

# 疑心暗鬼提督のブラック鎮守府再建

ライ adgj1248

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ブラック鎮守府再建ものを書いてみたくなったので始めてみました。ただし明るい提督が艦娘の心に寄り添ってといった王道ではなく、思いつきり邪道突き進んで行きたいと思います。

— 追記 —

砂糖増し増しのIfものを書いてしまいました。良ければ読んでみて下さい。

<https://syosetu.org/novel/243742/>

このお話の外伝「厨二病提督の崩壊鎮守府再建」を投稿しました。このクズが!!と笑いながら読んで頂けると幸いです。

<https://syosetu.org/novel/260835/>

Twitter始めました。

[raidgjl248](https://twitter.com/raidgjl248)

目次

人物紹介	1
プロローグ (1日目)	5
1話	9
2話	13
3話	17
4話	20
5話	24
6話 (1日目夕食)	29
7話	32
8話 (面談 鈴谷&熊野)	37
9話	40
10話	43
11話 (1日日夜戦準備)	47
12話	51
13話 (2日目)	53
14話	55
15話 (面談 第六駆逐隊)	58
16話	61
17話	65
18話	69
19話	73
20話	76
21話 (面談 金剛型姉妹)	79
22話	82

47話	174
46話 (地下通路調査)	170
45話 (3日目昼食)	167
44話 (対話 織田)	164
43話	161
42話 (対話 久藤提督)	157
41話 (面談 鳳翔)	153
40話 (面談 五航戦)	149
39話 (面談 一航戦)	145
38話 (3日目)	142
37話	137
36話	134
35話 (春雨対話)	130
34話	126
33話	122
32話	118
31話 (営倉調査)	116
30話 (2日目夕食)	113
29話	109
28話 (2日目戦闘準備)	105
27話 (平川市長登場)	100
26話 (面談 北上・大井)	96
25話 (面談 白露型姉妹)	92
24話	89
23話	86

72話	(対話 曙)	276
71話	(4日目夕食)	271
70話		267
69話	(対話 金剛型姉妹)	262
68話		257
67話	(対話 原田提督)	253
66話		249
65話		246
64話	(対話 帰還組)	242
63話	(4日目昼食&戦闘準備)	238
62話		233
61話	(艦娘奪還)	229
60話	(4日目)	225
59話		221
58話		216
57話	(悪雨登場)	213
56話	(面談 天龍・龍田)	207
55話		203
54話	(3日目夕食)	200
53話		197
52話	(対話 北条)	193
51話	(妖精さん挨拶)	188
50話		184
49話	(対話 平川市長)	181
48話		178

9 7 話	(救援部隊準備)	381
9 6 話	(夜戦報告)	377
9 5 話		374
9 4 話	(悪雨会話)	370
9 3 話		367
9 2 話	(神通会話)	363
9 1 話	(夜戦後半)	358
9 0 話	(夜戦前半)	354
8 9 話	(五日目夕食)	349
8 8 話	(夜戦出撃)	345
8 7 話	(夜戦準備)	341
8 6 話	(安藤さん対話)	337
8 5 話	(仙崎さん取材)	333
8 4 話	(電話対応)	329
8 3 話		325
8 2 話	(綾瀬さん対話)	322
8 1 話	(東雲さん対話)	318
8 0 話		313
7 9 話		309
7 8 話		303
7 7 話	(源さん対話)	298
7 6 話	(五日目朝食)	293
7 5 話	(5日目)	288
7 4 話	(対話 大淀)	284
7 3 話		280

98話 (救援要請)	385
99話 (救援初戦)	389
100話	393
101話 (救援戦)	397
102話 (久藤提督交渉)	402
103話 (6日目朝)	405
104話 (大淀のお仕事)	409
105話 (敵艦隊発見)	413
106話 (戦闘準備)	418
107話 (防衛戦開始)	422
108話 (防衛戦2)	426
109話 (防衛戦3)	430
110話 (防衛戦4)	434
111話 (防衛戦5+小森登場)	439
112話 (防衛戦終)	443
113話 (防衛戦事後処理)	448
114話 (大本営人事会議)	453
115話 (織田からの電話)	457
116話 (叢雲対話)	461
117話 (引き継ぎ)	466
118話 (6日目昼食)	470
119話 (6日目昼食2)	474
120話 (ぼのたん連行)	478
121話 (長門・一航戦対話)	483
122話 (瑞鶴対話・村雨回想)	489

1 2 3 話	(村雨対話)	494
1 2 4 話	(人事部中井からの連絡)	498
1 2 5 話	(悪巧み開始)	502
1 2 6 話	(小森提督候補生の秘密)	506
1 2 7 話	(北条・織田来襲)	510
1 2 8 話	(裏のお話・北条鑑定開始)	515
1 2 9 話	(大和対話)	519
1 3 0 話	(イムヤ&イク対話)	525
1 3 1 話	(大淀対話)	530
1 3 2 話	(北条のお買い物)	534
1 3 3 話	(工廠視察)	538
1 3 4 話	(食堂で北上さん)	542
1 3 5 話	(艦隊帰還)	546
1 3 6 話	(織田釈放)	550
1 3 7 話	(祝勝会1)	554
1 3 8 話	(祝勝会2)	559
1 3 9 話	(祝勝会3)	564
1 4 0 話	(祝勝会4)	569
1 4 1 話	(祝勝会5)	575
1 4 2 話	(第七駆逐隊お手伝い開始)	580
1 4 3 話	(鶴野提督)	585
1 4 4 話	(潮ちゃんお手製甘々コーヒー漣スペシャル)	589
1 4 5 話	(夜戦忍者・綾瀬さん)	596
1 4 6 話	(北条・織田・霞)	601
1 4 7 話	(佐世保の香取・出撃準備)	608



148話	(叢雲)	614
149話	(金剛隊戦闘開始・川内夜戦バカ)	618
150話	(対戦艦棲姫)	622
151話	(戦艦棲姫戦後)	627
152話	(熊井提督・人事課中井)	633
153話	(大本営サイド)	638
154話	(7日目朝)	643
155話	(憲兵隊金子さん)	650
156話	(加賀さん演習準備)	655
157話	(瑞鶴のスパルタ演習)	660
158話	(葛原提督起床)	665
159話	(叢雲ママ激おこ)	669
160話	(久藤提督会見前対話)	674
161話	(会見会場入り)	679
162話	(会見前編)	684
163話	(会見中編)	689
164話	(会見後編)	693
165話	(オークション前)	698
166話	(オークション)	704
167話	(綾瀬さんと久藤提督の裏話)	709
168話	(むっちゃん&春雨ちゃん&悪雨ちゃん)	714
169話	(海原朔真提督候補生)	720
170話	(夜戦忍者お説教)	726
171話	(ドロップ組と食事)	731
172話	(佐世保傘下の下調べ)	737

173話	(島津提督対話)	741
174話	(艦娘新聞検閲&叢雲の頼み)	745
175話	(神林司祭対話)	750
176話	(神林司祭と綾瀬さん)	756
177話	(吹雪・睦月・如月対話)	761
178話	(五十鈴と高雄の対話)	768
179話	(夜戦とその後)	773
180話	(8日目朝)	777
181話	(叢雲の謝罪)	782
182話	(8日目朝食)	787
183話	(軍艦防波堤)	793
184話	(島津提督&長門鎮守府)	799
185話	(横須賀艦隊出立)	804
186話	(哨戒遠征部隊出立)	808
187話	(羽黒面談)	812
188話	(羽黒面談2)	819
189話	(龍驤隊戦闘)	824
190話	(報告&資料の分析)	829
191話	(狐塚提督対話)	834
192話	(8日目昼食)	841
193話	(長門鹿島&小森対話)	847
194話	(島津提督言い争い)	853
195話	(イムヤ&イク)	860
196話	(益田鎮守府艦隊)	864
197話	(天龍&小森対話)	868

198話	(鳳翔隊戦闘)	874
199話	(鳳翔隊戦闘2)	878
200話	(夜戦打ち合わせ)	883
201話	(狐塚提督打ち合わせ)	887
202話	(8日目夕食)	891
203話	(8日目夕食その2)	897
204話	(古鷹到着)	902
205話	(コーヒーとプリンツオイゲン)	907
206話	(8日日夜戦開始)	913
207話	(8日日夜戦決着)	918
208話	(海外艦挨拶、島津提督との口論)	924
209話	(人事部中井さん)	931
210話	(鶴野提督、久藤提督)	936
211話	(龍田会話)	942
212話	(春雨・悪雨会話)	948
213話	(叢雲と長門鎮守府の仲介)	956
214話	(夜戦部隊帰還)	962
215話	(9日目朝)	969
216話	(会見道中)	976
217話	(会見前)	982
218話	(海外艦お披露目会見)	989
219話	(熊井提督会話)	995
220話	(仙崎さんの取材)	1000
221話		1008
222話		1013

2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2  
3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2 2  
7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3  
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

111311061100109310851078107110661058105110451038103110251019

## 人物紹介

主人公 葛原 直人（くずはら なおと）

本作の主人公。士官学校に通っていたが、在学途中で急遽北九州鎮守府の提督に任命される。在学中の成績は優秀であったが人間関係に問題があり、派閥には所属していない。

### 提督関係

北九州鎮守府の前任者 大森提督

北九州鎮守府にて汚職を繰り返していたが、何者かに殺害される。

横須賀鎮守府の提督 海原提督

東の英雄と呼ばれる。提督としての実力は非常に高く、姫級との戦いを幾度も経験している猛者で、人権派のトップだが、お人好しで人の悪意に疎い為に政治能力は低い。なので人権派のメンバーは東北地方や北海道地方へと追いやられてしまった。

呉鎮守府の提督 久藤提督

呉鎮守府を中心として、主に太平洋側を押さえている派閥のトップ。手下と共にかなり汚職で稼いで好き放題しているが、一応防衛の為の仕事はきちんとしている。鶴野提督とは権益争いでかなり険悪。

舞鶴鎮守府の提督 鶴野提督

舞鶴鎮守府を中心として、主に日本海側を押さえている派閥のトップ。久藤提督と同様に汚職でかなり稼いでいるが、久藤提督とは権益争いでかなり険悪。日本海側はあまり強力な深海棲艦が現れ難いので、派閥全体で見れば練度は低め。

佐世保鎮守府の提督 熊井提督

西の英雄と呼ばれる実力者で、主に九州地方を統括していて、艦娘は兵器だと公言する派閥のトップ。実力主義者で配下にも相応の実力を求める為、九州地方の鎮守府は全体的に練度が高め。海原提督の次に練度の高い艦隊を保有して、姫級を何度も討伐している。

長門鎮守府の提督 原田提督

北九州鎮守府の隣の鎮守府の提督。鶴野提督の傘下の提督。傲慢な性格。

益田鎮守府の提督 狐塚提督

長門鎮守府の隣の鎮守府の提督。鶴野提督の傘下の提督。

出雲鎮守府の提督 猿田提督

益田鎮守府の隣の鎮守府の提督。鶴野提督の傘下の提督。

函館鎮守府の提督 水上提督

海原提督の傘下の提督。海原提督に心酔していて、艦娘をとでも大事にしている。しかし艦娘を大事にしすぎて、戦果はあまり良くない。

鹿児島鎮守府の提督 島津提督

熊井提督傘下の提督で、熊井提督の次に権力を持っている。熊井提督が「軍人は政治に関わるべきではない」という思想の持ち主だが、島津提督はある程度は政治能力も必要だと考えている。なので傘下のまとめ役や情報収集や交渉などを担当している。

主人公と同期の提督候補生

織田

厨二病罹患者で艦娘ハーレムを目指すヤバい奴。その性格が災いし周囲から疎まれていて、派閥には所属していない。しかし艦娘達や妖精さんからはそれなりに好かれている不思議な人物。主人公を盟友と呼びはぐれ者同士仲良くしようとしているが、鬱陶しいと思われる。しかし拒絶されるほど嫌われている訳ではなく、それなりに付き合いがある。

北条

深海棲艦襲来後に急成長した北条工業のご令嬢。自分の派閥を作るつもりなので、派閥には所属していない。かなり前向きな性格で、主人公を自分の派閥に参加させるつもりでいる。北条工業の経済力と技術力のおかげで、わりと好き放題しても許されている。

小森

かなり臆病な性格の女の子で、逃げることに隠れる事に関しては天

才的な才能を持つ。コミュニケーション能力は壊滅的だが、その他の能力は軒並み優秀。演習においては無敗を誇る。派閥の勧誘を全て避けた為に派閥に所属しておらず、嫌がらせとして主人公と同室にさせられていたが、きつちりと住み分けをして特に問題がなかった。

海原朔真

横須賀の海原提督の弟。主人公の同期で学年3位の実力者。

大本営と憲兵関連

黒川

憲兵隊のトップ。久藤提督と鶴野提督の両方の汚職に加担している。両者の対立を維持するために調整もしている。

中井

大本営の人事課。主人公に嫌がらせをする程度の人物。

金子

北九州鎮守府の憲兵隊の隊長。久藤提督と密接な関わりを持つ。

北九州市の政治家

平川市長

北九州市の市長を務め、前任者の大森提督と汚職でかなり稼いでいた。

源

北九州市の副市長。より汚職で稼ぐ為に平川市長が邪魔だと思っていた。

東雲

明日への希望党の一員。市長選挙では代表として出馬した。艦娘新教の信者。

綾瀬

北九州市の再建部門のトップ。きちんと下調べをする用意周到な人物。

北九州市の一般人

真柴

鎮守府に納品する配送業者のトップ。商売人としてしっかりして  
いて、仕事は早く信頼出来る人物。

仙崎

仙崎情報社という地域密着型の新聞社で働く若い女性記者。夫が  
社長を務めている小さな新聞社で頑張っている。記者としての経験  
が浅いがその分素直な性格をしているので、主人公からは気に入られ  
た。

安藤

大手の新聞社である毎朝新聞の記者。それなり経験を積んだベテ  
ランで、記者らしい性格をしている。



## プロローグ（1日目）

世界は深海棲艦が現れてから激変した。始まりは漁船や貨物船などが襲われていたが、次第に沿岸部の街が襲撃されるようになり、各国の軍隊が戦いを挑んだものの新たな怪物にはあまり効果がなかった。そして世界中の海路と空路そして通信網が寸断されてしまった。

そんな時一筋の希望として現れたのが艦娘・妖精さん・提督の存在だった。深海棲艦と戦える艦娘、その艦娘をサポートする妖精さん、そして妖精さんを見ることが出来るという希少な才を持つ提督。彼らの存在を知った日本政府は、提督の才を持つものを探し出し各地の港に鎮守府を築いていった。数多の犠牲を払ったものの日本の沿岸部から深海棲艦を追い払い、防衛網を構築することに成功した。

そこから十年間日本と深海棲艦は一進一退の攻防を繰り返していた。

そんなある日事件は起こった。

とある地方の鎮守府の提督が執務室で何者かによって殺されたのだ。深海棲艦の襲撃で殺されたのであれば、近年では珍しいことではあるがそこまで問題にはならなかった。問題は執務室の中から砲撃された痕跡があることだ。その日は深海棲艦の襲撃はなくレーダーの記録にも何もない。しかし艦娘に提督を殺すことは出来ない。艦娘は人を殺すことを禁忌として感じる意識がとても強く、艦娘が故意に人を殺したことはない。深海棲艦との戦闘中に一般人が巻き込まれた事故は確認されているが、執務室で砲撃している以上事故の可能性も考えにくい。

この事件の捜査は難航しているが、それでも早急に解決しなくてはならない問題がある。後任を誰に任せるかだ。提督の居ない鎮守府に所属する艦娘は徐々に力を失い、最終的には消え去ってしまいうらい。防衛の要である鎮守府を減ぼす判断は出来ない。しかし原因不明の事件が起きた鎮守府に着任したい物好きは居ないし、そもそもその鎮守府は悪い噂の多い場所でもあった。あるグループは悪事の証拠を集めるために人を送ろうとしたが、別のグループが証拠隠滅のた

めに妨害をしてくる。未解決の事件と権力者の争いにより人選は難航した。

結果として上層部はどここの派閥にも所属していない新人提督を着任させることとした。表向きは士官学校で成績優秀だったのでいきなり提督に昇進した期待のルーキーとのことだったが、その実態は地雷原を歩かせる生け贄のような扱いであった。

送迎の車の窓から外を眺めていたら海沿いの街が見えてきた。深海棲艦襲撃の傷跡はまだまだ残っているが、復興が進んでいて活気がありそうなどころだ。海沿いの街は危険だからと内陸部に移住する者も多いが、鎮守府付近では比較的安全と思われているので復興も進み易いようだ。まあ現在は近海に近付かせないくらいで深海棲艦との勢力が拮抗しているだけで、防衛網が破られた場合真っ先に狙われるのが鎮守府だということは考えないのだろうか？

そんなとりとめもないことを考えつつ、自分が着任する鎮守府が近付いてきたことにため息をつく。これほどの悪条件を突きつけられた新人は自分が初めてではないかと思う。

まず提督になれる資格を持ったものが半強制的に入学させられる士官学校をまだ卒業していない。本来2年で提督としての基礎を叩き込まれるはずだが、1年ちよつとしか通えていない。教官から「昔はなんの知識もない状態で手探りで提督をしていたのだ、軍人が甘えるな!!」などと言っていたが、時代は変わったので知ったことではない。

次に前任の提督が殺された事件だ。上層部の連中は「この事件について調査し、犯人を見つけ出すのも貴様の役目だ!!必ず犯人を突き止める!!」などと偉そうに言っていたが、自分達が必死になって捜査して成果が得られなかったはずなのに、新人提督に無茶を言うものだ。この件に関しては若干心当たりはあるものの、所詮はただの推測に過ぎないし、なんなら外れて欲しいと思うほどの話だ。

最後に鎮守府の悪評の件だ。正直これが一番厄介なのではないか

と考えている。現状を見ていないのでどれほど腐っているかは分からないし分かりたくもない。ただ腐っているのは確実と分かるのが最悪だ。なぜならある上官からは「前任者の不正の証拠を調べあげて報告しろ、誰と繋がっていたかもきっちり調べあげろ」と命令され、別の上官からは「提督たるもの国防のための仕事だけを全うすべきだ、些事は気にせず護国に努めなければ提督としてやっていけないぞ」と余計なことに首を突っ込むなど釘を刺されたので間違いない。

あとは普通に提督としての仕事が大変で責任があるが、これに関しては妖精さんが見えるからには覚悟はしている。でもどうせなら他の新人提督のように、新しい鎮守府を一から作りあげる方がよっぽど楽に出来るはずだ。ある程度練度の高めの艦娘が最初から揃っていて、設備と資材もそれなりに揃っているのは大きなメリットだろうが、それを上回るデメリットが多すぎる。

これからのことを考えてブルーになっているとついに車が停まった。どうやら鎮守府についてしまったようだ。

「鎮守府に到着致しました」

今まで寡黙に運転してくれていた初老の運転手が声をかけてきた。正直人と話すのは好きではないので、寡黙で職務に忠実な彼が運転手でとても助かった。

「送迎ありがとうございます。」

「御武運を」

言葉少なく敬礼で見送ってくれる彼に敬礼を返し車を降りる。静かに発進する車を背に鎮守府の門を眺める。曇天のもとでそびえ立つ立派な門は、まるで自分を追い返そうとするかの如き威圧感を放つ。だがここまで来た以上引き返す事など出来ない。そして門の横で待っていた黒髪の女性が駆け寄って来て敬礼をしてきた。

「軽巡洋艦大淀です。提督様をお迎えに参りました。」

大淀・・・たしか資料に載っていたな、戦闘よりも事務仕事などが得意な艦娘だったか。おそらく前任者が秘書艦として使っていたのだろう。それにしても顔は若干青ざめ、震えも隠し切れていない。想像通りとはいえ厄介な鎮守府のようだ。

「出迎えご苦労、新任の葛原くずはら 直人なおとだ。これから宜しく頼む。さつそく鎮守府を案内して貰えるか？」

「ハッ!!かしこまりました。」

そう言つて震える手で門を開ける大淀に続いて鎮守府へと足を踏入れた。

---

提督が鎮守府に着任しました

これより艦隊の指揮を執ります

---

## 1話

大淀に連れられて鎮守府の中を案内して貰ったが、正直気味が悪いくらい静かだ。大淀曰く「全艦自室にて待機しております。ご命令があれば全員を即座に集合させることが可能です」とのことだが、艦娘が住まう寮の付近を通っても話し声一つ聞こえてこないのは異常だろう。大淀も案内と説明はきちんとしてくれるが、雑談は一切なく極力目線を合わせようとしないところを見ると、出来るだけ関わりたくはない、目をつけられたくないと言ったところか。おそらく前任の秘書艦が大淀だったのだろうがとんだ貧乏くじを引いてしまったのだろう。

大淀の案内で鎮守府の大まかな作りを把握した。建物は大きく分けて3つのエリアに別れていて、正門から見て左側が艦娘の寮や入渠施設と食堂などの生活用の施設。中央が執務室や会議室と応接室などの主に提督が使うための施設。右側が出撃港や工房と倉庫などの施設となっているようだ。そして正門と中央の施設の間に集会や訓練が出来そうな広場があって、裏側の海には海上演習場があるらしい。

そして気になったのはそれらの施設が綺麗に清掃してあることだ。前任者の評判が悪かったので荒れ果てた状態を想像していたので、これは嬉しい誤算と言うやつだろう。資材のほうも潤沢とは言えないものの、直近で困るような状況ではないのが嬉しいところだ。その代わり食糧に関してはかなり少なく、早めに業者に連絡して仕入れなければならぬ。とりあえず後は執務室と自室を確認したら、艦娘を召集して着任の挨拶と今後の指示をしましょう。

「提督、この先の執務室なのですが・・・」

執務棟の三階にある執務室の前に着くと、大淀が震えながら話かけてくる。

「どうした？」

「本部の方から提督が確認するまでは現状維持に努めろとのご命令で、艦娘は一切立ち入りが出来なかつたため、中は荒れ果てた状態です。ご容赦下さい」

「上の命令なら仕方ないな、事件の現場が見られるのは正直助かるし。……ん？艦娘はつてことは他の人は出入りしてたんだよな？本部から調査に来た人間とか」

「はい、本部の方々は調査のために度々中に入られておりましたが、我々が近づくことは許されませんでした。」

なるほど、つまりは証拠隠滅し放題って状況か。この分だと事件のほうも汚職のほうも有力な証拠なんて見つかるとは思えないな。そもそも真面目に捜査する気もあまり無いけど。

「あー、ちなみに捜査の内容についてどれくらい知っている？」

「ツ!!執務室で何者かが前提督に砲撃を行い殺害したと言うことだけです。本部の方からいくつか質問はされましたが、これ以上のことはほとんど知りません。他の艦娘も一緒かと思えます。」

明らかに動揺していたが、何かを隠しているからなのか、もしくは本当に何も知らないからこそその恐怖なのかは判断が難しいな。これまでの流れから艦娘も疑われているということくらいは理解しているだろうし。

まあとりあえずは部屋の中を確認してから考えるか。そう頭を切り替えそれなりに重厚な扉を開いてみる。

・・・あれだ、海の見える部屋と言えば聞こえは良いが、壁をぶち壊してまでやることではないな。正面の壁には大穴が空いていて、部屋には瓦礫と机の残骸が散らばっており、所々血痕が飛び散っているのが事件の凄惨さを示している。人間がやるには大砲でも持ち込まないと無理なので、深海棲艦か艦娘の仕業で間違いないだろう。おそらく前提督は執務室の机ごと砲撃されたようだが、砲撃の角度からして這いつくばりながら撃つたのかもしれない。とりあえず後でざつと調べたら妖精さんに頼んで部屋を修理して貰うか。

「大淀、私室を確認したら着任の挨拶をしたい。30分後に広場に集合するように伝えてくれ」

「ハッ!!」命令承りました。」

そう言うで大淀はきびきびと歩いて行った。命令に忠実なのは非常に助かるが、集合の命令程度で物凄い緊張感が感じられてしまう。前任者はよほど短気な奴だったのか？まあとにかく私室のほうもさつさと確認するか。

そう思いながら執務室の隣にある提督の私室の扉を安易に開けてしまった。開けた瞬間なんとも言えない甘ったるい香の匂いがして吐き気を催す。吐き気を我慢しながら中を見ると、なんとも豪華な部屋だった。まず間取りが一人で住むには異様に広く、大きなベッドもタンスや窓なんかも豪華な装飾付きだし、極めつけにはシャンデリアなんて付けてやがる。壁には絵画が飾られており棚には高価そうな壺が並べてある。なにより一番気持ち悪いのは石像だ。海軍の軍服を着た小太りのおっさんが敬礼してる石像で、おそらくは前任者がモチーフなのだろうが、自分の部屋に自分の石像を置きたがる神経が理解不能だ。どんだけ自分が好きなんだよ。こんなところで寝るくらいなら学生時代によくお世話になった営倉のほうが遥かに良く

眠れそうだ。

調査が終われば即刻改装することを決意し扉を閉めて、新鮮な空気を求めて窓を開ける。甘ったるい空気に侵された肺が新鮮な空気に喜んでいようだ。気持ち悪いので即刻改装したいのだが、一応私室の調査はしなくてはならないだろう。嫌な作業に憂鬱になりながら外を眺めて見ると、広場に艦娘達が続々と集合しているのが見えた。大淀に指示を出してから5分くらいしか経ってないはずだが、全員が走って集合し整列すると気をつけの状態で微動だにしなくなる。いくら軍隊とは言え訓練されすぎな気がする。

艦娘の状態にかなりの不安を抱きつつ、直立不動のままずっと立たせておくのも気になるので、予定より早く広場に向かうことにした。



## 2話

表向きは取り繕っていたものの、見え隠れしている問題点に頭を抱えながら広場に出ると、大淀が駆け寄って来た。

「提督、艦娘総勢40名集合致しました。」

「・・・早かったな」

揃っているならもう始めよう」

「ハッ!!かしこまりました!!」

短く返答した大淀が艦娘の列に戻って行く、広場には学校にもあつた簡易的なお立ち台があり、たった三段の階段が地獄への入り口にすら見えてくる。だがここから始めなければ成果は出せず、大本営の連中はニコニコ笑顔で罵倒してくるに違いない。あんなクズどもに良い思いをさせてやるのは反吐が出る。どうせやるからには自分のやり方で目にももの見せてやろうじゃないか。

「総員、提督に敬礼!!」

階段を登り終えると号令と共に艦娘達が敬礼をしてくる。号令をかけたのは大淀ではなく・・・確か戦艦の長門だったはずだな。おそらく長門が艦娘達の取りまとめ役なのだろう。敬礼で答えて手を下ろせば一斉に気をつけの姿勢へと戻る。本当にこういうところは訓練が行き届いているようだ。ざっと見渡したところ全員が緊張で強ばっているのは予想通りだが、もう一つ気になったのは艦娘の構成が偏っていることだ。戦艦と正規空母はかなり揃っているが、その他艦種が少ないのは問題だ。前任者は戦艦と正規空母でゴリ押しする戦いを好んでいたのが良くわかる。そんな資源をどうやって集めていたかは・・・先が思いやられる。唯一良いことは被弾したままの艦娘が居ないことだろうか、まあどうせ汚職を隠すために上の連中の誰かがやったことだろうが。

いつまでも黙ったままでは居られないし始めるか。

「初めまして、今日からこの鎮守府に着任した葛原だ。士官学校に在学中だったが殉職した前任者が変わって急遽着任することになった。至らないところもあるとは思いますが宜しく頼む。」

さてここからが本番だな。

「まず始めに着任にあたって大本営からの指令がいくつかある。通常  
の提督としての任と平行して前任者の汚職の調査と鎮守府の建て直  
し・・・そして殺された前任者の死因の究明だ。」

やはりか・・・前任者の汚職の話では微動だにしなかったが、死因  
の調査の件では動揺が見られる。特に幼い駆逐艦達は動揺を隠しき  
れていないな。

「この件に関しては事前に大本営が調査を行ったが原因究明に至って  
いない。なので引き続き調査を私が引き継ぐこととなった。そして  
諸君らも知っているとは思いますが、大本営は今回の事件を深海棲艦か艦  
娘のどちらかが犯人として捜査している。」

どちらかと言えば艦娘が犯人だと言う説が濃厚だが、証拠もなく提  
督が艦娘に殺されたとなると初めてのケースなので、なぜそんな事が  
起こったのかを調べなければ安心出来ないのだろう。そうでなければ  
鎮守府の艦娘全員を解体することで解決しようとしただろうし。

「この件に関しては大本営側でもかなり揉めていて、過激なものは鎮  
守府の全艦娘を解体するべきだという意見もある。」

「そんなのあんまりだろうが!!」

「て、天龍ちゃん!?!」

おお、プレッシャーをかけてみたらさっそく一人耐えきれなかった  
か。

「前のクソ野郎がなにをしてきたかわかってんのか!?命令に逆らえな  
いのを良いことに無茶な戦いで仲間が何人も沈められた!!罰として  
笑いながら拷問されたこともある!!さらには娼婦の真似事だつてさ  
せられた!!あんなクソ野郎は死んで当然なんだよ!!」

「天龍ちゃん!!もうやめて!!」

ああ、やっぱり前任者はクソ野郎だったか。改めて聞くとずいぶん  
と好き勝手やってたようだ。そして突っ掛かって来た天龍は姉妹艦  
の龍田に抑えられながらも睨んで来る。

「前任者の悪行については予想はしていた、追って調査と報告もする  
し、死んで当然の奴だったつてのは同意見だ。だがここは軍だ。上官

殺しが起こった可能性があるなら調査しなくてはならない。しかも大本営が痺れを切らして全艦解体命令を出す前にだ。だから諸君らも調査に協力して貰いたい。」

「理不尽だろうが!!」

「そんな話に納得出来るか!!」

これだけ反応すると言うことはやはり深海棲艦の線は薄そうだな。ざっと見回したら張りつめた表情の戦艦や空母達と青ざめている駆逐艦達が対照的だ。

「ああ、理不尽だし納得なんて出来ないことは知っている。だがこれは命令だ。いくら上の連中が腐っていようとも軍に居る以上命令に従わなくてはならない。それは捨て石としてこの鎮守府に着任させられた私も同じだ。」

「捨て石だと?」

「ああそうだ、誰が好き好んで提督殺しが起きた危険な鎮守府に着任したいと思う? 誰が前任者が好き放題やった後始末をやりたいと思う? 生憎私は上の連中からは嫌われていてね、奴らからしたら私が殺されようが一向に構わないし、もし鎮守府の建て直しに成功したのなら、適当な罪を擦り付けて解任しようぐらいに思っているだろう。幸いこの鎮守府ならば問題になるようなことは山程あるからな。」

「なんだよそれ、なんで人間は皆そんな奴らばかりなんだよ・・・」  
「軍人としての職業倫理のない一般人を提督の才能があるからと言って、力と権力を与えてしまった弊害だろうと私は考えているが、権力を持った人間は大概そんなもんだという気もするな。」

現実に絶望する天龍が黙ってしまった。つい辛い現実つてやつを語ってしまったか。他の艦娘の反応も似たり寄ったりだな。

「とりあえず話は以上だ、今後の諸君らの協力を期待する。今後の予定については夕食前に改めて通達する。何か質問がある奴はいるか?」

「では質問してもいいだろうか?」

そう言って挙手したのは長門だった。やはり艦娘達の取りまとめ役として責任感を持っているのだろう。

「ああ、なんだ？」

「提督は私達を、この鎮守府をどうしたい？」

「私も上の連中の良いように使われて終わるつもりはない。だから真つ当な鎮守府として建て直し、汚職等で付け入る隙を与えないようにし、上を黙らせる程の戦果をあげて提督の地位を守るつもりでいる。だから私は私のために諸君らの待遇を改善することを約束しよう。」

「わかった、理由はどうあれ待遇を改善して貰えるなら文句はない。私達は私達のために戦果を約束しよう。」

「他に質問がある奴はいるか？」

・・・居ないのであればこれで解散とする。あと大淀・間宮・明石・長門の四名は今後の予定の打ち合わせをするので会議室に来るように。では解散」

「提督に敬礼!!」

敬礼をする艦娘達に敬礼を返しお立ち台から降りる。伝えることは伝えたし、色々と情報も得られたが先の事を思いやると憂鬱だ。それでもどんな形であれ最初の一步は踏み出したのだ。上の連中にももの見せてやると決めた以上、歩みを止める気はない。

### 3話

新任の提督が去った後の広場は重油のような重苦しい雰囲気だった。前任者が殺されて地獄の日々を抜け出せたと期待していたが、待っていたのは全艦解体という暗い未来だった。天龍が激情に任せて放った言葉も「知っている、理解はしている、だが命令には従え」とばっさり切り捨てられた。最後に長門が引き出した「待遇は改善する」という言葉も上から解体命令が出れば意味はない。

「天龍ちゃん!!なんであんな無茶をしたの!?!提督に逆らったらどんな目にあうか知ってるでしょ!!」

「悪かったよ我慢出来なくて、でも誰かが言っただけやダメだと思っただよ。あいつには俺らの苦しみなんて伝わらなかつたみてえだけだな・・・」

「もう無茶しないでよ・・・天龍ちゃんが居なくなったら私・・・もう・・・」  
「わかつたわかつたって、俺の解体が決まった訳じゃないんだから泣くなって。」

そう言っただけで龍田を宥める天龍を見て艦娘達は複雑な思いを抱く。堂々と提督に意見出来たことへの尊敬、危険な状況への心配、恐怖で動けなかつた自分への失望、鎮守府の全員が解体されるかもという恐怖。様々な感情を処理しきれずに、ただただ俯くことしか出来なかつた。

ただ一人長門を除いては。

「皆顔を上げてくれ。絶望的な状況だが希望が無い訳ではない。全艦解体の話も提督は覆すつもりと言っていたし、私達の待遇も改善すると言っている。そして私が艦娘の代表として以前のような状況にならないように交渉する。だから皆は私を信じて待っていてくれ。では大淀、明石、間宮ついて来い。」

そう言っただけで堂々とした姿勢で去って行く背中が微かに震えていたが、恐怖してなお希望を求めて進む姿はまるでお伽噺の英雄のようだった。

先に会議室について今後の予定について考える。とにかくやることが多いし同時に進める為には自分一人では手が足りない。だから早急にやるべきことは艦娘を掌握し、効率良く動かせるシステムの構築だろう。無駄を省き任せられる場所は部下に任せる、しかし完全な丸投げ状態にはしない。これが自分が考えられる理想の提督だ。理想は所詮理想でしかないが、だからと言って目指さない理由はない。

コンコンコン

「入れ」

「失礼する」

考えも少しまとまったところで、呼んでおいた長門達がやって来た。席に座るように促すと、堂々とした足取りで進む長門に続いて、少し落ち着いて覚悟を決めた雰囲気の人3人が後から入って来る。正直さっきの挨拶でやり過ぎたかと思っていたが、存外精神的に強い奴らなのかもしれない。

「ではさっそく始めよう。最初の議題は組織の構成についてだ。案としてまず大淀を秘書艦として私の補佐、主に事務関係を担当して貰う。そして長門を艦娘のまとめ役として主に軍事関係を担当して貰う。私の不在時には二人が責任者として判断することもあるだろうが任せられるか？」

「分かりました、精一杯務めさせていただきます。」

「承知した。私に任せてくれ。」

「次に明石には資材の管理や外部への発注等を担当して貰う。出来るかな？」

「はい、提督から業者の方々に挨拶をして、引き続き私が担当することを伝えて頂ければ問題ありません。」

「了解した、話が終わったらすぐに連絡をする。最後に間宮には食事に関することを任せる。贅沢をさせる必要はないが、きちんと食事をとることが出来る環境を整えて貰う。出来るな？」

「それは艦娘にも食事を提供して下さるといふことで宜しいでしょうか？」

「当然だ、私が艦娘を虐待しているなんて話になれば、上の連中がここ

ぞとばかりに責め立ててくる。そんな際は与えるつもりは無いからしっかりと艦娘達に食べさせる。あと材料等の仕入れに関しては明石と相談するように。」

「かしこまりました。艦娘への食事の許可を頂きありがとうございます。」

「それでは具体的な指示に移ろう。大淀は鎮守府関係者の一覧と、この鎮守府に所属する艦娘の資料を用意しろ。長門は明日から資源回収のため遠征と近海の哨戒を始めたい。だからそのための編成と日程を組んで欲しい。明石は資源と備品の在庫確認をして帳簿を作成してくれ。今日からは資源と備品の管理は明確に記録をつけるように。間宮は取り急ぎ食材の発注をしてくれ、今日の晩飯に納入は間に合わないだろうから、何人か連れて買い出しにも行って欲しい。全員理解したか」

「はい!!」

「それでは執務室の修繕が終わるまでは、この会議室を臨時の執務室とする。それでは行動に移ってくれ。」

4人が敬礼をして動き出したのを見て、組織として動き始めた実感が湧いてくる。ブラック鎮守府の艦娘は心を病んでいるから、まともに動けるか不安だったがなんとかかなりそうだ。これなら大本営や周囲の提督がちよっかいをかけてくる前に、地盤を固めることが出来そうだ。

## 4話

主要な艦娘達に指示を出した後待つて居たのは電話地獄だった。大淀が用意した関係者のリストをもとに着任の挨拶をしていく。気楽だったのは最初に連絡をした仕入れ業者くらいなもので、前任者が必要としなかった艦娘の分の食料や備品等が売れるとあつてすぐ張りきっていた。納品に関しても「夕食までには間に合わせてみせませよ」とやる気満々だったので好印象だ。

後は軍関係者なのだが・・・今回着任した「北九州」という土地は非常に厄介な場所だ。地理的な話であれば本州と九州の境目と言えば簡単だろう。大本営のある横須賀から遠いことは自分にとってはメリツトだが、4大鎮守府の佐世保と呉の中間あたりにある為、両方から干渉を受けることとなる。日本海から東シナ海へ続くルートが目の前にあり、日本海側から瀬戸内海や太平洋へ抜ける海峡もあるのも、日本海側防衛の要である4大鎮守の舞鶴からも影響を受ける最悪の場所だ。さらには近隣の鎮守府にも挨拶をしなくてはならなかったため、全てを終える頃にはストレスで吐きそうだった。

周囲の鎮守府の提督達は小物ばかりだったので適当に流しておいたが、流石に4大鎮守府の主は格が違った。

まず一番近かった佐世保の提督だが、西の英雄と呼ばれるガツチガチの武闘派だ。艦娘は兵器だと主張する派閥の筆頭で、艦娘の扱いが酷いと大本営の奴らは言っていた。しかし学生時代に集めた情報では艦隊指揮については苛烈な印象だが、それ以外に関してはむしろ待遇は良さそうだった。電話では手短かに「戦果を上げる、クズどもとは付き合うな」とだけ言って電話を切られた。話が短いのは好印象だ。

次に呉の提督にはヤクザのボスって表現が一番近いだろうか？近隣の提督達を傘下に入れた汚職集団の頭で大本営のほうにも強い影響力を持っており、かなりやりたい放題やっているらしい。その代わり実力は本物で傘下共々国土防衛に大きく貢献している。電話では「上手くやりたければ俺の下に付け、下に付きたく無いならそれでも構わないが、余計な詮索はしないほうが身のためだぞ」と脅してきた。



脅されると反抗したくなるが力を付けるまでは無謀なことは出来ないか・・・

さらに厄介なのは舞鶴の提督だろう。こいつは呉の提督と権力争いをしていくらしく、本人の陰険な性格もあって正直一番関わりたくない奴だ。電話では長々と遠回しに脅してきた挙げ句「前任者の汚職の証拠を徹底的に調べあげ報告しろ。そうすればお前のようなカスでも傘下に入れてやろう」とかほざきやがった。こいつの傘下だけは絶対にならない。

最後の大本営を代表して横須賀の提督と話をしたが、相変わらず脳内がお花畑でうんざりしてしまう。この人は艦娘の人権を主張する派閥のトップで、艦娘と人間が皆で協力して深海棲艦の脅威に対抗しようという考えの人だ。キラキラと理想を語るのが大好きな人だが、政治関係には疎く足元の大本営での汚職にすら気が付けてない人だ。しかし艦娘の練度や艦隊指揮については圧倒的で、東の英雄と呼ばれるのも納得出来る。電話ではこちらの反応が無くても熱く語り続けたので、精神的な疲労では一番かもしれない。

「なんとか終わった・・・」

「お疲れ様です提督。コーヒーでもいかがですか？」

「ああ、頼む」

大淀にそう伝えると大淀は手際よくコーヒーの準備をしてくれる。秘書がいるというのも悪くないな。

「提督、砂糖とミルクはどうされますか？」

「甘ったるい理想論で脳が犯されそうなんだ、ブラックですつきりさせたい」

「・・・それは本当にお疲れ様です」

苦笑いしながら差し出されたコーヒーを一口頂く。コーヒーは甘いほうが好きなのだが、今日に限ってはブラックの苦みが心地良い。「ふう・・・美味しいな

さて、かなり時間を浪費してしまっただが、他の作業の進捗はどうなっている？」

「まず私ですが艦娘の資料のまとめは完了しております。同時に過去の戦闘の記録もまとめてありますので参考までにお目通しください。

次に明石さんですが、間宮さんがまとめた食材の発注は終了なそうです。また長門さんと協力して足りない備品のリストを作成中のことです。

最後に長門さんですが軽巡と駆逐艦で哨戒組と遠征組を編成し、遠征先の候補地を選定したとのこと。なので後は提督の指示があればいつでも行ける状態です。そして各艦娘寮を回って必要な備品のリストを作成しているとところです。」

・・・想像以上に優秀だ。指示されたことだけではなく、必要なことを考えて動けるのは凄く助かる。

「了解した。哨戒に関しては明日から始められるように準備を進めてくれ。遠征は状況を見てから決める。ちなみに必要な備品とはどんなものがあるか聞いているか?」

「ツーその・・・艦娘寮にはほとんど備品が無い状況でして・・・駆逐艦の子達などは布団すらなく床で寝ている状態です。ですからせめて布団くらいは支給して頂けないでしょうか?」

大淀は若干震えながらそう答えた。前任者の時ではその程度の要求すら出来ない有り様だったのか・・・

「明石に人数分の布団を早急に発注するように伝えろ、その他の備品については引き続きリストを準備するように。」

「はい、ありがとうございます。」

大淀も提案が通ったことに安堵しているようだ。自分も知らないうちに艦娘を虐待してしまうところだったので、内心ほっとしている。艦娘達もブラックの常識に染められているだろうから、意識の改善も今後の課題だろう。

「ん・・・提督今連絡が入りまして、食材を運ぶトラックが到着したようです。それと配送業者の代表の方が一緒に来られており、直接挨拶をさせて欲しいとのことですがいかがでしょうか?」

「わかった、ここにお通ししてくれ。挨拶ついでに布団に関しても交渉してみよう。」

「ハッ!!すぐにお連れ致します。」

敬礼をして退室していく大淀を見送って、彼女がまとめた艦娘の資料に目を通し始める。やることは山積みなのだ。同時にどんどん処理していかないと全く追い付かないな・・・

## 5話

「提督、配送業者の代表の方をお連れしました」  
「入れ」

大淀に案内されて入って来たのは背が高くかなり鍛え上げられた男性だった。自分もそれなりに背が高いほうだが、彼のほうが高いとすぐにわかるくらいだ。電話の声でも感じていたが、代表を務めるにしてはかなり若く、おそらく30代前半といったところか？

「さきほどお電話でご挨拶させて頂きました真柴です。食材や日用品なんかはうちで大概ご用意出来ますんで、今後とも宜しく願います。」

「改めまして新任の葛原です。今回は急な配送の依頼に応えて頂きありがとうございます。今後ともどうぞ宜しくお願いします。」

「なんのなんの、腹が減っては戦も出来ませんからね。それにしても随分と若い方ですねえ、電話での雰囲気は落ち着いていらつしやったので、もつと年上の方かと思つてましたよ。」

「若いとはいえ提督という責任ある立場ですので、あまり無様な姿は晒せませんよ。」

若さで舐められる訳にはいかないと多少の圧を込めて言つてみたが、真柴さんは興味深そうにニヤリと笑う。

「これは本当に良い提督さんが来られたようだ。ご安心下さい私達は商人です。お客様が求める物を売ってお金を貰う、そこがぶれない限り相手が誰であろうと関係ありません。特にお客様なら多少の無茶はこなしてみせますよ。」

「とても頼もしいお言葉だ。今後とも頼りにさせて頂きます。そこでさっそく頼りにさせて頂きたいのですが。」

「ほほう、お話を聞きましょう。」

「うちの艦娘達は布団すら与えられて無い状態だったようで・・・なんとか人数分の布団を揃えてあげたいのですが、40人分なんとか出来ますか？」

「なるほどなるほど、国を守ってくれる娘達を床で寝かせるなんて酷

い話ですなあ。ふーむ・・・特急料金上乘せして貰えるならば、今夜にも届けてみせますがいかがでしょう？」

「交渉成立ですね、料金は食材同様明石のほうに請求書を出しておいて下さい。では今後とも頼りにさせて頂きます。」

お互いにニヤリと笑いながら握手を交わす。流石に今日中には無理かと思っていたので、仕事が速くて助かる。

「こちらこそ宜しく願います。金払いの良いお客様にはしっかりとサーブさせていただきますよ。それでは急いで準備しますのでこれで。」

そう応えて真柴さんは会議室から退室していく、大淀に目線を送ると敬礼をして真柴さんの案内を請け負ってくれる。問題が一つ想定より早く解決したことに気分を良くしながら大淀の用意した資料に目を通していく。

---

駆逐艦	14名				
島風	雪風	暁	響	電	雷
白露	時雨	夕立	春雨		
吹雪	睦月	如月	曙		
軽巡洋艦	5名				
川内	天龍	龍田	夕張	大淀	
重雷装巡洋艦	2名				
北上	大井				
重巡洋艦	3名				
鈴谷	熊野	青葉			
軽空母	1名				
鳳翔					
正規空母	4名				
赤城	加賀	瑞鶴	翔鶴		
戦艦	3名				
長門	陸奥	大和			
高速戦艦	4名				

金剛 比叡 榛名 霧島

潜水艦 2名

伊168 伊19

工作艦 1名

明石

給糧艦 1名

間宮

練度については別紙にて

やはり戦艦や正規空母に偏っているな、駆逐艦ももう少し欲しいが、軽巡と重巡の数が少ないのも問題だな。事務仕事メインの大淀と開発メインの夕張は戦力としてあまり使えないため、軽巡は3名だと考えると結構キツイ。重巡も少し火力が欲しい時に便利で、状況次第で選べる装備の幅が広いのがメリットなのだが・・・まあ、無い物ねだりしても仕方がないので、このメンバーで運用を考えるしかないな。

「失礼する。遠征と哨戒の計画を作成したので確認して欲しい。それと相談なのだが・・・」

会議室に入って来た長門が気まずそうに話を切り出そうとする。

「大淀から聞いたが備品の件か？」

「そうなのだ、艦娘寮にはほとんど備品が無くてな、駆逐艦達には布団すら与えられず床で寝る娘も多く流石に不憫だな。提督は我々の待遇を改善して頂けると約束して下さい！ならば」

長門がこちらを説得しようとしてきたが、その件はもう終わった話だ。手で話を遮ったら長門が焦った顔で押し黙った。

「まだ大淀から連絡がいつてないようだが、布団については手配を済ませている。今夜中になんとか出来ると言っていたから、納品されたらすぐに配れるようにしておけ。その他の備品に関してはリストを作成して持ってこい。」

そう伝えると一瞬狐に摘ままれたような顔をしていたが、安心したようだ。

「ありがとう提督。これで駆逐艦の娘達に辛い思いをさせずに済む。その・・・予算とかは大丈夫なのだろうか？前任者はお前達に使う金など無いと言っていたが・・・」

「前任者が浪費や賄賂に使ってただけだろ。とりあえず前任者が残した金がそれなりにあるし、深海棲艦と戦闘があれば国から報奨も貰える。あまり贅沢はさせられないが、必要な物はきちんと購入するつもりだ。」

「そうか、それなら安心出来る。提督は我々を人間として扱ってくれるのだな。」

「ん？悪いがお前達艦娘を人間として見ることは出来ない。」

そう正直に伝えると安心と多少の信頼が混ざりあった表情が凍りつく。こういう認識については誤魔化すと後々大きな問題になりかねないので、早めに伝えておきたい。

「・・・そうか、やはり我々は兵器なのだな。」

「それも違う。お前達艦娘は艦娘だ。私にはどうして人間か兵器かで分けようとするのかが分からんくらいだ。」

「・・・すまない、言っている意味がよく分からないのだが・・・」

「例えばカモノハシという動物がいる。一応哺乳類に分類されるが、平たい嘴を持ち子供を卵で産む。つまりは鳥類の特徴を合わせ持っている。どう分類すべきか悩んで、結局卵生を持つ非常に珍しい哺乳類ということになった。しかし哺乳類としても鳥類としても違和感しか感じない生き物だ。つまりは既存の分類で分けようとする矛盾が生じてしまうのだ。」

前々から考えていた持論だが、長門は啞然としているだけだ。この例えは分かりにくいのだろうか？

「つまり艦娘を人として考えた場合、艦装や建造など兵器としての特徴と矛盾する。しかし兵器として考えた場合、意思を持って行動し人間と同じ感情があるところに矛盾が生じてしまう。だから私は艦娘は艦娘としてしか分類出来ないと考えている。」

「つまり我々は兵器でも人間でもないか？だが艦娘として扱うとはどうなるのだ？」

「そこをはつきりと決めるには人間は艦娘のことを知らなさ過ぎる。艦娘が現れてからたったの十年しか経っていないからな。」

「ならばせめて提督が我々をどう感じているのかを教えてください。」

「ふむ、個人的な考えで言えば軍人という言葉が一番近いだろうか？精神的には人だが軍人として戦う定めにあるし、軍の一員として国を守り規律ある行動が求められる。だから轟沈すると分かっているとしても、命令を出さなければならぬ時が来るかも知れない。まあ無駄に沈める気は一切無いが。」

「ありがとう、なんとなく提督の考えは分かった。とりあえず軍人として扱って貰えるなら本望だ。この命提督に預けよう。」

そう言って笑う長門の表情を見ると、どうやら迷いは吹っ切れたようだ。余計な迷いは戦場で死をもたらず。早めに潰せて良かった。

「それにしても提督は独特の考えを持っているんだな。」

「私自身は合理的な考えだと思っているのだがな。どうにも周りとは合わないらしい。」

話は終わりだ。遠征と哨戒の計画書を見させて貰おう。長門には引き続き備品のリストを作成して貰う。」

「任された。今回の話を他の艦娘達にも伝えて構わないだろうか？皆とても不安に思っているのだが？」

「そこは任せる。好きにしろ。」

「ありがとう提督。それではリスト作成の任に戻る。」

これで艦娘達が理解してくれば良いのだが、どうなるかは全く読めないな。



## 6話（1日日夜食）

長門が退席したあとは報告書に目を通していく。大淀から貰った艦娘についての報告書だが、やはり戦艦や正規空母はそれなりに練度が高めだが、その他の艦はかなり練度が低い。例外的に島風と雪風はそこそこ高めか。そして一番の問題は重巡だ。建造されてからそれなりに時間が経っているはずだが、鈴谷と熊野はまだ一度も出撃したことがなく、青葉も数回程度のような。いくら火力で戦艦達に遅れを取るとは言え、ここまで使わないのは異常だと思う。とにかく早めに練度を上げないと、いざという時に使い物にならないだろう。

長門から貰った遠征と哨戒の計画書のほうは特に問題はなかった。やはり駆逐艦と軽巡の数が少なく予定が詰まっているが、無理な予定と言うほどではなさそうだ。いきなり提出を命じた割には完成度が高かったのも、前任者が長門に丸投げしていた疑惑も出てくる。

コンコンコン

「失礼します。提督、夕食の準備が整いました。艦娘達にも食堂に集まるように指示を出しております。」

「分かった、すぐに行こう。」

書類にも一通り目を通したし、明日の予定もだいたい組上がったのでちようど良い。さっそく大淀と共に食堂へと向かう。食堂に近づくとカレーの良い香りが漂ってきて、それだけで忘れていた食欲が暴れだしそうだ。食堂に入ると全員が立ち上がり敬礼をしてきたので返礼をする。さつと見渡せば食事が出来る事への期待と、まだ信じられないという不安が混ざりあって落ち着きが無い感じか。中には期待の方に針が振りきれてる奴も居るようだが。とりあえず配膳もしていないようだし、先に仕事の話の片付けるか。

「全員揃っているようだな。明日からの予定だがまず哨戒を再開する。現状は周囲の鎮守府にカバーして貰っているが、あまり頼りきりになるのは良くないからな。その後様子を見て遠征も始めるのでそのつもりで。残りの者で鎮守府内の整理整頓と調査、あと面談を行おうと思う。面談では主に前任者の汚職の調査がメインとなる。あと

艦娘側からの質問と要望もあれば話を聞くつもりなので、事前に考えておいて欲しい。話は以上だがこの場で質問があるものは居るか？」

そう言っただけ見渡すと手を上げて居たのは、意外にも駆逐艦だった。

「なにが聞きたい？」

「あ、あの駆逐艦電なのです。司令官さん、本当にご飯を食べても大丈夫なのですか？」

「この鎮守府の責任者である私が決めたことだ。緊急時を除けば毎食用意するつもりだからちゃんと食べるように。むしろ用意したものを無駄な遠慮で食べない方が困る。他に質問はあるか？」

「はい！夕立お布団が貰えるって聞いたっばい

それって本当っばい？」

「まだ伝わってなかったか。今日の夜までに布団が納品される予定だ。長門には全員に配るよう指示を出しているから、長門の指示で受け取るように。」

「じゃあ司令官、お風呂は使っても良いかしら？一人前のレディとしてやっぱりお風呂には入りたいもの」

「入渠か、考えてなかったが好きに使って良いぞ。ただし高速修復材の使用は許可した時だけなのと、負傷した者がいる場合そちらが優先だ。」

ざっと見回すが他に質問はなさそうだな、雰囲気的には素直に喜んでる者と、困惑してる者で半々くらいかな？まあ、急に待遇が改善されれば戸惑うことも多いだろうが、真つ当な鎮守府にすると決めた以上、やることは早めに進めていかなければならない。

「明日の仕事の割り振りに関しては、長門に指示を出すので従うように。では間宮、私は会議室で食べるので後は任せた。」

「えっと、ここで食べていられないのですか？」

「まだやるのが山積みだからな、私の分は先に貰って行く。」

そう言っただけ自分の分をトレイに乗せて持って行く。やることがあるのはあるのだが、本当の理由は別にある。艦娘達は久しぶりに食事を楽しむことが出来るのだ、それを邪魔してしまうのは無粋だろう。自分も士官学校時代に経験したが、偉そうにしてる上官と一緒に食べ

るのは気分が悪い。やはり食事は誰にも邪魔されず、穏やかな気持ちで楽しむべきだ。

## 7話

艦娘達の多くは困惑していた。新しい提督が理解出来ない。最初はただただ怖がっていたし、着任の挨拶では悲観的な話をしていた。で、また前任者の時のような悲しい日々を過ごすものだと思っていた。しかし実際には大急ぎで待遇改善に取り組んでくれて、今日は久しぶりの食事まで出来るし、艦娘側からの要望にはきちんと応えてくれている。それなのに口調や態度は冷めた感じなのが不思議なのだ。優しく接する人だったら信じられたらだろうか？いや、最初は優しくしてきた人に何度も裏切られたから無理だ。かと言って前任者のような傲慢で粗暴な人間は二度とごめんだ。

「皆さん思うところはあると思いますが、まずは食事にしましょう。お皿を持って並んで下さい。皆さんに行き渡ったら揃って頂きましょう。」

間宮の言葉にまず駆逐艦達と赤城が我先にと列を作る。一部が動き出すとやはり期待はしていたようで、全員並んでカレーを受け取る。長らく補給として燃料等しか与えられて居なかったもので、ただのカレーとサラダがご馳走に見える。

「わわわ、とつても美味しそうなのです！」

「電、ぶつかってこぼしたりしたらダメよ」

「皆おっそーい！」

「赤城さん、まだ食べてはダメよ。」

「じゆる、わ、わかつてます。」

「ケツ、皆食べ物なんかで釣られやがって。」

「俺はあいつなんかを信用しないからな。」

「天龍ちゃん？あの人を信用してないのは一緒だけど、あんまり突っ掛かったらダメよ〜」

全員に行き渡ったのを見て間宮が前が出る。

「それでは皆さん、腕によりをかけて作ったのでたくさん食べて下さいね。頂きます。」

「「頂きます。」」

そこからはしばらくは幸せな時間を過ごす。久し振りのまともな食事に感動し、仲間と和気あいあいと会話をしながら楽しむ姿があった。そこには辛い現状を一時忘れるだけのものがあつた。

間宮の作ったカレーはとても美味かつた。流石は給糧艦と言つたところか。軍での楽しみなど食事くらいなものだから、その食事の質が高いのは凄く良いことだ。

以前の作戦の資料を読んでみたが、これは杜撰なものだつた。戦艦達が深海棲艦を撃退した戦いについては、それなりに詳しい資料が残っていたが、遠征の記録や哨戒での遭遇戦などの記録が曖昧なものが多い。中でも気になつたのは少数で遠征に行き、全員轟沈した回数が多いことだ。しかも戦闘内容はほとんど記載がなく、ただ深海棲艦と遭遇し轟沈とだけ書かれている。そもそも重巡2名で遠征に出たりするのが不自然過ぎる。とりあえず食器を返す時に大淀に資料を集めるように伝えるか。そろそろ艦娘達の食事も終わっているだろう。

食器を持つて食堂に行くと、ちょうど艦娘達が寮へと戻つて行くところだつた。久し振りの食事のお陰か表情も明るい者が多い。やはり美味しい飯は人生を豊かにするものだ。入り口に近づくとこちらに気がついたようで、壁際に寄つて敬礼をしてくる。日に何度も敬礼されるのはなんだか慣れないものだ。軽く手を上げて応えようと、足早に艦娘寮の方へと去つて行くものが大半だつた。

「司令官、カレーとっても美味しかったわ。」

「ありがとうございます。」

律儀にお礼を言つてきたのは・・・たしか駆逐艦の暁だつたか。お風呂の件を聞いて来たのもこの娘だつたな。

「おう、作つてくれた間宮にもちゃんと言つたか？」

「もちろんよ。お礼はちゃんと伝えるし。」

あ、お風呂とお布団もありありがとうございます。」

「その辺も真つ当な鎮守府なら当たり前前のもだから気にするな。その代わり仕事はきつちりやつて貰うからそのつもりでな。」

「暁は一人前のレディだもの、立派に働けるわ」

「ああ、期待している。」

ペこりと頭を下げて仲間の元へと戻って行く暁。心配そうな仲間  
にドヤ顔しているのはなんだか微笑ましい。しかし多くの艦娘が提  
督を怖がっている中で、初めて仕事以外のことで話しかけたというこ  
とは、かなりの勇気がいることだと思う。一人前のレディと言ってる  
のもあながち馬鹿には出来ないな。

食堂の中に入ると楽しそうに話をしていたのが一瞬で静まり、全員  
が立ち上がって敬礼してくる。またか・・・とりあえず応えて奥に居  
る間宮のところに行く。

「御馳走様、美味かった、今後も頼むぞ。」

「お粗末様でした。久し振りに皆に料理を出せて嬉しかったです。食  
事に関しては今後もお任せ下さい。」

食器を渡してから大淀を探してみるが見当たらない、まあ後で執務  
室に来るだろうからその時で良いか。その代わりと言ってはなんだ  
が、重巡の鈴谷と熊野が居た。面談は明日からとは言ったものの、一  
度も出撃していないのはかなり気になるので、出来れば早めに話を聞  
いておきたい。

「重巡の鈴谷と熊野、少し話がしたい。今から会議室について来てく  
れ。」

その瞬間空気が凍るのを感じた。大淀や長門達以外を呼んだのは  
初めてだが、ここまで空気が重くなるものなのか・・・

「わ、分かりました・・・」

顔を青ざめさせながらなんとか答えた鈴谷は、士官学校時代に見た  
別の鈴谷と全く別の存在だと思えるほど暗かった。これはよほど前  
任者に酷い扱いをされたのだろう。

「ほら見る本性を現しやがった、食事だ布団だどこちのご機嫌取り  
しておいて、結局これじゃねえか!! やっぱ人間なんて信用できねえ  
ぜ!!」

「どういうことだ天龍?」

「しらばっくれるつもりかよ!! てめえら人間が散々やってきたことだ

ろうがゲス野郎!!」

「なにが言いたいかは分からないが、あまり上官を侮辱するようなら、規律を守る為に罰を与えなくてはならなくなる。これは警告だぞ天龍。」

「お前ら人間はいつもそうだ!!こつちが逆らえないのを良いことに、罰なんて言い掛かりをつけて楽しんでやがる!!そんな奴を誰が信用するかって話だ!!」

はあ、警告はしたのだが仕方がないか・・・

ちようど騒ぎを聞きつけたのか食堂の入り口から長門が飛び込んて来る。

「どうした!?!なんの騒ぎだ!?!」

「長門、天龍を営倉に入れておけ。警告を無視して侮辱をしたのだ、罰を与えなくては示しが付かない。」

「なっ!!いや、しかし」

「長門、これは命令だ。天龍を一晩営倉で頭を冷やさせろ。」

「長門さん、俺も覚悟はしてる。営倉に連れて行ってくれ。だけどなあ提督、俺は納得もしてないし信用なんて全くしてねえからな!!」

「・・・分かった、私が責任持って営倉に連れて行こう。」

長門は凄く悔しそうに、そして若干失望したような目で見てきたがこればかりは仕方がない。信賞必罰が出来ない組織は簡単に崩れてしまう。まあ今回は初犯だし前任者に酷い扱いをされてきたこともあるので、一晩営倉で過ぐすという軽い罰で済ませておこう。しかしこれが続くようならまた考えなければならぬが。

長門に連れて行かれる天龍を見送る。これから営倉行きだと言うのに、天龍は堂々と胸を張って歩いている。間違ったことは一切していないという自負があるのだろう。その姿は士官学校時代の自分と被るものがある。反対に長門は見るからに気落ちしていて、どちらが連行される罪人なのか分からなくなりそうだ。

「鈴谷、熊野、待たせたな。会議室に行くぞ。」

「・・・は」

こつちの二人は既に諦めきったような表情で応える。確かに嫌な

過去を聞き出さなくてはならないが、よほど嫌な思いをしてきたのだろうか？本当に先が思いやられる。



## 8話（面談 鈴谷&熊野）

一連の流れで非常に重苦しい雰囲気の中、鈴谷と熊野を連れて食堂を出る。天龍に与えた罰は軽いものだが、艦娘達からはかなりの怯えを感じる。かと言って前言を撤回するような真似をすれば、以後艦娘達の行動に歯止めが効かなくなる。今は提督への恐怖で大人しくしているが、もしこちらが何もしないと感じたのなら、今まで虐げられてきた恨みをぶつけようとしてくるだろう。前任者達を恨むのは分かるが、それを自分に向けられるのはたまったものではない。それにそんな状態になれば自分は大本営から無能の烙印を押され、艦娘達は危険分子として解体処理されてしまうだろう。そんな未来は絶対に実現させる訳にはいかない。

鈴谷と熊野を連れて会議室に戻ったが、大淀はまだ来ていないようだ。とりあえず先に二人から話を聞いておくとしよう。二人に椅子に座るように伝え話を始める。

「まず初めに確認しておきたいのだが、記録では二人ともまだ一度も出撃していないとのことだったが、これは本当か？」

「はい、間違いありません・・・」

「なぜ出撃させられなかったか前任者は言っていたか？」

「そ、それは・・・」

鈴谷は暗い表情で言い淀み、熊野はずっと押し黙っている。

「別に責めている訳ではない。前任者のことを調査するのも私の仕事なのだ。辛い記憶だとは思いますが協力して欲しい。」

そう言っつて鈴谷を見つめると、鈴谷は目に涙を浮かべたが、覚悟を決めたように顔を上げた。

「その・・・私達が・・・重巡洋艦は・・・戦艦の出来損ないだから・・・です・・・。」

「は?..」

そこからの鈴谷の話をまとめると、前任者は見栄えの良い戦艦達を揃える為に建造を何度もしたが、建造では好きな艦娘を選べる訳では

ない。その結果戦艦を手に入れる過程で「ハズレ」として重巡洋艦や軽巡洋艦が手に入る。軽巡洋艦であれば遠征時の旗艦や潜水艦対策に使えるが、重巡洋艦に出来ることは戦艦や正規空母の下位互換ではない。雷撃戦であれば重雷装巡洋艦の独壇場だ。

それならば建造後すぐに解体されそうなものだが、重巡洋艦には別の仕事があった。それは提督のストレス発散や訪問客などの接待だ。提督の気分次第で犯され、さらには不特定多数の人間の相手をさせられる。反抗すれば拷問されるので抵抗する気力も失ったとのことだった。広場で天龍が叫んでいたことを思い出すが、やはり前任者は最低のクソ野郎なのは確実のようだ。

「話してくれてありがとう。今後私がお前達の提督である限り、そんな真似はしないし他の奴らにも手出しさせないと誓おう。」

「そう……ですか……」

まあ、こんな言葉一つで信じられるほど軽い話では無いだろう。誓ったからには約束は守り抜こう。行動によってしか信頼は得られないものだ。

「さて、今後のことだがお前達はどうしたい？」

「どうしたいって言われても?」

「ならこちらから道を提示しよう。まずはこここの鎮守府で艦娘として戦う道。もう一つは退役してどこかで軍と関わらずに過ごす道だ。他に考えつくならそれでも構わない。」

「えっと……今選ばないとダメかな?」

「いや、ゆっくり考えてもらっても「私は戦いますわ!!」

「熊野?」

今までずっと押し黙っていた熊野が叫んだ。

「私は艦娘で重巡洋艦の熊野ですの!戦艦の出来損ないじゃありませんわ!艦娘としての誇りを取り戻せるなら私は戦いますわ!鈴谷はどうですか?」

「私だって戦いたいよ……でも重巡洋艦じゃ役に立たないって前の提督が……」

「それは違どうぞ鈴谷、重巡洋艦が使えないなんてことは全くない。重

巡洋艦を上手く使えない無能な前任者の言い訳に過ぎない。戦う覚悟があるなら私はお前を存分に活躍させてやる。」

「うん、分かった。私戦うよ提督。これから宜しくね。」

「よく言いましたわ鈴谷！私達で重巡洋艦の凄さを見せ付けてやりますわ！」

この調子ならなんとかなりそうだな。演習で戦いの感覚を思い出させれば、きつと活躍してくれるだろう。いや、活躍させてやると約束したのだから徹底的に鍛えてやろう。

「お前達の覚悟は伝わった、これからは艦娘として力を貸してくれ。話は以上だ、今日はゆっくり休め。」

「ハッ!!」

会議室に来たときは全てを諦めた目をしてた二人が、目の光を取り戻したことに頼もしさを感じる。正直言うところの二人が使い物にならなければ、重巡が青葉一人だけになるので絶望的だったので一安心だ。

コンコンコン

「失礼します。」

お、大淀が戻ったか。調べたいことがまだまだ多いので助かるな。

## 9話

「提督……その……鈴谷さん達とのお話は終わったのですか？」  
「ああ、たった今終わったところだ。タイミング良く入室したから聞いていたのではないのか？」

「ツ!!いえ……その……心配でしたので近くで待機しておりましたが、会話については何も聞いていません。」

「なら良いが。」

大淀はかなり顔を青ざめさせているので、本当のところは分からない。確証があるわけではないし聞かれても問題はなかったが……

「それと提督……天龍さんを営倉入りにしたというのは本当ですか？」

「ああ、本当だ。長門から詳細は聞いたのか？」

「ええ、長門さんと食堂に居た娘から聞きました。天龍さんが提督を侮辱したからだ。」

「ならその認識で合っている。」

「どうしてですか？」

「先程侮辱したからだと聞いたのだろうか？それが事実だ。」

「私達の待遇を改善して下さると約束して下さったのに……あれだけ早急に物資の手配をして下さって……私達の声にも耳を傾けて下さったのに……どうしてですか？」

なるほど。大淀は根本的な部分を勘違いしているようだ。

「私はこの鎮守府を真つ当な鎮守府に立て直すと約束したのだ。だから食事も布団も早急に手配をした。だがそれは艦娘を甘やかす為ではない。それらは真つ当な鎮守府ならば、当たり前用に用意されるべき物だから用意したのだ。そして天龍が軍人として規律を乱すことをしたから、規律を守る為に罰を与えた。これも真つ当な鎮守府ならば当たり前のことだ。」

「そうですか……分かりました……」

正直納得は出来ないが諦めたところか、それにしても営倉一晩だけでずいぶん騒ぎになった気がする。警告もしたうえでこの処分なのだから、甘いと言われても仕方がないと思っていたのだが……

ふと時計を見るともう夜の9時か。調べものをさせたかったが、初日から夜遅くまで働かせるのは印象が悪いな、大本營の奴らに突っ込まれたら面倒だ。

「そう言えば布団の納品は終わったのか？」

「先程届きましたので、今全員に支給しているところです。」

「分かった、それが終わったら今日の業務は終わりにする。他の者にもそう伝えてくれ。ご苦労だった。」

「ハッ！それではこれで失礼します。」

大淀を見送って今後の予定を考える。これ以上一人で頑張っても逆効果だろう。調査もどうせ一日で終わるとは思っていないし、きちんと睡眠は取らないと作業効率が落ちるだけだ。非常時ならば無茶もするが、通常時には体調を整えておくことも軍人の仕事だ。とりあえず風呂は提督の私室の隣に提督専用のがあつたな。寝る場所は・・・あの私室で寝ることだけは絶対がない。たしか応接室にソファがあつたはずだからそこにしよう。

コンコンコン

「提督・・・いらつしやいますか？」

長門が報告に来たのかと思つたが、どうやら別の者のようだ。

「入れ」

「・・・失礼します。」

そう言つて入つて来たのは龍田だつた。姉の天龍が営倉に入れられた件で文句でも言いに来たのか？士官学校時代に見た龍田はおつとりしたように見えるが、実は天龍に負けず劣らず好戦的な性格だつたはずだ。

「なんのようだ？」

そう尋ねると龍田は静かに膝をつき、綺麗な所作で土下座をした。・・・え？

「天龍ちゃんが無礼なことを言つてしまい申し訳ございません。天龍ちゃんには私から言い聞かせます、罰も代わりに私が受けます、私が何でもします。だからどうか天龍ちゃんを許してあげて貰えませんか？」

正直かなり驚いた。本来好戦的な龍田が大人しく土下座までして頼み込んでいるのだ。しかも解体処分とかなら話は分かるが、今回はただの営倉一晩だけだ。営倉は見せしめという意味合いはあるが、基本的には部屋に閉じ込められてじっとしてただけだ。確かに掃除が行き届いていなければ不衛生などころではあるが・・・どうしてここまで大事になっているのかが理解出来ない。

「龍田、なぜそこまでするんだ？」

「・・・もう・・・天龍ちゃんが苦しむ姿は見たく無いんです・・・また解体されるところを見せられるのは・・・もう・・・」

「いや待て、話を聞いていないのか？今回天龍に与えた罰は、今晚営倉で過ごすことだけだ。解体するなんてことは言っていないぞ。」

「営倉行きということは、これからムチ打ちなどが待っているのでしょうか？天龍ちゃんは気の強い娘だから、きつと叩かれても反抗的な態度をとります。そして提督を怒らせてまた・・・」

「・・・ちよつと待て、なんでムチ打ちなんて話が出てくるんだ？私は営倉で一晩過ごせとしか命じてないぞ。」

「ならどうして天龍ちゃんは鎖で天井から吊るされているのですか！？」

「・・・え？なんで？」

## 10話

どうしても問われても、こっちがどうしても聞きたいくらいだ。営倉入りの罰は与えたが、天井から鎖で吊るせなんて指示は出してない。とりあえず現状把握が最優先だろう。

「私はそんな指示は出してない。しかしその話は聞き捨てならないから確認に行こう。営倉に行くから龍田は長門を営倉に連れてきてくれ。」

それだけ伝えて急いで会議室を出る。どうなっているんだ？まさか嵌められた？天龍がやけに挑発的だったのはこの為だった？それとも長門の作業なのか？だがそれにしてもあの二人からは、何かを企んでいるような嫌な気配がしなかった。天龍からは敵意を感じていたが、こんな回りくどいことをするとも思えない。

とりあえず現状把握をしなくては始まらない。足早に地下にある営倉へと向かうと、とても嫌な臭いがしてきた。士官学校の営倉もあまり清潔ではなかったが、ここの営倉はより臭いがキツイ。鎮守府の掃除をしておくなら、営倉の掃除もしておけよ・・・悪臭を我慢して地下へと降りて行くと、それなりに大きな牢屋が左右に3つずつ並んでいた。営倉にしては大きすぎると思うし、この程度の規模の鎮守府で6部屋はかなり多いのではないか？

「ツケー！ようやく来やがったか。」

声が出たほうを見ると天龍が拘束されていた。龍田の言っていたように、天井から鎖が伸びていて天龍の手錠に繋がっている。地面から足は離れていないが手を上げたままの状態で、ずっとこの姿勢を維持するのも辛いだろう。

「なんでこんなことに・・・」

「てめえが営倉行きて決めたんだろが!!」

「営倉行きとは言ったが、拘束しろなんて言っていない。」

「はあ？」

周囲を探すと鍵を発見した。ついでに見つけた鞭については放っておこう。急いで牢の鍵と天龍の手錠の鍵を外す。

「なんのつもりだ？」

「天井から鎖で吊るすのはやりすぎだから外しただけだ。大本營の奴らが知ったら大喜びで責めてくるぞ・・・」

「他所の奴らもやってるんじゃないかねえのかよ？」

「他の鎮守府の提督とやらにもやられたことはあるぞ？」

「他の鎮守府の内情までは知らないが、私は上の連中が作った法を逸脱するような真似をするつもりはない。」

「そう言うとな龍は胡散臭そうな目で見てくる。」

「その上の連中とやらが自分達で作った法を守ってなくても、お前はそいつらに従うって言ってるのかよ？」

「ああ、そうだ。あいつらに付け入る隙を与えたくはないからな。」

「へッ！偉そうな割には随分と弱腰なんだな！」

「なんとでも言え、この国が今どれだけ腐ってると思ってるんだ？力が無いまま真正面から挑むなんて馬鹿のやることだ。だからやり方は考えるさ。」

「そうかよ」

「そう言っただ龍は不機嫌そうにそっぽ向く。納得はしてないようだが、ひとまず大人しくはなったか。」

「提督、長門さんをお連れしました。」

「話が一段落したところでようやく龍田が長門を連れてきた。拘束が外された天龍を見て、少し落ち着いた感じの龍田とは対照的に、長門は押し黙って若干震えている。」

「長門、なぜ天龍を拘束した？營倉に連れていけとは言ったが、拘束しろとは命じてないはずだ。しかも天井から吊るすのは命令から逸脱し過ぎではないか？」

「その、前任者から營倉行きの時はきちんと拘束しろと言われていたのだ、だからそれが普通なのだと思うっていたのだ、申し訳ない。」

「長門さんを責めないでくれないか？俺が長門さんに迷惑かけたくなかったから、きちんと拘束するように言ったんだ。それで長門さんが責められると悪いからよ。」

「そういうことか。だから營倉行きと言った時に過剰な反応を示し



た訳だ。こいつらにとつて営倉とは拷問をされる場所だったのだ。相変わらず前任者は厄介なものを残してやがる!

「以後こんな真似をする必要は無い。もし今後拘束までする必要な事態が起こったなら、きちんと命令を出す。良いな!」

「ハッ!了承した。」

「天龍、拘束されていたなら罰としてはもう十分だ、部屋に戻って構わない。今後は発言には気をつけろよ。」

「それは提督次第だな。」

「て・ん・りゆ・う・ちや・ん?」

「ツ!!な、なんだよ?」

「私ちやくんと言ったよね?提督に突っ掛からないでつて?これ以上心配かけないでつて?」

「だ、だけだよ・・・」

「あらあら?~?だけどなにかしら?」

提督さんからも部屋に戻って良いと言われたし、お部屋でゆっくり話しましょうか?」

「あ、いや、その・・・」

「それでは提督、私達はこれで失礼しますね」

「お休みなさい。」

「ああ・・・その、明日も仕事だからあまり遅くならないようにな。」

「はあ、いい、お気遣いありがとうございます。」

「それでは。天龍ちゃん?」

「お、お休みなさい?」

「ああ、お休み。」

天龍を連れていく龍田はニコニコしていたが、内心かなり怒っているようだ。さつきまでの大人しく土下座までして頼み込んできた者とは別人かと思った。

「長門も早く休め、私ももう寝る。」

「ハッ!それでは失礼する。」

流石に今日は色々ありすぎて疲れた。さつきと寝て明日に備えよう。応接室のソファァーが待っている。

応接室のソファでゆっくり寝ていると、不意に近付いてくる足音で目が覚める。時間は深夜1時、こんな時間に近付いてくるのはただ事では無いだろう。敵襲か？暗殺か？それとも前任者を殺した奴か？とりあえず起きて体勢を整え、すぐに対処出来るようにする。相手はもう扉の前だ。

「提督！夜戦の時間だよ！！」

## 11話（1日日夜戦準備）

「提督！提督！夜戦の時間だよ!!」

部屋に入ってきた川内は、目をキラキラ輝かせ元気一杯に騒いでいる。今何時だと思ってる。

「うるさい、静かにしろ。あと今は夜戦の時間じゃなくて寝る時間だ。」

「いいや、夜戦の時間だね！夜戦が私を呼んでいる!!」

これがあの有名な夜戦バカか、夜な夜な提督のもとにやって来て、夜戦をさせると騒ぎ続ける問題児として有名だ。まさか着任初日から騒ぎ出すとはな・・・夜戦への執念だけは認めてやろう。

「今のところ夜戦をする予定は無い。明日の朝までは近くの鎮守府が哨戒を担当する約束だ。今夜は大人しく寝ておけ。」

「ええ〜そんなあ〜」

敵も居ないのに誰と夜戦をするつもりなんだよこいつは・・・そう考えていると、もう一人近付いてくる足音が聞こえてくる。こんな時間になんの用なんだ！

「提督！あ、川内さんも居ましたか。」

「大淀、こんな時間になんのようなんだ？」

「報告します、基地のレーダーにて敵艦隊を捕捉しました。現在こちらに向かつて侵攻中、構成は軽巡ホ級1、駆逐イ級3の斥候部隊と思われまます。」

「敵襲だ?!馬鹿な?!付近の鎮守府が哨戒を・・・あいつら手え抜きやがったな!!」

「ほら、やっぱり夜戦の時間じゃん!!」

「ツチ・・・分かった。夜戦の準備をしておけ」

「やったあ!!夜戦だ！夜戦だあ!!」

大喜びで走って行く川内を眺めながら頭を抱える。着任初日から夜戦とはついてない。

「それで敵艦隊との距離は？」

「現在の侵攻速度からすると2時間後には鎮守府が射程距離に入るか

と。」

「ならさつさと迎撃部隊を出さないとまずいな」

幸い敵艦隊の戦力はたいしたことないので、川内を旗艦にして駆逐艦を付ければ十分だな。一応数的有利は確保したいから、駆逐艦は4人だな。

「なあ大淀、駆逐艦の中で夜戦が苦手な奴とかいるか？そいつらは外しておきたい。」

「えつと・・・その・・・編成のメンバーでしたら、川内さんが集めて来ると思いますよ？夜戦の準備をしておけて言ってしまうましたし。」

「は？」

3分後、自分の前には出撃メンバーが並んでいた。編成を考える前に編成が終わってるのはどういうことだろうか？

「白露型駆逐艦一番艦、白露です！」

「白露型駆逐艦二番艦、時雨だよ。」

「白露型駆逐艦四番艦、夕立っばい！」

「白露型駆逐艦五番艦、春雨です、はい。」

「提督、これで夜戦行つて良いよね？」

とりあえず時間も無いし、編成する時間が省けたと考えるべきか・・・幸い駆逐艦達も嫌々参加している感じではないし、むしろ乗り気みたいだ。

「よし、このメンバーに任せる。川内を旗艦として単縦陣で速やかに敵艦隊を殲滅しろ。安眠を妨害した奴らを一匹たりとも逃すなよ！」

「二」「ハイ!!」「二」

「よおし!!夜戦だ!夜戦だあ!!」

元気良く返事をした彼女達に任せれば、ひとまず安心だろう。意気揚々と走り出す川内に駆逐艦達もついて行った。深夜にあのテンションは凄まじいな。

「なあ、大淀。なぜ川内は勝手に編成を決めて、艦娘達を集めて来たんだ？今回は時間がなかったし、編成も私が想定していた通りだったか

らそのまま行かせたが」

「その・・・川内さんは前任者から、夜戦に関しては丸投げされていたのです。」

「は？丸投げだと？」

「はい、前任者は戦艦と正規空母で正面から戦うことを好んでいましたので・・・その・・・夜戦だと空母が活躍出来ず、戦艦も昼間より危険が多いですし・・・あと夜は趣味に興じられていることが多かったので、とにかく夜戦が嫌いな方でした。」

「ああ、提督として最低なクズだな。それで？」

「川内さんが夜戦夜戦と騒ぐので、前任者は勝手に夜戦に出て良いと許可を出してしまったのです。出撃の許可を取らなくて良い、編成も作戦も勝手にしろ、事後処理も好きにしろと。なので川内さんは勝手に編成して、勝手に出撃していたのです。」

「無責任にもほどがあるだろ・・・」

「今回は提督が代わったのでちゃんと許可を取りに来たようですし、提督が夜戦の準備をしろと仰ったので、個人的な準備ではなく出撃の準備をしてきたのかと。」

「なるほど、そういうことなら独断専行を責める訳にはいかないか。実際に手際はかなり良かったしな。あと少し気になったのだが、急な夜戦にも関わらず駆逐艦の娘達が、かなりやる気だったのはなにか理由があるのか？」

「ッ・・・その夜戦は川内さんが全て仕切るので、駆逐艦の娘達には人気なのですよ。弾除けとして使われることもなく、無理な進撃を強要されず、被弾率もかなり低めですし。そして夜戦に行った娘達は帰還後ゆっくり寝られる、ということが大きいでしょうか？」

「体調を整える必要があるから、ゆっくり寝るのは構わないが、普通夜にちゃんと寝られるほうが良くないか？」

「それは・・・その・・・夜は前任者のストレス発散に付き合わされたり、来客のおもちゃにされるようなこともありましたので、安心して眠れない娘も多く・・・夜戦中は心配無いですし、帰って来る時間だと前任者も寝ていることが多かったので、朝方のほうが安心して眠れ

ます。」

「聞けば聞くほど頭が痛くなる話だな。それにしても前任者は駆逐艦にまで手を出していたのか」

「前任者は子供っぽい娘達にはあまり興味が無いようでしたが、来客の中にそういう人も居ますし、性的に手を出さなくとも失敗の責任を取らせるとか言って、拷問するのを楽しむような人でしたので・・・あと今はもう居なくなってしまったのですが、村雨さんや浜風さんなど少し大人っぽい娘達は手を出されていたようです。」

「・・・そうか。」

わりと軽い気持ちで聞いてみたら、想像以上に重い話が出てきてドン引きだ。むしろよくこれで汚職の噂程度で済んでいたものだ。真つ黒じゃないか、さっさと捕まってるよ。

「では提督、仮眠を取られてはいかがですか？接敵まで時間はありますし、戦闘のほうも川内さんに任せれば安心ですが、いかがなさいますか？」

「確かに送り出した以上私ができることは無さそうだな、だが私はこの責任者だ。戦闘については把握しておきたい、接敵の連絡が入ったら起こしてくれ。」

「かしこまりました。」

先頭を軽快に進む川内さんについて行きながら、白露型姉妹が密集して続いて行く。

「久しぶりの夜戦っぽい！一杯活躍するっぽい」

「そうだね、新しい提督は戦果が欲しいって言っていたから、僕達が結果を出せばきつと認めてくれるよ。」

「そうそう、だから心配しないでお姉ちゃんに任せてよ、春雨。」

「うん、ありがとうお姉ちゃん。」

「みんなー、そろそろ接敵するから気を引き締めて！行くよ!!」

「「はいー!」」

## 12話

「提督、川内さんからまもなく接敵するとの連絡が入りました。」

「分かった、旗艦川内の判断で戦闘を始めるように伝えてくれ。」

「了解しました・・・敵艦隊との交戦開始しました。」

初めての实战が夜戦とはついてない。幸い基地のレーダーで捕捉したため、おおよその位置が分かっているのは大きなアドバンテージだ。夜戦ではやはり索敵能力が重要なので、位置さえ掴めば戦力差的に圧倒出来るだろう。

「流石川内さんですね。T字有利を確保してからの奇襲攻撃、しかも川内さんが探照灯で捕捉して即座に一斉砲撃。初撃で旗艦のホ級含めて3隻を沈めました。」

おいおい旗艦自ら探照灯使うのかよ、探照灯を使えばこちらの命中率は大幅に上がるが、探照灯を使った艦娘が集中的に狙われる危険がある。旗艦が使うような物ではないと思うのだが、実際に奇襲でほぼ壊滅に追い込んだ手腕は見事なんだよなあ。

「最後の一隻も沈めたようです。こちらに損害なし、完勝です。」

「見事なものだな、通信繋げられるか？」

「こちらをどうぞ」

大淀から通信機を受け取る。

「あー、川内聞こえるか？」

「あ、提督？今回も良い夜戦だったよ！」

「見事な戦いだった、良くやった。」

「そうですね！白露型の皆も頑張ったから、帰ったら褒めてあげてね！」

「ああ、そうしよう。報告は昼食後に受けるので、帰ったらゆっくり休んでくれ。以上だ。」

「了解！」

これで自分の初陣は終わりか、はつきり言って提督として仕事をほとんどしていない気がする。それでも勝利は勝利だし、こちらに損害なく敵を殲滅したのだから満足しておこう。

「大淀もお疲れ様、あとは川内に任せてゆつくり休め。」

「ありがとうございます、提督もお疲れ様でした。それではこれで失礼します。」

臨時の司令室となっていた応接室から大淀が退室した。一人になった空間でつい1日を振り返る。着任後の案内で感じた不気味な雰囲気、着任の挨拶で天龍には厳しく言い過ぎたか？その後大淀や長門達がしっかり働いてくれたのは頼もしかった。挨拶の電話地獄は吐きそうだったが、配送の真柴さんという信頼出来そうな人がいたのは幸運だった。夕食のカレーは美味かったし、暁からお礼も言われたな。そこからは天龍ともめて、鈴谷に熊野の過去を聞き、天龍が拘束されたことでまたもめて・・・最後に夜戦で初陣か・・・

濃い過ぎる1日だった。山程問題点は出てきたし、調べることはまだまだある。果たして自分はこの鎮守府を立て直すことが出来るのだろうか？

夜戦を終えて大満足の川内を先頭に鎮守府へと帰還する。川内から少し離れて白露型姉妹が集まっていた。

「ふふーん、イ級を2隻も沈めたっぽい！」

「僕は1隻だね。夕立が沈めたうちの1隻は、春雨が中破まで追い込んだ奴じゃないか。」

「ううーお姉ちゃんはダメだったかなあ。ホ級にダメージは与えただ、川内さんに持っていかれたし。」

「川内さんは夜戦の達人だから仕方ないさ。むしろ川内さんが居るのに、僕達でイ級3隻沈めたなら大戦果だよ。」

「この調子でどんどん活躍するっぽい！」

「今度はお姉ちゃんも負けないんだから！」

「だから春雨も一緒に頑張ろう！」

「うん・・・ありがとうございます、お姉ちゃん。」



### 13話 (2日目)

「遠征に失敗した挙げ句、駆逐艦を3隻も消費しただど!?そしてお前は大破なんぞしたくせに、資源を捨てておめおめと帰ってきただど!?」

夜の執務室で顔を真っ赤にした提督から怒鳴られている。遠征途中に運悪く敵艦隊に発見されて、旗艦だった村雨姉さんが即時撤退を求めたが、聞き入れられることは無かった。お前達の仕事は資源を持ち帰ることだ!!敵艦隊を撃破してでも資源を運べ!!と無茶な命令が下された。資源を積んだ駆逐艦4隻で戦艦を含む艦隊に勝てる訳がない。全員が敵の砲撃の中を全速力で鎮守府へ逃げたが、一人、また一人と私の姉妹が暗い海へと沈んでいく。村雨姉さんも私を庇って沈んでしまったが、私もすぐに砲撃を受けてしまう。積んだ資源も失ってフラフラになりながら逃げ出して、なんとか鎮守府へと帰ってこれたが、私を待っていたのは罵倒の嵐だ。

「これだから駆逐艦などは使い物にならないのだ。資源を集めるか戦艦の盾になるぐらいしか使い道が無いくせに、それすら失敗するとはどういうことだ!?!しかも大破したまま帰って来やがって!お前も一緒に沈んでおれば、修理の手間もかからなかったというのにな!!」

なんで私は戦っているのだろうか?ボロボロの私を正座させていた提督は、私を蹴り倒し躡だと言って鞭を振るう。村雨姉さんが生かしてくれたこの命を無駄だ、沈めば楽だったのと言われるこの場所で、私はなんで戦っているのだろうか?

激しく罵り鞭を振るうこの人を見上げると、生意気だと言って顔を叩かれた。考えが・・・まとまらない・・・視界・・・赤く・・・

「春雨!!春雨!!起きて!返事をして!」

「お姉・・・ちゃん・・・」

「起きた?もう大丈夫?またうなされてたよ?」

「すごい汗っばい!タオル貰ってくるっばい!」

「またあの夢かい？大丈夫だよ春雨、僕達がついてるから、大丈夫だから・・・」

「ありがとう・・・大丈夫です、はい・・・」

人が近づく気配で目が覚める、時間を確認したら朝の7時前だった。昨日は急な夜戦であまり眠れなかったが、さすがに起きて執務の準備をするべきだろう。

コンコンコン

「提督、大淀です。起きていらつしやいますか？」

「ああ、今起きたところだ。入れ。」

「失礼します。」

応接室に入って来た大淀は昨日の疲れも見せず、姿勢を正して敬礼をしてきたので返礼する。

「まもなく朝食の準備が整いますが、いかが致しましょうか？」

「まだ起きたばかりで準備をしていなくてな、悪いが朝食はここに持って来てくれ。あと8時半から朝礼をするから、広場に集合させるように。ああ、昨日の夜戦組は昼までゆっくりさせておいて大丈夫だ。」

「了解しました。朝食をお持ちしますね。」

大淀が退室した後、急いで身支度を整える。指揮官がだらしない格好をしているのは、部下の風紀も乱れてしまうだろう。そして今日の予定を考えるが、相変わらずやるのが山積みだ。とりあえず大淀には資金の増減と来客の記録を調べて貰い、明石には資源の増減を調べさせる。長門には艦娘達を集めて、前任者の私室の調査と片付けを任せよう。あとは哨戒を始めるのと、面談も進めなくてはならない。今日も忙しい1日になりそうだ。

## 14話

朝食と身支度を済ませて広場に向かうと、既に艦娘達が整列をしていた。相変わらず緊張した雰囲気伝わってくるが、昨日よりは些かマシになった感じかな？

「提督、夜戦組を除く35名全員集合しております。」

「わかった、なら始めよう。」

列に戻る大淀を見送ってお立ち台に向かう。昨日は地獄の入り口のように感じた階段だが、今日はなんだか猛獣の巢の入り口くらいに見える。その程度なら可愛いものじゃないか。

「総員、提督に敬礼!!」

「おはよう諸君、今日はやることも多いので手短かに伝えよう。大淀は引き続き秘書艦として働いて貰い、明石には資源や物資の出入り等の過去のデータをまとめて貰う。明石の補佐には夕張を付ける。長門は前任者の私室の調査と片付けの指揮を取って貰う。ここは徹底的に調べるので皆にも協力してもらう。次に今日の哨戒だが、龍田・吹雪・睦月・如月に任せる。基地のレーダー範囲の外を見回る程度で構わない。最後に面談をしていきたいので呼ばれた者は会議室に来るように。何か質問がある者はいるか？」

「なら一つ聞きてえんだが「天龍ちゃん？」

「・・・聞きてえですが、面談するのは一人ずつやるのか・・・ですか？」

「あー天龍、昨日は罵倒したから罰を与えたが、無理して敬語を使う必要はないぞ。」

それで面談だが一人ずつやる時間は無いから、ある程度まとめてやろうと思っている。個別で話したいことがある場合は、事前に大淀に伝えてくれれば対応しよう。」

「おう、話が分かるじゃねえか！それなら構わねえ」

「他に質問がある奴はいるか？なければ解散だ。大淀・長門・明石はこの後に会議室に来るように。哨戒組は出撃の準備をして哨戒に出てくれ。では解散！」

「提督に敬礼!!」

艦娘達に敬礼を返しお立ち台から降りる、今日はかなりスムーズに進んだ気がする。いやこれが普通なんだろうけど。今日のメインは前任者の汚職の調査だ。上の連中が証拠隠滅しているようだが、徹底的に掘り返して探してやる。

会議室に大淀達を連れて戻ってくる。

「ではさっそくだが、今日は前任者の汚職調査がメインとなる。大淀は来客の履歴を調べることと、資金の流れを調査して欲しい。あと遠征や哨戒で全艦轟沈した日付もまとめてくれ。秘書艦としての仕事もあつて大変だろうが頼むぞ。」

「了解しました。ですが資金に関しては前任者が自ら管理してましたし、先に調査に来られた方々が証拠隠滅している可能性もあります。が・・・」

「資金に関しては証拠が見つければ儲けものつてくらいだが、やるだけやってみてくれ。」

「はい!」

「次に明石だが、まず倉庫に長門達が作業するスペースを確保してもらい、その後資源の増減の調査を頼む。特に他所の鎮守府から輸送されたやつを調べて欲しい。」

「はい!お任せください!」

「長門は艦娘達を集めて、前任者の私室の調査だ。部屋の中身は全て倉庫に運び出して調べて欲しい。壺や絵画なんかは全て売るから丁寧に扱ってくれ。」

「それは構わないが、全部運び出したら提督はどこで生活するのだ?」

「しばらくは応接室を使うが、調査が終わり次第普通の家具を購入するつもりだ。前任者の悪趣味なやつをそのまま使うのは吐き気がする。」

「フッフ、了解した。綺麗に全て運び出しておこう。」

「それでは各自作業を開始してくれ。あ、あと面談の件だが、まずは暁・雷・電・響の4人を呼んで欲しい。」

「了解しました。すぐに呼んで来ます。」

大淀達が退室するのを見送ってから資料に目を通す。暁達第六駆逐隊だが、前任者が駆逐艦を消耗品扱いしていたにも関わらず、他の駆逐艦より長く生き延びている。一番長いのは島風と雪風だが、その二人は駆逐艦離れした性能を持っているので、提督の間でも人気が高かったので理解出来る。そして長く生き延びているわりには、練度があまり高くないことも気になる。

コンコンコン

「司令官、第六駆逐隊集合したわ！」

「入れ」

さて、今度はどんな話が出てくるのやら・・・

## 15話（面談） 第六駆逐隊

「司令官、ご機嫌ようです。暁達に話があるのね？」

「ああ、朝礼でも伝えたが面談をしたい。とりあえず座りたまえ。」

あらかじめ用意していた椅子を勧めると、右から暁・響・雷・電の順番で座っていく。暁は表情が明るく、ちよつとドヤ顔している。響はあまり表情が読み取れないが、なんとなくこちらを品定めしている。雷は怯えが隠せていないが、一応取り繕おうと目線を逸らそうとしない。逆に電は完全に怯えていて目線を合わせようとしない。同じ暁型の姉妹でも個性がはっきりしているな。

「今回の面談は調査が目的で、諸君を責める意図はないから安心してくれ。」

「大丈夫よ司令官！暁になんでも聞いて」

「ではまずは前任者の印象について、一人ずつ聞いておこうか？」

「そうね、暁はあまり前の司令官とは話してないからよく分からないわ！でも皆が酷いことされてるって聞いたから、嫌な人だったと思うわ。」

「そうだね・・・怖い人だったよ・・・急に何を言い出すか分からない人だから・・・」

「え、えつとやっぱり怖い人だったかしら？で、でも私達が危険な時は、ちゃんと応援送ってくれてたわね。」

「電は・・・皆が沈むのも、痛いことをされるのも嫌なのです・・・」

「同じ第六駆逐隊でも評価が分かれるのか、気になるところはあるが、まずは暁。」

「なにかしら？」

「あまり前任者と話をしていないと言っていたが、暁が第六駆逐隊のまとめ役ではないのか？通信とかでも話をしていないのか？」

「まとめ役はもちろんお姉ちゃんの暁よ！でも司令官との連絡とかは響が担当していたわ！」

「そうだね、この中では一番長く在籍しているからね。」

「なるほど、じゃあ次に雷。危険な時はちゃんと応援を送ってくれた

と言っていたな。」

「そ、そうだけどどうかしたの?」

「戦闘の記録を見たが、他の遠征や哨戒の部隊だと轟沈していることも多々あるようだが、本当に応援を送って貰っていたのか?」

「そうね、私達だけで切り抜けられない時は、素直に応援を頼んでいたわ。」

「そうか。」

駆逐艦達は消耗品として扱われていたと思っていたが違うのか?

それにしても全艦轟沈の回数が多すぎると思うが・・・

「電は前任者を怖がっていたが、何か理不尽なことをされたのか?」

「電は・・・無理な作戦に失敗して、鞭で叩かれたこともあるのです・・・その時は由良さんと初雪さんと深雪さんが沈んだのです・・・旗艦だった長良さんはもつと酷いことをされていたのです・・・」

「そうか・・・それは辛かったな・・・」

やはり無理な作戦を強行して、失敗すると責められていたのだな。ならなんで第六駆逐隊で動いていた時は、応援を送ったりしていたのだろうか? 誰かお気に入りでもいたのか?

「なら単刀直入に聞くが、この中で性的なことを迫られた娘はいるか?」

「暁は無いわね。」

「私も・・・無いかな・・・」

「うーん、そういったことはされてないわね。」

「電は・・・お仕置きはされたのですが、そういったことはなかったのです。」

前任者は子供には興味が無かったのかな?

「それなら良いのだが、では何か要望などはあるか?」

「もう、痛いことをされるのは嫌なのです。深海棲艦との戦いは軍艦として避けられないのですが、暗い営倉で守るべき人から鞭打ちされるのは嫌なのです。」

「それはやるつもりは無いから安心しろ。」

「えっと、今の司令官は良い人みたいだし、もつと私を頼っても良いの

よ！」

「ああ、仕事はきつちりやって貰うつもりだ。頼んだぞ。」

「そうね・・・昨日お風呂でシャンプーが目染みて痛かったの。だからシャンプーハットが欲しいわ！」

「なるほど、そこは気がつかなかったな。とりあえず駆逐艦達の人数分必要か？手配しよう。」

「提督、ありがとうございます。」

「えつと・・・提督？暁の分だけで十分だと思っよ・・・」

発注する備品のリストに加えようとしたら、響に止められてしまった。駆逐艦の子達が皆必要という訳ではないのか？

「分かった、それで響は何か要望はないのか？」

「そうだね、この後二人で少し話したいことがあるんだ。時間を取って貰えるかな？」

「え？響？今話したら良いじゃない？」

なんだかあまり聞かれたくない話がありそうな響だったが、暁が邪魔をってしまった。純真無垢なもの問題だな。

「ああ・・・暁、この場では言いにくいこともあるのだろう。一人前のレディなら気をきかせてやってくれ。」

「そ、それもそうね。ちゃんと分かっているわ！」

ああ、暁がちよろくて助かった。

「それでは響は残って話をしよう。他の者は長門と合流して、前任者の部屋の調査をしてくれ。」

「はい！」

敬礼をして退室する3人を見送ってから、響に向き直る。

「それで話とはなんだ？」

響はあまり表情に出ないタイプだが、流石に緊張しているのが伝わってくる。いったいどんな話が出てくるのやら・・・



## 16話

「提督……まずはごめんなさい……」

「さっきの面談で嘘をついた件か？」

「……分かっていて見逃してくれたのかい？」

「まあ、言いたく無いことだつてあるだろうし、私を信用してないから話さなかったということも考えられる。だから今すぐに聞き出すつもりはなかったよ。」

「そつか……それで相談なんだけど……」

「自分がなんでもするから、他の姉妹は見逃して欲しいってところか？」

「つ!!どうしてそれを!?!」

ああ、やつぱりか……響は今まで姉妹達を陰ながら庇っていたのだろう。だからこそ暁と雷はあの程度で済んだのだろう。電は別の部隊に配属された時に、トラウマを植え付けられてしまったようだが……

「姉妹達に聞かれない話と言われて、一番に思い付いたのがこれだったからな。艦娘達の姉妹の絆は強いから、姉妹を出し抜いて優遇して貰おうなんて考えないと思つた。」

「そう……だね。姉妹は本当に大切なんだ。だからあの笑顔を守る為に頑張っていたんだ。電は守りきれなかったけど……でももう、皆が沈むところは見たくないよ……」

「言いたいことは分かつた。しかし前任者の時代はもう終わったんだ。私の鎮守府では前任者のような真似はさせない。」

「どうして提督はそんなことが言えるんだい？」

最初に優しい人は居たんだ。でも皆欲望に負けて私達に酷いことをする。酷いことはしないと云っていた人が、醜く歪んでいくのを見てきたんだ。信用……出来ないよ……」

「……そうだな、人間が欲望に任せて生きているってのは間違つてないだろう。だが人間の欲は色々な種類のものがあつてな、私と前任者では求める物が違う。だから前任者とやる事が違うだけだ。」

「・・・？なら提督は何がしたいんだい？」

「軍人としてこの国を守ること、それと私の兄を無実の罪で処刑した、軍の上層部の腐った連中を一掃すること。この2つが私の目的だ。」

「・・・つまり復讐かい？」

「ああ、復讐だ。だけど復讐だけならこんな手間がかかる真似はしない。それで済むなら私はとくに殺人鬼になっている。だが奴らは一応国を守る役割を担っている。奴らを殺せば深海棲艦によって、兄が守ろうとしたこの国が滅ぼされてしまう。だから地道に功績を上げて権力と力を得て、少しずつ腐った奴らを蹴落とす、提督として真っ当に働ける者を重用して、軍そのものを建て直したい。この鎮守府は私にとってその第一歩だ。だから艦娘達には練度を上げて、戦果を上げること集中して欲しい。その邪魔になる奴らは排除する。」

「・・・とんでもない人が私達の司令官になったんだね・・・はつきり言って痲痺持ちだった前任者が子供に見えるくらい怖いよ・・・でも、うん、この国を守りたいのは私達艦娘も一緒だし、上が腐ってるのは私達も嫌だよ。それに腐ってる連中と一緒にされたくないから、私達を大切に扱ってくれるんだね。それなら信用出来るかな。」

「大切に扱うと言うよりは、軍人としてきちんと扱うだな。これから先艦娘達を過酷な戦場に送らなければならなくなる時もある。当然簡単に沈ませる気はないが、戦場に絶対安全な場所なんて無い。だからそんな死地に送り込む以上、戦場以外では安心して過ごして欲しいとも思う。だから要望などは出来る範囲で叶えていきたいと思う。」

「ふふつ、ようやく艦娘らしい生き方が出来そうだね。分かった、私は司令官を信用するよ。これから宜しくね。」

「ああ、こちらこそ宜しくな。」

そう言つて笑う響と握手を交わし、響の信頼を得ることに成功した。正直復讐が目的だと知られたら警戒されると思っていたが、響は受け入れてくれたようだ。この調子で他の艦娘達からの信頼も得たいところだ。

「さて、それでは前任者について知つてることを教えてくれないか？」

そこから響が語った内容も悲惨だった。駆逐艦や軽巡洋艦は消耗品のような扱いをされて、頻繁に轟沈しているので長く在籍している者は少ないこと。任務に失敗すれば罵声と共に鞭で叩かれること。反抗的な艦娘は拷問され、酷い場合はその姿を姉妹艦に見せつけたり、目の前で解体するなどもしていたらしい。提督の気分次第で艦娘を犯し、戦艦と正規空母以外は接待にも使われていたらしい。提督自身は子供に興味が無かったらしいが、この街の市長がロリコンらしく、暁型姉妹を守る為に響が一人で相手をしていたらしい。

とにかく悪事が次から次へと出てきて頭が痛くなる。よくもこれ程までにやったものだ・・・

「なあ響、一つ気になったんだが、消耗品のような扱いをされていたらしいが、雷は危険な時は応援を送ってくれたと言っていたな。その辺はどうなっているんだ？」

「そこは私が上手くやってたからね。前の司令官は言い方一つで誤魔化せたりしたから。」

「どういうことだ？」

「例えば遠征中に敵艦隊に遭遇した時に、敵艦隊に遭遇したから資材を捨てて撤退したいって報告したら、私達が無能だと怒って無理にでも資材を運べって言われるんだよ。」

「はあ・・・相変わらずな奴だな・・・」

「だから敵艦隊の捕捉に成功した、観察を続けるので主力艦隊で撃破する好機ですって報告するんだ。そしたら意気揚々と主力艦隊を送ってくれたよ。」

「子供に子供騙しで騙される奴なのか・・・」

もし敵に発見された場合は？」

「その時は私達が囮になって敵を誘き寄せるから、主力艦隊で撃破して欲しいって言って、資材を捨てて全力で逃げるんだよ。」

「それは・・・資材を捨てて怒らなかつたのか？」

「主力艦隊で勝利して気分が良い時なら、資材のことなんか忘れてるよ。だから何も報告せずに帰投するのさ。」

「なんと言うか・・・したたかだな。」

「こっちは命懸けだからね。」

「私の指揮下ではそんな真似はするなよ?。」

「もちろんだよ。その代わりちゃんとお応援を送って欲しいな。」

「そこは任された。では長くなつたが話はこのくらいにしておこう。また話したいことがあつたら声をかけてくれ。」

「スパシーバ、提督。」

そう言つて響が退室し、第六駆逐隊との面談が終わった。

## 17話

第六駆逐隊との面談を終えたので、前任者の私室調査の様子を見に行く。指示はきちんと出したが、確認はきちんとしておくべきだろう。

執務棟の2階にある会議室から、執務室や前任者の私室がある3階に向かう階段で、艦娘達が絵や壺を運んでいるのを見かける。荷物を置いて敬礼しようとするのを制して、作業を続けるように伝える。いや、階段の途中で荷物置いて敬礼するとか危険だからやめろよ。

一通り艦娘達を通り過ぎたのを見送ってから、階段を登って執務室に向かう。無駄に豪華な扉は開け放たれて、廊下の窓も開けられている。やはりこの部屋に入るなら換気は必須だな。中に入ると長門が一人で絵画を外しているところだった。

「長門、作業はどんな感じだ？」

「すまないな、提督。ようやく荷物を運び始めたところだ。この部屋は臭いが酷くて、換気をしないとまともに作業を始められなかったのだ。この臭いにトラウマを持つ者も居るのでな……」

「確かに酷い臭いだったからな、それは悪いことをしたな……あの甘ったるい悪臭について何か知ってるのか？」

「……提督の私室に連れ込まれた者も多いからな……なんでも女性を興奮させる為の香を焚いているらしい。まあ、艦娘には効果がほとんど無いのだが、前任者が艦娘を連れ込む時はいつもこの臭いがしていたのでな……」

おお、流石のクズだな。もうこの程度ではあまり驚きもしくなくなっ  
てしまったが。

「それは本当に悪かったな……それで倉庫の方に作業スペースは確保出来たのか？」

「ああ、そちらは明石が確保してくれて、今は陸奥が向こうで仕分けて保管する指揮をしている。私より陸奥のほうが細かいことに気が効くので、そちらを任せただのだ。」

陸奥は長門の姉妹艦で、頼れるお姉さんって感じの艦娘だったはず

だ。確かに長門はきつちりしていて冷静な対応が出来そうだが、陸奥は気配りが出来て柔軟な対応が出来そうな感じだったな。

「壺とか絵画とかの美術品から運んでくれていたようだし、そのまま作業を続け「わーい！私がやっぱり一番速いよね!!」

軽快な足音と共に駆け込んで来たのは島風だった。彼女は駆逐艦離れた高スペックと、きわどい格好が多い艦娘達の中でも一番まずい格好なので有名だ。特に速度では並ぶものが無いとまで言われる優秀な艦娘だ。

「おうっ!?て、提督さん・・・お、おはようございます?」

さつきまで元気一杯だったのに、一気に挙動不審になったな。この娘も何かしらトラウマを抱えているのだろう・・・

「ああ、おはよう。速いのは良いことだが、一応売るものだから丁寧に扱うようにな。」

「は、はい・・・ただ大丈夫です。」

ここまで怯えているなら、もう少し慣れるまで面談はやらないほうが良いかな?

「島風ちゃん!待ってよ」

後から入って来たのは雪風だ。彼女も駆逐艦離れた高スペックと、何故かスカートを履いていないことで有名で、幸運の不沈艦として本来のスペック以上の働きをしてくれる頼もしい艦娘だ。

「あ、司令。おはようございます!どうされたのですか?」

島風とは違いきつちり敬礼と挨拶をしてくる。

「ああ、おはよう。作業の進捗を確認しに来ただけだ。島風にも言ったが、丁寧に作業するように頼むぞ。」

「はい、頑張ります!」

そう言っつて雪風は島風と一緒に作業に戻っていく。二人とも小さな少女ではあるが、難なく荷運びをしているのを見ると、やはり艦娘なのだなあと感じる。

「なあ、提督。相談があるのだが。良いだろうか?」

「どうした?」

「荷物を全て運び出して調査しろとの命令だったが、これをどうやっ

て調査すれば良いのか分からずに困っていてな・・・」

そう言つて長門が指差したのは、前任者の石像だった。等身大の大きさの石像なのでかなり重いが、艦娘の出力なら運ぶのはなんとかなると思う。しかしこの大きさなら細工をして、何かを隠している可能性がある。

「石像も台座も調べておきたいところだな。」

「お、提督じゃねえか。なんだよ、俺達はちゃんと働いてるぜ。」

天龍か・・・ちようど良い。

「ちようど良いところに来たな。頼みたい仕事がある。」

「なんだよ？変な仕事ならやらないからな？」

「この石像なんだが・・・」

「その趣味が悪い石像がなんだよ、はつきり言つて触りたくねえんだがよ？」

「叩き壊せ」

「・・・は？」

分かりやすく命令したつもりだったが、聞き取れなかったのだろうか？天龍は呆けた顔をしている。

「だから叩き壊せ。必要なら艤装の使用も許可しよう。」

「おいおい、マジかよ。」

「ああ、だが周囲の邪魔にならないところで作業して欲しいのと、中に何か入ってる可能性があるから、砲撃はやめて欲しい。出来るか？」

「へっ！そういうことならこの天龍様に任せな！！思いつきりぶっ壊してやるぜ！！」

大喜びで艤装を取りに行く天龍を見送ると、長門が心配そうな顔で声をかけてくる。

「なあ、提督。本当に良かったのか？」

「もちろんだ。あんな小太りのおっさんがモチーフの石像に価値なんか無い。それに隠された細工を探して解除するなんて面倒だからな。それに前任者には散々迷惑をかけられているのだ。憂さ晴らしくらいしたくもなる。」

「そうか・・・提督がそう言うなら良い。」

「では陸奥のほうの様子を見に行くから、ここは任せたぞ。」  
「了解した。」

苦笑いしていた長門を背に、倉庫の方へ向かって歩いて行く。少しだけ気分が良いな。



## 18話

前任者の私室を出て倉庫の方に向かう。途中すれ違った艦娘達は自分の姿を見かけると、道の端に寄ってそそくさと通りすぎて行く。昨日は端に寄って直立不動の状態で敬礼をしていたので、少しはマシになったと言ったところか？作業の手を止められるのも困るしな。そんなことを考えながら歩いていると、曲がり角を曲がろうとした時に、誰かが走って来る気配を感じ踏み留まる。一瞬遅れて目の前に電が現れて、驚いた表情のまま盛大に転んでしまった。あのまま進んでいたら、ぶつかってしまふところだったな。

「はわわわわ!!」

「ちよ!!電!!」

しかも後ろから走って来ていた雷が、転んだ電に躓いて2次災害を引き起こす。艦娘がこの程度でどうにかなるとは思わないが、巻き込まれるのは勘弁願いたいものだ。

「いったーい!もう電!気をつけないとダメじゃない!」

「ごめんなさいなのです・・・」

ハッ!!司令官さんは大丈夫なのですか!?

「ぶつかってないから大丈夫だ。」

顔を真つ青にした電が安否確認をしてきたが、どう見ても大丈夫じゃないのは電と雷の方だろう。後からやって来た暁と響もやれやれといった感じか。

「まったくもう、落ち着きが無いと一人前のレディにはなれないわよ!」

「まあ、司令官が無事みたいで良かったよ。」

「作業を急いでくれるのは分かるが、危ないことはしないようにな。」

戦闘時以外での負傷なんてバカらしいからな。

「ご、ごめんなさいなのです・・・」

「では私はもう行くから気を付けて作業するように。」

「分かったわ司令官!輸送任務なら暁に任せて!」

第六駆逐隊を送り出してまた倉庫に向かつて歩き出す。この作業は輸送任務になるのだろうか？名目上は調査と片付けだが、荷物を運び出すということだけを取り上げれば、輸送任務になるのかも知れないな。どうでも良いことだが。

倉庫前にたどり着くと陸奥・赤城・加賀の3人が、運ばれた物を検品してから倉庫に収納していたが、こちらに気が付いた陸奥が近づいてくる。見た感じ多少緊張はしているようだが、他の艦娘達よりは余裕がありそうだ。

「あら？提督、視察ですか？」

「そんなところだ。指示を出すだけで終わらせたら、想定外のことが起きることもあるから、確認はきちんとしないな。」

さもないと天龍が拘束されたような事件も起きてしまうしな。

「そうねえ、今は他の娘達が運んでくれた物を調べて倉庫にしまっているわ。品物も種類ごとにわけているし、リストも作っているのだけれど良かったかしら？」

「ああ、問題ない。壺や絵画みたいな小物は良いが、ダンスやベッドなどの大物は念入りに頼むぞ。二重底などの仕掛けがあるかも知れないからな。」

「分かったわ。大物と言ったらあの石像だけど、天龍に任せて本当に良かったのかしら？」

「ん？もうその話を聞いたのか？さっき上で天龍に伝えただけりなのだが。」

「艦娘には電信があるもの、普段は混線を避ける為にあまり使わないのだけれど、急ぎの報告とか大掛かりな作業の時は使うわ。大淀も使っていたと思うのだけど？」

「そう言われれば大淀が報告を受けていたな、あの時は特に気にしなかったが、艦装を使っていなくても通信が可能だったのか。」

「艦装無しでも通信が出来るのは便利だな。」

「ええ、艦装を使った時みたいに遠距離では使えないけれど、鎮守府内くらいなら問題なく使えるわ。その代わり私達でルールを決めて

使っているわね。」

「ほう、ルールとは？」

「まず基本的に使って良いのは秘書艦の大淀とのやり取りだけね。そして大勢で作業する時はその代表者が使えるようにしていて、今回は長門と私ね。あとは川内が夜戦のメンバーを集める時くらいかしら？」

なるほど、便利な機能だが混線しないように気を付けているのかな。

「だからさつき天龍が石像を任された、思いつきりぶつ壊してやるぜ！って言ってたから心配になって……」

「それならば私が命令したから問題ない。何か気になることでもあるのか？」

「いえ、その……壊してくれるのは心情的には嬉しいのだけれど……一応前任者が大切にしてきた物だから、壊してしまって問題にならないのかなって……」

「ふん、上からは徹底的に調査しろと命令されていて、調査に必要なだけだからやるだけだ。上が何か言ってくるならそれで押し通すから気にするな。」

「あらあら、真面目な軍人さんかと思っていたけれど、ただ命令に従うだけの人では無いのね。」

陸奥はクスリと笑いながらそう言った。まるで悪戯をした弟を見るような表情だな。

「命令にはちゃんと従うさ、軍人だからな。だが石像を壊すなんて言われていないし、提督には鎮守府の運営に関して大きな権限を持っているからな。この程度なら何も問題無い。」

「なら良かったわ。天龍ったら広場に人を集めて、公開処刑みたいなことやるみたいだからびびったりしたわ。」

「その話は初めて聞いたな……」

陸奥の表情が一気に強ばる。自分の表情も強ばっているのを感じる。なんとも言えない沈黙が流れてしまつて、陸奥もどうしたら良いか迷っているようだ。まあ、前任者に恨みがある艦娘も多いし、これ

くらいは見逃してしまおうか？だが流石に公開処刑はやり過ぎな気もする……

「そうだ！天龍には周囲の邪魔にならないように壊せと命じた。だから破片が飛び散る範囲に人が来ないように、見張りを何人か立たせていた。あと破片を拾い集めるのも一人では大変だ。これで問題無いな。」

「……そういうことにしておきましょう。天龍にはあまり派手にやり過ぎないように伝えておくわ。」

陸奥は頭を抱えながらもそう言ってくれた。こうやって柔軟に対応してくれるのは、上に立つ人間にとっては非常に助かる。長門が皆を引っ張る役なら、陸奥はそれを上手くフォローする役といったところか。

「ああ、助かる。では他の見回りに行くから、ここは任せたぞ。」

「ええ、分かったわ。」

優しく微笑む陸奥に見送られて、その場を後にする。後は明石達の様子を見てから会議室に戻るか。

## 19話

陸奥達が作業している備品等を扱う倉庫から、明石がいるはずの資材を扱う倉庫へと向かう。中を覗くと奥の方から慌ただしい感じの音がする。

「おっ、明石は居るか？」

「ひっ！い、今行きます!!」

奥から何かが崩れる音と「夕張ごめん！」という声が出て、明石がバタバタと慌ただしく出てきた。一応昨日から何度か話をしているので、多少は慣れてくれたかと思っていたが、案外そうでもないらしい。

「お、お待ちせ致しました！何のご用でしょうか？」

「作業の進捗を確認しに来たのだが・・・何をそんなに慌てているんだ？」

そう言われて明石は見るからに冷や汗をダラダラながしながら、視線をあちこちに向けている。どんだけ挙動不審なんだよ・・・

「あ、いや、そのですね・・・まだ調査中というか・・・と言いますか」

「上手くいつてないのだな？」

「あ、いや・・・はい。申し訳ありません。」

なんとか言い繕おうとしたみたいだが、じっと見つめたら観念したようだ。

「別にサボっていた訳では無いのだろう？それならそれで現状を報告すれば、怒るような真似はしない。その代わり報告はきちんとするように！良いな？」

「は、はい。すみませんでした。」

上手くいかなかったのは仕方ないが、それを誤魔化そうとするのは良くない。報告が遅ればそれだけ対処が遅れ、被害は大きくなっていくものだ。

「それで、どんな問題が起きているのだ？」

「えつとですね・・・元々前任者は資材の管理とかは適当だったのです

が、一応私が帳簿を作成してはいたのですよ。1日の始まりにどの資材がいくらあるかという簡易的なものでしたが……」

「ずいぶんと手抜きな帳簿だな……」

「その前任者の命令で、あまり詳細な帳簿は作らせて貰えなかったもので……」

なるほど、汚職の調査などを恐れて、曖昧な帳簿しか残していなかったと言うことか。そもそもそんな雑な帳簿ではあまり役には立たないだろうが。

「まあ良い。それでその帳簿は？」

「それが見当たらなかったの……大慌てで探していたところでした……」

「帳簿の管理は明石がしていたのでは？」

「そ、そうなのですが……倉庫の事務所から書類関係がまとめて無くなってしまって……大淀さんに頼んで執務室も探して貰いましたが見つからず……」

つまり証拠隠滅済みってことか……上の奴らも厄介なことをしやる!!

「おそらく調査に来た奴らが処分したのだろう。この件で明石に責任は無いから安心しろ。」

「うう、ありがとうございます。」

明石は半泣きになりながらお礼を言ってきた。罰せられるのがよほど怖かったのだろう。今回は明石に落ち度は無いのだが……とりあえず証拠がないなら証言だけでも聞いておくか。

「証拠がないなら仕方ない、明石が覚えている範囲で構わないから、前任者がどうやって資材を運用していたか教えてくれないか？」

明石の話を纏めると遠征などで持ち帰る資材以上に使い込んでいたこと。よく輸送船で資材が送られて来ていたが、どこからどれだけ送られて来たのか把握はさせて貰えず、前任者が建造に使用するので把握は出来ていないこと。備品や前任者の私物が納入される時は事前に連絡はなく、記録は付けるなど命令されたことなどを教えてくれ

た。資材の出所は気になるところだが、おそらく裏取引があったから隠蔽工作をしたのだろう。

「相変わらず頭が痛くなる内容だが、とりあえず聞きたいことは聞けた。助かった。」

「いいいえそんな、少しでもお役に立てたなら良かったですよ。」

話をしている間に明石も落ち着いたようで、最初の慌てぶりが嘘のようだ。

「とりあえず書類の搜索は打ち切ろう。処分されたものをいつまでも探しても仕方がない。通常業務に戻ってくれ。」

「了解しました。」

「あ、そういえば昨日言っていた、必要な備品のリストを作る話はどうなった？」

「えっと、そちらは早急に欲しい物はリストアップしたものがあるので、少々お待ちを。」

明石が奥へと走って持って来たリストに目を通す。各部屋に棚と机と姿見と座布団、後は消耗品の類いか。妥当なところなので、その場で書類にサインする。

「確認したから手配の方を頼む。あ、そう言えばさっきの面談で、暁からシャンプーハットが欲しいと言われていたな。ついでに頼んでおいてくれ。」

「え？シャンプーハットですか？」

明石はきよんとした顔をしているが、そんなにおかしな物なのだろうか？自分は使ったことはないが、子供なら必要な子もいるのではないだろうか？

「ああ、そうだ。」

「わ、分かりました。手配しておきます。」

「では任せたぞ。」

これで倉庫の視察は終わりだな。大淀のほうも確認しておきたいが、面談も進めておきたい。とりあえず会議室に向かう途中で誰かに声をかけておくか。

## 20話

会議室に向かう途中、壺や絵画を運ぶ駆逐艦達とすれ違ったあとで、大きいベッドと洋服棚を金剛姉妹が運んで来ているのを見つけた。二つともかなりの重量があると思うが、前後二人で抱えても安定していて、流石は戦艦級の出力と言ったところか。ちようど姉妹が揃っているし声をかけておくか。

「あー、金剛、ちよつと良いか？」

「Oh・・・提督・・・どうしました？」

先頭にいた金剛に声をかけたが、これがあの金剛か？士官学校時代に見た金剛は明るく元気で、大型犬のように走り回ったりじゃれついたりしていた記憶があるのだが・・・表情も暗く凄く冷めた目をしている。

「その荷物を運び終わったら面談がしたいのだが、作業的に金剛姉妹4人が抜けても大丈夫そうか？」

「Ah・・・残ってる物なら空母の娘と重巡の娘達で運べると思いマース・・・」

「なら、それを運び終わったら姉妹揃って会議室に来て欲しい。」

「Ah・・・それは命令デースか？」

金剛だけでなく姉妹全員が冷めた目で見てきて、警戒・侮蔑・嫌悪感・怯えこの辺の悪感情を感じる。ま、ここでは提督に良い印象を持つ者は居ないだろうし、この程度で引くようでは鎮守府を建て直すなど不可能だろう。

「ああ、命令だ。」

「Oh・・・命令なら仕方ないデース・・・」

「では先に会議室で待っている。作業を終わらせて来てくれ。」

明らかに気落ちした金剛姉妹を見送ってから、会議室に向かう。鈴谷や響の話から、戦艦と正規空母達はそれなりに優遇されていたのかと思っていたが、今回は何が出てくるのやら・・・

会議室に戻ると大淀が待っていて、敬礼で迎え入れてくれる。

「提督、お待ちしております。調査の途中経過を報告したいのです



が、宜しいでしょうか？」

「ああ、頼む。」

「まず来客と資金の流れの件ですが、資料が徹底的に隠蔽工作をされているようで、手掛かりすらない状態でした。」

「やはり、そうか……」

「戦闘記録の方は残っていましたので、全艦轟沈した日付のまとめは終わっております。」

「分かった、助かる。」

「それともう一件ご報告なのですが……」

ん？今まで淡々と報告していたが、なんだか凄く嫌そうな雰囲気を感じる。厄介事だな……

「その、先程市長から連絡がありました、直接ご挨拶に伺いたいのので、今日か明日にでも時間を作って頂けないか？とのことです……」

ふむ、市長……市長……ああ、響の話で出てきたロリコンの糞野郎か……正直関わりたくない相手だが、そうも言ってられないか……

「……なら今日の午後3時以降なら時間が取れますと伝えてくれ。それと市長が来たら大淀以外は全員作業を中断して、自室にて待機するようにしてくれ。あとせっかく汚職の証拠が来られるのだ、録音の準備もしておいて欲しい。」

「分かりました。そのように手配します。」

大淀には市長を案内して貰わないといけないが、極力艦娘達と関わらせたくない相手だ。本当に秘書艦の大淀にとっては貧乏くじだろうが、我慢して貰うしかないな。

「あと建造の記録がないか調べて貰えないか？」

「え？建造の記録ですか？」

「資料の帳簿が見つからなかったのは聞いているだろう？だから消費した資材から逆算出来ないかと思つてな。」

「なるほど、分かりました。そちらの調査もお任せ下さい。」

大淀が退室して、ロリコン糞野郎からどうやって情報を絞り取るか思案していると、会議室の扉がノックされる。

「提督、金剛デース。」

「入れ。」

「失礼しマース。」

午後からの糞野郎も気になるが、まずは目の前の金剛型姉妹の件だな。相変わらず金剛以外は喋ろうとせず、淡々と命令に従っていると言った印象か・・・これは話を聞き出すのも一苦労かな？

## 21話（面談 金剛型姉妹）

「朝礼でも話をした面談をしたい。とりあえずかけてくれ。」

あらかじめ用意していた椅子を勧めると、右から金剛・比叡・榛名・霧島の順番で座る。暁型の時も右に長女が座って、順番に並んでいたな。

「では改めて、この北九州鎮守府に着任した葛原だ、宜しく頼む。」

少し間を空けてみたが反応無しか・・・

「一応確認のため自己紹介をしてくれるか？」

「金剛型戦艦一番艦の金剛デース。こっちから順番に比叡・榛名・霧島ネー。」

・・・金剛以外にも喋らせるつもりだったが、なかなか難しいようだ。

「ありがとう。さっそく本題に入るが、今回は前任者の汚職の調査が目的だが、何か言っておきたいことなどはあるか？」

「無いデースね。」

はあ・・・取りつく島もない感じか・・・よほど警戒されているようだ。

「前任者に不満などはなかったのか？」

「私達艦娘は兵器デース。前任者のことなんて話すことは無いネー。」

・・・分かった、なら要望の方はあるか？」

「極力私達に関わらないで欲しいデース。」

ここまで拒絶されると手がつけれないが、流石にそれは困るな・・・

「はつきり言うが、今この鎮守府に戦艦を4人も遊ばせておく余裕はない。関わるなど言うのは無理な相談だな。」

「もちろん分かってマース。出撃も演習も雑用でも、命令されれば仕事はするネー。けど必要ない時は関わらないで貰いたいデース。」

「・・・つまり徹底して兵器として扱って欲しいということか？」

「そうデース。」

これはこれで厄介だな・・・情報を引き出せないのはともかく、艦

娘自身が兵器として扱われることを望んでいようとも、外部の人間にとっては糾弾する口実になりかねない。

「集会で話したとは思いますが、上の連中に責める口実を与えない為に、艦娘の待遇を改善すると約束したのは覚えているな？だから用意している食事を拒否されたり、支給した布団を使わずに床で寝たりされると困るのだが・・・そこはどう考えている？」

「Ah・・・提督は食事をするように、支給した布団を使うようにと命令しましたネ。だから命令には従ってマース。」

「分かった・・・命令に従っていて問題を起こさないのであれば、これ以上言うべきことは無い。金剛の考えは理解した。」

そう言うのと金剛は立ち上がり、他の姉妹もそれに続いて立ち上がった。

「それでは私達はこれで退席しても良いデースか？」

「金剛は退席して構わないが、他の姉妹はまだダメだ。」

「Why!?!これ以上何があるのデースか!?!」

金剛はよほど姉妹達に話をさせたく無いらしく、先程までの冷淡な対応とは違い、物凄く焦っていることを隠しきれていない。

「姉妹揃っての面談とは言ったが、金剛以外は何一つ話していないからだ。これでは何を考えているかは全く伝わらない。」

「No!No!No!!私達の考えは一つネ!!私が代表で話したことが全てデース!!」

「それを判断して言葉にするのはお前ではなく、他の姉妹達だと私は考えている。」

「Shit!!ですが提督!!「あ、あの」

金剛の言葉を遮ったのは比叡だった。金剛も驚愕のあまり比叡を振り返り唾然としている。

「私は金剛お姉様について行く決めていません。だから私の意見も金剛お姉様と同じです。」

「・・・そうか。」

「私も同じ考えですね。」

「霧島も一緒か・・・」

「私も金剛お姉様に従う、ただそれだけです。」

比叡も霧島も目線を一切逸らさずに断言してくる。それ相応の覚悟はあるのだろうか。

「はあ・・・分かった・・・榛名はどうだ？」

「は、榛名は・・・」

それだけ口にして榛名は俯いて黙り込んでしまった。姉妹達に便乗するかと思っただが、何か思うところがあるのか？

「H e y ! 提督！もう十分ネ!!話は終わりデース!!」

「はあ・・・榛名以外は退席するように、私は榛名ともう少し話してみる。」

「榛名だけ置き去りにするなんて出来ないネ！」

金剛が喰い下がってくるが、榛名も姉妹がいる状態では話しくいのだろう。ここは無理にでも引いて貰うしかないな。

「金剛、比叡と霧島を連れて作業に戻れ。これは命令だ。」

「Sh i t !!命令なら・・・仕方ないネ・・・」

そう言つて金剛は私を睨み付けながら部屋から出ていった。比叡と霧島も榛名を気遣うような表情は見せたものの、何も言わずに金剛の後についていった。あの3人には悪いが、ようやく榛名の話聞く準備が整ったか。

## 22話

会議室に自分と榛名の二人きりになったが、榛名は相変わらず俯いて黙り込んでいる。何かしら話したいことがあるのかと思っただが、ただ話す気力が無いだけだったか？

「榛名、話したい内容はまとまったか？」

「……ごめんなさい。何を言えば良いのか、榛名には分からないんです……」

「……そうか。だが何かを話したい気持ちはあるのだな？」

「はい……どうして良いのか分かりません。でも前と一緒になのはもう嫌なんです。」

前と一緒に嫌か……一応今までの情報から、戦艦と正規空母は優遇されていたと思っていたが、思うところがあつたのだろう。

「そうだな……どうしたら解決するかは一先ず後回しにして良い。それは私も考えることは可能だろう。だから何が嫌だったのかを教えてください。そこは榛名にしか分からないことだ。」

そう榛名に伝えると俯いたまま涙を溢し、それでもゆっくりと話し始めた。

「榛名は……榛名は金剛姉様の張りつめた表情は見たくないです。比叡姉様にも霧島にも笑って欲しいです。他の仲間達が苦しむのも見たくないです……」

涙と共に溢したその嘆きは、榛名が抱え込んでいた闇そのものなのだろう。姉妹を、仲間を思いやる優しさを持つがゆえに、前任者の行いに心を痛めてきたのだろう。

「前任者が艦娘をどう扱っていたかは、他の艦娘からもある程度聞いている。それが全てとは思っていないが、戦艦と正規空母はそれなりに優遇されていたのではないのか？」

前任者は戦艦と正規空母でこり押しする戦いを好んでいたはずだし、響の話では客人の接待に戦艦と正規空母は呼ばれなかったと聞いている。

「……そう……ですね。私達戦艦や正規空母は特別扱いされています。」

した。補給や入渠などは優先的にさせて貰って、戦闘時も極力損害を受けないように配慮されていました。他の艦娘達が受けていた鞭打ちや拷問なども滅多にされません。お客様の接待も私達は免除されています。・・・提督のお相手はさせられていたので、清い体ではいられませんでしたが・・・」

「・・・ほとんどさせられなくて当然の事ではあるのだが、一応前任者から優遇はされていたのだな。」

「・・・はい・・・そうです。でもそれは他の艦娘達の犠牲の上に成り立っていました・・・」

榛名の話では戦艦や正規空母が出撃する時には、いつも随伴の駆逐艦がついて来て、所謂弾除けとして使われていたそうだ。随伴の駆逐艦達は戦艦に迫る砲弾を避けることは許されず、多くの駆逐艦達が沈んだ。そしてその戦果は残されず、戦艦達がほぼ無傷で勝利したという輝かしい戦果だけが残ったという。もし戦艦達が被弾でもしやうものなら、随伴の駆逐艦達が罵倒と共に鞭打ちが待っている。

「金剛姉様は優しい人です。以前は現状を変えようと前任者に訴えたり、轟沈寸前の駆逐艦達を庇ったりしていました。ですがそんな話を聞き入れて貰えるはずもなく、庇われた駆逐艦達は前任者に激しく叱責されていました・・・でも金剛姉様は戦艦でしたので軽い叱責で済んでしまいます。そして金剛姉様は助けた駆逐艦達から責められるようになったのです・・・なぜ余計なことをしたのかと・・・庇ったりしなければ私が沈むだけで済んだのにと・・・」

榛名はとても苦しそうに当時の惨状を語る。

「金剛姉様の絶望した顔は忘れられません。それでも金剛姉様は助けられる命を見捨てることが出来ずに、何度も同じ過ちを繰り返し、何度も傷付いて心をすり減らしてしまいました。その苦しみの果てに命令にただ従うことが、一番被害が少ないことだと考えるようになったのです。」

「はあ・・・優しさが前任者の時代では仇になってしまったのか・・・」  
「ええ、ですから私達に出来ることは、駆逐艦達が沈む前に敵を沈める

ことだけでした。遠距離から弾薬を使いきるつもりで砲撃して、早く戦いを終わらせるような戦い方です。それでも被害が出ない訳ではありませんでしたが、それが一番被害を抑えることが出来ました。」

「毎回そんな戦い方をしていたら弾薬が持たないし、連戦も出来ないだろう?。」

「前任者は派手な戦いを好んだので、そこは大丈夫でした。あと深海棲艦の侵攻も、日本海側だとそこまで多くないので。」

しかし資材を無駄使いする余裕は今後なくなるだろう。早めに演習で普通の戦い方に慣れさせるか。

「よく話してくれた、ありがとう。朝礼でも言ったと思うが、私が指揮を執る以上無駄に艦娘達を沈めるつもりはない。戦争だから絶対に沈めないなんて約束は出来ないが、お前達が沈まないように準備を整え作戦を組み立てることは保証しよう。」

榛名は未だに俯いたまま目を合わせようとはしない。涙は枯れず、それでも言葉を紡いでいく。

「・・・なぜ・・・ですか?。」

「・・・なぜとは?。」

「なぜ私達を沈めたくないと思うのですか?。」

「簡単に沈めたら練度が上がらずに、いざという時に対応出来ないからだ。」

「それならば全員の練度を上げる必要は無いですよ?育てる者を選んで他を犠牲にして守ったほうが、効率が良いことは知っています。そうやって私達は育てられました。提督は戦果を求める方だと聞いています。ならどうして効率が良い方法をとろうとしないのですか?。」

・・・なかなか鋭いところを突かれたな。練度の話は嘘ではないが、それだけが理由ではない。今までの艦娘達はそれだけで納得してくれたのだが・・・榛名は俯くのをやめてこちらを真っ直ぐ見据えてくる。これは誤魔化すのは無理か・・・

「・・・分かった、もう一つの理由も話そう。ただしこの話は公に出来る内容ではない。だから誰にも話さないのが条件だ。もちろん姉妹



に伝えることも禁ずる。それでも聞きたいか？」

榛名は覚悟を決めた目でこちらを見据え、無言で頷いた。

「深海化だ。」

「深海化・・・とはなんですか？」

「正式名称は『艦娘における深海棲艦化現象』だったかな？」

「どういうことですか!?! 私達が深海棲艦になると言うのですか!?!」

榛名は驚愕に目を見開き、思わず叫んでいた。それくらいのシヨックを受ける話だろう。

「この情報は隠蔽されているので、軍でも知っている者はほとんどいないだろう。詳しい原因等は分かっているが、深海棲艦に沈められた艦娘が深海棲艦へと変化してしまう現象だ。」

「嘘! そんなどうして!?! なら今まで沈んでしまった娘達も!?! 私が沈めた深海棲艦も仲間だったかも知れないのですか!?!」

「まずは落ち着いてくれ、大声を出せば誰に聞かれるか分からない。一先ず深呼吸だ。」

榛名は言われるがままに深呼吸をして、少しだけ落ち着きを取り戻したものの、やはり衝撃は大きすぎたようだ。

「はあはあはあ・・・すみません、取り乱してしまいました。ですがなぜそんな秘密を提督が知っているのですか? 提督は新人だと聞いていますし、それほどの権限があるとは思えません。」

「・・・それを研究していたのが、殺された私の兄だからだ。」

## 23話

「提督のお兄さん……ですか?」

「ああ、私には年の離れた兄がいたのだが、兄もまた提督だった。東北地方の小さな鎮守府を運営していて、私も近くに住んでいた。数ある鎮守府の小さな一つを担当した提督だったが、私にとってには深海棲艦と戦う英雄だった……今思えば兄は軍人には向かない、心の優しい人だったと思う。」

「そんな!心の優しい人が悪い提督なわけないです!!」

思わず榛名が叫んでしまったが、それはきつと間違いなのだろう。そうでなければ、兄が処刑されてしまったことはどうなるのだ?だがそんな議論なんてわざわざするつもりは無い。

「……そんな兄だからこそ艦娘からは好かれていて、特に戦艦の扶桑とは恋仲だったそうだ。だがまだまだ練度が足りず、ケツコンカツコカリまでは至らなかったらしい。」

「それは……羨ましいですね……」

思いを寄せた提督と結ばれるのは、艦娘の理想なのかも知れないが、現実はそのままで甘くない。

「……しかし大規模作戦に参加した際に、兄は扶桑を失ってしまった。悲しみに打ちのめされた兄だったが、扶桑が最後に残した言葉に従って、国を守る為に提督として戦い続けた。」

「……それでどうなったのですか?」

「扶桑が沈んでから2ヶ月後、兄の鎮守府は一隻の戦艦ル級に襲撃を受け、壊滅状態に陥った。そして執務室から焼け出された兄の目の前に、戦艦ル級が居たそうなのだが、そのル級は兄が扶桑に贈った首飾りをしていたそうだ。」

「そんな!!」

「兄は倒れながらも必死に手を伸ばしたそうだが、ル級はしばらく兄を見つめると、鎮守府から去って行ったらしい。そしてそのル級がどうなったのかは分からないそうだ。」

榛名はあまりの衝撃に口を覆って、黙り込んでしまった。艦娘が深

海棲艦と化した事実はやはり堪えるのだろうか。

「そこから兄は艦娘の深海棲艦化について研究し始めたが、そもそも艦娘の研究すら進んでいないのだ。当然研究は難航した為、大本営にも掛け合ったが相手にされず、一人で地道に研究していた。そしてある程度研究が進んだ頃に、兄は国家転覆罪で捕えられ処刑された……」

「兄は国を守る英雄である艦娘を深海棲艦と同一視し貶めることで、国に混乱を招こうとする大罪人として裁かれたのだ。だが実際には捨て艦戦法で実績を積んできた連中にとって、兄の研究は都合が悪かっただけだろう。」

「そんな……そんなことが許されるはずありません!!」

榛名にとつては受け止めたくないことなのだろうが、事実として兄は裁かれ、上の連中は今もなお居座り続けている。

「それがこの国の司法では許されてしまったのだ。私は絶対に許さないがな。だから私は上の奴らを叩き潰す!!だが国を守ろうとした兄の意思を無駄にしないやり方で、復讐を完遂する必要があるのだ……厄介な話さ……」

榛名が同情した目で見てくるが、はっきり言って反吐が出る。可哀想だと同情されるためにこんな話をしたのでは無い。これは私の覚悟を示すために打ち明けた話だ。

「そして私は口封じを恐れて鎮守府付近から逃げだし、名前を変えて戦争孤児として生きてきた。兄の研究は処分されただろうが、私の頭の中には兄が捕まる前に見せてくれた、研究の成果が残っている。話が長くなつたが、これが私が艦娘を沈めたくないもう一つの理由だ。納得出来たか？」

「……ごめんなさい、まだ考えがまとまりません……そんな悲劇が起こつていただなんて。それに深海棲艦化の話も……」

「まあ、色々重いことを話したからな。受け止めるのにも時間が必要だろう。この件に関してはゆっくり考えてくれ。その代わり他言無用だ、これがどれだけ危険な案件か分かるな？」

「それは……分かります。その危険な話を榛名に聞かせてくれた覚悟

も分かります。・・・だから約束は守ります、信頼にはきちんと応えたいので。」

榛名は真つ直ぐ自分の目を見つめてくる。揺るぎないその視線は、信頼に足るものだったので少し安心した。どうも艦娘達は純粹な者が多いようだ。人間と同様に感情があるのに不思議なものだな。

「さて、そろそろ昼食の時間になるし、話を切り上げよう。最後に何か要望などがあれば聞いておこう。」

「榛名は・・・皆が笑顔になれる鎮守府にして欲しいです。戦争は辛いことですが、だからこそ帰ってくる場所・・・帰りたいと思える場所が欲しいです。姉妹が皆揃って笑顔でティータイムを楽しむのが、榛名の夢なんです。」

「分かった。それで精神面が安定し、より良い戦いが出来るならば、そんな環境が作れるように努力しよう。」

「お任せ下さい！勝利を！提督に！」

笑顔で敬礼する榛名にきっちりと返礼し、退室するように促した。金剛達との面談は上手くいかなかったが、榛名だけは信頼を得ることに成功したようだ。

## 24話

榛名との面談では少し熱くなって、秘密を喋り過ぎた気もするが、あの榛名の様子を見る限り、間違った選択だとは思えない。榛名を足掛かりにして、他の金剛姉妹からも信頼を得たいものだ。

コンコンコン

「失礼します。」

相変わらず良いタイミングで大淀が来たな。いや、艦娘達が面談が終わった後に大淀に電信で報告しているのだな。それならばいつも面談後に大淀が来るのも当然だな。だが今回は大淀だけでなく、かなり上機嫌な天龍も一緒だった。

「よお提督！お目当てのやつがあつたぜ！」

そう言つて天龍は一冊の本を手渡してくる。やはり石像を叩き壊させて正解だったな。

「良くやった天龍。中身は確認したのか？」

「あー、俺はそういう細かいのはわかんねえよ。調べたりするのは大淀の仕事だろ？」

「私が見たところ資金の帳簿でした。これは汚職の証拠としてかなり大きなものかと。」

それはまた大物が出てきたものだ。しかし嚴重に隠していた為に証拠隠滅されず、自分の手に渡ってしまったと考えると皮肉なものだな。

「これで調査が大幅に進むだろう。感謝する。」

「俺も石像をぶっ壊せてすっきりしたぜ！ありがとな！それにしてもよくあんな所に隠してるのが分かったな？」

「別に隠してるのが分かったから、天龍に壊させた訳ではない。徹底的に調べさせたものの一つが当たっただけだ。調査つてものはそういう努力の積み重ねが重要なんだよ。」

「ふーん、まあそんなもんか。」

ああ、こいつ理解してないな・・・まあ、そういうことは上の人間が考えれば良いことか。

「提督、間宮さんからもうすぐ昼食の準備が整うと連絡がありました  
が、そろそろ休憩されてはいかがですか？」

「そうだな、全員に作業を一時中断し、休憩するように連絡してくれ。  
あと悪いが私の分の昼食はここに運んで貰えるか？この帳簿に目を  
通さねばならぬのでな。」

「なんだよ？提督は休憩しねえのかよ？」

石像を壊させてから、なんだか天龍が友好的になってきているな。  
最初に突っ掛かって来ていたのが嘘のようだ。

「午後から市長との面会があるのでな、それまでに汚職の証拠は確認  
しておきたい。でなければ上手く追い詰められないだろう？」

「フフフ、サイコーだなあ、おい。あのロリコン糞野郎をぶちのめすな  
ら応援するぜ。」

お互いにニヤリと笑いながら拳を軽くぶつける。最初こそ揉めた  
が、存外気が合う奴なのかも知れないな。

「そういう訳で大淀、頼んだぞ。」

「分かりました、すぐにご用意致します。昼食後の指示はどうされま  
すか？」

「長門と陸奥には調査を続けさせてくれ。ただし2時半には切り上げ  
て、各自自室で待機するように伝えて欲しい。大淀は私の補佐と市長  
を迎え入れる準備だな。あと川内達夜戦組は昼食後に報告に来るよ  
うに伝えておいてくれ。」

「はい、お任せ下さい。」

退室する大淀と天龍を見送って、さっそく資金の帳簿を調べてみ  
る。

大淀が持って来てくれたサンドイッチを片手に帳簿を読み進めて  
いるが、汚職の証拠がどんどん出てくる。艦娘へ支払うべき給与の横  
領、食費や生活必需品を購入する資金も横領、市長や各組合関係から  
の寄付という名の賄賂などが出てきたが、特に酷いのは艦娘使用料と  
艦娘委譲代だろう。おそらく性接待と人身売買のことだが、それで荒  
稼ぎしている。そして稼いだ金は個人的な買い物と遊興費、上への賄

賂や口止め料、他所の鎮守府から資材の購入等に使われていた。潤沢に使用していた資材の謎は解けたな。

市長を脅すのであれば、やはり性接待と人身売買の件だろう。もしかしたら、売られた艦娘達を取り返すチャンスもあるかも知れないな。あとはこの情報の使い方だがこれが一番難しい。ただ大本営の憲兵隊に連絡しても、握り潰される可能性がある。前任者は呉鎮守府の傘下だから、舞鶴の提督に情報を流せば、敵対勢力のスキャンダルとして大騒ぎすると思うが、呉鎮守府からの妨害や報復などは確実だろう。市長や組合関係者がどれだけ裏で繋がっているか、探りを入れていかなければならないな。

コンコンコン

「提督、川内以下5名、報告に参りました。」

「入れ」

「何はともあれ報告を受けるのが先だな。」

## 25話（面談 白露型姉妹）

川内と共に夜戦で活躍した白露・時雨・夕立・春雨が一行に並ぶ。川内は昨夜の明るさは鳴りを潜め、かなり緊張している感じだな。白露型姉妹も緊張していて、特に白露と春雨は余裕が無さそうで、逆に夕立は少し余裕そうかな？

「では報告を頼む。」

「ハッ！昨夜我が鎮守府に接近していた、軽巡ホ級1・駆逐イ級3からなる敵部隊と交戦し、これを全て撃破しました。こちらの損害はありません。以上です。」

「了解した。大淀からは奇襲攻撃を仕掛けて、一気に勝負を決めたと聞いている。皆良くやってくれた。」

「ハッ！ありがとうございます。」

敬礼する川内に倣って白露型姉妹も敬礼してきたので、答礼すると気を付けの体勢に戻る。そして川内が落ち着きなく、キョロキョロと挙動不審になっている。

「川内、落ち着きがないがどうしたんだ？」

「あ、えっと・・・報告ってこれで良かったのかなあつて？」

「口頭での報告はそのくらいで大丈夫だ。後で大淀と共に詳細な戦闘記録を作っておいてくれ。」

「それならもう終わったよ。いや、報告なんて久し振りだから緊張しちゃったよ。」

そう言えば川内は前任者から夜戦を丸投げされ、報告すらしていなかったらしいな。

「そこは慣れて貰うしかないな。今後は出撃の許可は私が出すし、艦隊の編成についても私が決定権を持つ、あと報告や戦闘記録もしっかりするようにな。」

「はあ〜い。」

今まで好き勝手やっていたからか、若干不満そうな川内だが、軍として動くなら当然のことをするだけだ。

「そう不貞腐れるな。今後も夜戦に関しては川内を優先的に使ってい



くつもりだし、編成についても意見を求めることが多いだろう。だから今後も夜戦の達人として、鎮守府を支えて欲しい。」

「やったあ!!夜戦なら任せておいて!!」

やっぱり夜戦が出来るのは嬉しいのだろう、簡単に輝くくらいの笑顔になったな。まあ、適材適所つてやつだから、今後も頼りにさせて貰おう。

「そう言えば急な出撃だったから聞けなかったが、今回の夜戦に白露型姉妹を選んだ理由はなんなんだ?」

そう訪ねると川内は少し考え込む。隣に立っている白露型姉妹の緊張が高まる中、川内が出した結論は・・・

「夜戦に出たいって熱い思いを感じたからかな?」

「・・・召集前に話を聞いたのか?」

「いや、そんな雰囲気を感じただけ。」

「そうか・・・それと私を起こしに来た時だが、敵艦が近づいて来てる報告を受けてから来たのか?」

「いや、夜戦の気配を感じただけだよ?」

・・・マジかこいつ。雰囲気とか気配とかで判断していたのか・・・それでも結果を残している以上認めない訳にはいかないが、こいつは野生の獣か何かなのか?

「そ、そうか・・・感覚が優れているのだな。」

「ふふーん、夜の私は絶好調だからね♪」

「今後も頼りにしている。話は以上だが、白露型姉妹はこのまま面談をしようと思う。川内は長門の指揮下で作業してくれ。」

「はぁーい。じゃあ失礼します。」

笑顔で敬礼する川内を見送ってから、白露型姉妹に椅子を勧める。先程までは川内の報告ではあったのだが、会話に一切入って来なかったことを考えると、こちらが思っているよりも緊張しているのかも知れないな。駆逐艦達は消耗品扱いされていたから、機嫌を損ねないよう気を付けているのかも知れない。

「昨夜の食事前にも話をしたが、今回の面談は前任者の汚職の調査がメインとなる。なので諸君らの不利益になるようなことでは無いか

ら、安心したまえ。それと要望などがあれば聞いておきたいから、何かあれば言ってくれ。」

そこから聞いた話は榛名や響が話していた内容とほとんど同じものだった。戦艦の盾に使われたり、遠征や哨戒任務では無茶な命令で、仲間が沈んでいったこと。作戦に失敗したら罵倒とムチ打ちが待っていたこと。食事が与えられず、燃料を食事代わりにしていたこと。部屋に備品を買って貰えず、姉妹で集まって寒さに耐えたこと。客人の接待に使われたり、今は居ない村雨と海風は提督本人にも犯されてきたこと。相変わらず過酷な環境だったようだ。

「話してくれてありがとう。相変わらず胸糞悪い話だが、私が提督になった以上待遇の改善は約束しよう。何か要望はあるか？」

「夕立はもつともつと活躍したいっばい！もつともつと頑張ってお仕事して、提督に夕立達は役に立つって認めて貰いたいっばい！だからどんなお仕事でも頑張るっばい!!」

「要望でもつと仕事が出来たいとは驚いたな。なんでそこまで功績を求めらんだ？」

そう言った途端に夕立の体がビクンと跳ねる。明らかに動揺しているが、何か不味いことを聞いてしまったか？

「え、えつと、その・・・し、時雨！助けて欲しいっばい！」

「ええ!?僕かい!?えつと、僕も夕立と同じでもつと活躍して認めて貰いたい。理由は・・・まだ伝える覚悟が出来ていないんだ・・・聞かないで貰えると嬉しいんだけど・・・」

「話したくないことならば無理に聞くつもりは無い。その代わり功績を稼ごうとして、無理な戦い方をするのだけはやめてくれ。私はお前達を簡単に沈めるつもりはないからな。」

そう伝えるとほつと一息ついて落ち着きを取り戻した。まだ二日目なのだから、いきなり秘密を話せなどと言うつもりは無いのだがな。信頼なんてそう簡単に得られるものでは無いだろう。

「では白露と春雨は何か要望はあるか？」

「えつと、えつと、お仕事頑張ります！つてのは夕立と一緒にだし・・・」

「食事も食べれて、お風呂に入れて、お布団も貰って・・・えーと・・・」  
「白露、別に無理に要望を出す必要は無いからな？後で思い付いたものがあれば、大淀や長門に相談したら良い。」

「すみません、ありがとうございます。」

「春雨はどうだ？」

改めて春雨に話題を振ると少しだけうつ向いたものの、しっかりと視線を上げてこちらを見てくる。

「私もお仕事頑張ります。その、お姉ちゃん達だけに任せる訳にはいかないのです、はい。」

春雨も仕事か・・・功績を稼いで何か頼みたいことがあるのだろうか、よほど焦っているのだな。

「・・・分かった、春雨も要望があれば大淀か長門にでも相談してくれ。時雨と夕立は他にもう無いか？」

「僕は大丈夫だよ。何かあったら相談するよ。」

「あ、夕立は甘いものが食べてみたいっぽい!!」  
「飯は美味しいけど、甘いものは別で食べてみたいっぽい!!」

「フフツ、嗜好品の類いか。戦果を上げたご褒美として用意しておくのも悪くないか。分かった、楽しみにしておけ。」

「ありがとうございます！これでますますやる気が出るっぽい!!」

最後はなんだかほのぼのとした要望だったな。甘味くらいでやる気が出せるなら安いものだ。

「では面談を終わろう。長門の指揮下に入って作業してくれ。」

「はい！」

白露型姉妹はやる気があるようなので、今後の活躍に期待したいところだな。

## 26話（面談 北上・大井）

白露型姉妹が退室したあと、いつも通り大淀がやって来た。

「大淀、市長を迎える準備は進んでいるか？」

「応接室に盗聴器を仕掛けてあります。記録の方も問題ありません。それと提督にはこれを。」

大淀が手渡して来たものを確認すると・・・

「ボイスレコーダーか・・・こんな希少品よく手に入ったな。」

機械類を始め工業製品はかなりの希少品だ。深海棲艦の襲撃で、海沿いの工場地帯は軒並み大打撃を受け、海外との貿易も出来ない為に原料や部品等も入って来ない。幸い鉄やボーキサイト等は手に入りやすいので、複雑でないものならば生産も始まっているようだが、電子機器が生産されるのはまだまだ先だろう。

「前任者のタンスを調べていた北上さんが発見したものです。動作は問題ありませんが、データは何も入っておらず、汚職の証拠は掴めませんでした。」

「いや、これだけ便利な品を見つけたのだ、お手柄だな。他には何か見つかったか？」

「ほとんど調査を終えています、目ぼしい物は無さそうですね。」

やはり私室の方も証拠隠滅されているようだ。まあ資金の帳簿が見つかったことで満足しておこう。

「分かった。市長が来るまでもう少し時間があるから、もう一組くらい面談しておきたい。ちょうど先程話題に上がった北上と大井を呼んでくれるか？」

「分かりました、すぐに連絡します。それでは私は失礼します。」

会議室にやって来た北上と大井に椅子を勧め、面談を始める。北上はあまり緊張していないように見えるが、大井に関しては冷静にこちらを見据えて、表情からは何を考えているのかが読み取れない。

「では改めて、この鎮守府に着任した葛原だ。宜しく頼む。」

「重雷装巡洋艦の北上だよよろしく。」

「同じく重雷装巡洋艦の大井です。宜しくお願いしますね。」

「まずは北上、先程希少なボイスレコーダーを見つけてくれたそうだな。良くやってくれた。」

そう伝えると少し照れたのか、頬を掻きながら目線を反らす。

「いや〜引き出し全部出して確認してただけだね、調べ終わって引き出しを戻してたら、なんか出てきたんだよ。よく分かんないけど運が良かったのかな?」

つまりタンスに細工をしていたものを、偶然条件を満たしたってところか。

「運が良かったにしろお手柄だ。ありがとう。」

「あくいいってもう。ほら、話進めようよ。」

照れる北上に思わずクスリときてしまう。大井も先程までとは違い、なんだか誇らしそうな感じだ。

「では聞いていくが、二人は特殊な重雷装巡洋艦とのことだが、前任者からはどんな扱いを受けていたんだ?」

「うくん、なんか置物扱い? 基本放置みたいなの?」

「あくそれはなんとというか、雑な感じだな。」

「まあね〜私と大井っちって特殊じゃん。魚雷の火力が自慢だけど紙装甲だし。軽巡洋艦みたいに水上機飛ばして哨戒も出来ないし、潜水艦対策にも使えないし。だから戦闘にも哨戒や遠征にも呼ばれない感じ?」

前任者は重巡洋艦ですら運用出来ない無能だったからな、特殊な重雷装巡洋艦なんて使えるはずがないか・・・

「それは宝の持ち腐れだな・・・」

「だよね〜北上さんこれでもやる時はやる娘だからねえ〜」

「だが前任者にとって使えないなら、何かしら酷い扱いを受けていたのではないのか?」

「そりや〜飯が食べれなかったり、部屋に何にもなかったりはしたけど、それは皆一緒じゃん。お客さんの接待とかさせられなかったし、なんか提督にもほとんど呼ばれなかったから。本当に置物扱いだね。」

一応特殊な艦娘だし、島風や雪風みたいな扱いだったのだろうか？

「大井はどうだった？」

「そうですね・・・そこまで悪くなかったと思いますよ？北上さんの言う通り食事等は最悪でしたが、北上さんを危ない戦場に行かせず、私と北上さんをずっと同じ部屋にいさせてくれましたから。けれど私と北上さんの処女を奪ったので、死んで当然だと思いますけど。」

怖!!完全に目が据わってやがる・・・北上と大井の仲が良いのは有名だが、これは恐怖を感じてしまうレベルだ。例え艦娘が人間に危害を加えない存在だと分かっているとしても、刺されてもおかしくないと思ってしまう。

「まあまあ、大井っち落ち着いて。私はそこまで気に病んでないからさあ。」

「北上さんがそう言うなら・・・」

北上に宥められるとすぐに落ち着くようだが、大井は北上が付いていないとすぐに暴走してしまいそうだな。

「以前の扱いについては分かった。それでは要望などはあるか？」

「北上さんと私を離ればなれにしないこと、北上さんに危険な真似をさせないこと、北上さんに手を出さないこと。これを守って欲しいです。」

なんと言うかもう大井の性格はよく分かった。北上第一主義とでも言うべきか・・・北上も若干引いてるぞ・・・

「あー、北上は何か要望はあるか？」

「うーん、北上さんもやっぱり艦娘だからねえ。ずっと置物扱いは嫌かな。やっぱり戦場で活躍してこそその軍艦つてのもあるから。でも出撃するなら大井っちと一緒に良いな。」

少し寂しそうに、少し申し訳なさそうに語る北上だが、戦う意思があるなら問題ない。

「分かった。戦う気概があるなら、活躍する舞台を整えるのが提督の仕事だ。前任者には無理でも私ならお前達を活躍させられる。」

「いいねえ、しびれるねえ。それならスーパー北上さまの凄さを見せてあげるよ。大井っちもそれで良いでしょ？」

「はい！北上さんがそう言うなら！」

北上も大井も良い笑顔だ。若干大井の笑顔には怖いものを感じるが、そこは見なかったことにしよう。

「ではこれから宜しく頼む。面談は以上だ。そろそろ市長が来る時間だから、部屋に戻って待機していてくれ。」

「りよ〜か〜い。そいつは駆逐艦達を虐めてたみたいだし、ギツタギツタにしてやってよね。」

「今日は情報を探る程度だと思うが、しっかり追い詰めてやるさ。」

ニヤリと笑って部屋を出ていく北上と、丁寧に一礼して出ていく大井。北上の期待を裏切らないように頑張るとするか。大井が怖いし。

## 27話（平川市長登場）

北上達が退室してしばらくすると、いつも通り大淀・・・ではなく明石が来た。

「ん？明石、どうしたんだ？」

「大淀さんは市長の案内とかで忙しいので、私が盗聴とか録音とかを頼まれたんですよ。大淀さんは市長を出迎える為に正門で待つてますよ。」

「なるほど、宜しく頼むぞ。それにしても面倒な仕事だな・・・汚職の調査なんてさっさと打ちきりたいのだから・・・」

そう言うとき明石はきよんとした顔をしている。

「えっと、提督？資金の帳簿が見つかったから、証拠は十分なのでは？後は芋づる式に捕まえれば良いものかと？」

なるほど、動かぬ証拠があれば憲兵に捕まえられると思っているのか・・・純粋な奴だな。

「甘すぎる考えだな。大本営も憲兵隊も汚職の巣窟だぞ？証拠なんて握り潰されて終わりだ。」

「えっ？じゃあ、どうするんですか？」

「いくつか案はあるが、どれが使えるかを探ってみなくては始まらない。だから地道に情報を引き出すしかないんだよ・・・面倒だから・・・」  
明石にもめんどくさい案件だというのが伝わったのか、とても嫌そうな顔をしている。

「あ、提督、大淀さんから連絡です。市長が来たので応接室に案内しますとのことですよ。」

「分かった、明石も準備してくれ。」

「了解しました！」

大淀に案内されて来た男は、無駄に着飾っている太ったおっさんで、つい前任者の石像を思い出してしまった。さぞかし前任者とは気が合ったのだろう。そして自分を見た瞬間に若造だと侮ったのか、少しだけ口元が緩んだのを見逃しはしない。内心成金豚野郎と罵りな



がらも、キリツと軍人らしい表情でやり過ぐす。

「新しい提督が着任したと聞きました、ご挨拶に伺いました。この街の市長を勤めております、平川と申します。宜しくお願い致します。」  
「新しく着任しました葛原です。若輩者ではございますが国防の要として、精一杯勤めさせて頂きます。急な着任だったため、ろくなおもてなしも出来ませんがご容赦下さい。」

「いえいえ、慌ただしい時に急にご挨拶に伺ったのですから、お気になさらないで下さい。」

しばらくは社交辞令という無駄な遊びに付き合わなければならぬかと思っていたが、先に話を切り出して来たのはぶぶぶ平川市長だった。

「さつそく一つお聞きしたいのですが、前任者の大森提督はどうされたのでしょうか？急に新しい提督が着任されると聞きました、我々も驚いているのですよ。」

どういうことだ？この平川市長は前任者が殺された事件を知らないのか？事件のことは軍の不祥事なので一般には公開されていないが、この街の汚職集団の取り纏めで、前任者と関わりが深かったはずなのに知らないのか・・・情報を回して貰ってないと言うことは、あまり重要視されていない人物ということか？

「申し訳ありませんが、軍規に関わることで私の口からはお伝え出来ません。平川市長と前任の大森提督は親しくされていたようですので、心配されるのは当然だとは思いますが・・・申し訳ございません。」

そう伝えるとかなりイラツときたのか、こめかみの辺りが震えている。それでも一応自制はしたようだ。

「軍規に関わるのであればこれ以上詮索は出来ませんなあ。しかし大森提督と私達は色々取引などもさせて頂いておりましてな。急に居なくなれると困りますなあ。葛原提督は取引等については何か引き継ぎをされているのですかな？」

「申し訳ございませんが、何一つ引き継ぎはされておりません。」

そう言った瞬間に平川市長はニヤリと笑った。大方知らないこと

を良いことに、約束をでっち上げる気だろうが、その程度で騙されるほど馬鹿ではないぞ？

「いや、それは困りましたなあ。直近で言えば交流会の予定などもありましたが、もちろん準備されていないのですかね？」

「交流会ですか？どのようなことをされていたのですか？」

「我々一般市民にとつて艦娘とは馴染みが無いものとして、感情を持った兵器として恐れる者も少なく無いのですよ。いえ、もちろん私は国の為に戦ってくれる英雄だと思っておりますが。そこで悲しい誤解を解くために、街の有力者を集めて艦娘達と交流会を定期的に行っていたのですよ。駆逐艦の響がおるでしょ？あの娘と私は仲が良くてすなあ、よく交流を深めたものですよ。」

良いように言っているが、実態は抵抗できない艦娘達にやりたい放題する乱交パーティーだろう。

「そうなのですか？参考までにどれくらいの規模で行っているのですか？」

「そうですねあ・・・多い時なら20人くらいの有力者を集めますな。艦娘達も駆逐艦から戦艦や空母まで、分け隔てなく参加しておりますな。」

戦艦や空母まで要求するチャンスと見たか。嘘なのは分かるが、ここで追及するのは悪手だな。

「そうなのですか・・・前任者とのお約束を守れずに申し訳ございませんが、現在急な着任で鎮守府も慌ただしい状況です。しばらくは交流会を行う余裕はないかと・・・」

「なんだと!?こちらは人を集める準備も終えているのだぞ!!せつかくの人と艦娘が歩み寄る機会をなんだと思っているのかね!？」

ほほう・・・自分の意見が通らず激昂したか、都合が良い。

「艦娘達は国を守るのが第一の仕事です。それを疎かにする判断は私には出来ません。」

「それは貴様が無能だから出来んのではないのか!?提督ならば国を守るのは当たり前だ。その上で地域との関係を上手くやるのも、提督の仕事だろうが!？」

「深海棲艦の動きも活発になっており、この鎮守府の戦力も十分とは言えません。しばらくは交流会をする余裕などありません。」

「貴様はワシをなめておるのか!? ワシのバックに誰が付いていると思っておるのだ!? 呉鎮守府の久藤提督じゃぞ!! 貴様のような新人の小僧など消すのは簡単なのだぞ!？」

とりあえず言質も取れたが、もう少し深く探ってみる頃合いかな? 「少し落ち着いて下さい。熱くなられているようですし、ご一緒に散歩でもして気分転換しませんか?」

「何を言っておるのだ貴様は!? 馬鹿にするのもたいがいにしろ!!」

「まあまあそう言わずに・・・ここでは話し難いこともありますので・・・」

意味深にそう伝えると途端に黙り込む、いくら馬鹿でもここまで言えは伝わるか・・・

「では大淀、少し歩いて来る。私達が戻って来るまでこの部屋で待機しておくように。」

「分かりました。それではお気をつけて。」

平川市長を連れて外へと向かう、とりあえず黙って付いて来てくれるが、これではまるで犬の散歩・・・いや、豚の散歩だな。珍妙な光景だが、誰の目もないのだから気にする必要はないか。

「さて、この辺りなら良いでしょう。応接室ですと誰が聞いているか分かりませんかからね。」

「・・・それで話とはなんだね?」

「今この鎮守府は汚職の件で、憲兵隊から目を付けられているのですよ。」

「馬鹿な!? 呉の久藤提督がバックに付いているのに、そんなことが起こるはずがない。」

余程久藤提督の権力を信じ込んでいるようで、簡単に喋ってくれそうだ。

「久藤提督と舞鶴の鶴野提督が仲が悪いのはご存知で?」

「むう・・・あいつの仕業か・・・自分も汚職しておる癖に、我々の邪魔ばかりしておって!!」

「そういう訳で今は派手に動く訳にはいかないのですよ。それと購入された艦娘達はどうかされていますか？」

「もちろん情報が漏れんように各自が管理を徹底しておるわ。それがどうしたのだね？」

お、艦娘の人身売買も認められたか。味方のふりをしただけで良く喋ってくれるものだ。

「最悪家宅捜索が入る可能性もあるので危険かと。こつそりと返却して頂ければ、こちらで上手くやることも可能ですが？」

「うむ。ワシの一存だけでは決められぬことだな。有力者の皆にも相談しよう。もし返却することになったら地下通路を使って返却しよう。」

「地下通路ですか？」

「知らぬのか？ 鎮守府の営倉の奥に隠し扉があつてな、そこから街の外れへと抜けられるのだ。」

「ありがとうございます。後程確認しておきます。ではあまり長くなると怪しまれますので、今日はここまでとしましょう。ご検討のほうを宜しくお願い致します。」

「うむ、危険を知らせてくれて助かった。」

「こちらこそ、貴重な情報を吐いて下さって助かりました。ボイスレコーダーでばっちり録音させて頂いております。」

## 28話（2日目戦闘準備）

応接室に戻ったあと、大淀に平川市長を送り出させた。情報収集もしっかり出来たし、上手く騙して売られた艦娘の返却も要求出来たので、まずまずの戦果だと思う。

「なあ明石、録音の方は上手く出来てるか？」

「部屋の中の話ならばうちりですが、いきなり散歩なんて始められても対応出来ませんよ。」

「そっちはボイスレコーダーがあるから問題ない。せつかく北上が見つけてくれたのだから、有効に使わないとな。お陰様であの豚は警戒心を解いてベラベラと喋ってくれたよ。」

「ぶっ!!急に変なこと言わないで下さいよ!思わず笑っちゃうじゃないですか。」

「ハハハ、私も上手くいって上機嫌なのだ、気にすることもないだろう?」

二人して朗らかに笑っていたが、明石が急に真面目な顔になって、次第に焦り始めた。

「急にどうしたんだ?」

「て、提督!大淀さんから緊急通信です!哨戒に出ていた龍田さん達が敵艦隊を発見。即時離脱許可を求めています。」

「分かった、離脱を許可する。長門と大淀を会議室に呼べ。」

「はい!」

人間の次は深海棲艦か・・・厄介な奴らめ。

「大淀、報告を頼む。」

「はっ!龍田率いる哨戒部隊が敵艦隊を捕捉しました。構成は空母ヲ級1、戦艦ル級1、重巡リ級2、駆逐イ級2からなる主力艦隊と護衛に軽巡ホ級2、駆逐イ級4からなる水雷戦隊です。」

それなりに大きな戦力だな、はつきり言って今の鎮守府には、まだ戦闘に出せる状態では無い者も居る。一度も実戦経験の無い鈴谷と熊野には荷が重いし、金剛姉妹も榛名を除いて使うリスクが大き過ぎ

る。空母については全く話をしていないので未知数だ。だが相手に空母が居る以上、空母無しは流石にキツイか・・・

「長門、空母で戦闘を任せて大丈夫だと思える者はいるか？」

「そうだな、赤城と加賀の一航戦の二人なら問題ない。五航戦の翔鶴と瑞鶴は、戦場に出すには危うい精神状態だな。」

「分かった、一航戦の二人に出て貰おう。」

ル級を抑える為にも戦艦が一人欲しいか。長門には作戦指揮の補助をして貰うから除外して、残りは榛名か陸奥、空母二人を採用するから航空戦は有利を取れるから榛名で大丈夫だな。あとは重巡相手の火力持ち・・・さっそく北上と大井を使うか。空の心配が無いなら、長距離からの先制雷撃が猛威を振るうだろう。あとは護衛に駆逐艦だな。水雷戦隊の相手はこちらも水雷戦隊で対応しよう。

「では主力艦隊は赤城を旗艦として、加賀・榛名・北上・大井・雪風に任せる。第二艦隊は天龍を旗艦として白露型姉妹4人を出す。もう一人駆逐艦が欲しいが誰かおすすめはいるか？」

「それならば島風だろう。あの娘はとても頼りになる。」

「島風か・・・性能面では問題ないが、彼女は私に会った時にかなり怯えていたようだ。精神面は大丈夫なのか？」

「ああ、それは彼女が人見知りをする性格なだけだ。慣れたら明るく元気な良い娘だぞ。」

前任者に酷い目に合わされたかと思っていたが、ただの人見知りか・・・

「分かった、最後の一人は島風に任せる。では早急に出撃準備をさせて。」

「はっ！承知した！」

出撃港に続々と艦娘達が集まり、急いで出撃の準備に取り掛かる。「今回は赤城さんが旗艦を勤めるのね、一航戦の誇りを新しい提督に見せつけましょう。」

「ええ、美味しいご飯を食べたので元気一杯です。戦いに勝って皆でまた美味しいご飯を食べましょう。」

「赤城さん・・・そうですね、皆でここに帰って来ましょう。」

「いや〜活躍したいって言ったけど、こんなに早く出番が来るとはね。頑張ろうね大井っち」

「はい！北上さんと一緒なら負けません！」

「よお〜し！スーパー北上様の凄さを見せてあげようかな！」

「榛名さん！護衛は雪風に任せて下さい！」

「いえ、その・・・無理をしてはダメです。今の提督は駆逐艦を盾にするような方では無いのですから。」

「大丈夫です！雪風は沈みません!!」

「そうですか。ふふっ、では頼りにしていますね。」

「はい！任せて下さい!!」

「よお〜しお前ら、戦艦や空母の盾じゃなくて、やっと水雷戦隊として戦えるんだ。気合い入れていけよ!!」

「ふふーん！夕立がまた一番になるっばい！」

「ああ!!今度こそ一番はお姉ちゃんなんだからね！」

「まあまあ姉さん落ち着いて。提督にも言われただろう？功績を焦って無理な戦い方をするなっつてさ。まずは皆が無事に帰ってくる事が一番大事だよ。」

「うう〜それは分かってるわよ。」

「おいおい、この天龍様が居るっつてのに一番を取れると思っつてんのか？ずいぶんと気合い入っつてるじゃねえか？」

「天龍さんにも島風ちゃんにも絶対に負けなっつばい！」

「おうっ!？」

出撃港へと向かうと、準備を整えた艦娘達が整列していく。整列し敬礼する艦隊に返礼をして、声をかけていく。

「まず第一艦隊旗艦赤城、今回の戦いは航空部隊と重雷装巡洋艦の先制雷撃で、どれだけ敵を削れるかにかかっている。頼んだぞ。」

「はい、お任せ下さい！」

「次に第二艦隊旗艦天龍、お前達は空母の盾として呼んだ訳ではない。戦力として呼んだのだ、そこを間違えるなよ。」

「おう、俺に任せておきな！」

「ふっ、深海棲艦が私の着任祝いをしてきているのだ。盛大に歓迎してやれ！出撃だ!!」

「「はい!!」」

これで出来ることはやったのだ。あとはこいつらを信じてやるしかないな。



会議室にて開戦の報告を待つ。送り出してしまった以上、あとは現地の艦娘達の活躍に期待するしかないのだが、どうしても気になってしまう。明石に一つ仕事を依頼してからは、会議室で戦況を気にしている。幸い哨戒に出ている龍田達は敵艦載機の攻撃を受けたものの、被害は軽微で既に戦線を離脱したとのことなので安心した。

「提督、赤城さんからまもなく交戦距離に入るとのこと、艦載機の発艦許可を求めています。」

「許可する。航空戦を開始せよ。重雷装巡洋艦の二人には自分達の距離になったら、各自の判断で雷撃を開始するよう伝えろ。出来るだけ大物を狙うようにな。その後は旗艦の判断で砲雷撃戦に入れ。」  
「分かりました。航空戦開始します。」

新しい提督に代わってから初めての实战で、いきなり第一艦隊の旗艦に任命された。提督とはまともに話をしていないが、長門さんが私を推薦してくれて、提督が私に任せると決めたらしい。私自身が提督に信頼されたのではなく、長門さんの判断を信頼したというところに、思うところが無いわけではないが、この戦いに勝利して提督の信頼を勝ち取りたい。

「鎮守府より入電。航空戦を開始せよ。北上・大井は射程距離に入り次第先制雷撃を開始、その後は旗艦の指示のもと砲雷撃戦へと移行します。加賀さんいきませよ！」

「ええ、一航戦の誇り見せてあげましょう。」

「第一次航空隊発艦!!」

「報告します、赤城・加賀により制空権確保しました。航空攻撃に成功し、空母ヲ級中破、戦艦ル級小破、重巡リ級轟沈1、駆逐イ級轟沈1。こちらに損害はありません。」

「ほう、二人がかりとは言え敵空母を抑えこんだか、なかなかやるではないか。」

空母ヲ級を中破まで追い込んだならば、もう艦載機は飛ばしてこれ  
ないはずだ。そうなると制空権は完全にこちらのものか。そして次  
は・・・

「先制雷撃命中です!!戦艦ル級轟沈、重巡り級もう一隻轟沈です!!」  
良い走り出しだ。これで敵主力艦隊は使えない空母と駆逐イ級が  
一隻だ。

「第二艦隊、敵水雷戦隊との交戦に入ります。榛名さんが砲撃で援護  
して、敵水雷戦隊の軽巡ホ級を沈めました!第二艦隊砲雷撃戦入りま  
す。」

さあ、敵艦隊はボロボロなんだ。しっかり止めを刺せよ。

その後砲雷撃戦できつちりと止めを刺して勝利した。こちらの損  
害は天龍が春雨を庇って中破したのと、白露が小破。哨戒部隊の龍田  
と吹雪が撤退時に受けた艦載機の攻撃でそれぞれ中破と小破。この  
程度の被害である敵艦隊を倒せたのだ、十分に許容範囲だろう。戦闘  
後龍田達哨戒組と合流し鎮守府へと帰投し、旗艦を勤めた3人から報  
告を受けたところだ。

「全員よくやってくれた。特に赤城と加賀は敵空母を抑えこんだ上で  
敵艦隊にかなりの打撃を与えてくれた。今後も期待している。」

「ありがとうございます。一航戦の誇りにかけて今後も頑張ります。」  
胸を張って受け答える赤城を見れば、長門が信頼していたのもよ  
く分かるというものだ。

「提督、北上さんも大活躍だったんだけど?」

「フツ、そうだな二人で戦艦ル級と重巡り級を仕留めたのだったな。  
やはり重雷装巡洋艦の火力は侮れないな。」

「でしよでしよ、まあ、今回は赤城さん達がしっかり空を守ってくれ  
たから、安心して魚雷を撃てたのも大きいけどねえ。」

ドヤ顔の北上とその北上をうっとり見つめる大井・・・いや、大井  
も一緒に活躍したはずなんだが、まるで北上一人で戦果を上げたみた  
いに見える。

「あとは状況を見て第二艦隊の援護に回った、榛名の判断も良かった

し、砲雷撃戦で止めを刺した第二艦隊の働きも見事だった。」

「そんな、特別な評価なんて、榛名にはもつたいないです。」

「ツチ・・・俺は被弾しちまったからな、でもこいつらはしつかり活躍したんだから、そこんとこ分かってくれてるなら良いけどよ。」

照れる榛名と不貞腐れる天龍、榛名はともかく褒めているのに不貞腐れるのは面倒な奴め。

「賛辞くらい素直に受け止めておけ、天龍の被弾も春雨を庇ったものだ」と聞いてるぞ。」

「悪いかよー！」

「確かに旗艦が庇うつてのはあまり良くない行動かも知れないな。しかし結果として第二艦隊の戦果は十分だ。だからその程度のことをグチグチ言うつもりは無いさ。」

「・・・そうかよ。突っ掛かって悪かったな。」

なんだ、天龍はかなり素直になったものだな。隣で龍田が啞然としているぞ？

「ではこれにて解散とする、各自休息をとるように、ただし入渠は負傷した者が優先すること。ご苦労だった。」

敬礼で締めると、艦娘達も揃って敬礼する。これでやっと一息つけるな。そう思っていると傍に控えていた大淀と長門が近づいてくる。

「提督、艦隊の指揮お疲れ様でした。新人の提督とは思えないほど見事な指揮でした。」

「うむ、この長門も安心して彼女達を送り出せたものだ。特に駆逐艦達を盾に使わないで良いのは本当にありがたい。」

「お前達艦娘が上げた戦果だ。私は大した事はしていない。」

「ハハハ！賛辞くらい素直に受け止めておけ、だったか？発言には責任を持つべきだと思うが？」

長門がニヤニヤしながらそう言ってきて、大淀も思わずクスリと笑ってしまった。これは長門に一本とられたな。

「・・・長門の言う通りだな。ありがとう。」

しばらくニヤニヤしていた長門だが、何かを思い出したかのよう

に、急にソワソワし始めた。

「あー、ところで提督、仕入れておいた例のあれなのだが・・・彼女達に伝えなくて良かったのか？」

「ああ、そうだったな・・・まあ、間宮に伝えているから問題無いだろう。私達も仕事は終わりだ、食事して休むとしよう。」

「そうですね、今回の戦闘に参加しなかった方達は、もう食事を済ませていますしね。提督も一緒に食事をしましょう。」

大淀が笑顔で提案してくる。いや、それだと艦娘達が落ち着いて食事が出来ないだろ。

「ああ、いや、私は会議室で食事をするから、悪いがまた持って来てくれるか？確認しておきたいことがある。」

「提督？先程仕事は終わりだとおっしゃいましたよね？私達に気を使って頂いているのは分かりますが、あまり避けられるような真似をされると、ちよつと悲しいですよ？」

気付かれていたのか・・・しかしここまで言われたらお手上げだな。「分かった、このまま食堂に向かうとしよう。」

なんだか艦娘達の扱いが緩くなってしまった気もするが、軍としてのケジメさえ守れば問題はないか。

### 30話（2日夕食）

食堂に入ってみると、艦娘達が間宮の前に並んで食事を受け取っていた。島風は先に受け取ったらしく、既に食べ始めている。ちょうど今受け取っていた赤城のお盆を見ると、これでもかと盛った山盛りのご飯と特大ハンバーグが2段重ねだった。自分も18歳と若く食べ盛りではあるが、流石にあそこまで食べられないな。付け合わせのサラダも大盛なので栄養が偏ることはないと思うのだが・・・そもそも艦娘達にとって栄養バランスは必要なのか？燃料さえあれば最低限の活動は出来るし、弾薬の補充と傷ついたら鋼材と入渠、艦載機が落とされたらボーキサイトで補充が可能だ。それでも人間らしい生活をする方が艦娘達にとって良いらしいので、食事を与えることを推奨されている。一応食事を与えなくても、財政の問題や食糧の入手困難などを理由に言い訳すれば、罰せられることは無いのだが・・・無駄にリスクを負う必要は無いし、艦娘達の士気を維持する為にも、食事は重要だと思っている。

「提督？どうかされましたか？」

入り口付近で少し考え込んでしまったので、大淀を少し心配させてしまったか。

「いや、少し考え事をしていただけだ、気にするな。」

自分が発言した途端に艦娘達の意識がこちらへと向く。食事のことで頭が一杯で、こちらに気が付いて無かったのだろう。慌てて敬礼してくる艦娘達に軽く手を上げて止めさせ、列の最後尾に並ぶ。

「あ、あの、提督？提督はこのトップですし、列に並ばずに先に受け取って頂いて宜しいのですが・・・」

「私は艦娘達への命令権を持つているが、こんなところで無駄に使う気は無い。別に急いでいるわけでは無いからな。」

確かに士官学校では教官達から色々と言われたものだ。上官より先に食事に手を付けるなどか、上官を待たせるなどか、上官の私的な雑用を手伝わせたりとか。とにかく上下関係が大切だと言って、威張り散らしていたのを覚えている。演習で叩きのめしてスッキリして

も、すぐに因縁を付けてくるので面倒な奴等だった・・・あんな奴等にはなりたく無いな。

「いえ、その・・・お気持ちはとても嬉しいのですが、前に並んでる娘達も気まずいので、先に食事を受け取って貰えませんか？」

・・・確かに艦娘達の視線もどこか微妙な雰囲気だな。権力を振りかざすつもりは無いのだが、艦娘達に余計な気を使わせるのも本意ではない、ここは自分が折れておくべきか・・・

「・・・分かった、そういうことならば先に頂こう。」

「ご理解頂きありがとうございます。」

一礼する大淀を背に間宮の方へ向かうが、艦娘達からどことなくほっとした雰囲気を感じる。特別扱いされることにいまいち納得は出来ないが、感性の違いというものだろうか？こんなことでこちらの意思を押し付けるのも良く無いか・・・間宮の前に行くと、今のやり取りの間で準備したらしく、すぐに食事を手渡される。

「はい、どうぞ。今日は食堂で食べられるのですか？」

「ありがとうございます。まあ、成り行きでな。」

「そうですね、それは良かったです。一度も顔を見せて貰えないので、少し心配していたのですよ？」

食事はきちんと食べていたはずだが、何を心配していたのだろうか？食事の質か？それとも食堂の運営状況を確認していなかったからか？言われてみれば他の現場は視察をしたが、食堂だけは間宮に任せきりになっていたな・・・

「今夜の食事も美味そうだな、この調子で食堂の運営を頼むぞ。」

「あ、はい、ありがとうございます。」

ん？気にしていたのはこの案件では無かったのか？

「何か気になることがあるなら相談してくれ。」

「いえ、大丈夫です。あ、先程仕入れて下さった羊羹なのですが、どうされますか？」

「ああ、その件か。あれは要望で頑張ったご褒美に甘味が欲しいと言われてな、とりあえず試して仕入れたものだ。今日出撃した艦娘達に渡すつもりだから、食後にでも出してやってくれ。」

「分かりました。私の方で配っておきますね。」

間宮が微笑んでそう答えるが、突然ガタガタ！と音がしたのでそこからを見ると、食事を始めていた赤城が立ち上がっていて、後ろで椅子が倒れていた。驚愕に目を見開き、リスのように頬を膨らませた姿は、先程まで立派に旗艦を務めた存在とは別人かと思ってしまう。他の艦娘達も少なからず驚いているようだ。

「提督！提督！さっそく夕立のお願い聞いてくれたっばい!？」

列から飛び出して来た夕立が嬉しそうに聞いてくる。あまり間宮の前を塞ぐのも悪いので、少しずれてから対応する。

「士気を上げる為には悪くない案だったからな。それに今日は良い戦果を上げたのだ、実績はきちんと評価するべきだろう。今後も期待しているからな。」

「ありがとうっばい！これからどんどん活躍して甘いものを貰うっばいー!」

笑顔でお礼を言う夕立はやる気に満ちているようで、これだけ単純なら扱い易いものだ。他の艦娘達からお礼を言われて声をかけていった。ここまで好評ならば、士気の高揚という目的は達成出来たと見て良い。夕立もなかなか良いアイディアを出してくれたものだ。

### 31話（営倉調査）

夕食後ゆっくり休もうかと思っていたが、平川市長から地下通路があると聞いていたのを思い出し、一人で営倉へと向かう。営倉に着くと昨夜も思ったが嫌な臭いが漂ってくる。地下である以上換気にもあまり期待出来ないの、仕方なく我慢して調査を始める。本来の営倉であれば、3畳程度の広さの部屋がいくつもある程度だが、この営倉はレンガで作られた9畳くらいの広い部屋が、左右に3部屋ずつ並んでいる。この規模の鎮守府だと明らかに部屋数が多いし、一度に何人か入れられそうな部屋は営倉としては不自然だ。営倉と言うよりも監獄と言われたほうがしっくりくる。だが一番不自然なのは拘束具の存在だろう。本来営倉に入れられる場合、拘束はされないのが一般的だ。もし暴れるような者でもせいぜい手錠をかけられるくらいだろう。しかしこの営倉には天井やら壁や床に鎖がついていて、酷いものは簡易的な寝台に鎖がついているものもある。悪趣味極まらない・・・

調査を続けると左奥の壁にレンガが押し込める場所を見つけた。押し込んだ横に手をかける場所があったので、ゆっくり引くとあまり音も立てずに隠し扉が開いていく。隠し扉の先は倉庫のような場所になっていて、拷問などに使っていたであろう道具が置いてあった。これは証拠の写真でも残しておきたいところだが、生憎カメラなどは希少品なので所持していないのが悔やまれる。深海棲艦が出現する前は普通に店で売っていたのに、こんなところでも深海棲艦が残した傷跡を感じてしまう。

さらに調査を進めると、倉庫の奥の方に艤装が置いてあるのを発見した。流石に艤装だけでどの艦娘のものかまでは判断出来ないが、大きさからして戦艦と正規空母のものは無さそう。飛行甲板もあるが、おそろしく軽空母のものだろう。なぜこんなところに艤装があるのかは分からないが、これも何か重要な手掛かりになるだろう。

最後に倉庫の一番奥に扉があり、開けてみると通路がかなり奥の方



まで続いていて、部屋の明かりだけでは先が見通せない。これが平川市長が言っていた地下通路だろう。ここを調べるならば明かりが必要だろうが今は準備がないし、どこまで続いているのか分からないので、また明日調べに来るとしよう。誰にも告げずに調査を始めたので、もし何かあった場合に対応が遅れてしまうかも知れないからな。

提督用の浴室で温まりながら、一日を振り返る。資材や資金関係などの書類は証拠隠滅をされていたが、天龍に壊させた石像から資金の帳簿が出て来て、汚職の捜査に進展があった。

艦娘達との面談で、第六駆逐隊・金剛型姉妹・白露型姉妹・北上大井ペアと面談が出来た。軒並み協力的な感じだったが、金剛姉妹の榛名以外はかなり手がかかりそうだ。逆に榛名には過去を明かしてしまったが、そのおかげで信頼を得ることに成功した。

平川市長との会話では、予め資金の帳簿で黒だと判明していたこともあり、上手く情報を引き出すことに成功した。あまり関わりたくない相手だが、今後も情報を搾り取る必要があるかも知れない。

深海棲艦の襲撃は艦娘達の活躍で無事に撃滅することに成功した。艦種の偏りがあることや、練度と精神面での問題がある艦娘も居て、編成に支障が出ていたことが今後の課題だろう。

最後の営倉の調査では、地下通路を探すだけのつもりが、思わぬ発見があったので、かなりの成果を得られたと思う。カメラさえあれば証拠としてしっかり残せるのだが、それだけが心残りだ。

・・・カメラ・・・カメラ・・・ああ!!

### 32話

時間は午後9時と少し遅かったが、カメラの有無は重要なので早めに知っておきたい。執務棟を駆け降りて艦娘達の寮へと向かう。青葉がカメラを持ってきている可能性にもつと早く気が付いていれば、色々証拠の写真を撮らせていたのに!!とは言えいきなり部屋に押し掛けるのも良くないだろう・・・いつもなら大淀に呼び出して貰うのだが、秘書艦だからと言って常に一緒にいる訳ではないからな。艦娘寮の一階にたどり着くと鈴谷が歩いているのを見つける、鈴谷に呼び出して貰うか。

「あれ？提督じゃん。こんばんは。」

こちらに気が付いた鈴谷が声をかけてくる。面談前の暗い雰囲気は、少しだけ改善されたようだが、まだまだ士官学校に居た鈴谷のよくな明るさは無い。まあ、これから少しずつ改善すれば良いだろう。「ああ、こんばんは。青葉に用事があったのだ、悪いが呼んで来て貰えるか？」

そう伝えると鈴谷は一瞬驚いた顔をしたが、何かを考えるように唸り始めた。

「うーん、青葉なら部屋に居ると思うけど・・・その、もし良かったらその用事鈴谷が代わっても良いよ。ほら、同じ重巡洋艦だし、鈴谷もけっこうあるほうだし、提督のこと悪くないかなあとは思っているし、うん。」

「何が言いたいかはよく分からないが、今用事があるのは青葉だ。呼んで来てくれ。」

「・・・は、はい・・・」

鈴谷はがつくりと肩を落として、青葉を呼び出しに行ってくれた。青葉とはまだ話をしていないので推測にはなるが、鈴谷達同様にあまり良い待遇ではなかったのだろう。だから青葉を心配したのだろうが、流石に鈴谷がカメラを所持しているとは思えないので仕方ない。

数分後、少し暗い雰囲気を取り戻してしまった鈴谷が、顔を真っ青にして震えている青葉を連れて来た。

「提督、青葉を連れて来ました。」

「ありがとうございます、下がって良いぞ。」

「はい・・・おやすみなさい。」

青葉を残していくことに後ろめたさを感じるのか、やはり暗い雰囲気  
で鈴谷が去っていく。明日にでも少し話をしておくべきだろうか  
？

「し、司令官！青葉型重巡洋艦青葉です！ど、どのようなご用件でし  
ょうか？」

「では単刀直入に聞こう。カメラを所持しているか？」

そう聞いた瞬間にビクツ！と飛び上がらんばかりに動揺していた。  
これは持つてるな。そう思って少し気を抜いた瞬間に、視界から青葉  
が消えたかと思うと、足元で青葉が綺麗な土下座をしていた。

「どうか、どうかカメラだけはご勘弁下さい！あれは青葉にとって大  
事なもので、青葉の心の拠り所なんです！無闇に使用したりしません  
ので、どうかお許しください!!」

大事な物を奪われたくないのは分かるが、土下座しながら大声で騒  
がないで欲しい。何の騒ぎかと艦娘達が遠くから様子を伺っている  
ようだ。この状況を見たら、自分が青葉を追い詰めているようにしか  
見えないだろう。

「待て待て、カメラを取りあげたりはしないから落ち着いて話を聞け。  
とりあえず土下座はやめてくれ。」

「ほ、本当でしょうか？」

土下座の姿勢から頭を上げて、涙目で見つめてくる青葉。いくら希  
少品とはいえ、上官の権限で奪うような真似はしたくない。しかしカ  
メラの重要性は高いので、協力して貰えるように交渉が必要だな。

「もちろん部下から私物を奪うような真似はしない。ただし協力して  
貰いたいことがある、ここは人目につくから、カメラを持って会議室  
について来て欲しい。」

素直にそう伝えると、青葉はがっくりと肩を落として、ただ「分か  
りました。」とだけ言って、とぼとぼ歩いて部屋にカメラを取りに行っ  
てくれた。かなりカメラを大事にしているようなので、あまり協力的

ではないようだが、ここはなんとか協力して貰えるように交渉してきたい。

「え!?!汚職の調査の為にカメラを使用したってことですか!?!」

汚職調査の件を伝えたら、青葉が物凄く驚いている。なんだか一々リアクションが大きい奴だ。

「ああ、そうだ。本来なら証拠は全て撮影して記録として残しておきたかったのだが、カメラを所持していなくてな・・・そこで青葉のことを思い出したので、協力して貰おうと思ったのだ。」

「い、いや〜そういうことでしたか〜あはは〜」

驚いたかと思えば急に顔を赤くして、挙動不審になっている。いったい何を考えていたのやら?!

「それで協力して貰えるか?」

「はい、青葉でお役に立てるならばもちろんです。それに調査ってなんだかドキドキします!」

先程までの暗い雰囲気から一転し、興味津々だと目を輝かせている。

「それでどこを調査するのでしょうか?」

「まずは先程一人で調べて来たのだが、営倉の奥に隠し扉があつてな、その奥の倉庫と隠し通路を調べたい。もう遅い時間だが構わないか?」

「はい!隠し扉に秘密の地下通路!これは俄然やる気が湧いてきました!!」

「それでは大淀に連絡してくれ、地下通路の探索を行うから、有事の際は青葉を通して連絡してくれと。それから工場に行つて懐中電灯を貰つてきてくれ。」

「分かりました。でも司令官、どうせなら探照灯のほうが良いのでは?青葉が居れば電池が切れる心配もないですよ?」

「探照灯か・・・あれだと出力が強すぎるのではないか?」

「いえいえ、ある程度は調整が出来ますのでご心配なく、青葉にお任せ下さい!」

まあ、調整が出来るなら問題無いか。

「分かった、青葉に任せよう。」

「はい、恐縮です。では探照灯取ってきます。」

走って会議室から飛び出した青葉を見ると、どうやって協力を取り付ける交渉をするか考えていたのが馬鹿らしくなる。でもこれで調査がよりスムーズに進むな。

### 33話

探照灯を装備した青葉と合流し営倉へと向かう。最初はご機嫌だった青葉だが、営倉に近づくとやはり嫌なことを思い出してしまったのか、少し顔色が悪くなる。

「大丈夫か？きついならカメラを預かって私が一人で行って来るが？」

「い、いえ、大丈夫・・・です。やはりここには嫌な思いがあります。皆のためにも頑張らないといけませんから。」

相変わらず顔色は良くないが、その真剣な目から覚悟を感じる。そこまで言うなら仕方ないのだが・・・

「一応釘を刺しておくが、今日調べた結果は口外禁止だからな？」

その瞬間青葉の体がビクツ！と激しい動揺を見せる。マジか・・・ちやんと言っておいて良かった。

「えつとですね・・・大淀さんに連絡する際にですね・・・皆さん青葉のことを心配していたので、汚職の調査に同行するだけなので大丈夫ですと、全員に聞こえるように伝えてしまいましたので・・・」

「はあ・・・そこまでの情報なら問題無いが、あまり軽率な行動はやめて欲しい。」

「はい、申し訳ございません。」

青葉がしゅんとしてしまっただが、今回は無闇に情報を流すような話ではないだろう。

「ううゝ秘密の扉に秘密の地下通路なんて特ダネを前にお預けですか・・・せっかく艦娘新聞の特ダスクープになると思ったのに・・・」

「・・・調査の前に情報管理について話をする必要があるようだな。」

「ひいひい!!」

「ふう、こんなところか。では調査を始めるとしよう。」

「うう・・・お供致します。」

情報を漏らさないようにしっかりと釘を刺してから調査を始める。

最初に営倉内の写真を何枚か撮って、隠し扉も開いた状態で撮影する。隠し扉を開けた瞬間に青葉は興奮してのだが、中に入るとやはり気が滅入るようで、一気にテンションが下がる。

「うう・・・悪趣味な道具ばかりですね・・・青葉が見たこと無いのも多いです・・・」

「本当に悪趣味な奴等だな・・・」

「こんなのを記事にしても、皆のトラウマを抉るようなものですね・・・ええ！もちろん記事になんてしませんよ!？」

パシャパシャと撮影しながら愚痴る青葉に、目線で釘を刺しておく  
と青葉が慌て始める。調査の相方は本当に青葉で大丈夫だったのだろうか？

「この悪趣味な拷問道具も問題だが、もっと問題なのはこの奥だ。」

「うう・・・まだあるのですかあ・・・」

一通り撮影した青葉を連れて奥に進むと、青葉が目を見開いて驚愕する。

「ええ!?これ艀装じゃないですか!?なんでこんなところに!？」

「それは分からん、だから調査をしているのだ。」

「そ、そうですね！これは大発見ですよ！って、ああ!!」

相変わらず一タリアクションの大きい奴だが、何かを発見したようだ。

「これ！これ衣笠の艀装です!!私の妹の衣笠の艀装です!!」

「分かるのか？」

「青葉は艀装にそこまで詳しい訳じゃないですが、妹の艀装だけは間違えたりしません。どうしてこんなところに行き？遠征に行き沈んだはずなのに・・・」

「艦娘本人が轟沈した時に艀装だけ残るなんてことはあり得るのか？」

「えっと・・・青葉が知る限りあり得ないです。艀装は艦娘の一部みたいなものですし、そもそも艀装を着けないと海には出られないはずですよ。」

それもそうか。いくら艦娘が人間離れしているとはいえ、艀装無し

で出撃は無理だろう。

「艦装と艦娘ってなんとなく繋がっていると云いますか・・・えっと、砲身とか魚雷とかの装備は付け替えが可能なのですが、核となる艦装は本人にしか扱えないんです。だから青葉が妹の衣笠の艦装で出撃するなんてことはできないんです。なので艦装が無事なら、衣笠もどこかで生きているんじゃないかと考えてしまう訳で・・・」

青葉は混乱しながらもなんとか説明しようとしてくれる。妹の衣笠が生きているかも知れないと希望を抱きながらも、この状況では断言出来るほどの自信は無いのだろう。

「ちなみにその衣笠が遠征で沈んだのはいつ頃の話なんだ？」

「2ヶ月ぐらい前の話です。高雄と衣笠の二人だけで遠征に行って、二人とも轟沈したとだけ聞きました。」

「重巡洋艦二人だけで遠征か・・・胡散臭い話だな。」

「そうなのですが、司令官の命令には逆らえませんし、何かお考えがあつてのことだと思っていました。それに前の司令官に意見でもしようなものなら拷問が待つてましたし・・・」

「まあ、これ以上ここで話していても解決はしないか・・・追つて調査は進めよう。」

そう言つて奥の通路へと進むが、青葉がついてくる気配が無い。気になつて振り返ると、青葉が覚悟を決めた目をしている。

「し、司令官、無理を承知でお願いします。この艦装の件を他の艦娘達にも伝えて頂けませんか？もしかしたら姉妹が生きてる可能性があらんです。その情報だけでも希望が持てるかも知れません。」

「悪いがそれはダメだ。この件に関してはまだ何も分かつていない、艦娘達にただ動揺を与えるだけだ。それにもし姉妹が生きてるかも知れないと思つたら、どうにか探しだそうとするのではないか？」

「それはもちろんです。姉妹が生きてるならなんとしてでも！」

「それが問題だ。姉妹の存在が確認され、私の指揮で取り戻すのなら問題無い。しかし各自がバラバラに動いたり、想定外の動きをされる訳にはいかない。この件を仕組んでる奴等に探つていることを知られて、何か対策をされる可能性もある。最悪の場合は証拠隠滅の為に



解体される可能性もある。だからこの件は情報を漏らすことは禁じる。それに青葉一人でこの件を調査することもダメだ。分かったな？」

「うう．．．わかり．．．ました．．．」

感情的には納得出来ていないようだが、理解はして貰えたようだ。今回は相手はつきりと分からない以上、簡単には動けないな。そう考えていると、俯いていた青葉が急に顔を上げた。

「あ、司令官大淀さんから通信です。大本営からお電話だそうなので、至急会議室に戻って欲しいとのことですよ。どうされますか？」

「ツチ、こんな時に連絡をしてくるとは．．．相変わらず面倒な奴等め．．．」

「分かった、なら隠し通路の調査は後日とする。青葉はもう休んで良いぞ。」

「分かりました、また調査する時は是非お呼び下さい。」

「ああ、頼りにしているぞ。」

「恐縮です！」

### 34話

会議室に着くと大淀が待っていた。

「提督、大本営の憲兵隊の黒川さんからお電話がありました。折り返しお電話致しますと伝えております。」

「はあ・・・面倒な奴だな・・・分かった、今から電話する。」

憲兵隊の黒川と言えば、憲兵隊のトップだな。憲兵隊は鎮守府の警備と提督の監査が主な仕事になる。ただし実情は提督達から賄賂を貰い、汚職に加担するような奴等だ。基本的に門番の仕事はしているが、鎮守府の中に入ることは滅多に無く、鎮守府内は半ば治外法権のような状態になってしまっている。これは戦争初期の混乱の中で鶴野提督率いる汚職集団が、提督の人権や権利を主張して、民衆の命を盾にして勝ち取った特権の一部だ。普段憲兵隊は鎮守府内に入れず、大本営の命令があれば鎮守府内の捜査が出来る。しかし警察は現地の提督の許可が無い限り鎮守府内に立ち入りが出来ない。こんな状況で憲兵隊が汚職に加担していれば、提督はやりたい放題だろう。これがこの国に汚職が蔓延ることになった一番の原因だろう。

「では提督、私はこれで失礼します。」

電話の内容はだいたい想像がつくし、少し利用させて貰うか・・・「待ってくれ、悪いが通話の記録を頼めるか？」

「・・・？ええ、分かりました。」

大淀は一瞬戸惑ったものの素直に録音の準備をしてくれる。さてとりあえず面倒な奴の相手をするか。仕込みもしておきたいところだな。大本営の憲兵隊に電話をするとすぐに繋がった。

「北九州鎮守府提督の葛原です。黒川さんよりお電話を頂いたのとどこでかけ直しました。」

「ふん！上官をここまで待たせるとは何事か！いったい何をしておったのだ!？」

ああ、黒川本人が出たか。相変わらず威張り散らした奴だな。そもそも憲兵隊と提督では直接の上下関係は無かったはずだが、こいつは理解してないのか？この黒川は憲兵隊の中では中立の立場を取って

いる。大半の憲兵隊員が鶴野提督派と久藤提督派で分かれている中で、中立を保っていると言えば聞こえは良いが、どちらからも賄賂を貰いながら、片方の勢力が強くなりすぎないように調整しているだけだ。そのバランス感覚だけはクズながら見事なものだ。

「前任者の大森提督の汚職調査をしております。」

「ほう？それで何が分かったのかね？」

「書類等が軒並み紛失していたので、捜査は難航していますね。艦娘達からの聞き取りで、艦娘達への暴行や性交の強要、客人への性接待の強要、ついでに指揮官としての能力の低さが露呈しました。」

「ほほう？お前は艦娘の言うことなどを鵜呑みにするつもりか？バカバカしい。」

「いえ、今は証言の裏取りを進めているところです。地下の営倉の状態と隠し倉庫にあった拷問器具を見る限り、艦娘達への暴行等があったのは事実だと思われまます。」

そう伝えるとしばらく黙ってしまった。隠し倉庫を知らなかったのか、もしくはここまで早くバレると思っていなかったのかだろう。

「どうやって隠し倉庫を見つけたのだ？」

「今日平川市長が鎮守府に挨拶に来られまして、隠し通路について教えて下さったので。それと平川市長からは艦娘を買収したとの発言もお聞きしております。」

「ツチ!!他には何かあるのか？」

舌打ちするなら隠してやれよ。とりあえず資金の帳簿の件は黙っておくか。また証拠品として押収して握り潰されても困る。

「汚職調査について主だったことはこれくらいです。引き続き調査を進めます。」

「おう、それで前任者を殺害した犯人は見つかったのか？」

は？こいつは何を言っているのだ？お前達憲兵隊が必死になって捜索したはずの案件だろうか？そんな簡単に見つかると思っっているのか？まあいい、仕込みを始めるか。

「その件に関しても調査を進めていますが、まだまだ仮説の段階です

ね。正直に言つてかなり難航するかと。」

「ふん、使えん奴め。それで、一応仮説とやらを聞いてやろうじやないか。」

「私は前任者の大森提督を殺したのは、艦娘でも深海棲艦でもなく人間だと考えております。しかも提督の才能を持つ者です。」

「はああ・・・なんだそれは？執務室の壁の砲撃の跡を見ておらんのか貴様は・・・」

心底馬鹿にしたような感じだが、犯人を見つけられなかったこいつに馬鹿にされるのは腹が立つな。

「ええ、もちろん見ております。ですから大森提督を殺した犯人と壁を砲撃で壊した犯人が別だと言っているのですよ。」

「はあ!? どういうことだ!?!」

「ですから提督の才能を持つ者が大森提督を殺害して、偽装の為に艦娘を使って執務室で砲撃をさせたってことですよ。」

「待て待て待て、事件当日に来客は来ていないのは確認している。そんなことはあり得ない!」

「それは正規の手続きをした者が居ないだけですよね？先程少し話題に出しましたが、隠し通路から侵入したのでしょうか。おそらく大森提督と密談する約束でも取り付けたのでしょうか。」

「だが大森提督の遺体は粉々だったのだぞ、どうやって殺したと言うのだね!?!」

こいつはさつきから人に聞くばかりで少しも考えてないな。それでも憲兵隊のトップなのか？

「殺した手段はこの際どうでも良いですよ、後で火薬を用いて爆破すれば良いだけです。人を一人爆破するだけならそこまで火薬の量も多くは無いですし、艦娘の砲撃と合わせて爆破すれば音も誤魔化せます。」

「むう・・・しかし艦娘達は人間への危害を加えられないのであろう？そんな艦娘に執務室での砲撃などさせられるのか？執務室は提督の権限の象徴みたいな場所だろう？そこへの攻撃は提督自身への攻撃と同意なのでは?」

所詮はただの部屋に過ぎないのに、象徴への攻撃とか言い出し始めたぞ・・・まあ、納得させれば良いだけか。

「まず壊したものは壁だけですし、壁の向こう側は海なので、提督の権限で無理に命令すれば問題無いでしょう。それと提督の象徴への攻撃が可能かと問われましたが、これは可能です。今日調査の為に前任者の石像を壊すように命じましたが、なんの躊躇いもなく実行しました。」

「・・・うーむ。存外馬鹿に出来ない話のようだな・・・分かった、その線で捜索を続けると良い。」

「お言葉ですが、私には他の提督を調査する権限がありませんので、これ以上の捜査は出来ないと思われます。捜査が難航しているのはこれが原因ですので、後の調査は大本営と憲兵隊で行って頂きたい。」  
「なるほど・・・明日大本営の方々とも相談してみよう。ご苦労だった。」

そう言うと黒川は電話をガチャリと切った。とりあえず上手くいったようだな。ついついたため息が出てしまう。大淀も少し苦笑いしているな。

「お疲れ様です。通話はしっかり録音出来ていますよ。」

「ああ、助かる。」

「それにしても凄いですね。汚職調査の方はお手伝いしたので知っていました。前任者殺害の件も、あれほど斬新なお考えをされていただなんて。」

・・・そろそろ頃合いか。

「なあ、大淀。前任者殺害の件なんだが」

「はい、なんですか?」

「お前はこの説が間違っているのを知っているのではないか?」

その瞬間空気が凍った。

### 35話（春雨対話）

突然の追及に大淀が絶句している。しかし少し考えたら想像がつくだろう。敵の接近の報告が無く味方も演習をしていない夜の鎮守府だ、急な敵襲に備えて艦装を取りに行く者、状況把握の為に確認を急ぐ者、命令があるまではと待機する者。混乱する鎮守府の中で一番に執務室に駆け込むのは誰か？そんなもの秘書艦に決まっている。当然憲兵隊もそう考えただろうが、犯人が見つかっていないので、なんとか追及を逃れたのだろう。

「……ど、どうしてですか？」

「大淀が秘書艦なのだから、一番情報を持っていそうだと考えるのは当然だろう。それにさつき電話で話した内容は、推理と言うよりは妄想に近いレベルで証拠が無い。」

「ですが黒川さんの質問にちゃんと答えてましたよね？」

「予め話を作っていたからな。それなりの準備は考えていたさ。」

そうでなければただの妄言と思われる終わりだ。ただの推察に過ぎない話に信憑性を持たせようとするのだから、相手を混乱させた上で、相手に犯行が可能だと考えさせるように誘導しなくてはならない。質問の予測くらいやって当然だ。

「それではなんであんな話を作ったのですか？」

「……大淀、質問を続ける事で話を反らそうとするな。大森提督が殺された日に何を見た？」

「うっ……私が見たのは……壊された壁と机とバラバラに散った大森提督です……」

大淀は顔を真っ青にしながら答える。ここまで追い詰められても口を割ろうとしないのは、なかなかの胆力だな。

「ふむ、嘘は言っていないが本当の事を隠しているな。他にも見たのだろうか？艦娘の誰を庇っている？」

「そ、それは……それは……」

ついに大淀が膝から崩れ落ちる。その時椅子に当たって倒してしまい、ガタンと大きな音が会議室に響いた。するとドアの向こうから

「ひい！」と声がした。

「誰だ!？」

誰かにこの会話を聞かれてしまったか、普段なら気配を感じるはずだが、黒川と大淀の相手に集中し過ぎてしまったか・・・

「あ、あの、春雨です、はい。」

「はあ・・・とりあえず中に入れ。」

「し、失礼します、はい。」

入って来た春雨は足を震わせながら、おどおどとした様子で入ってくる。

「盗み聞きとはいったいどういうつもりだ？理由によつては重い処分を下さなくてはならなくなるが？」

「い、いえ、そんな！盗み聞きをするつもりはありません、はい。その・・・提督にお話がありまして応接室に伺ったのですが、いらつしやらなかったの・・・会議室から声が聞こえたので、話が終わるのを外で待っていました。もちろん会話が聞こえないように、扉からは離れてました、はい。」

これが事実かどうかは分からないが、ここでやったやってないを議論してもらちが明かない。

「分かった。話したいことがあるなら時間は作るつもりだが、大淀との話が先だ。悪いが後にして欲しい。」

春雨の話も気になるが、まずは大淀から前任者殺害の件について聞くほうが先だ。しかし春雨はなかなか部屋から出ようとしなない。

「・・・もしかして、大森提督殺害の件でしょうか？」

「春雨さん!？」

まだ話を続けようとする春雨に大淀が驚いて声をあげる。

「やはり、盗み聞きしていたのか？」

「いえ・・・その・・・なんだか大淀さんが追い詰められているようでしたので・・・この件だと思いましたが、はい。」

「まあいい、とりあえずまだ話の途中なんだ、一旦席を外してくれ。」

そこまで言ってもなお春雨は下がろうとしない。しかも普段は俯いている顔を上げて、真っ直ぐこちらを見据えてくる。震えながらも

こちらを見る目に、それ相応の覚悟を感じてしまう。

「それなら私の話も無関係ではないです・・・その・・・私が大森提督殺害の犯人です、はい。」

「春雨さん・・・」

「ちよつと待て！今なんと言った!？」

流石にこれは耳を疑う話だ。

「ですから、私が大森提督殺害の犯人です、はい。」

正直これは想定外だ。このタイミングで犯人自ら名乗り出るのももちろんだが、一番驚くべきことは、春雨が普通に出撃していたことだろう。自分の推測では今回の事件は艦娘が犯人だと考えていた。さらに言えば艦娘の深海棲艦化が関わっていて、それが原因で提督に攻撃したのではないかと疑っていた。確かに春雨は事件当日に遠征失敗し、所属する艦隊が春雨を残して全滅していたので、容疑者の有力候補だった。しかし2度も出撃して戦闘を行っていたので、容疑者からは外してしまっていた。

「その話は本当なのか？誰かを庇ったりしているのではないのか？」

「いえ、本当だと思います、はい。」

「本当だと思いますだ?!曖昧な表現だな。」

「その・・・撃った時の記憶が無いので・・・でもあの時執務室には私と大森提督しか居ませんでしたし・・・大森提督に鞭で叩かれた時に視界が真っ赤に染まって・・・気が付いたら大森提督を砲撃していたようです、はい・・・」

撃った時の記憶が無いか・・・これはまた厄介な話だが、状況証拠で言えば完全に黒だろう。

「その後の事は覚えているか？」

「大淀さんが部屋に入って来て、お姉ちゃん達を呼んで、お姉ちゃん達に入渠させて貰って、部屋で震えていました・・・憲兵の方に質問された時も怖くて、何も話せなくて・・・お姉ちゃん達が代わりに答えてくれました、はい。」

「つまり、白露達もこの事は知っているのか？」

「そ、そうです、はい。だから私を助けて貰えるように頑張ろうっ



て・・・」

なるほど、それで功績を得る為に焦っていた訳か。まだ話す覚悟が無いと言っていたのも無理はない。提督殺しを許される程の恩赦なんて並大抵のものでは無いだろう。個人的には前任者が殺されたのは自業自得だと思うが・・・

「はあ・・・大淀。」

「は、はい！なんでしょうか？」

「隠していたことはこれで間違いないか？」

「はい・・・そうです・・・」

大淀も項垂れてこの世の終わりのような雰囲気だ。この様子なら嘘をついていないようだな。

「分かった、もう少し詳しく聞かせてくれ。」

今夜は長くなりそうだ。

### 36話

そこから改めて大淀から事件当時の話を聞く。その日村雨を旗艦として春雨・五月雨・涼風の4人で遠征に出撃したが、運悪く敵艦隊と遭遇。即座に資源を捨てて離脱する許可を求めたが許可されず、資源を満載したままの撤退を強いられた。当然速度が出ないため敵艦隊に追い付かれ、激しい攻撃を受けることになり、春雨以外は轟沈してしまい、春雨だけは轟沈寸前の状態で鎮守府へと帰還した。そのまま春雨は叱責を受けるために呼び出されたそうだ。大淀が会議室で報告書等をまとめていると、突如砲声が鳴り響き建物の一部が崩れ落ちる音がした為に、慌てて執務室へと駆け込んだ。

執務室の照明は壊れており、廊下からの明かりを頼りに見た光景は、蹲つて震える春雨と破壊された執務室、そして飛び散った大森提督だった。上半身は損傷が酷く、足が落ちていなければ本人確認もままならないような状態だった。大淀も酷く混乱していて、春雨から事情を聞こうと声をかけてみたが、不明瞭な発言を繰り返すばかりで会話にならなかったそうだ。一先ず落ち着かせないと会話にならない話だったので、白露型の姉妹を呼び出して春雨を入渠施設へと運ばせた。提督不在の為無断で高速修復材も使ったそうだ。その後長門と明石と相談してこの話は隠し、原因不明の事件として大本営に連絡したとのことだ。

「はあ・・・なるほどなあ・・・それにしても良く大本営の連中から隠し通せたな。あいつらも当然艦娘を疑っていたはずだから、知っていることを全て話せと命令してきたはずだが？」

「勘違いされている方も多いですが、私達艦娘への命令権を持っているのは、所属する鎮守府の提督だけです。普段なら大本営の方々の命令に逆らうことはしません、強制力があるわけでは無いのです。なので秘密を守ることが出来ました。」

「それで情報が得られずに大本営は諦めた訳か、あいつらからしたら艦娘が命令に逆らうなんて思っていないだろうからな。」

あの連中にとって艦娘達は都合の良い兵器だ。まさか自分が嘘を

つかれているとは思わないだろう。艦娘が嘘をついていると主張する時は、自分に都合が悪い証言をしている時くらいだろう。

「話はだいたい分かった。だが一つ疑問なのだが・・・春雨、なんでこの事を私に伝えようと思ったのだ？ 姉妹達はお前を助ける為に功績を上げたかったようだが、まさか恩赦が得られる程の功績を上げたとは思って無いだろう？」

「そ、それは・・・もうお姉ちゃん達に無理をして欲しくないんです・・・もう・・・姉妹が沈むのを見るのは嫌なんです・・・今日白露お姉ちゃんは小破で済みました、でも私を庇った天龍さんは中破です。こうやって足を引つ張って誰かが傷つくのはもう嫌なんです！ いつ沈んでしまうのかって怖いんです!!」

相変わらず艦娘達は姉妹思いな奴等だ。姉妹の恩赦を求める為に頑張る姉達と、そんな姉達に無理をさせない為に罪を認めたと・・・「甘い考えだな。」

「え？」

「それでお前が解体されれば、姉妹が楽になるとでも思っているのか？ 馬鹿を言うな!! 守ろうとした妹が自ら解体されに行ったなど、どれだけ心を抉られると思う!?! それでも戦争中なんだ、お前の姉妹はそんなボロボロの状態でも、戦闘に行かされるぞ？ 生きる気力を削がれた奴が、生き残れるほど甘い場所ではないぞ!!」

春雨は自分の言葉で嫌な未来を想像してしまったようで、膝から崩れ落ち頭を抱えて震えている。しかしそんな甘ったれた奴にこれ以上かける言葉は無い。

「て、提督！ 落ち着いて下さい。」

慌てて大淀が止めに入ってくる。半泣きの大淀を見て一旦深呼吸をする。ふう・・・つい熱くなつて怒鳴ってしまった・・・自分としては犯人が自ら罪を告白してきたのだ。都合が良いと喜ぶべきものなのに、ここまで感情的になってしまふとはな。しかしせっかやくやる気になった白露型姉妹達を、絶望させるのは惜しいな。だが彼女達との話は避けて通れないだろう。

「大淀、白露型姉妹を呼んでくれ。すぐにだ。」

「は、はい！少しお待ち下さい。」  
さて、どうやって話をするべきか・・・今後に響かずに、落としどころを決められないだろうか？

### 37話

大淀に白露型姉妹を呼び出して貰ったら、すぐにドタバタと足音が聞こえたかと思うと、失礼します！と叫びながら会議室に白露型姉妹が入って来た。

「春雨!? どうしてお姉ちゃんに黙ってこんな事をしたの!? 皆で頑張るって決めたのに!？」

「お姉ちゃん・・・ごめんなさい・・・」

「ごめんなさいじゃなくて理由を聞いてるっばい! ちゃんと答えて欲しいっばい!？」

「二人とも落ち着いて、提督の前だよ。」

「この中では時雨が一番落ち着いているかな? 時雨も冷や汗をかいているが、他の姉妹よりは話がしやすいか。」

「白露・夕立、後で時間はとってやるから今は大人しくしている。時雨、現在の状況がお前達にとって危険な状態なのは分かるか?」

「・・・もちろんだよ。実行犯の春雨だけじゃなくて、秘密にした僕達も罰を受けるよね?」

その言葉に春雨が反応して、絶望的な表情をしている。これ以上姉妹に迷惑をかけたくないと思ってやった行動が、姉妹を窮地に追いやってしまったことに気が付いたからだ。

「そ、そんな!? やったのは私です! 罰を受けるなら私だけを!」

「私はともかく大本営の奴等は、艦娘達が罪人を庇って嘘をついた、我々大本営に反旗を翻したとか言って騒ぐのは間違いないだろう。鎮守府ごと処分される可能性も否定は出来ん。」

愕然とする春雨とは対照的に、時雨は真っ直ぐこちらを見据えてくる。

「今提督は私はともかくって言ったよね? つまり提督には何か僕達を助けてくれる余地があるのかい?」

「まだ情報が足りないから判断が下せないだけだ。だからお前達を呼んで話を聞こうと思ったのだ。とりあえず事件当時の話をしてくれ。」

「分かったよ、嘘偽りなく話すよ。」

そこから聞いた内容は大淀の話とあまり差は無かった。大淀に呼ばれて駆け付けた白露型姉妹だが、部屋の惨状に衝撃を受けたが、倒れ込んでいる春雨に駆け寄った。春雨は不明瞭な言葉をブツブツと呟いていた。その後大淀の指示で入渠させて部屋に連れ帰った。憲兵達には提督に乱暴されたショックで話が出来ないからと言って、白露達が代わりに対応したらしい。しばらくすると春雨も落ち着いて会話も出来るようになったが、まだ悪夢にうなされていているらしい。それでも新しく着任した提督が成果を求める人だったから、姉妹で協力して戦果を上げて、春雨の恩赦を勝ち取ろうとしていたとのことだ。「話はだいたい分かった、それにしてもよくそんな状態で出撃させようと思ったものだ……」

「最初は僕達だけでやるつもりだったけど、春雨がそれだけは嫌だつて泣き付くから……それでも春雨は明石さんの検査では問題無かつたし、顔色も良くなつたんだ。最初はもう本当に青白くて心配したよ……」

「ちよつと待て！今なんつて言った!？」

「えっ？えつと、春雨の顔色が悪かつた話がどうしたんだい？」

「他に変わったことは無かつたか？」

「変わったことつて言われても……あの時の春雨はボロボロで、いつも通りのことのほうが少ないよ……」

「髪もピンクが薄くなつてて元気が無かつたっぽい……」

これは顔色が青白く髪の色が薄くなる、つまり白に近づいているつてことは、深海棲艦に近づいているつてことだろう。しかし今の春雨を見てもそんな感じは無い。確かに顔色は少し悪いが、あくまで体調が悪い人程度のものだ。髪の色に関しては全く変わっていない……と思う。これが事実なら軽度の深海棲艦化を引き起こしたにも関わらず、元の状態まで戻ったことになる。兄が探し求めて手がかりすら掴めなかつた、深海棲艦化した艦娘を元に戻す方法。その手がかりを春雨が持っているかも知れないと言うことか!？」

「もう一度聞くんが、明石の検査では本当に何も悪い所は無かったんだな？」

「もちろんだよ。そうでなければ流石に戦闘には連れて行けないよ。」

いや、この精神状態で連れていくのも大概ののだが、そこはもう何も言うまい。実際に戦果は上げているのだ。

「・・・分かった。他に何か言っておきたいことはあるか？」

「僕達は妹を助ける為ならどんな命令にも従うよ。過酷な戦場でもきつと戦果を上げて見せます。だからどうか春雨を助けて下さい。」

「私からもお願いします。もうこれ以上妹達を失いたくないんです！」

「提督さん！夕立ももつともつと頑張つて、いっぱいいっぱい敵を倒すっぽい！だから助けて欲しいっぽい！」

「お姉ちゃん・・・」

妹の為に覚悟を決めて頭を下げる白露型姉妹。ここまで来たら覚悟を決めるしかないか・・・大本営の連中に深海棲艦化の話をして、相手にされないだろうし、艦娘達が大本営に対して嘘の報告をしていたのは、鎮守府を解体する良い口実になってしまう。かと言って知っている者を解体して証拠隠滅しようとするれば、大淀・長門・明石も解体することになるので、鎮守府の機能が麻痺するのは確実だ。それに深海棲艦化について調べるならば、春雨の希少価値は計り知れない。その代わりこの件が漏れたならば、一発で全てが終わる。それほど危ない賭けをせざるを得ない状態だ。誰かの庇護下に入るのも手だが、流石に生殺与奪の権を預けられるほど信用出来る者はいない。

「この件については箝口令を敷く。この件に関して口にすることを禁ずる。大淀、長門と明石にも伝えてくれ。春雨に関しては今後とも要観察だ。定期的に明石に検査して貰えるようにする。検査で問題なければ出撃もさせる。あまり長く休ませても疑われるかも知れないからな。」

「と言うことは助けてくれるのかい？」

時雨が恐る恐るといった感じで聞いてくる。だが最後にまだやらなければならぬ事がある。

「助けると言うよりは共犯者になったってほうが正しいか・・・私はその覚悟を決めた。だから春雨、お前も覚悟を決めろ。」

「覚悟を決めろと言われても・・・どうすれば良いんですか？もう私は皆の足を引つ張りたく無いんです！」

春雨が悲痛な叫びをあげるが、はつきり言っつてそんなものは甘えだ。

「足を引つ張りたく無いなら、必死に訓練するしかないだろう？強くなるしか道は無い。はつきりと言っつておくが、もし春雨が居なくてもこいつらには戦場に出て貰う。その時にお前が強くなっつていれば、こいつらを助けられるかも知れない。だが蹲つて動かなければ、そんなことは絶対にあり得ない話だ。」

「・・・努力はしました!!それでも・・・皆には追い付けないし・・・村雨姉さんは私を庇つて沈んだんです!!」

普段大人しい春雨が心の叫びを発するが、こいつは現実に立ち向かう覚悟が足りない。だが叫べるくらいの気概は残っつているようだ。

「努力すれば結果が伴うなんて現実はそんなに甘く無い。努力をしても覆せないことなんていくらでもある。だからと言っつて努力を怠れば、もつと多くのものを失うだろう。これは戦争だ、絶対に勝てるなんて保証は無い。ならばより勝率を上げる為に出来ることをするしかない。もちろんそれは戦闘だけではない、警戒も遠征も工房や食堂で働く後方支援の者達も、全てが必要なのだ。そこに甘えが許される余地は無い。だから苦しくても辛くても歩みを止めるな！お前達がそこまで努力したならば後は私の責任だ、私が勝つ為に全力を尽くすことを誓おう。だから春雨、覚悟を決めろ。」

春雨は涙を流しながらもこつちの目を真つ直ぐ見ている。ようやく覚悟を決めたか？

「分かり・・・ました。私も戦います。もう姉妹を沈めないで済むように、もつともつと強くなります、はい。」

なんだか最後の最後がしまらない感じだが、まあ及第点だな。これで晴れて自分も共犯者だな。

「ふー、良かったあ！これでおとがめ無しかあ。お姉ちゃん安心し



ちやったあ！」

「すごく心配だったけどなんとかなるっばい。」

「これで安心して眠れるよ。」

おとがめ無しか・・・いくら秘匿するからと言って、一応犯人を匿っていた訳だし、全く罰を与えないのも良くないか・・・

「残念ながら罰は与えるぞ？秘匿する必要があるから、あまり派手なものは出来ないかな？一応提督殺しの犯人を匿っていたのだ、それくらいは受け入れろ。」

喜びムードが一瞬にして静まり返る。まあ、あまり浮かれたままにするのも不味いしちようど良い。

「え、えつとお・・・罰って何かな？お姉ちゃんちよつと怖くなってきたんですが・・・」

「白露型姉妹と大淀・長門・明石は罰として明日は営倉の掃除をしてもらう。嫌な仕事だろうが、本来なら解体されてもおおかしくないんだ。諦めて受け入れろ。」

そうして複雑な表情をする白露型姉妹と大淀に今日はもう休むように伝えて、自分も応接室へと休みに行った。

### 38話 (3日目)

白露型姉妹との話が終わった後は、すぐに応接室のソファで眠りについた。幸いな事に「夜戦の時間だよ!!」と騒ぐ者はおらず、静かに眠る事が出来た。寝起きで少しぼーっとした頭で今日の予定について考える。とりあえず地下通路の調査と面談は進めておきたいのと、演習も開始したいところだ。昨日の戦闘では重巡洋艦が使えず、選択肢が狭められたので、早いうちに実戦へ参加させられるレベルにしておきたい。後は執務室の修復と前任者の私室の改装工事もおきたい。昨夜提督殺害の犯人は判明したので、早めに証拠隠滅：ではなくて執務室の機能を取り戻す必要がある。それと荷物を全て運び出した私室だが、あまりにも広すぎるので、分割して来客用の部屋を作ろうかと検討している。士官学校時代に聞いた話だが、提督候補生を各鎮守府に行かせて実地訓練をさせる話があったはずだ。艦娘寮にも空き部屋はあるし、そもそもこんな問題だらけの場所に人が来るのか疑問ではあるが・・・自分同様に上の連中から嫌われている奴に心当たりがあるので、一応準備だけはしておきたい。部屋の改装なら妖精さんに頼むべきなのだが・・・考えてみるとこの鎮守府に来てから妖精さんを見ていない・・・艦娘達が出撃しているので、必ず存在しているはずなのだが・・・これも調べる必要があるそうだ。

コンコンコン

「提督、おはようございます。もうすぐ朝食の準備が整います。」

「分かった、準備を終えたら行くので、先に食堂へ行ってくれ。」

「はい、お待ちしております。」

あまり大淀を待たせても悪いから、さっさと準備を終わらせるか。

食堂に向かう途中で何人か艦娘達を見かけた、きちんと敬礼をしてくるので返礼をしていく。初日のような固さが抜けた者が多く、少しずつ新しい環境に慣れてきたようだ。軍としてのけじめは必要だが、過度な緊張は精神的に悪影響だ。戦場で悪影響が出そうなものは、極力排除しておきたいものだ。

「あ、提督じゃん。おはようございます。」

「あら、提督、ごきげんよう。」

声をかけてきたのは鈴谷と熊野だった。鈴谷はなんだか気まずい雰囲気、熊野は普通な感じだな。

「ああ、おはよう。」

「あー、そのー、昨日は変な誤解してごめんさい。」

突然鈴谷が頭を下げてきたが、昨日は色々大変だったので、どの事かいまいち思い出せない。たしか鈴谷とは青葉を呼び出して貰った時に話をしたが……

「よくわからんが、何を誤解していたのだ？」

そう尋ねると鈴谷は顔を赤くして挙動不審になってしまった。

「そ、それは……その……」

なんだか最後の方はゴニョゴニョ言っていて聞き取れなかったが、まあそこまで気にする事でもないだろう。熊野が若干引いた目で鈴谷を見ているが、とりあえず放っておこう。

「まあいい気にするな。そんな事より今日から二人には演習に出て貰う。実戦で戦えるように鍛えるつもりだから、覚悟しておけよ？」

「あ、うん、鈴谷頑張るから。」

「ふふん、私のえれがんとそころを見せつけてやりますわ!!」

鈴谷はともかく熊野は気合い十分といったところか。まあ、どちらにせよ戦力になるまで鍛え上げるだけなのだが、やはり気合いがあるほうが上達も早いだろう。そんな事を考えながら食堂に入ると、艦娘達の多くは食事を始めていた。慌てて口の中の物を飲み込んで敬礼しようとしてくるのを手で制して間宮のもとへ向かう。

「提督、おはようございます。昨夜は良く眠れましたか？」

「おはよう、昨日は夜戦もなかったし気持ち良く眠れたよ。」

「それは良かったです。今日の朝食は和食ですよ。」

そう言って差し出されたのはご飯に味噌汁と漬物、そしてメインはなんと焼き魚だった。深海棲艦発生により漁業は大打撃を受けている。一時期は魚は川魚しか流通していなくて、物凄い高級品になっていた。鎮守府近辺では近海で漁をする船も出始めて少しずつ市場に

出回っているが、まだまだ高級品と考えて良い。

「間宮、この魚はどうやって仕入れたんだ？」

「早朝に配送の真柴さんから届けて頂いたものです。漁業関係者の方からは是非鎮守府の方々に食べて欲しいと相談されたそうで、格安で仕入れる事が出来ました。」

一瞬賄賂の事が頭に浮かんだが、一応正規のルートで仕入れているので問題はないか。漁業関係者だって商売をしているのだから、商品の売り込みくらい珍しいものでもないだろう。

「それにこの地域はかなり安全性の高い瀬戸内海に繋がっていますので、漁業の復興も他の地域より早いのですよ。だからそこまで高級品でもないんですよ。」

なるほど、言われてみれば瀬戸内海は呉鎮守府の傘下でしっかり守られていて、日本海側に繋がる関門海峡はこの北九州鎮守府が押さえられている。確かにかなり安全性の確保が出来ているだろう。

「そう言うことならば久しぶりの魚を堪能させて貰おう。」

美味しい朝食は1日の活力を与えてくれる。今日待っている激務に立ち向かう勇気を貰った。

### 39話（面談 一航戦）

朝食時に大淀に声をかけて、朝礼をするので広場に集合させるように伝えて、今日も朝礼を始める。3日目ともなると多少は慣れるようで、自分も艦娘達も過度な緊張がなくなっている気がする。

「総員、提督に敬礼!!」

「おはよう諸君。今日は演習を始めようと思う。今日の演習は各自の性能試験をする予定だ。航行速度や砲撃精度などを測定し、今後の演習方針を決めるためのものだと思う。この演習は長門に監督を任せる。また面談の続きも行うので、呼ばれた者は会議室に来るように。次に哨戒任務だが天龍を旗艦として第6駆逐隊に任せるので、出撃準備を整えたら出てくれ。何か質問がある者はいるか?・・・いないようならばこれで解散とする。大淀・長門・明石はこの後会議室に来るように。では解散!」

「提督に敬礼!!」

敬礼に返礼して広場を後にする。とりあえずは演習の内容を細かく決めておくか。

会議室に大淀・長門・明石を集めて打ち合わせを始める。

「大淀はいつも通り秘書艦としてサポートしてもらう。昨日の調査の続きや面談等も行うので、そのサポートも任せる。」

「はい、お任せ下さい。」

「長門には演習の監督をしてもらい、明石には演習に必要な機材の準備をしてもらう。演習の内容は朝礼でも伝えたが、各自の性能試験をしてもらう。航行速度・障害物を避けながらの航行・砲撃精度・雷撃精度・防空射撃をしてもらう。空母達には航行系を終わらせたなら防空射撃の補助に回して欲しい。それと午前中に空母達の面談をする予定なので上手く交代で回すように。大丈夫か?」

長門は少し考えこんでいたが、顔を上げた。

「ふむ、それなりに時間がかかりそうな内容だ。それならば何人かに監督を手伝って貰い、何種目か同時に進行したほうが良さそうだ。そ

れで構わないか？」

「ああ、そうしてくれ。人選は長門に任せるが、長門も含めて監督をする者も性能試験が出来るようにしてくれ。」

「承知した。」

「明石の方は大丈夫か？」

しかし明石はちよつと苦い顔をしていた。

「えつとですね・・・前の提督の時に演習は資材の無駄とかで滅多にやらなかったもので・・・機材はあるのですが、メンテナンスに多少時間がかかるかもです。なので夕張さんを補佐にして貰えませんか？」  
「分かった。では夕張はそちらの作業に専念させてくれ。それでは長門と明石は演習の準備に取り掛かってくれ。あと赤城と加賀は面談をしたいので、大淀から連絡して欲しい。」

「はい！」

コンコンコン

「失礼します。」

「入れ。」

数分後赤城と加賀が会議室にやって来た。既に何人かの艦娘と面談をしているからか、二人からは怯えなどを感じない。これは良い傾向だな。二人に椅子を勧めて面談が出来るようにする。

「では改めて、新しくこの鎮守府に着任した葛原だ。宜しく頼む。」

「一航戦の赤城です。こちらこそ宜しく願います。」

「同じく一航戦の加賀です。宜しく願います。」

赤城は少し笑顔で挨拶してきて、わりと好意的なようだ。加賀は凜としているが冷たい印象は受けず、堂々とした佇まいは頼もしさを感じる。

「まず昨日の戦鬪では良くやってくれた。敵空母を完全に抑え込んだ上で、敵艦隊に多大なダメージを与えてくれたお陰で、こちらの損害は軽微なものだった。」

「ありがとうございます。ですが相手の空母は一隻でしたので、当然の事をしたままで。」

「それはそうだが、当たり前前の事をきちんと出来るのは大事な事だ。特にこの鎮守府では前任者がやりたい放題していたから、いきなりの実戦で不安だったからな。」

やはりこの話には思うところがあるのか、赤城は若干暗い顔をしたが、すぐに顔を上げて真っ直ぐ見据えてくる。

「確かに環境は急に変わりましたが、良い方に変わっていますので。駆逐艦の娘達を盾にして使い潰すのは辛かったです。ですから水雷戦隊の皆にかけて下さった『空母の盾ではなく戦力として呼んだ』という言葉は、私達も凄く嬉しかったです。」

「なるほど。しかし駆逐艦を盾として使わないからには、安易に敵を近付かせないような立ち回りや、敵の砲撃の避け方を覚えて貰う必要がある。そこはしっかりと訓練してもらおうからな?」

「はい!一航戦の誇りにかけて必ず会得してみせます!」

自信に満ちた良い表情だ。これなら今後も期待出来そうだな。

「加賀は何か伝えておきたいことはあるか?」

「いえ、特にはないです。艦隊指揮は的確でしたし、私達の待遇を改善して頂きました。無理矢理夜の相手をさせられたと言う話も聞きませぬ。提督として理想的だと思いますので、今後も貴方の元で戦いたいです。」

「ほう、かなりの好評価だな。ここの艦娘達は少なからず提督という存在に悪感情を持っていると考えていたのだが・・・」

「そういう娘も多いと思いますが、私は私の目で見て判断します。前の提督は貴方の評価には関係ありません。」

ほう、これはかなり冷静に判断しているようだな。あれだけ悪環境に居た上で、ここまで割り切るのはなかなか難しいものだろう。

「そうですよ、提督は美味しいご飯を提供して下さいますから、悪い人じゃないです!」

やはり赤城は食いしん坊なのか・・・いや、多少食費が嵩む程度なら、きっちり戦果を上げるのであれば気にする事でもないな。

「赤城さん・・・流石にご飯だけで判断するのは軽率ですよ。」

「加賀さんだって私に負けないくらい食べてたじゃないですか!」

「ですが私はそれだけで良い提督と判断したりはしていません。」

「まあそのくらいにしておけ。兵士の食事を確保するのは上官の務めだ。その代わりきちんと食べて調子を整えておけよ?」

「はい、一航戦の誇りにかけて!」

これは頼もしい奴らだ。今後の活躍に期待しておこう。

「他に何か言っておきたい事はあるか?」

そう聞くと、赤城がまた暗い表情をして語り始める。

「では最後に・・・五航戦の娘達・・・特に瑞鶴さんは前任者に酷い扱いを受けていました。なので彼女達が立ち直れるように配慮して頂きたいです。それまでは私達が戦場を支えますので。」

「長門からも聞いたが、酷い状態なのか?」

「はい・・・瑞鶴さんはかなり反抗的でしたので、前の提督に目をつけられてしまつて・・・」

「分かった。配慮するように気をつけよう。ではこれで面談は終わりにする。今後の活躍に期待している。以上だ。」

「はい、一航戦の誇りにかけて!」

二人揃つて頼もしい限りだ、安心して戦場に送れる空母が居る事は、作戦立案の大きな助けになることだろう。



## 40話（面談 五航戦）

一航戦との面談後いつものように大淀が来たので、演習の様子を確認した。演習用の標的を準備する間に、航行系の演習を始めているらしい。航行速度に関してはやはり駆逐艦の独壇場で、特に島風は飛び抜けた性能を持っているようだ。最高速度も勿論だが、障害物を置いた状態でも難なく走破したらしい。次いで雪風と夕立の成績が良かったとの事だ。逆に駆逐艦の中では吹雪と曙の成績はあまり良くなかったので要注意だろう。引き続き演習を続けるように伝えて、五航戦の二人を面談の為に呼び出した。

コンコンコン

「失礼します、五航戦の翔鶴と瑞鶴です。」

「入れ。」

五航戦の二人が会議室に入って来たが、一目見ただけでかなり酷い精神状態だと分かる。あらかじめ長門や赤城から聞いていたが、確かにこんな状態では戦闘に参加させるのは無理だろう。翔鶴は全てを諦めたような悲しい目をしており、瑞鶴は酷く怯えているような印象だ。とりあえず二人を席に座らせて話が出来る場を整える。

「では改めて、新しくこの鎮守府に着任した葛原だ。宜しく頼む。」

「正規空母五航戦の翔鶴と瑞鶴です。」

静かに翔鶴が答えたが、瑞鶴は震えながら目を合わせようとしな  
い。

「・・・ふむ、一応長門と赤城から軽く話を聞いている。二人とも精神的に不安定だから、戦場には出られないと聞いた。」

「・・・そう・・・ですね。正直に言っ  
て今出撃しても足手まといに  
かならないと思います。」

「分かった、こちらが大丈夫だと判断するまでは出撃させるつもりは  
無いから安心して欲しい。」

そう伝えると翔鶴は一瞬顔をしかめたが、すぐに元の表情に戻つた。瑞鶴は俯いていた顔を上げて絶望したような表情をしている。

これは何かしらトラウマに触れてしまったか？

「お氣遣い頂きありがとうございます。それではお休みの間に私達は何をすれば宜しいのでしょうか？」

「体が鈍らないように演習はして貰うつもりだ。それ以外となると・・・そうだな、鎮守府の中を見て回って欲しい。」

「鎮守府の中をですか？」

意外な話だったのか、翔鶴はきよんとした顔で尋ねてくる。

「ああ、そうだ。お前達二人は前任者によつてかなりのトラウマを植え付けられたと聞いている。だが今の鎮守府の環境は私が着任したことで大きく変わっている。それを私の口から伝えても、お前達が信用するとは思えない。だから自分の目で確かめろ。それがお前達が今やるべき事だと思う。」

「・・・分かりました。それが提督の命令ならば従います。」

なんだか全く手応えを感じないが、一先ず翔鶴については一歩前進だろう。問題なのは震えたままの瑞鶴だ。

「瑞鶴は今の話はちゃんと聞いていたか？」

「ツ!!だ、大丈夫です。ちゃんと聞いてます。」

「では私は何をしたいと伝えた？」

そう問いかけると顔を真っ青にして答えに詰まってしまう。やはりまとも聞いていないかつたようだ・・・

「え、えっと・・・出撃はしないと・・・」

「それで？」

「あ、いや、その・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・罰なら私がちゃんと受けるから！他の娘や翔鶴姉には手を出さないで下さい!!」

なるほど・・・強気な瑞鶴も龍田のように姉妹艦や他の艦娘に罰を与える事で、心を折られてしまったのか・・・自分のせいで仲間が罰を与えられるのが、艦娘達には一番辛いようだ。前任者は戦艦や空母をそれなりに重用していたはずだが、そういう嫌なやり方で従えていたのか・・・

「落ち着け、この程度なら口頭での注意で済む話だ。だから深呼吸を

しろ。」

「はあはあ・・・罰はないの?」

「ああ、だから息を整えて落ち着いて話を聞け。」

そこから瑞鶴の呼吸が整うまでにしばらくかかった。これはそうとう厄介な状態だな・・・

「ごめんなさい・・・少し落ち着いたわ。」

「それでは先ほど言った話だが、出撃が許可されるまでの間に、体が鈍らないように演習に参加すること。そして鎮守府を見て回って欲しい。」

「鎮守府を見て回る?」

「そうだ。この鎮守府は私が着任したことで、大きく変わっている。それをきちんと自分の目で確かめる。それがまず始めにやるべき事だ。前任者の時代はもう終わった。」

「もう、罰はないのかな?」

不安そうに見つめてくる瑞鶴だが、ここで罰は無いなどと優しい嘘は絶対に無い。

「悪いことをすれば当然罰を与える。しかしそれは悪いことをした本人が受けるべきだし、理不尽な内容にするつもりは無い。」

「そっか・・・」

「そうだ。規律を守るには罰が必要な時もある。しかし組織に必要なのは信賞必罰だ。つまり活躍したものにはきちんと報いることも重要だと考えている。実際に夕立から頑張ったご褒美に甘いものが欲しいと要望があつてな、昨日の戦闘に参加したものには羊羹を与えた。だから何か要望があるなら言って欲しい。その要望に見合うだけの成果をあげたなら、出来る限り叶えてやりたい。それがお前達の士気を高めることに繋がるからな。」

そう伝えると瑞鶴は俯いて何かを考えている様子だ。

「要望・・・なら私はもう無理矢理犯されるのは嫌です・・・」

「そこに関しては元々艦娘達に手を出すつもりは無いから安心しろ。」

「嘘よ!!提督だって男だもの!!きつと我慢出来ずに手を出すはずよ!!」

「まあ、口で言っても仕方ないだろうが、そもそも私はお前達艦娘をそこまで信用していない。」

「信用していないの……。」

瑞鶴の表情がまた絶望に染まる。

「いや、この言い方は誤解を招くな。正確に言うなら女性として、つまり体の関係を持つと思うほど信用はしていないと言うことだ。仕事に関してならそれなりに信用している者もいる。」

「えっと……犯すのに信用がいるの？」

「まず規律を守る為に艦娘を犯す事はしないのだが……体の関係を持つことは、弱点を晒すことになる。いくら艦娘が人を傷つけられない存在だとしても、そんな真似は私には出来ない。」

瑞鶴はよく意味が分からないといった感じの表情だが、とりあえず犯される心配が無いことだけ伝われば良いか。

「長くなってしまったが、そういうところも含めて今後は鎮守府の中を見て回って欲しい。私の下で戦えるかはその後判断しろ。」

「うん、分かったわ。」

「翔鶴は他に言いたいことはあるか？」

「いえ、大丈夫です。今後も瑞鶴共々宜しくお願いします。」

そう言っ頭を下げる翔鶴は、少し憑き物が落ちたような感じだ。これならば戦線復帰も遠い話ではないだろう。

「こちらこそ宜しく頼む。では面談は以上だ、演習に戻ってくれ。」

五航戦姉妹を見送ると、ついついため息が出ってしまった。分かってはいたが、やはりキツイ面談になってしまったな……

#### 41話（面談 鳳翔）

さて一航戦と五航戦の面談が終わったので、残る空母は唯一の軽空母鳳翔だけか。鳳翔に関しては何と情報がない。重巡洋艦が戦艦の出来損ないなんて言われていたように、軽空母も空母の出来損ないと言われていたのではないだろうか？しかしそれなりに練度が高めなのも気になるところだ。まあ、ここで考えていても仕方がない。大淀に呼び出して貰って面談をするか。

コンコンコン

「提督、鳳翔です。」

「入れ。」

鳳翔は丁寧な所作で入室し、席を勧めると静かに腰を下ろした。表情も穏やかな感じで、はつきり言って何を考えているのか全く分からない。

「では改めて、新しくこの鎮守府に着任した葛原だ。宜しく頼む。」

「はい、航空母艦鳳翔です。不束者ですが、よろしくお願いいたします。」

丁寧にお辞儀する姿からは余裕を感じる。これならば回りくどいことはせずに、素直に質問しても問題ないか？

「さっそくだが前任者の時代では、こういった扱いを受けていたのだ？」

「そう・・・ですね。やはり私は旧型の空母ですので、戦力としては少し物足りないです。なのであまり戦闘には参加させては貰えませんでした。ですので艦娘寮で皆さんのお世話をすることが多かったでしょうか。」

やはり戦闘には参加していなかったか。しかし軽空母は通常の空母よりも燃費がかなり良いし、水上機よりも通常の艦載機のほうが、行動範囲も広く索敵能力に優れるので、哨戒任務にはかなりの適性があると思うのだが。

「戦闘をほとんどしていないわりには、練度が高めなのはこういう事

なんだ？」

「それは在籍年数が長いですから。私はこの鎮守府が出来たばかりの頃、なので前の方のさらに前の提督の頃から在籍しております。」

淡々と語る鳳翔だが、前任者のさらに前の時代から生きていたのか。一応着任前に見た資料で確認したはずだが、前任者の汚職の印象が強くて、あまり記憶に残っていなかった。

「ほう、そこまで昔の話は他の艦娘からは聞いたことが無いな。」

「その時代から生き残っているのは私だけですから・・・皆さん私を置いて沈んでしまいましたので・・・」

少し俯きながら語るが、確かにあの悪環境なら納得だ。むしろ鳳翔が生き残っている事が奇跡だろう。

「ちなみにその最初の提督はどんな方だった？」

「そうですね・・・良くも悪くも普通の方でしょうか？悪事を働くような方ではありませんでしたが、特別な功績を上げた事はありません。しかし艦娘からは好かれていましたよ。ですが6年前の深海棲艦の襲撃で亡くなられて・・・その時にも多くの仲間が沈んでしまいました。その後鎮守府復興の為に大森提督が着任されました。」

なるほど、この鎮守府は一度襲撃で壊滅寸前までいってしまったのか・・・

「6年前にそこまでの被害を受けていたのか、そう考えるとこの街の復興速度はかなり早かったのだな。」

「いえ、当時の襲撃では街はそこまで被害を受けていませんので。深海棲艦はまず鎮守府を狙います。なので鎮守府が攻撃を受けている時に、呉鎮守府からの応援が到着して撃退に成功しました。ですが失ったものは多かったです・・・」

それで呉鎮守府の傘下の大森提督が着任した訳か・・・それにしても提督が殺されたタイミングで応援が到着するのは、少し怪しい話だと思っるのは疑い過ぎだろうか？

「そこからの大森提督の時代は苦しく悲しい時代でした・・・戦争で沈むのは悲しいことですが、私達艦娘は軍艦ですので仕方ないことだと思いません。しかし虐待やお金儲けの道具として使われるのはとても

傷つく事ですし、傷ついた娘達を見るのはとても辛かったです・・・」  
流石に過去を語るのは辛いのか、淡々と語っていた鳳翔だが、感情を抑えきれなかったようで、少し涙を流している。少し無遠慮に踏み込み過ぎてしまったか・・・

「辛い話をさせてしまったか・・・今後は私が艦娘達の待遇を改善することは保証する。戦争である以上犠牲が出る事は避けられないだろうが、それ以外の事から守れるように努力しよう。」

「ありがとうございます。少しずつですが、この鎮守府にも活気が出てきましたので、私も少し嬉しいです。今後とも宜しくお願いいたします。」

丁寧な所作で頭を下げる姿は美しさを感じてしまう。少しは心の余裕を取り戻して貰えたかな？

「それでは改めて今後の話がしたい。現状では鳳翔は唯一の軽空母だ。先程戦力としては物足りないと言っていたが、戦争は正面からの戦いが全てではない。私としては哨戒任務で活躍して貰いたいと思っているがどうだろうか？」

「ええ、ご命令とあれば喜んで。しかし私の航行速度はそれほど速くありませんので・・・そこはご注意ください。」

「了解した。深入りさせないように気を付けよう。では他に要望はあるか？これは軍務に限った話ではない。例えば夕立はご褒美に甘いものが欲しいと言っていたし、暁はシャンプルーハットが必要だと言っていたな。」

鳳翔はその例えに暖かな微笑みを浮かべると、少し考え込んでから顔を上げて、真っ直ぐ自分の目を見てくる。

「それでは居酒屋の経営を許可して頂きたいです。もちろん軍務の合間の時間で構いませんので。」

「居酒屋だと？」

「はい、最初の提督の時代にやっていた事なのです。艦娘の皆さんが安心して楽しめる場所を提供するのが、なによりの喜びでした。簡単なお料理とお酒が楽しめる場所で、辛い戦いを乗り越える力になればとの思いから始めた事です。もちろん提督もよく利用されて、艦娘達

との絆を深めておりました。」

「なるほど、戦争で溜まったストレスを軽減する為に有効かもしれない。羽目を外し過ぎなければ、適度な飲酒も悪くはない。ただそうになるとそれなりの設備と場所が必要だから、準備には時間がかかるか・・・」

そう言う鳳翔はかなり嬉しそうに微笑む、それだけ鳳翔にとって大事な場所だったのだろう。

「ありがとうございます。もちろんすぐには言いません。これは趣味のお話ですから、軍務に影響を与えてしまうのは心苦しいですから。」

「ふっ、私が良い案だと判断したのだ。それをズルズルと先延ばしにするほど、私は怠惰ではないつもりだぞ?」

「それは頼もしいお言葉です。では期待してお待ちしております。」

「では面談は以上だ。演習も頑張ってください。」

「はい、お任せ下さい。」

鳳翔は朗らかに微笑んで退室していった。これならば運用にも支障は無いだろう。それにしても居酒屋か。これは意外な要望が出たものだ。

鳳翔が退室した後すぐに大淀が入って来たが、なんだか深刻そうな雰囲気だ。

「何があった?」

「呉鎮守府の久藤提督からお電話です。」

ついに厄介な相手が動き始めたか・・・



## 42話（対話 久藤提督）

心配そうな大淀から電話を受け取り、一呼吸置く。これから魔物と対峙するのだ、それ相応の覚悟が必要だ。大淀は気を効かせて録音機器を持って来たが、首を横に振って断る。これから話す内容は証拠を残しておきたくない。それを確認した大淀は席を外してくれた。

「お電話変わりました、提督の葛原です。」

「呉鎮守府の久藤だ。要件は分かっているよな？」

「心当たりが多くてどれのことか分かりませんね。」

「おい、とぼけてんじやねえぞ？」

ふむ、これくらいで怒って感情剥き出しにはして来ないか・・・

「私が久藤提督の傘下に入らない件ですか？前任者の調査の件ですか？それとも平川市長から言質を取ったことですか？・・・それとも私が鶴野提督の傘下に加わった件ですか？」

「全部気に食わねえが・・・最後の冗談が一番気に食わねえなあ!？」

「すみません、最後のはまだでしたね。」

『『まだ』か・・・舐めた態度とるなら、俺への宣戦布告と見なすぞ?』

やはり簡単な挑発じゃ冷静さを崩せないか、まあこの程度でどうにかなる相手ではないか・・・

「失礼しました。しかし本格的に敵対される場合はそれしか手段が無いことはご理解頂きたい。私の力だけでは久藤提督に簡単に潰されてしまいますので。まあ、本当に最後の手段ですがね。」

「だったら何故さっさとあいつの傘下に入らないんだ？」

「それは簡単な話ですよ。鶴野提督が嫌いだからです。信用出来ない人間の傘下に入るのには恐ろしいですから。」

「クツクツクツ。それはなんとも単純な理由だな。なら俺の傘下に入らねえのも同じ理由か？」

「そうですね。しかし鶴野提督よりはマシなので、交渉するなら久藤提督だと思っていますよ?。」

電話越しに久藤提督が大笑いしている。掴みとしてはまずまずか・・・

「ずいぶんはつきりと言うじゃねえか。だがコソコソ嗅ぎ回っておい  
て今更交渉だと？あまり舐めた事言っつてんじゃねえぞ？」

「調査に関しては大本営からの命令ですので、面倒でも仕事はこなさ  
なくてはならないので。何もありませんでしたと納得させられる状  
況では無いでしょうか？久藤提督が大本営の命令を撤回させて頂ける  
なら、すぐにでも打ち切りしたい仕事ですが？」

まあ、そんな事が出来るなら最初からやっているだろうがな。

「ツチーだから最初から俺の傘下に入れと言っただ。そしたら上手  
く隠蔽して、お前にもそれなりの見返りを用意したのによお。」

ふん、そんな話は久藤提督が信用出来ない時点であり得ないな。そ  
ろそろ話を進めるか。

「それは無理な相談ですね。さて、交渉の話ですがこちらの手札とし  
ては、憲兵隊の黒川さんにはまだ開示していない証拠があります。鶴  
野提督に渡せば久藤提督の陣営に大打撃を与えるくらいの決定的な  
証拠です。」

「ほう？何を見つけたんだ？」

「それを伝えてしまったら情報操作したり、証拠隠滅の為に人を送り  
込むのでしょうか？」

「お前はどんなカードを持っているかも伝えずに信じろと言うつもり  
か？」

「用心の為には仕方ないかと。相手が大き過ぎるのも問題ですね。」

しばらく沈黙が続くが、どうやら話を進めてくれるようだ。

「それで？俺を脅してどんな要求を押し通すつもりだ？」

ふう・・・とりあえず話は聞いてくれるか。第一関門は突破かな？  
次はどこまで要求を通せるかだな。

「私の要求としては汚職捜査の件を解決する事です。つまり犯人を捕  
まえて大本営に解決したと認めて貰うことです。あと不正に売られ  
た艦娘達を取り戻す事も要求します。」

「バカなこと言っつてんじゃねえぞ?!それだと交渉にすらなっつてねえだ  
ろ!？」

「ここまでは当然の反応だな。」

「ですから落とし所として、久藤提督には生け贄にする人物を選んで頂きたい。その人に罪を全て擦り付けて他の陣営の方を守る。この辺が落とし所としては納得出来る場所ではないですか？」

「ほう……つまりこっちで捜査の終わりを作って、被害を最小限に留めようって話か。そしてお前は事件を解決した功績を得ると。」

「ええ、こういうのお得意でしょう？ 私一人では大本営から認められないでしょうが、久藤提督が圧力を掛ければ可能なのではないですか？」

そう問いかけると数秒の沈黙があつた後に、深いため息が聞こえてきた。

「まったく……お前さんやっぱ俺の傘下に入らないか？ その悪辣な性格ならうちで上手くやっていけると思うぞ？」

「それはお断り致します。」

「ツチ、言ってみただけだ。大本営に圧力かけるのは問題無いが、筋書きは考えてあるんだろ？」

「もちろんです。大森提督が平川市長と結託して艦娘の不正利用をしていた。その際久藤提督がバックについていると嘘をついて周囲を脅していた。捜査の結果不正に売られていた艦娘を保護して、平川市長は余罪の捜査の為に大本営へと護送される。こんなところでしようか？ それ以降の話はお任せしますが。」

「悪くはないな。本当に性格悪い奴だ。」

「お褒めにあずかり恐縮です。」

「ではそういう話で進めるが……裏切ったらどうなるか分かってるよな？」

「もちろんですよ。私の目的はこの鎮守府で提督を続けることです。これ以上危ない橋は渡りたくないです。なのでそちらが裏切らない限りは大丈夫です。」

「ああ、なら契約成立だ。艦娘が売られた先にはこちらから勧告しておく。従わない奴は平川と同じようにすれば良い。今後も宜しく頼むぞ。」

「ありがとうございます。ですが今回限りのお付き合いとなるように

願っております。」

「ツチ、いけすかない野郎だ。もう切るぞ。」

久藤提督が電話を切ったことでやつと交渉が終わった。極度の緊張が緩んだ反動で机に突っ伏して大きなため息をつく。正直汚職の隠蔽に加担するのは気が進まないが、こうでもしないと久藤提督と鶴野提督の間に挟まれて磨り潰される。どちらかの傘下に加わるのが嫌な以上、この辺が妥協点だろう。とりあえず大まかな流れは決まったが、今後久藤提督に出し抜かれないように気を付けなくてはいけない。契約は成立したが、信頼出来る相手ではない。・・・気晴らしに演習の様子でも見に行くか・・・

## 43話

大淀を伴って海上演習場へと向かう。大淀は自分の顔を見た瞬間に何があったのですか？と心配していたが、久藤提督の相手で疲れただけだと言つて、そのまま連れてきたのだ。演習場に近づく前から砲撃音が鳴り響いており、順調に演習が進んでいるようで安心する。海上演習場にたどり着くと、陸奥が重巡洋艦達の航行演習をさせているところだった。

「演習の調子はどうだ？」

「あら、提督・・・なんだかお疲れみたいね。演習は順調に進んでいるわ。でもやつぱりまだ立ち直れてない娘達もいるから・・・そういう娘達は演習の成績にも大きく影響してるわね・・・」

やはり精神面の不安定さで性能の低下を引き起こしてしまっているか・・・こういう所が艦娘がただの兵器では無い部分だろう。やはり士気の管理も重要な仕事だな。

「でももちろんやる気な娘達もいるわ。今走らせてる重巡洋艦の娘達も、最初に比べたら格段に良くなってるわよ。」

「なるほど、他の艦娘で気になる者はいるか？」

「その・・・成績が悪いから処罰の対象にしたりはしないのかしら？」

陸奥は少し躊躇つて質問してきた。気になる者がいるが、自分の発言でその者達が処罰を受けるのは嫌なのだろう。

「今後の参考にするだけだから安心しろ。状況を把握しなければ対策も練れない。」

「そう・・・なら調子が悪い娘達だけ伝えるから気にかけてあげて欲しいわ。まず五航戦の娘達の動きが硬いわね。次に金剛姉妹はなんとというか、動きが雑というかなげやりというか・・・ただメニューをこなしてるって感じね。でも榛名は真面目に取り組んでいたわ。川内さんはお昼だからあんまり調子が良くないわね。あの娘夜は凄いいけどお昼はちよつと苦手みたい。駆逐艦の娘達だと曙が一番良くないわね・・・彼女は前の提督から目の敵にされていたから・・・あと吹雪・睦月・如月の3人もまだまだ不安ね・・・」

なるほど・・・川内は夜戦で活躍させれば問題無いが、他はやはり気になるところだ。五航戦は面談の感触からすると、少しずつ改善しそうな見込みがあるが、榛名を除く金剛姉妹は何かしら対策が必要だろう。幸い榛名がやる気になってくれているので、見込みが全く無い訳ではない。問題はまだ面談を行っていない駆逐艦の娘達か。特に曙が重症のようなので要注意だろう。

「潜水艦の二人はどうだ？」

「そうですね・・・イムヤさんは元が真面目な人なので、演習にはしっかり取り組んでいますね。イクさんは・・・格別悪い訳ではないけれど、良くも悪くもマイペースな娘だから・・・」

なるほど、可もなく不可もなくってところか。最悪の状態でないだけマシだな。

「あと大和はどうだ？戦艦の中では唯一話をしていないのだが？」

「そうねえ。彼女も調子を取り戻しつつあるわ。優しい娘だからかなり苦しんでいたけれど、提督が代わってちよつと前向きになれた感じかしら？今は長門の所で砲撃演習しているはずだけれど、なかなか良い音じゃない？」

さつきから聴こえていた砲撃音は大和のものだったか。砲撃音で良し悪しを判断出来るほどではないが、陸奥が良いと判断しているならそれを信じておこう。

「それなら設備の方は問題無かったのか？」

「そこは明石と夕張が頑張ってくれたわ。元々整備されずに放置されていただけで、壊れていた訳ではないもの。すぐに整備をしてくれたわ。」

「分かった、色々と参考になって助かった。」

「あら、お役に立てたなら良かったわ。」

そう言つて微笑む陸奥は、余裕があるお姉さんといった雰囲気でも頼りになる。凜々しい長門と良いコンビだな。

「ではそろそろ昼飯の時間だから、長門にキリの良いところで休憩するよう伝えてくれ。」

「分かったわ。最近美味しいご飯が食べられるから嬉しいわ。」

「それは良いことだ。今日改めて士気的重要性を確認したところだからな。しっかりと食べて調子を整えてくれ。」

「ええ、ありがと。」

とりあえず演習の様子は聞けたから、自分も食事にするか。そう思つて食堂に向かおうとしたら、大淀が近くに居ない事に気がついた。辺りを見回すと少し離れた所で何か通信をしているようだが、なんだか困った顔をしている。

「どうした?」

「あ、提督、その提督にお電話なのですが、相手がよく分からなくて・・・」

「相手が分からない?名乗らないってことか?」

「ええ、その名前を聞いても『葛原に汝の盟友からだと言えれば分かる』とだけ・・・」

ツチ!面倒な奴からの電話か。悪い奴ではないのだが、相手をするのが面倒な奴だ。しかし何かしら伝えたい事があるのだろうかから仕方ない。

「はあ・・・士官学校の同期だ・・・代わってくれ。」

「あ、はい、どうぞ。」

さて、どんな話を持ってきたのだろうか?

#### 44話（対話 織田）

「あー葛原だ。なんの用だ？」

「おおー盟友よ！息災であったか？急な話ではあったが、まずは鎮守府着任おめでとう。」

「何一つめでたくない状況だな。で？用件はなんだ？無いならもう切るぞ？」

「フツフツ、そう焦るでない。久しぶりに会話をするのだから、もう少し

とりあえず話が長くなりそうだから通話を終了した。相変わらずむき苦しい男だ。ふと顔を上げると大淀が困惑していた。

「え、えつと、提督？もう宜しかったのですか？」

「ああ、たいした用事では無さそうだ。」

そう言った直後にまた電話がかかってきたので、仕方なく対応する。

「どうした？」

「いやいやいや！どうしたではないだろう！いきなり切る奴があるか！まったく相変わらずせっかちな奴め・・・」

「こつちは忙しい。これから昼飯を食べなくてはならないのだ。手短かに用件だけを伝えろ。」

「我との話より昼飯のほうが大事なのか！我等自由の翼を代表して連絡したと言うのに、この仕打ちとはな・・・」

「何が自由の翼だ・・・問題児四天王の間違いだろうか・・・」

自由の翼改めて問題児四天王。自分の同期の士官候補生で、他の候補生が4大鎮守府のどこかの傘下に加わる中、どこの勢力にも所属しなかった4人組だ。教官潰しの葛原・座敷童子小森・お嬢様北条・そして今電話しているのが変態の織田である。まあそれぞれのメンバーが仲が良いわけではないのだが、周囲が勝手に一纏めにした。た。

「それで、なんの話だ？」

「鎮守府着任を祝いたかったのは本当だぞ？それとは別件があつ



て・・・提督候補生の実地訓練の話だ。」

「その件か・・・私のところに連絡するからには誰かが来るのだろうが・・・やはり小森か？」

「そうだ。というかあの娘はお前以外に扱える人間が居らんからな、しかたあるまいて。」

確かにあの人見知りの激しい娘は、他の鎮守府で上手くやれる気がしない。まあ、ここで上手くやれるかは別の話だがな・・・

「それでいつから来るんだ？大本営からは何も連絡が来ていないが？」

「我が手にした情報では3日後だ。私の盟友は上の連中に嫌われておるからな・・・嫌がらせて連絡はギリギリになるのではないか？」

「そんなところだろうな・・・相変わらず悪質な連中だ。早めに教えて貰って助かった。礼を言う。」

「ハッハッハ！気にするでない、我等の仲ではないか。それに礼を言うなら霞ママに言うといい。この情報を教えてくれたのは霞ママだからな。」

霞か・・・訓練艦として何度か世話になったものだ。ツンツンして置くせに、なにかと気配りの出来る奴だった。

「分かった、霞にも礼を言っておいてくれ。」

「任された。ちゃんと盟友の代わりに罵倒されておこう。」

・・・こういうところがこいつが人から避けられる原因だろうな。その割には艦娘や妖精さんからはそれなりに好かれているのが不思議だ。

「ではさらばだ！健闘を祈る！」

「ああ、またな。」

さて、とりあえず私室の改装工事を急がなければならないな。

「待たせたな大淀。昼飯を食べに行くか。」

「はい、お供します。それで電話ではなんと？」

「提督候補生の実地訓練があつてな。ここにも一人来るらしい。」

そう伝えるとやはり心配なのか、少し大淀の顔色が悪くなる。

「そう・・・ですか。この時期に来ると言うことは、どこかの勢力から

の偵察を兼ねていると見たほうが良いでしょうか?」

「その心配は無いだろう。今度来るのは私と同じく上の連中から嫌われている者だ。つまりは私同様に厄介払いだな。」

「それは・・・また・・・大変な事になりそうですね。」

やはり艦娘達には提督という存在そのものにトラウマがあるのだろうか、今回に限っては余計な心配だろう。

「あまり怖がらなくて大丈夫だ。来るのは女性だし根は真面目で良い奴だ。その代わりかなり面倒な奴だな。」

「どういった方なのですか?」

「基本的に人を怖がるし艦娘も同様に怖がる。後は逃げたり隠れたりする事に関しては天才だ。」

そう伝えると大淀は微妙な顔をしている。

「悪い人ではないのですが、その人本当に提督になって大丈夫なのですか?」

「正直難しいと思うが、艦隊指揮については同世代でも飛び抜けていた。ついでに言えば私は演習でその娘に勝った事がない。」

「それは・・・頼もしい方ですね。」

頼もしいかどうかは分からないが、優秀な臆病者は厄介な相手だと言うことは学ばせて貰った。

「一応この件は大本営からの指示がまだ無いから、あまり言いふらさないで欲しい。」

「分かりました。」

部屋の準備も必要だが、それよりもまだ残っている問題を片付けておきたいものだな。昼飯を食べた後は調査の方を進めるか。

## 45話 (3日目昼食)

食堂に着くと既に艦娘達が食事をはじめていた。正直に言うとな艦娘達が並んでいるところを順番抜かしするのは気が引けるので、既に並んでいる者が居ない状態は好ましい。食事中にも関わらずにきちんと敬礼しようとするのを手で制して、間宮の元へと歩いていく。

「こんにちは提督さん。なんだかお疲れのようですが大丈夫ですか？」

「ちよつと面倒な電話があったただ、問題ない。」

「そうですか・・・でしたらいっぱい食べて、元気になって下さいね。」

「ああ、心遣いに感謝する。」

ふむ、今日のお昼は唐揚げ定食か。鶏は良いものだ。牛や豚と比べ成長が早く、狭いスペースで飼育可能なので、深海棲艦の襲撃で打撃を受けている日本にはありがたい家畜だ。その為生産の安定化が進み、かなり入手しやすくなったものだ。大盛になった唐揚げ定食を受け取って、どこに座ろうかと見回すと、白露型姉妹と食事をしている夕立がこちらに手を振っていた。

「提督、一緒に食べるっぽい？」

ふむ、なにかしら話したいことがあるのだろうか？人が多い場所で大声で呼ばれた為、かなりの注目を集めてしまっている。こんな状況で理由も無く誘いを断るのは、とても印象が悪いな。

「ふむ、では一緒に食べようか。」

輝く笑顔の夕立、苦笑いしている時雨、微笑んでいる春雨、そして机に突っ伏している白露。いったい何があったのだろうか？

「あー、白露はどうしたんだ？」

そう尋ねると時雨が気まずそうに答えてくれる。

「その・・・今回の演習なんだけど、白露姉さんは今のところ全部の種目で夕立に負けちゃったから、少し自信を無くしてるみたいで・・・」

「うう・・・お姉ちゃんがいつちばんのはずだったのに・・・」

「夕立ったら結構頑張ったっぽい!?提督さん褒めて褒めて〜」

なるほど、姉としての威厳を失ってしまった訳か。夕立は無邪気に

喜んでいるが、おもいつきり追い討ちをかけてしまったようだ。だがここは軍である以上実力がものをいう世界だ。

「良く頑張ったな。その調子で午後からも励むと良い。」

「ふふーん！夕立に任せるっばい！」

「うう・・・最後の防空演習だけはなんとしてでもいつちばんになるんだから・・・」

ここまで打ちのめされてもまだ一番にこだわる執念は見事なものだな。

「防空演習だって負けないっばい！」

とことん姉に容赦の無い妹も居たものだ。少しだけ救いの手を差し伸べておくか。

「一応言っておくが、今回は個人としての性能を調べる為の演習だ。しかしそれだけが全てではない。白露、長女としてまとめ役をしたいなら、明日行う予定の座学こそ一番を取るべきだな。」

「ええ!?座学のテストもあるんですか!？」

「お勉強は苦手っばい!!」

周囲の艦娘達の注目も集まっているようだし、軽く話しておくか。

「深海棲艦の知識や各陣形の特徴など、覚えておくべきことは多い。そのような知識が戦場で役に立つはずだから、当然覚えて貰うつもりだ。その為にまずどれだけの知識があるのか調べる為に、テストを行うつもりだ。」

テストの内容については、士官学校時代に受けたものを流用するの  
で、準備の手間もたいしてかからないしな。それにしても夕立が勉強  
が苦手なのは予想通りだが、白露もあまり得意ではないようで、頭を  
抱えてしまった。救いの手を差し伸べるつもりが追い討ちをかけて  
しまったようだ。

「時雨！今夜はお姉ちゃんに勉強教えて！」

「う、うーん。座学は本格的にやってないから、僕もそんなに自信無いよっ。」

「春雨は真面目だし勉強できるっばい?。」

「えっと、流石にやったことが無いものはちよつと・・・はい。」

「別に成績が悪いから罰せられるようなものでは無いから、そんなに焦る必要は無いぞ？知らないことは今後学べば良い。」

「そう言っても頭を抱え続ける白露と夕立に苦笑しつつ、唐揚げに手を伸ばす。冷めてしまうと作ってくれた間宮に失礼だからな。ふむ、相変わらず美味しい。やはり美味しい食事は活力に繋がるので重要なものだな。」

「とにかく皆で勉強会をするわよ！」

「わかったよ白露姉さん、僕も付き合うよ。」

「夕立はお勉強嫌いっばい・・・」

「あ、あの・・・今日って営倉の掃除がありますよね、はい・・・」

「二あ・・・」

「・・・そう言えば営倉の掃除を命令したのだった。演習と面談と電話と忙しかったので、すっかり忘れてしまっていた。それと午後から隠し通路の調査も進めなくてはならない。青葉を引き連れてまた調査をするか。」

## 46話（地下通路調査）

どうやって座学のテストを乗り切るか相談している白露型姉妹を眺めながら、のんびりと食事をした。ここまでやる気があるならば、手助けとして営倉の掃除が終わったら、士官学校時代の教科書を渡しても良いかも知れない。一夜漬けするには十分な資料だろう。大淀と長門を会議室に呼んで、打ち合わせを始める。

「長門、演習のほうは順調か？」

「うむ、想定よりも時間はかかっているな。やる気がある者達が何度か挑戦したがってな、ついアドバイスをして何度かやらせてしまったのだ。勝手なことをしてしまっただが、彼女達のやる気を無駄にしたくなかったのだ・・・すまない。」

そう言えば陸奥も重巡洋艦達に航行演習を何度かやらせたと言っていたな。だがそれで練度が上がるのであればむしろ良い事だろう。「確かに一言相談があっても良かったとは思うけれど、練度の向上に繋がる事だから大丈夫だ。午後からも余裕があればやらせて構わない。しかし予定していた内容はきちんと終わらせるように調整してくれ。」

「承知した。」

「そう言えば演習用の機材の設置等は終わっていたよな？午後から少し明石を借りたいが大丈夫だろうか？」

「機材に関してはもう問題ないだろう。もし何かあっても夕張も居るからな。だが出来れば撤収作業くらいまでには戻して貰えると助かる。」

「そこまで時間を取らせるつもりはない。それと調査に青葉を同行させたい。まだ終わっていない演習については、明日哨戒組と一緒にやらせてくれ。」

「承知した。」

「では大淀は引き続き秘書艦としての業務を頼む。緊急時は青葉を経由して連絡してくれ。あとそれなりに距離が離れるかもしれないから、通信の為に青葉には艀装を装備するように伝えてくれ。通信機能

と探照灯があれば良いから武装は必要ない。」

「はい、お任せ下さい。」

明石と青葉と合流して営倉へと向かう。明石にもこれから見る事は他言無用だと念を押して、営倉の隠し扉から中に入る。中には相変わらず悪趣味な道具が並んでいて、明石と青葉の顔色が悪くなる。

「う……これは……」

「悪趣味な道具ですよね……青葉もあまり見たくないです……でも重要なものは奥にあるんですよ……」

「ええ……まだ何かあるんですか……これは艀装じゃないですか!? なんでこんな所に!?!」

「まだ調査中で確証は無いが、他所に売り払われた艦娘達のものだと思っっている。青葉では艀装が誰の物かまでは判別出来なかったから、艀装に詳しい明石に見て貰おうと思っつてな。」

「……分かりました。少しお待ち下さい。」

そう言っつて明石は艀装を一つずつ確認してメモに書き込んでいった。

「お待たせしました。こちらが調査結果です。」

明石からメモを受け取っつて内容を確認する。

軽空母

龍驤

重巡洋艦

高雄 衣笠 摩耶 羽黒

軽巡洋艦

球磨 五十鈴 神通

駆逐艦

朧 漣 潮

合計で11人分か。これだけの数が居れば作戦や遠征等の選択肢が、どれだけ増えると思っつているのだろうか? まあ、前任者には扱

きれなかったかもしれないが・・・

「助かった。この結果を大淀に伝えて、遠征等で轟沈した記録と照らし合わせて欲しい。あと大淀にもこの件は他言無用だと念を押してくれ。」

「・・・分かりました。その、提督はこの件をどうされるおつもりですか?」

やはり明石も思うところがあるのだろう。神妙な面持ちで尋ねてくる。

「まだ詳しい事は言えないが、もちろん取り返すつもりでいる。」

「え、衣笠が戻ってくるかも知れないんですか!? 青葉その話詳しく聞きたいです!」

やはり姉妹艦の事が気になるようで、青葉がぐいぐいと迫って来るが、今詳しい事は言えないと言ったばかりだろう・・・

「まだその可能性があると言うだけだ。だから上手く事を運ぶ為に慎重に調査を進めている。焦る気持ちは分かるが、今は大人しく調査に協力するように。」

「はい! 青葉もお手伝いします!」

「頼んだぞ。では明石は大淀に報告したら、演習の方に戻ってくれ。」  
「了解しました。」

明石に任せる仕事はこれで終わりだが、やはり気になるのか隠し部屋から出る時も艤装の事を気にしている様子だった。仲間が売られていたなんて情報で、気にならない訳はないだろうからな。これでいよいよ失敗出来なくなつたな。

「では青葉は私と地下通路の調査だ。撮影は任せたぞ。」  
「もちろんです。青葉のカメラが情報を逃しませんよ!」

青葉に探照灯で照らして貰いながら、地下通路を進んで行く。中はコンクリートできちんと整備されており歩きやすい。しかし照明の類いは設置されておらず、探照灯のみが頼りだ。しばらく歩き続けるとついに少し階段を登った先にドアが見つかった。

「ふむ、鍵はかかかっていないようだな。扉の向こう側にも人の気配は無さそうだし行くか。」



扉を開くと小さな部屋にたどり着いた。中には机と椅子と棚があるくらいで、かなり埃を被っていた。

「ん？ああ、扉は片側からは鍵が必要なタイプだな。流石に誰でも鎮守府へと侵入出来るのは不味いから当然か。青葉、棚から適当に本を取ってくれ、挟んで扉が閉まらないようにしておく。」

「えっと、とりあえずこれで、『フォークリフト教習テキスト』なんでしょうかこれ？」

「クレーンみたいなのに荷物を運ぶ時に使う機械だ。そんなに重要なものじゃないから気にするな。」

とりあえず本を扉に挟んで帰り道を確保してから部屋を出ると、どうやら大きな建物の一室だったらしく、隣にも扉が並んでいるのが確認出来た。しかし廃墟のようで窓が割れていたり、埃だらけの場所だった。

「青葉、大淀に通信を繋いでくれるか？」

「少々お待ち下さい・・・はい、どうぞ。」

「大淀か？」

「はい、どうされましたか？」

「今地下通路を抜けて出口付近にいる。そっちから青葉の位置情報と分かるか？」

「えっと・・・電探があるので大丈夫です。地図と照らし合わせると・・・鎮守府から2kmくらい離れた海沿いの廃工場でしょうか？」

なるほど海沿いの廃工場か。あまり人が寄り付かない場所だな。しかも大きな建物だから、秘密の扉の隠し場所には困らないだろう。市長もぐるだから再開発の許可を出さないってことも出来るしな。

「分かった。場所はきちんと記録して後で見せてくれ。今から鎮守府に戻る。」

「はい、お気をつけて。」

地下通路の調査についてはとりあえずはここまでだな。場所は分かったから十分だ。後は扉の鍵が見つければ良いのだが、それはまた今度だ。

## 47話

「あのく司令官、どうしてあの廃工場は調べないのでしょうか？」

鎮守府への帰り道で青葉がおずおずと尋ねてきた。

「あそこはただの入り口に過ぎないからだな。徹底的に調べれば何かしら痕跡が出るかも知れないが、それをするには人員も時間も足りない。他にやるべきことも多いからだ。」

「でもそれだと売られた艦娘達の足取りを追えないのでは？」

「その為の調査を戻ってからやる予定だ。大淀に頼んだ轟沈の記録と資金の帳簿を照らし合わせれば、確証が得られると思っている。後は平川市長をどうやって上手く動かすかだな。」

はつきり言って久藤提督が動く以上、平川市長が逆らうとは思えないが、何かしら誤魔化そうとしてくるだろう。その時に誰が売られたか分かりませんでは話にならない。

「うう・・・なんだかよく分かりませんが、司令官がすっかり考えて下さってるのですね・・・青葉は大人しくしておきます・・・」

艦娘達は純粹な者が多い。軍艦として戦略については理解しているが、人間の嘘や暗い部分には疎い印象だ。これだけ仲間が売られた状況で、不信感を抱かずに轟沈したという話を信じていたくらいだからな。まあ、そんな所は艦娘の仕事ではなく人間である自分の仕事だろう。

「得意分野が違うだけだから、そうやって落ち込む事は無い。それに艦娘側から見た視点は私には無いものだから、今後もしも気になった事があれば教えて欲しい。それがヒントになることもある。」

「恐縮です。それでは気になっていたことなのですが・・・」

お、さっそく聞きたいことがあるのか、その好奇心は調査にうつってつけだな。

「艦娘が別の人に売られたのでしたら、何故存在出来るのでしょうか？」

「・・・どういうことだ？」

「あ、いえ、司令官はご存知無いかもかもしれませんが、提督の指揮下に

ない艦娘は徐々に力を失って、最後には消えてしまうのですよ。ですから他所の鎮守府に移籍とかなら問題無いのですが、市長さんは普通の人ですよね？」

言われてみればおかしな話だな・・・提督の居ない鎮守府の艦娘が力を失って消えてしまうのは知っていた。そのせいで急遽自分がこの鎮守府に送られたのだ。

「青葉、もし提督の指揮下から外れた艦娘が居たとして、消えてしまうまでどれくらい耐えられると思う？」

「えっと・・・前の司令官が亡くなつて司令官が来るまでにだいたい一週間でしたが、その程度なら問題なかったですね。ですが力を失い始めたら加速度的に症状が進みますので・・・3週間くらいが限度なのではないですか？試す気にはなりませんし、個人差もあるとは思いますが・・・」

3週間か・・・あまり悠長にしてられない案件かもしれないな・・・「その話の根拠はなんだ？」

「えっと・・・艦娘の本能的な話なので、何故分かるのかと言われても困りますし・・・3週間って話も確証があるわけでは無いので・・・すみません。」

「いや、謝る必要は無い。むしろ本能的な話は私の知らないことだから、教えてくれて感謝する。」  
「恐縮です。」

さてどう考えるべきか・・・期間については曖昧だが、目安として3週間と考えよう。それならば3週間以内に11人も売られたって状況なのか？もしそうであれば、時間を稼がれてしまうと艦娘の消失が起こってしまうだろう。しかしそんな使い捨てるようなやり方をするだろうか？いくら前任者が不要と判断した者達だとしても、使い捨てにするほど資材は潤沢だったのだろうか？そんな雑な使われ方にしては艀装をきちんと保管しておくのも不思議だ・・・ん？艀装の保管？

「なあ青葉、もしかしたら艦娘達は売られたと考えるよりも、長期間貸し出されていると考えたほうが良いかもしれないな。」

「と言うと？」

「鎮守府に所属したままで、任務として相手の家に長期間行かせるんだ。そして定期的にこの地下通路を使って鎮守府に帰って来ることで、鎮守府に所属しているという体裁を整えていたのではないか？」  
「な、なるほど……でも鎮守府内に戻って来たなら姉妹艦に無事を伝えたりは……」

「提督の権限で全ての通信機能を遮断しろとか命令したのではないか？」

「それなら可能かもしれませんが……」

「だんだんと前任者のやり口が見えてきたな。こうなると整備についてでも気になるところだ。」

「確認だが、艦娘が怪我をした場合は入渠しなければ治らないはずだよな？」

「いえ、自然治癒はしませんが、小破以下の損害なら明石さんが修理することも可能ですよ？」

「その手もあつたか……しかし明石が全く知らない様子だったから明石に修理させていた線は薄いだろう。」

「前任者の時代で入渠施設付近に近づかないように命令された事はあつたか？」

「それは無いですが……基本的に用事が無い時は部屋で待機するように言われてましたよ。それなりに自由に動けたのは秘書艦の大淀さんと、夜戦を任されてた川内さんくらいだと思います。明石さんは工廠に部屋があるので、あの区画から出る事も無いかと思えます。」

「そう言われれば着任初日に案内を受けた時、大淀以外の全ての艦娘が部屋で待機していたな。つまりあれが日常の状態だったのか……」  
「それならば大淀と川内に気を付ければ、こっそりと入渠施設を利用させることも可能だな。」

「そうですね。なんだか一気に話が進んでしまいましたね。」

ふと青葉を見ると難しい顔で唸っていた。艦娘達が苦手な分野の話なのによく付き合ってくれたものだ。

「仮説としては十分に可能性が高い話だ。青葉のおかげでここまで話

が見えてきたのだ。ありがとう。」

「恐縮です！お役に立てて嬉しいです！」

さてと、後はこの話の裏取りと平川市長との交渉かな？

## 48話

青葉を伴って会議室に戻ると、大淀が資料をまとめていてくれた。やはりリストにあった艦娘達は遠征で全艦轟沈した扱いになっていた。そしてその日付に平川市長から多額の資金を得ている事も確認出来た。しかし平川市長を通したやり取りの為、誰がどこに売られたかまでは確認出来なかった。

「こうなると平川市長の動き次第で厄介な話になるな・・・一応久藤提督からの指示で動き始めているはずだが・・・」

そう呟くと大淀が困った顔で質問してきた。

「あの、提督、私はこの件に関してあまり説明を受けておらず、断片的な話しか分からないのですが・・・」

そう言われれば大淀にも話していない事が多かったな。大淀には秘書艦として補佐をして貰わなくてはならないし、そろそろ情報を開示しておいたほうが良いか。

「分かった、情報を共有しておこう。その前に青葉、撮影した写真の現像ってどうやってやるんだ？」

「え、えっと、青葉のカメラは妖精さんが作ったものなので、工廠にある機材で現像をしますけれど・・・」

「ならば今から証拠写真の現像をしてくれ。」

「ええ!? 現像するのは良いですけど、青葉だってお話聞きたいですよ! 今こまでお手伝いしたんですから、ちよつとくらい教えてくれても良いじゃないですか! 青葉すつごく気になります!!」

青葉が涙目ですがうって来るが、まだ不確定要素が多い状況だ。妹の衣笠の件で焦って余計な行動をしてしまいかねないので、悪いがまだ全てを明かす事は避けたほうが良いだろう。

「悪いな、衣笠も含めて悪いようにはしないつもりだから、今は大人しくしている。」

「うう・・・青葉は信頼されているのか分からなくなってきました・・・おおよ・・・」

わざとらしい演技をしながら崩れ落ちて、こつちをチラチラ見ている

だが、こつちが折れる気配が無い事を悟り、がつくりと肩を落としたがら会議室から出て行つた。

「提督、宜しかったのですか?」

「重要な情報だからな。扱いにも慎重になる。それと……盗み聴きしてないでさつさと現像してこい!!」

「ひ、ひいーごめんなきあああ!!」

ドアの向こう側から聞こえた、バタバタと走り去る音にため息を吐く。好奇心が強すぎるのも考えものだな……

「青葉さん……それにしてもよく気が付きましたね?」

「一時期は孤児として過ごしていたからな、人の気配には敏感なんだ。後は士官学校でも悪意に晒されてたから余計にな……」

「そうでしたか……」

「今は私の話はどうでもいい。今調査している案件のほうが重要だ。」

大淀に前任者の大森提督が艦娘の販売に手を出していた話をした。大淀は鎮守府にいる艦娘が、客人相手に接待を強いられていた事は知っていたが、売られていたのは知らなかったようだ。時々大淀も接待に参加させられて、その時は秘書艦を別の者に代わって貰っていたようで、その時に遠征での全艦轟沈も多かったようだ。詳しい話は教えて貰えず、その時秘書艦をしていたのが誰かすら分からない状態で引き継ぎすら無かったので、大淀も不審に感じながらも調べる事は出来なかつたらしい。それにそんな都合の悪い調査を大森提督がさせるとは思えないしな。

「それで久藤提督と交渉して、販売を仕切っていた平川市長に艦娘を返却するように圧力をかけて貰ったと。」

「ああ、交渉の内容は言えないが、そういう事だな。そして証拠も十分揃っているし、平川市長には責任を取って捕まって貰うつもりだ。」

「それも久藤提督は了承していると考えて良いのですか?」

「ああ、今のところ協力してくれるように話をつけてある。だから久藤提督の気が変わらないうちに終わらせたいところだ。」

大淀は数秒目を閉じて黙考し、ため息を吐いた。

「はぁ・・・分かりました。ずいぶんと大きな事件になっていたのですね・・・提督にもお考えがあるのでしょうか、久藤提督とのやり取りについては聞きません。私達艦娘としては売られた仲間が無事に帰ってくるのが一番ですから・・・」

こうやって割り切ってくれるのは非常にありがたい。これが青葉だったら絶対にごねているだろう。

「それで、これからどうするおつもりですか？」

「とりあえず平川市長をつついて様子を見てみようと思う。久藤提督からどんな命令が出されたかも気になるし、それによつて今後の動きを考える必要がある。」

「分かりました。それではさっそく電話を繋ぎましようか？」

「ああ、頼む。」

さてと、今度はどうやって情報を引き出すべきかな？



## 49話（対話 平川市長）

大淀に平川市長へと電話を繋げて貰った。さていったいどんな反応をするだろうか？

「もしもし、北九州鎮守府の葛原です。」

「貴様!!よくもわしを騙してくれたな!!貴様は久藤提督の傘下ではないのだろうか!?!」

「はあ・・・私は一言も久藤提督の傘下の者だなんて言っていないんですが？なんなら録音したものを確認されますか？」

「そんな事は問題ではない！実際にわしが騙されているのが問題なのだ!!」

まったくこの豚は・・・自分が騙そうとした相手に騙されたから激昂するとは・・・騙されるほうが悪いだろう。

「はあ・・・無駄話をするつもりはありません。久藤提督と話をつけた以上、艦娘の返却を行わなければ久藤提督が動くことになります、どうされるおつもりですか？」

「貴様あ!!わしを誰だと思っておるのだ!?!」

「ただの地方の役人ですね。久藤提督の傘下で好き放題されていたようですが、この話を蹴るなら久藤提督から切られると思いますよ？それでも強硬姿勢を崩しませんか？」

「クソ!!そんなこと言われんでも分かっておるわ!!今晚わしの屋敷に艦娘達を集める事になっておる。明日貴様が確認して問題が無ければ、明日の夜に地下通路を使って返却する手筈だ。何か文句あるか!?!」

ふむ、なるほど。つまり明日自分が確認に行く時に憲兵隊を引き連れて、平川市長を逮捕する手筈だな。久藤提督も上手くやるものだ。「いえ、手順には問題なさそうですね。集める艦娘のリストはもうありますか？」

「ふん！軽空母1、重巡4、軽巡3の8人だ。」

この期に及んでまだこいつは誤魔化そうとしているな。往生際の悪い奴だ。

「駆逐艦3が抜けてますが？」

「チツ、分かっておるわい！わしの所に居るから数えてなかったただけだ!!」

なるほど、自分の所にいる艦娘をちよろまかそうとした訳か。単純な奴だな。

「取引は正確にお願いしますね？」

「久藤提督からの指示だからな！最初から誤魔化す気など無いわい!!しかし貴様も覚悟は出来ているのだろうか？」

ほう、声音からこちらを脅そうとする悪意を感じる。まだ強気な態度が取れると考えるあたり、余程自信があるのか？それとも余程の馬鹿なのだろうか？

「なんの覚悟ですか？」

「ここまでわしのメンツを潰してくれたのだ、ただで済ますはずがなからう？クツクツクツ、わしを敵に回すと言うことは、この街を敵に回すという事だ。各方面に圧力をかけて、貴様は何一つこの街で取引が出来ないようにしてやろう。鎮守府の運営に失敗して、無様な姿を晒すが良い!!」

なるほど、こいつは余程の馬鹿だな。もしもその目論見が上手くいったとして、この鎮守府が機能不全を起こしたとしよう。そうなれば深海棲艦の侵攻を止められず、街が大きな打撃を受ける事になる。まあ、そもそも明日逮捕される人間が何を出来るのか？って話なのだが、これは黙っておこう。

「はあ・・・こちらは貴方の汚職の証拠を握っているのですよ？本来断罪されるべき状況なのに、久藤提督の計らいで艦娘の返却だけで済ませうという話なのですが・・・久藤提督のご厚意を無駄にされるおつもりですか？」

「それは今回の件で終わった話であろうか？それをまた持ち出せば久藤提督も黙っておらんだろうなあ？」

どうやらどうしてもマウントを取りたいようだな。これ以上付き合うのも時間の無駄だな。

「はあ、ではお好きにされて下さい。今回の取引さえきちんとして頂

ければ、私としては構いません。その後の事は別の対処をさせて貰います」

「ほほう？貴様に何が出来ると言うのだね？」

「さあ？こんな所で手札を明かすような愚かな真似はしませんよ。」

「貴様!!必ず後悔させてやるからな!!」

「そうですか。では明日の取引までの関係になりそうですが、それまで宜しく願いますね。」

「生意気な小僧め!!必ずだ!!必ず後悔させてやるから覚悟しておけ!!」

そう言つて平川市長は電話を叩きつけるように切つたようだ。とりあえず艦娘を集めて貰えるのならば、後の事は気にする必要も無いだろう。

「提督、お疲れ様です。コーヒーでも淹れましょうか？」

「ああ、頼もう。ミルクと砂糖を多めに入れてくれ。」

「はい、少々お待ち下さい。」

大淀が淹れてくれたコーヒーを楽しみつつ、大きな問題が一つ解決の目処がついたことを喜ぶ。後は久藤提督に明日の段取りを確認すれば問題ないだろう。ついでにもし自分に何かあった場合は、証拠を鶴野提督に渡すように大淀に指示を出して、その件を久藤提督に伝えておこう。そこまで釘を刺しておけば、自分を害するよりも平川市長を切る方を選ぶだろう。最後まで油断は出来ないがな・・・

その後久藤提督に電話をして、明日の確認を済ませた。本来軍人ではない平川市長を逮捕するのは警察の仕事なのだが、艦娘関連の事件であることと、久藤提督の影響力があることが理由で、やはり憲兵隊を使うようだ。明日の朝にうちの鎮守府に憲兵隊が来て、共に平川市長の逮捕に向かう事になった。その後の平川市長の運命は・・・久藤提督のみ知るところだ。

## 50話

「提督、哨戒に出た天龍さんから連絡です。敵影無し、これより帰投するとの事です。」

「了解した。」

着任3日目にしてようやく戦闘の無い日を迎えられるそうだ。深海棲艦と戦うことが仕事とは言え、毎日戦闘するのは勘弁して欲しいものだ。

「そろそろ演習も終わった頃だろうか？」

「そうですね。一通り終わったようですので、今は片付けをしていますようですね。」

「分かった。片付けが終わったら各自補給をして、休息して構わない。長門には演習の結果をまとめて報告書を提出するように伝えてくれ。」

「分かりました。提督はこの後どうされるおつもりですか？」

「この後か・・・いい加減に執務室と私室の改装に手を出したいところだが・・・」

「その前に一つ聞いておきたいのだが、ここに着任してから妖精さんの姿を見ていないのだ。艦娘達が出撃している以上存在していると思うのだが・・・何か心当たりはないか？」

「・・・そうですね。その、妖精さん達は前任者から怒鳴られたりしていたので、怯えて隠れてしまっているものかと。私達艦娘の前には姿を現してくれますし、搭乗して戦闘や通信などのサポートをしてくれますが・・・」

「また前任者か・・・本当にろくな事をしないな・・・大方希望する艦娘が建造されなかったとかで怒鳴り散らしていたのだろうか？」

「はい・・・時には床や壁に投げつけたりの暴力を振るう事も・・・なのでこの妖精さん達は隠れてしまって・・・大声で召集すればしぶしぶ出て来るとは思います・・・」

本当に面倒な状況を作ってくれたものだ。提督の第一条件は妖精さんが見えて意志疎通が出来る事だ。未だにその存在は分からない

事が多いが、妖精さんなくして鎮守府は成り立たない。自分是人権派ではないので、妖精さんと仲良くするべきだとは思っていないが、その技術と鎮守府を支えてくれる事に敬意を持って接するべきだと考えている。確かに気まぐれなところがあり、思うようにコントロール出来る存在ではないが、そもそも妖精さんが持つ未知の技術について、完璧にコントロールしようなど無理な話だろう・・・

「まずは妖精さんとの関係を構築するところから始めるべきだろうな。ああ、そうだ。営倉の掃除もさせるのだったな。そっちは大淀が監督して白露型姉妹と長門と明石でやるように。ただし隠し扉は開けないようにすること。それと隅々まで綺麗にする必要もない。あの程度汚れと臭いが落とせば十分だろう。」

「分かりました。それと妖精さんに会いに行かれるのでしたら、工廠が一番会いやすいかと。建造や開発担当の妖精や艦装の制御を担当する妖精が集まる場所なので。」

「なるほど、助かる。」

ではさつそく妖精さんに挨拶に行くとするか。

さつそく工廠に向かおうと思っていたが、手土産も無しに挨拶に行くのもどうかと思い、まずは食堂の間宮の元を訪れた。間宮は夕食の下拵えをしていて、その手際は素人目で見ても素晴らしいものだな。

「間宮、作業中悪いが少しいいか?」

「あら?提督さん、どうされましたか?」

「昨日明石に頼んで入荷した甘味はどこにしまっている?」

「えっと、こちらにありますますが演習のご褒美とかですか?」

「いや、今回は妖精さんに挨拶に行こうと思ってな。その時に手土産もないのはどうかと思ったからな。」

そう伝えると間宮が優しく微笑んだ。

「それはとても良いことですな。きつと妖精さん達も喜ぶと思います。そういう事でしたら金平糖がお勧めですよ。他のお菓子だと小さく切り分けられないいけません、金平糖なら妖精さんも食べやすいですから。」

「なら金平糖を貰っていいこう。助かった。」

「どういたしまして。私達艦娘にとって妖精さんは大事なパートナーですから。妖精さんを大事に扱って頂けるのは嬉しいです。」

やはり艦娘と妖精さんは関わりが深いので、愛着も湧くものなのだろう。間宮はとても嬉しそうにしている。今後は妖精さんの扱いにも留意すべきだな。

金平糖を手に入れて工場に向かうと、夕張が演習で使った機材を手入れしていた。他の艦娘のような制服姿ではなく作業着を来て作業する姿は、ベテランの職人のようだ。そう言えば夕張とはまだまともに話をしていなかったな。

「整備は順調か？」

「あ、提督、お疲れ様です。演習で使っただけなので、簡単な手入れだけで済みますから。明石さんがいなくてもこれくらいなら大丈夫です！」

「頼もしいな。何か困った事があれば早めに報告してくれ。」

「ありがとうございます。あー、困った事ってほどではないのですが・・・」

そう言いながらも夕張は困った様子で頬を掻いている。何か言いにくい事があるのだろうか？

「どうした？」

「一応確認なのですが、私は実戦で使えないと考えられてるのではないかなあと思っています。もちろん工廠でのお仕事は大好きなのですが、実戦でもお役に立てればなあと思っています。確かに速力や耐久力に不安がありますが、装備を他の軽巡よりも多く積めますので、そこら辺の強みを生かして貰えたらなあと思っています。」

なるほど、確かに装備開発などの工廠で仕事をしているイメージだったが、戦闘能力が低い訳ではないのか。しかし軽巡洋艦で速力に不安があるのと、ただでさえ弱点の耐久力に劣る事は、明確な弱点だろう。重雷装巡洋艦のような長射程の攻撃も出来ないとなると・・・護衛を付けて高火力で一気に勝負を決める運用になるか？それとも

旗艦としての指揮能力を求めるときだろうか？

「ふむ、前線での戦いも出来る事は頭に入れておこう。しかし工廠での整備や開発も重要な仕事だから、明石の手が回らない時はそちらの応援を優先させて貰うぞ？」

「ええ、それはお任せ下さい！先程もお伝えしましたが、工廠のお仕事も大好きですので！」

薄汚れた作業着でニコニコ上機嫌に笑う姿は、本当に工廠での仕事が好きなのだろうと感じる。しかし実戦投入も可能ならば、今後使える選択肢が増えて助かるな。

「あ、そう言えば提督は何かご用があったのでは？」

「妖精さん達に挨拶に来たのだ。本当は着任後すぐに来るべきだったのだろうが、そこまで気が回らなくてな。詫びと言ってはなんだが、手土産も持って来ている。」

「わあ、それは良いことですね！きつと妖精さん達も喜びますよ！ちよつと呼んで来ますね。」

そう言つて夕張は工廠の奥の方へと駆けて行つた。確かに直接私が呼ぶよりは夕張を通したほうが、あまり警戒されずに済むかもしれないな。

## 51話（妖精さん挨拶）

夕張が工場に入ってしばらくすると、数人の妖精さんを連れて来てくれた。夕張の肩に乗っている者や腕に抱えられた者がいたが、全員夕張にしがみついている、こちらをかなり警戒しているようだ。妖精さんの数がこれだけということは無いですね、おそらく代表で出てきたか、もしくは夕張が声をかけて比較的警戒心の少ない者達を連れて来たかだろう。士官学校時代に見た妖精さん達は、どこかのほほんとした気まぐれなイメージだったが、艦娘達と同様に環境でここまですべて変わってしまうものか……

「あー、とりあえず作業台の上に並んで貰えるか？」

妖精さん達は夕張に諭されながら、しぶしぶ夕張から離れて作業台の上に並んでいく……と思ったが青髪でモンキーレンチを持った妖精さんを先頭に、後ろに隠れるように集合している。この青髪の妖精さんがリーダー的な存在なのだろうか？それにしてもかなり怯えてしまっている。こうやって怯えられると、士官学校の同期だった小森を思い出す。いや、呼んだら姿を現してくれるだけ妖精さんのほうがマシかな？きちんと並ぶように注意しようとしていた夕張を制して、作業台の前で膝立ちになる。怯える相手の警戒心を和らげるには、視線を合わせるのが効果的だったはずだ。自分はその背が高いので、見下ろされる恐怖はよく分からないが、小森相手に有効だったのできっと妖精さんにも通用するはずだ。妖精さん達もかなり驚いているようだが、さつきよりは警戒心が薄れた気がする。

「では改めて、先日からの鎮守府に着任した葛原だ。鎮守府を運営していくうえで、諸君等には協力して貰う事も多々あるだろう。諸君等は前任者から不当な扱いを受けて来たと聞いているが、私はそんな真似をするつもりはない。だから諸君等も力を貸して欲しい。宜しく頼む。」

敬礼をして真っ直ぐ見つめていると、妖精さん達はお互いに顔を見合わせた後に、整列してビシッと敬礼を返してくれた。とりあえずは認めて貰ったといったところか。妖精さんは喋れないので、行動に



よって判断するしかない。まあ、ごく稀に妖精さんの声が聞こえる提督もいるらしいが、生憎自分にはそこまでの才能はなかったようだ。とりあえず手土産として持っていた金平糖を妖精さんの前に置くと、興味津々のようだ。

「これは挨拶代わりの贈り物だ。仲間の妖精さん達と分けて食べて欲しい。今後の諸君の活躍に期待している。」

そう伝えると金平糖に一気に妖精さんが群がって行く。ここまで大喜びなら掴みとしては上々だろう。・・・いつの間にか妖精さんの人数が増えてる気がする。どこかで隠れて様子を見ていたのだろうか？

「いやー、提督良かったですねえ。妖精さん達も大喜びみたいです。それにしても甘い物で買収するとは、なかなかやりますね〜」

「鎮守府の運営には欠かせない存在なのだから、関係を良好に保つのも提督の仕事だ。それに相手の好物を知っているならば、関係改善にそれを贈るのは常套手段だろう？」

「あーなんと言うか・・・打算を一切隠さないその発言はどうかと思いますが・・・いや、むしろ正直で良いのかな？」

目の前でその事を口にしてしまった夕張も、かなり分かりやすい方なのではないだろうか？正直なところ人間と友好的な関係を築くのは苦手な方だという自覚はある。これがお互いの利害がはつきりした関係や、こちらと敵対するような相手なら慣れたものだが・・・「私も軍人だ。馴れ合いよりは利害関係で動いた方が良いだろう。軍とは合理性を求めるものだと考えている。しかし艦娘達や妖精さんにも感情があつて、しかも通常の軍人とはかけ離れた性格の者も多いとなると、普通の軍隊のようにはいかなから苦勞するだろうな。」

「と言いますと？」

「例えば士官学校時代に居た霞だが、頻繁に提督を罵倒する存在として有名だが、普通の軍人が上官にそんな事しようものなら、即座に懲罰ものだ。うちの鎮守府でも本当に真面目な性格で、軍人らしい者は少ないのではないか？特に駆逐艦達は精神的に幼い者も多い。」

「あー、それはそうかもですねえ。でも駆逐艦の娘達だって軍艦とし

ての誇りを持っていますし、任務には真面目に取り組んでいると思いますが？」

「ああ、そこに関しては信頼している。だからこの話は戦闘時以外の話だな。まあ、ある程度妥協しなければ鎮守府の運営そのものが成り立たない事は、士官学校できちんと学んだつもりだ。あまり心配する必要はない。」

「提督も色々と考えられてるのですね。私は兵器の開発とか整備とかには詳しいですが、その辺りの事はよく分かりません。」

夕張は難しそうな顔をして、首を捻っている。やはり軍人というよりは職人気質なのだろうか？

「その辺りの調整も私の仕事なのだろう。規律を大きく乱すようならば、罰を与える必要があるだろうが、ある程度の許容力が無ければ上手く艦娘達を扱えないだろうからな。」

「提督も大変ですね。」

確かに大変ではあるのだが、素直で純粋な者が多い艦娘の相手なんてまだ楽なほうだ。人間相手の苦労とは段違いだ。しばらく夕張と話をしていたら、夕張の肩に一人の妖精さんが登っていた。両手に金平糖を持っていて、一つ夕張に差し出しているようだ。

「あ、私にも分けてくれるの？ありがとう♪」

その妖精さんは夕張の口に金平糖を投げ込んで、肩の上で自分の金平糖を食べて満足そうな表情だ。しばらく妖精さんの様子を眺めていると、こちらに向かって敬礼をした後に、少し光ったかと思うと夕張に吸い込まれるように消えていった。

「・・・今のはどうなったんだ？」

「あら？提督は初めて見るのですか？今の娘は普段私の中で計器とかの制御をしてくれている妖精さんで、金平糖に釣られて出てきてたのですが、満足してまた私の中に帰って来たんですよ。」

そうだったのか・・・知識として妖精さんが艦娘に搭乗して、主砲や艦載機などの制御をしている事は知っていたが、実際に乗り込む姿は初めて見た。やはり艦娘も妖精さんも謎が多いな。改めて作業台の上を見ると、満足してごろごろしてるもの、仲間に持って行くのか

金平糖を背負ってどこかへ行く者など様々な動きをしている。

「さて、妖精さん達、そろそろ仕事の話をしても構わないか？」

作業台の上の妖精さん達に声をかけると、改めて整列してから敬礼をしてくれる。どうやらやる気は十分のようだ。

「今日は執務室の修繕と私室の改装を頼みたい。執務室は壁が崩れてしまっているのです、そこを修理して貰いたい。そして私室だが無駄に豪華で広すぎるので、シンプルな部屋を二部屋にしたい。大仕事になるが頼めるか？」

そう聞くとハチマキを頭にしてノコギリを持った妖精さんが、腕捲りをしてドヤ顔をしている。どうやらやってくれようだな。

「ああ、提督、妖精さんに頼むのは良いんですが、妖精さんが作業している間には中に入れなくなりますけど大丈夫ですか？」

少し慌てたように夕張が注意してくるが、特に問題はないだろう。

「ああ、問題ない。忠告感謝する。」

さてと、これで執務室と私室の問題は解決しただろう。夕食までまだ時間が残っているし、一組くらい面談でもしておくか。本当ならば演習の結果を見てからが良いのだが、流石にまだまとめ終わって無いだろう。

「それではこれで失礼する。夕張のおかげで妖精さんとも良好な関係が構築出来た。感謝する。」

「い、いや〜当然のことをしただけですよ〜」

若干照れた様子の夕張に改めて礼を言って、工廠を出て執務室に向かう。さて、誰を呼ぶべきだろうか？

「提督さ〜ん！待って下さ〜い！」

振り返ると夕張が工廠から慌てて出てきた。何か忘れ物だろうか？

「今大淀さんから連絡があつて、正門にお客様が来てるみたいです。門番をしている憲兵さんは『北条麗子』さんが来られたと言ってます。お付きの執事さんも居るそうですが、お知り合いですか？」

「はあ・・・士官学校の同期だ。大淀と長門は作業中で、陸奥も報告書を作っているだろうな。加賀に連絡して応接室に案内するように

言ってくれないか？」

「はい・・・加賀さんから了解しましたとのことですよ。」

「分かった。助かる。」

それにしてもあのお嬢様は、アポ無しで唐突に来やがったな・・・

## 52話（対話 北条）

「提督、お客様をお連れ致しました。」  
「入れ。」

応接室で待っていると加賀から声をかけられたので、入室の許可を出す。北条が執事を連れて入って来た。少し茶色っぽい髪を腰の辺りまで伸ばして姿勢も良くて顔立ちも良い為、艦娘達と比べても劣りはしないだろう。

「おーほっほっほっ！数日ぶりですわね葛原！提督になったと聞きましたが調子はどうですか？」

高笑いと共に上から目線で話しかけてくる。本当にこの性格さえなければなあ……

「はあ……厄介事が多すぎて困っているところだな。それで何の用なんだ？」

対面のソファに腰かける北条とその背後に控える執事の……確か本郷さんだったか？そして加賀は自分の背後に控えてくれるようだ。

「ため息をついてばかりだと幸せが逃げてしまいますわよ？昼間に織田の奴が貴方の着任祝いをしたと聞きました、負けてはいられないと思っただけで直接伺って差し上げましたの。」

「は？織田から連絡があったのは昼前だぞ？その短時間でここまで来たのか？」

「ええ、プライベートジェットがあればすぐですもの。おーほっほっほっ！！」

相変わらず無茶苦茶な奴だ。深海棲艦の襲撃で空港も大打撃を受けた為、日本の航空機関はほとんど使えない状態だ。一応空港の滑走路自体の整備は出来ているところもあるし、国内であれば一応制空権は確保しているので、使えない訳ではないのだが……まさか北条がプライベートジェットまで所有していたとはな……

「プライベートジェットまで持つてるとは思わなかったな……それもお前のところで作ったのか？」

「ええ、正確に言えば深海棲艦に破壊された航空機から部品を集めて、再構築したものですわ！もちろんそれを行う技術があつてこそですけど。」

「流石は北条工業と言つたところか。」

北条の実家の北条工業は深海棲艦の襲撃後に急速に力を伸ばして来た会社だ。以前は中規模の金属加工工場だったそうだが、『技術の再生』を社是として深海棲艦の襲撃で失われた技術を再び使えるようにする活動をしている。深海棲艦の襲撃で職を失った技術者を職種に関わらず受け入れたり、会社そのものを吸収合併することで、様々な分野に手を出す事を可能としている。今の日本の再建に最も貢献している民間企業と言つても過言ではない。妖精さんの謎の力に頼りきった鎮守府のようなものではなく、人間本来の技術を使うことで安定して大規模な生産が可能になるのが魅力だろう。

「おーほっほっほっ！北条工業の素晴らしさを理解して頂けたかしら？そんな会社の後押しを受けている私が提督としての才能も持つのですよ？それはもう提督のトップに立つべき存在になるでしょう？ですから今のうちに私の傘下に入る事をオススメしますわ。」

「またその話か・・・何度も誰かの傘下に入るつもりは無いと言つたはずだ・・・」

正直に言えば北条工業の後ろ楯は魅力的な存在かもしれない。しかし提督として各方面に敵を作ってしまったのに、さらに北条工業内部での権力争いにまで参戦するのは無理難題だろう。あれだけ大きな企業なら久藤提督や鶴野提督と繋がっている者達も当然居るだろうからな。

「相変わらずつれないですわね・・・私は貴方の提督としての才能をかなり評価してますのに。まあ、良いですわ。今日は同期の提督就任のお祝いに来たのですから、細かい事は置いておきましょう。どうせいずれは私の傘下に入るでしょうし。」

「はあ・・・まあ、そういう事においてくれ・・・」

北条の頭の中では自分が傘下に加わる事は決定事項のようだ・・・これだから我が儘なお嬢様は困る。

「そう暗い顔をするものではありませんわ！着任祝いとしていくつか貴方にプレゼントを持って来ていますのよ？本郷！」

「はい、お嬢様。こちらを。」

本郷さんがテーブルの上に大きめのカバンを置いたが、果たして中から何が出てくるのやら？

「まずはこれ、カメラですわ！聞いた話ですと貴方は鎮守府の捜査も任されているそうですね。ですから捜査にはカメラが必要だと思いますの！それからこっちはボイスレコーダーですわ！貴方には敵も多いみたいですし、こういうのも役に立つと思いますの！どうです？私の心遣いに感謝なさい？おーほっほっほっ!!」

確かに希少品でありがたい物だが、両方とも手に入った後に持つてくるタイミングの悪さ・・・どうせくれるのであれば、自分が向こうを出る時に渡して貰えればと思ってしまうのは贅沢だろうか？いや、他人の善意からの贈り物にケチをつけるのは良くないか・・・

「あ、ああ。助かる。」

「それと最後にスタンガンですわ！貴方は本当に敵が多いですから、これでバチバチやっちゃいなさい！」

ほほう、ずいぶんと過激な事を言うものだ。後ろの加賀が若干引いてる気がする。一応士官学校で柔道等の武道は習ったが、自衛手段は多いほうが良い。

「ほほう、自衛の為の道具はありがたい。いざという時は自分の身は自分で守らなければならぬからな。」

あくまでも自衛の為の道具ということを主張しながらスタンガンを受け取る。あくまでも自衛の手段の一つだ。これで敵対する奴等を襲うなんてのは無しだ。

「そうでしょう！そうでしょう！もつと感謝しても宜しくてよ？おーほっほっほっ!!」

ああ・・・本当にこの性格さえなければ素直に感謝するのだがなあ・・・悪意が無いので対応に困る奴なんだよなあ・・・

「わかったわかった、また何か困った事があれば声をかけるかもしれないから、宜しく頼むな。」

「ええ、任せなさい！未来の傘下の者には寛大な心を持っていますもの！おーほっほっほっ！」

面倒な性格だが北条工業の技術力は本物だからなあ、関係は維持しておいたほうが良いので困ったものだ。

「お嬢様、そろそろ次の予定の時間が迫っております。」

「あら？もうそんな時間ですか？では葛原、私はこれで失礼致しますわ。将来の為にしっかりと艦娘を鍛え上げて、立派な艦隊を作りなさい！良いわね？」

「ああ、言われるまでもない。加賀、二人を送ってくれ。」

「はい、お任せ下さい。」

今までずっと黙って控えていた加賀に二人を送って貰う。加賀は本当に真面目で任務に忠実なので、艦娘の中でも一番軍人向きの性格なのではないかと思う。何はともあれ色々と贈り物を貰えたのはありがたい。カメラもボイスレコーダーも2台あって困るものではないからな。・・・そう言えばカメラの現像はどうすれば良いのだろうか？青葉のカメラのように妖精さんに頼めたら楽なんだが、せめてこの街に現像できる場所があれば助かるのだが・・・



## 53話

北条との話の後に営倉掃除の様子を見に来たのだが・・・どこからかホースを引っ張って来ているのは良いとして、中から楽しげな声と水をかかなりの勢いで出している音がする・・・いったい何をしているのだろうか？

「どうですか？どうですか!?この威力!!私と妖精さんの力の前に汚れなんて無力です!!さあどんどんいきますよー!!」

「明石さん凄いつばい!!これならお掃除簡単に終わるつばい!!」

「そうでしょう!?!いや〜真柴さんに貰ったアイディアでこっそり作ってみましたが、なかなか凄い物が出来ましたねえ〜これは今日のMVPは頂きですね!!」

「今回のいっちゃんばんは明石さんに譲るしかないかなあ〜こんな便利な物作って〜」

「はっはっは!〜ついに!〜ついに!!この明石の時代が来たみたいですね!!」

そこには高圧で水を発射する機械を手に自慢する明石とはしゃぐ夕立と白露が居た。他の者は既に水を撒いた場所でブラシを使って掃除しているようだ。さて・・・

「ずいぶん楽しそうだな?」

その一言で今まではしゃいでいた3人の動きが止まり、ギギギと音がしそうなほどぎこちなくこちらを振り返る。3人とも冷や汗をダラダラ流しているのは見えていて少し面白い。

「あ、い、いや〜その〜」

「どうした?作業を続けないのか?」

取り敢えず一旦水を止めて明石が慌てながら説明しようとする。

「これは、そのですね、掃除用の洗剤等を発注した時に、真柴さんから高圧洗浄機なるものを聞きました。なんでもレンガや石造りの部屋の掃除に便利な物だとかで・・・それで勝手に購入するのはダメなので自分で作れないかなあと思った訳でして・・・決して営倉掃除が面

倒だったとかではなくてですね・・・その・・・ごめんなさい。」

なるほど真柴さんから高圧洗浄機の購入を勧められたが、購入するには自分の許可が必要だから、明石が妖精さんとこつそり作ってみた。しかも営倉掃除の罰が面倒だったからと自白までしている。

「大淀。」

「は、はい、その、明石さんに水を撒く為のホースを持ってくるように頼んだのですが・・・かなり強力なのを持って来たみたいですが・・・でも凄く便利でしたので・・・」

なるほど、あくまでも水を撒く為のホースで押し通すつもりか。というか今回は説明を求めただけで、怒ってはいないのだがな・・・勝手に開発した事以外は。

「まあ、今回の命令は営倉の掃除をする事だから、その手段までとやかく言うつもりは無い。怪我なくきちんと掃除をしているなら問題無い。」

そう宣言すると緊張していた空気が弛緩する。今回の件は命令を効率的に遂行するために、現場の人間が知恵を出したので、むしろ誉められる行動ではある。

「ただし、明石、勝手に開発して報告もなく使用するとはどういうつもりだ？より効率的に仕事をしようとすることはとても良い事だと思うが、全てを無許可なのは問題だよな？」

「はい、申し訳ございませんでした。」

服や足が濡れるのも気にせず綺麗な土下座を敢行する明石・・・いや、そこまでする必要は無いのだが・・・

「理解出来たならもういい、今後何か開発したい時は事前に一言相談するように。」

「はい、今後はきちんと報告します。」

「では作業を再開してくれ。明石、その高圧洗浄機の性能が見たい。説明と実演を頼む。」

そう言うときさっきまでしゅんとしてたのが嘘のように笑顔を輝かせている。ああ、やっぱりこいつも技術屋なのだな。

「はい！お任せ下さい！！」

その後明石の説明を受けながら掃除を続け、予定よりも大幅に早く掃除が終わった。しかもかなり綺麗になっているのも良い点だ。道具一つでここまで変わるのだから、技術力とは侮れないものだな。

「ではこれで掃除は終了とする。もうすぐ夕食の時間になるから、早めに入渠施設で汚れを落とすように。」

「はい！」

「あ、提督、もうすぐ天龍さん達哨戒組が戻って来るそうですがどうされますか？」

「天龍達にも入渠施設で汚れを落とすしてから、食事にするように伝えてくれ。報告は後で構わない。私も食事前に少し汚れを落とすから食堂に行く。」

「はい、そう伝えておきます。」

さて、とりあえずシャワーでも浴びて着替えておこう。

## 54話（3日夕食）

シャワーを浴びて気分良く食堂に向かうと、艦娘達は既に食事を始めていた。いつも通り反応しようとするのを手で制す。注目を集めているようなので、今のうちに声をかけておくか。

「食べながらで構わないから聞いてくれ。食後に重要な話をするつもりだ。だから食後はそのまま食堂に残っていてくれ。以上だ。」

自分の発言を受けて艦娘達がざわめき始める。今日の演習の話だろうか？今後の予定だろうか？等の意見が飛び交う中で、明日の筆記試験の話っぽい！？と絶望感を出している者もいた。何はともあれまずは食事を済ませるとしよう。間宮の元へと向かうと、手際よく準備をしてくれた。

「提督、お疲れ様です。」

「お疲れ様。今晚のメインはオムライスか。洋食も作れるのだな。」

「はい、和・洋・中なんでも作れますよ。もちろん材料が手に入る物に限りますし、この人数ですのであまり凝ったものは作れません。」  
「献立の組み立て等に関して私は素人だ。間宮がやり易いようにやってくれ。」

「はい、お任せ下さい。」

間宮から食事を受け取って席を探そうとすると、すかさず青葉が近寄って来た。

「ささっ、司令官、こちらの席へどうぞ。今日は青葉達と食べましょう！」

青葉が案内する方を見ると、こちらに手を振っている鈴谷と、我関せずと優雅に食事を楽しんでいる熊野が居た。まあ、熊野も嫌がっている訳では無いようだし、誘いに乗っておくか。

「分かった、一緒に食べるとしよう。」

青葉がささっこちらへと、椅子を引いて青葉の正面の席へと誘導してくれる。左隣に鈴谷が居て、鈴谷の前に熊野が座って居る配置だ。手を合わせてから食事を始めると、青葉が好奇心に目を輝かせながら質問してきた。

「それで司令官！大事な話とは何ですか？青葉気になります！」

「あ、鈴谷もそれ気になる。」

なるほど、それが目的だったか……他の艦娘達も気になるのか、少し食堂のざわめきが鎮まって聞き耳を立てているようだ。

「さつきも言ったが食後に艦娘達全員を集めて話をするつもりだ。大事な話だからきちんとなら場を設けて話すつもりだ。」

「ええ、そんなくあんな事言われたら気になってしまいますよ、教えて下さいよ。」

はつきりと断つたがまだ食い下がってくるか、面倒な奴め……それならこちらにも考えがあるぞ？

「ふむ、青葉は食事よりも仕事の話の方が気になるぞ？」

「はい！もちろん食事は楽しみですが、青葉の好奇心が疼いてしまいました！」

「では、先に写真の現像の件と……盗み聞きをしていた件について話をしようか？」

そう言った途端にピタツと止まり、冷や汗を流しながら目線を逸らした。分かりやすい奴だな。

「あ、えっと……お仕事の話は後にしましょう。ええ、美味しいご飯が冷めてしまってもったいないです。アハハ……」

「青葉……盗み聞きして……」

「ああ！鈴谷さん！そんな目で見ないで下さい。誤解です！いや、その、ちよつと気になってしまっただけで、別に盗み聞きしようなどではなくてですね！少しだけドアから離れるのが遅くなったのかなんと言うか……」

「え、それ完全にアウトじゃん……青葉は今晚営倉行きかあ……」

「いやああ!!司令官！なにとぞ、なにとぞ寛大な処置を宜しくお願い致します！あ、お疲れでしたら肩でもお揉みしましょうか？」

青葉は揉み手をしながら低姿勢でご機嫌伺いをしてくる。本当に分かりやすい奴だ。

「食事中に肩揉みなんかされたら食べにくいだろうが……良いから座って食事しろ。」

「はい・・・分かりました・・・」

とぼとぼと大人しく自分の席に座る青葉。無罪放免とはいかないが、この態度を考慮してあまり重くない罰を考えておこう。

「仕事の話と言えばだが、鈴谷、演習はどうだった？」

「あ、それぞれ！鈴谷ちよー頑張ったからさあ！鈴谷褒められて伸びるタイプだし！うーんと褒めてね！」

「ほう、自信有りと言ったところか。結果を見るのが楽しみだな。」

「あ、いや、結果は普通かもだけど・・・鈴谷こういうの初めてだし、経験なかったからやり方がよく分からなかったっていうか・・・でもでも一生懸命頑張ったからさ！」

ふむ、それは一理あるな。今まで演習も実戦も経験させて貰えなかったのだ。いきなり動けるようにというのは無理があるな。

「そういえば、長門がやる気のある奴には計測だけでなく練習もさせたと言っていたな。」

「そうそう！そういうところ！鈴谷頑張ったんだから！これで熊野にや負けないねえ〜」

「はあ・・・鈴谷、そういうことは私に勝ってから言うものではなくて？」

「いや！鈴谷けっこう勝ってたじゃん！」

「これだから鈴谷は・・・優雅さが圧倒的に欠けていましたわよ？」

「え!?!それ関係無くない!?!」

その後も姦しく言い合う二人を眺めながら食事を進める。熊野も初めての演習で鈴谷と張り合っていたのなら、それなりに成果があったのだろう。

「あ、あのく青葉も午前中は演習頑張りましたからね？ですから温情の余地を頂ければなあなんてですねえ・・・」

・・・ふむ、相変わらず間宮の料理は美味しいな。この料理が毎日食べられるのは大きな利点だろう。

## 55話

食事を終えてから問宮に食器を返却していると、大淀と長門の指示で机や椅子を端に寄せ、全員が整列出来るスペースを確保する。大事な話と言ったからきちんと場を整えてくれたのだろう。問宮も片付けは後回しにして列へと加わり、大淀が全員揃った事を報告してくれる。簡易的に用意された台に登り、こちらも話を準備が整った。

「総員、提督に敬礼!!」

「諸君、今回話をするのは前任者の汚職調査の件だ。諸君等との面談や私室の調査等から得られた情報を元に、私がさらに調査を進めて決着の目処が立った。まずは諸君等の協力に感謝する。」

艦娘達にとつては想定外だったようで驚いているようだが、それほど動揺は無いようだ。

「しかし最初に伝えておくがこれは決着であつて解決では無い。罪を犯した者全てが罰せられる訳では無く、諸君等の中には不満を抱く者が出るだろう。だが私はこの方法が最善だと判断し、準備を整えて交渉した結果だ。この決定は諸君等の意見で変更されない事を予め伝えておく。」

流石に雰囲気重くなつたな。特に天龍なんかは思いつきり睨んでいるが、まだ突っ掛かるのは抑えているようだ。龍田にお説教されたのが効いているのか？

「まず初めに前任者の汚職の罪状だが、全てを上げたらキリがないので、諸君に關係している艦娘の不正使用についてだけ話そう。本来艦娘は軍事目的に使用するもので、鎮守府の運営に関わる事から大きく逸脱した命令をする事は罪に問われるものとなる。これをどれだけの提督が守っているかは考えたくないがな・・・諸君等は客人の接待に使われた者も多いと思うが、当然これは違法行為だ。しかし一番の問題行為は、艦娘を一般人相手に密売していた事だ。これは平川市長を通して販売していたようで、明日平川市長はこの件で捕まる予定だ。そして売られていた艦娘達も明日にこの鎮守府に返還される事になつている。人員は軽空母龍驤、重巡洋艦高雄・衣笠・摩耶・羽黒、

軽巡洋艦球磨・五十鈴・神通、駆逐艦隴・漣・潮の計11名だ。」

流石に今回ばかりは動揺が激しいようだ。仲間が売られていた事に憤慨する者、姉妹艦や仲間が帰って来ることを喜ぶ者、駆逐艦の方では泣き崩れた曙の周りで声をかけているようだ。

「提督、質問良いだろうか？」

ざわめきが収まった後に長門が拳手してきた。まあ、当然疑問に思うことは多いだろう。

「ああ、許可する。」

「色々聞きたい事はあるが、まずはこの鎮守府に売られた仲間が帰って来た場合、どういう処遇になるのかを聞きたい。」

「私としては全員戦線に復帰出来るようにするつもりだ。ただしまだ彼女達の状態を私は確認していないし、彼女達の意味も確認していない。今どうするかを断言は出来ない。」

「了承した。私達も彼女達の復帰を支援させて貰おう。次に提督が初めに言っていた私達が不満を抱く事についてきちんと説明をして頂きたい。」

「明日平川市長が捕まると言ったが、捕まるのは平川市長だけで他の者、つまり平川市長から艦娘を買っていた者達については処分が下されない事だ。それと他の汚職の件について目を瞑る事も条件だ。」

「おい!!それは流石に納得出来ねえぞ!!」

・・・ついに天龍の抑えが効かなくなったか、まあ、無理もないか・・・  
「俺達も散々汚されたけどよ、売られた奴等ってのはもつと惨めな思いをしてたはずだ!!それなのにそんな思いをさせてきた奴等が無罪放免なんて納得出来る訳ねえだろうが!？」

「その言い分はもつともだな。だが現実はそのままで甘く無い。そもそも上の奴等は腐っているから、まともに捜査して証拠を上げた所で握り潰されるのが目に見えている。そして早急に売られた艦娘達の返還を求めるならば、それ相応の妥協をしなくてはならない。」

「だからって納得出来るかよ!!」

天龍は龍田の制止を振り切って吠えていて、やはり納得は出来るものではないようだな・・・



「気持ちには分からなくはない。しかし天龍、この件を長引かせてしまったら、連中は証拠隠滅の為に売られた艦娘達を別の鎮守府で解体する可能性が出てくるぞ？そうなってしまえば艦娘達が戻って来ないのももちろんだが、奴等の罪を追及する事も出来なくなる。だから艦娘達の返還を最優先にした結果、こういう決着になった。」

「チツ・・・そうかよ・・・」

ようやく天龍も落ち着いたか。納得は出来ないようだが、仲間が最優先だと言われれば、これ以上突っ掛かるのは諦めたか・・・するとまた長門が挙手をした。どうやらまだ質問を続けるようだ。

「天龍が失礼した。それでは提督、なぜ艦娘達の保護を最優先としてくれたのだ？」

「ふむ、戦力増強の為だ。はつきり言うが私は汚職事件や上層部の権力争いには興味が無い。私の現在優先すべき事はこの鎮守府の再建だ。そして現在の鎮守府は巡洋艦や駆逐艦の人数が不足している。もちろん通常ならば建造すべきなのだろうが、資材を消費せずに艦娘を手に入れる事が可能ならば、そちらを選ぶのが道理だろう。」

「・・・つまり売られた艦娘達を助けたいからではなくて、あくまでも鎮守府の運営に必要なだからと言うことか・・・」

「ああ、そうだ。感情論で動くところくなことが無い。だからこれは私が今の鎮守府に利益があると判断した結果だ。」

やはり重苦しい雰囲気がある。しかしここで感情論で動くことを認めてしまえば、天龍の言い分を通さなくてはおかしくなる。だから艦娘達に悪い印象を与えたとしても譲るべきでは無いだろう。

「・・・承知した。思うところが無い訳では無いが、結果として仲間の命を救う事になるのだ。私は提督の考えを支持しよう。それで私達はどうか動けば良い？」

なんとか長門は納得してくれたようだ。まとめ役の長門が感情的にならずに判断してくれるのはとても助かる。

「基本的には何もしなくて良い。むしろ現状を壊さない為にも何もするな。明日の朝から私はこの件で外出するので、留守を大淀と長門の

二人に預ける事になる。だからその間哨戒任務と緊急時の対応を任せる事になる。後は帰って来た艦娘達を迎え入れるだけで構わない。」

「承知した。護衛は誰か連れて行かないのだろうか？」

ふむ・・・護衛か・・・正直に言って人間相手だと艦娘の護衛は頼りない。人間に攻撃出来ない性質上、盾として振る舞う事は出来るが相手への抑止力にはなり得ない。だが居ないよりはマシではあるか・・・人選は交渉について何も言わない者に限るな。

「そうだな・・・一人連れて行こう。人選については明日の朝に指示を出す。連絡要員としても必要だからな。他に聞きたい事がある者はいるか?・・・居ないようならば話は以上だ。では解散。」

「総員、提督に敬礼!!」

いつもの長門の号令で話は終わった。私が食堂を出ると、背後からざわめきが聞こえて来る。艦娘達にも当然思うところがあるだろう。願わくば明日の朝までに折り合いをつけて欲しいものだ。

## 56話（面談 天龍・龍田）

会議室に戻るとすぐに大淀が今日の演習の結果を持って来てくれた。大淀に今日の業務はこれで終わりだと伝えて、退室させてから資料に目を通していく。練度の差もあるかも知れないが、やはり精神状態で大きな差が出ているようだ。戦艦だと長門や陸奥の成績が良く、続いて大和と榛名、そして榛名以外の金剛姉妹は大きく差が開いてしまっていて、特に砲撃精度が問題だろう。空母も一航戦と五航戦での差が大きく、今後の運用に影響が出そうだ。しかし戦艦組も空母組も航行能力の低さが課題だ。直線的な航行はともかく、障害物を置くと航行能力がかなり落ちる。駆逐艦達を盾にする戦法の弊害だな。重巡洋艦の三人はまずまずの成績で、練度の割には頑張ったのが感じられる。龍田と川内もまずまずの成績だが、練度に差があるはずなのに同じくらいか・・・やはり川内は夜戦じゃないと調子が出ないか・・・駆逐艦は島風・雪風が飛び抜けていて、夕立がなんとか食らい付いている印象だ。吹雪・睦月・如月の3人も気になるところだが、やはり曙の成績は酷いものだ。姉妹艦が帰ってくれば少しは持ち直すだろうか？潜水艦の二人の成績もあまり良くはないが、練度の低さを考慮すればそれ相応と言ったところだな。とりあえず問題点の洗い出しが出来たので、成果としては十分だろう。

コンコンコン

「あー、天龍だ。龍田も居る。」

「入れ。」

入室を許可すると、不機嫌そうな天龍と少し緊張した龍田が入って来た。さっきの件の続きだろうか？

「何の用だ？先程の件ならば最初にも言ったが、お前達の意見で決定は変えないぞ？」

「チツ・・・まあ、その話は後だ。先に哨戒任務の報告をしてなかったからな。そつちを先に済ませるぜ。」

「そう言えば報告がまだだったな。一応大淀から敵影無しと聞いていたが？」

「ああ、敵艦は見当たらなかった。……俺から言わせたら気に入らねえけどな。」

「はあ……活躍の場が欲しいタイプか。戦果を上げる事に前向きなのは良いが、敵が居ない事でイラついているのはあまり良くないな。いつもいつも戦闘があるわけでは無いし、こういうタイプは無茶な攻勢を仕掛けそうで怖いものだ。」

「はあ……哨戒任務も立派な仕事だ。何も無いならそれで良いのだが……」

「いや、そういう事じゃなくてな！なんと言うかよお……大概大きな戦闘があった後は、残党なりはぐれが寄つて来たりするもんなんだよ。それが全く無いのが気に食わないんだよ。」

「……なるほど。今回はきつちり殲滅したはずだから残党は無いと思うが、深海棲艦は戦闘があった場所に惹かれる性質があるのでは？という話があったな。はつきりとした根拠の無い話だが、大規模な戦闘の後には掃討戦をするのが通例となっている。まあ、今回に関しては姫級どころか鬼級も居ない小規模な群れだったので、考え過ぎと言えばそれまでなのだが……」

「懸念があるなら早めに警戒しておくべきか。龍田、川内を呼び出してくれるか？」

「あ、はい……すぐ来るみたいよ。」

「分かった。」

「チツ……はつきりとした根拠のある話じゃねえのに、こういうところでは俺達の意見を聞くんだな……」

「現場での事と上の奴等とのやり取りを一緒にするな。それにこういう懸念は早めに潰すに限る。何も無いならばそれで良い。何も無い事を確認出来るのだからな。」

天龍はしばらくこちらを睨んでいたが、ため息を吐いてやれやれと首を振る。

「今度の提督はよく分かんねえ奴だよ。人の気持ちを考えないクソ野郎かと思えば、俺達の生活環境整えたり、駆逐艦達を潰す戦法を使わないと言うし、独断で強硬な態度を取ったかと思えば、些細な意見も

聞き入れるとかどうなってるんだよ?」

「はぁ・・・それが必要だと判断すれば実行するだけだ。合理的に判断しリスクを極力回避する。上に立つ者はそうあるべきだと私は思うが?」

「チツ・・・これだから「提督!夜戦するの!?夜戦だよね!?夜戦しよう!!」

天龍の言葉はハイテンションで会議室に入って来た川内によって遮られた。苦虫を潰したような表情の天龍と満面の笑みの川内、そして苦笑している龍田。漂っていた重い空気をぶち壊して夜戦!夜戦!と騒ぐのは流石夜戦バカと言われるだけの事はある。

「天龍、悪いが話は後だ。川内には急で悪いが夜間哨戒を頼みたい。場所は昨日戦闘があった場所の方向で、さらに奥を調べて欲しい。ただしあくまでも偵察だから、交戦するような事が無いようにして欲しい。」

「ええー哨戒だけかぁ・・・まあ、夜の海に出られるなら良いけどさぁ。」  
「そう言うな。本来なら偵察機が使えない夜間の哨戒はリスクが大きいかから避けるべきだが、川内の隠密性と感覚を信頼して派遣するのだ。それで人員は誰が必要だと思う?」

「そういう事なら良いけど。うーん、見付かったらダメなら一人で行ったほうが良いかな?それなら敵の気配を感じたらすぐに逃げられるし。」

一人か・・・もしもの時はリスクが高いが、その代わり敵に見つかる可能性は大きく下がるだろう。ここは川内に任せるか。

「・・・分かった。ただし絶対に交戦は避けるように。良いな?」

「うん、任せて!じゃあ行ってくるね!」

会議室に入って来た時ほどではなくても、ご機嫌な様子で会議室を出て行った。

「なんだよ、ずいぶんと川内を信頼してるみたいじゃねえか。」

「前任者の時代に夜戦を一任されていた経緯とその戦果、そして先日の夜戦での活躍を見れば信頼出来る。だが信頼しているのは夜戦の能力だけだからな?例えばもし川内が今回の艦娘を返却させる話に

口を出したとしても、私はその意見を聞き入れないだろう。他の艦娘もそうだ。それぞれの仕事を信頼していても、別の分野について同様に信頼しているわけではない。そこは間違えるなよ?」

「分かった分かった。今度の提督はずいぶんと疑い深いのは良く分かったよ!前のクソ野郎よりは絶対に良いけど、面倒な奴だぜまったく・・・」

「天龍ちゃん?」一応黙って聞いていたけれど、あんまり口が悪いとまた言い聞かせないとダメなのかなあ?」

「ちよ、良いだろこれくらい。提督も怒つたなら警告してくるだろ!」  
「それって怒られない限り何しても良いって事かなあ?そんな事して逆鱗に触れたらどうするつもりなのかなあ?私を心配させないでっ  
ていつも言ってるのに、どうしてちゃんと聞いてくれないのかなあ  
?」

「ひいー」

さつきまで威勢の良かった天龍だが、龍田に詰め寄られてびびっている。というか笑顔なのに目が笑ってないのは普通に怖いか・・・  
「ここまで話をしたんだ、このまま面談って形にしたい。龍田は何か要望とか伝えておきたい事とかあるか?」

「え?私ですかあ?そうねえ・・・さつきの話へのお返しじゃないけれど、私は提督さんを信頼してませんからね?お仕事に関してはちゃんとしてくれるみたいだけど、それ以外に関してはいつ豹変するかわからないものねえ。だから提督さんが私達を見ているみたいに、私達も提督さんを見る事を忘れないで欲しいわあ。」

なるほど、これは肝に銘じておくべき事だな。笑顔を絶やさずにこういう事を言えるとは、やはり根は天龍に負けず劣らず好戦的なのだろうか?

「ああ、覚えておこう。少なくとも仕事に関して信頼されているならば今は十分だ。今後も宜しく頼む。」

「はあ、いい、宜しくお願いしますねえ。」

「天龍はまだ何かあるか?」

そう尋ねると少しだけ考え込んでいたが、意を決したように顔を上

げた。

「俺は軍艦として、艦娘として誇り高く生きていたい。だから前の提督みたいなクソ野郎の元で働くのは苦痛だった。あいつは俺達の誇りを散々に汚しやがった。だから提督には人の気持ちを、俺達の艦娘としての誇りを理解して欲しい。そうすればどんな過酷な戦場にだって立ち向かってやる。それで沈むなら本望だ！俺達はそれくらい覚悟を持っていてる事は知ってくれ。」

「・・・誇りか、なかなか難しい話だな。生憎私は人間の指揮官でお前は現場で戦う艦娘だ。物を見ている視線が違う。」

そう伝えると天龍が悔しそうに歯ぎしりをしている。

「だからこそ・・・だからこそ声をあげろ。気に食わない事があるなら主張しろ、言葉にしろ。そうでなければ伝わる事はあり得ない。もちろん私にも意思があり主義主張があるし、時には対立もするだろう。軍隊である以上お前達の意味に反する命令を下さなくてはならない時もあるだろう。それでも、誇りを大切にしたいなら主張する事は諦めないで欲しい。そうでなければ私にはお前達を理解する事は出来ない。」

「そうかよ・・・なら今後とも遠慮なく言わせて貰うぜ。だから提督、今後も宜しくな。」

「ああ、宜しく頼む。」

天龍がつき出して来た拳に拳を合わせる。これも天龍なりの流儀なのだろう。ずいぶんと男らしい流儀だな。

「じゃあ俺達はもう行くぜ、またな提督。」

「提督さん、おやすみなさあ〜い。」

「ああ、お休み。」

天龍と龍田を見送って一息ついてから、寢室代わりの応接室へと向かう。それにしても誇りか。私はその存在を知ってはいるが、私は誇りを持っているのだろうか？自分の目的の為に利益になるかどうかでしか判断出来ない自分に、誇りなどといった上等なものが理解出来るようになるのだろうか？そもそも復讐者に誇りなんてものが必要なのだろうか？

だが天龍の生き方は眩しく感じたな・・・



## 57話（悪雨登場）

応接室で寝ていると、誰かが近づいて来る気配で目が覚める。最初は川内かと思ったが、川内は今一人で夜間哨戒に出ているはずだ。それに足音を殺してこちらを探るような動きをしている気がする。それはおそらく相手は艦娘では無くて人間だろう。それもかなりの手練れだ。士官学校時代は悪戯レベルの闇討ちだったので、少し脅してやれば逃げ去ったものだが、残念ながらここは鎮守府の中だ。ここまですぐで逃げ込んで来た以上、目的を果たすか明らかに失敗しない限りは逃げないだろう。とりあえず武器になりそうな物を静かに探す。まずは北条から貰ったスタンガン、これが唯一まともな武器だろう。後はペンが数本と文鎮くらいか。机もソファも柵も武器にするには重すぎる。後は柵に入っているティーセットや本等も投げるくらいは出来るか・・・後は相手の武装次第だな・・・殺しに来たのなら拳銃やナイフくらいは持っているだろうし、盗みに来たとしても何かしら護身用の武器くらいは持つはずだ。応接室は2階なので窓から飛び降りて逃げることも可能だが、この暗さだときちんと着地が出来るか不安だ。もし着地に失敗して動けなくなればそこで終わりだ。やるしか無いな・・・

静かにペンと文鎮をポケットにしまい、貰ったばかりのスタンガンのセーフティを外す。相手はまだ扉の向こう側でこちらの様子を伺っているようなので、今のうちに扉に近づいていく。可能ならば相手がドアノブを掴んだ時に、こちらからスタンガンでドアノブに電流を流して仕留めたい。それが失敗したならば、せめて電気をつけることで視界の確保くらいはしておきたいものだ。位置としてはドアノブ側の壁際で、すぐに照明の電源が入られる場所で機会を待つ。相手も戸惑っていたようだが、ついにドアノブを掴んだようで、ゆっくりとドアノブが動いた！すかさずスタンガンをドアノブに押し付けて起動すると、バチバチツツ!!と派手な音がした。しかし相手は叫びも倒れもせず、ドアを勢い良く開けて、何かを突き付けてくる!!とつさに電気をつけてその場を離れると、パッパッパッ!と音が3

連続で聞こえた。おそらくはサイレンサー付きの拳銃だろう。ソファアの影に隠れる前に文鎮を投げつけたが避けられて、反撃に2発撃たれたがソファアに隠れて難を逃れた。ただし当たらなかつただけで、一発はソファアを貫通しているので、このまま隠れていても撃たれるだけだ。立ち上がりながらペンをまとめて投げつけたが、相手の銃撃が太ももに当たり熱い痛みが走る。幸いかすつただけのようだが、痛みを気を取られた隙に相手は拳銃を捨ててナイフを取り出す。一方的に撃たれるよりはマシだが脅威が去った訳ではない。相手が振るうナイフの一撃目を避けたものの、足の痛みにはバランスを崩してしまい倒れてしまう。そんな隙を逃す相手ではなく、馬乗りになって止めを刺しに来たのを、相手の腕を掴んでギリギリ生き残った。

「提督?」

暗殺者に殺されかけていると誰かの声がした。ふと視線を動かすと春雨の姿が見えた!

「春雨! 助けてくれ!!」

とりあえず叫んでみたが、正直この状況では期待出来ないだろう。普通の人間なら暗殺者に攻撃するだろうが、艦娘に人は傷つけられない。暗殺者の方も提督を殺せば、艦娘などどうとでもなると判断したのか、こちらを殺す事に集中している。

「え、えい!!」

そんな気が抜ける声と共に馬乗りになっていた暗殺者が吹っ飛び鈍い音がした。慌てて状況の確認をすると、暗殺者を突き飛ばしたであろう姿勢の春雨と、柵にぶつかって首があり得ない方向に曲がった暗殺者がいた!! 艦娘が人間に攻撃したのだ!?

「あ・・・あ・・・私・・・そんな・・・」

春雨はしばらく呆然としていたが、暗殺者を攻撃してさらには殺してしまったことを認識してしまい、頭を抱えて蹲りぶつぶつと不明瞭な独り言を呟き始める・・・

「落ち着け春雨! お前は私を助けてくれたのだ! お前は人を救ったんだ!! それにお前は私の命令に従っただけだ! 罪は上官の私が背負う

！だから落ち着いて深呼吸するんだ!!」

「い、いや・・・私・・・ワタシ・・・」

ついに春雨が倒れてしまったので、どうするべきか判断に迷う。暗殺者の方は即死だろうから一先ず大丈夫だろうが、春雨の方が問題だ。だんだんと髪の色が薄くなっているのは、おそらく深海棲艦化が進行しているのだろう。今回は白露型姉妹が入渠施設に入れたら、元に戻ったと言っていたので、今回も試してみるべきであろうか？ならばまずは入渠施設に運ぶのが先決か？それとも白露型姉妹が声をかけ続けたからこそその奇跡だろうか？それならばまずは白露型姉妹を呼ぶべきだ！そう思って会議室にあるはずの通信機を探そうとしたが、春雨がゆっくりと起き上がる。

「春雨!?!大丈夫か!?!春雨!?!」

起き上がった春雨の顔は青白く、髪の色も微かにピンクが残っているくらいだ・・・

「こんばんわ、提督。会えて嬉しいわ♪」

## 58話

「春雨・・・なのか？」

見た目はもちろんだが、口調もまとう雰囲気もガラツと変わった事に違和感を感じる。別人と言われた方が納得出来るくらいだ。普段のおどおどした雰囲気は無くなり、代わりに笑みを浮かべているが、その微笑みからは温かさを一切感じない。

「どうかなあ？普段の春雨じゃないけど、私も春雨の一部っていうか？深海棲艦になり損なった春雨っていうのが正しいかなあ？」

「・・・深海棲艦のなり損ないだと？つまり春雨の深海棲艦に汚染された部分って事か？」

「まあその認識で間違えでは無いかもねえ？私にもよく分からないんだけど。でもこうなった原因はあなた達人間よ？ずいぶんと酷い扱いを受けたものよ？この子が悪感情に染まるのも無理無いわ。」

「ああ、前任者の大森提督から酷い扱いを受けていたそうだから・・・人間を恨むのも仕方あるまい・・・」

そう言うとき春雨は笑みを深くして目が妖しく輝いた気がした。

「他人事みたいに言うのね？恨んでいる人間の中には提督も含まれるのよ？私の深海棲艦としての本能が人を殺せ、提督を殺せって囁くの。」

春雨はこちらに近づいて甘えるように、媚びるように身体を寄せると、そつと首筋を撫でてくる。それはきつといつでも殺せるぞと言う警告であり、獲物をいたぶつて遊ぶようなものだろう。嫌な汗が流れていくのを感じる。

「ならばどうして私を助けた？人間が憎いなら見殺しにすれば良かったのではないか？」

「さあね？それは春雨がやったことだもの。私はその背中を押しただけ。だから私には関係無いわね。」

「だがお前も春雨なんだろう？」

「・・・そうね。私が完全に別人格なら問答無用で殺してるかもね？」

春雨は自分からそつと離れて顔を伏せる。その表情は先程までの

余裕の笑みではなく、戸惑いを隠せないような感じだ。

「つまりまだ殺す気は無いと言うことか・・・ならばまずは先程は助かった、礼を言う。」

「だからそれは春雨が!!・・・いや、もういいわ。それでどうするつもり?」

「えらく曖昧な質問だな。まずは春雨について詳しく知りたい。」

「春雨なら心を閉ざしているわよ?人を殺したのが余程ショックだったみたいね。」

「そちらも心配だが、今一番気になっているのは、今話している春雨だ。お前の事をもっと知りたい。」

そう言うとき春雨はそっぽを向いて少し距離を取った。それから半目でこちらを睨んだ後にため息を吐く。

「ああもう・・・同じ春雨だと紛らわしいのよ。そうねえ・・・私は春雨の抱いた悪感情の象徴みたいな存在だし、悪雨って呼んでくれるかしら?」

「分かった。便宜上そう呼ぶとしよう。なら改めて言うが、私は悪雨の存在について詳しく知りたい。なぜ生まれ、どういう思考をして、何を求めているのか?私に協力して貰えるのか?その代価として何を求めるのか?聞きたい事は山程ある。」

「ちよつとちよつと!そんなに一度に聞かれても答えられないわよ!!って言うか何?私に協力を求めるつもりでいるの!」

「悪雨が春雨の一部ならば、交渉の余地はあると思っっているが?」

「バカじゃないの!?!なり損ないとは言え私は深海棲艦よ!!いつ本能に従って提督を殺すか分からない存在よ!?!それをどうして手元に置くのよ!?!」

悪雨が胸ぐらを掴んで叫んでくるが、その行動に殺意は感じない。ならば十分に交渉の余地はあるだろう。

「はつきり言っただけ今の悪雨は貴重な存在だぞ?たとえば半端な状態であつたとしても、理性的で会話が可能な深海棲艦なんてどれ程の希少価値があると思っっているんだ?艦娘以上に謎が多い深海棲艦の事を理解するチャンスだ。それに艦娘についても同時に理解を深める事

が出来るだろう。その事は提督をやる上で大きなメリットだ。リスクを犯して交渉する価値は十分にある。それに敵対しようとするなら今すぐ殺そうとするのだろうか?」

「そ、それは・・・私はそんな・・・」

胸ぐらを掴んでいた手から力が抜けていく。少しは落ち着いて話せるのだろうか?

「では逆に聞こうか? 悪雨はどうするつもりだったんだ? 私を殺してこの鎮守府を去り、深海棲艦として生きるか? それとも春雨としてここで生きるか?」

「そんなの・・・そんなのここで生きたいに決まってる!! 私だって春雨よ!! お姉ちゃん達と幸せに暮らしたい!! 暗い海の底で暮らしたくなんか無い!! 深海棲艦として皆を沈めるなんてしたくない!! そんな事したら・・・そんな事したら私を庇ってくれた村雨姉さんになんて言えば良いのよ!?! 沈んでしまった他の姉妹にどの面下げて詫びれば良いのよ!?! 私を助けようとしてくれたお姉ちゃん達に・・・何を・・・言えば・・・」

激情に任せて叫ぶ春雨がついには涙をこぼし始めた。最初に見せた冷酷な雰囲気は消え失せて、そこにはどうして良いか分からずに、震えて泣きじやくる子供がいた。

「ならばこの鎮守府に居られる方法を考えるとしよう。悪雨にここに残る意思があるならば、私はそれを歓迎しよう。この鎮守府の最高責任者が腹をくくったのだ。後は方法を考えるだけだ。」

そう伝えると悪雨は抱き着いてきて、大声で泣き始めた。余程不安だったのだろう。姉妹との幸せを諦めていたのだろう。その不安に耐えるのはこの小さな身体と未熟な心では辛かったのだろう。何故かは分からないが泣きじやくる悪雨が落ち着くまで、優しく頭を撫でていた。

悪雨を撫でていると、次第に髪の色が綺麗なピンク色に戻っていき、泣き声もだんだんと落ち着いていった。髪の色が戻ってしばらくすると、自分から離れて俯いていた。顔色もかなり良くなっているよ

うで、むしろ赤いくらいだ。

「春雨に戻ったのか？」

「えっと、そう……ですね、はい。」

「悪雨はどうしたんだ？」

「その……今は顔を合わせられないそうです、はい。」

「そうか……まだまだ聞きたい事があったのだがな。」

そう言うところを真っ直ぐと見つめてくる。

「あ、あの！その悪雨ちゃんから伝えたいことがあって、その、私の身体の事ですけど、悪雨ちゃんの影響で艦娘としてのリミッターが外れるから気を付けろって、はい。」

「リミッター？」

「えっと、本来艦娘は人を傷つけられないようになって、それが深海棲艦の影響で壊れてしまったらしくて……それに艦装をつけて無い状態でも、艦装をつけている時に近い出力が出てしまうから、力の使い方に気を付けろって言ってます、はい。」

艦娘を制限するリミッターか……何故そんなものが存在するのは分からないが、艦娘が人を傷つけられない原因はここにあったか。今までは艦娘自身の倫理観というのが一般的な解釈だったが、そんな説明よりは余程納得がいく話だ。それと出力の方も、普通なら提督が艦装の使用を許可することで、艦娘達が本来の力を発揮出来ていたのが、リミッターが壊れて常時使えるようになったと考えるべきか。ただし艦装を付けて無いので砲撃や雷撃が行えない状態だろうか？

「分かった、私も気を付けるが一番気を付けるべきなのは春雨だ。使い方を間違えないようにな？それと今日は私の命を救ってくれてありがとう。改めて言うが今回の件は命令した私に責任がある。だから春雨が必要以上に気に病む事はないし、この件で春雨が責められる事が無いように私が配慮しよう。」

「ありがとうございます。私を受け入れてくれて、悪雨ちゃんを受け入れてくれてありがとうございます、はい。」

「私には私の都合があるだけだ、気にするな。では悪いが私は事後処理をしなくてはならない。大淀を呼んでくれるか？春雨は入渠で少

し落ち着いたら、そのまま部屋へ戻って構わない。」

「わ、分かりました。．．．大淀さんはすぐ来るそうです。では提督、お休みなさい、はい。」

「ああ、お休み。」

さてと、夜は遅いがきっちり事後処理をしなくてはならないな．．．



## 59話

春雨が退室してからしばらくすると、大淀がやって来た。連絡があった時間帯を考えれば、寝ていたところを起こしてしまったのであろうが、服装も含めてきつちりした格好なのは流石だ。

「提督、お呼びでしょうか？夜間哨戒に出た川内さんからは特に・・・つて、提督!!足を怪我されてるじゃないですか!？」

「ん？ああ、少し銃弾がかすただけだ、心配するな。」

「銃弾がかすただけって！そんな軽いものではないですよ!!すぐに救急車を!!」

「待て待て！本当に大丈夫だ。あれだ、救急箱とかあるか？」

「すぐにお持ちします!!」

ドタバタと走りさつて少しすると、救急箱を持って来た。艦娘だらけの場所だが、きちんと人間用に用意していたのだな。

「手当てしますから、早くズボンを脱いで下さい!!」

そこまで焦るような怪我ではないのだがなあ。制服のズボンは穴が開いて、血が滲んでしまったので廃棄だな。

「少し落ち着け、いくら人間が弱いからと言ってこれくらいで死ぬ事は無い。とりあえず自分で処置をしながら要件を説明するから、ちよつと深呼吸しろ。」

「す、すみません・・・」

深呼吸をして一旦落ち着いた大淀だったが、すぐに奥で死んでいる暗殺者に動揺し、さらに自分が殺されかけた事を話した時にも、顔を真っ青にしていた。ちなみに怪我の手当ては別室で行い、ついでにズボンを履き替えておいた。

「・・・お見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ございません。それで提督はどうされるおつもりですか？通常なら憲兵隊に連絡して対応して貰うものだと思いますが？」

「死んでいるから尋問も出来ないからなあ。かと言って素直に憲兵隊に話をしたら、鎮守府内で起きた事件の捜査の為って言いながら、荒

らされるだろうな。ついでに言えばこの件だけでなく、他の件の証拠隠滅に手を出すかも知れない。」

「ではどうされるおつもりですか?」

「うちの門番をしている憲兵達は久藤提督の傘下だ。話をつけるなら久藤提督だろう。」

「久藤提督ですか!?でも久藤提督が刺客を送り込んだ可能性もあるのでは!?!」

「おそらくだがその可能性は低い。せつかく汚職事件が収まりそうな状況なのに、提督の暗殺なんて事件が起きれば騒ぎが大きくなる。あの人のメリットは低いだろう。大淀、久藤提督に連絡を繋げてくれ。」

まあ、可能性はゼロではないが、話を通さないととなるとこちらで隠蔽工作をするしかない。艦娘の力があればそれくらい可能だろうが見付かった場合のリスクが大きすぎる。見張られている可能性もあるからな。

「分かりました・・・少々お待ち下さい。」

今回は流石に久藤提督も寝ているだろうから、取り次ぎに少し時間がかかっているな。時間は現在の夜の2時だから、普通に考えたら電話するような時間では無いから仕方ない。

「提督お待たせしました。」

「ありがとうございます。」

さて、交渉を始めるか・・・

「もしもし、北九州鎮守府の葛原です。」

「こんな時間に電話とはなんのつもりだ?余程重要な要件なんだろうなあ?」

「いえ、先程こちらにプレゼントが届きましたので、そのお礼をと思いまして。」

「はあ!?!なんの話だ!?!ふざけてねえでさつさと要件を言え!!」

「私の元に暗殺者を送り込んだのでしょうか?なら交渉決裂ですので、宣戦布告のお電話ですよ。」

「暗殺者だ?!?!その話は本当か!?!」

ふむ、この反応はやはり白か?

「ええ、先程襲われたばかりです。幸い撃退しましたので軽傷で済みましたが。」

「犯人は捕らえているのか!? 捕らえているなら拷問でもして吐かせろ!! 少なくとも俺は暗殺者を送ったりはしていない!!」

「やはりそうですか・・・試すような真似をしてみません。申し訳ないですが、犯人は揉み合いとなった時に柵にぶつかってしまいました、打ち所が悪かったようで即死しました。」

「てめえ初めから俺の指示じゃねえと読んでやがったな?」

「当然ですね。本当に依頼人だと思っっているなら電話なんてしませんよ。」

そう応えると電話の向こうから大きなため息が聞こえてくる。こつちもそれ相応の緊張をしているのだから、こつちがため息を吐きたいくらいだが、まだ油断出来る状況ではない。

「まったく・・・かまかけて来るとは良い度胸だな。それで、犯人の心当たりはあるのか?」

「そうですね。本命が平川市長で対抗が鶴野提督でしょうか? 平川市長はこちらを凄く恨んでいるようでしたので、そつちなら話が簡単なのですがね。」

「鶴野提督が候補に上がった理由はなんだ?」

「単純に利益の話です。もし私と久藤提督の取引が鶴野提督に伝わっていた場合、妨害の為に送り込んで来たというのが自然な流れかと。とりあえず明日平川市長を締め上げれば、どちらが犯人か分かるでしょう。」

「それで? わざわざ電話して来たんだ、何か用件があるのだろうか? 揉み消しか?」

流石に頭の回転が速いな・・・話がスムーズに進むのは悪くないが、敵としては厄介な奴だ。

「大事にしたくないのと、リスクを残したくないので。うちの鎮守府にいる憲兵隊だけで簡単に処理をして頂きたい。それならば一応憲兵隊の捜査が入ったと言い訳出来ますし。久藤提督のメリットとしては、大本営の憲兵隊が捜査に来れば、鶴野提督の傘下の憲兵も来る

でしょう。その時に色々と探られるのは困るでしょうから、それを防げますよ。」

「分かった。そちらの憲兵に指示を出すから。さっさと遺体を片付けさせろ。」

「ありがとうございます。それでは私はこれで失礼します。」

「ああ。上手くやれよ。」

その後憲兵に犯人の遺体を引渡し、ほとんど捜査しないまま帰っていった。これでゆっくり眠れるな。

「提督、お疲れ様です。川内さんから報告です。夜間哨戒をしたところ、遠征の目的地の一つである資材溜まりに、敵艦の気配が多数あったとの事です。戦闘を避ける為に帰還するとの事です。」

「ご苦労様。明日に詳しい報告を聞くと伝えてくれ。流石に眠い……」  
「分かりました。ではお休みなさい。」

「ああ、大淀も夜遅くまで働かせて悪かったな。ゆっくり休んでくれ。」

「はい、ありがとうございます。ですが念のために、応接室の隣で控えさせて下さい。提督に何かあっては困りますので。」

「……分かった。無理はするなよ。キツイなら別の誰かを呼んでも構わないからな。」

「はい、お任せ下さい。」

これでようやくよく眠れるな。鎮守府のセキュリティの強化も考えなくてはならないか……

## 60話（4日目）

コンコンコン

「提督、起きていらっしやいますか？」

大淀の呼び掛けで目が覚める。人の気配で目覚めないとは、やはり疲れが残っているか・・・時間は7時、憲兵隊は9時に来る約束だから、今から準備すれば問題無いだろう。

「今起きたところだ。準備をしたら食堂に行くから先に行ってくれ。」  
「分かりました。先に行つてますね。」

とりあえず今日は平川市長との件を片付けるのと、川内が昨日言っていた深海棲艦の調査、出来ればその殲滅までやりたいところだ。これだと座学のテストは明日に回したほうが良いかも知れないな。

食堂に着くとやはり起きるのが遅かった為、艦娘達は食事を済ませた者もちらほらいるようだ。流石に4日目にもなると、食事中に畏まった挨拶は不要だという事が浸透してきたのか、食事中の者は急いで立ち上がって敬礼するような事はなくなった。席に座ったまま敬礼したり、声をかけてきたり、黙って頭を下げる等の個性が出始めている。それらに軽く応対しながら間宮の元に向かつて、朝食を貰いに行く。

「提督さん、おはようございます。今日は少しお疲れのようですね・・・昨夜はあまり眠れなかつたのですか？」

「いろいろとあつたからな。しかしこの程度で泣き言は言っていられないからな。気にするな。」

「あまり無理はなさらないで下さいね？」

「体調の管理くらいは自分でやるさ。いざという時に動けませんじや話にならないからな。ふむ、今朝は煮物メインの和食か、楽しみだな。」

「ありがとうございます。しっかりと食べて元気になつて下さいね。」

間宮に礼を言つて座る場所を探そうとすると、川内がフラフラしながらこつちに来た。

「ふあく提督・・・食事中に悪いけど・・・昨日の報告させてくれないかな？提督が起きるの待ってたから眠たくて・・・」

「分かった、無理をさせて悪かったな。」

川内に連れられて食堂の隅に行くと、大淀と長門が居て周囲の席には誰も座らないように配慮されていた。二人とも食事を済ませたらしく、机には地図が用意されていて、準備万端と言ったところか。

「遅くなった。では報告を聞かせてくれ。」

簡易的な報告会を始めると、大淀が地図を指差しながら説明をしてくれる。

「時間も限られていますし、手短にお伝えしますね。先日戦闘があった場所からさらに奥に進むと、普段遠征で使用していた資材溜まりがあるのですが、その付近で川内さんが多数の敵艦隊の気配を感じたそうです。戦闘は厳禁でしたので詳細は調べられませんが、それなりに大きな艦隊だと思うので、改めて空母を含めた偵察部隊を編成するべきかと思えます。」

資材溜まりに敵艦隊か・・・自然と資材が溜まっていく場所の事を資材溜まりと呼び、そういう場所から遠征任務等で回収する事で、鎮守府の運営を行うものだ。一応鎮守府も一種の資材溜まりとなっていて、少しずつだが資材が増えていくものだが、それだけで艦隊を維持するのは困難だろう。基本的に資材溜まりは小さな島になっていて、深海棲艦の発生以前には確認されていなかった島も多数報告されている。例外として海底に溜まるポイントもあって、そういう場所には潜水艦が向かうのが一般的だ。この資材が溜まっていく現象については未だに解明されていないが、深海棲艦が拠点にすると、資材が多く溜まっている事が多いという報告もある。そのため深海棲艦も同じ資材を使っている、拠点にした場所に資材を輸送しているのではないかと言われている。

「なるほど・・・うちもそろそろ資材の確保をしたいから、資材が豊富そうな拠点は魅力的だが、深海棲艦の勢力が未知数なのが怖いな。」

「あく、提督、かなり大規模そうだったし、厄介な相手だと思うよ・・・この前よりかなり数も多そうだったし。」

「この前より多いか・・・川内の感覚を信じるならばかなりの強敵だな。」

「それは厄介な話だな。前回でもうちの鎮守府としてはかなりの戦力を投入したからな・・・」

「提督、一ついいか？」

「長門、どうした？」

長門は少し言いづらそうにしていたが、意を決して顔を上げた。

「情けない話ではあるが、他の鎮守府に増援を頼む事は出来ないのだろうか？無理に我々だけで対処するべきでは無いと思うのだが。」

「それも視野に入れてはいるが、せめて偵察をして敵の勢力をある程度確認してからだな。よく分からないけれど敵が居るので援護してくださいなんて言っても、絶対に相手にされないからな。」

「それもそうだな。少し弱気になりすぎたようだ。すまない。」

「気にするな。慎重になるのは指揮官としては良い事だ。特に今の鎮守府の内情ならば不安にもなる。とりあえず今日は鳳翔を旗艦として、偵察部隊を派遣する。随伴艦は龍田と暁型姉妹にする。ただし航空機での偵察が目的だ。相手が反撃するようならば、即座に撤退しろ。その後の対応は私が平川市長の元から戻ってから対応する。大淀と長門は私が居ない間の留守は任せる。一応連絡要員として一人連れていくつもりだ。」

「分かりました。それではそのように手配します。それで誰を連れていかれるおつもりですか？」

「出来れば春雨を連れて行きたい。」

「春雨ですか!？」

大淀がかなり驚いた顔をする。昨夜深海棲艦化した事は伝えていないが、昨夜春雨が暗殺者から助けてくれた話はしたし、暗殺者が首を折って即死していたので、大淀も思うところがあるだろう。昨日は深くは聞かずにいてくれたが、気になっていない訳はない。長門も驚いてはいるようだが、口出しをするつもりは無いようだ。川内はもう半分眠っているみたいだな・・・

「これは本人の意思を確認してから決めようと思う。それと川内、疲

れているだろうからもう休んで良いぞ。」

「はっ！あ、ありがとう提督。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

フラフラと川内が去っていくのと入れ替わりに、春雨がやって来た。大淀が名前を叫んだので気になったようだ。

「その、提督、おはようございます。えっと私の名前を呼ばれたようですが、何かご用でしょうか？」

「ちようど良い、今日私は外出するのだが、連絡要員としてついて来て欲しい。頼めるか？」

「ふえ!?わ、私ですか?わ、私でよろしければお供します、はい。」

若干顔を赤らめながら承諾してくれた。とりあえずこれで朝の指示出しは終わりだな。

「では春雨で決まりだな。では偵察部隊の編成の準備が整い次第出発してくれ。他の艦娘達は有事に備えて、いつでも動けるようにしておいて欲しい。では後は頼んだぞ。春雨は9時に憲兵隊が来る予定だから、10分前には正門に来てくれ。」

「はい。」

大淀と長門が立ち上がって敬礼し、指示を出しに行く。春雨は食事の途中だったようで姉妹達の元に戻り、他の姉妹から質問攻めにあっているようだ。さてと、これでようやく落ち着いて朝食を食べる事が出来る。この美味しい食事だけが、鎮守府内で唯一の楽しみだ。ありがたく頂くとしよう。



## 61話（艦娘奪還）

正門前で待っていると、春雨が艤装を背負って走って来た。今回は連絡要員なので主砲や魚雷等の武装を外した状態だ。

「て、提督、お待たせ致しました、はい。」

「まだ時間まで余裕がある。少し今日の予定を話しておこう。昨日も言ったが、今から平川市長のところに憲兵隊と一緒に行って、平川市長の逮捕と売られた艦娘達の保護をする。基本的には憲兵隊が全て手筈を整えてくれるから、私はその確認と艦娘達への指示だけで十分だ。春雨には連絡要員としてついて来て貰うのと同時に、万が一の場合に備えて、護衛の役割も果たして欲しい。」

「護衛……ですか……」

「ああ、そうだ。今回に関しては人間が相手だ。だから他の艦娘には難しい仕事だ。だから春雨の力を貸して欲しい。ただしこれは人を殺せと言う意味ではないから勘違いしないでくれ。だから力の使い方には十分注意が必要だ。それに春雨が人を攻撃出来るという事実が極力隠したい。だから春雨が護衛として働くのは、本当に追い詰められた時だけだ。」

「分かり……ました……私の力が、悪雨ちゃんの力が提督のお役に立てるなら……大丈夫です、はい。」

それでもやはり不安なのだろう。昨夜人に手を出してしまったばかりなのに、無理をさせ過ぎてしまっただろうか……

「……流石に無理を言い過ぎたか。過度な負担になるのであれば、私の本意ではない。誰かと代わって貰うか？連絡要員としてならば他の者でも良いのだが……」

「い、いえ！その……提督は今から危ない所に行くのですよね？」

「一応事前に上手くいくように準備は整えたが、それでも何が起ころかは分からない。だから危険な場所かも知れないな。」

「だったら私が護衛の任務頑張ります！その、提督が死ぬのは嫌ですから、はい。」

まっすぐこちらを見つめてくる瞳には、強い意思が感じられる。信

頼を込めて軽く頭を撫でると、春雨はとても良い笑顔になった。これならば大丈夫そうだな。

「ならば護衛も含めて宜しく頼む。」

「お任せ下さい、はい！」

ちやうど憲兵隊の車両が数台鎮守府の前に停車した。さて、大仕事の仕上げに行きましょう。

「ふっふっふ。話は聞こえませんでした、これは良いものが撮れました！さつそく記事の準備をしなくては!!」

憲兵隊の護送用の車両に乗って平川市長の私邸に着いた。この車両なら今日返還される艦娘達も乗れるから、まとまって行動出来るような配慮がされているのだろう。私邸の前を手際良く封鎖して、私邸に乗り込んで行く憲兵隊の後をついて行くと、平川市長の私室で平川市長が取り押さえられたのか、大声で叫んでいるのが聞こえて来た。「な、なにをするか無礼者!!わしを誰だと思っておるのだ!!わしに手を出せば久藤提督が黙っておらんぞ!!」

憲兵隊はその言葉を見殺しして、淡々と手錠をかけた平川市長を引き摺り出して来た。平川市長はこの時間にも関わらず寝間着姿で本当に無様な様子だった。そして自分と目があつた瞬間に顔が青ざめた。

「な、なぜ貴様がここにいる!!いったいどういう事だ!!」

「なぜ何も今日お伺いする予定でしたよね？私が生きていることがそんなに不思議ですか？」

「馬鹿な!!あ、いや、こ、これはいったいどうなっておるのだ!!なぜわしが逮捕されなくてはならんのだ!!話が違うであろうが!!わしはきちんちんと艦娘達を集めてやっておるのだぞ!!」

はあ・・・この反応は尋問するまでもなく、暗殺者を送り込んで来たのは平川市長で間違いなさそうだな。鶴野提督かもと警戒していたのが馬鹿みたいだ。

「これで提督暗殺未遂も確定ですね。」

なおも騒ぐ平川市長を憲兵隊が黙らせて、艦娘達の居場所に案内して貰う。憲兵隊は事前に場所を把握していたようで、スムーズに隠し部屋へと入って艦娘達を発見した。

「これは酷いな・・・」

そこにいた艦娘達の多くは傷だらけで、特に漣・朧・潮の傷が酷かった。艀装を付けて無い状態でも、人間よりはかなり丈夫な艦娘達だが、その代わり入渠しなくては傷が治らないというデメリットがある。艦娘達は人が入って来てもほとんど反応せず、せいぜい目線をこちらに向ける程度だった。

「球磨達になんの用事クマ?」

唯一ほとんど損傷の無い球磨が代表で尋ねてきた。かなり疲労はしているようだが、まだまともに話せそうか。

「まずは自己紹介をさせてくれ。北九州鎮守府に新しく着任した葛原だ。今日は不正に売られていた艦娘達の保護に来た。お前達は全員北九州鎮守府の所属で間違いないか?」

「球磨達は全員北九州鎮守府の所属で間違い無いクマ。新しい提督クマ? 前の提督はどうしたクマ?」

「前任者は死んだ。とにかく全員鎮守府に連れ帰って入渠させる。ついて来い。」

そう言うと艦娘達がのろりと立ち上がったが、漣達は自力で立てないようだ。球磨が近寄って手助けをして、漣に肩を貸している。

「春雨、朧と潮の手助けをしてくれ。」

「はい!」

その後平川市長の私邸を出て、護送車に乗せて行った。人員の確認を済ませたので、春雨を連れて憲兵隊の責任者の元へと報告に行く。

「艦娘達は全員護送車に乗り込みました。ご協力ありがとうございます。」

「了解しました。最後に平川市長に会って貰えますか?」

「ん? 分かりました。」

憲兵隊の責任者が嫌な笑顔を見せた事で、かなり警戒心を抱いたが、すぐに平川市長が引き摺られて来た。かなり騒いでいたが、耳打

ちをされて少し大人しくなったので、さらに警戒する。平川市長は手を後ろで拘束されているので、たいした事は出来ないはずだが・・・

「貴様!!この恨みは絶対に忘れないからな!覚悟しておけ!!」

そう言うのと平川市長は体当たりで憲兵を突飛ばしドタドタと逃走を始めた。いや、この状態だとすぐに捕まるだろ・・・すると憲兵隊の責任者が拳銃を取り出して追い掛け始める。・・・そういう事か・・・

「春雨、こっちに来い。」

「あ、はい。」

春雨を近くに呼んで、春雨の目を手で覆う。こんな人間の汚い部分を見る必要も無いだろう。

「生まれ!!それ以上逃げるなら撃つぞ!!」

平川市長の足元に威嚇射撃をしながら、憲兵隊の責任者が叫ぶが平川市長は止まる様子は無い。おそらく平川市長は逃げる手筈を整えているとでも言われたのだろう、そしてこの流れも演技だと思いついでいるのだろうか・・・

パンパンパン!!

銃声が鳴り響き平川市長が倒れる。頭に一発と背中に二発、まず助からない。倒れた平川市長に憲兵隊が駆け寄るのを背に、責任者が戻って来た。

「お見苦しい所をお見せしてしまって申し訳ございません。」

「逃走されたのであれば致し方ない措置です。では我々は鎮守府へと戻ります。」

「分かりました。護送車を出すように伝えます。」

春雨と共に護送車に乗って鎮守府へと帰還する。やはり人間の悪意が一番恐ろしいものだな。

## 62話

護送車の中は暗い雰囲気か漂っていた。散々人間の玩具にされてきたのだから無理も無い。ひとまず鎮守府に連絡をしておくか。

「春雨、大淀に通信を繋げてくれるか。」

「はい、少しお待ち下さい・・・どうぞ。」

「大淀、聞こえるか？」

「はい、大丈夫です。」

「今売られていた艦娘達を11人全員保護して鎮守府に連れ帰っている所だ。帰還したらまず入渠させるつもりだが、かなり損傷が激しい者もいる。自力での移動と入渠が困難だと思われるので、運べるように準備を整えてくれ。」

「了解しました。出力のある戦艦や空母達を中心に準備をしておきます。」

「それと高速修復材の準備も頼む。」

「・・・分かりました。そちらも準備をしておきます。」

「ああ、頼んだぞ。」

通信を閉じると近くに來ていた球磨が不思議そうな顔をしている。提督、これから球磨達はどうなるクマ？もしかして球磨達は久しぶりにみんなに会えるクマ？」

「鎮守府に戻ったらまず入渠を済ませて貰う。その時に他の艦娘達とも顔を合わせるはずだ。」

「みんなに会えるのは嬉しいクマ！」

流星に疲れているようだが、多少は表情が明るくなったか。

「ちよつといいか？」

声が出たほうを見るとこちらを覗んでくる艦娘がいた。たしか・・・摩耶だったか？

「高雄型重巡洋艦3番艦の摩耶だ。お前が新しい提督だって事は聞いたが、これからアタシ達をどうするつもりだ？」

「先程入渠させる話はしたのだが・・・その後の待遇の話で良いのか？」

「ああ。」

「私としては諸君には鎮守府の戦力として活躍して貰いたいと思つている。現在の北九州鎮守府は戦力の偏りが大きい。特に巡洋艦が不足しているので、出来るだけ早く実戦投入可能な練度になって欲しいものだな。」

「そんな良い話が信用出来るとでも思つてるのかよ？こつちがどれだけ酷い扱いを受けて来たのか分かつて言つてるのか？」

まあ、摩耶の言う事ももつともだな。球磨は純粹に喜んでいたようだが、他の艦娘達は疑いの目で見ている者も多い。

「信用出来ないならばそれでも構わない。むしろ口先だけでどうにかなる話では無いだろう。私は信用は行動によつてしか得られないと考へているしな。だが諸君は軍隊に所属している事は忘れるな。上官を信用してなからうが、命令には従つて貰うからそのつもりでいろ。」

「チツ・・・これだから人間って奴は・・・」

摩耶はかなり不機嫌そうだが、今はこれでも仕方ないだろう。衣食住揃つて礼節を知ると言うものだ、こんなボロボロの状態ではまともに話は出来ないだろう。それに戦場に復帰する話を良い話と考へてくれているのなら今は十分だ。春雨がおろおろと心配そうにしているが、いきなり信頼を得る等無理な話なのだから、そこまで気にする必要は無いのだがな。

しばらく重苦しい雰囲気で移動すると、ようやく鎮守府に着いたようだ。護送車を降りると正門の所に多くの艦娘達が集まっている。早く仲間に再会したいのは分かるが、これだけ集まると通行の邪魔だな・・・

「道を開ける、まずは入渠させるのが優先だ。戦艦や空母は負傷者を運ぶのを手伝つてくれ。」

艦娘達が左右に分かれて道を作り、その間を通つて戦艦達が負傷者を運んでいく。途中で姉妹艦娘達が負傷者に付き添っていたが、そのくらいは許容範囲だろう。負傷者の運び出しが終わると大淀が近づいて来た。

「提督、お帰りなさい。入渠と高速修復材の準備は整っています。」  
「助かる。高速修復材の使用を許可するから、早く傷を治してやれ。あと間宮に連絡して、昼食には少し早い何か食べる物を準備してやって欲しい。食事を済ませて少し落ち着いたら、帰還した者達と話をする。」

「分かりました。」

「それと哨戒に出た鳳翔からは連絡はあったか？」

「いえ、まだですね。ですがもうそろそろ索敵範囲に入る頃だと思います。」

「分かった。ならば帰還組の世話は陸奥に指揮を任せて、長門と大淀は会議室に来てくれ。鳳翔からの連絡が届き次第、作戦会議を始める。」

やるべき事が多くて困ったものだ。いつになったら落ち着けるのだろうか？

会議室に集まってからしばらくすると、鳳翔から連絡があった。報告の内容をまとめると。

空母ヲ級 2

軽空母ヲ級 1

戦艦ル級 2

重巡リ級 3

軽巡ヘ級 1

軽巡ホ級 2

駆逐イ級 5

駆逐イ級後期型 2

計 18 隻の 3 艦隊

前回より数が多いが、こちらの艦隊でどうか出来ない訳ではない微妙なラインだ。ただし空母が多いのが気になるところだ。今回はこちらの空母の数が多く、制空権を確保出来て有利に戦えたが、今回は敵のほうが空母が多い。可能ならば五航戦のどちらかに出て貰えば助かるのだが、昨日の演習結果を見るとまだ不安が残る。それに

鳳翔達哨戒組は敵艦載機の迎撃を受けて、多少損害を受けているため参戦はさせない方が良さだろう。

「編成としては相手に合わせるなら、空母を中心とした航空戦部隊と戦艦を主力とした打撃部隊、そして水雷戦隊と言ったところか。水雷戦隊は天龍に白露型姉妹と島風で良いだろう。航空部隊の主力は一航戦に出て貰い、その下に重雷装巡洋艦の二人を付ける。この航空部隊の護衛には誰が適任だと思うだろうか？」

そう尋ねると長門が頭を抱えて悩みだす。

「敵の空母のほうが多いから対空能力の高い者が良いのだが・・・対空能力なら摩耶なのだが、今は出せる状態では無いからな・・・」

「ふむ、やはり対空能力が必要か・・・ならば夕張を出そう。夕張に対空砲を積ませて出せば対空能力も補えるだろう。欠点の速力も空母の護衛ならばそこまで気にならないからな。」

「悪くない考えだ。もう一人だが・・・雪風には打撃部隊での護衛を頼みたいので、候補から外すとすると・・・残った駆逐艦の中では吹雪が一番動けるだろうか・・・軽巡は川内しか残っていないが、夜間哨戒に出した川内を昼間から出撃させるのは不安だからな。」

「それならば吹雪のほうはまだマシか・・・それでも不安は残るが、贅沢は言えないな。打撃部隊だが、演習結果を見ると金剛姉妹だと不安が残るから、長門・陸奥・大和が主力で護衛に雪風とすると残り二人か・・・」

「提督、少しよろしいですか？」

大淀が真つ直ぐとこちらを見つめている。

「どうした？」

「私は今回の作戦に金剛姉妹の起用を提案します。」

ほう、これは意外だな・・・

「理由は？」

「まず金剛姉妹は前任者の時から戦闘で結果を出しています。ですので戦闘に参加するだけの力はあると判断します。」

「ふむ、それだけでは長門達と比べてメリットが薄いな。」

「それと今気になっているのは、提督側についた榛名と他の姉妹との



間に距離が出来てしまった事です。ですのでこの戦闘をきつかけに、金剛さん達にも提督のやり方を理解して貰って、榛名さんとの関係を取り戻して欲しいと思っています。もちろん感情論だけで言うのはありません。戦力として考えても、榛名さんを除く金剛姉妹がいつまでも協力的で無い事は大きな損失になります。ですので早めに対策を講じるべきだと思うのですが？」

まあ、意見としては悪くない話だろう。この状況でやる必要があるかは少し疑問だが、戦力として使えると言うのであれば試してみる価値はあるだろう。

「分かった。長門もそれで良いか？」

「ああ、私の力を提督に見せ付けておきたかったが、それは次の機会にさせて貰おう。」

「では金剛姉妹と雪風と・・・青葉を出すか。青葉は一応実戦経験があるはずだ。」

大淀も長門も他に意見は無さそうなので、これできまりだな。

## 63話（4日目昼食&戦闘準備）

作戦会議後に間宮から昼食の準備が整ったと連絡が入ったので、出撃前に昼食を済ませる事にした。帰還組の入渠も終わったので一緒に食事が出来る状況なのだが、ゆっくりと交流させる余裕は無さそう。食堂に着くとそこには大量のおにぎりや並んでいて、奥の方で間宮がどんどん追加のおにぎりを握っていて、吹雪・睦月・如月の3人が漬物とお味噌汁の準備や、出来上がったおにぎりを並べたり等の手伝いをしていた。なるほど、時間が無いから手早く食べる物を準備した訳か。これは助かるな。吹雪から漬物とお味噌汁と空の皿が乗ったお盆を受け取り、おにぎりを自分で確保してから席に座る。この方式ならば間宮の前に列が出来る事もなく、後から入って来た艦娘達も次々と食事を始めていく。大淀があらかじめ連絡していたのか、急いで食事を済ませてそのまま食堂に残ってくれている。帰還組の中にはゆっくりと食事を味わっている者もいるが、そこは出撃には関係無いので構わないだろう。しばらくして艦娘達の食事も落ち着いたようなので、一旦机を左右に移動させて簡易的な広場を作り艦娘達が整列する。大淀が用意した小さなお立ち台に上り、集会の準備が整った。

「総員、提督に敬礼!!」

「大淀から伝えられたとは思いますが、鳳翔が率いる偵察部隊から連絡があり、資材溜まりに深海棲艦達が集まっている。よって我々は速やかにこれを撃破するべく部隊を派遣する事にした。悪いが帰還組とゆっくり話をするのは、この仕事が終わってからにしてくれ。敵の構成だが、空母ヲ級2・軽空母ヌ級1・重巡リ級1・駆逐イ級2からなる航空部隊。戦艦ル級2・重巡リ級2・軽巡ヘ級1駆逐イ級後期型1からなる打撃部隊。軽巡ホ級2・駆逐イ級後期型1・駆逐イ級3からなる水雷戦隊の計3部隊だ。よってこちらも同様に3部隊出す。まず第一部隊を赤城率いる航空部隊として加賀・大井・北上・夕張・吹雪とする。特に夕張には対空砲を積んで、敵艦載機の迎撃を頼む事になる。戦闘でも役に立つと言ったのだ、その実力を示してみせろ。」

「はい！私にお任せ下さい！」

「赤城と加賀は艦上戦闘機を多めに搭載して、敵艦隊に打撃を与えるよりは、味方を守る方を優先して欲しい。相手の方が数は多いが頼んだぞ。」

「はっ！一航戦の誇りにかけて!!」

第一部隊は問題無さそうだな。

「続いて第二部隊は金剛を旗艦として金剛姉妹4人と護衛に青葉と雪風を付ける。金剛、護衛は付けたが以前のように盾として使い潰す為ではないから、そこは勘違いするなよ？それとこの部隊が今回の作戦の要だ。早めに敵艦を黙らせて、他の部隊の援護に回る事も頭に入れておけ。」

「OK！それが提督の命令なら、私は誰も沈めさせないネ！」

相変わらず敵意剥き出しで睨んでくる金剛だったが、今はこれでも構わないだろう。旗艦として作戦に参加するし、仲間を守りたいという意思は本物のようだ。

「最後に第三部隊は天龍を旗艦として白露型姉妹と島風に出て貰う。前回の相手よりは手強いはずだ。気を引き締めてかかれよ。」

「おう!!天龍様に任せとけ!!」

普段は反抗的な天龍だが、戦闘になると頼もしいものがあるな。これならば戦果も期待出来そうだ。

「それでは各自戦闘準備を始めろ。敵艦隊から資材を奪い返すぞ!!」

「総員、提督に敬礼!!」

艦娘達がそれぞれ出撃の準備に取り掛かる。青葉や北上と大井は心配そうな姉妹艦に軽く声をかけているようだ。本来ならもう少しゆっくりと再会の喜びを堪能させたいところだが、今回は我慢して貰うしかない。その代わり戦闘後に何か褒美を用意しておくか。

「ふあ、かがふあん！いつこうふえんのほこりをみせまふよ!!」

「赤城さん・・・そういう事はおにぎりを食べながら言うものではないと思うのだけど・・・」

「んん!!さあ、加賀さん！一航戦の誇りを見せますよ!!」

「・・・ええ、頑張りましたよ。」

「赤城さん！赤城さんと一緒の部隊だなんて光栄です!!護衛として頑張ります!!」

「ええ、吹雪さん。一緒に頑張りましたよ。ですが無理は禁物ですよ。今の提督は私達が沈むのを嫌います。ですから盾として使い潰される必要が無い事は肝に銘じておいて下さい。」

「はい！分かりました！やっぱり赤城さんは素敵なお人ですね！」

「またまた大井つちと一緒に戦えるねえ。宜しくねえ。」

「はい！北上さんと一緒なら、私はどこにでも行きます!!」

「へへ、なら今日もスーパー北上様の活躍を見せてやらないとねえ、夕張も私達の護衛頼んだよ。私達紙装甲だから、艦載機の攻撃受けたら何も出来ずに終っちゃうからさあ。」

「ええ、せっかく戦闘でもお役に立てる機会を貰えましたからね。任せて下さい！」

「良い？最優先に守るのは北上さんですからね？私はともかく北上さんが被弾する事が無いように全力を尽くさない。」

「ひい！が、頑張ります。」

「金剛姉様・・・」

「Hey榛名、心配無用ネー。提督の命令もあるし誰も沈めさせないネー！」

「そう・・・ですか・・・」

「榛名が提督を信じてるのは分かってマース。可愛い妹が信じているのなら、私も信じたいデースが・・・まだ少し時間が欲しいデース。」  
「分かりました。金剛姉様も比叡姉様も霧島も皆で笑顔になれるように、榛名頑張ります!!」

「それでこそ私の妹ネ！Follow me!! 皆さん、ついて来て下さいね!!」

「はい、比叡はどこまでもついて行きます！」

「はい、榛名は大丈夫です！」

「ええ、金剛姉様のサポートは霧島にお任せ下さい。」

「いや、姉妹愛って良いですねえ。青葉も取材、あ、いえ、護衛します。」

「護衛なら雪風にお任せです!!雪風には幸運の女神がついてますから!!」

「さーてチビツ子ども!仕事の時間だぜ!!天龍様について来な!!」

「こ、今度こそいつちばんはお姉ちゃんのものなんだからね!!」

「今度も夕立が大活躍するっぽい!また活躍して夕立も春雨みたいに、提督に頭撫でて貰うっぽい!!」

「ええ!?夕立姉さんどうしてそれを!」

「青葉さんから聞いたっぽい!!春雨だけズルっぽい!!」

「まあまあ夕立落ち着いて。活躍したら提督だってそれくらいしてくれるぞ。」

「時雨も撫でて欲しいっぽい?」

「あ、うくん、どうだろ?僕も提督の事は嫌いじゃないからね。」

「ちよつと!そういうのもお姉ちゃんがいつちばんだからね!」

「おいおい、この天龍様を差し置いて一番とか、相変わらず気合い入ってるじゃねえか。だが一番はこの天龍様が頂くぜ!!」

「天龍さんも頭撫でて欲しいっぽい?」

「んなわけあるか!!まあ俺様が一番になったら、提督から甘いもんでも貰ってお前らに分けてやるよ!だから気合い入れていくぞ!!」

「!!」

「お、おう!」

## 64話（対話 帰還組）

出撃する艦娘達を見送って、ようやく帰還して来た艦娘達と対話する時間が取れた。接敵するまでまだ時間がかかるだろうから、今うち話をしておきたい。大淀に帰還組を会議室に集めて貰った。

「では改めて、この北九州鎮守府に新しく着任した葛原だ。ここに居る者達は前任者から不当な扱いを受けていたと聞いている。私の希望としては諸君等には私の指揮下で、深海棲艦と再び戦って欲しいと思っている。その場合まずは十分な休息を取り、演習で戦場に出るのに問題が無いと判断するまでは鍛えるつもりだ。本来ならば命令で強制的に指揮下で戦わせる事も出来るのだが、心が折れた奴を艦隊に入れたくはない。だからこれが受け入れられない場合は、すぐに退役して貰う事になる。」

帰還組は押し黙っていたが、こちらを睨んでいた摩耶が声を上げる。

「つまり従わなければ解体するぞって話だろ？人間って奴は本当に身勝手な奴等だぜ。」

「解体はするつもりは無いが、似たような話にはなるな。退役する者には前任者が着服していた分の給与をまとめて渡す事になる。これは建造されてからの日数で計算した額を渡す。その後は余生を好きに生きる。消え去るまでにやりたい事をするか、もしくは自分で気に入った提督を見つけて仕えるか、そこは自分で考えて自分で決めろ。」

「おいおい、そんな事して本当に大丈夫なのかよ？」

「二応前例が無い訳ではない。東北や北海道地方に追いやられた人権派のやり方だな。本来は艦装に修理不可能な損傷が出た場合の措置らしい。人権派って奴等は意地でも解体をしたがらないようだ。幸せな環境で消えていくのが一番の供養だとさ。」

さすがに摩耶も押し黙ってしまったか。温情のある処置とは言え、消え去るのは恐ろしいと言ったところか？

「まあ、そんな事はアタシには関係ねえ！アタシは摩耶さまだぜ!? ビビって安全な所でガタガタ震えてるなんてごめんだぜ!!」

「ならば私の指揮下で戦え。やる気があるならば鍛えて戦場に送ってやる。こつちとしては戦力はまだまだ足りないからな。」

「チツ！だからテメエを信用なんざ出来る訳ねえだろうが!」

「はあ・・・ならどうやって戦うつもりなんだ？お前にいくらやる気があるろうが、提督の指揮下でないと深海棲艦とは戦えない事くらい知っているだろう？人間不信なのは分かるが少しは頭を冷やせ。」

「そ、それは・・・」

理屈は分かるが感情では納得出来ないと言ったところか。本当に面倒な奴だな。しかしこれも天龍が言っていた誇りを守る為の行動なのか？自分には駄々をこねてる子供にしか見えないが？

「そもそもなぜ私の指揮下で戦う事に、私を信用する事が必要なのだ？ここは軍隊だ。指揮系統をはつきりとさせる事に、信用が必要では無いだろう？もちろん上官と部下が信頼関係で結ばれたほうが、より戦果を上げられるのは知っているが、最初からそれを求めるのは無理だろう？そもそも私も会ったばかりの奴を信頼しろなど無理だ。」

「なんだよ・・・それ・・・」

摩耶はショックを受けているようだが、こんなものは当たり前ではないのか？信用は行動でしか得られないものなのに、会ってすぐに信用するなど愚の骨頂だろう。利害関係で結ばれる契約も、回数を重ねる事で信用になるのだ。

「あー、熱くなつてるところちよつと良いかな？」

「えつと・・・衣笠だったか？どうした？」

「私は提督の指揮下で戦うわ。青葉が怖い人だけど信頼出来るって言ってたから、私は青葉の言葉を信じるわ。だから青葉ともども宜しくねー!」

「ああ、宜しく頼む。」

衣笠が手を差し出してくるので、握手を交わす。重苦しい雰囲気の中で、自分の意思をきちんと示せるのは好印象だな。

「あー、それで提督さんに提案なんだけど、衣笠さんもやっぱり疲れるからゆつくり休みたいんだよね。だからこの話は明日にしない？考えをまとめたい娘も居ると思うし。」

それもそうか、入渠を済ませたとは言え疲労が溜まっている状態ではまともに考えられないか。

「良いだろう。こちらとしては指揮下で戦って欲しいという要望も伝えたいし、退役する話も説明出来た。あとは各自で鎮守府の様子を見るなり、他の艦娘達に話を聞くなどして決めれば良い。ただし待つのは明日までだ。それまでに結論を出すように。では他に言いたい事がある者はいるか?」

「あ、球磨も提督の指揮下で働くクマ。大井は置いといて、北上は提督の事褒めてたクマ。球磨にはそれで十分クマ。」

「軽巡洋艦神通です。私も国を守る為に戦います。それが私達艦娘の使命ですから。それに姉さんも心配ですし。」

「私は五十鈴よ。悪いけど私はまだあんたを信用出来ないわ。それでも安全な所で余生を過ごすなんて絶対に嫌よ!だからあんたの指揮下で戦ってあげる。でも娼婦の真似事なんて二度とごめんだからね!!」

ほう。軽巡洋艦の3人は指揮下に入ってくれたか。これだけでもずいぶんと助かるな。

「分かった、宜しく頼む。」

「あー、ウチは一旦保留にさせて貰うで。大先輩の鳳翔さんがおるらしいやん。あの人の話聞いてから決めるわ。」

「重巡洋艦の高雄です。せっかく時間を頂けるなら、摩耶と一緒に考えたいと思います。摩耶もそれで良いわね?」

「あ、ああ。」

「えつと・・・重巡洋艦の羽黒です・・・私は提督の指揮下で戦います・・・もう一人きりは辛いので・・・」

羽黒は参戦したが、高雄・摩耶・龍驤は保留のようだ。保留組は良いが、おどおどしている羽黒のほうに気になるところだな。戦う理由が一人きりが嫌だというのはどうなのだろう?まあ、これは今後の課題だな。

「分かった。保留組は明日の夜までに結論を出してくれれば構わない。」



「あーえっと、これ最後は私達って流れみたいですよね・・・」

声が出たほうを見ると、挙動不審な漣、こつちを睨んでいる臙、その後ろに隠れている潮が居た。

「言いたい事があるなら言っておいたほうが良いと思うぞ？」

「じゃあぼのたんの事も心配だし、私達も保留で一つお願いします。」  
「分かった、ゆっくりと話をすれば良い。ではこれで解散とする。各自自由にして構わないが、現在作戦行動中だ。私もだが大淀と長門も忙しくなるだろうから、何か聞きたい事があれば陸奥を頼ってくれ。以上だ。」

とりあえず帰還組との話はこれで良いだろう。これで深海棲艦との戦いに集中出来る環境が整ったな。

## 65話

帰還組との話が終わった後に、大淀から哨戒に出ていた者達が帰って来たとの連絡を受けたので、大淀と共に出撃港へ出迎えに来た。損害としては龍田が中破で他は小破程度か。敵艦載機の迎撃を受けたと言っていたが、敵艦の編成をしっかりと確認する為に、少し無茶をしたのだろうか。それでも一番狙われるはずの鳳翔が小破で済んでいるのは、護衛の龍田達が頑張った証拠だな。

「旗艦鳳翔、哨戒任務を終えて無事帰投致しました。」

「ご苦労様。詳細な報告をしてくれたので、作戦立案にとっても役に立った。龍田達護衛もしっかりと鳳翔を守ってくれたようだな。」

「そう言って貰えると嬉しいわあくでも私ボロボロだし早く入渠させて貰えないかしら?」

一番損傷の激しい龍田は、中破とはいえかなり疲労しているようだな。

「分かった、ゆっくり入渠してきてくれ。」

「はあくい。じゃあお先に失礼しますね。」

そう言っていると龍田は少しふらつきながら、艀装を外す為に奥へと歩いて行った。

「あ、提督さん、哨戒の帰り道で別の鎮守府の艦娘を見かけましたよ。遠くでしたし通信もしていませんのですが、おそらく隣の長門鎮守府の哨戒部隊だと思います。」

「ほう、長門鎮守府の哨戒部隊か。」

長門鎮守府と言えば、着任初日にうちの鎮守府の哨戒範囲を担当してくれて、見事に敵艦隊の接近を許してくれた所だな。そんな奴がうちの哨戒範囲の方まで艦娘を派遣するとは、何を考えているのやら? 「そいつらが向かっていた方角は分かるか?」

「ええつと・・・私達とすれ違ったので、ちょうど深海棲艦が居た方面になると思います。戦闘に巻き込まれてなければ良いのですが・・・」

・・・深海棲艦が居る資材溜まりに哨戒部隊を派遣するだど? こちらの進軍と重なったのは偶然だろうか? もし仮に偶然で無いならば

目的はなんだ？本当に哨戒が目的ならば、哨戒する方向から帰還しているこちらに通信をして、情報を得ようとするのではないのか？ならば目的は……

「分かった。暁、響、雷、電、悪いが補給を済ませたらもう一仕事して貰えるか？」

「もちろん良いわよ！私は一人前のレディなんだから当然出来るわ！」

「良いわよ！もーっと私に頼っても良いのよ？」

「いい、電も大丈夫なのです。」

「ダー。構わないよ。だけど司令官、何か気になる事があるのかい？」

この調子なら問題なさそうだな。

「まあな、杞憂であれば良いのだが、一応手は打っておきたい。もし杞憂であっても無駄にはならないからな。大淀、睦月と如月を呼んでくれ。それと明石と通信を繋げて欲しい。」

「分かりました。」

その後暁を旗艦として暁型姉妹＋睦月・如月で艦隊を編成し、明石に急ピッチで装備を変更させて出撃させた。途中大淀が気をきかせて、暁型姉妹に間宮が用意していたおにぎりを食べさせていたので、やる気も十分だろう。全力で深海棲艦が待つ資材溜まりへと向かわせたので、なんとか間に合えば良いのだが……それからしばらくの間書類仕事を片付けながら待っていると、ようやく開戦の時が来たようだ。

「提督、赤城さんよりもうすぐ敵艦隊との交戦距離に入るとの事ですよ。」

「分かった。通信を繋げてくれ。」

「はい、どうぞ。」

「では作戦だが赤城が率いる航空部隊で敵航空部隊を押しさえろ。その隙に金剛率いる打撃部隊で敵打撃部隊を打ち破り、他の艦隊の支援に回れ。天龍率いる水雷戦隊は敵水雷戦隊の足止めして、金剛達が支援に回れるようになったら一転攻勢をかけ敵を殲滅しろ。この作戦の

要は敵航空部隊をどれだけ早く無力化して、金剛達を自由に暴れさせるかだ。だから北上と大井は先制雷撃でしつかりと敵空母を狙え、敵艦載機は赤城と加賀と夕張で押さえにくれるはずだ。」

「第一艦隊旗艦赤城、了承しました。一航戦の誇りにかけて、敵艦載機の好きにはさせません。」

「第二艦隊旗艦金剛、了解デース。」

「第三艦隊旗艦天龍、了解したぜ！天龍様の实力を見せてやるぜ!!」

「では各旗艦の指示で戦闘を開始せよ。諸君等の健闘を祈る。そして誰一人沈めずに全員で帰って来るように。」

「二は、二！」

これで後は現場の旗艦達に任せるだけだ。それにしても指揮官と不便なものだな。現場の様子は無線でのやり取りでしか見えない為、報告を聞いて判断するしかない。士官学校時代の演習では艦隊の動きを確認出来るように撮影され、戦場の様子をリアルタイムで確認出来ていた。だからこそ細かい指示も出せたのだが、実戦ではそうはいかない。今考えると決められた範囲内で戦う演習だからこそ出来る話なので、実戦を考えるとあれは不要なものだったのではないだろうか？どちらにせよ無い物ねだりをして仕方がない。後は艦娘達を信じて待ち、何か連絡が入れば即座に判断する心構えをするしかない。

## 66話

「これより戦闘行動に入ります。各艦提督の指示通りに作戦を遂行して下さい。では第一次航空隊発艦します!!」

赤城の号令と共に艦娘達は戦闘態勢へと移行する。まずは赤城と加賀が艦載機を次々と飛ばす。夕張が対空砲を装備して控えているが、航空戦の主役は空母だ。相手の数が多くとも負けるわけにはいかない。作戦として一番は味方艦隊を守る事だが、出来ることならば敵艦隊にも打撃を与えておきたいところだ。

「敵艦載機を発見しました。各艦対空射撃の用意を!!」

空中では艦載機同士で激しい戦闘が繰り広げられる。数で勝る相手に練度で対抗して、戦力は拮抗しているようだ。お互いに削り合いながらも、いくつかの編隊が戦場を抜けて敵艦隊を目指して進軍する。

「加賀さん、直掩機を出して!敵の突破を防ぎます!!」

「ええ、分かったわ。」

すぐに直掩機の発艦をして、抜けて来た敵艦載機に攻撃を仕掛ける。もちろん敵も艦爆や艦攻を守る為に、護衛の戦闘機がドッグファイトを挑んで来る。数は大幅に削れたものの、相手の数が多く6機抜けて来たが、すかさず夕張が対空射撃を行い敵艦載機を全て撃ち落とす事に成功した。

「どーお?この攻撃は!?4スロット全てに対空砲を装備したんだから、この弾幕射撃は抜けられませんよ?」

「へー、夕張つち結構やるじゃん。」

「その調子で北上さんを死守しなさい!!」

「お、お任せ下さい!」

「ん〜じゃあ大井つち、そろそろ私達もお仕事しましょうかね?」

「はい!!北上さんに合わせます!!」

「んじや行くよ〜40門の酸素魚雷は伊達じゃないからねつと!!」

「海の藻屑となりなさいな!!」

北上と大井が魚雷を発射した頃に、赤城と加賀の艦載機も敵艦隊へ

と迫っていた。敵陣へとたどり着いたのはたったの3機だけだったが、それでも最後の意地とばかりに爆撃を敢行する。敵の最後の抵抗を掻い潜り、敵旗艦の空母と軽空母にそれぞれ小破のダメージを負わせる事に成功した。

「あまり損害は与えられませんでしたか・・・」

「赤城さん、私達の目的は艦隊の護衛よ。まだ油断しないで。」

「そうですね。敵の第二陣に警戒しましょう。」

敵が爆撃機の攻撃に苛立っているところに、さらに重雷装巡洋艦の雷撃が襲いかかる。

「敵空母ヲ級中破、軽空母又級轟沈、旗艦の空母ヲ級を庇った重巡り級大破。北上さんと大井さんは大戦果ですね。加賀さん、相手の動ける空母は旗艦のヲ級だけです。一航戦の誇りにかけて空は私達が支配しますよ!!第二次航空隊発艦!!」

「ええ、一航戦の誇りにかけて必ず守るわ!!」

北上と大井の活躍により、航空戦の優位は一気にこちらへと傾いた。ここからは砲雷撃戦の時間だ。

「私達の出番ネ!! Follow me!!ついて来て下さいネ!!」

「よしお前ら!俺達も出るぜ!!俺達の仕事は牽制だからバンバン撃ち込め!!水雷戦隊はきっちり押さえ込むぞ!!」

「戦況はどうなっている?」

「現在敵航空部隊を押さえ込んで、砲雷撃戦へと移行しました。金剛率いる第二艦隊が敵打撃部隊と激しい撃ち合いをしていますね。青葉さんが水上機を飛ばして、砲撃精度の向上を助けているようです。第三艦隊も激しい砲撃を開始して、敵水雷戦隊を釘付けにしていますね。」

「序盤戦は順調のようだな。このまま押しきれれば良いのだが。」

「ここからは金剛達の活躍にかかっているな。大淀が薦めるだけの實力は見せて貰わないと困るぞ?」

「撃って撃って撃ちまくるデース!!早く敵を沈めて味方を守るデース

!!」

金剛の指示で金剛型姉妹は激しい砲撃を開始する。精度に多少の難はあるものの、高速戦艦としての機動力を生かして、敵に接近しながら撃ちまくる。前任者の時代ではこちらの駆逐艦が被弾する事を恐れて遠距離から攻撃していたので、命中率がかなり悪かったのだが、駆逐艦の盾が無くなった今だからこそ、躊躇無く前に出て砲撃戦を挑む事が出来るのだ。こちらの砲撃が当たりやすくなるのと同時に敵の砲撃も多少当たるが、戦艦の装甲を頼りに強引に敵を沈めていく。

「ひいひい！あ、青葉も負けてられませんが、激しい砲撃ですねえ。金剛さん!!そろそろ敵の雷撃が来る範囲に入ってしまったですよ!!気を付けて下さい!!」

「OK!!方向転換するネ!!しっかりついて来て下さいネ!!」

「あ!!雷撃が来てます!!雪風に任せて下さい!!」

目敏く雷跡を発見した雪風が金剛達を守るように前に出て、敵の魚雷に砲撃を開始する。本来そこまで当たるものではないので、回避に専念するべきもののだが、次々と砲撃を当てて敵の魚雷を処理していく。

「Thanks ユッキー!!こちらからもお返しデース!!」

金剛姉妹の集中砲火により、敵打撃部隊は壊滅した。後は指示通りに他の艦隊の援護に回るべきだろう。赤城率いる第一艦隊は制空権を確保したので優勢に立ち回っているし、敵艦隊との距離も遠い。ならば天龍達の水雷戦隊を援護して、殲滅戦へと移行するべきだ。金剛姉妹は小さく中破くらいの損傷を負っているが、まだまだ戦える!!

「第三艦隊の援護に行きマース!!」

この動きが決定打となって敵艦隊は総崩れとなり、天龍率いる水雷戦隊がきつちり止めを刺して戦闘を終わらせた。

「提督、戦闘終了しました。こちらの勝利です。敵艦隊の殲滅も完了しています。」

「こちらの損害は...」

「赤城率いる第一艦隊は損傷無し。第二艦隊は金剛・比叡が中破、榛名・霧島・青葉が小破、雪風は損傷無し。第三艦隊は全員小破以下です。」

被害が第二艦隊に集中しているな。それなりに無茶な戦い方をしたようだが、他の艦隊の損害は大きく押さえられているようだ。戦果としては悪くないが、今後の戦い方は考える必要があるようだ。

「了解した。資材溜まりの資材で補給をして、周囲の警戒をしてくれ。もうすぐ暁達が到着するはずだからそれまで待機だ。」

「了解しました。」

これで戦闘については片付いたな。後は暁達が到着するのを待つだけだ。何はともあれ無事に勝てたので良かった。

「提督!!赤城さんから通信です!!味方艦隊が接近中、所属はおそらく長門鎮守府で駆逐艦6隻で構成された艦隊が2艦隊来ています!!」

はぁ・・・懸念していた通りの事が起きてしまったようだ・・・



## 67話（対話 原田提督）

『こちらは長門鎮守府の遠征部隊です。資材の回収作業をするのですみやかに交代して下さい。繰り返します。こちら長門鎮守府の遠征部隊です。資材の回収作業をするのですみやかに交代して下さい。』

長門鎮守府の艦隊からの通信は、こちらに命令するような口調だった。通信を受けた艦娘達も戸惑う者や憤慨する者、無関心な者など様々な反応だった。

「ふざけんじゃねえぞ!!俺達が戦った後からのこのこ出てきて資材を寄越せだど!?!てめえらには誇りってやつがねえのか!?!」

通信越しに天龍が怒鳴っているのが聞こえて頭が痛くなる。気持ちには分かるが無駄な行動だ。

「やめろ天龍。その艦娘達に言っても無駄だ。」

「はあ!?!てめえはこれが許せるってのか!?!」

「現場の艦娘達は上からの命令で動いてるだけだから、そいつらに何を言っても無駄だ。不本意な命令でも従わなくてはならないのは、お前達ならよく知っているだろう?」

「・・・そうだな。悪かったよ・・・」

「文句なら私が直接長門鎮守府の提督に言う。とりあえず現状はそのまま待機だ。こつちで話をつけるまでは資材確保の為の場所を譲る必要は無いし、こちらから何も言う必要は無い。暁達が到着したらすぐに資材の積み込みをさせてくれ。全員で積めるだけ積んだら帰還するように。赤城、頼んだぞ。」

「了解しました。」

さて、どうやって暁達が到着するまでの時間を稼ごうか？

「提督、長門鎮守府へ通信を繋げますか?」

「いや、まだかける必要は無い。しばらく放っておいたら向こうから抗議の電話をしてくるはずだから、それまでゆっくり時間を稼ぐ。」

「・・・分かりました。駆け引きとかは提督にお任せします。」

大淀は少し困ったような顔をしたが、すぐに切り替えたようだ。艦娘達からすれば人間同士の小競り合いなんて、愚かな行動にしか思え

ないだろう。しかし艦娘達のように素直に人間の相手をしてしまうと、相手はどこまでも増長して様々な要求をしてくるものだ。こんな茶番に付き合わされるのは腹立たしいが、悪意のある相手はきつちりと拒絶しておかないと、味を占めて何度も寄ってくるし、仲間もどんどん集めて来るので手に負えない。

「・・・提督、さっそく長門鎮守府から通信ですね。」

「仕方ないな。繋いでくれ。」

思ったよりも早くかかってきたな。これはかなり苛立っているのではないか？

「お電話代わりました。北九州鎮守府の葛原です。」

「長門鎮守府の原田だ。こちらの遠征部隊が資材の回収作業に行ったのだが、貴様の艦隊が資材溜まりで妨害していると報告があった。いったいどういふつもりだ？」

「妨害とは人聞き悪いですね。我々は資材溜まりを占拠していた深海棲艦を撃破しました。提督の規約では資材溜まりを占拠する深海棲艦を撃破した場合、その資材溜まりで資源を回収する優先権を得られるはずです。ですので我々の行動には正当性があります。」

「私は敵艦隊が居たなどといった報告は受けていないぞ？本当に実在していた証明はあるのか？貴様が嘘の報告をしているのではないか？」

報告を受けていないだなんて白々しい。こちらが戦闘している事を知らなければ、こんなタイミング良く遠征部隊を送ってくる訳が無いだろう。

「それでしたら後日正式な報告を大本営に送りますので、確認してはいかがですか？もしくは今すぐ確認したいのであれば、潜水艦を派遣していただいて沈んでいる深海棲艦を確認すれば良いかと。」

「チツ・・・良いからさっさと資材溜まりを明け渡せと言っているのだ！貴様は着任直後の慌ただしい時に、哨戒任務をしてやった恩を忘れたのか!？この恩知らずめ!!」

ついに難癖をつけるのを諦めて、強引に話を進めようとしてきたか。そんなものでどうにかなると本気で思っているのだろうか。

「ほう？もちろん覚えていますよ。着任直後の夜に夜戦をしたことは、つい最近の出来事ですからしつかり覚えていますが？」

「ふん、博多鎮守府の方が手を抜いて深海棲艦に抜かれたのだろう。私には関係無い話だ。というかさつきからなんだその態度は？新人のくせにやけに反抗的な態度ではないか？新人は黙って先輩の指示通りに動いていれば良いのだ!!そういう常識をしらないから、貴様はどの陣営にも入れない爪弾き者なのだ!!」

「ずいぶんな物言いだな。こんなクズが1つの鎮守府を管理しているのだから困ったものだ。しかもおそらくこいつが特殊な奴ではなく、よくいる提督の一人なので頭が痛くなる。」

「はあ・・・少なくとも私は敬意を払うべき相手にはきちんに対応しますが？まああなたには縁の無い話かも知れませんが。」

「なんだと貴様あ!!貴様なんかよりも遥かに実績のある先輩に対してなんとこの物言いだ!!私の後ろにはあの鶴野提督がいるのだぞ!!鶴野提督の不興を買って、ただで済むと思っっているのか!？」

「はっはっはっはっ」

「貴様あ!!何がおかしい!？」

「こいつも平川市長と同様に、虎の威を借る狐、ただの小物同士だともうも似るものなのだろうか？」

「これは失礼しました。いきなり面白い冗談を言われるのでつい笑ってしまいました。」

「人を馬鹿にするのも大概にしておけ!!」

「馬鹿にしているのはそちらでしょう？鶴野提督の不興を買ってしまいうですか？何を今更言っているのですか？少しでも交渉をするつもりがあるならば、相手を調べるくらいはしてはどうですか？鶴野提督の不興なんて一年前には買ってます。」

「貴様あ!!」

「そこからはばらく原田提督が喚いていたが、とりあえず受話器を机に置いて一息つく。それなりに時間を稼げたと思うのだがなあ。」

「提督、暁さん達が資材溜まりに到着したようです。」

「ならば早急に資材を回収して撤収しろ。もし高速修復材があれば最

優先に回収しろ。あと資材は燃料と弾薬は多めに欲しいところだな。」

「分かりました、そう伝えます。」

暁達が到着したのであればもうこれ以上付き合ってやる必要はないな。

「聞いているのか貴様?!」

「ああ、失礼。部下から報告を受けていたもので。もうすぐ私達の部隊は資材の回収が終わりますので、その後はご自由にされて下さい。ではこれ以上の会話は無意味ですので、これで失礼します。」

「なんだと?!ふざけ

ふう・・・やつとやかましい怒鳴り声が聞こえなくなった。本当に人間の相手は面倒だな。

「大淀、今晩は祝勝会を開きたい。間宮には少し豪華な食事を頼んで、明石には真柴さんに連絡して何か甘味を仕入れておくように伝えてくれ。」

「それは楽しみですね。準備のほうはお任せ下さい。売られていた艦娘達の帰還のお祝いも合わせて盛大にやりましょう!」

「ああ、任せた。私は残っている書類を片付ける。」

「そう言えば執務室は使われないのでですか?もう修理が完了していると思いますか?」

完全に頭から抜けてしまっていたな・・・

3階に上がり修理が終わったという執務室の扉を開く。壁に空いた大穴や散乱した瓦礫も消え去って、まるで新築のような部屋へと生まれ変わったようだ。残骸となっていた机も新しい物が用意されており、大きな机の上には通信機も設置してある。これならば艦娘達を呼び出すのに便利だ。後は書類を保管する本棚と、備品を置く為の棚があるだけのシンプルな作りだ。仕事をする場所ならばやはりシンブルにまとまっている環境の方が良いので、この執務室は自分の好みに合っている。執務室の出来上がりに満足したので、今度は隣の私室を確認しておこう。廊下に出て私室の前に来ると、きちんと扉が二つに増えている。中に入るとこちらもシンプルな作りになっていた。ベッドと洋服棚と机と椅子、最低限必要なものが揃っている感じだな。無駄な装飾等は全て消え去って、すっきりとした感じで、あとは窓にカーテンが必要なくらいだろう。部屋の奥の扉を開けるとトイレと小さな風呂場があるのも助かる。隣の部屋も同じ作りで客室としては十分だな。これは妖精さんにまた金平糖を持って行くべきかな？そう考えながら執務室に戻ると大淀が少し慌てた様子で入って来た。

「提督、外部の方からの面会希望がいくつか来ております。新聞社の方が一人と、新しい市長候補を名乗る方が3人です。」

平川市長が消えたのは今朝の事なのになかなか動きが早いな。新聞社に市長逮捕の件を探られるのは嫌だが、無視をすると憶測をまるで事実のように書き始めるから困ったものだな。とりあえず出せる情報だけ出して満足して貰うか。市長候補も一目会っておきたいところだ。市長を選ぶのは市民による選挙なのだが、鎮守府の影響力がかなり大きいものだ。ここ10年深海棲艦とは拮抗状態が続いているものの、脅威が消え去った訳ではない。もし仮に街を豊かに発展させてくれる市長が居たとしても、深海棲艦の襲撃を受けてしまえば瓦礫の山となる。さらにその時に行政と鎮守府の仲が悪く連携が取れていなかった場合、避難勧告の発令が遅れて多くの命が奪われる危険

もある。なので市長選挙においてその地域の提督の支持は大きな意味を持つ事になる。ならばこの北九州鎮守府の提督として、どの市長候補が一番良いか見極める必要がある。

「そうだな・・・まだ晩飯まで時間はあるし、新聞社の対応だけ初めにしておくか。彼らは情報の鮮度を優先するだろうから、こちらがすぐに会えると言えば飛んで来るだろう。市長候補達とは明日に会おう。午前中に一人と午後二人、時間の調整を頼めるか？」

「分かりました。連絡しておきます。」

それから30分もしないうちに、新聞社の人 came したとの報告を受けたので、大淀に応接室まで案内して貰った。報告を受けてからなかなか来ないので少し不安になったが、大方あちこち興味を持って大淀を困らせているのだろう。軍の施設なので許可無く写真撮影は禁止だし、艦娘相手に取材するのも禁止しているのだが・・・

コンコンコン

「失礼します。新聞社の方をお連れ致しました。」

「入れ。」

大淀に連れられて入って来たのは、小柄のかなり若い女性で驚いた。ショートカットで茶色の帽子を被り、首からカメラを引っ提げており、好奇心旺盛そうな目は青葉を連想させる。しかし快活そうな印象とは異なりゆっくり歩いて入室するのも意外だ。というかこの歩き方は・・・おそらく片足が義足だな。これならばここまで来るのに時間がかかるのも仕方ないな。

「いや〜お待たせしてすみません。仙崎情報社の仙崎まどかと申します。この度は取材を受けて下さりありがとうございます。」

「北九州鎮守府の葛原です。宜しく願います。えっと、仙崎情報社ですか？申し訳ありませんが聞いたことの無い名前ですね。」

「あはは、地域密着型の新しい会社ですから、ご存知無いのも無理は無いですよ。今回は大手の新聞社がごたついている隙に、ダメ元でお願いしてみたら許可を頂けたので、とてもありがたいことですよ!!」

そう言われれば新聞社の方としか聞いていなかったな・・・勝手に

大手の新聞社が来たと勘違いしたのはこちらの落ち度だな。

「ほう？大手の新聞社がごたついていると？」

「それはまあ・・・大手の方は前任者の提督や市長を称賛するような記事を書いていたので、今回の事件がありましたので・・・」

なるほど、大森提督や平川市長と癒着していたのに、汚職で逮捕されたなんてなれば混乱もするか。

「なるほど、それで仙崎さんが来られたと。会社の名前からして社長を務められているのですか？」

「いえ、会社を立ち上げたのは夫で、私は取材と記事を書くのが仕事です。なので経営は夫に任せてます。って私が取材されちゃってますよー！」

「これは失礼しました。それで本日のご用件はなんでしょう？生憎ここは軍事施設ですので、お答え出来ない事も多いのですが。」

「ええ、それは勿論承知しております。ですので答えられない事には答えられないとはつきり言って頂けると助かります。まずは鎮守府への着任おめでとうございます。士官学校での成績が優秀で在学中にいきなり提督に抜擢されたとのことですが、着任されてみてどのよう感じましたか？」

まずは無難な質問からと言ったところか。

「突然の配属で驚いてはいますが、私も提督の一人です。国防を担う人間として、それ相応の覚悟を持って職務を全うするつもりです。」

「これは頼もしいお言葉ですね。私達が安心して暮らせるように、是非とも頑張つて頂きたいですね。それでは、その、前任の大森提督が亡くなられた件に関しては、どうお考えですか？」

さっそく切り込んで来たが、質問も恐る恐ると言った感じだし、まだ取材に慣れていないのだろうか？

「申し訳ないですがそれは軍事機密です。軍の発表以外の事をお伝えする事は出来ません。平川市長の件に関しても同様です。」

「う・・・分かりました。それでは新しい市長候補についてはどうでしょう？」

最初から無理だと思っていたのか、すぐに引き下がったな。ベテラ

ンの記者ならなんだかんだ言いながら、情報を引き出そうとして来そうなものだが・・・

「先程市長候補の方から面会の申し入れはありましたが、まだお会いしていないのでなんとも言えないですね。」

「えっと、候補者は副市長を務めていた源さんと、最近議員になった若手の東雲さん、あと再建部門を担当していた綾瀬さんの3人ですね。皆さんと面会されるおつもりですか？」

「ええ、明日お会いするつもりです。宜しければ明日の夕方頃に来て頂ければ、話せる事もあると思いますか？」

「良いんですか!?是非とも取材させて頂きたいです!!」

そう伝えると物凄く嬉しそうで、尻尾をぶんぶん振る犬のような食いつき方だ。はつきり言ってここまで扱い易い新聞社の人間を使わない手は無い。一般人向けにある程度情報を発信する必要があるのなら、やり易いに越した事はない。

「ええ、お待ちしております。ただしここは軍事施設ですので、有事の際はそちらの対応を優先する事はご了承下さい。」

「ありがとうございます。ええ、勿論です。お仕事の邪魔をするのはこちらとしても避けたいですから。あ、質問の続きですが、葛原提督にとって艦娘とはどういう存在ですか？」

「艦娘は艦娘でしかないというのが私の持論なのですが・・・分かりやすく言うならば軍人が一番近いですね。艦娘自身に意思や感情がありませんが、国防を担う軍人として戦う必要がありますので。」

「えっと、では葛原提督は人権派になるのでしょうか？」

「それは違いますね。人権派は艦娘に甘過ぎると思っております。しかし過激派のように使い潰すつもりもありません。私は私の判断で最善だと思える運用をするだけです。」

「な、なるほど。では最後に市民の方々へ一言頂きますか？」

市民に向けて一言か・・・正直なところ邪魔さえしなければ興味は無いのだが、面倒事を減らす為にも無闇に反感を買う必要は無いな。

「私は提督としての職務をきちんとな務めるだけです。民間の方にもご協力頂く事もあるかと思しますので、その時は宜しく願います。」



「ありがとうございます。また明日の夕方にお伺い致しますので、その時はまた宜しくお願いします。」

「ええ、今後とも良い関係を築いていきたいものです。大淀、仙崎さんを送ってください。」

「はい、ではこちらへ。」

これでとりあえず新聞社の対応は良いだろう。思ったよりも楽な対応で済んで助かった。

## 69話（対話 金剛型姉妹）

出撃港でしばらく待っていると、出撃していた艦隊が帰還して目の前に整列した。

「第一から第三艦隊および遠征部隊、無事に帰還しました。目標の殲滅及び資材の回収に成功しております。」

「素晴らしい戦果だ。諸君等の活躍に感謝する。これより各自入渠を済ませ、午後8時に食堂へ集合するように。暁率いる遠征部隊は資材の計量をして納品して来てくれ。明石に資材の帳簿をつけさせているから、正確に計量を頼むぞ。」

「ええ、暁は一人前のレディだから、お仕事はちゃんと出来るわ。いっぱいいっぱい持って帰ったんだから!!」

駆逐艦6人にドラム缶だけを装備させて向かわせたのだ。かなりの量が期待出来そうだ。

「ああ、それは楽しみだな。それと金剛は少し話があるから残るように、では解散。」

各自艤装を外して入渠に向かう中で金剛がこちらを睨み付けている。一応金剛だけに残るように伝えたが、金剛姉妹全員が残っていて榛名が心配そうな目をしている。

「Hey 提督。お話はなんデース？」

「まずは今回は見事な戦果を上げてくれた。良く戦ってくれた。しかし今回の戦いではかなり無茶な戦い方をしたそうだな？」

「What?それが何か問題でもありますか?提督の命令通り誰も沈んでないデース。」

「ああ、今回に関しては問題無い。今の練度で味方艦隊の被害を押さえようと思ったら、突撃して被害担当を引き受けるしかないだろう。練度の高い雪風はともかく随伴艦の青葉の損傷も少ないから、そこにも配慮をしていた事が感じられる。」

「なら何も問題無いネー。」

「私が心配しているのは今後の話だ。今回の敵はこちらにとって面倒な相手だったが、それでも格下だ。強引な戦法でも押しきれただろ

う。しかし今後もそんな相手ばかりな訳はない。格上の敵が相手ならば突撃したお前達は、集中砲火で潰されて艦隊が壊滅しているだろう。」

「・・・そんなもしもの話をされても困りマース。状況に応じて戦い方を変えるなんて当たり前の事デース。」

「それは当然の事だ。問題は何故今回突撃をせざるをえなかったかだ。答えは簡単だ、お前達の砲撃の精度が良くないからだ。」

金剛は反論出来ず悔しそうに俯き、比叡と霧島が鋭い目で睨んでくる。

「以前の戦い方ならば遠距離から数撃ちや当たるとやたらに撃ちまくっていたそうだな。戦艦と空母だけで戦うなら接近する必要があるのだから、早急に援護に行く為に突撃を敢行した。いくら精度が悪くても近付けば当たるからな。違うか？」

「その通りデース。でも提督は速やかに敵艦隊を排除して援護に回れと命令したネ!!それに従って何が悪いネ!!」

「ああ、誤解しているようだが、今回の件を責めているつもりはない。むしろ今回は慣れない突撃戦法でしっかりと戦果を上げて、損害も押さえられているので、そこは褒められるべきだと考えている。しかし私としては今後の事を考えなくてはならない状況だ。今後主力艦隊として働いて貰うならば、突撃だけでは生き残れない事は理解して欲しい。状況次第では有効な戦術だが、それだけしか出来ないようでは話にならないからな。」

「・・・それで私達に何をしろと言うネ？」

「演習を真面目に取り組め、特に砲撃の精度向上が最優先課題だ。それと機動力関係だな。同じ突撃でもただ真っ直ぐ突っ込むのと、敵の砲撃を予測して避けながら進むのでは大きな差が出る。」

「OK それが提督の命令なら従いマース。なら話はこれで f i n i s h ネ?。」

半ばなげやりに金剛は話を打ち切ろうとする。このままではたぶん口約束だけで、金剛達はたいして変わらないだろう。

「いや、最後にもう少しだけある。今回の戦いを任せてみて感じたが、お前は味方の損害を押しさえようとする為に自分自身の損害を許容しているようだ。そんな思考ではいつか沈むぞ?」

「・・・提督は私達が兵器なのを忘れてマース。兵器で戦う以上損耗するのは当然の事デース。それを提督が気にするのはおかしい話ネー。」

「ならばどうして味方を守ろうとする? 戦略価値だけを考えて駆逐艦や巡洋艦とお前達戦艦を比べたならば、どちらがより重要になるかは分かるだろう?」

「ツ!!ならば提督はまた駆逐艦達を盾にして戦えと言うのデスカツ!? また救える命を救えない無力感を味わえと言うのデスカツ!? そんな地獄のような日々を・・・諦めきつた目で沈んでいく仲間を見送る日々を!! 誇りも希望も踏みにじられた日常を過ごせと言うのデスカツ!!」

涙を流しながら激昂する金剛。ついに金剛の本音を垣間見た気がする。榛名から聞いてはいたが金剛の本質は優しいのだろう。その優しさを踏みにじられて出来上がったのが、無気力で命令に従うだけの金剛だ。それでも誰かを守ろうとしてしまう優しさを捨てきれないから、自身を犠牲にしようとしてしまったのだろう。

「ようやく金剛の思いを聞いた気がするな。そんなお前に私から言える事は一つだけだ。仲間と誇りを守りたいのなら強くなれ。それしか道は無い。演習を重ね、実戦を切り抜け、数多くの戦い方を身に付けろ。それが味方も姉妹も自分自身をも守る唯一の方法だ。最初に言ったが私はお前達艦娘を無闇に沈めるつもりはない。それはお前達艦娘の練度を上げなければ、いざという時に何も出来ない無力な鎮守府になるからだ。はつきり言うがもし今この鎮守府に姫級なんて来たならば、ろくな抵抗も出来ずに潰される。それこそ4大鎮守府に助けを求めるお荷物へと成り下がる。今すぐに強くなるのは不可能でも、私はいつまでもそんな底辺を這いずり回る気は無い。だからお前達が強くなろうとするならば、それを支えるのが私の仕事で、障害になるものがあれば全てを排除する覚悟がある。」

激昂していた金剛も、隣で鬼の形相で睨んでいた比叡と霧島も、ど

うして良いか分からずに悲痛な面持ちをしていた榛名も、何も言えずに押し黙る。こちらの覚悟と意思が伝わったのであればもう十分だな。

「長くなったが私から言いたい事は一つだ。強くなれ。以上だ。艦装の解除と入渠を済ませておけ。」

そう言つて呆然と立ち尽くす金剛姉妹の前から立ち去った。

提督が立ち去った後も私達はしばらく動けずにいました。金剛姉妹も比叡姉妹も霧島も少し怯えているように感じます。

「金剛姉様、大丈夫ですか？」

「ふう……Thanks you 榛名、大丈夫ネ。あれが榛名が信じた提督ですか？静かなのに凄く怖い目をしてたネ……」

「そう……ですね。榛名も少し怖かったですけど、それでも榛名は提督を信じてます。提督の覚悟は本物です。私達を強く鍛え上げて、精強な鎮守府を作る覚悟があります。その為には私達を簡単に沈めつもりはないと言う話に嘘は無いと思います。ならば榛名は信じてついでにこうと思います。金剛姉様はどう思われますか？」

「Oh……理由は本当にそれだけですか？」

流石は金剛姉様です。榛名の事を良く見てくれています。ですが提督と約束しましたので全てを話す訳にはいきませんね……

「……提督を信じる根拠はまだありますが、これは金剛姉様達にも話が出来ません。提督の信頼を裏切る事は出来ません……でもいつか金剛姉様達も信頼して貰つて、提督から話して貰えたら榛名は嬉しいです。」

「OK 大事な約束があるなら無理には聞かないネ。比叡、霧島、二人は提督を見てどう思いましたか？」

「怖かったです……でも榛名が信用するのも少し分かる気がします。」  
「そうですね……前任の大森提督とは全く違う存在ですね。少なくとも嘘をついているようには見えませんでした。」

「OK ならばワターシももう少し提督を信じる事にしマース。だからまずは提督が言っていた演習を頑張りマース！ついて来て下さい

ネー!!」

「はい!!金剛お姉様にどこまでもついて行きます!!」

「はい!!榛名頑張ります!!」

「もちろんです。金剛お姉様。」

「それでこそ私の妹デース!!」

やっと金剛姉様の笑顔が見れて、榛名は嬉しいです。

## 70話

金剛姉妹との話を終えて執務室に戻って一息つく。今回はそれなりに大きな戦いをしたので、明日は掃討戦をしてあの資材溜まり周辺を安全にしておきたいものだ。しかしまずは大淀と共に今日の戦闘結果のまとめを進めていくのが先だ。鎮守府の資金の多くは大本営から支給されるもので、鎮守府の規模によって変わる維持費と、深海棲艦を倒す事で貰える討伐報酬がある。後はその他副業で稼ぐ提督もいるが・・・早い所討伐報酬が貰えるように、書類はさっさと提出するに限る。

コンコンコン

「提督、暁よ。」

「天龍もいるぜ。」

「入れ。」

暁が一枚の紙を持って執務室へとやって来た。遠征の結果の報告だろう。いっぱい資材を持って帰ったと言っていたから楽しみだな。天龍は今回の戦闘の報告だろうか？

「資材の計量が終わったわ。明石さんからこの書類を渡して欲しいって頼まれたの。」

「ありがとう、確認させて貰おう。」

暁から書類を受け取って確認すると、想定以上の結果だった。高速修復材5個に燃料と弾薬を満載だ。燃料と弾薬優先とは言ったが、余ったスペースに鋼材やボーキサイトを載せて来ると思っていた。しかしこの量ならば燃料と弾薬だけで一杯になったのだろう。

「どうやらかなりの量があったようだ。よくやった。」

「当然よ！だって暁はレディなもの。それにあそこにあった深海棲艦を皆が倒してくれたおかげだもの。」

「それもそうだな。」

「でもあれだけ資材があるなら、長門鎮守府の人と喧嘩する必要はなかったかも知れないわ。」

「・・・そんなに多かったのか？」

「ええ、あそこは宝の山みたいだったわ。たぶん長門鎮守府が持って行ってもまだ少し残るんじゃないかしら？」

「そこまでか……」

「提督？」

暁が不思議そうに首を傾げているが、これは思ったよりも厄介な話かも知れない。

「ああ、いや、大丈夫だ。それより入渠は済ませたのか？ 8時から美味しい食事が待ってるぞ？」

「それはとっても楽しみね。じゃあこれで失礼します。」

ペこりとお辞儀をしてルンルン気分執務室を出ていくのを見送って、少しため息をついた。

「なんだよ提督、資材が多かったのがそんなに嫌なのかよ？ まあ、長門鎮守府の奴らに資材をやるのは癪かも知れねえがよ。」

「いや、そこは全く気にしていない。自分達の分が確保出来るならば後の事は知ったことではないからな。問題は資材が多すぎるほうだ。」

「は？ どういう事だよ？」

天龍は訳が分からないと言った表情だが、これにはきちんとした根拠がある話だ。

「大淀、あの資材溜まりは特別溜まるのが早かった訳では無いよな？」

「ええ、ごく一般的な資材溜まりでしたが、深海棲艦が拠点としていたのであれば、多いのは当然では無いのですか？」

「あのサイズの集団にしては多すぎる。今回は輸送ワ級も確認していないのにこの量だ。しかも今回の敵のトップは空母ワ級だろう。」

「それがなんだよ？」

「深海棲艦の知能の話だ。基本的に深海棲艦は知能が低い、上位の個体になればそれなりの知能を得る。そして下位の個体は上位の個体の命令に従い、群れを形成する性質がある。」

「それはまあ……知ってるけどよ。」

「今回相手にしたワ級くらいならば艦隊程度が管理出来る限界だろう。歴戦個体の flagship とかならば話は変わるが、今回の



相手は普通のヲ級だ。」

「ああもう！だからなんだってんだよ!!」

天龍がしびれを切らすか、これは前提条件だ。

「だが今回見つかった資材の量を考えれば、3艦隊で必要な量を遥かに超えている。それに輸送ワ級も確認出来ていないのだ。つまり……」

「な、なんだよ……」

「あれは敵の本隊ではなく、侵略の為の前線拠点だったと考えるべきだ。もちろん今回戦った相手よりも多く、上位種が率いる群れが存在するだろう。前線拠点を構築するという軍事的な行動をするならば、それ相応に上位の個体だな。」

「マジかよ……」

流星に好戦的な天龍でも焦る話か。今回の戦いでも鎮守府の戦力の大半を使い、多少の損害は受けている。それなのにさらに多い敵で、しかも上位種が率いるのであればより困難なものになる。本能任せで攻撃してくる下位の深海棲艦よりも、能力が高く戦略的な戦い方が出来る上位種のほうが、圧倒的に恐ろしい相手だ。はつきり言って戦って勝てるとは思えない。

「幸い今回敵の侵攻拠点を潰した事で、敵の侵攻は遅れる事になる。早目に見つけて対処出来たのは運が良い。大淀、あの資材溜まりの奥に上位種が控えて居るかも知れないと、大本営に連絡をしておいてくれ。後は長門・博多・佐世保あたりには個別で注意を呼び掛けて欲しい。そうすれば何かしら動きがあるかも知れない。」

「分かりました。すぐに連絡します。」

「なら俺達はどうすんだよ?」

「今日はこれ以上の行動は避けた方が良くからゆっくり休め。今後の方針は、明日資材溜まり周辺の様子を見てから決める。明日からもハードな戦いになる可能性もあるから、今日の疲れを残すなよ?」

「了解だぜ。つと、今日の報告をしに来たんだったな。大淀には伝えているが、今日は金剛達が活躍してくれたから、俺達の隊は被害が少ないぜ。けど敵水雷戦隊の足止めにして、その後の殲滅戦にして駆逐

艦の奴らはかなり頑張ってた。後でしっかり褒めてやってくれ。特に春雨は凄かった！練度に差がある島風を押さえ、今日の一番だったぜ!!」

ほほう、白露型姉妹の中では夕立が一番性能が良かったが、今回は春雨が上回ったか。戦場での戦果はその日の調子や相手の動きにも左右されるから、性能が戦果に直結する訳ではないか。

「分かった。後でしっかり褒めておくとする。天龍もご苦労だった。」  
「おう！次の戦いも任せておきな!!」

頼もしい言葉を残して天龍が執務室から去って行く。なかなか水雷戦隊の旗艦として様になっているではないか。今後の成長が楽しみだな。

## 71話（4日夕食）

一通り報告書作成と周囲の鎮守府に警戒の呼び掛けを終えた。大淀の話では長門鎮守府は無反応で、佐世保鎮守府と博多鎮守府からは最近の戦闘記録の共有を求められたので、情報を共有したとの事だった。もちろん大本営のほうにはきちんとした報告書を提出しているので、明日あたりには届くだろう。

「提督、間宮さんから夕食の準備が整ったとの事です。」

「分かった。」

今晩は祝勝会と伝えていたが、何が出てくるのか楽しみだな。

大淀と共に食堂に近づくと中からざわざわとした気配を感じる。中に入ると艦娘達は中央にスペースを作って並んでおり、食堂の奥からは良い匂いが漂ってくる。自分が入って来たからか私語は謹んでいるようだが、それでも期待でそわそわしている者も見受けられる。これはあまり待たせるのも酷だな。

「提督、総員51名揃っております。」

「分かった。」

いつもの簡易的なお立ち台に登って挨拶の準備をする。

「総員、提督に敬礼!!」

いつもの長門の号令で艦娘達が敬礼してくるが、今まで売られていた艦娘達も遅れる事が無いのを見ると、やはり生まれながらの軍人なのだなと感じる。

「まずは先程は諸君の活躍により、資材溜まりに陣取っていた深海棲艦の部隊を殲滅することに成功した。現状の戦力を考えれば大きな戦果と言えるだろう。諸君の奮闘に感謝する。よって今日はささやかながら祝勝会を開く事にした。おおいに楽しんで明日からの活力に繋げ、より一層職務に励む事を期待する。また、今日は長らく不当な扱いを受けていた者達の帰還祝いも兼ねている。これを機に交流を深め、命を預ける者として絆を深めて欲しい。何はともあれ今宵は宴だ、しっかりと楽しめ。以上だ。」

「総員、提督に敬礼!!」

話を終えると長門や陸奥を中心に手際良く準備が進められる。艦娘達が左右に避けて中央にいくつか机が配置され、食堂の奥からどんどんと大皿に乗った料理が運ばれて来る。どうやら今日は立食形式での食事になるようだ。料理を運ぶ途中で危うく電と雷が衝突しそうになっていたが、ギリギリ回避に成功して料理を台無しにする惨劇からは逃れられた。料理が並べられて各自に食器が配布されたが、微妙な雰囲気でも動こうとしないのだが・・・ああ、そうか、自分に気を使ってしまうているのか。ならばさっさと動いたほうが良さそうだな。

「遠慮するな。せっかくの料理が冷めてしまうぞ。」

料理を取りながらそう声をかけると、艦娘達は一斉に動き出して、そこはまるで戦場のような混雑ぶりだった。早々に自分の欲しいものを手に入れて、食堂の隅の方を陣取ると間宮が水を持って来てくれた。

「提督、お疲れ様です。」

「ありがとう。間宮こそお疲れ様。急な話だったのに良く準備を整えてくれた。感謝する。」

「いえいえ、鳳翔さんや翔鶴さん達にも手伝って貰いましたので。それに皆さんがこうやって喜んでくれるのが何よりの喜びです。」

「頼もしい言葉だな。」

「提督には感謝しています。前の提督さんの時にはこんなに笑顔が溢れる事は有りませんでしたから。」

「しつかり戦果を上げて来たのだ。それにはしつかりと報いるさ。間宮も自分の分を確保しないと無くなるぞ?」

「あらあら、いっぱい用意したのにもうあんなに。これはちよつと作り足した方が良いかもですね。それではこれで失礼しますね。」

艦娘達が料理を取り終わって座席を確保しているようだが、残された大皿にはほとんど料理が残っていない状態だった。おかわりするのが前提の大食艦達もいるので、準備する量が足りなかったようだな。間宮は困りましたねえと言いなながら食堂の奥へと消えて行った

が、その背中は何んだかとても嬉しそうだった。

「司令官！お食事中にすみません、取材宜しいですか!？」

「ちよ、青葉！」

声をかけられた方を見ると、目を爛々と輝かせた青葉と、かなり困惑気味の衣笠が居た。二人共しつかりと料理は確保済みのようだ。

「はあ、構わんが早く食べないと料理が冷めるぞ？」

「ではご一緒させて頂きますね。ほら、衣笠も座って座って。」

「え、ええ!?!本当に大丈夫ですか？」

「ああ、気にするな。」

「じゃ、じゃあ失礼します。」

自分の前の席に座った青葉型姉妹だったが、好奇心旺盛な猫のような目をした青葉と、借りてきた猫のように大人しい衣笠が対照的だ。まあ、衣笠は今日初めて会ったので、慣れていないのは当たり前だ。むしろこの短期間でぐいぐい来る青葉のほうがおかしいのではないだろうか？

「まずは深海棲艦相手の大勝利おめでとうございます。」

「ありがとうございます。青葉も金剛達と共に良く戦ってくれたそうだな。」

「いえいえ、青葉はサポートに回ってましたので、金剛さん達について行っただけのようなものですよ。金剛さん達にしっかりと守って貰ってましたし。」

「まあそう言うな、サポートもちゃんとした仕事だ。」

「ははあ、有り難きお言葉恐縮です。では大規模戦闘を無事に乗り越えた感想など頂けますか？」

「そうだな、まずは勝って安堵している。勝つ為に情報を集めて編成も考えているが、戦場では何があるか分からないからな。だが深海棲艦の脅威がなくなった訳ではないから、油断は禁物だ。」

青葉はふむふむと頷きながらメモに書き込んでいく。いや、ちゃんと食事しろよ。

「なるほど、勝って兜の緒を締めよですね。参考になります。それでも今日は豪華な祝勝会を開いて頂いてありがとうございます。皆さんとっても喜んでますよ。」

「そう思うならちゃんとした食事も楽しめ。」

「あはは、これは失礼しました。」

「えっと、じゃあ私も質問良いかな？」

衣笠が恐る恐るといった感じに手を上げて質問の許可を取ってくる。

「どうした？」

「その、今日は摩耶に結構厳しい事を言ってたよね。でも今は祝勝会なんて開いて優しくしてくれてるし、どっちが本当の提督の姿なのかなあと思ってる。」

「本当の姿も何も私は私だ。軍人として必要な事をしてるだけだ。規律を守る為には厳しくしなければならぬが、成果を上げたならばきちんと報いることも重要だ。組織に必要なのは信賞必罰だ。よく罰のほうに意識がいつてしまいがちだが、賞もまた疎かにしてはならないものだ。功績にはきちんと報いなければ、誰も頑張ろうとは思わなくなってしまう。」

「・・・そっか。青葉が言ってた、怖い人だけど信用出来る人だつてのが少し分かったかも。」

「ふふん、そうでしょう。青葉も一人の艦娘として、そして一人の記者として司令官の事を見てますからねえ。司令官はしっかりした人ですよー！」

青葉がどや顔で自慢しているが、まあいいか。一応信頼はしてくれているようだしな。

「あ、そう言えば信賞必罰で思い出ししたが。」

そう言つて青葉のほうに視線を向けると、可愛らしく首を傾げているが、何かに気が付いて冷や汗をダラダラとかき始める。

「いやいやいや、今は楽しいお祝いの席ですから。こういう時は楽しいお話だけにしておきましょうよ！ほ、ほら、お料理もとっても美味しいですよー！」

「え、なに？青葉何かやらかしたの？」

「ちよ、衣笠！今はそういう事言わないで！」

あたふたと慌てている青葉を見ると、なんだかもうどうでも良く

なってしまうな。

「はあ・・・まあ今回は初犯で未遂だったし、今日の功績も考慮して恩赦と言う事にしよう。」

「ははあ！寛大な処置に感謝致します！」

その後少し大人しくなった青葉と、少し嬉しそうな衣笠と共に食事を楽しんだ。

## 72話（対話 曙）

食事を堪能したので食器を間宮の所へ持って行く。ちょうど間宮も追加の料理を出し終わって一息ついているところのようだ。

「ご苦労様。今日も美味かった。」

「あ、提督さん。ありがとうございます。」

「食事を終える者達も居るだろうから、そろそろデザートを出してやってくれるか?」

「あ、そうですね。すぐに準備します。」

「ああ、それと金平糖を貰えるか?」

「ふふつ、妖精さん達にもご褒美ですか?きつと喜ぶと思います。はい、どうぞ。」

「助かる。」

金平糖を受け取って工廠へと向かおうとすると、途中で響が話しかけてきた。

「やあ、提督。今日はご馳走が食べられてとても嬉しかったよ。」

「ああ、それは良かった。今日は偵察に遠征と頑張ってくれたからな。明日からも頼むぞ。」

「了解だよ。それはそれとして・・・なにか良さそうな物を持つてるね。こいつは力を感じる。」

響が物欲しそうな目で金平糖を見てくる。やはり甘い物が欲しいのだろう。他の艦娘達も気になったようでかなり注目を集めている。

「こら響!そんな催促するなんてレディのすることじゃないわよ!!」

「もしかして甘い物っぽい?夕立も欲しいっぽい!!」

「あ、待ちなさい!お姉ちゃんがいったちばんに貰うんだから!!」

「ちよつと二人ともやめなよ。」

「・・・じゆる。」

「赤城さん・・・まずは目の前のお皿の物を食べてからよ。」

「加賀さんだつて手が止まっていますよ?」

「んんっ!そんな事はないわ、少しゆっくりと味わっていただけです。」



「あらあら？気になるなら長門も貰いに行けば良いじゃない？」  
「な、なにを言うか！そもそもビッグセブンとしての威厳と言うものがな……」

「なら私は貰いに行つて来るわね。」

「な!?!おい!!」

なんだか大騒ぎになってしまったな……

「響、悪いがこれは妖精さん用の物だ。」

「そうかい……それは残念だね……」

「お前達の方は別に用意してある。今間宮が用意しているからそつちを食べろ。」

「Спасибо!!それはとても楽しみだ!!」

甘味が食べられると聞いて、食堂内はお祭り騒ぎだった。気が早い者は間宮さんの所に駆け込んで行つてしまった。

「では私はもう行くぞ。」

「わかったよ。また頑張るから期待しててね。」

「ああ、頼んだぞ。」

響にそう告げて食堂を後にした。

〜工廠のとある一角〜

『艦娘付きの奴らは良いよなあ……今頃ご馳走の分け前にありついでる頃だぜ。』

『そうだなあ。でも今回は俺達だけ金平糖貰つてたからな。』

『なあに、また貰える機会はあるはずさ。』

『それもそうだな。ならさっさと艤装の整備を続けるか……』

『おいお前ら!!一旦仕事を切り上げろ!!』

『どうしたんだよ?』

『艦娘付きの連中から入電だ!!提督が金平糖を持って工廠に向かつているらしいぞ!!』

『なんだって!?!全員作業は中断だ!!作業台の上に集まれ!!金平糖だあ!!』

『『うおおおお!!』』

工廠に着くとそこには作業台に沢山の妖精さんが集まっっていて、自分が部屋に入ると敬礼で迎え入れられた。昨日渡した時よりも人数が増えているので、昨日隠れていた連中も出てきたのだろう。既に連絡があつたのか、ビシツと敬礼こそしているものの、その表情は期待に満ちたものだった。

「どうやら話が伝わっているようだな。まずは執務室の修繕と私室の改装工事ありがとう。満足な出来映えだった。それと今日は深海棲艦相手に勝利したお祝いだ。この勝利は諸君等後方支援組の貢献もあつての事だ。よつてささやかながら金平糖を授与する事にした。皆で食べてくれ。」

そう言つて作業台の上に金平糖を置くと、妖精さん達が一斉に群がり始める。艦娘にしろ妖精さんにしろ本当に甘い物が好きなのだな。

工廠を後にして私室へと帰つて来た。本来ならばまだ寝るには早い時間なのだが、昨日は暗殺者が来たのであまり眠れていないので、今日は早めに眠りたいものだ。明日もまた面倒な案件も多いからな。

コンコンコン

「提督、曙です。」

「入れ。」

曙か・・・うちにいるのは知っているが、全く話したことが無い艦娘だ。聞いた話では前任者に酷い扱いを受けていたとの事だったな。案の定と言つてはなんだが、入つて来た曙の表情は暗く、士官学校で見たツンツンしていた雰囲気は全く無い。

「それで何の用だ？」

「えつと・・・まずは売られていた娘達を取り戻してくれてありがとうございます。ございます。それに私達の待遇を改善して頂いた事も感謝しています。帰つて来た私の姉妹達もとても喜んでいました。」

「それは良かった。しかし私は提督として強い鎮守府を作る為に必要な事をしているだけだ。士気の低下はそのまま戦果の低下に繋がるし、艦娘達を取り返したのも戦力として期待しているからやった事

だ。」

「そう・・・ですか・・・それでも安心して姉妹達を任せられます。」  
「ん？どういう事だ？」

信頼してくれたのだと思うのだが、なんだか言葉の選び方が気になる所だ。

「その・・・今日は提督にお願いがあつて来ました。」

「ほう、なんだ？」

「私を・・・私を解体して下さい。」

## 73話

いきなり自分を解体しろと言ってきたか……これはまた厄介な話だな。

「……理由は？」

「……艦娘の販売に関わっていたからよ。」

「そうか……だが前任者の大森提督の命令でやらされていたのだろうか？」

「それはそうだけど……だからって許される事ではないわ。それに憲兵隊にもあなたにも何も言わなかったわ。」

確かにそれは一理あるが、どうせ脅されていたとかならう。前任者のやりそうな手口だ。

「とりあえず知ってる事を全て話せ。判断はそれからだ。」

「ええ、分かったわ。」

そこから聞いた話は想像通りの胸糞悪い話だった。きつかけはやはりと言うか、曙が着任時に大森提督を罵った事から始まる。当然激怒した大森提督は曙に罰を与えたが、それでも曙は他の艦娘達への仕打ちが許せずに反抗を続けた。結果は瑞鶴の時と同様に、曙への罰を他の艦娘に与えてその姿を曙に見せ付けて心を折った。さらには第七駆逐隊を人質にして、艦娘の販売を手伝わせたそう。平川市長の元へ第七駆逐隊が送られて、あいつ等に酷い事をされたくなければ黙って手伝えとの命令だった。艦娘を販売する時は大淀に代わって秘書艦を務めて、隠蔽工作に協力させられていたという。そもそも提督が命令すれば逆らう事が出来ないのに、わざわざ人質を使って脅すなんて悪趣味極まりない。大森提督が殺された後に助けを求めようとしたが人間は信用出来ないし、何より姉妹が平川市長の所にいるので、下手な事をすれば酷い事をされてしまうので動けなかったそうだ。しかし実際に帰って来た姉妹はボロボロの状態で、他の艦娘達も酷い扱いを受けていた事実を知ってしまった。

「とりあえず話は分かったが……やはり悪いのは大森提督と平川市長

と艦娘達を買って虐待していた奴等だろ。曙が責任を負う必要はないと思うが?」

「そんな訳ないわ!!私が大森提督に逆らったからこんな事が起きたのよ!!私に勇気がなかったから誰にも助けを求められずに、あの娘達はずっと苦しい思いをしてきたのよ!!それなのにあの娘達は私の事を責めないの!!泣いて謝っても辛かったねって慰めてくるの!!辛い思いをしてたのはあの娘達なのに!!こんなのが許されるわけ無いじゃない!!」

「だから私から罰を与えて貰おうと思ったと言うことか。」

「ええ、そうよ。提督としても今までこの事を黙っていたんだから、罰を与えるには十分な理由でしょ?」

これは本当に厄介な話だ。はつきり言つて曙に非があるとは思えない。強いて言えば最初に大森提督に反抗した事だが、それは大森提督自身から罰を与えられているし、その罰を他の艦娘に与えていたのは大森提督に非がある。だからその件は当事者同士の話で自分には関係が無い。自分に助けを求めなかった件も、人間不信と人質がある状態で助けを求めるべきだったと言うのは酷な話だし、自分が直接質問して隠していた訳でもない。だから曙に非が無いと考えるのだが、曙はそれを認めようとはしないだろう。しかし曙を解体すれば第七駆逐隊は勿論だが、他の艦娘達にも悪影響を与えてしまう。非が無い者を罰するのは許容出来ないが、罰を与えなくては曙が納得出来ないという矛盾。本当に面倒な話だ。

「話を聞いたがやはり解体するには理由が足りないな。」

「なんでよ!?!」

「今この鎮守府は立て直している最中だ。そんな状況で私が罪が無いと思う者に罰を与えれば、組織としての規律が揺らぐ。」

「だから私は罪を犯したから罰を受けるって言ってるのよ!?!」

「はつきりと言うが、お前の感情に巻き込まれても迷惑なだけだ。お前の感情で罪があると考えていようが、ここでは判断を下すのは私だ。それもこの鎮守府の責任者としての仕事だ。」

そう伝えると曙は呆然と立ち尽くす。曙は罰を受ける覚悟は出来

ていても、許される覚悟はなかったのだろう。

「じゃ、じゃあ私はどうすれば良いのよ……」

「他の奴らに迷惑をかけたと思うなら、その分働いて取り戻せ。」

「そんな都合の良いこと許される訳がない!!」

「それは誰が許さないのだ?」

「え?」

「私は許した、聞いた話では売られていた艦娘達も許しているそうだな。なら誰が許さないと言うのだ? 艦娘達が表向きでは許していても、裏では怨み言を言っていると考えているのか?」

「そんな訳ないわ!!あの娘達がそんなに性格が悪い事をするわけ無い!!だから……私が私を許せない……だけね……」

やはり問題は曙自身の自責の念か。そうなると後は曙も納得出来る方法で、しかもあからさまな罰では無いものか……

「なあ、曙。お前は解体される事を望んでいたがそれは出来ない。これは私としては譲れないところだ。さらに言えば前任者のように体罰を加える等の罰を与える事も、規律を守る為にはもちろん出来ない。」

「そう……」

「でもそれだと曙は納得出来ないのだろうか?だから妥協案だ。曙にはきつい仕事をして貰う。自責の念に耐えながらその仕事をする事を罰として受け入れて貰う。」

「……私は何をすれば良いのよ?」

「秘書艦の補佐だ。」

「はあ!?!」

完全に想定外だったようで、思わず叫んでしまったようだ。

「あんた何を考えてるのよ!?!私は今まで大淀さんの代わりに秘書艦代行をさせられて、悪事に加担させられてたのを忘れたの!?!」

「だがそれは曙自身の意思ではなくて脅されていただけだろう?だからやり直すチャンスを与えているのだ。大淀は秘書艦としては優秀だが、一人では手が回らない時もあるし、休みを与える事も出来ない。補佐くらいは付けておいたほうが良いだろう。」

「でもそんな事を罰にだなんて・・・もつと厳しい最前線に行くとか・・・」

「そんな事だと？秘書艦の仕事を舐めるなよ？」

「え？いや、舐めてる訳じゃ・・・」

「秘書艦は後方支援の要だぞ？情報伝達が遅れば現場の艦娘達の命に関わる重要な仕事だ。半端な覚悟で務められると思うなよ？」

「ご、ごめんなさい・・・」

これで秘書艦の重要性は認識して貰えたようだな。後はこの話に納得して貰うだけか。

「それでこの話を受けるか？言っておくが曙が秘書艦に対してトラウマを持っている事を知った上でこの話をしている。逃げるのならば今のうちだぞ？私としては覚悟の無い者に秘書艦を補佐とは言え任せる事は出来ない。だがこの仕事をしつかりと務める事は鎮守府に大きく貢献し、艦娘達を助ける事に繋がる。それを曙自身の罪の意識への罰としろ。」

曙は目を瞑ってしばらく考え込んでいた。秘書艦を務める事への恐怖や嫌悪感、艦娘達への罪悪感、これで本当に罰になるのかと言う疑問。それらを整理して折り合いを付けるのは、なかなか難しい事だろう。しかし目を開けてこちらを真っ直ぐ見る瞳には、確かな覚悟を感じられた。

「分かったわ。その仕事引き受けるわ。もちろんやるからには全力を尽くすから。」

「当然だ。これから宜しくな。」

「ええ、宜しくお願います。」

「ならば最初の仕事だ。大淀を呼んでくれ。」

「はい!!」

ひとまずはこれで落ち着くだろう。大淀も一人では大変だろうか、人手が増えたほうが助かるだろう。

## 74話（対話 大淀）

曙と共に私室で待っていると大淀がやって来た。

「提督、どうされましたか？」

「今曙と話をしてな、大淀にもきちんと話しておこうと思つてな。」

それから曙の補足を受けながら、曙の過去について話をした。大淀は秘書艦としてやはりシヨツクな内容だったが、さすがに曙を責めるような真似はしなかった。

「それで曙さんは罰を求める為に提督の元を訪れて、自分を解体して欲しいと言つたのですね？」

「ああ、だが私としては曙に非があるとは思えなかつたので、規律を守る為にもそれは出来ない。しかし何も無しでは曙が納得しなくてはな。妥協案として曙には厳しい仕事を任せる事で、罰の代わりとする事になつた。」

「厳しいお仕事ですか？」

「ああ、曙には大淀の下で秘書艦の補佐をさせようと思う。」

「秘書艦の補佐ですか!？」

まあ、大淀が驚くのも無理は無いか。今まで大森提督の指示で汚職に加担させられていた者を、補佐とは言え秘書艦に抜擢しようと言うのだ。

「曙本人の意思は確認済みだ。曙が秘書艦にトラウマを持っている事も承知している。それでも前に進む為にもやらせてみようと思つている。」

「大淀さん、私頑張るから。お仕事を教えて下さい。」

深々と頭を下げて大淀に頼み込む曙。士官学校時代に見た曙は常にツンツンしていて、こんなに素直に頭を下げるイメージはなかったが、本来真面目な性格だしそれ相応の覚悟を持っているのだろう。

「そ、それは・・・その・・・提督、私何か至らない事をしてしまったのでしようか？」

「ん？なぜそんな話になる？」



「その・・・急に曙さんを秘書艦にするなどと言われたもので・・・私は秘書艦の仕事に責任を持って取り組んでいます！戦場ではお役に立てない私が唯一活躍出来る場所なんです!!この鎮守府こそが私の戦場なんです!!葛原提督が着任されてようやくまともにお仕事が出来て、私が全力で支える事が出来る提督に巡り合えたのに・・・今度こそ仲間を守ると決めたのに、私はこの仕事を奪われてしまうのですか!?!私が春雨さんを庇おうとしたから信用を失ったのですか・・・?」  
急に泣き出しながら大淀が取り乱し始めた。普段は冷静な対応をしていただけに、かなり意外な反応だ。

「待て待て、大淀を秘書艦から外すなんて言っていないぞ!?!曙はあくまでも補佐だ。大淀の仕事に不満は無い。だが秘書艦はハードな仕事だから、補佐くらいは付けたいとも思っていただけだ。書類関係に電話対応に接客対応、さらには出撃や遠征の管理と通信、敵襲時の対応やその他雑事等仕事が多すぎる。深夜に急に呼び出す事もあるのだから、満足に睡眠が取れるかも怪しい仕事だぞ?」

「私は艦娘です!!人よりも強い体を持っています。他の艦娘の皆さんだって、数日かけて遠征する事だって可能です。もちろんお仕事は忙しいですが、それは秘書艦として責任を持ってやる事です。ですからどうか私から秘書艦の仕事を奪わないで下さい・・・」

「だから秘書艦は変えないで、補佐を付けると言っているだけなのだが・・・」

まさかここまで反対されるとは思わなかった。秘書艦の仕事にここまで責任感を持つてくれているのは嬉しいが、補佐を付ける事に過敏に反応しているのは困ったな・・・

「見たか曙?大淀はこれだけの覚悟を持って秘書艦をやってくれている。補佐とは言え秘書艦の仕事の重要さは理解出来たか?」

「ええ、大淀さんのこんな姿は初めて見たわ。提督の言ってた通り、秘書艦の仕事は大変なものだって分かったわ。でも私も引く気は無いわ!!せっかくだかり直せるチャンスを貰ったのだもの。雑用でもなんでもやってやるわ!!」

「一応言っておくが、曙は専任で秘書艦の補佐をやらせるつもりはな

いからな？曙には出撃や遠征にも出て貰わないと困るからな？」

「ええ、分かったわ。それも仕事ならきちんとやるわ!!」

曙の方も譲る気は一切なしか。やる気に満ちているからには、有効に活用したいものなのだ。

「大淀、落ち着いて考えて欲しい。今うちの鎮守府で中核を担っているのは誰だ？」

「そうですね・・・秘書艦としての私、軍事関係や艦娘達の取り纏めをしている長門さん、工廠と資材の管理や物資の買い付け等をしている明石さんでしょうか？」

「食事関係を担っている間宮もだな。そして長門には陸奥がいるし、明石には夕張がいる。間宮も今日の昼は吹雪達に手伝って貰っていたし、夜は鳳翔や翔鶴に手伝って貰ったと言っていた。だから他の艦娘達に頼る事は悪い事では無い。むしろ仕事を円滑に進める為には、時には人手が必要な場合もある。」

「そ、それは・・・そうですが・・・」

「さらに言えば曙は大淀の下で仕事をするのだから、大淀が管理をする必要がある。曙がどれだけの能力があつて、どの仕事を任せられるかの判断をして、大淀の指示で仕事をさせるのだ。だから曙の行動に大淀が責任を持つ必要がある。もちろん私が直接指示を出す場合もあるが、それは私が大淀の上にいるからで、その責任は私が負うべきものだ。組織を上手く機能させるには、人を上手く使う必要がある。むしろ大淀は秘書艦としてそういう能力が求められていて、普段は出ているではないか？だから曙も秘書艦の補佐として上手く使つてやれ。」

「・・・分かりました。提督がそこまで言われるのであれば期待に応えてみせます。曙さん、宜しくお願いしますね。」

「こちらこそ宜しくお願いします。」

これでようやく話がまとまったようだな。

「では大淀、曙の教育も含めて任せたぞ。それと曙にはあれを渡しておこう。」

数少ない私物の中から一冊の本を取り出す。

「これは？」

「士官学校時代の教本だ。提督としての職務について、戦闘指揮から書類関係まで全て載っている。まずはこれで勉強して、秘書艦としての基礎を学んでおけ。」

「はっ!!」

「では話は以上だ。明日からもまた頼むぞ。」

「はい!!失礼します!!」

ふう・・・なんとかなったようだな。これでやっと眠ることが出来るな・・・

75話 (5日目)

窓の外から聞こえる鳥の鳴き声で目が覚める。昨日は疲れてすぐに寝てしまったが、わりと早めに寝れたので今朝はかなり調子が良い。やはり睡眠は健康を維持するのに重要な要素だな。いつ敵襲があるか分からない以上、休める時に休んでおくのも仕事のうちだ。着替えなどの支度をしていると、扉の向こうから人の気配を二人分感じる。いつもの如く大淀が来たのと、おそらくは曙だろう。

コンコンコン

「提督、起きていらつしやいますか?」

「ああ、おはよう。」

「朝食の準備が整っていますけどどうされますか?」

「身支度は整っているからすぐに行こう。」

扉を開けると大淀の隣に曙が待機していた。少し眠そうなのは、昨日渡した教本を夜遅くまで読み込んでいたのだろう。

「て、提督、おはようございます。」

「ああ、おはよう。少し疲れているように見えるが、昨日渡した教本で勉強していたのか?」

「ええ、秘書艦補佐として勉強しないといけないことが多いから。」

「それは構わないが無理はするなよ?曙の仕事は秘書艦の補佐だけではない。いざと言うときに疲れて出撃出来ないなんて事にならないように気を付けろよ?」

「分かったわ!」

なんだかここまで素直な曙というのも違和感があるな。士官学校時代に見た曙なら「当たり前でしょ!!馬鹿にしないで!!」とか言いそうなものだが・・・やはり艦娘も環境次第で性格が変わるのだろうか?むしろ艦娘の性格が変わってしまうほど酷い環境だったと言うべきか・・・まあ、真面目に働いてくれるなら問題ないか。とりあえず食堂に向かいながら今日の予定を確認する。

「大淀、今日の市長候補者との面会の予定はどうなっている?」

「9時から副市長の源さん、13時から明日への希望党の東雲さん、1

4時から再建部門の綾瀬さんです。」

「了承した。今日の予定だが、先日の演習で能力測定が出来ていない者達と帰還組で、改めて能力測定を行いたい。」

「分かりました。天龍さんと第六駆逐隊ですね。あと夕張さんも出来ていなかったですね。」

「それと昨日攻略した資材溜まり周辺の調査だな。新しく艦隊が派遣されている可能性もあるから、旗艦は鳳翔で護衛に龍田と白露型姉妹を付けよう。はぐれ程度なら狩ってしまうが、敵の艦隊が到着していれば偵察だけで構わない。」

「はい、手配しておきます。」

とりあえずはこんなところだろうか？後は鳳翔の偵察の結果次第と言ったところか。

「あ、あの提督、少し報告したい事があるのだけれど・・・」

「あ、曙さん!？」

「ん？なんだ？」

「その、青葉さんが艦娘寮に艦娘新聞つてのを掲載してて・・・ちゃんと提督の許可は取っているのかしら?」

「・・・それは初耳だな。」

「一応前からたまに作ってたみたいだけど、今回は気になる内容もあって・・・」

「はあ・・・食事の前に確認しよう。案内してくれ。」

「分かったわ!」

真面目な顔の曙の隣で大淀が頭を抱えているので、あまり良い内容ではないのかもしれないな。

艦娘寮の2階にある談話スペースに行くと、一部に人だかりが出来ていた。こちらに気が付くと全員が敬礼してきたので答礼すると、大部分がそそくさと去っていく。残っていたのは白露型姉妹と若干焦っている青葉と、あちゃーと言いたそうな衣笠くらいだな。

「し、司令官!?!お、おはようございます。艦娘寮に何か御用事でしょうか?」

「青葉が艦娘新聞というものを掲載していると聞いてな。確認をしに来た。」

「そ、そうなんですか？いや、これはあくまでも趣味でやってる程度のお話ですので、正式なものではないですよ。」

「だが多くの艦娘が読んで影響を与えるものだろうか？先に私に確認を取るべきだと思うが？」

「も、申し訳ございません。」

「とりあえず内容を見せて貰おう。」

青葉が作った艦娘新聞はなかなか上手く出来ていると思う。見出しとしては売られていた艦娘が帰還した事と、昨日の大規模戦闘の勝利がメインのようだ。帰還組との再会を喜ぶ写真と祝勝会の写真も掲載されており、夕食の時にされたインタビューの内容も載っている。

「ふむ、内容としては悪くないな。今後は掲載する前にきちんと許可を取るように。」

「はい、恐縮です。」

「では最後に一つ聞きたいのだが？」

「な、なんでしょう？」

「一番下のこれはなんだ？」

そこには「提督にも人の心があつた!!艦娘への歩みよりの姿勢を見せる!!」との見出しと共に私が春雨の頭を撫でている写真があつた。内容としては肯定的に捉えて、不用意に提督を恐れる必要は無いとの事だったのだが……

「内容はともかくとして、この写真は明らかに盗撮した物だよな？盗聴の次は盗撮か？」

「あ、いや、その……申し訳ございませんでした!!」

即座に土下座をする青葉だが、流石にこれは看過出来ない。

「先日情報漏洩の危険性について話もしたし、盗聴の件でも注意をしたはずだが……理解出来ていなかったようだな？私と春雨の会話も盗み聞きしたのか？」

「いえいえいえ!!会話か聞こえるようなところまでは近寄ってないで

す!!なんか良い雰囲気だったので、他の艦娘達を安心させたくて撮っただけです!!」

この話の真偽は分からないが、恐らく盗み聞きまではしていないのだろう。もし盗み聞きをしていたのなら、悪雨について気になって聞いてくるだろう。

「とりあえず青葉は営倉行きだな。」

「そ、そんなぁ・・・」

「あー、これは仕方ないね・・・青葉、お勤め頑張つて。」

衣笠がやれやれとばかり青葉の肩に手を置いて慰めている。

「さて、この新聞のほうだが・・・内容はともかく盗撮の写真が載っているからなぁ・・・春雨はどう思う?」

「は、はい!?!私ですか!?!」

「春雨も盗撮の被害者だからな。春雨が嫌だと思っなら今すぐ剥がして処分するが?」

「え、えつと・・・嫌ではないですが・・・」

「嫌ならばきつちり青葉に言っておいたほうが良いと思うが?」

そう伝えると春雨は少し考えて、こそこそと青葉に耳打ちをし始めた。

「ええ、もちろん良いですよ!!なのでどうか情状酌量の余地を・・・」

「えつと、提督、私は大丈夫です、はい。」

ふむ、何かしら青葉と取引をしたのだろう。春雨が良いと言うなら、新聞は残しておくか。

「分かった。ならこの新聞は残しておこう。内容自体は悪くはないからな。では大淀、青葉を連れて行ってくれ。食事はちゃんと届けてやれよ?」

「分かりました。では青葉さん、行きますよ。」

「うう・・・分かりました・・・」

とぼとぼと大淀と曙に連行されて行く青葉を見送ったが、これで懲りてくれれば良いのだが。

「さて、食事にするでしょう。」

「提督さんも一緒に食べるっばい!?!」

「ああ、あまり間宮を待たせるのも良くないし一緒に行くか。」

「じゃあ提督さんの隣は貰ったっばい!!」

「ああ!!またお姉ちゃんより先に!!」

「まあまあ、姉さん落ち着いて。姉さんも反対側に座ったら良いじゃないか?」

「おお、時雨あつたま良い〜」

「あー、青葉も居なくなつたし、衣笠さんも一緒に良いかな?」

「もちろんです、はい。」

今朝は賑やかな朝食になりそうだな。



## 76話（五日目朝食）

食堂に着くと青葉の件で時間を取られたからか、多くの艦娘達が食事を始めていた。それなりに注目を集めており、勘の良い者は衣笠が青葉と一緒にではないので、青葉の運命を察しているようだ。

「提督、おはようございます。今日はお連れの方がいっぱいですね？」  
「途中で会ったのでな。今朝は洋食か。」

「ええ、パンとスープとサラダに卵です。昨日は豪勢な食事でしたので、今朝は少しシンプルな感じですよ。」

「だがとても良い匂いがする。楽しみだ。」

「はい、ありがとうございます。」

間宮から朝食を受け取って礼を言い、机を確保して白露型姉妹と衣笠を待つ。

「司令官、ちよつとええか？」

「ん？龍驤に翔鶴と瑞鶴かどうした？」

「うちの用事はあれや、昨日鳳翔さんから話聞いたし、鳳翔さんがえらい信頼しとるみたいやったからな。うちも命預けたる。改めてよろしゅうな司令官。」

「ああ、それは助かるな。軽空母は鳳翔一人だけだったからな。今後の活躍に期待している。」

「おう、任しときやー！」

ドンと胸を張って宣言する姿は、どや顔する暁の姿と被って見えるが、それでも自信に満ちている雰囲気なのは良い事だ。

「それで翔鶴と瑞鶴はどうしたんだ？」

「そのですね、大淀さんが今日一部の艦娘達だけで演習をすると仰っていたのですが・・・私達も参加する事は可能でしょうか？」

「ほう、可能ではあるが理由は？」

「前回の演習では結果を残せませんでしたので、今回こそはと思いついて。昨日は空母達が集まって少しお話をさせて頂きました。そこで鳳翔さんも一航戦の方々も信頼されているようでしたので、私達も頑張ろうと思ひまして。」

「そうね、辛い思いをしていた龍驤が復帰するんですもの。負けてられないわ。それに一航戦の奴らに目にももの見せてやるんだから!!」

「ちよつと瑞鶴?言葉使いには気を付けないとダメよ?」

「だって翔鶴姉!!あの一航戦の青い方『貴方達五航戦が居なくても、私達一航戦が居れば問題ありません。五航戦は鎮守府でゆっくりしてなさい』なんて言うのよ!!あれで引き下がったら五航戦の名が泣くわ!!」

「どうやら瑞鶴は加賀に煽られたらしいな。もしかしたら心配していただけたかもだが、結果として瑞鶴が奮起したなら良い事だ。」

「分かった、二人の演習参加を認めよう。戦線復帰出来る日を待っているぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

「ええ、すぐに一航戦なんか追い抜いてやるんだから!!」

話が終わって空母達が去ると、待っていてくれた白露型姉妹と衣笠が席に着いて食事を始める。

「そう言えば白露型姉妹は昨日も頑張ってくれたようだな。天龍が褒めていたぞ。」

「昨日もいっぱい頑張ったっばい!!提督さん褒めて褒めて!!」

「あ、こら!!いつも言ってるけど、お姉ちゃんがいつちばんでしょ!!」

「うくん、昨日一番活躍したのは春雨だからね。一番はやっぱり春雨じゃないかな?また撫でて貰ったらどうだい?」

「ひゃう!?!し、時雨姉さん!?!」

「あ、そうそれよ!それ!!春雨だけ撫でて貰っていつちばん活躍するなんてするいわ!!」

「夕立も提督に撫でて貰って一番活躍するっばい!!」

「ん?なんだそれは?」

春雨を撫でた事と春雨が活躍したことに何か関係があるのだろうか?

「夕立が春雨に負けたのはきつとそれが原因っばい!!だからみんな撫でて貰っていっぱい活躍するっばい!!」

「いいや、ここは私だけ撫でて貰って、念願のいつちばんをゲットしま

す!!これはお姉ちゃん命令です!!」

「姉さん・・・それは流石にどうかと思うよ?」

「あはは、提督大人気だねえ。ここは衣笠さんも験担ぎで撫でて貰ったほうが良いかな?」

「ニヤニヤしながら変な事を言うな・・・白露達も喧嘩しないで食事をしろ。今日は朝から哨戒任務に出て貰うつもりだ。その結果次第で今後の方針を決めるのだからしっかりしてくれよ?」

「それならちゃんと撫でてくれるっぽい?」

「はあ・・・それで納得するなら食後に頭を撫でてやる。ただし効果を期待されても困るぞ?」

「ならいっぱい食べて今日も頑張るっぽい!!」

食後に白露型姉妹を順番に撫でて送り出し、衣笠に視線を向けると「え?ほんとにするの?困ったなあ」とか言いながら頭を差し出して来た。いや、やるべきかやらなくて良いのか分からんからこちらが困るのだが・・・とりあえず軽く撫でたら満足したようなのでよしとしよう。

「いや、ご主人様マジばないわあ。ぼのたんもこれで落としたんですか?」

「・・・漣と潮に臍か。何のようだ。」

「いや、ぼのたんも立ち直ったし私達も一緒に頑張ろうって話になりました。その事をご主人様に言おうとしたらイチャラブしてるもんでどうしようかと?」

「イチャラブと言われてもなあ・・・ただじゃれ付いて遊んでるだけだろ。」

「うわあ・・・キタコレ・・・とにかく私達も正式に艦隊に加わりますので、これから宜しくお願いします。」

「ああ、宜しく頼む。」

「あ、駆逐艦ハーレムへの参加は要相談ですので、まずはぼのたんから口説いて下さいね♪」

完全にからかつてきているな・・・昨日の今日でグイグイ来る奴だ

な・・・後ろで警戒している隴と潮の反応が普通だと思うのだが・・・  
漣自身も多少緊張しているように見えるのが不思議だ。警戒しているのならば、ここまでグイグイ来る必要も無いと思うのだが、よく分からん奴だ。

「とりあえず艦隊への参加は了承した。今日の演習も頑張ってくれ。」  
「ほいさっさー漣にお任せあれ！」

おどけて見せる漣と後ろでペコリとお辞儀をする隴と潮が対照的だったな。

「あー、ちよつと良いか？」

声をかけられた方を向くと、ちよつと不貞腐れた感じの摩耶と苦笑いしている高雄が居た。

「今度は摩耶に高雄か。お前達も参加してくれるのか？」

「まあな。やっぱり安全な場所でのんびりするなんて性に合わないからな。けど条件があるぜ。」

「なんだ？」

「まずは前のクソ野郎の時みたいに、あたし達に娼婦の真似事をさせない事!!」

「ああ、それは問題無い。」

「それと聞いた話だと今日市長候補が来るらしいな？なら副市長の源って野郎が来るんじゃないか？」

「・・・知り合いか？」

「あたしを買ったクソ野郎だよ!!だからあいつを市長にするのはやめろ。」

なるほど、それは恨んでも仕方がないか。どうせクソみたいな奴が三人来るのだから、クソ確定な奴が一人くらい候補から減っても構わないか。

「一応言っておくが私に市長を決める権限は無い。市民が選挙で選ぶからだ。しかし鎮守府の影響力が大きいのも事実だ。だから私が約束出来るのはその源って奴を支持しない事だけだ。それでも構わないなら約束しよう。」

「それで構わねえ。ならこれから宜しくな。」

「ああ、摩耶は対空能力が高いと聞いている。今後の活躍に期待しているぞ。」

「へっ！分かってるじゃねえか！任せときな！」

「では話もまとまったようですので、私も摩耶と一緒に宜しく願いますね。」

「ああ、高雄も期待している。宜しく頼む。」

これで帰還組は全員艦隊に加わってくれたか。想定より早く参加してくれたのは助かるな。これで安心してクソ野郎との対話が出るな。対話で粗探しをして批判する内容を考えなくてはいけないが、そんなに難しい話では無いだろう。

## 77話（源さん対話）

哨戒部隊の出撃を確認し演習の手筈を整えてから、大淀を市長候補の出迎えに行かせた。場所も執務室から応接室へと移り到着を待つ。

「提督、正門に源さんが到着したそうよ。」

「分かった、大淀に案内させてくれ。」

やはり秘書艦の補佐が居れば連絡に困る事がなくて助かるな。

「録音の準備は整っているか？」

「ええ、明石さんに使い方も教えて貰ったし大丈夫よ。」

「なら録音は頼んだぞ。とりあえずこいつに関しては汚点を探って失脚させるのが目的だ。」

「はあ・・・なんか悪い事してる気がするけど、また前みたいなのが市長になっても迷惑なものね・・・ちゃんと協力するわ。」

悪い事か・・・まあ、間違っではないないが、この程度なら人間同士のやり取りとしては、まだ穏便な方だと思う。やはり艦娘は素直な者が多いのだろうか。

「では、隣の部屋で待機していてくれ。」

「ええ、分かったわ。」

さて、どんなクソ野郎が来るのだろうか？

コンコンコン

「失礼します。源様をぐ案内致しました。」

「入れ。」

大淀に案内されて来た源と言う男は、雰囲気が前任者の平川市長に近いものがある。権力者と言うものは似通うものなのだろうか？

「お初にお目にかかります。北九州市で副市長を務めている源と申します。現在は市長が不在の為市長代理を務めております。」

「北九州鎮守府の葛原と申します。以後お見知り置きを。」

「ええ、もちろんですとも！こちらからも宜しくお願い致します。なにせ着任されて間もないと言うのに、平川市長を排除してくださいさるなんて！なんとお礼を言えば良いものやら！」

いきなり本音をぶちまけやがったな・・・こんな奴が上に立って大丈夫なのか？

「上から命じられた汚職調査の結果ですので、私の意思で排除した訳ではありません。」

「それもそうですなあ。なにせ平川市長はずいぶんと間抜けなところがありましたから、下手に証拠を残して自滅したのでしょうか。その点私は優秀ですから、そんなへまは致しませんよ？」

こいつが優秀だと？冗談ではない。汚点を探って失脚させようとしていたのに、開幕から汚点を大放出しているこいつが優秀な訳無いだろ？こちらはまだ探りすら入れてないのだぞ？

「はあ・・・とりあえず本日は市長選挙の応援要請との事でしたが？」  
「はっはっは、そうでしたなあ。とは言っても残りの二人では話になりませんから、私の勝ちで決まりのような話ですがな。」

「と言いますと？」

「なにせ私には副市長として政務に関わってきた実績がありますし、新聞やらを使って民衆をコントロールする方法も熟知しております。それに比べて東雲は経験不足で何も出来ん若造ですし、綾瀬は嘘つきで臆病な狐みみたいな奴ですから、そんな奴らに負ける要素は一切ありませんなあ。」

いや、いくら他の二人が無能であってもこいつ以下と言うのは流石に考えたく無い話だな。確かに政務経験と言う部分では勝るかも知れないが、前任者の平川市長と並ぶくらいの無能ぶりに見えるのだが・・・

「なるほど、お話は分かりました。」

「それでは私を支援して下さいと言う事で宜しいですか？」

「それは残りの2人とお会いしてから決めさせていただきます。ですのでまた改めてご連絡しましょう。」

「うーむ？葛原提督は少し慎重になられておるのかな？まあ、若く経験も浅いのであれば無理もありますまい。悩むのは若者の特権とも言いますしなあ。はっはっは。」

は？こいつは何を言っているんだ？悩むのは若者の特権だと？私

は思考を放棄した無能ですと宣伝しているようなものだぞ?!

「ずいぶんと自信をお持ちのようですね?」

「それはもちろん、年季が違いますからなあ。私を選べば損はさせませんよ?せっかくですから年長者からのアドバイスを一つ、鎮守府を強くする為に最も必要な物はなんだと思いますか?」

「そうですね。やはり徹底した管理でしょう。軍の一員としてどうやって力を引き出し、どうやって育てるか。そして敵に対してどう戦うか。これを管理するのが提督の役割だと思います。」

「うむうむ、悪く無い答えですがまだまだお若いすなあ。最も必要な物、それは金ですぞ。金さえあれば資材を湯水の如く消費し、精強な軍隊の維持が出来るのです。実際に前任者の大森提督はその辺を良く理解して、この北九州鎮守府を精強な鎮守府へと成長させたのです!」

は?この北九州鎮守府が精強な鎮守府だと?馬鹿かこいつは?いや、馬鹿なんだった。精強を名乗りたければせめて姫級と戦える程度には強くなるべきだと思うが、今の北九州鎮守府にそんな実力なんてあるわけがない。呆れて物も言えない。

「その点私にお任せ頂ければ、艦娘を使って平川以上に稼いでみせましょう!もちろんあんな愚か者のように逮捕される事も無いでしょう。」

「・・・それで、その見返りとして私に求める事はなんですか?」

「いえいえ、そんな求める事だなんて。ただ私に艦娘の運用をお任せ頂ければ良いのです。特に大森提督が独占していた戦艦や空母達も預けて頂ければ、もつと大きな利益を得られますぞ?私のような経験豊富な人間に任せる事で、葛原提督のような経験の浅い方でも上手く艦娘を運用する事が出来るのです。そのお力になればと願っておりますぞ。」

自信満々に言い切る所はいつそ清々しきを感じるくらいだ。いくらなんでもこいつを市長にはさせたく無いな。私に決定権が無いのが悔やまれるが、今のうちに対処しておくべきか。

「なるほど、これは想像以上の方が来られたようですね。これは何も



おもてなしをせずにお帰り頂くのは私の沽券に関わりますね。少し準備をしますのでお待ち頂いても宜しいですか?」

「ほほう!それはありがたい申し出ですな。午後まで予定は入れて無いので構いませんよ?」

「では少しお待ち下さい。大淀、源さんにお茶とお菓子を準備してくれるか?」

「・・・はい、分かりました。」

「では少し準備をしますので、一旦失礼しますね。」

「ええ、楽しみにしております。」

クソ野郎の相手を一旦大淀に任せて、隣の部屋で録音している曙の元に向かう。

「曙、録音はもう十分だ。今から言う物を大至急準備させろ。」

「ひい!な、なによ。」

「確か資材輸送用の船があつたよな。あれを動かせるようにしてくれ。」

輸送船は本来鎮守府間で資材を輸送する時に使う物だ。あまり大型では無いものの、それなりの航行速度と艦娘を遙かに凌駕する積載量を誇る。およそドラム缶40個分の資材を運ぶ事が可能だ。その代わり艦娘よりも大きく敏捷性は皆無なので、深海棲艦に見付かれれば当然簡単に沈む。一応多少の砲撃には耐えられるが、魚雷や重巡クラスの砲撃は耐えられないだろう。

「良いけど何に使うの?」

「」

「はあ!?!何を考えているのよ!?!」

「ちなみに曙は輸送船の運転は出来るか?」

「ええ、私だって艦娘だから出来るけど・・・本当にやるの?」

「ああ、それと摩耶・天龍に演習を中止して出撃の準備をさせろ。あと吹雪・睦月・如月の3人もだ。」

「わ、分かったわ。でも絶対に無茶な事はしないでよね?」

曙が若干青ざめた顔で警告してくる。

「当然だ。準備を急いでくれ。」

さて、おもてなしをしようではないか？

## 78話

一通り指示を出して出航の準備を整えて応接室へと戻る。天龍からはかなり怒鳴られたが、とりあえず指示には従ってくれるようだ。

「源さん、お待たせ致しました。ついて来て頂けますか？」

「おお、準備が整いましたか？ いったいどのような趣向を用意して下さったのですか？」

「せっかく鎮守府に来て下さったのですから、鎮守府にしか出来ない事が良いかと思ひまして。良いものをお見せ出来ますよ？」

「ほほう！ それは楽しみですなあ。」

「ええ、お楽しみ頂けると思いますよ？」

上機嫌な源さんとは対照的に、大淀は顔が青ざめていた。無線でやり取りしていたのを聞いていたのだろう。

「いやー、まさか輸送船でのクルージングとは、なかなか豪気なお方ですなあ。」

曙が運転する輸送船の甲板に椅子を用意して、海を駈ける爽快感を味わう。周囲には護衛として天龍を旗艦として摩耶・吹雪・睦月・如月が付いている。

「深海棲艦が現れてからは海に出る事なんてなくなりましたからね。せいぜい漁師が沿岸部や瀬戸内海で漁をする程度です。しかし艦娘が護衛につけば問題ありませんから。」

「いやはや恐れ入りましたよ。十年以上も海に出ていませんでしたが、これほど爽快なものだとはすっかり忘れていましたよ。」

「ご満足頂けたようで何よりです。もう少し余興を用意していますので、お楽しみにして下さい。少し指示を出してきますね。」

「はっはっは、まだ何かあるとは！ 物凄く贅沢なおもてなしですなあ！」

ご満悦の源さんを放置して運転している曙の所へと行く。ちなみに船に乗っているのは私と源さんと曙だけだ。大淀も付いて行きたいと言っていたが、有事の際に対応して貰わなくてはいけないので、

鎮守府に残って貰った。

「鳳翔からは連絡があったか？」

「・・・はぐれのイ級3隻を発見したそうよ。場所も資材溜まりよりも手前で、そんなに遠くは無いわ。」

「ほう、それは都合が良いな。鳳翔達にはイ級を迂回して資材溜まりの偵察に行かせてくれ。イ級はこちらで仕留めると伝えろ。」

「ええ、分かったけど・・・本当にやるの？」

「ああ、もちろんだ。天龍達に位置情報を伝えてそのままイ級へと向かってくれ。それと私が操作室から出たら鍵をかけて、甲板から中に人が入れないようにしろ。」

「・・・分かったわ。」

「それで葛原提督、余興というのはいつ始まるのですかな？かなり沖のほうまで来た気がするのですがね？」

流石に長時間海を走り続けたので不審に思い始めたか。まあ、もう遅いのだがな。

「そろそろ見える頃合いですかね？天龍！そろそろ準備しろ!!」

「おう!!つつかてめえはそろそろ下がってろよ!!マジで危ねえぞ!!」

「護衛の天龍を信頼しているからな？頑張ってくれよ？」

「ああもう!!お前ら行くぞ!!こんな心臓に悪いのはさっさと終わらせるぞ!!」

天龍が艦隊を率いて速度を上げる。その不穏なやり取りに流石に危険を感じたのか、源さんが慌て始める。

「いったい何が起きているのかね？ここは本当に安全なのかね？」

「そこは私が保障しましょう。それよりもそろそろ見えてきますよ。双眼鏡であちらをご覧下さい。」

そう促された源さんは双眼鏡を使って目を凝らす。

「・・・何か黒いのが居るが・・・まさか深海棲艦か!!」

「ええ、その通りです。」

「馬鹿か貴様は!!何がその通りだ!!私を殺すつもりか!!」

「はっはっは、そんな物騒な真似はしませんよ。ただ源さんが艦娘や

深海棲艦の脅威について、あまりご存知では無いようでしたので、実際に見て頂こうと思ひまして。艦娘が実際に戦う所なんて提督でも見た事がある人は少ない、とても貴重な体験ですよ?」

「それは貴様みたいに頭のおかしい奴がおらんからだろうが!!こんな船奴らの攻撃で沈んでしまうぞ!!今すぐ引き返せ!!」

今まで丁寧話していたのに、余裕がなくなつて化けの皮が剥がれたようだな。

「この船は頑丈ですから、奴らの砲撃くらいなら簡単には沈みませんよ?」

「甲板の上に居ればわしは死ぬだろうが!!せめて中に・・・おい!!なぜ扉が閉まっている!?開けろ!!」

「そんな事よりもうすぐ戦闘が始まりますよ?せつかくだから良く見て頂きたいものです。」

「何を悠長な事を言っているのだ!?貴様は気でも狂っているのか!いや狂っているぞ!!今すぐ引き返せ!!それかわしを降ろせ!!」

「降りたいのであれば救命ボートくらいはありますが?オールも付いていますから、陸地を目指して頑張りますか?」

「ふざけるな!!貴様こんな事をしてただで済むと思うなよ!」

源さんが激昂した瞬間に、輸送船の付近に砲弾が撃ち込まれ、輸送船は激しい揺れと水飛沫に襲われて、立ち上がっていた源さんが甲板の上で転んでしまう。

「ひいひい!!」

「船上での訓練もされていない方が無闇に立ち上がると危ないですよ?」

「なんでわしはこんな船に乗ってしまったのだ?頼むから早く引き返してください!!」

「そう怖がらないで下さい。どうやら戦闘はもう終わったようですよ?今回は最弱の駆逐イ級が3隻だけだったのですぐ終わってしまいましたね。実際に艦娘の戦闘を見て頂いた感想はいかがですか?」

「お、終わった・・・のか?」

「ええ、うちの艦娘達がしっかり守ってくれましたから。貴方はいつ

もこうやって艦娘達に守って貰っているのですよ？普段はあまり実感が湧かないようですが、今は戦争中なのをお忘れなく。」

恐怖に震えてズボンが汚れた無様な様子だったが、しばらく時間をかけて落ち着くとまた喚き始める。

「これのどこが余興だ!!わしを危険な目に合わせおって!!許されると思っておるのか!?!」

「艦娘と深海棲艦について理解して頂くなら、この程度の危険は必要かと思ひまして。それにこの程度で危険だと言われても困りますよ？普段から我々は命のやり取りをしているのですから。」

「貴様は艦娘を戦わせているだけだろうが!!」

「ええ、そうです。現場で戦うのは彼女達です。しかし私の采配次第で彼女達が沈むかもしれないです。万が一深海棲艦に負けるような事があれば、多くの市民の命が失われるかもしれないですよ？提督とはそれくらいの重責を背負う仕事です。だから彼女達艦娘をいつでも戦えるように管理するのも私の仕事で、貴方が入り込む余地などありません。私よりも貴方の方が艦娘を上手く運用出来るだなんて冗談じゃない。」

「貴様ああ!!」

源さんが激昂して胸ぐらを掴もうとしてきたので、普通に腕を掴んで倒して甲板に叩き付ける。運動不足の小太りのおっさんが、士官学校で訓練を受けた軍人相手に勝てると思ったのか？

「いきなり何をされるのですか？襲われたら制圧するしかなくなりませんよ?」

「離せ!!離せ!!」

「それにここは船の上ですよ？暴れて海に落ちても私は責任を取れませんよ?」

その一言でようやく状況を理解したのか、やっと大人しくなったので解放する。

「はあはあ・・・クソが・・・こんな奴と仕事なんぞ出来るか・・・まったく・・・用事はもう済んだのだろう!!早くわしを帰らせる!!この事は大本営にも報告するし、新聞社にも伝えて貴様をクビにしてやる

!!

「それはどうぞご自由に。あとなんで用事が終わったと思われるのですか?」

「・・・は?」

「今のは前哨戦ですよ?本隊がまだいるはずなので、そこまできつちり仕留めておかないと。」

「待て待て待て!!これ以上わしを危険な目に合わせようと言うのか!!冗談じゃない!!付き合ってられるか!!」

「どうしても言うならば、救命ボートでもお貸ししましょうか?必死になって艦娘に頼み込めば、もしかしたら曳航してくれるかもしれない。ほら、艦娘達が戻って来ましたよ?確か摩耶とは顔見知りだったのではないですか?」

そう言うと言源さんは慌てて救命ボートを降ろしてそれに乗り込む。いや、マジで試すのか・・・

「摩耶!!摩耶!!わしの命を助けろ!!安全な陸地まで連れていけ!!これは命令だぞ!!」

「あん!?なんでてめえの命令なんか聞かなきゃならねえんだよ!!」

「わしはお前を大金を払って買ったのだぞ!!主人の命令を聞け!!道具の分際で主人に逆らうつもりか!」

「あたしの主人はその提督だけだ!!てめえなんか知ったことか!!」

「お、おい!!摩耶!!摩耶!!クソ!!他の奴でも構わん!!わしを助けろ!!誰かわしを助けてくれ!!」

はあ・・・まさか本当に救命ボートを使うとは思わなかったな・・・流石に置いて行くのはまずいか・・・そう考えていると、曙が操作室から出てきた。

「提督、鳳翔さんから連絡があつたわ。資材溜まり近辺に敵影なしとのことよ。」

「そうか・・・なら撤収するか。鳳翔には資材を回収したら帰還するように伝えろ。私達もその馬鹿を拾って帰還する。」

「分かったわ。」

その後救命ボートにロープを繋がせて輸送船で曳航し、鎮守府へと帰還した。源さんは流石に疲れたのか、ろくに会話もせずフラフラになりながら鎮守府を去った。ここまですれば心を折るには十分だろう。むしろここまでやってこの北九州市で市長を目指そうと言うならば、その根性を認めてやっても良いくらいだな。



帰りの船も曙が何も言わずに運転してくれていたもので、少し休憩が出来た。フラフラと帰って行く源さんを迎えに来た大淀に任せ、護衛を務めてくれた天龍達に声をかけに行く。

「護衛任務お疲れ様。しっかりと守ってくれて助かった。」

「お疲れ様じゃねえよ!!俺達がどんだけ心配だったのか分かってんのか!?!提督が船で深海棲艦を見に行くとか馬鹿じゃねえのか!?!」

流星にイライラしていたようで、天龍が突っかかって来る。まあ、多少無茶をさせた自覚はあるので、これくらいは仕方ないか。

「まあ、そう言うな。あれも必要な事だと判断して、安全も考慮した上でやった事だ。実際に深海棲艦の射程には入ってないだろ?」

「それはそうだけどよ!!深海棲艦の奴ら俺達を強引に突破して、なんとか提督を攻撃しようとしてたんだぞ!?!本当に肝が冷える戦いだっただからな!?!」

「それにあたしの方も忘れんなよ!?!何が戦いが終わったら合図として砲撃を輸送船の近くに撃ち込めだよ!!もし当たってしまったらと思っただけが気がしかなかったんだからな!!」

摩耶は源さんを驚かせる為の砲撃を頼んだ事を怒っているようだ。

「源さんを驚かせる為には必要な事だったんだ。流星に深海棲艦に砲撃をさせる訳にはいかないからな。」

「当たり前だ!!」

姉妹艦でも無いのに息ぴったりじゃないか。

「いい加減になんてこんな事したのか教えてよ。私だって提督を危険な場所まで運ぶのは怖かったのよ!?!何が『源さんに深海棲艦を見せに行く』よ!!」

輸送船から降りて来た曙もかなりご機嫌ななめのようなだな。まだ会って数日なのに、そこまで心配していたのだろうか?!

「分かった、分かった。きちんと話すから。その前に吹雪・睦月・如月、この話はお前達も聞くか?興味が無いならもう休んで構わないが?」

そう尋ねると三人は顔を見合わせて、少し考えた後吹雪が一步前に

出て来た。

「え、えつと・・・流石に私達も気になるので一緒に聞いても良いですか?」

「ああ、構わない。今回の目的は源さんに選挙を諦めて貰う為にやった事だ。私が支持しなければ当選する事は無いだろうが、万が一の可能性も潰そうと思った。」

「あのさあ、提督はあたしに言ったよな?提督に市長を決める権限が無いから、支持しない事だけは約束するつてよ。なのになんでここまですしたんだよ?」

摩耶も少し落ち着いてきたようだが、やはり気になる話のようだな。まあ、隠すほどの話では無い。

「簡単な話だ。想定以上にクソ野郎だったから、確実に排除したくなっただけだ。」

「お、おう。確かにクソ野郎だったけど、あんなに危険を犯してまで排除したかったのか?」

「そうだな。要は艦娘の体を使って稼がせろ、お前以上に上手く艦娘を運用してやると言われたのでな。それで艦娘がどういう存在なのかを、きちんと教えてやろうと思ってな?」

「あー、それはキレても仕方ねえか・・・あたし達の為に怒ってくれたのか?」

「いや、あくまでも源さんを市長にするデメリットが大きいと感じたからだ。あんなのが市長になったら、お前達を戦いに集中させられない。そういう要因はさっさと排除するべきだ。」

「・・・そうかよ。じゃあそういう事しておくよ。」

摩耶は一人納得したような雰囲気だが、そういう事もなにも事実なのだが・・・わざわざ理解をさせる必要も無いか。

「理由は分かったけどよ、今後は提督が前線に出てくるのはやめてくれよ?俺達は本当に心配だったんだからな?」

天龍が繰り返し釘を刺してくるあたり、かなり不安にさせてしまったようだな。確かに指揮官自らが前線に出るなど、愚かな行為ではあったか。

「ああ、悪かったな。」

「分かりや良いんだよ、分かりやな。んじや話は終わりだ。もうすぐ飯の時間だろ？軽く入渠してくるから先行つてろ。」

天龍達が艀装を外しに行つてしまうと、ちようど大淀が戻つて来た。あー、これはかなりご機嫌ななめのようなな・・・

「提督、少しお話ししいでしょうか？」

「心配かけた件なら悪かった。さつき天龍達から散々言われたよ。」

「・・・そうですか。では今後どう対応するおつもりですか？」

「どうとは？」

「帰り際に源さんがまだ喚いてましたよ？大本営に報告してクビにしてやるとか。今回の件ですがかなりの問題になるのではないのですか？」

ほほう、まだそんな事を言う氣力が残つていたか、少し手加減し過ぎたのだろうか？源さんの権力欲を甘く見積り過ぎたかな？

「まあ、多少問題になるのは覚悟している。だが叱責と精々罰金程度の罰になるだろう。その程度で源さんを市長の座から遠ざけられるなら十分な成果だ。」

「・・・あの人市長の座を諦めますかね？」

「少なくとも私が提督をする以上はやらないと思うぞ？その為に私をクビにしてやると息巻いているのだと思う。」

「・・・そうですか。私では判断出来ませんので、提督の指示に従います。」

「ああ、今後も頼むぞ。」

「んん！では別件の報告ですが、鳳翔さんから連絡があり、長門鎮守府の艦隊と思われる艦隊が資材溜まりの方向へ向かつていたとの事です。構成は3艦隊で戦艦主力の打撃部隊、空母主力の機動部隊、護衛の水雷戦隊と決戦仕様の艦隊との事です。」

ほほう、長門鎮守府が動いたか。おそらく資材溜まりの奥にいるはずの強敵を討伐するための部隊だろう。もう偵察を済ませて艦隊を送り込むとは、思っていたほど無能では無いのかも知れないな。

「分かった。長門鎮守府の方で片付けてくれるならそれで構わないだ

ろう。こちらはまだ練度が不足しているからな。そう言えば演習の方はどうなっている?」

「そちらは天龍さんと摩耶さんが抜けた事以外は滞りなく進んでいきます。五航戦の二人も先日よりも良い成績でしたので、実戦への参加も遠くは無いでしょう。あと神通さんもかなり集中して取り組んでいるので、かなり良い仕上がりになるかと思えます。逆に羽黒さんは集中しきれないところがありますし、第七駆逐隊の娘達も苦戦していますね。」

隣で話を聞いていた曙が悔しそうに俯いている。あれだけ酷い怪我をしていたのだから、すぐに復帰は難しいとは思っていたので、驚くような話では無いと思うのだが?

「分かった。長門にそろそろ切り上げて一旦休憩にさせろ。あと午後からも演習を継続するが、長門鎮守府が動いたし、資材溜まりには敵艦隊が居なかったので今日はもう戦闘は無いだろう。だから他の艦娘達も演習に参加させて欲しい。」

「分かりました。長門さんと打ち合わせをして午後からの予定を組み立てます。」

「ああ、そうだ。午後からは曙も演習に参加させたい。別の者に市長候補との会話を録音させたいのだが?」

「そうですね・・・明石さんは演習で使う備品の用意や、帰投した艦隊の艀装の整備で忙しいですし・・・夕張さんもその補佐でしょうね・・・他にそういう機械に詳しい人も一応いるのですが・・・」

「誰だ?」

「青葉さんです・・・」

「青葉か・・・」

流石に青葉を出すにはまだ早いと思うから、出来れば別の人に頼みたいな・・・

「あの、提督?私の演習は明日以降にして、私が録音するのが一番だと思っうけど?」

「はあ、仕方ない。そうしよう。」

大淀と曙を連れて食堂に向かおうとすると、大淀が大本営から電話がかかって来たと言う。流星に動きが早過ぎる気がするのだが・・・「お電話代わりました。北九州鎮守府の葛原です。」

「大本営所属人事課の中井だ。貴様には提督候補生の実地訓練先として、一人受け入れて貰う事となった。貴様は提督としての経験は浅いが、一人の提督として候補生を指導しろ。」

ああ、そっちの話か。そう言えば明日に小森が実地訓練に来ると、織田の奴が話していたな。数日前には決定していた話だが、嫌がらせの為にわざと連絡を遅れさせているのだったな。これ以上余計な事をされても面倒だし、嫌がらせが成功したと思わせておくか。

「提督候補生の指導ですか・・・それでいつ誰を受け入れるのかは決まっていますか？」

「明日貴様の同室だった小森がそちらに着任する。はぐれ者同士精々仲良くすれば良い」

「明日ですか・・・かなり急な話ですね。」  
「はっはっは！急な話がなんだと言うのだ？深海棲艦が急に襲撃してきてもそんな言い訳をするつもりか？今のところ順調に戦果を上げているようだが、大失態を犯すのも遠い話では無いかもしれんなあ？」

かなりご機嫌なようだな？扱い易くて助かる。それに一応戦果を上げている事は認められているのか。ならば源さんの件も問題無さそうだな。

「これは失礼致しました。実地訓練の日数はどの程度で予定されていますか？」

「ふむ、はつきりとは決まっていないが、小森が提督としてまともに働ける程度には鍛えて貰わねば困るなあ。だからどれだけ時間がかかろうとも構わんから、しっかりと指導してやれ。」

なるほど、自分達の手に負えないからお前が面倒を見ると言うことか。小森の奴はコミュニケーション能力が壊滅的だが、能力はかなり

高いんだよなあ。演習で小森が負けた事はないし、座学でも優秀な成績を修めている。その代わり本人はすぐに逃げるし隠れるので、まともな会話が出来た人間はほとんど居らず、もちろん派閥への参加もしていない。教官連中からしたら厄介な相手だろうから、自分に押し付けようと考えているのか。まあ、こちらとしてはそれなりに会話も成立するので、癖はあるが優秀な人材を長期間使って良いと言われたので、断る理由も無いけどな。

「・・・分かりました。あの性格ですのだからかなり時間がかかると思いますが、やれるだけやってみましょう。」

「はっはっは！なあに、さっきも言ったが時間はたっぷりと使って構わんぞ？同室だったのだからきちんと面倒を見てやれよ？」

やたらと同室を強調してくるな。士官学校時代に住んでいた寮は基本的に二人で一部屋なのだが、嫌がらせの為に異性である小森と同室にされていた事をからかっているのだろう。小森の存在に気づいた当初は多少戸惑ったが、お互いにきちんと住み分けが出来ていたので困る事はなかったし、むしろお互いに利益があつたくらいだ。

「ええ、努力はしてみます。」

「小森には明日の9時にそちらへ行くように伝えてある。後は好きにしろ。では任せたぞ。」

中井さんはずいぶんと上機嫌な様子で電話を切った。自分をやり込めたと思っっているようなら、とりあえず心配は無いだろうな。

「待たせたな。では食堂へ行くか。」

「分かりました。先日お話されていた提督候補生のお話のようでしたか・・・」

「ああ、明日の9時に来るらしい。織田の情報通りだな。部屋は私の私室の隣に作った客室を使わせてくれ。」

「分かりました。着任の挨拶は9時半くらいに予定しておきましょうか？」

「あー、多分無理だな・・・大人数の前に出てくるとは思えん・・・悪いが艦娘達には提督候補生が一人来るが、挨拶は事情があつて出来ないと通達しておいてくれ。」

「・・・その、本当に提督候補生として大丈夫なのですか？」

大淀がかなり困惑しているようだが、当然の反応だな。

「あー、大丈夫とは言えないな。だから厄介払いでここに送られて来るのだ。だが悪い奴では無いから、そういう意味では大丈夫だ。」

「・・・提督がそう言われるのであれば、信じるしかないですね。」

大淀がため息を吐きながら、諦めたようにそう言った。ああ、悪いが早めに諦めた方が良いぞ。

大淀と曙を連れて食堂へ行くと、やはり艦娘達の多くは食事を始めていた。とりあえず間宮から食事を受け取り、席を探していると背後から誰かが近づくと気配がした。

「へい！その可愛いぼのたん！一緒にランチでもどうだい？」

「はあ・・・漣、あんた普通に誘いなさいよ。なによそのナンパみたいなノリは？」

「いやー、普通に誘っても面白くないですよ？」

「からかっているだけでしょうが・・・それと秘書艦補佐として動くから、一緒に居られないって言ったでしょ。」

「それはそうかもだけど・・・」

秘書艦補佐の仕事に熱心なのは良いのだが、漣の様子を見るとかなり寂しそうだな。第七駆逐隊の精神面に影響が出るのは良くないな。

「曙、食事の時くらい姉妹達とゆっくりすれば良い。用事があれば呼ぶから気にするな。」

「で、でも・・・」

「はあ・・・なら秘書艦補佐として、今日の演習の様子を食事中に聞いておけ。今後の育成方針の参考にする。」

「・・・分かったわ。・・・ありがとう。」

「おお！ぼのたんがもうデレるとは!!キタコレ!!」

「うっさい!!なに馬鹿な事言ってるのよ!!さっさと行くわよ!!」

曙が食事のお盆を持ったまま、器用に漣に蹴りを入れて潮と隴が待つテーブルへと向かう。それと入れ替わりに、球磨が近づいて来た。

「あー提督、食事しながらで良いから、少し話しておきたい事があるク

マ。」

「分かった、話を聞こう。」

「えっと、では私は席を外しましょうか？」

「いや、そんな秘密にする話でも無いクマ。大淀も一緒に構わないクマ。」

球磨に案内されて席に着く。同じテーブルには軽く声をかけてくる北上とガン無視の大井も居たが、たしか球磨の姉妹艦だったからか。

「それで、話とはなんだ？」

「聞いた話だと、市長候補に明日への希望党の東雲って人が来るクマ？」

「ああ、何か知っているのか？」

「あいつは艦娘新教の信者だったはずクマ。」

「艦娘新教？あまり聞いた事の無いものだな。」

「えっと、艦娘は神様から世界を救う為に遣わされた使徒とか言ってる宗教クマ。それと提督は神様に選ばれた代行者とか言ってたクマ。球磨はその教祖に買われて、御神体扱いをされてたクマ。実際は余計な発言はしないように言われて、人形みたいな扱いだったクマ。」

今度の相手は宗教絡みか・・・面倒な話だな。

「それで、どんな人だったか覚えてるのか？」

「あー、悪い人では無いクマ。だけど熱心な信者で、簡単に騙されてる人クマ・・・」

「そうか・・・」

「艦娘が神様の使徒とかは良く分からんから置いとくクマ。でも艦娘に守って欲しいなら、球磨を祭り上げるより、戦場に行かせたほうが良いに決まってるクマ。結局貰ったお布施は教祖のお小遣いになるだけクマ。」

「宗教家に現実を見ると言っても無駄だな。しかしそんな奴が市長候補とは・・・」

「困った話クマ。でも悪い人では無いから穏便に済ませてくれると嬉しいクマ。適当にあしらってくれば十分クマ。」



「分かった。情報ありがとう。」

さて、どうしたものか・・・艦娘新教自体は不快だが、騙されてる信者なら球磨の言う通り、適当にあしらうくらいが無難だろうか？

## 81話（東雲さん対話）

昼食も終わり大淀を東雲さんの出迎えに行かせて、曙と二人で連絡を待つ。

「曙、演習の様子はちゃんと聞けたか？」

「聞けたけどあんまり良くない感じみたいね。やっぱり病み上がりなのと、ブランクが長いのがキツイわね。」

「そこは想定内だから仕方ない。演習に対してやる気があれば、そのうち解決する問題だからな。演習に集中出来ていそうだったか？」

「その・・・別行動してた私が心配だったみたいで、少し集中出来てなかったみたいね・・・午後からも私は参加出来ないけど、私の分まで気合い入れなさいって言って来たわ。」

漣達が心配しているのは、別行動な事よりもその張りつめた雰囲気の方だと思うのだが・・・無理をしているのが伝わっているのだと思う。

「それで上手くいけば良いのだが・・・」

「上手くいくようにするわ。・・・ん、大淀さんから連絡で、東雲さんが到着したそうよ。」

「分かった。球磨は悪人では無いとは言っていたが、念のため録音を頼むぞ。」

「ええ、分かったわ。」

「初めまして、明日への希望党の代表を務めております、東雲と申します。御目にかかれて光栄です！」

大淀に案内されて来た東雲さんは、まだ20代の若々しい人で、明るく挨拶をしてきた。体格もスラリとしていて、清潔感のあるスーツ姿が良く似合う。

「北九州鎮守府に新しく着任しました葛原と申します。以後お見知りおきを。」

「護国の為に日々戦って下さりありがとうございます。提督様や艦娘の皆様方のおかげで、我々一般人は安心した日々をおくる事が出来ま

す。」

東雲さんは真っ直ぐこちらの目を見て感謝の言葉を伝えてくる。その雰囲気からはご機嫌取りをしようだとか社交辞令的なものは感じられず、本心からそう思っているのだろう。

「これはご丁寧にも。提督の一人として護国の為に力を尽くしましょう。」

「これはとても頼もしいお言葉です!!そこで今日の本題なのですが、私も鎮守府の皆様方のお力になりたくて、この度市長選へと出馬する事になりました。若輩者ではありますが、私の熱い思いに賛同して下さるベテランの黨員の方々の支えもあり、今回明日への希望党を代表して出馬を決意した次第です。もし当選したならば、全力でこの北九州鎮守府をサポートし、人、艦娘、そして提督が力を合わせて深海棲艦の脅威に立ち向かいます!それこそが艦娘を遣わせて下さった神のご意志に報いる事になるのです!!」

ヤバイ・・・本気で圧が凄い・・・このセリフを一切の邪念なく言えるあたり、宗教家の脅威を感じてしまう。一個人としてなら問題無いのだろうが、仮にも一つの市のトップに立とうとしている人間だ。上に立つならば広い視野を持つべきだと思うのだが、それは期待出来そうにないな。

「ちなみにですが、鎮守府のサポートとおっしゃいましたが、どのような案をお持ちですか?」

「我が党内でも様々な意見が出ております。市の予算から鎮守府の為に使う予算を作成し、物資の手配や艦娘の為に施設の拡充等を行い、少しでも鎮守府の皆様が戦い易い環境を整えたいと思っております。また交流会や各地で行われている鎮守府の一般公開イベント等を企画して、市民への艦娘への理解を深めて頂き、市全体が一丸となって支援していきたいと思えます。また何か提督様からご要望があれば、即座に対応させて頂こうと思っております。」

これは市の予算をかなり注ぎ込むつもりだろうな。現状では鎮守府の予算は国が出していて、つまりは税金を使っている。もちろん国防の為に必要不可欠なので、ほとんどの国民が復興中の苦しい生活

に耐えながらも納得している。しかしそこからさらに市の税金を使うのは話が別だろう。それは本来復興に使うべき予算も鎮守府に回す事になるので、当然反発が起こるはずだ。それを国の為に戦っている鎮守府に協力するべきだという事で、市民を納得させられると信じているのが恐ろしい。ついでに言えば東雲さんを推しているベテランの党員達と言うのも怪しいものだ。もし本当に政治能力が有るのなら、若手に市長を任せずに自分で立候補すれば良い。おそらくはクリーンなイメージの東雲さんを全面に出して、裏で甘い蜜を吸うつもりだろう。そして汚職がバレれば東雲さんに罪を擦り付けるつもりではないだろうか？

「・・・お話は分かりました。鎮守府を良く思っただけで下さる事はとても伝わりました。まだもう一人市長候補の方とはお会いしていませんので、ここではまだお返事出来ません。」

「分かりました。私の熱い思いはお伝え致しましたので、後は葛原提督のご判断にお任せ致します。」

「・・・話は変わりますが、うちの球磨をご存知ですか？」

「ええ、存じ上げております!!私は艦娘新教と言う宗教を信仰しておりますが、球磨様は我々を安心させる為に、度々教会の方に足を運んで下さっていたのです。最近は深海棲艦の脅威が深刻化した為に、しばらくお会い出来ないと聞きましたか・・・」

なるほど。そういう設定になっていたのか。ここで球磨に証言させてその嘘を暴いても良いのだが・・・宗教家がこういう思考をするか全く分からない。論理的に話をして伝わる相手なら問題無いのだが、それはあまり期待しないほうが良いだろう。提督の言う事ならばと信じてくれれば良いが、提督のふりをした悪魔だなどと言い始める可能性も否定出来ない。・・・触らぬ神に祟り無しと言うことか。

「そうですね。球磨には鎮守府でやるべき事が多いですからね。」

「それは理解しております。球磨様を始め鎮守府の皆様方のご健闘をお祈りしております。」

「ありがとうございます。ではお話はここまでとさせて頂きましよう。本日はお越し頂きありがとうございます。」

「いえ、こちらこそ貴重なお時間をとって頂きありがとうございます。ありがとうございました。」

深々とお辞儀をする東雲さんを大淀に送って貰い、退室したところでため息を吐く。球磨の言っていた通り良い人ではあった。しかし市長として人の上に立って良い人だとは思えないな。せめて3人目の綾瀬さんが、もう少しマシな人である事を期待したいところだ・：

## 82話（綾瀬さん対話）

東雲さんの相手で疲れていたが、少し休むと市長候補の最後の一人の綾瀬さんが到着したと連絡があった。今回も曙に録音を任せて、準備は整っている。少しはマシな人が来れば良いのだが。

「初めまして、北九州市で再建部門の長をしております、綾瀬と申します。本日はお時間を頂きありがとうございます。」

やって来た男は少し小柄で痩せぎみな体格をしていて、おそらく40代くらいだろうか？きつちりとスーツを着こなし、身だしなみを整えていて好感が持てそうだが、細い目が印象的でなんとなく胡散臭い雰囲気を感じる。源さんは嘘つきで臆病だと言っていたが、的外れつてわけでは無さそうだな。

「北九州鎮守府に新しく着任した葛原です。以後お見知りおきを。」

「是非とも宜しくお願い致します。葛原提督はなかなか面白い方ですから、とても期待しておりますよ。」

「面白いですか？」

「ええ、もちろん悪い意味ではありませんよ。こちらで色々調べさせて頂きましたが、信頼出来るお方だと判断しております。お会い出来るのを楽しみにしていたところに、あの源の姿を見せられたもので。ついつい大笑いしてしまいましたよ。なかなか思いきった事をされましたなあ。」

こちらの情報を調べたと堂々と言うか。交渉するつもりがあるのならば当然の事だとは思いますが、わざわざ明言するのも不自然だな。それにしても源さんの姿を見て大笑いするのならば、二人の仲はかなり悪いのだろう。

「少々艦娘と深海棲艦についてお話ただけですよ。源さんはかなり認識の甘い方でしたので。」

「はっはっは！それはそうでしょうなあ。因みにその後のお話等興味はありますか？」

「・・・聞かせて頂きましょう。」

「源の奴は無様な姿で帰って来たらすぐに大本営に苦情の電話をしましてな。大本営の方に罵声を浴びせる始末でして。しかも止めとばかりに『わしに市長を務めて欲しければ、あの葛原とかいう男をクビにしろー！でなければわしは一切協力しないぞ!!』とか言ったら、向こうも『他の人が務めれば良いので結構です。』なんて返してきたので唾然としてましてな。電話の後に副市長としての仕事をストライキするなんて言い出しましたが、元々ろくに働いてないので大差無いですし、選挙を待たずに代理の方が執務を行う形となっております。」

市長の座への執着心は感心するくらいのものだが、まさか大本営相手に喧嘩を売るとは思わなかった。泣きつくなら理解出来るが、何が源さんを強気にさせたのだろうか？それにしても職務を途中で投げ出すなど、上に立つ者として異常な奴だな。

「それはまた・・・想像を越える展開になっていきますね・・・」

「ええ、まったくですな。葛原提督と馬が合わずに反発するのは読めていましたが、まさかここまで事になるとは思いませんでしたよ。まあ、雑談で盛り上がった事ですし、本題に入らせて頂きましたよ。か。」

「そうですね。まずは市長としての方針を教えてください。」

「私としては街の復興に力を入れたいと思っております。この北九州市もかなり復興は進んでおりますが、深海棲艦の出現前に比べればまだまだです。私もこの街を愛する一人として、思い入れのあるこの街を蘇らせる為に力を尽くしたいのです!!私には再建部門で培った経験と実績がありますので、安心して任せて下さい!!」

言っている事は別におかしな事はないのだが、やはりどうにも胡散臭いな。やはり人間性の問題だろうか？

「・・・というのが、建前ですな。」

ニヤリと深い笑みを浮かべた綾瀬さんが、とんでもない事を言っていた。こちらもそれは感じていたが、交渉の場で明言するような話では無いはずなのだが？

「・・・なぜそんな事を言うのですか？」

「葛原提督はなかなか疑り深いですし、どうせ見抜かれていると思

ますので、下手に隠すのは悪手だと判断しただけですよ。」

「なかなか思いきった事をしますね・・・ずいぶんと私について調べて来ているようですね。」

「いえいえ、ここまで情報を集める事が出来たのも、幸運の女神が微笑んで下さいましたからですよ。」

「それで、建前ではない方をお聞きしても？」

「たいしたものではありませんよ？安全に金儲けがしたいだけですよ。」

金儲けか・・・別にそれが悪いとは言わないが、悪事に巻き込まれるのはごめんだな。

「確かに普通の話ですね。」

「人間は皆お金が大好きですからなあ？そこで葛原提督にご提案なのですが・・・」

ほら来た。だが余計な話に巻き込まれるのはごめんだな。

「葛原提督とは距離を置いたお付き合いをしたいと思います。」

・・・流石にこれは想定外の話だな。市長選に重要な提督の支持を求めに来たのに、距離を置いたお付き合いをしたいと思います。なかなかの曲者のようだ。

「・・・それは構いませんが、理由をお聞きしても？」

「ええ、もちろんです。距離を置くとは言いましたが、市長と提督として必要な手続き等は当然やりますからね？それ以上の関わりを避けるだけです。我々としても有事の際に避難勧告が遅れるなんて事態は避けたいですから。」

「ええ、そこに関しては仕事ですからきちんやりましょう。」

「では本題に入らせて頂きますが、先程言った通り私は金儲けがしたいのです。そこで考えて頂きたいのですが・・・鎮守府の皆様が提供出来るもので、最も需要の高い商品とはなんだと思いますか？」

最も需要の高い商品か・・・話の流れからすれば平川市長のように、艦娘達に売春させる話では無いようだが・・・



## 83話

鎮守府が用意出来る最も需要の高い商品……

「やはり鎮守府独自のものと言えば戦力、それを背景とした『安全』でしようか？」

「はっはっは！やはり葛原提督は優秀なお方ですなあ。そうです、安全こそが鎮守府にしか提供出来ず、最も需要の高い商品です！言い換えれば安心、さらに正確に言えば安心して暮らせる土地とも言えますな。」

一応正解のようだが、まだ続きがあるのか。

「安心して暮らせる土地ですか？」

「ええ、そうです。私は深海棲艦の出現前は不動産業を営んでおりまして、その辺の機微には敏感な方ですから。何故鎮守府の近辺が再建のスピードが早いのか？それはもちろん鎮守府が守ってくれているという安心感があるので人が集まり易く、街の再建が進むのです。そしてこれは精強な艦隊を持っている4大鎮守府付近では特に顕著に現れています。後は地形的な話で、瀬戸内海近辺もかなり良いスピードですな。次いで日本海側ですか？」

「そして人が集まると当然土地の値段も上がると？」

「ええ、そうです。更に言えば土地の値段だけではありません。人が集まれば経済が活性化しますからなあ。物価も上がり、動く金も大きくなるのです。当然その土地の市長であれば、使える予算も多くなりますな。」

そして使える予算が増えれば、懐に入る金も多くなると。

「それは理解出来ました。それで。私と距離を置こうという話とどう繋がるのですか？」

「そちらに関しては葛原提督のご機嫌取りと言った意味合いが大きいですな。調査の結果葛原提督は他人をあまり寄せ付け無い性格だと判断しました。特に悪意がある者やこちらを下に見てくる者には激しく反発するでしょう？かと言って正義感に溢れる方ではない。葛原提督自身に被害が無い事であれば、基本的に無関心だと判断しまし

たがどうですか？」

狐のような細い目でニマニマしながら尋ねてくるが、ほとんど確信している内容なのだろう。そしてそれは間違いでは無い。

「はあ・・・本当に私の事を調べられたようですね。この短期間にどうやってそこまでの情報を集めたのですか？」

「先程も言いましたが、幸運の女神が微笑んで下さったのですよ。北条麗子さんという女神が。」

「北条ですか!？」

「ええ、一昨日の話です。私が葛原提督の情報を集めている時に、北条工業のご令嬢で士官学校に通われている北条麗子さんが、飛行機を使って葛原提督に会いに来るといふ話を聞きました。大急ぎで会食の約束を取り付けて、そこで葛原提督についての話をたくさんさせて頂きました。」

なるほど、情報源は北条だったのか。あいつなら在学中の自分の情報をかなり持っているだろうから納得だ。しかしあのお嬢様の話から、正確な情報を読み取る綾瀬さんの実力も侮れない。そもそも思い付きで会いに来た北条に、会食の約束を取り付ける手際と判断の速さも見事だ。

「北条ならば在学中の私についてはかなり知っているでしょうね。それにしても急な話なのによく会食の約束を取り付けられましたね。」

「そこは本当に幸運でした。市の方に空港を使用したいと打診がありまして、その話を聞き付けて大急ぎで連絡しましたから。幸い街の再建には北条工業が深く関わっておりますから、会食のお誘いは快諾して貰えました。だから本当に幸運が重なった結果、ここまでの情報を集める事が出来たのですよ。」

「なるほど、良く分かりました。話を戻しますが、私と距離を置く事で綾瀬さんにどんなメリットがあるのですか？」

「メリットと言うよりはデメリットの回避ですか？私の性格では葛原提督と仲良くしようとするれば反発されるのは目に見えていますし、葛原提督は久藤提督や鶴野提督から目を付けられていると聞いておりますから、仲良くするのはリスクが高い。そして葛原提督は放つて

おいても精強な艦隊を作る努力をして下さるのでしよう？なら私としては距離を取って、美味しい所を頂くのが一番です。そして葛原提督はこの街の市長から余計な事をされなれないと思えば、私を選んで下さるのではないですか？」

ここまで調べられているのなら完敗だな。実際綾瀬さんに利益がある事も理解出来るし、市長に余計な事をされないというのは、自分にとって大きなメリットだ。それにここまで考える事が出来る人ならば、政治の腐敗で街を食い潰すような事はしないだろう。小遣い稼ぎくらいはするだろうが。

「分かりました。綾瀬さんを支持しましょう。最低限の取り決めとして、表向きは友好的な態度を取る事、鎮守府とその取引業者の妨害をしない事、これらを守って頂きたい。」

「ありがとうございます。その条件はしっかり守りましょう。その代わり有事の際には迅速に情報を頂きたい。避難勧告が遅れる事態は避けたいですからな。」

「承知しました。軍事機密に触れない限りは、情報をお伝えする事をお約束しましょう。」

「そのお言葉が頂けたのなら満足です。ではこれで失礼させて頂きます。本日はお時間を頂きありがとうございました。今後も宜しくお願い致します。」

「ええ、こちらこそ宜しくお願い致します。大淀、綾瀬さんを送つてくれ。」

「はい、ではこちらへ。」

綾瀬さんが大淀と共に退室した後大きくため息を吐く。やはり格上の相手をするのは神経を削られるものだな・・・話がスムーズに進むのはありがたいが、やはりこちらを見透かされているのは不安を感じる。これならばもう少し綾瀬さんの情報を調べておきたかったが、着任してからそこまでする余裕はなかった気もする。今後の為にも情報を仕入れておきたいところだな。

「提督、かなり疲れてるみたいね。」

隣の部屋で録音していた曙が少し心配そうに声をかけてくる。

「まあな、格上相手は疲れる。源さんみたいな三下の相手も疲れるが、格上相手だと緊張感が段違いだ。」

「・・・確かにずっと綾瀬さんのペースで話が進んでいた気がするわね。本当にあの人が市長で良かったの？あの人多分汚職するわよ？」

「少なくとも残りの二人よりはかなりマシだ。こちらに被害がなければ、あとは向こうの問題だから、首を突っ込む必要は無い。お前達艦娘を戦闘に集中させる事が出来るならば十分だ。」

「そう、提督がそう言うなら文句はないわ。」

曙もあまり興味が無さそうな感じだな。でも内心市長と関係が薄い事で、少し安心しているのではないだろうか？無闇に尋ねてトラウマを刺激するような事はしないがな。

「それで、これからどうするつもり？少し休憩でもしたらどうなの？」  
「そうだな、一息ついたら演習の様子を見に行きたい。帰還組の様子が気になるからな。」

「分かったわ。その・・・コーヒーでも飲む？」

曙がそっぽ向きながら尋ねてくる。

「淹れてくれるのか？」

「それも秘書艦の仕事なもの。今大淀さんが来客対応で忙しいなら、秘書艦補佐の私がやるべき仕事でしょう？それだけよ。」

若干頬を赤くしながら話す姿は、なんとなく士官学校で見た曙の姿と被るものがあるな。

「ああ、では頼む。」

「そう。分かったわ。」

テキパキとコーヒーの準備をしてくれる姿を眺めながら、今後の予定を考える。とりあえず演習の様子を見て、夕方に仙崎さんが取材に来るから対応をするとして、その前に一組くらい面談が出来るだろうか？そう言えば営倉の奥にあった拷問器具を証拠として、憲兵に引き渡す準備もしておきたいし、そろそろ前任者の大森提督の私物も売り払いたいところだな・・・やるべき事はまだまだ山積みだな・・・

## 84話（電話対応）

応接室で曙の淹れたコーヒーを楽しんでいると、大淀が慌てた様子で駆け込んで来た。

「提督!!長門鎮守府より救援要請です!!お電話繋げても大丈夫ですか!?!」

「分かった、繋いでくれ。」

長門鎮守府から救援要請だ?!今朝出発した艦隊がやられたのか!?!もしくは手薄になった鎮守府を狙われたか?!

「お電話代わりました、北九州鎮守府の葛原です。」

「貴様あ!!よくも!!よくもこの私を嵌めやがったな!!」

「・・・は?なんの話です?」

いや、本当に心当たりが無い。何か仕掛けをして相手が激昂しているのなら構わないのだが、特に仕掛けた覚えは無いのだが・・・

「とぼけるな!!貴様のせいで私の艦隊が窮地に陥っているのだぞ!!今非を認めて救援を送るならば、軍法会議で多少の口利きはしてやろう。さっさと救援を送れ!!」

「本当に心当たりが無いのですが、どういう状況ですか?」

「まだとぼけるか!?!貴様は姫級の存在を知らながら情報を隠蔽して、私に主力艦隊を差し向けるように誘導したのであるが!?!」

「はあ!?!姫級ですか!?!」

「貴様が手に負えない敵艦隊がいるから助けってくれと言うから、わざわざ討伐に艦隊を送ってやったと言うのに!!貴様のせいで大損害だ!!今私の艦隊が包囲されて壊滅状態だから、今すぐ救援を送れ!!」

強力な深海棲艦が控えているだろうとは思っていたが、まさか姫級が居たとはな・・・しかもせっかく警告を発していたのに、それが勝手に救援要請になってるあたり、本当に面倒な奴だ。

「無茶を言われても困ります。姫級など我々の手に負える相手ではありません。佐世保か舞鶴を頼って下さい。それに姫級の存在は知りませんでした。強力な敵艦隊が居るかも知れないと救援要請ではなくて警告をしましたよね?偵察部隊で姫級を発見出来なかったの

すか?」

「貴様のようなひよっこに艦隊運用についてどうこう言われる筋合いは無い!!とにかく貴様は私の艦隊が包囲を突破して撤退するまでの時間を稼げば良いのだ!!さっさと救援を寄越せ!!」

ダメだ・・・まったく話が通じない・・・しかもこの感じだと原田提督は偵察部隊を送らずに、いきなり主力艦隊を送って包囲殲滅されているようだな・・・だから警戒しろと言ったのに。

「お言葉ですが我々に姫級と戦う能力は無いですし、今更救援に向かっても犠牲を増やすだけでしよう。救援は送れません。」

「貴様あ!!これは軍法会議ものだぞ!!貴様の責任で私の艦隊が壊滅するのだぞ!!」

「自分の艦隊に自分で責任を持ってない奴が提督を名乗るな!!恥を知れ!!」

電話の向こうでまだ何か喚いていたが、これ以上は時間のムダなので電話を切った。

「・・・提督、救援要請を断つても良かったのですか?」

心配そうに大淀が尋ねてくるが、今のやり取りを聞いてもまだ救援を送るなんて考えが残るのだろうか?

「話を聞いていたのだろうか?!姫級を相手にうちの艦隊を送ったところで何が出来る!?余計に被害を増やすだけだ!!それとも無能に付き合って仲間を無駄死にさせると言っているのか!?!」

「し、失礼しました・・・」

大淀が顔を青ざめさせて震えている。隣にいる曙も似たような状態か・・・少し感情的になり過ぎたか・・・

「分かれば良い・・・怒鳴って悪かったな。」

「いえ、こちらこそ配慮が足りず申し訳ございません。・・・また長門鎮守府から連絡が来ておりますが・・・」

「しばらく長門鎮守府との連絡は繋げなくて構わん。それよりも佐世保に連絡してくれ。残念だがあそこを頼るしかない。」

「分かりました、少々お待ち下さい。」

そこからはしばらく大淀が通信をしているみたいだが、なかなか代わ

らないな。

「・・・提督、佐世保からですが、現在佐世保は別海域にて主力艦隊が交戦中との事です。現在横須賀で討伐部隊を編成しているので、余計な戦闘は控えろとの事です。敵は集積地棲姫なので、直接攻めては来ないはずですが、艦隊を送り込んで来るかも知れないので、警戒は怠るなどの指示を受けました。」

佐世保が動けないのは痛いのが、横須賀が来るのであれば、それまで持たせれば大丈夫だろう。

「・・・そうか。では資材溜まりを拠点として、警戒網を構築する。艦娘達全員に演習の即時中断を伝え、補給と整備を急がせろ。一航戦と護衛に白露型姉妹を警戒部隊として、資材溜まりに送り込む、急いで準備させろ。それと横須賀と連絡をとりたい、通信を繋げてくれ。」  
「分かりました。」

急いで鎮守府内に指示を出した後に、横須賀鎮守府の海原提督へと連絡を繋ぐ。

「やあ、葛原提督、数日ぶりだね。鎮守府の運営には慣れたかな？」

「やるべき事が多すぎて、慣れるほど悠長な時間はなかったですね。それで海原提督がこちらに出現した姫級の討伐を行うと聞きました。増援はどれくらいで到着しそうですか？」

「うちの艦娘達にも急がせてるから、明日の朝には到着すると思うよ。」

「明日の朝ですか!?!かなり早いですね。」

姫級と戦うのであればそれ相応の準備が必要はずだ。討伐部隊を編成するにしても、通常の哨戒や近海防衛戦力の見直しが必要になるはずなのだが、横須賀鎮守府との距離を考えると異常なくらい早い。艦娘の練度の違いで航行速度が上がっているのだろうか、それにしても早過ぎる対応だ。

「昨日葛原提督からの情報を貰った段階で、もしもの為に討伐部隊の準備をしていたからね。佐世保の熊井提督と話をして、情報が集まり次第援護に行くつもりだったんだ。これも早めに報告をくれた葛原

提督のお手柄だね。・・・長門鎮守府の原田提督が早まってしまったのは残念だけど。」

これが東の英雄と呼ばれた男か・・・たったあれだけの推測に過ぎない警告から、情報を読み取って準備を整えていたのか・・・そう考えると佐世保鎮守府の熊井提督も同じ判断をしたと考えるべきか。

「私の推測がお役に立てたのなら幸いです。お二方の迅速な判断に感謝致します。」

「それで、葛原提督に一つお願いがあるのだけれど、北九州鎮守府を中継基地として使わせて貰えないかな？今回の集積地棲姫の出現場所から一番近いのは北九州鎮守府だし、横須賀鎮守府から向かうなら関門海峡を通るから、そこで補給とかをさせてくれると助かるのだけ？」

「了解しました。我々では対応出来ない姫級の討伐をして貰うのですから、出来る限りの協力はさせていただきます。」

「ありがとうございます。こちらからは艦隊が向かっていて、指揮は総旗艦の叢雲に任せているから、北九州鎮守府に到着したら彼女の要望を聞いてあげて欲しい。宜しく頼むよ。」

「了解しました。」

「ありがとうございます。では皆で力を合わせて、深海棲艦の脅威から日本を守ろう!!」

明るい声でそう宣言する海原提督の言葉で通話は終わった。海原提督は甘い理想を掲げる理想主義者だが、艦隊指揮に関しては自分の遙かに上を行っているようだ。味方としては頼もしい限りだが、いずれは肩を並べられるようにするべき相手だ。今回の戦いを通してその技術を学ばせて貰おう。



## 85話（仙崎さん取材）

横須賀鎮守府の海原提督との通話が終わり、鎮守府の中が慌ただしくなる。赤城を旗艦、白露型姉妹を護衛とした偵察部隊を資材溜まりに送り、演習組は補給と入渠を済ませて、いつでも出撃出来る準備を整え、明石と夕張は演習組の艤装の整備で大忙しだ。赤城達が資材溜まりに到着するのは夕方前くらいだろうが、そこでの情報を元に夜戦に備えて川内を送り込む事になるだろう。一航戦達は夜になる前に引つ込めるつもりだが、白露型姉妹は状況次第では残ってそのまま川内の下について貰うか。とりあえずは赤城達の情報待ちだな。

「提督、仙崎さんが取材に来られたとの連絡がありました。いかが致しますか？」

「思ったより早かったな。赤城達が資材溜まりに到着するまでもう少し時間があるから、今のうちに取材を済ませておこう。すぐに応接室に案内してくれ。」

「分かりました。ではお迎えに行つて来ます。」

一礼して執務室から去つて行く大淀を見送つてから、曙と共に応接室へと向かう。

「提督、この緊迫した状況で本当に取材してる余裕なんてあるの？」

「むしろ今しか取材を受ける余裕は無いな。深海棲艦の件が最優先だが、市長選挙を疎かにして良い訳では無い。こちらの意思を市民に伝えるならば、取材を受けるのが一番効率的だ。まあ、仙崎さんには悪いが必要最低限の事だけ伝えて、今日はお引き取り願う形になるだろうな。」

「そう。ちゃんと考えてるなら良いわ。私はどうすれば良いの？録音でもするの？」

「いや、仙崎さん相手ならそこまでする必要は無いな。いつ赤城達から連絡があるか分からないから、私の近くで待機していてくれ。」

「ええ、分かったわ。」

さてとやるべき事をさつさと済ませて、深海棲艦の方に集中したいものだ。

コンコンコン

「提督、仙崎さんをお連れ致しました。」

「入れ。」

しばらく待つと大淀が仙崎さんを連れて来た。部屋に入つて来た仙崎さんの表情を伺うと、昨日よりは多少緊張が和らいでいるようだ。昨日が好印象で終わったので、当然と言えば当然だな。

「お忙しいところお時間を頂きありがとうございます。昨日のお約束通りに市長選挙について取材に参りました。」

「ええ、ようこそお越し下さいました。しかし申し訳ないのですが、今は少々立て込んでおりますので、手短にお願い出来ますか？」

「わ、分かりました。では3人の市長候補とお会いされたとの事ですが、その印象はどうでしたか？」

仙崎さんの緊張感が一気に上がった気がする。昨日の態度から一変して距離を取られたと思われたか？いや、本当に忙しいだけなのだが・・・

「まず一番最初にお会いした源さんですが、はつきりと申しますが私の考えとは合いません。ですので私としては支持出来ません。」

「それはまた強い否定ですね。理由をお伺いしても宜しいですか？」  
「どうにも深海棲艦の脅威や艦娘の存在を軽視しているような印象を受けました。一つの鎮守府を預かる者として、受け入れる事は出来ません。」

本当は汚職する気満々だったからなのだが、その件に触れると前任者の大森提督や平川市長の話に触れる事になりかねないし、そうなること久藤提督を刺激してしまいかねない。この程度でお茶を濁しておこう。

「な、なるほど。それでは東雲さんはいかがでしたか？東雲さんは親艦娘派として有名な方ですので、艦娘達を軽視するような事はしないと思いますか？」

「そうですね、個人としては良い人だとは思いますが・・・少々妄信的な部分が見受けられたのが不安が残る部分ですね。人柄の良さと若

さ故の活力は魅力的なのですが、市長として上に立つ人間としては、もう少し経験を積まれて広い視野を持つて頂かなければ、安心して任せられないと判断致しました。」

本人の視野の狭さだけではなく、後ろに控えている者達が厄介そうだとというのが本音だがな。東雲さん本人が操られるのは構わないが、こちらにも一緒に巻き込まれるのはごめんだ。

「な、なるほど。しかし若さで言えば葛原提督はもっとお若いはずでは・・・」

「ええ、そうですがそれが何か？」

「あ、いえ！失礼しました!!そ、それでは最後の綾瀬さんを支持されるのでしょうか。」

「ええ、そうなりますね。綾瀬さんは街の再建に関わっていらっしやったようですし、これからこの街の更なる復興と発展に尽力して頂けると思いました。そして街の復興において、我々鎮守府の重要性も認識して頂けているので、私としては安心してお任せ出来ると考えました。」

本当はお互いに干渉しないという条件が一番なのだが、表向きは仲良くしておかないと街の住人が不安を感じてしまうからな・・・まあ、これならば真つ当な理由に思えるだろう。

「なるほど、なるほど。それでは葛原提督は綾瀬さんを支持されるということで記事を書かせて頂きます。きちんと街の皆さんに情報を伝えるのが私達のお仕事ですからね。では他に街の皆さんに伝えたい事などはありますか？」

「いえ、市長選挙に関して私は意思を示しましたので、後は市民の皆さんに判断して頂くだけです。それとは別に少し個人的なお願いをしても構いませんか？」

「え？あ、はい、なんででしょうか？」

「先程綾瀬さんとお話して少し興味を持ちましたので、過去にどんな事をされたか等の情報が欲しくなったのですが・・・生憎提督としての業務が忙しく、個人的に調べる余力が無いので困っているのですよ。簡単なもので構わないので、仙崎さんに調べて頂いて資料を作っ

て頂けないかと思ひまして。もちろんお仕事として依頼する以上は、きちんと報酬をお支払するつもりですが、いかがですか？」

「ええ、その程度で良ければ構いませんよ。そもそも市長選挙の取材をする為に、候補者の方々について多少は調べていますので、その程度の資料でしたら帰ってすぐに用意出来ますが？」

ほう、それは助かるな。あまり踏み込んだ調査をさせると、綾瀬さんに余計な警戒心を抱かせてしまうだろうから、すぐに用意出来る程度の情報で十分だ。

「ええ、その資料があれば凄く助かります。お願い出来ますか？」

「ええ、お任せ下さい！その代わり今後とも宜しくお願いしますね！」  
「もちろんです。しかし今日から数日はなかなか時間が取れないかもしれないので、落ち着いたらまたご連絡させて下さい。資料に関しては正門の憲兵に伝えて貰えば、艦娘の誰かが受け取りに行きますので、手渡して頂けると助かります。」

「ええ、そのように致します。ではお忙しい中お時間を頂きありがとうございます。では御武運をお祈り致します!!」

「ありがとうございます。」

ビシツと敬礼をする仙崎さんに答礼をする。仙崎さんは軍人では無いが、こちらの流儀に合わせてくれたのかな？それとも忙しいと伝えただから、深海棲艦絡みで何かあると察しての行動なのだろうか？まあ、悪い気はしないな。

## 86話（安藤さん対話）

仙崎さんを見送って曙と執務室に戻ると、資材溜まりへと向かわせた赤城から連絡があった。

「報告します。現在資材溜まりへと到着して、付近に敵艦は見当たりません。」

「分かった。では偵察機を姫級が発見されたポイントの方向へ飛ばして、敵艦が近づいていないか確認してくれ。それと出来るだけ資材溜まりの島に隠れるようにして、敵にこちらの数が分からないように気をつけて欲しい。」

「了解しました。」

ふむ、とりあえずまだ資材溜まりに敵艦隊は来ていないようだな。あまり余計な交戦は避けたいところだが、今一番警戒するべきなのは横須賀の艦隊が援軍に来る前に、大規模な攻勢をかけられる事だろう。今までの敵の戦い方を考えれば、まずは資材溜まりをpushさえる来ると思われる。ならばそこを妨害すれば多少の時間が稼げるはずだろう。ここで無理をする必要は無いので、勝てない相手だと分かればすぐに退却させるしかないのだが、せめて情報くらいは欲しいところだ。

「提督、大淀さんから通信よ。仙崎さんを正門まで送ったら、正門で別の新聞記者が待ってたそうよ。どうするの?」

「来客の予定はもうないのだが・・・それにこれ以上は余裕が無いな。大淀に來ている記者と通信を繋げるように伝えてくれ。」

「分かったわ・・・はい、どうぞ。」

ため息を吐きながら、曙から通信機を受け取り通信を始める。

「お電話代わりました、北九州鎮守府の葛原です。」

「これはこれは、突然の訪問で申し訳ない。毎朝新聞の記者をしております、安藤と申します。新しく着任されたというのにご挨拶が遅れて申し訳ありません。私どもは前任者の大森提督にも大変お世話になりましたのですが、新任の葛原提督とも良い関係を築いていきたいと思っております、本日はご挨拶と少々取材をさせて頂きたくお伺いさせて

頂きました。お忙しい中恐縮ですが少々お時間を頂けますかな？」

良い関係を築くつもりがあるなら、事前に連絡をするのが礼儀だと思うのだが・・・

「申し訳ございませんが、これより我が鎮守府は厳戒体制で深海棲艦への対応に当たります。ですので取材は落ち着いたらまたご連絡致しますので、今日のところはお引き取り下さい。」

「なんとなんと!?これはどうしたものか?たいした力も持たない新聞社の取材は受けたと言うのに、我々の取材は断ると言うのですか?いやはやご冗談が過ぎますなあ。私どもは民衆の代表者として、新たに着任された提督を知る権利があるのです。それを断るなどもはや民衆への裏切り行為とも言えますなあ?」

ずいぶんと話を大きくしてきたものだな。民衆の代表者としての知る権利だと?笑わせる。

「お言葉ですが私は提督として民衆を守る義務があります。深海棲艦の脅威が迫っている時に、その対応に集中しない事こそが民衆への裏切り行為だと私は考えます。先程の仙崎さんとは事前に約束をしておりましたので、必要な事だけお伝えする形でお引き取り願いました。ですのでこれ以上は時間を割けませんので、本日はお引き取り下さい。」

「ふーむ、どうやら本当に忙しそうですね。ですが我々も新しい提督がどのような人物か気になりますし、緊急の市長選挙の事などもお聞きしたいところだったので?これを民衆へと伝えなければ、誰を選ぶべきか迷ってしまいます。」

「とりあえず市長選挙では、私は綾瀬さんを支持致します。では申し訳ありませんが今日はお引き取り下さい。名刺をお持ちであれば、大淀に渡して貰えれば後日改めてご連絡致します。」

「・・・分かりました。我々を守るためだと仰るのであれば、今日はお暇致しましょう。ですが今後は我々毎朝新聞こそを頼って頂きたい。地方でしか活動していないような知名度と信用の低い会社ではなくて、我々のような実績と信頼のある大きな会社こそ、民衆は安心して情報を知ることが出来るということを忘れないで頂きたい。それで

は名刺を大淀さんにお渡し致しますので、ご連絡をお願いしますね。」  
やけに仙崎さんの会社を敵視しているみたいだな？大企業としてのプライドだろうか？今回の件に関しては毎朝新聞のような大きな会社が、癒着をしていた大森提督や平川市長の汚職が発覚してしまった件でもたついたのが原因だろう・・・それが信頼を語るのもおかしな話だな。

「分かりました。では失礼致します。」

通信を切って一息つくと曙が少し意外そうな顔をしている。

「どうした？何か気になる事でもあるのか？」

「その・・・仙崎さんの時とはずいぶんと対応が違うのね。」

「私も暇であれば面倒だが取材くらいは受けただろうが、今はそんな余裕はない。それだけだ。」

「それもそうね。・・・っ!!提督、赤城さんから連絡よ!!敵艦隊を発見したわ!!」

先程艦載機による偵察をさせたばかりだ。かなり近い距離にいたのだろう。

「通信を繋げ。」

「分かったわ!!」

曙から通信機を受け取り、一呼吸おいて気を落ち着ける。

「赤城、状況は？」

「敵の輸送部隊とその護衛と思われる部隊を発見しました。構成は重巡り級elite2・重巡り級2・軽巡へ級elite1・軽巡ホ級2・駆逐イ級3・駆逐イ級後期型2・輸送ワ級6です。もうすぐ交戦距離に入ります。敵艦隊はまだこちらに気が付いていないようですが、どうされますか？」

ふむ、空母も戦艦もないか・・・もうすぐ日が暮れるから、敵は夜戦のつもりで護衛艦隊を編成していると考えるべきか。しかしこの戦力差ではまともによっても勝てないな・・・幸い輸送ワ級に戦闘能力は無いが、それでも2艦隊を相手にしたくはないが・・・

「赤城、加賀、艦載機を全機発艦させて攻撃を仕掛ける。だが目的はあくまでも威嚇だ、無理に敵艦隊に打撃を与える必要は無い。資材溜ま

りの影に隠れて、相手にこちらの戦力を悟られないようにすれば、輸送ワ級を守るために一度下がるかもしれない。もし相手が撤退するならば少し様子を見てから撤退しろ。もし相手が引かないようであれば、即座に撤退だ。」

「了解しました!!」

敵に空母がない状況だからこそ出来る作戦だが、こちらの戦力がバレてしまえば通用しないのが辛い。普通の深海棲艦ならば何も考えずに突っ込んで来るだろうが、姫級の支配下の個体ならば知性のある動きも期待出来るだろう。

「曙、川内を呼んでくれ。」

「分かったわ!!」

とりあえず敵の戦力は判明したのだ。夜戦を仕掛ける準備をしなければな



## 87話（夜戦準備）

川内に連絡をするとすぐに執務室に走って来る音が聞こえた。やはり夜戦がしたくてたまらないのだろうな。執務室の扉をノックもせずに勢い良く開けて、満面の笑みの川内が駆け込んで来る。

「提督！夜戦だよね！夜戦の時間だよね！」

「ああ、夜戦だ。しかも今回はかなり激しい戦いになるぞ？」

「だよね！？そうだよね！！今日は夜戦の気配をビンビン感じるもん！！」

「相手は重巡り級 elite 2隻が率いる艦隊で、現状は2艦隊と輸送艦隊が1つだが、増援もあるかもしれない。川内は構成をどう考える？」

「重巡が居るなら火力が欲しいところだね。だから北上さん達が欲しいかな？こつちも艦隊が2つ欲しいから、天龍と龍田にもうひとつ艦隊率いて貰うとして、あとは駆逐艦の子達だね。あ、それと1つお願いがあるんだけど・・・」

ん？川内が躊躇うのは珍しい気がするな。これから夜戦と言うことであれば、テンションが高いものだと思っていたが。

「なんだ？」

「えつと・・・その・・・」

コンコンコン

「失礼致します、神通です。入っても宜しいでしょうか？」

神通か。確か川内の妹だったか？川内の様子を伺うと驚いた様子はなく、苦笑いをしながら困っている様子だ。どうにも今回の件と無関係では無さそうだな。

「入れ。」

入室を許可すると神通は綺麗な所作で入室し、自分の前で姿勢を正して敬礼をしたので答礼をする。姉の川内とは正反対で真面目な感じだな。

「それで、なんの用だ？」

「提督にお願いがあつて参りました。本日夜戦があると思うのですが、その人員に私も志願致しますので、是非とも艦隊に加えて頂けな

いでしようか？」

「あー、提督、私からもお願いします。神通を夜戦に連れて行って良いかな？」

キリツと真面目な表情で志願した神通に続いて川内も推薦してくれる。しかし川内がどうにも落ち着きが無いのも気になるが、やはり問題は神通の方だろう。

「・・・聞きたい事がいくつかあるが、どこから夜戦の情報を手に入れたのだ？先程偵察が終わったばかりだぞ？川内みたいに夜戦の気配を感じたとかか？」

「いえ、どこからも情報は得ていませんが、姉さんがそわそわしていたので、今日は夜戦があると確信しておりました。それで一緒に提督の元へと向かう約束でしたが・・・姉さんが急に走り出したもので・・・」なるほど。川内みたいな野生の勘みたいなのは無くても、川内の行動から察するくらいは出来てもおかしくは無いか。

「それは分かった。では次に神通はまともに動けるのか？前任者の大森提督に売られて、昨日帰って来たばかりだろう？怪我は高速修復材で治ったとは思いますが、疲労は溜まっていくだろうし、長い間戦場に出ていないから感覚が狂っているのではないか？」

「お気遣いありがとうございます。ですが体調は問題ありませんし、今日の演習で体の動きを取り戻す為に集中して取り組みました。いつでも戦場に出る準備は整っております。」

ふむ・・・正直あまり無理をさせたくないのだが、どうにも意思は固いようだ。士官学校の時に見た神通は普段は少し内気な印象だが、演習では鬼気迫る演習をしていたのを思い出す。1日で戦場に出られるレベルに仕上げたと言うのであれば、それなりに期待は出来そうなものだが・・・

「川内、神通の演習は見たか？」

「え？あ、うん。一緒に夜戦に行っても大丈夫だと思うよ。」

川内に話を振るとなんだか焦ったような雰囲気を感じたが、川内が戦力として問題無いと言うのなら信用しよう。

「では最後の質問だ。なぜ今回の夜戦に志願したのだ？川内から誘わ

れた・・・ようではないみたいだが？」

「はい、私の意思で志願しました。姉さんだけに任せるのも心配ですし、私も艦娘として戦える事を提督に示す良い機会ですから。」

「まあ、姉妹が心配なのは分からなくは無いです。だからと言ってあまり無理をするのは良くない。それに私はお前達を艦娘として扱うから、功を焦らなくてもきちんと活躍する機会は与えるが？」

「それは・・・姉さんからお聞きしました。しかしそれは戦場に出る事が可能なのに尻込みをする理由にはなりません。」

かなり強情だな・・・だがここまで言うのならそれ相応に自信があるのだろう。あまり時間も無いし、川内も良しとするならば任せるか。

「分かった、今回の作戦への参加を認めよう。」

「ありがとうございます!!しつかりと私が活躍出来る事を証明してみせます!!姉さんにも遅れをとるつもりはありません!!」

「・・・ずいぶんと川内を意識しているようだが、何かあったのか？」  
その問いを投げ掛けた瞬間に、執務室の温度が少し下がった気がした。これは触れてはいけないうつだったか？川内の方を見ると冷や汗を流しながら視線を反らしている。心当たりがあるようだな・・・  
「いえ、なにもありませんでしたよ？私がボロボロになって帰って来ただにも関わらず、迎えにも来てくれませんでしたし、入渠が終わって部屋に帰れば、姉さんは気持ち良さそうに寝ていましたから、特に何もありませんでしたよ？それに私が帰って来た事に気が付いても、普通に『あ、神通お帰り。長期の任務大変だったね。』なんて言う程度でしたから？」

・・・マジか。確かに川内は夜戦明けの上に私に報告をする為に夕方まで起きていたが、これは神通が怒っても仕方がないか・・・

「そ、そうか・・・あ、いや、川内もあの日は夜戦明けだったし、報告の為に私が起きるまで待たせてしまったからな・・・これは私にも責任のある事だ。すまない。」

「いえ、提督が謝られるような事ではありませんから、お気になさらないで下さい。それでは出撃の準備がありますのでこれで失礼致します

す。」

来た時同様に綺麗な敬礼をしてきたので答礼すると、神通はすぐに準備の為に執務室を後に行つた。神通は最後まで礼儀正しく丁寧な所作だったが、あれはかなり怒つていたな・・・通りで普段は少し内気なはずの神通があれだけ強情な雰囲気だった訳か・・・

「・・・川内。」

「あ、いや、その・・・反省はしています。でもね提督!? 私は神通が生きてたの知つてたから、あんまり驚かなかつただけで、帰つて来たのは素直に嬉しいんだよ!」

「はあ!? なんで川内が知つているんだ!」

「いや、そりや夜になるとたまに帰つて来た気配を感じてたし、大森提督に聞いたら極秘任務中だから、他の娘達には絶対に言うなつて言われてたから・・・確かにしばらく顔が見れなかつたのは寂しかつたけど・・・ちゃんと生きてるのは知つてたから・・・」

なるほど。夜間にこつそりと売られた艦娘の入渠等をさせる時に、川内の感覚に引つ掛かつたのか。それで大森提督に沈んだはずの神通が何故帰つて来ているのかを聞きに行つて、極秘任務で納得してた訳か・・・大森提督に上手くあしらわれていたわけだな・・・

「早めに仲直りしておけよ?」

「はい、頑張ります・・・」

## 88話（夜戦出撃）

「提督、赤城さんから通信よ。」

「分かった。赤城、状況は？」

「艦載機で攻撃を仕掛けましたが、敵艦隊はこちらの艦載機を発見すると即座に撤退しました。ですので敵艦隊にあまり損害を与える事は出来ませんでした。十分に敵艦隊が離れたのを確認しましたので、予定通りこちらでも撤退しています。」

なるほど。ずいぶんと撤退の判断が早かったようだな。通常の深海棲艦であれば艦娘の存在に気が付けば、戦力差も考えずに突っ込んで来るのだが、やはり上位種の支配下になれば知性的な行動をするようだな。今回は輸送艦隊が居ると、もうすぐ日が暮れて空母が活躍出来なくなるのを考慮して、一旦引いてくれたのだろう。

「分かった。今回の艦載機での攻撃は威嚇が主目的だから、こちらが無事に撤退出来たならそれで構わない。それと少し白露と話したいのだが代わって貰えるか？」

「はい、少々お待ち下さい。白露さん、提督が話があるそうです。」

「はぁーい、提督呼びましたか？」

「ああ、今夜戦の為の部隊を編成しているのだが、白露達の状態次第ではそのまま夜戦に参加して貰おうかと思つてな。燃料や疲労の具合などはどんな感じだ？」

「燃料はまだまだ余裕あるし、今日は哨戒だけで戦闘はしてないから余裕だよ!!夜戦も私達に任せてよ!!」

「夕立達も夜戦に参加出来るっぽい!?夕立も暴れたりないっぽい!!」

「ちよっ!!今お姉ちゃんが話してるんだから割り込まないでよ!!」

ふむ、これだけ元気そうなら問題無いか。白露達が難しいのであるが第六駆逐隊に出て貰うつもりだったが、白露達に任せるとしよう。では白露達に夜戦も任せよう。時雨と春雨も大丈夫か？」

「うん、僕も平気だよ。」

「私も大丈夫です、はい。」

「分かった。ならば今から夜戦部隊を編成して向かわせるから、途中

で合流してくれ。合流後は天龍と龍田の部隊に入ってくれ。」

「あれ？今日は川内さんじゃないの？」

「今回は2艦隊組むつもりだから、川内はまた別の艦隊を率いて貰うつもりだ。」

「あ、やっぱり川内さんも来るんだ。了解しました。」

「では詳しい指示は天龍達から聞いてくれ。健闘を祈る。」

「えへへ、いっちなばん活躍するから、期待しててね♪」

白露達との通信を終えて一息つくくと、執務室に大淀が帰って来た。見た感じ少し疲れてそうな雰囲気だな。

「どうした？なにかあったのか？」

「あ、いえ、すみません。先程来られていた安藤さんから名刺を受け取る際に、色々としつこく質問をされたもので・・・勝手に取材にお答えするわけにはいきませぬのでと断ったのですが、なんとか聞き出そうと粘られて・・・もちろん回答は全てお断りしましたのでご安心下さい。」

「それは大変だったな。だが勝手に質問に答えなかったのは良い判断だ。ちなみに何を聞いてきたんだ？」

「えっと、新しい提督について、前任者の大森提督の事件について、平川市長の事件について、市長選挙について、あとは現在深海棲艦が攻めて来ているのか？と質問されました。」

まあ、気になるのはその辺が妥当なところか。市長選挙の件以外はあまり探りを入れられたくない内容だな。

「分かった。まあ、この件は後回しで良い。それよりも夜戦の編成だな。第一艦隊を川内を旗艦として、神通・北上・大井・島風・雪風に出で貰おう。敵の重巡洋艦を叩ける火力を持った部隊だな。そして第二艦隊を天龍を旗艦として、龍田と白露型姉妹を出す。川内もこの編成で問題無いだろうか？」

「うん!!最高の夜戦が出来そうだね!!」

「ならば出撃準備に取り掛かれ。敵が前線基地を作ろうとするのをとことん妨害してやれ!!」

「はっ!!じゃあ提督、行ってくるね!!」

川内が良い笑顔で執務室から駆け出して行く。先程までは神通の件で微妙な雰囲気だったが、今はもう目の前の夜戦の事で頭が一杯なのではないだろうか？下手に引き摺って悪影響が出るよりはよっぽど良いがな。

艦娘達も警戒体制で待機させていたので、すぐに準備が整い出撃港に集合した。しかも間宮が気を効かせておにぎりの準備をしていたので、出撃する者達も急いで食事を済ませる事も出来たし、白露型姉妹の分も持つて行く事となった。

「では今回の目的だが、敵が資材溜まりに前線基地を作ろうとしているのでこれの妨害だ。明日になれば横須賀鎮守府からの応援が到着する予定なので、それまで時間を稼げれば我々の勝ちだ。偵察で確認出来た部隊については、この戦力で勝利出来るだろうが、増援が現れた場合はその場で判断する。川内の感覚を頼りにしているぞ。だから川内も無理はせずに、引き際を間違えないようにしてくれ。」

「任せてよ!!夜戦じゃ誰も沈ませないから安心して待っててよ!!」

「姉さんが無茶しないように見張っておきますのでご安心下さい。」

「ああ、頼んだぞ。それと天龍、今回は川内達の支援部隊にはなるが、遠慮する必要はない。思う存分暴れてこい。」

「おっしやあ!!俺も夜戦は得意だからな!!大船に乗ったつもりで任せとけよ!!」

「あらあら〜天龍ちゃんやる気みたいね〜。なら私もい〜ぱい沈めて来ようかしらあ?」

川内達も天龍達もやる気だな。川内は夜戦好きだし、天龍も好戦的な性格だから当然と言えば当然か。

「あの、提督?ちよつと良いですか?」

「ん?大井、どうかしたか?」

「私は面談の時に北上さんに危険な事をさせるなって言いましたよね?なのにこの短期間でまた出撃ですか?しかも今日の相手はかなり手強いみたいですけど?私の話をちゃんと聞いていたんですか?」

大井の目が完全に据わってるな・・・だが今回の作戦に重雷装巡洋

艦の二人はかなり重要なのだが・・・

「悪いが今回の戦いでは北上と大井の火力を生かさねば勝機は無い。夜戦が得意な川内の指揮下で戦わせるから、川内を信頼して戦ってくれ。」

「チツ、はあ・・・分かりました。」

「ええ、大井つちは私と一緒に行くの嫌なの？私はこれだけ提督から期待されたらテンション上がるんだけどなあ」

「北上さんと一緒に嫌なんて事は絶対にありません!!もちろん北上さんと一緒にどこにでも行きます!!北上さんは私を守りますから!!」

「じゃあ大井つちは私が守るから一緒に頑張ろうねえ。」

「はい!!」

・・・とりあえず大井もやる気になってくれたようだな。

「雪風と島風もしつかり頼むぞ。」

「はい!!雪風が艦隊をお守りします!!」

「おう!?あ、はい、頑張ります。」

雪風は頼もしいが島風はまだまだ慣れない様子だな。長門はただの人見知りだと言っていたし、時間が解決してくれるだろう。それまではあまり無闇に踏み込むべきではないか。

「では総員出撃だ!!」



## 89話（五日目夕食）

夜戦組を見送った後で大淀を連れて営倉へと向かう。本来なら明日の朝まで青葉には反省させるつもりだったが、今回の戦いはなにが起こるか分からないので、戦力になる者はいつでも戦える状態にしておきたい。曙には他の者達に夕食を食べさせるようにと指示を出したので、さつと青葉を出して食事にしたい。営倉に入ると殊勝な事に青葉は正座で待機していた。

「ほう？ずつと正座していたのか？」

「あ、いえ・・・その、人が近づく気配がしたので、もしかしたら司令官かなあと思ひまして。」

「まあ、その様子なら反省しているようだな。」

「それはもちろんです、はい!!」

そのわりには口元によだれの跡が見えるが、そこは見なかつた事にしておこう。自分も士官学校の時は営倉でよく寝ていたからな。人が近づいた気配で姿勢を正すのなら、ずいぶん可愛いものではないか。

「では今後は盗聴や盗撮をしないこと。撮影をする時はきちんと許可を取ること。新聞を掲載したい場合はまず私に見せに来ること。これらをきちんと守るように。良いな?」

「はい、以後気をつけます。」

「では今回の営倉入りはここまでする。今から夕食の時間だから食べに行くぞ。」

「はい、分かりました!」

川内達が接敵する前には執務室に戻らなければならないので、急いで食事を済ませよう。その間にも資材溜まりを確保された場合の手段をいくつか考えておかなければな・・・それともしかすると資材溜まりを迂回して、鎮守府を直接攻撃される可能性も捨てきれない。鎮守府防衛の計画も必要だし、夜戦組の退路を絶たれる可能性も考慮しなくては・・・

司令官のお許しを得て営倉の鍵を大淀さんに開けて貰いましたが、司令官はなにやらぶつぶつ呟きながら難しい顔をして営倉を後にしているようです。どうやら青葉の事はもう意識から外れている様子ですね。これなら小声で話せば気が付かないかな？

「あ、大淀さん、先程は電信で司令官が来ることを教えてくれてありがとうございました。おかげ様でうたた寝してしまったのがバレずに済みました……」

「はあ……営倉でうたた寝とは……ある意味凄い度胸ですね……」  
「うう……恐縮です……」

「はあ……本当に恐縮して下さいね？」

「はい……すみません……」

とはいえ現在の営倉は綺麗に掃除されたばかりなので嫌な臭いはず、床や壁も綺麗になっているうえに拘束される事もないし、一応簡素な寝具も用意されている。前任者の大森提督の時代では部屋にまともな寝具は無く、納品で使われた段ボールを集めて寝具にしていた事を考えれば、むしろ今の営倉のほうが良い環境だ。つついいうたた寝してしまうのも無理は無いと言うものだ。

「それにしてもなんだか切羽詰まった様子ですが、あまり戦況が良くない感じでしょうか？」

「いえ、そんな事はありませんが……相手は集積地棲姫が送り込んでくる部隊ですから……ただ襲ってくるだけじゃなくて戦略的な動きをするので、色々と考えられているのでしょうか。」

「それは確かに恐ろしい話ですね……」

「ですが作戦をきつちりと考えて下さるのは頼もしい事です。大森提督ではあそこまで考えられる事はなかったですから……」

確かに大森提督の時は、敵艦隊を見つけたら戦艦や空母で倒すくらいしか考えてなかったですからねえ……私達重巡洋艦はほとんど使われなかったですし、軽巡洋艦や駆逐艦達も対潜か戦艦達の盾としか使われなかったの、大森提督が作戦で悩んでる姿など誰も見たことが無いのではないのでしょうか？夜戦は川内さんに丸投げでしたし。

「そう考えると今の司令官は優秀な方なのかもですねえ。」

「まだ日が浅いので判断出来ませんが、少なくとも大森提督よりはかなり優秀でしょうね。ですから私は秘書艦として、あの方を支えたいと思っています。・・・だからあまり迷惑をおかけするような事は謹んで下さいね?」

「うう・・・気を付けます・・・」

大淀さんも少し変わられたようですね。大森提督の時は全てを諦めた暗い目をしていましたし、大森提督が亡くなってからは私達艦娘を守る為に必死に動いてくれました。それが最近はなんだか忠誠心の塊のような人になりましたね。もちろん今の司令官は良い人ですし、司令官の下で働いて活躍したい気持ちは青葉にも分かりますが。もしかしたら青葉を起こしてくれたのも青葉を助ける為ではなくて、司令官に余計な時間を取らせない為の配慮だったのでは?と思ってしまう。いや、うたた寝していた青葉が一番悪いのですけれど・・・

大淀と青葉を伴って食堂に着くと艦娘達は既に食事を始めていた。いつもよりは多少空気が重いが、深海棲艦との戦闘がどういう形になるか分からないので、緊張感を持って行動したほうが良いだろう。

「座ったままで構わないから聞いてくれ。皆も知っているとは思いますが、現在集積地棲姫がこちらに侵攻部隊を送り込んできている。幸い集積地棲姫自体は敵の拠点から動かないので、直接戦闘する事はないが、油断は出来ない状況だ。なので今日は早めに入渠を済ませて自室で待機して、いつでも出撃出来る心構えをして欲しい。また空母と軽空母は夜間の出撃は無いので早めに就寝して、明日の日の出と共に出撃出来る準備をしてくれ。一応明日の朝には横須賀からの応援が来る予定となっているので、まずはそこまで持ちこたえる事に集中してくれ。以上だ。」

話を終えると艦娘達は食事を再開する。せっかくならば美味しい食事を会話しながら楽しみたいところだろうが、状況が状況なので我慢して貰いたい。自分も早急に食事を済ませておきたいので間宮の下へ向かう。

「提督、お疲れ様です。」

「ああ、間宮も先程はおにぎりを用意してくれていて助かった。それと今夜は寝る余裕も無いかも知れないから、夜食を用意しておいて貰えるだろうか？・執務室で食べられるものを頼む。」

「分かりました。手軽に食べられるものをご用意しておきます。」

「宜しく頼む。」

「ですがあまり無理はされないで下さいね？」

「悪いが今は無理をするべき状況だ。もちろん私も馬鹿では無いから休める時にはきちんと休憩を取るが、それで艦隊の指揮が滞る事を容認出来る余裕は無いと考えている。」

「そう・・・ですか・・・分かりました。そこまでのお覚悟ならばもう何も言いません。私に出来る事は少ないですが、しっかりと支えられるように頑張ります。」

「ああ、頼んだぞ。」

間宮に食事を貰って空いている席に座って食事始める。大淀は一緒に座ったが、青葉は衣笠の所に行ったようだ。

「ねえ、提督、ちよつと良いかしら？」

「ん？五十鈴か、どうした？」

「神通が出撃したって本当かしら？」

「ああ、本人の強い希望と川内の推薦があつたからな。」

「そう・・・あの神通がね・・・分かつたわ。なら五十鈴もいつでも出られるから、出番になったら呼んでちょうだい。」

神通に続いて五十鈴もか。やる気があるのは良いことだが、あまり無理をさせて沈まれると困るのだが・・・

「神通にも同じ事を言ったが、怪我は高速修復材で治つたはずだが疲労は溜まっているし、しばらく戦場に出ていないので感覚が狂っているはずだろうか？・あまり無理をするべきでは無いと思うのだが？」

「神通も同じ事を言ったのだと思うけど、体調くらいはすぐに回復したし、今日の演習で戦闘の感覚は取り戻したわ。あまり艦娘をなめないでくれるかしら？・それにさつき間宮さんに言ってたじゃない、今は無理をするべき状況だって。提督が無理をしてるのに呑気に寝てい

ろだなんて冗談じゃないわよ。」

ふむ・・・ただの強がりかどうかは判断出来ないが、ここまで言うのであれば戦力として考えておいても良いだろう。

「分かった。ならば必要になれば出撃して貰うから、いつでも出られるように準備しておけ。」

「ええ、五十鈴に任せておきなさい。」

「そういう事なら球磨もいつでもいけるクマ。むしろしばらく出撃して無いから鬱憤が溜まってるクマ。だから戦場でぶっぱなしたいクマ。」

「あたしと高雄姉も行けるからな!!むしろガンガン起用しろよ?」

「分かった、分かった。お前らも準備してろ。ただし言ったからにはしっかりと働いて貰うから覚悟しておけよ?」

何はともあれ選択肢が増えるのは良いことだ。これで防衛の計画も少し楽になるな。

## 90話（夜戦前半）

食事を済ませてから執務室に戻り、川内達からの報告を待つ。その間にも先程参加を表明した艦娘達をどうやって使うかの考察を進めておく。最終的には敵の動きに合わせて対応するのだが、一から対応を準備するよりは素早く対応が出来るから疎かには出来ない。

「提督、川内さんからもうすぐ接敵するとの連絡がありました。」

「分かった、代わってくれ。」

大淀から通信機を受け取るが、大淀も心なしか緊張しているようだ。

「川内、状況は？」

「えっと、資材溜まりの付近に来たけど、敵艦隊は資材溜まりに留まって防衛してる感じかな？ 雰囲気的に2艦隊だから、輸送艦隊はもう帰った後みたいだね。」

まあ、輸送を終えた輸送艦隊が留まる理由は無いよな。護衛をしていた艦隊はそのまま資材溜まりの確保をしているのも予想通りだな。とりあえずは増援が来る前に間に合ったと考えると良いだろう。

「分かった。では増援が来る前に始末してしまおう。敵が資材溜まりの防衛に専念しているのならば、こちらは川内と天龍の艦隊で分かれて、南西と南東の二方向から仕掛けるとしよう。」

「良いじゃん！良いじゃん！十字砲火つてやつだね。」

「ああ、単純な手だが効果的だからな。攻撃のタイミングは川内と天龍の二人に任せる。相手は重巡り級eliteがいるはずだから油断するなよ。」

「了解！任せてよ!!」

とりあえず自分が出ることはここまでだ。後は現場の艦娘達を頼るしか無い。

天龍と軽く打ち合わせをして私達が担当する南西方向へと舵を切る。敵艦隊は警戒している雰囲気だが、幸いまだこちらには気が付いていないようだ。いつも通りに探照灯を使って敵艦隊に集中攻撃を

仕掛けて、敵艦隊の数を減らす作戦だ。こちらに応戦しようとする敵艦隊に天龍達の部隊が横槍を入れるおまけ付きだ。今夜も最高の夜戦が出来そうだね!!

「姉さん・・・本当に旗艦が探照灯を使うの？集中攻撃を受けて危険だと思っただけど・・・」

「もちろん！夜戦なら誰にも負けないから大丈夫だって!!今までもこのやり方で戦ってたからそんなに心配する必要無いって!!」

「・・・分かったわ。旗艦の姉さんがそう言うなら従うわ。」

「ほら、せっかくの夜戦なんだからもつと楽しまないと!!それに提督も期待してくれてるんだから、その期待にはしっかりと応えないとね!!」

「・・・ええ・・・分かったわ。」

「じゃあそろそろ仕掛けるよ!!皆、いつでも行ける!!」

皆を見渡すと気合いの入った眼差しを返してくれる。神通も少し暗い顔をしていたけど、少し待ってあげれば気持ちを切り換えて、真剣な表情へと変わる。

「よーい・・・」

探照灯を敵艦隊に向けて投射する。さあ、夜戦の始まりだよ!!

「撃てえ!!」

こちらの一斉射撃が敵艦隊へと襲いかかる。敵も奇襲に驚いているみたいだけど、すぐに対応してこちらに応戦しようとしたが、横から天龍達の艦隊の砲撃が入る。今の攻撃で少しは沈めることが出来たはずだ。しかし敵は天龍達の方を後回しにして探照灯を持つ私を沈める気のように、さつきから敵意をビンビン感じる。一応何隻かは天龍達の方に対応するみたいだけど。

「砲撃来るよ!!各員散開!!」

随伴艦の皆と距離を取りながら敵艦隊へと接近していく。こうやって囷を務める事で他の皆は攻撃をする余裕が生まれ、被害もかなり押さえられるのでいつも夜戦で使っている戦法だ。今日は敵の弾幕が激しいから私は撃ち返す余裕が無いけれど、こちらの部隊も天龍達の部隊も激しい砲撃を加えている。

「そろそろ私達の距離だね!!大井っち、一緒にいくよ!!」

「はい!!北上さんに合わせます!!」

重雷装巡洋艦の二人が魚雷を時間差で撃ち込んでいく。20本の魚雷の群れが2回×2人分放たれるので、この暗闇で避けきるのは至難の技だ。

「島風さん!雪風さん!私達も行きますよ!!」

「神通!?まだ前に出るのは早いって!!」

ヤバい!!神通が駆逐艦を連れて追撃の為に前に出てしまった!!まだこつちの魚雷が届いて無いから、いま前に出ると砲撃を受けちゃう!!私の制止を振り切って神通達が前へと出て敵へと砲撃を継続する。流石にこの距離なら敵も神通達の動きを把握してしまったので、砲口が神通達へと向かう!!

「ああっ!!」

「ひゃっ!!」

「神通!?島風!?」

神通と島風が被弾してしまった!?島風の方は小破で済んだけど、神通は中破してしまった!?幸いにも神通達への追い討ちがかかる前に、敵艦隊へと魚雷が到達したようだが、神通達へと敵の魚雷も接近している!!島風と雪風はすぐに反応して回避行動を取ったが、神通が少し遅れてしまう!!

「神通!!」

探照灯を捨てて神通を庇う為に全速力で航行する!!間に合ええええ!!!

川内が探照灯を担当してくれているので、俺達は一方的に砲撃を加えている。散発的な反撃はあるものの、砲撃の精度が段違いだぜ!!

「おっしやあ!!このままガンガン撃ち込んでやるぜ!!」

「うふふ♪アハハ♪また一隻沈めたわね♪次の死にたい船はどこかなあ?」

「ううー。夕立も負けないっぽい!!」

「お姉ちゃんも負けないんだから!!」



龍田や駆逐艦達と調子良く撃っていたら、敵艦隊で魚雷の激しい音が炸裂して、すぐに川内の探照灯が消えたようだ。

「魚雷を撃ち込んだから一旦距離を取るつもりみたいだな？俺達も少し距離を取って、川内達の次の攻撃に合わせるか。」

「あらあら〜仕方ないわねえ。もうちよつと撃ちたかったけど、川内さんが引くなら合わせないとねえ。」

打ち合わせの時に一旦距離を取る時は探照灯を消すから、その時は無理に攻めないようにって決めてたから仕方ないな。

「て、天龍さん!!」

「ん？春雨、どうした？」

「え、えっと、その・・・敵艦隊が川内さん達を追撃してるみたいですよ!!助けに行くべきだと思います!!・・・はい。」

探照灯が消えちまったからあまり見えないんだが・・・確かに向こうは撃ち合ってるけど、こっちには砲撃が飛んで来てねえが・・・

「春雨、良く見えるな？」

「あ、いえ・・・その・・・すみません。」

「いや、責めてる訳じゃねえから謝らなつて。だがどうすつかな？川内なら追撃くらい振り切っちゃうと思うが・・・」

「天龍さん！僕からもお願いするよ！春雨もこう言ってるし、僕も嫌な予感がするんだ。」

「私も春雨を信じてあげたいから!!天龍さん、お願いします!!」

「よくわからないけど夕立も突撃したほうが良いと思うっぽい!!」

白露型姉妹全員が春雨に賛成か。龍田を見ればニッコリ笑って頷いてくる。ならもう迷う必要はねえな!!戦友がここまで言うなら信じてやるのが俺の流儀だぜ!!

「よっしやあ!!なら今から突撃すつぞ!!気合い入れてついて来いよ!!」

## 91話（夜戦後半）

砲撃を受けてしまい体勢が整う前に敵の魚雷が向かっている事に気が付いてしまった・・・これはもう避けきれない・・・

「神通!!」

振り向くと探照灯を捨てた姉さんが全力疾走でこっちに向かって来て、私の前に滑り込んで魚雷を受けてしまう。

「姉さん!?姉さん!!」

激しい爆音と共に水柱が視界を遮る。視界を取り戻した先には大破した姉さんの姿があった。私のせいで姉さんが・・・姉さんが・・・「一旦下がるよ!!私は川内を連れてくから大井っちは神通をお願い!!島風と雪風は援護!!」

「はい!!分かりました!!」

後方から北上さんと大井さんが救助に来てくれる・・・けど姉さんが・・・

「しつかりしなさい!!下がるわよ!!」

「す、すみません・・・」

大井さんに怒鳴られながらも撤退を開始する。先程受けた砲撃のせいであまり速度が出ないけれど、大井さんに曳航して貰ってなんとか撤退出来ている。しかし姉さんを曳航している北上さんの速度はもっと遅い。こちらの雷撃で敵艦隊もかなりダメージを負っているはずだが、こちらを逃がさないように必死で追い掛けて来ているようだ。雪風さんと島風さんが牽制射撃をしているが、果たして無事に逃げ切れるだろうか?

「うう・・・北上さん・・・天龍達に連絡して援護に来て貰って・・・探照灯捨てたから一旦下がったと思うから・・・」

ボロボロの状態にも関わらず、姉さんが北上さんに指示を出す。一度離脱したはずの天龍さん達の助けが間に合えば・・・間に合わないならせめて姉さんだけでも助けなくては・・・

「わかった・・・ってもう天龍達が突撃始めたみたいだよ?」

「オラオラ!!天龍様のお通りだあ!!」

「うふふ♪一隻も逃がさないけど、覚悟は出来てるかしらあ?」

「狙うはボロボロの敵旗艦!!お姉ちゃんも絶対についてくればなるんだから!!」

「夕立が一番暴れるっばい!!」

「やれやれ、春雨、僕達は皆を援護するよ。」

「が、頑張ります、はい!!」

ボロボロになりながらも川内達を追い掛けていた敵艦隊に襲い掛かる。死力を尽くして追撃していた所に横槍が入ったから、敵の統制は完全に崩れ去って大混乱だぜ!!

「よおし!!このまま殲滅すつぞ!!」

「提督、戦闘が終わったようです。天龍さんから連絡が入ってます。」  
「ん?川内からではなくて天龍からか。」

大淀から通信機を受け取ったが・・・これは川内に何かあったのだろうか・・・

「天龍、報告してくれ。」

「おう、資材溜まりに居た敵艦隊は無事に殲滅したぜ!!けどよ、こっちもかなりやられちゃってよ・・・川内と白露が大破、神通が中破、俺と夕立と島風が小破だ。」

「そうか・・・川内がやられたか・・・」

「まあな・・・どうも神通を庇って大破しちゃったらしくてよ・・・神通が責任感じちまったみたいなんだよ・・・」

「そうか・・・川内は何か言ってたか?」

「川内も川内でお・・・大破しちゃったくせにまだ夜戦続けるつもりみたいで困ってんだよ。なんか小規模の艦隊が近づいてるから倒さなきゃいけないってさ・・・」

大破してもなお夜戦の感覚が鈍らないのか、本当にたいした奴だな・・・

「ならば艦隊の編成を少し変えよう。天龍を旗艦として龍田・北上・大井・島風・雪風で資材溜まりの防衛を続けてくれ。川内・神通・白露

型姉妹は鎮守府へと帰還させる。」

「了解したぜ!!追加の雑魚共くらいまた蹴散らしてやるよ!!」

「ああ、任せたぞ。」

とりあえず川内が脱落するならば、資材溜まりでの攻防は次の戦いで切り上げるべきだな。そうなるよ……

「大淀、球磨と吹雪・睦月・如月を出撃させるから呼んでくれ。」

「分かりました。」

「提督、球磨の出番かクマ?」

「ああ、球磨達には川内達を迎えに行つて貰いたい。」

「ん!?川内達がやられたクマか!?北上と大井は無事クマ!」

「北上と大井は無事だし、轟沈した者は居ないから安心してくれ。しかし川内と白露が大破してしまったのでな……今損傷の少ない者と損傷の多い者で部隊を分けて、片方を撤退させているところだ。撤退する部隊にも護衛は居るし何も無いとは思うが、念のために迎えに行つて貰いたい。」

「分かったクマ。戦闘で敵艦隊にぶつばなせないのは残念クマ……けど味方を守るのも大事な仕事クマ。夜戦の航行練習と思つて迎えに行つて来るクマ。」

食事の時にも感じたが、球磨は敵艦隊にストレスをぶつけたがつているのだろうか?そう言えば球磨は売られた先で、艦娘新教の御神体の役割をさせられていたのだったな。苦しむ人々を騙して金を搾り取る仕事を手伝わされていたと考えたならば、もしかしたら体を求められる以上のストレスを感じていたのかも知れないな。

「悪いが急いで行つてやつてくれ。頼んだぞ。」

「任せるクマ。」

さてと、これで次はどう出て来るだろうか?夜間の索敵を川内の感覚頼りにしていたから、計画を大幅に変更しなくてはならないか……

鎮守府への帰り道、僕は白露姉さんを、夕立は川内さんを、春雨は神通さんを曳航しながら進んで行く。いつも夜は元気な川内さんも

流石に疲れたのか今日は静かだし、神通さんも暗い雰囲気だし、春雨も戦闘が終わった後はなんだか暗い雰囲気をしていたから、少し気になってしまう。春雨の判断のお陰で誰も轟沈しなくて済んだと思うと、今日一番の活躍は春雨だと思っただけだなあ。

「うう……時雨え……敵の旗艦を倒したのはお姉ちゃんだからねえ……お姉ちゃんがいつちばんなんだから……」

「はいはい、分かっているから……」

白露姉さんはかなりダメージを負っていた敵の旗艦である重巡り級eliteに止めを刺した。しかし重巡り級eliteが最後の意地で撃った砲弾が直撃してしまい、相討ちで大破してしまった……その後慌てて僕と春雨で救援に向かい、姉さんを大破させられた事に怒った夕立が縦横無尽に暴れ回ったものだ。撃破数だけで言えば間違いないが夕立が一番だろう。夕立もかなり暴れ回って疲れたようなので口数が少なくなっている。だから今喋っているのは僕と姉さんくらいだ。大破してもなおこれだけ喋れるのだから、心配はいらないかも知れないね。

「帰ったらお風呂入って……提督にいつちばん褒めて貰って、甘いものを貰うんだから……」

「そうだね、僕達頑張ったからきつと提督も褒めてくれるよ。」

僕も皆のフォロワーを頑張ったから褒めてくれるかな？敵艦の撃破みたいな派手な戦果では無いけれど……提督は僕達を無駄に沈めるつもりは無いっていつも口酸っぱく言っているから、皆が生きて帰れるように頑張っているのも認めてくれそうなんだけどなあ。

「それとあれだね……たぶん今回は提督が撫でてくれる時間が短かったから被弾してしまったと思うんだよ……だから今度はもつと撫でて貰ってから出撃するんだ……」

「うくん？それ本当に関係あるのかな？」

確かに提督に頭を撫でられるのはなんだかちよつと嬉しいけれど、それだけで勝てるようになるものなんだろうか？被弾した責任を提督に押し付けるのは流石にどうかと思うけど……

「いや、ほら、なんか提督に撫でられるとなんだか頑張ろうって気にな

るでしょ？あんなに優しくされる事なんて無かったし・・・」  
「うん・・・そうだね・・・それはちよつと分かるかな？」  
「やっぱり時雨も嬉しいんじゃない・・・」  
「それは・・・優しくされて嬉しくないわけないよ。」  
「なら早く鎮守府に帰ろう？時雨え・・・全速前進だあ・・・」  
「はあ・・・無茶言わないでよ・・・気持ちは分かるけど・・・」

## 92話（神通会話）

川内達を撤退させてから約1時間後、資材溜まりを警戒させていた天龍達の元に敵艦隊が到着した。編成は軽巡ホ級1、駆逐イ級3だ。天龍達は一戦終えたばかりではあったが、資材溜まりにあつた資材で補給も済ませ、戦力差も大きかったのではほぼ無傷で仕留める事が出来た。この構成だと偵察部隊だとは思うのだが・・・天龍達の話では普通に攻撃を仕掛けて来たとの事。夜戦で不利な状況だと気が付いたならば、すぐに撤退すれば被害は少なくなるはずだが・・・集積地棲姫の指揮下の部隊だとしても、軽巡ホ級では戦術を理解する知能が足りないという事だろうか？気掛かりではあるがこれ以上考察するには情報が足りないので仕方ないか・・・

天龍達にも撤退の指示を出し、球磨達も川内達と無事に合流してたとの連絡もあった。あれからしばらくは資材溜まりを迂回した艦隊が襲って来るのではないかと警戒していたのだが・・・どうやら杞憂で済みそうだ。

「提督、そろそろ川内さん達と球磨さん達が帰還します。」

「分かった、迎えに行こう。」

出撃港で待っていると負傷した者達を球磨達が支えながらやってきた。やはり中破や大破となると艤装の損傷も激しく、服装もかなりボロボロの状態だ。

「あ、提督・・・ただいま。ちよつと派手にやられちゃった。ごめんなさい。」

少し落ち込んだ雰囲気の中、川内がすぐに謝ってくる。まだ夜で川内が一番活発な時間だが、やはりダメージが大きいので元気が無いようだ。

「いや、元々無傷で勝てるような甘い相手では無いと考えていたから気にするな。こちらには轟沈した者は居らず、敵艦隊は殲滅したのだから十分な戦果だ。皆良く頑張ってくれた。とりあえず入渠してくると良い。川内と白露は高速修復材を使うように。それと入渠を終

えたら川内は改めて報告に来てくれ。」

「はぁーい。流石にへとへとだよ・・・夜はまだまだこれからつてのにさぁ・・・じゃあ球磨、入渠ドックまでお願い・・・」

「川内しつかりするクマ!!傷は浅・・・くはないけど、とにかくしつかりするクマ!!」

川内は球磨に肩を貸して貰って、引き摺られるように入渠ドックへと運ばれて行く。白露型姉妹がこちらに近づいて来ようとしていたが、それより先に神通が自分の前に来て頭を深々と下げた。

「申し訳づぎいませぬ・・・今回艦隊が損傷を受けてしまったのは私の責任です・・・処罰は私が受けますので・・・その・・・姉さんは責めないで頂けませんか?」

深々と頭を下げた神通が謝罪と同時に川内を庇おうとしてきた・・・そしてその背後で白露型姉妹が気まずい雰囲気を感じて、吹雪達と共に入渠ドックの方へと退散していった。この場に残ったのは私と神通と大淀だけだ。

「はぁ・・・話を聞いていなかったのか? 私は今回の戦いを十分な戦果と評したはずだ。誰も川内を罰するとは言っていない。」

「そう・・・ですか・・・しかし姉さんはそれで良いのですが、私を罰を受けるべきです。私が先走って前に出てしまい被弾して、動きが鈍った私を庇って姉さんは敵の魚雷の直撃を受けてしまいました。それが無ければ姉さんが被弾するような事はなく、もっと損害を抑える事が出来たはず・・・」

「ふむ・・・先走って前に出たのは川内の指示を無視したもののなのか?」  
「その・・・事前の打ち合わせで北上さん達の雷撃の後に、私が島風さんと雪風さんを連れて前に出るという作戦は姉さんが決めていた事です。けれど私が功を焦って早く前に出過ぎた為に、被弾してしまいました。ですので責任は全て私にあります・・・」

なるほど・・・功を焦っていたという部分は気になるが、今回の問題は連携が上手くいかなかったと考えるべきだろうか?

「ふむ、神通は何か勘違いをしているようだ。」

「勘違い・・・ですか?」



「先程から神通は責任は全て自分にあると言っているが、お前達の行動に責任を持つべきは上官である私だ。軍規や私の命令に反すれば懲罰も与えるが、今回はそれには当てはまらないと思う。連携の甘さが原因ならば、この事を教訓にして次回に生かせば良い。」

「ですが!!それは私が功を焦ってしまったのが原因です!!」

「だがそんな精神状態の神通を出撃させたのは私だ。そこに関してはきちんと話をしておくべきだったな。」

「そんな・・・」

罰を受けるつもりだったらしい神通はどうして良いか分からなくなってしまうたようで、どうにか言葉を探そうとしているようだが、なかなか見付からないようだ。

「では、何故功を焦ってしまったのか、理由を聞かせて貰えるか?話しくいならば大淀には席を外させるか?」

「・・・では私は執務室でお待ちしておりますので・・・もし、何かあれば神通さんに通信を入れます。」

「分かった。」

戸惑っている神通を見て大淀は席を外してくれたようだ。神通から少し怯えるような雰囲気を感じたが、少し呼吸を落ち着けて自分に視線を向けてきた。

「では改めて聞くが、なぜ今回の戦いで功を焦ったのだ?」

「それは・・・私が姉さんに嫉妬していたからだと思います・・・」

「嫉妬か・・・」

嫉妬か・・・人間であれば誰でも持つていそうなありきたりな感情だが、艦娘達でもそういう感情を抱くものなのだ。

「はい・・・私はこの国を護るために精一杯の努力をしていたつもりです。演習も全力で取り組みましたし、出撃の機会があれば任務の遂行に全力を尽くしました。しかし私は以前の提督からは不要だと判断されて売られてしまいました・・・艦娘としての価値は無く、その・・・男性のお相手をするしか価値が無いと烙印を押されました。それがただただ悔しくて・・・」

「しかしそれは前任者の大森提督がまともな判断が出来ない無能だっ

たからだろうか？何故川内への嫉妬に繋がるのだ？」

「確かに大森提督に問題があったのかも知れませんが。しかしそれでも姉さんは夜戦の能力を認められて、この鎮守府で活躍していました。それは妹として誇らしい気持ちもありますが・・・私だって艦娘として必要とされたかった!!誇りを持って国を護るために戦いたかった!!私がお役に立てると新しい提督に証明したかった!!ですが結果は姉さんの足を引っ張るだけのお荷物となってしまいました・・・」

そう言っつて神通は俯いてしまったが・・・嫉妬と呼ぶにはずいぶんと可愛いものだ。前任者の元でも活躍する川内に嫉妬はしているようだが、それを理由に奮起して空回りしただけだ。これが人間だったら嫌がらせや敵対派閥を作るなど、もつと陰湿な事をしているだろう。

「とりあえず神通の気持ちは分かった。ならば神通がやるべき事は今回の件を反省し、次の機会に生かす事だ。」

「こんな醜い感情を持った私に・・・こんな醜態をさらしてしまった私にも・・・また機会を下さると言うのですか？」

「はあ・・・この程度の話で醜いなどと・・・少々潔癖過ぎるのではないか？人間の醜さを見てきた私には理解出来んな。それにたった一度の失敗で切り捨てるなど、指揮官として無能と言わざるをえない。」

「そう・・・ですか・・・」

「それと気が付いていないようだが、神通はこの鎮守府で一つ功績を上げているのだぞ？」

そう伝えると神通は怪訝な顔をする。まあ、この件に関しては自覚は無いはずだから当然か。

「功績・・・ですか？確かに今回の戦闘で敵艦隊に多少は損害を与えましたが・・・功績と呼べるほどのものではありません・・・」

「ああ、その件では無い。神通の功績は・・・」

## 93話

「神通が上げた功績は、他の艦娘達を奮起させた事だ。」

「え？・・・どういう事ですか？」

真面目な顔で提督が語る内容は、私には全く心当たりがないものでした。

「神通が出撃した後の話だが、五十鈴が私の所に来て、神通が出撃したのならば自分も出撃したいと言って来てな。それをきっかけに球磨・高雄・摩耶も同様に作戦に参加する意思を示した。これは神通の行動がもたらした成果だろう。」

「いえ・・・そんな・・・私はただ姉さんに負けたくないと思地を張っただけで・・・褒められるような事はしていないです・・・」

「その意地を張ったから五十鈴が張り合っただけではないか？同じ境遇だった神通が復帰するために努力をし、戦線への復帰を認められた事が他の艦娘達に影響を与えたのだ。理由が意地だろうがなんだろうが、その努力は認められるべきものだと思地は考えるか？」

「どうなのでしょう？私の努力を評価して下さいるのは嬉しいですが、本当に私の行動が他の方達に影響を与えたのでしょうか？」

「ありがとうございます。しかし私が与えた影響など微々たるものだと思います。私が居なくても五十鈴さん達は出撃しようとしたと思います。私が出撃した事を聞いてすぐに自分も出られると言ったのであれば、聞いた時には既に出撃出来るような体調のはずです。それを私の功績とは呼べないと思地います。」

「ふむ、もちろん五十鈴達が努力をした事は理解している。ただ少なからず神通の行動が彼女達に影響を与えたものだとも思う。他の者達に良い影響を与える者は、上に立つ人間としては重要な人材なのだ。」

「そう・・・ですか・・・」

「ここまで言われてしまったのならば、あまり否定し過ぎると提督のお考えを否定する事になってしまい、不興を買ってしまうかも知れません。まだこんな私でも提督は期待して下さいるのであれば、期

待に応えられるように努力すべきですね。

「今回は連携のミスで損害を出してしまったようだが、今回の件は教訓として次の機会に生かして欲しい。成長出来る事は通常の兵器には無い艦娘の強みだ。だからもつと強くなれ。以上だ。まずはゆっくりと入渠して怪我を治し、疲れをとって来ると良い。ああ、それと川内ときちんと話をしておくべきだな。」

「・・・そう・・・ですね。姉さんにはきちんと謝らないといけません・・・」  
「謝るだけではなくて、きちんと自分の気持ちを聞いて貰え。せつかくの姉妹艦なのだから、わだかまりが残るような事はするべきではないだろうと思うのだが?」

「私の気持ち・・・ですか。」

私が姉さんに対して抱いている劣等感を、よりにもよって姉さんに話せと言うのだろうか? 私の醜い姿を姉さんに・・・

「ふむ、姉妹艦であったとしても言えないか?」

「いえ・・・これは私が向き合わなくてはならない事なのですな・・・」  
「私から言わせれば嫉妬なんてものは人間としては持つていて当たり前前感情だな。それにお互いに認識の違いもありそうだし、ゆっくりと話をしたほうが良いと思うが?」

「認識の違いですか?」

「川内から聞いた話だと、川内は神通が無事に生きていた事を知っていたようだぞ?」

「そうなんですか!？」

なぜ姉さんがその事を!?他の艦娘の人達は知らないはずなのに!？」

「まあ、何をやらされていたかは知らなかったようだがな。川内は本気で神通達が極秘任務をしていると思っていたみたいだぞ。ずいぶんと簡単に騙されてたとは思うが・・・」

「そうだったのですか・・・」

言われてみればせっかく再び会えたのに、姉さんときちんと話をしていませんでしたね・・・私が帰って来た時に迎えてくれなかった事を根に持ってしまった、ずっと姉さんの話を聞かずにキツイ態度を取ってしまったていました・・・

「ふむ、話を切り出すのが難しいのであれば、私が話をする場を用意しても構わないが?」

「いえ、これは私が向き合わなくてはならない事ですから・・・きちんと私が話をします。」

「分かった。ならば私の話は終わりだ。まずは入渠して怪我を治して来ると良い。」

「はい、それでは失礼します。」

敬礼をしてから去って行く神通を見送って、一人で大きなため息を吐く。やはり人間関係の問題は苦手だ。損得勘定や敵対する相手なら慣れたものだが、仲を取り持つなど・・・本当にあれで上手く出来ていたのだろうか?だが提督として上に立つのであれば、こういう技能も身に付ける必要があるのだろうか・・・先が思いやられる。

「お話は終わったかしら?」

少し気を抜いてしまっていたようで、声がかげられるまで人の接近に気が付かなかったか。声がしたほうを見ると、そこには春雨が立っていた。見た目はいつも通りだが、いつもとは少し雰囲気が違うし、話し方も違うと言うことは・・・

「悪雨か?」

「あら?分かってくれたのね♪」

「話し方が違うからな。それで、何か話があるようだな。ならば先に大淀に連絡してくれるか?いざと言うときに連絡がつかないのは困る。」

「はあ〜い。・・・大丈夫みたいよ。あ、ちゃんと春雨として連絡したから安心してね♪」

「ああ、助かる。それで話はなんだ?」

そう尋ねると悪雨は少し微笑んで、少しずつ近づいてくる。

「そ・の・ま・え・に♪」

自分のすぐ近くまで近寄って来た春雨が笑みを深くする。そして・・・そっと抱き付いてきた。

## 94話（悪雨会話）

「いきなりなんの真似だ？」

突然に想定外の行動をしだした悪雨の意図が分からない。何かしら話があると思ったら、急に抱き付いてくるとは……

「そんなに邪険にしないでくれるかしら？これも必要な事なのよ？」

「はあ……それで？何があった？」

そう尋ねると悪雨はしばらく躊躇うみたいに俯いて沈黙していたが、俯いたままようやく口を開いた。

「声が聞こえたの。」

「声？」

「ええ、深海棲艦の声よ。」

「先程の戦闘中に聞こえたのか？」

「そうよ。深海棲艦になりかけてから一応聞こえてはいたのよ。ただしノイズ混じりの雑音みたいな感じで全く聞き取れなかったの。それがさっきの戦闘の途中で急にはっきり聞こえたの……」

深海棲艦の声か……深海棲艦はこちらにとっては理解不能な化け物だが、連中は戦略的な行動がとれるのだから、通信で意志疎通するくらいは出来て当然だが……それを悪雨も受信したと言うことか？

「……それで、連中はなんと言っていた？」

「沈めろ、沈めろって何度も言ってたわ。あと手負いの奴を狙え、仲間の仇を討てって……だから私は川内さん達が危ないと思って、天龍さんに援護に行くように提案したの。何も知らないはずの姉さん達も協力してくれたから、すぐに天龍さんを説得することが出来たのよ。」

「なるほど。そのお陰で川内達は轟沈する事無く帰還出来たのか。敵の通信を傍受出来るとはかなり有能な能力だな。そしておそらく深海棲艦になりかけた悪雨だけの能力なのだろう。ただ能力を使う条件は分かるのか？作戦に組み込むならば不確定要素は出来るだけ排除したい。」

「はあ……やっぱり提督はそう言うわよね。ええ、分かっていたわ……」

悪雨は深々とため息を吐いて、呆れたような雰囲気だ。しかしそれでも離れようとはしないのだな。

「何かデメリットがあるのか？」

「・・・怖かったのよ。」

「はあ・・・」

「だから怖かったのよ!!頭の中がぐちゃぐちゃになって!!自分が何者なのか分からなくなりそう!!深海棲艦側に引っ張られそうだったのよ!!」

つまり意図していなくても深海棲艦側の力を使ってしまった為に、深海棲艦化が進んだという事だろうか?それにしても以前のように髪の色が白くなったりはしていないようだが・・・

「そうか・・・有用な能力だが悪雨が深海棲艦化するのは困るな。」

「それが分かっているならちゃんと繋ぎ止めて欲しいわ。私は春雨で艦娘でこの鎮守府が・・・姉さん達と提督の居る場所が私の帰るべき場所なんだって、そうすればきつと深海棲艦になりかけても戻って来れるから・・・」

そう言つてより強く抱き付いてくる悪雨を見ると、以前悪雨が出てきた時の事を思い出す。確かあの時も抱き付いて来て、頭を撫でていたら落ち着いたのだったな。とりあえず頭を撫で始めると、一瞬だけビクツと反応したが少し落ち着いてきたのか、抱き付いてくる腕の力が弱まっていく。

「少しは落ち着いたか？」

「ええ、でももう少しだけこのままいさせて欲しいわね。代わりに良い情報を教えてあげる。」

「ほう?なんの話だ？」

「深海棲艦の本能の話よ。深海棲艦が攻撃する時に優先順位があるのは知っているかしら？」

「ああ、士官学校でも習ったが、一番が鎮守府で次に妨害してくる艦娘、そして市街地の順だったか?あとは人間以外の動物は狙わないってところか？」

まあ、これはあくまでも経験則を元にした目安であって、必ずこの

通りに動く訳ではない。日本各地に鎮守府が出来る以前は、鎮守府が無い人口の多い地域を何度も襲撃されていたので、深海棲艦にとつて邪魔な鎮守府が近くにあれば襲う程度のものであるというのが一般的な認識だ。それに動物を狙わないという話も狙わないだけであって、人間を狙った時の巻き添えに関しては一切考慮してないようだ。

「ええ、だいたいそれで合ってるけど、本当は少しだけ違うのよ。」  
「どこが違うんだ？」

「深海棲艦が一番最初に狙うのは提督よ。鎮守府が一番最初に狙われるのは、そこに提督が居るからよ。」

「確かに敵の指揮官を狙うのは有効な戦術だ。だが深海棲艦がどうやって提督の居場所を見つけるのだ？」

「えつと・・・どうやって説明したら良いのか分からないのだけど・・・その・・・人間って暖かいのよ。そして提督は他の人間と比べて格段に暖かいの。」

「暖かい？深海棲艦は温度で判断しているのだろうか？いや、だがそれなら夜の暗闇でも、艦装を背負っている艦娘の動きを把握出来るはずだ。」

「ああもう!!だから実際の温度じゃなくて感覚的な話なの!!なんと言うか、本能に訴えかけて来るみたいな奴!!それと艦娘からはそういうの感じないから!!」

うーむ、全く理解は出来ないが、深海棲艦の事で理解出来る事のほうが少ないのだ。これは深海棲艦にはそういう事を本能で感じられるとして、話を進めたほうが良いか。

「分かった、とりあえず深海棲艦は人間や提督の居場所を察する事が出来るのだな？」

「ええ、そうよ。ついでに言えば、この感覚は普通の艦娘も持ってるの。まあ、大森提督の時はそこまで感じなかったから、艦娘は深海棲艦ほど敏感に感じて無いと思うけど・・・」

「なるほど、なら悪雨は私の存在を暖かく感じているのか？」

「ええ、それはもう凄く感じてるわよ。そしてその暖かさに悪感情を抱く深海棲艦の本能と、暖かさを心地よいと感じる艦娘の本能がある



の。だからこうやって暖かさに触れて、提督が私に優しくしてくれたら、艦娘の本能のほうが強くなるの。そうすれば私は艦娘でいられると思うの。だから最初に言ったでしょ。これは必要な事だって。」

なるほど、ようやく悪雨の行動が理解出来た。ようするに今回の戦闘で原因は不明だが、深海棲艦に近づいてしまった。だから艦娘として生きたい悪雨が提督である私を使って、深海棲艦化の治療をしているという事だな。

「なるほど。これはかなり重要な情報だな。これで深海棲艦の動きが少しだけ理解出来て、戦闘を有利に進められるかも知れない。」

「そう・・・」

ん？先程まで少しだけ機嫌が良さそうだった悪雨の雰囲気が変わり変わる。怒っている訳ではないようだが・・・

「ねえ、提督・・・」

「なんだ？」

「正義って何かしら？」

「は？」

「深海棲艦の会話が聞こえた時に、仲間の仇を討ってって言ったの。それって深海棲艦にも仲間意識があって、仲間の為に戦えるってこと。それって正しい事じゃない？今までは深海棲艦は悪で私達が正義だと思ってた。少なくとも前の提督はそう言ってたわ。そこに關して提督はどう考えているのかを知りたくて・・・」

なるほど。深海棲艦の声を聞いてしまったが故の悩みか。まあ、分からなくはないが・・・私の答えは参考になるようなものだろうか？

「はあ・・・正義か・・・私もこの国の軍人だから大本營の奴等が掲げる正義つてもものを知ってはいるのだが・・・今更そんなものが知りた  
い訳ではないのだろうか?」

「ええ、そうね。それくらいなら私だって知っているもの。知りた  
いのはあくまでも提督がどう考えているかよ。」

自分はずつと抱き付いていた悪雨がそつと離れて、真剣な目でこち  
らを見定めようとしている。誤魔化しが通用するとは思えないか・・・  
「始めに言っておくが、悪雨が納得出来るような答えは持っていない。  
それでも聞きたいか?」

「ええ、知りたいのは私達が命を預けている提督の考えよ。だからそ  
んなに焦らさないで教えてくれないかしら?」

「分かった・・・そもそも私は正義という言葉が嫌いだ。あんなものは  
ただの言い訳に過ぎないからだ。」

「・・・どういうことかしら?」

「正義だ悪だと口にするような奴は、誰かを攻撃する為に自分と周囲  
に言い訳をしているだけだと思っている。あいつは悪だから攻撃す  
る自分は正しいので、暴力に訴えようが権力で潰そうが自分は悪くな  
いと。そこにあるのは結局は自分の都合があるだけに  
も関わらずだ。そして声高々に正義を叫べば、大概の人間はそれに同調してしま  
うものだ。」

「その・・・ずいぶんと過激な考え方ね。」

悪雨もかなり困惑しているようだが、私の持論を語れと言ったのは  
悪雨だ。

「ああ、そうだな。だが正義だなんてそんなものだ。私の兄は提督  
だった。兄が愛していた艦娘が深海棲艦化してしまっ  
てからは、兄は深海棲艦化してしまった艦娘を救おうと、熱心に研究をしていたの  
だ。そんな愛する者を救おうとしていた兄は軍の上層部の奴等から  
処刑されたのだ!!」

「そ、そんな事って・・・」

「軍の上層部の奴等が言うには、国を守る英雄である艦娘を深海棲艦と同一視し貶めることで、国に混乱を招こうとする大罪人との事だ。これがいづらが言い張った正義だ!!本当は艦娘を消耗品扱いしていた奴等が、兄の研究を邪魔だと感じただけなのに!!何が正義だ!?そこにあるのはあいつらの都合だけだ!!そんな正義なんて言い訳を私は絶対に認めない!!」

「ちよ、ちよつと、提督!!落ち着いて!!」

悪雨が慌てて自分に落ち着くようにと、少し涙目で言ってくる。つい感情的になってしまったようだ・・・悪雨に怒鳴ったところでどうにもならない話なのに、つい熱くなってしまった・・・

「すまない・・・少し感情的になりすぎた。」

「いえ・・・提督の考えが知りたいと言ったのは私だから気にしないで。普段冷静な提督がここまで感情的になるとは思ってたから、少し驚いただけよ・・・」

「普段は軍人として自制しているのだがな。悪いがこの話は誰にも言わないで欲しい。この話がどこからか漏れて、上層部の奴等に嗅ぎ付けられては困るからな。」

「ええ、約束するわ。それで・・・もうひとつだけ質問して良いかしら?」

「ああ、なんだ?」

「今の話を聞いた上で聞くけれど、提督はなんの為に戦うの?私が言うのも変な話だけど、なんだか深海棲艦より人間を恨んでみたいに感じたわよ?それなのにどうして人間を守る為に深海棲艦と戦っているのかしら?」

深海棲艦より人間を恨んでるか・・・

「勘違いをしているようだが、私が恨んでいるのは軍の上層部であって、人間を恨んでいる訳ではない。そして提督となったからには、兄が守ろうとしたこの国を守りたいと思っている。それに私が生きていく環境を守る必要もある。ようは動物が縄張りを守るのと同じだな。だから邪魔する者は深海棲艦だろうが人間だろうが関係無く排除するつもりだ。」

そう告げると悪雨はしばらく目を閉じて、言葉を噛み締めるように沈黙する。そして再びこちらを見た時には、覚悟を決めた目をしていった。

「分かったわ。なら私も姉さん達と提督が居るこの鎮守府を、居心地の良いこの場所を守る為に戦うわ。だからもう迷わない。春雨として、悪雨として、私の持ち得る全てを使って私の居場所を守るわ。」

「ああ、それで良い。」

「だから……この居心地の良い場所を壊したりしないでね？もしそんな事したら……提督が相手でも戦うから。」

そう言つて深い笑みを浮かべる悪雨はなかなかの迫力だな。今の姿は春雨なのに普段の春雨のおどおどした雰囲気は一切なく、底知れぬ威圧感を感じる。

「ふふつ、肝に銘じておこう。では今後も宜しく頼む。」

「ええ、こちらこそ姉妹共々宜しくお願いするわね。じゃあそろそろ私は行くわね。もうすぐ天龍さん達も帰ってくるはずだし、そろそろ姉さん達が入渠を終える頃なもの。提督と二人きりの所を姉さん達に嗅ぎ付けられたら、絶対にズルいつて騒ぎ出すと思うし。」

「そうだな、白露が私が一番だと騒ぎ出すのが目に浮かぶ。では大淀にここでそのまま天龍達の帰りを迎えるから、こちらに来るように伝えてくれるか？」

「ええ……すぐに来るそうよ。じゃあ私はこれで失礼するわね。」

「ああ、明日に備えてゆっくりしてくれ。」

「はあ〜い。んっ……あ、あの、お話を聞いて下さってありがとうございます。ございました。今後とも宜しく願います、はい。」

急に雰囲気が変わったかと思うと、ペコリとお辞儀をして悪雨……いや、春雨は小走りで行った。悪雨も春雨の一部だという話だが、あそこまで性格が変わると別人のように思えるのだが、今の対応を見ると悪雨が表に出ている時も春雨は話を聞いているようだな。同一人物だから記憶を共有しているのか？春雨と悪雨にはまだまだ謎が多いな……

## 96話（夜戦報告）

大淀と共に天龍達を待っていると、ちょうど日付が変わる頃に天龍達は戻って来た。天龍と島風は多少の損傷があるが、それ以外の者に目立った損傷はなく、旗艦の天龍を筆頭に良い顔をしていた。

「おう提督、今帰ったぜ。」

「ああ、連戦お疲れ様。全員無事なようだなによりだ。」

「あー、今回はこつちもかなり損害受けたんだけどよ、そこはおとがめ無しか？」

「相手の戦力を考えれば、無傷では済まない事は覚悟していたからな。轟沈者が出ずに敵を殲滅出来たのであれば十分な戦果だ。後続の敵艦隊もきつちり仕留めてくれたようだしな。」

「たりめえだろ？あの程度の敵に遅れは取らねえよ。むしろあんな戦力差で攻めて来るなんて自殺行為だろ？勝つつもりがあるのかって話だぜ。」

ん？勝つつもりがない・・・いや、確かにあれは偵察部隊のはずだから、勝つつもりはないはずだが・・・偵察部隊？規模としては偵察部隊のはずだが本当にそうなのか？本当に別の意味合いはないのか？

「おい提督、急に黙り込んでどうした？なんかあつたのか？」

「ああ、いや、済まない。少し考え事をしていただけだ。では報告は明日で構わないから、入渠を済ませて早めに休んでくれ。明日も油断は出来ないからな。」

「了解だぜ!!へへっ、なんか提督が来てから深海棲艦の奴等と戦う機会が増えてきたな!!提督がなんか呪われてんじゃねえのか？」

呪われているか・・・正直こんな鎮守府へと配属されて、直後に姫級が近くに居ると発覚したことを考えると、存外呪いつても笑えないかも知れないな。だがしかし起こった問題の半分以上は人災なのを考えると、呪いのほうが冤罪だと叫びそうだ。

「さあな？戦うのが怖いのなら後方勤務にしてやろうか？」

「おいおい冗談キツイぜ提督!!この天龍様がビビる訳ねえだろ？この

調子でガンガン戦わせろって話だぜ!!」

「ふふっ、今後も期待している。だから今は休んで次に備えておけ。」  
「おうよ!!」

そう言つて拳を付き出してくる天龍に拳を合わせて送り出す。本当に天龍はこういう男らしい仕草を好むのだな。そろそろと天龍について行こうとする艦娘達を見てふと思ひ出す。

「ああ、そうだ、北上。」

「ん〜?なあに提督?」

のんびりと振り返った北上と、その隣で鬼のように睨んでくる大井。いや、そこまで警戒されるような話ではないのだが・・・  
「川内と神通がやられた後に、とっさに撤退の判断と指揮をしてくれたそうだな。おかげで川内達を沈めずに済んだ。良くやってくれた。」

「いや〜そりや当然の事だつて。仲間が沈むのは嫌だし、それにいつも提督が口酸っぱく言ってるじゃん、私達を無駄に沈める気は無いつてさ。だから無理しないようにしたただけだつて。」

そう言つて北上は謙遜するが、この判断が出来た有能さを理解出来ていないようだ。前任者のせいでブラック鎮守府の思考に染まっている艦娘が多い現状で、即座に無理をしない判断が出来た事は大きな意味を持つ。

「だが私の意志に合った判断を下せるのは非常に良い事だ。戦闘が始まると鎮守府とのやり取りは非常に難しくなるものだから、現場での判断力を磨いて貰う必要がある。今後も期待しているから宜しく頼むぞ。」

「ふふん、まあ、そう言う事ならスーパー北上様に期待して貰おうかなあ。提督に頼られるのは悪くない気分だしさあ♪」

北上はどや顔しながらも若干照れた様子ではにかんでいる。その横顔をうっとりしながら眺めている大井からは、少し危ない気配を感じてしまうが・・・まあ、険悪ではないのだから気にする必要はないか。

「やっぱり北上さんは素敵ですね♪」

「えへへ♪そうだよねえ♪まあ、提督もこう言ってるし、大井つちも一緒に頑張ろうね。」

「はい!!北上さんと一緒ならいつでも頑張れます!!まあ、提督も北上さんの素晴らしさを理解しているようですし・・・少しは話が分かる奴みたいですし。」

北上に蕩けるような笑顔を向けていたかと思うと、急にわりと冷めた目でこちらを見てくる。まさかあの状態から大井が北上から目を離すとは思わなかった。一応大井も多少は私を認めてくれていると判断して良いのだろうか？

「いや、その言い方はちよつと失礼だからダメでしょ？もうちよい仲良くしようよ？」

「はあくい、北上さんがそう言うなら仕方ないですね・・・」

相変わらず北上が大井の手綱を完全に握っているようだな。北上が協力的な奴で本当に助かる。

「話は以上だ。二人ともゆっくり休んでくれ。」

「ほいほい。んじや大井つち、入渠しに行こつか？」

「はい♪二人でゆっくり入渠しましょう♪」

「もおく大井つち、近いつてく本当に甘えん坊だなあく」

とりあえず二人を見送ったので、大淀と二人きりになった。艦娘達とのやり取りの最中も、私から一步下がった位置で待機してくれている姿は、本当に秘書艦が様になっていると思う。

「ではそろそろ執務室に戻るとしよう。今晚は警戒を怠れないが、少し仮眠を取っておきたい。大淀も曙と交代で仮眠を取っておけ。」

「いえ、私は艦娘ですし、徹夜くらいは問題ありませんよ？」

「大淀には明日もしっかり働いて貰う必要があるから、休める時はしっかり休め。明日は横須賀からの応援も到着するし、小森も来る予定になっている。曙の性格だとそういう対応は難しいかも知れないからな。やはり外部との通信等も大淀の方が・・・」

・・・ん？外部との通信？・・・そう言えば長門鎮守府からの通信を絶っていたな・・・

「どうかされましたか？」

「なあ大淀、長門鎮守府からの連絡を無視して良いと言ったが、あの後  
に何か連絡はあったか？」

「そうですね、あの後しばらくは鬼のように通信をかけて来ましたし、  
20時くらいにまた通信がありました。罵詈雑言を言うだけでした  
し夜戦に集中するべきでしたので、提督にはお繋ぎ致しませんでし  
た。」

「そうか・・・なら良いのだが・・・」

だが何か嫌な予感がする。

「20時くらいにかかってくる時に何か言っていなかったか？」

「そうですね・・・お昼過ぎにかかってくる時とほとんど同じような感  
じでしたが？お前達のせいで私の艦隊が壊滅した、軍法会議にかけて  
やるから覚悟しておけ、鶴野提督の不興を買うとどうなるか思い知ら  
せてやると。泣いて土下座で詫びを入れるならこれが最後だぞとか  
も言っていましたか・・・どれも重要な話ではないと判断致しました  
が・・・」

「ああ、それで問題無い。」

そう、問題無いはずなのだが・・・

「最後に自分はもう寝るから、最低限夜間の警備くらいはしておけと  
言い捨てて通信を切られましたか・・・相手にする必要は無いかと。」

「なんだと!？」

「ひっ!!申し訳ございません!!」

「あ、いや、大淀は悪く無いから謝るな。悪いのはあの無能なクズだ。」  
姫級の脅威があるのに呑気に惰眠を貪るとかどういいう神経をして  
やがる!?!しかも夜間の警戒を他所の鎮守府に丸投げしようだなんて、  
度しがたいクズだ。そしてもしも・・・もしもだが、資材溜まりに現  
れていた艦隊が、こちらの注意を引く為の囮であったら？

「予定変更だ。今からすぐに艦隊を編成する。」



## 97話（救援部隊準備）

急遽艦隊の編成をされると言われて、大淀は緊張感を増したようだ。状況を理解してはいないだろうが、こちらの雰囲気からあまり良くない状況だと察したのだろう。

「艦隊の編成との事ですが誰を呼びますか？」

「そうだな・・・主力として金剛姉妹と青葉に吹雪、護衛として球磨・五十鈴・第六駆逐隊だ。全員に召集をかけてくれ。」

「はっ!!すぐに召集致します。」

「それともし、長門鎮守府からの連絡があつたらすぐに繋げてくれ。」  
「分かりました。」

はあ・・・この予測が杞憂で済めば一番楽なのだがな・・・

「提督、総員集合しました。」

「分かった。では今回の目的だが、長門鎮守府方向への救援目的で、長門鎮守府の警戒網の外側付近の索敵及び発見次第その殲滅だ。はつきり言つて今の長門鎮守府はほとんど機能していない。正直に言えば無能の尻拭いなどしたくは無いが、一般市民を守る為には動かなくてはならない状況となつている。」

「長門の連中が助けを求めてるなら仕方ないクマね。さっさと行つてぶっ飛ばしてやるクマ。」

球磨がやれやれ仕方ないなあという雰囲気を出しながらも、若干嬉しそうにしている。おそらくは深海棲艦相手に鬱憤をぶつけられる事を喜んでいるのだろう。

「いや、今回は長門鎮守府からの救援要請があつた訳ではない。そもそも長門鎮守府から交戦しているなどの連絡も無い。」

そう伝えると艦娘達はかなり驚いたようだ。まあ、救援が目的なのに救援要請が出ていないのだから、驚くのも無理は無い。

「どういふことクマ？敵艦隊がいないのに球磨達は救援に向かうクマ？」

「ああ、そうだ。あくまでも私の予測で長門鎮守府に大規模な襲撃が

あると考えているだけだ。そしてそうなったら簡単に長門鎮守府は崩壊するだろう。そういう最悪の事態を防ぐ為に先に行動している。」

「じゃあなに？五十鈴達は深夜にここまで艦隊を編成しておきながら、無駄足になるかも知れないって訳なの!？」

「ああ、むしろ私としては何も無いほうが楽なのだがな。あときちんと言っておくが、何もなかったから無駄足という考えは止めておけ。何も無い事を確認出来たのであれば、それも一つの成果だと私は考えている。まあ、大本営の奴等は結果だけを見て笑うだろうが、そんな奴等は勝手に笑わせておけ。懸念は出来る限り潰しておくのが私のやり方だ。」

そう伝えると五十鈴と球磨は若干げんなりとした雰囲気を漂わせる。この方針に関してはそのうち慣れて貰うしかないな。

「それなら五十鈴達の部隊だけで十分じゃない？偵察して本当に敵艦隊が迫っているなら、改めて金剛さん達を出せば良いじゃない。こんな資材の無駄よ?。」

「五十鈴、その提案は却下だ。今回は火力持ちの金剛達を救援にいつでも行ける状態にする為の行動だ。向こうから連絡があつてから動いては、救援が間に合わずに各個撃破される危険性があるからだ。私は長門鎮守府には戦艦を主力とした部隊が来る事を想定している。」

「はあ・・・分かったわ・・・五十鈴はもう何も言わないけど・・・金剛さん達は何かないの?。」

「Nothing、私達は提督に従うだけネ。」

「はあ、ずいぶん信頼してるのね・・・」

金剛に話を振るも一蹴されてしまい、ますますげんなりする五十鈴だった。金剛の場合は信頼などよりもただ単に命令に従うだけだろうが、それでもきちん命令を聞くので助かる。

「では出撃の準備を整えたら出発してくれ。それと五十鈴は対潜装備で出撃してくれ。」

「ふーん、潜水艦がいるかも知れないってわけね。」

「ああ、私が敵の指揮官であれば、救援に向かう部隊の妨害の為に潜水

艦を使う。救援に急いで向かう部隊であれば、警戒が疎かになりやすい。それに敵艦隊がまだ先だと思いい込んでいるならなおさらだ。だから五十鈴の高い対潜能力でこちらの艦隊を守って欲しい。やれるな？」

「そういう事なら五十鈴に任せておきなさい。」

先程まで少し不機嫌だった五十鈴だが、対潜能力を認められたのが嬉しかったのか、少し機嫌が良くなったようだな。

「ああ、頼んだ。球磨と暁達も金剛達の護衛を頼んだぞ。」

「提督の考える事はよく分からんクマ。でもとりあえず敵を探して殴れば良いクマね。」

「ふふん♪暁はレディだから任せられたお仕事はちゃんと出来るわ♪」

「そうそう、もーっと私に頼っても良いのよ♪」

「いい、電も頑張るのです。」

「了解。司令官、帰ったら何か良いものを期待しているよ?」

球磨は意外と脳筋思考なのだろうか?今回は五十鈴には対潜に専念して貰うために球磨を旗艦としたが、少し心配になってきたな。まあ、金剛達の護衛だから金剛達がしっかりしていれば問題無いか。第六駆逐隊の者達もやる気みたいだから、上手くやって欲しいものだ。

「吹雪も金剛達の護衛を頼むぞ。護衛のメインは球磨達だが、一番近い場所に居るのは吹雪なのだから油断はするなよ?」

「は、はい!!が、頑張ります!!」

吹雪はかなり緊張しているようだな。そして若干震えているようにも見える・・・あ!

「一応釘を刺しておくが、護衛として戦うのとただの盾として沈むのは違うからな?以前の提督がさせていたような戦い方はするなよ?」

「りよ、了解しました!!」

うーん、一応釘を刺したとは言え、少し気になるか・・・まだまだこの辺の意識改革が必要だ。

「金剛、今回は戦場の状況がまだ分かっていない状態だ。だから情報を集めて随時こちらから指示を出す。金剛達が今回の主力だから、戦艦としてそれ相応の戦果を期待している。ただしこんな戦いでお前

達を沈める訳にはいかないから、金剛がこれ以上は危険だと判断した場合はすぐに撤退して良い。分かったか？」

「OK、仕事はきちんとやるから大丈夫ネ。」

まあ、淡白な反応だが問題は無さそうだな。比叡と霧島も真面目な表情だし、榛名もやる気に見える。

「あ、あのく青葉はどうすれば良いのでしょうか？」

おずおずと青葉が尋ねてきた。営倉から出たばかりで若干気まずいのだろうか？

「青葉には探照灯を使って貰う。だから青葉はサポートメインだな。危険な役回りだがしっかりと頼むぞ。」

「了解です！青葉にお任せください!!」

ビシッと敬礼を決めた青葉は、いつもより真剣な表情だ。こうやってオンオフをしつかり切り替えられるのは良い事だ。

「では全員すぐに準備をして出発してくれ。」

「はっ!!」

艦娘達を敬礼で送り出してから、大淀と執務室へと戻る。今夜はまだ眠れそうに無いな。

「それにしても意外でした。」

「何がだ？」

「てつきり長門鎮守府の要請は無視するかと思っていましたの……」  
「まあ、感情的には非常に不本意だが、今回は一般市民にも被害が出るかも知れないからな。手遅れな状況であれば手を出さないが、まだ間に合うのならばなんとかするしかない。いくら長門鎮守府の提督が気に入らないからと言って、私の意地でこの状況を見過ごすのは軍人として問題だからな……能天気な惰眠を貪っているクズに殺意が湧いてくるけどな。」

「なるほど、よく分かりました。私も精一杯サポートさせて頂きます。」

「ああ、頼んだぞ。」

## 98話（救援要請）

大淀を連れて執務室に戻ると、中で待っていた曙がかなり眠たそうにしていた。眠気に抗うように周辺地域の地図を睨んでいたが、時折こくりこくりといきそうになっている。昨夜は夜遅くまで勉強していたようなので無理もない。本当は先に大淀を休ませておこうかと思っていたが、曙を先に休ませるか。

「大淀、曙、今から交代で休憩を取る。大淀には悪いが先に私と曙から休憩させて貰う。私はここに布団を持って来て仮眠を取るから、何か動きがあればすぐに起こしてくれ。曙も少し仮眠を取っておけ。」

「了解しました。お任せ下さい。」

「ちよ、ちよつと提督！私はまだやれるわ!!」

大淀は素直に聞き入れてくれたが、曙はまだやれると意地を張る。かなり疲労しているはずなのだが、それでも食い下がるのは責任感からだろうか？

「まだやれると思ううちに休んでおけ。まだそこまで無理をする状況ではない。いざという時に無理が効かなくなる。」

「そ、それなら先に大淀さんに休んで貰っても良いじゃない!!」

「はあ・・・私の采配に従うのは不満か？」

「つ!!いえ・・・提督の補佐をするのが秘書艦の仕事なのに、邪魔したらダメね・・・私も部屋から布団を持って来るわ・・・」

そう言つて曙は少し落ち込みながらも、時間を無駄にするまいと走つて自室へと戻つていった。曙は秘書艦の仕事についてかなりの責任感・・・と言うよりは強迫観念を抱いていると言うべきだろうか？一応こちらの指示には従ってくれるみたいだが、放っておくとどこまでも無理をしそうで困ったものだ。

私室から布団を持って来て仮眠の準備が整った直後、急に大淀の表情が険しいものとなる。どうやら深海棲艦の連中は自分に仮眠を取らせてはくれないようだな。

「提督!!長門鎮守府より救援要請です!!」

「分かった、代わってくれ。それと金剛達に警戒を強めるように言ってくれ。」

「はい、分かりました。」

喚き散らすクソ野郎の相手をする事に嫌悪感を感じるが、そうも言っていない状況だ・・・少し嫌気を感じながらも大淀から通信機を受け取る。

「代わりました。北九州鎮守府の葛原です。」

「こちら長門鎮守府所属、秘書艦代行しております朝潮です。原田提督に代わり救援の要請を致します。」

「・・・原田提督はどうしたのだ？」

「いえ、その・・・司令官には別にやるべき事があると・・・」

原田提督が艦娘に通信を任せるのは少し意外だったが、無駄に騒ぎ立てる原田提督と話をするよりは、真面目な事で有名な朝潮のほうが話は早いか。

「分かった。状況は？」

「現在鎮守府のリーダーにて敵艦隊を確認、長門鎮守府へと進軍しております。規模は4艦隊、戦艦ル級elite1、戦艦ル級4、他護衛の巡洋艦と駆逐艦が進行中です。現在長門鎮守府では遅滞戦術を仕掛ける予定ですが、独力での防衛は困難であり、至急救援をお願いします。」

「救援要請を出したのはうちだけか？」

「いえ、益田鎮守府にも救援要請を出しております、現在救援部隊を編成中との事です。」

まあ妥当なところか。益田は長門鎮守府から見たらうちとは逆方向にある隣の鎮守府だ。距離もうちから長門鎮守府までとそう変わらない。規模は小さいが深海棲艦が目の前に迫っているので、舞鶴などからでは援軍は間に合わないだろう。

「了承した。現在夜間哨戒の為に長門鎮守府との境界付近に向かわせていた部隊があるので、その部隊をそのまま救援に向かわせる。2艦隊で戦艦が4隻居るので火力は十分なはずだ。」

「迅速な対応ありがとうございます。情報は随時共有させて頂きます」

ので、どうか宜しくお願い致します。」

想定以上に話が早くまとまって助かるな。

「ちなみに長門鎮守府の戦力はどのくらいあるのだ？」

「そ、その、お昼の戦いでかなりの戦力を喪失しております。戦艦は山城さんしか残っておらず。・他は重巡4・軽巡6・駆逐14です。ですが朝潮は秘書艦代行の任を受けましたので、ちょうど24隻4艦隊となります。」

なるほど、人数としては互角だが戦艦の数が圧倒的に足りないな。夜戦なので昼間よりも接近戦となるので、練度次第では戦力差をひっくり返す事も出来るのだが。・期待するだけ無駄だな。こちらの艦隊が合流すれば互角、益田鎮守府の援軍も到着すれば優勢くらいに考えておこう。

「了解した。我々が到着するまで極力損害を出さないように時間を稼いでくれと、原田提督に伝えておいて欲しい。ではまた何かあればすぐに連絡してくれ。」

「・・・は！承知致しました。」

長門鎮守府との通信を終えると、大淀は金剛と連絡を取っているのかぶつぶつと呟いていて、執務室に戻って来ていた曙は状況を紙にまとめていた。

「大淀、金剛達に繋いでくれ。」

「はい、少々お待ち下さい。」

一旦通信機を大淀に渡して、すぐにまた受け取る。

「金剛か？」

「Yes 提督、命令は？」

「大淀から聞いたとは思いますが、急いで長門鎮守府への救援に向かってくれ。五十鈴を先行させて対潜警戒も怠るなよ。」

「OK すぐに向かうネ。」

金剛は話が早くて助かる。

「ねえ、提督、ちよつと良いかしら？」

「・・・五十鈴か？どうした？」

「その・・・さつきは悪かったわね。本当に長門鎮守府への襲撃があつ

て見直したわ。」

「そうか。」

「ええ、だから今度は五十鈴が実力を見せ付ける番よ!!だから五十鈴の活躍を期待して待ってなさい!!」

「ああ、戦果も期待しているが、まずは無事に戻って来るようにな。」

「ふふっ、五十鈴にお任せよ!!」

「どうやら五十鈴もかなりご機嫌なようだな。戦意が高いのは良い事だ。」



## 99話（救援初戦）

とりあえず指示を出し終えたので、状況が変わるまでは待機だな。金剛達を出発させてからわりとすぐに救援要請が来てしまったので、到着までおそらく2時間はかかるだろう。そしてそれは妨害が無くてそれくらいだ。一応航行速度を上げれば時間の短縮は可能だが、戦場についても使い物にならないという事態は避けるべきだ。艦娘達はその特性として、通常の航行速度と戦闘時の航行速度で大きな差がある。通常時は燃費を抑える為と艦装にかかる負荷を減らす為に速度を制限しているのだ。当然戦闘時にはそんな悠長な事は言っていられないので、速度の制限なんて解除する。練度が上がれば航行速度や最大船速も速くなるとは聞くが、今のうちの練度では無理は出来ない。

「提督、そろそろ一度休憩を取られてはいかがですか？先程は休憩が取れませんでしたし。」

大淀がこちらを心配そうな表情で提案してきたのだが・・・状況が動き出した以上はのんびりと寝る余裕は無いか・・・

「そうだな。流石に仮眠を取れる状況では無いから、間宮に夜食を持って来て貰おう。」

「・・・分かりました。すぐに手配します。」

「ついでに何か甘い物を持って来て貰おう、集中力を持続させるには糖分を取っておいたほうが良いからな。大淀と曙も食べておけ。」

「分かりました。お心遣い感謝します。」

大淀は素直にお礼を言って間宮に連絡をしてくれた。ちなみに曙は何かを言いたそうにしていたが、しばらく唸った後にまた周辺海域の地図へと視線を戻していた。そんな気遣いしなくても自分はまだやれると言いたかったのだろうか、先程咎められたので我慢したのだろうか。ただ、若干そわそわしているところを見ると、甘い物が楽しみではあるようだな。

連絡を受けた間宮がすぐにおにぎりを用意してくれたので、手早く

夜食を済ませる。食後に羊羹と緑茶を用意してくれたので、そちらも有り難く頂いた。これでまだまだ集中力は持つだろう。

「提督!!金剛さんから入電です!!五十鈴さんが敵潜水艦3隻を発見、交戦します!!」

本当に潜水艦を送り込んで来たか。本来本能のままに襲い掛かってくるだけの深海棲艦が、ここまで軍事的な動きをするのか・・・姫級の恐ろしさが個体としての能力だけでは無いと言うことが嫌でも実感出来る。

「了解した。球磨達も五十鈴の援護に入れ。大淀は金剛達との通信を担当。曙は長門鎮守府と情報を共有してくれ。」

「分かりました。」

「ええ、すぐにやるわ!!」

だがこれはまだ予測の範囲内だ。きちんと準備をさせていたから対応出来るはずだ。五十鈴の働きに期待だな。

提督からの指示通りにソナーで水中を探っていたら、潜水艦の反応を感知した。提督の話は五十鈴にはなんだか良く分からなかったけど、提督はここまで先を読んで五十鈴に準備させたのね。あいつ結構やるじゃない♪なら次は五十鈴の番よ。提督は五十鈴の対潜能力を買ってくれている。ならブランクがどうのこうのと弱音を吐いている暇はない!!五十鈴はやれるって言って、提督が五十鈴に任せたのだから、あとはきっちりあいつらを仕留めるだけよ!!

「さあ行くわよ!!五十鈴には丸見えよ!!」

「球磨達も援護するクマ!!位置が分かっている潜水艦なんてさっさと潰すクマー!!」

ふふん、球磨もやる気みたいだけど、ここは対潜装備の五十鈴の戦場よ!!一気に仕留めてやるわ!!

「提督、金剛さんから入電です。敵潜水艦部隊の全滅を確認。こちらの損害は一切ありません。」

「良くやった。警戒を怠らずに進撃してくれ。」

「分かりました。それにしても五十鈴さん流石ですね。五十鈴さんが潜水艦2隻を沈めて、球磨さんと響さんでもう1隻沈めたようです。」  
「こちらに損害が無くて、手早く仕留められたのだ。期待以上の働きだ。」

「そうですね。この調子なら・・・提督!!新たな敵艦隊を発見しました!!重巡り級2・軽巡ホ級2・駆逐イ級2です!!」

なるほど、潜水艦で奇襲をかけた直後にこの艦隊が襲い掛かる腹積もりだったか。しかし奇襲があっさり処理されたから、思惑が外れたみたいだな。

「今度は金剛達の出番だ。火力の差で一気に片付けろ!!」

いすーずの活躍で潜水艦は倒したけど、今度は重巡洋艦デース!?とことん私達の邪魔をするつもりみたいネ。でも負けるつもりはNothing!!榛名と一緒に今の提督に歩み寄ると決めたんだから、まずは提督を見極める為にもしっかりと提督の指示で戦いマース!!

「比叡!!榛名!!霧島!!準備はOK?」

「はい!!気合い!!入れて!!いきます!!」

「榛名も大丈夫です!!」

「金剛お姉様、いつでもいけます!!」

「OK!!あおばー、探照灯頼みマース!!」

「はい!!青葉にお任せ!!いきますよ〜」

あおばーのおかげで敵がすっかり見えマース。これなら夜でも問題Nothingネ!!

「撃ちます!!Fire!!」

私の掛け声と共に可愛い妹達も一斉射撃をしてくれマース。流石自慢の妹達デース、息ピッタリ合わせてくれマース。

「金剛お姉様!!仰角1度上方修正!!比叡お姉様は右に2度修正!!榛名は初弾命中なのでそのまま続けて!!」

「OK霧島!!第二射、Fire!!」

霧島の修正のおかげで、さつきよりも敵艦隊に損害を与えたネ!!

「球磨達も行くクマー!!突撃クマー!!球磨について来いクマー!!」

「暁の出番ね!!」

「雷に任せてよ!!」

「いい、電の本気を見るのです!!」

「y p a!!」

Oh!!クマー達も前に出たネ。なら私達の砲撃は次でF i n i s hネ!!

「第三射、F i r e!!」

「提督、金剛さんから入電です。無事に敵艦隊を撃破。こちらに損害無しです。」

「ほう、戦力差があったとは言え無傷で勝利したか。良くやった。では警戒しつつ進撃を続けてくれ。」

「分かりました。」

時間は多少削られてしまったが、無傷で進めるのは助かる。あとは長門鎮守府の連中がどこまで持ちこたえられるかな。

「提督!!長門鎮守府から入電よ!!長門鎮守府に迫っていた敵主力艦隊が、進路を東寄りに変更して、進軍速度を上げたわ!!」

「なんだと!?!」

鎮守府を目の前にして進路を変えただど!?!どういうつもりだ?まさか益田鎮守府からの援軍が来る事を読んで、各個撃破に向かったのか?だが益田鎮守府からの援軍が到着するにはまだ時間がかかるはずだ。深海棲艦達は何を狙っている?!

「とにかくこっちは出来る事をするしかない。金剛達にはそのまま長門鎮守府へと進軍させろ。」

## 100話

さて、金剛達はそのまま進軍させたが、長門鎮守府はどう動くのだろうか？それと援軍にきているはずの益田鎮守府の動きも気になるな。

「曙、長門鎮守府との通信を繋げてくれるか？」

「ええ、分かったわ。・・・はい」

曙が手渡してきた通信機を受け取る。

「代わりました。葛原です。」

「はい、長門鎮守府所属の朝潮です。ご用件はなんでしょうか？」

先程同様に朝潮が対応してくれるようだ。話が早くて助かる。

「敵艦隊の進路が東寄りに変わったと聞いたのだが、長門鎮守府はどう動くつもりだ？」

「その・・・提督からは鎮守府近海を堅守し、出来る限り時間を稼げとのご命令を受けておりますので・・・」

「そうか・・・」

原田提督はとにかく鎮守府を守りきる判断をしたのか・・・確かに鎮守府付近の街はそれなりに復興していて人口も多いが、それ以外の沿岸部の地域はほとんど人は居ないだろう。多少の犠牲を容認してしまえば、軍事施設である長門鎮守府を防衛出来る可能性は上がるはずだ。非情な判断ではあるが責める事も出来ないな。

「益田鎮守府からの援軍はどうなっている？」

「現在戦艦を主力とした3艦隊を編成し、つい先程益田鎮守府を出港したと連絡がありました。」

「なるほど・・・」

戦艦主力でそれだけの艦隊があれば、合流してしまえば戦力差はこちらに大きく傾くはずだ。しかし先程出港したのであれば、妨害を受けなければ長門鎮守府まで2時間半といったところか？こちらはあと1時間半と考えて・・・こちらが到着するまでに、長門鎮守府の連中がどれだけ残っているか次第になるか・・・

「そう言えば住民への避難勧告は済ませているのか？」

「はい、つい先程発令されました。」

「ん？そうか・・・」

つい先程か・・・この状況ならばもう少し早く避難勧告が出てもおかしくはないはずだが？一応避難勧告は提督が直接出せる訳ではなく、まずはその街の市長に連絡をして、市長が判断をして発令するのが一般的だ。なので今回は提督と市長とのやり取りが上手くいかなかったと見るべきか？いや、今はそこを探るよりは深海棲艦の対応のほう的重要だな。

「では引き続きなにかあれば連絡してくれ。」

「はっ!!お任せ下さい!!」

電話越しだが生真面目な朝潮が敬礼をしているのが目に浮かぶ。後は深海棲艦達がどう動くかだな。

長門鎮守府との通信から約30分後、曙の表情が急変した。何か動きがあったな。

「提督!!長門鎮守府から入電!!敵艦隊が沿岸部にて数度砲撃!!砲撃後長門鎮守府へと進路を変えたわ!!」

「そうか・・・被害にあったのはどこだ?」

「えっと・・・旧阿武町付近・・・幸いこの近辺に人の多い場所は無いはずだけど・・・」

本当に深海棲艦達は何がしたかったのだ?鎮守府を襲うつもりなら、なぜ寄り道を・・・!?

「曙!!通信代わってくれ!!」

「え、ええ。」

曙から奪うように通信機を貰う。まさかとは思うが・・・

「葛原だ。」

「はい、どのようなご用件でしょうか?」

「原田提督はどこに居る?」

「っ!!その・・・我々に指示を出した後、執務室を出られてから連絡が取れず・・・」

「あのクソ野郎!!艦隊指揮を放り捨てて逃げやがったな!!」

「「ひっ!!」」

思わず机を叩いて叫んでしまい、大淀と曙と電話越しの朝潮を驚かせてしまった。上に立つ者が八つ当たりとはみつともない姿を晒してしまったか・・・

「はあ・・・すまない。」

しかしこれでようやく辻褄があったな。悪雨が言うには深海棲艦は提督を優先して攻撃するそうだ。だから逃げた原田提督を追って東側に進路がそれたのだ。おそらく隣の益田鎮守府にでも逃げ込もうとしていたのだろう。そして鎮守府が優先的に狙われると思っていたので、そこに艦娘達を残して時間を稼いで逃げようと思ったが、深海棲艦からしてみれば最優先目標の提督が護衛も無しに鎮守府から離れるのだから、当然そつちを狙うに決まっている。

「朝潮、今そちらの指揮系統はどうなっているのだ?」

「え、えっと、総旗艦の山城さんが防衛の指揮をしていて、朝潮が一人で後方支援を担当しております・・・」

「分かった。ならば山城にとにかく時間を稼がせろ。こちらの援軍も急がせる。こちらが到着するまでなんとか生き残ってくれ。」

「はっ!!承知しました。」

「大淀、聞こえたな。金剛達を急がせてくれ。」

「はい、分かりました。」

とは言ったものの、いったいいつまで持ち堪えることが出来るだろうか? 無能だった提督の指揮下で戦っていた艦娘達だ、有能だとは思えない。かと言って指揮権を奪う事も出来ないか・・・艦娘の性質を元にした提督の規定では、提督が死亡もしくは生死不明となった場合、艦娘達は提督不在の鎮守府の所属のまま、新しい提督が着任すればそのまま指揮下に入る。艦娘達の指揮権が喪失するのは、提督の死亡もしくは生死不明となった上で、鎮守府がその機能を喪失した場合となっている。その場合は残された艦娘達は無所属のドロップ艦と同じ扱いとなる。だがもしも長門鎮守府が機能を喪失した場合、それは長門鎮守府所属の艦娘達が敗北し、そのほとんどは沈んでしまっているだろう。

「厄介な話になってしまったな……」

「その……長門鎮守府の原田提督が敵前逃亡したというのは本当でしょうか?」

「それは間違い無いだろう。少なくとも長門鎮守府との連絡が取れないのは確定だ。」

「そう……ですか……」

質問した大淀も横で聞いていた曙も暗い顔をしている。他所の鎮守府の話ではあるが、提督が艦娘達を見捨てたという事実は、受け入れ難いものだろう。本当に反吐が出る。

「提督は……私達を見捨てないでよ……」

「あ、曙さん!？」

曙が小さな声で、しかし確かに見捨てられたくないと言った。大淀も驚いてはいたが、内心は曙と同じ事を考えていたのだろうか? だが見捨てられたくない……か。前任者のやり方に絶望して自分を解体して欲しいと言っていた曙が、そんな事を言えるようになったのかな。

「心配するな。私は提督だ。指揮権を捨てて逃げ去るなんてそんな無様な真似はしない。そんなクソ野郎は提督ではない。」

「……そう。その根拠はなに?」

「私が私であるために必要な誇りだ。はつきり言って他の人間が語る誇りや名誉なんて物には興味が無い。言いたい奴等には勝手に言わせておけば良い。だが私を私自身が許せなくなる事は出来ない。ただそれだけだ。」

「……そう。変な事言っただけ悪かったわね。」

そっぽ向きながら謝る曙に苦笑しつつ、気を引き締めなおす。何はともあれまずは目の前の事に集中するべきだな。



## 101話（救援戦）

「提督、長門鎮守府から入電!!敵艦隊と交戦開始したわ!!」

敵艦隊が進路を変えたとの報告からしばらくして、曙が切羽詰まった様子で報告をしてくる。ついに始まってしまったか・・・やはり金剛達は開戦には間に合わないか・・・後は長門鎮守府がどれだけ粘れるかだな。

「分かった。戦況が入ったらすぐに伝える。」

「分かったわ。」

はあ・・・こんな戦力差ではどうしようもないわね・・・不幸だわ・・・あんな無能な提督の元で働かされたあげく、扶桑姉様も沈んでしまったのに、私に生きる意味なんてあるのかしら？

「山城さん!!敵艦隊が接近!!交戦距離に入ります!!」

「分かったわ。全軍交戦開始!!玉砕覚悟で一隻でも多く沈めなさい!!」

「えっ!?山城さん!?北九州鎮守府からの援軍が来るまで持ちこたえろべきでは!?!」

ああ・・・扶桑姉様・・・扶桑姉様の仇を取れない不甲斐ない山城を許して下さい・・・せめて憎き深海棲艦を一隻でも多く道連れにして、山城も扶桑姉様の元へと参ります・・・

「探照灯持ちは照射開始!!死力を尽くして戦いなさい!!全軍突撃!!」

「・・・提督、かなり不味い状況みたいよ。」

「何があった?」

「長門鎮守府の総旗艦をしていた山城さんが、敵艦隊に玉砕覚悟の総攻撃を仕掛けたわ・・・」

「なんだと!?!」

「敵艦隊にも打撃は与えているけど、こっちはもつと損害を受けてるわ・・・」

くそ!!なぜ援軍を待たない!?!鎮守府を防衛する為にも交戦はやむ

を得ないが、もう少し戦い方があるだろうが!!

「大淀、金剛達と話がしたい。」

「はい・・・どうぞ。」

「金剛か？」

「Yes 次の命令はなんですか？」

「航行速度を落とせ。」

「Why!?何が起きたネ!？」

「長門鎮守府の連中が暴走して、敵艦隊に総攻撃を仕掛けた。このままではこちらが到着する前に壊滅してしまうだろう。だからこのまま全速力で戦場に向かえば、疲労して駆け付けたのに味方が居らず、各個撃破されてしまうだけだ。だから無理な進軍をする必要がなくなった。」

「・・・長門鎮守府の娘達は見殺しですか？」

金剛が思い詰めたように声を絞り出す。先程まではただ淡々と指示に従っていたが、仲間を見殺しにするのは流石に躊躇うか・・・

「救えるものならば救いたい・・・長門鎮守府の連中の暴挙にお前達まで巻き込まれる事は避けなければならぬ。益田鎮守府からの援軍が来るまで時間稼ぎをするしかない。」

「・・・OK それが提督の判断なら従うしかないネ・・・」

「では敵艦隊を捕捉したら距離を取って戦え。相手が全力で追って来るならば、こちらで距離を取って長門鎮守府から引き離せ。」

「OK なんとかやってみます。」

はあ・・・これで各個撃破される最悪の事態は防げただろう。しかしこれで長門鎮守府は終わりだな・・・

「・・・提督、長門鎮守府の朝潮から最後の連絡よ。山城さんを止められず申し訳ございません。長門鎮守府の艦隊は大打撃を受け、鎮守府に敵艦隊が迫っています。これより朝潮も艀装を背負って最後の抵抗に向かいます。御武運を・・・だそうよ。」

「・・・そうか。」

提督が逃げてまともな指揮系統もないのに、最後まで戦いを挑むか・・・本当に生真面目な奴だな・・・

そろそろ金剛達が接敵する頃合いか。今頃長門鎮守府は深海棲艦の攻撃を受けているだろう。

「金剛さんより入電です!!艦娘数名がこちらに向かって来ており、その背後から敵艦隊が迫っています!!敵の数は2艦隊以下で戦艦は確認されていません。」

「すぐに敵艦隊を迎撃しろ!!逃げて来た艦娘を保護するぞ!!」

深海棲艦達は部隊を2つに分けたか。おそらく鎮守府を攻撃する部隊と、逃げた艦娘の追撃と金剛達の足止めだな。わざわざ戦力を分散させたのは、より確実に鎮守府を潰す為だろうか?なにせよこれはチャンスだ。敵艦隊が長門鎮守府の艦隊との戦いでどれほど消耗したかは不明だが、戦力を分散させたのであれば各個撃破も可能だ。

「OK 提督の指示ネ、敵艦隊を迎撃して、あの艦娘達を助けマス!!」

長門鎮守府の娘達は救えませんでしたでしたが、せめて生き残ったあの娘達だけは守りマス!!提督の許可はありマス!!だから今度こそ・・・私の目の前で沈ませはしないデース!!

「あおばーは探照灯!!クマーはあの娘達の救助をお願いします!!私達は敵を倒します!!」

「提督、金剛さんから入電です。敵艦隊の撃破に成功!!逃げて来た艦娘達も無事です!!こちらの損害は暁・雷が中破、金剛・青葉・球磨が小破です。」

「了解した。流石に無傷とはいかないか。だが長門鎮守府の生き残りを救助出来たのは大きい。」

「元長門鎮守府所属の木曾さんが提督にお話があるとの事ですが?」

元・・・か。つまり長門鎮守府はその機能を失ったようだな。

「ああ、代わろう・・・通信代わった、北九州鎮守府の葛原だ。」

「ああ、元長門鎮守府所属の木曾だ。まずは救援感謝する。」

「木曾さん離して下さい!!朝潮はまだ戦えます!!最後まで提督のご命令を遂行します!!」

「ああもう!!うるせえ!!通信してんだから静かにしてろ!!つとすまないな。長門鎮守府は壊滅して、原田提督も連絡が取れず生死不明だ。規定に従って俺と駆逐艦三隻の保護を頼みたい。」

「分かった。そちらの人員と損傷は?」

「俺が中破、朝潮が中破、陽炎と不知火が大破している。」

「了解した。敵艦隊の情報が欲しい。敵の残存戦力はどれくらいだ?」

「えつと……ル級eliteは山城さんが刺し違えていた。あとル級をもう一隻沈めたから、戦艦が残り三隻だな。それ以外についてははっきりとは分からない。」

「そうか……」

戦艦三隻か。一応戦力差ではこちらが上回っているだろうか?しかし負傷者を多く抱えた状態で戦闘をするのは避けたいところだ。もうすぐ益田鎮守府の援軍も着くはずだ。

「司令官!!横から失礼します!!青葉です。敵艦隊が長門鎮守府から海の方へと離れて行くのを発見しました!!」

「そうか……敵艦隊は撤退したか……ならばこちらも撤退する。周辺の警戒は間に合わなかった益田鎮守府の連中に頼むとしよう。金剛に撤退するように伝えてくれ。くれぐれも帰路で油断する事の無いようにと伝えてくれ。」

「はい、分かりました。」

とりあえずこれで今夜の戦いはひとまず終わりだな……。しかし長門鎮守府を守りきれなかったか……。これはまた厄介な事になるな……。それに時計を見ればもうすぐ午前5時か……。夜が明けるまであまり時間も無いな。

「では曙は先に休め。大淀は悪いがもう少しだけ頑張って貰う。」

そう伝えると曙は悔しそうにしていたが、流石に疲れているからか反論はしてこなかった。大淀も疲れてはいるようだが、少し嬉しそうだな。

「お任せ下さい。提督もお休みされますか?」

「いや、最後に一仕事残っている。私室で電話をかけるから、何かあれ

ばすぐに呼んでくれ。」

「分かりました。どちらに連絡をされるのでしょうか？」  
それは……

## 102話（久藤提督交渉）

今回の戦いでうちの鎮守府としては戦鬪に勝利しているが、全体で見れば完全な敗北だ。無能な長門鎮守府の原田提督が盛大に足を引つ張ったのが原因だが、大本営の奴等がこちらに責任を擦り付けてくる可能性がある。特に原田提督が所属していた鶴野提督の陣営は、原田提督に非がなかった事にしたがるのが目に見えている。ならば物凄く面倒ではあるが、対抗手段を用意しなくてはならない。

私室に戻って呉鎮守府へと連絡をすると、呉の秘書艦が出たので久藤提督へと取り次いで貰う。

「おう、呉鎮守府の久藤だ。こんな朝早くに何のようだ？」

「朝早くにすみません。つい先程長門鎮守府が壊滅した件はご存知ですか？」

「ああ、当然だ。長門鎮守府から大本営の方に連絡をすれば、当然俺の耳にも入る。お前のところも救援に向かったが無駄足だったみたいだな。」

4大鎮守府の長であればこれくらいの情報網があるのは当然だな。「そうですね・・・長門鎮守府の原田提督の無能ぶりには辟易としますよ・・・私達は戦鬪には勝利しましたが、全体で見れば大敗ですね。今回の作戦でこちらが得られたのは、長門鎮守府の生き残りを4人保護出来た事だけです。」

「はっはっは、それは本当に無駄足だったな。それで？俺に何のようだ？鎮守府の防衛に手を貸して欲しいのか？それとも資材が欲しいのか？」

「今回は資材を融通して頂けないかと思って連絡させて貰いました。今回想定外の消費がありましたし、横須賀の部隊がうちを補給基地として使う事を考えると心許ないですよ。特に高速修復材が欲しいところですよ。」

「・・・どういうつもりだ？冗談のつもりで聞いたが、本当に資材が欲しいとはな。俺の事は嫌いだから傘下に入らないと言つてたくせに、資材は寄越せと言うつもりか？」

本当はなんとかなるくらいの資材は確保しているが、資材はいくらあっても困る事は無い。それにしても久藤提督は自分が傘下に入らない事をそれなりに根に持っているのか？

「傘下に入るのをお断りしましたが、交渉の余地はあったはずですが？なので今回の件もお願いでなくて交渉です。」

「ほう？では資材を求める見返りに、お前は何を出すんだ？」

「こちらが出せるのは情報です。」

「情報ねえ？俺も情報網くらいは当然構築しているぞ？大本営からだけじゃなくて、全国各地に人をやって情報を集めている。その俺に情報を売るつもりか？」

「ええ、そうです。しかも鮮度が重要な情報ですよ？それこそ早くしないと鶴野提督が揉み消してしまいますから。」

「つまりあのじじいに都合の悪い情報ってわけだな。面白い、それで資材はいくら欲しいんだ？」

「いえ、それは私の情報を聞いてから判断して頂いて結構ですよ？久藤提督がどれくらいこの情報に価値を見出だすかわかりませんから。」

「・・・良いだろう。話せ。」

電話越しだからはつきりとは分からないが、こちらの考えが読めずにかかなり警戒しているようだな。

「まず、長門鎮守府の原田提督が敵前逃亡した件はご存知ですか？」

「ほう？興味深い話だな。証拠はあるのか？」

「証拠に関しては長門鎮守府の艦娘達の証言だけです。」

「むう・・・それだけなら弱いな・・・」

「ええ、これで敵前逃亡した確証は得られましたが、これだけでは鶴野提督に言い逃れされてしまうでしょうね。」

「ふん、勿体振らずに先を言え。時間が無いのだろうか？」

さて、ここからが本番だな。

「今回深海棲艦は長門鎮守府を目指していたにも関わらず、一度進路を東に逸らして、旧阿武町付近に近づいて砲撃をしています。」

「そんな誰も住んで無いような場所にか？」

「ええ、そしてその砲撃の後に長門鎮守府と原田提督の通信が途絶えたらしいのです。これが偶然だと思われませんか？」

これはもちろん嘘だ。本当は長門鎮守府を去ってから一切連絡はなかったらしい。そして私は悪雨から聞いた情報のおかげで、原田提督を襲う為に進路を変えたのだと確信しているが、そんな情報を明かすわけにはいかない。

「ほう・・・つまりその砲撃跡を搜索すれば、原田提督の遺品が見付かるかもしれないという事だな。そんなところで遺品が見付かれればあのじじいでも言い逃れが出来ないわけだ。」

「ええ、理解が早くて助かります。そして急がなければ先に鶴野提督の陣営が動いて、証拠隠滅してしまうかもしれないですし、そこで原田提督が死んだという確証もありません。それでも調べてみる価値があるのでは？」

「なるほど、なるほど。ようやくお前の考えが読めてきたぞ。今回の交渉の本命は俺に搜索をさせたいのだろうか？そして原田提督の罪を糾弾する事でお前への追及を避ける狙いか？」

「はあ・・・そこまで読まれたのであればお手上げですね。ですがせっかく鶴野提督の陣営を削るチャンスですから、当然調査して頂けるのでしょうか？」

「ああ、もちろんだ。良い情報ありがとな。これなら謝礼もしつつかりしてやらねえとなあ。すぐに輸送隊を送ってやる。」

「ありがとうございます。では失礼します。」

「おう、また面白い話があれば言ってい。」

通話を終えてため息を吐く。とりあえずこれで久藤提督が動いてくれるだろう。鶴野提督を相手にするには、久藤提督をぶつけるくらいしか方法が無いからなあ・・・本当は頼りたく無いが、こればかりは仕方ない。あとは久藤提督が証拠を発見してくれるのを祈るだけだ。もしそれがダメならば、長門鎮守府との通信記録を使ってなんとかするしかないのです、かなり厳しい事になってしまいうからなあ・・・さてと、とりあえずやることは済ませたから、執務室で仮眠を取るとするか。もううつすらと明るくなってしまったなあ・・・



103話（6日目朝）

通話を終えて執務室に戻ると、大淀は誰かと通信しているようぶつぶつ呟いていて、曙は部屋の角で布団にくるまって仮眠を取っている。

「あつ、提督、お話はもう宜しいのですか？」

「ああ、そっちは何かあったのか？」

「あ．．．いえ、その．．．とりあえず片付けましたので問題ありませんが．．．」

「いいから隠さずに報告しろ。」

「えつと．．．先程救助した木曾さんと朝潮さんが喧嘩しているようでして．．．金剛さんに二人を引き離して貰ったところです．．．」

「はあ．．．損傷を受けているはずなのに元気な事だな．．．どうせさつき言ってたみたいに朝潮が戦場に戻ると駄々をこねてるのではないか？」

「はい．．．それと木曾さんが原田提督に命をかけて尽くすほどの義理は無いと言ったことでさらに怒ったみたいでして．．．」

確か木曾は普段は気安い感じだが、かなり誇り高い性格だったはずだから、原田提督とは合わなかったのだろう。それに対して朝潮は真面目な優等生といった性格だ。たとえ上官がどんな人間であろうと、誠心誠意尽くしていたのが容易に想像出来る。

「はあ．．．朝潮と通信を繋げてくれ。」

「分かりました。その、ご迷惑をおかけしてしまい申し訳ございません。」

「大淀が謝る必要はない．．．朝潮か？北九州鎮守府の葛原だ。」

「はい、何のご用でしょうか？」

「木曾と喧嘩したと聞いたが？」

「いえ、喧嘩ではありません。木曾さんが前の司令官に対して不敬な事を言うので、注意をしただけです。それに深海棲艦の侵攻に徹底抗戦して、出来る限り足止めしろという命令を無視した事についても抗議しております。」

ああ・・・これだ・・・真面目なのは美德なのだが・・・自分は一切間違った事はしていないと考えているので、本当に悪気は無いのだろうか、正直に言って面倒な奴だ・・・

「あまり、木曾を責めるな。あいつは正しい判断をしている。」

「っ!? な、なぜでしょうか? 我々艦娘は提督の指示に従うべき存在のほうです!!」

「艦娘達が提督の指示に従うように、提督達もまた大本営の定めた規則に従っている。つまりは提督達の指示よりもさらに上の規則があるということだ。今回木曾が原田提督の命令を放棄して金剛達に救助を求めたのは、その規則に従った結果なので責める理由は無い。」

「な、なるほど。そのような規則があるとは、朝潮の勉強不足でしたか・・・」

まあその規則を生真面目に守っている者は少ないだろうがな・・・

「ああ、だから今後は私の艦隊で働いて貰う。良いな?」

「はい!! なんでもご用命下さい!!」

ふむ、やはり原田提督個人に思い入れがあるわけではなく、あくまでも提督が相手だから従っていたようだな。生真面目な朝潮らしいな。

「では最初の命令だが、勉強不足で木曾に抗議してしまった事を謝っておけ。」

「はっ!! それでは失礼致します!!」

なんとかうまくいったようだな。それにしても木曾が原田提督に命をかける義理は無いと言った事については、一切触れてないのだが・・・朝潮は単純だな。

「ありがとうございます。では提督、そろそろ仮眠を取られては如何ですか?」

「そうだな。だがその前にもうすぐ夜が明けるから、哨戒部隊を編成しておきたい。鳳翔を旗艦として、高雄、摩耶、睦月、如月で行かせる。」

「高雄さんに摩耶さんですか? 哨戒部隊にしては重めの編成ですね。」  
「敵艦隊に発見された時に、敵の追撃を振り切るくらいの力は欲しい」

「からな。だが戦艦だと足が遅くて逃げ切れん。」

「それでは鳳翔さんよりも龍驤さんのほうが良いのでは？龍驤さんなら速力の心配も無いと思いますが？」

「そうだな・・・確かに龍驤のほうが速力では優れているので、本来ならそちらを採用したいところなのだが・・・」

「龍驤は私の指揮下に入る事は認めしたが、神通達と違って戦闘に参加出来るとは言って来なかったからな。まだ病み上がりで本調子ではないのであろう。」

「え？そうだったのですか？龍驤さんなら何でうちをのけ者にするんや!?!って言いそうですが？一応声だけかけてみましょうか？」

「まあ、大淀がそこまで言うなら声をかけてみてくれ。ただし無理強いはするなよ？」

「分かりました。少々お待ち下さい。」

「そう言って大淀は龍驤に連絡を入れて、しばらくすると顔を上げた。」

「あの、提督、龍驤さんがお話したいと言っていますか？」

「ああ、代わろう・・・龍驤か？」

「ああ!!司令官!!うちも出れるわ!!昨日は神通やら五十鈴やらが出撃しとったんやから、次はうちの出番やろからって気合い入れとったんやで!!なんでうちだけのけ者にするんや!?!」

「おお、大淀の予想通りになんでうちだけのけ者にするんや!?!って言ったな。大淀はよく艦娘達の事を見ているのだな。」

「出撃させた者達は私に直接出撃させて欲しいと言いに来たからな。だから龍驤はまだ出撃出来る状態ではないと考えていた。」

「そんな制度があったんかいな!!それ知らなかったらうちの知らんうちに番削られるとこやったんか!?!勘弁してえなあほんまに・・・」

「とりあえず龍驤も出撃出来るのだな？」

「もちろんや!!任しとき!!」

「分かった。では哨戒部隊の旗艦を任せる。今回は護衛に高雄と摩耶も付けるが、敵艦隊を捕捉しても戦闘は仕掛けるな。そして必ず帰還するように。良いな？」

「ほお、鳳翔さんが言いよつたとおりやな。ほんまにうちらが沈むのを嫌がるんやな。ええで、ええで、きつちり生きて帰ってきたら安心しときや。」

「任せた。ではあとは大淀に従ってくれ。」

とりあえずこれで哨戒部隊は大丈夫か。あとは哨戒の結果と横須賀からの応援がいつ到着するかだな。

「では大淀、私は少し休ませて貰う。何かあればすぐに起こしてくれ。」

「分かりました。お休みなさい。」

これでようやく仮眠が取れる。流石に徹夜で艦隊指揮をとるのは疲れたな・・・

## 104話（大淀のお仕事）

さて、提督が私を信頼してお休みされる間を任せて頂いた以上、完璧に仕事をこなして信頼を裏切らないようにしなくてはなりませんね。まずは哨戒部隊のメンバーの招集と明石さんへの艦装準備の依頼。次に艦娘達の状態の確認、特に昨夜夜戦に出した部隊が出撃出来るかどうかが重要ですね。それに金剛さん達が鎮守府へ帰還するまでは安心出来ませんし、横須賀からの援軍にも連絡を取る必要がありますね。あとは本日提督候補生の方が着任されるというお話でしたね。かなり変わった方だと提督はおっしゃっていましたが、いったいどんな方なのでしょう？これ以上提督のご負担を増やして欲しくはないのですが・・・

「皆さん、秘書艦の大淀です。各員起床していつでも出撃出来るように準備を整えて下さい。龍驤さん・高雄さん・摩耶さん・睦月さん・如月さんは哨戒任務に出撃して貰いますので、至急出撃港へと向かって下さい。明石さんと夕張さんは艦装の準備と金剛さん達の帰還に備えて準備をお願いします。各員行動を開始して下さい。」

では皆さんに準備を整えて貰う間に、横須賀の叢雲さんに連絡をしておきましょう。・・・鎮守府の大型通信機に接続・・・周波数を横須賀鎮守府の救援部隊のものに設定・・・

「・・・こちら北九州鎮守府の大淀です。応答願います。」

「こちら横須賀鎮守府所属の叢雲よ。何かあったのかしら？」

「夜が明けましたので、これより北九州鎮守府から哨戒部隊を出撃させます。哨戒の結果に関しては随時共有させて頂きます。そちらはいつ頃到着の予定ですか？」

「こっちは今駆逐艦だけ先行してそちらに向かってるわ。私達先行部隊はあと1時間半、主力部隊は3時間つてどこかしら？哨戒は良いけど、私達が着くまでに轟沈したりしないですよ。」

「ええ、もちろんです。それでは到着をお待ちしております。」

速度の速い駆逐艦だけで先行して来ているのですか。長門鎮守府での戦闘に参加したため、北九州鎮守府の戦力が減少しているのを心

配して下さったのでしょうか？駆逐艦だけとは言え横須賀鎮守府の高練度の駆逐艦であれば、頼もしい援軍ですね。．．ん？鎮守府入口の憲兵の方から連絡ですか。提督候補生の方でしょうか？それにしてはかなり早い時間ですが．．

「はい、秘書艦の大淀です。」

「あー、こちらに新聞記者が数名集まっています、葛原提督への面会を求めている。」

「はあ．．新聞記者ですか．．昨日面会をお断りした安藤さんみたいな方々でしょうか？面会の約束もせずに来るとは．．せつかく提督がお休み頂いたのに、余計な仕事で起こすわけにはいきませぬね。」

「申し訳ないですが、現在深海棲艦の動きに対応する為に、面会はお断りしております。一通り片付きましたらこちらから連絡しますので、名刺だけ貰っておいて下さい。後で取りに行きます。その他予定外の来客があった場合、同様の対応をお願いします。本日は提督候補生の方が着任される予定ですので、その方が来られた時はご連絡下さい。」

「了承した。」

ふう．．ん？今度は間宮さんですか。

「大淀さん、おはようございます。」

「おはようございます。昨夜は夜食の準備ありがとうございました。それで、朝食の件ですか？」

「はい、昨夜は夜遅くまで働かれていたと思うので、朝食はどうされるかと？」

「そうですね．．提督は先程お休みになられたばかりですが．．一応手軽に食べられる物を用意して頂けますか？提督が食べられなかった場合は大変申し訳ないのですが．．」

「ええ、分かりました。もし余ってしまったら赤城さんをお願いしますから、食材も無駄にはなりませんので安心して下さい。」

「それは心強いですね。ではお願いします。」

食事の手配は済ませましたし、次は．．

コンコンコン

「はい、どなたですか?」

「さ、漣です。潮と隴も居ます。」

第七駆逐隊の娘達ですか、曙さんを心配して様子を見に来たのでしょうか?ですがせっかく提督が休まれているのに、騒がしくしたら起こしてしまいますね。では私が執務室から出て外で対応しましょう。

「お待ちせしました。曙さんが心配だったのですか?」

「そ、そうなんですよ。ぼのたん昨日は布団を取りに部屋に来たけど、結局そのまま帰って来なかったから・・・」

「そうですね、昨日・・・いや、つい先程まで曙さんも秘書艦補佐として頑張っていました。今は執務室で仮眠を取っていますので、騒がしくして起こさないで下さいね?」

「そ、そんな・・・曙ちゃん一昨日の夜も遅くまでお勉強してたのに・・・やはりそうでしたか。昨夜も眠たそうにしていましたから、無理をしているとは思っていましたが・・・秘書艦の仕事を奪われるのは嫌なのですが、昨夜は曙さんが居てくれたおかげでとても助かりましたので・・・悩ましい所ですね・・・」

「潮さん、心配なのは分かりますがこれは曙さんの意思で始めて、一生懸命取り組んでいる事ですから・・・出来れば応援してあげて下さい。」  
「そ、そうですか・・・」

「あー、曙は頑固なところあるからなあ・・・」

「ですなあ・・・ぼのたんが頑張るなら応援したいけど、無理をし過ぎないように漣達で見張らないといけませんなあ。そう言えばご主人様はどちらに?」

「提督も執務室で仮眠を取っていますよ。」

「ええ!?つまり同じ部屋に若い男女が一緒に寝てるわけですか!?キタコ・・・もが・・・」

いきなり大声で騒ぎだす漣さんの口を押さえて黙らせる。まったく・・・騒がないでと言っているのに・・・提督を起こしてしまったらどうするのですか・・・

「お静かにと言ったはずですが？」

少し怒気を含んだ声で言い聞かせると、漣さんは少し怯えた表情で両手を上げて、降参のポーズをしながら何度も頷きましたので、手を離してあげます。隣で潮さんと隴さんも涙目になっていますが・・・そんなに怖かったのでしょうか？

「とにかく、曙さんは大丈夫ですから、心配しないで下さい。ああ、そうだ。ついでに一つ用事を頼まれてくれませんか？」

そう言う漣さんは無言で何度も頷きます。

「入口の憲兵さんの所に行つて名刺を受け取つて来て下さい。もし外に人が居て何か話し掛けられても、一切相手にしないで下さい。」

第七駆逐隊の娘達は無言で敬礼をして走って行きました・・・そんなに私が怖かったのでしょうか？

「あー、大淀、聞こえとるか？龍驤やけど、出撃の準備が出来たでえ。」  
「分かりました。では哨戒任務に出て下さい。ただしくれぐれも慎重に行動して下さいね。」

「おう、任しとき!!」

これで哨戒部隊は結果待ちですね。次は皆さんの状態確認ですね。やるべきことが多くて大変ですが、私が秘書艦なのでから弱音を吐いてる暇はありませんね。



## 105話（敵艦隊発見）

さて、そろそろ皆さん食事を始める頃でしょうか？今のうちに皆さんの状態の確認をしておきましょうか。

「ただいまより鎮守府に待機中の各艦の状態を把握します。戦艦は長門さん、空母は赤城さん、巡洋艦は天龍さん、駆逐艦は白露さん、潜水艦は伊168さん、報告をお願いします。」

「長門だ。私も陸奥も大和もいつでもいける。」

「赤城です。一航戦及び五航戦、どちらも万全の状態です。鳳翔さんも問題ありません。」

「天龍だ。俺と龍田も問題ねえ。北上達と鈴谷達も問題ねえな。神通はきちんと起きて来たが、川内はしばらくは無理だろうな。あと夕張は工廠の仕事で離れられそうにねえな。」

川内さんは仕方ないですね・・・川内さんには夜に活躍して貰いましょう。それと出撃続きで工廠の方も明石さんだけでは手が回りませんか。

「白露です。白露型、島風さん、雪風さん、問題ありません。その・・・第七駆逐隊が見当たらないのですが・・・」

「曙さんは今休まれている、他の娘達は別の用事を頼んだので大丈夫です。伊168さん、お願いします。」

「私もイクも大丈夫よ。」

「了解しました。現在哨戒部隊を出撃させていますので、皆さんはいつでも出撃出来るように準備を整えて下さい。以上です。」

とりあえず昨夜夜戦に出た方々も川内さん以外は大丈夫そうですね。心配なのは第七駆逐隊と実戦経験の無い鈴谷さん達でしょうか？五航戦の娘達は実戦経験は豊富ですし、気持ちの問題も昨日の様子であれば大丈夫でしょう。これで提督が起きられたら滞りなく指揮が出来るでしょう。

「提督、提督、起きて頂きますか？」

大淀が肩を揺らしながら呼び掛けてきて、一気に意識が覚醒する。

仮眠のつもりが思っていたよりも深く眠ってしまったようだ。まさか人が居る部屋で熟睡してしまうとはな・・・よほど疲れが溜まっていたのだろう。時計を見ると1時間半くらいは寝てしまったようだ。

「・・・状況は？」

「たった今金剛さん達が帰還しました。それと横須賀鎮守府からの援軍ですが駆逐艦だけで先行していて、先行部隊も間もなく到着予定です。龍驤さん率いる哨戒部隊はもうすぐ基地レーダー範囲外に出る頃合いです。進路は資材溜まり方面に向かわせています。」

「了解した。ああ、そう言えば一つ言い忘れていたが、今日呉鎮守府から支援物資が届くはずだから、覚えておいてくれ。」

「呉鎮守府からですか!？」

まあ、呉鎮守府から救援物資だなんて意外だろうな。以前はともかく今は久藤提督の傘下から外れているのだ。驚くなど言う方が無理だ。

「ああ、資材の備蓄に不安を感じたのでな。少し交渉をした。だが資材の量については久藤提督の匙加減次第だからなんとも言えん。」

「そうですね・・・資材はまだ大丈夫そうでしたが、姫級を相手にする事を考えると、もう少し余裕を持つておきたいですからね・・・」

確かに姫級を相手にする以上、出来る限りの事はしておきたいものだ。実際に戦うのは横須賀鎮守府の艦娘達だが、何が起こるかわからないからな。

「ああ、そうだな。では金剛達には入渠と補給をさせてくれ。旗艦の金剛と球磨は先に執務室に報告に来させてくれ。」

「分かりま・・・提督!!龍驤さんから通信が入りました!!」

「代われ。」

どうやら敵艦隊は基地レーダー範囲のすぐ近くまで来ていたようだな。

「龍驤、状況は？」

「ほんまえらいことなつとるでえ!!敵の大艦隊や!!ちらつとしか見えなかったけど、5か6艦隊くらいおったと思うで!!それに敵の空母が

めっちゃおるで、おかげでうちの艦載機は全滅してもうたわ!!」

つい先程長門鎮守府に大規模攻勢を仕掛けておきながら、うちにも大規模攻勢を仕掛けてくるのか・・・集積地棲姫の艦隊は底無しかと言いたくなる・・・

「了解した。即座に撤退しろ。」

「もうしよるわ!! あんな海域に居座るほどアホやないわ!! あんなに見えたら即座にトングズラするに決まっとるやろ!!」

「ああ、それで良い。こちらの被害は?」

「あー、それはうちの艦載機だけで済みそうや。見えた瞬間に逃げだしたんと、うちの艦載機達に敵艦載機の足止めしてもろうたから・・・いくつか抜けて来たんは撃ち落としたしな。」

「ほう、完璧な撤退だな。」

「おおきに。」

「他の者の弾薬や燃料は残っているか?」

「多少対空砲火しただけやから、まだまだ余裕はある。せやからうち以外はそのまま防衛戦に出られるでえ。」

「了解した。とりあえず鎮守府へと向かって、龍驤以外は途中で迎撃部隊と合流して貰う。」

「了解や。」

事前に敵が見えたら即撤退と伝えていたのもあるが、龍驤は上手く撤退したようだ。病み上がりとは言え、速力の関係も大きいのではないだろうか? 今後も上手く使っていきたいものだ。

「・・・提督・・・大淀さん・・・何か動きがあったの?」

まだ寝惚けた雰囲気、曙が問い掛けてくる。そう言えば曙も執務室で仮眠を取っていたのだった。起こしてしまったか・・・だが、敵の大艦隊が迫っているのなら、ゆっくりさせる余裕は無いか・・・

「曙、敵の大艦隊が迫って来ている。秘書艦補佐として働けるか?」

そう問い掛けると曙は自身の顔を両手でペシペシ叩いて、気合を入れ直した。やはり疲労感濃いやうだが、やる気はあるみたいだな。

「それで、私は何をすれば良いの?」

「大淀は横須賀の叢雲に情報共有をしてくれ。曙はうちの鎮守府の艦娘達に総員戦闘準備を呼び掛ける。それと昨夜夜戦に出た者達が出られるかの確認も頼む。」

「提督、鎮守府内の確認は終わっております。川内さんはまだ動けず、夕張さんは工場の仕事で手が離せそうにありません。たった今帰って来た金剛さん達もすぐには無理だと思われます。他の者は全員大丈夫でした。」

「分かった。では曙は他の者達全員に招集をかける。」  
「分かったわ。」

大淀が確認を済ませておいてくれたおかげで、少し時間が短縮出来たな。それにしても敵の総戦力がどの程度か不明なのが難点だな。敵艦隊が基地レーダー範囲内に入れば、どの程度か判明するが、悠長に待つてる暇は無いだろう。どうせ敵の能力はこちらを上回っているのだから、総員出撃の必要があるだろう。

「空母機動部隊として一航戦と五航戦と護衛に摩耶と睦月、打撃部隊は長門・陸奥・大和で護衛は高雄と神通に如月、水雷戦隊は天龍・龍田に白露型姉妹、北上・大井・島風・雪風で遊撃に回って貰うとして：：鳳翔・鈴谷・熊野・漣・隴・潮で後方に抜けて来た奴らの対応をさせるか。あとはイムヤとイクには隙を見て雷撃を叩き込ませないとな．．．」

本当ならば初陣の鈴谷達や、まだ精神的に不安な第七駆逐隊を出したくはないのだが：：数で劣るのに出し惜しみする余裕はないか：：「分かったわ。」

第七駆逐隊の名前が出た事で曙も思うところはあったようだが、何も言わずに連絡を始めてくれる。

「提督、横須賀の叢雲さんが提督にお話があると云っています。」

「ああ、代われ．．．葛原だ。」

「状況は聞いたわ。私達先行部隊はもうすぐ北九州鎮守府に到着するから、補給の準備をして貰えるかしら？補給を終えたらすぐ出るわ。」  
「分かった。長距離移動の疲労は大丈夫か？」

「横須賀の艦娘をなめないでくれるかしら？この程度でへばるような

娘は横須賀に居ないわよ。」

「そうか、正直我々だけでは手に余る敵だから助かる。それで、敵の艦隊の構成ははつきりとしていないが、どう動くつもりだ？」

「ふん、敵の構成が不明なんてそう珍しい事じゃないわ。とりあえず私達が突っ込んで敵の注意を引いてどんどん沈めてくるから、あんた達は防衛に専念しなさい。数が多いなら私達だけじゃ止めきれないわ。あんた達は自分達の身と鎮守府、それに街への攻撃を阻止しなさい。」

ほう、ずいぶん自信だな。先行部隊は駆逐艦だけだと聞いていたが、かなり強気に出たな。だが歴戦の艦娘達だろうし口だけではないだろう。それにうちとは練度の差も大きいし、演習をしたわけでも無いので、下手に連携を取ろうとする方が危ないだろう。

「分かった。それでは東側から突っ込んで貰いたい。我々は西側に重点をおいて守らせて貰う。」

「なによ・・・意外と素直なのね。分かったわ、その作戦で良いわ。その代わりあんたの所の艦娘達を一隻も沈めさせないでよね!! 私達が援軍に来たのに沈まれたら、うちの提督の名誉に泥を塗る事になるんだから気を付けなさいよ!!」

「ああ、承知した。」

さてと、横須賀のお手並み拝見といきますか。

## 106話（戦闘準備）

鎮守府の艦娘達の出撃準備を整え、横須賀の先行部隊も到着して補給を済ませたので、迎撃の準備は整った。幸い龍驤達が逃げ帰るのをそのまま追って雪崩れ込んで来なかったため、少し時間には余裕を持てた。

「提督!!敵艦隊が基地レーダー範囲内へ続々と侵入して来ました!!」

「構成は分かるか?」

「えつと・・・空母ヲ級のflagship・elite2・通常種3、軽母又級2、戦艦ル級3、他巡洋艦・駆逐艦多数。合計30隻の大艦隊です!!」

いくらなんでも空母の数が多すぎるだろ!?!それにflagship級なんてその一隻だけで戦況を左右出来る存在だぞ!!

「完全にこちらを潰しに来ているな・・・」

もし北九州鎮守府だけで戦うのであれば、空母を止められずに好き放題爆撃されて終わってしまう。横須賀の駆逐艦達がどれだけ奮戦してくれるか分からないが、かなり厳しい戦いになるな。

「大淀は各艦隊に出撃の指示を出せ。詳しい指示は移動中に伝える。あと敵に動きがあればすぐに報告しろ。」

「はっ!!お任せ下さい。」

「曙、綾瀬さんに通信を繋げてくれ。」

「分かったわ。」

流石にこれだけの敵を相手にするならば、何が起るか分からない。市民には避難して貰おう。

「はい、提督。」

「北九州鎮守府の葛原です。」

「葛原提督ですか。あー、あの記者達の件であれば「緊急事態です。敵の大規模艦隊が迫っていますので、すぐに避難勧告を出して下さい。」

「・・・承知しました。長門鎮守府の次はうちですか・・・御武運をお祈りしております。」

綾瀬さんの話を遮って要件を伝えると、あまり余裕の無い雰囲気か

伝わったのか、何も聞かずに了承してくれた。話が早くて助かる。

「ありがとうございます。ではこれで。」

これで後方の憂いは減った。次は……

「曙、次は叢雲と通信を繋げてくれ。」

「分かったわ。……はい。」

「叢雲か？葛原だ。」

「なによ？敵の構成は聞いたし、作戦は変えるつもりは無いわよ？」

声に焦りは無いか……本当に肝が据わっているな……

「……空母が多いが、どれくらいやれる？」

「時間さえあればいくらでもやれるわよ。相手はせいぜい flagship 級の 3 人の防空網を突破したいなら、せめて改 flagship 級くらいは居ないと話にならないわ。あと私はもちろんだけど、天津風も時津風も柔な鍛え方はしてないから、こっちの心配してないで自分の艦隊の心配をしなさいよ。」

秋月型の防空駆逐艦か。話には聞いた事はあるが、かなり珍しい艦娘で士官学校には居なかったな。本来一隻で一つの艦隊を守るのに充分なはずなのに、それが三人もいるのか……横須賀の援軍は後続部隊も含めたら 3 艦隊、つまり一艦隊に一人ずつ入っていたが、駆逐艦だけで先行したためにこういう構成になったわけか。

「……分かった。そう言うのであれば信頼しよう。」

「……ほんと調子狂うわね。」

「ん？何か言ったか？」

「いや、任せなさいって言ったのよ。じゃあ私達は先に行くから。あと戦闘始まったら戦闘が終わるまでは気が散るから通信はしないでよね。」

「了解した。」

この様子であれば横須賀の方は問題無さそうだな。

「大淀、うちの艦隊の各旗艦に繋いでくれ。」

「分かりました。……どうぞ。」

「これより各艦隊に指示を出す。まず大まかな流れとしては、横須賀

の艦隊が敵艦隊を東側から切り崩していくので、北九州鎮守府の艦隊は敵艦隊の足止めをして貰う。お前達が抜かれれば鎮守府や街への被害が出るので、心して防衛に専念してくれ。まず赤城率いる空母機動部隊は敵艦載機の迎撃を優先して貰う。相手は空母の数が多いが防衛に専念すれば戦えるはずだ。」

「了解しました。一航戦の誇りにかけて抜かせはしません!!」

「次に長門率いる打撃部隊には、空母機動部隊に接近する敵の迎撃を頼む。長門には現場での総指揮も頼もうと思うがいけるか？」

「ああ、勿論だ。」

「天龍の水雷戦隊は長門達のうち漏らしを撃破して貰う。お前達が抜かれれば戦線が一気に崩れるから、なんとか持ちこたえろ。」

「へへっ、良いところ持ってくるじゃねえか。任しとけて。」

「北上の部隊は遊撃だ。天龍達のフォロワーやこちらを迂回する敵を叩いて貰う。だが北上と大井は装甲が薄いから、立ち回りには充分に気を付けるように。」

「ほーい。」

「鳳翔の部隊は後方支援だ。主な仕事は突破して来た敵の迎撃と大破した味方の救助だ。救助は主に第七駆逐隊で行い、鈴谷と熊野はその援護をしてくれ。この艦隊は他と比べても練度が低めなので、鳳翔がよく見てやってくれ。」

「分かりました。お任せ下さい。」

「潜水艦の二人は状況に応じて動かすから、序盤は戦場から少し下がっている。」

「え、ええ。分かったわ。」

「では諸君の活躍に期待している。・・・沈むなよ。」

「！！！！！！！！！！」

これで私の出来る事は一旦終わりだな。あとは戦況を見てからだな。

「提督・・・その、入口の憲兵から連絡がありました・・・提督候補生の方が来られたと。」

街には避難勧告が出されているはずだが・・・最悪のタイミングで



も律儀に鎮守府へとやって来たか・・・

「分かった。中に入れてやってくれ。小森なら案内は不要だろう。」

「ええ・・・本当に大丈夫なのですか？」

「案内する為の人員を送ってもどうせ見失う。この忙しい状況で無駄な事は出来ん。」

「わ、分かりました。そう伝えておきます。」

大淀も少し納得がいかないという雰囲気だが、今はそれどころでは無いと判断したのだろう。幸い鎮守府の作りは似通ったところが多いので、そこまで迷う事は無いだろう。

## 107話（防衛戦開始）

葛原提督が着任してから慌ただしい日々が続いている。日本海側は深海棲艦の発生が少なく、危険な個体も滅多に確認されず、もし見つかつたとしても佐世保の討伐部隊が殲滅していたらしい。なのでこれ程の数と質をあわせ持つ敵とは初めて対峙する。そんな大きな戦いで葛原提督は私に総旗艦という名誉ある大役を任せてくれた。作戦としては横須賀鎮守府の駆逐艦達に頼りきりになつて心苦しいが、圧倒的な練度と経験の差があるので彼女達を頼るしかないのが現状だ。だが我々が奮戦し敵艦隊の注意を少しでも多くこちらに向ければ、彼女達も動き易くなるだろう。私を信頼してくれた葛原提督に報いる為にも、恥ずかしい戦いは出来ないな。

「あらあら？今日はずいぶんと気合いが入っているわね。」

「当然だ。そういう陸奥こそ気合いが入っているように感じるが？」

「ふふつ、そうよね。せっかく北九州鎮守府が良い鎮守府になろうとしているのですもの。私達が守らないとって思うわよね。」

「ああ、駆逐艦達を盾として使い潰すなんて事はもうやりたくないからな。それに……」

「なにかしら？」

「葛原提督は我々が思っているよりも優しい方なのかも思つてな。」  
「うくん、どうかしら？私達に対しては真面目な軍人さんって感じるけど、優しいからって話ではないと思うわ。それと目的の為には手段を選ばない印象かな？」

「むう……市長候補の奴を深海棲艦の所に連れて行った話か……」  
「あれは流石に驚いたわね……それに売られていた娘達を取り戻す為に、平川市長以外の罪を追及しないなんて言い出したのも驚いたわ。」  
「いや、だがあれは売られていた艦娘達の命を優先したわけであつて、非難するような話ではないだろう？」

「どうにも私と陸奥では葛原提督の印象が大きく異なるようだ……」  
「別に非難なんてしてないわよ？真面目な軍人さんの印象がどんどん崩れていっただけで、むしろ私はすごく気に入ったわよ？」

「そ、そうか？なら良いのだが・・・」

「そういう長門はどうして提督が思ったより優しいなんて言い出したのかしら？」

「・・・先程の通信の最後に、沈むなよと言われたからだ。」

「確かに気遣ってくれるのは嬉しいけど？それっていつも口酸っぱく言っていないかしら？」

「今までの戦いは勝てる戦いだったからな。偵察や哨戒も情報を得たら逃げて問題ない。だが今回は違う。今回の相手は強大だ。それこそ北九州鎮守府存亡の危機と言っても過言では無い。それなのに提督は死力を尽くして防衛しろではなくて、沈むなよと言ったのだ。」

「そうね・・・前に私達が沈むと分かっていたても必要ならば命令するって言ってたけど・・・そう言われてみれば違和感があるわね。」

「そうだろう？だから私はそこに軍人として正しい事をしようとしていても、捨てきれない優しさを感じた。甘さとも言えるかもしれないが、人間味があって私は好感が持てる。」

私の考えを正直に伝えたが、陸奥は難しい顔で考え込んでいる。どこかおかしい所があったのだろうか？

「うーん・・・やっぱダメね。提督の人柄を知るには分からない事が多すぎるわ。だって提督が着任してから一週間も経ってないもの。でももつと深く知りたくなっちゃった。」

「それもそうだな。ならばまずはこの戦いに勝って生きて帰らなければな。そして提督の指示なのだ。誰も沈ませずに帰還しよう。」

「ええ、私もちゃんと補佐するから頑張ってね、総旗艦殿。」

「ああ、共に頑張ろう。」

「提督!!まもなく横須賀の艦隊が敵の交戦距離に入ります!!」

「分かった。こちらは？」

「こちらはもう少しかかりそうですね。」

ふむ、こちらは空母や戦艦も居るし、練度の差もかなりあるので、横須賀の艦隊からは引き離されてしまったか。それでも躊躇無く攻め込むのだな・・・

「敵艦載機発艦しました!!物凄い数です!!」

「そうか・・・まずはお手並み拝見だな。」

私達の姿を確認した敵艦隊から艦載機の群れが迫ってくる。ただ聞いていた空母の数にしては艦載機の数が少ないわね。

「来たわね。ここで輪形陣を組んで敵艦載機を迎え討つわよ!!秋月!!照月!!涼月!!対空迎撃開始!!相手はこっちが1艦隊だからって出し惜しみしてるわよ!!全部落として状況を理解させてやりなさい!!」

「はい!!」

襲いくる敵艦載機を次々と落としていく。これくらいなら秋月一人でも対処可能だから、三人も防空駆逐艦が居れば撃ち漏らしなんて出ないで当然ね。そして敵艦隊は私達が脅威だと認識を改めたようで、次の艦載機の群れはさつきとは比べ物にならないくらいの数が来るわね。

「敵艦載機の第2波が来るわよ!!さつきよりも多いから気を付けなさい!!ここで艦載機の数減らせば、後ろの北九州鎮守府の娘達が生き残れるようになるのよ!!しっかりと撃ち落とさなさい!!」

「はい!!」

艦載機だけじゃなくて巡洋艦や駆逐艦もこっちに來てるし、戦艦もこっちを狙おうとしてるみたいね。もう少し艦載機を減らしておきたいから、少し距離を取りつつ砲撃で数を減らそうかしら?魚雷は空母や戦艦の破壊に取っておきたいわね。

「距離を取りつつ応戦するわよ!!秋月達は対空迎撃に専念して。天津風と時津風は私と砲撃で敵の数を減らすわよ!!」

本当に数だけはいわね。でも質が悪いわ。それならいくらでもやり方はあるわ。・・・ん?敵の動きが変わった・・・北九州鎮守府の艦隊が到着したみたいね。思ったよりも早かったから、まだ予定よりも削れてないわね・・・

「敵艦隊に突っ込むわよ!!敵の砲撃と魚雷に気を付けなさい!!それと第一目標は敵の空母だから、それ以外を無視してでも魚雷を叩き込んでやりなさい!!」

あとは北九州鎮守府の艦隊がどれだけでもつてくれるか次第かしら？でもあの提督・・・こつちの指示をえらく素直に受け入れていて戸惑ったわ。こつちで調べたら教官潰しなんて渾名を付けられて、物凄く反抗的な人物って話だったのにどういふことかしら？まあ、そんな事は後で話せば分かる事ね。今は当初の作戦通りに北九州鎮守府の艦隊が敵艦隊の足止めをしてくれるのを期待して、私達は私達の仕事をしましょう。

「海の底に消えろ!!」

## 108話（防衛戦2）

大淀に戦況報告をさせているが、横須賀の艦隊は想像以上だった。どこかで駆逐艦だけの艦隊だからと思ってしまうのだが、防空駆逐艦はその名に恥じない性能を誇っているようだ。敵艦隊から発艦される膨大な数の艦載機を綺麗に処理している。

「提督、こちらの艦隊が交戦距離に入ります。それに合わせて横須賀の艦隊が敵艦隊へと突撃してます。」

「了解した。では作戦通りに防衛に専念させてくれ。」  
「分かりました。」

さて、長門は上手く敵艦隊を足止めしてくれるだろうか？

戦場に到着すると敵艦隊もこちらに気が付いたようで、空を埋め尽くさんとする艦載機の大群を送り込んで来る。横須賀の艦隊はあんなものをたった1艦隊で相手をしていたというのか!?

「敵の艦載機が来るぞ!!空母機動部隊、発艦開始!!他の部隊は対空迎撃用意!!」

「加賀さん、一航戦の誇りを見せますよ!!」

「ええ、五航戦との格の違いを見せましょう。」

「なんですって!?!翔鶴姉!!一航戦なんかに負けてられないわ!!五航戦の力を見せ付けてやるわよ!!」

「慢心してはダメよ瑞鶴。私達は一航戦の先輩方の援護が仕事よ。きちんと自分達に与えられた仕事をしましょう。」

「で、でも〜」

「でもじゃありません。良いですね?」

「はぁ〜い・・・」

こちらも艦載機を発艦させて迎撃する。今回は時間稼ぎが目的なので、艦戦を多めにした編成なのだが、それでも多くの敵艦載機が抜けて来てしまうか・・・

「敵艦載機が抜けて来たぞ!!迎撃しろ!!」

総員で対空迎撃を行い多くの敵艦載機を撃墜したが、やはり全ては

止めきれずに攻撃を許してしまう・・・だが後方で控えていた鳳翔達  
が残りをやってくれたようだな。

「被害報告を!!」

「空母機動部隊赤城・加賀の両名が小破、まだいけます!!」

「水雷戦隊、龍田が小破だ。問題ねえ。」

「遊撃隊のあたし達は被弾して無いよ。」

「後方支援部隊も損害ありません。」

私の部隊も損害はない。まだまだ大丈夫だな。そして敵の艦隊が  
こちらに向かつて来るのが見える。今度は戦艦2隻を含む艦隊で数  
は2艦隊くらいか。それにしてもいくつか既に損傷を負っているも  
のが見られるが、横須賀の艦隊が手傷を負わせたのだろうか?さら  
に敵艦載機の第二波も来る。さつきより数は少ないが、今度は対空迎  
撃だけに専念する事は出来ないな・・・

「陸奥!!大和!!前に入るぞ!!接近される前に数を減らす!!空母機動部  
隊は攻撃機で接近する奴等を狙え!!水雷戦隊も援護を頼むぞ!!」

「二はい!!」

さあ、ビッグセブンの力を見せてやろう!!

「提督、打撃部隊が攻撃を開始しました。報告では敵艦隊は2艦隊を  
こちらに向かわせて、艦載機での援護もあるそうです。あと敵艦隊は  
開戦前に多少の損傷があったとの事です・・・横須賀の艦隊でしよ  
うか?」

「ふむ・・・だがこちらの迎撃に動いたのは、横須賀の艦隊からは遠い  
部隊のはずだ。だから横須賀の攻撃では無いと思うのだが・・・」

それに横須賀の攻撃であればもっと損害が出ていてもおかしく無  
い気がする。となると・・・

「おそらくは長門鎮守府を襲撃した部隊の生き残りだろう。資材溜ま  
りで補給だけして敵艦隊に合流したのだろう。」

「なるほど、そういうことですか。あ!横須賀の艦隊が空母を2隻沈  
めました!!横須賀の艦隊はなおも敵艦隊の中を航行しています!!」

いくら練度が高いからといって無茶をし過ぎではないか?確かに

駆逐艦は速力と回避力に優れていて小回りが利く。そして敵艦隊の内側に入り込めば、敵は同士討ちを怖がって攻撃をしにくくなって、こちらは好き放題撃ちまくれるという理屈は理解出来る。だが敵艦隊が同士討ちを恐れずにこちらを潰しに来るかもしれないし、そもそもそんな近距離で戦えば、被弾する確率はどうしても増えるだろう。これはあまり長くは持たないと考えておくべきか……

「こちらの戦況はどうなっている？」

「着実に敵艦隊を減らしていますが、こちらにも損害が出ていますね……幸いまだ大破は出ていないようですが……ッ!!翔鶴さんに敵艦載機の攻撃が直撃しました!!大破です!!」

「鳳翔達に回収させてすぐに下がらせる!!」

「はい!!ッ!!これは!!」

「今度は何があつた!!」

「横須賀の艦隊と交戦していた敵艦隊が、空母の守りを捨ててこちらの艦隊へと進路を変更しました!!東側から回り込もうとしています!!」

「なんだと!」

横須賀の艦隊に勝てないのであれば、与し易いこちらの艦隊に少しでも損害を与えようと言うのか?恐ろしい執念だな……しかし数は9隻と少なく、横須賀の艦隊によって多少の損傷は受けているはずだ。

「では東側の進路を潜水艦達に妨害させる。それと北上達も回せ!!それと翔鶴は第七駆逐隊に任せて、鈴谷と熊野も援護に向かわせる!!」

鈴谷と熊野に関しては実戦経験がなく、今回は後方支援に終始させるつもりだったが……そうも言っていられない状況だ……戦況としては横須賀の艦隊が圧倒しているので、轟沈さえしなければなんともなるのだが……

「……不味いわね。」

「叢雲さん!?!どうかしましたか!?!」

敵艦隊に突っ込んだのに背後からの砲撃がなくなった事に疑問を



持って振り返ってみると、敵艦隊が空母を見捨て北九州鎮守府の方へと向かっている。だからと言って空母を無力化したわけでは無いので放置も出来ない。ならやることは一つしか無いわね。

「秋月!!私と指揮を代わってこのまま空母を殲滅しなさい!!私が一人で救援に向かうわ!!」

「ええ!?一人になるのはさすがに危険ではないですか!」

「良いからやりなさい!!それに一人で全部やるつもりはないわ。北九州鎮守府の艦隊も迎撃に回るはずよ。だから私は敵の背後から仕留めていくだけよ。」

「・・・分かりました。御武運を。」

「ええ、そっちもさっさと空母を沈めなさい。」

そう言い残して一人で反転して敵艦隊の背中を追う。敵艦隊を追う私をさらに追うように空母から艦載機が放たれるが、そのほとんどは秋月達が落としてくれた。全速力で敵艦隊を追いかけながら、艦載機の攻撃を回避しつつ迎撃を行うが、流石にこの状態で敵艦載機を撃ち落とすのは難しいわね。まあ良いわ。回避が出来ているなら問題無いわ。そう考えていたら・・・

「敵艦隊が反転してこっちを狙っている!」

私が孤立したからって今度はこっちを狙おうって言うのかしら? ころころと気が変わるみたいだけど・・・あまりこの叢雲をなめないで欲しいわね!!

## 109話（防衛戦3）

提督からの指示を受けてあたしは自分の艦隊に鈴谷さん達を加えて、回り込んで来た敵の対処に動く。潜水艦の二人は速度が遅いから、後で合流する形だねえ。けつこう苦戦してる皆を置いていくのは気がひけるけど、あの状態に横槍を入れられたらまずいからねえ……とりあえずは鈴谷さん達に水上偵察機を出して貰ったけど……

「あー、鈴谷さん、熊野さん、どんな感じ?」

「え、えつと……なんか敵艦隊が引き返してるみたいんだけど?」  
「え?マジで?」

もうなんなのさ……こっちの横腹狙つって急に引き返したりしてさあ……

「ツ!!横須賀の方が一人孤立して戦ってますわよ!」

「ええ!?あれと一人でやってんの!?それは流石に不味くない!」

横須賀の人達が物凄く強いのは分かるけど、それにしたって一人は不味いよね?とりあえず提督に連絡しなきゃね。

「あ、大淀さん?すぐに提督に繋いで。」

「はい……どうぞ。」

「どうした?」

「あ、提督、東側から回り込もうとした部隊なんだけど、反転して孤立した横須賀の娘が一人で戦ってるみたいだよ。流石にほつとけなし、前に出て戦って良いかな?」

「……ああ、すぐに援護に向かえ。」

「へへっ、りよっかい。」

よおし、提督の許可も貰ったしやっちゃいますかね!!

「皆、速力上げて突っ込むよ」

まずはあたしと大井つちの雷撃で数を減らすとしましょうかね!!

「……ああもう!!鬱陶しいわね!!」

北九州鎮守府の側面から攻撃しようとしていた部隊を引き留める事には成功したけれど、一人で艦載機にも狙われながら戦うのは

ちよつと厳しかつたかしら？魚雷はさつき空母と戦艦に叩き込んで来たからもう無いし、砲弾も残り3割つてところかしら？駆逐と軽巡はどうとでもなるけれど、問題は装甲と耐久の高い重巡ね。私の火力だとしつかりと弱点を狙わないと、あいつらに損傷を与えられないのだけど、こうも敵の迎撃が激しいとしつかりと狙う余裕が無いわね・・・

「ああもう!!なにを弱気になってるのよ!!私は横須賀の代表として来てるのよ!!しつかりなさい!!」

とりあえず適度な距離を取りつつ回避に専念していると、チラツと水上偵察機の姿が見える。どうやら北九州鎮守府の娘達がこつちの様子を探りに来たようね。けどあの提督はどういう判断をするのかしら？援護の為の部隊を寄越すのか？それとも最初の予定通りに足止めだけに専念するのかしら？もし援護に来ないのであれば、秋月達が空母を沈めてから合流するまで持ちこたえなくちゃいけないわね。

「ぎゃあ!!」

「嘘?!被弾した!?

ご主人様の指示で漣達は翔鶴さんの救援に来ましたが、かなり激しい戦いになってますね。これは早々に翔鶴さんを連れて逃げないとまずいですね。翔鶴さんの所にたどり着くと、そこには翔鶴さんを中心に防御を固め、瑞鶴さんが翔鶴さんを支えながら声をかけて・・・というか泣きついている感じでしょうか？

「また私のせいで翔鶴姉が・・・やだ・・・沈まないで・・・翔鶴姉・・・」  
「しつかりしなさい五航戦!!」

瑞鶴さん・・・加賀さんの言葉も耳に入って無いみたいですね。

「あ、赤城さん!!第七駆逐隊、翔鶴さんの救援に来ました!!」

「助かります。ではすぐに翔鶴さんを・・・瑞鶴さんも一緒に後方へ連れて行って下さい。」

「分かりました。私と潮で翔鶴さん連れてくから隴は瑞鶴さんをお願い。」

「任せて。」

瑞鶴さんを臙に任せて翔鶴さんを潮と二人で肩を貸して運ぶ……  
ぐぎぎ……やつぱり正規空母は重いなあ……翔鶴さんは機関部も  
やられてるみたいだし……

「瑞鶴さん!!退避するよ!」

「翔鶴姉……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」  
「瑞鶴さん!」

臙が瑞鶴さんに声をかけてるけど……これ瑞鶴さんもかなりヤバ  
イ感じじゃ……と思ってるのと瑞鶴さんに加賀さんが近づいてい  
き……パンツ!!と乾いた音を響かせた強烈なビンタを叩き込んだ。ヤ  
バイ、あれはマジ怒でガクブルですわ……

「いい加減にしなさい五航戦!!まだ翔鶴は沈んでいないのよ!?貴方が  
するべき事は翔鶴を連れて後方に下がる事です。早く下がちなさい  
!!」

「あ……ご、ごめん……なさい……」

加賀さんに怒られた瑞鶴さんが、泣きながらこちらに近づいて来  
た。

「ごめん……私が翔鶴姉を運ぶから……」

「わ、分かりました。では漣達が護衛します。」

おお、流石は正規空母、一人でしっかりと翔鶴さんを運んでますね。  
これならすぐに離脱出来そうですね。

「加賀さん……嫌な役を任せてしまっでごめんなさいね。」

「気にする必要はないわ。それよりも目の前の敵に集中しましょう。」

「ええ、そうですね。」

「長門、第七駆逐隊が翔鶴と瑞鶴を連れて下がってるみたいよ。」

「ん?瑞鶴もか?」

「ええ、そうみたい。」

空母が2隻抜けてしまったか……かなり厳しいが、敵の艦載機も  
かなり少なくなっているようだから、一航戦だけでも耐えられるか?い  
や、耐えられるようにするのが私の仕事だな。幸い近づいて来ている

敵艦隊の足止めはそれなりに上手くいっている。北上達が抜けたのは痛い。天龍達が上手く立ち回って足止めをしてきているので、私達打撃部隊の砲撃で少しずつ数を減らす事が出来ている。だがあちらにはまだ戦艦が2隻いるから油断は出来ないな。

「ふむ、敵の艦載機も減ってきたから、そろそろ戦艦ル級を仕留めに行くぞ。あの2隻を沈めるのは私達戦艦の仕事だ。陸奥、大和、行くぞ!!」

「私の出番ね。いいわ、やってあげる!!」

「戦艦大和!!推して参ります!!」

二人の気合いの入った返事に満足しつつ、速力を上げて敵艦隊へと接近する。随伴艦の高雄・神通・如月も速力を上げて付いて来るし、天龍達もこちらの動きに気が付いたようで、道を開けるように横にずれながら敵の足止めを継続してくれている。ここまで御膳立てされたのだ。負けるわけにはいかないな。

「目標戦艦ル級!!全主砲斉射!!撃てえ!!」

私の掛け声に合わせて一斉射を放ち、ル級の片方を中破へと追い込む。初撃にしては悪くない戦果だ。

「次弾装填急げ!!敵の反撃が来るぞ!!」

「ッ!!ふくんやるじゃない?」

「クッ・・・」

陸奥と大和が被弾してしまったようだが、まだまだやれるな。戦艦同士の殴りあいなのだから、この程度で狼狽えるわけにはいかん!!

「撃ち返すぞ!!撃てえ!!」

## 110話（防衛戦4）

「やっぱ!!北上さん、横須賀の娘が被弾しちゃったよ!!マジでヤバそうな感じ!!」

鈴谷さんが慌てて報告してきた内容に顔をしかめる。やっぱりまずい感じだったかあ・・・横須賀の娘を沈めちゃったら一大事だよねえ・・・

「ま、まだ沈んだ訳じゃないでしょ?なんとか助けるよ。大井つち、雷撃いくよ!!」

「はい!!私と北上さんの前を遮る愚か者共!!全部海の藻屑となりなさいな!!」

「まあ、ここは本気でやるときましようかね?うりやああ!!」

あたしと大井つちの魚雷の群れが敵艦隊へと迫っていく。敵艦隊は横須賀の娘に夢中で、こつちへの注意が疎かになっちゃってるね。あのまま横須賀の娘を追いかけてくれたら、魚雷の群れに突っ込んでくれるはずだね。横須賀の娘には当たらない絶妙なコース。流星はスーパー北上様と大井つちってとこだね♪

「じゃあ雪島、出番だよ」

「はい!!なんでしよう!?!」

「ちよつと!!私は雪島じゃないよ!!」

ええ〜名前まとめただけでなんか怒っちゃったよ・・・やっぱ駆逐艦はめんどいなあ・・・

「全速力で横須賀の娘助けに行つて来て、速さじゃ負けないんでしょう?あたし達もすぐに追い付くからさあ。」

「はい!!雪風がお守りします!!」

「え?全速力出して良いの!?!私には誰も追い付けないよ!!」

「はあーい、行つてらっしゃーい。」

適当に雪島を送り出したし、そろそろあたし達の魚雷が到達する頃かな?つて、ちよ!?!横須賀の娘が進路変更して魚雷の方に突っ込んで行くじゃん!?!もしかしてこつちに気が付いて無かったの!?!誤射で味方に止めを刺すとか営倉行きどころの話じゃないよ!?!

「ちよ!?!避けて!!」

「まずいわね・・・」

まさかこんな格下の奴ら相手に被弾してしまうなんて・・・私もまだだね・・・損傷は中破程度だからまだなんとかなるけど、これ以上の被弾は絶対に避けなきゃいけない。奥の手はあるけれどこんな所で使いたくないし・・・

「ん?北九州鎮守府の娘達が来てるわね。」

見たところ6隻で、先頭には重雷装巡洋艦の二人が居る。つまりまずは雷撃で数を減らそうとしてくるはずね。ならば上手く活用させて貰いましょう。こっちは敵艦隊に反撃する余裕は無いのだから回避に専念するしか無いけれど、それでもやれる事はあるのだから。

「うわっ!?!マジで!?!横須賀の娘が魚雷を全部回避しながら突っ切ったんだけど!?!」

鈴谷さんの叫びを聴きながら脱力する。あれは本当に心臓に悪かって・・・だってあたしと大井つちの魚雷だよ?20射線の酸素魚雷が4回分襲いかかるのに、それにわざわざ突っ込んで行くとかもう狂気の沙汰だよ・・・

「おおー、魚雷がいつぱい命中しましたわね。流石は重雷装巡洋艦のお二人ですわ!!」

「ええ、北上さんの凄さが分かりましたか?」

「これは私も負けていられませんわ。」

熊野さんと大井つちが褒めてくれてるけど、あれは横須賀の娘が・・・もういいや・・・雪島も砲撃で敵を牽制しながら近づいてるし、あたし達も砲撃をしますかねえ。

「ああ、うん、そだねー敵の数もかなり減ったから、このまま殲滅するよー」

「よおーし、いっくよー!!うりゃあ!!」

「分かりましたわ!!とおおお!!」

鈴谷さん達も砲撃を始めたし、こっちはあらかた片付いたかなあ。

「状況はどうなっている？」

「えっと・・・空母機動部隊から翔鶴さんと瑞鶴さんが離脱しました。ですが横須賀の艦隊が敵機動部隊を潰してくれたので、制空権は奪い返しています。長門さんと天龍さんの部隊はかなり被弾してしまいました。敵の艦載機も消えて戦況はこちらに傾いています。北上さん達は横槍を入れようとしていた部隊を壊滅させたようです。一人で戦闘していた横須賀の叢雲さんも、損傷はあるものの無事との報告を受けました。」

「なんとか乗りきれたようだな・・・こちらもかなりの損害を受けてしまったが、あれだけの部隊を相手にしておいて、轟沈が一人も出なかったのは僥倖だ。しかし潜水艦の二人には何もさせる事なく終わってしまったか・・・私もまだまだ甘い・・・」

「では引き続き敵の掃討戦をしろ。敵を殲滅するまで油断するなよ。」  
「分かりました。そのように通達します。」

「とりあえず防衛は成功したようなので、避難勧告を終了させておくか。」

「では曙、綾瀬さんに繋いでくれるか？」

「分かったわ・・・はい。」

「もしもし、葛原です。」

「綾瀬ですが、どうされましたか？」

「深海凄艦の大規模な襲撃を撃退しました。避難勧告を終了して大丈夫だと思われれます。」

「おお!!それは良かったです。街にも被害があつたとの報告は受けていないですし、無事に終わったのであればなによりです。流石は葛原提督、士官学校で成績優秀だっただけの事はありますなあ。」

「無事に終わった事で綾瀬さんもかなり機嫌が良いようだが・・・自分としては褒められるような事は出来ていない。」

「いえ、今回に関しては援軍に来てくれた横須賀の艦隊の力が大きかった。我々だけでは鎮守府が滅んでいたでしょう。それに今回は横須賀の実力を理解出来なかった為に、市民の皆様には無駄な避



難勧告を発令してしまいました。」

「・・・無駄だなんて言わないで頂きたい。我々一般市民は深海凄艦の襲撃に対して無力です。なのでいざと言うときに我々に残された手段は逃げるしかありません。確かに今回の結果だけを見れば無駄だったかもしれませんが、次回もまた上手く防衛が出来るとは限らないのです。そんな時に避難勧告を躊躇われてしまえば、多くの市民が犠牲となってしまいます。ですから避難勧告の発令に関しては躊躇わないで頂きたい。」

先程までの上機嫌な雰囲気から一転して、少し怒気を含んだ真剣な雰囲気だ。これは自分の失言だったな・・・横須賀の圧倒的な戦力を目の当たりにして、少し卑屈になってしまったか・・・

「失礼しました。今後も避難勧告が必要だと感じたらすぐにご連絡させて頂きます。」

「ええ、宜しくお願ひします。それではお互いに忙しいでしょうからこれで失礼しますね。」

「ええ、ありがとうございます。ではこれで。」

短い通話を終えた後に少し目を閉じて気持ちを入れ換える。まだ問題が全て解決したわけではないのだ。しっかりとしなくては・・・

「大丈夫？コーヒーでも飲む？」

大淀でも曙でもない声を聞いて一気に意識が覚醒し、目を開けるとそこには心配そうに見つめてくる小森の姿があった。

「・・・小森か。」

「きゃあああ!!」

「な、何者ですか!？」

「ひい!!」

大淀と曙も小森に気が付いていなくて、突然声をかけてきた事に驚いたようだ。それでも大淀はとっさに警戒出来るあたり肝が据わっているのだろうか？そしてその声に驚いた小森が自分の椅子の後ろへと隠れてしまう。

「落ち着け、こいつは今日着任予定だった士官候補生の小森だ。不審者じゃないから警戒しなくて良い。」

それにしても声を掛けられるまで全く気が付かなかつたな・・・と  
いうか執務室に入る時に声をかけろよと思うが・・・先が思いやられ  
るな。

1111話（防衛戦5十小森登場）

突然現れた小森に動揺している大淀と曙であったが、自分が危険は無いと言った事で少しは落ち着いたようだ。まあ、誰だっけいきなり部屋の中に知らない人が居れば驚く。自分も士官学校の寮で初めて小森を見つけた時は驚いたものだ。

「ちよつと!!いきなり脅かさないでよね!!」

「ひい!!」

「やめておけ曙。」

「で、でも!!何も言わずに執務室に侵入するなんて非常識だわ!!」

「まあ、それが正論なのだが…あんまり怒ると小森が逃げてしまう。こいつが逃げて隠れてしまったら見付けるのはほぼ不可能だ。」

「なんなのよそれ…」

冗談だと思いかもしれないが、小森の逃走と潜伏能力は異常だ。ただでさえ駆逐艦並みに小柄な体格で影が薄く、特徴と言えば腰のあたりまで伸ばした黒髪くらいの地味な少女で、吹雪型に混ざれば全く違和感を覚えないだろう。実際に吹雪型に紛れ込んで教官の目から逃れたのも見たことがある。そしてただでさえ気配が薄い彼女が本気で隠れようと思つたら、普通の人間どころかスペックの高い艦娘達でも難しいのだから、非常に厄介な事になる。

「逃げ隠れる以外に悪い事はしない臆病な奴だから、そこは諦めてそういうものと割り切つてやってくれ。」

あ、お菓子のつまみ食いくらいはしていたか。まあ、その程度なら気にする必要もないか。

「…提督がそこまで言うなら分かったわ。」

曙はまだ不満そうな表情だが、とりあえず引いてくれるようだ。大淀も何も言わないが似たような感じか。

「では大淀は引き続き前線との通信を担当してくれ。曙は…そう言えれば夜戦から戻った部隊にきちんと指示を出していなかったな…今どうなっている?」

「えつと…重傷者から順番に修理用の入渠施設を使つてはまずよ。」

うちも長門鎮守府の生き残りも練度が高い人は居ないから、あまり時間はかからないと思うわ。今戦闘に出てる人達が戻るまでには使い終わると思うけど？それと損傷が無い娘達は通常の入渠施設を利用してもう休んでるはずよ。」

ふむ、それならば高速修復材を使う必要はないか。消費資材に関しても夜戦組はそこまで問題無いだろう。

「旗艦の金剛と球磨はどうしている？」

「ちよつと確認するわ・・・金剛さんは今修理用の入渠をしてるところで、球磨さんは入渠を終えて報告書を書いてるみたいね。」

「なるほど、なら報告は金剛の入渠が終わってからで構わない。長門鎮守府の生き残りは？」

「えつと・・・重傷者が多かったから先に入渠を終えているみたいね。木曾さんが時間が取れるのであれば揃って挨拶がしたいって言ってるわ。」

「分かった、すぐに執務室に来るように伝えてくれ。あとは・・・そうだな、横須賀鎮守府の援軍の本隊がいつ頃到着するか確認しておいてくれ。」

姫級討伐の話は横須賀の本隊が到着して、叢雲が戻って来てからで良いだろう。もうすぐ長門達の方も終わるだろう。

かなりの激戦を乗り越えて僕達は深海凄艦に勝利し、今は掃討戦に移行している。こっちもかなりの損害を受けてしまったけど、なんとか皆沈まずに生き残れたみたいだね。

「オラオラオラ!!この天龍様から逃げ切れると思ってるのか!？」

「うふふ・・・私のお洋服ボロボロにされちゃったからねえ、逃がす訳にはいかないわねえ。」

天龍さんも龍田さんもかなり損傷を受けてるけどまだまだやる気みたいだね。でも姉さんも夕立もボロボロだし僕と春雨で援護に行こう。

「くっ・・・あと二隻沈めないと・・・また夕立にいつちばんを持っていかれる!!」

「夕立だつて・・・まだやれるっぽい!!」

「ちよつと姉さん!!夕立!!ボロボロなんだから無理しないでよ!!掃討戦は僕と春雨で行くから下がって!!」

「で、でも」

「でもじゃない!!沈んだらどうするのさ!?それじゃあ春雨行くよ。」

「が、頑張ります、はい。」

全く・・・姉さんの一番への執着は困ったものだよ・・・夕立も無茶な戦い方するから目を離せないし・・・これは提督から注意して貰ったほうが良いのかな?でも二人共凄く頑張ってるから、やる気に水を差すのもどうかと思うし・・・やっぱり僕と春雨でちゃんとフオロ―するのが一番なのかなあ?

掃討戦は空母を沈めた横須賀の人達が反転してきてほとんどやっちゃったね。これだと姉さん達が無理して来ている、ほとんどやる事がなかったんじゃないかな?

「ん?し、時雨姉さん!?海が光ってる!」

「わあ!?!本当だ!!ドロップ艦を見るなんて久し振りだね。誰が来るんだろ?」

深海凄艦を倒すとたまに海が光って、艦娘が生まれる事がある。通称ドロップ艦ってやつだね。ここ最近では前線に出る事が多かったけど、なかなかドロップ艦には会えなかったんだよね。誰が来るのかちよつと楽しみだね。しばらく柔らかい光を眺めていると、だんだんと光がおさまってそこに居たのは・・・

「はいはい!!白露型駆逐艦村雨だよ。みんな宜しくね♪」

「村雨!」

「む、村雨姉さん!?!・・・村雨姉さん!」

僕の姉妹艦が来てくれたんだ!!本当に・・・本当に嬉しいよ・・・

「村雨姉さん!!村雨姉さん!!」

「ちよ、ちよつとどうしたのよ春雨!」

普段おとなしい春雨も感極まって村雨に抱き付いて大泣きしてる・・・前の村雨が春雨を庇って沈んだから気持ちはよくわかるけど、

生まれたばかりの村雨はちよつと困ってるみたいだね。

「やあ、村雨。会えて嬉しいよ。」

「ちよつと時雨姉さん？見てないで助けてよ？」

「あはは・・・ごめんね？でももうちよつとだけ春雨の好きにさせてあげてくれないかな？」

「はあ・・・訳ありってことねえ・・・なんとなく理解したわあ・・・」

そう言つて村雨は泣きじやくる春雨を抱き締めてくれた。やっぱりなんだかんだ言つても姉妹艦だから妹が可愛いんだろうね。最初は困惑していた村雨も、今では優しい表情をしているよ。やつぱり僕の自慢の妹だ。

「ああ!?村雨じゃん!?なにに!?ドロップ艦!？」

「しかも春雨を抱き付いてるっぽい!?夕立も歓迎するっぽい!!」

「ちよ!?白露姉さんと夕立まで!？」

騒ぎを聞き付けたのか、姉さんと夕立もやってきて、ボロボロの状態なのも構わずに村雨へと抱き付いていく。

「あはは、ここは僕も歓迎しておこうかな？」

「ちよつとお!?もおくなんなのよおく」

姉妹艦全員で村雨を歓迎して、服も髪もぐちゃぐちゃになった村雨がため息を吐いてるけど、その表情はちよつと嬉しそうだ。今度はずつと一緒に戦いたいな。

## 112話（防衛戦終）

掃討戦も終わりボロボロになりながらも全員が生き残れた事に安堵する。総旗艦として提督の命令に伝えられて本当に良かった。戦後の確認の為に皆が集まって来て、横須賀の者達も損傷の確認等をやっているのだが……

「なあ、陸奥よ。あれは……どうするべきだろうか？」

「えつと……困ったわね……」

今私達が困っているのは……ドロップ艦の村雨の件だ。今は白露達が感動の再会といった雰囲気歓迎していて、こちらとしては邪魔をしたくはないのだが……

「陸奥は合同で敵艦隊を壊滅させた時、ドロップ艦の扱いがどうなっていたか覚えているか？」

「うーん、細かい所までは覚えてないけど……その戦闘における貢献度が高い方が優先権を持っていたと思うわ……」

「やはりそうか……」

はつきり言って北九州鎮守府の全部隊と横須賀の艦隊で貢献度を比べても横須賀の圧勝だ。つまり優先権としては横須賀にあると考えるのが当然なのだ。だが白露達に村雨は横須賀の所属になるからお別れだと告げるのは酷な話だ……

「やっぱり横須賀の人達と話をするしかないと思うわ。とりあえず旗艦同士で話をして、まとまらなかつたら提督に交渉して貰いましょう。」

「それしかないか……」

うう……助けて貰った横須賀の者達に、戦果であるドロップ艦を譲って欲しいと言うのは凶々しくて気が引けるのだが……白露達の為に恥を忍んで頭を下げに行こう。意を決して陸奥と一緒に横須賀の者達に近づいていくと、向こうもこちらに気がついたようで、旗艦の叢雲が近づいて来て、キツとこちらを睨んでくる。なんだか少し目が赤くて……少し涙目なのだろうか？

「ぐす……あ、あんた達、誰も沈んで無いでしょうね？」

「あ、ああ。かなりの損害は出てしまったが轟沈した者はいない。これも横須賀の艦隊が敵艦隊の注意を引き付けてくれたおかげだ。感謝する。」

「そう。なら良いわ。こっちも無事だし掃討戦も終わったからさっさと帰るわよ。」

「そうだな。すぐに帰還したいのだが・・・その前に一つだな・・・」  
「なによ？言いたい事があるならはつきり言いなさいよ。」

「いや、その・・・ドロップ艦の扱いについてなのだが・・・」

「・・・うちにはもう村雨が居るから、あんた達の所で保護してやりなさいよ。」

「ほ、本当に良いのか!？」

「ええ、用件がそれだけなら、私達は先に戻るわよ。」

「分かった。我々もすぐに帰還しよう。」

ふう・・・案外話せばなんとかなるものだな。これで白露達を悲しませずに済んだ。そっけない態度だったが、横須賀の叢雲はやはり良い娘なのだな。

「ふくん、良かったじゃない。簡単に譲ってくれて。」

「ああ、本当にな。では我々も帰還する。各旗艦は被害報告をしろ。大破して航行が難しい者は他の者が曳航してくれ。」

「叢雲さん、本当に良かったのですか？」

「ぐす・・・なによ秋月？文句でもあるの？」

「い、いえ、その・・・提督に確認取らずに譲っちゃいましたけど・・・」  
「司令官からこちらでの事は私に任されてるから問題無いわ。あんなの見せられて邪魔できるわけないでしょ。それにうちの司令官だったら、同じことをしてるはずよ。」

「・・・それもそうですね。うちの提督はとっても優しい方ですからね。」

「提督、長門さんから通信です。」

「分かった。代わってくれ。」



「提督、掃討戦が終了して今から鎮守府へと帰還する。かなりの損害が出てしまったが、轟沈した者は誰もいない。横須賀の艦隊も無事だ。」

うちの艦隊の練度で誰も沈まずに済んだか。横須賀の力が大きかったとは言え、多大な戦果と言っても良いだろう。

「誰も沈まずに済んだならなによりだ、皆良く頑張ってくれた。では被害報告を聞かせてくれ。」

「空母機動部隊、翔鶴が大破、摩耶が中破、赤城・加賀・睦月が小破。次に打撃部隊は陸奥・大和・高雄中破、私・神通・如月小破。水雷戦隊は白露・夕立大破、天龍・龍田中破、時雨・春雨小破。遊撃部隊は島風の小破のみ。後方支援部隊は漣・隴・潮小破。潜水艦は被害無し。以上だ。」

これはまた派手にやられたな。特に翔鶴の大破と陸奥と大和の中破が痛い。うちの艦隊の中では正規空母と戦艦の練度が高めなので、修理に必要な資材も多くなる。と言っても全員練度20以下なので莫大なつてほどではないが・・・それと艦載機もかなり落とされていくはずだから、ボーキサイトも大量に消えるか・・・

「了解した。では警戒を怠らずに帰還しろ。」  
「ハッ!!」

ふう・・・とりあえず資材が枯渇する事は無いはずだが、横須賀が姫級の討伐に使う分を考慮すると、これ以上の大規模戦闘は避けたいところだな。呉鎮守府から資材がどれくらい送られて来るのかも分からない。不確定要素をあてにするのは避けておこう。

「提督、横須賀の本隊だけだと一時間くらいで到着するそうよ。」

「了解した。今手隙の者は誰が居ただろうか？横須賀の艦隊が休憩出来る場所を準備させたい。夜通し航行してきたはずだから、寝られる場所を用意しておくべきだろう。」

「えっと・・・衣笠さんと羽黒さんね。あと出撃しないなら龍驤さんも空いてるわ。」

「ではその3人に部屋を用意させてくれ。」  
「分かったわ。」

コンコンコン

「木曾だ。」

「入れ。」

入室の許可を出すと木曾を先頭に朝潮・陽炎・不知火と続いて入って来て、横一列に並んで敬礼をしてきたので答礼する。

「まずは救助して頂き感謝する。元長門鎮守府所属の木曾以下4名、北九州鎮守府の指揮下へと入る。」

「了承した。私の方針としては、戦果を上げる事に重点を置いているが、艦娘の練度向上の為に無闇に沈むような戦いは避けるべきだと考えている。だから諸君も激戦であつても生き残るつもりでいてくれ。」

「ああ、了承した。ならどんな過酷な戦場でも生き抜けるように鍛えないといけないな。」

「そこに関しては容赦なく鍛えるつもりだ。それと私は信賞必罰が組織の基本だと思っている。軍人として規律ある行動を求めし、功績をあげたならばそれ相応の報酬を渡すつもりだ。」

「ほう？報酬か・・・長門鎮守府ではそんなものは無かったな。いや、もちろん待遇が良いに越した事は無い。その恩にはきっちりと報いるつもりだから期待していてくれ。」

やはりというべきか、長門鎮守府もブラックな鎮守府だったようだな。

「ああ、今後の諸君の活躍に期待している。では諸君も疲れているだろう。まずはゆっくりと休んでくれ。大淀、部屋の手配は出来ているか？」

「はい、部屋はまだ有り余っています。木曾さんは球磨型ですし、球磨さんと同室ですね。陽炎さんと不知火さんも同型ですので同じ部屋を用意しています。朝潮さんは・・・今のところ姉妹艦が居ないので一人になってしまおうのですが・・・」

「大丈夫です!!問題ありません!!」

「では姉妹艦が来るまでは一人部屋でお願いします。」

流石は秘書艦だな。しっかりと受け入れの事も考えてくれている

ようだな。

「では俺達は部屋で休ませて貰うが・・・だがお前も秘書艦の二人もかなり疲れているようだし、少し休んだほうが良いんじゃないか？」

「・・・やることを済ませたらちやんと休む。心配するな。」

「・・・そうか。なら悪いが先に休ませて貰うとしよう。ではこれで失礼する。」

木曾達の敬礼に答礼をして送り出す。一目見るだけでも疲労しているのが分かってしまうようだな・・・そろそろ本当に休みたいし二人も休ませたいのだが・・・いつの間にか机の上にあつたコーヒーを飲んで、少し気分を切り替える。さて、次は何をするべきか・・・

### 113話（防衛戦事後処理）

「提督、呉鎮守府の輸送艦隊から通信が入っています。」

「分かった、代わってくれ。．．．こちら北九州鎮守府の葛原です。」  
「こちら呉鎮守府輸送艦隊旗艦の多摩ニヤ。対姫級作戦用の支援物資を持って来たニヤ。もうすぐ到着するから輸送船の入港許可が欲しいニヤ。」

ほう？輸送船を使うってことはかなりの量が期待出来そうだな。ずいぶんと気前が良いな。それに思っていたよりも早い到着だな。

「許可する。支援物資に感謝する。まさか輸送船を使うほどの支援物資を送ってくれるとは思っていなかった。」

「北九州鎮守府が抜かれたら瀬戸内海に敵が入って来ちゃうニヤ。うちの提督は瀬戸内海に敵が入るのをとつても嫌がるからニヤ。」

なるほど。瀬戸内海は久藤提督の傘下で入口を封鎖して、安全な海となっていたはずだ。もし仮に北九州鎮守府が抜かれても、別の鎮守府から艦隊を出して押さえ込めるはずだが、それよりも資材を与えて、北九州鎮守府を生かしておいたほうがコストが安いと言うわけか。

「ああ、それとうちの提督から伝言ニヤ。『当たり前だからボーナスだ。』って言ってたニヤ。よくわかんないけど賭け事でもしてたのかニヤ?。」

大当たりって事は．．．久藤提督は自分が渡した情報から、長門鎮守府の原田提督が敵前逃亡した証拠を発見したのだな。これは朗報だ。

「賭け事などはしていないから気にするな。久藤提督にはありがとうございますとだけ伝えておいてくれ。」

「よくわかんないけど分かったニヤ。あと挨拶とか面倒な手続きとかは省いて良いかニヤ?多摩はそういう堅苦しいの苦手なのニヤ。さっさとやること終わらせてゴロゴロしたいニヤ。」

．．．ずいぶんと自由な雰囲気だな。だが元々資材の受け渡しを秘密裏にしていたのであれば、手続き等を省く習慣が出来ているのかも

しれないな。そして多摩のこの性格も余計な事をせずに仕事だけをやると考えれば、よく後ろ暗い事をしている久藤提督からしたら便利なのではないだろうか？とりあえず手がかからないのはこちらとしても助かる。」

「ああ、了承した。資材管理担当の明石に言っておく。」

「話が早くて助かるニヤ。では失礼するニヤ。」

これで呉鎮守府とのやり取りは大丈夫だ。あとは明石に任せるとしよう。

「大淀、明石にもうすぐ呉鎮守府の輸送船が到着するから、資材の受け取りをするように伝えてくれ。それと呉の艦隊は資材を降ろしたらすぐに帰るそうだ。」

「分かりました。そう伝えておきます。先程連絡がありました。金剛さんの入渠が終わったそうなので、もうすぐ報告に来るそうです。」

コンコンコン

「Hey 提督、金剛とクマーデース。」

「入れ。」

報告の為に執務室へとやってきた金剛と球磨だが、なんだか微妙な雰囲気だな。二人の敬礼に答礼する。

「Sorry 提督、長門鎮守府を助ける事が出来なかったネ。」

「球磨達も頑張ったクマ・・・でも4人しか助けられなかったクマ・・・」  
「いや、お前達は十分に働いてくれた。むしろお前達の戦果だけを見れば快勝だからな。だから今回の件は私と長門鎮守府の責任だ。お前達が気に病む必要は無い。」

とは言ってもそんなにすぐに気持ちの切り替えが出来るものではないか。

「・・・OK キソー達を助けられただけでも良かったと思う事にするネ・・・私達の艦隊も轟沈はしませんし、損害も軽微だったデース。入渠も終えて皆休んでマース。」

「むう・・・次こそは大活躍するクマ・・・それとこれが今回の報告書

クマ、金剛さんの分も球磨が代わりに書いておいたクマ。」

「分かった。夜戦明けで大変だっただろう。お前達もゆっくり休んでくれ。」

「分かったクマ。それじゃクマ達はこれで失礼するクマ。・・・金剛さん？どうしたクマ？」

報告を終えて球磨が退室しようとしていたが、金剛はその場に留まっている。まだ何か用件があるのだろうか？

「少し提督にお話がありマース。クマーは先に休んでいて下サーイ。」  
「ん？分かったクマ。」

球磨は特に気にした様子もなく退室した。そして金剛はこちらをじつと見つめたままだ。

「それで、話とはなんだ？」

「・・・提督もオーヨドもボーノもかなり疲れているように見えマース。少し休んだほうが良いのではないですか？」

「そうだな。そろそろ落ち着いてきたし、交代で休憩を取るべきだな。それに関してはこちらで上手くやるから気にするな。」

私と曙は1時間半くらい仮眠は取ったが、大淀はずっと働かせてしまったからな・・・

「・・・提案デスが、秘書艦の業務を私達金剛型姉妹が代わりマース。だから提督達は全員休憩するべきデース。」

「なんだと？」

「戦後の処理くらいは私達でも出来マース。高速修復材を使うかどうかの判断だけすれば、問題ありません。報告書等の書類は榛名と霧島が得意デス。比叡にサポートに動いて貰えば完璧ネ。」

「だがお前達は夜戦明けだろう？疲労が溜まっているのではないか？」

「私達は昨日の夕食後から呼ばれるまでは休んでマース。ずっと働いていた提督達よりはマシデース。それに戦艦は体力あるから問題Nothing」

ふむ・・・正直に言えば大淀も曙も休ませておきたいから魅力的な提案だな。自分自身も会う艦娘達が心配するくらいには疲労してい

るし、敵艦隊も大打撃を受けてしばらくは動きは無いと思われる。休める時に休んでおくべきか。

「分かった。では金剛に秘書艦代行を頼む。高速修復材は大破した者に使ってくれ。それと横須賀の本隊がもうすぐ到着するのと、呉鎮守府からの支援物資が到着する。話は通してあるから受け入れを頼む。それと横須賀の叢雲が何か言ってきたら、出来るだけ要望を叶えてやって欲しい。彼女達が姫級の討伐に集中出来る環境を提供するべきだ。それと他の所から通信があった場合だが、軍関係者以外の通信は時間が取れたらかけ直すとだけ伝えてくれ。あともし緊急の場合はずぐに起こしてくれ。良いか?」

「OK 任せて下さいネ。」

「では私は私室で寝てくる。大淀と曙も金剛に引き継いで休め。」

「・・・分かりました。金剛さん、何かあればすぐに起こして構いませんので。」

「私も秘書艦補佐だから、何かあったら起こしてよね。」

「OK 心配しないで休んで下サーイ。」

では時間を無駄にするのも悪いし、さっさと休むとするか・・・

「ああ、そう言えば・・・」

「What? まだ何かありますか?」

「小森、ついでだからお前の部屋に案内しておこう。」

「あ、うん、分かった。」

部屋の隅に居た小森に声をかけておく。忙しくて部屋に案内する余裕がなかったからな。流星にずっと放置はまずいだろう。

「WOW!!だ、誰ですカ!?!いつからこの部屋に居たのデスか!?!」

「あー、士官候補生の小森だ。今日から北九州鎮守府で実地研修している。たぶん金剛が部屋に入る前からずっと居たはずだぞ?」

ついさっきまで存在を忘れていたから自信はないけれど・・・

「Oh!!これがニンジャですか!?!まったく気が付かなかったデース・・・Ah・・・失礼しましたネ。金剛型一番艦の金剛デース。宜しくお願いしマース。」

「ひっ!!あ、はい、小森・・・です。」

おお!?!あの小森がちゃんと自己紹介をしたらだ?!小森も提督になる為に頑張っているのだろうか?何はともあれ良い傾向だな。



## 114話（大本営人事会議）

この国において鎮守府はかなり特殊な場所である。通常兵器で撃破が困難な深海棲艦に対抗し得る唯一の存在である艦娘を保有する鎮守府は国防の要だ。しかし鎮守府を管理しているのは日本の防衛を担っていた自衛隊ではなく、大本営という新しい組織だ。

元々は艦娘と提督という未知の存在を軍に組み込む法律が存在しなかった為、新たな枠組みとして大本営という組織を作り、国が鎮守府を管理しようとしていた。

だが提督の才能を持つ者は希少な存在で、鎮守府の運営には提督が必要不可欠だ。そんな提督達の一部が国の安全確保を背景として、提督の権利を主張し始める。要は国を守って欲しければ自分達を優遇しろと言うことだ。

結果として提督を管理するはずの大本営は、日本政府の手から離れてしまい、有力な提督達が管理する組織と成り果てた。

そんな大本営は現在絶妙なバランスで成り立っている。まず舞鶴鎮守府の鶴野提督と呉鎮守府の久藤提督が率いる2大派閥がある。犬猿の仲である二人の派閥は拮抗し、常に小競り合いを続けている。その両者の小競り合いが抗争へと発展しない理由はいくつかあるが、まずは憲兵隊の存在だろう。

憲兵隊は提督の才能の無い者達の集団で、名目上は不正な行いをした提督を取り締まる組織だ。しかし実際は提督を守ろうとする大本営に所属しているので、上手く機能していない。だが鎮守府の門番や周辺の警備など、対人間のトラブルを解決する部署として一定の地位を得ている。そのトップである黒川が、鶴野提督と久藤提督の争いに介入して、どちらか一方が強くなりすぎないように調整している。

そしてもう一つの大きな理由は横須賀の海原提督と佐世保の熊井提督の存在だ。両者は政治への関心が低く、派閥としては大きな力はない。しかし武力に関しては絶大で、姫級の討伐は二人にしか出来ない。なのでもし仮にこの二人を敵に回してしまった場合、深海棲艦の襲撃を独力で止められない可能性が出てくる。よってこの二人に目

を付けられるような派手な動きは出来ない。

こんな厄介な状況の大本営の会議室に、1つの議題が舞い込んだ。会議室には数人の人間と、遠方との連絡をとるための通信機が設置してある。今回の参加者は人事課の中井、憲兵隊の黒川、鶴野提督、久藤提督、熊井提督の側近、横須賀鎮守府所属の大淀の6人だ。

「それでは緊急の人事会議を始めます。進行役は私、人事課担当の中井が務めさせていただきます。今回の議題は壊滅した長門鎮守府の件です。長門鎮守府の原田提督が殉職されたので、取り急ぎ後任の提督を選出して、防衛網の再構築が急務となっております。何かご意見のある方はいらっしゃいますか？」

「考えるまでもなからう。長門鎮守府は日本海側の鎮守府、つまりわしの管轄じゃ。だからわしが後任の提督を選んでやるから任せておきなさい。」

「おいおい鶴野のじいさんよお？今回長門鎮守府を壊滅させるって失態を犯しておきながら、任せておきなさいなんて冗談が過ぎるぜ？とてもじゃないが任せておけねえなあ。」

「ここぞとばかりに調子に乗るでない。今回の相手は集積地棲姫の指揮する艦隊じゃ。普通の提督が相手をするには荷が重からう。殉職してしまつた原田提督を責めるのは酷というものじゃ。」

「だが集積地棲姫は陸上型の深海棲艦だ。直接鎮守府に攻めて来るわけじゃねえ。報告では長門鎮守府へと攻めて来たのは4艦隊で最上位の個体はル級 elite だろ？迎撃出来てもおかしくない戦力のはずだ。」

「そこに関しては直前はかなり艦隊を消耗してしまつていたようだよ。・・・嘆かわしい事に先日北九州鎮守府に着任した葛原提督に足を引つ張られてしまつたようじゃ。・・新任で士官学校を卒業出来ていない小僧ゆえ、周囲の鎮守府との連携の取り方を理解していなかったよ。・・原田の奴も苦勞したようじゃ。・・。」

「ほうほう？新米の提督の協力が無ければ鎮守府の防衛も出来ない無能だつたって事か？そんな奴に鎮守府を任せてたのはじいさんの責任じゃねえのか？」

「口を慎め若造が!!殉職した者を侮辱するなど罰当たりじゃ!!」

「その殉職つてのも勇敢に戦った結果なら尊敬出来るが、尻尾巻いて逃げ出した上に殺されたんじゃ情けなさ過ぎて笑えてくるぜ。」

「・・・なんじゃと?」

「旧阿武町付近で大破した軍用車両が発見されている。深海棲艦の砲撃で吹き飛んで、中の人間は原型を留めていなかったが、散らばった遺品の中に軍刀と拳銃が発見されて、原田提督の持ち物だということが確認された。つまり原田提督は深海棲艦の襲撃にビビって逃げ出したって事だ。」

「それは本当に原田提督の持ち物で間違いないのかのう?」

「軍刀と拳銃に刻まれた番号を確認したんだ。言い逃れは出来ねえぞ?まさか軍刀と拳銃が盗まれて、軍用車両に乗って逃げられたなんて冗談は言わねえよな?」

「もちろんそんな馬鹿げた事は言わんよ。そこまで遺品が確認出来れば原田提督本人で間違いはあるまい。・・・それで?」

「だからそんな負け犬をまた長門鎮守府に配属されたら困るって言うてんだよ。だから俺が目をかけてる奴を着任させるべきだ。」

「ふむふむ、何か勘違いしてはおらんか?」

「・・・なんだと?」

「勝てない相手に逃げて何が悪い?提督とは希少な存在じゃぞ?街への被害が出てしまった事は残念じゃが、提督の才能を持つ者の命を守るほうが重要じゃろうか?まして艦娘達はまた建造すれば良いだけじゃ。囧として使って何が悪い?」

「開き直りやがったな糞じじい!!」

「口を慎め若造!!」

「まあ、どうせ一般市民からのためえの信頼はがた落ちだぜ?この件が漏れれば、いざという時に逃げる提督を誰が信頼するかって話だ。」

「ふん、情報操作くらいいくらでも出来る。」

「だが今回被害を受けた長門市民が納得してくれるだろうかねえ?」

「・・・そんな情報を流せば大本営の信頼を損ねる事になるぞ?」

「信頼を損ねるのはためえだ。」

会議とは名ばかりで、鶴野提督と久藤提督の口論が続いていたが、ようやく膠着状態になった。二人はにらみ合いをして沈黙し、横須賀の大淀と熊井提督の側近は我関せずといった雰囲気だ。そこでようやく動いたのは憲兵隊の黒川だった。

「お二人の主張は理解しました。しかしこのままでは話がまとまらないでしょう。そこで1つ妥協案を出させて頂きます。今回長門鎮守府の原田提督に問題があったと思いますが、久藤提督の傘下の者を長門鎮守府に着任させるのは、鶴野提督が許容されないでしょう。そこで無所属の新人を着任させる事で手打ちとしませんか？」

「・・・北九州鎮守府の時と同じ事をしようってのか？」

「ふむ、続けなさい。」

「そもそも長門鎮守府は機能不全に陥っておりますし、長門市の被害も大きく復興には時間と労力がかかるでしょう。なので面倒な仕事は面倒な新人に押し付けて、今回は多少非のある鶴野提督が譲歩する形で手打ちとしてはいかがでしょうか？」

「そうじゃのう・・・その辺りが落としどころかのう？」

「ふん、まあ、良いだろう。それで？人選については考えがあるんだろうな？」

「ええ、もちろんです。今回私が新しい提督に推薦するのは・・・」

## 115話（織田からの電話）

コンコンコン

「Ah・・・提督、起きてもらえますか？」

徹夜明けで疲れて寝ていたが、部屋の外から金剛が呼び掛けてきた。たしか金剛に秘書艦代行を任せて、小森に客室を使えと案内して、すぐに私室のベッドで眠ったはずだ。時計を見るともう昼前なので、それなりに眠れたようだな。

「・・・今起きた。入れ。」

「失礼しマース・・・」

金剛が少し申し訳なきように私室に入って来たので、あまり良くない話なのだろうな・・・

「それで、何があった？」

「その・・・変な人から電話があつて困つてマース・・・」

「変な人からの電話？そんなものわざわざ相手にする必要は無いのだから・・・」

「Oh・・・ですが軍用の回線からかかっているので困つてマース・・・提督は軍からの電話は対応すると言つてましたネ・・・」

軍からの電話なのに変な人か・・・嫌な心当たりがあるな・・・

「そいつはなんと言つていた？」

「Ah・・・May youがどうか？なんたらノブナガがどうか？難しい話ばかりで対応出来ないネ・・・」

「はあ・・・私の知り合いだな。面倒だが相手をしよう。」

ため息を吐きながら困り顔の金剛から通信機を受け取る。要件次第ではさっさと切つてやる。

「葛原だ。」

「おお!!待ちわびたぞ我が盟友よ!!なにやら秘書艦を変えたようだな？うむうむ、色々な艦娘を秘書艦にしたい気持ちは、我には深く理解出来るぞ。」

やはり織田だったか・・・

「・・・用件はなんだ？」

「うむ、聞いて驚くが良い!! ついに!! ついに我の時代が来たのである!!」

「そうか、では切るぞ。」

「待て待て待て!! 大事な話であるから、そう焦るでない!! まずは我の話聞いて貰おう。」

「私も忙しい。話を聞いて欲しければ5秒で興味を持たせろ。」

「我、長門鎮守府に着任す。」

「・・・ほう?」

まさか本当に重要な話だったとはな・・・それにしても原田提督は昨夜死んだばかりなのに、もう後任の提督が選出されたのか。大本営の奴等はどういうところは仕事が早いのだな。

「ふむふむ、流石の盟友でも驚いたようだな。つい先程命令を受けたばかりだな。大本営の奴等もついに我の実力を認めたという事だ。これで我の野望である艦娘ハーレムを作る事が可能となったのだ!! しかも長門鎮守府は盟友の鎮守府の隣であると聞く。ならば我等の勝利は約束されたも同然であるぞ!!」

「・・・そうか。」

この馬鹿はずいぶんと喜んでいるようだが、つい先程長門鎮守府が壊滅したのを理解しているのだろうか? 崩壊した施設の再建が必要だし、艦娘達は誰一人居ない、そして街の被害が甚大ならば生活に必要な物資の供給も滞るはずだ。ずいぶんと呑気な奴だな・・・

「ふっふっふっ。しかもだ!! 今回は特例として士官学校所属の艦娘を一人連れて行く事が可能なのである!! 大本営の連中は気に食わぬがここまで厚待遇ならば、我も寛大な心で受け入れようと言うものだ。」

施設が崩壊して艦娘が一人も居なければ、鎮守府として何も出来ないだろうからな・・・大本営側からのせめてもの情けなのだろう。本当に可哀想だな・・・連れて行かれる艦娘が。

「まあ、頑張れ。それで? 誰を連れて行くのかももう決めたのか?」

「よくぞ聞いてくれた!! この第六天魔王織田信長の子孫にして、いずれはこの世界の覇権を握る漢、織田信雄の右腕となる者を紹介しよう!!」

「はあ……葛原かしら？霞よ。」

「ああ……霞か……」

織田に紹介された霞は通信機越しでもわかるくらい疲れているようだな……これからさらなる困難に立ち向かわなくてはならない事を思うと、あまりにも不憫に感じてしまう。

「ええ、このクズに初期艦を頼まれてしまったのよ……本当にこのクズはあたしが居ないとなんにも出来ないんだから……とりあえず明日の朝には長門鎮守府に着任すると思うから、宜しく頼むわよ。」

「そうか……大変な仕事だとは思いますが頑張ってくれ。何かあれば相談してくれて構わない。軍事的な話であれば私が協力出来るし、設備や財政面での問題ならば北条を頼ると良い。あいつも霞の頼みであれば聞いてくれるだろう。」

「そう言つて貰えると助かるわ。申し訳ないけれど落ち着くまでは頼りにさせて貰うわ。」

「気にするな。霞には士官学校時代に世話になったからな。」

「あ、あの……盟友よ？なんか我の時と対応が違い過ぎではなからうか？」

織田は何を当たり前の事を言っているんだ？おかしな奴とまともな奴で対応を変えるだなんて当たり前ではないか？

「では霞、北九州鎮守府の提督として長門鎮守府への着任を歓迎する。今後は協力して深海棲艦の脅威へと立ち向かおう。」

「ええ、こちらこそ隣の鎮守府として良い関係を築けるように、努力させて貰うわ。」

「め、盟友よ!!我は!?我には何かかけるべき言葉は無いのか!?!」

「そうだな……あまり霞に迷惑をかけないように頑張れ。ではこれで失礼する。」

「盟友ううううう!!!」

通信を終えて一息吐く。よし、それでは頭を執務に切り替えるか。

「Ah……今の人は提督の友達ですか？」

「いや、士官学校時代の知り合いだ。明日長門鎮守府に原田提督の後任として着任するそうだ。」

「Oh・・・あの人が提督になりますか・・・大丈夫なのですか？」  
「まあ、ヤバい奴だと感じるかも知れないが、あいつは艦娘ハーレムを作るとか寝言を言っつて、厨二病を患っているせいで言動がおかしく、座学は艦娘と深海棲艦の知識は豊富だがそれ以外はダメで、演習では想定外の事が起きたら混乱する頼りない奴だが、まあ、悪い奴ではない。」

「Oh・・・全く大丈夫な気がしないデス。」

まあ、あれで基礎は押さえているし、こちらのアドバイスなどはきちんと聞く度量はあるから、まだマシだろう。しかも艦娘や深海棲艦の知識に関しては自分よりも遥かに上だ。あいつはどこで調べたのかは知らないが、教本に載っていないような情報も知っている。各艦の特性や能力の傾向を始めとし、容姿や性格にその艦娘達の軍艦時代のエピソードまで把握している。あいつの艦娘好きは筋金入りだ。

「それよりも私が寝ている間の事を聞かせて欲しい。」

「OK 出撃してた艦隊は無事に帰って休んでマース。横須賀の本隊も到着して一緒に休んでマース。ムラクモーはお昼から姫級討伐に出撃したいと言っつてましたネ。呉からの輸送部隊は資材を置いて帰ったヨ。それから民間の方からいくつも通信ありましたガ、全てお断りしてマース。一応榛名がリストを作っつてるネ。」

「分かった。では準備を整えたら執務室に行くから先に行っつてくれ。」

「OK」

さて、今日もまた忙しい1日になりそうだ。



## 116話（叢雲対話）

執務室に戻ると中には大淀と金剛姉妹と叢雲が居た。大淀は金剛姉妹から話を聞いて引き継ぎをしているようだ。そしてこちらに気が付いた叢雲が話しかけてくる。無事に敵艦隊を撃破したからか、少し上機嫌な雰囲気だな。

「あら？もう起きたのね？」

「ああ、まだ集積地棲姫を撃破した訳ではないからな。」

「そうね。でも体調管理も提督の仕事よ。うちの提督みたいに頑張り過ぎて倒れたら、本当に大変な事になるんだから・・・休める時にはちゃんと休みなさいよ。」

「そう言っただけなら助かる。それで、金剛から少しだけ聞いたが、昼から集積地棲姫の討伐に向かうらしいな？」

「ええ、あれだけの部隊を送り込んで来たって事は、敵の本拠地は手薄なはずよ。あんた達が食事とか寝るとことか用意してくれたから、うちの艦隊もちゃんと休憩が出来たわ。なら今度は私達が戦闘で恩に報いる番よ。」

恩に報いるなんて大袈裟な・・・横須賀の艦隊が姫級討伐の主戦力なのだから、万全の状態にして送り出すのがこちらの仕事なのだが？「それで、作戦は考えているのか？」

「細かい作戦を考えるには情報不足よ。だから私が現場で指揮をするの。状況次第では今日は偵察だけで撤退するかもしれないし、一気に殲滅するかもしれないわね。」

「・・・一応確認なのだが、海原提督が作戦の立案をするのではないのか？」

「ええ、私が現場で判断するわ。もし私の手に負えない状況なら、一度この鎮守府に戻ってうちの提督に連絡するわ。」

「・・・それが横須賀のやり方ならば口を挟むべきではないか。」

「そうして貰えると助かるわ。お礼に一つ大事な事を教えてあげる。」  
そう言っただけで少し上機嫌だった叢雲の表情が引き締まる。

「もし今後姫級とかの上位種と戦う気があるのなら、いつでも艦娘と

通信が出来るなんて考えは捨てなさい。」

「・・・どういう事だ?」

「簡単な話よ。深海棲艦が通信妨害とか通信傍受をするのよ。」

「なんだと!?!そんな重要な話は士官学校でも聞いた事が無いぞ!?!」

「仕方ないわ。これは私達の経験から判断してるだけで、はつきりとした証拠は無いもの。通信妨害の方は距離や天候の問題かもしれないし、通信傍受の方は敵艦隊の動きから推測しただけで、はつきりとした証拠は無いのよ。でも私達は深海棲艦がそういうことをしている前提で行動してるのよ。だから私達は戦場に出たら無闇に通信をしないわ。」

叢雲が嘘をついているとは思えないし、経験則からの判断とは言っているが、信憑性は高いと考えるべきだ。うちの鎮守府でも春雨が深海棲艦の通信を傍受した事もあったので、逆が無いと考えるのは甘いだろう。

「そうか・・・貴重な情報に感謝する。しかしこの情報はきちんと共有しておいたほうが良いのではないか?」

「さあ?上の方の連中は知ってると思うのだけど、あんた達が聞いてないなら伝える必要が無いって判断したんじゃないの?」

「ふむ・・・確かに一般的な提督ならば、近海の防衛と遠征による資材回収くらいしかやらないから・・・そもそも上位種と遭遇する事が無いって事か?」

「それもあるけど、この情報を馬鹿が知ったらどうすると思うかしら?」

馬鹿がこの情報を知ったら?もし仮に織田がこの情報を知ったらどう考えるだろうか・・・

「・・・通信が危険だと考えて、出撃させた艦娘と連絡しなくなる?」

「ええ、そんな馬鹿がいるかもしれないわね。私達は歴戦の艦娘だから、提督の指示がなくてもある程度の判断が出来るけど、あまり戦闘経験の無い艦娘を指示無しで出撃させるなんて、沈んで来いと言ってるのと同じね。通常の深海棲艦が相手ならそこまで心配する必要無いのに、通信で指揮せずに艦隊を沈めるなんて愚の極みね。でもそん

なことをする奴が居ないとは言えないでしょ？」

「そうだな・・・ちなみに経験からしてどのレベルから危ないとかあるか？」

「そうねえ。flagship級くらいなら気にしなくて良いと思うわ。改flagship級とか鬼級からは気を付けたほうが良いわね。」

「分かった。心しておこう。」

おそらくこの情報は横須賀鎮守府が何度も苦しめられたからこそ得られた情報だろう。こういう知識が先人の知恵と言う奴だから、大事にしなくてはな。

「では話を戻すが、昼からの姫級討伐だが、我々に何かして欲しい事はあるか？」

「無いわね。姫級の相手は私達だけでやるわ。むしろ一緒に来られたら足手纏いよ。」

「やはりそうなるか・・・」

「あ、でも一つあったわ。戦闘後の話だけど、大規模な輸送艦隊が欲しいわね。集積地棲姫が溜め込んだ資材を回収しないと、また深海棲艦の溜まり場になってしまうわ。周囲の掃討と護衛は私達がやるから、出来れば輸送船を出して欲しいのだけど・・・」

輸送船を敵の本拠地に送るのか・・・確かに輸送船の積載量はかなり多い。しかし速力はともかく小回りが効かず、サイズも大きいので深海棲艦からすれば良い的だ。だが横須賀の艦隊が護衛をするのであれば問題無いか。

「分かった。輸送船と駆逐艦の輸送艦隊の両方を準備しておこう。」

「助かるわ。・・・それにしても仕事が物凄くしやすく調子狂うわね。」

「仕事がしやすいのであれば何が問題なのだ？」

「いえ、こっちに来る前にあなたの事調べさせて貰ったけど、あんたってあんまり評判が良くなかったのよ。教官潰しなんて渾名をつけられて、とつても反抗的な人物だって・・・」

「その事か。それは叢雲が優秀で結果を残しているからだ。それなら

ばきちんと支援をした方が私にとって都合が良いだけだ。早急に姫級の脅威から解放されたいのだな。」

「ふーん、まあ、悪く無い回答ね。じゃあ士官学校の教官ってそんなに酷かったのかしら？私はその辺は詳しくないのよね。」

「あいつらは基本的に無能な奴らだ。そもそも優秀な提督ならば、鎮守府の運営をさせている。だから教官なんてやってる連中は、なにかしら問題を起こした連中だ。そんな連中でも提督の才能は持っているから、一応確保しておきたいので教官をやらせているのだろう。・・・一人だけ例外が居ただけだな。」

「ふーん、酷い話ね。」

叢雲は自分から聞いておいて、あまり興味が無さそうな反応だな。

「そう思うなら海原提督に動いて貰ったらどうなんだ？あの人なら上にもかなりの影響力があるだろう？」

そう言った途端に叢雲の纏う雰囲気が変わる。これは不味いことを言ってしまったか？

「うちの提督を人間同士の醜い争いに巻き込まないで貰えるかしら？あいつはとつてもお人好しなの。だから放っておくと誰でも助けようとするから、良いように利用しようと思えば人間が集まって来るのよ!!そんな奴等にうちの提督が喰い潰されるのなんて絶対にお断りよ!!良い？覚えておきなさい。私達は深海棲艦が相手ならいくらでも手を貸してあげる。それが日本で最強の横須賀鎮守府の務めだからよ。けれど人間が相手なら一切手を貸すつもりは無いわ。それが守れないのであれば、私達は深海棲艦の襲撃に対しても手を貸さない。このルールを守っているからこそ、鶴野提督や久藤提督も私達には干渉しないの。分かったかしら？」

なるほど。海原提督の政治能力が低いのはこれが原因か。そもそも艦娘達が海原提督に情報が行かないようにしているのだろう。まあ、かなりのお人好しのようなので、元々の政治能力が低い可能性もあるが・・・

「ああ、了承した。元々本気で言ったつもりもない。ちなみにこの件は、お前達もこちらのやり方に干渉はしないって事で良いのか？」

「ええ、そうね。深海棲艦の討伐に関わる事以外には、一切干渉するつもりは無いわ。」

「なら問題無い。」

「そう。なら良いわ。」

とりあえずこれで横須賀鎮守府との関係が悪化する事はないようなので、お互いに不干渉としよう。

## 117話（引き継ぎ）

「あ、あの、お話はもう宜しいでしょうか？」

叢雲との話が一段落したところで、大淀が恐る恐る声をかけてきた。叢雲の剣幕に気圧されてしまったか？

「ああ、大丈夫だ。」

「えっと、金剛さんから大まかな話は聞いたと思いますが、戦後の処理は順調に進んでいます。それとこちらが戦闘の報告書と資材の消費量をまとめたものです。次にこちらが呉鎮守府から届いた資材の一覧です。そして最後に提督がお休みされている間にかかってきた通信の一覧です。」

「助かる。」

資料に軽く目を通していくがなかなか綺麗にまとめてある。特に戦闘の報告書に関しては、今回はかなり大規模な戦いであったにも関わらず、詳細な内容が記載されているのが素晴らしい。

「かなり良い仕事をしてくれたようだ。この仕事を金剛姉妹でやったのか？」

「Yes 私が総指揮と通信の対応を少し、比叡は艦隊の出迎えや入渠施設で指示出しをしてくれたネ。榛名は通信の対応と報告書の作成で、霧島は艀装の整備で忙しい明石に代わって資材関連の管理をしてくれたネ。あとマミーヤが食事の手配をしてくれたデース。」

「あ、金剛お姉様、報告書の作成は霧島がやってくれたので榛名では無いですよ？榛名は通信の対応で手一杯でしたので・・・」

「ええ!?!私は報告書の作成はしていません。榛名が忙しそうにしていたので手伝おうとしたのですが、私が確認した時には榛名の机に完成した報告書がありましたよ?！」

「ええ!?!じゃ、じゃあ比叡お姉様がこの報告書を!?!」

「いやいや!?!私も違いますよ!?!」

「What!?!ではいったい誰がこの報告書を作ったのですか!?!」

金剛姉妹の誰もが手を付けていないと言う報告書・・・

「・・・一応聞くが、大淀では無いよな?！」

「ええ、私は提督が目を覚まされたら起こして欲しいと金剛さんをお願いしていましたので、つい先程までは休ませて頂きました。」

大淀がこつそりと無理をしたわけでは無いようだな。となるとあとは……

「……小森か？」

「あ……うん。」

部屋の隅の方に居た小森に尋ねるとすぐに肯定された。これだけ騒ぎになっているなら早く名乗り出て欲しい……というかそもそも報告書を作った時に金剛に声をかけておけよ……

「ひえ〜!？」

「だ、誰ですか!？」

「曲者!？」

「いつからそこに居たのよ!？」

お決まりのように比叡・榛名・霧島そして練度が高く索敵能力の高い叢雲まで驚いている。大淀と金剛は二回目だからか、比較的落ち着いているようだ。

「ひい!？」

そしてこれまたお決まりの如く、皆が驚いた声に小森が驚いて怯えている……

「待て待て落ち着け。こいつは小森、今日からこの鎮守府で実地研修をしている提督候補生で、私の士官学校時代の同期だ。大淀と金剛以外はまだ紹介していなかったな。」

そう伝えると、金剛姉妹はとりあえず落ち着いてくれたようだ……

「あ、私は金剛型高速戦艦二番艦比叡です。」

「同じく三番艦榛名です。」

「同じく四番艦の霧島です。」

「ひっ!! あ、はい、小森……です。」

「えっと、小森さんが榛名達の代わりに報告書の作成をして下さったのですか?？」

そう優しく問いかける榛名に対して、小森は部屋の隅でコクコクと頷いている。別に責めている訳ではないのだから、そこまで怯えなく

ても良いと思うのだが・・・

「なあ小森、今日はどうしたんだ？避難勧告が出てるのに鎮守府へ来たり、こっそりと報告書の作成をしたり・・・ずいぶんとやる気があるようなのだが？提督にはなりたくないのではなかったのか？」

そう、この問題児である小森は、提督として艦隊を指揮する才能を持ち合わせておきながら、艦娘と関わるのが怖いという理由で提督になりたくないらしい。それでも提督の才能を見出だされたので、士官学校にほぼ強制的に通わされている。そんな状況でも逃げ出さずに授業を受けて、座学でも演習でもトップクラスの成績を修めている才女だ。彼女の逃げ隠れする力ならば脱走くらいは余裕だろうが、逃げ出さないくらいには根が真面目なのだろう。

「えつと・・・役にたたないと・・・追い出されたら・・・困る・・・」  
「・・・どういう事だ？」

「葛原さん・・・無能な人は嫌うから・・・役に立たないと・・・追い出される・・・他の鎮守府に行くのは・・・怖い・・・だから頑張った。」

つまりあれか、自分の機嫌を損ねて追い出されるのが怖かったと・・・確かに人見知りの激しい小森が、自分の鎮守府以外でまともにやれるとは思わないが・・・提督候補生の指導は上からの命令だから、簡単に放棄出来るものではない。

「いや・・・追い出したりするつもりは無いのだが・・・」

それにしても小森の発言を聞いて大淀と金剛姉妹がかなり緊張しているようだ。おそらく自分達も無能だと判断されたら追い出されるか解体されると考えたのだろうか？ついでに叢雲からの視線がかなり冷たいものになったが、こちらのやり方に口出しはしないと聞いたからか黙っている。

「そう・・・なの？」

「ああ、実地研修とはいえ私の指揮下に入ったのだ。ならば上手く使うのが指揮官の仕事だ。」

「でも・・・教官達的事・・・私が上の人間ならあんな無能はすぐに叩き出す・・・っていつも言ってたよ？」



「・・・そう・・・だったな。」

まずい・・・その話を持ち出されると否定が出来ない・・・実際にあんな無能なのに威張り散らしているクズが自分の指揮下に居たら、即座に叩き出す自信がある。だがなにか言わなければ、大淀と金剛姉妹、さらには他の艦娘達に伝わってしまい、自分は恐怖で艦娘達を支配する提督になってしまふ。鎮守府のトップとしてある程度畏敬されるのは好ましいが、過度な恐怖は悪影響を与えかねない・・・

「あれだ、こちらの指示をきちんと聞いてくれる事と、向上心を持ってくれれば問題無い。その条件を満たしてくれるならば、無闇に追い出したりはしない。指揮する者としてきちんと扱う事を約束しよう。」

なんだかもうこれは小森にというよりは、大淀達に言っているようなものだな・・・だがそのお陰で大淀達は少し安心してくれたようだ。

「うん・・・やっぱり頑張って正解だった。」

「・・・そう・・・だな。」

ああ、そうだ。小森が頑張った結果として、すごく精度の高い報告書が完成したのだ。何一つ間違っていないはずだ・・・

「小森も金剛達も良く頑張ってくれた。今後もよろしく頼む。」

「Thanks 今後も私達金剛姉妹を頼りにして欲しいデース。では私達はそろそろ休ませて貰いマース。」

「ああ、ゆっくり休んでくれ。」

118話（6日目昼食）

金剛姉妹が退室したあとに、書類にぎっと目を通していく。資材のほうは呉鎮守府から届いたのでかなり余裕が出来た。通信があったリストのほうもそのほとんどが記者からの取材の申し込みなので、しばらく放置して問題無いだろう。あとは長門市関係の人からが多いか・・・正直こちらに連絡されても困るのだが、なんの要件なのだろうか？

「提督、間宮さんからそろそろ昼食の準備が出来ると連絡がありました。朝から何も食べていないですし、先に食事にされてはいかがですか？」

「それもそうだな。叢雲、横須賀の艦隊はどうする？」

「どうするって言われても、私達はさつき食事したばかりだから必要ないわ。そろそろ皆も仮眠を終えて起きてくる頃だろうし、準備が整い次第出発するわ。」

「そうか。なにか必要なものがあれば遠慮無く言ってくれ。」

「ええ、助かるわ。それじゃ私はそろそろ出撃の準備をしてくるわ。」

そう言って叢雲が執務室を去ろうとしていたのだが・・・

「あ、あの・・・叢雲さん？」

大淀が恐る恐るといった雰囲気呼び止める。

「なによ？」

「間宮さんから、食堂の入り口で横須賀所属の飛龍さんと蒼龍さんが待機しているのですが、どうしたら良いですかと・・・」

「あの人達まだ食べるつもりなの!?これだから空母は・・・悪いけど何か食べさせて貰えるかしら？」

「分かりました。そう伝えておきます。」

「ありがと。それじゃ行くわね。」

飛龍と蒼龍と言えば二航戦の二人だったか？どうやら一航戦の赤城と加賀にも負けない大食艦のようだな。叢雲も少し気恥ずかしいのか早足で執務室を去って行った。

「では私達も食事にしましょう。緊急で処理すべきものも無さそう

だしな。」

「分かりました。ではお供致します。」

大淀と共に食堂に行くとし少し早い時間だからなのか、まだあまり艦娘達は来ていないようだ。目立つのは食堂の一角で大皿に盛った料理を堪能しているうちの二航戦と横須賀の二航戦だろう。同じテーブルで楽しい霧囲気で食事をしているようだが、はたから見るとフードファイトでもしているかのようだ。

間宮から食事を受け取り、どこで食べようかと考えていると、肩にポンと手が置かれて振り返ってみると、そこには見るからに不機嫌ですつて霧囲気の衣笠が居た。

「ねえ提督、ちよつと衣笠さんとお話しながら食べよつか？」

「ああそれは構わんが・・・」

衣笠に案内された席には、なんだか縮こまった青葉が座っている。また青葉が何かやらかしたのだろうか？とりあえず席に座って食事をしようとする、衣笠が膨れっ面でこちらを睨んでくる。

「はあ・・・さつきからどうしたんだ？」

「じゃあ率直に聞くけどさ、なんで衣笠さんを仲間外れにしたのかな？」

「・・・仲間外れ？」

「そうよ!!なんでさつきの戦闘で衣笠さんだけお留守番なのよ!!」

「・・・羽黒も残したと思うが？」

「羽黒さんはまだ精神的に不安定だから理解出来るわ。でも衣笠さんはいつでも出撃出来るのになんで置いてかれたのよ!!龍驤さんが出撃する意思を示さないと連れて行って貰えないとか言ってたけど、漣達は連れて行ったじゃない!!衣笠さんだけ忘れてたのかな!？」

鎮守府内のほぼ全ての艦娘が夜戦か迎撃戦に参加したにも関わらず、衣笠が参加出来なかった事を拗ねているのか・・・まあ、気持ちには分からなくはないが・・・

「確かにほとんどの艦娘に出て貰ったが、流石に鎮守府内で動ける艦娘が一人も居ない状況はまずいだろ？一応夜戦を終えた者達が居る

が、入渠中や艀装の整備中で出られないかもしれない。だからいつでも動ける戦力として、衣笠には残って貰っただけだ。」

「ううう……衣笠さんの事を忘れてたわけじゃないの?」

「それはない。」

「そう……ならいいけどさ……」

「ね、ねえガサ、そろそろ機嫌なおそ? 司令官にもちゃんと理由があったんだしさ?」

「分かったわよ……でも次は衣笠さんに任せてよね?」

青葉も一緒になって宥めてくれたおかげか、衣笠の機嫌も少しは良くなったみたいだな。

「良いだろう。状況次第ではあるが、重巡洋艦が必要な時は優先させよう。」

「うん、ならこの話はここでおしまい。ごはん食べよ?」

「そうだな、せっかくの食事が冷めてしまうといけないからな。」

「あ、なら食事しながら取材しても良いでしょうか? 青葉とっても気になる事があります!!」

先程までは衣笠が不機嫌だった為か大人しくしていたが、青葉はやはり青葉だったな。

「はあ……まあ、食べながらで良いならな。」

「ではでは、今回の一連の戦いを終えて如何ですか?」

「おい? まだ終わった訳ではないぞ? 横須賀の艦隊が集積地棲姫を撃破して、周辺海域の掃討を済ませるまで油断は出来ないぞ?」

「あ、そうですね……すみません……ならこの話はまた次回にします。ではもうひとつのお話ですが、今日から提督候補生の方が実地研修の為に着任されたそうですね? 何故か艦娘を集めて顔合わせをしないとの事ですが……どんな人が来られたのですか? 青葉的には是非とも取材をしたいのですが?」

「ああ……私の同期で小森って奴だ。かなり人見知りか激しい奴だな……大勢の艦娘を集めたら逃げてしまうのな……あと取材も諦めたほうが良いだろう。」

「ええ……そんなあ……」

青葉がかなり残念そうな表情だが、悪い事は言わないから諦めたほうが良い。絶対に逃げられるからな。

「青葉は小森が特に苦手とするタイプだ。」

「そ、そんなズバツと言われると、青葉もちよつと傷付くのですが……」  
「背が高く、声が大きくて、明るく積極的に話しかけてくるだろう?」

「え?他2つはともかく、青葉はそんなに背は高くないと思うのですが?」

「小森の体格は駆逐艦くらいだ。」

「まあ、確かに駆逐艦の娘達よりは背が高いですね。」

「身長に関しては目線を合わせれば良いし、声も気を付ければ大丈夫だろう。だが積極的に話しかけるのは致命的だな。」

「な、なんと!?!ではどうやって仲良くすれば良いのですか!?!」

小森と仲良くする方法か……

「わからん。小森が誰かと仲良くしている姿を見た事がない。」

「……つまり青葉が仲良くなれば第一人者って事になりますね。頑張ってみます!」

「そうか……あまり嫌われない程度で頑張ってくれ。」

十中八九逃げられるだけだが、もし上手くいったならば、そのノウハウは貴重なものになるだろうな。

1119話（6日目昼食2）

青葉からの質問も終わりそのまま食事をしていると、食堂の入り口から叢雲が入って来る。なんだか少し不機嫌な感じか？そのまま無言で一航戦と二航戦のフードバトル会場へと歩み寄る。

「ねえ、飛龍さん、蒼龍さん・・・いつまで食べてるつもりかしら？」  
「んん!?ふふあふほふあん!？」

「到着時に食事はしつかりと頂いたはずよね？もうすぐ出撃だから小腹が空いてるなら手早く済ませてって言ったわよね？このテーブルの上にある大量のお皿は何かしら？」

「ああ、いや、そのね・・・」

「ほ、ほら、腹が減っては戦は出来ぬって言うと思うんだけど・・・」  
「それにせつかくのご厚意を無下にするのも悪い気がしない・・・かな・・・なんて・・・」

「そう・・・言い訳はもう終わりかしら？」

「おお、凄い迫力だな・・・駆逐艦相手に正規空母の二人が縮こまっているな・・・それを気の毒に思ったのか、赤城が恐る恐る手を上げる。」

「あ、あの・・・私達と一緒に食事をしませんかってお誘いしてしまつたのですが・・・」

「それは別に構わないわ。同じ空母同士で話したい事もあるでしょう。でもそれはこの二人が出撃の準備を忘れて暴飲暴食をして良い理由にはならないわ。」

「あ、はい・・・」

赤城の援護も無意味だったか・・・

「ここでは他の人の迷惑になるわね・・・二人とも食べたお皿をすぐに片付けて出撃の準備をしなさい!!」

「は、はい!!」

「それと・・・残った料理はそちらでなんとかして貰えるかしら？」

「ええ、大丈夫です・・・」

「そう、じゃあお願いするわ。」

飛龍と蒼龍が慌ただしく片付けをして走り去って行くのを尻目に、頭を抱えた叢雲がこちらに近づいて来る。

「騒がせて悪かったわね。」

「気にするな。その・・・大変だな。」

「あの二人も普段はもう少し節度を持っているのだけど・・・美味しい料理を好きなかだけ食べさせて貰えるから、はしやぎ過ぎてしまったみたいね・・・」

「普段は制限でもかけられているのか？」

「横須賀にいる時はともかく、他の鎮守府を拠点に動く場合は満足するまで食べられない事が多いのよ。私達が他の鎮守府に駐留する場合、資材や食事などの諸経費は駐留する鎮守府が負担するでしょ。だから艦娘に食事をさせない鎮守府だと食事の提供が無かったりするし、最低限の食事だけを提供するところの方が多いわね。横須賀の傘下の鎮守府だとそんな事はないけれど。」

確かに艦娘は食事をしなくても死ぬ事は無いので、理解出来なくは無いのだが・・・

「横須賀の艦隊が駐留するのは、現地の艦隊では手に負えない敵が居るからだろうか？なのに主戦力の士気を低下させるような事をするのか？」

「酷い奴は資材の提供も渋るわよ。そういう奴はなにかと理由を作つて、付近の鎮守府に駐留の話を押し付けようとするわね。」

燃料や弾薬の提供を渋るだ?!?それで横須賀の艦隊が戦力を発揮出来ずに敗北か撤退した場合は、現地の艦隊だけでは勝てない状況だろ!?!

「理解出来ん・・・」

「でしようね。逆に私達を接待してうちの提督に取り入ろうとする奴も居るわね。あんたは違ったみたいだけど。」

「そうだな。生憎私は人に媚びを売るのが苦手なのでな。」

「そうね。待遇が良かったから最初は疑ってたけれど、あんたは私達を戦力としてしか見てないようだから凄くやり易いわ・・・長話が過ぎたわね。これじゃ二航戦の二人を叱れなくなるわ。じゃあ私は

行くわね。」

「ああ、健闘を祈る。」

「任せなさい。」

不敵な笑顔を浮かべてから叢雲は颯爽と食堂から去って行く。本当に駆逐艦とは思えない貫禄を感じてしまう。あれが歴戦の艦娘つてものか。

「いやー、横須賀の叢雲さん格好いいですね。帰って来たら青葉に取材させて欲しいです。色々とお話も出てきちゃいましたけど．．．横須賀の方々も苦労しているんですね．．．」

「そうねえ．．．衣笠さん達も以前は凄く不幸な状況だっと思ってたけど、そんな鎮守府が思ってるより多いのかな．．．」

「そうだな．．．呉と舞鶴の傘下の鎮守府だとそういうところが多いだろう。横須賀の傘下は艦娘を大切にする奴等の集まりだし、佐世保の傘下は艦娘を兵器として扱うが、食事やある程度の居住環境は兵器の性能維持に必要なだと考えているようだ。」

「なるほど。なんだか佐世保の方々の考えは司令官の考えに近いのではないですか？艦娘が兵器か軍人かという違いはありますが、食事とかを私達の性能維持の為に必要だっと思って考えは一緒だと思います。それに佐世保の傘下の方々は武闘派で実力が高いと聞きます。どうして司令官は佐世保の傘下には入ろうとしなかったのですか？」

まあ、佐世保の考え方は嫌いではない。呉や舞鶴の汚職集団とは違い軍人らしい集団で、実力主義なところも高評価だ。欲を言えばもう少し勢力の拡大を重視して、呉や舞鶴傘下の鎮守府を減らして欲しいところだな。

「そうだな．．．基本的に佐世保の考え方は嫌いではないが、当然合わない部分もある。佐世保の傘下に入るのであれば、気に入らないところも従わなければならなくなる。私のように我が強い人間には、規律と上下関係に厳しい佐世保鎮守府の傘下に入るのは息苦しいだろうな。」

そもそも自分は士官学校で教官潰しなんて呼ばれていた問題児だから、佐世保が欲しがるとも思えない。



「ほうほう、司令官は佐世保のやり方に賛同出来ない部分がある?」「まあな。」

佐世保の戦闘は苛烈だ。だから戦闘の厳しさについていけない艦娘は沈んでいき、強い艦娘だけが生き残る。佐世保に着任した艦娘は最初に厳しい演習で基礎を叩き込まれたら、後はほとんどん実戦に参加させて弱い艦娘をふるい落とす。この選別に生き残った艦娘達が佐世保の精鋭として鍛え上げられる。肉の盾として使い潰されるよりはマシだろうが、轟沈する者が多いのも事実だ。自分は艦娘の深海棲艦化を知っているので、そのやり方は危険が大きいと感じてしまう。「えっと・・・佐世保鎮守府のやり方に賛同出来ない部分を教えて欲しいのですが?」

「悪いがそれは教えられない。」

「ええ〜そんな〜教えて下さいよ〜気になるじゃないですか・・・ね、ガサも気になるでしょ?」

「ちよ、青葉!?私を巻き込まないでよ!?提督を怒らせて青葉と一緒に営倉行きとか絶対に嫌だからね!」

慌てる衣笠と営倉のという単語で尻込みしてしまう青葉。前回の営倉行きは短かったため、そこまで堪えては無いかと思っていたが、嫌なものは嫌らしいな。

「うう・・・営倉行きは嫌ですが・・・あ、青葉気になっちゃうなあ・・・なんて・・・」

「諦めろ。」

未練がましくチラチラとこつちを伺っていた青葉にバツサリと断り、食べ終わった食器の片付けを始めると、先程まで無言でこちらの話を聞いていた大淀も片付けを始める。そう言えば大淀は仕事の時以外で他の艦娘と話している時はあまり会話に入って来ないよな? なにか理由があるのだろうか?

## 120話（ぼのたん連行）

食事を終えて大淀と共に執務室へと戻っていると後ろから誰かが走って来る音が聞こえた。振り返って見るとそこには曙が居て、急に深く頭を下げてきた。

「ごめんなさい!!寝過ぎしてしまったわ!!」

「ん?何時までに起きろって指示は出していないはずだが?」

「でも提督も大淀さんも仕事を始めているのでしよう?だったら遅刻よ!!」

あれか?上官より遅ければ全て遅刻とかいうやつだろうか?集合時間を決めているのであれば、余裕を持って5分前行動くらいはして欲しいのだが、今回は休めとしか言っていない。

「はあ...以前はどうだったか知らないが、その考え方は嫌いだな。今回は時間を指定していないし、必要な用事があるなら呼び出すから心配するな。」

「うう...でも...」

「でもではない。悪いがここは私の管理している鎮守府だ。私のやり方に合わせて貰う。」

「...分かったわ。じゃあ私は何をすれば良いの?」

「とりあえず今起きたのであれば、まずは食事でもしてくと良い。」  
「そ、そんな!?遅れたのは謝るから!!ちゃんと秘書艦補佐の仕事出来るから!!私に仕事をやらせてよ!!」

曙は秘書艦補佐の仕事から外されたと感じたようで、必死になって仕事をやらせてくれと懇願してくる。やる気があるのは良いが、これはこれで問題だな。

「だから遅刻ではないと言っている...曙には後で別の仕事を頼むつもりだから、それまでは休んで体調を整えておけ。秘書艦補佐にした時に言ったが、曙には秘書艦補佐を専属でやらせる訳ではなく他の仕事もさせるつもりだ。まさか他の仕事は嫌だとは言わないよな?」

「そんな事は言わないわ!!その...取り乱してごめんなさい。それで?私に任せたい仕事ってなんなの?」

「今横須賀の艦隊が姫級の討伐に出ている。姫級の討伐に成功した場合、敵の溜め込んでいた資材を回収する為に、輸送船を含めた大規模な輸送艦隊を送る手筈になっている。護衛は横須賀の艦隊がしてくるので、曙には輸送船の運転と輸送艦隊の指揮を任せるつもりだ。基本的には横須賀の誘導に従って輸送すれば良い。」

「・・・分かったわ。輸送艦隊の規模は？」

「ドラム缶には余裕がある。有事に備えて雪風と島風には鎮守府に残って貰うが、それ以外の駆逐艦は全て出すつもりだ。」

この北九州鎮守府には大量のドラム缶があるので、資材の輸送で困る事は無い。なぜなら前任者の大森提督が他の鎮守府と頻繁に資材の取引をするために用意していたからだ。これだけは前任者のクズのお陰で助かっているところだな。

「分かったわ。じゃあ横須賀の艦隊から連絡があればすぐに召集をかけるられるようにしておけば良いのね？」

「そうだな。早ければ4時間くらいで決着すると思うが、状況次第では今日は様子見で終わる事もある。だから輸送船とドラム缶の準備だけしておいて、後は普通に待機していて構わない。今は寝ている艦娘達もいるだろうから、3時間くらいは自由にさせてやれ。それと・・・」

「それと？」

曙の背後を指差す。曙が振り返ると曲がり角のからこちらの様子を伺っていた第七駆逐隊が、慌てて隠れようとしていたが、尾行なんて慣れていないようでバレバレだ。

「はあ・・・あの娘達はまた・・・」

「おそらく曙が食事もせずに執務室へと走って行ったから心配しているのだろう。」

「私はちゃんと仕事があるから、食事はあんた達だけでしなさいって言ったのに・・・」

そういう事を言うから心配したのだろうな。

「はあ・・・隴、漣、潮、そこに居るのは分かっている。こっちに来い。」  
そう命令すると漣を先頭に曲がり角から恐る恐る出て来て、自分の

目の前に整列する。隼は少し震えながらもこちらをキツと睨んでいて、漣は気まずそうに笑いながら目線を反らし、潮は涙目で震えている。そんな姉妹達を曙はジト目で眺め、大淀は少し頭を抱えているが口出しはしないようだな。

「えつとですね・・・漣達はぼのたんの様子を見に来ただけでして・・・、決してやましい事はしていないであります!!」

こちらが何かを言う前に漣が一步前に出て、敬礼をしながら言い訳を始めた。いや、今回はそこまで責めるつもりはないのだがなあ・・・「だろうな。」

「あんだ達!! 覗き見ばっかりしてると青葉さんみたいに営倉行きになるわよ!」

「あ、曙ちゃん!?! の、覗き見だなんて!?!」

「してたんでしょ!?! だから見つかって呼び出されたんでしょが!!」

曙のお説教に反応した潮の力の無い反論も曙に一蹴されて、潮は今にも泣き出しそうな雰囲気だな。

「それは曙が心配かけるからでしょ!?!」

「だから心配いらなくて言ってるでしょ!?!」

潮を庇った隼が曙に詰めよって、曙と睨み合いを始めてしまい、漣と潮がおろおろし始める。

「はあ・・・私が3人を呼び出したのに、私を無視して喧嘩を始めるのか?」

「し、失礼しました!!」

二人は慌てて元の位置へと下がって私に敬礼をする。自分が言うのもなんだが、本当にこの姉妹は不器用だな。お互いの事を考えているのに、上手く噛み合わないと言うか・・・

「とりあえず覗き見に関しては、ただ純粹に曙が心配だったのだから悪質ではないと思う。だが褒められた事では無いから今後は控えるようにしろ。」

「は、はい・・・」

「だから今回は罰の代わりとして、お前達3人に少し仕事をして貰う事にする。」

「ご、ご主人様、出来ればお手柔らかにお願いしたいな〜なんて……」  
漣が分かりやすく媚を売ってくるが、別に難しい仕事ではない。

「私が着任した時に話したとは思いますが、上の連中に付け入る隙を与えないようにするために、私は艦娘達に食事をきちんと準備している。」  
「は、はあ？ありがとうございます。」

いきなり話が変わったからか、よく理解出来ていないようだな。  
「それなのに昼食を食べずに執務をしようとする困った奴がここに居る。」

そう言つて曙の頭に手を置くと、ビクン!! つと曙が硬直するのが伝わる。朧と潮は状況がまだ理解出来ていないようだが、漣は理解出来たようでニヤニヤし始める。

「ほほう？ご主人様の意向に逆らうだなんて、困った艦娘も居たものですかあ？ねえぼのたん？」

「あ、いや……私はそんなつもりは……」

「では3人で曙を食堂に連行し、ちゃんと食事を食べさせてこい。」

その一言でやつと状況を把握したらしい朧と潮が驚いた表情をしている。そして漣はニヤニヤしながら改めて気を付けの姿勢で敬礼をする。

「ほいさっさ♪漣達にお任下さいご主人様♪では朧さん、潮さん、ぼのたんを引つ捕らえよ!!」

「あ、ちよ、こら!!」

「曙、もう観念しなよ。」

「曙ちゃん、提督の命令だからね？」

漣の指示で朧と潮がそれぞれ曙の手を握る。朧と潮は嬉しそうにしているが、曙は少し気恥ずかしいようだな。

「うう……わかつてるわよ……ていうかちゃんと自分で歩くから手を離しなさいよ!」

「おつとぼのたん、また反抗ですかな？ご主人様から連行しろと言われてましたからなあ♪ぼのたんを自由にさせる訳にはいきませんなあ♪それではご主人様、漣達はぼのたんを連行しますのでこれで失礼致します♪その……ありがとうございます……」

曙をからかう口実が出来たからか漣はかなり上機嫌だな。最後だけは小声でしおらしい感じだったが。

「ああ、後は任せた。」

そう言って敬礼する漣達を背に執務室へと入った。これで少しは関係を改善してくれると良いのだがな。

## 121話（長門・一航戦対話）

執務室へと戻り今後の予定を考えるが、横須賀の艦隊の動き次第なので、しばらくは時間に余裕がありそうだ。今のうちに話をしておきたい者達と話をしておこう。

「大淀、少し話をしたい者達がいるから呼んで欲しい。まずは長門、次に赤城と加賀、瑞鶴、最後に村雨だ。」

「分かりました。すぐにお呼びします。」

長門が入室し挨拶を済ませたので、あらかじめ用意していた椅子に座るように指示をする。

「まずは今回の防衛戦良くやってくれた。全員無事に帰って来て安心した。」

「ああ、なんとか全員帰還出来て良かった。提督の期待には応えられたようだな。だが横須賀鎮守府の娘達が居なければ、我々は手も足も出ずに全滅していただろう。今後を考えると我々ももつと鍛えねばならん……」

ふむ。横須賀との戦力差に少し劣等感を感じているのだろうか？

「歴戦の横須賀艦隊と差があるのは仕方ない。そこに関しては今後しっかりと鍛えるしかないだろう。それに横須賀の戦いを少しだけとはいえ見る事が出来たのもとても良い経験になっただろう。将来的にはあの横須賀の艦隊に負けない艦隊を目指す。」

「良い目標だ。その期待に応えられるように私達も精進しよう。」

「宜しく頼む。それで、大規模な艦隊の総旗艦を務めてみてどうだった？」

そう尋ねると長門は少しだけ黙って考える。

「やはり連合艦隊の総旗艦を務めるのは名誉な事だから、そんな大役を任せて貰えた事は誇りに思っている。だが今回の戦いでは、前半はきちんと指揮が出来ていたと思うが、後半になると目の前の敵に集中し過ぎて指揮が疎かになっていたようにも思える。」

「なるほど。確かに総旗艦であれば艦隊全体を把握しておいたほうが

良いのだろう。だがそれはかなり難しい事で、艦隊の規模が大きくなればより困難になる。いきなり戦闘と指揮の両立をするのは無理がある。」

「確かにそうなのだが・・・横須賀の叢雲はあの激戦の中でも指示を出し、敵艦隊がこちらの側面を突こうとすれば、それに対応して一人で足止めまでしていたのだ・・・」

勝利に浮かれずに向上心を持ち続けるのは良いのだが、あまり暗くなりすぎても良くないな。

「経験の差があるのは覆しようの無い事実だ。一朝一夕で出来るようになるものではない。今大事なのは今出来る事でどうやって戦って生き残るかだ。高い目標を見る事も重要だが、足元が見えていなければすぐに躓く。戦場ではそれが命取りになるぞ?」

「・・・そうだな。すまない、ビッグセブンともあろう者が弱音を吐いてしまった。出来ないのであれば訓練あるのみだな!!」

「それもそうだが、なにも総旗艦が一人で抱え込む必要も無いぞ?」  
「と言うと?」

「総旗艦はあくまでもまとめ役だ。総旗艦は私が立案した作戦を上手く実行出来るように、各艦隊の旗艦に指示をするのが仕事だ。だから各艦隊の旗艦に任せられる事は任せて良い。ただ全体の大まかな戦況は把握しておきたいところだな。」

「ふむ、やはり上に立つ者としては、仲間達を上手く頼るのも必要な事というわけか。私自身が頼りにされたいという気持ちは強いが、仲間に頼ろうとするのは不得手だな・・・」

仲間を頼るのは不得手か・・・正直私も他人の事をあまり言えないな。この鎮守府の責任者として、部下の艦娘達を上手く使おうとする意識はあるが・・・心を開いて頼り頼られる関係とは違うだろうな。

「そうか・・・だが陸奥はよく長門に頼られていたように見えたが?」  
「うーむ、なんと言うべきか? 陸奥はとても気の利く奴だな。私が本当に困る前に自然と手助けをしてくれるのだ。確かにいつも頼りにしているのだが、他の者達を頼りにする時の参考にはならないと思うのだ。」



「なるほど。まあこの話も経験を積むしかないだろう。とりあえず私からの話は以上だ。他に何か言っておきたい事はあるか？」

「そうだな・・・私からは特には無いが・・・ああ、そうだ、大和が提督と話をしたがっているみたいだったな。」

「ほう、大和か。」

そう言えばまだ面談が済んでいない艦娘もまだまだいて、大和もその一人だったな。

「ああ、あいつも最近では笑顔を見せるようになったが、色々と思う事もあるのだろう。良ければ時間を作って話を聞いてやって欲しい。」

「分かった。早めに時間を作るとしよう。」

長門が退室してすぐに赤城と加賀が執務室へと入って来た。執務室のすぐ近くで待機していたのだろう。長門の時と同様に椅子に座らせて話を始める。

「まずは今回の防衛戦、良くやってくれた。」

「ありがとうございます。」

「赤城は今回の戦いをどう感じた？」

「そう・・・ですね・・・今までで一番厳しい戦いだったと思います。敵空母の数も多く艦載機の練度も高かったので、撃墜するのにかなり手間取ってしまいました。しかも敵艦載機の多くを横須賀の艦隊が撃墜したにも関わらずです。もし横須賀の艦隊が居なければと考えると・・・私達はもっと強くなければいけません。」

やはり今回の戦いでは横須賀鎮守府の艦隊が印象に残るようだな。まあ、あの規格外の活躍を見せ付けられたら仕方ないか。だが心が折れずに強くなる意思があるのは良い事だ。

「長門も似たような事を言っていたな。加賀はどうだ？」

「そうですね・・・横須賀鎮守府の力が大きかった事は言うまでもありません。ですが私達も上手く連携して行動が出来ていたと思いますので、かなり良い経験となったと思います。」

「ほう？良い経験か。」

加賀は今回の戦いをかなり前向きに捉えているようだな。

「ええ、事前に提督が各艦隊の役割を決めて、それを各旗艦が理解して行動出来ていたと感じましたし、総旗艦の長門さんが上手くまとめ下さったと思います。初めての規模の戦いで格上の艦隊を相手にして全員生き残れたのであれば、かなり良い経験が出来たと考えます。」  
「ふふっ、とても前向きで良い事だな。二人とも今後の成長と活躍に期待している。」

「はい!!一航戦の誇りにかけて!!」

二人とも椅子から立ち上がってビシツと敬礼をしてくる姿は頼もしさを感じる。この話はここまでで良いだろう。

「さて、もうひとつ聞きたい事があるから座ってくれ。」

そう声をかけると二人は少し緊張しているように感じる。次の話に心当たりがあるのだろうか、これは放置して良い話題ではないからな。

「次に聞きたいのは・・・先程の戦闘で瑞鶴が撤退した件だ。あれは赤城の判断との事だが間違いはないか?」

「・・・はい、間違いありません。」

「ではその判断に至った状況を説明してくれ。」

「まず敵艦隊との交戦中に翔鶴さんが瑞鶴さんを庇って被弾しました。それで瑞鶴さんがトラウマを刺激されてしまい、恐慌状態になってしまいました・・・ですので戦闘の継続は不可能と判断して、瑞鶴さんを後方へと下がらせました。勝手に判断をしてしまい申し訳ございません。」

そう言つて赤城は深々と頭を下げる。

「いや、謝る必要は無い。むしろ的確な判断をしてくれたおかげで損害を抑えられた。だが瑞鶴はトラウマを刺激されて恐慌状態になってしまったのか・・・」

最後の言葉で加賀が慌てて立ち上がる。

「お待ち下さい!!今回の戦いでは五航戦の子達が居なければ生き残る事は出来なかつたかもしれません!!翔鶴が被弾するまでは瑞鶴も敵艦載機の迎撃に大きく貢献しています!!私が必ず鍛え直しますので、どうか彼女にもう一度チャンス与えて下さい!!」

必死になって瑞鶴を庇っているが・・・もしかして・・・

「少し落ち着け。別に解体しようなどと言う話ではない。ただ現状の確認と対策を考えなければならぬだけだ。」

「そ、そうですか。失礼しました。」

そう言つて加賀は少し頬を赤らめて椅子に座りなおした。加賀は無表情で何を考えているか分かりにくいなどと聞いた事もあるが、きちんと見れば普通に素直な反応をしているのだがなあ。それにかなり仲間思いのようだな。

「それで、トラウマと言っていたが・・・軍艦時代の記憶というやつか？」

艦娘達は軍艦だった頃の記憶を持って生まれてくる。どういう原理なのかはわからないが、その記憶が艦娘の性格や性能に大きく関わっている事が知られている。今回の瑞鶴のトラウマは大戦中に翔鶴と共に行動していた時に、瑞鶴は被弾せずに翔鶴ばかりが被弾してしまった事に起因するのだろう。士官学校時代に織田が詳しく話をしていたのだが、話が長過ぎたので詳細までは覚えていない・・・「それももちろんですが、艦娘となつてから前任の大森提督から、そのトラウマを刺激するような事をされ続けたのが原因だと思います・・・」

そう語る赤城はとても悲しそうだ。それにしてもまた前任のクズが残した負の遺産か・・・

「瑞鶴に対する罰を翔鶴に受けさせていたというやつか・・・」

「ええ・・・瑞鶴さんはそれでかなり苦しんでいましたので・・・最近少し元気も出て来ていたのですが・・・」

「この後私が瑞鶴と話をしてみるつもりだが、とりあえず落ち着くまでは出撃はさせられない。瑞鶴が復帰するまでは二人に負担をかける事になると思う。」

「お心遣いありがとうございます!!もちろん私達が瑞鶴さんが不在の間を支えてみせます!!」

「ああ、任せた。私からの話は以上だが何か他に話しておきたい事はあるか？」

「いえ、瑞鶴さんを宜しく願います。」

「加賀は？」

「ありません。」

「分かった。では話はこれで終わりだ。瑞鶴を呼んで来てくれ。」

## 122話（瑞鶴対話・村雨回想）

一航戦の二人が退室した後に瑞鶴が執務室へと入って来たが、本来の勝ち気な性格は完全に鳴りを潜め、ずいぶんと憔悴している雰囲気だ。戦闘中に恐慌状態に陥ってしまったて、その件で呼び出されているのだから無理もない。

「その・・・足を引つ張ってしまい・・・申し訳ございません・・・」  
瑞鶴は私の前に立つとすぐに深々と頭を下げ、謝罪をした。そのままじつと頭を下げた状態でこちらが声をかけるのを震えながら待っているようだ。

「とにかくまずは頭を上げて椅子に座れ。」

「は、はい・・・」

とりあえず椅子には座ったが俯いたままで、顔を上げる気力はないようだな。

「察しているとは思いますが、私が聞きたいのは翔鶴が被弾した後に瑞鶴が恐慌状態に陥って撤退した件だ。一応報告は受けているが、まずは本人から当時の状況を聞きたい。何があった？」

「その・・・敵艦載機の迎撃をしていて・・・敵機を撃墜する事だけに集中してしまつて、敵艦攻からの雷撃に気がつかなくて・・・翔鶴姉が私を突き飛ばして代わりに被弾してしまつて・・・本当は油断した私が被弾してたはずなのに・・・また翔鶴姉が・・・翔鶴姉が沈むのが怖くて頭が真っ白になつて・・・加賀さんに怒られてから翔鶴姉と一緒に撤退しました・・・」

瑞鶴は俯いたままで震えながらも、語るべき事は語ってくれたようだ。しかしこのような精神状態ならば、この問題が片付くまで出撃は出来そうに無いな。

「状況は把握した。緊急事態だったとは言え、精神的にまだ不安定だった瑞鶴を出撃させた私の采配ミスだ。悪かつたな。」

私が瑞鶴に謝罪をすると、瑞鶴は弾かれたように立ち上がる。

「そ、そんな!!悪いのは私よ!!一航戦には負けたくないなんて大見得を切ったくせに、翔鶴姉に庇われて一航戦や他の人達に迷惑をかけ

て・・・それで、私の処分はどうなるの？」

最初は立ち上がった勢いで話していたが、最後にはまた俯いて不安そうに問い掛けてくる。

「とりあえずは私が大丈夫と判断するまでは出撃禁止だな。」

「・・・え？それだけ？」

「一応今回の件は命令違反や敵前逃亡ではないからな。旗艦の赤城の指示で翔鶴を連れて撤退したと聞いているが？」

「そ、それはそうだけど!?!でも私のせいで翔鶴姉が被弾して、他の皆を危険に晒したのよ!!なにか罰があるべきよ!!」

曙といい瑞鶴といいどうしてそんなに罰を受けたがるのだろうか？前任者のやり方の問題か？それとも艦娘の特性的な問題なのだろうか？

「確かに瑞鶴の油断があつたから翔鶴が庇つて被弾したと言うのは事実だろう。そして空母が二人行動不能になったのは大きな痛手だ。」

「だったら!?!」

「だがそれは瑞鶴が弱かつただけだ。」

「ツツ!?!」

「もちろん精神的に弱っていた事も原因だと思うが、実際に敵艦載機の攻撃に気がつかなくて翔鶴に庇われた。今回の件で瑞鶴がすべき事は、今回の教訓を生かして演習で経験を積み、次回の戦闘時に敵艦載機の接近に反応出来るようにする事だと思う。」

「だから次は頑張れって言うの？今回は一切責めないからって?」

瑞鶴は何かに怯えるような雰囲気で、震えながら顔が真っ青だ・・・これは・・・もうダメかもしれないな・・・

「まあ、瑞鶴に戦う気概があればの話だな。私としては戦う気力が無いならば、瑞鶴には退役を勧めようと思っている。」

「退役・・・」

その一言で瑞鶴はかなりのショックを受けたのか呆然としている。安堵するのではなくショックを受けたのか・・・もう戦うのが怖いって訳では無いのか？

「そうだ。戦えない者をいつまでも養う余裕は無いからな。退役を選

べば前任者の時代に貰えるはずだった給与を渡して、瑞鶴は無所属の艦娘となる。消えるまで自由に過ごすか、新しい提督を探すかという形になるな。」

「そっか・・・私はもういらないんだね・・・」

「戦う気力が無いならばと言う話だがな。加賀には悪いがこの鎮守府のトップとしては、そういう判断をせざるをえない。」

「そう・・・ん？なんで加賀さん？」

「先程加賀から『瑞鶴は私が鍛え直すから、もう一度あの娘にチャンスを与えて下さい』と頼まれたのだ。」

「加賀さんがそんな事を・・・」

先程まで絶望的な雰囲気だったが、少しだけ持ち直してきたか？やはり一航戦の事は意識しているようだな。

「それで、瑞鶴はどうしたい？残って戦うか？退役するか？」

「・・・強くなりたいわ。」

「ほう。なら加賀に鍛え直して貰うと？」

「ええ、今度は私が翔鶴姉を守るくらい強くなりたい・・・です。」  
「分かった。ならばそのように手配しよう。だが私が納得出来る状態になるまでは絶対に出撃はさせない。良いな？」

「ええ、分かったわ。」

瑞鶴の表情は少しだけ良くなつたか？

「では話は以上だ。今日はもう休め。」

「失礼します。」

私に敬礼をして退室しようとしていたが、扉の前で瑞鶴の足が止まり、扉の方を向いたまま話し掛けてくる。

「ねえ、提督・・・私、翔鶴姉を守るくらい強くなれるかな？」

「はあ・・・その調子では無理だろうな。」

「そっか・・・」

「それを私に聞いてくる時点でダメだ。強くなりたいなら他人任せにするな。なれるかななんて半端な意思では強くなれん。自分自身で強くなると決めて努力を続けろ。」

「そう・・・ありがと・・・」

「村雨さん、終わったわ。」

「は、はい。」

提督に呼ばれて執務室の近くで待っていたら、瑞鶴さんが険しい表情で帰って来た。なんとというか鬼気迫る表情と言うのか・・・ちよくと怖いかも・・・先に帰って来た長門さんも、一航戦のお二人も真剣な表情だったし、ここの提督ってやっぱり怖い人なのかしら？部屋で姉妹から聞いていた話を思い出す・・・

「ねえねえ、ここの提督ってどんな人なの？」

通信越しに声を聞いただけの提督の事が気になって、姉妹の皆に聞いてみる。

「そうだねくなんかクールでカッコいい感じ？」

「凄く真面目な軍人さんって雰囲気かな？」

「でもとっても優しいっぽい!!頑張ったらご褒美に甘いものくれるっぽい!!あとは頭撫でてくれるっぽい!!」

「あ、えっと・・・凄く良い人だと思います、はい。」

「へえくなんだか意見が割れてるけど、なんだか皆好印象って感じかな？」

「そだね。悪い人じゃないよ。」

「うん、僕達の事をちゃんと考えてくれる人だからね。」

「ちなみに春雨はベタ惚れっぽい!!」

「ちよ!!夕立姉さん!?べ、別にそういう訳では・・・」

あらあら?なんだか面白そうな話ね♪あの春雨がベタ惚れねえ♪「誤魔化しても無駄っぽい。春雨が寝る前に青葉さんから貰った写真を眺めてニコニコしてるの皆知ってるっぽい。」

「ええ!?な、なんでそれを!？」

「え、あれで隠しているつもりだったのかい?春雨が提督から撫でて貰っている写真を、いつも布団の中で眺めてたよね?」

「し、時雨姉さんまで・・・」

ふふっ、なんだか良い提督みたいで安心ね。今から会うのが楽しみ



♪  
「ふうくん、とつても良い人みたいだし、ちよつと誘惑しちやおうかなあ♪」

「二」それは絶対にやめたほうが良い（よ）（ね）（っぽい）（です）「三」  
「え、なにになに?!?なんで?!?」

「提督つて冗談通じないから宮倉送りだね。」

「規律には厳しい人だからね・・・」

「提督を怒らせたらロープで繋いで海の上を引き摺り回されるっぽい・・・」

「え、えつと・・・たぶん『そうか』の一言で終わるかと思います・・・はい。」

「ちよつ、なにそれ?!?さつきまでの話と違うじゃない?!?」

『業務連絡です。長門さん、一航戦のお二人、瑞鶴さん、村雨さんの順番で提督からお話があります。至急執務室横の資料室まで来て下さい。長門さんはそのまま執務室へと向かって、終わったら資料室で次の人に伝えて下さい。以上です。』

ええ?!?このタイミングで?!?まだ詳しい話を聞いて無いのに!!海の上を引き摺り回すってなんなの!?

「あ、ちよつと呼び出しがかかったね。」

「悪い人じゃないからきつと大丈夫だよ。」

「怒らせなければ大丈夫っぽい。」

「い、良い人ですから・・・はい。」

「う・・・い、いつてくるわ・・・」

ほ、本当に大丈夫なのかしら?

## 123話（村雨対話）

私は緊張した面持ちで執務室の前で深呼吸をする。今から初めて会う提督は姉妹達からの話だとよく分からない人だけど、怒らせなければ良い人みたいだし、せっかく着任した鎮守府の提督なんだから、出来れば仲良くしたいなあ。

コンコンコン

「失礼します。村雨です。」

「入れ。」

短い返答の雰囲気は少し威圧感を覚えてしまっけれど、まずは笑顔笑顔つと。やっぱり初対面なんだから元気に笑顔で挨拶しないとね。執務室の扉を開けて中に入ると、執務室の机に座る提督の姿があったのだけれど……

顔がすっごく怖いんですけど!?なにあの鋭い目付き!?絶対何人か殺してる目だよね!?夕立はあの人をすっごく優しい人って言ったの!?と、とりあえずまずは挨拶よね?あ、明るく元気に挨拶よね!?

「は、はいはい、白露型駆逐艦村雨だよ♪宜しくね♪」

「北九州鎮守府所属の葛原だ。鎮守府への着任を歓迎する。とりあえず椅子に座ると良い。」

うっ……これ本当に歓迎されてるよね?大丈夫よね?

「あ、ありがとうございます♪」

「既に会っていると思うが、うちには白露型姉妹が4人いる。しばらくは行動を共にするはずだから、分からない事は姉妹達に聞くと良いだろう。それと艦娘達の取り纏めを長門に頼んでいるし、大淀が秘書艦を務めている。何か相談があればそちらを頼ると良い。」

「わ、分かりました。」

「それと村雨はどんな戦いが得意だろうか?」

「え、えっと、対艦・対潜・対空となんだってやったげる!!もちろん輸送任務も行けるわよ。」

「ふむ、駆逐艦として苦手な事も無く、癖がなくて扱い易いか。悪くない。今後の活躍に期待している。」

うくん、顔や口調は怖いけど、なんか普通に歓迎されてる感じ？ただ真面目な人なのかな？

「任せて♪提督に村雨のちよつと良いところ見せてあげる♪」

「ああ、村雨からは何か質問はあるか？」

質問・・・質問かあ・・・なんだか良い人みたいだし、春雨がベタ惚れしてる人がどんな人なのか気になるなあ♪

「ねえねえ、提督はどんな艦娘が好みなの？村雨は提督さん好みかな？」

表情も男の人が喜びそうな笑顔で、自慢の胸をさりげなく強調しながら聞いてみる。どんな反応をしてくれるかな？

「そうだな・・・冷静で的確な判断の出来る奴が一番だろうか？戦闘能力の高さも重要な要素ではあるが、状況が変化する戦場で冷静に艦隊の指揮が出来る艦娘が理想的だな。そういう意味ではうちの鎮守府では赤城と加賀、それと北上も良い素質を持っていると思う。長門も経験を積めばもっと良い旗艦となれるだろう。村雨も経験を積んでより良い艦娘として成長して欲しい。」

「な、なるほどね〜」

そ、そうじゃなくて!!女の子としての好みを知りたかったんだけど!?せっかく村雨がちよつと誘惑してみたのに無反応なんだけど・・・これは気がついて無いだけなの？それとも話を逸らして誤魔化された？

「なら提督にとって艦娘ってどんな存在なの？」

「以前別の者にも答えたが、艦娘は人間でも兵器でもなく艦娘としてしか分類出来ないと考えているが、私個人としては軍人と言うのが一番近いと思っている。ただし艦娘は特殊過ぎるので、普通の軍人扱いも出来ないのが難しいところだな。」

うくん、人間でも兵器でもないかあ〜私達は軍艦の記憶を持って、人間としての感情も持っているから、この辺の線引きは難しいのかも知れないよねえ・・・

「軍人って扱いは私も分かるけど、普通の軍人扱いが出来ないってどういう事なの？」

「まず艦娘は軍人として個性が強すぎる。軍と言うものは国家の暴力装置だ。だからそこに所属する軍人は命令があれば人を殺せるように教育しなければならぬ。その為には各自の個性や主義主張は邪魔になるから、訓練で人格を磨り潰し国への忠誠心を刻み込むのが普通だ。」

「うっ……物騒な話ね……」

「ただと言われてみればそうなのかも……私が軍艦だった頃に乗っていた軍人さん達は、国の為に、残してきた家族の為に、命がけで敵の軍艦と戦って……つまり敵を殺そうとしていた。私自身もそれが普通の事で誇りを持って敵と戦っていたけれど、そこに個性なんてものはあんまりなかった気がする。」

「だが艦娘達は人類を深海棲艦の脅威から守るという目的は一致しているが、非常に個性豊かな性格をしている。真面目な軍人らしい性格から、明るく陽気な性格や、果ては不真面目でサボりがちな性格まで多種多様だ。これで普通の軍人扱いをするとするのはなかなか難しいだろう。」

「言われてみればそうかも？つまり提督は私達の個性も尊重してくれるってこと？」

「仕事に影響が出ない範囲ではな。だから食事や寝る場所などの生活環境も私が着任してからは改善している。これには上層部の連中に付け入らせないという目的もあるがな。」

「ふくん、なんだか優しい人なのね♪」

「別にそうでもない。私はきちんと戦果を出す為に必要な事をしていくに過ぎない。」

「でも夕立が頑張ったらご褒美くれるって言っていたわよ？甘いものくれたり撫でてくれたり。」

「まあ、夕立はちよろいから上手く手懐けられてるだけなのかな？」

「それは士気の上上に役に立つからだ。」

「士気の上上かあ。確かにやる気があった方が戦果が上がるわよね♪」

「そこは艦娘の特殊な部分で助かっているところだな。」

「ふくん？女の子のご機嫌取りは得意なの？」

「そうじゃない。考えてみる。軍艦だった頃は多くの軍人が乗っていただろう。彼等の士気を上げようと食事の質を上げたり居住環境を良くしようとすれば、莫大な金額が必要になる。それが一人分の食事や居住環境で済むのだぞ？ずいぶんと安上がりで効果が出るのだから、やらないなんて選択肢は無いだろ？」

「そ、そう言われてみればお得かも？」

空母や戦艦の人達がいっぱい食べるって言っても、何百人分も食べるわけないものね。それで軍艦一隻の士気を上げられるって考えたらお得なのかも？

「まあ、逆に言えば精神的に弱った場合、軍艦一隻分の性能が大きく下がる事になる。だから艦娘の扱いは非常に難しいし、普通の軍人のようには扱えないと言うことだ。」

「な、なんだか凄い話よね？」

ちよつとだけ村雨には難しかったかなあ？でもとにかく私達を大事にしてくれるのよね？以前のここは所謂ブラック鎮守府ってやつで、私達の扱いが酷かったみたいだし、良い提督が来てくれて良かったのよね？心の中で絶対何人か殺してる目とか言っでごめんなさい……

「他に質問はあるか？」

「ううん、提督の考えが聞けて良かったわ。またお話を聞かせてね？」

「機会があればな。では大淀を呼んでから部屋に戻っていてくれ。今後の活躍に期待している。」

「はいはい♪村雨のちよつと良いところ見せてあげるからちやんと見ててね♪」

笑顔で敬礼すると提督は相変わらず硬い表情で答礼してくる。ちよつと怖い人だけど、姉妹達が言っただけに良い人みたいね♪

## 124話（人事部中井からの連絡）

「提督、人事課の中井さんから通信が入っています。」

大淀が執務室に入って来てからの第一声がそれだった・・・

「そうか・・・代わろう。」

正直相手をするのが面倒だが、無視も出来ないだろう。

「代わりました。北九州鎮守府の葛原です。」

「人事課の中井だ。貴様は着任早々に揉め事を引き起こしているようだな？」

「はあ？どの件ですか？」

「とぼけるな!! 貴様が長門鎮守府の原田提督と協力しなかったせいで、長門鎮守府が壊滅して街にも大きな被害が出たのだぞ!!」

はあ・・・言い掛かりに付き合うほど暇ではないのだがなあ・・・  
「私は長門鎮守府の管轄ではありませんが？責任を負うべきは死んだ原田提督とその原田提督を傘下に入れていた鶴野提督でしょう？こちらに話を振られても困ります。」

「しらばっくれても無駄だ!! 貴様が虚偽の報告で原田提督を騙して、長門鎮守府の戦力を削った事。長門鎮守府の要請を断って哨戒任務を怠った事。長門鎮守府との通信を遮断して連携に大きな障害があつた事。全て証言を得ているのだぞ？」

「虚偽の報告をしたと言うのは嘘の証言です。通信記録を確かめて貰えば分かりますが、長門鎮守府と情報を共有した際に、大本営と佐世保鎮守府と博多鎮守府にも同じ内容の報告をしております。それで騙されたと騒がれるのは心外です。」

「ふむ、つまり残りの2つに関しては事実であつたと言うことだな？」

「ええ、そこに関しては原田提督の判断力の無さが問題点でしょう。」  
「つまり自分は悪くないとも言うつもりか？」

「もちろんです。そもそもなぜ長門鎮守府よりも姫級発見場所から近い我々が、長門鎮守府の為に戦力を割いて哨戒任務をしなければなら  
ないのですか？ 姫級の侵攻があるかも知れない状況でそんな余裕はありません。応援を要請するならば我々とは反対側の益田鎮守府か、

日本海側を担当している鶴野提督に要請するべきでしょう。にも関わらず原田提督は私にしつこく罵声を浴びせて執務を妨害しましたので、仕方なく通信を遮断しました。これでも何か問題がありますか？」

「ふん．．．まあ、良い。」

まあ良いだど!? なんだかんだとまだ難癖を付けるつもりだと思っ  
ていたがどういう事だ？

「とりあえず言い訳は聞いてやった。だが筋は通して貰おうか？」

なるほど、ここから理不尽な要求をしようと思か．．．

「はあ．．．一応話だけは聞きましょう。」

「現在この一件で大本営に民間から多くの苦情が届いている。特に貴様  
は民間からの通信を全て断って、何一つ説明をしていないと聞く。」  
「それが何か？まさか民間への対応が姫級の対応よりも優先されると  
でも言うのですか？」

そもそも今回連絡してきたのは一人二人の話ではない。多数の人間が通信を  
してきているのに、全てを対応する余裕など無い。姫級の対応が終わって安全が  
確保出来れば、少しずつ対応する事も出来るが．．．

「姫級の討伐は横須賀鎮守府の艦隊の仕事だ。貴様の仕事はさほど忙  
しく無いはずだ。」

「はあ．．．本気で言っているのですか？」

「ああ、もちろんだとも。」

こちらを嘲るような雰囲気を感じたので、おそらく本気でそう考  
えてはいないが、嫌がらせをしても大丈夫なくらいには余裕があると思  
っているのだろう。本当に面倒な奴だ。

「はあ．．．それで？私にどうしろと？」

「私も鬼ではない。民間からの通信に全て応えるのは難しだろう。だ  
から貴様には謝罪会見を行って貰おうと思っっている。それならば一  
度で済むだろう？」

「．．．つまり今回の一件で民間からの追及を私に集めてしまおうと言  
う事ですか？」

「そんな事は言っていない。だが今回の一件は貴様にも非がある事だ。ならば謝罪するのが筋と言うものだろうか？」

何が筋と言うものだ!? おそらく原田提督の失態を隠したい鶴野提督が、非難の矛先を自分に向けようと画策したものだろう。そう考えると長門市からの通信が多かったのは、すでに長門市に嘘の情報を流して自分を悪者に仕立て上げられていたのだろう。さて・・・どうしたものか? 正直こんな茶番は断ってしまいたいが、それはそれでこのクソ野郎に付け入る隙を与える事になる。だからと言ってこの件を受ければ、今回の一件の責任が自分にあると認めるようなものだ。

「一応言っておくがこれは大本営からの命令だから断る事は出来ん。それと軍事機密に関わる事は一切口外する事を禁止する。」

「軍事機密に関わる事、つまり大本営や鶴野提督の不利になることは黙っている?」

「解釈は任せるが破ればもちろん罰が下る。」

ふむ、逃げ道を塞ぐとする鶴野提督らしい狡猾な手だな。おそらく会見の場に来るのは鶴野提督の息がかかった者だけだろう。だからそこで大本営や鶴野提督の不正を訴えようが表沙汰にはならないだろう。であればどうやって上手く鶴野提督の思惑を崩すかだな・・・「分かりました。ですが姫級の一件が片付くまでは鎮守府を離れる事は出来ません。おそらくは明日には片付くはずなので、会見は明日の夕方にして頂きたい。それと質問に関しては事前に質問文を送って頂き、それに答える形式でやらせて頂きます。それで宜しいですか?」

「・・・ふむ、確かに姫級に関しては万が一があると困るからな・・・まあ、妥当なところか。」

「それと会場に関しては鎮守府をあまり長時間離れたくありませんので、鎮守府付近の建物をこちらで準備させて貰います。」

「・・・それは構わんがある程度の大きさを確保して貰うからな? 今日中に建物の手配を終えて、私に確認を取る事が条件だ。」

「分かりました。一応何人くらいの人数が入れば良いですか?」

「少なくとも30人くらいは入れる場所を考えておけ。」



こちらの要求を軽く受け入れてくれたな。ずいぶんと余裕があるようだ。まあ、無理な要求はしていないつもりだがな。

「分かりました。ではまた連絡します。」

「ふん、早めに連絡しろよ?」

「ええ、もちろんです。ああ、別件ですが一つ確認しても良いですか?」

「・・・なんだ?」

「前任者の大森提督が残っていた物の処分をいい加減片付けたいと思います。営倉にある拷問器具等の艦娘虐待の証拠品を憲兵隊に引き渡す許可と、大森提督の私物を売却して鎮守府の予算に加える許可の件です。どちらもまだ返答を頂いていないのですが?」

「ふむ?その件はとつくに許可書を送ったはずだが届いていないのか?」

また嘲るような雰囲気だ。どうせお前が書類を止めているのではないのか?

「いえ、届いていませんね。」

「では何か手違いがあったのだろう。また送ってやるから好きにする」と良い。」

「それはこの場で許可を頂いたと解釈しても宜しいのですか?」

「ああ、構わんよ。」

「分かりました。ではそちらも準備をしておきましょう。ではこれで失礼します。」

「ああ、ちゃんと謝罪の内容を考えておけよ。」

その一言で通話は終了した。さて、非常に面倒な状況になってしまったな・・・とりあえず仕込みをしておかないとだな・・・

## 125話（悪巧み開始）

人事課の中井との通信を終えて、面倒な案件についていたため息を吐いてしまう。

「提督……その……大丈夫ですか？」

「話を聞いていただろうからなんとなく察しているとは思いますが、上層部の連中は私に長門鎮守府壊滅の件で、謝罪会見をしろと言ってきた。責任を私に押し付けようって魂胆だな。」

「そんな……我々は出来る限りの事はやったと言うのに……あんなりです……」

大淀の嘆きは当然のものだ。長門鎮守府が崩壊したのは原田提督の責任なのに、敗戦の責任を押し付けられるなんてたまったものではない。

「上層部の連中なんぞこんなものだ。責任の押し付けなんて珍しくもないだろう。なににせよ謝罪会見を開けと言うのは大本営からの命令だ。従わざるをえない。」

「そんな!? なんとかならないのですか!？」

なんとかかねえ? もし謝罪会見を中止にするとすると、それ相応の力が必要だ。大本営の決定を覆すとなると、久藤提督か鶴野提督と交渉する必要がある。久藤提督の場合は鶴野提督との戦いに手を貸して貰う事になるので、大きな借りを作る事になるだろう。それに見合うだけの何かを提供出来るならば、貸し借り無しと言う事に出来るが、今のところこちらの手札が思い付かない。ならば無闇に借りを作るべきでは無いだろう。鶴野提督が相手ならば協力するのは不可能だ。なにかしら脅しをかけて動いて貰うしか無い。今のところ一番有用なのは原田提督の敵前逃亡の件だが、上手く使わないと簡単に揉み消されるからな……

「ふむ……おそらく謝罪会見を中止する事は難しいだろう。ならばどうやって都合良く謝罪会見を使うかと考えるべきだろうな。」

「都合良く使う……ですか?」

「ああ、これから忙しくなるぞ。」

「何かお考えがあるのですね？」

「ああ、ちよつとした嫌がらせだ。」

そう言つてニヤリと笑うと、大淀が少し震えたような気がした。

考えをまとめる為に大淀にコーヒを淹れて貰い一息吐く。今回は自分好みの砂糖多めの甘いコーヒで気分を落ち着かせる。上層部への怒りは消えないが冷静さを欠けば、思わぬミスを犯してしまう。

「とりあえず今回の件では、もう少し人手が欲しいところだな。姫級への対応も終わつてはいないので、そちらも同時に対処しなくてはならないうえに、時間の余裕もあまり無い。」

「・・・であれば曙さん呼びますか？」

「出来れば曙には輸送船の操縦と輸送艦隊の指揮に専念させたい。それに今回手伝つて貰う艦娘には、謝罪会見の当日にも補佐として連れて行きたいと考えている。大淀には私の留守を任せる必要があるし、曙はあの性格だからな・・・与えられた仕事は真面目にやるだろうが、まだ精神的には落ち着いていないから、多くの人間が集まるところに連れて行くのは避けたい。」

「そうなると戦艦か空母の人ですか？うちで一番落ち着きのある方と言えば鳳翔さんだと思いますが？」

「鳳翔か・・・確かに落ち着きはあると思うのだが・・・」

「何か問題でも？」

「性格が優し過ぎる気がしてな・・・これからやるのは人間同士の醜い戦いだ。こちら卑劣な手段を使う事も考えると少しな・・・」

それを言い始めると艦娘には荷が重い話か？だが艦娘の性格は多種多様なのだから、そういう話に耐性がある者もいるだろう。

「そう言われると困りましたね・・・龍田さんはどうですか？龍田さんなら少々卑劣な手段を使ったとしても許容されると思いますか？」

「悪くはないが・・・龍田はまだ私を敵視しているからなあ・・・それにサポートさせるなら視野が広くて気が利く者が好ましいだろう。」

「・・・となると陸奥さんですか？」

「陸奥か・・・」

あまり会話してはいないが、そこまでこちらを怖がっている印象もなかったし、天龍に石像を壊させた時も否定的ではなかった事を考えると、卑劣な手段を使っても受け入れて貰えるのではないだろうか？

「よし、陸奥を呼んでくれ。」

「分かりました。」

「次は小森だ。」

部屋の隅に居た小森が突然の呼び掛けにビクンと反応する。

「な、なに？」

「この近辺の建物について調べてくれ。条件は大きなホールがある施設で、会見を開けそうな部屋もあるところが良い。」

「大きなホールってどのくらい？演劇とかが出来るくらい？」

「そこまで広ければベストだ。なければ映画館のような場所でも構わん。」

「分かった。調べてみる。」

とりあえずこっちは小森に任せるとしよう。

「提督、陸奥さんはすぐ来るそうです。」

「分かった。大淀は今日こちらに通信をしてきた民間の者達に明日の夕方に会見を開くと伝えて、聞きたい事があれば質問を書類に書いて明日の朝までに送るように伝えて欲しい。当日はその質問にだけ答えると言っておけ。開催場所は決定次第連絡すると伝えてくれ。」

「分かりました。すぐに取りかかります。」

とりあえず今はこんなところか？場所が決まれば後は使用許可を取るのと、それなりの人手を準備する事、後は告知が必要だな。

コンコンコン

「陸奥よ。」

「入れ。」

部屋に入って来た陸奥は少し機嫌が良さそうな雰囲気だった。

「大淀から私に用事って聞いたけれど、どうしたのかしら？今回の戦闘の件？」

「まずは今日の戦闘では活躍してくれたと聞いている。良くやってく

れた。」

「ふふっ、ありがとう。」

「だが残念ながら別件でな・・・かなり面倒な案件を手伝って欲しい。」

「あらあら？頼って貰えるのは嬉しいけれど、そう聞くとつい身構えてしまうわね。なにをするつもりなの？」

「なあに、ちよつとした・・・悪巧みだ。」

## 126話（小森提督候補生の秘密）

葛原さんからお仕事を頼まれてしまった。ちゃんとお仕事しないと追い出されるかもしれないから、早く会見を開ける場所を探さないと・・・まずはあの子達に相談してみようかな？

そう考えた私はひとまず人気の無い場所に行って、周囲に人がいない事を確認する。うん、近くに人は居ないみたい。しっかりと確認を済ませた私は金平糖とティッシュを取り出して、床の上にティッシュを敷いて金平糖を少し乗せる。

「ねえ、誰か手伝ってくれないかな？」

小声で呼び掛けるとどこからもなく数人の妖精さんが現れた。

『お、小森の嬢ちゃんか。またなにか困ってるのか？』

「うん、葛原さんにお仕事頼まれたから、皆に手伝って欲しいの。」

私は妖精さんとお話が出来るとっても珍しい人間だ。数が少ない提督の中でも妖精さんの言っている事を聞き取れる人はほとんど居ない。それどころか艦娘達でもお話出来る人はほとんど居ないらしい。そんな凄く希少な力を持っている事を私には誰にも言っていない。もちろん葛原さんにも秘密にしている。なぜなら人と違う事が出来るという事は、いじめられるという事だからだ。

海沿いの町で産まれた私は小さな頃から妖精さん達が見えていた。けれど他の子達には妖精さんの姿は見えない。だから私は何も無い場所で一人で喋っているように見えてしまい、お化けと話をする気持ち悪い奴としていじめられてしまった。その頃は深海棲艦の事をまだ誰も知らず、妖精さん達もただ遊んでくれてお話ししてくれる優しい子達だった。

深海棲艦の攻撃が激しくなってきたからは家族揃って山間部へと疎開したので、妖精さん達とは会えなくなってしまったが、私が15歳になって提督候補者を探す検査を受けた時に再会して、とても驚いたのを覚えている。それからはほぼ強制的に士官学校に入学し、妖精さん達の力を借りながら頑張っている。妖精さん達だけなら良かったけれど、教官や他の士官候補生達はとっても怖いし、艦娘達も人間と同

じように見えるので、私をいじめていた人達を連想させて怖い。こんな怖がりな私が提督として指揮をするなんてとてもじゃないけれど無理だと思う。

とにかく今は葛原さんに守って貰って、提督として着任するのを先延ばしにしたい。その為には私が有能だと思って貰わなくてはならないのだ。そうでなければ追い出されてしまうかもしれないからだ。「えっとね、葛原さんから街で多くの人が集まれる場所を探して欲しいって言われたの。そこで記者を集めて会見をするのと、前任者の私物を売りたいんだって。劇場とか映画館とかが良いつて言ってたから、オークションでもするのか?」

『鎮守府と海の事は知っているが、街の事はあまり知らないからなあ……』

「うっ……そうだよね……」

妖精さん達は鎮守府で過ごすか、艦娘達と行動するかどうかからそうなるよね……

『そ、そう気を落とすなよ。とりあえず資料室に街の地図があったはずだ。持って来い。』

リーダー格の妖精さんの指示で数人の妖精さん達がトコトコと走っていく。

「ねえ、街に出てた妖精さんは居ないの?」

『そうだなあ……売られた艦娘達についてた奴らくらいか……ちよつと聞いてみるから待ってな。』

そう言っただけで残っていた妖精さん達も部屋から飛び出して、他の妖精さん達に声をかけてくれる。つい先程もこうやって妖精さん達が情報を集めてくれたおかげで、戦闘の詳細な報告書を作る事が出来て、葛原さんに褒めて貰ったのだ。全ては妖精さん達のおかげです。

しばらく待っていると妖精さん達が新しい妖精さん連れて、地図を持って戻って来た。

『話は聞いたクマ!!ちよつど良い場所を知っているクマ!!』

この子は球磨さんの所で働いている妖精さんかな?妖精さんにも個性があつて、この子は球磨さんの影響をかなり受けてるみたい。

「どこが良いかな？」

『このホールが良いクマ。ここは演劇とかが出来るくらい広いクマ。それに舞台裏も広いから安心クマ。ついでに小ホールもあるからそつちで会見すれば良いクマ。』

持つて来た地図を指して教えてくれる。鎮守府からもそんなに離れていないから、ここで大丈夫みたい。

「それなら葛原さんの言ってた条件を満たせるかも。ありがとう♪」  
『ふふーん♪球磨が宗教絡みのイベントで連れていかれてたクマ。嫌な思い出だけど役に立ったなら良かったクマ。』

お礼に金平糖を少し追加してから、葛原さんに報告に行く。せっかく妖精さんのおかげで仕事が早く終わったのだから、早く伝えないとダメだよな。

陸奥に今後の予定を伝えるとなんとも言えない苦笑いをしていた。隣で作業をしながら聞いていた大淀も少し驚いていたようだが、何も言わずに作業を続けてくれている。

「はあ・・・良いわ、提督が決めた事だもの、ちゃんと手伝ってあげる。けどあんまり無理をしてはダメよ？」

「ああ、分かっている。」

「そう、じゃあ私は明石さんに話をして、前任者の私物のリストを持つて来るわ。」

「ああ、頼んだ・・・小森も終わったか？」

陸奥を見送ろうとしていたら、こつそりと自分の机に地図を置こうとしていた小森を見つけた。地図に印がついているので、良い場所が見つかったのだろう。

「あ、うん・・・んん。」

「っ!?!いつの間にな!?!」

「ひっ!?!」

そしてお約束の如く驚く陸奥と、それに驚いて部屋の隅へと逃げて行く小森。

「あ、あらあら？そんなに怖がられるとお姉さん悲しいなあ・・・私は



長門型二番艦陸奥よ。あなたが噂の小森提督候補生かしら？」

そう尋ねられると小森は部屋の隅で怯えながら頷いている。その様子を見て陸奥は少し考えて、小森に近づいてからしやがんで目線を下げる。ほう、いきなり目線の高さに気を配れるとはなかなかやるな。

「とつても怖がりな娘なのね？心配しなくても大丈夫よ？ここの皆は良い娘達だから、貴女に酷い事なんてしないわ。提督もちよつと顔が怖いけれど、そんなに悪い人じゃないわ。」

「あ、うん・・・葛原さんは私を守ってくれる良い人・・・だよ・・・」

「そうなの？そう言えば私よりも提督との付き合いが長かったのよね？昔の提督の話とか聞いてみたいけれど、今はお仕事中のの。また今度お話を聞かせて貰えるかしら？」

「あ、はい・・・」

「そう。楽しみにしているわ♪じゃあまたね小森さん♪」

そう言って陸奥は執務室から去って行った。まさかあの小森と会話が出来るとは・・・貴重なものが見られたものだ。

## 127話（北条・織田来襲）

開催する場所が決まってからはトントン拍子に話が進んだ。市長の綾瀬さんに会見と競売の会場の使用許可を取り、黒川に会見の件だけを伝えて承諾を得る。そこからもう一度綾瀬さんに連絡をとって告知をお願いする。そして運送業者の真柴さんに当日の荷運びの為に、汚職に関わっていた者達に声をかけていく。

「提督?!横須賀の叢雲さんから通信が入りました!!」

「代わろう。・・・葛原だ。」

「叢雲よ。今無事に集積地棲姫の討伐が終わったわ。今は残党狩りをしているところよ。」

「おお!!流石だな。こちらは輸送艦隊の準備は整っているがどうする?」

「こつちは損傷も少ないし、すぐに送って貰って大丈夫よ。私達も護衛に向かうから途中で合流しましょう。」

「分かった。すぐに向かわせる。」

ふう・・・これでとりあえず集積地棲姫の問題は片付きそうだな。それにしても思っていたよりも早く終わったな。

「大淀、曙に輸送艦隊を率いてすぐに出発しろと伝えてくれ。」

「分かりました。・・・すぐに出発するとの事です。」

さて、後は曙と叢雲に任せれば大丈夫だろう。会見も競売の案件も後は任せても問題無いはずだがなにをするべきか?とりあえず面談でも進めるべきだろうか?そう言えばまだ話が出来ていない艦娘達も多いからな。

「提督、正門の憲兵の方から来客が来たとの連絡が入りました。」

「はあ・・・こんな時に来客だと?そんな予定は無いと追い返せ。」

そう言うで大淀が困った表情をする。

「えっと・・・来ている方が・・・」

「おーほっほっほっ!!また私が遊びに来ましたわよ!!」

「そして我も来た!!」

執務室に案内されたのは高笑いをする北条と、変なポーズをしている織田だった。一緒に執事の本郷さんと秘書艦の霞も来ている。それとどうにも霞は調子が良く無さそうだ。

「はあ・・・この忙しい時に何をしに来た?」

「織田が提督として着任する話は聞いていますわよね?それに小森さんも葛原の元で実地研修を始めたのですから、今日はそのお祝いをする為に来ましたのよ!!おーほっほっほっ!!」

「なぜ事前に連絡しなかった・・・」

「サプライズと言うやつだぞ、盟友よ!!」

「そうですわ!!驚いたかしら!」

「ああ、驚いたからもう帰れ・・・」

「今来たばかりですわよ?相変わらず冗談がお好きですこと?」

「冗談のつもりはなかったのだが・・・」

「はあ・・・まさかとは思うが、今私が姫級の対応をしている話を知らないわけでは無いよな?」

「む、そうであるか?」

「私はもちろん知っていますわ!!でも今朝姫級の艦隊を倒したのでしよう?流石は葛原!!見事な働きですわ!!」

本気で言ってるのかこいつらは・・・北条はともかく織田は知っておけよ・・・お前が着任する鎮守府を崩壊させた奴だぞ・・・

「北条が言っているのは、姫級が送り込んで来た艦隊の話だ。姫級自身を倒したのではない。」

「あら、そうなんですか?では早く倒してしまいなさい。」

「はあ・・・先程横須賀の艦隊から集積地棲姫の討伐は完了したと連絡があった。今は事後処理の段階だ。」

「なら問題ありませんわね♪では横須賀の方達も加えて祝勝会も一緒にすれば良いですわね!!本郷!!」

「お嬢様、持って来た食材は横須賀の方達の方も準備しております。」

「流石は私の執事、良い仕事をしますわね♪おーほっほっほっ!!」

恭しく礼をする本郷さんに気分を良くして北条が高笑いをしている

る・・・本郷さん・・・横須賀の分も準備しているって事は、まだ姫級との戦闘が片付いていなかった事を知っていたんだろ？なんでこのお嬢様を止めなかったんだ・・・

「はあはあ・・・悪かったわね葛原・・・二人を止める事が出来なくて・・・」

「霞も苦労したのだろう・・・体調が悪そうだが大丈夫か？」

「はあはあ・・・ちよつと疲れただけよ・・・」

見る限りちよつとでは済まなそうだ・・・

「大淀、鳳翔を呼んで霞の看護を頼んでくれ。」

「分かりました。」

「はあはあ・・・迷惑かけて悪いわね・・・でも助かるわ・・・」

あの霞がずいぶんと素直だ・・・これはよっぽどキツイようだな・・・

「おい、織田。お前霞に何をした？」

「我確定なのか!?!」

「いいからさっさと吐け。場合によっては拳で吐かせるぞ?」

「待て待て待てい!!霞殿は慣れない飛行機で疲れておられるだけである!!その疑うような鋭い目をやめい!!」

「霞、本当か?」

「そ、そうね・・・ちよつと慣れない体験で疲れてしまっただけよ・・・べ、別に怖かったとかそんなのじゃないわよ・・・」

ふむ、いつものツンツンした発言にも覇気が無いか・・・だがおそらく霞が疲弊しているのは飛行機に乗った事が原因のようだな。これが霞個人の問題なのか艦娘の特性によるものなのかは気になるところだが・・・

「提督、正門前にトラックが来て、物資の搬入の許可を求めています。所属は北条工業との事ですが・・・」

「ああ、それなら私がお祝いの為に準備したものですわね。通してあげなさい。」

「はあ・・・通してやれ。それと明石にすぐに連絡してくれ。で、何を持って来たんだ?」

「織田と小森さんの着任祝いの為の食材を持って来ましたのよ!!最高のものを取り揃えておりますから感謝なさい!!おーほっほっほっ!!」

「大淀、間宮に連絡して、すぐに今から搬入されるものを確認させてくれ。食材に関しては好きに使って良いと言ってくれ。」

「分かりました。」

まったく・・・この忙しい時に面倒事を持って来やがって・・・競売の為にまだやるべき仕事があると言うのに・・・そうだ!!

「大淀、陸奥を呼んでくれ。それと北条、一つ頼みがあるのだが？」

「あら？なんですかの？」

「北条は美術品には詳しいか？」

「もちろんですわ!!美術品や調度品に対する知識や美的センスなどは淑女の嗜みですもの!!おーほっほっほっ!!」

「なら良かった。明日前任者が溜め込んだ私物を競売形式で売るつもりでな、私にはその商品の価値がよく分からんのでな。目利きと値段の設定を頼みたい。」

「ええ、良いですわよ!!その代わりもし私が気に入るものがあつたら、先に買い取らせて貰っても構わないかしら？」

「ああ、それで良い。では案内に陸奥を呼んでいるから、後は彼女に案内して貰ってくれ。」

ふう・・・これで一つ問題が片付いたな。この忙しい時にいきなり来て迷惑をかけてくるのだから、これくらいは協力して貰わないと困る。

「ほほう、盟友よ、我には何か頼みたい事はあるか？」

織田に頼みたい事か・・・とりあえずこいつには邪魔にならないところで大人しくしていて欲しいものだが・・・

「いや、織田には先に客室へと案内しよう。ついて来い。」

「うむ、では行こうではないか盟友よ!!」

「な、なあ盟友よ？ここはその・・・」

「客室だ。」

「いやいやいや!!我にはどう見ても営倉にしか見えないのだが!」

「客室だ。綺麗に掃除しているだろう？」

「待て待て待てい!!ではこの鉄格子はなんだと言うのだ!」

「涼しげな作りの部屋だろうか？」

「確かに風通しは良さそうではあるが!?! いやこの地下室自体が風通しが良く無いから無意味ではないのか!?!」

「それに布団もそれなりに良いものを使用している。確かめてみるか?」

「そ、そうなのか?」

そう言っつて織田は営所・・・客室に入っつて布団を確かめているので、扉を閉めてからカギをかける。

「ちよ!?! 盟友!?!」

「このようにカギもかけられるから、セキュリティ面でも安心だろうか?」

「それ外からかけてるやつ!! 中からは出られないやつ!!」

「安心しろ、食事の時間になれば迎えに来る。」

「それまではここで過ごせと言うのか!?! もしかして物凄く怒っているのか!?! なあ、 盟友!?!」

その簡単な質問に笑顔で答えてから、私は営倉を後にした。

「盟友ううううう!!!」

## 128話（裏のお話・北条鑑定開始）

人事課の執務室で一息ついていると、憲兵隊の黒川が訪ねて来た。

「中井さん、北九州鎮守府の方はどうですか？」

「ええ、おそらく順調ですよ。葛原はきちんと謝罪会見を開く為の準備をしているようです。あいつはなんだかんだで上からの命令には従う奴ですからね。」

「ですがただで従う奴ではありませんまい。何かしら小細工を考えているのでは？」

「もちろん考えているでしょう。とりあえずあいつは前任者の私物を販売する許可と拷問器具等の証拠品を憲兵隊に引き渡す許可を求めて来ましたよ。」

そう答えると黒川さんは難しい顔をする。

「前任者の私物を販売する許可ならば多少は想像がつきませんが・・・証拠品の引き渡しに何の意味が？」

「さあ？そつちはついでかカモフラージュのつもりではないですか？おそらく本命は私物の販売の方でしょう。」

「ふむ、そう言えば先程北条さんが織田を連れて北九州鎮守府へと向かったとの報告がありましたな。北条さんに前任者の私物を売って、まとまった資金を用意するつもりでは？」

「どうでしょう？北条さんの行動は読めませんからね・・・策略でもただの気まぐれでもあり得るのが怖いところですね。ただ葛原が資金を手にしたとして何をやるかが分かりませんがね。まさかあいつが記者に賄賂を贈ろうなんて考えないと思いますし。」

黒川さんも少し悩んだがお手上げとばかりに首を振る。

「まあ、何かしら画策していると言うならば問題無いでしょう。せいぜい大きな問題を引き起こして貰いたいものですね。」

「そこは間違い無いでしょう。あいつは頭は回るくせに、上から押さえつければ反発するバネのような単純な男です。あれだけ煽っておけば私と鶴野提督に対して何かしら攻撃をしてくるのは間違い無いでしょう。」

「はっはっは、恐ろしい男ですなあ。」

「ええ、まったくです。」

「出来れば上手く久藤提督も巻き込んで、泥沼になってくれれば申し分無いのですが・・・」

「葛原も所詮は力の無い一人の提督です。鶴野提督とやりあうには久藤提督を巻き込むしか無いでしょう。」

「ええ、そうなれば我々の動く隙も生まれると言うものですか。」

「ですね。葛原提督には一生懸命頑張っただけのものです。我々の理想の為に動く駒として。」

「久藤提督、ご報告があります。」

「なんだ？」

「先程北九州市の者から明日葛原提督が謝罪会見を開くとの連絡がありました。」

「ほほう、あいつがそんな真似したがるとは思えねえから、大本営からの命令だろうな。」

鶴野のジジイが罪を押し付ける為にやっただけで考えるのが普通だな。だがそれにしてもやり方が杜撰だ。あのジジイなら情報操作くらいはもうやっているはずだ。そして大本営に圧力をかけて葛原に今回の事を黙っている命令すれば、そんなに大きな問題にはならないはずだ。俺が嫌がらせで広めている原田提督が敵前逃亡した話から目を反らす必要があったから、そんな大胆な手を打ったのか？

「それと葛原提督は謝罪会見の後に同じ会場で前任者の私物を販売するオークションを開くと言っているそうで、すでに北九州市の有力者の方々に声をかけているそうです。」

「はあ・・・あいつもあいつで何をするつもりなんだ？」

謝罪会見と同じ会場に北九州市の有力者、つまり俺の派閥の連中を集めてどうするつもりだ？おそらく俺の派閥を謝罪会見に絡ませるつもりだろうが、そもそも俺の派閥の奴らには今回の戦いは原田提督が逃亡したせいで負けたと既に伝えている。混乱を引き起こして謝罪会見をやむやにするつもりか？



「この一件どうされますか？」

「そうだな・・・」

今回の一件では葛原は俺に何も連絡はしなかった。つまり俺の力を当てにしてジジイとやりあうつもりは無いのだろう。だが俺の傘下の奴らを集めていると言うことは、強引に巻き込んでくる可能性はある。ジジイとの小競り合いは日常茶飯事だから問題はねえが・・・問題なのは葛原がどういう目的で動いているかだな。

「とりあえずは様子見で良いだろう。オークションへの参加は各自の判断に任せるが、問題を起こさないように言っておけ。あと謝罪会見の方にこつちからも記者を送り込め。」

「はっ、かしこまりました。」

さて、どう動くのやら？あいつはそれなりに優秀みたいだから、出来れば今後も北九州を守っていて欲しいものだが・・・見物だな。

「おーほっほっほっ!!なかなかの品揃えですわね!!さあ、掘り出し物を探しますわよ!!」

提督から北条さんの案内役を任されたのだけれど・・・この人本当に提督の友達なのかしら？提督がこの人と仲良くしているイメージが全然湧かないのだけれど・・・

「えっと・・・北条さん？提督からはオークションに出す商品の値段設定をするって聞いたのですが？」

「陸奥さん・・・でしたか？安心しなさい。もちろん葛原からの頼み事はちゃんとやってあげますが、良い物があれば先に買い取って良いと約束してますの。ならば目利きにも興が乗ると言うものでしてよ？おーほっほっほっ!!」

そう言って高笑する北条さんに、若干不安を感じながらも倉庫にしまった商品の一つ一つを確認する。北条さんはぱつと見ただけでどんな値段をつけていくので、私もどんどんと商品リストに書き込んでいく。この人本当に目利きをしているのかしら？とは言っても私には目利きの知識が無いから判断出来ないけれど・・・でも一応かなり高価な物もあれば安い物もあるので、北条さんなりに目利きはしてい

るのかしら？

「これで全部ですね。ご協力ありがとうございます。」

「私にかかればざっとこんなものですわ!!おーほっほっほっ!!」

「確かに凄いスピードで判断されていて驚きました。」

「私の目にかかればこんなものですわ!!おーほっほっほっ!!私も様々な美術品を見る事が出来て楽しかったですわよ。名作も贋作も入り混じっておりましたし。」

「値段が安い物も多かったですね。贋作だと売り物にならないかもしれませぬ・・・」

「あら？贋作でも良い物がありますのよ？確かにオリジナルではありませんが、オリジナルに近づこうと必死に努力した作品は、見応えがあつて私は嫌いではありませんのよ？もちろん質の低い贋作は論外ですが。そう言う意味ではオリジナルよりも素晴らしい贋作のほうが珍しいかも知れませぬわね。」

「なるほど・・・」

贋作を贋作と知つてなお質が良ければそれで良いっていう考えは、なんとなく提督と気が合いそうね。あの人は美術品なんて興味が無さそうだけど。ちよつとこの人に興味が湧いて来たかも？

「ではお仕事は終わりましたし、ここからはお買い物時間ですわね♪」

「ふふっ、私もお付き合ひさせていただきます。」

## 129話（大和対話）

織田を客室に案内し終えて執務室に戻る。部屋に残っているのは大淀だけ・・・小森も見当たらないから大淀だけだな。

「北条は陸奥が迎えに来たか？」

「ええ、先程一緒に行かれました。少々北条さんのテンションに陸奥さんが困っていた様子でしたが、たぶん大丈夫かと。」

「・・・陸奥ならきつと大丈夫なはずだ。」

北条は少々常識外れの事をするだけで、基本的に悪い奴ではない・・・はずだ。色々と苦労した記憶はあるが、北条から悪意を感じた事はなかったからな。だからと言ってあいつもただのバカではないからなあ・・・

「それよりも明日の取材用の質問がいくつか届いていますが、どうされますか？」

「ほう、早いな。少しだけ目を通すか。」

大淀からいくつか手渡された書類には、質問者の所属とこちらに対する質問が箇条書きで書いてあった。ざつと目を通したが内容は人事部の中井が話していたものと大差なく、特に関心を惹くものは無さそうだな。

「たいした事は書いていないようだな。これは明日に質問を締め切ってからまとめて確認すれば十分だな。となると・・・少し時間も出来るし面談の続きをするか。」

「え？お客様の相手をしなくて良いのですか？」

「北条には仕事を頼んでいるし、霞は体調が悪いからゆつくりさせてやりたい。だから北条の仕事が終わるまでは時間に余裕がある。」

「えつと・・・織田さんは？」

「あいつも今は客室で休んでいる。」

「そうですか。では誰を呼びますか？」

「まずは大和と話がしたい。次に潜水艦の二人も呼んでくれ。」

「分かりました。」

コンコンコン

「失礼します。大和です。」

「入れ。」

執務室に入って来た大和はなんだか少し暗い雰囲気だ。長門からは大和が何か話したい事がありそうだから、話を聞いてやって欲しいと聞いているが・・・ひとまず大和を椅子に座らせて対話出来る状態にする。

「まずは今朝の戦いではよくやってくれた。砲撃もだが対空迎撃でも活躍したとの報告を受けている。」

「ありがとうございます。しかし先程の戦闘では中破してしまい・・・ごめんなさい・・・」

「気にする必要は無い。ある程度の損害は想定範囲内だ。轟沈者が誰も居ないのであれば問題無い。」

「そう・・・ですか。」

どうにも歯切れが悪いな・・・

「何を気にしているのだ？せつかく二人で話をする場を設けたのだ。話したい事はしっかりと話しておいたほうが良いと思うが？」

「あ、いえ、その・・・私は他の皆さんよりも消費が激しいので・・・」

「そんな事か。大和を出撃させるからには、その程度の事は折り込み済みだ。それに資材であれば呉鎮守府からの支援も届いたから、まだまだ余裕がある。」

「その・・・その資材は・・・どうやって手に入れた物なのですか？」

大和は俯いたまま絞り出すかのような細かい声で質問してくる。

「どうとは？呉鎮守府からの支援だと言ったはずだが？」

「提督は呉鎮守府の傘下に入る事を断ったと聞いております。それなのに支援をタダで受けられるとは思いません。ならどうやってその支援を引き出したのですか？」

「ふむ、質問の意図は分かった。だが悪いが交渉した結果としか答えられん。」

「そう・・・ですか・・・」

「逆に聞こう。なぜ資材の出所を気にする？」

「ッ!?し、失礼しました!!」

私の言葉に大和は弾かれたように反応して、慌てて謝罪する。

「謝る必要はない。私は理由をなぜかと尋ねているだけだ。私には言えない話ならば無理に聞き出すつもりはないが・・・」

「いえ・・・その・・・提督を疑うような事をつい・・・ごめんなさい・・・」  
「今までの環境を考えれば、すぐに私が信用出来ないのは当然の事だ。一々気に病む事はない。それにまともに話をするのはこれが初めてなのだから、いきなり信用しろと言うほうが無理と言うものだ。」

「そ、そんな事は!!提督はこの鎮守府を良い方向へと変えて下さっています!!それは・・・分かってはいるつもりです・・・」

さて、どうしたものか・・・何か気がかりな事があるのだろうか、おそらくそれは私を非難する内容なのだろう。

「気になる事があるならば今のうちに聞いておいたほうが良いぞ?それに答えられるかは保証出来ないが、答えられない質問や私を非難する内容だったとしても怒りはしない。」

「・・・少し私の話を聞いて頂けますか?」

しばらく黙って俯いていた大和だったが、ようやく話をする気になったようだな。

「ああ、話してみろ。」

「私は・・・以前の提督からは厚遇されてきました・・・私が生まれた時、大森提督が大喜びで迎え入れてくれた事を今でも覚えています。」

懐かしそうに静かに語る大和を黙って見守る。あの戦艦と正規空母が大好きな奴なら、大和が着任したら大喜びだろう。むしろ大和の着任を喜ばない奴は居ないか?

「最初は本当に幸せでした。私は資材の消費量が多くて扱い難い艦であると感じていますが、大森提督は資材は十分にあるから気にせず出撃して構わないと言って下さいました。その言葉に応えるべく何度も出撃して戦果をあげて、上機嫌な大森提督に褒めて頂ける。軍艦時代には大和ホテルなんて揶揄されて、あまり活躍の機会が得られなかった私にとっては本当に誇らしい事でした。」

まあ、気持ちは理解出来る。大和型と言えば最強の戦艦として名高

いが、その資材消費量も半端ではない。通常の弾薬や燃料の消費もちろんだが、もし大破してしまえばその修理に大量の鋼材が必要になってしまう。故に大和型は安易に出撃させる事が出来ない。しかし資材の供給に不安がないのであれば、これ以上無い戦力とも言えるだろう。

「ですが私は知ってしまいました・・・私の幸せは他の艦娘達を犠牲にしていると・・・」

「それで資材の出所が気になったと？」

「はい・・・提督は大森提督がどうやって資材の確保をしていたかご存知なのですよ？」

「大まかな話はな。汚職や艦娘の密売、それに風俗的な扱いもしていたと調べがついている。あとは艦娘達へ使うべき金を抑えての節約か。そうやって得た金で資材を買っていたのだろうか？」

「それと私達戦艦や正規空母を守って修理に必要な資材を節約する為に、駆逐艦の子達を盾として扱っていました・・・逆らう艦娘には厳しい罰もありました・・・」

「ああ、その話も聞いている。だが私はそのような戦術を使うつもりはないから安心しろ。」

目を見てはつきりと伝えると大和は少しだけ安心したような雰囲気になったが、まだ何か気になる事があるような気がする。

「ええ、ここ数日の戦いの話は聞いています。提督は私達が沈まないように配慮して下さいっていると皆さんが言っていました。実際に私が参加した戦いでも、大破した者の撤退を援護する部隊を準備していたとても驚きました。」

「それなりの損傷を覚悟した戦いだったから、対応出来る準備をしただけだ。」

「そう・・・ですか？」

「ああ。」

しばらくの沈黙が続き、大和はまた俯いてしまう。

「私は弱くて臆病で卑怯な艦娘です・・・」

ポツリと懺悔をするように大和が呟く。

「私には大森提督に逆らう勇氣はありませんでした・・・私に優しく接してくれる大森提督が他の娘達に酷い事をしているのを知ったのに、私には皆の為に動く事が出来ませんでした・・・もし怒りの矛先が私に向かったら・・・もし逆らう艦娘は不要だと捨てられてしまったら・・・そんな想像に怯えて何も出来なかった・・・何も変えようとしなかった・・・そんな弱くて臆病で卑怯な艦娘なんです・・・」  
なるほど、これが大和が抱えていたものか。他の艦娘達がどんな処遇だったかを考えれば、恐ろしくて動けないのも無理はない。

「話は分かった。私から言わせれば全ての責任は大森提督にあると考えるが、大和は他の艦娘達に引け目を感じていると。」

「そう・・・ですね・・・今までも、そしてこれからもきつと迷惑をかけて生きていくと思いますから・・・」

「それで資材の話に繋がってくるよ。」

「はい。提督は大森提督とは違って、真つ当な方法で資材を集められるでしょう。きつと駆逐艦の娘達がコツコツと遠征で資材を集めてくれるのだと思いますが、私が出撃すればその資材を湯水の如く消費してしまいます。だから私はまた他の娘達に負担をかけてしまいます。それでも・・・それでも私は・・・戦場で活躍したいと夢見ずにはいられないのです・・・」

ほう、駆逐艦達への罪悪感を感じながらも、それでもなお戦場で活躍したいと考えるか。よほど活躍していたのが嬉しかったのだな。

「ふむ、大和の考えは分かった。だが組織と言うものをあまり理解していないように感じる。」

「組織をですか？」

「ああ、組織を上手く運営するには役割分担が必要だ。前線で戦う者、資材の回収をする者、後方支援に徹する者、各自がそれぞれに与えられた仕事をする事で組織は運営されており、その全てを管理するのが私の仕事だ。だから資材を集めてくれる駆逐艦達に感謝をするのは良いが、引け目を感じる必要は無い。そんな事を気にして自分の与えられた仕事に支障が出れば、その方が駆逐艦達に顔向け出来ないし知っておけ。」

「そう……ですね。もちろん戦場で活躍する機会を頂けるのであれば全力で戦います!!」

「それと大森提督に逆らえなかった件だが、私としては気にする必要は無いと思うが、私が気にするなと言っても気になってしまうのだろうか?」

「ええ……」

「それならば今後は守られる側から守る側になる事を目指すと良い。」  
「守る側ですか?」

「今までは駆逐艦達を盾にして守られて来たのだろうか?ならば今度は大和が駆逐艦達を守ってやれば良い。大和は強力な戦艦だ。その火力と射程は敵の脅威を遠距離から排除する性能を持っているし、対空能力も高いので敵艦載機から味方を守る事も出来る。だからもっと強くなって駆逐艦達や随伴艦を、もっと言えば鎮守府を守れる存在になれば良い。」

大和は私の言葉を深く噛み締めるように目を閉じてしばらく沈黙していたが、顔を上げてこちらを真っ直ぐ見つめてくる目には覚悟を感じることが出来た。

「ありがとうございます。提督のおかげで私の進むべき道が見えました。」

「ならば今後も宜しく頼む。資材の兼ね合いもあるから頻繁には出撃させてやれないだろうが、いざと言う時の切り札として期待している。」

「はい!!お任せ下さい!!」

立ち上がって良い笑顔で敬礼する大和に頼もしさを感じる。どうやら今回の面談は上手くいったようだな。



## 130話（イムヤ&イク対話）

コンコンコン

「伊168よ。伊19も居るわ。」

「入れ。」

大和との面談が終わり、次は潜水艦の二人との面談だ。執務室へと入って来た伊168は緊張した面持ちで、逆に伊19はなんだか上機嫌な様子だ。とりあえず二人を椅子に座らせて話をする場を整える。

「では改めて、新しくこの鎮守府に着任した葛原だ。宜しく頼む。」

「伊168よ。言いくらいからイムヤで良いわ。宜しくね。」

「伊19なの!!イクって呼んでも良いの!!」

「分かった。では今後はイムヤとイクで呼ばせて貰おう。まずは今回の戦いでは活躍させてやれなくてすまなかったな。」

「え!?そんな事で謝るの!?!」

「確かにせっかく出撃したのに何も出来なかったのはちよつと残念だったの・・・」

「ちよ!!イク!?失礼な事言わないの!!」

「はぁ〜い、な〜のね♪」

今まで面談をしてきた艦娘達は大概緊張しているか怯えていたので、イクの軽い態度はとても珍しいな。

「んんっ、まずは前任者の時にどのような扱いを受けていたか聞いても構わないか?」

「ええ、私達潜水艦はほとんど出撃する事はなかったわ。精々海底の資材回収に出るくらいね。」

「地味なお仕事なのね・・・」

「・・・大森提督から潜水艦は卑怯者が使うものだから、栄光ある我が艦隊には不要なものだっって言われたわ。」

まあ、無能な前任者に潜水艦なんて難しい艦娘を扱えるはずもないよなあ・・・

「卑怯上等なのね!!隠れ潜んでからの奇襲攻撃こそ潜水艦の華なのね!!」

「ほう、なかなか良い事を言うじやないか。奇襲攻撃を仕掛けずして何が潜水艦だって話だな。」

「理解のある提督で嬉しいの♪」

散々前任者に貶されたはずなのに、きちんと自分の存在意義を見失っていないのは素直に好感が持てる。

「ありがと・・・話を戻すけれど、大森提督が不要な艦娘をどう扱うかは分かるわよね・・・」

「たくさんの男の人の相手をしてたのね。」

「イクは言いにくい事を・・・でもそうね、今更隠しても無駄ね・・・私達は街の有力者達の相手をよくさせられていたわ・・・」

「脂ぎったおっさん達ばかりだったのね・・・」

イクの発言でイムヤは当時の光景を思い出してしまったのか、体を抱いて震え始める。

「大勢に囲まれる事も少なくなかったわ・・・」

「そうか・・・」

「それはそれで興奮したのね。」

「・・・は？」

イクは今なんて言った？

「・・・私はイクが庇ってくれたから、ちよつとはマシだったけど・・・」

「イムヤも可愛いけどイクのおっぱいには勝てないのね♪大きい正義なのね♪」

「ごめん、イクはちよつと黙ってて。」

「はぁ、い、なのね・・・」

「とりあえず以前の扱いはこんな感じよ。これ以上はあんまり思い出したく無いわ。」

「あ、ああ。辛い話をさせて悪かったな。今後の話だが、私としては引き続き私の指揮下で活躍して貰いたいと思っている。今後は海底の資材回収だけでなく、必要があれば戦闘にも参加して貰うつもりだ。もちろんその為には演習も必要だがどうだろうか？」

「ええ、もちろん司令官の指揮下で働かせて貰うわ。司令官は私達に

性接待とかをやらせるつもりは無いのでしょ？」

「ああ、当然だ。それと食事や居住環境の改善もしている。それはこの数日で感じて貰えたのではないだろうか？」

「ええ、こんな環境で働けるなら本望ね。イクもそれで良いわよね？」  
「もちろんなのね♪イクの魚雷がうずうずしてるの!!」

今回はかなりスムーズに話が進んだな。イムヤは多少のトラウマはあるものの、こうして男性である私と話も出来ているし、今後は性接待などやらせるつもりは無いので問題なさそうだ。イクもやる気十分って雰囲気だ。

「分かった。今後の活躍に期待している。ではそちらから何か聞きたい事はあるか？」

「うくん、今のところあんまり気になる事はないけど・・・そう言えば司令官って着任してから建造したこと無いわよね？大森提督は頻繁に建造してたから気になったんだけど？」

「片付けるべき問題が多かったからな。それに既存の艦娘達の事をまだ把握出来ていない。とりあえず全ての艦娘と面談をするまでは建造するつもりは無いな。そこからは状況次第としか言いようが無いが、しばらくは既存の艦娘達の練度を上げる方が優先だろうな。」

「なるほどねえ。うん、私からの質問はもう無いわ。」

「そうか、ではイクは何か聞きたい事は？」

そう話を振るとイクの目が輝く・・・なんだか嫌な予感がする・・・

「イクはいつ提督のベッドに呼ばれるの？早く呼んで欲しいのね♪」

ダメだ・・・少し頭が痛くなってきた・・・イムヤもイクの隣で頭を抱えている・・・

「・・・先程も言ったが、私はお前達に性接待をやらせるつもりは無い。」

「それは外部の人達の話なのね。提督相手なら接待じゃ無いのね。」

「いいや、私も職権乱用して相手をさせるつもりは無い。」

「職権は乱用するものなのね!!使わなければ何の為の職権なのね!!」

なんて事を言い出すのだから・・・

「職権は私が鎮守府を維持・発展させる為のものだ・・・乱用して良いものではない・・・」

「むう・・・提督の理解が得られなくて残念なのね・・・なら合意があれば問題無いのね♪提督は若くてイケメンだから、イクはいつでも大歓迎なのね♪提督も息抜きは必要はずなの♪」

「はあ・・・悪いがお前達に夜の相手をさせるつもりは無い・・・」

「むう・・・我慢は良く無いのね・・・」

ダメだ・・・本当にイクが考えている事がわからない。なぜこいつはほぼ初対面の自分にこうまでグイグイくるのだろうか？取り入って優遇して貰おうと考えているのか？それとも私の弱味を握ろうとしているのか？

「イク・・・もうそんなことしなくても大丈夫なのよ・・・」

「イムヤ？」

「イクが私を庇う為に、男の人達に積極的な態度をとってくれてたのは分かってるわ・・・負担をかけてしまつてごめんなさい・・・」

「イクはやりたい事をしただけなのね!!イムヤが気にする必要は無いのね!!」

「そう・・・ありがとう・・・でももうそんな事しなくても良いのよ？今度の提督は私達をちゃんと軍人として扱ってくれる人なの。だからもう無理する必要なんて無いの・・・」

「イムヤ・・・」

なるほど、イムヤを庇う為の行動だったか。それならば理解は出来るが・・・やはり私の言葉はまだ信用されていないようだな。こればかりは行動で示す以外に方法が無いから、時間をかけて理解して貰うしかないか・・・

「それはそれとして、イクは提督と夜戦をやってみたいのね♪」

・・・まさか本当に色狂いなだけなのか？だがしかし艦娘だぞ？艦娘は純粋な者が多いはずだ。提督に好意を寄せてケツコンカッコカを済ませた艦娘ならともかく、ほぼ初対面の相手だぞ？そんな相手にここまで言い寄るものなのか？これだから話の通じない相手は困るのだ・・・

「あー、イムヤ、イクはまだ精神的に不安定のようにだ・・・悪いが部屋に連れ帰って様子を見てやってくれないか？」

「え、ええ。じゃあ私達はもう行くわね。今日はちゃんと話が出来て良かったわ。」

「あ、ちよつと!?イクの話はまだ終わってないのね!!」

「では二人とも、今後の活躍に期待している。」

「ええ、海のスナイパーイムヤにお任せ!!正規空母だつて仕留めちゃうから!!」

イムヤはそう言つて良い笑顔を見せてから、イクを引きずつて退室していった。

「イクは正気なああのおおねえええ!!」

### 131話（大淀対話）

イムヤ達が去るとすぐに執務室に大淀がやって来た。

「て、提督？先程のイクさんの叫びは・・・提督も頭を抱えられて・・・いったい何があったのですか？」

「色々想定外の事があってな・・・」

「私で良ければお話を聞きますけれど？」

「いや、こういう話を女性に相談するのはどうかと思うが・・・だが対処に関しては同じ女性の方が分かるのか？」

大淀に話すべきか迷っていると、大淀が深いため息を吐く。

「ああ・・・なるほど、イクさんに言い寄られたんですね。」

「そんなところだ・・・」

「それで提督は私達にそういう事をさせるつもりは無いと公言しているにも関わらず、イクさんが誘って来るので対処に困ったと？」

「まあ・・・そうだ・・・」

「提督にその気が無いのであれば、普通に断ったら良いのではないですか？我々艦娘は提督のご命令には逆らえませんので、提督がそういう関係を拒絶されればそれまでかと？もし提督がイクさんとそういう関係になりたいのであれば、合意の上であれば誰も文句は言わないと思いますよ？イクさんですし・・・」

大淀は本当に不思議そうに尋ねてくる。と言うか最後のイクさんですしってなんだ？艦娘達もイクがあんな性格だと言うのが共通認識なのか？

「いや、私にその気は無い・・・無いのだが、安易に拒絶してしまうだけで良かったのかと考えてしまっただけ・・・」

「と言うと？」

「性欲は食欲・睡眠欲とならぶ人間の三大欲求だろう？お前達の話聞いて様子を見る限り、食欲は燃料で誤魔化しは効くものの、普通に食事をさせなければ士気の低下を引き起こす。睡眠欲も普通の人間よりは耐えられるが、長時間不眠で働けば性能の低下を引き起こす。ならば性欲はどうなるのだ？」

「え、えつと・・・そこまでは考えた事はありませんでした・・・」  
「私もそつち方面の欲求不満で能力が低下したという話は聞いた事がないのだが、艦娘が女性で提督の多くが男性だという事を考えると、艦娘達がそういう相談を提督にする可能性は低く、表沙汰になっていないだけなのではないかと疑ってしまう。給料をきちんと貰って外出許可も出せる鎮守府であれば、各自で何かしら対応して貰う事が出来ると思うのだが・・・給料はもうすぐなんとかかなりそうだが、外出許可を出せるようになるまではもう少しかかりそうだから・・・」  
「え!?! 私達に給料を支給されるのですか?」

大淀は本当に驚いたような雰囲気だ。まあ、前任者のやり方に慣れなければ無理もないか。これは意識の改革から手を着けなければならぬ案件だろうか?

「一応規定では、提督は所属する艦娘達に給料を支給する義務がある。財政難等を理由に支払わない者も多いのが現状だが・・・」  
「財政難ですか? 前任者の大森提督は金銭面で困っているようには見えませんでしたか?」

「それでも通ってしまうくらい有名無実の規定ではあるな・・・そもそも人間の給料と比べてしまえば、艦娘の給料はお小遣い程度に設定されている。」

「え、えつと・・・とりあえず今まで貰った事はありませんでしたが、困った事はありませんでしたので・・・」

「それは鎮守府では衣食住を提督が保証するからなのだが・・・それすらしてない奴が多いのが現状だからなあ・・・そもそもお前達は大森提督のやり方に慣れてしまっているからな・・・」

ここまで説明しても大淀はあまり理解出来ていない様子だ。これは意識改革もかなりの大仕事になりそうだ。

「えつと、私達が給料を頂けるといふ話は分かりましたが、その給料の使い道はどうなるのでしょうか? 艦娘として生まれてから一度もお金を使った事が無い者がほとんどだと思いますが?」

「ああ、それも外出許可が出せない理由の一つだな。艦娘達にある程度人間社会の常識を理解して貰わなければ、トラブルを起こす事が目

に見えている。金銭感覚やある程度の常識がありそうなのは、外部の人間と接触する機会がある大淀・明石・間宮あとは明石の手伝いをしている夕張くらいか？」

「そうですね．．．あとは鳳翔さんも大森提督が着任される前に着任されてますので、もしかしたら大丈夫かも知れないです。」

「まあ、そんなところだろうな。とにかくしばらくは明石を経由して買い物をして貰い、金銭感覚を身に付けて貰うつもりだ。ある程度金銭感覚が身に付けば、私が戦艦や空母などの比較的落ち着きのある者達を連れて街に出る。そこで問題無いと判断出来れば、その者達が引率する事が条件で他の者達にも外出許可が出せるようになるだろうと考えている。」

「な、なるほど。先が長そうなお話ですね。」

「ああ、本当にな．．．」

この辺の常識を教えるなんて話は普通の兵士では起こらない艦娘特有の問題だろうな．．．そもそも給料を貰って外に買い物に行けるような鎮守府であれば、新しく着任した艦娘を他の艦娘達が案内するので、問題など起きないのだが．．．

「まあ、そんなわけではらくは外出許可が出せないのだ．．．ならばそれまでは何かとこちらで配慮する必要があるのだ．．．そして食欲や睡眠欲に繋がる居住環境の改善については、私も理解出来るし対応も容易だ。心に余裕が出来て何か欲しい物があれば、明石を通して購入させれば問題無いだろう。だが性欲に関しては．．．」

「そう．．．ですね．．．そもそも嫌な思いをしてきた者達が多いので、今の環境で不満を持つ者はほとんど居ないと思いますが．．．どこにでも例外は居ますから．．．」

「ああ、本当に想定外だったから．．．ここまで悩む事になったのだ．．．外部の人間の相手をさせれば接待の疑惑が生まれる。かと言って私が相手をすれば無理やり迫った疑惑を持たれるし、そもそも私はお前達とそういう関係になるつもりは無いのでな．．．」

「手詰まりですね．．．」

「ああ．．．」



大淀と二人で頭を抱えるが、それで解決策が思い浮かぶ程度であればここまで悩んでいない。

「ん・・・提督、曙さんから通信です。今姫級の居た拠点に到着したので、資材を積み次第帰還するとの事です。」

「ほう、かなり早かったな。」

「道中の安全を横須賀の艦隊が確保していましたので、輸送船も含めて全速力で航行出来ましたからね。それに暗くなると周囲の警戒が難しくなってしまうですから、かなり急いだようです。」

「なるほど、叢雲の判断だろうな。横須賀の戦力があつてこそその判断だろう。」

「帰りは資材を積むので多少時間はかかるとは思いますが、19時頃には帰還出来ると思います。」

「分かった。では祝勝会は全員揃つてから出来そうだな。間宮には20時から始めたいと伝えて欲しい。」

「分かりました。・・・間宮さんもなんとかしますとの事ですが、手の空いている娘達に手伝つて欲しいとの事です。」

「分かった。では人選は間宮と大淀に任せる。料理が出来ない奴を向かわせたら逆に邪魔してしまうだろうからな。」

「お任せ下さい。提督はこれからどうされるおつもりで・・・すいません、陸奥さんから倉庫区画に来て欲しいとの事です。北条さんが提督を呼んでいるそうで・・・」

ほう、おそらく値段の設定が終わり、北条が購入したい物の交渉と言ったところか。とりあえず成果を確認しておきたいところだな。

「分かった。私が対応する。何かあれば陸奥経由で連絡してくれ。」

そう大淀に言い残して執務室を後にする。結局イクの件はどう対応するか決まらなかったが、しばらくは様子を見るしか無いだろう・・・これ以上面倒事が起きなければ良いのだが・・・

### 132話（北条のお買い物）

北条に頼んだ仕事が終わったとの連絡があったので、倉庫区画へと来てみたが・・・北条はとても機嫌が良さそうにしている。なかなか良い掘り出し物があつたのだろうか？陸奥もわりと機嫌が良さそうなので、思っていたよりも北条に振り回されずに済んだのだろうか？

「北条、頼んだ仕事が終わったと聞いたが？」

「ええ、この程度は私にかかればすぐに終わってしまいますわ。おーほっほっほっ!!」

「そうか、助かった。それで買いたい物は決まったか？」

「そうですわね・・・とりあえず全部買い取りますわ!!」

「・・・は？」

「ぜ、全部だ?!こいつは今回の仕事の意味を理解していないのか?!オークションに出す商品の値段設定だぞ?!商品がなくなったら意味がなくなるだろうが!!」

「ま、待て。流石に全部はやめろ。」

「あら？私が買いたい物は先に買わせて貰えるという約束でしたでしょう？別に買い叩くつもりはありませんわよ？」

「それはそうだが・・・明日のオークションに出品する物が無くなるのは困る。」

「ふふっ♪冗談ですわよ♪冗談♪流石に全部は買いませんわよ♪おーほっほっほっ!!」

「そ、そうか・・・」

愉快そうに高笑いしている北条だが、こいつは冗談みたいな事を平気でやるので、本気か冗談かがわかりにくい・・・高笑いする北条を見ていると無性にイラツとするのだが、一発くらい殴っても許されるだろうか？流石にやらないが・・・

「まず絵画や壺なんかの美術品は良いとして、ベッドやダンスなどの家具類は中古品を使いたくありませんもの。」

「ん？家具類も売れそうなのか？」

「ええ、しっかりとした作り的高级品なので売れると思いますわよ？」

ああ、もちろんベッドのマットは廃棄処分すべきですけど。なんだか嫌な臭いも染み付いていますし……」

「なるほど、では家具類も売る事にしよう。それで話を戻すがどれを買いたいのだ？」

「えっと、これとこれと……あとは……」

北条はそう言っていくつかの商品を指差していく、途中で陸奥が『え？』と怪訝そうな顔をしていたが、何が気になったのだろうか？

「最後にこれですわね。」

「まあまあの数だな。」

「ええ、今選んだ物はいらなから、残りの美術品を買いたいですわ。もちろん現金一括払いで構いませんわよ？」

「……は？また冗談か？」

「いえ、今度は本気ですわよ？」

しばらく唾然としていたが、北条は首をかしげるばかりだ……どうやら本気で言っているらしい。

「さて、どうしたものか……」

「一つ忠告しておきますけれど、オークションの開催は今日決めて明日開催なのでしょう？高額な絵画をいきなり出されても、買う方も困るので適正価格では売れませんわよ？」

「まあ、確かにそうかも知れんな……」

そんな高額な絵画やらをまとめて買おうとしている奴のセリフではないと思うが……そこは懸念していたところではある。

「ですから良い商品は私が適正価格で買い取ったほうがかなりお得だと思いますわよ？」

「ふむ……」

今回オークションを開催する目的で一番重要な事は、鎮守府の運営資金を稼ぐ事だ。次に謝罪会見と同じ場所で行う事によって、何かしらのトラブルを誘発する事。ついでに前任者の汚職に加担して私腹を肥やしていた奴らへの嫌がらせだ。ここで北条が大量の商品を買い取ったとしても、オークションの開催が出来る程度の商品は残る。質の悪い商品ばかりになる件も、今考えている案ならばさほど問題に

はならないはずだ。

「良いだろう。北条が欲しいと思う物は全て売ろう。」

「流石は葛原ですわ!!判断が早くて助かりますわ!!おーほっほっほっ!!では本郷、あとは任せましたわよ?」

「はい、お嬢様。お任せ下さい。」

上機嫌に笑う北条は側に控えていた執事の本郷さんに全てを丸投げした。まあ、本人があれこれ指示するよりもベテラン執事の本郷さんに任せただろうが、問題なく仕事が進むだろうから正しい判断ではある。

「陸奥、大淀にこの話を伝えてくれ。それとこのまま本郷さんと売却の手続きと、商品の搬出を担当してくれ。手が足りなければ鎮守府で待機している者に手伝わせて構わない。」

「分かったわ。なら赤城と加賀にでもお願いしようかしら?」

「それは構わないが、姉妹艦の長門は呼ばないのか?」

「うーん・・・長門はちよつと不器用なところがあるから・・・美術品を壊してしまつたらと思うとね・・・」

「そうなのか?」

長門と言えば軍人っぽい立派な艦娘だと思っていたが、そんな弱点もあつたのだな。まあ、そこは他の艦娘がカバーすれば問題無いか。

「ええ、長門は艦娘達の頼れるリーダーだって感じなんだけど、細かい作業とかは苦手なのよね。書類仕事とかも苦手なのだけど、本人は凄く真面目だからやる気はあるの。だから放っておくと一人で唸りながらずっと苦戦してしまうから、いつも私が手伝ってあげてるの。長門って実は結構見栄っ張りで、他の娘達にはそういう弱い所を見せたくないから、私以外の誰かに助けを求めるとして事をやらないのよ。困ったものね?」

そう言いつつも陸奥の表情は柔らかく、そこまで困っているようには見えない。陸奥も長門から頼られて悪い気はしないようだな。

「そういう事なら今後も上手くフォローしてやってくれ。」

「ええ、もちろんよ。あ、この話は他の娘達には言わないでね。お姉さんとの秘密よ♪」

陸奥はそう言いながら人差し指を口に当ててウインクしてきた。なんとなくそんな動作が似合っているような気がするな。

「ああ、分かった。ではあとの事は任せた。」

「ふふっ、分かったわ。あ、そうだ。せっかくここまで来たのなら、明石達の所に顔を出してあげたらどうかしら？あの娘達は昨日からずっと大忙しだし、ちよつと気にかけてあげたほうが良いと思うわ。」

そう言われれば昨日から出撃が続いて、それなりに損害も大きかったから艀装の整備も大変だっただろう。そこに呉からの資材と北条が持つて来た食材の対応まで・・・様子を見ておいたほうが良いかもしれないな・・・

「そうだな・・・少し様子を見てこよう。」

「ええ、じゃあ大淀には伝えておくから、明石達を宜しくね♪」

陸奥はそう言つて微笑むと、本郷さんの所に行つて打ち合わせを始める。やはり陸奥は何かと気配りが出来る優秀な艦娘だな。さて、自分分は明石達の様子を見に行くとしよう・・・

### 1333話（工場視察）

明石達の様子を見る為に工場の方に顔を出してみると、明石と夕張が工場の机に伏しているのを見つけた。どうやらかなり疲れているようだ。

「様子を見に来たのだが、ずいぶんと疲れているようだな？」

「て、提督!？」

声をかけると二人とも慌てて飛び起きる。

「いや、これはその・・・サボっているとかではなくてですね!？今はちよつと休憩中ということでした・・・」

明石が慌てて弁明しているが、別に怒っているわけではないのだがなあ・・・やはり上官が様子を見に来ると言うのは、責められていると感じるもののだろうか？

「別にお前達を責めに来たわけではないから落ち着け。様子を見に来ただけだ。」

「そ、そうですか？とりあえず艀装の整備も食材の搬入も終わってますよ。あとは輸送艦隊が帰って来てたらその対応ですね。」

「そうか、良くやってくれた。二人ともかなり疲れているように見えるが大丈夫か？」

「え、ええ。ちよつと疲れちゃいましたけど、まだまだやれます!!」

ふむ、多少疲れているようだが、まだまだ気力はあるようだな。

「ならば良いがあまり無理をするなよ？」

「あはは・・・まあ、そのですね？今はお仕事がとつても楽しいので、少し頑張り過ぎただけですから大丈夫ですよ？体が壊れるような無茶はしてないですし。」

「ほう？仕事が楽しいか？」

「ええ、もちろん遊んでるとかではなくて、やりがいとかそういう感じのやつです。夕張もそうでしょ？」

「そうね♪私は戦闘も出来るけど工場の仕事も好きだからね♪」

「とまあこんな感じです。ちゃんと交代で休憩もしてますし、体を壊すような無茶はしてないのでご安心下さい。」

ふむ、やる気があつて体調管理にも気を付けているのであれば、とりあえず問題はない。むしろかなり良い状態だな。

「分かった。では今後もその調子で頼む。私は前任者とは違って積極的に行動するつもりだ。遠征も演習も出撃もかなり増えるだろう。だからその分お前達の負担が増えると思うから覚悟しておけよ?」

「望むところですよ!!清々しい気分です仕事出来ますから、気持ち的には大森提督の時よりもかなり楽ですよ!!」

「ふむ、そういうものなのか?」

「そうですねえ。やっぱり皆を万全の状態で送り出したいですからね。大森提督の時は駆逐艦を使い潰してましたので・・・資材の無駄だからと言って、ポロポロの娘を整備せずにほったらかしなんて事も・・・中破未満の損傷なら私がこつそりと対処出来ますが、それ以上の損傷は入渠しないとお手上げなんですよね・・・」

なるほど、最初から盾として使い潰すつもりであれば、入渠や整備はしないほうが節約になるという事か。その結果が春雨の深海棲艦化を引き起こして殺されたのだから、私からすればずいぶんと間拔けな話に感じる。それに深海棲艦化したのが春雨だけなんて事は無いはずだから、おそらく近くの海域を守護している佐世保鎮守府に大きな負担をかけていたのだろう。

「今は私が提督としてこの鎮守府を管理しているのだ。私が管理する以上手抜きをするつもりは無いし、出来る限り万全の状態を整えて戦いに備えたい。なぜなら戦争は直接戦う前にほとんど勝負が決まっているからだ。」

「ええ!!?どういう事ですか!!前線で戦う娘達が頑張るからこそ勝てるのでは!?!」

「まあ、そう考えるのが普通だろうな。だが実際には違ふと私は考えている。まずは敵と戦う前にどれだけの戦力を確保出来るか。次に敵の情報をどれだけ手に入れるか。そしてその情報を読み取って相手の行動を予測し、有用な作戦をたてる事が出来るか。ここまででほとんど勝負は決まっている。実際の戦いはここまで準備したものの結果に過ぎない。」

「うーん・・・そう言われればそうかもなんですけれど・・・夕張はどう思う?」

明石はどうにも納得出来ない様子で、首をかしげながら夕張に話を振る。

「なんとなくは理解出来るけど・・・でも提督って私達の士気についてはかなり気にしてたはずよね?それって私達の頑張りが大切って事じゃないの?」

「もちろん重要だ。だがそれは最初の戦力の確保の段階だな。艦娘の数と種類・練度と士気と体調管理・装備や資材等の準備・艦娘の作戦への理解度と状況判断能力の強化の為の教育。ここまでが戦力の確保だと考えている。相手がどれ程の規模で攻めて来るか分からない以上、最高の準備をしておきたいものだ。時間と資材が限られているので、出来る事に上限があるがな。」

「な、なるほど?」

二人ともなるほどとは言いつつも、きちんと理解出来たわけでは無さそうだな。まあ、艦娘達は現場で戦う事が仕事で、今話したのは指揮官から見た世界の話だ。視点が違うと理解出来ない話だったかもしれないな・・・大淀あたりなら理解してくれるだろうか?

「色々と話したが、とにかく私は準備で手を抜くつもりは無いから、お前達にはしっかりと働いて貰うから覚悟しろって事だ。」

「はい!!任せて下さい!!」

まあ、今はこれで良いだろう。艦娘達への教育はまだまだこれからだ。将来的には艦娘達全員に私の考えを理解して貰いたい、先は長く険しい道になりそうだな。

「では私は食堂の様子を見に行こうと思う。輸送艦隊と横須賀の艦隊が戻って来たら対応をしてくれ。ああ、そうだ。輸送艦隊の件だが、艦娘達が運ぶドラム缶の資材はうちの資材置場に入れて貰うが、輸送船に積んでいる資材は降ろさなくて良い。」

「ん?分かりましたが・・・またどこかに運ぶのですか?」

「状況次第だがそうする可能性が高い。」

「了解しました。」



これで工廠の視察は終わりだ。もう少ししたら輸送艦隊も帰って来る頃だと思うが、食堂の方は大丈夫だろうか？

### 134話（食堂で北上さん）

食堂に着くと奥の厨房で数人の艦娘達が慌ただしく作業している様子が見える。あまり余裕はありそうにないか？

「んあ？提督じゃん、どしたの？」

ふと声がした方を見ると、食堂の机でだらけていた北上を見つける。休憩中だろうか？

「食堂の様子を見に来たのだが、かなり忙しそうだな。」

「そだね〜急に大量の食材が入って来て、今日は豪華なパーティーをするんでしょ？普通に人数分の食事を用意するのは違うみたいで、間宮さんが大慌てしてたよ。出来ればもう少し早く教えて欲しかったってさあ〜」

「すまないな・・・私も北条達が到着するまで一切の情報が無くてな・・・北条に振り回されてしまった・・・」

本当にあのお嬢様は急にどんな事をするか分からないから困ったものだ・・・

「ああ・・・提督もお疲れみたいだね〜まあ、間宮さんがなんとかするって言って、人手を集めて頑張ってるんだから、提督はど〜んと構えていれば良いと思うよ？提督は料理に関しては専門外なんでしょう？今声かけるのは邪魔になるし。」

「それもそうだな。間宮に頼るしかないか。そう言えば北上は休憩中か？」

「ん？アタシも料理は専門外だから、戦場みたいな厨房には入らないよ？たぶん後で配膳とか手伝うと思うけど？」

そう言っって北上はヘラヘラと軽く笑っている。

「つまり仕事の待ち時間って事か？」

「う〜ん？そもそもアタシは呼ばれて無いからどうだろねえ〜」

「そうなのか？ならなんで食堂に来たんだ？」

「あれだよ、大井っちの付き添い？ほら、大井っちって料理上手いから手伝って欲しいって言われたんだけど、『北上さんと離れたくないから嫌です!!』って駄々こねちゃって・・・だからこうしてアタシが応

援して、大井つちには厨房で頑張つて貰つてるのさ。」

なんとも微妙な理由だったな・・・確かに大井からは戦闘に行く時は、北上と一緒に出撃させて欲しいとの要望があつたが、ここまでべつたりだったのか・・・ふと厨房の方を見ると、手際よく作業をしながらこちらを睨んでいる大井と目があつた。

「なるほどな・・・大井にも困つたものだな。」

「まあねえ〜大井つちつてそういうめんどくさいところもあるけど、本当は優しくて良い娘だから理解してあげて欲しいなあ。暴走しそうになつたらアタシが手綱を引いてあげるからさあ。」

「・・・善処しよう。」

「ちよ!?提督!?なんで目を反らしながら言うのさ!?!」

「はあ・・・私は人を理解するというのが苦手だな・・・その場での喜怒哀楽くらいは読み取れるし、欲や悪意で動く奴は理解出来るが：」  
そう伝えると北上は微妙そうな表情をする。

「ああ・・・提督も提督でめんどくさい感じなのかあ・・・でもそういうわりには色々配慮してくれてない?食事とか布団とかは本来支給されるべきものだったらしいからともかく、甘いものをご褒美として渡すとかって絶対に必要なものではないでしょ?」

「それは単純に物で釣つてやる気を出させているだけだろ?流石に貰つて嬉しい物を渡せば相手が喜ぶ事くらいは分かる。」

「んん〜?まあ、艦娘は基本的に甘いもの嫌いな娘は居ないからねえ。ならあれは?」出撃前に声をかけてやる気を出させたり、帰つて来たら褒めてくれるのは?」

「出撃前に声をかけるのは作戦の目的と行動方針をきちんと伝える為だ。それと帰つて来たら褒めると言うが、それはきちんと結果を出しているからだ。お前達の上官として仕事を任せただけ以上、報告を受けたらその結果に対して評価をして伝えるのは当然ではないのか?」

「そんなもんなのかなあ?少なくとも前の提督はそんな事しなかつたと思うよ?あ、なんか長々と演説っぽい事はしてたけど・・・じゃあほらあれだよ!?アタシ達の部屋の備品を発注してくれてるらしいじゃん?机やタンスとかはともかく、一部屋に一つ大きな姿見も買つ

てくれるんでしょ？それって女の子への配慮ってやつじゃないの？」  
どうして北上はここまで必死になって、自分が艦娘達に対して配慮している事にしたがるのだろうか？よくわからん奴だ。

「それは長門が作った備品リストにあったものだからだ。それに軍属であれば身だしなみにも気を使うべきだ。服装の乱れは風紀と規律の乱れに繋がる。」

「うへえ〜規律とかはアタシはちよつと苦手かなあ・・・うくん・・・あとは何かあったような気がするんだけど・・・あ!!あれだよ暁がお風呂の時に自慢してた!!ほら？あの頭洗う時に使うやつ!!」

「シャンプーハットか？」

「そうそれ!!あれこそ配慮ってやつだと思うんだけど!?普通の人は要らないじゃん!!」

「だが子供だと必要な者も居るのだろうか？響には暁の分だけで充分だと言われたから、あまり使う者は多くないようだが。」

最初の面談で要求するくらいだ。暁にとつては重要な事だったのだろう。別に高価なものでもないしな。

「なんだかなあ？結構配慮してくれてると思ったけど、なんかよく分かんなくなってきたよ。てかよく考えたらアタシは現状に不満ないし、これ別にアタシが頑張る事じゃない気がしてきた。とりあえず提督がめんどくさい人だったのは分かったよ。」

北上はお手上げのポーズをとりながら、やれやれと首を振る。

「まあ、真つ当な人間とは言い難いかもな。軍人としては真つ当でありたいとは思っているが。」

「うんうん、それさえブレなきや良いでしょ。後は長く一緒にいたらそのうちわかるでしょ。」

「そんなものか？」

「そんなものだよ。たぶん。」

「そうか。」

確かに私がここに着任してまだ一週間経っていないのだ。私の知らない事はまだまだ多いのは当たり前か。

「ん?・・・提督、大淀がもうすぐ輸送艦隊が帰って来るって言ってる

よ。」

「分かった。では成果を確認しに行くか。大淀にそう伝えてくれ。」

「ほいほい。・・・分かりましただってさ。」

「では行ってくる。」

さて、どれほどの戦果があるか楽しみだな。

## 135話（艦隊帰還）

出撃港に到着するとちやうど輸送艦隊と横須賀の艦隊が到着したようだ。横須賀の艦隊は補給や艀装の解除をされていて、うちの艦隊は艦娘達が運んで来たドラム缶を倉庫区画へと運んでいるようだ。先に叢雲がこちらに気がついたようで、横須賀の艦隊に一声かけて整列させる。それに気がついたうちの艦隊も曙が号令をかけて整列させる。やはりこういう所でも練度の差を感じてしまう。

「横須賀艦隊、全員帰還したわ。損害軽微よ。」

「輸送艦隊も全員帰還したわ。損害無しよ。」

「良くやってくれた。横須賀艦隊は補給と入渠を済ませたら夕食の間までゆつくりしてくれ。」

「ええ、そうさせて貰うわ。」

「輸送艦隊は資材を倉庫区画へと運べ。ただし輸送船に積んでいるものはそのまま大丈夫だ。後は明石の指示に従え。」

「ええ、分かったわ。」

「ちなみに今日の夕食は姫級討伐の祝勝会をするつもりだ。遅れないように急いで作業をするように。以上だ。」

そう言つて敬礼でしめて解散すると、うちの艦娘達は大喜びで倉庫区画へと走つて行つた。やはり良い食事と言うものは士気の向上に有効な手段だな。そう考えていると叢雲がこちらを見ているのに気が付く。

「どうかしたのか？」

「・・・なんでも無いわ。ちよつとイメージと違つただけよ。祝勝会なんてするのはね？」

「ん？士気を高く保つ為には有効だと思うが？」

「そう。まあ良いわ。私達もその祝勝会に出席するって事かしら？」

「そのつもりだが何か問題があるのか？参加出来ないのであれば、別の場所で食事が出るように手配するが？」

「そこまでしなくても良いわよ。」

「そうか？そのほうが手間が省けて助かる。」

叢雲は何を気にしているのだろうか？やはり横須賀の艦隊をもてなして、横須賀の海原提督に取り入ろうとしていないかと疑っているのか？

「ねえねえ、北九州の提督さん。祝勝会って事は美味しいご飯がいっぱい食べられるのかな？」

「祝勝会って言うくらいだから、ご馳走は欠かせないよね」

叢雲の後ろから気軽に声をかけてきたのは、確か二航戦の飛龍と蒼龍だったか？叢雲以外の横須賀の艦娘に話しかけられるのは初めてだな。

「な!?あんた達!!みつともない真似はしないでよね!!私達は横須賀の代表として来てるのを忘れないでよね!!」

「まあまあ、話をするくらい良いじゃん？別に悪い人じゃ無さそうだし？皆で仲良く協力しようってのがうちの提督の方針じゃん？」

「そうそう、ツンツンしてるだけじゃ仲良くなんて出来ないよ」

「うう・・・でも横須賀としての威厳とかプライドとか・・・」

「そういうのは戦闘で見せたら良いじゃん？北九州の提督さんもその辺理解してくれるよね？」

「ああ、もちろんだ。我々では到底不可能な戦果をあげているのだ。横須賀を侮るような事はあり得ないな。」

「ふふん、ちゃんと分かってくれる提督さんで嬉しいな」

ふむ、叢雲としか接していなかったから、横須賀の艦娘達は排他的だと思っていたのだが、全員がそうではないようだ。叢雲は海原提督を守る為に排他的になり、二航戦の二人は海原提督の意思を尊重して友好的になるか。艦娘達にも個性があるのだから当たり前の話ではあるな。

「分かったわよ・・・けどあんまり羽目を外し過ぎないでよね？」

「わかってるって♪ねえねえ、それで美味しいご飯はちゃんと用意してくれてる？私達いっぱい食べるけど大丈夫かな？」

「ああ、そこは問題ない・・・が一つ先に言っておかなければならない事がある。」

「ん？どうしたのかな？」

「私の士官学校時代の知り合いが来ていてな。明日から隣の長門鎮守府に着任する事となつて居るのだが、今日はそのお祝いも一緒にする事になつて居る。それでも構わないか？」

「私達は全然構わないけど？」

「そうね、叢雲ちゃんは？」

二航戦の二人に話を振られた叢雲は、さらに不機嫌そうな感じだ。

「・・・そういう話は事前に言うべきじゃないかしら？私達に誰かを紹介しようって魂胆なのかしら？」

「すまない、今日いきなり押し掛けて来てパーティーを開くなんて言い出したのでな・・・私も直前まで知らなかったのだ・・・」

「そう。それで誰が来るの？」

「一人は明日長門鎮守府に着任する織田という提督候補生・・・いや、もう提督と呼ぶべきだろうか？とりあえずこいつは放置しておけば問題ないと思う。ただもう一人が厄介だな。北条工業の娘を知っているか？」

「はあ・・・知ってるわ・・・うちにも何度か来てたわね・・・」

ふむ、確かに士官学校と横須賀鎮守府はかなり近い場所にある。そして人脈作りに積極的な北条が横須賀鎮守府にアプローチしても不思議ではないか。

「そうなのか？」

「ええ・・・うちの提督と何度か会食をしているから知ってるわ・・・本当は近づけたく無いけれど、北条工業を敵に回すのは避けたほうが良いからって事で、無闇に断つて追い払う事も出来ないのよ・・・」

「ほう、横須賀鎮守府でもそういう判断をするのか？」

「あんた何か勘違いしてない？私達は好き好んで問題を起こそうとしてるわけじゃないわよ？武力を背景に発言力は確保してるけど、あくまで私達の目的は平穏な暮らしを勝ち取る事よ。民間企業や地元の人達とはある程度付き合いがあるし、会つても問題ない人には海原提督も会つてるわ。北条さんはちょっとグレーゾーンだけど・・・」

なるほど、多少の付き合いはあるのか。それにしても会つても問題ない人には海原提督も会つて居るとの事だが、それは逆に言えば会つ



て問題のある人間には会わせていないと言うことか。

「まあ、それはひとまず置いておこう。横須賀としては今回の祝勝会に参加するかどうかを決めて欲しい。」

「はあ・・・北条さんは私達が居る事を知っているのよね？そこで理由も無く断つたら関係悪化するわね・・・私達も参加するわ・・・」

「すまないな・・・食事の質に関しては期待して良いだろう。北条が最高の食材を持って来たと言っていた。」

「やったあ!!ご馳走楽しみだね蒼龍♪」

「そうね!!嬉しいわ〜」

頭を抱える叢雲と大喜びの二航戦が対照的だ。そんな様子を横須賀の艦隊が遠巻きに見ているようだが、わりと好意的な雰囲気だろうか？だがその中の数人がフラフラと倒れた!?

「どうした!?!大丈夫か!?!」

慌てて駆け寄ってみると倒れていたのは確か防空駆逐艦の秋月・照月・涼月だったか!?

「こ、こ、こ、高級・・・食材・・・」

「ん？なんだ？何を言っている？」

「はあ・・・大丈夫だから私達に任せなさい。」

叢雲がそう言うのと周りの艦娘達も慌てる事もなく秋月達を回収して去って行った。いったいなんだっただろうか？

## 136話（織田釈放）

さて、食堂の方も輸送艦隊の方も特に問題ないようなので、後は食事の準備が整うのを待っただけだろう。先程横須賀所属の秋月姉妹が倒れた件は原因不明だが、叢雲が問題ないから横須賀の艦娘達で対応すると言っていたので、叢雲に任せるべきだろう。なにか必要なものがあれば言ってくるだろう。ならば体調を崩していた霞の様子でも見に行くか？それならば織田も釈放・・・ではなくて声をかけておくか。

織田に声をかけようと客室へと足を運ぶと、中から大きなびぎが聞こえてくる。どうやら織田はこの客室がずいぶんと気に入ったようだ。とりあえず客室の鉄格子を鍵の束で叩いて、大きな音で織田を叩き起こす。

「うお!? な、なんだ!? 敵襲か!？」

「そろそろ食事の時間だ。さっさと起きろ。」

「なんだ盟友か・・・あまり乱暴な起こし方はしないで欲しいのだが?」

「なら人が近づく気配で起きろ。」

「無茶を言うでないわ!! 普通の人間はそんな能力を持っておらぬ!!」

そういうものなのだろうか? 織田が油断し過ぎているだけではないのか? 少なくとも自分は余程疲れていない限り人の気配で目が覚めるし、士官学校で同室だった小森も同じだ。つまりこれは織田が鈍感なだけだろう。

「そんな呑気な事を言っていたら暗殺者に殺されるぞ?」

「はっはっはっ!! 盟友も面白い冗談を言うものだな!! 国防の要である提督を暗殺するなど愚の骨頂!! そんな重罪を犯す者が居るわけがなかろう?」

「ん? お前知らないのか? 私は3日前に殺されかけたぞ?」

「なんと!? それは本当か!？」

「ああ、前任者の大森提督と平川元市長の汚職の件も合わせて、それなりの騒ぎになったはずなのだが?」

「そ、そうか・・・着任から一週間も経たずに殺されかけるとは・・・  
いったい何をすればそんなに恨まれるのやら・・・」

どうやらこいつは本当にあの事件の事を知らないようだ。前任者が何者かに殺された曰く付きの鎮守府で、後任の私が暗殺者を差し向けられたのだから、かなり大事件のはずなのだが・・・やはりこいつの情報網は艦娘関連に偏っているようだな。

「まあいい、そろそろ食事の時間だ。」

「ぬう？もうそんな時間であるか？今日は私の着任祝いを盛大にしてくれると言う話だったな。やはり主役が居らねば始まらないよな!!」

ふむ、どうやらまだ寝ぼけているようだな。今日は姫級討伐の祝勝会がメインで、織田の着任祝いはそのついでだ。いや？でもこれがこいつの正常な状態だったか？どちらにせよ戯れ言に付き合うのも時間の無駄だな。とりあえず客室の鍵を開けると、織田がノロノロと客室から出て来て大きく伸びをする。

「ぬう・・・やはり営倉で寝ると身体が痛くなってしまふな・・・いつも使っておる北条様から賜った柔らかいベッドが恋しいのう・・・」

「はあ・・・とりあえず霞の所に行くぞ。」

「む？そうであるな。食事の前に我が右腕である霞殿と合流するべきであるな。」

「お前の初期艦だろうか？少しは霞の体調を心配してやったらどうな  
んだ？」

「ふっ、舐めるなよ盟友？あれは我が選んだ初期艦である。我と霞殿との信頼関係があれば、心配など不要である!!」

何故か変なポーズで全く根拠のない事を言い出したぞ？相変わらずわけのわからん自信に溢れていてかなりイラツとする。これでは霞のこれからが思いやられるな・・・

コンコンコン

「はい、どなたででしょうか？」

「葛原だ。霞の様子を見に来た。」

「はい、少々お待ち下さい。」

鳳翔の部屋の外から声をかけると、中からそつと鳳翔が出て来た。

「鳳翔、霞の容態は？」

「おそらく重度の疲労だと思います。よつぽど飛行機に乗るのが怖くて、ずっと緊張していたのではないですか？軽く入渠を済ませて今は落ち着いて眠っていますので、出来れば起こさないであげたいのですが・・・」

今は眠っているのか。ならばゆつくりと眠らせておくべきだな。それにしてもやはり原因は飛行機に乗った事か・・・

「なるほど。もうすぐ食事の準備が整うが、食べられそうか？食堂に来るのが難しいならなにか食べやすいものをここに運ばせるが？」

「うーん・・・どうでしょう？それは霞ちゃんが起きてから判断した方が良いと思いますが？」

「それもそうか。ならば悪いがもうしばらく霞の看護を頼めるか？本当ならば鳳翔も今回の祝勝会に参加したいと思うのだが・・・」

「いえいえ、大丈夫ですよ。こんな状態の霞ちゃんを放っておくのは可哀想ですから。看病は私に任せて下さい。」

こちらの目を見て柔らかく微笑む鳳翔の姿を見て、これならば安心して霞を任せられそうだ。霞の看護を頼む者を考えた時に、真っ先に世話焼きな鳳翔の事が思い浮かんだのは間違いではなかったようだな。

「すまんが宜しく頼む。何か必要な物や人手が欲しい時は、大淀に言つてすぐに手配して貰え。」

「ええ、ありがとうございます。」

「ふむ、我からも一つ良いかな？」

今まで隣で黙っていた織田が鳳翔へと話しかける。鳳翔から少し困った雰囲気を感じるが？ああそうか。

「鳳翔、こいつは今度長門鎮守府に着任する織田で、霞を初期艦に選んだ奴だ。」

「うむ、よく聞け!!我こそはゲフツ!!」

いつものように盛大な名乗りをあげようとしたので、とりあえず鳩尾を殴つて黙らせる。どうしてこいつは考え無しに行動するのだろ

うか？

「静かにしろ。霞が寝ている。」

「ゲホツ!!ゴホツ!!す、すまぬ……」

鳩尾を抑えながら咳き込む織田を見て鳳翔がおろおろしている。こんな奴が相手でも心配するとは、鳳翔はかなりのお人好しのようだな。

「それで、鳳翔に何を伝えたかったんだ？」

「ぬう……ごほん。霞殿が目覚められたら我の事は気にせず、今はゆつくりと休んで英気を養って欲しいと伝えてくれるだろうか？」

「は、はい。ちゃんと伝えておきますね。」

そう言つて柔らかく微笑む鳳翔に織田が挙動不審な態度をし始める。こいつは重度の艦娘好きだから、鳳翔に見惚れたのだろうか？うちの艦娘に手を出されても困るので、やはり自由に行動させず、営倉に入れておいて良かったな。

「では私はそろそろ行く。後は任せた。」

「はい、お任せ下さい。」

さて、そろそろ食事の準備が整う頃だろう。食堂に向かうとしよう。

## 137話（祝勝会1）

織田を連れて食堂に戻ると艦娘達が慌ただしく配膳の準備をしているところだった。座席の準備は整っているようで、既に座ってソワソワしている者達もいる。そして食堂の中央に少し周囲のテーブルから離れたテーブルがあり、そこに座っているのは……

「あら？遅かったですわね？もうすぐパーティーが始まりますわよ？主役が遅れては始められませんわよ？おーほっほっほっほっ！！」

いつも通りに高笑いする北条が居るのは良いのだが……北条の前の席に若干顔が青ざめた小森が座っていた。北条に捕まったか……「そうか、待たせたな。」

「おお!!お待たせ致した!!むむっ!!小森嬢も来ておられたか!？」  
「あ……うん……」

「ふむふむ。これで自由の翼のメンバー勢揃いであるな!!これは吉兆!!今日の宴は私の提督就任と小森嬢の実地研修の開始、それに我が盟友が大戦果を上げた祝いである!!皆で大いに盛り上がろうぞ!!」

「おーほっほっほっ!!織田はよく理解しているようですわね!!褒めて差し上げるわ!!」

「ありがたき幸せ!!」

織田と北条の茶番劇を横目に見つつ、自分は小森の隣に座って織田は北条の隣に座る。四人で集まる時はいつもこの席順だ。

「小森、大丈夫か？」

「う、うん……大丈夫……」

「また北条に捕まったのか？」

「呼ばれたからちやんと来ただけ……」

「そうか……」

意外だと思いかもしれないが、小森は誰かに呼ばれたらちやんと来るのだ。だが見える範囲に来て様子を伺うだけで声はかけない。そしてしばらく様子を伺った後にその場からこっそり立ち去る習性がある。小森曰く『呼ばれたから来たけど、声をかけられなかったから帰った』との事。本人としては一応義理立てしてるつもりらしいが、

結果としては呼び出しを無視しているので、教官連中や同期の奴等の多くは怒っていた。この事を小森に伝えた事があるが、目を逸らして『私はちゃんとしてるから・・・』と言っていたので、悪い事をしてる自覚はあるようだ。

「今日は小森さんの実地研修開始祝いも含めてますのよ？主役がかけではパーティーが出来ませんわよ？おーほっほっほっ!!」

「あ・・・はい・・・」

そして北条は小森の天敵と言っても過言ではない。なぜなら北条は小森の姿を普通に見つける事が出来るからだ。そして北条は背が高く、声が大きく、明るく社交的に話しかけてくる。小森が最も苦手とするタイプだ。幸い悪意を持って近づいてくるわけではないが、北条としては優秀な小森を自分の派閥に入りたい・・・というかむしろもう派閥の一員にカウントしているのです、それはもう積極的に話しかける。当然どこにいても目立つ北条が話しかけるので、周囲の奴等も小森の存在を認識するようになるので、小森としてはかなりの負荷になるようだ。それでも呼ばれたら来るあたり律儀な性格なのだろうか？

「提督、よろしいでしょうか？」

「ん？間宮か。どうした？」

「準備が整いましたので、始めて頂いても宜しいでしょうか？」

「ああ、分かった。良く準備を整えてくれた。」

「ありがとうございます。」

一礼して下がる間宮を見送って立ち上がり、周囲を見渡すと艦娘達全員起立してこちらを見ている。多くの艦娘が期待に目を輝かせているようで、横須賀の艦隊も似たような感じか？

「総員、提督に敬礼!!」

長門の号令で一斉に敬礼をしてくる。この辺は横須賀の艦隊もしっかり訓練されている。

「まずは集積地棲姫の迎撃と討伐に尽力してくれた事に感謝する。長門鎮守府の件は非常に残念だったが、北九州の地に一切の被害を与えなかった事は素晴らしい戦果だ。皆も理解しているとは思いますが、今回

の一件は横須賀鎮守府の艦隊が居たから勝てた戦いだ。北九州の危機を救ってくれた事に感謝する。では祝勝会を始める前に紹介しておきたい者達がいる。私の士官学校時代の同期で今後関わる事があるだろう。」

織田と北条は堂々と胸を張って、小森はビクビクしながら注目を浴びる。小森は本当はすぐにでも逃げ出したいのだろうが、逃げようとする北条に止められて余計に注目を浴びるので、とりあえず耐えているのだろう。早めに終わらせてやるのが情けというものか・・・

「まずはこの北九州鎮守府に実地研修で来た小森だ。人見知りが激しく臆病な奴だから、あまり怖がらせないように接してやってくれ。」

視線を小森の方に向けると一瞬ビクツ!!となったが、状況を察して諦めたようだ。

「こ・・・小森・・・です・・・」

名前だけ言ってペコリと頭を下げて小森の挨拶は終わった。まあ、小森にしては頑張ったのではないか？

「次に明日から隣の長門鎮守府に着任する事になった織田だ。こいつは妄想癖があるので話す時は話し半分聞いておけ。」

「ちょ!?!盟友よ!!それは酷くないか!?!ごほん!!我こそは第六天魔王織田信長の子孫にして、いずれはこの世界の覇権を握る漢!!そしてここに居る葛原の唯一無二の盟友!!織田信雄である!!」

こちらの牽制も無視して堂々といつも設定を叫ぶとは・・・ある意味大物なのか?艦娘達の反応は様々で呆然として反応に困っている者、冷ややかな目で見ている者、逆にカッコいいと目を輝かせている者、苦笑しているものなど様々だ。まあ、こいつはどうでも良いか。「んんっ、最後に私の同期の北条だ。北条は北条工業の社長令嬢で、今回は祝勝会の為に多くの食材を持って来てくれた。皆感謝するように。」

「おーほっほっほっ!!ただいまご紹介頂いた北条ですわ!!葛原は私の派閥の一員ですわ!!ですからあなた達の後ろには北条工業がついていますの!!あなた達は北条工業からの手厚いサポートを受けて、葛原の指揮下で屈強な艦隊を目指しなさい!!おーほっほっほっ!!」



「おい!?私はお前の派閥に入るつもりは無いと言っているだろうが!!」

「将来的には私の派閥に入るのでしょうか?なら問題ありませんわ!!  
おーほっほっほ!!」

「はあ・・・もういい・・・せつかくの食事が冷めてしまう・・・んんっ、では紹介は以上だ。せつかくの祝勝会だから思いつきり楽しんで、明日からの活力としてくれ。以上だ。」

「総員、提督に敬礼!!」

挨拶を終えると間宮の指示で全員にステーキが配られていく。今回は北条が持つて来た神戸牛のステーキがメインで配られ、その他はバイキング形式で好きなものを食べられるようだ。食後のデザートも種類が豊富で量もあるので、艦娘達は大喜びだろう。さて、色々あったがまずは食事を楽しむとするか。

「なな、なん・・・こんなに大きなお肉!」

「あああ、秋月姉・・・だ、大丈夫?」

「て、照月姉さんも震えて・・・」

『これはなんのお肉ですか?わたくしせつかくのディナーに安いお肉は嫌ですわよ?』

『ちよ!?熊野!!失礼なこと言ったらダメだつて!!』

『えっと・・・最高級の神戸牛らしいですよ。』

『え!?マジで!』

『あら?それは楽しみですわね♪』

『こここ、神戸牛!?物凄く高いお肉!』

『はわわわわ!?!』

「秋月姉さん、照月姉さん、これは涼月達の手に残る代物です・・・ここは撤退を・・・」

「あー、やっぱり秋月ちゃん達ステーキ食べないの?なら私達で貰って良い?」

「飛龍さん!!是非!!是非お願いします!!」

「ありがと♪こんなに美味しいのに♪」

「いえ、やっぱり落ち着きませんので。秋月達のご馳走は銀シャリで良いのです。」

「そ、そうですね。幸いおつけものも用意して下さってますし。」

「美しい銀シャリですね。頂きましょう。」

「「頂きます。」」

『見て見て!! いっちなばんたくさんご飯を盛れたよ!!』

『むう・・・夕立も負けないっばい!!』

『もう!! 食事中に遊ばないでよ!! このお米も凄く良いやつらしいから落としたりもつたいないんだからね!!』

『えっと、魚沼産のコシヒカリですね、はい。』

『ふくん、それって高いの?』

『えっと・・・お米の最高級の品種ですし、産地は新潟ですから・・・輸送が困難な状況ですから物凄い値段になると思います、はい・・・』

「「ぐふ・・・」」

「秋月!? 照月!? 涼月!？」

「はあ・・・しょうがないわね・・・誰かこの娘達を部屋に連れて帰ってくれる? もう、部屋で戦闘糧食でも食べさせておきなさい。」

## 138話（祝勝会2）

祝勝会で出される料理は最高級の食材を使っているだけあって、レベルが物凄く高かった。もちろん間宮を筆頭に料理が上手だという艦娘達の技術があつてこそだろうが。自分が座っているテーブルでは織田と北条が大声で喋り、自分が適当に返答し、小森がビクビクしながら料理を食べている。士官学校時代から変わらない空間だ。艦娘達は初めて見る人を警戒しているのか私達に遠慮をしているのか分からないが、しばらくの間は近づいて来なかった。だがまあ、一番最初に近づいて来るのはやはりこいつだよなあ。

「ども、恐縮です。青葉です!!皆さんを取材しても良いでしょうか?」「おーほっほっほっ!!私に興味を持つのは当然ですわね!!もちろん宜しくてよ!!おーほっほっほっ!!」

「うむ、良かろう。なんでも聞くが良い。」

やはりこの二人は青葉の取材に乗り気のようにだが・・・何を口走るかかわからんな・・・

「はぁ・・・私も構わないが、こいつらの言うことをあまり真に受けるなよ?」

「ありがとうございます♪小森さんも宜しいでしょう・・・あれ?小森さんは?」

「ああ、小森さんなら先程お皿を持ってどこかに行っていましたわよ?何か料理を取りに行ったのではなくて?」

北条に言われて気がついたが、先程まで隣に座っていた小森が消えている。青葉の登場で意識が逸れた瞬間を狙って離脱したのだろうか?そんな状況でも北条は小森の行動に気が付くのか。侮れない奴だな。

「あう・・・ついさっきまで座っていたのでチャンスと思つたのに・・・まあ良いです!!今居られる方だけでも取材させていただきます!!まず初めにうちの司令官と士官学校の同期の方々とお聞きしましたが、司令官とはどのようなご関係で?」

「私は今4大鎮守府とは別の新しい派閥を作っていますの。ここにい

る葛原・織田・小森さんは私の派閥の初期メンバーですわよ。」

「ふつ、我と盟友の関係か…：我は第六天魔王織田信長の子孫である。そして盟友はその瞳に深淵の闇を宿す者。闇を宿す我等が盟を結ぶ事はもはや必然!!故に我はただの友ではなく盟友と呼ぶのである!!」

「ただの士官学校の同期だ。それ以上でもそれ以下でもない。」

「ふむふむ、なるほど。では士官学校時代の司令官のお話とか聞いても良いですか?」

青葉が何かメモを取りつつ取材を進めていくのだが、今の話から何が分かったのだろうか?

「そうですね?葛原は何かと好戦的でよく教官や他の候補生と揉めていましたわね。けれど口だけではなく実力を兼ね備えていましたわ。そういう所を見込んで私の派閥に誘いましたわ。」

「うむ。盟友は人を挑発して叩きのめすのが趣味であるからな。トラブルには事かかない奴であったな。」

「ああ…うちでも司令官は嫌いな人には容赦無いつて噂になってますからねえ…でもやっぱり成績は良かったですね♪」

「ええ、もちろんですわ♪座学でも演習でも小森さん以外では誰も勝てませんでしたわ。」

「うむ、教官にも演習で負けた事はない。むしろ同期で3位の海原とかいうイラつくイケメンの方が良い勝負をしておったな。」

「ええ、あの方もなかなかの実力ですわね。その次が私ですわね♪おーほっほっほっ!!」

「なるほど、なるほど。やっぱり司令官のお友達の皆さんは優秀なのですわね。」

いや、友達ではないのだが…それよりもっと大きな間違いがある。

「青葉、織田の成績は低いぞ?せいぜい中の下くらいだな。」

ついでに言えば北条が4位というのも他の奴らが北条に気を使った結果だろうから、あまり信用出来る数字ではないのだが…まあ、これはあくまでも自分の主観の話だからやめておこう。

「ええ!?そうなのですか!?!」

「むう・・・わ、我はまだ真の力を発揮しておらぬだけなのだ・・・」  
「実際に発揮出来ない力なら無いのと同じだ。馬鹿な事を言っていないで過去の戦闘記録でも見て勉強しろ。」

「むう・・・盟友は手厳しいのう・・・」

「ふむふむ、なるほど。」

「ああ!?青葉殿!!こういうカツコ悪いところはカットで!!カットでお願いします!!」

織田は先程までの尊大な態度を崩し、惨めに頭を下げて懇願している。こういうところが織田が小物たる所以だな。青葉も急な態度の変化に戸惑っているようだ。

「え、ええ・・・ど、どうしましょう?」

「こんな情けないところも含めてこいつだ。しっかりと書いてやれ。」  
「盟友?」

困ってこちらに助けを求めた青葉にそう言い放つと、青葉が苦笑している。

「えつと・・・では今後の成長に期待と言うことにしておきましょう。そう言えばチラツとお聞きしましたが、皆さんは問題児四天王とか呼ばれていたとか?」

「そうですね。私の派閥のメンバーは頻繁に揉め事を起こしますから、そう呼ばれてしまうのも仕方ないと言えますわね。私まで問題児扱いされるのは遺憾ですけれど。」

いや、北条工業の権力と経済力で好き勝手やってる奴は確実に問題児だろう?何より問題児の自覚が無いのが一番たちが悪い。

「ふつ・・・革新的な考えを持つ者は古臭い考えの者達から排斥される。これは致し方ない事であるが、無能な奴等の言いなりでは進歩はなく衰退するのみである!!」

「まあ言っていることは間違いないが、お前は基本的に無能側の人間だからな?」

「ふぐう!!」

「だが幸いな事に他の者の意見に耳を傾ける事が出来る。変なプライドで自分の考えに固執しないところはお前の長所だ。だから霞を頼

れ。霞は凄く優秀な奴だから、あいつの意見に従えばそうそう大きな問題は起こさないだろう。」

「う、うむ。心得た。」

「だから霞を初期艦として選んだ事は、最高の判断だったと言えるだろう。それだけは本当に助かった。」

「はっはっはっ!!やはり覇道を歩むには良き副官の存在は必須であるからな!!」

「ほほう。なんと言いますか、織田さんって司令官の言う事を素直に聞くんですね。かなり酷い事を言われていますが・・・」

かなり酷い事か・・・まあ、否定はしない。織田相手には手心を加えないようにしている。

「そう思うのも無理はないが・・・盟友は我の為を思い厳しくしておるところがあるからな。それに盟友の助言は役に立つ事が多いのだ。」

「なるほど。司令官の事をかなり信頼しているのですね!!」

「うむ、それとなんと言ったか・・・『夢を見るのは勝手だが指針を決める時に見るべきなのは現実だ。』だったか?『居眠り運転をすれば事故を起こして沈む。鎮守府という大きな船をお前の夢で沈めるな。』とも言われた覚えがある。」

「おお・・・なんか司令官らしい言葉ですね。」

「他にもあるぞ。確か『気持ち进行を分かってあげるなんて言う奴は、何も出来ない善人か悪意を持つ詐欺師だ。結果を出すのに必要なのは気持ちではなく数字と論理と情報、そしてそれを元にした行動だ。』なんて事も言われたのう。」

ほう、確かその話をしたのは出会った当初だったはずだ。よく覚えていたものだ。

「なかなか過激な発言ですね・・・」

「盟友は極端な事もよく言うし、凄く困難な事も言うのでなあ・・・全てを生かせる訳ではないのだが、そんな考えを知らぬよりは良からうというものだ。」

「ああ、それで充分だ。下手に全て理解したなんて言われた方が恐ろしい。」

「うむ。青葉殿、こうやって我に提督として必要になるであろう事を盟友は教えてくれるのだ。これが我が盟友を信じる理由の一つである。」

「なるほど。ありがとうございます♪おかげで織田さんだけでなく司令官の事を少し理解出来ました。」

「ならばよし!!盟友は一筋縄ではいかぬ厄介な奴である。どうしても分からぬ事があれば我に相談するが良い。我の経験から何かアドバイスが出来る事があるやもしれぬぞ?」

「分かりました!!もしもの時は頼りにさせて頂きます。では織田さん、北条さん、今日は取材に応じて頂いてありがとうございます♪」

青葉は二人にお礼を言って去っていった。後は新聞になった時に変な事を書いていないか確かめれば問題ないだろうか?

### 139話（祝勝会3）

青葉の取材も終わって一息ついていると、今度は木曾・朝潮・陽炎・不知火の4人が来た。元長門鎮守府所属として行動しているのだろうか？まだこちらに来たばかりだし馴染めないのは無理も無いか。

「なあ、提督。仲間内で楽しんでるとこ悪いが少し時間を貰えるか？」

「ああ、分かった。北条、織田、悪いが少し席を外す。」

「ええ、宜しくてよ。」

「うむ、艦娘との語りも重要である。我等の事は気にせず楽しんでくるが良い。」

「楽しむと言われてもな・・・わりと真面目な話だと思うのだが？とりあえず木曾達を連れて席を離れる。」

「では移動するか。話を聞かれたくないのであれば執務室が良いか？」

「ああ、いや、別に内緒にするような話じゃないんだ。俺達も戦えるって事をちゃんとやっておこうと思ってるな。」

「ん？わざわざこのタイミングでか？」

「あーその俺は大丈夫じゃないかって言ったんだがな・・・」

木曾が苦笑していると朝潮と不知火が一步前に出てくる。

「司令官！！ご歓談中のところ申し訳ございません！！ですがこの鎮守府では司令官にいつでも出撃可能であると伝えなければ出撃をさせて貰えないと聞きました！！なのですぐにも意思表示をして司令官のお役に立てる事をお伝えしようと思いましたが！！」

「あまり聞かないルールですが、不知火の落ち度で出撃メンバーから外されては困りますので、一刻も早くお伝えしようと考えました。」

「・・・誰からそんな話を聞いたんだ？」

「龍驤さんです。」

「龍驤か・・・」

龍驤達は街の有力者達に売られて虐待されていて、実戦からもしばらく離れていたから、出撃させるのを控えていたのだが・・・出撃メンバーから外されかけたのを余程根に持っているのだろうか？



「少々誤解があるようだが、龍驤達は特別な理由があつて出撃出来るかの確認をただけだ。心配しなくてもお前達は必要ならば出撃させる。」

「ありがとうございます!!この朝潮!!いつでも艦隊のお役に立てるよう頑張る覚悟です!!なんなりとご下命ください!!」

「不知火も司令の期待に応えてみせます。」

ビシツと敬礼をする二人に答礼する。この二人は本当に真面目な性格なのだな。

「だから俺らは大丈夫だろって言ったんだ。なあ陽炎?」

「そうよね。そもそもあたし達はついさつき輸送任務に出てたのにな。朝潮も不知火も心配し過ぎなのよ。」

「陽炎は気を抜き過ぎです!!いつでも司令官の為に誠心誠意全力で尽くす事が艦娘としての使命ですよ!!」

「ここまで厚遇して下さいさる司令の元で働けるのです。こちらも相應の覚悟で応えるべきです。」

「分かつてる分かつてるつて!!二人とも圧が強いつて!!私も良い鎮守府に来て嬉しいのは一緒だから!!」

陽炎が朝潮と不知火に迫られて困っているようだ。真面目なのは良い事だが、これは流石にやり過ぎだろうか?

「朝潮、不知火、それくらいにしておけ。真面目なのは良い事だが平時にはある程度緊張感を解いておかないと、いざという時に疲れて集中力を欠いてしまう。仕事にはきちんとメリハリをつけるべきだ。」

「承知致しました!!ご指導頂きありがとうございます!!」

二人はきちつと敬礼をして一歩下がる。こちらの指示に忠実なのは高評価だな。

「陽炎もやる気はあるのだろうか?」

「もちろんよ!!長門鎮守府じゃこんなご馳走食べられなかったし♪そりゃやる気だつて沸いてくるわよ♪」

「ならば良い。一応言っておくが今回の食事はかなり特別だから、毎日(こんな)馳走ではないからな?」

「いや、それは流石に分かつてるつて。それでも普段の食事も美味し

「いって聞いたよ?」

「食事に関しては間宮に任せているからな。贅沢はさせるつもりはないが、それなりの質は確保させている。」

「それなりの質って言うけど、長門鎮守府では本当に最低限の食事って感じだったし…きちんと食べられるだけありがたいものよ。」

「そういうものか。」

「そういうものよ♪」

ふむ、なんにせよやる気があるのならば良いだろう。そう考えていると不意に背後から誰かが近づいてくる気配を感じて振り返ると、そこには満面の笑みの川内が居た。

「提督提督!!今日はご馳走ありがとね♪おかげでもう元気いっぱいだよ!!」

「そうか。それは良かった。」

「うんうん。だから夜戦しよ!!夜戦!!」

「夜戦か・・・」

やはり川内の頭の中には夜戦しかないのだろうか?そもそも戦闘とは目的ではなく手段だ。敵の侵攻を防ぎたい、敵の大物を撃破して敵の勢力を削りたい、資材の確保の邪魔をする敵を排除したい。このような目的があつて戦闘という手段をとるのだ。だが川内は夜戦という手段の為には目的を選ばないという、どうしようもない夜戦狂なのだろうか?

「うん、夜戦だよ♪ほら、横須賀艦隊が集積地棲姫倒したじゃん?大規模戦闘の後には掃討戦するでしょ?だから夜戦しよ!!」

「掃討戦に関しては明日横須賀艦隊が担当する事になっている。」

「でもでも今ならまだ散り散りになってるのを各個撃破出来るじゃん?それなら私達にも出来ると思うんだ。そうしたら横須賀艦隊は明日の仕事が少なくなつて、早く横須賀に帰れて幸せ。提督は功績をあげられて幸せ。私達は夜戦が出来て幸せで皆幸せじゃん♪」

ふむ、確かに各個撃破出来るなら北九州鎮守府の戦力でも問題無いか?川内の常識外れな索敵能力ならば、本当に可能かもしれない。それに功績をあげる事も魅力的だが、艦娘達に実戦経験を積ませる事も

重要だ。川内は自分が思っていたより考えているのか？

「ふむ、悪くは無いか。」

「やったあ♪夜戦だあ♪」

となると人員は・・・駆逐艦は輸送任務に行かせなかった島風と雪風がいる。衣笠も次は声をかけて欲しいと言っていたから声をかけよう。あとは・・・

「司令官!!進言宜しいでしょうか!？」

「朝潮、どうした?」

「夜戦であれば是非この朝潮に出撃をご命令下さい!!」

「不知火も志願します。必ずや司令のご期待に応えてみせます。」

「そういう事なら俺も行けるぞ。提督としても俺達の実力を確かめる良い機会じゃないか?なあ陽炎?」

「え?あ、うん、そうね。良いと思うわ。」

「朝潮達は輸送任務に行ったばかりだが、疲労とかは大丈夫なのか?」

「もちろん問題ありません!!入渠と食事で万全の状態です!!」

確かにやる気充分のようだ。だが旧長門鎮守府の者達には、明日仕事をして貰うつもりだったのだが・・・まあ、一人居れば問題無いか。分かった。だが木曾、お前には明日の朝から任せたい仕事がある。悪いが今回は駆逐艦達に出番を譲って貰えるか?」

「そ、そうか・・・それなら仕方ないな。」

「悪いな。という事で川内、この三人を艦隊に加えようと思うがどうだ?」

「もちろん大歓迎だよ♪一緒に夜戦楽しもう♪」

「あとは衣笠にも声をかけておきたい。もう一人は誰が良いと思う?」

「うーん?球磨か五十鈴かな?私はそっちに声かけてくるから、提督は衣笠さん宜しく。」

「分かった。朝潮達は先に出撃の準備をしていてくれ。」

「二はいっ!!」

朝潮達は元気に駆け出したし、衣笠を探すとするか。

「司令官のお役に立てるチャンスです!!絶対に期待に応えましょう!!」

「はい。不知火達の実力を示す時です。」

「うう・・・急に出撃なんて・・・ケーキ食べたかったなあ・・・帰った時に残ってるかな?」

「陽炎!!弛んでますよ!!」

「そうですよ。出撃を命じられた以上戦いに集中するべきです。」

「ああもう分かってるって!!二人は真面目過ぎるのよ!!」

## 140話（祝勝会4）

衣笠に声をかける為に探そうとしたが、こちらが探す前に既に衣笠が来ていた。

「ちょうど良かった。話を聞いていたのか？」

「そりゃ朝潮ちゃんと不知火ちゃんが大声出してたからね。皆気になつてたし衣笠さんの名前が出て来たら気になるでしょ？」

そう言われれば食堂から出ていないのに、あれだけ騒いでいたのだ。注目されないほうがおかしいか。

「それもそうか。なら話が早いが衣笠は夜戦に参加するか？もし祝勝会を楽しみたいなら他を探すが？」

「絶対に出るからね!!衣笠さんは料理もデザートも充分楽しんだからもう大丈夫♪それに美味しい食事食べてやる気満々なんだよ？こんな絶好調の時に断る娘なんて居ないって!!それより問題なのは・・・ほらあれ。」

衣笠の指差す方を見てみると、球磨と五十鈴が睨みあっていた。

「ここは球磨に任せておくクマ。五十鈴はケーキでも食べてゆっくりしてれば良いクマ。」

「はあ？五十鈴に引っ込んでろって言うの？冗談じゃないんだけど？球磨こそ大好物の鮭でも食べてれば良いのよ。」

「それはもう喰ったクマ!!だから元気いっばいで球磨の野性が暴れたがっているクマ!!今回は対潜じゃないから球磨のほうが良いに決まってるクマ!!」

「はあ!?!追撃戦は五十鈴の十八番よ!!今回は散り散りの敵を各個撃破するんでしょ？なら五十鈴の出番じゃない!!」

「クウ~~~~マア~~~~!!」

「むむむむ!!」

「良いね♪良いね♪夜戦への最高の情熱を感じるよ!!どっちが夜戦への情熱を持っているか勝負だね!!」

球磨と五十鈴が唸りながら睨み合いを続け、一触即発の雰囲気だ。てつきり祝勝会の料理を楽しんでいる途中だから、出来れば出撃した

くないのかと思っていたのだが・・・これは少々誤算だったようだな。そして川内は煽るな。

「ほらね。あの二人もやる気でしょ？ほら、ちゃんと提督が決めないと、あの二人いつまでも睨みあってるわよ？」

「そうだな。お前達のやる気を少々甘く見積もっていたようだ。」

「なんだかんだ言って私達艦娘は戦う為に生まれた存在だからね。ほら、その・・・存在意義的なやつかな？ボロボロの状態だったらもかく、万全の状態なら皆活躍したいって思うよ。まあ、青葉みたいに別の事に情熱注いでる娘もたまにいるけど。」

ふむ、なるほど。そう言われればこの艦娘達は酷い扱いを受けていたにもかかわらず、出撃する事に関してはほとんどの艦娘が肯定的だ。こういう精神的な強さも艦娘としての特殊性というものだろうか？

「そういうものか。とりあえずあの二人を止めてくる。」

衣笠にそう言って喧嘩をしている二人を止めようとしたが、その前に木曾が間に入った。

「おいおい、五十鈴も球磨姉も落ち着けよ。」

「なによ？五十鈴に文句でもあるの？」

「木曾は下がってるクマ!!ここは姉ちゃんがカツコいいとこ見せてやるクマ!!」

「いや、二人とも出撃してえのはすげえわかるけど、こんなところで喧嘩すんなよ。出撃してえのは本当によく分かるけどよ・・・」

「う・・・」

喧嘩の仲裁に入った木曾が落ち込んで、当事者二人に同情されるという奇妙な空間が出来上がってしまった。よほど夜戦に参加しなかったようだな・・・

「ほ、ほら？木曾は明日の朝から任せたい仕事があるって言われてたじゃない？だから心配しなくても大丈夫よ？」

「はあ・・・仕方ないクマ・・・今回は五十鈴に出番を譲ってやるクマ。球磨は姉ちゃんとして木曾を独りぼつちにするのは忍びないクマ。」

「そ、そう？じゃあ五十鈴が出るわね。」

ふむ、どうやら決まったようだな。木曾としては不本意かもしれないが、結果として見事に場を収めてくれたようだ。

「あー、では川内・衣笠・五十鈴は出撃の準備をしてくれ。」

「やったあ♪夜戦だあ♪夜戦だあ♪♪」

「はあーい♪衣笠さんにお任せ♪」

「ふふっ♪五十鈴に任せて!!」

元気良く走って行く三人を見送って、今後の予定を考える。夜戦をすると決めた以上、こちらにも指揮をする準備を整えなくてはならないな。

『メーデー、メーデー、メーデー。こちら駆逐艦陽炎所属妖精、誰か応答願う。』

『こちら北九州鎮守府通信設備妖精、状況報告を求む。』

『陽炎がケーキを食べ損ねて落ち込んでいる。しかも朝潮と不知火に睨まれてるから、誰かに頼む事も出来ない状況だ。なんとか出来ないか?』

『甘えるな馬鹿野郎。妖精に出来る事じゃないから諦めろ。』

『クソツタレ!!甘いお菓子なんて食べた事無いから物凄く楽しみにしてたんだぞ!!たくさんあるなら分けてくれても良いじゃねえか!?!』

『だからそれをどうやって伝えれば良いと思ってるんだ?俺達の言葉は艦娘にも提督にも伝わらないんだぞ?金平糖くらいならともかく、ケーキなんて大物運べないだろ?』

『うう・・・そりゃ分かってるけどよ・・・』

『あー、割り込み失礼。工廠妖精だ。落ち着け新入り。俺達がなんとかしてやるから大船に乗ったつもりで待ってろ。』

『ほ、本当か!?ありがてえ!!』

『って事で小森の嬢ちゃん。なんとかしてくれないか?』

「う、うん・・・」

妖精さんから相談されたけど・・・陽炎さんってあの元気で明るい娘だよね・・・喋りかけられたら怖いんだけど・・・しかもあの真面

目で大きな声で話す朝潮さんと目付きが凄く怖い不知火さんも近くに居るんだよね……。でもせつかく楽しみにしてたケーキが食べられないのはちよつと可哀想だな。

「分かった……。なんとかする。」

『おお!!ありがとうございます!!』

うん、私と妖精さん達とは持ちつ持たれつだから、皆を頼るからには頼られた時はちゃんと助けてあげないといけないよね。とりあえず妖精さんを肩に乗せて周囲の様子を伺う。幸いな事に今は五十鈴さんと球磨さんの喧嘩に皆の意識が向いている。動くなら今がチャンスだね。

『小森の嬢ちゃん、作戦は?』

「冷蔵庫にまだケーキの箱があると思うから、その箱に『夜戦出撃者ご褒美用』ってメモを付けようと思うの。」

『なるほど、それならとっておいてくれるだろうな。メモとペンはどこから持って来るんだ?』

「それは貼れるタイプのメモをいつも持ち歩いてるから大丈夫。」

『なんでそんなもん持ち歩いてるんだ?』

「何か伝えたい事がある時にメモがないと困るでしょ?」

当たり前前の事を答えたけれど妖精さんは首を傾げている。何が分からなかったんだろう?とにかくあんまり時間をかけてもいけないから行動しよう。とりあえずメモの準備を済ませてから厨房へと忍び込む。食堂の方を見てニコニコしながら休憩している間宮さんに気が付かれないように注意して冷蔵庫へと近づく。うん、こっちは気が付いていないから大丈夫。そつと冷蔵庫を開けると中には使いきれなかった食材がたくさん入っていた。

『おお!!こりやすげえな!!』

感動している妖精さんには悪いけれど、今は隠密行動中だから静かにして欲しい。さつとお目当ての物を探すと、いくつかケーキの箱が残っていた。とりあえず基本はやっぱりショートケーキだと思っから、ショートケーキの箱にメモを貼ってそつと冷蔵庫を閉じる。うん、間宮さんにはまだ気付かれてない。慎重に厨房から撤退してこれ



で任務完了だ。

『やっぱり小森の嬢ちゃんはずげえな。間宮さんは全然気が付いてなかったぜ。』

「慣れてるからね。」

さてお仕事も終わったし、私も席に戻ってデザート食べようかな？

北条さんも織田さんも怖いけど、北条さんがくれるお菓子は凄く美味しんだよね。

『じゃあ、あとはケーキを確保してるのを陽炎に伝えたら任務完了だな。』

「……え？」

『そりやそうだろ？じゃないと悲しい気分で夜戦に行っちまうぞ？』

「……分かった。」

「さあ皆!!夜戦の準備は出来た？」

「はい!!朝潮!!いつでも行けます!!」

「不知火も問題ありません。」

「うん、私も大丈夫よ。」

川内さんが目を輝かせながら聞いてくる。これは一刻も早く夜戦に出たかって顔だなあ。衣笠さんと五十鈴もやる気みたいだし。ケーキの件は諦めるか……運良く残ってたら良いけど。

「提督、皆準備出来たよ♪出撃して良い？」

「ああ、だが無理はするな。危険だと判断した場合は即座に撤退しろ。」

「うんうん、わかってるって♪じゃあ行ってくるね♪」

通信越しで指示を受けた川内さんに続いて、出撃港へと向かう。ああもう、今は出撃に集中しないと!!

「あれ?ねえ陽炎ちゃん、艦装にないを付けてるの?」

「え?衣笠さん、何かついてます?」

「ほらこれ、メモかな?」

衣笠さんがとってくれたメモには「冷蔵庫にケーキを確保してる。帰ったら皆で食べて。」と書かれていた!!

「やったあ♪ねえねえ皆♪冷蔵庫にケーキを確保してるから、帰ったら食べてってさ♪」

「へえ？良いじゃん♪ますます夜戦にやる気が湧くよね♪」

「司令官の心遣いでしょうか？このような配慮までして頂けるとは感激です!!」

「ここの司令は優しい方ですね。良かったですね陽炎。」

「えへへ、よおし!!川内さん、夜戦頑張りましょう!!」

「もちろん!!じゃあいつくよお!!」

「ねえ五十鈴、提督がこんな回りくどい事すると思う?」

「ないわね。提督なら直接言うと思うわ。」

「だよねえ。じゃあ誰かな?」

「さあ?五十鈴にはわからないわね。」

「そっか。まあ、後で聞けばいいっか。」

141話（祝勝会5）

川内達を夜戦に出撃させた以上、こちらも指揮が出来る状況を作っておくべきだろう。今はまだ基地レーダーの範囲内だから深海棲艦との接触は無いだろうが、早めに執務室で準備をするべきだろう。ついでに後回しにしていた明日の会見の質問の確認も済ませておきたい。

「んんっ!!提督よ、少し良いだろうか?」

今後の予定に関しての考え事をしていたら、長門が声をかけてきた。長門の後ろには陸奥と横須賀鎮守府所属の・・・たしか那智だったか?が居た。3人とも雰囲気からして少しお酒を飲んでいるようだ。

「どうかしたか?」

「そのだな・・・おそらく提督は執務室に戻るのではないかと思っ  
な。」

「そうだな。もうしばらくは敵に遭遇しないだろうが、早めに執務室へと戻ろうかと考えていたところだ。」

「そ、そうか・・・ならば仕方ないか・・・」

「何か私に用事があったのではないのか?」

「うむ・・・そのだな・・・」

なんとも歯切れの悪い回答にしびれを切らしたのか、陸奥がやれやれといった雰囲気の前に出てくる。

「もう、長門は考え込み過ぎよ。提督、今お酒が飲める娘達で集まって、北九州と横須賀合同で飲んでいるんだけど、提督も少しだけ参加しないかしら?今ならまだ少しだけ時間あると思うんだけど?」

「私からも是非お願いしたい。勝利の宴としてここまで歓待されたのだ。横須賀の一員として北九州の提督と杯を交わしたい。交流の一環として一杯だけでも付き合って貰えないだろうか?」

横須賀の那智も上機嫌な雰囲気で誘ってくる。そう言えば昔織田から聞いたが、那智はかなりの飲兵衛だと聞いている。演習で見る那智は凛々しく真面目な雰囲気だったので、意外だったのを覚えている。

る。それにしても……

「はあ……悪いがお酒には付き合えない。」

「むっ?もしかして下戸なのか?」

「いや、私はまだ未成年だぞ?」

「二……え?!」

「ん?言っていないかったか?私はまだ18歳だから酒は飲めんぞ?」

「そ、そうだったのか!」

「ああ、そうだ。」

「若いなあとは思ってたけど、まさか未成年とは思わなかったわ。」

「そ、そうか……それは悪い事をしたな。すまない。だがまさか未成年とは……」

そんな私に年上に見えるのだろうか?そこまで老けているつもりはなかったのだが……

「まあいい、お酒は飲めないが少しだけ顔を出そう。それで良いか?」

「ああ、ありがたい。ではこちらへ。」

大喜びの那智に案内されて、合同で飲んでいると言っていた席へと向かったのだが……明らかに身長が低い者が二人も座っている……

「おい、まさかとは思うが駆逐艦に酒を飲ませているのか?」

振り返って長門と陸奥を問い詰めると二人ともビクツと反応する。これはアウトだな。とりあえず隣り合って座っている二人に近づいて肩に手を置く。

「二人とも……駆逐艦なのにお酒を飲んでいるのか?」

そう声をかけると二人は慌ててこちらを振り返る。そこに座っていたのは響と龍驤だった。

「やあ、司令官、なんだい?」

「……え?ちよい待てや!!うちは駆逐艦やないわ!!こんななりでもれつきとした軽空母なんやで!!うちは大人なんやから酒飲んで文句言われる筋合いはないわ!!」

「む?龍驤だったか。すまない。私の勘違いだったようだ。」

「おう、分かればええよ。まあキミのことやからわざとからかつとるわけやないやろ。次から気い付けてや。」

龍驤は激しいツツコミをしながらもどこことなく物悲しい雰囲気を漂わせている。

「ああ、すまなかつたな。だが響、お前は駆逐艦だろう？何を飲んでいる？」

「・・・水みたいなものさ。」

「ほう、水みたいなものか？」

響のグラスを持つとかなり強めのアルコールの臭いがする。

「かなり強いアルコールの臭いがするぞ？」

「でも色は水だよ。」

「・・・長門。」

「な、なんだ？」

「間宮にマッチがあるか聞いてこい。」

「分かった。」

長門が大急ぎで間宮からマッチを貰って戻ってくる。響のグラスをテーブルに置いて火を近づけると・・・案の定青白い炎が揺らめく。

「火がつくのだが？」

「可燃性の水とは珍しいね。」

「これでもまだ水だと言い張るのか？」

「ねえ司令官？」

「なんだ？」

「ウォーターとウォッカって似ていると思わないかい？」

こいつは少しどや顔で何を言っているんだ？そんな屁理屈で誤魔化せると思っているのか？というかこれはウォッカだったのか。火がつく時点でかなり度数の高い酒だとは思ったが・・・

「思わないな。」

「それは残念だ・・・」

「はあ・・・とりあえずこれは没収だな。」

「ちよつと待つて欲しい。司令官は私が子供だからお酒を飲んでダメだと言いたいのかい？」

「ああ、そうだ。」

「それなら何も問題はないと思うよ？だって私の誕生日は1933年

3月31日だよ。だから二十歳なんてとつくの昔に過ぎてしまったよ。」

「それは軍艦として生まれた日付だろ？」

「ハラシヨール!!よく知っているね!!でも艦娘として生まれた日付だと、私達艦娘の全員が飲めない歳になつてしまうよ？」

「まあ・・・それはそうだな。」

確かに艦娘がこの世に現れてから20年は経っていない。艦娘達は生まれたその瞬間から今の姿であり、大規模な改装をしない限り姿は変わらないものだ。

「そもそも艦娘の飲酒を制限する法律や規則があるのかい？」

「ふむ・・・言われてみればなかったな。」

艦娘に食事を与える為の規則はあるが、逆に艦娘の飲食を制限する規則はなかったはずだ。この辺は艦娘の存在に法や規則が追いついていない感じだろうか？

「そうだな・・・那智、横須賀では駆逐艦の飲酒に関してはどうしている？」

「特に制限はしていないな。もちろん出撃や遠征前に飲む事は禁じられているが、それは他の艦娘達も同様だ。とは言っても駆逐艦でお酒を嗜む者はほとんど居ないがな。」

ふむ、少ないとは言えお酒を飲む駆逐艦はいて、特に問題は起きていないと考えるべきか。

「分かった。では響の飲酒を許可しよう。」

「スパシーバ♪」

飲酒の許可を得て良い笑顔を見せた響は、そのまま艦娘達の方へと向いてどや顔でガッツポーズをした。普段おとなしい響がそこまで喜ぶのだから、よっぽどお酒が好きなのだろうか？

「その代わり何か問題が起きるようであれば制限をかけるつもりだから、節度を持って楽しむようにな。」

「分かったよ司令官。」

「では待たせたな。私は未成年だから飲めないのだが、少しだけ付き合わせて貰おう。」

そこからうちと横須賀のお酒を飲む者達が改めて乾杯をして交流を楽しんだ。横須賀の艦娘達も友好的な雰囲気、叢雲の物凄く警戒していたのはなんだったのかと思った。ちなみにお酒を飲んでいるメンバーの中に大淀がいたので、大淀にはそのまま食堂に残ってまとめ役と北条達の対応を頼んで、自分は曙を連れて執務室へと戻った。

## 142話（第七駆逐隊お手伝い開始）

「あ、あの・・・ご主人様。」

曙と共に祝勝会を途中で抜けて執務室に戻ろうとしていると、廊下で背後から漣に声をかけられた。振り返ると隴と潮も一緒にいる。漣はなんだか挙動不審で、隴と潮はいつもより落ち着いているようだ。漣はよく分からんが隴と潮は少し慣れてきたのだろうか？

「どうかしたか？」

「いやその・・・あれがあれしてあれなんで、漣達もご主人様のお手伝いしようかなあと思ひまして。」

「・・・あれでは何も伝わらないのだが？」

「いや、真顔でマジレスされるとかなり辛いのですが・・・」

「ん？マジレスとはなんだ？」

「ああえつと・・・助けてオボえもん!!」

「え!?!アタシ!?オボえもんって何!?!」

漣が困って隴に泣き付くが状況がさらに混沌としてきたな。私もやることがあるのであまり暇ではないのだが・・・

「ああもう!!うちが明かないわね!!隴、漣だと話にならないから、あんなが説明してよ。」

「そう言われても最初に漣が言ったけど、何か執務で手伝えることありませんかってだけ。」

「そうですぞご主人様!!漣達第七駆逐隊はきつとお役に立てるはずであります!!」

「ふむ、理由は分からないが執務の手伝いをしたいという事か？お前達は執務の手伝いが出来るのか？」

「なにをおっしゃるやら。確かにぼのたんは第七駆逐隊一仕事熱心ですが、おぼろんも真面目さでは負けておりませんぞ？それと潮ちゃんはおちよつと怖がりですが、細かい事に気が利く優しい娘なので、ツンツン艦のぼのたんじゃ気が回らないところをカバーする事が出来るのです!!」

「誰がツンツン艦よ!!」



まあ、姉妹艦だから多少鼻屑目に見ているのかもしれないが、手伝いくらいならやらせてみても問題ないだろうか？金剛に執務を任せた時も姉妹艦がサポートをしていた。それを考えると曙のサポートとして第七駆逐隊を動かせるように教育するのも悪くないか？

「ふむ、それで漣は？」

「えっと……とつても可愛いです♪」

なにかポーズを決めてアピールをしてきたのだが、執務において役に立つのだろうか？

「……そうか。」

「……ごめんなさい冗談です。なにとぞこの漣にもう一度チャンスを下さい。」

「……それで漣は？」

「コミュ力が高いので執務室が明るい雰囲気になること間違いなし!! ああ!?!ちよ!!雑用でもなんでもやりますから見捨てないで!!と、とにかく漣達でも出来そうな仕事はないでしょうか?」

ふむ、漣達でも出来そうな仕事か。

「とりあえず正門の憲兵達のところに行つて、なにか書類が届いていないか確認してくれ。」

「ほいさっささ♪漣にお任せあれ。おぼろんと潮ちゃんは先に執務室に行つて♪」

そう言い残して漣は走り去つて行つた。ではさっさと執務室に行くでしょう。

「ご主人様、お待ちせ致しました♪」

執務室で既に届いていた質問状に目を通していると、漣がお使いから戻つて来た。手ぶらで走つて行つたにも関わらず、カバンに封筒をたくさん入れて持つて来たようだ。

「ご苦労。そのカバンは？」

「書類が多いから大変だろうって、憲兵の方が貸してくれましたよ。朝に居た人は無愛想だったけど、今居る人は良い人みたいですね。なんだか機嫌が良さそうでしたし。」

「ほう、憲兵がそんなことをしたのか。」

この北九州鎮守府の正門を警備している憲兵隊は久藤提督の息がかかった奴等のはずだ。そしておそらくは前任者の時代では汚職に加担していたはずだ。前任者も憲兵隊と揉めるのは避けたいだろうから、金を握らせるなり艦娘に接待をさせるなりしていたと考えるのが妥当だろう。それが私が着任してからは業務上の関わりだけで、それ以上の接触は避けている。そんな状態の憲兵が艦娘相手に気を使うような事をする理由はなんだ？

「あ、あの〜ご主人様？難しい顔をされていますがなにかまずい事しちゃいました？」

「ああ、いや、大丈夫だ。憲兵から他に何か言われたりしたか？ちなみにどんな奴が対応したか覚えてるか？」

「ええっと、カバンは何か用事がある時に返してくれば良いってくらいですかね？対応してくれたのはご年配の憲兵さんで、わりと気さくな方でしたよ。」

ふむ、それなりの歳で気さくな憲兵か。それだけでは狙いが分からないな。艦娘経由で私に取り入ろうとしているのか？それとも艦娘に汚職関係で不利な証言をされたくないからか？ただ単にそれなりの歳だから問題を起こすのを嫌って、友好的な振る舞いをしたただけだろうか？だがこれ以上は情報が足りないから考えるだけ無駄だな。とりあえずそんな憲兵が居る事だけ覚えておこう。

「分かった。では書類を貰おうか。」

「はいどうぞ。ちなみにこれってなんの書類なんですか？かなりの量がありますけど。」

「明日会見をするからその質問状だな。少し読んでみるか？気分が悪くなる事間違いなしだ。」

ちなみに曙はさつきから私と一緒に夕方までに届いていた分を読んでいる、明らかにイライラしながらまとめている。

「うわあ・・・真顔でそんな嫌な事言わないで下さいよ・・・怖いもの見たさで少し気になりますけど。」

「そうか、臆と潮はどうするっ..」

「えつと・・・じゃあ漣と一緒に・・・」

潮はちよつと嫌そうに苦笑していたが、漣に自分が読み終わった書類を渡すと、漣達と一緒に読み始めた。

「どれどれ?・・・うわあ・・・」

書類を読んでいた漣が露骨に嫌そうな顔をしていている。臍も段々と目付きが険しくなり、逆に潮は悲しそうな表情になる。

「ねえご主人様、これって質問と言うよりご主人様の失態を追及している感じじゃないですか?というか長門鎮守府が崩壊したのをご主人様のせいになされてますよね?」

「ああ、長門鎮守府の元提督の責任を私に擦り付けたい奴等が考えた会見だからな。記者を買収しているだろうからそんな質問ばかりだぞ。」

主な内容としては『長門鎮守府に虚偽の情報を流して損害を与えたのはどういう意図があった行動か?』『長門鎮守府の救援要請に応えなかったのは何故か?』『長門鎮守府を崩壊させて長門市に大きな損害を与えた責任をどうやってとるつもりなのか?』等の長門鎮守府関連のものが多かった。あとは前任者の大森提督の件や平川市長の件を追及するものもあるし、こういう派閥争いが原因で今回のような事態が起こったのではないかとという追及もある。ついでに大手の新聞社数社から『我々の取材を断っていたのは、何か国民に対してやましい事があるのではないか?』なんてものもあったな。

「えつと・・・これってご主人様は大丈夫なんですか?」

「ああ、まともに答えるつもりはないから問題ないな。」

「うわあ・・・ご主人様もご主人様ですね。」

いや、こんな妄言に一々答えてやるのもバカらしいと思うのだが。とりあえず漣が持つて来た方も目を通しておくか。質問状の内容にあれこれ言いながら読んでいる漣達を一旦おいて、曙と共に未確認の質問状を読んでいくが・・・

「ふむ、少し今までのものと毛色が違うな。」

相変わらず自分の責任を追及しようとするものが多いが、同時に長門鎮守府の原田提督の責任を追及するものが増えている。今回の一

件は鶴野提督の指示で仕組まれたものだと思っていたが、もしかしたら久藤提督が妨害の為に動いたのだろうか？

「そうね。こういう質問に答えてあげれば提督が責任を負う必要がないって伝わるんじゃない？」

「大本営から口止めされるだろうがな。とりあえず原田提督の責任追及をしたい記者も来るというのが分かれば良いさ。」

「ふーん、そんなものなのね・・・ッ!?通信が入ったわ。」

「川内か？早いな。」

「いいえ、舞鶴鎮守府の鶴野提督からよ。」

「はぁ・・・また面倒事か・・・」

「・・・分かった。代わろう。」

## 143話（鶴野提督）

面倒事の気配をひしひしと感じるが、どうせ避けられないのだからさつさと済ませよう。

「北九州鎮守府所属の葛原です。」

「舞鶴の鶴野じゃ。」

「それでどのようなご用件ですか？現在作戦行動中ですので手短にお願います。」

「それはご苦勞な事だ。では単刀直入に行こうかのう。明日の謝罪会見を中止しろ。」

「……は？」

「だから明日の謝罪会見を中止しろと言っておるのじゃ。」

「どういう事だ？この件は鶴野提督が仕組んだ話だろう？久藤提督の介入で想定外の事態が起こったから、全て無かった事にしようとしているのだろうか？」

「はあ……なにを今さら……散々嫌がらせをしておいて中止せよですか？」

「ふん、わしはこの件には関わっておらんぞ愚か者めが。」

「はあ？そんな話を信用するとも思っているのか？いつは？」

「はあ？あまり面白くない冗談ですね。原田提督の失態から目を反らす為に、私が今回の敗因だと広めたいのでしょうか？実際に既にそういう話が広まっているようですが？」

「ふん、それは被害を受けた長門市の皆が納得出来るように事実を話してやってだけじゃ。」

「ほう？事実ですか？私には原田提督の妄想を元にした作り話を広めているように感じましたけれど？」

「これだから貴様は小僧なのじゃよ。事実なんてものは見る者によって姿を変えるものじゃ。今最も大事なのはこの敗戦の影響をどうやって最小限に抑えるかじやろう？その為の方法を考えるのが政治と言うものじゃ。」

「誤魔化すつもりも悪びれるつもりもないか。その上で鶴野提督が

流した情報が事実だと言い張るとは……どれだけ面の皮が厚いんだ？

「はあ……ここで追及するのは時間の無駄でしょうね。」

「ほほう？物分かりが良いではないか？ならばさっさと謝罪会見の中止もしろ。せつかくわしが苦勞して今回の件を収める為に動いておるのに、それを引つ掻き回すような真似をしおって、この愚か者が。」  
「その話もここでやるだけ無駄ですよ。今回の会見は大本營の命令で動いている事です。お得意の政治で大本營に掛け合えば宜しいのでは？」

「そうすると既に連絡をした者達からの反感が大本營に集まってしま  
うじやろうが!!貴様が適当な理由で中止にすれば事足りる話じゃ!!」

「はあ？ただでさえこちらに悪い印象を押し付けておいて、さらに自  
分の計画が失敗しそうだからと言って、その責任も押し付けようと言  
うつもりだろうか？政治とやらはずいぶん恥知らずな事らしいな。」

「はあ？なにか勘違いしているようですが、私が鶴野提督の命令に従  
う必要はありません。命令したいのであれば一度大本營を通して下  
さい。大本營を傀儡にしているのであれば簡単なはずでしょう？」

「生意気な小僧め……何を企んでおる？」

「私も暇ではないのですから、そんな大がかりな事は出来ませんよ。」

「しらばつくれるな!!今回の謝罪会見と共にオークションを開催する  
だろうが!!そうやって多くの人を集めて何をするつもりじゃ!!」

「ほう？あの糞ジジイが声を荒げるとは、思っていたより余裕が無い  
のだろうか？」

「ええ、どうせ人が集まるならばと面倒な仕事を一緒に済ませるだけ  
ですよ。」

「それを信じろとでも？笑えん冗談じゃ。」

「冗談ではありません。これが私にとっての事実というやつですよ  
？」

「小僧、意趣返しのももりか？横須賀まで巻き込もうとしておきなが  
ら、ただのオークションですとでも言うつもりかのう？」

横須賀を巻き込む？なんの話だ？横須賀艦隊に増援に来て貰った

のは姫級の対応の為だ。会見やオークションには関わらないはずだが？

「・・・なんの話ですか？横須賀には関係の無い話でしょう？」

「まだしらばっくれるつもりか!!あの海原の弟が明日の会見に参加する為に外出許可を取ったのは、すでにわしの耳に入っておるぞ？」

その件は初耳だな。今回話題に出た海原弟こと海原朔真（さくま）は横須賀の海原提督の弟で、士官学校で同期だった男だ。成績は学年三位でそれなりに優秀な奴だったのだが・・・なんであいつがわざわざ来るのだろうか？兄とは違って腹黒い奴なので、なにか企んでいるのだろうか・・・

「・・・はあ？呼んだ覚えはありませんが、それがなにか？」

「それがなにかではないわ!!何を企んでおるのは知らんが、わしの邪魔をするならただではおかんぞ!!」

「だったらさっさと大本営に圧力をかけて会見を潰せば良いでしょう？これ以上は話にならないようですからここまでにしませんか？私は茶飲み話に付き合うほど暇ではないので。」

「チツ、この件は忘れんからな？」

鶴野提督もこれ以上は無駄だと判断して、さっさと通信を切ってくれた。それにしても今回の一件は想定していたよりも大きな話になっていく気がする。久藤提督の介入があるのは予想の範囲内だが、海原弟まで動くとは完全に想定外だ。となると裏で介入している奴がまだ他にいると考えるべきだが・・・情報が少な過ぎるか・・・

「ねえ提督？」

「どうした曙？」

「コーヒーでも用意するから、少し気分転換でもしてくれないかしら？」

「ん？先程まで食事をしていたのだから、まだ休憩には早いと思うが？」

「私は大丈夫だけど、提督が怖い顔してるから漣達が震えてるのよ。」

言われて漣達の方を向くと、3人で固まって震えていた。怖がりな潮はともかく漣と朧も震えているのか・・・

「・・・そうか。なら少し休憩するでしょう。川内からはまだ連絡が無いのだろうか?」

「そうね。でももうそろそろ基地のレーダー圏内から出るはずよ。」

「ならコーヒーを飲む余裕くらいはあるか。」

「あ、なら漣達が準備しますから、ぼのたんはご主人様を宜しく!!」

そう言つて漣は臙と潮を連れて、慌てて執務室から走り去っていく。

「・・・逃げたわね。」

「・・・そんなに怖がらせてしまったか?」

「・・・漣達が気にし過ぎなだけよ。私はもう慣れたわ。」

「・・・そうか。」

確かに鶴野提督との会話は不快の一言だが、だからと言つて漣達に八つ当たりするつもりはないのだが・・・漣達が前任者や売られた先での事を思い出してしまうのは仕方ないか・・・こればかりはまだまだ時間がかかるだろうな。



144話（潮ちゃんお手製甘々コーヒー漣スペシヤル）

鶴野提督がどう動くのかわからないので、とりあえず届いた質問状に目を通していく。基本的に自分を追及するものがほとんどだが、少し原田提督を追及するものも混ざっている。状況も混沌としてきたので、誰が何を狙って動いているのかが見えてこない。

「ほう？これは・・・」

「なに？気になるものでもあった？」

「ああ、ちよつと読んでみると良い。」

「えつと・・・え!?!これ原田提督だけじゃなくて、鶴野提督も批判してるじゃない!?!」

「ああ、原田提督の艦隊指揮能力の低さ、敵前逃亡をした件、長門市への避難勧告が遅れたせいで被害が拡大した件を追及している。そして日本海側を管理しているのに、そんな奴を提督に据えていて、救援も送らなかつた鶴野提督の責任を追及するものだな。」

「あと私達が長門鎮守府の救援に向かわなかつたのは、鶴野提督と久藤提督の派閥争いが原因ではないのか？なんて書かれてるわよ!?!」

ふむ・・・質問状の差出人は特に聞いたことのない無名の新聞社のようなだが・・・ずいぶんと攻めた質問をする奴だ。鶴野提督の批判だけでも珍しいのに、同時に久藤提督の批判もしている。何故か北九州鎮守府が久藤提督の派閥に入れられているのが気に食わないが、他の質問はまともな事ばかり書いている。

「・・・曙はこれをどう思う?..」

「すごく的を射た質問ばかりね。少しは話の分かる奴も居るじゃない。会見の時にこの質問状を使いたいくらいね。そんな事は大本营が許さないと思うけどね。」

「・・・そうか。」

曙から見てもそう感じるか・・・

「なによ?..気になる事があるならちゃんと行ってよね。」

「この質問状がこちらにとって都合が良すぎるのが気持ち悪くてな。」  
「どういう事よ?」

「我々が久藤提督の傘下であるという認識を除けば、私の考えとほとんど一緒の内容だと言っても良い。質問の仕方も分からないから聞いていると言うよりは、こうですよね?という確認している感じで、事実にかなり近い質問ばかりだ。」

「確かにちよつと不自然ね・・・」

「それにここまで直接的に鶴野提督を攻撃しようとするのも不自然だ。この件が鶴野提督の耳に入ったら、無名の会社など潰されるだけだぞ? 斬新な記事を書けば知名度が上がるかも知れないけれど、リスクが高過ぎると思う。」

曙も少し考えてから納得したようだ。

「それもそうね・・・それで、提督はこの質問状をどう考えているの?」

「そうだな・・・今のところ思いつくのは、この質問状が使われない事を前提に送られたという可能性だな。」

「え? どういう事よ?」

「つまりこの質問状を私が読んで、内容的に会見では使わないと判断している場合だ。」

「質問に答えて貰えないと考えて質問状を送ったって事? そんな無駄な事するかしら?」

「一見無駄には見えるかも知れないが、この質問状を送ってくる事で私の印象に残る。そして個人的に接触してくるという可能性だ。」

少々回りくどいかも知れないが、今回の会見では報道関係だけでなく多くの有力者が来る事になる。ここまで情報を集める能力があつて頭が回るのであれば、会見がまともなものにならないと考えても不思議ではない。ならば個人的に接触する機会を作ろうとするのも理解出来る。

「うーん? まあ、分からなくはないわね。」

「それともう一つは逆に私がこの質問状を会見で使うと考えて送った場合だ。」

「ええ・・・大本営を無視してこんな質問に答えるなんてリスクが高す

ぎるでしょ?。」

「別に正直に答える必要はないさ。こんな質問がありましたが大本営の意向で回答出来ませんと言えば良い。なんならそんな事実はありませんと答えても構わない。」

「・・・つまりこっちは鶴野提督の失態を追及しないけれど、集まった記者達に鶴野提督に落ち度があると印象付ける事が出来るってことであつてるかしら?。」

「そういう事だな。この場合この質問状を送った奴の名前も公開して、そいつを生け贄にするつもりだがな。」

「ふーん、でもそれだとこんな質問状を送るリスクが高すぎないかしら? 久藤提督にでも守って貰うつもりかしら?。」

確かに鶴野提督を真正面から批判するのであれば、敵対する久藤提督の差し金だと考えるのが妥当なのだが・・・

「それはそれで違和感がある。久藤提督の差し金ならば、鶴野提督と久藤提督の派閥争いの話をするメリットが無い。この話をする久藤提督が私に援軍を送らせないように指示をした事になってしまい、責められるのは久藤提督だ。」

「じゃあ誰なのよ?。」

「そうだな・・・おそらく差出人は捨て駒か実在しないと考えて良い。黒幕の目的は鶴野提督と久藤提督の勢力を削るのが目的だろうか? これ以上は情報不足だな。」

案外海原弟が絡んでいるのか? だがあいつは腹黒いが簡単にボロが出るような真似はしそうにないのだが・・・まあ、そもそも前提が仮定の話なのだから、もしそこで間違っていれば結論なんて出るはずもないか。

「それもそうね。」

曙もこれ以上の考察は無駄だと判断して、残りの質問状の確認をしようとしていたら・・・

「ご主人様お待たせしました!!」

明るい声と共に漣達が帰ってきた。そう言えばコーヒーを淹れてくれるとの事だったが、思ったより時間がかかったな。だが自分が漣

達を怖がらせてしまったようなので、心を落ち着ける為の時間をとつたと考えれば仕方ない事か。漣は気持ちを切り替えたようで満面の笑みだが、隴は気まずそうに視線を反らして、潮は漣の後ろに隠れてしまっている。

「ああ、戻ったか。」

「ええ、では潮ちゃん!! さっそくご主人様にコーヒーを渡したげて!!」  
「……ど、どうぞ。」

「ああ、ありが……どう?」

コーヒーを渡す役目を潮に任せた事を意外に感じたのだが、お盆に乘せて差し出されたそれに目を奪われてしまう。

「な……これはなんだ?」

お盆の上にはアイスコーヒー?のグラスが5人分用意されていた。それは良いのだが……そのコーヒー?はアイスとクリームとフルーツで彩られていた。しかもなにか刺さっている……これは自分の知っているコーヒーではない……

「名付けて『潮ちゃんお手製甘々コーヒー漣スペシャル』です♪」

「そ、そうか……どうしてこうなった?」

「えっと、コーヒーの準備をする為に食堂に行ったのですが、漣達はご主人様の好みを知りませんでしたのでご主人様のお友達に相談したら、ご主人様はコーヒーは甘いほうが好きとお聞きしました。」

「確かにコーヒーは甘いほうが好みだが……だからと言ってこうはならないだろうか? 普通は砂糖とミルクではないのか?」

「いやまあ、普通にコーヒーを淹れても印象に残らないかなあと思いました、食堂にある材料を使って漣が個性的な一品に仕上げて見せました♪」

「そ、そうか……」

まさかコーヒーを淹れるだけの事に個性を求めてくるとは思わなかったな……潮はお盆を差し出した状態で視線を下げてプルプルして、隴は気まずそうに視線を反らしたまま頬を掻いている。

「私と潮は止めたんだけど……漣がね……」

「はあ……なにしてんのよこのクソピンク。」

「おおぅ!?ぼのたんから久し振りにクソピンク頂きました!」

「余計な事するからでしょ!!コーヒーくらい普通に淹れなさいよ!!」

「いやいや、ご主人様のご機嫌取りの為に精一杯頑張った結果ですぞ!?!」

「逆に困らせてるのよ!!クソピンク!!」

「でも甘い物食べたら幸せな気持ちになると漣は思う訳ですよ。」

漣と曙が言い合いを始めたが・・・今回ばかりは曙が正しいと思う。

とりあえず今後はコーヒーに漣は関わらせないようにするべきか・・・

「あ・・・あの・・・」

「ん?ああ、潮、待たせて悪い。そこに置いてくれ。」

「えっと・・・漣ちゃんをごめんなさい・・・新しく淹れなおしましよ

うか?」

せつかく潮が少し話をしてくれるようになったと言うのに、最初の話題がこれとはな・・・潮にとっては災難だったな・・・

「いや、そのままが良い。食べ物を粗末にするのは良くないからな。」

潮が私の前にコーヒー?とスプーンを置いてくれた。これはあれだ、コーヒーと思うから違和感があるのだ。こういうスイーツだと考えればそれほど問題はないのではないか?そんな事を考えていると第七駆逐隊にも謎のコーヒーが配られていた。

「はあ・・・こんな事になるならあたしがコーヒー淹れてくれば良かったわ・・・」

「ふふつ、本当にそんな事言って良いのかねぼのたん?」

「なによ?クソピンク。」

「この潮ちゃんお手製甘々コーヒー漣スペシャルを食べた後でも同じ事が言えるかな?」

「ふん!!」

「まあまあ、物は試しって事で・・・」

まずは臙が喧嘩する曙と漣を仲裁しながらコーヒーにスプーンを伸ばす。

「うん、上の部分は普通にクリームだから甘くて美味しいね。」

確かに臙の言う通り、上に乗っている部分に関してはただのクリー

ムとフルーツだからな。臙に続いて他の姉妹もコーヒー?に手をつける。

「キタコレ!!甘くてウマウマですな♪」

「・・・そうね。でもこれなら普通に別のお皿に盛って出せば良いじゃない。」

「これだからぼのたんは・・・もつと遊び心を持とうぜ!!」

「あんたは遊び過ぎなのよ!!」

「・・・でも甘くてとっても美味しいよ?」

「おお!!潮ちゃんの優しさが染み渡る!!さあさあ!!提督もどうぞ!!」  
「そうだな。」

それにしても漣は本当に遠慮なくぐいぐい来ているな。本当につきまきまで私を怖がっていたのだろうか?こういう軽い態度は不快では無いのだが、理解が追いつかない。こういう感情で動くタイプは苦手だな。同じ感情で動くタイプでも川内みたいに分かりやすい奴なら良いが・・・

「ふむ・・・やはり上の部分は普通のスイーツだな。グラスのふちに刺さっているリングが邪魔になって食べにくいな・・・」

「うーん、ウサギリングゴ可愛くないです?やっぱり第七駆逐隊的にはウサギは外せないと思うんですよ!!漣も潮ちゃんもウサギ好きですし、ぼのたんも実はこっそりと艤装にウサギマーク付けてますし。」

「ちよ!?!なに言ってるのよ!!」

「本当はおぼろんのカニ要素も入れたかったのですが・・・流星にスイーツにカニはキツイかなあと自重しました・・・」

「うん、アタシがカニは絶対に入れないで漣を止めました。」

これにカニの足が突き刺さっていたかも知れないと考えると・・・  
「そうか・・・臙、良くやってくれた。」

「うん、アタシもカニ入りは食べたくなかったから・・・」

「いやいやいや!?!漣だって本当にやろうとは思ってませんよ!?!」

「どうだか?あんたは悪ノリが行き過ぎそうで怖いよ。」

「素っ気ない態度でそんな事を言いつつも、漣スペシャルを楽しむぼのたんであった。」

「うっさいわね。思ってたよりまともだったから食べてるだけよ。」

確かに見た目で驚いたが、実際に食べてみるとそこまで悪くない。曙が言っていたように別のお皿に盛って出しても良いとは思うが…問題はコーヒーがどうなっているかだな。

「まあ、そこは潮ちゃん頑張った一品だからね。」

「…？漣スペシャルって言ってたから、あんたも一緒に作ったんじゃないの？」

「人には得手不得手と言うものがありましたですねえ…漣はアイデアを出しただけで、調理は潮ちゃんが全てやってくれました。潮ちゃんの女子力半端ねえっすわ。」

「漣…あんたねえ…」

「じゃあぼのた人はコーヒー淹れられるの？」

「それくらい普通に出来るわよ。…でもこのコーヒーあたしが淹れたのより美味しい。」

「ふっふっふっ、潮ちゃんとの戦力差を理解してしまったようだな。」

「あんたが威張るな!!このクソピンク!!」

ほう？コーヒーのほうも美味しいのか？試しにコーヒーを飲んでみるとコーヒーは甘さ控えめにしており、上のスイーツと一緒に飲むのがちょうど良いくらいだ。あんまり時間をかけすぎるとアイスが全部溶けて台無しになりそうだが。

「ほう、美味しいな。」

「あ、ありがとうございます。」

「よっしやあ!!見たかぼのたん!!ご主人様からお褒めの言葉を貰った!!つまり漣達の勝利って事だよね!!キタコレ♪」

「もうそれで良いわよ…さっさと食べて仕事に戻るわよ。」

まあ、想像よりも美味かったのは本当だし、多少なりとも第七駆逐隊との交流するきっかけになったと思えば、この謎のコーヒーも良かったのではないだろうか？もしかするとこれが漣がおかしな事を始めた本当の狙いだったのかもな？

## 145話（夜戦忍者・綾瀬さん）

「提督、川内さんから通信が入ったわ。」

思っていたよりも美味しかった謎のコーヒーを食べ終わって、一息ついたあたりで川内からの連絡があった。

「分かった、代わろう。川内、状況は？」

「提督!!今夜も最高な海だよ!!敵艦隊は予想通りまだ再編が終わってなくて、けっこう散らばってる感じかな。でも数はそれなりに居ると思うよ。だから今から奇襲をかけて各個撃破しようと思うんだ。」

「分かった。戦い方は川内に任せるが、危険を感じたらすぐに帰還する事だけは約束しろ。」

「は〜い、じゃあ今から始めるけど、ちよつと本気で隠密行動するから、緊急の時以外は通信しなくても大丈夫？」

「分かった。ではこちらからも通信は控えておこう。では任せたぞ。」  
「もつちろん!!夜戦なら任せてよ!!」

上機嫌な川内との通信を終えて一息つく。それにしても夜の川内は本当に規格外だ。ただでさえ暗い夜の海なのに、敵の数が多いとかをどうやって判断するのだろうか?そもそも夜戦の気配を感じるとかふざけた理由で行動しているのに、実際に戦果を上げているからには何かがあるとは思うのだが……

「……………ずいぶんと川内さんの事を信頼してるのね?」

「まあな……夜戦の気配がするとかで動いてるめちやくちやな奴だが、実際に多大な戦果を上げている以上は上手く使うべきだからな。」

「それもそうよね……」

まあ、曙の懸念も分からはなくはない。曙もどちらかといえば感覚よりも論理派の人間だろう。だから川内に任せきりというのも不安を感じてしまうのだろう。

「おお?ぼのたん嫉妬ですかな?」

「うっさい。そんなじゃないわよ。」

「ふーん?私も川内さんみたいにご主人様から信頼されたい、みたいなやつかと思っただけだなあ?」



「違うって言うてるでしょ!!ふざけた事言っでないで洗い物でもしてきなさい!!」

「ほいさっさく洗い物くらいは漣が一人で出来るから、おぼろんと潮ちゃんほのたんをよろしくねえ」

そう言い残して漣は逃げるように執務室から去っていく。そしてからかわれた曙は不機嫌そうに執務室のドアを睨んでいる。

「いや、曙をよろしくって言われても……」

「怒らせるだけ怒らせて行っちゃった……」

「別に気にする事無いわよ。さっさと仕事をするわよ。」

「は、はい。」

いやあ、ここの鎮守府の夜戦はなんだか陽気で楽しいね♪川内さんは上機嫌でいっぱいお喋りしてくれるし、五十鈴さんと衣笠さんもすつごく優しい。真面目な朝潮と不知火も川内さん達に色々と質問したりしてて、とっても楽しい雰囲気ね。

「よおし!!提督の許可も貰ったから、今から隠密行動で各個撃破するよ!!だからお喋りはここまで。こっからは静かにね。」

「はっ!!了解しました!!」

「陽炎も大丈夫?」

「あ、はい。大丈夫です!!」

「じゃあ、今からはさつき教えたハンドサインで指示を出すから見落とさないでね。」

そう言うと川内さんはさつきまでの楽しそうな表情から一変して、物凄く真剣な表情になる。五十鈴さんと衣笠さんも無言で集中力を高めているし、朝潮と不知火も川内の一挙手一投足を見逃すまいと気を張っている。うん、ここからは本気でお仕事する時間だね。

私達の様子を見て満足したのか、川内さんがついて来るように指示を出して、それに従って陣形を組んでついて行く。さつきまでの明るいピクニックのような雰囲気は消え去り、波の音と私達の艦装の音だけが聞こえる。耳をすませてみても他の音は一切聞こえない。それにしてもハンドサインで指示を出すなんて徹底してるなあ。普通に

口頭で指示しても聞こえる位置に敵はいないと思うんだけど？

そんな事を考えていると先頭に行く川内さんからの指示があった。『敵発見、接近する』えっ？本当に？まったく見えなただけでも川内さん自信あるみたいだし、信じてついて行くしかないわよね！！

「はあ・・・また通信が入ったわよ。」

川内を送り出してから少しして、曙が少し不機嫌そうに報告してくる。

「相手は誰だ？」

「綾瀬さんよ。」

ほう？綾瀬さんであれば明日の会見の件で何か話があるのだろうか。会場の手配を頼んでいる以上はあまり邪険には出来ないか。

「分かった、代わろう。代わりました、北九州鎮守府の葛原です。」

「綾瀬です。夜遅くのご連絡失礼致します。ですがお早めにお耳に入れておきたい事柄がありますね。」

「お伺いしますが現在作戦行動中ですので、手短にお願います。」

「それは失礼しました。では単刀直入にお伝えしますが・・・市長候補の一人である源が明日の会見で何か企んでいるようでした。地域の有力者達に協力を要請しているようです。」

ほう？まだ諦めていなかったか。たしか大本営に喧嘩腰で私に対する苦情を言って、適当にあしらわれて終わったと思っていた。

「はあ、ずいぶんとしつこい奴ですね。」

「ええ、とは言っても市長選挙はまだ行われていませんから、奴としてはまだまだあがきたい所でしょう。むしろ葛原提督と決別した以上、今回の会見で葛原提督を非難して追放でもしないと、源に勝機はありませんからなあ。」

ん？そう言えばそうだったか？そう言えば副市長の源がストライキをしているから綾瀬さんが私とのやり取りを担当しているだけで、まだ正式に市長になった訳ではなかったか。

「そう言われればそうでしたね。てつきりもう市長選挙の件は片付い

たと思っていました。」

「まあ、ほとんど片付いたようなものなので、最後のあがきと言えばそれまでですが……もし今回の件で葛原提督が失脚でもしたら逆転も充分にあり得ますので心配なのですよ。」

「流石に今回の一件でクビにはならないと思いますが……一応気を付けておきましょう。」

「お手数おかけします。ついぞと言ってはなんですが、源が声をかけた中に先代の大森提督の遺族の方々も居るようです。」

「はあ？大森提督の遺族ですか？」

今さらそんな奴らが出てくるのか？まさか春雨が大森提督を殺害した件が漏れているとは思えないから、現状大森提督は平川市長と汚職で荒稼ぎをしていて、何者かに殺されてしまった人だ。源が仲間に加えると言っているのであれば、なにかしら自分を非難するつもりなのだろうが……

「ええ、大森提督の遺族です。」

「今さら出てきて何か影響力があるとでも？」

「さあ？本人達はまだ権力があるつもりなのではないですか？」

「それか源が形振り構わず使えそうな奴に、片っ端から声をかけているだけですかね？」

「まあ、そんな所かと。ですが一応葛原提督のお耳に入れておこうかと思ひまして。あと源とは別件ですが、なにやら北条工業にも動きがあるようです。」

「……北条工業ですか？」

一応自分は北条とそれなりに仲が良いとは思っているけれど、北条工業も一枚岩ではないだろう。北条工業の影響力は大きいから、ここは気を付けておくべき所だろう。

「ええ、今のところ誰かが会見に参加するかどうか情報がありませんので……」

「そうですね。ですが今回の会見がそれなりに注目を集めている以上、北条工業が全く動かないのもおかしいとは言えますね。」

「そうですね。葛原提督は北条工業の令嬢と懇意にされているよ

うですので、派手に敵対するとは思えませんが・・・これも一応葛原提督のお耳に入れておきたかったのです。」

「情報ありがとうございます。」

「いえいえ、今回の一件は私の政治生命にも関わってくるお話ですから。また何か分かりましたらご連絡します。葛原提督の方からは何かありますでしょうか?」

こちらばかり一方的に情報を貰うのも借りを作るようで気になるな・・・

「そうですね・・・ここだけのお話ですが、今回の会見の件で鶴野提督から圧力をかけられたくらいですかね?」

「え?失礼ですが今回の一件は鶴野提督が仕組んだ事でしょうか?鶴野提督が圧力をかけてくるなんて当たり前ではありませんか?」

「ああ、少し言葉が足りませんでしたね。鶴野提督から『会見を中止するように』と圧力をかけられたのです。」

「本当ですか!?!」

「ええ、つい先程の事です。鶴野提督の意図は全く分かりませんが・・・」

「そうですか・・・これは重要な情報をありがとうございます。」

「いえいえ、お互い様ですから。それでは私はこれで失礼します。」

「分かりました。御武運をお祈りします。」

ふう、今回の一件はどんどん人が集まってくるな・・・まあ、源も大森提督の遺族も北九州市の人間だから、関わってくるのは当たり前前と言えばそれまでか。北条工業に関しては全国どこでも関わっていないところが無いしな。

146話（北条・織田・霞）

「ご主人様へご主人様の盟友さんとパトロンさんを連れて来ましたよ」

綾瀬さんの電話が落ち着いたと思ったら今度は漣が北条と織田か。気がつけばそれなりに遅い時間になっているし、そろそろ帰ってくれる時間になったか？

「おーほっほっほっ!!まだ仕事を頑張っているようですよわね?感心ですわ!!」

「やることが多いからな。」

「盟友よ、休む時は休まねばいざと言うときに動けぬぞ?」  
「それくらいは分かっている。」

というかそれも自分が織田に教えた事だ。織田の場合は休む方が多いから気にする必要はない気もするが・・・それにしても漣からの呼び方が少し気になる・・・織田が盟友盟友とうるさいからそちらは仕方ないかもだが、北条がパトロン扱いか・・・まあ、あながち間違いだと言えないところが微妙だな。

「ん?霞も一緒に居たのか。もう体調は大丈夫なのか?」

「ええ、鳳翔さんのおかげでなんとかね。迷惑かけたわね。」

「これくらいの事を気にするな。」

見た感じまだ疲労が抜けきってはいないようだが、ここに来た時よりもずっと顔色が良い。鳳翔に看病を任せて正解だったな。

「ふっ、我の右腕の霞殿は不滅である!!」

「はあ・・・バカな事を言ってあまり無理をさせるなよ?霞が倒れたらお前の鎮守府が崩壊すると考えておけ。」

「う、うむ。心得た。」

「それで、そろそろ帰るのか?」

「ええ、もう遅い時間ですし今日はこれでお暇しますわ。」

「我と霞殿も今日は北条様の別荘に泊めて貰える事になったのでな。盟友とはここでしばしの別れとなる。だが我は明日からは長門鎮守府の長である。我と盟友の仲だ。いざと言うときは遠慮なく頼ると

良い。」

「……は？こいつは何を言っているのだろうか？自分が織田を頼る？逆の未来しか見えないのだが？」

「そんな妄言は提督としてまともに働けるようになってから言え。」

「なあに、霞殿も居るし長門鎮守府で可愛い艦娘達が待っておるのだ!!すぐに盟友と肩を並べる提督となるであろう!!」

こいつはもしかして長門鎮守府が完全に崩壊した事を知らないのか？自分もきつちりと現状を確認した訳ではないが、木曾達の話では生き残りが居ないはずなのだが……それに激しい攻撃を受けたはずだから、設備もどれだけ機能しているか不明なのだが……

「……そうか。」

「うむ、期待していると良い我が盟友よ!!」

こいつの根拠の無い自信はどこから湧いてくるのだろうか？しかもなんだか変なポーズを決めているし……

「おお!!盟友さんカッコいい!!」

「そうであろう!!そうであろう!!漣殿は見る目があるではないか!!」

ただでさえ根拠の無い自信に満ちているというのに、漣に煽てられもう手がつけられなくなってきたているな。

「はあ……霞、頼んだぞ。」

「ええ……初期艦に選ばれたからにはきつちりやるわ。」

霞もやれやれと頭を抱えているが、織田を止めはしないのだな。

「ちなみに明日は何時頃に長門に着く予定だろうか？」

「そうね……8時にはついておきたいわね。」

「分かった、それくらいの時間に支援物資を運ばせよう。」

「本当に助かるわ。」

「いつまでも長門鎮守府が機能不全だとこちらが困るからな。あまり気にするな。」

「……出来るだけ早く立て直すわ。」

「期待している。」

本当に霞だけが頼りだ……

「さて、挨拶も済みましたしそろそろ帰りますわよ。夜更かしは美容

の大敵ですわ。」

「そうか。ああそうだ、北条は明日の会見について何か聞いているか？」

「一応は聞いておりますわよ？北条工業の後ろ楯が必要でしたら私が参加しても宜しくてよ？」

「いや、こんな下らない話で大きな借りは作りたくない。それよりも北条工業から誰かが参加すると聞いたのだが、何か知っているだろうかと思つてな。」

「そういう話は聞いておりませんわね。本郷は何か聞いていますの？」

北条が執事の本郷さんに話を振ると、本郷さんは難しい顔をする。

「いえ・・・今のところそのような話は聞いておりません。ですがこちらの地区長であれば参加してもおかしくないかと。」

「だそうですわ。詳しく調べてみましょうか？」

「いや、それ以上は気にしなくて良い。」

ふむ、北条工業からの参加者は北条ではなかったか。であれば本郷さんの言うように地区長あたりが来るのだろうか？とりあえず大きな介入がなければ問題ないのだが・・・

「そうですね？まあ、何かありましたらすぐに連絡しなさい。北条工業の力を存分に見せつけてあげますわ!!おーほっほっほっ!!」

「我も盟友としていつでも馳せ参じよう!!」

北条には本当に必要になったら手を借りるしかないかもしれないが・・・まあいい。心意気だけは受け取っておこう。

「分かった。では漣、北条達を正門まで送つて来てくれ。」

「ほいさっさ!!」

漣は北条達を連れて執務室を出たが、外からは明るく楽しそうな声が聞こえてくる。漣が執務の手伝いを申し出た時に、漣自身の長所が可愛いとかコミュ力が高いとか言っていたが、案外人受けが良いというのもバカには出来ないかもな。

「はあ・・・本当に漣はうるさいわね・・・」

「あはは・・・まあそこが漣の良い所だし。」

「漣ちゃんはいつとも元気だよね。」

「隴と潮に聞きたいのだが、北条達と話をしたのはコーヒーの好みを聞いた時に話をしたと言っていたな？」

「うん、そうですね。」

「は、はい。」

「やけに親しそうな感じだったが・・・人間が怖くないのか？」

漣も隴も潮もつい最近まで人間から虐待されていたのだから、人間に恐怖や嫌悪感を持っていて当然のはずだ。実際に自分は最初かなり警戒されていたはずだ。

「うくん？多少は怖いって気持ちはあるけど、漣が最初に話しかけて悪い人じゃ無さそうだったから大丈夫かな？って感じかな。」

「わ、私はまだちよつと怖いです・・・でも漣ちゃんが踏み出す勇気を持ってくれるから、私も頑張ろうって・・・思います。」

ふむ、当然と言うべきだが怖さはあるのか。それでもなお漣は人と仲良くしようとしているということか。これは自分が考えていた以上にメンタルが強いのではないか？

「それに雰囲気柔らかいって言うか？北条さんは派手な人だけど、全てを受け入れる器と言うか包容力と言うか？なんか海みたいな雰囲気？」

「あ、なんかちよつと分かるかも。」

「織田さんは魔王がなんとか言ってるけど、基本的におおらかな雰囲気だよ。鯨みたいな感じかな？」

「ああ、鯨さんかあ。」

隴の感性はよくわからないが、案外的に射ている例えかもしれないな。

「ほう、隴はなかなか面白い例えをするな。」

「そうかな？あと小森さんはむしろこつちが怖がられてるよね・・・野良の子猫みたい。」

「うくん？小森さんは良く分からないなあ。」

「あと提督は最初物凄く怖かった。あの目は絶対に何人が殺してると思った。抜き身の妖刀のような迫力だったよ。」



「お、臙ちゃん!？」

「・・・そうか。」

抜き身の妖刀か・・・そこまで殺気を出しているつもりはないのだが・・・いや、臙達と最初に会ったのは平川市長の屋敷だから、それなりにピリピリはしていたか？

「でも漣と北条さん達のおかげでそこまで怖い人じゃなくなったかな？ 理不尽に怒ったり八つ当たりしたりする人じゃ無いつて分かったから。今の提督は鞘に収まった妖刀って感じかな？」

「お、臙ちゃん!? あんまり失礼な事を言っちゃダメだよ!？」

鞘に収まった妖刀か・・・それだけでも充分に怖いのではないか？ まあ、なめられるよりは多少怖がられていたほうが良いか？

「なるほど。参考になった。」

「なら良かった。それで潮は提督の事をどう思ってるの?」

「ええ!? わ、私はまだちょっと怖い・・・と思います・・・でもちよつとずつ提督の事を知りたい・・・です。」

ふむ、潮なりに少し前向きになっていると考えるべきだろうか？ それにしても思っていたよりも臙がよく喋るな。一番喋る漣が居ないからか？

「ま、そうだよね。曙は?」

「あ、あたし!? そうね・・・厳しい人ね。でも提督としてきちんとしてるから、あたしにとっては良い提督ね。」

「へえ? 曙がけつこう素直だ。そう言えば曙は今の提督にはクソ提督って言わないよね? どうしてなの?」

「・・・あたしだって誰にでもクソって言うわけじゃないわよ。それに本物のクソ提督を知った後だとね・・・」

ほう、概ね高評価だな。そう言われれば曙からクソ提督と呼ばれた事はなかったな。士官学校に居た曙は誰彼構わずクソ呼ばわりだった事を考えると、この曙は酷い目にあつたせいで性格が変化しているなとは思っていたが・・・

「ふーん、そっかあ。」

「ただいま戻りましたあ!! 何々? 漣の居ない所で何か面白い話をして

た感じですか？」

「あ、漣お帰り。じゃあさっそく提督の第一印象と今の印象を教えてください？」

「え？提督の目の前で!?マジっすか!？」

「うん、もう皆言ったよ。」

「うわあキタコレ・・・おぼろんって時折怖いもの知らずになるからなあ・・・これ言わなきゃダメなやつっすか?」

若干涙目で漣が見てくるがそもそも自分の印象について聞いた覚えは無いのだが・・・

「いや、私は無理強いするつもりはないが?」

「お!?流石提督!!話がわかるう♪」

「漣だけ仲間外れになるけど提督がそう言うなら仕方ないね。漣だけ仲間外れだけど。」

「おっふ・・・そう言われるとキツイものがありますなあ・・・言っても提督怒らない?」

「私達は怒られなかったよ?」

「そっかあ・・・えっと、第一印象は怖かったです。絶対に何人かヤツてる目だと思いました。今は意外と優しい所もある真面目な提督ということでおなじやす。」

「・・・そうか。」

漣からも何人が殺してると思われていたか。一応今のところ自分の手は汚していないはずなのだが・・・病院送り程度なら何度もあるがな。

「ほら!!気まずい空気になったじゃん!!おぼろん話題はちゃんと選んでよ!!」

「だって提督が聞くから。」

「私は北条達と話していたが、人間が怖くないのかと聞いたただけだぞ?」

「ん?そうだったけ?」

「やっぱりおぼろんのせいじゃん・・・これはぼのたんからのクソ呼ばわり案件ですぞ!!」

「あたしを罰ゲームみたいに使うな!!」

こうしているとなんだかんだで第七駆逐隊は仲が良いな。

「んんっ、せっかくだから漣に聞いておきたいのだが、漣も人間が怖いのだろうか？なぜ積極的に話しかけようとするんだ？」

「ああ・・・まあその怖いのは確かに怖いのですが・・・相手がもしかしたら良い人かもしれないなあとか、話もしないで悪い人だと決めつけるのも良くないかなあとか・・・そんな感じです。それに第七駆逐隊で一番コミュ力が高いのは漣ですから、切り込み隊長は漣の役割かなあと思ったりするわけですよ。」

「なるほどな。」

あれほど酷い目にあっておきながら、まだ人を信じたいと思えるのか。はつきり言っつてとんでもないお人好しだな。だが漣が勇気を出して一步踏み出したからこそ、第七駆逐隊がこうやって自分と話が出来たのだろう。やはり漣の言うコミュ力とやらもバカには出来ないな。

「ささっ、この話はここまでにしてお仕事の続きをしましょう。」

「あんたが雑談を打ち切って仕事をしたがるなんて・・・」

「ん？ぼのたん？」

曙が話している途中で急に話を止めた。これは何か通信が入ったか？

「提督、佐世保鎮守府から通信よ。」

「佐世保だと!？」

何故このタイミングで佐世保から連絡が来るのだ？佐世保の熊井提督は政治関係には全く興味を持っていなかったはずだ。それが何故会見を前日に控えたこのタイミングで動いて来たのだ？

## 147話（佐世保の香取・出撃準備）

「代わりました。北九州鎮守府の葛原です。」

「佐世保鎮守府秘書艦の香取です。夜遅くに失礼致します。」

今回は熊井提督本人ではなくて秘書艦からの連絡か。

「それは構いませんがいったいどのようなご用件でしょうか？佐世保鎮守府は政治関係の話には干渉しないはずでは？」

「えっと・・・ああ、明日の会見のお話でしょうか？私個人としてはとても気の毒だとは思っていますが、その件に関して熊井提督は何もするつもりはありませんよ？」

このタイミングで会見とは関係のない話だったか・・・

「そうでしたか・・・それは失礼しました。ではどのようなご用件でしょうか？」

「まず私達が作戦行動中だった事はご存知でしょうか？」

「ええ、佐世保の艦隊が別の海域で交戦中だったので、横須賀鎮守府から応援を呼んだと伺っております。」

「ええ、その通りです。それで敵艦隊を壊滅に追い込んだのですが、敵艦隊の中核を担う個体に逃亡を許してしまいました・・・近隣の鎮守府へと警告をさせて頂いております。」

これはまた厄介な案件だな。佐世保鎮守府の艦隊から逃げ切ったのであれば、さうとう強い個体なのだろう。

「・・・その個体が鎮守府へと攻撃を仕掛けてくる可能性があると言う事ですか？」

「絶対に無いとは言いませんが・・・既に大破状態でしたので、今すぐ攻めて来る可能性は極めて低いと思います。それに現在こちらで捜索・追撃部隊を編成しておりますので、私達に任せて頂ければ解決するとは思いません。」

「なるほど、自分達の獲物に手を出すなど言う事ですか？」

「いえ、北九州鎮守府は我々の傘下ではありませんので、こちらから何かを命令するつもりはありません。もちろん討伐が可能であれば討伐して頂いて構いません。その場合討伐したならば連絡を頂きたい

とは思いません。もしくは搜索に協力して頂けるならば、情報に対して謝礼という形で報いる事も可能です。位置情報さえあれば我々の艦隊が急行して討伐致しますので。」

ことごとく予想が外れてしまい、なんだか調子が狂うな・・・佐世保鎮守府の熊井提督は苛烈な軍人のイメージだったので、軍人としてのプライドに固執するタイプだと思っていた。

「ちなみに逃亡した個体の情報は？」

「葛原提督は戦艦棲姫をご存知でしょうか？」

「戦艦棲姫ですか・・・士官学校時代に交戦記録を読ませて頂きました。」

相手は戦艦棲姫か・・・確認されている姫級の中でも破格の砲撃力と耐久力を持つ相手だ。その代わりに艦載機も魚雷も無いが、昼戦夜戦を問わずに高い戦闘能力を持つ。例えば大破していたとしても、うちの実力での討伐は困難だろう。

「であればどれ程危険な相手かは理解して頂けるかと思えます。こちらからの情報は以上ですので、後の判断はお任せ致します。協力して頂けるのであればまたご連絡下さい。」

「分かりました。ではこれで失礼します。」

佐世保との通信を終えてため息を吐く。集積地棲姫の後始末も終わっていないのに、今度は戦艦棲姫か・・・

「曙、すぐに川内と通信を繋げてくれ。」

「分かったわ・・・っ!?提督!!通信が繋がらないわ!」

「なんだと!」

これが叢雲が言っていた通信妨害か!?つまり川内達の近くに戦艦棲姫が存在している可能性が高いと言う事か!?もしこの仮説が正しかった場合、本来敵艦隊が再編成を終える前に各個撃破する作戦だったが、戦艦棲姫を中心に再編成してしまう可能性がある。いくら川内の索敵能力が優れていたとしても、姫級が相手であれば過信は出来ない。上手く交戦を避けて逃げていれば良いのだが・・・

「曙、金剛型姉妹・神通・球磨・島風・雪風・村雨以外の白露型姉妹に緊急招集をかける。すぐに出击港へ向かうように伝えろ。明石と夕

張にも急いで金剛達の出撃準備をさせてくれ。」

「分かったわ!!」

「潮は川内への通信を試みろ。万が一繋がったらすぐに撤退するように伝えろ。」

「は、はい!!」

「朧はこの件を横須賀の叢雲に伝えてくれ。」

「すぐに行きます!!」

「私は出撃港に行つて指示を出す。漣は連絡要員としてついて来い。」

「はいさつさ!!」

出撃港まで走つて行くとすぐに金剛達も到着する。

「Hey!!提督!!何があつたネ!!」

「説明する。総員傾注!!現在夜戦に出撃した川内との通信が途絶えた。そして別海域で佐世保鎮守府が交戦していた戦艦棲姫が逃亡したとの情報が入っている。私にはこれが無関係とは思えないので、お前達にはすぐに川内達の救援に向かつて貰う。」

「ね、姉さんが!」

「ああ、現状川内を含め艦隊の安否は不明だ。最悪既に壊滅している可能性もある。だが生存している可能性も充分にある。」

「Ah・・・私達は川内と合流して戦艦棲姫と戦えと言いますか?」

「いや、佐世保からの話では戦艦棲姫は大破状態で逃亡したらしい。ならば無闇に追い詰めなければ戦艦棲姫と対峙することはないはずだ。だから川内を発見したらすぐに撤退しろ。それと作戦海域で通信妨害が発生している可能性がある。通信状況には常に気をつけて、もし鎮守府との通信が途絶えた場合は、作戦を中止して通信が回復する場所まで撤退しろ。」

「OK!!ならすぐに出撃しマース!!」

「ああ、急いで出撃しろ。」

そう命令すると金剛達は再度敬礼して出撃準備に取りかかる。

「ああ、そうだ。春雨少し話がある。」

「え?は、はい!!」

「漣、春雨と大事な話があるから少し席を外してくれ。それとしばらく誰も近付かないように見張っていてくれるか？」

「あ、はい。」

「では春雨、こっちに来い。」

春雨を近くの部屋に連れ込んでドア越しに外の気配を伺う。おそらく誰も聞き耳を立ててはいないようだな。

「春雨、悪雨と代わってくれるか？」

「は、はい。……何の用かしら？」

見た目は変わらずに春雨のままだが雰囲気が一変して、悪雨に交代してくれたのが分かる。

「単刀直入に聞く、深海棲艦は艦娘の通信を妨害する事が出来るのだろうか？その性能について知っている事があれば教えてくれ。」

「はあ……私は最近深海棲艦になったばかりなのよ？しかも中途半端に。だから本能的な話ならともかく、技術的な話なんて分からないわよ。」

「そうか……」

悪雨に聞けば何か分かるかもしれないと期待したのだがダメだったか……

「私から言えるのは艦娘と深海棲艦の通信は波長が違うって事ね。私も深海棲艦の通信を聞いたのは一回だけだから、それ以上の事は分からないわね……」

波長が違うという事は、艦娘の通信が妨害されている状況でも、深海棲艦は通信出来るかもしれないという事か。

「なるほど。では悪雨であれば深海棲艦の通信を傍受出来るか？」

「……あまりやりたくはないけれど可能だと思っわ。」

「ならばやってくれ。今は少しでも川内達の手掛かりになる情報が欲しい。」

「はあ……そんなに川内さん達が大事なの？ちよつと妬げちゃうわね……」

「川内は優秀だからな。それにあいつらが沈んで深海棲艦化すると困る。」

もし仮に川内の索敵能力を持つ深海棲艦なんて誕生してしまったら、どれほどの脅威になるか分からない……

「はぁ……良いわ、やれるだけやってあげるわよ……その代わり……」  
悪雨はすつと近付いて来ると、そつと抱きついてきた。

「何をしている?」

「抱きついてるのよ。あとちゃんと頭を撫でて欲しいわ。」

「……必要な事なのか?」

「凄く重要な事よ。」

何が重要なのかは分からないが、とりあえず悪雨の機嫌を損ねるのは作戦に影響が出るので、言われた通りに頭を撫でる。

「どうしてこれが必要なんだ?」

「よく覚えておいて。今回あなたは私に深海棲艦としての力を使えつて言ってるのよ。それは精神が深海棲艦側に引つ張られる行為なの。だからそれに負けない為には、艦娘側に精神を引つ張る必要があるの。だからこうして提督と触れ合って提督との繋がりを強める必要があるの。」

「そういうものなのか。」

「私が考えた対症療法だけどね。でもちゃんと効果はあったわよ。」

そう言えば深海棲艦の通信が聞こえたと震えていた時も似たような事を言っていたな。その時も抱きついてきた悪雨の頭を撫でていたら落ち着いていたな。

「なるほど、効果があるならば仕方ないな。」

「そう、仕方ないの。んっ、もう充分よ。」

「そうか、では頼んだぞ。」

「ええ、分かったわ。その代わり帰って来たらまたお願いね。」

「ああ、分かった。」

悪雨がすつと離れると雰囲気がまた変わる。

「そ、それでは出撃の準備をします、はい。」

「ああ、急いでくれ。」

ペコリとお辞儀をしてから春雨が出撃の準備の為に走って部屋を出た。通信妨害の件はあまり情報を得られなかったが、悪雨の協力を



得られたのは大きいだろう。これで川内達を無事に発見する事が出来れば良いのだが・・・

## 148話（叢雲）

まずい・・・ちよつと深入りし過ぎたかな？最初は単独行動している深海棲艦を撃破したり、小集団を一方的に狩る事が出来てたけど・・・敵は混乱するどころか迅速に指揮系統を回復させてる気がする。これだと迂闊に手を出すとすぐに敵の応援が来て数で潰されそう・・・それに遠くからも集まって来てる？

「川内？大丈夫？」

「ごめん、今余裕無いから黙ってて。」

五十鈴が声をかけて来たけど今はそれどころじゃない。とにかく感覚を研ぎ澄ませて少しでも活路を探さないと・・・私だけなら敵艦隊の包囲網を潜り抜けて撤退する自信はあるけれど・・・今は艦隊行動中だ。それにさつき通信で応援を呼ぼうと思ったら、こんな時に限って調子が悪いみたいで繋がらない。強引に突破するのも一つの手だけど・・・

「・・・何か用？」

「なんでも無い。」

つい先程深海棲艦を倒した後に山風ちゃんがドロップしたのだ。つまり練度1の演習すら経験していない娘がいる。さらに他のメンバーも練度が高いわけでもなく、朝潮・陽炎・不知火の3人は今日初めて組む娘達・・・このメンバーで強引に突破しようとする・・・良くて3人抜けられるくらいだと思う・・・

『北東、撤退、着いてきて』

ハンドサインで指示を出して敵の気配が薄い方へと撤退する。鎮守府からはより遠く離れてしまうけれど、今全員生き残る為にはこうするしかない。私が大好きな夜戦では絶対に誰も沈ませないんだから!!

悪雨との話を終えて部屋を出ると、少し離れたところに居た漣が近寄って来る。なんだかニヤニヤしているがなんなのだろうか？

「ご主人様、部屋に近寄る不届き者は居なかったであります!!」

「ご苦労。では執務室に戻るぞ。」

「ほいさっさく。それにしてもご主人様も隅に置けませんなあ♪」

「何がだ？」

「惚けても無駄ですよ？出てきた時の春雨ちゃん表情を見れば一目瞭然ですよ？」

「・・・そうか？」

「・・・漣は春雨の表情から何を読み取った？春雨が部屋を出る時には既に悪雨の気配はなかったはずだ。だがもし仮に深海棲艦化の事を知られてしまったのであれば非常にまずい。・・・秘密を守る為にもそれ相応の措置が必要か？」

「ちよ!?」ご主人様!?怖い怖い落ち着いて下さい!!だ、誰にも言いませんから!!ご主人様と春雨ちゃんの愛の密会の事は誰にも言いませんから!!」

「・・・愛の密会？」

「いや、そんな怪訝そうな顔されても・・・違うんですか？春雨ちゃん一人を呼んで密室に誰も近付けるなつて言いますし、部屋から出てきた春雨ちゃんはとっても幸せそうな顔・・・あれは完全に雌の顔をしていたのでそういう事かと？」

「はあ・・・ただの色恋沙汰だと勘違いしているだけか・・・それならどうでも良いな。」

「はあ・・・馬鹿な事を言っていないでさっさと執務室に戻るぞ。」

「あ、さっきおぼろんが横須賀の叢雲さんを連れて執務室に行くつて言っていましたよ。」

「分かった。ならすぐに向かおう。」

執務室に戻ると既に叢雲が来ていたようだ。

「状況は臚と曙から聞いたわ。かなりまずい状況みたいね。」

「ああ、おそらく戦艦棲姫が川内の居る海域に近付いたのだろう。」

「これは私の予想だけど、佐世保から逃げた戦艦棲姫が集積地棲姫が居た場所を再利用しようとしたんじゃないかしら？そこなら残党やはぐれが集まって来るはずだから、戦力の補充が出来ると考えてもお

かしくないわ。」

「そこではぐれ狩りをしていた川内に近付いてしまったという事か・・・」

非常に運の悪い話ではあるが、今の状況を考えるとそれが一番あり得そうだ。

「それで？少し聞いたけどこの川内さんは夜限定で非常に高い索敵能力を発揮するのよね？」

「ああ、それに危険を感じたら撤退しろと言つてある。姫級が近付いて来たのを察すればすぐに撤退するとは思うのだが・・・」

「通信が出来ない以上希望的観測で行動を決めるのはやめなさい。それと佐世保と戦艦棲姫が交戦した場所を考えたら、川内さん達に南西↘南南西の方向から近付いているんじゃないかしら？それで撤退が出来ない状況に追い込まれていると思うわ。」

なるほど、川内達が狩りをしている後から戦艦棲姫が近付いていったと考えられるのか。確かにもしも先に戦艦棲姫が現場に居たのであれば、川内はその気配を感じて撤退、もしくは通信をしようとして異常に気がつくはずだ。もし仮に南に撤退出来ていたならば、こちらの杞憂だったで済む話だ。

「なるほど、となると逃げるなら北から東の方向になるか。」

「そうね。それで私達横須賀の艦娘だけど、戦艦や巡洋艦のほとんどがお酒を飲んでるから、ほとんど使い物にならないわ。それに秋月型姉妹も対空に特化してるから、空母の居ない夜戦は苦手なのよ・・・」  
「そうか・・・」

「だから今回は佐世保を頼りなさい。通信妨害の件を伝えれば、熊井提督なら動くはずよ。」

「分かった。曙、佐世保に連絡して通信妨害の件を伝えてくれ。」  
「分かったわ。・・・佐世保は討伐部隊を向かわせるそうよ。」

それならば戦艦棲姫の討伐は佐世保に任せておけば問題無いはずだ。であれば今必要な事は川内達の安全を確保する事だ。金剛達の進路は集積地棲姫が居た場所から東の方に向かわせて・・・だが通信妨害の範囲に入って金剛達とも連絡が取れなくなるのも危険か・・・

ならば通信妨害の範囲の外で派手に動いて敵を引き付けるか？

「じゃあ私はそろそろ出るわね。」

「ん？ 叢雲はどうするつもりだ？」

「天津風と時津風を連れて捜索に出るわ。この3人で戦艦棲姫の討伐は火力不足で難しいかもだけど、その辺の雑魚に遅れを取る事はないわ。もし仮に戦艦棲姫に遭遇しても速力の差で簡単に離脱出来るし。」

「そうか・・・すまない、助かる。」

「ふん!!前にも言ったけど私達が居るのにあんた達に沈まれると、横須賀の名誉に傷が付くから助けるだけよ。勘違いしないでよね。」

「それでも助けられるのは事実だ。」

「そう、じゃあ私はもう行くわ。」

そう言い残して叢雲は執務室を去った。本当に横須賀の艦隊には大きな借りを作ってしまうのだが・・・今は使えるものは全て使おう。私に手段を選ぶ余裕などないのだから・・・

「ふう・・・横須賀の叢雲さんマジ格好いいっすわあ・・・ぼのたんも同じツンデレキャラとして頑張らないといけませんなあ。」

「私は別にツンデレなんかじゃない!!まあ叢雲さんが格好いいのは同意だけど・・・」

「実力と経験に裏打ちされた自信があるからだろうな。それに戦況の判断と予測も出来る。私も提督として学ぶところが多い。」

海原提督が現場を一任するだけの実力があるというわけか。これが日本で最強の鎮守府で最も海原提督の信頼を得ている初期艦の実力か。戦闘能力や現場での指揮能力だけではなく、提督として働けるくらいの作戦立案能力か・・・本当に優秀な存在だな。

## 149話（金剛隊戦闘開始・川内夜戦バカ）

金剛達と叢雲達を送り出してからしばらくは何事もなく時間が過ぎてゆく。日付はとつくに変わってしまい、今夜もかなり遅くまでかかってしまいそうだ。途中で大淀がやって来たが多少なりともお酒を飲んでいたので今日は休ませた。大淀自身は問題ありませんと言っていたが、大淀には明日の朝自分が睡眠をとっている間を任せたいと言って納得して貰った。

「提督、金剛さんとの通信にノイズが入り始めたわよ。」

「分かった。では金剛達に作戦を開始させろ。」

「分かったわ。」

今回の作戦は通信状況が安定しない環境での初めての作戦なので、かなり消極的な作戦となっている。通信が出来るギリギリの場所ですべて探照灯を空に向けて照射して、空砲を鳴らして敵艦隊を挑発する。ここまですれば川内の感覚であれば気が付くはずだし、こちらに戦力を引き付ける事が出来れば川内が逃げる隙も作れるだろう。戦艦棲姫については佐世保の討伐部隊が動いているはずなので、そちらに丸投げするつもりだ。

「空砲と探照灯の照射をしたわ。」

「では総員警戒せよ。通信状況には常に気を配れよ。」

「分かったわ。」

「春雨、空への照射はもう良いです。索敵を開始して下さい。」

「は、はい!!」

旗艦の神通さんの指示で空への探照灯の照射を中止して敵艦隊を探します。私達白露型姉妹と球磨さんは神通さんを旗艦として、索敵と金剛さん達の護衛を担っています。それにしても……

『マタテキガキタ!!オイハラエ!!チカヨラセルナ!!』

さつきから戦艦棲姫と思われる個体の叫びが頭に響きます……提督からの指示で悪雨ちゃんが頑張ってくれてるみたいだけど……この声を聞いているとちよつと不安になります……

「ん？春雨？大丈夫？」

「白露姉さん・・・だ、大丈夫です、はい。」

「無理はしないでよ？」

「少し緊張しているだけですから、はい。」

先程からの戦艦棲姫の通信を傍受した結果、おそらく川内さん達はまだ無事です。それに佐世保鎮守府の艦隊はもう交戦を開始しているみたいですね。この話を提督に伝えたいのですが・・・深海棲艦の力を使っている事は秘密なので、通信で伝える事が出来ません・・・金剛さんや神通さんを上手く誘導出来れば良いのですが・・・せめて索敵に関しては有効に使わないと。

『カムムスタ!!シズメロ!!シズメロ!!』

・・・敵艦隊が近付いて来たようですね。いち早く探照灯を使って索敵をすると、こちらに一直線で向かって来る敵艦隊を発見しました。

「見つけました!!」

「Niceハルサメ!!撃ちます!!Fire!!」

私が敵艦隊を発見するとすぐに金剛さん達が交戦を開始してくれます。敵に戦艦は居なくて小規模なのですぐに終わりそうです。ただ他にもこちらに向かって来る部隊が居るようなので油断は出来ません。川内さん達が無事に脱出するまで頑張らないと!!

『一時停止』

川内さんのハンドサインで艦隊が静かに停止する。川内さんは南の方を向いて真剣な表情で何か考えているみたい。衣笠さんもつられて南の方を向いてみると、なんだか雲が照らされてる？あれって探照灯かな？

「全員聞いて、状況が変わったよ。援軍が来たみたい。」

「そうなの？」

「うん、南西からと南からだね。南の方はたぶんうちの艦隊だと思う。南西の方はかなり強いみたいだから、横須賀か佐世保の艦隊だと思うんだよね。」

良かったあ。通信が途絶えたから提督が私達を助ける為に援軍を送ってくれたんだ♪よく耳を澄ませれば砲撃音が聞こえるかも？波と風の音でよく聞き取れないけど。

「提督もなかなかやるわね。それで？五十鈴達はどう動くの？」

「まず状況の説明だけど、私達を追い掛けて探してた奴らは、迎撃の方に回されたみたい。南西の方は深海棲艦が多めだけど多分大丈夫。南の方は敵を引き付けて迎撃してるみたい。こっちは無理しなければ大丈夫だと思う。あと深海棲艦の中心になってそうなのが東に少数の艦隊を連れて逃げてる。」

「だったら南西か南の艦隊と合流するように動けば、敵艦隊を挟み撃ちに出来るから無事にこのピンチを切り抜けられそうだね。」

「悪くない状況ね。それで？」

「もしこれが全部提督の作戦通りに進んでいたらただけど・・・」

「そこで川内さんが言葉を切ってしまう。川内さんの凄く真剣そうな表情に艦隊の緊張感も高まっていく。」

「提督は私達に敵の頭を仕留めさせようとしてるよ!!」

「え!!」

「だってこの状況で敵の頭を仕留められるのは私達だけだよ!!提督は私達がちゃんと戦力を温存してるって信じてくれてたんだ!!それで敵の戦力を分散させて、私達が敵の頭を仕留める為のお膳立てをしてくれてる!!私には敵の頭を仕留めろって言う提督の声が聞こえる!!私達を信頼してくれるなら私はその信頼に応えたい!!皆もそうでしょう?提督の信頼に応えたいよね?」

「え!!え!!?そうなの!!衣笠さんには提督のさっさと逃げて来いって声が聞こえる気がするんだけど!」

「ふくん、良いんじゃない?それって提督が五十鈴達なら出来るって判断したって事でしょ?悪くないわ。」

「もちろんです!!この朝潮、司令官のご期待には必ず応えたいと思います!!」

「司令が私の活躍に期待してるのね♪なら陽炎型の力を見せるわよ!!」



「当然です。司令の期待に応えてみせます。」

うーん？なんか皆やる気みたいだね。やっぱり提督が期待してくれているなら、その期待には応えたいもんね!!提督は私達を助けてくれて、食事や寝るところを用意して艦娘として活躍出来る場所を作ってくれた。だから今度は衣笠さん達が活躍して恩返しをする番だよね!!

「衣笠さんも提督の期待には応えたい!!よぉぅし!!衣笠さんの夜戦、見せてあげる!!」

「よし!!決まりだね!!じゃあ今から奇襲を仕掛けるけど、山風ちゃんはまだドロップしたばかりだから、今回は後方で警戒しててね。」

「・・・うん、分かった。」

「じゃあ行くよ!!また指示はハンドサインで出すから、しっかりついてきてね!!」

## 150話（対戦艦棲姫）

「金剛、戦況はどうだ？」

「No problem!!ハルサマーがいち早く敵艦隊を見付けてくれてマース。だからすぐに対処出来てるヨ。」

ふむ、春雨に深海棲艦の通信を傍受させたかいがあったようだな。これならばこちらの挑発に乗って来た奴らを返り討ちに出来るな。

「ではそのまま迎撃を続けてくれ。」

「OK それとドロップ艦を一人保護したヨ。」

「ほう、それは運が良いな。ちなみに誰を保護したんだ？」

「アキツッキーだったヨ。」

なに!?秋月だと!?あの防空駆逐艦の秋月だと!?運が良いなんてレベルじゃないぞ!?

「間違い無いのか?」

「もちろんネ。なんなら本人と話をしたら良いと思いい「金剛さん!!次来ます!!」Sorry また後でネ。」

「ああ、分かった。」

金剛達は今のところ順調のようだな。おそらく佐世保からの援軍も優勢に戦っているだろう。となればそろそろ川内達がどちらかの軍に合流しても良いのではないかと思うのだが・・・もしくはかなりの被害を受けていて、挟み撃ちを狙う余裕すら無いのか?戦場を東から迂回すれば叢雲達と合流出来るかも知れないが・・・

川内さんを先頭にして暗い海を静かに進む。こんなに暗いのに川内さんは迷い無く私達を先導してくれる。さっきの川内さんの言葉で皆物凄くやる気になってる。可愛い妹の不知火の目もいつもより鋭くなってるかな?

『もうすぐ 攻撃』

川内さんの合図で砲撃戦の用意をする。作戦は川内さんが探照灯を担当して、衣笠さんが敵の旗艦への攻撃、他の人達で取り巻きを潰す。その後魚雷の射程圏内まで近付いて雷撃戦というシンプルな作

戦だ。

「っ?! 気付かれた!! 散開!!」

こちらが仕掛ける前に気が付かれた!? 川内さんの号令で慌てて散開して回避行動をする。敵の砲撃は至近弾でかなり危なかった。いきなり至近弾を撃ってくるなんてかなり強い相手だ!!

「怯むな!! 接近して撃ちまくれ!!」

砲撃に怯まずに川内さんが探照灯で敵艦隊を照らしてくれる。相手はかなり禍々しい巨人のような艤装の深海棲艦と軽巡1と駆逐2だ。敵の旗艦は見たことも無い相手だけど、ボロボロの状態で砲身がいくつか潰れている。これならきつとやれる!!

「逃げてても無駄よ!!」

私達の中では一番射程の長い衣笠さんの一斉射が敵艦隊を襲う。敵の旗艦を狙った砲撃は敵の駆逐艦に阻まれてしまったが、一撃で駆逐艦一隻を沈める事に成功した。

「五十鈴には丸見えよ!!」

今度は五十鈴さんの砲撃が軽巡へと命中して損傷を与える。川内さんは敵の砲弾を回避しながら探照灯を使用してるので、砲撃する余裕は無さそうだ。今のうちに私達はとにかく距離を詰めない!!

「ほら!! もう一発!!」

さらに衣笠さんの追撃が今度こそ敵の旗艦へと命中した!!

「よし当たった!! って全然効いてない!」

確かに命中したはずだけど相手の装甲が硬いのか、ほとんどダメージが無いみたいだ・・・あの射程と重巡の砲撃をも弾く装甲・・・相手は戦艦みたいだね・・・

「ああ!! 直撃!」

「衣笠さん!」

衣笠さんがやられた!? 当たり所が悪かったのか、一撃で吹き飛ばされてしまった。川内さんと五十鈴さんが同時に焦ったような声をあげる。

「クッ・・・衣笠さんの仇!!」

五十鈴さんが敵の旗艦を狙うが、装甲に阻まれてたいした損傷を与

えられない。五十鈴さんが衣笠さんをやられて冷静さを失ってる？  
五十鈴さんは取り巻きを狙う作戦だったのに……

「私と不知火で軽巡をやる!!朝潮は駆逐艦をやって!!」

「はい!!」

ようやく私達の砲でも届く範囲に入ったので、最初の作戦通りに取り巻きを狙ってきつちりと沈めた。これで旗艦を守る奴はもう居ない。あとはなんとか雷撃を命中させるだけ!!

「うそお!？」

「五十鈴!？」

五十鈴さんも被弾したみたいで川内さんが動揺してるみたいだけど、私と不知火と朝潮は脇目もふらずに全力で敵に近付く。川内さんが私達の意図を察してくれたのか、探照灯で照らしながらも砲撃を開始するが……

「わああ!？」

ついに川内さんも敵の砲撃に捕まってしまったけれど、敵はもう見えている。

「確実に当たる距離まで近付くわよ!!誰が沈んでも恨みっこ無しだからね!!」

「はい!!」

ふふっ、不知火も朝潮も覚悟は出来てるみたいね。この状況で少しでも引いたら全滅するだけだって分かっているのね。長門鎮守府で仲間が次々と沈んでいくあの地獄を生き延びた私達だ!!覚悟は出来る!!

「っ!？」

朝潮が被弾しても私は止まらない。

「うっ!!」

不知火も被弾したけど止まらない!!

「いつけええええ!!」

ギリギリまで近付いて魚雷を発射する。この距離なら絶対に避けられない!!そう思った瞬間私の意識は轟音とともに吹き飛ばされた。

「Hey 提督、お待たせしましたネ。追加の部隊も無事に倒して損傷軽微デース。」

「良くやってくれた。引き続き警戒せよ。」

「OK それと今日はどうしてもLuckyネ。またまたNew faceが登場したヨー!!」

またドロップ艦か？今日は物凄くドロップ艦が多いな。連戦しているからか？

「ほう、それは運が良い。それで誰がドロップしたんだ？」

「ではアキツッキーとNew faceに代わるヨ。」

「秋月型防空駆逐艦一番艦秋月、ここに推参致しました。お任せ下さい。」

「北九州鎮守府の葛原だ。秋月は対空能力に特化していると聞いている。」

「はい。この秋月が健在な限り敵機動部隊にやらせはしません!!」

「それは頼もしいな。それでは今後の活躍に期待している。」

「はい。ありがとうございます。」

横須賀の秋月もそうだったが、かなり真面目そうな雰囲気だ。それに珍しい防空駆逐艦が手に入った事はかなり大きな戦力強化だな。

「んんっ、提督さんお疲れ様です。練習巡洋艦鹿島、着任です。うふふ。」

「………鹿島だと？」

「あ、はい。そうですが……お気に召しませんでしたか？」

「いや、すまない。少々驚いただけだ。むしろ練度の低いうちにとつて練習巡洋艦は喉から手が出るほど欲しい存在だ。鹿島の着任を歓迎する。」

だが鹿島も秋月と同様にかなり珍しい艦であったはずだ。それが同時に獲得出来るとは……いったい何が起こっているのだ？

「うふふ、そうでしたか。いきなり嫌われてしまったのかと思ってびっくりしてしまいました。それではこれから宜しくお願い致しますね。」

「ああ、こちらこそ宜しく頼む。」

何はともあれ貴重な戦力が手に入った事は喜ばしい事だ。だがまだ川内達と連絡が取れていないから油断は出来ない。

「金剛、周囲に敵は居そうか？」

「Oh・・・目に見える範囲にはいませネ。私はセンドーイじゃないからよく分からないヨ。ハルサメーはどうですか？」

「ふえ!?わ、私ですか!?えっと・・・近くには居ない・・・と思います。でもあつちからちよつと嫌な予感が・・・もしかしたら川内さん達に何かあつたのかも・・・」

「OK 提督、聞いてましたか？ハルサメーは北東方向から嫌な予感がすると言ってるネ。ハルサメーの予感は今よく当たるみたいヨ。これなら第二のセンドーイになれるそうネ。」

春雨がそう言うのであれば、深海棲艦の通信を傍受して得た情報を、予感という形で伝えてくれているのだろう。それにしても川内という常識外れの前例があるからか、予感という根拠の無いものでも受け入れられているのは都合が良い。それにしても北東か・・・集積地棲姫の居た場所から東に向かった辺りか？東に迂回してこちらに帰って来ようとしたところで敵に捕捉されてしまったのか？

「金剛、進路を北東に警戒しながら進め。通信の状態にもきちんとなきを付けて。」

「OK それでは進軍開始デース!!」

川内達に何かあつたようだが・・・無事だと良いのだが・・・

## 151話（戦艦棲姫戦後）

「陽炎!!陽炎!!目を覚まして!!」

・・・誰かが私の体を揺さぶりながら必死に呼び掛けてくる。この声は・・・

「川内・・・さん？」

「あ!!気が付いた？」

「あ、はい・・・いたたあ・・・」

「良かったあ・・・」

どうやら少しだけ気を失っていたみたい。ゆっくりと起き上がろうとすると、あちこち痛む。どうやらかなり手酷くやられたみたいね。

「はっ!?敵は!?皆は無事なの!?!」

「敵の旗艦は陽炎の雷撃で沈んだよ。本当にありがとね。他の皆は無事・・・とはちよつと言えないけど誰も沈んでないよ。」

「そっか、なら良かったあ・・・」

周りを見渡すと艦隊の皆が私の近くに集まってくれてたけれど、本当に皆ボロボロだ。この様子だと全員大破かな? 朝潮と不知火は後方で待機していた山風に肩を貸して貰ってようやく立っているみたいだし。

「ふふっ、不知火ボロボロじゃん♪」

「・・・陽炎も人の事言えませんよ。」

「えへへ、そうかもね♪」

不知火とそんな冗談を言って笑いあう。相変わらず不知火の表情はほとんど変わらないけど、私にはちゃんと不知火が笑ってくれてるのが分かってる。

「それにしてもびっくりしたよ。あの強敵相手に三人とも恐れずに切り込んで行くんだもん。」

「あはは・・・一撃だけなら沈まないって知ってますからね・・・あの状況で敵に余裕を与えてしまったら、既に被弾した人が狙われて沈んじゃいますから・・・仲間が沈むところは長門鎮守府でたくさん見て

きましたから……」

「そっか……」

川内さんが悲しそうな顔をしちやってる。ちよつと湿っぽい話をし過ぎちやつたかな? そんな事を考えていたら、海がうっすらと明るくなる。

「あ!? またドロップ艦かな!？」

あれだけ強い敵を倒したんだから、ドロップ艦くらいのご褒美があつても良いよね♪心安らぐ優しい光が海の底からゆつくりと海面へと上がつて来て……

「Guten Morgen. 私は重巡プリンツ・オイゲン。宜しくね♪」

「……え?」

聞き取れなかつたけど、最初の言葉はたぶん外国語だよね!? つて事は外国の人!? それとも金剛さんみたいな帰国子女!?

「おあ!? 皆さんボロボロじゃないですか!? 大丈夫ですか!？」

「あ、うん、なんとかね……私はこの艦隊の旗艦を務めてる川内だよ。宜しくね。」

「はい、宜しくお願ひします。」

「えつと、ぷりんつさんだっけ? どの国の人なの?」

「ドイツ生まれの重巡洋艦でアドミラル・ヒツパー級の3番艦です!! ビスマルク姉様とライン演習作戦に参加しました!!」

ドイツの人かあ。どうやら本当に日本以外の国の艦娘、いわゆる海外艦というやつらしい。海外艦ってほとんど発見されていないすつごく珍しい艦だったと思うんだけど……

「へ、へえ〜凄いなだね。とりあえず一度提督に通信入れてみるね。繋がれば良いんだけど。」

「提督!! 川内さんと通信繋がりました!!」

春雨から嫌な予感がすると言われて、金剛達を北東にしばらく進ませていると、潮が驚いた表情で報告してきた。

「本当か!? 代わろう。川内無事か!？」



「あ、提督？皆ボロボロだけどまだ誰も沈んでないよ。」

「そうか・・・今どこにいる？」

「えっと・・・集積地棲姫が居た拠点から東に進んだとこだよ。出来れば早めに救助して欲しいかな。」

「分かった。曙、金剛達をすぐに向かわせろ。隴は横須賀艦隊に情報共有しろ。」

「分かったわ。」「うん。」

曙と隴が指示に従って動き出す。川内が救援を求めろくらいだから、かなり手酷くやられたようだ。早く救助しなければ敵の追撃を受けるかもしれない。

「あ、提督、敵の頭はすっかり沈めたよ!!」

「・・・今なんと言った？」

「だから私達で敵艦隊の中心になってた深海棲艦を倒したんだって!! 凄いでしょ♪」

まさか戦艦棲姫を倒したと言っているのか？

「・・・一応確認するが、どんな姿をしていた？」

「えっと、初めて見た奴だったけど、なんか人型で後ろに巨人みたいな機装がある奴。最初からボロボロだったのに物凄く強くてさあ!! そいつ一人にこっちの艦隊は全員大破に追い込まれちゃった・・・でも最後は陽炎が相打ちになりながら魚雷を叩き込んで沈めたよ!!」

この特徴は佐世保から聞いていた戦艦棲姫の特徴で間違いないだろう。最初から大破状態になっていた相手とは言え、姫級に戦いを挑んで撃破したのか・・・

「はあ・・・ずいぶんと無茶をしたな・・・相手は戦艦棲姫、姫級だぞ？」

「姫級だったんだ!! えへへ♪だって提督が私達を信じてくれて実行した作戦でしょ? だったらなにがなんでも期待に応えたいって思うよね♪」

「・・・なんの話だ？」

川内達を信じて実行した作戦? まさか戦艦棲姫も集積地棲姫の残党として認識しているのか? だから無理をしても討伐をしたのか

？

「……え？提督が援軍を送ってくれたんだよね？それで敵艦隊を引き付けてくれたんだよね？」

「ああ、通信障害が発生していたから、通信が繋がる範囲で挑発して敵の注意を引き付けさせていた。あと佐世保に情報を共有して討伐部隊を送って貰った。」

「だよねだね!!それで追い込まれて逃げ出した戦艦棲姫ってやつを、戦力を温存していた私達で仕留める作戦だったんでしょ？」

「……そんな作戦を考えた覚えはないのだが？」

「……本当に？」

「ああ、そもそも私は危険を感じたらすぐに撤退するようにと命令したはずだが？」

「……あつ。」

あつじやない……まさか通信が繋がらない状況で、勝手に作戦を理解したつもりになって、戦艦棲姫に自ら攻撃を仕掛けたのか……これは後でじっくりと話をするべきだな。

「もう良い、続きは無事に帰って来てからだ。」

「はい……」

川内は意気消沈しているようだ。しかしどうしたものか……独断専行による作戦は咎めるべきなのだが、戦艦棲姫に止めを刺した功績は称賛されるべき戦果だ。

「あつ、それとドロップ艦を保護したよ。それも二人も。」

「ほう、それは朗報だな。」

「えへへ♪きつとすつごく驚くよ♪じゃあ代わるね。」

ドロップ艦を二人も保護したのか。金剛達も二人保護していたから合計4人だ。いくらなんでも多すぎないか？

「あたし……白露型駆逐艦……その八番艦山風。いいよ……別に……」

山風か。たしか改白露型だったか？確かに珍しい艦だな。秋月に鹿島に山風か……人数が多いただけでなく、珍しい艦娘ばかりだな。

「北九州鎮守府の葛原だ。宜しく頼む。」

「別に……構わないでいいよ……」

ふむ、かなり警戒心の強い艦娘のようだな。だが初めて小森と出会った時よりはマシか？

「そうか。だが私の鎮守府に着任した以上、仕事はきちんとして貰うつもりだ。そこで手を抜くなよ？」

「・・・分かった。」

「ではもう一人と代わってくれ。」

まあ、まずはこんなものだろう。これ以上は怖がって逃げるだけだろう。

「Guten Morgen. 私は重巡プリンツ・オイゲン。宜しくね♪」

「・・・は？」

「あれ？通信状況が悪いのかな？もしもくし？聞こえてますか？」

「ああ、いや、すまない。聞こえている。」

「良かったあ。じゃあ改めてGuten Morgen. 私は重巡プリンツ・オイゲン。宜しくね♪」

どうやら自分の聞き間違いではなさそうだ。聞き覚えの無い名前だが、どう考えても日本の艦娘では無さそうだ。

「北九州鎮守府の葛原だ。その・・・どこの国の艦娘なんだ？」

「ドイツ生まれの重巡洋艦でアドミラル・ヒツパー級の3番艦です!!  
ビスマルク姉様とライン演習作戦に参加しました!!」

「そうか・・・ドイツか・・・」

ドイツの艦娘なんて日本で確認したのは初めてではないか？確か海外艦で確認されているのは佐世保のガングートと横須賀のタシユケントの二人だけだったはずだ。しかも二人とも地理的に近いロシアの艦娘だ。あとは駆逐艦の響が第二改装によってヴェールヌイと名前を変えるという話もあったが、それもロシアの艦娘だ。これはかなり厄介な事になるな・・・

「あれ？もしかしてアドミラルはドイツの事が苦手なんですか？」

「いや、そういうわけではない。驚き過ぎて少し頭が追いついていないだけだ。すまない。何はともあれ北九州鎮守府への着任を歓迎する。」

「D a n k e ! D a n k e ! これから宜しくお願いね♪」  
「ああ、宜しく頼む。」

## 152話（熊井提督・人事課中井）

川内達の救出は既に指示を出したので、後は金剛達と横須賀の艦娘達に任せるしかない。であれば次にやらなければならない事は・・・潮は引き続き川内達との通信を維持しろ。漣は金剛達との通信を担当して、隴は引き続き横須賀とのやり取りを任せる。」

「はい!!」

「曙は佐世保との通信を繋いでくれ。私が熊井提督と直接話したいと伝えてくれ。」

「分かったわ。・・・繋がつたわ。」

「代わろう。北九州の葛原です。」

「熊井だ。なにがあつた?」

「こちらの艦隊が逃亡していた戦艦棲姫と遭遇して撃破しました。」

「・・・それは本当か?」

流石の熊井提督でも驚くか。まあ、手負いとは言え横須賀と佐世保以外で姫級を討伐したのは初めての出来事だ。疑うのも無理はない。「旗艦の証言では相手は見たことのない人型の深海棲艦で巨人型の艤装をしていたとの事です。それに遭遇した時点でかなりボロボロの状態だったとの事なので、佐世保から頂いた情報と合致すると判断しました。戦艦棲姫の轟沈とドロップ艦の出現も確認しております。」

「・・・分かった。協力に感謝する。」

熊井提督はその一言だけで通信を切ろうとしている雰囲気を感じる。しかしこちらとしてはまだ話が残っている。熊井提督相手であれば無駄な前置きは省いたほうが良いか?・

「それでドロップ艦の扱いについての相談なのですが・・・」

「お前のところのドロップ艦だ。好きにしろ。」

「ですが今回戦艦棲姫を追い詰めたのは佐世保鎮守府で、我々は止めを刺しただけです。共同作戦でのドロップ艦は功績の大きい方に優先権があります。ですので取り巻きからのドロップ艦はともかく戦艦棲姫からのドロップ艦は佐世保が所有すべきだと私は考えています。」

「情報の共有はしたが共闘したつもりはない。戦艦棲姫を仕留め損なつたのはこちらの落ち度だ。それに討伐しても構わないと伝えただけだ。他者の功績を奪うような卑劣な真似はせん。」

「今回のドロップ艦は極めて希少な海外艦ですが本当に良いのですか？」

「くだい!!」

この一言を最後に熊井提督は通信を切ってしまった。熊井提督は軍人としてのプライドが高いからか、態度が一貫していて動きが予測しやすい。とりあえず熊井提督から言質は取ったのでよしとしよう。

「曙、次は大本営と繋げてくれ。」

「分かったわ。……繋がつたわ。相手は人事課の中井さんよ。」

ん？何故人事課がこんな深夜になつても起きているのだ？叩き起こしたにはあまりにも対応が早すぎる。まあどうでも良いかさっさと報告を済ませておこう。

「北九州鎮守府の葛原です。」

「人事課の中井だが、こんな夜遅くにいったい何の用だ？」

「佐世保鎮守府が追っていた戦艦棲姫をうちの艦隊が撃破しましたので、その報告です。」

「は？馬鹿を言うな!!貴様程度の実力で姫級の討伐をしただと!?嘘をつくな!!」

「はあ……疑われるのであれば後で佐世保鎮守府に確認すれば良いでしょう？そんなすぐにバレるような嘘をつくわけないでしょう……」

信じられない話なのは分かるが、自分はこんな時間に虚偽の報告をするほど暇ではない。

「だが貴様の艦隊に姫級を討伐する力など無いはずだ。」

「ええ、ですから佐世保鎮守府が轟沈寸前まで追い詰めていた個体に止めを刺しただけです。」

「……つまり貴様は功績欲しさに佐世保鎮守府の戦果を横取りしたと言うのか!？」

「ええ、それが何か？既に佐世保鎮守府とは話がついています。」

本当は川内が暴走しただけなのだが、結果としては戦果の横取りを

してしまつたからな。

「この恥知らずが!!それでなんだ? 姫級を討伐した実績を盾にして、長門鎮守府を壊滅させた責任から逃れようという魂胆か?」

「はあ・・・ただの報告ですが? それともう一件報告ですが、戦艦棲姫を討伐したらドロップ艦が現れました。」

「それがどうした? まさか戦果だけでなくドロップ艦まで佐世保鎮守府から掠め取つたのか?」

「二度も言わせないで下さい。佐世保鎮守府とは話がついています。そのドロップ艦ですが海外艦でドイツの艦娘だと言っています。名前はプリンツ・オイゲンと言うそうです。」

「・・・は?」

これは驚いても仕方ないか。ロシア以外の艦娘が日本で発見されるのは初めてだ。

「では報告は以上です。失礼します。」

「待て待て待て!! 希少な海外艦でしかもドイツの艦娘だ?! 貴様気は確かか!」

「少なくともそう聞いております。まだ帰還していないので通信越しにしか確認出来ていないのですが、本人はドイツの艦娘だと言つてます。」

「本当に間違い無いのだな? 嘘でしたでは済まされんぞ?」

「ええ。」

「ふむ・・・であれば丁度良いかも知れん。いやなに、鶴野提督から慈悲深い御言葉を頂いていてな。新人の提督である貴様をメディアの前に突き出して謝罪させるのは酷な話ではないか仰つているのだ。私としては貴様にきちんとけじめを付けさせるつもりでいたが、鶴野提督が庇われるのであればと頭を悩ませていたのだ。」

ほう? 鶴野提督は本当に謝罪会見を中止させるように圧力をかけたのか。よほど都合の悪い事があるのだろうか。

「はあ・・・それで?」

「私も鬼では無い。貴様が鶴野提督の恩義に報いて、詫びの証として新しい海外艦を鶴野提督に譲ると言うのであれば、今回貴様が掠め

取った功績を理由に謝罪会見を中止させても良いぞ？悪くない条件だろう？」

「はあ？これが本気で悪くない条件だと思っっているのか？謝罪会見がなくなるのはそこまで悪くないが、何故鶴野提督に詫びなどしなくてはならないのだ？こいつ気は確かか？」

「すみませんが私は深夜遅くまで作戦指揮をして疲れているのです。下らない冗談に付き合う余裕はありません。話はここまでにしませんか？」

「なんだと貴様あ!!私が歩み寄ってやったと言うのに、なんだその態度は!!そもそも貴様が不当に掠め取った功績について、大本営から直々に追及しても構わんのだぞ!!」

「これで三度目ですが、今回の件は熊井提督と話がついています。熊井提督自ら今回の戦艦棲姫に止めを刺した件を問題にしないと云われ、ドロップ艦についても私が保護するべきだと言われました。これ以上何か文句を言うのであれば、熊井提督を説得して下さい。」

あの頑固な熊井提督を説得出来るものならな。しかも熊井提督は海原提督と並ぶ実力者だ。大本営としても機嫌を損ねるのは避けたいだろう。

「なっ?!い、今は貴様の話をしている!!熊井提督には関係無いだろうが!!」

「関係無い?今回の一件に関わった鎮守府の提督が関係無いわけないでしょう?この件を追及するならば熊井提督を避けては通れませんよと忠告しているのが理解出来ないのですか?」

「貴様あああ!!」

ふむ、中井さんもかなり冷静さを失っているようだな。どうやら鶴野提督からの圧力もあってなのか、かなり追い詰められているようだな。

「それと私としては明日の会見の準備は順調に進んでいます。ですからそれも交渉材料にはなりません。会見を中止したければ大本営の命令として参加者に通達して下さい。」

「何を言っている!?!そんな事をすれば大本営の威信に傷が付くだろう



が!？」

「そんなものは私の管轄外です。精々頑張つて下さいね。」

そう言い残して通信を切る。報告で面倒な事になるとは思っていたが、中井さんの追い詰められている様子を確認出来たのは面白かったな。

「うわぁ・・・ご主人様がめっちゃ悪い顔してるわぁ・・・」

ふと周囲を見渡すと、漣と隴が引いていて潮がびくびくしている。曙は特に気にした様子は無さそうだ。

「ははっ、敵を追い込んでいくのは悪くない気分だからな。それこの程度ならお遊び程度のものだぞ？人間の闇はこんなものじゃない。」

「いや、漣的にはご主人様は充分やべえ奴ですよマジで・・・怖い笑顔でめっちゃ煽つてたじゃないですか・・・」

言う程怖い顔をしていたか？面倒な相手だから機嫌は悪かったかもしれないが・・・

「漣、あんたも執務手伝いたいならこれくらい慣れなさい。今のなんてただの口喧嘩よ。」

「マジすか・・・ぼのたんもダークサイドに堕ちてたか・・・およよ・・・」  
「ふん!!別にそんなんじゃないわよ。ただ現実を少し知ってるだけ。」

曙は散々人間の醜い部分を見て来たからな。漣達も酷い目にはあっているだろうが、曙はもっと嫌な物を見てきただろう・・・それに比べれば今のは確かにただの口喧嘩だな。

## 153話（大本営サイド）

「クソ!!クソ!!クソオ!!」

北九州鎮守府との通信が途絶えた通信機を叩きつける。どうしても想定外の事ばかり起こるのだ!?!どうして提督という奴らは想定外の動きばかりするのだ!?

「中井さん、少し落ち着いたらどうですか?」

「黒川さん!!葛原の野郎が!!使い捨ての火種の分際でなめた態度を!!」

「まあまあ、そう怒らずに。葛原の態度が悪い事なんて既にご存知でしょう?だからなんの躊躇いも無く捨て石として使えるのですから。」

「それはそうですが!!」

「それに葛原を煽って焚き付ける計画に関しては問題なく進んでいるでしょう?なにやら会見で何かをやらかす準備を進めているようですし。」

「それは・・・」

確かに葛原の野郎は会見の準備は順調に進んでいると言っていた。だから何かしら問題を起こすはずなのだが・・・

「ですが会見は鶴野提督から圧力をかけられてしまったではないですか!!それを強引に進めればこちらが睨まれます!!」

「そうですね・・・」

今私と黒川さんの頭を悩ませている一番の原因は鶴野提督が葛原の謝罪会見に反対している事なのだ。今回の謝罪会見の内容は鶴野提督が広めている内容とほとんど同じで、原田提督の失態を葛原に擦り付けるものだ。散々各地で同じ内容を広めているくせに、葛原に直接謝らせるのはダメだと言うなど誰が予測出来ると言うのだ!?

「それに久藤提督に動きが無い!!これでは当初の計画通りには進まないです!!」

「それも誤算でしたね・・・」

本来の計画では鶴野提督が葛原の謝罪会見に協力してくれて、それ

に対抗する為に久藤提督が動いてくるはずだった。表向きでは葛原と久藤提督に繋がりはないと言っているが、裏で手を結んでいる事は確認している。原田提督が深海棲艦の砲撃で殺された時に、久藤提督の派閥がいち早く原田提督が敵前逃亡した証拠を押さえた。そして呉鎮守府からの輸送船が北九州鎮守府に入港したのも確認された。この事から葛原から久藤提督に情報提供があり、久藤提督が謝礼として資材を送ったと考えられる。

それに北九州鎮守府の汚職調査の件もある。こちらの計画としては、葛原の野郎がどちらの陣営にも加担せずに、泥沼の争いになるはずだったにも関わらず、結果として久藤提督側に多少の損失はあったものの久藤提督の思惑通りの状態で早期に解決してしまった・・・これも葛原が久藤提督に尻尾を振った証拠だから、葛原は久藤提督の下に付いたと考えて間違いない。あのクソ野郎は誰の下にも付かないみたいな態度を取っていたくせに、ちよつと追い込まれたくらいですぐに態度を変えやがって!!あいつのせいで計画が大きく狂ったのだ!!

「元々鶴野提督と久藤提督を争わせて、二人の力を少しずつ削っていく計画だった!!その為の火種として葛原を着任させたと言うのに、どうして我々が追い詰められなくてはならんのだ!!」

「そうですねえ・・・葛原に関しては思っていたよりも使えなかったと割り切りましょう。問題は鶴野提督の方です。なぜ今回の話には鶴野提督が乗って来なかったかの方が問題でしょう。」

今回の一件は大本営が主体となって強引に進めた話だ。本当ならば鶴野提督へのご機嫌取りとして誤魔化せる話だったのに、その鶴野提督から圧力をかけられてはどうしようもない。かと言って久藤提督が鶴野提督の邪魔をするように動く気配も無いので、久藤提督の妨害があったと言いつても事も出来ない。だからと言って葛原の責任で中止をさせようとしても、あいつは責任をこちらに押し付けようとするはずだ。それにあれだけ告知をして人を集めたからには、納得のいく理由がなければ中止は出来ない。強引に中止させれば勘の良い者達なら大本営からの命令だと気付く。それは大本営への不満を抱

かせてしまう。

「くそお!!どうして提督という奴らはどいつもこいつも好き勝手に動くのだ!?そもそも妖精だかなんだかが見えるだけのド素人が、ここまです権力を持つ事がおかしいのだ!!なぜ国防に関する事をド素人に任せねばならぬのだ!!国を守るのは我々軍人の仕事だ!!そして軍事力は国が管理すべきものだ!!」

「はあ・・・お気持ちには痛い程分かりますが、今さらそれを嘆いても仕方ないでしょう。深海棲艦出現当初に提督達を上手く制御出来なかったのは我々の失態です・・・」

今思い出しても腹立たしい。深海棲艦の出現により日本は大打撃を受けた。街は焼かれ交通網や通信網は寸断されて、自衛隊による防衛線も軽々と食い破られた。深海棲艦と我々では戦力に大きな差があった。人間とそう変わらない大きさであつても奴らは一隻の船なのだ。奴らを沈める為には一隻の軍艦を沈めるだけの火力を、人間くらいの大きさの相手に叩き込む必要がある。そして奴らの放つ砲弾は戦艦の主砲であつても拳大くらいの大きさだが、命中すると戦艦の主砲の威力を發揮するのだ。これで次から次へと攻めて来るのだから、通常兵器での迎撃なんて不可能だ。

そんな絶望的な状況で突如艦娘達は現れた。本当に突然の出来事だったのだ。政府がその存在を認識した時には、既に鎮守府の原型とも言える施設がいくつか作られていたのだ。その施設で指揮をしていた提督に話を聞いて、我々の目に見えない妖精さんという特殊な存在を知った。提督となる為の最低条件はその妖精さんが見える事だと言う。馬鹿げた話ではあるが艦娘達に頼る他に勝ち目が無い以上、そちらのルールに合わせるしかなかった。

最初は軍人の中から提督の資質を持つ者を探して鎮守府を建設していたが、日本各地を守る為には人数が少なすぎた。それに当時は深海棲艦の情報も少なく、艦娘の運用も手探り状態だ。いくつもの鎮守府が潰されて、軍人出身の提督はその数を減らす一方だ。それ故に一般人からも広く提督の資質を持つ者を集めたのだが・・・

「全てはあの鶴野提督が提督の権利の保障をなどと言いつ出したからだ

!!あそこからこの国は狂い出したのだ!!それを利用して勢力を伸ばした久藤提督もだ!!あいつらがこの国を食い物にしやがった!!」

「政府が提督達をきちんと管理する制度を整える前に動かれましたからね……」

「それに熊井提督もだ!!軍人出身であるにも関わらず、奴らの増長を放置しやがった!!何が自分は軍人だから政治には口出ししないだ!!? そんな悠長な事を言う時ではなかった!!」

「中井さん……それは今さら言っても仕方ない事でしょう。本来軍人が政治に口出ししないのは正しい事です。彼は危険な九州地方をしっかりと抑えてくれている。それに海原提督と共に強力な個体を撃破している。軍人としては最高の働きと言っても良い。」

「しかし!?!」

「私とて提督達の増長は腹立たしいです。ですが国を守る為には提督達の要求を飲むしかなかったのです……しかし現在はようやく戦線が安定してきたところです。だからこそ鶴野提督と久藤提督の勢力を少しずつ削り、国が管理している大本営の力を増大させて、国が軍事力をきちんと管理するというあるべき姿を取り戻す時です。」

「それは分かっています!!」

「ならば焦らない事です。鶴野提督も久藤提督も一筋縄ではいかない相手です。事を急ぎ過ぎればこちらが潰されます。」

「そう……ですね……」

腹立たしい事だが鶴野提督と久藤提督は確固たる地盤を持っている。それをいきなり壊せばその混乱は深海棲艦に付け入る隙を与えてしまう。だからこそ地道に削っていかねばならない。もちろん自分達の地盤を削られれば二人も黙ってはいないはずだ。だからこそお互いに削りあって貰うのが一番だ。その為に我々は屈辱を感じながらも動いてきたのだ……

「ではそろそろ現実を見ましよう。今は今回の謝罪会見についてどう対応するかが重要です。」

「分かりました。問題はどのようにして我々大本営へのダメージを最小限にして、謝罪会見を中止するかですね……」

「いえ、必ずしも中止しなければならぬとは限りません。」  
「と言つと。」

「鶴野提督は敗戦の責任を提督に負わせてメディアの前で吊るし上げる事に反対しています。」

「それは・・・まあそうですね。」

鶴野提督自身が有力者達に今回の責任は葛原提督にあると情報を流しているくせに、メディアの前で提督を吊るし上げるなど言っている。

「鶴野提督は艦娘新教を裏で操っています。提督の敗北であれば今まで何度もあります。信者達を納得させる術も持ち合わせているでしょう。ですが提督の失態や怠慢による敗北ならばかなり印象が変わります。」

「我々としては提督の派閥争いによる連携不足を主張して、大本営による派閥の統一を主張したいところですね。」

「そうですね。鶴野提督は提督の権威の失墜を嫌がっているのです。今回の一件だけならば葛原提督に責任を負わせてしまえば良い。ですが敗北した提督をメディアで吊るし上げる前例を作ってしまうえば、今後どこかの鎮守府が深海棲艦に潰された場合、メディアによって吊るし上げられるのを危惧しているのだと思います。」

「ではどうするのですか？」

「今回の長門鎮守府壊滅に関しての話は極力削ってしまい、姫級を2体も討伐した事を強調しましょう。もちろん手柄は横須賀鎮守府と佐世保鎮守府のものとしてです。」

「横須賀はともかく佐世保は大丈夫ですか？」

「確かに止めを刺したのは北九州鎮守府です。しかし戦艦棲姫を追い詰めたのは佐世保鎮守府ですから、そこを強調するだけです。熊井提督も事実を否定するような事はしないでしよう。」

「それもそうですね。では鶴野提督はどのような形で説得しましょう。後は・・・」

「葛原提督が我々の命令を破って暴れる事を期待しておきましょう。」  
「精々頑張つて暴れて欲しいものですね。」

154話（7日目朝）

金剛達が無事に川内達と合流したとの連絡を受けたので、執務室では交代で仮眠をとった。昨日に引き続き今日も深夜まで夜戦をする事になるとはな・・・だがおかげで戦艦棲姫に止めを刺せし、希少なドロップ艦が手に入った。プリンツ・オイゲンに関しては希少過ぎて頭を抱える事になってしまったが・・・

「提督、起きて。そろそろ艦隊が帰投するわ。」

「・・・分かった。迎えに行ってくる。」

曙に起こされて帰投した艦隊を迎えに出撃港へと向かう。潮と漣は仮眠を取っていて、連絡要員として朧を連れて来た。だんだんと周囲が明るくなり始めており、もうすぐ日の出が見られる時間帯だ。一応仮眠は取れたが流石にまだ眠たい。だが部下に弱い所は見せられないので、意識を切り替えて背筋を伸ばす。出撃港で少し待っていると夜戦に出撃していた部隊と、途中で合流した叢雲達が帰って来た。他はほとんど無傷だが川内達は全員ボロボロの状態だ。よく全員生きて帰ってこれたな。

「総員敬礼ネ!!」

金剛の号令で整列した艦娘達が一斉に敬礼をするので、こちらでも敬礼で応える。

「まずは全員生きて鎮守府に帰って来れて良かった。金剛達が上手く敵を引き付けて撃破したのが大きいだろう。良くやってくれた。」

「ハルサメが頑張ってくれたおかげネ。後でちゃんと褒めてあげて下さいネ。」

「ああ、春雨が索敵で大活躍したのだったな。春雨のおかげで被害が最小限に済んだ。良くやってくれた。」

「は、はい。ありがとうございます。」

「それと叢雲達も急な出撃を頼んで悪かった。おかげで誰一人沈めずに済んだ。感謝する。」

「ふん、別にこれくらいどうって事ないわよ。」

「そして最後に川内。」

「ひゃい!!」

流石にあの川内でも思う所があるのか、かなり緊張しているようだ。

「まずは通信が途絶えるという危機的状況に陥りながらも、部隊を全員生存させて帰還させた事は素晴らしい成果だ。そしてその索敵能力と機を見て敵の頭を討ち取った功績は、今回の戦いで一番の物だ。」  
「えへへ♪」

「だが私の『危険を感じたら即撤退しろ』という命令に反して戦艦棲姫に挑み、全艦大破という危機的状況に陥ったのも事実だ。お前の判断で艦隊が全滅していた可能性も非常に高かった事を忘れるな。」

「はい・・・ごめんなさい・・・」

功績を褒められて照れていたのもつかの間で、全滅の可能性が高かった事を追及されると、素直に反省しているようだ。

「功績は非常に大きいが今回の件を不問には出来ない。それは私自ら命令無視をしても構わないと宣言するのと同じだ。そんな事をしたらこの鎮守府という組織は瓦解する。だから川内には罰として営倉で謹慎させる。入渠で傷を癒したら営倉に入れ。」

「はい・・・分かりました・・・」

川内も落ち込んではいないが、不満そうな感じではないな。他の艦娘達も今回の件に不満はなさそうか？

「では各自入渠を済ませて休んでくれ。それと旗艦は報告書の提出をするように。以上だ。」

「総員敬礼ネ!!」

再度敬礼で話を終えると、艦娘達はそれぞれ艤装の解除に向かうのだが・・・春雨が近づいて来て自分に抱き付いてきた!?

「あ!!春雨だけズルいっほい!!夕立も褒めて欲しいっほい!!」

「ああ!!お姉ちゃんがいつちばんだあ!!」

春雨に触発されて夕立と白露も抱き付いてきて大騒ぎになる。春雨が抱き付いてきたのはおそらく出撃前に話していた深海棲艦化対策なのだろうが・・・周囲の目を気に出来ないくらい余裕がなかったのだろうか？他の艦娘達も急に抱き付いた春雨達に驚いているよう



だ。そして夕立と白露は何故抱き付いてくるのだ？

「提督さん、提督さん♪夕立もちゃんと頑張ったっばい!!褒めて褒めて!!」

「待てい!!お姉ちゃんが先だあ!!」

「もう・・・皆やめなよ。提督を困らせちゃダメだよ。」

時雨が仲裁するも他の姉妹達は一切聞く耳を持たないようだ。早く春雨の頭を撫でて満足して貰って離れて欲しいが、ここで春雨だけ撫でるのは不自然過ぎるか？ほとんどの艦娘達はこちらに興味を失ったのか艦装を外しに行ったが、まだ残ってこちらを見ている者もいる。ここで春雨だけ特別扱いは疑念を生む可能性がある。

「はあ・・・まあ、金剛隊も神通隊もほとんど無傷だったな。護衛としての仕事をきっちりしてくれたようだな。良くやってくれた。」

そう言つて三人の頭を撫でてやると、嬉しそうな表情をする。春雨は事情があるから仕方ないとは思うが、白露と夕立は何故ここまで友好的なのだろうか？この二人も前任者からは酷い扱いを受けていたはずだ。提督や男という存在に嫌悪感や危機感を抱いてもおかしくないはずだ。にも関わらずまだ一週間も経っていないのにここまで甘えてくるようになったのだ。これも艦娘特有のものなのか？それともこの二人が特別なのか？この二人が友好的になったのは春雨との一件があつた後からだから、あの一件で信頼を得たという事だろうか？

「提督さんに撫でられるとぽかぽかして気持ち良いっばい♪」

・・・ぽかぽかする？その言葉は少し引掛かる。そう言えば悪雨が艦娘達は提督を凄く暖かく感じて、それが心地良いと言つていたな。逆に深海棲艦はその暖かさが憎いから提督を狙うのだったか？つまり白露達が抱き付いてきたり撫でられて喜んでいるのは、艦娘としての本能的なものなのだろうか？

だとすると艦娘という存在はずいぶんと人間に都合良く出来ている。理不尽な命令にも従うし人間に対して攻撃する事が出来ない。提督の指示がなければ艦装を装着出来ず、真の力を発揮する事が出来ない。そのうえ提督に好意を抱き易いだなんて都合が良すぎる。艦

娘という強力な兵器に何重もの安全装置を付けて、人間に牙を剥かないようにされているのではないか？

「提督さんどうかしたっばい？なんだか難しい顔をしてるっばい？」  
「いや、なんでも無い。」

色々と考えてはみたものの、艦娘の生い立ちを知るにはまだ情報が少なすぎるか・・・今は仮説の一つとして頭に入れておけば充分だな。  
「んん!!ね、ねえ提督。僕も姉さん達と同じくらいには頑張ったんだよ？」

「時雨も撫でて欲しいのか？」

「ふ、不公平は良くないと思うんだ。」  
「そうだな。」

遠慮気味に近づいて来た時雨の頭を撫でてやると、やはり凄く喜んでいいる。鎮守府を運営する者として、艦娘の手綱を握る為にも多少のスキンシップは有効だと覚えておこう。というかここまで好意を抱き易い艦娘に嫌われるだなんて、前任者はよっぽどだったのだな・・・  
しばらく白露型姉妹の好きにさせていると、満足したのか離れて艦装の解除に行った。ようやく白露型姉妹から解放されたのだが・・・  
「司令官!!少しお話よろしいでしょうか？」

そこには朝潮・不知火・陽炎が居た。朝潮はなんと言うか・・・一目で物凄く褒めて欲しいのが伝わってくる。なんだか尻尾をブンブン振る犬を連想させる。陽炎はなんだか苦笑いしていて、不知火はキリッとした表情で何を考えているのかわからない。

「どうした？」

「えつと、その、川内さんは旗艦として今回の独断専行の罰を受けるとの事でしたが、我々はどうなるのでしょうか？」

「ええ!!?そういう話するの!?!」

朝潮が少し遠慮がちに質問してきて、陽炎が隣で驚いている。てつきり朝潮は褒めて欲しいのかと思ったが違ったのか？

「今回は旗艦の川内が責任を取ればそれ以上は追及しない。随伴艦は旗艦の指示で行動するものだから、旗艦にはそれだけ重い責任があると私は考えている。だからお前達は早く入渠を済ませて休むと良

い。」

「はっ!!お心遣い感謝致します!!ですがその前にもう1つだけよろしいでしょうか?」

「ああ、なんだ?」

「我々元長門鎮守府の艦娘は司令官のご期待に応える活躍は出来たのでしょうか?拾って頂いたご恩に報いる事は出来たでしょうか?」

たしか帰還途中に聞いた報告では、この三人が戦艦棲姫に特攻を仕掛け、見事に撃破したとの事だったな。無茶な作戦にも思えるが戦艦棲姫にこちらの火力でダメージを与えるならば、雷撃を命中させるしかなかった。

「報告では随伴艦の軽巡と駆逐艦を沈めて、さらに戦艦棲姫へと近づいて雷撃を命中させたと聞いている。」

「はい!!陽炎の指示で出来る限り戦艦棲姫に近づいて雷撃を放つ作戦でした!!私と不知火は戦艦棲姫の砲撃に阻まれてしまいました。陽炎が止めを刺してくれました!!」

「ふむ、あの場の戦力でお前達は最善の動きをしてくれたと思う。良くやってくれた。」

「ありがとうございます!!作戦を全う出来て良かったです!!」

朝潮は良い笑顔で応えるとそのままさらに一歩近づいて来て、上目遣いでこちらを見ている。先程まで白露達が頭を撫でられていたのをじっと見ていたので、頭を撫でて欲しいのは流石に理解出来る。充分な活躍をしているのでそれくらいはしても構わないか・・・

「ありがとうございます!!」

軽く頭を撫でてやると、凄く嬉しそうにお礼を言ってきた。

「ねえ司令?私も頑張ったんだけどなあ?」

・・・今度は陽炎がニヤニヤしながら近づいてくる。もうここまできたら頭を撫でてやるしか選択肢がないな。

「ああ、良くやってくれた。」

「えへへ♪さーんきゅ♪」

さらに不知火まで無言で近づいてくる。

「不知火もか?」

「・・・不知火に落ち度でも？」

「いや、無い。良くやってくれた。」

「ん・・・」

不知火は頭を撫でてでも表情が変わらないが、これで満足なのだろうか？まあ、良いか。

「それと今回は勝つ為の手段が限られていたから仕方ないが、今後はもう少し命を大切にしろ。精強な艦隊を作る為にはお前達に練度を上げて貰う必要がある。無闇に沈むような戦い方をされると困る。」

「「はい!!」」

「ではそろそろ入渠して休むと良い。」

「あ、そうだ!!ねえ司令、ご褒美のケーキはちゃんと貰えるの!?!私すつごく楽しみにしてたんだけど!?!」

「・・・ケーキ?なんの話だ？」

陽炎が突然ケーキの話をしたが、そんな話をした覚えはない。とうか昨日北条が持って来た物を食べたばかりではないのか?そんな事を考えていると、陽炎が物凄くショックを受けていた。

「そんなあ・・・急な出撃でケーキを食べられなかった私達の為に、司令が確保してくれてたんじゃ無いの?」

「そんな話をした覚えはないが?」

「でもほら!?!私の艦装にメモを付けてくれたたでしょ!?!戦闘の最中に失くしちゃたけど、私はちゃんと覚えてるよ!!『冷蔵庫にケーキを確保している。帰ったら皆で食べて。』って書いてたもん!!朝潮と不知火も見たでしょ!?!」

「そうですね。確かに確認しました。」

「ええ、不知火も確認しています。」

ふむ・・・流石にこれで陽炎が嘘をついているとは思えない。となると艦装にメモを付けるなんて遠回しな事をする奴は小森だけだ。何故小森はそんな事をしたんだ?あいつは艦娘を怖がっているから、積極的に関わろうとは思っていないのだ・・・

「お前達の話聞く限り、おそらく小森が確保したのだと思う。臚、間宮に確認してくれるか?」

「あ、うん、ちよつと待って……ショートケーキを一箱取つて  
るみたい。」

「やったあ!!小森さんって昨日紹介された実地研修の人だよね?お礼  
を言いたいけどまだ寝てるかな?」

「たぶんもう起きる頃だとは思うが……直接お礼を言いに行つても気  
配を察して逃げられそうだな……」

「ええ……臆病な人って聞いたけど、そこまで怖がるの?」

「ああ、あいつは筋金入りの臆病だ。感謝の気持ち伝えたいのなら  
ば、手紙を書いて部屋の前に置いておく方が確実だろうな。どうして  
も直接お礼が言いたいのであれば、私が放送で呼び出すという手もあ  
るが?」

一応呼び出せば小森は来るし、自分であれば小森を見落とす事も無  
いだろう。

「うーん?せっかく私達に優しくしてくれたんだから、無理矢理呼  
んで怖がらせるのはちよつと嫌だなあ。うん、お手紙にするね♪」

「ああ、そうしてやれ。」

そう言うのと陽炎達はようやく艤装を外しに行つた。小森が何故こ  
んな事をしたのかは分からないが、陽炎達の様子を見るとかなり嬉し  
かったのだろう。これも小森が少しずつ艦娘達に歩み寄ろうとして  
いる結果なのだろうか?

## 155話（憲兵隊金子さん）

朝潮達を見送ってから臙を連れて執務室へと戻る。臙は道中で何か考え事をしていたのか、黙って難しい顔をしていた。執務室に戻るともう大淀が出てきていた。

「提督、おはようございます。」

「ああ、おはよう。悪いが一通り引き継ぎを済ませたら少し休ませて貰う。曙達も仮眠は取らせたが後は大淀に任せて休ませるつもりだ。」

「ええ、お任せ下さい。昨夜の出来事については曙さんから聞いております。そんな時にお酒を飲んでしまつて仕事が出来なくて申し訳ございません。」

「いや、私が許可をした事だから大淀が気にする事ではない。今日の予定だがまず大きいところは会見とオークションの開催だな。会見に関しては大本営がなにか言ってくるかもしれないが、どちらにせよオークションは開催する予定だ。会見が夕方からでオークションはその後だが、午前中に配送業者が商品を受け取りに来る。対応は陸奥と明石に任せてある。」

「はい、準備は滞りなく進めておきます。」

「それと長門鎮守府に物資を輸送したい。昨日輸送船で回収した分を持って行かせる。ああ、それと高速建造材が余っていたはずだ。しばらく建造する予定は無いからあれも追加してくれ。輸送船の護衛は木曾と暁型姉妹で良いだろう。木曾には現地で被害調査と霞の手伝いを任せたい。」

「被害調査もですか？それは現地に着任する織田提督の仕事なのではない？」

「それはそうなのだが、私も長門鎮守府を立て直すのにどれくらい時間がかかるか知りたい。元の状態を知っている者が居たほうが、仕事が早く終わるはずだ。」

「分かりました。では手配しておきます。」

とりあえずこんなものだろうか？後は大本営の奴らがどう動くか

だな。

コンコンコン

「叢雲よ。ちよつと良いかしら?」

「入れ。」

「今後の事で少し相談があるのだけど・・・」

「どうした? 確か今日は残党狩りをしてから横須賀に帰還する予定だったはずだが?」

「だが昨夜は戦艦棲姫との戦いもあったから、状況が変わっているか?」

「昨日の戦艦棲姫戦だけど、思っていたよりも深海棲艦の数が多かったのよ。ほとんどが佐世保が対処してくれたから問題にはなっていないけど、ちよつと気になるのよね・・・だから私達で調査をしたいから、もう少し滞在期間を伸ばさせて貰えないかしら?」

確かに戦艦棲姫はボロボロの状態で佐世保の艦隊から逃げ出していた。その時他の深海棲艦は佐世保の足止めをしていたとの事なので、戦艦棲姫が引き連れていた深海棲艦は少ないはずだ。にも関わらず佐世保の追撃を止める艦隊とこちらの陽動艦隊に差し向けた艦隊の2つを用意した。しかもその前に川内が残党狩りもしていた。そう考えると確かに多い。どこから集めてきたのかは気になるところだ。

「分かった。必要なだけ滞在して構わない。」

「助かるわ。じゃあ調査艦隊を編成して送り出したら私は休ませて貰うわ。」

「ああ、それにしてもまた姫級か?」

「その可能性はかなり低いけど、調査をしないとなんとも言えないわね。もし姫級が居たのなら私達が討伐するから心配いらないわ。それじゃもう行くわ。」

ふう・・・姫級との連戦であつても気負うところが無いか・・・あれこそが強者故の余裕というやつか。

「大淀も聞いたな。引き続き横須賀の艦隊が動き易いように手配してくれ。」

「了解しました。……提督、正門の憲兵隊詰所から本日の打ち合わせをしたいとの連絡がありました。どうされますか？」

「分かった。執務室に呼んでくれ。」

「お待たせしました。憲兵隊北九州基地所属の金子です。」

ふむ、この顔には見覚えがある。平川元市長の元から艦娘を回収する時に憲兵隊の代表をしていた男だ。平川を唆して逃亡させて撃ち殺したのでしつかりと覚えている。つまりは久藤提督側についている憲兵のはずだ。

「艦娘救出作戦の時はお世話になりました。今回は会見での護衛を務めて頂けるのでしたね。」

「ええ、提督の安全を守る事も我々憲兵隊の任務ですから。」

「では部隊の指揮は金子さんが担当されるという事で宜しいですか？」

「ええ、今回は車3台と私を含めた10人の隊員で護衛をする計画です。」

「こちらは私と補佐の艦娘を二人連れて行こうかと考えていますが大丈夫ですか？」

「ええ、もちろん構いません。それと我々の上官である黒川より指示を受けまして、会見で話す内容を書いております。この内容通りの事を話すようにとのご命令です。」

「……拝見しましょう。」

鶴野提督に圧力をかけられたにも関わらず、中止という選択はしなかったようだ。だが会見で話す内容はかなり丸くなっている。自分に責任を押し付けるような内容ではなく、当事者として事実の説明をする形になっている。まあ、事実とは言え大本営に都合の良い事実なので、原田提督が敵前逃亡した事は隠されている。ふつ、現在行方を搜索中だが鎮守府の惨状から発見は困難であると予測されるか。まるで鎮守府で殉職したかのような言い草だな。あと都合の悪い部分は軍事機密という事になる。便利な言葉だな。

「大本営はしぶんと方針を変えられたようですね？何か理由でも



？」

「さあ？我々現場の人間には上の連中が考えている事など分かりませんよ。」

ふむ、しらばっくれているだけか本当に知らないのかは判断出来ないな。

「ちなみに今回の件で久藤提督は何か言っていましたか？」

「久藤提督は傘下の方々今回の件は下手に手を出すと通達していました。会見もオークションも参加はして良いが問題を起こすなと。」

「ずいぶんと消極的なのですね？ちなみにですがもし仮に問題を起こすような方が居た場合は、どういう扱いになりますか？」

「久藤提督のご命令に逆らうのであれば、久藤提督が保護する必要性はありません。法に反するようであれば我々憲兵隊の出番ですね。」

ふむ・・・久藤提督はかなり今回の件を警戒しているのか？それならば潰すような動きをしてもおかしくはないのだが・・・

「分かりました。もしもの時は宜しくお願いします。」

「では会見は17時からですので16時頃に鎮守府を出発で宜しいですか？」

「ええ、それをお願いします。」

「分かりました。では私はこれで失礼します。」

金子さんが執務室を去ろうとするので、大淀に正門まで送るように指示を出す。金子さんは執務室から退室する直前に立ち止まる。

「これは独り言ですが、最近うるさい人が鎮守府の周囲で騒いでいて困っているのですよ。何か問題を起こせば捕まえられるのですが・・・」

鎮守府の近くで騒いでいる奴、普通の相手ならそれ自体を問題として捕まえる事も出来る。そしてこのタイミングで言うならば、それは会見の場で久藤提督の意思を無視する派閥の人間を見せしめとして捕まえたいとかだろうか？例えば副市長の源さんとか？

「・・・私も独り言ですが、最近ハエがブンブンとうるさくて困っています・・・どうにかしたいものです。」

「ふふっ、お互い大変ですねえ。」

そう言い残して金子さんは執務室から去って行った。あの様子ならばこちらの意図もちゃんと伝わっているだろう。後はどうやって問題を起こさせるかだが・・・正直放っておいても問題を起こしそうではある。まあ、最悪激昂させて掴みかかって来たら捕まえるとかでも良いか。

## 156話（加賀さん演習準備）

コンコンコン

「加賀です。少し宜しいでしょうか？」

「入れ。」

憲兵の金子さんが退出したすぐ後に、加賀が執務室を訪ねて来た。

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。それで要件は？」

「演習の許可を頂きたいです。昨日瑞鶴からも鍛え直して欲しいと言われましたので。」

ふむ、瑞鶴が面談の後で直接加賀に話をしたのか。瑞鶴が持ち直したのも加賀の言葉があったからだだし、かなり意識しているようだな。

「分かった。許可しよう。私が納得出来るまで瑞鶴には出撃させないつもりだ。遠慮なく鍛えてやれ。必要ならば手が空いている者に手伝わせても構わん。」

「ありがとうございます。それでは失礼します。」

ふむ、とりあえずはお手並み拝見だな。もし成果が出なければまた別の方法を考えれば良い。それにしても仮眠を取ったとはいえ寝不足で頭が少し痛い。大淀が戻って来たら後は任せよう。

ようやく提督がお休みになられたので、出来れば緊急の案件が無ければ良いのですが・・・まずは朝の連絡からですね。

『皆さんおはよう御座います。本日の予定ですが、16時頃から提督が会見とオークションの為に外出します。それにともない午前中に配送業者の方が荷物を受け取りに来られます。予定通り陸奥さんと明石さんで対応をお願いします。それと輸送船で長門鎮守府に資材運びますので、木曾さんと第六駆逐隊は食事が終わったらすぐに出撃準備をしてください。あと追加で高速建造材も載せるので積み込みもお願います。あと連絡事項として横須賀鎮守府の方々が調査の為にもうしばらく滞在する事になりました。横須賀の方からなに

か要望があれば、出来る限り協力をお願いします。以上です。』

さて、昨夜働けなかった分お仕事を頑張りました。まずは報告書の作成ですね。昨夜の戦闘報告書はまだ提出されていませんが、資材の増減やドロップ艦の報告など出来る物は早めに手をつけておきましょう。

「大淀さん、間宮です。朝食の準備が出来ましたので受け入れを開始します。」

「はい、宜しくお願いします。」

「提督のお食事はどうしたら良いでしょうか？」

「提督は先程休まれましたので・・・おそらく昼前には起床されると思いますので、なにか手軽に食べられる物があると良いかもしれません。」

「分かりました。準備しておきます。」

「それと申し訳無いのですが・・・私も執務であまり余裕が無さそうですので、何か片手間に食べられる物を用意して頂けないでしょうか？」

「分かりました。あまり無理をはいけませんよ？」

「お気遣いありがとうございます。」

とは言え秘書艦としての務めを果たさなくてはなりません。昨夜はお酒を飲んでしまったので、大事な時に役に立たなくなってしまう・・・提督から自分がお酒を飲んで構わないと許可したのだから気にするなと言われましたが・・・秘書艦の仕事は私の存在意義です。私が秘書艦として一番有能だという事を証明し続けなければなりません!!

提督から演習の許可も頂いたので、まずは朝食を頂きましょう。一度部屋に戻ってお腹を空かせた赤城さんと合流して食堂に向かうと、既に何人か並んでいます。少し出遅れましたね。

「今日のぐいはんも美味しそうですねく加賀さん♪」

「そうですね。気分が高揚します。」

「昨夜のぐい馳走も素晴らしかったですが、こういう和食の朝食も良い

ですよね♪」

「やはり和食は落ち着きますね。」

一番前では間宮さんとお手伝いの娘達が配膳をしてきています。食器も大中小とあって、人によって使い分けています。当然私と赤城さんは大ですね。間宮さんから朝食を受け取って座る場所を探していると、五航戦が食事をしているのを見つけました。今のうちに演習について話しておきましょう。

「ここ良いかしら?」

「か、加賀さん!」

「あら、赤城さん、加賀さんおはよう御座います。どうぞ座って下さい。」

「おはよう御座います。翔鶴さん。失礼しますね。」

「ええ、おはよう御座います。」

「ほら、瑞鶴もちゃんと挨拶しなさい。」

「お、おはよう御座います・・・」

瑞鶴は何を緊張しているのかしら?この娘は私とは性格が違い過ぎて、何を考えているのかよく分からないのよね・・・でも悪い娘じゃないわ。

「瑞鶴、提督から演習の許可を頂きました。今日から徹底的に叩き直すから覚悟しなさい。」

「っ!お、お願いします!!」

やはりやる気はあるみたいね。提督から私が瑞鶴の助命嘆願をした事が伝わってしまったようで少し気恥ずかしいのだけど、五航戦が立ち直るきっかけになってくれたのなら良かったわ。

「最初に言っておきますが・・・私は人に物を教えるのが苦手です。」

「ええ!?!じゃあどうするってのよ!?!」

「ですから瑞鶴には私と一対一で何度も戦って、戦闘経験を積みませます。何度も叩きのめしてあげるから、後は自分で課題を見つけて学習しなさい。」

「っ!?!上等よ!!簡単にはやられないわ!!絶対に返り討ちにしてやるんだから!!」

これくらいのが概があるなら大丈夫そうね。負ける気は全くありませんが。

「ふん、鎧袖一触よ。赤城さんと翔鶴には私達のサポートをして貰いたいんだけど良いかしら？」

「はい、良いですよ。」

「もちろんです。瑞鶴を宜しくお願いします。」

「話はまとまったわね。じゃあ食事を済ませたらすぐに始めましょう。」

長門鎮守府への輸送任務か・・・これのせいで昨日の夜戦に出られなかったのか・・・誰かがやらなきゃならねえ仕事だから仕方ねえけどさ・・・

「木曾さん、第六駆逐隊出撃準備完了したわ!!」

「おう、高速建造材も積んだか？」

「もちろんよ!! 暁は一人前のレディだから、ちゃんとお仕事出来るんだから!!」

「うし、じゃあ連絡入れてさっさと行くか。・・・こちら木曾だ。出撃準備が整った。」

「了解しました。それでは輸送任務に出発して下さい。それと現地で被害調査の手伝いもお願いします。長門鎮守府の霞さんから他になにか要望がある場合は、出来る限り協力してやって欲しいとの事です。」

協力ねえ・・・長門鎮守府がどれだけ原型を留めているか分からねえけど、一応だいたい施設の場所くらいは分かるか？流石に戦闘や遠征の記録なんかは燃えてるだろうなあ・・・

「分かった。出来る範囲でやってみるよ。」

「宜しくお願いします。では出撃して下さい。」

「おう、行って来る。」

それじゃあ輸送任務に行くか。はあ・・・途中ではぐれとか居ねえかなあ？居たら少しは憂さ晴らしが出来るのによ・・・  
「許可が出たから出撃するぞ。響は輸送船の運転頼んだぞ。」

「ダー、任せてよ。」

「雷と電も準備出来てるな？」

「もちろんよ!!いつでも行けるわ!!」

「電も大丈夫なのです!!」

「うし、じゃあ出撃だ。」

資材を満載した輸送船を囲うように陣形を組んで航行する。とは言ってもまだ基地レーダーの範囲内だから、あまり警戒する必要が無  
いけどな。それにしても俺達が守れなかった鎮守府と街を確認して  
来いか・・・

「あの・・・木曾さん・・・」

「ん?どうした電?」

「もしかしてなのですが・・・あんまり元気が無いのです?」

「・・・んな事ねえよ。」

「なになに?困ってるなら私を頼っても良いのよ♪」

「大丈夫だからちゃんと警戒しててくれ。」

「分かったわ!!」

チツ、駆逐艦に気遣われるようじゃダメだな。気合入れなおさねえ  
とな。

## 157話（瑞鶴のスパルタ演習）

「大淀さん、配送業者への荷物の受け渡しが終わったわよ。」

「ありがとうございます。それでは陸奥さんは夕方までは自由にされて下さい。夕方からは提督と同行して貰いますので、宜しく願います。」

「ええ、分かったわ。」

「こちらは特に問題は無さそうですね。まあ、準備段階ではともかく会見でもオークションでも問題が頻発しそうですが・・・提督もそれを狙っているような感じなので、問題が起きない訳がないですよね・・・無事に戻って来て下されば良いのですが・・・」

「あー、こちら木曾だ。長門鎮守府に到着した。織田提督がお礼を言いたいと言っているが、どうする?」

「申し訳無いのですが、提督はまだお休みされていますので・・・提督が起床されたらこちらから連絡するように進言してみます。」

「了解だ。ならばらくは手伝いでもしながら待機してるぜ。」  
「宜しくお願いします。」

長門鎮守府への輸送艦隊も無事に到着しましたか。正直なところ昨日の残党が居てもおかしくは無かったのですが、昨夜でまとめ撃破出来ていたのでしょうか?この件は横須賀の艦隊が調査して下さっているのです、その結果待ちですね。あとは瑞鶴さんの演習は順調でしょうか?少し気になりますね。でも加賀さんと二人きりではなくて、赤城さんと翔鶴さんがついているので大丈夫ですよ?

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「もう限界ですか?そんな事ではいつまで経っても戦場には出させて貰えませんよ。」

「クツ!!まだまだやれるわよ!!次こそ私が勝つんだから!!」

「その意気です。ですが私も負けません。」

うーん・・・昨日から瑞鶴がずっと思い詰めているみたいで心配だわ・・・昨日私が瑞鶴を庇った事に関しては気にしないで言って言った



けれど、やっぱりかなり気にしてしまっているわね・・・提督と加賀さんのおかげで前向きになったのは良かったけれど、無理をし過ぎないか心配だわ・・・

「翔鶴さん、瑞鶴さんが心配ですか？」

「赤城さん・・・そう・・・ですね・・・今の提督になつてから私達は少しずつ変わっていけると思っていたのですが・・・私が瑞鶴を庇つて瑞鶴のトラウマを刺激してしまったせいでこんな事に・・・」

「それは違いますよ。翔鶴さんが庇わなければ瑞鶴さんが沈んでいたかもしれません。そんな心配が出来るのも瑞鶴さんが生きているからです。だから翔鶴さんが悪い事なんて無いんですよ。」

「そう・・・でしょうか？」

「ええ、それに落ち込んでしまった時は空元気でも良いから体を動かした方が良いですよ？嫌な事が頭に入る余裕が無いくらい頑張つて、美味しいご飯をいっぱい食べて、ヘトヘトの体でぐっすり眠るんですよ。そうするととってもスッキリするんですよ？」

確かに瑞鶴はかなりキツそうだけれど、その表情はそんなに悪くないわ。鎮守府に戻つて来た時は本当に酷い状態だったものね・・・

「そんな考え方もあるのですね。加賀さんがそこまで考えて下さっているとは思いませんでした・・・」

「ふふっ♪加賀さんは不器用ですから。あれでもかなり瑞鶴さんの事を心配していたのですよ？」

「加賀さんが瑞鶴の助命嘆願を下さつたとお聞きしました。」

「ええ、ただ提督は最初から瑞鶴さんを解体するつもりは無かつたようですから、加賀さんが空回りしてしまっただけなのですが・・・」  
「そんな事ありません!!瑞鶴が言っていました!!加賀さんから立ち上がる勇気を貰つたつて!!それが無ければ心が折れていたつて!!」

加賀さんは瑞鶴の恩人です。その加賀さんの行動が無駄だったなんてはありますがありません!!

「ふふっ、そうですね。だったら加賀さんも頑張ったかいがありませんしたね♪では次は私の番ですね。翔鶴さんも体を動かしませんか？私がお相手しますよ?」

赤城さんはそう言うてにこやかに手を差し伸べて下さる。どうやら私も赤城さんにご心配をお掛けしてしまったようです。

「分かりました。ご指導宜しくお願いします。」

「ええ、では始めましょうか。」

うう・・・また負けたあ!!今度こそ勝てると思ったのに!!

「まだまだ甘いですね。まだやれるかしら?」

「当然よ!!」

「とは言え集中力が落ちているのも事実ですね。少し休憩を挟んで再開しましょう。」

「私はまだやれるわ!!」

「ただ動けるだけでは意味がありません。休憩しながら何故負けたのかを考えなさい。一旦頭の中を整理する事も必要よ。」

「・・・分かったわ。」

確かにがむしやらにやったところで加賀さんの守りを抜けるとは思えないわね・・・なんとか対策を練らないと・・・

「あつ、休憩するの?お疲れ様々」

「飛龍さん!?!蒼龍さん!?!なんでここに居るの!?!横須賀の人達は調査に行っただんじやないの!?!」

「いやほら・・・私達空母は鈍足だし燃費悪いから、こういう調査とかには向いてないんだよ。だからお留守番だね。」

「だからちよつと手持ち無沙汰なのよね。だから演習の様子を見てたの。」

「そうだったんですね。その・・・もし良かったらアドバイスを頂けませんか?見ていて気になった事とかあれば・・・」

横須賀で歴戦の空母として活躍してる二人なら、なにか私の弱点がわかるかも!?!

「そうですねえ?瑞鶴は攻撃に意識を向け過ぎかな?」

「そうですね、加賀さんの防衛網を破る事に躍起になって隙だらけだったよ。」

「うう・・・」

「それに動きが素直過ぎます。強引に中央突破しようとしているのが丸わかりです。」

「それが分かっているから加賀さんも中央に戦力を集中する事が出来たよ?」

「うう・・・ありがとうございます。気をつけます。」

確かに今まで深海棲艦相手の時は圧倒的有利な戦場が多かったから、とにかくゴリ押しするクセが付いちやったのかな?

「その加賀さんも迎撃に集中するクセがあるよね?空母戦は先手必勝!!大胆さも必要だよ。」

「私達は中破した段階で戦力使えないし、攻撃も大事だよね。」

「助言ありがとうございます。気をつけます。」

私が勝てない加賀さんでも二人にとっては弱点があるんだ・・・私をもっと頑張らないと・・・

「それと二人共棒立ちし過ぎ!!」

「あれじゃあただの的になっちゃうよねえ。」

「うう・・・」

今まではいざと言うときも他の娘が守ってくれてたけど、今後は私達にも回避行動が求められるものね・・・

「そうだ!!良かったら私と蒼龍が演習するのを見てみない?動きの参考になると思うよ!!」

「ええ!?!そんなの良いですか!?!」

「私達も退屈してたし、ちよつと体動かしたかったのよねえ。」

「それに昨日のご馳走のお礼に何かしたかったからちようど良いよね!!」

「確かに昨日のご馳走は凄かったなあ。」

「でも流石に許可を取らないとマズインじゃ・・・」

うちの提督怒るとすつごく怖いみたいだし・・・

「流石に無許可ではやらないって。でも頼めば許可くらいすぐ出るんじゃない?」

「そつちの提督さん私達にかなり配慮してくれてるでしょ?腕が鈍ると嫌だから演習したいって言えば、ちゃんと許可出ると思わない?」

それは・・・そうかも？横須賀の人から要望があれば出来る限り協力するように言われたし。

「ちよつと大淀さんに確認してみるね。」

その後大淀さんに確認したらあつさり許可が出て、しかも横須賀の演習が見られるなんて滅多に無い機会だからと言って、大勢の娘達が観戦に来る一大イベントになった。そんな衆人環視の中でも飛龍さんと蒼龍さんは気負った様子も無く、私達には想像も出来ないようなハイレベルの戦いを見せてくれた。正直に言っとうちの正規空母4人で挑んでも返り討ちに合う気がする・・・

でもせっかくこうやって見せてくれたんだから、動きを参考にしなきゃ!!すぐには無理でも一歩ずつ近づいてやるんだから!!

## 158話（葛原提督起床）

目が覚めて時間を確認したら昼前くらいだった。睡眠を取ったからか寝不足による頭痛も治まっている。これならば体調面では問題無いだろう。あと昨日の夜中に第七駆逐隊が作った謎のコーヒーを食べて以降、何も食べていなかったので空腹だ。昼食前の微妙な時間ではあるが、なにか食べておきたいところだな。だがその前に自分が休んでいる間に何があったか把握しておきたいので執務室に行くか。身だしなみを整えて執務室に行くと、大淀が書類仕事をしていた。

「提督、おはようございます。」

「ああ、報告を聞こう。」

「オークション用の商品の配送は無事に完了しております。あとは現地で確認をすれば問題ありません。長門鎮守府への輸送船も何事もなく無事に到着しました。木曾さんには現地で協力するように伝えております。演習ですが一航戦と五航戦の四人で演習をしていましたが、途中から横須賀鎮守府の二航戦のお二人も参加したいとの要請がありました。」

「ほう？横須賀の二航戦がか？」

「はい、空母のお二人は速力の関係で調査任務に同行されませんでしたので、腕が鈍るのが嫌だから演習させて欲しいとの要請がありました。提督から横須賀の艦娘からの要望には出来るだけ協力するように命令されていましたので、私の方で許可を出しました。」

「ああ、構わない。それで演習の様子は？」

「直接見た訳ではありませんが、報告では二航戦のお二人が戦う姿を多くの者が観戦したとの事です。その後二航戦のお二人は加賀さん達の演習を指導して下さったそうですよ。」

「指導までしてくれたのか。ありがたい事だ。」

瑞鶴の特訓に関しては加賀に任せると言ったが、まさか横須賀の二航戦に手助けを求めるのは予想外だった。もちろんハイレベルな横須賀の艦娘に指導して貰えた事は、瑞鶴だけではなく他の者にも凄く良い経験となっただろう。

「それと・・・各地の鎮守府から何件も連絡があったのですが・・・緊急の案件では無さそうでしたので、名前と要件をリストにまとめております。」

「分かった。見せてくれ。」

「はい、こちらをどうぞ。」

緊急ではない案件と言うことで、だいたいの予想はついているのだが・・・やはりプリンツ・オイゲンについてか・・・ほとんどの案件がプリンツ・オイゲンの移譲についてと書かれている。呉と舞鶴の傘下の奴らは理解出来るが、横須賀の傘下からも何人かいるのが意外ではあるな。あと佐世保の傘下の提督達からは、演習の申込みが来ている。おそらく熊井提督から功績を掠め取った件で反感を買い、演習で叩きのめしてやろうという魂胆だろう。

「ずいぶんと連絡があったのだな。」

「はい・・・侮辱的な発言をされる方も多くすぐに提督を出せと騒いでいましたが、提督の体調面と案件の重要性を考慮して、こちらで保留させて頂きました。」

「ああ、助かる。とりあえずまともに相手をする必要も無いだろうか  
ら放置して構わない。報告は以上か？」

「はい、他は特に問題はありません。」

「では少し食堂に行ってくる。なにかあれば連絡してくれ。」

「分かりました。」

コンコンコン

「叢雲よ。いいかしら？」

「入れ。」

食事をしようかと考えていたら、執務室に叢雲が入って来た。その後ろからは何故か項垂れている二航戦の二人も居る。

「どうした？」

「この二人が私に無断で演習をしたのよ・・・勝手に演習してしまつて申し訳無いわ。」

「申し訳ありませんでした。」

疲れた様子で頭を下げる叢雲と、その後ろで二航戦の二人も揃って

頭を下げている。

「ん？先程大淀から報告は受けたが、こちらの大淀に確認を取って許可を得ているのだろうか？なぜ謝る必要がある？」

「そっちの好意に甘えて作戦に必要な無い演習なんてしたからよ。いきなり他所の鎮守府の資材を使って演習なんて普通やらないわよ。」

「そうなのか？」

「当然よ。合同演習を目的としてるなら、補給は主催側が用意するのが通例だけど、今回は深海棲艦の討伐に来てるのよ？中継基地として使わせて貰っているのに、作戦に関係無い事で資材を使うのは問題よ。」

まあ、確かに作戦に必要なだったかと言われれば違うのだろうが……大淀が許可を出している以上こちらから問題にするつもりは無い。むしろうちの空母達の指導までしてくれたと聞いている。こちらに大きなメリットがある話だったのだから、むしろ二航戦の二人には感謝しているくらいだ。」

こちらが問題にしないと分かって、叢雲も少し落ち着いたようだな。叢雲の後ろで二航戦の二人もホッとしているようだ。

「そう……そう言って貰えたら助かるわ。ついでに調査に出した部隊からの報告だけど、今のところはぐれが数体居ただけで、大規模な群れは発見されてないわ。このままさらに奥を調査して問題なければ帰還するわ。だからもし問題なければ今晚休ませて貰って、明日の朝に横須賀へ帰還するわ。」

「ああ、了解した。」

とりあえずはまだ調査は続けるようなので、その結果次第だな。問題が無いならばそれに越した事は無い。

「提督、お話し中すみません。今度は函館鎮守府から通信が入りました。」

「はあ……またプリンツ・オイゲンの件だろうか。」

「ちよつと待って。今函館って言ったわよね？函館は横須賀鎮守府の傘下よ。それにまたプリンツ・オイゲンさんの件ってどういう事？」

他所の鎮守府の通信にとやかく言うのはルール違反なのだが、叢雲

は聞き捨てならない単語に食いついてしまったようだな。

「んん・・・まあ良いか。昨日保護したプリンツ・オイゲンを寄越せと、各地の鎮守府から連絡が来ている。おそらく函館も同じ要件じゃないか?」

「そう・・・もしかして他にも横須賀傘下の鎮守府から連絡があったのかしら?」

「ああ、何件かあるな。」

「そう・・・ルール違反なのは承知で言うのだけれど、もし函館も同じ内容なら私に代わってくれないかしら?あと連絡があった他の鎮守府も教えてくれる?身内の恥は早急に対処したいの。」

叢雲は無表情だが物凄く怒っているのを感じる。叢雲の後ろで二航戦の二人が怯えているのが良い証拠だ。

「私は構わないが海原提督に確認しなくて良いのか?」

「問題無いわ。というかこういう問題は私達だけで解決して、海原提督の耳には入れないようにしてるの。」

そう言えば横須賀鎮守府では海原提督を人間関係の問題から遠ざけていたのだったな。個人的に思うところはあがあるが、それが横須賀のやり方であれば干渉する必要は無いか。それに横須賀鎮守府の傘下を黙らせてくれるだけでも助かるしな。

「分かった。とりあえず話してみよう。」

「感謝するわ。」



## 159話（叢雲ママ激おこ）

大淀と通信を代わって函館鎮守府の提督の対応をするが、自分の横で叢雲が圧を放っている。まあ、責められるのはこちらでは無いのだから関係ないか。

「代わりました。北九州鎮守府の葛原です。」

「はじめまして、函館鎮守府の水上です。」

「それで？今日はどのような要件で？」

「今日はプリンツ・オイゲンさんの件で連絡した。」

「はあ・・・やはりそうですか・・・」

自分のその一言に叢雲の圧が一段と高くなる。

「その反応、やはり心当たりはあるのだろうか？」

「心当たりもなにも朝からその件で各地の鎮守府から連絡がありました。予想しないほうが無理です。」

「それだけ君が希少な海外艦を所属させる事に不満を持つ者が多いという事だ。だから我々横須賀鎮守府の傘下の者が保護しようとしている。まさかとは思うが、すでに誰かに売ったりしていないだろうか？」

「引き渡しをするつもりはありませんが・・・なぜそんな事を言われなくてはならないのですか？」

「北九州鎮守府は久藤提督の傘下だろうか？そして着任したのは士官学校で悪名を残した君だ。疑わない理由が無い。」

北九州鎮守府が久藤提督の傘下だったのは、前任者の大森提督が久藤派だったからだ。それに自分の士官学校時代の悪名について知っているならば、久藤提督の下に付くとは思わないはずなのだが・・・こういう正義を振りかざす奴らは、結論に合わせて前提を変えたりするからたちが悪い。さつさと叢雲に対処して貰おう。

「はあ・・・そうですか。ですが私はプリンツ・オイゲンを誰かに引き渡すつもりはありません。私からの話は以上です。」

「待て!!これは国際問題にも発展しかねない話なんだぞ!!君個人の話では無い!!」

これ以上話す事は無いので隣で待機している叢雲へと通信機を渡す。どうやって解決するつもりだろうか？

呆れた様子の葛原提督から通信機を受け取ったため息を吐く。どうやら悪い予想通りにうちの傘下の提督達が暴走しているようね…

「おい!?おい!!聞いているのか!?まだ話は終わっていない!!」

「黙りなさい!!」

「……え?」

「横須賀鎮守府所属の叢雲よ。葛原提督から通信を代わらせて貰ったわ。」

「む、叢雲さん!?お、お疲れ様です!!函館鎮守府の水上です!!」

さつきまでかなり怒っていた様子だけど、私の名前を聞いた途端に大人しくなったわね。これならちゃんと話が出来そうね。

「ええ……それで?どういうつもりかしら?」

「はっ!!北九州鎮守府に海外艦のプリンツ・オイゲンさんが着任されたと聞き、悪名高い場所から保護するべく交渉をしていたところなんです!!ただでさえ久藤提督の傘下の奴らのやり方には腸が煮えくり返る思いではありますが、プリンツ・オイゲンさんの問題は国際問題に発展する危険性があります!!一刻も早く我々が保護すべきだと考えます!!もちろん横須賀鎮守府が保護して下さいるのであれば、それが一番だと他の鎮守府の提督達も考えています!!」

ふーん?あくまでも保護だと言うのね。全員が同じ考えだとは思わないけれど、少なくとも水上提督の性格なら本気で保護しようと考えているのでしょうね。

「必要無いわ。あんた達の出る幕はないから、自分の艦隊の事に集中しなさい。」

「……それは横須賀鎮守府が保護して下さいると言う事でしょうか?」

「そもそも保護する必要が無いと言っているの。」

「ですが北九州鎮守府に着任した葛原という男は士官学校で成績は良かったものの、素行不良で何度も営倉行きになったと聞きます!!そんな奴に海外艦を任せたら何をされるか分かりません!!ドイツの艦娘

を虐待すれば我が国が西洋と戦争になる危険もあるのですよ!!」

はあ・・・言い分は分からなくは無いかけれど、そもそも通信の途絶えた西洋と外交問題になると言っているのも変な話だ。もちろんいつか通信や国交が復活した時に問題になるかもしれないから、虐待なんてするべきでは無いのは当たり前だけど・・・

「はあ・・・葛原提督はそんな人間では無いわ。葛原提督は艦娘を軍人としてきちんと扱っている。そこは直接鎮守府の様子を見た私が保証してあげる。」

「で、ですが・・・」

「なに？私の目が信用出来ないって言うつもり？」

「いえ、そういう訳では・・・ですが佐世保のように使い潰されでもしたら・・・」

「それも無いから安心なさい。」

「ならば未熟な指揮で沈めてしまう可能性も・・・」

「ここまで言ってもまだ喰い下がるか・・・ほんとしつこいわね・・・そろそろ本気で怒るべきかしら？」

「少なくともあんたよりはまともな指揮をしていたと思うわ。」

「そ、そんな!?私だって一つの鎮守府を守ってきた提督です!!ぽつと出の新人に負けるわけじゃないです!!私が着任してからの2年間、誰も轟沈させていないのがその証拠です!!」

「それはあんたが消極的な作戦ばかりだからよ。慎重なのは良いけれどあんたのは度が過ぎるのよ。だから結局は横須賀や他の鎮守府に頼る事になるの。協力する事と一方的に負担をかける事は違うの。一人前の提督を名乗りたければいい加減理解なさい。」

「うう・・・ですが万が一にも艦娘達を沈ませるわけにはいきません!!」  
本当にこいつはあ!!

「そこが間違っているのよ!!私達艦娘は提督と共に戦う仲間であって友達じゃないの!!私達は人々を護って戦う為に生まれた存在よ!!決して甘やかされる為に生まれたんじゃない!!天才だって持て囃されてるうちの司令官だって何度も艦娘を沈めてしまったわ!!私は何度も後悔して涙を流す司令官を見てきたわ!!その悲しみを乗り越えて

今の司令官がいるの!!そんな司令官だから私達は全てをかけて誇り高く戦えるのよ!!」

「それは………」

「ハア……ハア……話が逸れたわね……とにかくプリンツ・オイゲンさんの件でこれ以上関わるのは止めなさい。あと他の連中にもこれ以上の手出しは私が絶対に許さないと伝えなさい。良いわね?」  
「……分かりました。叢雲さんがそこまで言われるのであれば従いましょう……それではこれで失礼致します。」

「ええ。」

ようやく叢雲が通信を終えたが、まさかずっと冷静だった叢雲がここまで感情を爆発させるとはな……

「……みつともないとところを見せてしまったわね。」

「いや、そんな事は無い。叢雲もかなり苦労しているのだな。」

「そうね……今のがうちの派閥の問題……艦娘を大切に過ぎる軍人として正常な判断が出来ない奴が多いのよ……」

「なるほど……」

「皆が口では海原提督のような立派な提督になりたいって言うのよ。でもあいつらは司令官の綺麗な所しか見てないのよ……司令官が味わった苦悩も挫折も絶望も全部見てない……今の司令官があるのは必死になって失敗から学び、何度も何度も試行錯誤した結果よ。それをあいつらは何も見ていない……司令官が残した記録も綺麗などころしか見ない……苦い敗戦の記録こそ見て学んで欲しいのに……」

横須賀の連中は海原提督を神聖視しているのだろう。だからこそ汚点には目を瞑り、輝かしい功績を見て褒め称える。自分達が海原提督のように出来なくても、海原提督は天才だからと諦める。そんな奴らが高みに登れる訳が無い。

「そうか……」

「はあ……うちの連中が迷惑かけて悪かったわね。これ以上またなにか言ってくるなら、また教えてくれるかしら?」

「分かった。頼らせて貰おう。」

「じゃあ私達はもう行くわ。」

そう言つて叢雲は二航戦の二人を連れて執務室から去ろうとする。そんな叢雲を二航戦の二人はかなり心配そうに見ているのが印象的だ。

「……叢雲。」

「……なによ？」

つい呼び止めてしまった……こっちを見ずに応える叢雲の声は少し震えていたような気がする。

「私の指揮は士官学校で数多くの戦闘記録を読んで学んだ物だ。特に横須賀の記録は勝利も敗北も全て参考にさせて貰った。今の私があるのは過去の記録があったからと言つても過言ではない。」

「……そう。」

「それとそういう奴を他にも何人が知っている。海原提督の残したものは無駄では無い。」

「……そう。」

叢雲はそのまま執務室から去つて行つた。二航戦の二人はこちらに改めて一礼をしてから叢雲を追つて、執務室から去つた。

## 160話（久藤提督会見前対話）

函館との通信のあと食堂で昼食を手早く済ませて執務室に戻ると、次から次へと通信が入ってくる。もちろんそのほとんどがプリンツ・オイゲンに関する事だ。昼前の一件以降横須賀の傘下から通信が入る事は無くなったものの、本当に面倒な奴らだ。

舞鶴鎮守府の傘下の奴らは、希少な海外艦は4大鎮守府にこそ相応しく、貴様が所有するには格が足りない。さつさと鶴野提督に差し出せと言ってくる。こいつらは自分自身で所有するつもりは無いようだが、手に入れたプリンツ・オイゲンを鶴野提督に差し出して何かしら対価を要求したいのだろう。まともに相手をするのがバカらしくなるので、適当に断って通信を切っている。

呉鎮守府の傘下の奴らは金や資材で売ってくれと交渉を持ちかけてくる。元々北九州鎮守府は艦娘を売る事で資金や資材を手に入れていたのだから、そういう取引が当たり前だと考えているように感じた。ただ意外だったのは断っても声を荒げる奴が少なかった事だろう。舞鶴鎮守府傘下の奴らのように、もっと高圧的な態度で怒鳴るものだと考えていたので、ちよつと気味が悪い……

佐世保鎮守府の傘下の奴らは直接寄せとか売ってくれとは言わないものの、お前に希少な海外艦を所持する資格があるのか試してやる。うちの艦隊と演習をしろと言う奴が多かった。海外艦を所持する資格うんぬんは知った事では無いが、演習に関しては少し興味がある。北九州鎮守府の当面の目的は既存の艦娘達を鍛える事なので、演習の申込みが多いのは悪く無い。とりあえず忙しいので全て保留にしてあるので、落ち着いたら情報を整理して順番に演習しようかと考えている。

「お疲れ様です。コーヒーでも淹れましょうか？」

「ああ、頼む。」

通信の対応は本当にストレスが溜まる……新人提督が相手だと思つてこちらを見下してくる奴のなんと多い事か……

「ミルクと砂糖はどうされますか？」

「入れてくれ。」

「分かりました。」

大淀が手早くコーヒーを入れてくれて、そのコーヒーを飲んで一息つく。頭をスツキリさせたい時はブラックが良いが、落ち着きたい時には甘めのコーヒーが良いものだ。

「ふう．．．美味しいな。」

「そう言っただけだと嬉しいです。」

正直コーヒーの良し悪しなどよく分からないので、美味いか不味いかくらの基準しかない。だから大淀の技術がどれくらいのものかは理解出来ない。まあ、どちらにせよ大淀が褒められて悪い気はしていないようなので、そこまで気にする事でも無いか。

「ふう．．．まだ時間に余裕はあるが、そろそろ会見に向かう準備をさせておくか。陸奥と春雨に外出の準備をさせてくれるか？」

「それは構いませんが．．．陸奥さんは予定通りなので良いのですが、春雨さんも連れて行くのですか？」

「ああ、陸奥にはあちらでもオークションの準備をしてもらう必要がある。だから緊急時の連絡要員に一人欲しいからな。」

それに春雨ならばいざという時の護衛も出来る。護衛として憲兵達も居るが、信用出来るかと言われれば無理だ。利害が一致していれば協力してくれるだろうが、状況次第で簡単に裏切ると考えておくべきだ。

「．．．そうですか、分かりました。．．．．．陸奥さんも春雨さんも了解しましたとの事です。」

「分かった。」

大淀の反応が少し遅れたか？もしかして春雨を選んだ理由を誤魔化した事に疑問を持たれたか？確かに連絡要員ならば春雨でなくても問題は無いからな。

「．．．．．提督、今度は呉鎮守府の久藤提督から通信が入りました。」  
「．．．分かった、代わろう。」

ようやく久藤提督が出てきたか．．．むしろなぜ今まで動かなかったのか疑問なくらいだ。希少な海外艦は久藤提督も当然欲しがると

思っていたが・・・

「代わりました。北九州鎮守府の葛原です。」

「おう、久藤だ。話の内容は想像出来るよな？」

「はあ・・・プリンツ・オイゲンの件ですか？」

「そうだ。もし売るつもりがあるなら俺に売れ。一番高く買い取つてやる。」

「売るつもりはありません。話は以上ですか？」

「いや、一応理由を聞いておきたい。ただでさえ周りから目をつけられてるお前が、希少な海外艦なんて所持したら余計に目をつけられるだけだろ？ さっさと俺に売った方が楽だと思うが？」

ふむ、久藤提督はかなり冷静だな。もう少し怒るなり圧をかけてくるなりすると思っていたが・・・

「北九州鎮守府は前任者が艦娘の売買をしていた件が表沙汰になつているのですよ？ 例え正規の取引で移籍させたとしても、難癖を付けられたり捜査の口実にされたりするのは目に見えています。それに艦娘達の士気にもかなりの悪影響を与えます。そんなデメリットを受け入れる理由がありません。」

「なるほどな。なら他の鎮守府にも絶対に売らねえって事で良いんだな？」

「そうですね。他所に渡すつもりはありません。」

「なら良い。もし裏切つて舞鶴にでも売ったら全力で潰しにかかるが、一言はねえな？」

「ええ、問題無いです。」

「ならこの件は終わりだ。」

ずいぶんあっさりと手を引くものだ・・・最初から自分がプリンツ・オイゲンを売らない事くらいは予測していたかもしれないが・・・舞鶴鎮守府が海外艦を手に入れるのを嫌がるのは当然だが、もつと強引に交渉してくるかと思つていただけに拍子抜けだ。

「この件はと言うと他にも何かご用件が？」

「ああ、会見の件だ。」

「会見の件ですか？ 私ももうそろそろ準備をしたいと考えていますの



で、手短にお願い出来ますか？」

「ああ、今回の件を見てるとどうにもきな臭くてな。当事者から少し話が聞きたいだけだ。なにか気になる話は無かったか？」

きな臭いと言われてもそんなものは最初からだ。今回の敗戦の責任を自分に押し付ける為に始まった話だからな。とはいえ久藤提督にわざわざ情報を渡してやる義理も無いのだが、ここで機嫌を損ねて会見中に邪魔をされても面倒だな。

「そうですね・・・一番意外だったのは鶴野提督が今回の件に乗り気では無いみたいですね。」

「ほう？あのじじいが仕組んだ事じゃねえと？」

「そこまでは分かりません。鶴野提督が仕組んでおきながら、想定通りに進まなかったから潰しにきた可能性もあります。ですが今回の件を潰そうとして大本営に圧力をかけたのは間違いなさそうですね？」

「・・・なるほどな。その情報は悪くねえ。」

「そうですね。」

正直この程度の情報であれば、久藤提督ならばすぐに手に入れられそうな気がするのだが・・・

「だったら俺からの話はもうねえな。まあ、会見頑張ってくれや。」

「分かりました。・・・憲兵の金子さん達が護衛を下さるので、頼りにする事があるかもしれませんね。」

「ああ、いざとなったら頼れば良い。じゃあな。」

久藤提督はそう言って通信を切った。これは金子さんが言っていた邪魔者を排除する件は、久藤提督の指示によるものだと考えても良さそうだ。後は噛み付いてくる邪魔者が誰かという事だけだな。だがそこに関してはこちらが何もしなくても、どうせ向こうから噛み付いてくるか。

「さて、そろそろ良い時間だ。私は会見に行ってくるから鎮守府の事は任せたぞ。緊急時にはすぐに連絡をしてくれ。」

「はい、お任せ下さい。ではお気を付けて。」

大淀に鎮守府の事を任せて正門へと向かう。色々と考えてはいる

が、上手く立ち回れば良いのだが・・・

## 161話（会見会場入り）

正門前で待機していた陸奥と春雨と合流して、憲兵隊の運転する護送車に乗り込む。ただでさえ高価な品となつている車を3台も準備出来るのは、腐つても憲兵隊が力を持つている証拠だな。今回の会場まではそう遠くも無いからすぐに到着するだろう。

「では陸奥は会場に着いたら、予定通りにオークションの商品の検品をしてくれ。」

「分かったわ。」

「春雨は連絡要員として私と一緒に行動しろ。」

「は、はい!!」

「あとはあまり余計な奴と話をしないように気を付けてくれ。陸奥はオークションの準備の為に話す必要があるだろうが、話す内容には充分気を付けて欲しい。軍事機密に関わる事ももちろんだが、何気無い会話からも得られる情報もあるからな。」

「それは構わないけれど・・・ずいぶんと警戒してるのね?」

「ああ、どんな奴が来るか分からないからな。」

記者なんて人種は情報を得る為に手段を選ばないような奴も居るだろうし、艦娘が人間に危害を加えられないと知っている奴が問題を起こすかもしれない。

「失礼、お言葉ですが関係者以外は、我々憲兵隊が近寄らせませんのでご安心下さい。葛原提督だけでなく艦娘の護衛も我々の仕事ですから。」

護送車の助手席で指揮をしている金子さんが声をかけてくる。いや、情報の漏洩を危惧するならばお前達も警戒対象なのだが?久藤提督派閥の人間として見ても、大本営側の人間として見ても敵だ。たまたま利害が一致しているから協力しているだけで、決して仲間では無いという事は忘れてはいけない。・・・が一応協力関係にあるならば表立って敵対するのはマズイな。

「ええ、それは理解しているつもりですが、何処で誰がどんな手を使ってくるか分からない以上、警戒するのは当然の措置です。」

「まあ・・・そうですね。我々も警戒しましょう。」

会場の入口前に到着すると既に多数の記者達が集まっっていて、憲兵隊に護衛されながら移動する自分達をカメラで撮影してくる。こちららの許可も無く無遠慮に撮影しまくるのには腹が立つが、これくらいは想定内だ。それと今から会見だと言うのにこの場で質問を投げ掛けてくるバカも居たが、当然無視した。護衛の憲兵隊を突破しようとするバカまでは居なかったのが救いだらうか？

「なんと言うか・・・凄いわね・・・」

建物の中に入ってようやく記者達から開放されると、陸奥がぽつりと呟く。どうやら記者達の姿にちよつと恐怖を感じたのだらうか？

「あいつらにとつて情報はそれくらい重要なものなのだらうな？いや、情報と言うよりは素材か？」

「素材？どういう事かしら？」

「あいつらがやろうとしている事は、真実を突き止めて大衆に広める事じゃない。真実を切り取って自分達に都合の良い解釈や加工をして、それが真実であると広める事だ。それが例え真実とは正反対の事でもな。」

「・・・ちよつとよく分からないわ。」

大人つぽい雰囲気陸奥だが、やはり人間の狡猾さを理解してはいないようだな。

「例えば今私達は憲兵隊に護衛をして貰いながらこの会場に入る時に、たくさん写真を撮られたな？」

「ええ、凄い数だったわ。」

「私を罪人に仕立て上げたい奴らなら、今の写真を私が憲兵隊に連行されている写真にするかもな。」

「それは・・・流石に嘘だつてバレルと思うけど？」

「きちんと情報を得られる立場の人間ならな。そうで無い人間なら騙される奴は一定数居るはずだ。しかも他の証拠をでっち上げれば、その数も増えるだらう。だからこそああいった手合には極力関わらない方が良い。特に今から陸奥には一人で行動して貰うのだからな。」

「ふう・・・分かったわ。充分気をつけるわ。」

陸奥の目つきが少し怯えていたような感じから、戦場に向かうような雰囲気へと変わった。これなら大丈夫そうだな。

「では陸奥は検品の方を頼む。」

「いいわ、やってあげる!!」

「それでは案内しますのでこちらに。」

陸奥は数人の憲兵隊に案内されて、倉庫の方に向かった。後は陸奥がどれだけ上手く立ち回れるかだな。自分達も金子さんの案内で控室に向かっていると・・・

「戻って下さい!!ゲストの方はまだ控え室から出ないで下さい!!」

「やかましい!!私を誰だと思ってる!?この街の市長になる男だぞ!!貴様程度の人間が私に指図するなど無礼だ!!」

ふむ、聞き覚えのある声がエントランスホールの二階側から聞こえてきた。少しするとドタドタという足音と共に、吹き抜けになっている二階部分の手すりから降り出すように源さんが現れた。そのまま落ちれば面倒事が一つ片付くのだが・・・

「ようやく来たか!!散々待たせやがってクズが!!この私自ら貴様の最後を見に来てやったぞ!!私に逆らうからこんな事になるのだ!!今更後悔してももう手遅れだ!!さっさとクビになれ!!」

ずいぶんと強気に罵声を浴びせるものだ。さも自分の力でこの会見を開いたかのような言い草だが、源さんがなにかしたのだろうか? たしか大本営に苦情を言って適当にあしらわれただけではなかったか?というか警備の人間も何をしているのだろうか?あれくらいの人間を抑えられずにどうする?

「おい!?聞いておるのか!?今すぐ土下座で謝ると言うならば、多少は考えてやっても良いぞ!」

騒ぐ源さんを警備の人間は本気で止めようとしていないみたいだ。金子さんに視線を向けると、暗い笑みを浮かべている。ここでやる気なのか?源さんを逮捕するだけならば、挑発して掴みかからせるなどをすれば一発だろうが・・・見せしめとしては軽い気がする。

「金子さん、早く控室に案内して頂けますか?ここはどうにも五月蠅

くて落ち着きません。それに記者の方々をあまり待たせても悪いでしょう。」

「・・・分かりました。ご案内しましょう。おい!!ゲストの方を控室にご案内しろ!!」

「なっ?!?貴様!!この私を無視するつもりか!?おい離せ!!クソ!!私は絶対に許さんからな!!」

金子さんの指示でまだ騒いでいる源さんがゲストの控室に連れられていかれたようだ。やはりやろうと思えばすぐにでも抑える事が出来たみたいだな。

「それで、どういうおつもりですか?」

自分達の控室に向かう途中で金子さんが少し不満そうに聞いてきた。抽象的な質問だが、さっきの源さんを捕まえるお膳立てを無視した件だろうな。

「なんのお話か分かりませんが、先程も言ったとおり記者の方達をあまり待たせるのも良くないでしょう?彼等も大きな事件を記事にしたいと心待ちにしているようでしたし。」

「ふむ・・・それもそうですね。分かりました。急いで準備を進めましょう。」

金子さんは自分の心にもない発言からおおよその意図を察したのだろう。すぐに切り替えて控え室に案内してくれた。どうせ見せしめにするなら記者達の前で大々的にやった方が良く。こういう意図を読み取れるあたり、この金子という男はそれなりに頭が回るようだ。

「それでは準備が整い次第呼びしますので、少しここでお待ち下さい。」

「ええ、お願いします。」

控え室から金子さんが出て行って、春雨と二人きりになる。とは言え入口を憲兵で護衛しているはずだから、油断は出来ないのだが・・・金子さんが退室した直後に春雨が抱き着いてきた。

「おい、何をしている?」

「・・・ごめんさい。でもあなたが散々罵倒されるのを聞いた

ら、負の感情が溢れ出してしまいそうになったの・・・少しだけこうして落ち着かせて貰えるかしら？・じゃないとこのドス黒い感情を抑えられる自信が無いわ・・・」

この雰囲気は悪雨か・・・そう言えば悪雨は春雨の抱いた悪感情の象徴とか言っていた気がする。春雨の様子をよく見ると、ほんの少しだけ髪の色が薄くなっている気がする。これはマズイな・・・深海棲艦の影響だけを考えていたが、人間の悪意によっても刺激されてしまうのか・・・ならばストレスが溜まるこのような場所に連れて来たのは失敗だったか・・・

「そうか・・・それは悪かったな・・・私の護衛の為にと思って連れて来たが、かなりの負担をかけてしまったようだ。仕方ないから陸奥と配置を代えるか？向こうならば悪意に晒される事は少ないだろう。」

「それは絶対に嫌よ・・・こんな場所であなたから目を離すなんて耐えられないわ・・・いざという時にあなたを守れるのは私だけ。それなのにあなたの側から離れるなんて、それこそあなたを失う不安で発狂してしまいそうだわ・・・」

「そうか・・・では私の側で我慢して貰うしかないな。言っておくが春雨が私を守るのは本当に最後の手段だからな？護衛に憲兵隊も居るし、私自身も自衛能力を持っている。春雨が人間にも攻撃出来る事は極力表に出したくない。それは理解しているな？」

「ええ、分かっているわ。私の存在はあなたの立場を悪くする。それこそあなたか私、もしくは二人共処分されるくらいには・・・だから私が動く時は本当にあなたが殺されそうな時だけよ。」

「それが分かっているなら良い。このまま護衛と連絡役を頼む。」

そう言っただけ悪雨の頭を撫でると、落ち着いてきたのか髪の色がだんだんと鮮やかなピンクに戻っていく。それにしても深海棲艦の通信を傍受させた時でも髪色に変化は無かったのに、入口の記者達と源さんの罵倒くらいで髪の色に影響が出る程のストレスになったのか・・・やはり人間の悪意が一番厄介なのだろうか？

## 162話（会見前編）

コンコンコン

「葛原提督、会見の準備が整いました。」

「分かった。すぐに行こう。」

しばらく悪雨の頭を撫でて落ち着かしていると、部屋の外から金子さんに声をかけられる。撫でるのを止めて悪雨に目線をやると、少し名残り惜しそうにしながらも素直に離れた。

「では行くぞ。」

「は、はい!!」

控室を出てから金子さんの案内で第一会議室と書かれたところに連れていかれた。中からざわざわと声が聞こえるので、記者達が待っているのだろう。

「こちらです。」

「ああ。」

金子さんがこちらに一声かけてから扉を開けて中に入る。その後自分に春雨が入りさらに背後を憲兵が守っている。部屋に入った瞬間にバシャバシャバシャとカメラのシャッター音が鳴り響く。部屋の一番前に設置してある机の前まで歩いていき、一度敬礼をしてから用意された席につく。シャッター音が落ち着くまで待ちながら部屋を観察すると、最前列がカメラマンでその後ろが記者達だろう。そして後方で見ているのが見物にきた有力者のようだ。見覚えがあるのはさつき騒いでいた源さんに綾瀬さんと・・・チツ、海原弟がニコニコ笑顔で見やがる。あいつ本当に来やがったな・・・

「まずは今回の深海棲艦の襲撃により犠牲となった方々へお悔やみ申し上げます。そして今回の一件でかなり混乱が生じてしまい、あらぬ噂が流れている事態を大本営側が憂慮しております。そのため今日は私が大本営の代理として、また当事者の1人として当時何が起こったかを説明する為に会見を開かせて頂きました。」

一旦言葉を切ると会場がどよめく。散々大本営の奴らが自分を吊るし上げる為の謝罪会見だと吹聴していたのに、蓋を開けてみたら謝



る気配が無いのだから仕方あるまい。ただ自分としては恥じるべき事は何も無いので、堂々とした雰囲気は崩さない。弱味を見せれば付け込まれるだけだ。

「まず事の発端は北九州鎮守府が付近の資材溜まりと呼ばれる、資材が自然と溜まる場所に単食う深海棲艦を撃破した事です。深海棲艦撃破後に資材の回収作業を行いました。想定よりもかなり多い量の資材が発見されました。私はこの多過ぎる資材が、深海棲艦が侵略の為に用意した前線基地ではないかと考え、大本営と周辺の鎮守府に警告をしました。」

「質問宜しいでしょうか？」

話を途中で遮るなど言いたいところだが・・・これくらいは仕方ないか・・・

「答えられる事であれば。」

「深海棲艦にはたいした知能は無く、本能的に襲いかかってくるものだ」と聞いております。前線基地を作るなどの行動をするものなのでですか？」

「少々誤解をされているようですが、知能が低いのは下位の個体だけです。上位個体であればある程度知能が高く、配下の者に戦略的な行動をさせます。特に鬼級や姫級といった最上位の個体であれば、かなり高度な知能を持っていると考えられます。」

「あ、ありがとうございます。」

ふむ、特に噛み付いてくる訳でもないか？まあ、このあたりは有力者なら多少は知っているくらい知識だろう。記者の中でも驚いている者と、質問した奴の勉強不足を笑っている奴がいる。

「さて続きですが、翌日北九州鎮守府は周辺海域の哨戒だけ行っていました。長門鎮守府が威力偵察の部隊を編成し、集積地棲姫と呼ばれる個体の発見に成功しました。ですが大きな戦力差があつた為に長門鎮守府の艦隊は壊滅してしまいました。」

実際は偵察もせずに主力艦隊を送り込んだだけなのだが・・・この辺は大本営の意向だから、無闇に原田提督の無能さを公表出来ないのだよなあ・・・

「噂では葛原提督が原田提督を陥れたという話を聞きましたが、どう弁明されるおつもりですか？」

今度はまた別の記者が質問をしてきた。こいつは鶴野提督の派閥の奴か？

「そのような事実はありません。原田提督に渡した情報は他の鎮守府や大本営に伝えたものと同一です。これに関しては通信記録も残っていますので、大本営側からも理解を得られています。」

本来なら大本営側は認めずにこちらを責めるポイントだった。しかし鶴野提督からの圧力の影響からか、こちらを責めるような内容は無くなっていた。まあ、元々あいつらが流した嘘で迷惑を被っていたのが無くなっただけなので、一切恩は感じないが……

「その後戦力の低下を危惧した長門鎮守府が各地に増援を求めましたが、我々北九州鎮守府としては集積地棲姫の発見場所から最も近い場所だった為、安易に増援を送る事は出来ませんでした。」

「つまり長門鎮守府を見捨てたという事ですか!？」

「私が第一に考えるべきは北九州の防衛です。あなたは長門の人々を守る為ならば、北九州の人々が死んでも構わないと主張されるのですか?！」

「そ、それは……それは流石に暴論だ!!どちらも守れば良いだろう!!」「それが出来るような相手ではありません。軍事に関しては素人が考え無しにとやかく言うのは辞めて頂けますか?！」

「な、なんだと!？」

「話を続けます。その日の夜に長門鎮守府から救援要請が再度届き、大艦隊が押し寄せているとの情報が入りました。我々も増援を送ったものの深海棲艦の別働隊による妨害を受け、長門鎮守府での防衛戦には間に合いませんでした。我々が到着した時点で長門鎮守府は崩壊しており、数名の生き残った艦娘を保護する事しか出来ませんでした。益田鎮守府からの増援が到着次第、周辺海域の警戒を引き継いで北九州鎮守府へと帰還させました。これが長門鎮守府崩壊の全容です。」

「つまりもし葛原提督がもっと早く行動を起こしていたならば、長門

鎮守府を救えたかもしれないという事ですね？」

さつきからかなりしつこく絡んでくる奴だな・・・

「ええ、その可能性は否定しません。」

「だったら!!」

「ただそれは結果が出た後で考えた話です。そんなものは素人でも簡単に言える事です。ですが現実はそのなりに甘く無い。今回は偶然標的が長門鎮守府だったというだけで、北九州鎮守府が標的になる可能性も充分にありました。それでもあなたは北九州の人間を見殺しにしてでも長門鎮守府に増援を送るべきだったと主張されるのですか？」

「う・・・いや・・・しかし・・・」

「分かって頂けたのであれば、安易な発言は控えて頂きたい。」

やっと黙り込んだか・・・流石に北九州の有力者が多く集まるこの場所で、北九州を見殺しにするべきだとは言えないからな。

「質問宜しいですか？」

今度は別の記者か・・・

「どうぞ。」

「これはあくまでも噂ではありますが、長門鎮守府を指揮していた原田提督が敵前逃亡をしたと聞きました。これは責任ある提督がすべき行動ではありません。この事について葛原提督はどう思われますか。」

「・・・そこに関しては本当に自分もそう思う。そう思うのだが・・・そこに関しては隠蔽するようにと命令されているのが悔やまれる。」

「申し訳無いですが、その件に関しては私は情報を持っていません。大本営から聞いた話では、現在原田提督の行方を捜索中ですが、鎮守府の惨状から発見は困難だと思われるとの事です。」

「ですが旧阿武町付近で大破した軍用車両が見つかり、中から原田提督の遺品が見つかったという話も聞いております。これでもまだ原田提督が敵前逃亡していないと言うのですか？」

噂と言うかほぼ真実を教えられているな・・・

「……その情報は初めて聞きましたが、私はそれが真実かを確認したわけではありません。なのでコメントは控えさせて頂きます。いずれ大本営から正式な発表があると思いますので、それまでお待ち下さい。」

「……分かりました。」

質問してきた男はニヤリと笑っている。こちらの反応からこの件が真実であると読み取ったのだろうか？それとも公の場でこの話をする事が目的だったか？とりあえず前半部分はこんなところか？後は後半部分の集積地棲姫討伐と戦艦棲姫討伐の件を広めて、大本営の株を上げろだったか？まあ、前半部分よりはマシか……

## 163話（会見中編）

原田提督の敵前逃亡問題の件で微妙な空気になっているが、構わず話を進めなくてはな。

「さて、それではここからは集積地棲姫と戦艦棲姫をどのように討伐したかになります。」

「いい加減にしろ!!」

突然の怒鳴り声に会場が静まり返る。何事かと思えば後ろの方から源さんが立ち上がってズカズカと近づいて来る。いきなり派手に動いてきたな。となればこちらも源さんを陥れるつもりで動くでしょう。

「さつきから聞いていればなんだ貴様は!?! 貴様の無能さを棚に上げて言い訳ばかり!! 貴様の判断ミスで長門市に大きな損害を出したと言うのに、謝罪の一つもせんのか貴様は!!」

「先程までの話を聞いていませんか? 素人の思い付きで難癖つけられても困るのですか?」

「黙れ!! そんな言い訳が通用するか!! 我々を馬鹿にするのもたいがいにしろ!! さつきから素人は黙っていると言っているが、貴様だつて着任したてのひよっこではないか!! その貴様の能力の無さが今回の惨劇を招いたのだから、頭を地面に擦り付けて謝罪するのが当然だろうが!!」

ずいぶんと好き勝手言ってくれるな。激昂している源さんとはともかく、会場の雰囲気も少し変わってきた。源さんに同調して声をあげる者こそ居ないが、記者達は源さんと自分の写真を撮りながら、次に何が起こるか期待している雰囲気だ。ついでに隣で金子さんが動こうとする気配を感じたので、それとなく手で制しておく。まだ動くには早い。

「先程もお話しましたが、今回の一件で大本営は私に非は無いと判断しています。私個人の判断ではなく大本営の判断です。あなたの勝手な判断よりも余程信頼性があると思えますが?」

「貴様あ!! いくら積んだ!?! 大本営への賄賂をいくら積んだのだ!?!」

「賄賂などいっさいしていません。勝手な妄想で騒ぎ立てるのは止めて下さい。」

「私の妄想だと!? 貴様の悪事は既に私の耳に入っているのだ!! 今更言い逃れが出来ると思うな!?!」

悪事ねえ・・・どうせ鶴野提督がバラ撒いた悪評の事だろう。それをさつきまで散々潰してきたのが理解出来て無いのか? だがこいつは充分に冷静さを失っているみたいだし、そろそろ仕留めるとするか。

「はあ・・・先程からずいぶんと私を敵視しているようですが、そんなに私を排除したいのですか?」

「当たり前だ!! 貴様が私に対してした仕打ちを忘れたとは言わせんぞ!!」

「まさかとは思いますが・・・先日私が暗殺されかけたのもあなたの仕業ですか?」

その一言に会場がざわめく。提督を暗殺なんてすれば鎮守府の機能が一時的に麻痺する。当然重罪に問われる大事件だ。

「は、はあ!?! な、なにを言っている!?!」

「先日鎮守府に暗殺者が送り込まれた件、あなたが関与しているのではないかと聞いているのです。」

「ふざけるな!! そんなもの平川が勝手にやった事だろうが!! 私は関係無い!!」

ふっ、やはり知っていたか。平川元市長が市長をしていた時に源さんは副市長、つまりナンバー2の位置に居たのだ。当然この件も話くらいは知っていると予測していたが、簡単に自白してくれたな。

「ほう? 何故たった今公表したばかりの暗殺未遂事件について、平川元市長が犯人だと知っているのですか? これはなにかしら関与していたと考えるべきですね。」

「は、はあ!?! 何を言っている!?!」

「そいつを捕らえろ!!」

金子さんの号令で憲兵隊が数人がかりで源さんを拘束する。会場は多少混乱したものの、すぐに源さんは取り押さえられる。こんな状

況でもカメラマン達はシャッターチャンスとばかりに撮影している。「よし、提督の暗殺未遂事件の重要参考人として、この男を拘束する!!」すぐに連れていけ!!」

「ハッ!!」

「何をする!?!離せ!!何故私を捕まえる!?!捕まえるのはあいつだろうか!?!離せ!!」

源さんはかなり暴れたがしよせんはただの一般人、数人の軍人相手にどうこう出来る訳も無く、簡単に拘束されて連行された。これで邪魔者の排除も出来たし、久藤提督からの依頼も完了という事で良いだろう。

「さて、邪魔が入ってしまいました。話の続きをしましょう。」  
「待って下さい!!葛原提督が暗殺されかけたと言うのは本当ですか!?!」

1人の記者が叫ぶように質問してきて、他の記者達も興味津々のようだ。流石に気になるか。

「ええ、大本営には報告していますが、4日前の深夜に暗殺者が鎮守府へと侵入し、私が襲撃を受けました。幸い怪我は銃弾が足を掠めただけで済みましたが、実行犯は暗殺に失敗すると自害してしまい、憲兵隊の調査でも証拠が掴めずに捜査が難航していました。まさかと思つてカマをかけてみたら、どうやら大当たりだったようです。」

背後で春雨がビクツと反応している気がする。本当は春雨が私を守ろうとして犯人を殺してしまつたが、大本営への報告には犯人の自殺という事になっている。ちなみに犯人の処理をしてくれた憲兵隊には、私が犯人を殺してしまつたので情報操作をして欲しいと伝えてある。嘘の報告で嘘の情報を隠す事で、艦娘に意識が向かないようにしている。

「我々憲兵隊が事実であると保証します。事件を未然に防げず申し訳ございません。この件に関しては徹底的に調査する事をお約束します。」

「ええ、宜しくお願いします。今回の一件は前任者の大森提督の不審死に繋がる可能性もあります。徹底的な調査をお願いします。」

「ええ、お任せ下さい。」

・・・また背後で春雨がビクビクしている気配がしている。ついでだからそつちの件も源さんに冤罪を擦り付けただけなのだが・・・まあ、春雨としては気になるところか。

「前任者の大森提督が暗殺されたという噂は本当だったのですか!？」  
「申し訳ございませんが、こちらについては捜査が難航していて、はっきりとしたお答えが出来ません。何者かに殺害されたのは事実ですが、犯人は人の可能性だけでなく、未知の深海棲艦の襲撃の可能性もあります。捜査に進展があれば大本営から発表があるかとは思いますが。」

記者達はかなり興奮しているみたいだな。源さんが引き起こした騒動で期待していたところに、提督暗殺未遂事件という爆弾を投げ込まれたのだ。先程まで源さんの言動でこちらを非難する材料を探していたのに、その意識をより大きな事件で消し飛ばす事に成功したか。

だが興奮している者が多い中で、頭の良い冷静な人間も少しは居るようだ。特に後ろで見守っている有力者の中には、会見の邪魔をした人間を大本営側が強引に排除したと受け取った者も居るだろう。実際に暗殺者を送り込んだのは平川元市長であって、源さんはそれを知っていただけの可能性が高い。つまりは冤罪を擦り付けて強引に拘束したと言っても過言では無い。そろそろ印象の回復を試みるべきだろうか？

「さて、話がかかなり逸れてしまいましたね。ここからは集積地棲姫と戦艦棲姫の討伐の経緯についてお話しましょう。」



## 164話（会見後編）

「長門鎮守府が壊滅した翌朝ですが、北九州鎮守府にも大規模な侵攻がありました。北九州市にお住まいの皆さんは避難勧告を発令したのをご存知かと思えます。正直なところ我々北九州鎮守府の独力では、その侵攻を止められなかった可能性が高いです。ですが横須賀鎮守府からの増援の駆逐艦達が間に合い、無事に撃退する事に成功しております。」

「横須賀からの増援は駆逐艦だけだったのですか？」

「横須賀鎮守府から派遣された増援艦隊の先行部隊として、駆逐艦6名がその戦闘に間に合いました。もちろんその後戦艦や空母を含む主力部隊も到着してます。」

「先程葛原提督は北九州鎮守府の独力では侵攻を止められなかったと仰りましたが、いくらあの横須賀鎮守府の艦隊であっても、駆逐艦だけではそこまでの戦力では無いでしょうか？避難勧告を発令するほどの事態では無かったのではないですか？」

まさかこんな公の場で横須賀鎮守府の強さを疑うような発言をするとはな・・・自分が避難勧告を発令したのに街に一切被害がなかった件を責めたいようだが、あまり良い手とは思えないな。

「駆逐艦は弱いと誤解をしているみたいですね。確かに砲撃の火力は低いですし、装甲が貧弱で撃たれ弱いのは事実です。しかしその速力と敏捷性による回避力は他の艦種には無い強みですし、雷撃による一撃は戦艦の装甲相手でも大ダメージを与えます。しかも今横須賀鎮守府が派遣した駆逐艦6名の内3名は、防空駆逐艦という対空戦に特化した駆逐艦です。彼女達が敵空母の艦載機をほとんど叩き落としたと言っても過言ではないです。もし彼女達の活躍が無ければ、艦隊に多大な被害が出ただけではなく、艦載機が北九州の街に迫っていた可能性が高いです。もちろん残りの3名の駆逐艦達も獅子奮迅の活躍を見せてくれました。」

「まあ、横須賀鎮守府の駆逐艦達が凄いのには分かりましたが、北九州鎮守府にも前任者の大森提督が残して下さった精強な艦隊が居るで

しよう？そんな艦隊を保有しておきながら弱気な発言ばかりされると、我々としては葛原提督の提督としての能力を疑ってしまいます。」

「北九州鎮守府の艦隊が精強ですって？冗談ですか？なら何故4大鎮守府に名を連ねて無いのですか？実力に大きな隔たりがあるからでしょう？特に国内最強の横須賀鎮守府の艦隊と比べたら雲泥の差です。今回の迎撃戦で北九州鎮守府から30名の艦娘が出撃していますが、それでも横須賀鎮守府の駆逐艦6名の方がより貢献したと言っても過言ではありません。」

「い、いや、それこそ冗談でしょう？いくら横須賀の艦娘が強いからと言っても・・・」

「残念ですがそれが現実です。もしここまで言っても理解して貰えないのであれば・・・運が良い事にこの場には私より横須賀の事に詳しい奴がいますよ？」

そう言って視線を後ろの有力者達の方に向けると、記者達も一斉に後ろを向く。視線の先に居るのは当然横須賀鎮守府の海原提督の弟である海原朔真だ。ついさつきまで爽やかな笑顔で会見を見ていたが、その笑顔が若干引き曇っている。ざまあみろ。

「彼は横須賀鎮守府の海原提督の弟です。私よりも遥かに横須賀鎮守府について詳しいでしょう。この場で少し語って貰えますか？」

朔真が目線でこつちを巻き込むなど主張してくるが知った事では無い。高みの見物に来たつもりならば、見物料を取り立てても文句は無いだろう。

「んんっ!!兄さんの事について語りたいところではありますが、会見の本題から話が逸れてしまいます。もし気になる方がいらつしやるならば、会見が終わった後で聞きに来て下さい。ただ僕から一つだけお伝えしておきたい事は、先程葛原提督が言った内容は誇張表現ではなく事実です。横須賀鎮守府と他の鎮守府ではそれくらいの差はありません。」

朔真はかなり困っていますという雰囲気を出しながらも、横須賀鎮守府の実力についてだけは断言した。会場もその言葉にどよめいている。これで横須賀の実力について難癖をつける奴はもう居ないだ

ろう。

「皆さんにも横須賀鎮守府の実力が少しだけ伝わったようですね。それでは話を戻しますが、北九州鎮守府への襲撃を撃退した後、横須賀の増援艦隊の本隊が到着。少し休憩を挟んで集積地棲姫の討伐に向かい、これを見事に討伐しました。ここまでが集積地棲姫討伐までの流れとなります。」

流石にこの話には疑問を持つ者は居ないな。横須賀の主力部隊が姫級の討伐に成功した事を疑う馬鹿は居ないだろう。

「そして戦艦棲姫ですが、こちらは集積地棲姫の討伐と同時に佐世保鎮守府が対応していました。佐世保の艦隊は戦艦棲姫をギリギリまで追い詰めましたが、あと一歩のところまで逃亡を許してしまいました。そこで佐世保鎮守府は北九州鎮守府を含む周囲の鎮守府に、警告と搜索の協力を要請しました。連絡があつた時に北九州鎮守府は集積地棲姫の残党狩りをしていて、追い込まれた戦艦棲姫が偶然その場に現れたので、我々が止めを刺す形になりました。」

「つまり北九州鎮守府が姫級の討伐を果たしたと言う事ですか!?先程は北九州鎮守府の艦娘の実力は低いと仰っていたのに!」

「二応我々が止めを刺しはしましたが、我々が戦艦棲姫を発見した時には既に轟沈寸前でした。そんな状態にも関わらず我々はかなり苦戦しています。ですから戦艦棲姫を討伐した功績のほとんどは佐世保鎮守府のものと考えて下さい。」

「つまり佐世保鎮守府が苦勞して追い詰めた相手を、北九州鎮守府が横取りした形ですか?」

「ええ、そうなります。ですがこれは佐世保鎮守府の熊井提督から許可を得ている事ですし、討伐後に熊井提督に報告をしましたが、この件を問題にするつもりは無いとのお言葉を頂きました。戦艦棲姫討伐後に出現したドロップ艦についても、北九州鎮守府で保護するようにと言われております。」

やはり熊井提督の名前を出せば、記者達もそれ以上の追及はしてこないみたいだな。軍人氣質の熊井提督が決定した事ならば、まず曲げる事は無いだろう。そこを突ついて熊井提督を怒らせるのは得策で

は無いというのが共通認識なのだろう。

「最後になりますが、戦艦棲姫討伐の時に保護したドロップ艦ですが、希少な海外艦でドイツの艦娘でした。名はプリンツ・オイゲンで重巡洋艦です。」

その瞬間会場が大きなどよめきに包まれた。記者達はもちろんだが、後ろの有力者達もかなり興味を持っているようだ。

「海外艦ですか!?!しかもロシアではなく西洋の海外艦ですか!?!それは本当ですか!?!」

「ええ、もちろんです。」

「西洋の海外艦なんて初めてですよ!!そのプリンツ・オイゲンは今どこに!?!」

「鎮守府で待機させています。」

「なぜこの場に連れて来なかったのですか!?!」

記者達としてはビッグニュースを記事にしたいのに、写真撮影も直接取材も出来ないとなれば、当然不満を持つだろう。わざわざ応えてやる義理は無いが。

「現在この情報が各地の鎮守府へと伝わり、希少な海外艦を欲しがる者が大勢います。ただでさえ注目を集め過ぎているのに、こんな人の集まるところに連れて来るなんて事はしません。よからぬ事を考える人間が居ないとも限りませんし。」

「それは他の提督がプリンツ・オイゲンさんの強奪を企むと疑っているというおつもりですか!?!」

「誤解を恐れずに言うならばまさにその通りです。今日だけでもかなりの数の鎮守府から連絡がありました。売って欲しいやら貴様には相応しくないから寄越せやら、無礼の詫びとして献上しろなんて話もありましたね。」

ここに來ている記者達でもその様子が簡単に思い浮かぶだろう。

「失礼ですが葛原提督はどこかの鎮守府にプリンツ・オイゲンを譲渡する気は無いのですか?海外艦と言えば希少な存在で、現状では横須賀と佐世保しか保有していないと聞きます。言い換えれば強さの象徴とも言える存在です。4大鎮守府の提督こそ所有すべきで、一

提督が所有すべきでは無いとの考えもありますが?」

本当に失礼だな。大勢の前で面と向かってお前には資格が無いと言うか。まあ、散々言われた事だから今更どうとも思わないが。

「ありません。戦艦棲姫討伐の一番の功労者である佐世保鎮守府ならば、プリンツ・オイゲンを譲渡すべきだと考えていましたが、熊井提督には断られました。なので他の鎮守府に譲渡するつもりはありません。」

「ですが鎮守府の格に似合わない事をすれば、後々大きな問題になりかねないと思えますが?」

「それこそ譲渡しても問題になります。先程海外艦は強さの象徴だと言っていました、そんな大事なものを他所の鎮守府から譲り受ける方が恥でしょう。自分の力で勝ち取ってこそ価値があるものでは? 実際に熊井提督からは他者の功績を奪うような卑劣な真似はししないと言われました。まさかとは思いますが、4大鎮守府の長ともあろう方が、卑劣な手段で他人の功績を奪いたいと考えているとでも言うつもりですか?」

「い、いえ・・・そんな事は・・・」

鶴野提督ならばそんな戯言は良いからとつとと寄越せと言いそうだがな。公の場で一人の記者がそんな事を言えるはずも無い。

「では私からの説明は以上となりますので、会見はここまでとさせて頂きます。引き続き別の会場にて大森前提督の遺品を販売するオークションを開催します。お時間のある方は是非ご参加下さい。それでは失礼します。」

記者達が黙った隙を見て一気に話を終わらせて、すぐに会場から立ち去った。本当ならば記者達ももつと質問したかっただろうが、わざわざ付き合う義理はない。

これで後はオークションだけだな。

## 165話（オークション前）

ざわめく会場をさっさと出てから、オークション会場でもある大ホールの舞台裏へと向かう。そこには既に検品を終えたらしい陸奥がいて、すぐ側に憲兵隊が二人と少し離れたところに作業員の集団が居た。自分が近づくとこちらに気が付いたようで、陸奥と作業員の代表者が近づいてくる。

「陸奥、検品は終わったか？」

「ええ、大丈夫よ。」

「ではこちらの納品書にサインを頂けますか？」

「はい、ご協力ありがとうございます。」

「・・・はい、確かに確認しました。では我々は待機していますので、始める時は声をかけて下さい。」

それだけ言って代表者は作業者の集団へと戻って行った。なんとなくだがこちらにあまり良い感情を持っていないような雰囲気だな。敵意を向けてくる程ではないのだが・・・

「陸奥、何かあったか？」

「そうね・・・彼等も最初は気さくに話しかけてくれたのだけど・・・提督から余計な話をするなって命令されてたから、申し訳無いけれどもお話を断ったのよ。私が軍属だから仕方ないとは考えてくれてるみたいだけど、やっぱり拒絶されたらちよつとね・・・」

なるほど。それならば仕方ないな。作業者の目的が情報収集なのかただの雑談なのかは分からないが、警戒する必要があるので一線はきちんと引いておくべきだ。

「それは仕方がない。では金子さん、会場に客を入れ始めて下さい。三十分後から始めようと思います。」

「分かりました。あとオークション前に少し話がしたいと言っている方が居るのですが、どうされますか？」

「はあ、誰がそんな事を？」

「前任者の大森提督の遺族との事です。」

ふむ、確かさつき捕縛された源さんと一緒に何かやろうとしていた

のだったか？会見の時には特に動きが無かったから忘れていたのだが……

「そんな奴と会う必要があると思いますか？」

「絶対には言いませんが、出来れば会って頂きたいところです。」

特に興味も無いので無視しようかと思っただが、金子さんとしては自分に会って貰いたいようだ。おそらく源さん共々捕まえてしまう予定だったが、会見で動きを見せなかったのも、今のうちに処理しておくってところだろうか？

「分かりました。手短に済ませましょう。」

「ありがとうございます。すぐにお呼びします。」

そう言っただけで金子さんが部下に指示を出してしばらくすると、太ったおばさんとその息子らしき奴らが連れて来られた。おばさんは厚化粧に成金趣味っぽいアクセサリをジャラジャラ付けていて、お世辞にも品が良いとは言えない。息子の方はあの天龍にぶっ壊させた大森提督の石像を思い出させるあたり、やはり親子なのだなあと感じる醜さだ。歳は自分よりも少し上くらいか？表情もニヤニヤしていて陸奥に無遠慮な視線を向けるので、陸奥が少しだけ自分の後ろに隠れるように移動した。

「貴方が私の夫の跡を継いだ提督かしら？」

「ええ、葛原です。」

「ふーん、それで？」

「それでは？そちらが何か用事があって来られたのでは？」

「なんて口のきき方かしら!?せつかく弁明する機会をあげようと思っ  
てわざわざ来たのよ!」

「はあ？心当たりがありませんか？」

「こいつは何を言っているんだ？」

「貴方遺族である私達に無断で夫の遺品を売り払おうとしてるじゃない!!」

「あなたの夫が不正に貯えた財産を大本営が没収して、それを私が販売して鎮守府の運営資金として利用して良いと許可が出たのです。文句なら大本営に言ってみたらどうですか？私個人としては他の資

産が差し押さえになつていないあたり、大本営はずいぶん甘い対応をしたと思いませんか？」

「なんて事を言うのかしら!? 国を護る為に身を粉にして働いていた先人への敬意が感じられないわ!! それに私の夫を殺した犯人をまだ見つけられて無いと聞いているわ!? どう責任を取るつもり!?」

国を護る為に身を粉にして働いた先人? 誰の事だ? まさか金儲けと性欲を満たす為に動いていた大森提督の事を言っているのか? 冗談キツイな。

「はあ・・・大森提督は犯罪者ですよ? 大森提督が艦娘達に何をしていたかは、ある程度の情報は公表されたはずですが?」

「提督という重責ある仕事をしていたのです。夫がおもちやで遊んでいたからと言ってそれを責める程、妻として狭量ではないわ。」

ダメだこいつは・・・しかも艦娘の目の前でおもちやとか言いやがったな・・・陸奥から怒っている雰囲気を感じるし、春雨は後ろで私の服をギュツと握って感情を抑えているようだ。

「はあ・・・話になりませんね。これ以上の話は無駄ですので、大本営にでも掛け合つて下さい。」

「なんですって!?!」

「まあまあ母上、落ち着いて下さい。私が話をつけますから。」

怒れる母親を宥めて息子の方が前に出てきたが、こいつが何を言っても状況がひっくり返るとは思えないのだが・・・

「すまん。父上の死から一月も経っていないのだ、母上もまだ心の整理が出来ていないのだ。」

「はあ? それで?」

「いやなに、先程の会見も聞いていたが、お前もなかなか上手くやっているようではないか。父上が亡くなられた事はとても残念だが、お前のように有能な奴が後任に就いたならば、この街の住民も安心出来るだろう。」

「はあ。」

なんだ? こいつは煽てればどうにかなるとでも思っているのか? しかも上から目線で話しているから、煽てる事にも成功していない。



「だが聞いた話ではお前は軍事には明るいらしいが、政治や人間関係はあまり得意では無いと聞く。街の有力者達の反感を買っているようでは、この先提督として上手くやっていけないはずだ。だから条件次第では私が手を貸してやらん事もない。私には父上が大切に築いてきた人脈がある。その私から協力を要請すれば、有力者の皆も理解してくれるはずだ。」

人脈ねえ・・・大森提督が提督であつたから構築出来た人脈だろう？こいつはこの歳で士官学校に通っていないようなので、提督としての才能は無いはずだ。つまりなんの利益も産まない奴に、すり寄ってくるバカは居ないだろう。本当に政治の手腕があればなんとかなるかもしれないが・・・

「・・・ちなみにですがお仕事は何をされているのですか？」

「ん？そんな事はどうでも良いだろう？大切なのはこれからだ。」

こいつ無職だな。親が金持ちなら働く必要はなかっただろう。だがその親が死んでしまったから、ようやく動き出したところか。しかも父親が偉かつたから自分も偉いと勘違いしているようだ。

「そうですか。」

「うむ、お互いに未来のある若者同士だ。仲良くしようではないか。」

いや、お前に未来は無い。

「いえ、お断りします。」

「まあ、そう結論をあせるな。」

そう言うところのクズはこっちに近づいてきて、肩に手を載せようとしたので軽く払う。一瞬怒りの表情を浮かべたが、すぐに持ち直す事が出来たようだ。思っていたよりは我慢が出来るのか？

「そう邪険にするな。お前も知りたいのだろう？父上が艦娘を使って儲けていたやり方をな？」

「はあ・・・」

「お前には難しくても私には出来る。だが私には提督の才能は無いからお前の協力が必要だ。お前は艦娘を、私は人脈とノウハウを提供する。それで全て上手くいく。ついでに父上が出し渋っていた戦艦と正規空母も使わせてくれるならもっと稼げる。そこに居る奴はたし

か陸奥とか言う戦艦だろう？一目見ただけで良い体をしているのが分かる。これならいくらでも「黙れ。」え？」

「黙れと言っている。それ以上の侮辱は許さん。」

「はあ!?こつちが下手に出てやってりやさつきからなんだその態度は!?!」

「艦娘は戦う為の存在だ!!お前の欲を満たす為のものではない!!」

「なに綺麗事言ってるやがる!!どうせお前も鎮守府で好き放題ヤツてんだろうが!?!艦娘なんてたくさん居るんだから、独り占めしてないでこつちにも寄越せ!!」

これ以上の問答は必要無い。艦娘の不正利用をしようとしているのは明白だ。さつきと金子さんに捕縛して貰おうとしたら・・・大森提督の息子が真横にふっ飛ばされた。あれ?自分はまだ殴って無いのだが・・・

「このクソ野郎があ!!さつきから聞いてりや艦娘さんに!!なんて事を!!言いやがる!!」

どうやら話を遠くで聞いていた配送業者の人間が、我慢出来ずに殴りかかったようだ。しかも倒れたところを馬乗りになってさらに殴っている。配送業で鍛えてるだけあって一発一発が重い。自分も軍人として鍛えているが、あんな人と殴り合いたくは無いな。

「ゲフ!!ちよ!?!待て!?!だ、誰かとめ!?!」

大森提督の息子が周囲に助けを求めるが、母親は腰を抜かしてしまい、作業者の仕事仲間達は冷ややかな目で見て止めようとしないうつくりと十発くらい殴って少し落ち着いたあたりで、ようやく憲兵隊が殴りかかった作業者を取り押さえた。

「この二人を艦娘不正利用の疑いで拘束しろ!!」

「は??え?」

金子さんの指示で大森親子が憲兵隊に連行される。息子の方は喋る気力も無いようでもまに連行されて、母親の方はなにか喚いていたがまあ良いだろう。

「葛原さん、うちの若いもんがすみません。責任なら止められなかった私が負います。」

「いえ、もう少しで私が殴っていたところでしたから、お気になさらず。」

「そうですか・・・それでそいつの処遇はどうなりますか？暴行で逮捕されるのでしょうか？それなら私も責任者として一緒に・・・」

「私としては特に何も。金子さんは？」

「・・・我々は憲兵隊であって警察ではありません。提督や艦娘への暴行であれば捕縛しますが、今のはただ目の前で起きた喧嘩を止めただけです。これ以上我々は関与しません。」

「だそうです。さっきの一件は何も無かったという事にしましょう。ではそろそろ時間ですし、オークションを始めましょう。」

少しの間ほかんとしていたようだが、安堵した笑顔を浮かべて深々と頭を下げてきた。とにかくこれで一件落着だな。

## 166話（オークション）

オークション会場の様子を覗き見ると、それなりに客が入っているようだ。この会場に入場する時にカタログ代わりのプリントを配って貰ったのだが、その内容を見てかなりざわついている様子だ。先程の会見よりも人が増えているので、会見には入り込め無かった者達も来ているのだろう。あとカメラや録音機器の持ち込みは禁止されているが、先程の会見に来ていた記者達も参加しているようだ。ではさっさと始めるか。

「皆様お待ちしました。本日は大森前提督の遺品を販売するオークションにご参加頂き、ありがとうございます。今回の売上は北九州鎮守府の運営資金として有効に活用させて頂きますので、宜しく願います。」

自分が挨拶を終えるとまばらな拍手で応えてくれた。まあ、こんなものだろう。

「ちなみに今回の商品の鑑定についてですが、北条工業のご令嬢にご協力頂きました。それでは最初の商品をご紹介します。」

そう言って舞台袖の陸奥に視線を送ると、陸奥が一つの絵画を台車に載せて運んでくる。

「こちらはかの有名な西洋の画家であるゴッホの『ひまわり』という作品……の贋作です。」

自分が贋作だと言い切った事から、会場にまた大きなどよめきが起こる。予め配っておいたプリントにはきちんと贋作だと明記していたのだが、それなりに驚いたようだ。もしこれを本物として売ろうとしていたら、当然のように偽物じゃないのかと難癖をつけられる。しかし最初から贋作と言えばそんな事は起きない。

「それでは入札を始めます。3万円からです。」

入札を開始したが当然誰も手を上げず、会場にはクスクスと嘲笑がそこら中から聞こえてくる。まあ、予想通りの反応だな。

「では3万円。」

最初に動いたのは綾瀬さんだった。会場の雰囲気を見かねたのか、

新しい市長として提督との関係をアピールする目的かは分からないが、最初の客としては妥当なところだな。

「他に誰かいませんか？……いないようですので3万円で落札です。」

会場からまたまばらな拍手と一際大きな嘲笑が響いている。そんな中で係の者が綾瀬さんの所に行つて、書類にサインを貰っている。さて、そろそろ仕掛けるか。

「ああ、皆様に一っだけ注意点を伝えるのを忘れていました。先日平川元市長が艦娘の不正利用で憲兵隊に捕縛された件はご存知でしょうか？平川元市長は捕縛後に逃走を試みて射殺されてしまったのですが。」

その一言で会場の雰囲気は嘲笑から困惑へと変わる。突然こんな話を始めたら無理もない。

「もちろん艦娘の不正利用の件の調査は我々がおこなったのですが……不正利用の決定的な証拠はとある美術品に隠されていました。」

突然の情報の開示に有力者達はさらに困惑し、記者達は思わぬ情報に食いついた。

「もちろん他の美術品も調べてはいますが、何か見落としがある可能性も否定出来ません。ですから万が一購入後に何かありましたら、北九州鎮守府か憲兵隊の方にご連絡下さい。我々できちんと対処させていただきます。」

会場が静寂に包まれた。こんな事を言ったが、万が一証拠品を発見したとした奴がいたら、素直に連絡してくる奴なんかいるはず無い。自分が関わっている物ならさっさと処分するし、他の誰かの物なら交渉材料に使えるはずだ。会場に不安と期待の種がバラ撒かれた。

「それにしてもなぜ大森前提督はこれ程までに贋作を集めていたのでしょうか？大した価値の無い、傷付いても困らないような贋作を。さて、そろそろ次の商品をご紹介しますよう。」

その後のオークション会場はなかなか面白い状態だった。美術品の中に汚職の証拠が隠れているかもしれないと言う話には、最初は会

場も懐疑的ではあった。しかし入札する人間が増えると不安も大きくなるものだ。しかも北九州の有力者達だけではなく、会見のついでに来ていただけの記者達が食いついたのだ。何か情報が得られるかもしれない。もしかしたら葛原提督がわざと証拠品を隠しているかもしれない。誰かに自分の弱味を握られるかもしれない。誰かの弱味を握れるかもしれない。そんなドロドロした思惑で会場は熱気を帯びて、冷静な判断力を失う者が増えた結果、価値の低い贋作を高く売る事に成功した。

「提督、お疲れ様。凄い盛り上がりだったわね。」

「ああ、陸奥も良く働いてくれた。助かった。」

「なんだか凄い事になったわね。あれ大丈夫なの？」

「私は少し不安と期待を煽っただけだ。それに嘘はついていないからな。」

「でも商品は全部徹底的に調べたでしょう？証拠品なんて出てこないはずよ？」

「ああ、だが我々が気が付かないくらい巧妙に隠されている可能性はある。限りなく少ないがな。」

そう言つて笑うと陸奥も面白そうに笑う。

「ふふつ、悪い人ね。それと一つお願いがあるのだけど良いかしら？」

「どうした？」

「さつき私達の為に怒ってくれた人が居たじゃない？どうしてもお礼を言っておきたくて・・・」

「まあそれくらいなら良いだろう。どうせ鎮守府に帰る前に配送業者の人にも挨拶するつもりだ。」

金子さんに鎮守府へと帰還する事と配送業者に挨拶がしたいと伝えたら、すぐに代表者とさきほど大森前提督の息子に殴りかかった若者が連れて来られた。

「それでは我々は鎮守府へと戻ろうと思います。今日のご協力ありがとうございました。引き続き購入者への配送を宜しくお願いします。」

「ええ、お任せ下さい。また何かあれば是非うちを頼って下さい。」

「ええ、今後とも宜しくお願いします。陸奥。」

陸奥の名前を呼ぶと陸奥が一步前に出て、若者の前に立つ。

「さつきは私達の為に怒ってくれてありがとうございます。とっても嬉しかったですわ。」

「いや、その・・・俺はあいつがムカついたから殴っただけです・・・俺は学がねえっすけど、艦娘さん達が俺達を守ってくれてる事くらいは知ってるっす。だからそんな艦娘さん達に酷い事言っただけに、仁義ってやつを叩き込んだだけっす。」

「そう、ちゃんと私達の事を理解してくれる人が居て良かったわ。」

「そんな大したもんじゃねえっすよ・・・あとはあれっす、美人の前でカッコつけたかっただけっす・・・」

「あら？あらあら♪あなたはとつてもカッコよかったからその目的は成功ね♪」

「そ、そうっすか。」

「はっはっはっ、おめえ良かったじゃねえか!!」

照れる若者の背中を代表者がバシバシと叩く。

「艦娘達の為に怒って下さった事、私からも感謝致します。私が殴る前に手を出された事は驚きましたが。」

「はっはっはっ、そこは本当にうちの若いもんがすいませんでした。それにしても葛原提督も案外血の気が多いみたいですね。」

「職業柄舐められるわけにはいきませんからね。ではそろそろ失礼致します。」

「はい、それでは。おい、いつまで呆けてんだ。さっさと仕事に戻るぞ。」

「うっす!!」

「あんな良い人達もいるのね。」

会場から出て護送車に乗り込んだ後に、陸奥がぼつりと呟く。

「人間にはいろんな性格の奴が居る。艦娘に対する考え方もバラバラだ。さつきの奴は艦娘を好意的な目で見える奴で、直情的な奴だっただけだ。だからと言ってあいつの全てが信用出来るわけではないぞ？

状況次第では敵に回るかもしれない。」

「そう・・・提督は疑い深いのね。」

「そうでなければ権力者に良いカモにされるだけだ。鎮守府のトップである私はこのくらいで良い。」

「なら私達はその分人間を信じてみたいわ。私達に好意的な人はただどね。前提督の息子みたいなのは流石にお断りだわ・・・」

「あれこそ底辺の人間だ。流石にあのレベルの奴ばかりではないさ。」

まあ、そのぶん知性もお粗末なものだったから、敵対しても怖さを感じなかったがな。



## 167話（綾瀬さんと久藤提督の裏話）

さてさて、葛原提督はなかなか面白い事をしてくれましたなあ。なにはともあれこれで源さんも完全に政治生命を絶たれましたし、私の期待通りに事が進んでなによりですなあ。それはともかくまずは報告をしておくべきですね。

「お世話になっております久藤提督。綾瀬です。」

「おう、どうした？」

「葛原提督の会見とオークションが終わりましたので、ご報告をと思ひまして。」

「ほう、何があった？」

「会見の内容としては平凡なものでした。大本営の発表する内容をそのまま読んで、噛み付いて来る記者達に反撃をしたくらいでしょうか？ ああ、源さんが突っ掛かって捕縛されましたね。その時に提督暗殺未遂の容疑者に仕立て上げられましたね。」

「どういう事だ？ あのバカが会見の場で葛原を殺そうとしてたのか？」

「いえいえ、流石にそんな事態にはなっていないません。先日平川市長が暴走して、北九州鎮守府に暗殺者を送り込んだ事件があったでしょう？ その件の罪を葛原提督が源さんに擦り付けたのですよ。」

「ほう？ 俺が隠蔽に協力してやった件を公表したか？」

「そうですね。捕縛するきっかけさえあれば罪状なんて後からどうとでもなるというのに… 冤罪を吹っ掛けてまで潰しにかかるとは、葛原提督はかなり源さんの事が嫌いのようですね。」

「はっはっはっ、それはそうだろうな。あいつらが性格的に合うわけがない。それにどうせ真犯人の平川は死んでるんだ。提督の暗殺未遂なんていう強力なカードを使える時に使っただけだろう。こつちとしては多少憲兵隊の評価が下がるくらいしかデメリットは無い。充分許容範囲内だな。」

まあ、久藤提督側から源さんの逮捕に協力するように働きかけたのだ。多少のデメリットは飲み込んで貰えるか。

「それと大森提督の遺族の二人も、会見とオークションの間に裏で捕縛したと金子さんから聞きました。配送業者の者が数人見ていたとの事です。」

「ほう、金子の奴がわざと一般人の目に入るようにしたんだろう。完全に情報が漏れない状態でやるより、多少情報が漏れるくらいでやったほうが、信憑性が高まるつてもんだ。元から秘密にするつもりが無いならその方が良い。後から本当は罪も無いのに憲兵隊が捕縛したなんていちゃもんつけられても面倒だ。」

「そこは金子さんも弁えてくれているようですね。なので久藤提督のご意思に反して動いていた奴らの処理は滞りなく終わっています。ですがオークションで少々問題がありました・・・」

私としては葛原提督と久藤提督で揉めて欲しくは無いのですが：これは流石に報告しなくてはまずいでしょう。

「ほう？葛原のやつは何をしでかしたんだ？」

「オークションで大森前提督の遺品を売る前に、贋作であると宣言してから開始しました。私も最初は意図が読めなかったのですが、取り敢えず葛原提督との友好関係をアピールする為に、最初の商品を最安値で落札しました。」

「・・・ほう、それで？」

「その後に私が購入の手続きをしている時に、思い出したように一つ注意点を説明されました。なんでも平川元市長が逮捕された一件の決定的な証拠は、とある美術品の中に隠されていた。万が一購入した美術品の中から証拠品が出てきた場合、北九州鎮守府か憲兵隊に連絡するようにと・・・」

「・・・はっはっはっ!!これはまた面白い事を考えたな!!」

ほほう、これは少し意外な反応ですな。

「まあ、その後はかなり荒れましたよ。北九州の有力者達は当然後ろ暗い事がありますから、愚かな一部の者達がなんとか自分で商品を確認しようとして躍起になっていました。しかもそこに少しでも情報が欲しい記者達や、他の地域から来ていた有力者達も加わっていました。」

「それならさぞかし高く売れただろうな。どれにも証拠品なんて入っ

て無いだろうにな。」

「そうですね。私にも葛原提督が証拠品をわざと残すとは思えませんが、さすがそうは思わない方も多かったみたいでして……久藤提督の派閥の有力者達の中にもかなり慌てている人も居まして……」

「そんな簡単な嘘に騙されるバカが悪い。突拍子も無い話だが……おそらく美術品の中に証拠品を隠していたのを発見したというのは本当だろうか。」

「そうですね？そこに関しては私はちよつと判断を躊躇ったのですが……」

「たぶん俺と交渉する時に言ってたのがそれだろう。あれだけ強気に出てたからには、何か持っているはずだとは思っていた。」

なるほど。久藤提督相手に交渉を持ち掛けて、平川元市長を生け贄にしたという話は聞いています。その時に見つけた証拠品ですか……「それで、久藤提督はどう動くおつもりですか？」

「いや、特に方針を変えるつもりはねえな。このまま北九州鎮守府はあいつに任せる。」

今回の件でお咎め無しですか。私としてはほつとしますが、久藤提督にしては甘い判断な気がします。どうにも久藤提督は葛原提督を気に入っているようですが、葛原提督が傘下に加わったという話は聞きません。

「私としてはありがたい話ですが、本当に宜しいのですか？」

「ああ、あいつは政治には口出ししないと云っているのだろうか？ならば各種の利権は市長になるお前が握れるはずだ。それに葛原は指揮官としてもそれなりにやるようだ。湯水の如く資材を浪費していた大森に比べて、かなり少ないコストで防衛してくれそうだ。北九州を抜かれてしまったら、俺が支配する瀬戸内海に深海棲艦が入ってしまった。せつかくの深海棲艦が居ない安全な海というデカイ利権が脅かされる。それに北九州は艦娘の不正利用で大々的に報じられてしまった場所だ。そんなところでまた艦娘の不正利用で儲けようなんてバカの考える事だ。生産拠点を別の場所に移す計画は進めている。」

「なるほど。葛原提督をかなり認めていらつしやるようすな。」

「まあな。あの若さであれだけやれば上出来だ。それに頭も回るし度胸もある。反抗的なのは確かにデメリットではあるが、葛原は鶴野提督を敵に回している以上、同時に俺ともやり合うのは流石にキツイと理解しているはずだ。仲良くするわけ無いし小競り合い程度はするかもしれないが、そのくらいなら遊びの範疇だ。」

やはりかなり気に入っている様子ですな。それならば私も安心してそれなりのお付き合いが出来ますな。軍事は葛原提督に任せて、政治は久藤提督と一緒に甘い汁を吸わせて頂く。それと並行して街の再開を進めていけば、より多くの稼ぎが見込めるでしょう。

「であれば今後もそのような方針でお付き合いしましょう。北九州鎮守府に関わる業者についても、こちらの方で上手くやっておきますので。」

「それは構わんが、あんまり派手に動くとはバレルぞ?。」

「北九州鎮守府と取り引きしている業者を保護するだけですから、バレルたとしても問題ありません。」

「だがお前が俺と繋がっていると知られたら、面倒な事になるんじゃないか?。」

「それもご心配無く。というかたぶん葛原提督は私達が繋がっている事に気が付いていると思えますよ?。」

「そうなのか?。」

「ええ、私は葛原提督とお会いした時に少しでも信用を得る為に、わざと金儲けがしたいなどと汚い部分を隠しませんでした。おそらく私が汚職で稼ぐ事も織り込み済みで、私を支持して下さったと思います。そしてこの街で汚職をするならば、久藤提督と繋がりを持つ事は簡単に想像出来るでしょう。葛原提督の性格であれば、私が葛原提督の邪魔をしない限り、関わってこようとは思わないと考えています。」

「なるほどな。俺もその考えには賛成だが油断はするなよ?寝首を掻かれるぞ?。」

「ご忠告ありがとうございます。もちろん警戒は怠りませんとも。先日葛原提督がとある地元の新聞社の者と話をしたようでして、その

後で新聞社の者が私について調べていたとの情報も得ています。まあ、基本的な情報ばかりであり深く探る様子は無かったので泳がせていますが、一応マークはしてあります。」

「ほう。葛原の弱点は使える人間が少ない事だ。北条工業を本格的に頼れば話が変わるかもしれないが、今のところそんな素振りも無い。」

「そうですねえ。そういう意味でも鎮守府に関わる業者を保護する事は有効でしょう。多くの業者が競い合うように関わるよりも、少ない業者に任せたほうが監視もしやすいですから。」

「そうだな。葛原も特に不便が無ければ気にしないだろう。それにしてもお前は中々優秀だな。」

「久藤提督に褒めて頂けるとは光栄です。」

「では今後の北九州の政治は任せたぞ。俺も協力してやるから上手くやれよ。」

「ありがとうございます。それではこれで失礼します。」

ふう・・・なんとか上手くいきましたね。これで私の政治生命は先ず安泰でしょう。もし葛原提督と久藤提督が戦う事になったら、私も巻き込まれてしまうかもしれないのでかなり不安でした。これなら安心して金儲けが出来ますね。

## 168話（むつちゃん&春雨ちゃん&悪雨ちゃん）

「ねえ、さつきから少し気になる事があるのだけど、聞いても良いかしら？」

護送車から降りて憲兵隊達と別れてからすぐに陸奥が尋ねてきた。憲兵達には聞かれたく無い話か？

「なんだ？オークションでの事か？」

「いえ、その・・・なんでずつと春雨ちゃんと手を繋いでいるの？」

「そ、その・・・ダメ・・・ですか？」

「ああ、ごめんなさい。別に責めてるわけじゃないから安心してね？ただずつとそうしてるから気になっただけなの。」

陸奥の質問に春雨が暗い反応をしたため、陸奥が慌ててなだめる。確かに護送車に乗る前あたりから春雨が手を握ってきたので、好きにさせていた。

「今回の一件は春雨には少し荷が重かったようだな。会见で人間の悪意に晒されて、少し怖い思いをさせてしまったようだ。それで心細くて手を握ってきたようだ。」

さらに言えば深海棲艦化対策でもあるだろう。人目があるからか抱き着いてくるのは我慢しているようだ。

「そう・・・春雨ちゃんも怖い思いをしたのね・・・」

「・・・陸奥も怖かったのか？」

「そう・・・ね。やっぱり視線とかは凄く気になったわね。私だって男の人が私達をどう見ているかは、それなりに理解しているつもりよ？配送業者の人達みたいになちよつと胸とか足とかに視線がちらちら集まるのは仕方ないかなあって思うけど・・・あの殴られた人みたいに獲物を狙うような目を隠そうともしないのは、流石になちよつと怖かったわ・・・」

「なるほど、視線か・・・今後はそういうところにも配慮をするべきか・・・」

そういう連中に手出しをさせる気は無いが、うちの鎮守府には性的なトラウマを抱える者も多い。

「そうして貰えると嬉しいわ。でも提督はそういう部分ではちよつと不思議なのよね?」

「何がだ?」

「提督の視線からはそういう欲みたいな物を感じないんだもの。防衛戦の後で私達が中破してた時も特に何も無かったわ。ジロジロと見るわけでもないし、慌てて目を逸らすわけでもないし・・・なんて言うか、損傷の確認はしたけどそれだけみたいなの?」

「・・・それが普通では無いのか?」

「少なくとも前の提督はジロジロ見てくるタイプだったわね・・・」

「そうか・・・あまり気にした事はなかったが、気になるのであれば配慮するべきか?」

だが損傷の確認はきちんとしておくべきだと思ひ、艦娘達が帰還してきたら報告を受けておきたい。

「うくん?どうかしら?提督はあまり意識しなくて良いかも知れないわ。普通に損傷の確認をするくらいなら文句を言う娘はほとんどいないはずよ。逆にあまりにも感情が感じられない視線だから、ちよつと不気味に感じたくらいかしら?」

「・・・どういう事だろうか?」

「えつと・・・私達をそういう目で見てないのは助かるのだけど、提督が何を考えてるのかわかりにくいって言うか・・・ほら?普通あるじゃない?作戦が無事に終わってほつとしたとか、自分の指揮で敵を倒せて嬉しいとか、逆に私達の動きが悪くて怒ってるとか・・・そういう感情があまり感じられなかったから・・・ピリピリした緊迫感だけはいつも伝わってくるけど・・・」

「私は指揮官としてお前達の命を預かっている。そして指揮官の動揺はお前達に悪影響を与えるだけだ。だから冷静さを保つように心掛けてはいるな。」

そう伝えると陸奥が少しだけ考え込む。

「・・・そうね。指揮官としてはそれが正しいと私も思うわ。だからこれは私のわがままだけど、オフの時くらいはもう少しだけ心を開いて欲しいかな?提督だって人間なんだから張り詰めてばかりだと保た

ないわよ？何かあればお姉さんが相談にのってあげるから♪」

心を開くか………なかなか難しい話だな。

「そうか……考えておこう。」

「そう？それじゃあ私はここで失礼するわね。」

「分かった。今日はオークションの補佐を務めてくれて助かった。ゆっくりと休んでくれ。」

「ふふっ、ありがとう♪」

陸奥は微笑んでから艦娘寮の方向に歩いていった。それにしても人間というか男の視線に恐怖を感じると言っていたな……トラウマを持っていく艦娘も多いだろうから、そこらへんの意識調査もするべきか？だが男性である私が不用意に踏み込めば、余計にトラウマを刺激する事にならないだろうか？検討と情報収集が必要か？

「し、司令官、少しだけお時間良いでしょうか？」

春雨が手をギュツと握りながら聞いてくる。おそらく深海棲艦化対策だろうな。先程からずっと私の手を握る事で我慢しているようだが、早いところ落ち着かせるべきだな。

「ああ、だがその前に大淀に連絡を入れてくれ。鎮守府に帰還した事と、少し倉庫区画に寄ってから執務室に戻ると伝えてくれ。」

「分かりました、はい。………了解しましたと言っています。」  
「では行こうか。」

春雨を連れて倉庫の一つに入る。周囲に人の気配は無いし入口の鍵をかけたので、誰かに見つかる事も無いだろう。そう考えていると予想通りすぐに春雨が抱き着いてきた。というかもうすでに悪雨か？

「ずっとずっとずっと我慢してたわ……」

「……よく耐えたな。」

「あいつら何様のつもりよ!!私達が守ってあげたから死なずに済んだのよ!?それなのにあいつら私の司令官に悪意を向けて!!そんなに死にたいなら私が殺してあげるわよ!!」

余程ストレスを抱え込んでいたのか、さっきまで特に変化が無かつ



た悪雨の髪の色が真っ白に変化する。髪の色で深海棲艦化の進行度合いが分かるのは助かるが、これはかなりマズイ状態だな。

「おい、少し落ち着け。」

「でもあいつらはあなたを疑い貶め侮辱したのよ!?!しかもあなたを責めてクビにしようとしていたのよ!?!私は新しい司令官なんて絶対に嫌!!あなたの他に誰が私みたいな深海棲艦もどきの半端者を受け入れてくれると言うの!?!私からあなたを奪おうっていうなら殺しても阻止してやるわ!!」

「少し落ち着け。あの程度の事で私をクビにしたりは出来ない。今回は大本営がこちら側に付かざるを得ない状況だったからな。それによ源さんと大森前提督の遺族とやらは、捕縛してしまっただろ?」

「捕縛だけでしょ?前任者の息子がボコボコにされてたから少し気は紛れたけれど、本当は殺してやりたかったわ・・・平川元市長の時は撃ち殺したじゃない?なんで今回もそうしなかったのよ?」

そう言えば平川市長が殺された時に春雨もそこに居たのだったな。咄嗟に目隠しをして現場を見せないようにはしたが、流石にあの状況で音が聞こえれば理解出来るよな。

「あれはそもそも私の意志ではなく、金子さん・・・というか久藤提督の意志でやった事だ。それにあんなに人が集まる場所で殺したら大問題だ。まして悪雨に手を汚させたらその時点で日本中を敵に回す事になる。深海棲艦だけでなくあの横須賀の艦隊も敵になるぞ?」

「それは・・・分かってるけど・・・」

横須賀鎮守府を敵に回すという恐怖で、流石に少し落ち着いたか・・・味方としては頼もしい反面、敵に回せば理不尽な戦力差がある。もし仮に悪雨が深海棲艦としての能力を開放したとしても、相手は姫級を数多く屠ってきた奴らだ。まず間違いなく殺される。

「ついでに言えば捕縛された奴らだが、あいつらは久藤提督の傘下でありながら久藤提督の命令を無視して動いたらしい。久藤提督の性格ならば当然けじめをつけさせるだろう。消される可能性も充分あるし、もし仮に生かされても真っ当な人生は送れないだろう。それで納得してくれ。」

「……そうねえ。ちゃんと頭を撫でてくれるならそれで納得してあげるわ……」

今の話となんの関係があるかは理解出来ないが、それで落ち着くと言うなら仕方ないか……

「……これで良いか？」

「悪くはないわ。」

だんだんと髪の色が元のピンクに戻っているから、悪雨の怒りも鎮まってきたのだろう。しかしこうもストレスを溜め込み易いとなると、今後の悪雨の運用について考えなおす必要があるか……対人間の切り札として護衛をして貰っていたが、この調子だといつ爆発してもおかしくない……

「悪雨……人間は憎いか？」

「……少なくとも私は人間そのものを憎んでる訳じゃないわ。あなたや私に悪意を向けて来る奴に、それ相応の悪意を向けてるだけよ……」  
「そうか……しかし一々悪意に反応していたら、この先苦労する事になる。ある程度の嫌味程度なら受け流せるようになって欲しい。」

「……努力はするわ。」

とりあえず今はここまでか。あまり追い詰めても逆効果になる。今後の様子次第でこのまま護衛の仕事を任せるかは考えよう。

「あ、あの……ありがとうございます。」

髪の色も綺麗なピンク色に戻って、雰囲気もかなり落ち着いたようだ。とりあえず悪雨の怒りは静まったようだな。

「もう大丈夫か？」

「大丈夫です、はい。あの……悪雨ちゃんには私からもちゃんとお話ししますので……」

「そうか。頼むぞ。」

「は、はい!!」

最後に軽く頭を一撫ですると春雨は抱き着くのを止めて離れた。ふむ、顔色もかなり良くなっているな。

「あ、司令官、どうやらお客様が正門に来られているようです。」

「ほう、誰が来ている？」

「えっと・・・海原朔真さんです。」

「朔真か・・・」

あいつ何をしに来たんだ？話があるならオークション会場で話をして来れば良いだろう？わざわざ私が鎮守府に戻ってから来ると言う事は、余程秘密にしたい話があるのだろうか？

「では応接室に案内するように大淀に伝える。私もすぐに向かう。」

「分かりました、はい。」

## 169話（海原朔真提督候補生）

応接室の前に到着すると扉の前で曙が待機していた。

「朔真はもう来ているのか？」

「ええ、今中で大淀さんが応対してるわ。」

「そうか、私が留守の間に何か変わった事は？」

「横須賀の艦隊が周辺海域の調査をした結果、小規模な拠点をいくつか潰したけど、大きな拠点は無かったとの事よ。あと長門鎮守府に向かった木曾さん達だけど。長門鎮守府はかなり手酷くやられたみたいね。今は私達が輸送した資材を使って、最低限活動するのに必要な施設の復旧作業中よ。あと木曾さん達が周辺海域の哨戒をしたけれど、敵影無しだったわ。」

なるほど。横須賀が問題無いと判断したならば、一先ずは大丈夫なのだろう。長門鎮守府の復興にある程度時間がかかるのは仕方ない。そこは定期的にフォロワーするしかないな。

「分かった。では曙は執務室に戻っていてくれ。朔真は私と大淀で対応する。」

「分かったわ。それにしても下の名前で呼ぶなんて、かなり親しい間柄なの？」

「そういう訳ではない。あいつがいずれ提督になった時に海原だと兄と被ってしまうから、下の名前で呼んでくれと言っていた。ただそれだけだ。」

「ふーん、そう。じゃあ私は執務室に戻ってるわ。何かあったら大淀さん経由で連絡するわ。」

「ああ、任せた。」

さて、では自分は朔真の相手をするか・・・今回はいったい何を企んでいるのやら？

応接室に入ると既に朔真が座っていて、大淀がお茶を出していたようだ。朔真は自分が応接室に入ると、まるで旧友に久し振りに会えたかのような良い笑顔を向けてくる。相変わらず胡散臭い奴だ。

「待たせたな。それで何をしにここに来た？」

「はあ・・・君は相変わらずだね。君が大変な目にあっていると聞いて心配になったから様子を見に来たというのに・・・会見の時に巻き込まれた文句も含めて話をしようとしたのに、オークション後すぐに鎮守府へ帰ったと聞いて慌てて追い掛けて来たのさ。」

「そうか、それで？何を企んで今回の一件に絡んで来たんだ？」

「おいおい、企むだなんて人間きが悪い事を言わないでくれよ・・・学友の窮地に駆けつけようというのがそんなにおかしな事かい？」

朔真は一見兄である海原提督のような誰にでも優しい性格に見える。心優しく偉大な兄に憧れてその背中を追う弟。世界平和を願う兄の力になりたくて努力する弟。そして兄同様に人当たりの良い人格者。これが海原朔真という男の周囲からの評価だ。だからこそ自分の感覚が胡散臭い奴だと警鐘を鳴らしている。

「なら会見の時に記者達を黙らせる為に役に立って助かった。礼を言う。ではこれで学友を助けるという目的も達成したな？そろそろ帰ったらどうだ？」

「やれやれ・・・どうして君は僕をそんなに毛嫌いするんだい？僕としては君とは上手くやっていきたいと思っっているんだけど？」

「そうだな・・・何を考えているか読めない有能な奴がニコニコしながら近づいて来る。これを警戒すると言われてもな。」

「ははは、君に有能だと認められるのは悪く無い気分だけど、まさかそこまで評価が高かったとは思わなかったよ。結局艦隊指揮では君にも小森さんにも勝てなかったのにな・・・」

「だがお前は負ける度にその敗北を糧に成長して、私にいつも喰らいついてきた。油断出来ない相手だ。最初はただ兄の偉業に継る勘違い野郎だったのにな。」

「ははっ・・・本当に君は手厳しい事を言うね。でもそうだね。士官学校に入ったばかりの僕はそう言われても仕方なかった・・・だから僕の目を覚まさせてくれた君にはこれでも感謝しているんだよ？」

確かにあの頃の朔真は自分は他の提督候補生とは別格だと考えていたようだ。まあ、偉大な兄のやり方を見せて貰っていたのだから、

他の奴らより格段に艦娘の運用について知っていた。慢心するのも無理は無い。初めて会った時も表情は穏やかな笑顔だったのに、なんとなくこちらを下に見ている雰囲気伝わってきたのを覚えている。「そうか・・・だが私は気に食わない奴を演習で叩きのめしただけだ。他の奴らと同様にな。」

「そういうとは思ってはいたよ。君は本当に喧嘩っ早いからなあ・・・」  
「そういう性分だ。だが噛み付く相手くらいは考えている。」

「鶴野提督に噛み付く奴が言っても説得力がないよ。」

「そうか。それで？もう一度だけ聞くが・・・何をしにここに来た？」

話を全然進めようとしないので少しだけ圧を込めて言うが、朔真はやれやれといった雰囲気を受け流す。まったく関係無い大淀を怖がらせてしまっただけか・・・

「そんなに警戒しないでくれよ。最初から言っているように様子を見に来ただけさ。それでも僕は君に対しては真摯に向き合っているつもりなんだけど、なかなかどうして信用して貰えないのだろうね・・・」  
「ならばもう少し情報を開示してみたらどうだ？お前の目的がなんなのか？とかな。」

「それも随分前から言っているだろう？僕の目的は兄さんの理想を叶える手伝いをする事だ。人類と艦娘が手を取り合って幸せに暮らせる世界を勝ち取る事。それが僕と兄さんの変わらない目的さ。」

「だがお前は綺麗事で世界が変わらない事を知っているはずだ。」

「・・・難しい事は分かっているさ。」

そこで言葉に詰まるところが朔真と海原提督の違いだろう。海原提督ならば綺麗事と言われようが、いつかその夢が叶うと信じているように思う。それに対して朔真はもう少し現実を見ている。だからこそ綺麗事を吐き続けるこいつが胡散臭いのだ。兄を狂信的に信じている奴なら、その程度の男だと切り捨てれば良い。悪意を持ってこちらを騙そうとする奴ならば、こちらとしても対処が簡単だ。建前として綺麗事を並べておいて現実的な話をするならばそれも悪くない。だがこいつは何がしたいのかよく分からない。かと言って無能がフラフラと目的なく動いているのとはまた違う。本当に厄介な相手だ。

「難しいではなく無理だ。深海棲艦という明確な脅威があってもなお人間同士で争うような奴らだぞ？そんな奴らが話し合いなんかでまとまるわけがない。もし一つにまとめる方法があるとすれば、圧倒的な武力を背景とした恐怖による政治くらいだろうか。」

「それは兄さんの理想からはかなり外れているね。この話を続けても無駄に長くなるだけだから、そろそろ本題に入らせて貰えるかな？」

「良いだろう。なにが聞きたい？」

「今の君の立ち位置とこれからなにがしたいかだね。」

「北九州鎮守府の提督でこの鎮守府を強くしたい。以上だ。」

「ふう・・・そういう事を聞いているんじゃない君なら分かるだろう？」

「分からないな。何が聞きたいかはつきりと言ってみたらどうだ？」

「ならそうだね、4大鎮守府との関わり方とかはどうだろうか？」

ふむ、ようやくこいつも少し踏み込んで来たか。だが質問としては軽いものだな。

「そうだな・・・横須賀鎮守府はその戦闘能力の高さを見させて貰った。超えるべき高みではあるが、海原提督の性格を考えれば敵対する事は無いだろう。傘下の奴らとは気が合いそうに無いがな。佐世保鎮守府とは距離も近く軍人氣質な人間の集まりだ。馴れ合う事は無いが軍事的な協力はするだろう。呉鎮守府と舞鶴鎮守府からは嫌われているから、向こうの出方次第だな。」

「そうなのかい？横須賀・佐世保・舞鶴は良いとして、呉鎮守府とはそれなりに繋がりがあるんだろう？君の最近の動向を調べたらなんとなく察するさ。」

なんとなくねえ？その目は確証を持っている人間の目だ。きちんと情報を集めて来ているらしい。どこまで知っているかは疑問だが・・・

「利害関係で少し取引をしたただけだ。馴れ合うつもりは無い。」

「ははっ、君らしいね。でもこの街の有力者はほとんどが久藤提督の派閥の人間だろうか？そこはどう考えているんだい？」

「私は軍人であって政治家ではない。鎮守府の運営に支障がなければ

関わるつもりは無い。」

「とはいえ資金の重要性を知らない君では無いだろう？」

「だからと言って金儲けの為に時間を取られて、鎮守府の運営が疎かになれば本末転倒だ。そもそも鎮守府をまともに運営するだけならば、通常の運営資金と深海棲艦の討伐褒賞だけで充分だ。」

「なるほど。じゃあどうしてさつき有力者や記者達を騙して金を巻き上げたんだい？」

やはりさつきオークションでの一件も理解していたようだな。しかも汚職の証拠があるかもしれないと言っておきながら、実際には徹底的に調べた後だという事も理解しているようだ。まあ、これくらいは朔真なら理解して当然か。

「騙すとは人間が悪い。可能性を示唆しただけだ。それにどうせ大森提督の遺品の処分は、やらなくてはならない仕事だ。ならば高く売れる方法を試しただけだ。」

「ふふっ、そうかい。じゃあ最後に今後の方針とか聞いても良いかな？」

「私はこの鎮守府を強くする。そのためには演習と実戦を積み重ねるしかないだろう。」

「じゃあ佐世保の傘下から演習を挑まれているらしいけれど、それも受ける気かい？」

ほう、そんな情報も仕入れているのか・・・こいつはどこから情報を入手しているのだ？士官学校では派閥を問わずに仲良くしているから、そこから流れてくる情報なのか？

「条件次第だ。」

「そうかい。とりあえず聞きたい事も聞けたし、僕はそろそろ帰るとしようかな。」

「そうか。こちらから情報を得るだけ得てから、何もせずに帰るか。」  
「その言い方は卑怯だね・・・なら少しだけ。今回の一件で大本営側は手痛いダメージを負ったみたいだ。本当は鶴野提督と久藤提督を巻き込んで、双方の力を削ろうとしたみたいだけど、二人に感づかれて警戒された形だね。今後どうなるかは分からないけれど、大本営側は



今よりももつと動きにくくなるだろうね。」

なるほど・・・鶴野提督が今回の件に否定的だったのはそれが原因か。それに久藤提督も今回の件に関してはやけに慎重で、傘下の者達が問題を起こさないように手綱を握っていたし、命令に背いた奴らを手早く処分していた。大本営の思惑を警戒した結果だったか。

「なるほど。悪くない情報だ。」

「それは良かった。じゃあ僕はそろそろ行くよ。君の今後の活躍に期待してるよ。」

「ああ。大淀、正門まで送ってくれ。」

「分かりました。ではこちらに。」

朔真が大淀に連れられて退室したことでようやく一息つける。あいつの相手をするのも疲れるな・・・

## 170話（夜戦忍者お説教）

面倒な奴の相手も終えて執務室に戻ると、中では曙が黙々と書類仕事をしていた。

「どうだったの？」

「多少は有益な情報を吐いたが、まだまだ隠し事が多いようだな。」  
「・・・まるで尋問したみたいな言い方ね。」

尋問か・・・本気で情報を引き出すなら有効かもしれないが、とてもじゃないがリスクが高すぎる。犯罪者とかが相手なら使えるかもしれないがな。

「流石にそこまでは出来ないな。」

「・・・そこまでは？」

「多少強引に迫って圧をかけたくらいだ。あとは向こうの質問にも答えてやったから、一応対等な取引だとは思うぞ？」

「そう。そのくらいなら問題無いわね。間宮さんから夕食の準備が出来たって連絡がきてるわよ。それと横須賀の艦隊もそろそろ帰還するそうよ。」

「分かった。では間宮には食堂を開けるように伝えてくれ。それと先に木曾達と通信がしたい。」

「分かったわ。・・・はい。」

「木曾か？」

「ああ、どうした？」

「そちらの状況はどうだ？」

「そうだな・・・長門鎮守府の状況は良くないな。妖精さん達が大急ぎで施設の復旧をしている。明日の朝には鎮守府として最低限の設備が復旧するらしい。あと明日の朝に大本営から明石が派遣されるとも言ってたな。それと織田提督に頼まれて周辺海域の哨戒もしたが、はぐれすら見つからなかったぞ。」

ふむ、とりあえず明日の朝には最低限動けるようにはなるのか。高速建造材も渡しているし、資材もそれなりの量を送っている。最低値で建造すればとりあえずの頭数くらいは確保出来るだろう。長門鎮

守府には哨戒と資材回収に専念させて、敵艦隊を発見次第こちらから討伐部隊を送り込めば、一先ず鎮守府の維持は可能になるだろう。

「なるほど、了解した。燃料の残りはどうだ？」

「まだ半分以上は残っているぞ。」

「では最後にもう一度哨戒をしてから北九州鎮守府に帰還してくれ。」

「それは構わないが、俺達が帰還したら長門鎮守府が無防備になるぞ？」

「それは別の艦隊を送るから安心しろ。霞にもそう伝えておいてくれ。」

「分かった。では行ってくる。」

「任せた。」

あとは長門鎮守府へ夜間の哨戒に行かせる艦隊を編成するのだが・・・まあ、あいつしか居ないよな・・・

食事の時間になったので間宮さんから姉さんの食事を受け取って、姉さんが入れられている営倉へと向かう。今回の一件で姉さんは多大な功績を残したものの、提督の命令に反する行動をしてしまいましたので、営倉送りへとなってしまいました。あれでも姉さんは夜戦ではあまり無茶はしていなかったはずだ。そんな姉さんが率いる艦隊を轟沈寸前の戦艦棲姫がほぼ壊滅状態まで追い込んだという。本当に恐ろしい相手です・・・陽炎さん達の活躍で仕留める事が出来たものの、全員生還した事が奇跡のような状況でした・・・姉さんも少しは反省してくれると良いのですが・・・

「あ!!神通じゃん!!なにに!!そろそろ夜戦の時間!!夜戦の時間だよね!!」

「はぁ・・・夜戦ではなく夕食の時間です。姉さんは謹慎中なのですよね?ちゃんと反省しているのですか?」

「も、もちろんしてるよ!!私だって今回は失敗しちゃったなあとは思ってる!!」

「それなのにもう夜戦の事しか考えてないのですか?」

「いやそのほら!!私に考えがあつてね!!」

「どんなお考えですか？」

「確かに今回は提督の考えを読み間違えてしまったのが原因だと思うけど、原因はそれだけじゃないと私は思ったんだ。」

「どういう事でしょう？今回は姉さんの勘違いから始まって、周りの人達も同調してしまったのが原因のはずですけど・・・まさか旗艦を任ざれておきながら、他の人達にも原因があるなんて言いませんよね？」

「それで？他の原因とはなんででしょうか？」

「それはつまり私達の実力不足だよ!!」

「実力不足ですか？」

「そう!!実力不足!!まさかあんなに弱ってる相手に止めを刺すだけで、あんなに被害を受けるとは思わなかったからね・・・夜戦なら誰にも負けないって思ってたけど、まだまだ修行不足だったよ・・・」

「それは分かりますが・・・姉さんが怒られている部分とはかなりズレてませんか？」

「そこはあれだよ。よく考えてみて？もし私達が戦艦棲姫に余裕で止めを刺せるくらい強かったらどうだったと思う？」

「そうですね・・・それなら艦隊に大きな被害を出す事なく仕留められたとは思いません。」

「だよね!!だったら提督からの命令だった周辺海域の掃討から逸脱してなかったし、危険を感じたらすぐに撤退しろって命令も、危なげなく討伐するなら問題無かったんだよ。」

「えつと・・・」

「つまり同じ失敗をしない為にはもつと強くなる必要がある!!だからもつともつと夜戦をするべきだと私は考えたんだ!!」

「姉さんは本当に夜戦バカですね・・・姉さんの無茶な行動を責められたはずなのに、どうして結論が夜戦をするになるのですか・・・」

「はあ・・・良いですか姉さん、そもそも「あつ?!提督の足音だ!!」

「姉さんにお説教をしようかと思ったら、どうやら提督が営倉へと来ているようですね。それにしても足音だけで誰か判別出来るなんて、姉さんの感覚は相変わらずですね。」

「ん？神通も来ていたのか？」

「はい、姉さんに夕食を持って来たところです。姉さんになにかご用事でしょうか？」

「ああ、川内、反省したか？」

「もちろん!!」

「では今回の一件では何が悪かった？」

「それは

「はい・・・すみませんでした・・・今後は提督の指示をちゃんと守って無茶な行動をしないように、充分気をつけます・・・」

「分かれば良い。」

流石は提督ですね。姉さんが先程私に言った事を自信満々に提督に語ったところ厳しい叱責を受けて、姉さんは営倉の中で正座して意気消沈しています。やはり姉さんに言い聞かせるならこのくらいはしなくてははいけませんね。

「ちゃんと反省をしたなら次の話だ。川内には食事を済ませたら長門鎮守府周辺の夜間哨戒に出てもらおう。」

「え!?夜戦!?夜戦に行つて良いの!？」

ええ!?もう姉さんを夜戦に出すのですか!？」

「あくまでも目的は長門鎮守府の防衛だ。現在の長門鎮守府はまともに機能していない。つまり駆逐艦一隻でも近付けば危険な状態だ。一応霞が着任しているが基地レーダーも機能していない状態で、駆逐艦一隻で防衛するなど無謀過ぎる。だから索敵能力に優れる川内に長門鎮守府周辺の警備を任せる。」

うう・・・確かにその状況であれば姉さんの索敵能力が欲しい状況ですね・・・もし姉さんを出撃させないのであれば、複数の艦隊で警戒する必要があります。そうなると北九州鎮守府の防衛が手薄になりますし、資材の消費も増大します・・・仕方ないですね・・・

「もちろん任せてよ!!絶対に駆逐艦一隻すら通さないから!!」

「期待している。それと念を押しておくが、もし自分達で対処しきれないかもと思つた場合は、すぐにこちらに連絡して増援の要請をし

ろ。絶対に抜かれたらいけない事も考慮した上で判断する事だ。分かったな？」

「は、はい!!大丈夫です!!」

「では艦隊の構成だが」

「提督、少し宜しいですか？」

「神通、どうした？」

「私も是非その作戦に参加させて下さい。前回の夜戦で私は失敗してしまいました。今度こそ冷静さを保って防衛任務を遂行する所存です。ですから名誉挽回の機会を与えていただけませんか？」

「ふむ、先程も言ったが今回は長門鎮守府の防衛が最優先だ。名誉挽回の為に功績を焦ればそれは逆効果だと理解しているか？」

「はい!!任務の遂行こそが名誉挽回の手段だと心得ています!!無茶な攻勢に出るような真似は絶対にしません!!」

「ならば神通にも出て貰おう。あとは潜水艦対策として五十鈴、火力持ちとして高雄を出そう。それと島風と雪風で良いか？」

「うくん?やりすぎな気もするけど、万が一にも抜かれたらいけないからね。それで良いと思うよ。」

「ではこれでいこう。大淀に通信で伝えてくれ。そしてすぐに食事を済ませて準備をしろ。」

「はい!!」

## 171話（ドロップ組と食事）

大淀経由で夜間哨戒の話は伝わったので、そろそろ自分も食事をしようとう食堂に向かう。先程横須賀の艦隊も帰還したとの報告があったが、まだ横須賀の艦娘達は食堂に来ていないな。おそらく入渠等を済ませてから食事にするつもりだろう。

「提督さん、お疲れ様です。少し宜しいでしょうか？」

「ん？鹿島か。どうした？」

「本日の夕食ですが、もし宜しければ私達とご一緒して頂けないでしょうか？新たに着任した娘達で集まっています、提督さんがどのような方なのか知る為に交流の場を設けて頂ければと思います。」

そう言われれば色々立って込んでいたので、直接話をする機会がなかったな。

「分かった。案内してくれ。」

「ありがとうございます♪ではこちらに。」

鹿島に案内されたテーブルにはプリンツ・オイゲン、秋月、山風、村雨が居た。村雨とは一度話をしているのだが、先日ドロップ艦として着任したばかりだから来たのだろう。なにはともあれ手早く食事の準備を整えたのだが……

「……ちよつと待て。」

「なんででしょう？」

「なぜ秋月の食事だけ質素なんだ？」

今日の夕食は鶏の唐揚げにサラダと味噌汁なのだが、秋月の食事は白ごはん味噌汁と漬物になっている。どうして着任したばかりの秋月が冷遇されなければならないのだろうか？なにかの罰だとしても自分になんの話も無いのは問題だ。

「す、すみません……その……豪勢な食事に慣れていないものでして……」

ん？豪勢な食事に慣れていない？どういう事だ？

「ん？唐揚げくらいなら一般的な料理だと思うが？」

「と、とんでもないです!!あまりの豪華さに少しクラクラしてしま

うくらいです!!」

「提督さん、秋月さんなんですけど、今朝の食事の時に昨晚の残り物を見て卒倒してしまいました・・・」

鹿島がフォローに入って来たのだが、食事を見て卒倒するとはにわかには信じ難い。

「まあ、確かに昨晚の食事は北条が高級な食材を持ち込んでいたから、物凄く豪華なものだったけど・・・卒倒する程のものなのか?」

「えつとですね・・・秋月さんは軍艦時代の記憶の影響もありまして、かなり儉約家なんですよ。」

「はい、ただでさえ銀シャリを頂ける贅沢をしているというのに、その上豪華なおかずまで頂けるとなると落ち着かなくてですね・・・間宮さんをお願いしてこの食事にして頂きました。」

「そうだったのか・・・」

そう言われれば昨晚の祝勝会では、横須賀の秋月型姉妹が急に倒れて運ばれた事件があったな。叢雲からはこっちで対処するから気にしないで良いと言われて、何が原因で倒れたのか分からなかったが、もしかして横須賀の秋月型姉妹も食事の豪華さに驚いていたのか?

「はい。本当は毎食銀シャリとお漬物だけで充分満足ですと言ったのですが、間宮さんから『せっかく艦娘として現代の食事を食べる事が出来るのですよ?』うちは提督の方針で食事はきちんと食べる事になっていきます。ですからおかずを少しずつでも食べて慣れて下さい。』と言われてしまいました・・・ですから今日はお味噌汁を頂いております。」

これはかなり重症だな・・・まさか希少な秋月型姉妹にこんな欠点があったとは・・・一人だけ食事の質を落とすというのは、公平性の観点からあまり褒められた事では無いと思うのだが、命令で無理矢理食事をさせるのもまた違う気がする。横須賀の秋月型姉妹の事を考えてみても、これは秋月型の個性として受け入れるべきか?

「そういう事情があるならば仕方ない。ただこれでは私が秋月を冷遇しているように見えてしまうから、出来れば少しずつ改善して貰いたいところだな。」



「りよ、了解しました。」

「では皆も待たせたな。食事にしよう。」

「Hurra マーミヤのお料理楽しみです!!」

「それはなによりだ。プリンツ・オイゲンは海外の出身だから、食事が合うかどうかは少し気になっていた。」

「DankeDanke!」

プリンツ・オイゲンはさっそく日本に馴染んで来ているようだな。食事前に全員で手を合わせていただきますと挨拶すると、見様見真似でいただきますと言う。

「Aha アツアツのカラーゲ!!これもとっても美味しいです!!」

「やはり唐揚げは揚げたてが美味しいな。」

「流石はニツポンのキューリョー艦だね♪うんうん、お金の管理だけじゃなくて料理も出来るなんて、マーミヤは凄い人だよ!!」

「・・・ん?お金の管理?食材の仕入れに関しては間宮も関わっているが、基本的なお金の管理は秘書艦の大淀の仕事だと思うが?」

「Achso!?!皆のお給料を出すからキューリョー艦じゃないんですか!?!」

「給糧の給は供給するの給、糧は食料という意味だ。つまりは食料を供給する艦という事だ。だからここでは食事の管理を任せている。」

「Hm... 日本語は難しいですね。Danke Admiral。」

とは言いつつもプリンツ・オイゲンはかなり日本語が喋れている。ところどころドイツ語らしき言葉が出るものの、意思疎通にはあまり支障が出ない。おそらくダンケがありがとうで、アドミラルは提督という意味だと思われる。

「これから日本で過ごせば自然と覚えていくだろう。分からない事はまわりの艦娘達に聞けば良い。ちょうど同期に鹿島も居る。鹿島は練習巡洋艦という艦種で、ものを教えるのが上手だから頼ると良い。」

「はい♪鹿島で良ければ是非頼って下さい♪」  
「DankeDanke!私ニツポンの事をもっともっと知りたいです!!」

ふむ、これだけ熱心ならすぐに日本での暮らしに馴染めそうだな。

「はいは〜い!!村雨はもつともつと提督の事が知りたいで〜す♪」

「ふむ、確かにそれが今回の趣旨だな。何か質問があるのか?」

「じゃあ、提督のお気に入りのお艦娘を教えてください?」

「お気に入りか・・・あまり考えた事は無かったが、やはり大淀だろうか?」

そう呟くとどこかでガタガタと音が聞こえた。誰か転んだか?

「大淀さんか〜とどこか良かったの?」

「仕事に対して凄く真面目で責任感が強いところだな。秘書艦として様々な業務を遂行してくれるおかげで、私もかなり仕事がしやすい。」

「あ、やっぱり仕事の話なんだ・・・」

「ん?他に何かがある?」

「なんでもないで〜す。じゃあ他には誰か居る?」

「他か?間宮も安心して仕事を任せられるな。私は食堂の運営に関しては素人だ。だからその道のプロである間宮が居てくれて本当に助かった。それと明石も夕張と共に上手くやってくれている。あとは前にも話したと思うが、赤城や加賀などは現場で冷静な判断をしてくれるので評価が高いな。」

「うん、やっぱりこうなったかあ・・・」

ん?村雨の質問にきちんと答えたつもりだったが、あまり期待していた答えではなかったか?

「違うのね!!もつと提督は女の子に興味を持つべきなのね!!仕事にしか興味が無い男じゃダメなのね!!」

「イク!!邪魔しないの!!し、失礼しました!!」

「ああ!?イクはまだ言いたい事があるのねええ!!」

突然イクが会話に割り込んできたと思ったら、イムヤに引きずられて去っていく。あれはいつたいたんだっただろう?

「んんっ!!他に質問はあるか?」

「今のは無視するんだ・・・じゃあ春雨の事はどう思ってるの?」

また遠くのテーブルでガタガタと音がした。食事中にも関わらず誰かが暴れているのか?それにしても春雨についてか・・・まさか悪雨の件に触れるわけにもいかないが、なにも無いでは外出先に連れて

いる件で余計に怪しまれてしまうか・・・

「そうだな・・・戦闘面では白露型姉妹の一員として頑張ってくれている。真面目でおとなしい性格だから、外出先の連絡要員として重宝している。明るく社交的な艦娘を連れて行くと、他の人間達から情報を引き出されてしまう危険性があるからな。黙って後ろからついて来てくれるのは助かる。」

「ああ・・・そういう理由で春雨を連れていたのね。なんかしっくりきたわ。でも今回は陸奥さんも一緒だったよね？陸奥さんは大人っぽいけど寡黙な人じゃないと思うんだけど？」

「陸奥にはオークション関連で業者の人間と関わって貰う必要があったからな。ある程度柔軟な対応が出来て人当たりが良く、さらに情報漏えいのリスクまで考えられる人材となると、陸奥が最適だと考えた。もちろん充分に警戒するように伝えていた。」

「提督って警戒心強いよねえ・・・うちの山風とどっちが警戒心強いかな？」

「村雨姉・・・巻き込まないで・・・」

山風にジト目で抗議された村雨だったが、大して気にしていないようにやれやれと首を振る。

「まったくこの娘は・・・そんなんじゃ皆とも提督とも仲良くなれないわよっ。」

「・・・・・・・・別がいい。放っておいて。」

「はあ・・・じゃあお姉ちゃんから一っだけ忠告しておくけど、そんな態度だと本当に構って貰えなくなるからね？この提督に心の機微を察して欲しいとか絶対に無理だからね？」

「・・・・・・・・そう。」

山風は少し拗ねたようにそっぽを向く。なかなか気難しい性格なのだろうな。それよりも・・・

「おい、本人を目の前にしてそんな事言うのか？」

「じゃあ提督に乙女心が分かるの？」

「・・・・・・・・無理だな。」

「うん、知ってた。」

生憎そんな事を考えられらような余裕のある人生を送っていない  
のでな・・・ただでさえ性別が違うのに、そんな曖昧なものが理解出  
来るわけが無い。損得や明確な悪意であればずいぶんとわかり易い  
のだがな・・・

## 172話（佐世保傘下の下調べ）

鹿島達との夕食を終えて執務室に戻ると、既に大淀と曙が戻って来ていた。

「提督、川内さんから出撃の準備が整ったとの連絡がありました。」

「分かった、出撃させてくれ。大淀はそのまま川内達との通信を担当して、情報の共有と通信障害が発生しないか警戒してくれ。」

「はい!!お任せ下さい!!」

ん？普段は真面目に仕事をしている大淀だが、少し雰囲気が出る気がする。何か良い事でもあったのだろうか？まあ、仕事に問題がなければそれで良いか。

「ねえ、私は何をしたら良いの？」

「そうだな、佐世保の傘下の奴らから演習のお誘いがあったな。リストはあるか？」

「ええ、これよ。」

曙から貰ったリストには演習の申込みをしてきた鎮守府とその提督の名前が書かれていた。余程新人提督が熊井提督から功績を搔っ攫ったのが気に食わなかったのか、佐世保傘下のほぼ全ての鎮守府が演習の申込みをしている。

「ほう、かなり目をつけられているようだな。」

「そうね。提督が外出してる時にも何件か連絡があったけど、けっこうピリピリした感じだったわね。でもこつちを下に見ている雰囲気は感じたけど、あからさまに侮辱してきたりはしなかったわ。昨日の一件を非難する人も居なかったわ。」

「佐世保傘下の奴らは実力主義だからな。口喧嘩なんてみっともない事をするよりは、演習で叩きのめして実力差を思い知らせてやろうって事だろう。それに熊井提督が認めた物を傘下の奴らが非難するのはマズイから、侮辱的な発言は控える必要があったのだろうな。」

「そう考えるとまだまともな連中ね。それで？結局演習は受けるつもりなの？」

「条件次第だな。その条件の交渉も個別にやるのは面倒だから・・・今

回佐世保鎮守府からは演習の申込みをされてないから、佐世保傘下のナンバー2となると鹿児島鎮守府の島津提督か？」

「そうね。こっちが各鎮守府の提督の性格と戦力のおおよそのデータよ。戦力のデータは大本営で共有されているものね。佐世保傘下の人達は真面目できちんと報告をしているはずだから、このデータはそれなりに信用出来ると思うわ。提督の性格に関しては過去の実績からの予測と噂話程度のもだから、あまり確度の高い情報じゃないわ。」

曙から渡された資料はそれなりの量がある。手始めに島津提督のデータを見ると、簡単な提督自身の情報から始まり、鎮守府の戦力規模、得意とする戦術、過去の戦闘の略歴、最近の戦闘記録などが集められていた。

「……ずいぶんと準備が良いな。これは曙が用意したのか？」

「大淀さんが主導した事よ。私は手伝っただけ。」

「大淀、そうなのか？」

「はい、演習の誘いを受けるかどうかは分かりませんが、提督が判断される参考にはなるかと準備しておきました。」

「確かに凄く有用なデータだが、かなり大変だったのではないか？他にも仕事が多かったはずだが？」

「いえ、ほとんど大本営で管理しているデータを共有して貰っただけですから。それに一番時間がかかるはずだった昨晚の戦闘記録ですが、いつの間にか小森さんが作成して下さいましたから……」

「ほう、また小森が？」

「はい……私が戦闘記録の作成に手をつけようと思った時には、すでに完成したものが机の上に置かれていました。ちゃんと内容を旗艦を務めた人達に確認して貰いましたが、かなり精度の高いものでした。」

？  
 昨晚の戦闘記録の作成はかなりの難題のはずだ。特に通信が途絶えてからの川内達の動きが把握出来ないのが大きい。そして小森の性格上艦娘達の話聞いて回る事もしないはずだ。ならばいったいどのような手段で精度の高い戦闘記録を作ったのだろうか？

「大淀と旗艦を務めた者達が精度が高いと言うならばそれを信用しよう。あとで私も見せて貰う。」

「はい。それで想定よりも早く仕事が終わってしまいましたので、余った時間で少しでも提督のお役に立てる事をしようと思いついたので、データの収集をさせて頂きました。」

「なるほどな。よくやってくれた。これで交渉がスムーズに出来る。」  
「お役に立てたのであれば何よりです。」

そう言つて大淀は嬉しそうに微笑むと、川内達との通信の仕事に戻つた。資料の方にぎつと目を通すが、やはり佐世保の傘下の鎮守府には練度の高い艦娘が在席している。うちの鎮守府では練度が高めの戦艦や空母ですら改に至っている者は居ない。例外は重雷装巡洋艦の二人と川内は改に至っている。それに対して佐世保傘下の鎮守府では改や改二に至っている者がいる。ただし傾向として各鎮守府に練度の高い艦娘が数人居るが、その他の艦娘の練度は低めだ。つまり練度の高い艦娘達がふるい落としに生き残つた艦娘達なのだろう。中間層も何人かはいるので、今後はその艦娘達が育つて第一線で通用するようになるのだろう。

「ふむ、これを見てどう思う?」

曙に鹿児島鎮守府に在席する艦娘のデータを見せてみると、やはり難しい表情をしている。

「はつきり言つてうちとは練度の差が大きいわ。まともにやったら勝てないわね。特に主力の戦艦や空母の差が大きいわ。」

「逆に言えば一部の例外を除けば、巡洋艦と駆逐艦の練度は低めだ。付け入るならそこだろうな。」

「とは言つてもうちの巡洋艦や駆逐艦も練度が低いのよね・・・提督が着任してからは実戦続きだったけど、それ以前は実戦は少なかったしまともな戦い方をしてないから、実際の戦力を考えたらもつと厳しいわよ。」

「まあな・・・本来ならもつと基礎的な演習を積み重ねたいところだからな・・・」

「そう思うなら断ればいいじゃない?」

「それも一つの手だが……ここまで演習の申込みが多いと活用したくなるのでな。」

「なら負けるの覚悟で挑む？それはそれで経験にはなると思うわよ？」

「絶対に勝てる状況を作れると考える程自惚れてはいない。ただ出来る限り勝率を上げる努力をしなければ、対抗演習をする意味が無い。」  
「それはそうね……」

となると交渉でどれだけ有利な条件をもぎ取れるかにかかってくる。佐世保傘下の奴らは軍人氣質の人間が多いから、上手くプライドを刺激する必要がある。かと言って下手に挑発をするのも良くない。北九州鎮守府が強くなるまでは、姫級などの強力な深海棲艦を発見した時には佐世保か横須賀の協力が必須だ。もちろん佐世保の方が距離的に近いので、そちらの協力が得られる方が良い。熊井提督の性格なら軍事面での事なら協力して貰えるだろうが、派手に敵対した場合はどうなるかわからない。

「なかなか厄介な状況だが、そろそろ動くでしょう。鹿児島鎮守府に通信を繋げてくれ。」

「分かったわ。……はい。」

曙から通信機を受け取ってから一呼吸置く。さて、やるか。



### 173話（島津提督対話）

「北九州鎮守府の葛原です。」

「おう、鹿児島鎮守府の島津だ。今朝連絡した演習の件か？ずいぶんと遅い返答だな？」

「こちらも事後処理や会見や各地の鎮守府からの連絡などで手が回らないのですよ。」

「つまりわしの話は後回しにするくらいの重要性しか無かったと言いたいのか？」

「重要な話だからこそ、きちんと時間が取れる時に連絡させて頂いたと考えて下さい。」

「ふん、ものは言い様だな。」

チクチクと嫌味を言ってくるが、この程度ならジャブみたいなものだろう。島津提督はそれなりに年配の提督ではあるが、まだまだ血気盛んな人物だ。それがこの程度の小言で済ませているならば、まだまだ余裕はありそうだな。

「それでは本題に入らせて頂きますが、現在うちが佐世保鎮守府傘下の提督の方々から演習の申込みを受けているのはご存知ですよね？」

「ああ、当然知っておる。姫級に止めを刺したという噂の新人の実力を皆確かめたいと思っておる。」

「とは言いましてもこんなに一度に演習の申込みをされては、こちらとしても対応に困ります。」

「なるほど。それでわしに佐世保側を取り纏めて欲しいという事か？」

「話が早くて助かります。本来であれば派閥の長である熊井提督にお願いするべき話だとは思いますが・・・」

「ふん、熊井提督は忙しいからな。そのような雑事はわしが引き受けよう。」

まあ、ここまでは想定通りだな。今回の一件に熊井提督自身は関わっていない。もちろん演習の申込み自体は咎められる事ではないが、自分達の不満をぶつける為の演習で熊井提督の手を煩わせたくは

無いのだろう。

「ありがとうございます。それでは対抗演習ですが、一ヶ月後から月一回くらいのパースで順番にお相手するのはどうでしょう？これなら無理なくお相手が出来ると考えていますか？」

「はあ!?!馬鹿な事を言うな!!一ヶ月後だと!?!なぜそんなに時間がかかる!?!」

「現在私は鎮守府の立て直しをしている最中です。前任者の指揮が杜撰だった事もあり、うちの艦娘達は練度以下の戦力しか発揮出来ていません。ですからまずは基礎から叩き直す必要がありますので、対抗演習をするには時期尚早だと判断します。」

「ふざけるな!!仮にも戦艦棲姫に止めを刺したのだろう!?!ならばそれ相応の実力はあるはずだ!!」

「御冗談を・・・いくら姫級とはいえ轟沈寸前で取り巻きも脆弱な状態だったのですよ?しかもこちらは甚大な被害を受けています。これで相応の実力があると言うのは難しいでしょう。」

まあ、そんな事は言われなくても分かっているだろうけどな。だが姫級の討伐という事実は大きい。現状では横須賀と佐世保のみが討伐に成功している。あとは複数の鎮守府での連合艦隊で撃退した記録はあるものの、甚大な被害を出したうえで姫級には逃亡されている。つまり何も知らない一般人からすれば、姫級の討伐を果たした北九州鎮守府は横須賀と佐世保に続く英雄的な快挙を成し遂げたように見える。着任して一週間の新人提督が古参の提督よりも上に見られるのだ。そんな状態で長期間我慢するのは難しいのだろう。

「いや、やはり姫級討伐の功績は大きい。それだけの功績を上げた艦隊がいるならば、是非とも手合わせ願いたいものだ。先延ばしにするなど臆病な真似をするものではないぞ?」

やはりこの程度では引かないな。この程度で引いてしまうようなら交渉が終わってしまうから困るがな。

「ご理解頂けませんか・・・ですがまだ対抗演習を始められない理由が2つ残っています。」

「一応聞いてやろう。」

「まずは資材の問題です。今回の一件でそれなりの資材を入手しましたが、まだ安定して資材の回収を行う目処が立っていません。ただでさえ通常の鎮守府運営もままならないのに、そんな状態で対抗演習の連戦をすればすぐに資材が足りなくなります。」

「ふむ……確かに前任者の大森は他の鎮守府から資材を買い集めておったな……。だがそれは奴が次から次へと建造しておったからだろう？そんな贅沢をしなければ問題無いはずだ。」

やはり大森前提督の資材使いの荒さは有名だったようだな。

「いえ、そもそも通常の資材回収も杜撰なやり方だったので、これもまた艦娘達を1から教育しな必要があります。」

本当はそこまで深刻な状況ではない。資材溜まりもいくつか記録しているし、資材の輸送に関してはそこまで訓練が必要なものではない。それにドラム缶は沢山残っていたからその心配もない。

「ふむ……であればこちら側で主催すれば良い。それならば資材はこちらで用意するので問題無かろう？」

「そこで問題になるのが2つ目の理由です。そちらの鎮守府が主催する演習に参加するとなると、主力部隊と私が鎮守府から離れる事になります。月一回程度であればそれでも上手くやりますが、月に何度も留守にする事は出来ません。うちはまだそんなに安定した運営は出来ていません。」

「ならばこそ姫級を二体も討伐した今が好機だろう？横須賀が周辺海域の掃討もしたと聞く。ならば安全が確保されているうちに演習を済ませてしまえば良いではないか？」

「逆に言わせて貰いますが、立て続けに姫級が二体も現れたのですよ？三体目が現れないと何故言い切れるのですか？私としては三体目が現れる兆候を見落とさないように、警戒を厳重にするべきだと考えています。そんな時期に鎮守府から離れるなど考えられません。」

流星に慎重論が過ぎるかもしれないが、完全に否定出来る内容でもないはずだ。新たな姫級がいつどこで現れるかなんて誰にも分からないのだから。もちろん滅多に現れるものではないが。

「ええい!!臆病者め!!ならば我々が資材の支援をしてやって、なおか

つ北九州鎮守府で対抗演習をすれば問題なからう!？」

ほほう、思ったよりもあつさりよこの条件を引き出せたか。余程うちと演習をして勝つ事に執着しているようだな。資材の心配も鎮守府を留守にする心配もなく対抗演習が出来るならば最高の条件だ。

「まあ・・・そうですね。」

「ここまで譲歩してやったのだ。日程や演習のルールに関してはそちらに譲歩してもらおうぞ?」

「仕方ありませんね・・・ただ一つだけ言わせて貰いますが、先程お伝えした通りうちの艦娘達の戦闘能力はかなり低いです。まともに動けるとしたら、川内が率いる夜戦部隊くらいなものでしょう。実際に戦艦棲姫に止めを刺したのもこの部隊ですし。」

「つまり夜戦で戦いたいと言うわけか。」

「そうですね。ですがルールに関してはこちらが譲歩致します。ですから弱い部隊を相手に確実に勝ちたいと言うのであれば、昼戦でもお相手は致しましょう。」

「そんな事を言われて昼戦を挑むような腑抜けは佐世保の傘下にはおらんわ!!その代わり演習は明日から連日行うものとする。構わんな?」

やはりプライドを刺激するのは有効のようだ。これだけ御し易い人間だと悪巧みは向かないかもな。軍人としては真面目な人間かもしれないが。

「分かりました。ここまで譲歩して頂いたのであれば、せめて日程くらいは譲歩致します。」

「ふん、ではこれで失礼する。詳細はまた送る。」

「はい、お待ちしております。」

ふう・・・とりあえず良い条件を引き出す事に成功した。夜戦限定であれば多少は勝負になるかもしれない。後はなんとか勝つ為の作戦を考えなければな。

## 174話（艦娘新聞検閲&叢雲の頼み）

コンコンコン

「失礼します!!青葉です!!今お時間宜しいでしょうか?」  
「入れ。」

島津提督とのやり取りが終わって一息ついていたら、執務室に青葉がやってきた。ニコニコ笑顔で何かポスターサイズくらいのもものを持つているから、艦娘新聞とやらの掲載許可を貰いに来たのか?まあ、今は川内達も接敵していないし、執務室から動かずに出来る仕事なら問題無いか。

「司令官!!新しい艦娘新聞を持ってきました!!確認と掲載の許可をお願いします!!」

「ふむ、では見せて貰おう。」

「はい!!是非読んでみて下さい!!」

差し出された新聞を手に取るとその新聞は4枚重なっていた。

「今回はずいぶんと書いたのだな?」

「いや〜今回は本当に書きたい事が次から次へとありましたので、ついつい書いてしまいました。」

「そうか。」

一枚目は昨日の防衛戦と夜間の対戦艦棲姫戦がメインのようだ。各艦の活躍と皆の無事が祝われており、なかなか明るい内容となっている。だが下の方に大きく『命令違反、ダメ、絶対!!』と書かれています。川内が命令違反により営倉送りとなった事が報じられていた。

「この件に関しては情報はもう伝わっているのでは?」

「ええ、まあその・・・神通さんが戒めの為に是非載せて欲しいと・・・神通さん曰く『姉さんは多大な功績を上げたものの、命令違反を犯してしまいました。ここできちんと罰せられる姿を示しておかないと、規律を守ることが出来ません。』との事です。」

ふむ、一応川内の了承はあるのか。神通が勝手に動いた事は気になるが、神通も姉の手綱を握る為に頑張っているのだろう。

「分かった。なら次は祝勝会の様子か・・・」

「はい!!そっちは楽しい記事ばかりです!!」

「この記事は写真が多めで少しずつ解説が入っているくらいだよ。どれも楽しそうな写真ばかりで特に問題はなさそうか。」

「・・・ん?これは?」

「どれですか?ああ、潮ちゃんお手製甘々コーヒー漣スペシャルですか?第七駆逐隊の娘達が凄いの作ってたから、司令官に持って行く前に写真を撮らせて貰ったんですよ。いやくなかなか豪華なコーヒーでしたね。司令官も美味しく召し上がったと聞いていますが?」

「まあ、悪くはなかったな。かなり驚いたが。」

「まあ、コーヒーを頼んであれが出てきたらビックリしますよねえ。それにしても司令官が甘党なのはちよつと意外でした。」

「そうか?」

「ええ、なんだか司令官は難しい顔をしながらブラックコーヒーを飲んでるイメージでしたから、甘いものを食べて喜んでいる姿はちよつと想像出来ませんでした。艦娘の皆はだいたい甘いものが好きですから、これはちよつと親近感が湧きますね♪」

「甘いものが好きなのはそれほど意外だったのか。頭を働かせるには糖分が必要なのだがな。さて、3枚目の内容は新しく着任した艦娘達のインタビューか。元長門組とドロップ組の合わせて九人の艦娘達が紹介していて、内容も特に問題なさそうだ。さて4枚目は・・・えっ?3枚目にはノーコメントですか?」

「特に問題はなさそうだが?」

「問題の有無じゃなくてもっと興味を持って欲しいのですが・・・」

「ん?内容の確認が必要だったのでは?」

「いや、それはそうなのですが・・・まあ良いです。次にいきましよう・・・」

「なんだか青葉が落ち込んだようだが、なにが言いたかったのだろうか?とりあえず4枚目に目を通してみる。内容としては自分の同期の3人についての話らしい。織田と北条の写真はあるが小森の写真は無いようだ。やはり撮影に失敗したようだな。」

「ふむ、あいつらが自分の友達として紹介されているのが気になるが、

「一応問題は無いか。」

「え？友達じゃないんですか？」

「士官学校の同期だ。多少関わる事が多いがな。」

「青葉には仲良さそうに見えましたが・・・」

「まあ、それなりの付き合いではあるからな。とりあえず新聞の内容に問題は無さそうだ。掲載する事を許可しよう。」

「ありがとうございます!!ではさっそく掲載してきますね!!」

「なんだか寂しそうな表情をしていたが、掲載の許可を出すとすぐにニコニコ笑顔になって、執務室から去っていく。よく分からないがこれで良いか。」

コンコンコン

「叢雲よ。少し良いかしら？」

「ああ。」

「叢雲が執務室に入室すると、その後ろから秋月型姉妹の3人も一緒について来た。」

「「し、失礼します!!」」

「なにやら緊張した雰囲気です。敬礼をしてきたので、それに応えておく。」

「それで要件は？」

「まずは今日の報告ね。大淀さんから聞いたかもしれないけれど、周辺海域の哨戒をしていくつか小さな拠点は潰したわ。特に大規模なものもなかったから、しばらくは大規模な攻勢は無いと思うわ。潰した場所については資料の方を見て貰えるかしら？」

「叢雲から渡された資料に目を通すと、それなりに遠くの方まで哨戒をしてくれたようだ。何事にも例外があるので油断は出来ないが、これではらくは安泰だと思われる。」

「なるほど。」

「それで調査も終わったから、明日の朝に帰るわ。その前に一つだけ私的な頼みがあるのだけど良いかしら？」

「ん？横須賀鎮守府からの依頼ではなく叢雲の個人的な頼みという事か？今回の恩義もあるし出来る範囲でなら協力しようと思うが・・・」

「そう、助かるわ。まあ、この3人からの頼みなのだけど、そんなに難しい話じゃないから安心して。ほら、場は作ってあげたからあとは自分達で言いなさい。」

そう言うのと叢雲は少し下がって秋月達に前に出るように促す。それにしても秋月型からの頼みか・・・食事関連か？意を決したように秋月が一步前に出る。

「えっと・・・葛原提督は私達秋月型姉妹の事をどれくらいご存知でしょうか？」

「対空性能に特化した防空駆逐艦と認識している。」

「では軍艦防波堤についてはご存知ですか？」

「いや、聞き覚えがないな。」

「そうですか・・・」

聞き慣れない単語だったので、素直に知らないと伝えると秋月達が少し悲しそうな雰囲気になる。

「その軍艦防波堤とはなんだ？」

「えっと・・・この北九州には軍艦としての涼月と冬月が沈んでまして、防波堤としてずっと守っていて、えっとえっと・・・」

「秋月姉落ち着いて。私がちゃんと説明するから。えっと、まず軍艦防波堤というのは戦後に生き残った軍艦を解体した後に、防波堤として再利用するために埋設したものです。そしてこの北九州の地には私達の姉妹艦である涼月と冬月が眠っているの。だから横須賀に帰る前に会いに行きたいんです。」

「なるほど。その程度なら問題ない。曙、軍艦防波堤の場所を調べられるか？」

「だいたい場所は知ってるわ。たしかその辺りに艦娘新教の支部があったはずよ。艦娘涼月の縁の地だから聖地として管理してるとかじゃなかったかしら？そのあたりの事情は球磨さんが詳しいと思うけど？」

「艦娘新教か・・・」

少し面倒な話になったな・・・球磨は艦娘新教のところで働かされていたのだったな。あとは艦娘新教と言えば市長候補だった東雲さ



んがいたな。だが東雲さんは信徒の一人であって、艦娘新教に対しての影響力は低いだろう。だが支部のトップとの繋ぎくらいは出来るか？

「せ、聖地ですか？私とお冬さんが眠る地が聖地だなんて、ちよつと恥ずかしいですね。でも大事にしていたでいて、とつても嬉しいですよ♪早くお冬さんに会いたいなあ♪」

うう・・・今更艦娘新教と関わるのは面倒だからと言って拒否するのは難しいか・・・艦娘新教側もまさか聖地に艦娘が、それも縁のある艦娘が来る事を拒否はしないだろうが・・・面倒な事になりそうだな。

「はあ・・・ではこちらで艦娘新教の関係者に話を通してみよう。また後で連絡するから休んでいてくれ。」

「ありがとうございます!!秋月はこの御恩は忘れません!!」

頭を下げる秋月に続いて照月と涼月も深々と頭を下げてくる。面倒な話ではあるがこつちこそ大きな恩があるのだから、これくらいの要望には応えなくてはな・・・

「話はまとまったみたいね。じゃあ悪いけれど宜しくお願いするわ。」  
「ああ。」

そう言つて叢雲も頭を下げてから秋月型姉妹を連れて退室した。どうやらこの反応だと叢雲達は艦娘新教の関係者を面倒な相手とは思っていないようだ。まあ、艦娘新教関係者も横須賀の艦娘達を相手に悪さをするような事は無いだろうからな。あいつらは艦娘達を利用して民間人から金を巻き上げているだけだからな。むしろ艦娘を厚遇するくらいだろう。

「はあ・・・曙、球磨を呼んでくれ。」

「分かったわ・・・すぐに来るそうよ。」

はあ・・・宗教関連の奴には関わりたくないな・・・

## 175話（神林司祭対話）

コンコンコン

「球磨だクマ。」

「入れ。」

宗教関連の奴に関わる面倒さに頭を抱えていると、球磨はすぐに執務室へと来てくれた。

「それで球磨になんの用事クマ？球磨は夜戦部隊から外されたけど別働隊でも出すクマ？」

「いや、艦娘新教の件で少し話が聞きたくてな。」

「うげ・・・面倒な話だったクマ・・・」

「すまんが色々と教えて欲しい。うちに艦娘新教の内情を知る者は球磨しか居ないのだ。」

「けど球磨も黙ってぼおーっと突っ立ってただけクマ。あんまり詳しい事は知らないクマ。」

「ではまずは軍艦防波堤にあるという艦娘新教の支部の場所は分かるか？」

「そのくらいなら分かるクマ。何度も行ったクマ。」

「明日にそこに行きたいのだが、艦娘新教側が管理していると聞く。今から交渉したいと思うのだが、教祖とやらがどんな人間か知っているか？」

「教祖って奴はたぶんそこには居ないクマ。あいつはどっかからたまに来るくらいクマ。支部の管理は司祭って奴がやってるクマ。たぶんそっちに話をつけた方が早いクマ。」

「そうか。北九州にあるのは支部だから教祖はいないのか。そう言われれば当然の話だな。」

「その司祭の名前は分かるか？」

「分からんクマ。皆司祭様としか呼ばないからあいつの名前は知らないクマ。」

「そ、そうか。そいつの性格はどうだ？」

「表でニコニコ聖職者ぶって、裏で金儲けの事ばかり考えてるような

奴クマ。球磨をお飾りに仕立て上げてたのもそいつクマ。」

「なるほど。」

「だったら利益を与えてやれば簡単に丸め込めるか。今回の件には横須賀の艦娘が関わるので、余計なトラブルは避けたいところだ。」

「それにしても提督はあんなどこになにしに行くクマ？あそこは退屈などこクマ。」

「私も関わりたくはないのだが、横須賀の秋月型姉妹から軍艦防波堤に行ってみたいと頼まれてな・・・」

「ああ・・・そういえばあそこには涼月と冬月が眠ってたクマ・・・そういう事情なら協力してやっても構わないクマ。」

「助かる。何か気になる事はあるか？」

「うくん。秋月達が来るなら司祭は大歓迎すると思うクマ。むしろ信者を集めて大騒ぎするクマ。そして支部への寄付がたくさん集まるクマ。」

「やはりそうなるか・・・」

「あと司祭はかなり臆病な奴クマ。球磨が鎮守府に返還される時も別際に『ここでの事は誰にも言わないでくれ。信者達に球磨を好き勝手に利用していたと知られたら暴動が起きてしまう』とか言ってたクマ。けど球磨を散々物扱いしてたから球磨が知った事じゃねえクマ。そう言えば『新しい提督には球磨は丁重に扱っていたと伝えてくれ』とかも言ってたクマ。少なくとも物扱いは丁重には言わねえクマ。」

「なるほど。球磨の存在自体が司祭にとっては地雷のようなものか。それと鎮守府と揉めるのは避けたいと。ならばこちらが強硬手段に出ない限りは敵対しないと考えて良さそうだな。」

「そう言うくと球磨は不思議そうに首を傾げる。」

「クマ？弱みを握ったから叩き潰すんじゃないクマ？提督は気に入らない奴は輸送船で引き摺り回すって聞いたクマ。司祭は引き摺り回さないクマ？..」

市長候補の源さんを引き摺り回した件がこんな誤解を招いてしまったか・・・

「そんなつもりは無い。宗教関連と関わるとろくな事が無いからな。今回は横須賀からの頼みだから関わらざるを得ないが、基本的にはお互いに干渉しないのが望ましい。それに横須賀の艦娘と一緒に行くのにトラブルを起こしたくはない。」

「提督がそう言うなら仕方ないクマ。あ、トラブルを起こすつもりが無いなら余計な心配かもしれないけど、信者達は悪くないクマ。自分達を助けてくれる艦娘に感謝して一生懸命祈ってるだけクマ。あんまり酷い事はして欲しく無いクマ。」

「ああ、そこは心配しなくて良い。」

たしか艦娘新教の信者で市長候補だった東雲さんの時も似たような事を言っていたな。球磨は艦娘新教の上層部は嫌っているようだが、信者達に関しては守りたいと考えているようだ。宗教家よりも余程信者達を大切に思っているじゃないか。

「ではさっそく交渉を試してみるか。曙、艦娘新教の支部に繋がられるか？」

「ええ、分かったわ……はい。」

「助かる。……北九州鎮守府の提督をしている葛原です。夜遅くに失礼します。」

「いえいえ滅相ありません。わざわざ提督様からご連絡頂けるとは光栄です。ああ申し遅れました。私は艦娘新教北九州支部の取りまとめをしております、司祭の神林と申します。本来であれば提督様の着任と共にご挨拶に伺うべきでしたのに、お伺い出来ずに申し訳ございません。それで本日はいったいどのような要件で？」

ふむ、ずいぶんと早口で喋る奴だな。鎮守府からのいきなりの連絡でかなり焦っているようだ。これならば球磨が言っていた臆病な奴という話にも信憑性があるな。

「私は回りくどい話は好きでは無いので、簡潔に話をしましょう。現在北九州鎮守府に横須賀鎮守府からの増援が滞在していますが、そのうちの一部の艦娘から軍艦防波堤を見たいと頼まれました。軍艦防波堤は現在艦娘新教が管理していると聞きましたので、その確認の為に電話致しました。」

「おお!?それはそれは大変喜ばしい事です!!軍艦防波堤は我々艦娘新教の者達で管理をしておりますが、艦娘の方が来訪されるのを拒む理由はございません!!是非ともお越し頂きたく思います。」

「それは助かります。では明日の朝に伺うと思います。ですが横須賀の艦娘達は多忙の身です。あまり時間はありませんので、信者の方々とゆつくり話をするような時間は取れません。そこはご理解頂きたい。」

「そ、そうですか・・・いえいえ、それは仕方のない事です。あの日本の守護者として名高い横須賀の艦娘を一目見られるだけでも、私を含めて信者にとっては望外の喜びです。あまり贅沢は言うものではありませんな。」

とりあえず釘は刺しておいたから、この程度で充分だろう。あまり長く関わりたくはない。

「ご理解頂き感謝します。それではこれで。」

「ああ!?少しお待ち下さい!!せっかくの機会ですし今後のお話などさせて頂けませんか?葛原提督はご多忙とは存じ上げますが、我々艦娘新教側としましては葛原提督を微力ながら支援させて頂こうと思っておりますので、なにかと良い関係を築いていければと。」

まあ、やはり食い下がるか。せっかく金儲けの手段が近づいて来たんだ。簡単に手放したくはないか。

「ほう?それは以前球磨が協力していたような事をまたして欲しいと?」

「えっと・・・球磨様からどのような話をお聞きになったかは分かりませんが、もし宜しければお手空きの時で構いませんので、信者達に艦娘様の元気なお姿を見せていただければ、信者達の明日を生きる活力になると信じておりますので・・・何卒ご協力頂ければと・・・」

「私は提督で球磨は艦娘です。私が真実を語れと命ずれば球磨は真実を語ってくれます。その上でもう一度聞きますが・・・以前球磨が協力していたような事をまたして欲しいと?」

「い、いやその・・・それは不幸な行き違いと言いますか・・・そ、そう!!大森前提督が原因なのです!!全ては大森前提督からの命令で悪

質な金儲けをしていただけでして、私としては球磨様の扱いには心を痛めておりますでですね!」

少し圧をかけただけでこれか・・・余程精神的に追い詰められているようだ。艦娘新教の本部を頼ればこちらとやり合う事は出来るはずなのに、どうにも逃げ腰な雰囲気だ。これならやりやすいな。

「そうですか。」

「ええ、ええ、そうですとも!!葛原提督は艦娘の皆様をととても大切に扱われていると聞いております。ならば我々艦娘新教の主義とも合致する事が多いはずです。ならば是非とも共に手を取り合えたらと!!」

「あまり戯言を囁らないで頂きたい。球磨から事情を聞いた以上私はあなたを信用していない。今回の一件は横須賀鎮守府が関わっているから穏便に済ませようと考えていますが、基本的に私は艦娘新教とは関わりたくないと考えています。そちらが干渉して来ない限りこちらも干渉は避けるとお約束しますが、もしこちらに干渉するおつもりでしたら・・・分かりますね?」

「わ、分かりました・・・や、やはり平和が一番ですから・・・私も死ぬのは恐ろしいですから、下手に干渉したりは致しません・・・」

ん?別に殺すとまでは言っていないのだが・・・私が直接手を下さなくとも、艦娘新教の信者が暴動でも起こせば殺されるか?ありえない話ではないな。

「では明日の朝に伺いますので宜しくお願いします。」

「は、はい!!お待ちしております!!」

ふう・・・とりあえずこれで明日は問題なく軍艦防波堤の訪問が出来るだろう。あとはあの神林という男がどう動くかだな。艦娘新教の本部に泣きつくのが無難ではあるだろうが、流石に横須賀の艦娘がいるところで問題は起こしたくないはずだ。

「ほほお、これが噂になつて提督のヤバい姿クマ?脅迫がすごく様になつてるクマ!!」

「脅迫とは失礼な。ただの牽制だ。」

「クマ?まあ細かい事は良いクマ。とりあえず明日の朝に球磨が艦娘新教のどこまで案内すれば良いクマ?」

「ああ、頼む。」

「任せるクマ!!」

「あと問題は起こすなよ?」

「分かっているクマ♪相手を言いなりに出来る状態を保つ為なら我慢出来るクマ♪」

「.....まあ、そういう事で構わない。」

「なんだか話が少しおかしな方向に行っている気がするのだが、あなたが間違いでも無いから.....問題を起こさないのであれば今はそのれで良いか。」

## 176話（神林司祭と綾瀬さん）

街の運営に関する書類仕事に追われてしまい気が付けば既に夜更けだ。市役所に残っているのは自分と自分の秘書だけで、市役所の中は静かなものだ。それにしても北九州鎮守府に葛原提督が着任してからというもの、驚くくらいに順調に事が進んでいる。前任者の平川市長が失脚して謀殺され、市長選挙に立候補すれば葛原提督からの支持を得る事に成功した。久藤提督との繋がりもしつかり確保出来ている。他の候補者である源さんは勝手に暴走して久藤提督の不興を買って脱落し、東雲さんは葛原提督が私を支持する事が報じられると、葛原提督の意思を尊重したいと言って市長選挙から辞退した。候補者が私一人になったのだからあとは信任投票だけで、流石にこれでは落選は無いだらう。

「綾瀬様、お疲れ様です。本日はそろそろお休みになりますか？」

「そうですね。仕事が順調に進んでいる時にどんどん進めておきたいところではありますが、無理をし過ぎて体調を崩しては元も子もありませんね。派閥の構築は順調ですか？」

「はい、概ね順調です。源さんの派閥は源さんが葛原提督と対立した時点でこちらに流れて来ていましたし、今回の一件で完全にこちら側に付きました。東雲さんの派閥は派閥ごとこちらの傘下に入っています。こちらはまだまだ派閥としての力がありますので、ある程度の権益は持っていかれませんが、大きく対立する事はないと思われま。それよりも問題は……」

「オークションでのやり取りで疑心暗鬼に陥る者達が多い件ですか……」

「はい……派閥内でも探り合っている状態で……こちらにも綾瀬さんが購入した絵画について、何か問題はなかったのかとか、高値で買い取らせて欲しいなどと問い合わせが多くて……」

存在しない汚職の証拠に踊らされる人のなんと多い事か……あんな嘘にここまで騙されるとは……冷静に考えれば証拠品など残して販売なんてするわけがないでしょうに……



「そうですか・・・葛原提督のイタズラにも困ったものですね・・・」  
「あれをイタズラで済ませるのですか？」

「あの程度の嘘で騙される方が悪いですよ。馬鹿から金を巻き上げようとしたら、思ったよりも馬鹿が多かっただけですよ。」

「それはそうかも知れませんが・・・」

「しばらく放っておけば次第に落ち着きを取り戻すでしょう。葛原提督に騙されたと反感を抱く人も多いでしょうが、それはそれで私にとっては都合が良い。葛原提督と関わりを持つ人間は少ないほうがやりやすい。」

「そうですね。綾瀬様が葛原提督とやり取りが出来る数少ない窓口となれば、双方に恩を売る事もやりやすくなるでしょう。」

「ええ、葛原提督とは上手く付き合いたいものです。彼には北九州の防衛に専念して頂いて、美味しいところは私達で頂きましょう。」

計画が順調に進んでいる事を喜びながらも、少しばかり疲労が溜まっているのを感じる。ですが政務を疎かにすれば懐に入るお金も減ってしまいますからねえ。この北九州という街はもつともつと大きく出来るはずだ。そんな事を考えていたら執務室の電話が夜の静けさを壊して鳴り響く。こんな時間にいったい誰でしょう？秘書が電話対応をしてくれているが、どうにもただ事では無い雰囲気ですね。

「綾瀬様、艦娘新教司祭の神林様から大至急取り次いで欲しいとの事ですが・・・かなり気が動転している様子です・・・」

ふむ、神林さんですか。あの方はそこそこの地位にいるにも関わらず小心者ですからねえ。逆に言えばあの臆病さがあってこそ無事に司祭の地位までなれたとも言えますが・・・あとあの人は臆病なわりには欲深いのも不思議なところですよ。臆病であれば影でコソコソしていれば良いものを、強気に出られる相手だと思えばすぐに調子に乗りますからねえ。

「分かりました。代わりましょう。・・・もしもし、綾瀬ですがどうされましたか？」

「た、助けて下さい!!このままではあの狂犬に殺されてしまう!!」

「穏やかな話ではありませんね・・・まずは落ち着いて状況を教えて貰えますか？」

「あの狂犬提督が今度は私を狙っているのです!!このままだと平川元市長や源さんや大森前提督のご遺族のように私も消されてしまいます!!」

「どうやら葛原提督と何かあったようですね。葛原提督の性格であれば余計なちよっかいを出さなければ、わざわざ関わってくるとは思えません・・・」

「葛原提督がですか・・・神林さんから何か手出しをしたのですか?」「そんなわけありません!!あんな狂犬に手出しをするなど恐ろしい!!なにもしていないのにあの狂犬は横須賀の艦娘を連れて艦娘新教の北九州支部を訪問すると言ったのです!!」

「横須賀の艦娘を連れてですか?これはまたどうしてそんな事を?」「表向きは横須賀の艦娘が軍艦防波堤を見たいからと言っていました・・・しかしこちらが歩み寄りの姿勢を見せた途端に牙を剥いたのです!!球磨から真実を聞いている。こちらに手を出せばどうなるか分かるなど!!あれはきつと横須賀の力を盾にして、私を潰しに来ているに違いありません!!」

「ふむ・・・おそらくは歩み寄りの姿勢を見せたのが原因でしょうね。葛原提督にとつて我々のような人間が友好的な態度を取る事は、敵対行動と似たようなものですからね。それと横須賀の力を借りて潰してきたというのも違うでしょう。横須賀の力は強大ですが、政治的な話には絡んで来ないでしょう。余計な事さえしなければ問題無いとは思いますが・・・せつかなので恩を売っておきますか。艦娘新教側に恩を売っておくのは悪くありません。」

「少し落ち着いて下さい。葛原提督は関わろうとしなければ、そうそう荒事は起こさないとはいけません。」

「そんな馬鹿な!!あの狂犬は久藤提督の権威を無視して平川元市長を謀殺したばかりか、源さんを深海棲艦の工サにしようとしたり、そのまま海上を引き摺り回した奴ですよ!!大森前提督の御子息も顔面を徹底的に殴られたそうですし、噂では暗殺者を素手で殴り殺したとも

聞きます!!そんな奴が荒事を厭うだなんて信じられません!!」

うーん・・・どうにも悪いイメージが先行しているようですね・・・葛原提督はそこまで野蛮な方ではないと思うのですが・・・これはこれで都合が良いかもしれませぬね。

「私は葛原提督から支持を貰えるくらいには仲が良いです。私が仲裁に入れば葛原提督も矛を収めてくれるでしょう。」

「ほ、本当ですか!?ありがとうございます!!ありがとうございます!!」  
「その代わりこちらの指示に従って頂きますよ?葛原提督は気難しい方です。我々の感覚で親しくなろうとすれば怒らせるだけです。神林さんが余計な真似をして、これ以上葛原提督の反感を買ってしまえば、私としては今後の事を考えて手を引くしかなくなります。」

「わ、分かりました。それで私はどうしたら良いのですか?」

「まず当面の目標として、極力関わらずにやり過ぎす事が一番です。葛原提督は嵐のようなものです。下手に手を出そうとしても怪我をするだけです。大人しくやり過ぎすのが一番安全です。」

「何を言っているのですか!?私はもう既に目をつけられているのですよ!」

「逆に言えばまだ目をつけられただけです。大人しく距離を取ろうとすれば彼は興味を失います。葛原提督は面倒事を嫌いますから、干渉さえしなければ攻撃してくる事は無いでしょう。」

「そ、そう言われれば・・・艦娘新教と関わりたくないと言われましたね・・・こちらが干渉しなければ干渉しないとも言っていましたか・・・あの言葉は信用出来るのでしょうか?」

「そこまで言われていたのに殺されると考えていたのですか・・・いや、まあ、そんな話を鵜呑みにするのもどうかとは思いますが・・・」  
「おそらく本心でしょう。ちなみに葛原提督はいつ軍艦防波堤に来ると言っていましたか?」

「明日の朝とだけ・・・はつきりと時間は聞いておりません・・・」  
「そうですね・・・まあ良いです。もし宜しければ横須賀の艦娘が軍艦防波堤を訪れる際に、私も一緒にしましょうか?私が神林さんと葛原提督の間に入れば、葛原提督もそうそう揉め事は起こさないでしょ

う。後はそのまま葛原提督と関わらなければ、そのままやり過ごす事が出来るはずです。」

「本当ですか!?ありがとうございます!!ありがとうございます!!」

「では具体的に葛原提督を迎える為に何をすべきか話を詰めましょう。」

これで神林さんに大きな恩を売ることが出来ました。後は葛原提督を怒らせ無いように神林さんの動きをコントロールすれば良い。人の顔色を伺うのは私の得意分野です。上手く立ち回って、しっかりと利益を頂くとしましょう。

177話（吹雪・睦月・如月対話）

艦娘新教の神林さんもきちんと脅しておいたし、かなり怯えた様子だった。これであまり関わる事なく横須賀の艦娘達の軍艦防波堤訪問が終わりそうだな。

「曙、叢雲に艦娘新教側の許可を取れた。明日の朝に球磨に案内させると伝えてくれ。」

「分かったわ。……対応に感謝するわって言ってるわ。」  
「分かった。」

秋月型姉妹はともかく叢雲は人間に対する警戒心が強い奴だ。神林さんが擦り寄って来ても上手く躲すか突っぱねてくれるだろう。案内役に球磨が居れば神林さんも下手に動こうとはしないだろうしな。あとは出発前にもう一度球磨に言い聞かせる必要があるか？

「提督、川内さんから通信です。」

考え事をしていたら大淀から声をかけられた。声の感じが切羽詰まった雰囲気ではないので、接敵したわけでは無さそうだな。

「代わろう。……川内か？状況は？」

「今長門鎮守府の近海についたよ。敵の気配はかなり離れたところに数隻いるかもしれない感じかな？たぶんはぐれじゃないかな？」

「近づいて来そうか？」

「どうだろ？今の所近づいてくる感じじゃないかも？」

ふむ、川内の感覚ならばかなりの信憑性があるが、もし川内達をそちらに向かわせている間に別の個体が長門鎮守府を狙うとまずいか……

「分かった。向かって来ないのであれば今は手を出す必要はない。その場で警戒していてくれ。」

「はい。夜戦したかったなあ……」

「姉さん？」

「ちよ!?待って神通!!命令違反とかしないから怖い顔しないで!」

「はあ……しつかり警戒を頼むぞ?」

「う、うん!!何かあったらまた連絡するから!!」

そう言つて慌てたように川内は通信を終えた。流石にこれだけ言い含めれば無茶はしないよな？神通も川内のストツパーとして手綱を握ろうと頑張っているようだしな。さて、戦闘はしばらく無いとは思うが、川内達の動きが気になるのもう少し様子を見ておきたい。となると少し時間に余裕が出来るか・・・ならまだあまり話をしたことが無い艦娘と面談をしておくか。帰還組と新規組は一先ず置いておくとして、元から居た者で面談をしていないとなると・・・吹雪・睦月・如月・島風・雪風・川内・夕張・青葉つてところか？大淀・明石・間宮ともしてないか。島風・雪風・川内は夜戦に出しているし、大淀・明石・夕張・間宮は仕事でそれなりに話をしている。青葉はよく絡んでくるから放っておいて良いだろう。

「曙、少し時間に余裕があるから面談をしたい。吹雪と睦月と如月を呼び出してくれるか？」

「それは良いけれど面談はここでするの？それなら私達は出ておくけれど？」

「いや、応接室のほうでやろう。何かあつたらすぐに呼んでくれ。」

「分かったわ。・・・すぐに応接室に向かうそうよ。」

「ああ。」

さて、あまり話した事の無い者達だが、どんな話が出てくるやら・・・

コンコンコン

「し、司令官お待たせ致しました!!ふふ吹雪以下三名お呼びにより参りました!!」

「入れ。」

「し、失礼致します!!」

ドア越しの声音からも吹雪の緊張が伝わってきたが、応接室に入った吹雪は緊張のせいかわきがぎこちない。応接室の扉を開けて中に入るとその場で立ち止まって敬礼をした為に後続の睦月とぶつかつてよろけるし、その後も右手と右足を同時に前に出してギクシヤクと歩き始める。睦月は睦月で吹雪につられて緊張しているのか、ビクビクしながら視線をせわしなく彷徨わせている。逆に如月はそんな二

人の様子を見て微笑むくらいの余裕があるようだ。

「と、特型駆逐艦の1番艦吹雪です!!本日は宜しくお願い致します!!」「む、睦月です!!よよよ宜しくお願いします!!」

「睦月型駆逐艦2番艦如月と申します。おそばに置いて下さいね。」

「この鎮守府に着任した葛原だ。まずは座ると良い。」

「し、失礼します!!」

「ありがとうございます。」

なぜ吹雪と睦月がここまで緊張しているか分からないが、こんな様子だとまともに話が聞けないな。

「はあ・・・そう緊張するな。この場は別にお前達を責める場ではない。」

「は、はい!!大丈夫です!!」

「む、睦月も大丈夫です!!」

「如月は本当に大丈夫ですよ。ふふっ♪」

「なあ如月、何故この二人がここまで緊張しているのか知っているか?」

「そうねえ?別に大した話じゃないんだけど?」

「如月ちゃん!」

「ふふっ♪二人とも提督のいろんな噂を聞いたり、実際に提督が話しているところを見たりして、提督の事とか今後の自分達の事とか色々考えてたのよ。三人でそんな話をしていたら急に呼び出されたからビックリしちゃっただけよ♪」

「つまり呼んだタイミングが悪かったのか?」

「二人が考え過ぎなだけだから、司令官が気にする事じゃないと思うわ。夜も遅いし二人とも色々考えちゃうわよねえ♪」

「如月ちゃん!!」

ふむ、今まで面談をするときは時間が空いた時に艦娘達を呼び出していたが、あまり良くない事だったのか?かと言って忙しい執務の間を縫って面談をしているから、予定を立てて計画的に進める余裕は・・・これは今後の課題だな。

「そうか・・・二人共急に呼び出して悪かったな。」

「い、いえ!!こちらこそすみません!!」

「如月ちゃんがからかってるだけですから!!大丈夫です!!睦月は大丈夫です!!」

「では深呼吸をして少し落ち着け。これではまともに話も聞けん。」

「す、すみません・・・」

しばらく二人してスーハーハー深呼吸をしているのを待っていると、ようやく少し落ち着いたようだ。これでは先が思いやられるな。

「さて、それでは面談を始めるが、三人とも比較的最近に建造されたデータにあるが間違いないか?」

「はい。私と睦月ちゃんが一ヶ月くらい前で、如月ちゃんは2週間くらい前に建造されたばかりだったと思います。」

「ふむ、では前任者からはどんな扱いを受けていた?」

「その・・・吹雪型や睦月型は駆逐艦の中でも特に消耗が激しくて・・・姉妹艦が沈む事も日常茶飯事だったそうです・・・私が着任した時にはいた白雪ちゃんや深雪ちゃん達がそう言っていました・・・だから私も使い潰されて沈むものだと考えていました・・・」

「睦月達も似たような感じですよ。そんな環境だったから如月ちゃんが建造された時も素直に喜ばなくて・・・」

「如月も建造された初日から酷い目にあつたわ・・・その時は金剛さんの盾として使われて、大破して帰って来たのに入渠させてくれなかったわ・・・大破したならあと一回使って終わりだなと言われた時は、もう本当にどうしようかと・・・」

戦艦や空母の盾にするところまでは、まだ戦術の一環として理解は出来る。しかしなぜ入渠させない?大破した駆逐艦を入渠させるコストは最低値で建造するより少ないはずだ。資材がもつたいないという理由では説明が出来ない。

「はあ・・・前任者は何がしたかったんだ?」

「そんなこと如月に聞かれても分からないわ。とりあえず睦月型はハズレみたいな事を言ってたくらいかしら?だから睦月型は次々と沈んでたらしいわ。むしろそんな環境で1ヶ月も生き延びた睦月ちゃ



んが凄いのよ。」

「そ、そんな・・・睦月は川内さんのおかげで生き延びただけだよ・・・」  
「ん？なぜそこで川内が出てくる？」

「傷ついて足手まといの睦月を川内さんは夜戦に連れて行ってくれたんです。夜戦さえ生き延びたら入渠と補給が出来たので・・・だから川内さんに救われた駆逐艦は多いんですよ？」

「なるほど。」

そう言えば以前川内は前任者から夜戦を丸投げされていたと聞いたな。その時に報告もなく入渠と補給をいいと言っていたな。だから前任者が見捨てた駆逐艦を助ける為に、夜戦に連れ出していたのか。

「私も川内さんに助けられた事があります。怪我した娘は後ろで待たされて戦闘には参加しないので、本当に行って帰って入渠するだけでした。」

「そうなの？私の時は前の司令官が死んで、どこから来た偉い人に入渠しろって命令されるまで放置だったわよ？あの時は睦月ちゃんもずっと中破したまま放置されてたでしょ？」

「あの時はタイミング悪く夜戦がなかったからじゃないかな？前の司令官が亡くなる直前くらいに、お昼も夜も襲撃が無い日が続いてたはずだし・・・」

「あの時は襲撃は無かったけど遠征先で大変な事になってたよね・・・睦月達は怪我してたおかげで遠征のメンバーには選ばれなかったよね。」

「そう言われたらそうかもだけど・・・ずっと大破したままなのは辛かったし悲しかったわ・・・」

どうやら川内が上手く駆逐艦達を助けていたようだ。しかし川内が動けたのは夜戦があるときだけか。あくまでも川内に許可されたのは、夜戦を自由にする権限とその事後処理までだったと言うことか。

「二つ気になったのだが、前任者が使い潰すと決めた駆逐艦を入渠させて怒られなかったのか？今までの話を聞くと資材の無駄使いとか

言い出しそうだが？」

「えつと・・・そもそも私達に興味を持っていなかったのではないでしょうか？ 駆逐艦が沈むのは日常茶飯事でしたから、一々誰が損傷したとか覚えていなかったのだと思います・・・」

「接待で使われる娘達はともかく、使い捨ての娘はそんな扱いだったね・・・」

「なるほど・・・過去の話はだいたい理解した。では今後の話をしよう。私としてはきちんと呼逐艦として働いて貰いたいと考えているがどうだろう？」

「は、はい!! 吹雪!! 頑張ります!!」

「でも吹雪ちゃんはともかく、睦月達は基本スペックが低いですよ？ そんな睦月達でも良いんですか？」

「その代わり睦月型は燃費に優れているだろう？ 遠征での資材回収や輸送任務でこそ活躍出来る。なにも前線で戦うだけが軍の仕事ではない。」

むしろ今後は金で資材を買い漁るなんて真似が出来なくなるのだから、遠征による資材の回収はより重要性が高くなる。それを考えるともう何人か睦月型が欲しいところだ。

「ふふっ♪ やっぱり今の司令官はちゃんとして如月達の良いところを分かってくれてるわね♪ そんなあなたにだったらいつでも尽くしてあげる♪」

「き、如月ちゃん!？」

「ああ、期待している。睦月はどうだ？」

「にや!?! あ、えと・・・えと・・・その・・・」

睦月が顔を真っ赤にして、また視線をあちこちに向けて挙動不審になっている。そんなに言い難い事があるのだろうか？

「どうした？ 何か待遇に不満があるなら今のうちに言っておいたほうが良いぞ?」

「い、いえいえ!?! 不満なんてなにも無いです!! 睦月も頑張るから、よ、宜しく願います!!」

「そうか？ まあ何かあれば相談してくれ。私に言い難い事であれば大

淀や長門を頼ると良い。」

「は、はい!!」

「では私からは以上だ。何か聞きたい事や言っておきたい事はあるか？」

「い、いえ!!大丈夫です!!」

「睦月も大丈夫です!!」

睦月だけではなく吹雪までまた最初みたいに緊張している雰囲気だが、本当に大丈夫なのだろうか？まあ、そのうち慣れてくるか？

「そうねえ？睦月ちゃんや吹雪ちゃん共々、ずーつとお側において下さいねえ♪司令官が呼んでくれたらいつでも頑張るから♪」

「ああ、頼りにしている。」

如月だけは気持ちに余裕がありそうだな。吹雪と睦月はどうにも緊張しやすいようなので、それとなくフォローしてくれると艦隊として運用しやすいのだが・・・今後に期待だな。

## 178話（五十鈴と高雄の対話）

吹雪達との面談を終えて一旦執務室へと戻る。もう夜も遅いし曙は休ませて大淀と交代で仮眠を取るべきか？

「提督、戻られましたか。川内さんから通信が入っています。」

「分かった。……川内か？何があった？」

「あ、提督、ちよつと深海棲艦が動き始めたみたいだから、どうするか指示が欲しくて。」

「こつちに向かつて来てるのか？」

「うーん？ちよつと微妙な感じかな？近づいては来てるけど、真っ直ぐこつちに向かつてはいないから、別の場所を目指してる感じかな？方角的には西だね。」

西と言う事は戦艦棲姫とやりあった場所に向かつている感じか？もしくはどこかの資材溜まりでも目指しているのだろうか？

「敵の規模とかは分かるか？」

「あんまり多くは無いと思うよ。多くても4隻かな？それもそんなに強そうな気配は感じないよ。」

「他に敵の気配は？」

「今の所は感じないよ。」

ならば早目に潰しておくか。敵の意図は不明だが艦隊の規模が小さいうちに叩く方が楽だ。念の為に長門鎮守府の守りに二人残したとしても数的不利にはならず、相手が手練れでないならば川内が上手くやれるだろう。

「ならば隊を分けてもやれるか？長門鎮守府近海の警備に高雄と五十鈴を残して、速やかに敵艦隊を始末したいのだが？」

「やったあ!!任せてよ!!」

「では川内・神通・島風・雪風は敵艦隊の討伐を速やかに遂行し、すぐに長門鎮守府の警戒に戻れ。高雄と五十鈴はその場で警戒を続けてくれ。」

「了解!!夜戦だ!!夜戦だあ!!」

相変わらず川内の夜戦に対する情熱は凄いな……まあ、結果を出

している以上は問題無いのだが。

「大淀、川内と高雄との通信は任せても大丈夫か？そろそろ仮眠を取っておきたいのだが？」

「はい、お任せ下さい。川内さんが接敵したら起こせば良いですか？」

「ああ、もしくは何か異変があれば起こしてくれ。曙は今日はもう休め。」

「ちよ!?!私はまだやれるわよ!!」

「良いから休め。明日も朝からやる事が多い。休める時にきちんと休んでおけ。これは命令だ。」

「分かったわよ・・・」

曙は少しだけ落ち込んだようにトボトボと執務室から出て行った。それに対して深夜の仕事を任された大淀はなんだか嬉しそうな雰囲気を感じる。仕事熱心なのは良い事だが、キツイ仕事を任せられた方が喜ぶと言うのも変な話を感じる。まあとりあえず私室から布団を持って来て仮眠を取るか。しかしこうも執務室で寝る事が多いのならば、執務室に布団を常備していた方が便利かもな。

「じゃあ高雄と五十鈴は警戒宜しくね!!」

「はい、川内さん達も頑張ってるね。」

「ふん!!分かったからさっさと行きなさい!!」

「うん♪よおし!!じゃあ皆行くよ!!待ちに待った夜戦だあ!!」

川内の奴は大喜びで行ってしまったわね・・・なんでせっかく出撃したのに五十鈴がお留守番しなきゃならないのよ・・・

「行ってしまいましたね。」

「・・・そうね。」

「・・・少しご不満ですか？」

「ちよつとだけよ・・・提督が長門鎮守府の警備を重要視してるのは分かっているわ。」

「それでもやっぱり戦いたかったですか？」

「なによ・・・ずいぶんしつこいわね・・・」

「当然よ。高雄さんは不満じゃないの？」

「ええ、長門鎮守府の防衛も重要なお仕事ですから。」  
「そう。」

真面目な優等生みたいな回答ね。でも艦娘ならもつと活躍した  
いって思うのが当然でしょ？そういう意味では優等生的な発言をす  
る高雄さんよりは、夜戦で大喜びしてる川内の方がよっぽど好感が持  
てるわね。それにしても・・・

「さつきからなんなのよ？そんな微笑ましいものでも見る目を辞めて  
くれない？」

「ごめんなさいね。ちよつと五十鈴さんが摩耶みたいに見えてしまっ  
てつい。」

「ふうん？そんなに似てるかしら？」

「戦闘で活躍したいっていう気持ちが強いところが本当にそっくりよ  
？」

「そんなの艦娘なら当然の事じゃない？高雄さんは違うっていうの  
？」

「もちろん私だつて活躍したいですよ。前の提督と違って今の提督は  
とても良い人みたいですから。」

「・・・まああいつも悪くはないわね。まだ数日しか関わってな  
いから、信用するにはまだ早いとは思うけど。」

確かに五十鈴の実力をちゃんと評価してくれてるのは悪くないわ  
ね。作戦指揮も問題なくやってるし、資材や資金の管理もきっちりし  
てるって聞いたわね。あとは今のところ艦娘に無理矢理迫ったとか  
の話も聞かないけれど・・・そこはいつ本性を表すか分からないわ。男  
なんて所詮は獣だもの・・・だからせめて提督としては優秀であつて  
欲しいわね。

「そうですね・・・摩耶も提督の能力は認めてるみたいですけど、提  
督の人間性に関しては色々と不満や不信感があるみたいなのよ。そ  
れでも艦娘としての誇りを取り戻す為に、前線で戦いたいって言うて  
るのよ。しかもかなり焦っているみたいで、功績を得る為に無茶をし  
かねなくて・・・困ったものです・・・」

「ふうん？確かに似てるかもしれないわね。私だつて艦娘としての誇

りを取り戻したいっていうのは同じよ。だから五十鈴は五十鈴の為に戦うの。決してあの提督の為でも腐った街の連中の為でもないわ。」

「ふふっ♪本当に摩耶とそっくりですね♪」

「そう。じゃあ高雄さんはなんの為に戦うのかしら?」

「なんの為に戦う・・・ですか?」

「そうよ。高雄さんは提督の指示に従う事に不満は無さそうだけど、それはなんで?」

軽い質問を返したつもりだったが、高雄さんは深刻そうな顔で悩み始めた。そんなに難しい質問だったかしら?

「言われてみれば戦う理由をしっかりと考えた事はなかったかもしれないね。艦娘として生まれたからには深海棲艦と戦う事が当たり前だと思っていましたので。ですから提督の指示で作戦を遂行する現状には満足しているつもりです。直接戦闘ではなくても海域の警備も立派なお仕事ですから。」

「それは五十鈴だって分かってるわよ・・・」

「あとは摩耶が早く鎮守府に馴染めるように、私がしっかりしないとってくらいでしょうか?特に摩耶は提督という存在そのものに拒否感があるみたいですし、私が提督と摩耶の橋渡しが出来ればと思っています。だからその為にもまずはきちんと仕事をこなして、提督からの信頼を得なければいけませんね。」

暗い暗い夜の海なのに、月明かりに照らされた高雄さんの横顔が眩しく見える。本当にこの人は・・・

「高雄さんは強いわね・・・」

「強い・・・ですか?」

「高雄さんだって五十鈴や摩耶さんと同様に売られていたんでしょ? 散々酷い目にあわされたのに、どうしてそんなに強く生きられるのよ?」

「私は五十鈴さんが思っているより強くないですよ。五十鈴さんや摩耶が艦娘としての誇りを頼りにして生きてるように、私も長女としてしっかりしなくてはという思いを支えにしているだけですから・・・」

もし摩耶が生きていなかったら私もどうなっていたか・・・」

「そう・・・」

姉としてか・・・名取や由良が居たら五十鈴ももつと強くいられたのかしら・・・ううん、何を弱気になってるのよ!!五十鈴は五十鈴よ!!どんな環境だって関係ないわ!!

「私が戦う理由はこんなところです。もちろん艦娘として国を守らなければという意識はありますが、やはり身内の事が一番ですね。失望させてしまいましたか?」

「そんな事ないわ。むしろ綺麗事を言われるよりは好感を持てるわ。」  
「それなら良かったです。お話に付き合ってくれてありがとうございます。」

「そろそろ警戒のお仕事に戻りましょうか?」  
「そうね。川内の感覚は信用してるけど、それでも絶対ではないものね。」

「はい、川内さん達が戻るまで私達二人で頑張りましょう。」

「ええ。」

戦う理由かあ・・・五十鈴ももう一度ゆっくり考えてみたほうが良  
いかしら?艦娘として長く戦いたいのならなおさらね・・・



## 179話（夜戦とその後）

「提督、そろそろ起きて頂けますか？」

執務室で少し仮眠をとっていたが、大淀に声をかけられて目を覚ます。

「……ああ、状況は？」

「川内さんから通信があつて敵艦隊の捕捉に成功、敵の構成は軽巡ホ級1駆逐イ級2だそうです。川内さんが交戦許可を求めています。」

ふむ、想定以上に脆弱な艦隊なので、はぐれかなにかだろう。川内達であれば問題なく始末出来るはずだ。

「許可する。手早く済ませろ。」

「分かりました。」

大淀に指示を出すと数分後に戦闘が開始され、想定通りにすぐ決着がついた。川内の索敵能力で一方的に敵艦隊の位置を把握し、有利な位置取りをしてから探照灯で照らして奇襲するのだ。脆弱な艦隊では為す術もない。

「提督、川内さんから通信です。」

「ああ……川内、終わったか？」

「うん、終わったよ♪こっちは無傷の完全勝利だよ♪あとドロップ艦の気配は無さそうだし、近くに敵はいなさそうだよ。」

「良くやってくれた。それではすぐに長門鎮守府近海に戻って警戒を続けてくれ。」

「はい。」

あのはぐれの目的はよく分からなかったが、とりあえず川内が近くに敵を感じないのであれば、とりあえずは安心だろう。だが念の為に通信状況は常に把握しておきたい。一応深海棲艦の上位種が通信の傍受を行うらしいが、近海の防衛を固めるだけであれば多少傍受されたとしてもそこまで問題ではない。なぜなら遠洋と違って増援の派遣や撤退が容易であるからだ。だから後手に回ったとしても打つ手はある。

「では大淀、私は先に休ませて貰う。悪いが川内達との通信を維持し

てくれ。」

「はい!!お任せ下さい!!」

「それと明日は朝一番に哨戒部隊を出して川内達と交代させる。メンバーは龍驤・天龍・暁型姉妹でいこう。」

「ではそのように通達しておきます。それと間宮さんに連絡して、哨戒部隊の娘達が早目に朝食を食べられるように手配しておきましょう。」

「ああ、頼んだ。」

さて、明日もまた面倒事があるのだから、早目に休んでしまおう。とりあえず艦娘新教が大人しくしていてくれれば楽なのだな。

今回は敵の数も少なかったので圧勝でしたね。それにしても相変わらず姉さんの索敵能力は規格外ですね。こんなに暗い海なのに敵がどこにいるのか正確に分かってるみたいで・・・まあ、朝から夕方にかけては集中力を欠いてしまうのが欠点ですけど。それでも夜戦では多大な功績をあげているので、提督からその能力をかなり評価して頂いているようで羨ましいです。私ももっと頑張らないと・・・  
「提督が予定通り長門鎮守府近海に戻って言うてるからすぐに戻るよ。」

「じゃあ高雄さん達のところまで競争しようよ!?もちろん私が一番早いけどね♪」

「へえ?いくら島風が速いからって、夜の海で私に勝つつもり?良いよ勝負だ!!」

「はい!!雪風も頑張ります!!」

「ちよつと姉さん!?今は作戦行動中ですよ!!遊んでる場合じゃありません!!」

「ええ、提督はすぐに長門鎮守府近海に戻って言うてたし、命令から外れて無いから良いじゃん?」

「良いじゃんではありません!!作戦行動中に陣形を乱して航行するのは論外です!!」

まったく姉さんは今日提督から怒られたのをちゃんと反省してい

るんでしょうか？せっかく凄いい能力があるのだから、もう少し旗艦としての責任感を持って欲しいものです・・・

「神通さん競争しないの？島風よりおっそいから？」

「し、島風ちゃん!？」

「・・・今、なんて言いましたか？」

「だからあく神通さんが島風よりおっそいから競争しないのって聞いて・・・ます・・・」

そうですか。どうやら姉さんだけではなく島風さんも教育しなければならぬようです。いくら性能面で優秀であったとしても、艦隊行動を乱すような真似は許せません。

「島風さん？私は作戦行動中に遊ぶのが間違っていると言っているのですよ？」

「お、おう!？」

「ちよ!？神通落ち着いて!!また怖い顔してるから落ち着いて!!島風が恐くて震えてるから!!」

「島風ちゃんも早く謝って!!失礼な事を言ったらダメですよ!!」

「姉さん？私は落ち着いていますよ？それと私はなにか間違った事を言っていますか？」

「うんうん、間違って無いから!!私も島風も夜戦の後でちよつと昂ぶってただけだから!!ごめんって!!ほら、島風も反省してるから許してあげて？」

姉さんとなりで島風さんが壊れた人形のように首を縦に振り続けてますね・・・まあ、反省しているならここまでにしましょうか。ここであまり時間をかけるのはそれこそ命令違反になりますし。

「分かれば良いんです。では単縦陣で長門鎮守府近海まで戻るで良いですよね？」

「そうだね。じゃあ行こっか？」

「ええ、それと私は最後尾でも良いですか？」

「良いけど何するの？」

「私が最後尾から陣形が乱れていないか確認しようと思います。もし陣形を乱すような事があれば・・・提督に航行演習をするようにと進

言わせて貰います。」

提督は私達の待遇を良くして下さいる反面、私達に規律と戦果を求め方のようです。ならば海上での行動の基本となる航行に問題があるとなれば、徹底的な演習の許可を頂けるでしょう。姉さんと島風さんに軍規というものを叩き込むには良い機会です。

「い、良いけど御手柔らかにね？」

「それは旗艦としての命令ですか？それともただのお願いですか？」

「お姉ちゃんからの切実なお願いだね・・・」

「そうですか、では行きましょう。私が後ろからしっかりと監視します。」

「だよねえ・・・島風、雪風、頑張っついて来てね。」

「あ、うん・・・」

「雪風はいつでも行けます!!」

すっかり大人しくなった島風さんはともかく、雪風さんはとても真面目で良い子ですね。仕事はきっちりしたうえで被弾率も少ないので、とても優秀な駆逐艦です。では姉さん達も進み始めたので、私もすっかりついて行きましょう。自分で最後尾からの確認を申し出たのですから、自分自身が一番きちんとしなければなりません。

180話（8日目朝）

執務室のベッドでふと目が覚める。時間は午前5時だから少し早い時間だが、さつきと身支度を済ませてしまおうか。寝ている時に起こされなかったと言うことは、特に問題が起きなかったと言うことだろうが、状況の確認はしておきたい。手早く身支度を済ませてから執務室に入ると、机の上に地図を広げていた大淀が顔をあげる。

「提督、おはようございます。良く眠れましたか？」

「ああ、状況は？」

「あれから川内さん達は無事に五十鈴さん達と合流してから長門鎮守府周辺の警戒をして、深海棲艦との接触はありませんでした。現在龍驤さん達哨戒部隊が出撃の準備をしているところです。あと30分くらいで準備が完了すると思います。」

ふむ、とりあえず昨夜はあれ以上の動きはなかったようだな。はぐれが西から流れ込んで来たのか、それとも何か意図のある行動だったのかは判断出来ないが、一先ず安全が確保出来たならば良い。そうなるかとは長門鎮守府がどれだけ早く機能するようになるかだな。長門鎮守府の現状は艦娘が霞一人しか居ない。建造で頭数を増やしたとしても全員練度1の脆弱な艦隊だ。しかも戦艦や正規空母を建造するのは、資材の運用を考えるとまだまだ先の話だろう。まずは巡洋艦と駆逐艦で近海の警備と遠征による資材集めを安定させる事になるはずだ。

「問題が無いのであればそのまま予定通りに進めろ。それで大淀は地図を眺めて何を考えていたんだ？」

「あ、いえ、その・・・今回の一件の流れをもう一度確認しておこうと思ひまして。」

「なるほどな。」

「それで思ったのですが・・・昨晚の深海棲艦についてなのですが、やはり少しだけ不自然な気がします。」

少しだけ不自然か・・・確かに少し気になっていたところだ。深海棲艦の行動に関してはまだまだ把握出来ていない事が多いから、自然

な深海棲艦の動きというのも変な話だが、知能の低い下位の個体であれば本能のままに動くはずだ。つまりは戦力差も考えずに鎮守府に襲撃を仕掛けてもおかしくはない。だが奴らはこちらに仕掛けて来ようとはしなかった。となると上位の個体からの指示があったか、鎮守府の襲撃よりも優先されるものがあつたかだ。

「ふむ・・・理由は？」

「昨日横須賀の艦隊が周辺海域の調査として、かなり広範囲の深海棲艦を殲滅しています。ですのではぐれがふらふら彷徨うだけで、あの海域に現れるでしょうか？何か目的があつたと考えるのが自然だと思います。」

「そこは私も気になっていたところだ。川内の話では最初は同じ場所で留まっついていて、別の場所に移動しようとしていたと言っていた。ならば何か目的があつたと考えるのが自然だろう。」

「そうですね。大きな戦闘があつた場所には深海棲艦が寄って来やすいという話もありますし、そう考えれば自然な行動とも言えるのですが・・・」

確かに大規模な討伐作戦の後には掃討戦をするのが通例ではある。だから大きな戦闘後に深海棲艦が集まるというのも、それなりの信頼性のある話だ。集積地棲姫に戦艦棲姫、さらには周辺の拠点を片っ端から潰して行ったので戦闘の規模はかなり大きい。だからはぐれが戦場の跡地に惹かれて来たという話なのか？

「とりあえずは継続して哨戒部隊を送り込んで、経過観察をするでしょう。鎮守府の防衛が最優先ではあるが、調査の結果次第では深海棲艦の生態について何か得られる物があるかもしれない。」

「了解しました。では長門鎮守府近海の哨戒部隊とは別で、哨戒部隊を編成しますか？」

「そうだな・・・哨戒と同時に昨日横須賀が潰した拠点の資材の回収もしたい。小規模の拠点だったとは聞いているが、それなりの資材は得られるはずだ。」

「ではすぐに哨戒部隊と遠征部隊を編成しますか？」

「いや、先に今日やるべき事を確認しておきたい。演習も進めたいか

らな。」

「佐世保傘下の鎮守府との演習の件ですか？」

「それもあるが普通の演習も進めたい。特にドロップ艦達は一度演習で実力を確かめておきたい。その他にも実戦を任せるのが不安な者も多い。」

一応艦娘達は生まれた時から本能的に海上で戦う事が可能である。だが可能であると言うことと実戦で頼りになるかはまた別だ。それに同じ艦娘であっても多少の性能差や特別な個性を身に着けている者も存在する。北九州鎮守府で言えば春雨と川内が顕著な例だろう。春雨の深海棲艦化は提督からの虐待による後天的なものだと思われるが、虐待を受けていた数多くの艦娘達の中で春雨だけが深海棲艦化している事を考えると、何かしらの素質があったと考えられる。そして川内の夜戦限定の索敵能力も通常では考えられない。高練度の歴戦の艦娘ならばある程度索敵範囲も広がると思うが、川内は改二にすら至っていない。もちろん個体差に関しては能力が低下する場合も考えられるし、体調や精神状態にも大きく影響される。

「なるほど。でしたら演習したいメンバーをリストアップして、鹿島さんに任せてみてはどうでしょう？」

「鹿島か・・・確かに練習巡洋艦としての性能も見ておきたいところだな。だが鹿島自身がドロップしたての練度1だし、演習の成果はすぐに実感出来るものでも無いからな・・・」

「そうですね・・・演習も日々の積み重ねではありませんが、練度の低い者であればその効果も見えやすいと思います。しかし提督が懸念される事も理解出来ますので、長門さんと共同で演習の監督をして頂くというのはどうでしょう？長門さんは艦娘の取りまとめとして動いて貰っていますし適任かと。」

確かに前回の艦娘達の能力を確かめる為に行った演習も長門が指揮をしてくれていたな。あの時も艦娘達の課題の洗い出しという仕事をきちんとなさしてくれた。

「分かった。それでいこう。では鹿島と長門で指揮をして、ドロップ艦は全て参加させるとして、正規空母も引き続き演習をさせたい。あ

とは第七駆逐隊と羽黒も気になるところだし、金剛姉妹にも砲撃演習をさせておきたい。」

「なるほど。第七駆逐隊も演習に参加するという事は、曙さんが執務が出来ないという事ですね。では引き続き私が秘書艦を務めましょう。」

「いや、大淀は昨晚寝ていないだろ？引き継ぎが終わったらちやんと休め。」

「私ならまだやれます!!それに秘書艦業務はどうするおつもりですか!？」

「どうにも大淀も曙も秘書艦業務で無理をしようとする傾向があるな。有事の際であれば無理してもらおう必要もあるが、平常時に無理をする必要は無い。」

「午前中は曙に任せれば良い。午後から大淀に秘書艦を任せて曙に演習をさせれば良いだけだ。それと大淀も曙も少し気負い過ぎだ。平常時に無理をすればいざと言う時に動けなくなる。この話は何度かしているはずなのだが?」

「も、申し訳ございません・・・」

「秘書艦の仕事に熱心なのは良いが、休む時はきちんと休め。」

「分かりました・・・」

一応大淀も理解はしているようだが・・・これは曙も含めて一度きちんと言話をしておくべきか?

「あとは佐世保傘下の鎮守府との演習だが、これは島津提督からの通知があつてから決める。だが夜戦であれば川内が必須なものと、火力の確保で重雷装巡洋艦の二人には出て貰う事になるだろう。」

「そうですね。川内さんが旗艦ならば優位な場所から先制攻撃を仕掛けられると思います。夜戦火力の高いお二人を採用するのは良い判断かと。」

「となると・・・遠征部隊は旗艦を龍田に任せて、吹雪、睦月、如月、春雨、朝潮にしよう。哨戒部隊は旗艦を鳳翔に任せて摩耶、衣笠、白露、時雨、夕立で編成するか。」

「遠征部隊は良いと思いますが、哨戒部隊が少し重めの編成ですね。」



どのような意図が？」

「今回は哨戒と同時に発見した敵艦隊を叩けるだけの火力が欲しい。戦艦や正規空母が出てくるなら撤退するべきだが、重巡洋艦くらいならば仕留めておきたい。哨戒部隊は遠征部隊の護衛という意味合いも持たせるつもりだから、ある程度の戦力が必要だと考えた。」

横須賀が拠点を潰して回ったおかげで、強力な個体は現れる可能性が少ないのも強気に出られる理由だ。戦場跡に寄ってくるはぐれがいれば叩いておきたい。

「なるほど。ではそのように通達しておきます。」

「とりあえず今考えられるのはこのくらいか？」

「艦娘新教の方はどうされます？」

「そう言えばまだ叢雲と細かい打ち合わせをしていなかったな・・・朝食の席でも話をしよう。時間に関しては叢雲に任せるし、案内は球磨がいれば問題はない。」

「提督は直接出向かれないのですか？」

「ああ、忙しいのに私がわざわざ出向く必要も無いだろう。球磨には出発前にもう一度釘を刺しておくし、何か問題が起こればすぐに連絡するように伝える。神林さんも昨日の電話の雰囲気であれば、下手な真似はあまりしないだろう。」

あの横須賀鎮守府の艦娘が来るというのに、何か問題を起こせば艦娘新教側から切られてもおかしく無い。そして球磨が艦娘新教での扱いを暴露してしまったら、確実に問題が起こってしまう。それこそ信者が暴動を起こして、責任を艦娘新教側から全て押し付けられて殺されてもおかしくは無い。ならば細心の注意を払って問題が起きないようにするはずだ。

「分かりました。・・・龍驤さんから出撃準備が整ったとの連絡がありました。」

「では出撃させてくれ。」

さて、今日も忙しい一日になりそうだ。

## 181話（叢雲の謝罪）

コンコンコン

「叢雲よ。少し良いかしら?」

「入れ。」

大淀が艦娘達への指示を通達して、そろそろ朝食を食べようかと思っていると、叢雲が執務室を訪ねて来たようだ。

「今日の予定について話をしに来たわ。」

「ああ、今日で横須賀の艦隊は引き上げるのだろうか?それと軍艦防波堤への訪問だったか?」

「ええ、秋月達の要望に応えて貰って感謝するわ。それで今日は出来るだけ早目に動きたいから、朝食を済ませたらすぐに向かいたいのだけれど構わないかしら?人員は秋月型姉妹の三人と付き添いで私が行くわ。」

「分かった。こちらからは案内役として球磨を出す。とりあえず艦娘新教側に横須賀の艦隊は忙しいから、あまり時間は取れないかもしれないと伝えてある。あと球磨にも案内だけに徹しろと伝えておくから、叢雲達の動き易いようにすれば良い。」

「そう...それは助かるけど...」

何故か訝しげな表情で叢雲がこちらをじーつと見てくる。何か問題のある事をしてしまったか?

「もしかしてあんた艦娘新教と揉めてるの?」

「...なぜそう思う?」

「なんとなくよ。そういえば昨晩も艦娘新教の話が出てきたら少し気乗りしない雰囲気だったわね。あの時は秋月達も居たから深くは聞かなかったのだけど、何か訳ありな感じかしら?」

はあ...良く見ている。とは言えこの問題に関しては自分に落ち度は無い話だ。あの神林という男と前任者が起こした問題だ。

「まあな。艦娘新教側の司祭が北九州鎮守府の前任者と仲良くしていた。後は察してくれ。」

「...そう。踏み込んだ事を聞いて悪かったわね。まさか艦娘

新教の人達が・・・」

「横須賀鎮守府としては艦娘新教側との関わりは無かったのか？」

「私達は艦娘新教とはかなり密接な関係よ。鎮守府に艦娘新教側からの支援も貰っているし、基地祭や公開演習などの時にはお世話になっているもの。非番の娘が横須賀にある艦娘新教の支部に遊びに行くくらいには友好的な関係よ。司祭も優しいおじいさんだし、私も何度かお世話になってるわ。他の横須賀傘下の鎮守府でも似たような感じだったから・・・」

なるほど。どおりで警戒心の強い叢雲が艦娘新教側を警戒していなかったのか。叢雲の証言から考えると、おそらく横須賀鎮守府の傘下の鎮守府近辺にはまともな司祭達を派遣しているのだろう。艦娘新教側としても日本最強の艦隊を持つ横須賀と揉めるのは絶対に避けたいだろう。

「北九州に着任した司祭がそういうやつだったて話だろう。別に艦娘新教に所属してる奴が全て悪い奴だなんて言うつもりは無い。それと北九州支部の神林という司祭には充分に釘を刺しておいたから、余計な真似はしれないと思う。だから叢雲達は気にせず軍艦防波堤に行ってくるよと良い。あとは私と神林司祭との問題だ。」

「分かったわ・・・想像以上に迷惑をかけてしまったようね・・・ごめんなさい・・・」

ずいぶんとしおらしい態度だな。想像以上に迷惑をかけてしまったと悔やんでいるようだが、そこまで気にする事だろうか？

「鎮守府を救って貰った恩に比べれば大した手間では無い。気にするな。どうせいつかはぶつかる問題だったしな。とりあえず今日は揉め事を起こさずについてくれれば問題無い。」

「ええ、分かったわ。だったら秋月達には何も伝え無い方が良くもしれないわね・・・あの子達は隠し事が出来る程器用じゃないもの：」  
「そこは任せる。とは言っても向こうも問題を起こしたくは無いだろうから、気負い過ぎなくて良いはずだ。それと案内させる球磨は元々艦娘新教と関わりがあった奴だから、艦娘新教での事を聞くのは止めた方が良い。」

「そう・・・分かったわ・・・球磨さんにも辛い思いをさせてしまうのね・・・」

さつきから叢雲がかなり弱々しい雰囲気です調子が狂うな・・・いつものように毅然とした態度の方が好感が持てるのだが・・・

「そこに関しても気にするな。球磨も既に割り切っているようだ。むしろ私が神林司祭にしっかりと釘を刺したのを見て少し喜んでいくくらいだ。」

「そう・・・そんなに恐ろしい脅しをしたのかしら？」

「ふっ、想像にお任せしよう。ではそろそろ食事にはしないか？あまり時間は無いのだろうか？」

「そうね。すぐに横須賀鎮守府に戻らないといけないのよ。また別の海域でキナ臭い話があるから、早目に動いておきたいのよね。」

「そうか・・・横須賀の艦隊は大変だな・・・」

「慣れたものよ。じゃあ私は先に行かせて貰うわ。」

「ああ。」

ふむ、ようやく叢雲も調子を取り戻してきたようだ。それにしても叢雲達はまた別の海域に行くのか・・・理解はしていた事だが、横須賀鎮守府にかかる負担は相当大きいな・・・それこそ横須賀鎮守府に何か大きな問題が起きれば、防衛網が崩壊しかねない程に・・・だが嘆いたところでどうにかなる話でもない。少しずつでも戦力の強化をするしか道は無いな。そんな事を考えていると、外から誰かが走ってくる音が聞こえる。

「ごめんなさい!!遅くなったわ!!」

執務室に飛び込むように入ってきた曙は、ここまで全力で駆けて来たようだ。現在の時刻は午前6時になったところだ。多くの鎮守府は午前8時から通常業務を始めるところが多いと聞くので、この時間に来た曙はかなり早い方だ。もちろん朝食もまだ食べていないはずだ。大淀にしろ曙にしろどうにも無理をしたがる傾向にある。いや、これは何時から執務を開始すると決めておかなかった自分の落ち度かもしれない。

「はあ・・・別に遅くは無い。とりあえず今から食事にするつもりだか

「ら曙も一緒に来い。」

「え!?でもまだ引き継ぎが!？」

「大淀はどうする?。」

「ぐ」一緒にさせて頂きます。」

「では行くか。」

大淀と曙を引き連れて執務室を出ると、廊下の向こうから漣が歩いて来るのが見えた。

「あ、ご主人様!!おはようございます!!」

「ああ、おはよう。こんな朝早くにどうした?。」

「まあその、今日も朝からぼのたんが大慌てで準備して駆け出して行ったもので・・・また連行案件かと思って漣が来たのですが・・・もう連行中ですか?。」

相変わらず無理をする曙を心配して来たわけか。だが先日よりは漣の表情が穏やかなあたり、そこまで不安を感じている訳ではなさそうだ。

「なるほど。まあ、だいたいそんな感じだ。」

「ですよねえくまったくぼのたんは・・・少しは学習して貰いたいですなあ。」

「は、はあ!?別にそんなんじゃないでしょ!？」

「そう言えば今日は漣だけなのだな。臙と潮はどうしたんだ?。」

「おぼろんと潮ちゃんには先に食堂に行って、食事の準備をして貰ってますよ。どうせぼのたんは連行される運命でしょうし、先に準備しておいたほうがスムーズに食事出来るでしょ?もし良ければご主人様と大淀さんも一緒にしませんか?。」

なるほど。曙の行動と自分がどう対応するかを考えての行動か。

先を見据えての行動は悪くない。

「ではそうしよう。大淀も構わないか?。」

「はい、もちろんです。・・・臙さんと潮さんに私達の食事の手配も依頼しておきました。」

「おお!?流石は秘書艦の大淀さん!!見なさいぼのたん、これが出る秘書艦というものですぞ?。」

「うっさいわね・・・大淀さんが凄いの嫌ってほど知ってるわよ・・・でも私だつて・・・」

「あー、ごめんつて。そう落ち込まないでよ。ほら、ぼのたんには私達第七駆逐隊がついてるからさ。一人じゃ勝てないなら頼りなつて。数は力ですぞ!!」

「別に落ち込んで無いわよ!!まあそうね・・・手が足りない時は手伝つて貰うわ・・・」

ふむ、どうやら曙が無茶する件に関しては、漣達が上手くフォローしてくれそうだな。最初から仲間想いの者達だから、上手く噛み合えば良いのだな。

## 182話（8日目朝食）

食堂では早朝にも関わらず多くの艦娘達が食事に来ていた。既に食事を始めている者も居て、やはり一番目立つのは正規空母達の席だろう。うちの一航戦と五航戦に加えて横須賀の二航戦も一緒になって、雑談を楽しみながら食事をしているようだが、相変わらず超特盛の量を食べている。一航戦と二航戦が大食艦なのは知っていたが、五航戦もそれに負けないくらい食べるのだな。やはり正規空母の燃費の問題だろうか？そんな豪快な食事風景と対象的なのは、部屋の隅で肩を寄せ合うようにして食事をしている横須賀の秋月型姉妹だ。食堂のスペースは充分に余裕があるのだが・・・まあ、迷惑をかけられているわけでもないのだからとやかく言うような事ではないか。

「あ、提督、おはようございます。」

「ああ、朧か。おはよう。」

「朝食の準備出来てるよ。」

「ああ、助かる。」

朧に食堂の中央付近に準備されていた席へと案内してもらい、席について食事を始める。そして予定通りに大淀と曙と共に引き継ぎや今日の予定に関しての話を進める。今日も予定が詰まって忙しいからな・・・

「あー、これはあれだね・・・」

「あれですなあおぼろん氏・・・」

「え？あれってなあに？」

「自然に会議を始めたなあと思って・・・」

「そうですね・・・」

「あ、うん、そうだね。」

「あれで食事もしっかりしてるんだからびっくりだね。」

「新しい提督が来てからまだ一週間くらいでしょ？しかもぼのたんが秘書艦補佐になったのって3日前くらいじゃないっ？」

「うん、そうだね。曙ちゃんすつごく頑張ってるね。」

「元々仕事人気質の曙と提督の性格が合ってたからなのかな？」

「それもあるだろうけど、うちのぼのたんがチョロ過ぎて3日で調教完了したってこはうっ!!」

「誰が調教済よ!!」

「痛いですぞぼのたん・・・会議に集中していたはずでは？」

「隣で普通に喋ってたら聞こえてくるわよ!!」

大淀達との話に集中していたのだが、いきなり曙が漣の頭を叩いて喧嘩を始めた。どうやらまたなにか漣がちよっかいをかけたようだ。

「・・・提督、お食事中すみません。長門鎮守府より通信が入りました。」

長門鎮守府からという事は織田か霞だな。織田がこんな早朝から起きるといいうのも珍しいし霞からか？

「ああ、代わろう・・・葛原だ。」

「おお!!盟友よ!!我だ!!」

「なんだ・・・ハズレの方が・・・」

「ちよ!?!いきなりそれは酷くないか!?!」

「どうした?用が無いなら切るぞ?」

「待て待て待てい!!用が無ければ通信などせぬであろうが!?!そもそも盟友は気が短くていかんと」

どうにも話が長くなりそうだったので通信を切って食事を再開する。が・・・すぐにまた通信が入る。

「・・・なんの用だ?」

「あの・・・ちゃんと我の話聞いてくれぬか?」

「なら用件を簡潔に伝えろ。」

「長門鎮守府の現状報告である・・・今朝鎮守府内を確認したのだが、妖精さん達のおかげで最低限の設備は復旧しておる。」

「具体的には?」

「通信設備とレーダー関係は完全に修理完了しておる。建造ドック・入渠ドックは共に一つずつ復旧、工廠と資材倉庫も一部復旧。食堂は復旧完了しておるが、艦娘寮は一部だけである。本当は全部修理したいのだが、資材の関係でこの程度に留めるべきだと霞ママに言われて



しまったのでな。」

ふむ、本当に必要最低限と言ったところだな。だがまともな艦隊も居ない状況で設備だけ整えても無駄だ。というか霞が織田の手綱をきちんとして握ってくれているようで安心出来る。

「流石は霞だな。」

「ぬう・・・まあよい。というわけで我は今から建造にて新たなる仲間を手に入れるのだ!! 新たなる艦娘に出会えるこの感動!! 是非とも盟友と分かち合いたくて連絡したのだ!!」

「そうか、では切るぞ?」

「またか盟友!? そのネタは飽きてしまったぞ!」

「ああ、そうだ。」

「む? どうした我が盟友よ?」

「霞からも言われているとは思いますが、まずは最低値レシピで数を揃えろよ? いきなり戦艦や空母を狙って資材を無駄使いするなよ?」

「う、うむ・・・しかしだな・・・」

「では忠告はしたぞ? 私は忙しいから後は霞を頼れ。」

「あ!?! ちよ!?!」

織田に忠告だけ済ませてから通信を切る。あいつには霞が付いているのだから、この程度の助言で問題ないだろう。もしなにかトラブルがあれば霞から連絡があるはずだ。

「あの・・・宜しいのですか?」

「ああ、無駄話に付き合うほど余裕はない。向こうの状況も理解したいし、こちらが伝えたい事は伝えた。」

「そう・・・ですか・・・」

「どうした? 何か気がかりな事でもあるのか?」

「いえ、何でもないです。」

大淀には何か思うところがあったのかと思っただが、どうやら話す気は無いようだ。まあ、無理にでも聞き出すような事でも無いか。

「ふう・・・大淀さんが言わないのであれば、この漣がご主人様に一言物申しましょう。」

「ん? なんだ?」

「コミュ障か!!もつと何か話す事あるでしょ!!」

「・・・何か伝え忘れていた事でもあったか?」

「いやいやいや!!そういう事じゃなくて友達相手ならもつと何かあるでしょ!?!業務連絡じゃなくて雑談とかですよ!!」

「織田は友達ではなく知り合いだ。それに雑談と言われても何を話せと言うんだ?雑談にどういう意図があるのだろうか?」

「ああもう!!なんで雑談に意味を求めんですか!?!そこは友好的な関係を築くとかで良いんですよ!!雑談の内容も天気でも食事でも漣が可愛いでもなんだってかまいませんよ!!」

ふむ・・・確かに天候の話は作戦行動に影響する話だな。今日は曇っではいるが今の所雨は降っていない。これが土砂降りになるようであれば、まともに艦載機が使えない程に視野が悪くなるかもしれない。食事の件は向こうの鎮守府で食料の確保が出来たかを心配しての発言だろうか?流石にそこは北条が援助しているだろうと考えていたが・・・そういう細かな確認を雑談として話をするべきと主張しているのだろうか?それと最後のは意味が分からん。艦娘好きの織田の為の何かだろうか?

「ふむ、つまり漣としては今の会話は情報量が少なかったと言いたいのか?」

「その言い方は絶対に理解してないやつ!!ぼのたんもご主人様になんか言っちゃってよ!!」

「諦めなさい。提督として最低限のコミュニケーションは出来ているわ。」

「はにや〜!!?そうだった!!ぼのたんは調教済みだった!!」

「だ・れ・が!!調教済みよ!?!」

「はう!?!こうなったらおぼろん!!潮ちゃん!!なんか言っちゃって!!」

「うーん・・・ノーコメントで。」

「漣ちゃん?食事中にあんまり騒いだらダメだよ?」

「何・・・だど・・・」

漣の言いたい事はどうにもよく分からないが、漣なりに何かを一生懸命伝えようとしているのか?

「はぁ・・・よく分からんが次回話をする機会があれば試してみよう。」  
「是非そうして下さい・・・ご主人様のコミュニケーションが改善されるなら、漣が孤軍奮闘したかがあると言います。」  
「そうか。」

そんな話を話していると向こうから球磨が近づいて来た。食事が終わったから秋月型姉妹を軍艦防波堤に案内する話の確認だろうか？

「提督、球磨は食事が終わったからいつでも出発出来るクマ。横須賀の叢雲も早く出たいみたいだから出撃の許可が欲しいクマ。」

「ああ、分かった。軍艦防波堤の位置なら北九州鎮守府のレーダー圈内だから問題はないだろうが、一応警戒してくれ。それと艦娘新教側との問題に横須賀を巻き込みたく無いから、今回は何も問題を起ささないようにしてくれ。それと帰ったらどうい対応をされたかきちんと報告するのと、もし問題があればすぐに通信で知らせてくれ。」  
「了解クマ!!それじゃあ行って来るクマ!!」

とりあえずこれで球磨には必要な事は全て伝えられたな。ここまできちんと命令しておけばそうそう問題は起ささないだろう。となるとあとは・・・

「ああ、それと少し良いか？」

「クマ? なにかあるクマ?」

「天気はどうだ?」

「曇ってるけど雨は降って無いクマ。心配する程じゃ無いクマ。」

「食事はきちんと食べたか?」

「クマ? ちゃんと出された物を全部食べたクマ。好き嫌いなんてしてないクマ。」

「なら良い。あと漣は可愛いか?」

「クマア!?! 提督疲れてるクマ? ゆっくり休んだ方が良いと思うクマ・・・」

「いや、大丈夫だ。では案内頼むぞ。」

「わ、分かったクマ・・・」

とりあえず漣の言っていた雑談を試してみたが、これで上手くいっ

ているのだろうか？あまり反応が良くないと思うのだが・・・球磨も  
不可解な事があつたかのように首を捻りながら去って行ったし・・・

「漣、雑談はこんな感じで良いのか？」

「なんも言えねえ・・・」

## 183話（軍艦防波堤）

軍艦防波堤では先程まで慌ただしく歓迎の準備が進められていました。普段から清掃はしていたものの、横須賀鎮守府の艦娘が来るとの事で、多くの信者が集まって念入りな周囲の清掃を行っていました。とは言ってもこの軍艦防波堤で姿を確認出来るのは駆逐艦柳だけで、駆逐艦涼月と冬月はコンクリートの下に埋まっている。秋月型姉妹がそんな現場を見てがっかりしてしまわないでしょうか？それにしてもこんなに信者を集めてしまったら、葛原提督の反感を買ってしまわないでしょうか？そんな事を考えていたら神林さんが慌てた様子でやって来る。

「あ、綾瀬さん!!鎮守府より連絡がありました!!今から鎮守府を出発して海路でここに向かっているそうです!!」

「やはりそうなりますよね。陸路では大きく迂回しなければなりませんから、海を進む手段があるなら海路から来ますよね。こちらの手筈は?」

「信者達に命じて周辺の清掃は完璧です。案内表示も綺麗になっていますし、山の方にある慰霊碑も清掃とお供え物を準備して抜きありません。もちろん慰霊碑の方にお送りする為の車の手配も完璧です。後は手土産も用意しております。」

「分かりました。念の為に確認しておきますが、手土産は普通のお菓子ですよ?底に金等を仕込んだりしていませんか?」

「え、ええ。そこは綾瀬さんから念を押されていましたから、普通のお菓子にしておきました。ですがそれで葛原提督や海原提督が納得されるでしょうか?」

「やれやれですね。賄賂を贈る習慣があるのは理解出来ませんが、葛原提督や海原提督には逆効果になるのが理解出来ませんか?・皆さん裏では普通にやっていますが、賄賂は贈る方も受け取る方も違法行為なんですよ?そんな事をするくらいなら、寄付金として正規のルートで贈れば良いものを・・・」

「海原提督は正義の人ですから、賄賂などは一切受け取らないという

話ですし、葛原提督は汚職行為に手を出すリスクをかなり嫌がる方です。その点お菓子程度であれば艦娘達に喜ばれますし、周囲からも賄賂とは受け取られませんので無難に済ませられますよ。」

「そうなのですか？海原提督はまあわかりませんが、葛原提督が汚職行為のリスクを嫌がるのですか？着任早々に暴行や殺人を犯しておきながら、賄賂程度を今更怖がるとは思えません。」

「はあ・・・私が調べた情報では葛原提督本人がやった事は、源さんを海に連れて行った事と暗殺者の撃退をした事だけです。平川元市長は憲兵に取り押さえられたところを逃亡して憲兵隊に銃殺されていますし、大森元提督のご子息が暴行された件も別の人間と揉めた時に暴行されたとの事です。暗殺者の撃退について死因が自殺というのは怪しいですが、仮に葛原提督が手を下していたとしても正当防衛です。」

「・・・・・・・・にわかには信じられない話ですね。」

「でしたら葛原提督に贈るお菓子に賄賂を入れたらどうですか？その場合私は即座にこの件から手を引きますけれど。」

「そんな事おっしゃらないで下さい!!もちろん綾瀬さんの指示通りに動きますから、どうか見捨てないで下さい!!」

「分かっていただければ構いませんよ。」

はあ・・・どうせ私に縋るしかないなら、変な勘ぐりをしなければ良いものを・・・本当に面倒な人ですね。

球磨さんの案内で軍艦防波堤へと向かっているのだけれど、正直に言うとし気が重い。秋月達は素直に喜んでいるみたいだけど・・・球磨さんがここでどんな扱いを受けていたのかと想像すると、トラウマを抉るような事を頼んでしまった事を後悔してしまう・・・一応球磨さんは気にした様子は見せないけれど、内心どう思っているのかしら・・・

「もうすぐ軍艦防波堤に着くクマ。なんか人がいっぱい集まっているクマ・・・」

「そう。私達を歓迎してくれてるのかしら?」

「横須賀の艦娘に会える機会なんて滅多に無いクマ。きつと司祭が信者達に情報を流しやがったクマ。」

「そう・・・」

案内された場所では多くの人が集まって、こちらに向かって手や国旗を振っている。遠目からでも艦娘の視力であれば一人一人の表情まで視る事が出来るけれど、老若男女皆純粋な笑顔で迎えてくれる・・・けれど一人だけかなり緊張している男がいる。服装から見てもあれが神林司祭だろう。その隣に立っている人物もそれなりに良い服装だから、ある程度立場のある人間でしようね。

「ねえ球磨さん、あの白い服を着た人が神林司祭なのかしら？」

「あー、名前は知らないクマ。でもあいつが司祭で合ってるクマ。」

「その隣の人は分かる？」

「あいつは知らねえクマ。」

「そう・・・」

球磨さんが知らないということは艦娘新教の関係者では無さそうね。となると私達か北九州鎮守府と関係を深めたい有力者ってどこかしら？どうにもキナ臭いし警戒しておいた方が良さそうね。秋月達は特に何も感じていないみたいで、満面の笑みで手を振り返しているみたいだし、少し釘を刺しておこうかしら。

「あんた達、悪いけれど次の作戦行動の時間が近づいてるから、ここではあんまり長居は出来ないわ。手早く済ませてちょうだい。」

「ええ、分かっています。今回は私達のワガママに付き合ってくださいありがとうございます。」

「別にこれくらい構わないわよ・・・」

うう・・・純粋な秋月達の間を見ると、少し気まずく感じてしまいわ・・・そんな事を考えている間に、人々の大歓声に迎えられて神林司祭の前に整列して敬礼をする。陸には上がらずに海からなので私達は神林司祭達を見上げる形だ。

「横須賀鎮守府所属の叢雲よ。本日は軍艦防波堤への訪問許可及び盛大な歓迎をありがとうございます。」

「艦娘新教北九州支部を任されております神林と申します。本日は勇

名名高い横須賀鎮守府の艦娘様方にお会い出来て光榮に存じます。信者一同皆様のご活躍に心からお礼を申し上げるとともに、皆様のことからのご健勝とご無事を心からお祈り申し上げます。」

「ありがとうございます。皆様ののご期待に応えられるように、誠心誠意職務に励ませて頂くわ。」

「ありがとうございます。それで・・・その・・・つかぬことをお聞きしますが、葛原提督はどちらに？」

「クマ？提督なら鎮守府で仕事してるクマ。なにか用事があるなら球磨が伝えてやるクマ。」

「ああいえ!!お忙しいのであれば、お手を煩わせるような事は致しません!!一目お会いしてご挨拶をと思っておりましたが、そういう事情であれば仕方ありませんとも!!鎮守府に戻られましたら皆様のご活躍に信者一同心から感謝しておりますとお伝え下さい。」

「分かったクマ。」

ふうん？事前に話を聞いていたけれど、この神林とかいう司祭は随分と挙動不審ね。一応取り繕ってるつもりみたいだけど、多量の発汗に目線がキョロキョロと忙しく動いていて、葛原提督が不在と聞くと露骨に安堵の息を漏らしたわね。葛原提督が余計な事をしないようにしっかりと釘を刺したと言っていたけれど、かなり恐ろしい脅し方をしたのかしら？

「悪いのだけど私達はあまり時間が無いの。軍艦防波堤の案内をして貰えるかしら？」

「これは失礼致しました!!ではまずこちらに船体の上部が見えておりますのが駆逐艦柳となります。そして現在はコンクリートによる補強で埋まっておりますが、駆逐艦柳に続いて駆逐艦涼月・冬月が眠っております。この三隻がここ北九州の地を響灘の荒波から護つて下さる軍艦防波堤として眠っております。そして向こうに見えます高塔山にこの三艇の戦没者慰霊碑が建てられています。もし宜しければそちらまで車でお送りいたしますが？」

「・・・申し訳ないけれど、本当に時間がないから慰霊碑はまた機会があれば訪問させて頂くわ。」



「本当にお忙しいようですね……ではまたこの地を訪れて頂けるまで、信者一同と共に大切に管理させて頂きます。」

「ええお願いするわ。」

そして私達は海に、信者の方達は陸に並んで黙禱を捧げる。ここで護国の為にその船体を捧げた三隻とその戦没者に感謝を捧げ、願わくば冬月と柳が艦娘としてまた共に戦えますようにと。

「行ってしまいましたね……」

「え、ええ。」

横須賀の艦娘達と案内役の球磨さんは、黙禱を終えるとすぐに別れの挨拶をして立ち去ろうとしました。神林さんが慌ててお土産を叢雲さんと球磨さんに手渡すと、叢雲さんは丁寧にお礼を言って受け取り、球磨さんは少し顔を顰めていたがきちんと受け取ってくれた。だが叢雲さんもお菓子を受け取った際に、わずかにだが重さを確かめるような素振りを見せたので、神林さんをかなり警戒しているようですね……出来ればこの機会に横須賀鎮守府との縁が欲しかったのですが、警戒されている神林さんと一緒だと印象が悪いと思ったので、今回は何もせずに見送る事にしました。

「それでは私は政務がありますので、これで失礼致しますね。」

「ええ、分かりました。それにしても葛原提督が訪ねて来ないとは予想外でした。てっきり直接乗り込んで来るものとは……」

「これで分かったでしょう？ 葛原提督は神林さんとは距離を置きたがっているのです。ですから余計な事をしなければ、目をつけられる事は無いでしょう。」

「その余計な事が理解出来ないから苦労しているのですがね……」

ああ、そうでしょうかとも。事前に相手の情報を集めておき、実際に会って相手を観察しながら話をし、その後に関心になった事をさらに調べる。そういう苦労をしているからこそ、その人に合った対応を取れるのです。それでも人の心を完全に理解するなんて無理な話なので、すから、努力もしないで上手くやれるわけがないというものです。

「まあ、また何かありましたらご相談下さい。私がお力添え出来る事

であれば、その時はまた手をお貸し致しましょう。」

「ありがとうございます。今後とも是非宜しくお願い致します。」

これで神林さんは私がコントロール出来るようになりそうですね。今回の収穫として悪くはありませんね。

## 184話（島津提督&長門鎮守府）

食事を済ませて曙と共に執務室へと戻る。大淀は食事の時に引き継ぎを済ませたので、既に部屋へと戻っていった。

「……………提督、島津提督から通信よ。」

「きたか……………代わりました、北九州鎮守府の葛原です。」

「島津だ。さつそく今日から我々佐世保鎮守府傘下の提督達と演習して貰うが、覚悟は良いな？」

「ええ、それで日程は？」

「ふん、まず今日はわしが率いる鹿児島鎮守府が相手をする。そして明日から順に博多・佐伯・天草・宮崎の順番で相手をしようと考えている。」

「なるほど。沖縄鎮守府は不参加ですか？」

「沖縄は距離も遠いし海に囲まれた難所だ。わざわざ資材を運んで演習させて貰うなんて冗談ではないと言っていた。」

ふむ、まあ当然と言えば当然か。海に囲まれていると言うことは、当然警戒するべき範囲が広いと言うことになる。むしろあんな孤島を護れている事が奇跡に近い状況だ。しかも聞いた話によると不定期ではあるものの、佐世保鎮守府と鹿児島鎮守府と協力して、船で物資のやり取りもしていると聞く。そんな最前線で戦う鎮守府でありながらも四大鎮守府に数えられるどころか、佐世保のナンバー2の座を島津提督に明け渡している。戦力と政治力はまた別物とは言えるが……………気になるところではある。

「それは仕方ありませんね。」

「夕方頃にはそちらに着く、演習は午後8時からでよいな？」

「ええ、構いません。それで編成の条件は？」

「お前は戦艦に自信が無いと言っていたであろう？だからわしらは戦艦の使用は無しで戦ってやる。お前はどのような編成でも構わん。」

「……………それはこちらは戦艦を使っても構わないと言う意味でしょうか？」

「ああ、もちろん構わんよ。戦艦でも潜水艦でも好きに使うと良い。」

それくらいの手はくれてやる。あとは対抗演習時の基本的なルールに則る。」

「ずいぶん自信だな。いや、まあそれくらいの手があってもどうにかなるか分からない相手なのだが。」

「ちなみにそれは島津提督との演習に限りですか？それとも他の鎮守府との演習の時でもですか？」

「他の鎮守府との演習でもだ。わしらは実戦で鍛えられた歴戦の提督だと自負しておる。いくら姫級の討伐を果した相手だとしても、わしらが格上だと確信しておるのだ。だからこそ実力差を見せつける為に、お前に有利な条件で勝つ。それだけだ。」

ふう……これでは有利な条件を引き出す交渉すら出来ないではないか……とは言えこちらが戦艦を使えるからと言って、安易に戦艦を使うのも考えものだ。こちらの唯一のアドバンテージは川内の飛び抜けた索敵能力による奇襲だ。そして戦艦の長所は長射程高火力高耐久だが、短所は速度と砲撃の連射性能だ。高速戦艦である金剛姉妹であっても、速いのは最高速度であって敏捷性という点では巡洋艦や駆逐艦達に大きく劣る。だから川内が得意とする奇襲と離脱を繰り返す戦法についていけない可能性が高い。そして動きの鈍い戦艦では魚雷の格好の的になりかねない。これは人員に関しては再検討が必要だな。

「……分かりました。全力でお相手させて頂きましょう。」

「ああ、だがその前に一つだけ条件を出そうと思う。」

「ほう？ここからが本題だったか？これだけ譲歩された上で出す条件か……何を言ってくるつもりだ？」

「……条件ですか。お聞きしましょう。」

「プリンツオイゲンだ。」

「はあ……勝ったらプリンツオイゲンを寄越せという話ですか？」

「いや、そんな事は言わん。全ての演習にプリンツオイゲンを参加させて貰いたい。」

なるほど、話題のプリンツオイゲンを見てみたい。その性能を確かめたい。そんなところか。だがプリンツオイゲンを参加させるので

あれば、小森が得意としていた潜水艦一隻だけで演習に参加させ、一撃だけ加えて時間切れまで逃げ回る作戦が使えなくなるな。

「それは構いませんが・・・プリンツオイゲンはドロップしたばかりなのをご存知ですよね？艦娘としての経験も浅いですし、艦隊行動で連携させる訓練も当然出来ておりません。それでも演習に参加させると？」

「その点は当然考慮している。だからこちらも一隻建造したての重巡洋艦を編成に入れる。それでプリンツオイゲンを採用するデメリットは相殺されるはずだ。」

その条件であればプリンツオイゲンの練度不足のデメリットは解消出来る。むしろ練度の観点で言えば、こちらより練度の高い佐世保側の枠を一人潰せると考える事も可能だ。そしておそらく建造したての重巡洋艦よりもプリンツオイゲンの方が性能は高いだろう。そこまでして新しい海外艦の性能を知りたいのか？

「・・・分かりました。こちらとしてもプリンツオイゲンの性能試験と練度上げは必要だと考えていますので悪い話ではありません。」

「宜しい。では今晚輸送船に資材を積んで行く。演習ではくれぐれも手を抜くような真似をするなよ？」

「ええ、もちろんです。ではまた。」

島津提督との通信を終えて一息つく。久藤提督や鶴野提督のような搦手を使ってくるような相手だとは思わなければ、油断は出来ないで相手をするのは疲れる。

「・・・提督、疲れてるとこ悪いんだけど、今度は長門鎮守府から通信よ。」

「・・・またか？まあいい、代わろう。・・・葛原だ。」

「お、おお。我が盟友よ、度々すまぬな・・・」

ん？普段から馬鹿みたいに声が大きい織田だが、今回はずいぶんとおとなしいな・・・これは何かやらかしたな？

「要件はなんだ？」

「そのだな・・・資材不足が深刻でな・・・」

「資材不足か・・・」

長門鎮守府に輸送した資材はそれなりの量があったはずだが、鎮守府の復興にかなり消費してしまったのは想像出来る。出来るのだが・・・あの優秀な霞が早々に資材不足に陥ると考えるのも不自然だ。「う、うむ・・・着任早々助けて貰ってばかりなのは悪いと思っておるが、他に頼れる者も居らぬのでな。何か良い案はあるだろうか?」

「そうだな・・・駆逐艦や軽巡洋艦の数はどれくらい揃った?」

「現状で重巡洋艦2人、軽巡洋艦4人、駆逐艦が10人所属しておる。」

・・・重巡洋艦?数を揃えるための最低値レシピで建造した場合、出現するのは駆逐艦と軽巡洋艦で極稀に潜水艦が出るはずだ。つまり最低値レシピじゃない建造を少なくとも2回は行っているな。

「なるほど、戦艦や空母は現れ無かったのだな?」

「うむ・・・残念ながら我に幸運の女神は微笑んでくれぬようだ・・・」

「つまり戦艦と空母を狙った建造をしたのだな?」

「・・・は!?め、盟友!?ち、違うのだ!?これはその・・・無駄遣いなどではなくてだな!」

「自業自得だ。自分でなんとかしろ。」

「盟友!?ちよ!?盟友うううう!!」

織田の悲痛な叫びを聞き流して通信を切る。無理な建造で資材を枯渇させるとは・・・愚かな奴だ。

「・・・提督、また長門鎮守府からよ。」

「織田と話す事は無い。無視して構わない。」

「えつと・・・相手は霞みたいだけど?」

「はあ・・・分かった、代わろう・・・霞か?」

「ええ、その・・・ごめんなさい。私が目を離したすきにうちのクズがやらかしてしまったの・・・私の監督不行き届きだわ・・・」

やらかしたのは織田なのだが、霞がかなり落ち込んでしまっているようだ。声にいつもの覇気が無い。

「事情はある程度聞いている。それほど切羽詰まった状態なのか?」

「そうね・・・燃料はまだあるけど、弾薬と鋼材とボーキサイトが底を尽きかけてるわ・・・空母が居ないからボーキサイトは問題ないし、鋼

材も大きな損傷を受けなければ問題無いけど・・・弾薬の不足は演習にしても実戦にしても大問題よ・・・」

なるほど・・・一応夕方には鹿児島鎮守府から資材が入ってくる予定なので、北九州鎮守府としては資材を支援する余裕はある。だが織田の奴に頼めばいくらでも資材を融通して貰えると思われてはたまらない。だが長門鎮守府の復興が遅れるのも困るし、霞が苦勞しているならば手を貸してやりたいところだ。となると・・・

「ならば遠征部隊の用意をすると良い。軽巡洋艦と駆逐艦はある程度数がいるし、ドラム缶もかなりの量を送っているはずだ。」

「まあ、それが妥当なところね・・・無理を言っただけが悪かったわ。こっちはこっちでなんとかかしてみるわ。」

「まあ待て。もうすぐ北九州鎮守府から遠征部隊を出す予定だ。昨日横須賀鎮守府が潰して回った拠点を目標として、護衛の艦隊をつけて資材の調査と残党狩りをするつもりだ。だからそれに長門鎮守府の遠征部隊も同行したらどうだ？深海棲艦と遭遇すればこちらの護衛部隊が相手をするので、単独で遠征をするよりは安全だ。」

「・・・分かったわ。すぐに準備させるわ。」

「ああ、霞も大変だろうが頑張ってくれ。」

「ええ・・・ありがと。」

本当に霞は苦勞しているようだ・・・早く安定した鎮守府運営が出来るように・・・

## 185話（横須賀艦隊出立）

球磨からもうすぐ北九州鎮守府へと帰還するとの報告を受けたので、曙と共に出撃港へと足を運ぶ。出撃港には横須賀の艦隊が集まっており、艦装を装着した状態で待機している。後は叢雲達が帰還したらそのまま横須賀へと帰る予定になっている。北九州鎮守府側の艦娘も何人か来ていて、横須賀の艦娘達との別れを惜んでいる。ついでに青葉が最後のチャンスとばかりに、横須賀の艦娘達に取材と撮影をしている。

「はあ……青葉、あまり迷惑をかける事はするな。」

「ええ……ただ取材してるだけですよお……ちゃんと相手に許可をとってから取材してますよ?」

「それはそうだろう。もしまた無許可で取材や撮影をしていたら営倉行きだ。横須賀の者達もうちの青葉が迷惑をかけて悪かったな。」

「あ、いえ。横須賀所属の青葉もこんな感じですし、他の鎮守府の青葉さんから取材を受ける事もあります。だから慣れてるので大丈夫ですよ。」

なるほど。そう言われれば横須賀や他の鎮守府にも青葉が居るのだったな。どうやらどこの青葉も取材取材と言っているのだろうか。

「そうか、そう言って貰えると助かる。ん? 叢雲達が戻って来たか。」

帰還した叢雲達は慣れた様子で出撃港から陸に上がってくる。叢雲はいつものキリツとした表情だし、秋月型姉妹は満足そうな表情で、球磨も普通の表情のようなので、特に大きな問題は起こらなかつたようだな。一応何か手荷物を持っているようなので、何かお土産でも渡されたのだろうか?

「待たせたわね。何事もなく無事に帰還したわ。」

「ああ、それは良かった。球磨も案内ご苦労だった。報告を聞きたいから少し待っていてくれ。」

「分かったクマ。」

「横須賀艦隊!! 総員整列しなさい!!」

叢雲の号令で横須賀の艦娘達が自分の前に素早く綺麗に整列する。



こういう細かなところでも練度の高さを感じさせるものだ。そして横須賀の艦娘達と話をしていた北九州鎮守府の艦娘達も、自然と自分の後ろに整列したようだ。

「ではこれで私達横須賀艦隊は横須賀鎮守府へと帰還させて貰うわ。前線基地として私達を手厚く支援してくれた事に感謝するわ。」

「こちらこそ北九州鎮守府の危機に駆け付けてくれた事に感謝する。」

「ええ、また何か異変があったらすぐに連絡しなさい。横須賀鎮守府は深海棲艦と戦う全ての鎮守府の味方をするわ。」

「ああ、まだまだ北九州鎮守府の戦力は心許無いから、また頼る事があるかもしれない。我々も出来るだけ早く戦力として使えるようになるつもりだが、それまではまた頼む。」

「そう、心強い言葉だわ。あんた達のところと肩を並べて戦える日を楽しみにしているわ。じゃあ私達はこれで失礼するわ。総員!! 敬礼!!」

横須賀の艦娘達の一糸乱れぬ敬礼にこちらもきつちりと敬礼で返す。少しだけ叢雲が微笑むと、すぐに表情を引き締めて他の艦娘達と共に広い海へと出港する。一糸乱れぬ行軍をする横須賀艦隊が見えなくなるまでその姿を目に焼き付けた。いずれは自分の艦娘達もある練度の高さに追いつけるように励まねばな。

「………行ったな。」

「ええ、そうね。」

「横須賀に並び立てるように励まねばな。これから徹底的に鍛え上げるぞ。」

「ええ、望むところよ。」

隣に居た曙も横須賀の雄姿を目に焼き付けたようだ。いつにもまして気力に満ちた目をしている。普段見るような焦っている感じではなく、静かに闘志を燃やすような良い目だと感じる。

「あー、提督? 曙? なんか今はちよつとあれクマ?」

今後どうやって艦娘達を鍛え上げるかを思案していると、球磨が少し遠慮気味に声をかけてくる。ああ、そう言えばまだ艦娘新教側での報告を聞いて居なかったな。

「ん？ああ、すまん。報告を聞こう。」

「分かったクマ。とりあえず軍艦防波堤についたら信者がいっぱい来てたクマ。司祭の奴が信者達に情報を流したに違い無いクマ。まあ、信者達は手や旗を振ったりしてただけクマ。悪い事は何もしてないクマ。」

「心配しなくても信者達をどうこうするつもりは無い。それで？その他は？」

「叢雲も球磨も事を荒げるような事はしなかったクマ。司祭もお土産にお菓子を渡してきた事以外は、特に目立った事はしてねえクマ。」

「なるほど、それがそのお菓子か？」

「そうクマ。」

球磨が持っていたお菓子を渡して来たので、とりあえず重さを確かめてみるがそんなに重くない。多少箱を振っても金属音はしないな・・・ひとまず問題は無さそうなので、詳しく調べるのは後にしよう。

「提督も叢雲と似たような事してるクマね？」

「叢雲が？」

「そうクマ。叢雲もお菓子を貰った時にさり気なく似たような動きをしてたクマ。なにしてるクマ？」

叢雲も貰った菓子箱の中身が本当に菓子なのかを気にしていたか。横須賀と縁を結ぼうと賄賂を贈る奴も多いだろうから、その対策も慣れたものと言うわけか。

「ああ、菓子箱の重さを確かめたのと、少し振って音がしないかを確かめただけだ。」

「お菓子の中身が気になるクマ？」

「ああ。正確には菓子箱の中身が本当に菓子なのかを気にしている。これで貴金属でも入っていて、賄賂扱いになるのも馬鹿らしい。」

「な、なるほどクマア・・・球磨はそこまで気が回らなかったクマ・・・」

「別に構わない。もし賄賂が入っていたら、その件を公表して神林司祭を追い詰めるだけだ。他に何か気になる事は無かったか？」

「ああ、そう言えば司祭から提督は来てないのかって聞かれたクマ。」

提督が来てない事を知ったら露骨に安心してたクマ。」

「ほう？それはまた私も嫌われたものだな。」

「あれだけ脅迫したら当たり前前クマ。球磨でも提督を敵に回すのは勘弁クマ。」

「……そこまで怖かったか？ちよつとした牽制程度のもりだったのだが？」

「それともう一つ思い出したクマ。司祭の隣になんか偉そうな奴がもう一人居たクマ。」

「偉そうな奴？名前を聞いてないのか？」

「身なりの良い奴が司祭の隣に居たクマ。でもすぐに軍艦防波堤から離れたから、そいつと話す機会は無かったクマ。」

ふむ、身なりが良いと言うことはそれなりの立場を持つ人間だろう。そして球磨が知らないと言うことは、艦娘新教絡みじゃ無い可能性が高い。だがそれにしても軍艦防波堤に現れた理由が読めない。艦娘新教を通じて北九州鎮守府や横須賀鎮守府との縁を作るつもりなら、積極的に話しかけてくるはずだ。それこそ名乗りもしないのは不自然だ。

「そいつの特徴とか覚えているか？」

「クマア？なんか小柄でキツネ目の胡散臭い笑顔な奴だったクマ。スーツを着てたから艦娘新教の偉いやつじゃ無いと思うクマ。」

「ふむ……身なりが良くて小柄でキツネ目でスーツを着ている胡散臭い奴か……」

その特徴で思い浮かぶのは綾瀬さんだろうか？市長であれば艦娘新教と関わりがあるのも理解出来る。だが介入するにしても中途半端な関わり方だ。いったい何を企んでいるのだろうか？

「そいつは隣に立ってただけで何も喋らなかつたクマ。だからもうこれ以上の情報はもう無いクマ。」

「ああ、分かった。案内と報告ご苦労だった。」

とりあえず今はこのくらいで問題無いだろう。神林さんは大人しくしていたようだし、綾瀬さんと思われる人物の目的を探るには情報が少な過ぎる。

## 186話（哨戒遠征部隊出立）

「総員、提督に敬礼!!」

曙の号令で出撃港に集まった遠征部隊と哨戒部隊の艦娘達が綺麗な敬礼をするので答礼する。このあたりの規律やらは横須賀の艦娘達にもそう劣るものではないのだがな。

「大淀から通達があったとは思うが、今日は昨日横須賀の艦隊が潰れていた敵拠点付近の調査と資材回収を行う。哨戒部隊は旗艦鳳翔で摩耶・衣笠・白露・時雨・夕立だ。該当海域の索敵と敵艦隊を発見した場合にはその撃滅をしよう。横須賀艦隊が深海棲艦を一掃したばかりとはいえ、充分に警戒するように。」

「はい。お任せ下さい。」

「次に遠征部隊は龍田を旗艦とし、吹雪・睦月・如月・春雨・朝潮だ。基本的に戦闘は鳳翔の部隊に任せて、こちらの部隊は輸送に専念してくれ。敵拠点に資材が多く残されている場合は何度か往復して貰う事になる。それと長門鎮守府から合同で遠征部隊を送る手筈となっているので、揉め事は起こさないように上手くやってくれ。」

「分かったわ〜」

「では出撃してくれ。」

「[[[[はい!!]]]]」

哨戒部隊と遠征部隊が敬礼をしてからすぐに出撃の準備にとりかかる。横須賀が潰した拠点は全部で3つだ。そのどれもが大規模な敵艦隊が居なかったとはいえ、残党やぐれが居る可能性は充分にある。あとは昨夜の不審な動きをしていた深海棲艦の件だ。上位種の意味による行動なのか、それとも深海棲艦としての本能的な動きなのか・・・調べてみる価値はあるはずだ。

「実戦ですか・・・致し方ありませんね。」

「ん？鳳翔さん緊張してんのか？」

「そう・・・ですね。今回は主力部隊に選ばれてしまったので少しだけ・・・」

「なんだよ気にすんなって!!この摩耶様がついてるんだからさ!!敵空母が出たってアタシの対空砲火で蹴散らしてやるからさ!!」

「衣笠さんも居るからね!!哨戒のお仕事は私の水上機もお手伝いしますし、敵が出たら衣笠さんの火力にお任せってね♪」

「ふふっ、頼もしいお言葉ですね。では不束者ですがどうか私を支えて下さいね。」

「おう!!」

「はい!!」

「ふっふっふっ♪」

「どうしたんだい姉さん?変な笑い方して・・・」

「変な笑い方とは失礼な!!時雨にはこの喜びが分からない?」

「えっと・・・何かな?」

「ここ最近私達白露型姉妹は凄く活躍の機会を与えられているのです!!」

「うん、まあそうだね。初日の夜戦からずっと前線に出る事が多いかな?」

「つまりこれは私達白露型姉妹が提督から信頼されている証なんだよ!!」

「そうかな?でもそうだったら嬉しいかな。」

「ぽい・・・」

「・・・夕立はなんで落ち込んでるんだい?」

「今日は春雨だけ別の部隊っぽい・・・」

「夕立姉さん?私は別に気にしていませんが・・・」

「そういう日もあるさ。別に戦うだけが僕達の仕事じゃないからね。」

「春雨と勝負出来ないっぽい・・・」

「勝負ならお姉ちゃんが相手になってあげるから!!ほら、元気出しなよ!!」

「白露姉ちゃんじゃ相手にならないっぽい・・・」

「な、な、なんだとお!?今度こそいっちゃんになってその発言を訂正させてやる!!」

「あはは・・・鳳翔さん達にあまり迷惑かけないようにね・・・」

「みんなあくちやんとドラム缶は持ったかしら？」

「はい!!準備に抜かりはありません!!遠征任務もこの朝潮にお任せ下さい!!」

「朝潮ちゃんはとつても元気ねえ♪・・・あらあ?吹雪ちゃんと睦月ちゃん?もしかして少し寝不足かなあ?」

「い、いえ!!だ、大丈夫です!!」

「ぜ、全然平気でしゅよ!!」

「・・・遠征任務とはいえ、無理はダメよ?昨日は寝付けなかったの?」

「少し考え事をしていただけですから!!心配無いですから!!ね?睦月ちゃん?」

「そそそ、そうだよね吹雪ちゃん!!」

「二人とも何かあったのかしら?」

「吹雪ちゃんも睦月ちゃんもちよつと思春期なだけだから大丈夫ですよ」

「如月ちゃん!!」

出撃部隊を送り出したあとは演習に参加するもの達を集めた。事前に通達していたのですぐに集合した。見たところ表情の明るい者がほとんどだが、気になるのは山風と羽黒だろうか。山風は表情が暗いと言うよりは他の艦娘達を警戒している感じだろうか?同じドロップ艦の村雨とプリンツオイゲンは社交的だし、鹿島は長門と打ち合わせをしながら来たのを見ている。秋月は多少緊張しているようだがその表情は明るい。ドロップしたての山風の性格が歪む程の事件は起きていないと思うので、これは山風の特長なのだろうか。

それよりも問題は羽黒だ。相変わらず暗い顔と言うか覇気が感じられないと言うか・・・士官学校時代に見た羽黒も引つ込み思案でどおどしている印象だったが、ここまで暗くは無かったはずだ。とりあえず演習に参加させようとは思っていたが、先に面談で話を聞いて原因の把握に努めたほうが良いか?

「総員、提督に敬礼!!」

今度は長門の号令で演習組が敬礼をする。

「では通達通りに演習を始めようと思う。まず一航戦と五航戦は昨日に引き続き加賀の采配で演習をしてくれ。横須賀の二航戦からのアドバイスも意識して取り組むようにな。」

「ええ、お任せ下さい。」

加賀の口数は少なく口調も平坦だが、目は静かに闘志を漲らせている気がする。そんな加賀に触発されてか瑞鶴も良い目をしている。瑞鶴についてはもうしばらく加賀に任せても良さそうだな。

「次に金剛姉妹は砲撃演習、ドロップ組は性能試験で第七駆逐隊はドロップ組と一緒に練習だ。こちらの指揮は鹿島に任せようと思うので、長門に相談しつつ進めてくれ。」

「はい、提督さんのご期待に応えられるように頑張りますね♪」

「ああ、練習巡洋艦としての能力を見てみたい。頑張ってくれ。」

鹿島は嬉しそうに微笑んでいるが、その實力はどの程度のものなのだろうか? 気になるところだ。

「では演習を始めてくれ。」

「「はい!!」」

艦娘達が敬礼をして一斉に動き出す・・・ただ一人羽黒を除いて。

「あ、あの・・・司令官さん・・・私は・・・」

「羽黒にも演習に参加して貰うつもりだったが、先に面談をしておきたい。構わないか?」

「は、はい・・・大丈夫です。」

「では応接室で面談をしよう。曙は執務室で書類仕事を進めてくれ。」  
「分かったわ。何かあったらすぐに知らせるわ。」

「ああ。」

さて・・・羽黒はいつたいたいどんなトラウマを抱えているのやら・・・たしか最初に艦隊への参加を確認した時に、もう一人になるのは嫌だと言っていたので、姉妹艦か僚艦が全滅したとかだろうか? 気が重いな。

## 187話（羽黒面談）

応接室のソファに腰を下ろして羽黒にも座るように勧める。先程から羽黒の様子を観察しているが、どうにも違和感を感じてしまう。売られていた艦娘達を平川元市長の屋敷から奪還した時に、艦娘達の多くはボロボロの状態だった。もちろん羽黒もそのうちの一人であったので、売られた先で虐げられていた事は容易に想像出来る話だ。であれば自分と応接室で二人きりになるこの状況に対して、なにかしら反応があるのが普通だと思う。しかし羽黒は怖がるでも反発するでもなく、ただ少し俯いて暗く生気の抜けたような目をしている。むしろ少し怯えているほうが士官学校で見た羽黒に近いと感じるくらいだ。

「さて、さっそく面談を始めよう。知っているとは思うがこの鎮守府で新しく提督になった葛原だ。」

「えっと・・・羽黒です・・・妙高型重巡洋艦姉妹の末っ子です・・・」  
「ああ、宜しく頼む。確認だが羽黒は前任者の大森提督から民間人に売られていた。間違いないな？」

「はい・・・間違いありません・・・」

「買い手は誰だ？」

「大手配送業者の社長です・・・」

「配送業者だ?!?つまり今鎮守府に食料やらを配送させているところか!?!」

そうなると少し面倒な話になる。もし羽黒が配送業者に怨みを抱いていたとして、羽黒に気力を感じない原因となっていたとしても。だがその解決の為に配送業者と縁を切るのは難しい。信頼出来る別の会社を探して契約を結ぶのは非常に困難だ。

「ご、ごめんなさい・・・違うと思います・・・今鎮守府に來られているのは・・・白馬運輸という会社ですよね？」

「ああ、たしかそんな名前だったと思う。」

「私が売られていたのは黒蟻運輸です・・・表向きは普通の配送業者ですが、裏では違法な商品の配送をしていました・・・私達艦娘



も含めて……」

「ほう……艦娘の取引にも手を出していたと？」

「はい……何人もの艦娘を運んでいたと社長の岩尾さんは自慢してました……うちのシステムは完璧だからバレる事は無いって……よく自慢されていました……」

ふむ、ずいぶんと程度の低い完璧だな。艦娘相手なら情報が漏れないと高を括っていたか？どうせバレても久藤提督あたりがもみ消していただけだろう。それにしても……

「……何人もの艦娘か？」

「はい、何人もです……」

「つまり他にも売られた艦娘達がたくさん居ると？」

「はい……」

これはまた大問題だな……確かに記録上不自然な轟沈をした艦娘達はまだまだ多く存在する。だが地下の隠し部屋にあった艤装の持ち主は全員帰還しているし、平川元市長も帰って来た艦娘達以外は把握していない様子だったはずだ……となると呉鎮守府の傘下の奴等に送られた艦娘達の事か？

「その艦娘達の行き先に心当たりはあるか？」

「……何人かは秘密裏に呉鎮守府傘下の鎮守府へと運んだと聞かれています……」

やはり呉鎮守府傘下の鎮守府か……正規の手続きを経て艦娘が移籍という形で売られていたのは把握している。正直こちらは正規の手続きを経てるので奪還は無理だ。だが正規のルートを通さない艦娘の販売も行われていたのか……まあ、鎮守府が相手であれば艤装の管理に困る事は無いし、わざわざ平川市長を通さないのも納得出来る。正規のルートを通さないのであれば、当然後ろ暗い理由があるはずだ。他所の鎮守府を経由して、その地域の有力者に艦娘を売っていたとかなのか？

「なるほど。しかし何人かはって事は、他にもまだたくさん居たのだな？その行き先に心当たりは？」

「……消えました。」

「・・・・・・・・なに？」

「・・・・・・・・皆消えたか解体されたと思います。」

「ん？解体はともかく消えたとはどういう事だ？それは足取りを追えないと言う意味か？」

「いえ・・・・・・・・文字通りの意味で消えました・・・・・・・・少なくとも妙高姉さん達は・・・・・・・・私の目の前で・・・・・・・・」

消えただど!?つまり艦娘の消失現象か!?確かに提督を失った艦娘は徐々に力を失って、最終的には力尽きて消えてしまうとは聞いた事がある。実際に自分も売られていた艦娘達に、鎮守府で艦娘として生きるか退職金を貰って自然消滅するまで好きに生きるかを選ばせた。結果は全員鎮守府で艦娘として生きる事を選んだので良かったのだが・・・・・・・・

「それは本当の事なんだな？」

「・・・・・・・・はい。」

羽黒が嘘をついているようにはとても見えない。となると艦娘の消失現象が起こっていた事は確定だ。そうなると次は何故消失現象が起こってしまったかだ。

「分かった。羽黒が知る限りの事を教えてくれるか？」

羽黒の話をまとめると、艦娘を一般人に販売していた当初から艦娘の消失現象が起こっていたらしい。当然高い金を出して購入した奴等は、閉じ込めていた艦娘が急に跡形もなく消えたので、大森提督や仲介の平川市長に苦情を言う事になる。だが大森提督にも消失の原因は理解出来なかつたので、艦娘達を使い捨ての商品として売っていたとの事だ。その方が何人も艦娘を売れるからむしろ都合が良かったのだろう。

しかし買った方は出来るだけ長く使いたい。そのために艦娘を購入した有力者どうしでの情報交換や、艦娘を使って実験をし始める奴が出てくる。その結果普通に犯した艦娘よりも、激しい暴行を加えた艦娘の方が消失までの期間が短い事が分かった。さらには艦娘新教のようにある程度艦娘を大事に使っている場所では、より長く生存す

る事が確認された。つまり傷ついた艦娘はより早く力を失って消失する事になる。

そうなるに次に出てくる発想は、入渠で傷を癒やせばより長く使えるのではないかという発想だ。艦娘は艀装を外した状態でも人間より丈夫だが、入渠しなければ傷が治らないという欠点を持つ。だから傷を治す為にこつそり鎮守府へと運び込み入渠させてみたところ、消失現象がおさまったという。なので大森提督は艦娘のメンテナンスを取って、販売した艦娘の入渠をさせていたらしい。そしてこのシステムで回り始めたのは半年前くらいの話だそう。

「はあ・・・想像以上に胸糞悪い話だったな・・・」

「ご、ごめんなさい・・・」

「何故謝る？羽黒は被害者だろうか？悪いのはこんなシステムを作った大森提督達とそれを利用した奴等だ。それにしても一つだけ分からない事がある。」

「・・・なんででしょうか？」

「他の鎮守府に売られた艦娘達は所属が変わるのだろうが、一般人に売られた艦娘達は羽黒も含めて北九州鎮守府に所属はしていたんだよね？」

「そう・・・ですね・・・一応正式には北九州鎮守府の所属でした・・・」

やはりそうだよな・・・売られていた艦娘達の艀装は北九州鎮守府で管理していた。それは当然だ。いくら艦娘が人に危害を加えられないからと言って、軍艦の火力を持つ艀装を一般人に渡す馬鹿はいない。それに相手が提督でなければ艦娘の譲渡は不可能なはずだ。つまり一般人に売られていた艦娘達は、形式的には大森提督の命令で一般人の家に長期滞在していた形になる。つまりは大森提督の指揮下でありながら消失現象を引き起こしたという話になる。

「はあ・・・これは艦娘の消失現象の通説を覆す事態だぞ・・・」

「はい・・・大森提督や岩尾さん達もその事で随分と頭を悩ませたと聞いています・・・」

「この北九州という街はある意味艦娘研究の最先端をいつていたのだな・・・胸糞悪い話だが・・・」

「そう・・・なるのでしょうか・・・」

かと言って艦娘の消失現象について研究を進めるような真似は出来ない。やつと多くの艦娘達が前を向いて艦娘として戦う事を選んでくれたのだ。この研究の為に消失現象を引き起こすものなら、この鎮守府は一気に崩壊する。

「だが情報としてはかなり貴重な情報だ。よく教えてくれた。」

「はい・・・」

「とはいえ、この情報はかなり扱いが難しい。だから今後この件に関して口外する事を禁じる。良いな?」

「わかりました・・・」

「ちなみにこの話を既に誰かにしたか?」

「いえ・・・していません・・・」

ならば情報が漏れる心配はないか?おそらく艦娘を購入していた奴等と艦娘販売に関わっていた奴等は、この件について公表はしないはずだ。自分達の悪事について言及する事になるのでわざわざ公表するメリットが無いし、もし公表しようとしたのが久藤提督にバレたら口封じされるはずだ。なら北九州鎮守府で他に知ってる艦娘はいらぬのか?候補としては帰還組と大淀だな。それと艦娘の販売に協力させられていた曙か?だがあいつらは艦娘の消失については何も言わなかった・・・少し探ってみる必要があるが、情報が漏れるのも厄介だ・・・慎重に事を進めなくてはな・・・

「ではこの話はここまでとしよう。次は今後についての話をしたい。」

「今後・・・ですか?」

「ああ、羽黒の今後についてだ。何か要望などがあれば聞いておきたい。」

「特には・・・ただ・・・」

「ただ?」

「もう誰かが居なくなるのが怖いです・・・一人になるのが怖いです・・・」

妙高達の消失を見たのがかなりのトラウマになっているようだな・・・自分の指揮下に加わると宣言したときも、一人きりは辛いか

らだと言っていた。とは言え艦娘達は戦うのが仕事だ。遠征任務であつても不意の遭遇戦や敵潜水艦による妨害もあるので、誰かが沈む可能性は常にある。そんな場所にこの精神状態の羽黒を送り込むなんて冗談ではない。周囲の足を引っ張って被害が増えるだけだ。

「……はつきり言おう。我々は戦争をしているのだ。常に誰かが沈むリスクを抱えて行動している。その覚悟が無い者を戦場には送り出せない。」

「それは……分かつているつもり……です……」

「だからもう一度問おう。羽黒は艦娘として戦うか？それとも前線から身を引いて、消失するその時まで余生を楽しむか？」

「……それは……私のような戦えない艦娘は必要無い……. . . . .  
ということでしょうか？」

「誤解を恐れずに言うならそうだ。」

「そう……. . . . .ですか……. . . . .」

羽黒がただでさえ縮こまっていた体を震えさせる。おそらく戦場に出て誰かを失うのは怖い、一人寂しく消失するのも恐ろしいと言ったところか。

「だが羽黒にもう一度立ち上がる気力があるならば、私はその気持ち  
を尊重しよう。例えば正規空母の瑞鶴も酷い精神状態で、翔鶴が傷付  
く事を恐れている。だが今は少しずつ前を向いて、翔鶴を守るだけ  
の強さを手に入れようと努力している。だから私は瑞鶴には優先的  
に演習をさせようと考えている。」

「……. . . . .瑞鶴さんは……. . . . .強いのですね……. . . . .」

「そうかもな。だが瑞鶴だけが特別だとは思わない。こここの艦娘達の  
多くは虐げられ、心に傷を負った者が多くいる。それでもなお気丈に  
振る舞い戦場へと駆けて行くのだ。」

「そう……. . . . .ですよね……. . . . .私だけじゃ……. . . . .ないですよね……. . . . .皆つ  
らい目にあつてますよね……. . . . .なのに私だけ……. . . . .」

どうにも羽黒は自分自身を責める傾向にあるようだ。それが曙の  
ように仕事をする原動力になるのであれば、まだやりようがあるのだ  
が……. . . . .

「あくまで私見ではあるが、羽黒には心の芯となるものが無いように思える。」

「心の・・・芯ですか・・・」

「ああ、例えば瑞鶴なら翔鶴を守りたいという想いを持っていたから立ち上がった。羽黒と同様に売られていた五十鈴は艦娘としての誇りを取り戻したかったか？いずれにせよ強く生きるには強い想い、強い目的が必要なのだと私は考えている。」

そう、私も兄を殺した奴らに復讐するという強い想いを胸に生きてきた。そして兄が護ろうとしたこの国を護るという想いも同時にだ。この2つがあったからこそ安易な暴力に頼らず、提督としての実力を身につける努力が出来たし、今後も提督として成長する為に努力は惜しまないだろう。

「強い想い・・・ですか・・・」

「ああ、言い換えれば欲と言っても良い。欲は全ての原動力だ。人間なんて欲を満たす為に生きていっているとんでも過言では無い。確かに欲に身を任せればいずれ身を滅ぼす事にもなるだろう。だが無欲な奴に強い意志は宿らない。だからこそ私は強い欲とそれをコントロールする理性が必要だと考える。」

「そ、そうですね・・・」

「だからこそ羽黒も何か目的を持って見たらどうだ？そうすればきつと強く生きられるはずだ。」

「強く・・・生きる・・・」

そう言つてまた羽黒は黙り込んでしまう。だが私の言葉について考えてくれているならば、少し時間を与えたい。自分の欲なんてものは本人にしかわからないし、外部から与えてやるものではない。

「・・・わ・・・私は・・・」

## 188話（羽黒面談2）

「私は・・・羽黒は・・・弱いです・・・」  
「・・・ああ。」

「妙高姉さん達は・・・汚されても最後まで・・・誇り高く消えて逝きました・・・なのに羽黒は・・・」

「羽黒はなんだ？」

「羽黒は・・・痛いのが怖くて・・・消えてしまうのが怖くて・・・妙高姉さん達に庇われて・・・なのに妙高姉さん達が居なくなっただけになっても・・・恐怖に震えて・・・最低な人に媚びて生かして貰うような惨めで最低な娘なんです・・・」

なるほど。羽黒から気力を感じなかつたのは自己嫌悪が原因か。ボロボロになっても羽黒を庇おうとして消えていった姉妹達と、そんな状況に追い込んだ相手に媚びてでも生き残った羽黒。どっちが誇り高いかは問うまでもない。

「つまりそんな弱い自分には価値が無いと？」

「はい・・・羽黒にはもう・・・」

「そうか・・・」

確かにこの様子では使いものにならない。指揮官としては切り捨てるのが正しい判断だ。例え艦娘達からの非難を受けたとしても、心の折れた奴を艦隊に残すべきではない・・・艦娘達の命を預かる提督が私情で判断を狂わせてはいけない・・・はずなのだ・・・だが死の恐怖に怯え、無力感に絶望した姿は・・・

「・・・あるところに一人の少年が居た。」

「・・・え？」

「その少年は早くに両親を失っていたが、少年には心優しい兄が居た。兄はとある鎮守府で提督をしていた。ど田舎の小さな鎮守府だったが、国を護る為に戦う兄は少年にとっての英雄だった。その英雄の元で戦う艦娘達もキラキラと輝いて見えたんだ。そんな兄と艦娘達の姿を見ていた少年は、当然のように提督になることを夢見ていた。幸い少年には妖精さんが見えていたから、将来の為にと兄から色々と教

わったし、艦娘達もその少年を可愛がってくれていた。」

「それって……」

「だがそんな優しい日々は長くは続かなかった。腐った上層部の奴らに目をつけられた兄は、無実の罪で捕らえられ軍法会議にかけられる事となった。兄は上層部にとって都合の悪い事を研究してしまったのだ。」

「そんな……」

「兄は少年や艦娘達に言っていた『きちんと話せば理解して貰えるはずだ。きつと上層部の人達はなにか誤解をしているんだ』とな。だが兄は戻って来なかった!!そして新しく着任した提督は、兄が都合の悪い情報を艦娘達に伝えたかもしれないと考えて……所属する艦娘達の全員を解体した……」

「……」

「少年は無力だった……兄の処刑も艦娘達の解体も止める術を持たなかった。少年はただただ逃げた。兄と艦娘達を失った事を悲しみ、上層部の奴等の凶行に怒り、自分の無力を呪い、自分も口封じされるのではという恐怖に怯え、無様に泥だらけになりながら一人近くの山中へと逃げ込んだ。」

そこまで語ってから少し羽黒の様子を見ると、少年の話に同情したように涙を浮かべていた。真剣に話を聞いてくれているようだな。

「少年は人間が怖かった。いつ自分の正体がバレて、上層部の奴等の手で殺されるかと常に不安だった。だからと言って少年が一人でずっと山の中で暮らせるほど甘くはない。無力な少年にとって山の生活は過酷だった。ボロボロになりながらも少年はとある山村へと奇跡的にたどり着き、そこで名前を変えて戦争孤児として生きる事にした。このご時世だ、身寄りの無い戦争孤児なんてそこら中に居たから、村人達に怪しまれるような事はなかった。だが人々は顔も名前も知らない戦争孤児を助ける義理も余裕もなかった。」

まあ、当然だ。その山村は深海棲艦の襲撃を受けた者達が、より海から離れた場所に避難するために作った場所だ。交通網と物流が麻痺している状態で新しい山村に余裕なんてあるわけがない。



「少年も生きる為に必死だった。泥水を啜り、残飯を漁り、地に這い蹲って物乞いをし、盗みに手を出して山村の者達に追い回される。そして噂を頼りに新しい山村へと移り住み、似たような事をしてまた次の村を探す。それが少年の生きる術だった。．．．そんな少年の話聞いて羽黒はどう思う？誇りも良心も捨てて生にしがみついた少年をどう思う？誇りの無い奴と見下すか？生にしがみついたみつともない奴と笑うか？」

「そ、それは．．．仕方のない．．．事だと．．．」

「ああ、そうだろうとも。少年が生きる為にはそうするしかなかったのだからな。そんな生活が続けるうちに少年は少しずつ生きる為の知恵を手に入れた。山で食べる事の出来る山菜の判別が出来るようになった。釣や狩りで獲物を捕らえる事が出来るようになった。人目を盗んで残飯を確保する事が出来るようになった。村人の仕事を手伝い食料を分けて貰えるようになった。そうして少しずつ生活が安定してきてから、ようやく少年は兄を陥れた奴らに復讐する事を考え始めた。」

「復讐．．．ですか？」

「ああそうだ。生きる事が目的だった少年は、生きる為の目的を手に入れた。衣食住足りて礼節を知るとも言うが、生きる事に必死な環境では余計な事は考えられないものだと思う。生活に慣れて余裕が出来たからこそ、少年は自分が何をしたいかを考える事が出来たのだ。」

「その少年は．．．．．今でも復讐を？」

「ああ、それなりに月日が経って青年と呼ばれるようになっても、未だに復讐の為に準備を続けている。だが同時に青年には夢があった。」

「夢．．．ですか？」

今までずっと暗い表情で俯いていた羽黒が、少しだけ顔を上げた。「ああ、いつか憧れた兄のような、いや、兄をも超えるような立派な提督となって、兄が護ろうとしたこの国を護る事だ。これがなかなか厄介な話でな．．．兄を陥れた奴等は軍の上層部だ。これを皆殺しにすれば軍が混乱して護るべき国が滅びてしまいかもしれない．．．そう考えると安易な復讐に走るわけにはいかなかった。だからこの夢

がなければとつくに復讐は終わっていただろうな。」

「それは・・・そうかもしれないませんが・・・」

「士官学校に入った青年は戦いに関する知識を集め、演習で多くの経験を積んだ。だが提督となった今でも青年の復讐と夢を同時に実現するには、全然実力が足りていない。だから青年は隠れて牙を研ぐ。今は力を蓄える時だから大きな揉め事は避けねばならない。例え復讐すべき相手に頭を下げる事になろうともだ。」

「司令官さんにそんな過去が・・・」

流石にここまで語れば自分の話だと分かるか。まあ、今更だな。こんな過去でも羽黒が前に踏み出すきっかけになれば良い。

「少し話が逸れたか・・・とにかく今までの羽黒は少年と同じで、生きる為に必死だったのだろうか？ならば誇りを失っていたとしても、それは誰かに責められる事ではないはずだ。そして今の環境ならば戦場以外で死ぬ事は無い。だからいつまでも自分を責めていないで、自分のやりたい事を探せば良い。考える余裕くらいはあるはずだ。」

「私の・・・羽黒のやりたい事・・・」

「ああ、なんでも構わない。安心して暮らせる場所を確保したい、誰かを守りたい、美味しいものが食べたい、姉妹艦達が出来なかった事がしたい、羽黒がやりたいと思えばなんでも良い。もちろん復讐を考えても良い。」

そう問い掛けると羽黒は悩み始めた。すぐに答えが出る話ではないかもしれないが、考え始めたというのは最初の一步を踏み出し始めたという事だ。悪くない。

「・・・!!?し、司令官さん。」

「どうした?」

「曙さんから通信です。長門鎮守府近海の警備をしていた龍驤さん達が、敵艦隊を発見したとの事です。」

ちっ・・・まだ話は途中だったというのに邪魔しやがって・・・まあ、どのみち深海棲艦を許す理由は無いので、殲滅しか選択肢は無い。「分かった。相手の構成は?」

「ホ級elite、ホ級1、イ級elite、イ級2の計5隻で

す。」

「分かった。龍驤達に迎撃させろ。私もすぐに執務室に戻る。」

「わ、分かりました。」

「こちらには軽空母がいるので、航空機による先制攻撃が出来ると思えば若干有利か？だが油断出来る程ではないな。」

「羽黒、話の途中で悪いが私は指揮をしなくてはならない。さっきの話をよく考えておいてくれ。それと少年の話は誰にも言うな。」

「は、はい。」

「では演習に戻れ。」

## 189話（龍驤隊戦闘）

急いで執務室に戻ると曙が真剣な表情で通信機を使用していた。「状況は？」

「もうすぐ龍驤さん達が仕掛けるわ。長門鎮守府にも連絡済みよ。長門鎮守府からは援軍を出すべきかと聞かれているけどどうするの？」  
「いや、援軍は必要無いだろう。長門鎮守府の艦娘達は建造したばかりで連携も取れないだろうし、遠征部隊として人員も割いている。龍驤達が苦戦するようなら長門鎮守府にも出て貰うしかなくなるが、今はまだ必要ないはずだ。」

「そう。じゃあ伝えておくわ。」

「しかしこう何度も深海棲艦の襲撃があると、どうにもきな臭いな……」

「そうね……戦艦棲姫の討伐後に横須賀鎮守府が周辺海域の掃討をしたのよね？という事はこいつらはその外側から来たってことよね？」

「ああ、そのはずだ。地図を貰えるか？」

「ええ、分かったわ。」

執務室の机に地図を広げて、深海棲艦の遭遇地点に駒を置いてみる。北九州鎮守府から北北西にいったところに集積地棲姫、その南西あたりから戦艦棲姫が流れて来ている。そして叢雲達が潰した拠点は集積地棲姫の拠点から東に向かってある程度並んでいる。これは再建中の長門鎮守府を護る為に、長門鎮守府をカバーするように行動した結果だ。それに集積地棲姫が居た拠点より西側となると佐世保鎮守府傘下の管轄となるので、そのへんの軋轢を嫌ったのかもしれない。そして夜間にふらふらとしていた深海棲艦は長門鎮守府の北を東側から移動していて、今回の深海棲艦も長門鎮守府から北東の方向から向かって来ている。このふたつの艦隊が無関係では無いと考えると……

「……………東側に上位個体が居て、偵察部隊を送り込んで来ている？」

「……………充分にあり得る話ね。」

だがどうしてこうも長門鎮守府が狙われる？一度崩壊させた場所だから、防衛網の構築が出来ていないと知っているからか？それともただ単に深海棲艦の本能に従って、激しい戦いのあった場所に惹かれて寄って来ているだけなのか？

「もしこの仮説が本当だったら、また面倒な事になってしまふな……」  
「そうね……ん!!考え事は後よ。龍驤さん達が接敵するわ。」

司令官から任された偵察任務やったけど、うちの艦載機が見事に敵を見つけてやったでえ!!しかも敵さんは少数やし司令官から迎撃命令も即座に出たんや!!前回は多勢に無勢で逃げるだけやったけど、今回はうちらが主力艦隊や!!

「さあ仕切るで!!攻撃隊発艦や!!」

まずはうちの艦載機でどれだけ敵さんを削れるかにかかてるんや!!うちがへましたら戦力差はかなり不利になってしまふから責任重大や!!

「あんま気負うなよ龍驤。この天龍様が居るんだからあんな奴らに負けやしねえよ。心配してねえでどーんとかまして来いよ!!」

「そうよ!!暁達第六駆逐隊も付いているんだから、龍驤さんが失敗しちゃってもちやんとフォローしてあげるわ!!」

「そうよ!!もつと雷達を頼って良いのよ♪」

「な、なのです!!」

「ダー」

これはあかんなあ。久々の実戦で表情カチンコチンに固まっとつたんかいな？天龍だけやなくて第六駆逐隊の娘達にも心配かけてしまったやんか。

「アホぬかせ!!まずはそこで大人しくうちの華麗な艦載機さばきを見とかんかい!!」

言うたからにはきっちり仕事せなあかんな!!艦載機の皆!!ほんま頼むでえ!!そう声をかけたら、なんや気合の入った雰囲気を感じる!!ほんま頼りになる奴らやな!!

『敵艦隊捕捉!!母艦龍驤より攻撃命令!!これより襲撃隊列にて攻撃する!!俺に続けえ!!』

『敵艦載機は無く対空能力も低い!!お前らあんな奴らに落とされるなよ!!』

『当たり前だろ!!龍驤の姉御に恥かかせんなよ!!』

敵の艦載機による迎撃もなく、龍驤の放った艦載機達は悠々と距離を詰める。こちらに気がついた敵艦隊が対空迎撃を行ってきたので、敵の迎撃を躲しながら一気に距離を詰める。幸い敵の迎撃による弾幕は薄く、ほとんど被害を出さずに魚雷を投下して一気に飛び去る。

『よっしゃあ!!軽巡ホ級を仕留めたぞ!!』

『やったぜ!!しかもあいつら動揺して隊形ぐちゃぐちゃじゃねえか!!』

『おいおい、うちの姉御の綺麗でフラットな体型を見習いやがれっつんだバカ野郎!!』

上機嫌で飛び去る妖精さん達に龍驤からさらなる指示が出る。

『態勢立て直したらもう一回突撃だどよ!!』

『そりや良いな!!天龍さん達に任せる前にもう一隻くらい沈めてやろうぜ!!』

『よしきた!!深海棲艦に九七式艦攻の恐ろしさ見せてやろうぜ!!』

十分に距離をとった艦載機達は、再び襲撃隊形を整えて敵艦隊へと突っ込む。混乱する敵艦隊は各自がバラバラに対空迎撃をされていて、さつきよりも弾幕が薄い。

『へいへい!!弾幕薄いよ!!』

『よっしゃ!!旗艦狙え旗艦!!』

『あいつ沈めたら金平糖貰えるぞ!!』

妖精さん達は敵旗艦目掛けて魚雷を投下したものの、その進路を塞ぐように移動した駆逐イ級に阻まれ、駆逐イ級は盛大な爆発と共に沈んでゆく。

『チツ、大物は逃したか。全機帰投する!!』

『だが2隻沈めたんなら十分な戦果じゃないか!!』

『俺達の仕事はここまでだ!!武運を祈るぜ!!』

「見てみ？うちの艦載機は出来る奴らやる？」

軽巡ホ級に駆逐イ級を仕留めた龍驤がドヤ顔で笑う。これで残り  
はホ級eliteとイ級eliteとイ級の三隻だ。こっちの練度  
に不安は残るものの、数的有利だから充分にやれる!!

「へっ!!やるじゃねえか!!」

「ならうちは艦載機の回収するわ。前線の指揮は天龍に任せるでえ。」

「おう!!任せとけ!!行くぞちびっ子共!!」

「ちよつと暁はレディなのよ!?子供扱いは……って置いてかないでよ  
!？」

暁が出遅れたせいで少しもたついたが、すぐに単縦陣を形成して交  
戦開始する。全速力で近づきながら砲撃するが、初弾はお互いに全弾  
外れ。

「次弾装填!!次は当てっぞ!!」

さっきの砲撃から誤差を修整して2発目を放つ!!旗艦のホ級el  
iteには避けられたものの、イ級eliteとイ級に砲弾が命中  
し、イ級elite中破とイ級轟沈の成果を上げるが……

「クソがっ!!」

「はにやーっ?!」

「もう、許さない……許さないんだから!!」

こっちの被害はオレと電が小破、暁が中破か……

「雷撃戦行くぞ!!暁は無理すんな!!」

充分に距離が縮まったので中破した暁以外で魚雷を発射する。4  
隻分の魚雷はきちんと相手の逃げ場を奪って命中し、派手な爆発が巻  
き起こる。

「やったわ!!」

「おい!!敵の雷撃来るぞ!!油断すんな!!」

「え!？」

こっちの雷撃が命中したことに喜んだ雷が油断しちまった!?!他の  
四人は上手く雷撃を躲したが、雷がもろに雷撃くらっちゃった!?!

「うう……なによもう、雷は大丈夫なんだから!!」

「まったく・・・大丈夫じゃねえだろうが・・・まあ、とりあえず敵艦隊は全部沈めたみたいだな。提督に報告すつか。」



## 190話（報告&資料の分析）

「提督、龍驤さんからよ。」

「ああ、代わろう。……龍驤、状況は？」

「あー、とりあえず終わったでえ。けどそれなりに被害出てもうたわ……」

「ある程度は折り込み済みだ。報告を。」

流石に無傷とはいかないか……龍驤の艦載機による先制攻撃で削ったから、こちらが優勢ではあつたはずだが……

「天龍と電が小破、暁が中破、雷が大破や。」

「かなり被害が大きいな……」

「あー、天龍だ。わりい提督……前線で指揮をしたオレの責任だ。」  
「責めるつもりはない。だが今後の対応を考える必要があるな……龍驤、艦載機の状態はどうだ？」

「まだまだ余裕やで!!今回は敵空母も居らんし、対空強いのもおらんかったしな。燃料と弾薬もまだまだあるでえ。」

出来れば長門鎮守府近海の警備は継続しておきたいところだ。しかし暁と雷は下からせて入渠させるべきだ。本来ならば長門鎮守府で入渠させたいところなのだが、あのバカが資材を使い込んだせいでそれも難しい。となると……

「ならば部隊を二つに分ける。龍驤、響、電はそのまま長門鎮守府近海の警備を継続しろ。天龍、暁、雷は北九州鎮守府へと帰還せよ。」

「あ!?!おい、オレはまだやれるだろ!?!下げるなら電を下げてやれよ!?!」  
「それも考えたが、万が一長門鎮守府から北九州鎮守府の道中で敵に遭遇したらどうする?いくら索敵をしたからと言って、見落としが無いとは限らない。それに大破した雷を速やかに帰還させるなら、電よりも天龍に曳航させた方が速い。」

「ちっ……そういう理由ならしょうがねえな……」

「あー、警備の継続はええけど……うちらだけやとまともに戦闘は出来んけど、そこらへんは考えてくれとるん?」

「ああ、すぐに増援を送るから、それまで持ち堪えれば良い。もし敵艦

隊を発見した場合は無理に戦闘する必要はない。最悪長門鎮守府と合流して時間を稼げ。」

「そこまで考えとるならええわ。はよ援軍送ってや。」

「ああ、分かった。」

とは言ったものの援軍は誰を送るべきか・・・もし仮に長門鎮守府よりも東側の領域に上位種が存在しているとしよう。今のところはこちらを探ろうとしている様子だが、その偵察部隊をことごとく潰している。これで警戒をして引っ込んでくれれば良いのだが、強引に攻めて来られると非常にまずい。今の長門鎮守府は再建途中で補給拠点としての役割も満足にこなせない。遠征部隊が資材を回収してくれば少しはマシになるのだが・・・それにしても長門鎮守府よりもさらに東側は、舞鶴傘下の領域だろうに・・・攻めるならそっちを攻めて欲しいものだ。

「曙、援軍を出す。鈴谷、熊野、陽炎、不知火を呼んでくれ。」

「分かったわ・・・すぐに来るそうよ。だけど良いの？戦力を小出しにするのは愚策じゃないかしら？」

「確かにそうなのだが・・・うちには空母も戦艦も軽々しく動かせる余裕がないのでな・・・情報が足りなさ過ぎる。」

「そうね・・・」

「だから情報を集める。曙、大本営に問い合わせさせて長門鎮守府と益田鎮守府と出雲鎮守府の戦闘記録を貰え。ここ3ヶ月くらいで構わない。」

「ええ、分かったわ。」

鈴谷達に出撃を命じてから、取り寄せた戦闘記録を調べていく。どの鎮守府も近海の哨戒と資材溜まり付近での小競り合い、それと小規模な深海棲艦の襲撃の撃退程度の戦闘しかしていない。あとは遠征先での遭遇戦くらいか？だが・・・

「ふむ、こうして戦闘記録を見ると指揮した提督の性格が少し見えてくるな。」

「そんな簡単に分かるものなの？」

「大雑把な傾向だけならな。例えば長門鎮守府の原田提督は哨戒を疎かにしている。そのせいで遠征先で被害を受ける事が多く、その後には過剰な戦力を送り込んで深海棲艦を撃退している。思慮に欠けていてプライドだけ高い無能だな。」

「そうね．．．まあ、救援要請の通信越しでも傲慢な態度だったから分かるわ。」

たしかに死んだ原田提督に関しては、あれだけの言動を見れば戦闘記録を見るまでもないか。

「次に益田鎮守府の狐塚（こづか）提督だが、この人は頻繁に哨戒部隊を出している。しかし哨戒先は近場ばかりで遠くの情報は集めていない。そして遠征先も近場ばかりだから、ほとんど損害を出していない。」

「．．．．．つまり臆病者？」

「可能性は高い。だが本当に臆病ならばもっと遠距離まで哨戒させても良いと思うがな。自分が前線まで出るわけではないのだから、艦娘達を犠牲にしてもより多くの情報を集めようとしそうなものだ。」

「ならどういう性格なのよ？」

「たぶんだが名誉などに興味がなく、その日が無事に過ごせたら良い程度の事を考えているのではないか？すくなくとも戦闘指揮に自信やプライドを持っているタイプではないと思う。」

「．．．最低限の仕事だけすれば良いって考えね。」

それで間違っていないとは思いますが．．．だがどうにもなにか引っかけ。あとで探りを入れてみるべきか？

「最後に出雲鎮守府の猿田提督だが、こいつは哨戒の数も遠征や出撃の数も少ない。だが数少ない戦闘の規模は大きめだ。」

「それにその戦いでもほとんど被害を受けていないみたいね。かなり優秀なのかしら？」

「そこに関しては少し疑問が残るな．．．艦娘達の練度が低いわりに被害が少なすぎる。おそらくは虚偽の報告をしているのだらう。．．．．．ほら見ろ、この戦いでは練度が8あった艦娘がその2回後の戦いでは練度3になっている。この艦娘とこの艦娘もだな。」

一つの鎮守府に同じ艦娘が二人所属することは出来ない。そして練度が低下するなんて話は聞いた事が無い。つまり一度轟沈して再び建造かドロップ艦で手に入れたのだろう。雑な隠蔽工作だな。」

「言われてみればそうね・・・。」

「つまりこいつはプライドが高く外面を気にするタイプだな。そのわりには仕事熱心には見えないが・・・。」

おそらく少ない遠征回数で艦隊を維持出来ていると言うことは、一回の遠征で多くの資源を回収していると言うことだ。そして戦闘の直後に遠征しているの、深海棲艦が資材を溜め込むのを待つてから拠点を潰してそのの資材を奪っているのだろう。一見効率良く見えるのだが、自分の手に負えなくなつて援軍を呼ぶ事も多く、戦闘の規模相応に被害も出ているはずだ。それでもなお問題無いくらいに資材を確保出来ているのだろうか？

「あとは深海棲艦の動きかしら？戦闘の回数で言えば長門鎮守府が一番多く、次に出雲鎮守府、一番少ないのは益田鎮守府ね。この傾向は三ヶ月間変わってないわ。」

「ああ、それぞれの提督の積極性を考えてもそうなるだろうな。そして直近でも集積地棲姫の一件があるまでは特に変わった様子はない。益田鎮守府も出雲鎮守府も特に変わった動きをしていないと言うことは、今回襲撃が続いているのも集積地棲姫との戦いの影響だと考えて良いはずだ。」

「でもこれじゃ上位個体が居るかどうかは・・・!？」

急に曙が驚いた顔をする。何か気がついたのか？

「どうした？」

「どうにもタイミングが良すぎると思うんだけど、益田鎮守府の狐塚提督から通信よ。」

「救援要請か!？」

「いえ、ただ何か話があるだけみたい。」

ふむ、長門・益田・出雲鎮守府の戦闘記録を調べている最中に通信か・・・あまりにもタイミングが良すぎるので、偶然このタイミングで通信を入れてきたとは考え難い。となると大本営の奴らが曙に戦

闘記録を送った際に、北九州鎮守府が何か探っているから気をつけろ  
とでも伝えたのか？開示されている戦闘記録の請求なんて提督なら  
ば誰でも出来る事なのに、そこまで過敏に反応したのか？

「分かった。代わろう。」

## 191話（狐塚提督対話）

「代わりました。北九州鎮守府の葛原です。」

「益田鎮守府の狐塚だ。」

「それで？本日はどのようなご要件で？」

「なにやらお前が我々の事を探っていると聞いてな。なんのつもりだ？」

ふむ、やはり大本営あたりから戦闘記録を取り寄せたとの連絡があったか。こうなると鶴野提督にも報告が上がっている可能性が高いな。まあ、別に隠すような事は無いのだが……

「なんのつもりと言われても、深海棲艦についての情報を集める為に戦闘記録を取り寄せただけですが？何か問題でも？」

「……何を隠している？長門鎮守府の次はうちを狙っているのか？」

「はあ……長門鎮守府は私が潰したとでも？長門鎮守府が潰れたのは原田提督のせいでしょう？」

「ああ、そうだと。あの声がデカいだけのクズが死んだのは自業自得だ。ざまあみると言ってやる。あのクズを自滅の道に誘い込んだお前には礼を言っても良い。」

ほう？原田提督と狐塚提督はかなり仲が悪かったようだな。やはり同じ舞鶴鎮守府の傘下であろうと、一枚岩ではないようだ。だが共通認識として自分が原田提督を陥れたのは事実とされているようだ。

「そんな事実はありませんが、ひとまずおいておきましょう。それで？私が次は益田鎮守府を狙っている？」

「その通りだ。原田のやつは騙せてもわたしは騙されんぞ？お前は鎮守府を潰して自分の仲間を引き込むつもりなのだろうが、そんな作戦はお見通しだ。」

「とんだ濡れ衣ですね……」

「誤魔化そうとしてもそうはいかんぞ？あの織田とかいう煩い奴はお前の友人なのだろう？それに北条さんとの繋がりも無視出来ない。」

上層部の奴らにどんな手段を使つて提督の座にねじ込んだのかは分からんが、お前達は鶴野提督から領地をぶん取つたのだ。警戒しない理由が見当たらんわ!!」

これは話にならないな・・・結論を決めて話をしている奴に、一々説明しても無駄でしかない。というかもし仮に長門鎮守府を潰したのも策略で、誰かを長門鎮守府に着任させる事が出来るなら、絶対に織田などという厄介な奴は選ばない。もし選べるのであれば朔真を選ぶ。何を考えているのかわからんやつだが、あいつは優秀だし勤勉であり問題行動を起こさない。

「はあ・・・話が通じないのは分かりました。警戒するだけならお好きにして下さい。我々はそちらの警戒を無視して粛々と深海棲艦の対応をするだけです。」

「・・・なんだ？益田鎮守府の近くに姫級でも居ると言いたいのか？」

「さあ？それを調べる為の情報収集ですから。ですが私は姫級とまではいかなくとも、上位個体が存在すると仮定して調べていますよ。」

「・・・そんな兆候は確認していない。」

「ええ、狐塚提督は近海での哨戒と遠征しかしていませんからね。奥の方で虎視眈々と準備をしている敵艦隊は見つけられないでしょう。」

「ぐ・・・」

ふむ？深海棲艦の話は気になるのか？これならば少し不安を煽れば偵察をしてくれるのではないか？そして何か発見すれば、鶴野提督に増援を求めて解決してくれるかもしれない。

「聞きたい事はそれで終わりですか？であれば無駄な通信はさっさと終わりたいのですが？情報収集とその精査を続けなくてはなりませんから。」

「・・・なにか分かったら連絡しろ。」

「はあ？」

「なにか分かったら連絡しろと言っている。」

「はあ・・・それをして私にどんな価値があるのでしょうか？」

「価値だと？情報の共有は重要な事だろうか？お前が我々の戦闘記録を取り寄せたのも情報を集める為だろうが。」

「それが何か？」

「だからお前もきちんと我々に情報を共有しろと言っているのだ!!」

「はあ……狐塚提督はあなたを陥れようとしている私の言葉を信じるつもりですか？」

「ぐ……」

また黙ったな。こいつは都合が悪くなると黙るタイプのような。

まあ、考えなしにベラベラ喋るよりはマシか。原田提督よりは知性を感ずる。

「失礼。なにも私は情報を一切開示しないと言うつもりはありません。戦闘記録はきちんと大本営に提出しますので、気になるのであればそちらから取り寄せてはいかがですか？手続きの関係で一日か二日ほど遅れた情報にはなりますが、そこから読み取れるものもあると思います。もちろん戦闘記録は結果であって、偵察の情報や私の予測等は記載されませんが。」

「……何が目的だ？」

「目的？北九州鎮守府を護る事ですよ。あと今は長門鎮守府の防衛にも力を貸しているところです。」

「違う!!情報を出し渋る目的を聞いている!!」

「はあ……必要最低限の義務は果たしているのですがねえ……あえて言うならば目的はありません。狐塚提督に協力するデメリットが大きいから、私の考えを伝えたくないだけです。」

「デメリットだと？」

「ええ、私も近隣の鎮守府との情報共有は重要だと考えていました。ですから先日自分が集めた情報から、強力な個体が存在するかもしれないと警告しました。佐世保鎮守府と長門鎮守府と大本営に同じ情報を送ったはずなのに、何故か長門鎮守府が一人でろくに情報収集もせずに艦隊を差し向けた責任を擦り付けられました。それで長門鎮守府が崩壊したのは私のせいだと？冗談ではありません。それが舞鶴鎮守府傘下のやり方であれば、関わりたくないと言うのが当然で



す。」

「ぐ……」

また黙ったか。と言うことは反論しようにも思いつかないという事かな？狐塚提督は原田提督の性格をよく知っているのだろう。さつきも声がデカいだけのクズだと言っていたし、ここまで言われれば原田提督が騙されたのではなく、勝手に暴走して自滅した事にも考えがいくはずだ。

「ではそういう事で、情報が欲しいのであれば自分で偵察部隊を送り込んで下さい。それか出雲鎮守府の猿田提督に協力を要請してみても如何ですか？」

「ま、待て。猿田の奴は駄目だ。あのバカに振り回されるのはごめんだ……」

「振り回される？ああ、援軍に呼ばれる事ですか？」

「そうだ。奴の適当な作戦に付き合わせられて、わたしの艦隊がどれだけ被害を被った事か……原田のクズもそうだった……鶴野提督からの命令で無ければあんな奴らに付き合ってやる義理は無いのに……」

ほほう？どうにも狐塚提督は被害者面をしているが、私にはそうは思えない。確かに狐塚提督の艦隊が原田提督や猿田提督の援軍として呼ばれ、少なくとも被害を被っているのは事実だ。しかし原田提督や猿田提督が深海棲艦に積極的に攻撃をするから、益田鎮守府への襲撃がほとんどなかったとも言える。自分に言わせれば普段から近海だけを行動範囲としているツケを支払わされただけというだけだ。

「そうですね。それはお気の毒に。ですが私には関係無い話です。それではこれで。」

「ま、待ってくれ!!まだ聞きたい事がある!!」

「はあ……なんですか？」

「お前はこれからどう動くつもりだ？」

「さあ？情報が無ければなんとも言えませんね。無闇に戦力を投入出来るほど、北九州鎮守府には余裕がありませんから。情報収集をしつつ北九州鎮守府と長門鎮守府の防衛をするのに手一杯でしょう。も

し仮に上位個体が北九州鎮守府か長門鎮守府を襲撃しようとするれば全力で抵抗しますが、別の鎮守府が標的であれば我々の手には負えないと考えています。」

「だったら!!だったら情報があればどうだ!?敵の上位個体の位置が判明すれば協力してくれるか!？」

これはまたずいぶんと必死だな。助けを求めらなまず猿田提督か鶴野提督だろう?猿田提督と仲が悪いのは分かるが、鶴野提督を頼らない理由はなんだ?

「それは共闘のお誘いという事ですか?偵察はするから援軍を送れと?信用出来ない相手である私と?」

「あ、ああ。今日話してみても分かったがお前はかなり頭が回るようだ。協力する価値があると判断した。もし仮に上位個体が居たとして、それを速やかに撃破すれば長門鎮守府への圧力が少なくなる。お前にとっても悪い話ではないはずだ。それがわからん奴ではないだろう?」

「ふむ・・・そちらが偵察を担当して下さいるのであれば悪い話ではありませんね。ですが共闘に関してはお約束出来ません。我々の手に負えない相手が居る可能性も充分にあります。その時は素直に鶴野提督に助けを求めれば良いかと。」

「そ、それは・・・そうなのだが・・・色々と事情があつてだな・・・とにかく協力はしてくれるのだよな?」

ここまでくれば安泰だな。散々不安を煽って突き放したかいがあつたというものだ。これで狐塚提督が頑張つて情報をかき集めてくれるだろう。

「まあ、ひとまずは協力しましょう。まずは情報の精査からですかね?」

「情報の精査?」

「私が集積地棲姫の危機に反応したのは、資材溜まりの資材が想定よりも多かつた事です。それで深海棲艦が大規模な攻勢の為に資材を前線に送つたのではないかと疑つたのです。つまり情報の精査をすれば敵艦隊を直接発見せずとも、その兆候を感じ取る事が出来るかも

しれないのです。やる価値は充分にあるかと。」

「な、なるほど・・・」

「とりあえず欲しいのは資材溜まりの状況と、通信状態でしょうか？  
あともちろん深海棲艦と遭遇すればその情報も。」

「わ、分かった。だが通信状態は何故必要なんだ？」

「これは横須賀の艦娘から聞いた話なのですが、姫級などの上位個体は通信妨害をしてくる可能性があるそうです。ですから艦娘達にも  
し鎮守府と連絡が取れなくなった場合、すぐに撤退するように命じて  
おいたほうが良いかと思われまます。」

「・・・嘘では無いのだな？」

「ええ、少なくとも戦艦棲姫と遭遇した時、現地の部隊との通信が途絶  
しています。これが偶然だと思われるのであれば構いませんが？」

「いや、貴重な情報だ。感謝する。」

ほう？ずいぶんと素直になったものだな。まあ、この方がやりやす  
いから文句は無い。

「なにはともあれ、まずは情報収集です。情報を送って貰えれば情報  
の精査には協力しますので、出来ればより精度の高い情報を送って貰  
いたいものです。」

「ああ、分かった。分かったのだが・・・」

「なにか？」

「お前は本当に着任して一週間かそこらの提督なのか？にわかには信  
じられんのだが・・・」

「士官学校で学んだ成果です。・・・と言いたいところですがここまで  
やれるのは、必死に情報を集めて学んだ結果です。士官学校の奴でこ  
こまでやれそうなのは自分の他に二人くらいしか思い当たりませ  
ん。」

もちろん小森と朔真の事だ。小森に関してはあの能力の高さは自  
分の理解の範疇を超えている。だが頭が良いのは確かだろうから、情  
報の精査くらい出来るだろう。そして朔真も自分と同じタイプの人  
間で、しっかりと過去の戦闘記録などの資料を読みまくって、それを  
生かすだけの頭脳があるはずだ。そして自分に並ぼうとするくらい

の成績を修めていたので、これくらいの芸当は出来て当然だろう。

「士官学校を出た学生などあまり期待はしていなかったのだが・・・認識を改める必要がありそうだな。」

「そこは個人差が大きいのでなんとも。織田のような奴もいますし、あれより酷い奴なんてごろですよ。」

「なるほどな。では情報を集めて送る。協力よろしく頼む。」

「ええ、お待ちしております。それではまた。」

狐塚提督との通信を切って一息つく。とりあえず狐塚提督に情報収集の協力をさせる事が出来たのは大きい。情報を鵜呑みには出来ないが、何も無いよりかははるかに良い。

「・・・」

「ん？ 曙、どうかしたか？」

「いや、その・・・提督ってこういう時だけやけに生き生きと喋るなあって思っただけよ・・・」

「そうか？ まあ、相手を思い通りに動かすのはなかなか難しいぶん、上手く行けば嬉しいものではあるな。」

「そう・・・もうすぐお昼ごはんの時間よ。演習してる人達もそろそろ切り上げるみたいだから、私達も一旦休憩にしない？」

「もうそんな時間か。分かった、片付けて行くか。」

192話（8日昼食）

資料を片付けてから曙と共に食堂へと向かうと、多くの艦娘達が食堂へと向かっていた。午前中の演習を終えた者達も食事に来ているようで、こちらに気がついた村雨が駆け寄って来る。

「あ!!提督!!なんで演習見に来てくれないの!?!せつかく村雨がちよつと良いところ見せてあげようと思つてたのに!!」

「急な案件が入つて演習を視察する時間が取れなかつただけだ。気にするな。」

「そうですかー・・・この村雨を放置ですかー・・・村雨そんな趣味ないから、かまつてー!!」

そう言つて村雨がよくわからない駄々をこねる。ここまですると言うことは、なにかしら伝えたい事でもあるのだろうか？

「ふむ?では食事をしながら演習の様子でも聞くとしようか?」

「じゃあ許してあ・げ・る♪食堂に並びましょ♪山風もそんなとこいないで一緒に行くわよ〜」

「村雨姉・・・なんであたしを巻き込むの・・・」

「山風がすぐ一人になろうとするからよ。まったく世話の焼ける妹だわ・・・」

「・・・別に頼んでない。」

そう言つて文句は言うものの、山風は一緒についてくるようだ。なんだかんだ言つて今鎮守府にいる姉妹艦が村雨だけだから、一緒に行動したいのだろうか。

「ふーん、じゃああたしは席を外しておくわ。第七駆逐隊の皆と食べてるから、何かあつたら呼んで。」

「ああ、分かつた。」

曙は村雨に気を使ったのか席を外すようだ。そんな曙に漣がこつそりと近づいていく。

「ねえ、ぼのたん?本当に良いのですかな?」

「ぼのたん言うな!!で、何がよ?」

「そんなにあつさり引いちやつたら、村雨ちゃんにご主人様を寝取ら

れはう!？」

「バカな事言っていないで行くわよ!!」

「それで？演習はどうだった？」

「んー？私は今回が初めての演習だし、どの演習もそれ相応って感じかなあ？」

「まあ、最初はそんなものか。」

「そんなものよく提督が見に来てくれなかったし」

「ん？自分の視察があればなにか変わったのか？」

「やる気が出る。」

「・・・そうか。」

上官に見られてあれこれ口出しされながらやる演習の方がやる気出るだなんて、村雨は変わった奴だな・・・

「あ、でもやっぱり秋月ちゃんは防空駆逐艦だけあって、対空訓練では飛び抜けた成績だったよ。あれは勝てる気しないなあ」

ふむ、流石は防空駆逐艦と言ったところか。練度1とは言え性能差がはつきりと出るか。今後の活躍が楽しみだ。

「なるほど。それは実戦で活躍してもらうのが楽しみだな。他の者はどうだった？」

「んー？提督は村雨とお喋りしてるのに、他の娘の事がそんなに気になるの？」

「当然だな。自分が指示を出して演習をさせているのだから、全員気になるに決まっているだろう？」

「はいはい、分かってますよくだ・・・これだから提督は・・・そうねえ、山風も村雨とそう変わらない感じだし、第七駆逐隊の娘達も似たような感じかな？プリンツオイゲンさんは元気に演習してて、成績も流石は海外艦ってところかしら？逆に羽黒さんはなんだか調子悪そうな感じ？」

村雨山風と第七駆逐隊は問題なしで、プリンツオイゲンは好調か。羽黒に関してはまだ思い悩むのも仕方ないだろう。もう少し時間がかかるのは覚悟しておこう。

「空母達や金剛姉妹はどうだった？」

「そつちはあんまり見てないからわかんないなあ。でも空母の人達はバチバチにやってたみたいよ？帰りに瑞鶴さんがそうとう悔しがってたし。金剛さん達も砲撃演習の時に見かけたけど、凄く真剣な表情だったかな。」

「であれば問題無さそうだな。あと鹿島はどうだった？演習の指揮を長門と共同でやらせてみたはずだが？」

「うーん？特に気になった事は無いか？普通に演習の指揮をしてただけだし、ちよことアドバイスを貰ったくらいかな？」

「なるほど。」

まあ、無難に仕事をこなしてくるならそれで充分ではあるな。なにせ鹿島にとつても今回が初めての演習なのだ。

「……村雨姉、それは違う。」

「山風？何が違うの？」

「……演習に参加した人達が滞りなく、普通に演習が出来た。……さらにその上でちゃんと全員にきちんとアドバイスしてた。……これは凄い事。」

「あー、そう言われればそうかも？小休憩は挟んでたけど、ずっと待機してるとかは無かったわね。」

「なるほど。山風は周囲をよく見ているようだな。」

「……別にこれくらい普通。」

それだけ言うと山風はまた黙々と食事続ける。山風は社交的なタイプではないが、周囲の事はよく見ているようだ。観察力の高さは高評価だ。

「そうか。とりあえず演習の様子はある程度把握した。あとで長門と鹿島にも話を聞いておこう。」

「じゃあ堅苦しいお話はここまでで、ここからは雑談タイムね♪」

「……雑談か。」

「え？なに？村雨とは雑談したく無い的な反応？ちよつとどころかかなり傷付くんですけど……」

「ああいや、そういうわけではないが……どうにも私は雑談が苦手な

ようでな。今朝も漣に言われて試してみたのだが、どうにも上手い  
かなくてな。」

「……え？ちよつと待つて。雑談で上手くいくつてなに？普通  
にお喋りするだけでしょ？」

「そうは言つてもな……今朝漣のアドバイス通りに球磨と雑談してみ  
たのだが、球磨には怪訝そうな顔で体調の心配をされたのだが……」  
こちらが頭を悩ませている内容なのだが、村雨も村雨で頭を抱えて  
しまった。どうやら村雨は雑談することは出来て当然の技能だと認  
識しているようだ。これは他の艦娘達も同様なのか？

「ごめん、ちよつと待つて。漣く!!ちよつと来て。」

「ほいさつき。村雨ちゃんどした？」

「ねえ、提督が雑談苦手つて言つてるんだけど……なにか知つてる？」  
「ああ……あれは苦手なんてそんなレベルじゃないですよ……ご主  
人様の頭には仕事の事しか入つてないみたいでして……そもそも楽  
しくお喋りするつて概念を知らないのでは？」

「嘘!?そのレベル!?!」

「雑談に意味を求めてくるので、雑談に意味なんて求め無いで下さ  
いって言ったのに、何故か情報量が足りなかったのかという結論にな  
りましたからね……」

「うわぁ……」

なにやら漣と村雨の二人で盛り上がつて、こちらをなにか可哀想な  
ものを見るような目で見てくる。これはよほど一般的な技能を身に  
着けていなかったのだろうか？人に正確に情報を伝えたり、人から必  
要な情報を探り出したりするのは、それなりに上手くやれていたと思  
うのだが……

「村雨も漣も雑談が得意なのか？」

「得意と言うか……村雨は雑談大好きよ。」

「むしろ雑談しかしてないまである。」

「いや、それは言い過ぎでしょ。」

「てへ♪」

「ふむ……ならばどうすれば雑談が上手く出来るようになるんだ？ど



うにも二人の話しぶりからすると、身に付けておいて当然の技能のようだが・・・普通の会話と何が違うんだ？」

「うわぁ・・・」

「またしても二人から可哀想なものを見るような目で見られた。」

「これは重症ね・・・」

「わかってくれますか村雨ちゃん!!いや、むらむらちゃん!!」

「・・・そのあだ名は村雨が欲求不満みたいで可愛くなぁい。」

「ゴメェヌ。」

「とにかく提督は雑談について考え過ぎ。もつと気楽にお喋りするだけよ?お喋りをして楽しかったらそれで良いの。」

「ですぞですぞ!!雑談を技能とか言ってる時点で間違っているのです!!」

「・・・そうか。」

「そもそも提督にとつての普通の会話ってなに？」

「会話の目的は情報の伝達だろう?あとは情報を引き出すか交渉するか思考の誘導くらいか?」

「あー、間違つては無いはずなんだけどなんだろう？」

「あとさらっと思の誘導とか出てくるのが、マジご主人様ですわ。」

ん?会話とはコミュニケーション、つまりは情報の伝達のはずだが・・・どうやらこの二人にとつては少し違うらしい。

「あれよ、目的の無い会話が雑談って事で良いんじゃない？」

「それだ!!」

「目的の無い会話か・・・」

これはまた難しいお題だな。なにかを伝える事がない会話?ならば何を話せば良い?漣は天気でも食事でも漣が可愛いでもなんでも良いと言っていたが・・・よくわからん。

「まあ、そんなに頑張るものじゃ無いから、気楽にやればいいんじゃない?村雨も付き合つてあげるから。」

「では漣は村雨ちゃんに丸投げするのでしょうか。」

「いや、漣も手伝いなさいよ。」

「うくん?でもご主人様を刺激し過ぎて爆発されると困るから

なあ……」

「へタレた!?!しかも今更!?!」

「ふっ……村雨ちゃんはまだご主人様との付き合いが浅いから、怖い時のご主人様を知らないのですよ。」

「……提督が着任したのって一週間前くらいよね? 漣はその前から提督の事知ってたの?」

「いえ、まったく知りませんでしたな。」

「じゃあ村雨とほとんど変わらないじゃない!!」

「ふう……ご主人様、この無駄さ加減が雑談というものですぞ。」

「……そうか。」

「これが雑談か……なかなか難しそうだ……」

「村雨は漫才じゃなくてお喋りがしたかっただけなのになあ」

## 193話（長門鹿島&小森対話）

昼食を終えて執務室に戻ると既に曙と大淀が居て、午前中の引き継ぎを行っていた。こういう事を言われずとも自然とやっているあたり、秘書艦として自発的に動こうという意思を感じて助かる。

「あ、提督、お疲れ様です。午後からの予定はどのようにお考えですか？」

「午後から曙には演習に参加してもらうつもりだ。それと午後からの予定を決める前に、長門と鹿島と話がしたい。呼んでくれるか？」

「分かりました……すぐに来るそうです。それと先程遠征部隊から連絡があつて、一つ目の元敵拠点に到着したとの事です。」

「ほう？接敵の連絡が無かつたということは、敵は見当たらなかつたのか。」

「はい。敵影はなく資材の量は少なめとの事です。」

ふむ、横須賀艦隊が駆逐した拠点の一つ目は特に問題無しか。資材が少ないのはちよつと残念だが、大きな拠点ではないので仕方あるまい。このまま残り二つの拠点も何事も無ければ良いのだが……東へ向かう以上なにかしら起こつてもおかしくはないか……

「了解した。資材を回収して次の目的地に向かえ。敵への警戒は怠るなよ。」

「了解しましたとの事です。」

コンコンコン

「長門と鹿島だ。提督が呼びだと聞いたが入つても良いか？」

「ああ、入れ。」

長門と鹿島が執務室へと入つて来たが、少し緊張している様子か？

鹿島はわからなくもないが、長門はそろそろ慣れて欲しいものだ。

「まずは午前中の演習監督ご苦労だった。村雨と山風から聞いた話だが、なかなか上手く指揮をしてくれたようだな。」

「そう言つて貰えるのはありがたい。鹿島が初めてとは思えない程上手く動いてくれたので、私は基本的な事しかしていかないがな。」

「い、いえ、長門さんの助けがあつてこそです。私はこの鎮守府の事を

ほとんど知りませんから。」

「ふむ、上手くやれているなら何よりだ。とりあえず二人からも演習についての所感を聞きたい。」

「そうだな・・・やはり目立ったのはプリンツオイゲンと秋月だな。二人共練度1とは思えないくらい動きだったな。」

「なるほど。鹿島はなにかあるか？」

「そうですね。皆さん課題はまだありますが、演習を重ねる事で克服出来るかと思います。もちろん私自身も含めてですね。」

まあ、無難な受け答えだな。演習の成果は一朝一夕に出るものでもないし、経過観察が必要だろう。

「では引き続き演習を二人に任せよう。だが少し状況が変わってな。午後からの予定を変更したい。」

「ほう？具体的には？」

「金剛型と一航戦の参加はやめて待機させたい。」

「それは構わないが、何かあったのか？」

「長門鎮守府のさらに東側に深海棲艦の上位個体が存在する可能性が出てきた。現在益田鎮守府が索敵を行っているが、その結果次第では動いて貰う必要がある。」

「なるほど・・・しかし益田鎮守府か・・・益田鎮守府は鶴野提督の派閥だったと思うが大丈夫なのか？」

当然の疑問だな。着任したばかりの鹿島はよく分かっているが、自分が鶴野提督の派閥と険悪な関係だと言うのは周知の事実だろう。

「不安なのは分かるが問題は無い。狐塚提督も私の事を信用しているとは思えないが、お互いの利益の為なら協力出来る相手だと思う。」

「そうか。提督がそう言うのであれば信じよう。何かあればすぐに相談してくれ。」

「ああ、分かった。それと鹿島。」

「は、はい!!」

「午後からはプリンツオイゲンに艦隊行動の練習をさせたい。夜間に鹿児島鎮守府の島津提督との演習があるのだが、そこにプリンツオイ

ゲンを参加させるとの要望が出た。付け焼き刃で構わないから、ある程度動けるようにして欲しい。」

「・・・分かりました。やれるだけやってみます。」

「ん？なにか気になる事でも？」

「いえ、その・・・プリンツオイゲンさんは海外の方ですので・・・日本語での指示に反応するのが少しだけ遅いみたいでして・・・」

「そうなのか・・・日常会話だと会話に対する返答が多少遅くても気にならないが、刻一刻と変化する戦場ではその遅れが大きな足枷になるか・・・」

「それは慣れるまでは仕方ない。今回はあくまでも演習だから、やれる範囲で構わない。それと無理をさせ過ぎて、演習で動けないなんて事にならないようにな。」

「はい、お任せください。」

「では午後の演習を始めてくれ。」

「「はっ!!」」

長門と鹿島と曙が敬礼をして執務室から退室する。三人が退室したのを確認してから、大淀が資料を持って近づいてくる。

「提督、先程益田鎮守府から通信で資料が届きました。ご覧になりますか？」

「ああ、確認しよう。」

資料の内容はここ最近の戦闘記録と哨戒や遠征の結果か。だが益田鎮守府は近海ばかりしか行動しておらず、少し遠くまで出た時は長門鎮守府か出雲鎮守府との合同作戦の時だけだな。

「ふう・・・きちんと情報の提供をしてくれるのは助かるのだが、これでは今まで調べた事と変わらん。遠征結果も毎回資材の量が少ないのも予想通りだ。」

「近海にある資材溜まりでこまめに回収したら当然そうなりますね。」  
「資材の増減がほとんど無いところを見ると、深海棲艦の影響を受けていない場所なのだろう。そう考えるといきなり益田鎮守府が襲撃される事は少なそうだ。」

「やはり益田鎮守府の偵察部隊が情報を掴むまではなんとも言えない

かと・・・」

「そうだな・・・敵の偵察部隊と遭遇すれば、少しは情報が得られそうなのだが・・・」

「そうやって資料を見て考えていると、微かにだが誰かが執務室のドアを開いた気がした。視線を向けるとやはりというかさそこには小森がいた。今回はたまたま気がついたが、相変わらずこっそりと行動する奴だ。」

「小森か、なんの用だ？」

「あ・・・その・・・昨晚の戦闘記録・・・」

「ああ、助かる。」

「そうやって小森は一枚の資料を手渡してくる。そう言えば川内から報告は受けていたが、書類は受け取っていなかったか。小森がこの鎮守府に来てから、戦闘記録は全て小森が作っている。考えてみれば自分は小森に何も命令をしていなかったはずだ。というか着任してからずっと忙しかったので、小森の事を放置してしまっていたな・・・そしてそんな急に現れた小森に対して大淀は少し驚いたようだが、もう悲鳴をあげる程ではなくなったようだ。」

「じゃ、じゃあこれで・・・」

「小森、この資料を見てどう思う？」

小森の前に曙が集めたここ最近の長門鎮守府・益田鎮守府・出雲鎮守府の戦闘記録と先程送られてきた資料を並べる。小森は大淀からの視線を気にしながらも資料に目を通していく。

「・・・・葛原さんは偵察部隊を送って来てる深海棲艦を探してる？」

「ああ、その通りだ。」

「・・・・だったら集積地棲姫の影響範囲・・・考えるべきだと思う。」

「集積地棲姫の影響範囲か・・・」

「少なくとも襲撃を受けた長門鎮守府と北九州鎮守府は集積地棲姫の影響範囲内だ。だが益田鎮守府はどうだ？これは正直なところ曖昧だ。一応集積地棲姫の影響は受けていなさそうだが、長門鎮守府に敵の視線が集まっていたおかげで、難を逃れただけかもしれない。」

「益田鎮守府は集積地棲姫の影響範囲外で、別の上位個体がそつちにいると考えているのか？」

「・・・違うよ。たぶんもつと広いはず・・・」

「・・・そう考える理由は？」

「・・・日本海側は・・・今まであんまり強い深海棲艦は出現しなかった・・・」

「たしかに日本海側は太平洋側に比べると、上位個体の出現率がかなり低い。だが低いだけで姫級の出現も前例があるし、今回の集積地棲姫はかなりの戦力を集めていたぞ？」

「・・・だからだよ・・・日本海側に強い深海棲艦が少ないのは・・・資材が少ないからだと思う・・・」

「資材が少ないか・・・」

確かに仮説としては悪く無い。深海棲艦が資材溜まりに資材を運ぶ習性があるということは、深海棲艦も艦娘と同じ資材を使用していると考えるのが自然だ。そして日本海は陸地に囲まれた小さな海だ。艦娘達の資材についても分からない事が多いが、狭い海だから少ない資材しか集められず、太平洋のように広い海よりも深海棲艦の出現率や上位個体が少ないというのは理解出来る。

「なるほど。小森は集積地棲姫が日本海側の広い範囲から資材をかき集めて、強力な艦隊を作っていたと考えているのか？」

「うん・・・だから日本海のアちこちに・・・拠点を作って指揮官を派遣してたと思う・・・」

「資材の輸送と拠点の防衛を考えれば妥当だな。となると・・・深海棲艦側からしたら、トップである集積地棲姫との連絡が途絶えた事になるのか？深海棲艦の情報網がどの程度のものか分からないが、横須賀艦隊がこの近辺を掃討したから、さらに遠くの拠点の指揮官が様子見に艦隊を派遣してきたと言ったところか？」

「うん・・・でもこれはあくまでも私の予想・・・」

「それは分かっている・・・だがその線で考えるのは悪く無い。」

はあ・・・小森に相談するだけでずいぶんと話が進んでしまった。こんな事ならばもつと早く相談するべきだった・・・だがそうなると思

揮官と仮定して上位個体はこれからどう動く？自分なら態勢を立て直す為に一度引くだろう。自分達のボスである集積地棲姫を討伐した強力な艦隊がいるのだ。そんな奴を相手にしたくは無いと考えるのが普通だ。しかし横須賀の艦隊が帰還したのを知っていたら？集積地棲姫の制御から外れて、深海棲艦の本能に従って襲撃を始めたら？

「小森、敵の拠点の位置にあたりはつくか？それと敵の今後の行動の予測は可能か？」

「……それは難しい……でも小さな拠点は多そう……小さな拠点を叩いていけば……大きな拠点の位置も予測出来る……かも……」

「そうか……なら情報が集まるのを待つか。益田鎮守府の偵察部隊からの情報と、うちが出した遠征部隊とその護衛からの情報があれば、もっと位置を絞れるようになるだろう。」

「うん……頑張って……」

そう言つて小森はペコリと頭を下げて、そそくさと執務室から退室しようとする。

「おい待て。どこへ行くつもりだ？」

「……え？」

「これからまだ情報が集まるんだ。その精査に協力してもらいたい。」

そう言つて小森は慌てて自分と大淀に交互に視線を向ける。相変わらず挙動不審だが、どうにも大淀を怖がっているのだろうか？大淀は特になにもせずじつと小森を見ているだけなのだが……

「……分かった……待機してる……」

「ああ。」

そう言つて小森は自然と部屋の隅に行つて縮こまる。ああやつているとうっかり目を離したら、その存在を忘れてしまいそうだ。だが待機していると言つた以上、いつの間にか居なくなること無いだろう。そういう律儀なところは知っている。



## 194話（島津提督言い争い）

さて、深海棲艦の対応をする前に一つ済ませておかないといけない事がある。島津提督への連絡だ。おそらく今頃は資材を積んだ輸送船に乗って、北九州鎮守府へと移動している最中だろう。だが深海棲艦の相手をするならば、島津提督の相手をする余裕は無いのだが……送られてくる資材が貰えないのはもったいないな……

「大淀、鹿児島鎮守府の島津提督と通信がしたい。」

「ええ、分かりました。……はい、どうぞ。」

「北九州鎮守府の葛原です。」

「鹿児島鎮守府の島津だ。演習の件なら心配いらん、夕方頃には輸送船に乗ってそっちに到着する予定だ。」

「そうなのですね……それなのに大変心苦しいお話なのですが……」

「なんだ？まさかここまでできて演習を渋るつもりではあるまいな!？」

「残念ながら、まさにその件でご相談があります。」

「貴様!!わしを馬鹿にしておるのか!？」

まあ、当然激怒するよな……通信の向こう側で烈火の如く怒鳴りつける島津提督の言葉をとりあえず聞き流す。軍人としての誇りとか目上の人に対する礼儀とかを叫んでいるが、正直なところ知った事ではない。ただまあ、きちんと演習の約束をしていたにも関わらず、それを反故にしようとしている事はこちらに非があるので、この程度の罵詈雑言は甘んじて受け入れよう。……だが話が進まないな。

「はあはあはあ……」

「……気はすみましたか?」

「貴様ア!?それでも反省しておるのかア!？」

「いえ、約束を反故にしようという件はこちらに非がありますが、事情も聞かずに怒鳴られて反省しろと言われても困ります。」

「なんだと!？」

そこからまたさらに罵詈雑言の嵐が吹き荒れる。というか言ってる事がさつきと大差ないので、ますます時間の無駄だ……そもそも演習の中止は益田鎮守府からの情報次第なので、まだ確定しているわ

けではない。しかも演習の日程をずらせるならば問題無いので、それも考慮に入れていたのだが……こうも話が進まないと切りたくなる。さらに通信の向こうでも何か話をしているようで、島津提督が誰かを怒鳴りつけている……

「すみません、通信代わらせて貰いました。鹿児島鎮守府所属で演習部隊の旗艦を務めさせて頂いている古鷹です。」

お？艦娘が通信を代わってくれたか。しかも古鷹と言えばしつかり者の印象がある。士官学校に居た古鷹は凄く真面目で扱い易い艦娘として人気だったな。

「ああ、北九州鎮守府の葛原です。」

「先程は島津提督が失礼しました。」

「そんな奴に謝らんでいい!!」

後ろからまた怒鳴り声が聞こえたので、島津提督はまだ近くにはいるようだ。

「……いえ、気になさらないで下さい。」

「そう言つて貰えるとありがたいです。ですが……演習を急に中止にする件。これについては納得がいく説明を頂けますか?」

古鷹の声から感じる印象が一気に変化した。先程までは優しくな雰囲気だったが、今は静かな怒りを秘めた雰囲気だ。だが元々説明するつもりだったのだから問題無い。

「ええ、もちろんです。その前に前提条件として長門鎮守府の事はどの程度ご存知ですか?」

「先日深海棲艦の襲撃を受けて崩壊し、現在は新しい提督が着任されて再建中だと聞いています。」

「ええ、その認識で合っています。そして長門鎮守府にある程度の戦力が整うまでは、北九州鎮守府が防衛に協力する事になっています。」

「お隣の鎮守府だから協力されているんですね。ということは長門鎮守府に何かあったのですか?」

「昨夜に一回と今朝に一回、長門鎮守府の付近に深海棲艦が出現しまして……幸い規模は小さかったので、私が派遣していた哨戒部隊で対処出来ました。……私はこれが集積地棲姫の残党が関わっている

のではないかと考えています。」

「集積地棲姫の残党ですか？それは横須賀鎮守府が掃討したと聞いてますが……」

「横須賀が周辺海域の掃討はしましたが、あくまでも周辺海域の掃討です。その範囲外に関しては横須賀の管轄外ですので、生き残りが居ても不思議ではありません。」

「なるほど……それもそうですね。ですが大規模な襲撃があったわけではなく、あくまでも小規模の襲撃が二回あっただけなんですね？」  
ふむ、こういう理解が早い相手だと話が早く進んで助かる。そのぶん簡単にだませ無いので厄介ではあるが、今回は普通に助かる。」

「そうですね。今のところ情報不足で相手の規模は判明していませんし、自分の考え過ぎでただの小規な群れの可能性も否定出来ません。なので現在私の艦隊と益田鎮守府の艦隊が情報収集の為に哨戒部隊を出しているところです。」

「ええ!?益田鎮守府と協力しているんですか!？」

「ええ。それが何か問題でも?」

「あ、いえ、その……葛原提督は鶴野提督と険悪な関係だと聞いていたので、ちよつと驚いただけです。問題はありません。」

「まあ、その件は否定はしませんが、軍事的な話で協力出来るならしますよ。我々の判断が多くの人々の命を左右する事になるので、より良いと思える行動をするだけです。」

まあ、もちろん誰とでも協力出来るわけではない。協力しないほうが良いと判断したら当然協力はしない。今回は狐塚提督が利用出来るだったから利用しているだけだ。

「それは立派なお考えですね。ではもしその斥候部隊の情報で葛原提督の予想が杞憂に終わった場合は、私達との演習を断る理由は無いですよね?」

「ええ、もちろんです。それにもし仮に深海棲艦の襲撃が本当にあつたとしても、日程を変更して頂ければと思いますので、その辺も含めて島津提督と相談したかったのですが……話をちゃんと聞かずに怒ってしまわれたので……」

「その……ごめんなさい……」

「いえ、古鷹さんが間に入って下さって助かりましたのでお気になさらず。それでこちらの提案としては、演習の日程を改めるのが最善だとは考えていますが、如何でしょうか?」

「少し島津提督と相談しますので、またこちらからかけなおしていいですか?」

「ええ、もちろんです。」

さて、どう出てくるかな? 真つ当な思考の持ち主ならば、今回は日程を変更する代わりになにかしらこちらから譲歩を引き出そうとするだろう。だが島津提督はプライドが高く、散々プライドが傷つけられたと感じて演習中止だと言い出すかもしれない。それはそれで資材と格上と戦える貴重な機会を失う事になって残念だな。

「提督、島津提督から通信です。」

ん? 古鷹ではなく島津提督本人か。

「代わろう……はい葛原です。」

「古鷹から聞いたが、また貴様は臆病風に吹かれておるようだな? たかが小規模の艦隊二つくらいで狼狽えおつて情けない。そもそも哨戒部隊を派遣すれば深海棲艦が見つかるのは当たり前だ。それで一々騒ぎ立てるほどの事では無い。」

「はあ……その小規模の艦隊で長門鎮守府はまた潰される可能性があるのですよ? 警戒するのが当然です。」

「警戒するのは当たり前だ!! だが貴様は過度に恐れて妄想を膨らませておるだけだ!! 敵の大規模な艦隊が存在する確証も無しに、厳戒体制に移行するなど馬鹿馬鹿しい!! 哨戒部隊も出してさらに益田鎮守府も協力しておるのだから!! これ以上何をする事がある!? わしとの演習を渋る理由がどこにある!?!」

ダメだこいつ……頭冷やして来たのかと思つたら、ずっと頭に血が登ったままではないか……

「はあ……それで? 島津提督は演習を強行するべきだと?」

「当然だ!!」

「はあ……分かりました。そこまで言われるならば計画通りに進めま

しよう。ただしもし仮に哨戒部隊が深海棲艦の艦隊を発見したり、長門鎮守府への襲撃があれば演習は中止します。宜しいですね？」

「ああ、最初からそうしておれ。」

「言質は取りましたからね？これで何が起こっても文句を言われる筋合いはありませんからね？」

「くだい!!なにがあっても夕方までにはそつちに着くから準備しておけ!!」

ここまでくるとまるで猪だな。怒りで冷静さを失っているのか？それとも元から理性が足りないのか？なににせよ言質はとったのだ。これदनにか問題が起ころうとも島津提督の責任だ。

「分かりました。準備はしておきましょう。」

「おう、それに深海棲艦がいたとしてもそれはそれで構わんからな。」

「……は？どういう事ですか？」

「今回の目的はお前の実力を確かめる事だ。ならば相手が深海棲艦でも悪くは無い。お前の指揮がどの程度のものかを直接確認する良い機会ではないか。」

「まさかとは思いますが……私が指揮をするのを司令室で見るとおつもりですか？」

「当然だ。他になにがある？わしの指導を受けられる機会など滅多に無いぞ？この機会に貴様の性根を叩き直してやる。」

「冗談ではありません!!艦隊の指揮をするのに横で騒がれて邪魔されるのは容認出来ません!!」

「邪魔とはなんだ!?!邪魔とは!!」

「邪魔以外のなんだと言うのですか!?!演習での事ならば指導として受け入れる事も出来ます!!ですが実戦では命がかかっているのですよ!!そんな状況で考えが合わずに怒鳴り散らす人間を司令室に入れるなど狂気の沙汰です!!」

ただでさえ自分は経験が浅く艦隊の指揮にはかなり慎重になっているというのに、それを邪魔されるなどたまったものではない。理性的で優秀な人間がきちんと指導をするならまた話は別なのだが、先程までの会話からそんな期待は一切出来ない。

「邪魔だ邪魔だと無礼な奴め!!わしが何人の提督を指導してきたと思っっている!?!お前のようなひよっこが口答えして良い相手ではないわ!!」

「そんなに人に指導するのが好きなら佐世保傘下の人達にすれば良いでしょう!?!それが引退して士官学校の教官でもしたらどうですか!?!」  
「前線から身を引けだ!?!馬鹿にするのも大概にしておけ!!わしは死ぬまで現役で国の為に尽くすと決めておるのだ!!」

「そんなの知った事ではありません!!とにかく深海棲艦の対応中に司令室へ立ち入りはお断りします!!」

「そこまで拒否すると言うことは、何か隠したいものでもあるのだろうか!?!お前みたいなひよっこが戦艦棲姫を討伐するなどおかしいと思っっていたのだ!!いったい何を隠している!?!」

隠し事なら色々あるが、今回はただ単純に邪魔されたくないだけなのだが……

「はあ……その件についてはすでに説明したはずなのですが……仕方ないですね、変に疑われても面倒ですので妥協しましょう。私の行動を監視するために司令室には艦娘を一人だけ入室するのを許可します。記録を取るのはい構いませんが、その代わり作戦指揮への口出しは厳禁です。」

「わしを司令室に入れるつもりは無いと言うのか!?!それではなんの指導も出来んだろうが!?!」

「指導の押し売りなんて求めてません。私に島津提督のやり方を押し付けないで下さい。これ以上は一切譲歩しませんので、もしまだなにか言われるのでしたら佐世保傘下との演習全てをお断りします。」

「なんだと!?!」

「佐世保傘下の提督達との演習は、こちらも得るものが大きいと判断して受けた話です。ですがこうもトラブルの原因となるならダメリットが大き過ぎます。北九州鎮守府を護る一人の提督として、余計な揉め事に時間をかけたくありません。」

「ぐう……ああもういい!!ひよっこのお前の為に指導してやろうと思っっていたのに、ここまで馬鹿にされるとは思わなかった!!演習でお

前を叩き潰して何も教えずに帰ってやる!!後悔してももう許さん!!」  
そのまま通信が一方的に切られた。演習だけやってすぐに帰って  
くれるなら、何一つ問題無い。だがそれも何事も無く演習が出来れば  
の話だがな。はあ・・・無駄に時間を取られてしまったな・・・

## 195話（イムヤ&イク）

コンコンコン

「イムヤよ。入ってもいいかしら？」

「……入れ。」

島津提督の相手が終わって少ししたら、イムヤが執務室を訪ねて来た。しかし執務室に入った瞬間にイムヤは何かに驚いたようにでギョツとした。

「あ、えつと……その……大淀さんに頼まれて憲兵隊の人から書類を貰って来たんだけど……」

「ああ、助かる。」

「は、はい、これね。」

書類を渡す為にイムヤが近づいてくるが、表情が固く少し震えている……どうにもイムヤに怖がられているようだ……まあ、今まで散々男に酷い目にあわされてきたのだから無理も無いか。以前の面談の時はもう少し余裕があったように思えるが、あのときは無理をしていたのだろうか？

イムヤから渡された書類に軽く目を通すと、書類の多くは有力者からの面会や新聞社からの取材の申し込みだった。つい昨日大きな記者会見を開いたばかりだというのに……まったく面倒な奴らだ……

「あ……えつとお……」

「ん、ああ、すまん。書類はたしかに受け取った。ご苦労だった。」

「じゃ、じゃあ私はこれで……」

「……イムヤ、やはり男は怖いか？」

「あ、いや、その……ちよつと司令官が怖い顔してたからつい……」

怖い顔か……島津提督との一件が原因か……イムヤには全く関係無い話なのに、不用意に怖がらせてしまったのは失態だな……

「それはすまなかつたな。怖がらせるつもりはなかったのだが……つい感情を表に出してしまったようだ。」

「あ、うん、司令官が悪い人じゃ無いってのは分かっているんだけど



ね・・・慣れるまではちよつと大目に見て貰えないかな?」

「大目に見るもなにもこれは私の失態だ。以後気をつけよう。」

「ううん、気にしないで。じゃあ私はもう行くね。」

そう言つて少し申し訳無さそうな表情でイムヤが退室しようとする時、執務室の扉が外側から勢い良く開かれる!!

「それじゃダメなのね!!」

「イ、イク!?!」

「提督は我慢のし過ぎなのね!!一週間も抜かなきゃイライラもムラムラムも溜まつて当然なの!!だからイクがスッキリさせてあげるのね!!」

・・・これはまた厄介なのが来たな。イムヤはどうして良いかわからずに自分とイクの顔を交互に見ながら狼狽えているし、大淀は啞然としている。

「はあ・・・イク、必要ないから部屋に戻っている・・・」

「提督はちゃんと理解してないのね!!」

「・・・なにをだ?」

「提督の立場をなの!!」

「・・・ほう?とりあえず聞いてみようか?」

提督としてのあり方が間違つていると?自分では提督として真つ当に働いているつもりだが、どうやらイクの目線からはそうでは無いらしい。どんな諫言が出てくるか気になるところだ。

「艦娘は皆美人や美少女揃いのね!!」

「・・・ん?ああ、それで?」

「艦娘は提督の命令に従う都合の良い存在なのね!!」

「・・・まあ、言い方はともかく軍属だからな。指揮系統の維持は重要だな。」

「こんなに美味しい状況でエロスな展開にならないのはおかしいの!!提督は一人の男として、いや一匹の雄として絶対に間違つているのね!!」

・・・うむ、やはり理解出来ん。こんな頭のおかしな発言だが、鎮守府の事をよく知らない外部の男が言うならばまだ理解出来る。勝手な妄想からの嫉妬だと考えて適当にあしらえば良い。だが

なぜ当事者で被害者側である艦娘からこんな発言が出るのだ？

「……見解の相違だな。私には理解出来ん。」

「提督はストレスを甘く考え過ぎてているのね……提督のお仕事はストレスとの戦いなね……」

「……まあ、確かにストレスが溜まる仕事であるのは否定出来ないな。」  
「だから提督にはストレスの捌け口が必要なのね。そして見目麗しい女の子達が提督の命令ならなんでも従うのね。ならやることは一つなのね!!」

「それが理解出来ん……なぜイクは職権の乱用を勧めてくるのだ？私をクビにしたいのか？」

「そんなこと考えて無いの……我慢してストレスを溜めたら健康に悪いの……それにストレスは溜まり過ぎるとおかしくなるのね……今は理性的な提督もどうなるか分からないのね……」

ふむ……これは一概に否定出来ない話になって来たな……確かに過度なストレスによって心身が壊されたり性格が歪む事はある。自分だって敬愛していた兄が処刑された事や、死の恐怖で性格が歪んだ自覚はある。つまりイクはストレスによって自分が変わってしまった事を恐れているのか？もしかすると前任者の大森提督も最初はまともな人間で、それが段々と変化していったのだろうか？それにイクは多くの有力者達の相手もさせられていたと聞く。そうやっておかしな人間を見てきたからこそその発言なのだろうか……

「……イクからの警告は確かに受け取った。だが私は規律を守り守らせる立場の人間だ。艦娘をストレスの捌け口にするような真似は出来ん。だから何か別のストレス発散方法を考えておこう。」

「はあ……エロスは世界を救うのに残念なの……提督は想像以上に難攻不落なのね……」

「それに艦娘とそういう行為をするのは私にはリスクが高過ぎて、余計に頭が痛くなりそうだ……」

「それはがっかりなのね……はっ!？」

自分の言葉を聞いて落ち込んでいたイクだったが、急に重大な何かに気が付いてしまったかのような愕然とした表情をした。

「どうした?」

「ま、まさか提督は……男の人の方が好きな人だったのね?!」  
「違う!!」

「だったら全て納得出来るのね……イクのおっぱいにも反応しなくて、駆逐艦のロリボディにも、巡洋艦達の食べ頃ボディにも、戦艦や空母達のセクシイボディにも反応しなかったのは、提督が女の子の体に興味がなかったからなのね……」

「断じて違う!!」

確かに性欲は同年代に比べてかなり少ないようだが、断じて男色家などでは無い!! 本来にあり得ない勘違いだが、イクは未だに疑惑の目で見てくるし、イムヤはちよつと引いた雰囲気だし、大淀に至っては少し顔を赤らめている……こんな噂が広がればそれこそストレスでどうにかなりそうだ……

「……本当に違うの?」

「ああ、それはあり得ない話だ……うっ……想像しただけで吐きそうだ……」

「大丈夫なの? おっぱい揉む?」

「はぁ……イムヤ。」

「え、わわわ私!! 私そんなにおつきくないよ!?!」

「はぁ……イクを部屋に連れて帰ってくれ……」

「え!?! あ、はい!! 失礼しました!!」

「あっ!?! ちよ!?! 待つのねイムヤ!?! もう少し粘ればやれるはずなああのおおねえええ!!」

イムヤが大慌てでイクを引き摺って執務室から退室してくれた。イクはイクなりに私の事を心配してくれていたようだが、余計にストレスで頭が痛くなりそうだ。だがストレス発散に関してはなにか考えなくてはな……

## 196話（益田鎮守府艦隊）

はあ……ダメだ……イクの事がまったく理解出来なくなってきた……とりあえずイムヤに連れて行かせて距離をとったが、最後のやり取りで余計に混乱してきた……ストレスを溜めるのは良くないというのは理解出来る。その為の手段が艦娘との関係を強要する事だとイクが考えているのも、前任者の大森提督の姿を見てきたと考えれば理解は出来る。そしてイク自身が自分に関係を迫ってくるのは、他の艦娘達に被害が及ばないようにするためだと考えれば納得は出来る。だが最後の男色家疑惑はなんなの？ ストレス発散を提言してきた奴が、何故ストレスの原因となるような発言をするのだ？ 挑発のつもりか？ それとも本気でそう考えていたのか？

「提督、一度コーヒーでも飲んで落ち着かれてはいかがですか？」

「……そうだな、ブラックで頼めるか？」

「はい、少々お待ち下さい。」

大淀が手際良くコーヒーの用意をしてくれて、良い香りを漂わせたコーヒーが目の前に置かれる。コーヒーを一口だけ口をつけると、コーヒーの苦味が思考をリセットさせてくれるようで、少しだけ頭がスツキリする。

「ふう……美味しいな。」

「ありがとうございます。では一息入れたばかりで申し訳ございませんが、報告をしても宜しいですか？」

「ああ。」

「長門鎮守府の増援に向かわせた鈴谷さん達が龍驤さん達と合流したとの事です。それと長門鎮守府から帰還させていた天龍さん達が、まもなく北九州鎮守府に帰還しするとの事です。」

「分かった。では龍驤には引き続き警戒を続けるように伝えてくれ。遠征部隊の方はどうなっている？」

「遠征部隊は二つ目の目標地点に到着しました。敵影無しとの事です。資材の量も一つ目の拠点と大差無さそうです。」

ふむ、二つ目も敵影がなく資材が少なめか・・・昨日横須賀鎮守府の艦隊が潰したばかりなのだから、放棄された資材が回収出来ると期待していたが、少し当てが外れたようだな。

「そうか・・・遠征部隊の資材はどれ位溜まっているだろうか?」

「そうですねえ・・・北九州と長門の部隊でそれぞれ6割くらいになるかと。」

「ふむ・・・では資材を長門鎮守府の部隊に渡せるだけ渡して、長門鎮守府の部隊を帰還させろ。」

「宜しいのですか?」

「ああ、うちの資源はまだ余裕があるが、長門鎮守府は馬鹿のせいで補給もままならない。せめて補給拠点として使えるようにしておきたい。」

「分かりました。・・・鳳翔さんから了解しました。長門鎮守府の部隊と分かれて次の目的地に向かいますとの事です。」

「ああ、気をつけて行ってくれ。」

次が横須賀の艦隊が潰した最後の拠点で、長門鎮守府から一番遠い場所だ。何かしら深海棲艦の手掛かりを掴んでくれれば良いのだが・・・

「ッ!?!提督!!益田鎮守府より入電です!!益田鎮守府の哨戒部隊が深海棲艦を発見しました!!」

「状況は!?!」

「益田鎮守府が派遣していた二つの哨戒部隊のうち、一つが敵を発見して交戦開始してます。敵の構成は軽空母又級1・軽巡ホ級1・駆逐イ級3との事です。」

「偵察部隊と見て間違い無いな。撃破は可能か?」

「はい、戦力的に優勢で撃破は容易との事です。」

ふむ、とりあえず狐塚提督は敵の哨戒部隊との戦闘程度は想定していたか。それならば余裕があるな。となるとどこで遭遇したかと、敵の増援が無いかを心配するだけか。

「分かった、ならば益田鎮守府から続報があるまでは動かなくて良い。」

「分かりました。詳細が入り次第お伝えします。」

今日は珍しくうちの提督からいつもの近海ではなく、もつと先の方の哨戒任務が出た。普段の哨戒部隊よりもかなりごっつい編成で、しかもあたしと飛鷹をそれぞれ旗艦とした二艦隊もや。あの引き籠もり気質の提督が攻めの姿勢を見せるなんて、明日は槍でも降るかもな？

「おい!? 隼鷹!? 敵艦隊はどうなっている!? 状況を報告しろ!!」

「あー、心配せんでも大丈夫やって。かなり戦力差あつたやろ? 全力で叩いたよ。」

「損害は!? 敵の増援は見当たらないか!?」

「大丈夫、大丈夫。損害は軽微だし敵の増援も見当たらないよ。」

「なら現在位置の座標を送れ!! それと今回の敵艦隊の動きを詳しく教えろ!!」

「うへえ……」

あたしの提督は一々細かいからどうにも苦手なんだよなあ……こういう細かい事は飛鷹の方が得意なんやけどなあ……

「うへえではない!! お前はいつもいつも!!」

「鳥海!! ヘルプ!! ヘルプ!!」

「はあ……良いですよ。こうなる事は予想出来ていましたから……」

「ああ、神様仏様鳥海様!! ありがと!! あたしこういう細かいの苦手なんだよねえ。」

というか提督も始めっから鳥海を旗艦にしとけば良いのにさあ……まあ、あたしも久し振りに戦闘を前提とした編成の旗艦って事で、ついついテンション上がっちゃったけどなあ。鳥海が報告を代わってくれたおかげであたしは自由になったし、今のうちに旗艦らしく僚艦達に声かけておこうかな?

「皆大丈夫かあ?」

「だめ……だるい……眠い……」

「うゆ……久し振りの遠出と戦闘でうーちゃん疲れたぴよん……」  
「あぁーしんどー」

「いや、もうちよいやる気出さんかい!!」

「隼鷹さん、皆ダメみたいだから今日はここまでにして帰ろう? お布団が私達の帰りを待ってるよ?」

この艦隊やる気なさ過ぎやろ!? 普段はあたしもそっち側やからあんま文句言えんけど!? というか提督も何を考えてこんな編成にしたん? あたしに加古・卯月・望月・初雪なんて・・・真面目なの鳥海しかおらんやろ?

「はあ・・・あたしもそうしたいけど、今日の提督は何故か張り切ってるからなあ・・・」

「うん・・・絶対におかしい・・・これはきつと誰かの陰謀だよ・・・絶対に犯人は許さない。」

初雪は居るかどうかも分からない犯人に気炎をあげてるけど、そのやる気をもうちよい仕事に向けて欲しいとこやなあ・・・

「とは言っても、うちの提督を動かせるのは鶴野提督くらいやない? この前長門鎮守府に救援が間に合わなかったし、めっちゃ怒られたのかな?」

「つまり全ての黒幕は鶴野提督・・・はあ・・・そろそろ寿命でぽっくりいかないかなあ・・・」

「ちよ!?!」

初雪が適当な口調で鶴野提督を呪っていると、鳥海がパンパンと手を叩いて注目を集める。提督との通信終わったのかな?

「司令官さんより命令です!! これよりさらに奥へと進んで哨戒任務を遂行しろ!! 以上です!!」

「「「うへえ・・・」」」」

「皆さんしっかりして下さい!! 特に隼鷹さんは旗艦なんですよ!?!」

「分かってるって・・・じゃあ皆行くよ」

それにしてもまだ進むんか・・・今日の提督は本当にどうしたんやろ?

## 197話（天龍&小森対話）

「提督、益田鎮守府より先程の戦闘の詳細が送られて来ました。」  
「ああ、確認しよう。」

益田鎮守府から送られて来た資料は、かなり詳細なものだった。哨戒部隊の構成や航行記録から始まり、敵との遭遇場所や敵の構成と戦闘の推移が細かく記載されていた。ついでにもう一つの哨戒部隊の構成と航行記録も一緒に送られている。

「ふむ、場所は哨戒部隊を北と北西の二手に分けて派遣して、北西側の方で敵艦隊と遭遇か。敵の構成は軽空母と軽巡に駆逐が3か。まあ、偵察部隊と考えるのが妥当だな。こちらの索敵機が先に敵を発見して、その時の敵艦隊は西から東にゆっくり移動していたか。」

「そうになると敵の拠点は長門鎮守府よりも東側、益田鎮守府より西側と考えるべきでしょうか？」

「断定は出来ないが・・・だが可能性は高くなってきたな。」

「益田鎮守府からは引き続き哨戒部隊による索敵を継続するとの事ですが？」

「ああ、そのまま続けて貰おう。狐塚提督も早目に敵主力艦隊を見つけ出して、こちらに増援を頼みたいのだろうな。それにしても・・・」

どうにもこの二つの哨戒部隊だが、編成に偏りがある気がする。旗艦が隼鷹と飛鷹となっているが、隼鷹の部隊は練度が低く性格に難がある艦娘が多い。例外は鳥海くらいか？それに対して飛鷹の部隊はそこそこ練度が高めで、性格も真面目な艦娘が多い。これは・・・

「何か気になる事でも？」

「いや、問題ない。」

例え自分の予測が当たっていたとしても、私が口出しするような事では無い。それよりは益田鎮守府が頑張って、敵主力艦隊を発見するのを期待しておこう。

コンコンコン

「天龍だ。入るぞ。」

「ああ、入れ。」



少し雑に扉を開けてズカズカと天龍が執務室に入つて来る。少しだけ機嫌が悪いか？

「今戻った。敵艦隊は壊滅させたが、こっちもそれなりに被害を受けちまった。悪かったな。」

「いや、相手とはそこまで戦力差がなかったから、多少の被弾は仕方ない。暁と雷は先に入渠させてるのか？」

「ああ、構わないだろ？」

「ああ、問題ない。敵艦隊と戦って何か感じた事はあるか？」

「いや・・・ちよつと油断して浮ついてかもしれねえ。戦場に立つんだからもつとオレがビシツと言つて引き締めるべきだった・・・そのせいでちびっ子共に余計な怪我をさせちまった・・・」

「駆逐艦達が油断していたのか？」

「・・・まあな、だが悪いのは気を引き締められなかったオレだ。ちびっ子共は悪くねえ。」

あくまでも天龍が悪いと言い張るか。旗艦は龍驤だし油断していたのは駆逐艦で損害を受けたのも駆逐艦だ。だがそれでも龍驤も駆逐艦達も庇うか・・・本来であれば私から駆逐艦達に注意すべきだが、天龍が現場で指揮をした者としてここまで考えている。ならばここは天龍に任せて、天龍自身の成長を促すべきか？

「わかった。そこまで言うのであれば私からは何も言わないでおこう。その代わり天龍からきちんと言い聞かせておけ。」

「おう!!悪いな提督!!」

「では深海棲艦の動きはどうだった？」

「あー、特に気になった事はねえな？龍驤が発見して先制攻撃を加えて、こっちに來たのを迎撃しただけだからな。特に違和感とかはねえな。」

「そうか。では以上だ。入渠してくると良い。」

「おう、またなんかあったらすぐ呼べよっとうお!!」

「ひっ!?!」

執務室から退室しようとしていて突然大声を出した天龍の視線の先には、部屋の隅小森が縮こまっていた。そういえば小森に執務室で

待機させていたのをすっかり忘れていたな．．．．島津提督とイクとのやり取りで意識から外れてしまっていた。部屋に居る小森の存在を見落とすという事は、それだけ周囲に意識を配る余裕がなかったという事か．．．

「あつ、わりい、驚かせちまったな。」

「あ．．．うん．．．ごめんなさい．．．」

「別に謝る必要はねえよ。」

「そ、そう．．．」

「あー、ついでと言っちゃつなんだが、気になつてた事を聞いても良いか？」

「え．．．．．な、なに？」

ほう？天龍が小森に聞きたい事か？小森も逃げずに答えるみたいだし、これは小森について知ることが出来る貴重な機会かもしれないな。青葉が悔しがりそうだ。

「答えられない事は答えなくて構わないんだが．．．オレ達艦娘が怖いか？」

「う、うん．．．．．怖い．．．です．．．」

「そうか．．．．．それは俺達が軍艦としての力を持つてるからか？」

「ううん．．．それも怖いけど．．．そんなのなくても怖い．．．です．．．」

「俺達艦娘は人間を傷つけられない。それを知ってもまだ怖いのか？」

「．．．．．うん。」

「．．．ならなんで提督になろうと思ったんだ？」

「妖精さんが見えるから．．．提督にならないといけない．．．．．怖いけど．．．．．」

「あー、つまり義務だから提督になるって事か。本当はなりたく無いけど義務だから仕方なくってか？」

「．．．．．うん。」

「そうか．．．．．」

天龍が何か言い淀むような雰囲気と考え込んでいる。自分に対しても物怖じせずに発言する天龍が言い淀むとは珍しいな。

「なら仕方ねえな・・・」

「・・・怒らないの?」

「あー、怒ってはいるけどそれはあんたにじゃない。覚悟がなくて嫌がるちびっ子を、無理矢理提督に仕立て上げようとする上の連中に怒ってるだけだ。そんなのあんたも指揮される艦娘も不幸になるだけだ。それでも上の奴らはあんたを提督にしようとしてる。なら責任は上の奴らであんたは悪くねえよ。」

「・・・そう。」

「ほう?これは少し意外だな。誇りを大切にすると天龍ならば、提督としての覚悟を持ってとか言うと思っていたのだがな?」

「んだよそれ・・・確かに俺は誇りを大切にしている。だけどそれはオレの生き方だ。オレに命令を下せる提督ならともかく、他の奴にとやかく言うつもりはねえ。オレの力は他の奴らを護る為の力だ。護るべき相手に誇りを胸に戦えなんて言ったら本末転倒だろうがよ。」

「・・・そうか。それは悪かったな。」

そう言われれば天龍が自分に突つかかって来る姿は見ているが、他の艦娘に突つかかる姿は見た事が無い。おそらく天龍なりにルールがあるのだろう。まだ付き合い合いが浅いから知らない事ばかりだな。

「あー、もう一つだけ質問良いか?」

「・・・なに?」

「なんでうちの提督の事は怖がらないんだ?この顔で恐ろしい事を平気でやるような性格だぜ?」

「おい天龍?」

「んだよ?まともな性格の奴は人を脅す為に船で深海棲艦のところに連れて行くこうなんて考えねえよ。」

「それは・・・そうかもしれないな・・・」

天龍は余程あの一件を根に持っているようだな。たしかにあれはやり過ぎた自覚はある。後悔は一切していないがな。

「で?どうなんだ?」

「・・・慣れた・・・から?」

「慣れたか。まあ、そんなところか。」

「それに葛原さんは・・・わかりやすい・・・人だからかな？」

ふむ、わかりやすい人だからか・・・小森レベルになるとこちらの考えてる事もお見通しというわけか？それにしても今日の小森はやけに喋っているな？いつもなら話しかけられる前に逃げてそうなのだが、今日は天龍に怯えながらもきちんと受け答えをしている。

「はあ!?!嘘だろおい!?!何考えてるか分からない奴筆頭だろ!?!」

「ひい!?!」

「あ、わりい・・・つい驚いて大声出ちまった・・・それで、この提督のどこがわかりやすいんだ？」

「えっと・・・葛原さんは・・・仕事と勉強の事ばかり話してる・・・他の事に興味が移らない・・・ルールと理屈で動いてる・・・怒らせる事をしなかつたら悪意を向けてこない・・・だからわかりやすい・・・です。」

「あー、そういうや提督が仕事絡みの話以外をしてみるとこ見た事ねえな。それに理屈っぽいってのも分かる。怒らせたら怖いのもな。だが悪意を向けて来ないってなんで分かる？」

「・・・私・・・人が怖い・・・私をイジメてくる人いっぱい・・・だからいつも人を見てる・・・視線や悪意はすぐにわかる・・・葛原さんは必要以上に話し掛けてこない・・・機嫌悪い時でも八つ当たりしない・・・だからそんなに怖くない・・・」

ほほう？小森が自分から逃げない理由はそういう事だったか。確かに小森は視線や悪意には敏感なのは知っていた。だが小森がここまで自分を評価してくれているとは知らなかった。

「ふうん、なるほどな。」

「でも・・・敵と無能には容赦しない人だから・・・悪意を向けられたら最後・・・だから敵にならないように・・・捨てられないように頑張ってる・・・」

「あー、なんか納得したわ。今日は色々教えてくれてありがとな。」

「う、うん・・・」

「じゃあオレはそろそろ行くぜ。提督、あんまりイジメんなよ?」

「はあ・・・心配するな。さっさと入渠してこい。」

「おう。」

小森をイジメるような真似はしたことがないのだが、いったい天龍からはどう見られているんだ？いや、小森の事だから、こちらが意図していなくてもイジメられていると感じてしまうか？こればかりは分からんな。

## 198話（鳳翔隊戦闘）

小森の扱いに少しだけ考えていると、大淀が突然立ち上がった。

「ッ!?提督!!鳳翔さんから通信です!!鳳翔さんの艦隊が敵艦載機に捕捉されてしまいました!!」

「代わろう・・・鳳翔、状況は?」

「現在3つ目の目的地に到着する少し手前です。私も哨戒機を飛ばしていたのですが、敵哨戒機から先に捕捉されてしまいました・・・申し訳ございません・・・現在敵哨戒機が撤退して行くのを、私の哨戒機が追いかけているところです。」

「なるほど・・・まだ敵戦力は不明か・・・」

敵艦隊には確実に空母がいるが、空母に対する備えならば鳳翔と摩耶が居る。普通の空母ヲ級一隻くらいなら航空戦で対抗する事が出来るはずだ。だがヲ級が居るような艦隊だと随伴艦もそれなりに整っているはずだ。こちらは遠征部隊も居るので数だけ見れば二艦隊だが、駆逐艦達にはドラム缶を装備させているので、戦闘能力はかなり落ちている。そんな相手に挑みたくは無。相手が又級程度であれば問題無いのだが・・・敵の戦力が分からない以上、安全策を取って一度引くか・・・鳳翔の艦載機が情報を得られたら、再度対応しよう・・・

「全艦反転し、輪形陣にて敵の攻撃に備えよ。哨戒部隊は遠征部隊を護るように。鳳翔は敵艦隊を発見したらすぐに知らせろ。」

「承知しました。」

こちらを警戒しつつフラフラと逃げる敵艦載機が憎たらしい!!自分達が哨戒任務に就いていたのに、先に捕捉されるなどなんという失態だ!!あいつらのせいで面目丸潰れだ!!

『クソ!!まだ敵艦隊が見えないのか!!』

『このままだと鳳翔さんに合わせる顔がないぞ!!』

『落ち着けお前ら、それでも鳳翔隊の一員か?久し振りの実戦で浮き足立ってるのか?』

『クツ・・・わかつてる・・・わかつてるさ!!』

『だが久し振りの実戦なんだぞ!!』

前の前の提督の時は空母の一人として前線で戦っていた鳳翔さんだが、前の提督の時には軽空母は空母ではないとふざけた理由で冷遇されていたのだ・・・当然我々鳳翔隊にもお呼びがかかる事もなく、戦果を上げる後輩達を尻目に使われる事のない艦載機を磨くだけの日々だった・・・それが今の提督になってやっと巡って来たチャンスなんだ!!なんとしても物にしなくては!!

『ッ!?見ろ!!敵艦載機が上がって来たぞ!!』

『なら敵艦隊は近いぞ!!各員散開!!敵艦載機を回避して敵艦隊へと近付くんぞ!!意地でも鳳翔さんに情報を届けるぞ!!』

敵艦載機の多くは我々を無視して鳳翔さん達の方に向かったが、直掩部隊が迎撃に向かってくる。バラバラに散りながら強行突破を狙う自分達を執拗に狙ってきやがるが、多少の被弾は覚悟しつつ押し通る!!

『見えたぞ!!又級1リ級1ホ級1イ級3だ!!鳳翔さんに電文を送れ!!各自戦線を離脱して帰還せよ!!』

『りようか・・・おい!!北東方向にいるのは敵艦隊じゃないか!!』

『なんだあれ!?別働隊か!!』

『別働隊だと!?クツ・・・』

強行突破したせいでこちらの部隊の大半は被弾していて、深海棲艦の迎撃で撃墜された奴もいる・・・ここで偵察を諦めて帰還すれば生きて帰れる可能性はまだ充分にある・・・だが別働隊の情報が必要ければ、鳳翔さんが率いる艦隊が危機に陥るかもしれない・・・

『ふう・・・お前ら、鳳翔さんは好きか?』

『はあ!?こんな時にいきなりなんだよ!?』

『雑談してる暇なんかねえぞ!!』

『こんな時だからだ!!』

『ッ!?当たり前だ!!鳳翔さんはすごく優しい人なのは知ってるだろ!?』

『あの人は俺達鳳翔隊の誇りだ!!』

ふっ・・・愚問だったな・・・

『じゃあ悪いがお前らの命をくれ。我々は偵察任務を続行する!!目標は敵別働隊!!命がけで鳳翔さんに情報を届けるぞ!!』

『おう!!』

『へっ、任せろ!!』

「……………提督、敵艦隊の構成が判明しました。又級1リ級1ホ級1イ級3。そして別働隊にホ級2ワ級4です。別働隊は戦場から離脱しようとしています。ツ!?敵艦載機を視認しました!!迎撃します!!」

「ああ、分かった。敵艦載機を迎撃後反撃しろ。」

「……………あの子達がくれた情報・・・無駄にするわけにはいきません!!」

「全艦載機発艦、九六式艦戦隊は敵艦載機の迎撃を開始して下さい。九九式艦爆隊は敵艦隊に向かって下さい。」

「鳳翔さんはあたしの後ろに隠れてな!!ここはあたしが通さねえぜ!!」

九六式艦戦隊と摩耶さんのおかげで、こちらには大した被害はなく反撃に移れますね。

「提督、敵艦載機の迎撃完了しました。損害軽微です。」

「よし、ならば鳳翔達は敵艦隊の迎撃に出ろ。龍田達はドラム缶を放棄、撤退中の敵輸送艦隊を強襲せよ。」

遠征部隊の龍田さんの艦隊も戦闘に加わりますか。ドラム缶を放棄すれば速力は問題無いですが、戦闘を想定した装備では無いので火力は控えめなはず・・・ですが輸送艦隊相手に損害は与えられるでしょう。そうなると横槍を入れられないように、私達がしっかりと敵艦隊を抑え込む必要がありますね。

「皆さん、前に出ますよ。私達で敵艦隊を抑えます。」

「おっしやあ!!摩耶様の力を見せ付けてやるぜ!!」

「衣笠さんにお任せってね♪」

「今度こそ私がいっちゃんなんだから!!」



「夕立が活躍してまた甘いもの貰うっぽい!!」

「ふふっ、これは僕も頑張らないとね。」

艦隊の士気は充分、これなら充分やれます。

敵艦隊に向けて急行している九九艦爆隊は、遠くに見える敵艦隊を見据えて静かに闘志を燃やしていた。

『おい、提督は敵艦隊を確実に沈めるつもりらしい。逃げてる輸送艦隊も遠征部隊がドラム缶を放棄してまで追撃するそうさ。』

『そうか・・・あいつらの無茶を無駄にせずに済む。ありがたい事だ。』

『ああ、ここまでは深海棲艦の奴らに良いようにされちまったんだ・・・派手に行くぞ!!』

『おう!!』

幸い敵からの抵抗は少ない。敵の直掩部隊をこちらの偵察部隊が敵輸送艦隊まで引っ張っていった事も影響しているはずだ。あいつらが作ってくれたこのチャンスを逃すわけには行かない!!

『突撃!!突撃!!一気に突っ込め!!』

『九九艦爆なめんなよ!!』

敵の抵抗を無視して九九艦爆で距離を詰める。敵艦隊の真上から一気に急降下して狙いを定める。九九艦爆から放たれた爆撃が敵艦隊を襲う!!

『よし!!離脱するぞ!!成果はどうだ!?!』

『又級中破、イ級小破。敵空母を使い物にならなくしてやったぜ!!』

『上出来だ!!胸を張って帰還するぞ!!』

鳳翔さん達、あとは任せました。

## 199話（鳳翔隊戦闘2）

「よし、ならば鳳翔達は敵艦隊の迎撃に出ろ。龍田達はドラム缶を放棄、撤退中の敵輸送艦隊を強襲せよ。」

あらあら？遠征部隊の私達を強引に戦闘に参加させるみたいねえ？相手は逃げてる輸送艦隊だから、装備の整って無い私達でもやるって判断でしょうけど、資材の確保より敵輸送艦隊の撃破を優先するんだ。ふふふっ♪

「はあくい♪皆々、ドラム缶を放棄して反転よお。逃げてる敵輸送艦隊を追撃するわよ〜」

「ええっ!?本当ですか!?!」

「はっ!!ドラム缶放棄しました!!吹雪さん!!睦月さん!!旗艦からの命令ですよ!!すぐにドラム缶を放棄して下さい!!ほら、春雨さんと如月さんはすでに放棄してますよ!!」

「は、はい!!ごめんなさい!!」

「龍田さん!!ドラム缶の放棄完了しました!!敵輸送艦隊を追いましよっ!!」

あらあら、朝潮ちゃんは真面目で良い子ねえ。こういう気を引き締めないといけない時には、きちんとしてくれてとっても助かるなあ。「ふふふっ、じゃあ敵輸送艦隊に向かって進撃よお。遠征のつもりだったけど、ちゃあんと戦闘に頭を切り替えないとダメよお。一隻も逃さないようにねえ。」

「はあくい。それにしても司令官つたら、いきなり作戦変えてくるだなんて・・・ほんと強引なんだからあ♪」

「ご、強引って・・・」

「た、確かにそうだけど、如月ちゃんなんか嬉しそうじゃない?」

「うふふ♪なんか求められてる感じがするから、強引なのも嫌いじゃないもの♪」

「も、求められてる・・・」

「三人とも!!もうすぐ戦闘なんてすよ!!気を引き締めて私語は謹んで下さい!!」

「ご、ごめんなさい!!」

「はぁ、ごめんなさいね・・・あら？春雨ちゃんちよつと顔色悪いけど大丈夫？」

「は、はい!!だ、大丈夫です、はい。」

あらあら？春雨ちゃんは大丈夫って言うてるけど、言われてみれば少しだけ調子が悪そうかも？でも今更春雨ちゃんだけ離脱させるのも難しいし、私がちゃんとフォローしてあげないのかなあ？

「じゃあ皆良いかなあ？まずは敵の護衛のホ級を狙うわよお。私と春雨ちゃん、旗艦のホ級を、残りの四人はもう一隻のホ級を狙ってね。」

「はい!!」

ふふふっ♪いっぱい戦果を上げたら、後で天龍ちゃんが羨ましがるかなあ？楽しみねえ♪

へへっ、鳳翔さんが敵のヌ級を黙らせたか。まだやろうってならアタシの対空砲火をもう一度食らわせてやるつもりだったけど、どうやらもう必要ないみたいだな。なら次は砲雷撃戦だ!!深海棲艦の奴らにぶちかましてやらあ!!

「でえええい!!」

「逃げてても無駄よ!!」

駆逐艦の奴らよりも射程が長いアタシと衣笠が、まず敵艦隊へと砲撃を開始するが、アタシの砲撃は外れて衣笠の奴はイ級に直撃か・・・負けてられないな!!敵もリ級とホ級が応戦してきやがった!!

「げっ!?んだよお!!」

ホ級の野郎!!アタシに当てて来るとは良い度胸じゃねえか!!だがヤバいところには当たってねえから、勝負はこれからだぜ!!リ級の野郎は外したしこっちが優勢だ!!

「時雨!!夕立!!行くよ!!」

「夕立が一番頑張るっばい!!」

「やれやれ・・・僕がフォローするから二人共あんまり無茶しないでね・・・って聞いてないか・・・」

駆逐艦の奴らが前に出るか。まあ、駆逐艦達は前に出て戦うのが当

たり前だけど、駆逐艦達だけに前線を任せるなんてのはカッコ悪過ぎるぜ!!

「衣笠!!アタシらもどんどん前に入るぞ!!」

「了解!!衣笠さんにお任せよ!!」

「アタシ達の狙いはり級だ!!こつちの方が火力は上なんだ!!撃ち負けるなよ!!」

今度は駆逐艦同士での撃ち合いになったが、こつちは三人で相手は衣笠がさつき仕留めたから残り2隻。夕立と白露が滅茶苦茶に突っ込んでるように見えたが、イ級が砲撃する直前に急に回避行動をとって、きつちりと避けやがった。しかも躲した後で落ち着いて反撃して、夕立が小破していたイ級を見事に沈めたし、白露がダメージを与えたイ級に時雨がしつかりと止めを刺す。なかなか良い連携じゃねえか!!残るは又級中破とり級にホ級か!!

「摩耶様の攻撃、喰らえくっ!!」

「ほら、もう一発!!」

敵とほぼ同時に撃ったこつちの攻撃は、り級を庇うように前に出てきたホ級に命中して沈めた。ちつ、り級を仕留め損なっちゃったな・・・

「ああっ!!直撃!?!」

「も、もくばかあく!!これじゃ戦えないっばい!?!」

クソ!!こつちは衣笠がり級に中破させられて、夕立がホ級に大破させられた!!もう少し早くあいつらを仕留められてれば!!二人をさっさと下げたいが、もう既に雷撃戦の距離だ!?!今更下がれねえ!!

「クソ!?!雷撃戦だ!!」

敵のり級を睨みながら雷撃を放つ。あいつさえなんとか出来ればこつちの勝ちなんだ!!あいつさえ仕留めれば!!

うーん・・・これはちよつとまずいかなあ・・・夕立が被弾して大破しちゃったし・・・でももう雷撃戦の距離だから、僕も魚雷を発射しないとね。姉さんは敵旗艦の又級に向けて魚雷を放って、摩耶さんはり級を狙ってるみたいだね。なら又級は姉さんに任せて僕はり級

の方かな？摩耶さんの魚雷を避けようとしたら、この辺に動くかな？

「いーっけえー!!」

「でえええいー!」

姉さんの魚雷が見事に又級に刺さって盛大な爆発が起こる。リ級は摩耶さんの魚雷をギリギリ躲して……うん、予想通りの位置だ。僕の魚雷もしつかりとリ級に命中して……大破か……轟沈まではいかなかったみたいだね。でも大破まで追い込んだら追撃すれば仕留められるだろう。だからその前にリ級が放った魚雷を回避しないと。魚雷はどこに？

「っばい!」

「っ?!夕立!?!避けて!!」

夕立の方に魚雷が!?ダメだ!!夕立はもう大破してるんだ!!そんな状態で魚雷なんて受けたら!?!この距離は僕じゃ間に合わない!?!

「夕立いいいい!」

派手な轟音と共に盛大な水飛沫が上がる。嘘だよな? やつとこれから皆で頑張つて活躍しようつて時に嘘だよな!?! やつと僕達が艦娘として戦える良い提督が来てくれたの!?! 水飛沫が収まったその先には……

「痛ったあ!! あーもう!! 寒いし、痛いし、恥ずかしいし……んもおー今に見てなさいよおーっ!!」

「はあはあはあ……姉さん庇うの間に合ったんだね。本当によかったよ。」

「ふふん♪ まあ、お姉ちゃんだからね♪ 妹を護るのは当然だよ♪」

「ふふっ、流石だね。」

「た、助かったっばい。白露姉ちゃんありがと。」

「どうよ!! 敵の旗艦仕留めたし、イ級も時雨と二人で沈めたし、夕立も轟沈の危機から護ったし、今日こそお姉ちゃんがいつちばんでしょ!!」

確かに今回は姉さんが大活躍だね。僕もイ級を姉さんと撃破したし、リ級にも魚雷を当ててるから大活躍だ。これならきつと提督も褒めてくれるよね?

「うう．．．でもまだり級が残って．．．」

「ねえよバカ!!」

「あつ、摩耶さん。」

「もうアタシと衣笠で止め刺したよ。まったく．．．そんなボロボロになつてまで無理しようとするな!!」

「で、でも．．．いっぱい頑張つて提督さんに褒めて貰いたかつたっばい．．．」

「それで沈んだら元も子もねえだろうが!!」

「ぽい．．．」

うーん．．．夕立が頑張りやなのは良いことだけど、もっと自分を大切にしたいな．．．

「まったくこの娘は．．．」

「白露姉ちゃん?」

「いい?夕立が沈んだらもう提督に会えないんだよ?それに私達だつて悲しいんだから無理しないの。皆で生き残つて帰れば提督はちゃんと褒めてくれるから、沈むような事はしちゃダメよ。」

「は．．．」

「姉さん．．．．．良いこと言ってるけど、姉さんもこの前は一番に拘つて無茶してたじゃないか．．．それが分かつてるならもう少し落ち着いて欲しいな．．．」

「うっ!?あ、いや、その．．．．．ごめん。気を付けます．．．」

皆で生きて鎮守府に帰る。それが本当に大事で嬉しい事なんだよ?皆が沈んで一人ぼっちになるのは、とつても寂しくて悲しい事なんだから．．．．．

## 200話（夜戦打ち合わせ）

「提督、戦闘終了しました。」

「分かった、報告を。」

「まず鳳翔さんの部隊ですが、敵艦隊を全て轟沈させましたが、こちらの被害も大きいです。摩耶さん小破・衣笠さん中破・白露さんと夕立さんが大破です。」

「そうか・・・まあ、楽には勝たせてくれないか。」

「次に龍田さんの部隊ですが、こちらも敵輸送艦隊を全て轟沈させています。こちらの被害は龍田さんと睦月さんが小破です。」

「ほう、こちらは上手くいったな。遠征部隊を無理やり戦闘に参加させたが、想定以上の成果だな。」

とりあえずこれで敵が補給拠点を作るのを阻止出来たと考えて良いだろう。だがこれ以上の進撃は危険だ。敵の増援が来た場合まともに戦えるとは思えない。

「では鳳翔と龍田達に帰還するように伝えてくれ。それと益田鎮守府に今回の戦闘の詳細な記録を送ってくれ。」

「分かりました。」

とりあえずは敵艦隊が来た方向と敵輸送艦隊が逃げていった方向は同じだから、その先に奴等の拠点がある可能性が高い。益田鎮守府の艦隊が見つけ出してくれば楽なのだが・・・だがもうすぐ夕方なのでそろそろ益田鎮守府も搜索活動を中止する頃か？そうなるとう島津提督を止める口実としては、少し物足りないのだが・・・強弁すればなんとかなるか？

「大淀、島津提督と通信を繋げてくれ。」

「はい、少々お待ち下さい・・・・・・・・えつと・・・古鷹さんが応対するようですが構いませんか？」

「ああ、むしろ都合が良い・・・・・・・・北九州鎮守府の葛原です。」

「はい、鹿児島鎮守府所属の古鷹です。ご要件はなんでしょうか？」

「先程うちの艦隊が敵輸送艦隊とその護衛艦隊を発見して、その撃滅に成功しました。しかし輸送艦隊がいたと言うことは、輸送艦隊を

送ってきた主力艦隊及び拠点があると推測出来ます。なので我々は引き続き益田鎮守府と合同でその搜索及び撃滅をします。ですから約束通りに鹿児島鎮守府との演習は延期にして頂きたい。」

「やはりそうなっちゃいましたか・・・分かりました。島津提督には私からそう伝えておきます。それでは私達は近隣の博多鎮守府で待機しようと思います。」

ほう、それは非常に助かる。正直に言って島津提督を鎮守府に入れるとトラブルが起きる気しかないので、出来るだけ距離を置きたい。物理的に距離をとってくれるならありがたい話だ。それにしても島津提督がまたゴネて揉めるかと思っていたので意外だったな。

「それは助かります。」

「あ、それと私だけはお約束通り北九州鎮守府で葛原提督が指揮するのを見せて貰おうと思いますが、大丈夫でしょうか？」

「ええ、こちらからお出した条件ですし問題ありませんよ。その代わり艦隊指揮の邪魔になるような事はやめて下さい。」

「ええ、もちろんです。では後程お伺いしますね。」

「はい、お待ちしております。」

やはり古鷹が間に入ってくれると鹿児島鎮守府とのやり取りもスムーズに進むな。とはいえ古鷹の一存で博多鎮守府に泊まる事や演習の延期を決定は出来ないはずなので、島津提督が予め決めていたのだろう。少しは頭が冷えてきたのだろうか？それともこちらの態度に腹を立てたので博多鎮守府に泊まる事にしたのだろうか？

「さて、鹿児島鎮守府は大人しくしてくるようだし、夜戦の編成を考えるとするか。」

「夜戦となればまずは川内さんですよね？」

「そうだな。川内を使わない理由はない。とりあえず呼んでくれるか？編成の相談がしたい。」

「はい、少々お待ち下さい。」

大淀がそう言うてから一分もせず執務室の扉が勢い良く開かれる。艦娘寮から全速力で走って来たのか？そんなに夜戦が楽しかったのだろうか？いや、川内に対しては愚問だな。



「提督!!夜戦!!夜戦の時間だね!!」

「ああ、夜戦だ。川内の意見が聞きたいから、まずは現状の説明からだな。」

「うんうん!!今日は大っきな夜戦の雰囲気だし、作戦会議は大事だね♪」

大っきな夜戦の雰囲気か・・・川内がそう言うのであれば、それなりの規模の敵艦隊と戦う事になるのだろうか・・・とりあえず川内にこれまで北九州鎮守府と益田鎮守府が遭遇した敵艦隊の情報と、敵の主力艦隊が居そうな場所の候補を指し示していく。

「今回はまだ敵の規模が把握出来ない。それと益田鎮守府も合同で参加して貰うつもりだ。その2点をふまえたうえでまずは編成の意見を聞いてみたい。」

「そうだねえ?そもそも提督の目的はなんなの?偵察だけ?それとも一当てして敵の戦力を削る?それとも一気に攻略しちゃう?」

「可能なら殲滅したいところだが、相手の規模と正確な居場所がわからないから・・・だが川内の索敵能力があれば、現地でどこまでやるかを判断出来るのではないかと考えているが?」

「もちろん任せてよ!!でも殲滅も視野に入れるならかなりの戦力が必要だと思うよ?」

「ほう?その根拠は?」

「私の勘!!」

堂々と勘だと言い切るか・・・だが下手な情報よりも随分と頼りになりそうなのだよね・・・

「・・・分かった。ならば三艦隊出そう。主力艦隊は旗艦川内・神通・北上・大井・島風・雪風だ。機動性と火力の確保をして扱い易い艦隊だろう。次に打撃力の確保の為に金剛姉妹と青葉・高雄を出す。その護衛として旗艦五十鈴・球磨・第七駆逐隊。五十鈴達には主に対潜警戒とうち漏らしの対応をしよう。この編成でどうだろうか?」

「おお!!豪華なメンツだね♪それなら楽しい夜戦が出来そうだよ♪」

「ではそのメンバーで編成しよう。大淀、今のメンバーに通達を頼む。」

それと間宮にすぐに食事を食べさせられるか確認してくれ。」

「分かりました……食事の準備もすぐに出来るそうです。」

「分かった。なら今のメンバーにはすぐに食事をして、出撃の準備をするように指示しろ。」

「了解しました。すぐに行動させます。」

「じゃあ私も晩ごはん食べてくるね!!夜戦♪夜戦♪」

そうやって上機嫌で川内は執務室から退室した。夜戦に関しては本当に頼りになる奴だな。そうなるとあとは益田鎮守府からどれだけ戦力を引っ張れるかだな。最悪でも陽動として敵戦力を引っ張れるくらいの戦力は欲しいところだな。

## 201話（狐塚提督打ち合わせ）

益田鎮守府の執務室で周辺海域の地図をずっと睨んでいるが、状況はあまりよくない・・・わたしが出した哨戒部隊からの情報と北九州鎮守府からの情報で、それなりの規模の艦隊が存在する可能性が高い事は分かった。そしておおよその位置は判明している。しかし敵主力艦隊の姿はまだ見えない・・・存在するはずの敵が見えないというのは恐ろしいものだ・・・

「ぐ・・・まだ敵艦隊は見つからないのか？」

「はい・・・申し訳ございません・・・隼鷹さん達も飛鷹さん達も頑張っているのですが・・・」

「頑張っているかどうかは関係ない!!もうすぐ日が暮れてしまうのだぞ!!敵主力艦隊を発見出来なければ、葛原提督からの援軍が望めないのだぞ!?偵察は我々がするから討伐に協力してくれと頼んだのだ!!だからこのままでは・・・」

「申し訳ございません・・・」

ぐ・・・秘書艦の扶桑にあたってはどうにもならないのはわかっていのだが・・・隼鷹の部隊はいつたいなにをやっているのだ!?あの部隊は鳥海以外は性格に難がある奴らを集めて入れている。だから大損害を受けても情報さえ得られれば良かったのだが・・・なかなか上手くいかないものだ・・・

「提督、北九州鎮守府の葛原提督から通信です。」

「ぐ・・・もう時間切れだと言うのか・・・」

「・・・どうされますか？」

どうされるものにも、葛原提督を説得するしかないだろう・・・そうしなければこの話は明日に持ち越しになってしまう。そして今日の夜に敵艦隊が益田鎮守府に攻め入らないとは限らない。今までの経験上深海棲艦達に手を出した鎮守府は狙われ易い。だから今までは長門鎮守府や出雲鎮守府に敵意が向けられていて、益田鎮守府はあまり狙われなかったのだと思う。だが今日はわたしの艦隊も深海棲艦の撃退に協力している。だから狙われる可能性は充分にある。だ

からこそ北九州鎮守府の戦力で敵主力艦隊を撃退して貰う必要がある。撃退出来なかったとしても、せめて敵意を北九州鎮守府に向けて貰わなければ困るのだ。

「代われ．．．．．益田鎮守府の狐塚だ。」

「北九州鎮守府の葛原です。」

「も、もう少しだ!!もう少し待ってくれ!!日没までまだ少しある!!ギリギリまで待ってこないか!」

「は、はあ?なんのお話ですか?」

「なんの話だ?!私が偵察をするから敵主力艦隊の討伐に協力してくれる話だっただろう?!もう少し!!もう少しで見つけられるはずなんだ!!」

「はあ．．．少し落ち着いて下さい。敵主力艦隊の位置はかなり絞れたでしょう?私は夜戦を仕掛ける為に戦力を送るつもりですよ?」

「ほ、本当か!」

「ええ、ですから狐塚提督にもご協力頂ければと思いますして通信をしたのですが?」

そ、そうだったのか．．．私も少々焦り過ぎていたようだが、そういう事なら話は早い。北九州鎮守府の艦隊を主力として、益田鎮守府の艦隊はあくまでも支援に徹する。そうすれば敵主力艦隊の敵意は北九州鎮守府の方に向けられるだろう。理想としては北九州鎮守府の艦隊が敵主力を撃破してしまう事だが、ある程度損害を与える程度でも問題無い。だが北九州鎮守府が敗北する可能性も視野に入れなければならぬ。最悪のパターンは北九州鎮守府が早々に撤退して、わたしが派遣した艦隊を深海棲艦が殲滅し、そのまま益田鎮守府へと流れ込んでくる事だ。

「な、なるほど．．．それで勝算の方は?」

「戦争ですから勝利を確約は出来ませんが、今回の戦闘で敵艦隊を殲滅もしくは大打撃を与えるつもりで戦力を送りますよ。具体的には主力となる水雷戦隊と高速戦艦四人による打撃部隊、そしてその護衛艦隊ですね。」

「ほほう?かなりの戦力を投入されるのだな。益田鎮守府は小さな鎮

守府だから、それだけの戦力を投入出来るのは羨ましい限りだな。であれば北九州鎮守府が主攻を担って貰えると解釈しても良いだろうか？」

「ええ、そのつもりです。それで益田鎮守府からはどれだけ戦力を出して頂けますか？」

「こちらとしては主力の水雷戦隊を一艦隊。うちから出せるのはそれが限度だ。鎮守府の運営状況を考えれば出来るだけ損害も抑えたい。」

「……なるほど。」

葛原提督が黙ってしまった……これは流石に消極的過ぎただろうか？ここで葛原提督に手をひかれてしまうのは避けたいところだが、出来る限りこちらに負担にならないように交渉したいところだ。

「悪いがこちらにも資源に余裕が無いのだ。偵察部隊として二艦隊出したのでもなかなかキツイ状況なのだ。それでなんとかならないか？」  
「仕方ないですね……そうになると我々が戦闘を始めた後に、横から攻撃を仕掛けるくらいですかね？それならば敵の位置も判明していませんし、リスクも比較的少ないでしょう。」

「ありがたい。葛原提督には負担をかけてしまうな。」

「その代わり作戦中はこちらの指示に従って頂きます。我々は連携して動けるほどお互いの事を知らないのです、あまり近くで動くとお互いを邪魔してしまうでしょう。ですから攻撃を仕掛けるタイミングと場所はこちらからの指示に従って貰いますが構いませんか？」

ぐ……指揮の委任か……言ってる事は至極まともだが、葛原提督はわたしの艦隊を使い潰そうという腹積もりか？流石に使い潰されるのは避けたいところだ。

「攻撃のタイミングと場所はそちらに任せよう。だが私は私の艦隊に責任を持つ立場だ。指揮権の委任は承諾出来ない。」

「ええ、構いません。それとドロップ艦があった時は北九州鎮守府が貰いますが問題ありませんね？」

「ああ、主攻を担って貰うのだから当然だ。」

「ありがとうございます。ではこれで決まりですね。艦隊を編成した

らまた連絡しますので、そちらも宜しくお願いします。情報共有は密にお願いしますね。」

「ああ、もちろんだ。宜しく頼む。」

ふう・・・これでなんとか北九州鎮守府に負担を押し付ける事が出来そうだ。原田や猿田みたいなバカ相手も疲れるが、葛原のように頭の回る奴の相手も疲れるものだな・・・

「ふう・・・」

狐塚提督との通信を終えてため息を吐く。

「提督、益田鎮守府との共闘はどうなりましたか？」

「微妙なところだな・・・どうにも狐塚提督は今回の戦いに消極的なようだ。益田鎮守府の艦隊にはあまり期待は出来そうにない。」

「そうですか・・・」

「だが最低限こちらが動き易い条件は整った。少なくとも邪魔にはならないだろうな。」

「そうなると北九州鎮守府の艦隊だけで戦うつもりでいたほうが良さそうですね。」

「ああ、こちら無理しない程度に戦おう。」

あとは実際に川内を派遣してから考えよう。川内の感覚頼りで行き当たりばったりな作戦だが、川内の索敵能力を考慮するとこれが一番効率が良い。むしろ昼よりも夜戦の方が安心感があるなどどう考えてもおかしいのだがなあ・・・

「そうですね。」

「さて、そろそろ夕食を食べておこう。今夜は忙しいから余裕がある時に休んでおこう。」

「はい、お供します。」

## 202話（8日目夕食）

食堂に着くと夜戦に出撃する者達が慌ただしく食事をしていた。だが慌ただしくも過度な緊張はしていないようで、川内を筆頭に夜戦への意気込みを感じる。そして慌ただしく食事をする夜戦組とは少し離れたところで、一航戦の二人が食事をしている。なんだか食堂が開いているときはいつもあの二人が居るような気がする……

「……提督、私達に何かご用ですか？」

「ふあ!? んぐ……んっ……失礼しました。どうなさいましたか？」

「ああ、いや、別に用があったわけではない。だがそうだな、今日の演習の話は聞いておきたい。」

「演習ですか? 今日も五航戦と演習をしましたが、鎧袖一触でした。まだまだ鍛える必要があります。」

「加賀さん、瑞鶴さんも頑張っているのですからそんな事言ってはダメですよ?。」

「いいえ赤城さん、提督への報告は正確にしなくてははいけませんし、私にあしらわれる程度では鍛えた事にはなりません。」

「それはそうですね? ……もう少し瑞鶴さんの頑張りを認めてあげても良いんじゃないですか? 瑞鶴さんも加賀さんに勝とうと必死に頑張っているんですから。」

「……何度も立ち向かってくる根性は認めても良いですがそれだけです。私はあの娘を甘やかすつもりはありません。ですから提督、私が必ず五航戦を鍛えてみせますが、まだまだ時間が掛かりそうです。引き続き私に任せて頂けますか?。」

「どうやら瑞鶴はしっかりと加賀との演習に励んでいるようだ。加賀の方もずいぶん強い意思を宿した目をしている。これならば続けさせて問題無いだろうな。」

「ああ、問題ない。元々時間がかかる事だと理解している。徹底的にしごいてやれ。」

「ええ、お任せ下さい。」

「そして当然だがこれは加賀自身の訓練にもなる。瑞鶴に追い抜かれるような事がないようにな。」

「もちろんです。五航戦に遅れをとるわけにはいきませんから。」

士官学校時代に加賀は無表情でなにを考えているのかわかりにくいのの評判だったが、こうして接すると表情の動きは少ないものはつきりと意思表示が出来るわかりやすい奴だと感じる。

「それは頼もしいな。赤城もちゃんと加賀のフォローをしてやってくれ。」

「はい、お任せ下さい。加賀さんも瑞鶴さんもお互いに意地っ張りですから、放っておいたら二人共無茶をしまいそうですものね。本当は二人共とつても優しい人なんですけど。」

「・・・赤城さん。料理が冷めてしまいますよ。」

「ふふっ♪そうですね加賀さん♪」

「そうだな、食事中に時間を取らせて悪かったな。食事が続けてくれ。」

「ええ、ありがとうございます。」

「提督もお食事の時くらいはゆっくりされて下さいね。」

「ああ、そうさせて貰おう。」

そう言つて一航戦の二人と別れたは良いものの、これから行う夜戦については色々と考えざるを得ない。島津提督から邪魔される事がなくなったのは良いが、狐塚提督からの協力があまり期待出来ないのは痛い。というより戦闘中に勝手に戦線を離脱されたりする可能性を考えると、形だけ参加させて戦闘には関わらせない方が無難かもしれない。

「んあ？提督じゃん。お疲れ〜」

「ん？北上か。何か用か？」

「いや、別に用つてほどじゃないんだけど、たまたま近くに来たから声かけたただだよ。っていうかなんかちよつと不機嫌そうな感じ？何かあった？」

「・・・そんなに顔に出ていたか？」

「どうだろ？なんとなくそんな気がしただけ。しいて言えばいつもよ



り眉間に皺が寄ってるくらいかな?」

「そうか・・・あまり感情を表に出さないように気を付けていたつもりだったのだが・・・私も上に立つ者としてまだまだ甘いみたいだな。」  
島津提督とのやり取りの影響でイムヤを無駄に怖がらせたばかりだと言うのに・・・どうにも上手くいかないようだ。

「んく? まあ別に気にしなくていいんじゃない? 提督にも立場つてやつがあるのかもだけど、あたしは特に気になんないしさあ。」

「北上は私が怖く無いのか?」

「別に? この短い間で提督の噂は色々聞くけど、そんなに悪い噂は聞かないし、あたし達が何かされたわけでもないしねえ。それに駆逐艦に絡まれて困ってる姿を見たらなおさらねえ。」

噂か・・・まあ、艦娘同士で情報の共有くらいは当然するだろう。特に新しい提督が着任すれば注目を集めて当然だ。だがそんなに悪い噂は聞かないか・・・その程度で収まっているなら悪くはないか? 「そうか。」

「そうだよ。この鎮守府で提督を本当に嫌ってる艦娘は居ないと思うよ? あ・・・大井っちは提督の事どう思ってるの?」

「いや、本人を目の前にして聞くのか?」

「・・・別に嫌ってはいません。提督が着任してから北上さんが生き生きとしますし、出撃に関しても北上さんが乗り気ならば私から文句は無いですし、生活環境の向上は素直に評価してますよ。」

北上の隣に座っていた大井はこちらに視線も向けずにそう答える。どう考えても友好的な態度ではないが、敵意を向けられているわけでは無さそうか?

「だつてさ。じゃあ提督を嫌ってる艦娘は居ないみたいだね。」

「はあ・・・だと良いがな。」

正直に言つて誰にも嫌われていないは無理がある。実際に自分の事を怖がる艦娘はまだ居ると思うし、艦娘達に男性や提督にトラウマがある以上この問題はどうしても時間がかかる。というかそもそも集団の全員に好かれるなどまず無理だ。それこそ本物の聖人君子でもなければ不可能だろう。もし本当にそんな奴が居たら気味が

悪くて自分は近付きたくないがな。

「あはは・・・それで話を戻すけど何かあったの？あたしに話せないような事ならこれ以上聞かないけど。」

「いや、どうせ夜戦に出る者達には伝わる事だ。今日の夜戦に関してなんだが「ねえ!!今夜戦の話した!?!夜戦の話だよね!?!」

急に会話に割り込んで来たやつは顔を見なくても分かる。こんなテンションで夜戦の話に食いつくのは川内しか居ない。

「はあ・・・そうだ。」

「だよね!!だよね!!提督も夜戦が待ち切れないんだよね!!」

「姉さん?」

「ひっ!?!神通!?!そ、そんなに怖い声だしてどうしたの!?!」

川内の後ろからすつと出て来た神通が川内の肩を掴んで怖い笑顔を浮かべている。一応笑顔なのだが取繕われているのがはつきりと理解出来るのが怖いところだ。

「夜戦ではしゃぐのは仕方ないですが、提督と北上さん達との会話を邪魔してはいけません。提督、北上さんと大井さん、姉さんがお騒がせしてしまい申し訳ございません。」

「いや、神通が止めに来てくれて助かった。」

「あはは・・・川内は相変わらずだよねえ」

「私は別に怒ってませんから・・・」

「ありがとうございます。姉さんもちゃんと謝って下さい。」

「あー、ごめんごめん。ついテンション上がっちゃってさ。でも夜戦の話してたよね!!」

「姉さん・・・少しあちらで私とお話しましょうか?」

「ええ!?!夜戦の話はダメなの!?!」

このままでは話が進まないな・・・というかどうせ川内とも話をしなければならぬのだ。呼ぶ手間が省けたと考えよう。

「神通、どうせ川内とも後で話をしなければならぬところだったのだ。ついでだから二人とも話をしておきたい。」

「・・・分かりました。」

「それでそれで!?!夜戦の話ってなに!?!」

「あまり良い話じゃないぞ。援軍に来る予定だった益田鎮守府の艦隊だが、どうにも作戦の参加に消極的で信用出来ない。」

「……え!?もしかして夜戦を中止するとか言わないよね!」

「中止にはしないが益田鎮守府の艦隊はあてに出来ないから、うちの艦隊だけで戦う事になるだろう。」

「あ、夜戦があるなら私は問題ないよ♪」

川内としては夜戦の有無だけが問題か……いや、川内は元々益田鎮守府の増援を頭数に入れていなかったのだろうか?川内の勘については未知数過ぎるから、あり得ない話ではないな。

「姉さん……提督、質問宜しいでしょうか?」

「どうした?」

「益田鎮守府からの援軍はあるのですか?それとも最初から派遣されないのでしょうか?」

「水雷戦隊が一艦隊派遣される。派遣はされるが私としては戦闘に関わらせ無いつもりだ。信用出来ない相手と共に肩を並べるくらいならば、我々だけで戦った方がマシだ。戦闘中に勝手に撤退されて戦線を崩されるリスクは負いたくない。周辺海域の警戒という名目で戦場からは遠ざけるつもりだ。」

「なるほど。分かりました。」

「それと川内には伝えたが、敵艦隊の撃滅が理想ではあるが、無理をしてまで拘る必要は無い。敵戦力の把握が出来れば充分で、敵戦力を削る事が出来れば上出来だ。そのあたりの判断は川内が現地赶赴してから判断しようと思う。神通も川内の補佐を頼む。」

「はい!!お任せ下さい!!」

「話は以上だ。出撃に備えろ。」

「はい!!」

川内と神通は敬礼をしてから駆け出した。川内は夜戦が待ち遠しくて仕方ないのだろうし、神通は物凄く真面目な性格なので早目に準備を整えたいのだろう。

「いや〜それにしてもあれだね〜狐塚提督だっけ?なんというか御愁傷様だね。」

「・・・北上、どういう意味だ？」

「いや、これって作戦の直前で手を引いたみたいなんじゃない？」

「まあ、そんなところだな。一応共同作戦に参加する体裁だけは確保しているがな。」

「だったら充分でしょ？うちの提督に喧嘩売ったらろくなことにならないらしいじゃん？だから御愁傷様だなあつて。」

「・・・私にそこまでの力はないぞ？」

「またまたあくじやあ私達も出撃の準備してくるね。大井っち行くよ」

「はい!!どこまでもお供します♪」

北上と大井は楽しげな雰囲気準備に向かう。それにしても喧嘩を売ったらろくな事にならないか・・・

「・・・私は艦娘達にどう思われているんだ？」

その呟きに答えようとする者は誰も居なかった。

## 203話（8日目夕食その2）

北上達と別れて間宮から食事を受け取り大淀と共に席についたのだが、先程の北上の発言がどうにも引つかかる。指揮官として部下に舐められるよりは畏敬された方が良い。ただしそれは規律を守る指揮官として恐れられるのが良いのであって、罰と称した暴行や性的に襲われるかも知れないという恐怖ではダメだし、何をしてもかすかわからない危険な奴として恐れられるのも問題だ。あくまでも目指すべきは信賞必罰を正しく実行する厳格な指揮官であるべきだ。

「Ah・・・提督、少しいいデスカ?」

「金剛か。どうした?」

金剛から声をかけてくるとは珍しいな。それこそ金剛は自分にと  
いうよりは提督という存在そのものにトラウマがあったはずだ。そ  
していつもどおりというか金剛の後ろに残りの金剛姉妹も揃ってい  
る。比叡は少し心配そうに、榛名は少し嬉しそうに、霧島は少し緊張  
したような雰囲気か。

「えっと・・・そ、そうデス!!今日の出撃の話聞きに来たヨ!!」

「ふむ、大淀からの通達はあつたはずだが、今回の戦いではまだ敵の規  
模が判明していない。だから川内が現地に行つて索敵をして、その結  
果次第で作戦行動が変わる事になる。だが敵の拠点を叩くならば火  
力が必要だ。お前達金剛姉妹には敵を蹴散らす火力を求めている。」

「お、OK。Ah・・・何故ヤマト達じゃなくて私達なのか聞いても良  
いデスカ?」

「速力の問題だな。夜戦の中心となるのは川内だ。そして川内が得意  
とするのは、索敵能力を活かした奇襲と闇夜に乗じた離脱だ。速力が  
低いと奇襲には問題がなくても離脱に支障が出る。だから高速戦艦  
であるお前達を選んだ。」

「な、なるほどネエ、わかったヨ。Ah・・・ウン、仕事はちゃんと頑  
張りマース。Resultには期待してヨ。」

「一応聞いているとは思うが、無理をしてまで攻略する必要はないか  
らな?可能であれば殲滅するが、威力偵察程度でも充分だ。変に気負

うなよ?」

「OK 命大事にデスね。Ah・・・」

・・・それにしてもさつきから金剛はどうしたんだ? どうにも先程から落ち着きもなく目線もあちこちブレているし、会話にも集中しているようには見えない。それに先程から何か言い淀んでいる雰囲気だ。

「はあ・・・それで? 本題はなんだ?」

「Why!? どうしてそれを!」

「さつきから挙動不審過ぎるぞ。流石に何か言い淀んでいる事くらいはわかる。」

「Oh・・・提督にはお見通しネ・・・Ah・・・」

「お姉様!! 気合です!! 気合!!」

「金剛お姉様、提督ならきつと大丈夫です。」

「金剛お姉様、事前情報から考慮した結果、成功率はかなり高いとの結果が出ています。お、落ち着いていきましよう。」

「Thank you そうネ、これ以上妹達にカツコ悪いとこ見せるのはNOデース。提督!!」

「なんだ?」

問い返すと金剛が静かに膝をついて深々と頭を下げ土下座をした。

「Sorry!! 今まで提督にとっても嫌な態度とってしまっただネ。許して欲しいデース。」

「・・・ん? ああ、いや、別にそこまでされるほどの事はされてないと思うのだが? とりあえず土下座はやめてくれ。」

正直なところ金剛がこれまでこちらから距離を取ろうとしていた態度よりも、大勢の艦娘が集まる食堂で土下座される方が困るのだが・・・食堂の艦娘達がざわついているし、遠くから「おあ!? これがニッポンのドゲザハラキリ!? ニッポンの文化ですネ♪」などと不穏な声も聞こえてくる・・・土下座も勘弁だがこんなところで切腹されたら大惨事だぞ・・・

「Oh・・・想像以上にあっさりネ・・・」

「そもそも金剛は言う程問題を起こしていないから、そこまで謝られる理由が無い。」

「Why!?! 私提督を避けてたヨ!?!」

「だからその程度だろ? 別に命令に反抗したりこちらを侮辱するような発言は受けていない。」

「Uh・・・だったら許してくれマスか? 必要ない時は関わらないでと言っただけどネ、それも無かった事にしてくれマスか? 私達少しずつでも提督に歩み寄りたいヨ。」

「それは構わないが・・・急にどうしたんだ?」

あれだけ頑なだった金剛がここまで態度を変えるところはどういった心境の変化だ? いや、秘書艦の仕事を金剛姉妹で手伝うと申し出て来たときには、すでに歩み寄ろうとする兆候はあったか。

「Ah・・・可愛い榛名が提督は良い人だっけとずっと言ってくれたからね。それから提督の事を見てたヨ。寝不足で顔色悪くてもお仕事頑張る姿見てたら、邪魔してる私が悪い人に思えてきたヨ・・・それに・・・」

「それに?」

「提督と幸せそうに話してる娘達を見てたらちよつと羨ましくなったデース。でも私が心を閉ざしたままだと私だけじゃなくて、可愛い妹達も遠慮して幸せを手に入れられないヨ・・・だからちゃんとオトシマエつけにきたよ。」

「落とし前って・・・まあいい。先程も伝えたが私は金剛に対して怒っていない。他の艦娘達と同様に扱って良いと言うならそうしよう。」

「Thank you!! 提督が優しい人で良かったヨ。」

「そうか。だが私はお前達に軍人としてきちんと働く事を求めている。まずは今日の夜戦だな。あまり他の夜戦メンバーを待たせるのは良くないから、早く準備を整えて来い。」

「Yes!! 私達の実力、見せてあげるネー!!」

「気合!! 入れて!! 頑張ります!!」

「勝利を!! 提督に!!」

「データ以上の活躍が出来るように頑張りますね。」

金剛姉妹はそれぞれに宣言をすると清々しい表情で駆け出して行った。これで金剛姉妹が集中して戦闘に挑めるのであればなによりだ。今後の活躍にも期待が出来そうだ。

「なあ大淀。」

「どうされましたか?」

「当たり前かもしれないが、艦娘からの私の評価も色々あるようだな。」

「そうですね。私達には個性もありますし立場やこれまでの経験など様々な違いがありますから。同じ艦娘ですら別の鎮守府の艦娘とは違う個性が現れるものですからね。いろんな目線で提督を見ているのが当たり前だと思います。」

「それもそうだな。」

「イクは当然獲物を狙うエロスな目線で見てるのね!!提督は軍服姿がカッコいいけど露出が少ないのね。だからそのぶん軍服の袖からチラッと見える引き締まった腕にエロスを感じるのね♪でも襟元を緩めて鎖骨あたりまでチラ見せするとよりエロスを感じるはずなのね!!」

「はあ・・・イクはどこでも唐突に出てくるな・・・それにしても獲物を狙う目線か・・・どれだけ肉食系なんだこいつは?本当に懲りない奴だ・・・」

「村雨はこの広い肩幅が良いと思いきす♪ガッツリしてて男らしくてカッコイイです♪鹿島さんはどう思います?」

「ええ!?えつと!?落ち着く香りがするとか安心感があると言うか・・・ぷ、プリンツさんは!」

「Hm・・・Admiralのカッコイイところですか?若いのに落ち着いた良い声してると思います!!次はヤマカゼの番ですね!!」

「・・・え?指・・・とか?いや・・・別に気になる事なんてないけど・・・」  
「さ、最後は秋月ですか!?え、えつと?えつと?ここはお腹一杯美味しいご飯が頂けて幸せです!!」

イクと村雨につられて一緒にいたドロップ艦組も変な事を言い始めた・・・イクはともかく村雨もそっち側なのか・・・今後に警戒だ



な。

「はぁ・・・バカな事言っていないでさっさと食事を済ませておけ。状況次第ではお前達に出て貰う可能性もあるのだぞ?」

「了解なのね!!いつ呼び出されても良いように待機しておくのね!!出撃でもベットでもどっちでも遠慮なく呼んで欲しいのね♪」

「・・・なんだったら営倉で待機しておくか?」

「・・・営倉は営倉で悪くないシチュエーションだと思うのぐえ!」

「し、失礼しました!!」

イクの対応に困っているといつものようにイムヤが多慌てで引き摺っていく。イムヤも段々とイクに対して遠慮がなくなつて、問答無用で連れて行ってくれる。本当に助かる。

## 204話（古鷹到着）

食事を済ませて執務室に大淀と共に戻った。そこで哨戒に出ている艦隊の帰還報告を受けていると……

「ん……提督、鹿児島鎮守府の古鷹さんが到着されたそうです。」  
「分かった。陸奥に執務室まで案内するように伝えてくれ。それとあまり情報を抜かれないように気を付けてくれともな。」

「了解しました。ですが下手に隠そうとすれば余計に疑念を抱かれるのではないですか？提督は隠さなくてはならない程の悪事をしては……いえ、なんでもありません。陸奥さんに気をつけるよう伝えます。」

隠したい事は色々あるが、一番マズイのは春雨の件だろう。大淀は悪雨の事を知らなくても、春雨が前任者の大森提督を殺害した事は知っている。そしてその事がバレたら春雨だけでなく隠蔽に関わった全員が処刑されるだろう。むしろ鎮守府丸ごと処理されても不思議ではない。島津提督としてはもっと別の事に興味があるのだろうがな。

コンコンコン

「陸奥よ。古鷹さんをお連れしたわよ。」  
「入れ。」

陸奥に案内されて執務室に入って来た古鷹は丁寧な所作で敬礼をする。やはり古鷹は真面目で礼儀正しい艦娘なのだな。

「鹿児島鎮守府所属の古鷹です。本日は葛原提督の指揮を見学に来ました。宜しくお願いします。」

「北九州鎮守府所属の葛原です。新人の拙い指揮かもしれませんが、ご容赦頂けると幸いです。」

「そう謙遜なさらないで下さい。これまでの戦闘の記録は読ませて頂きましたが、新人の方とは思えない内容でしたよ。」

「あまり持ち上げられても困ります。至らない所ばかりだと言うのに、勘違いしてしまいそうになります。前置きはこのくらいにしてお

いて仕事の話をししましょう。現在北九州鎮守府からは艦隊攻撃させています。接敵予定まではまだ時間がありますが、それまで古鷹さんはどうされますか？休まれるのであれば部屋を用意致しますが？」

「いえ、お構いなく。その・・・島津提督から北九州鎮守府に到着したら、葛原提督をしつかり見張っておけと命令されたもので・・・出来れば作戦開始までの様子も見学させて頂けませんか？作戦は接敵する前が一番重要ですし・・・」

古鷹は監視のために送られて来た事を一切隠そうとしないのだな。いや、今更取り繕われても無駄ではあるのだが・・・

「確かに仰る通りですね。ですがそうなると先にお見苦しいものを見せなくてはならないかもですね・・・」

「どういう事ですか？」

「これから益田鎮守府の狐塚提督にも古鷹さんの話をしなくてはなりませんから。政治的な都合で揉める可能性が高いかと。」

「えっと・・・その・・・私がいるせい・・・でしょうか？」

「原因の一つにはなるでしょうが、元々もめる予定でしたのでご心配なく。私には後ろめたい事はありませんので、私としては執務室に居て頂いても構いませんから。」

古鷹に安心して貰えるように笑顔でそう伝えてみたのだが、古鷹だけでなく隣にいる陸奥も顔を引き攣らせてしまった・・・

「あ、あはは・・・ご迷惑をおかけしてしまいましたが、私も島津提督から与えられた任務がありますので、葛原提督の許可が得られるのであればここに居させて頂きます・・・」

「分かりました。陸奥、悪いが引き続き古鷹さんの対応を頼む。鎮守府で待機している艦娘達に雑用を手伝わしても構わないから、きちんともてなしてくれ。」

「分かったわ。まずは古鷹さんの椅子と机を用意して、皆の飲み物でも持って来て貰おうかしら？コーヒードで良いかしら？」

「お気遣いありがとうございます。」

「・・・コーヒートを頼むのは漣以外にしてくれ。」

古鷹は客人だ。客人に漣スペシャルとか言うとしてもコーヒートを

出すわけにはいかない。もしかしたら艦娘は甘味好きが多いので気に入るかもしれないが、こんなところで冒険するべきではない。

「え?どうしたの提督?漣はさつき出撃したから居ないわよ?」

「そうだったな・・・すまん、忘れてくれ。」

「別に良いけど、提督が艦娘を嫌うのはあんまり褒められた事じゃないわよ?お姉さんちよつと悲しいわ。」

「別に嫌っている訳では無い。先日の漣の悪ふざけを思い出したただけだ。」

「そう。まあ良いわ。こっちは私が上手くやるから提督はお仕事に専念してね。」

陸奥が任せてくれと言うならば上手くやるだろう。陸奥は人当たりも良いし、情報管理についてもきちんと考えて動く事が出来る。なら自分は自分の仕事に専念するか。

「ああ、頼んだ。大淀、益田鎮守府の狐塚提督に繋いでくれ。」

「了解しました。・・・どうぞ。」

「北九州鎮守府の葛原です。」

「益田鎮守府の狐塚だ。どうした?」

「現状報告としては先程北九州鎮守府から艦隊が出港しました。」

「分かった。益田鎮守府からも合流予定地点へと向かわせよう。だが話はそれだけではないのだろうか?」

「ええ、狐塚提督に伝え忘れていた事を一つ思い出しましたので。」

「つ、伝え忘れていた事だ?!この土壇場のタイミングで伝え忘れていた事だ?!なにを企んでいる!?!」

ずいぶんな慌てようだな。何か企んでいるのはお互い様だろうに。余程繊細な綱渡りみたいな事を考えているのか?それともただたんに心配性なだけか?

「企むだなんて大袈裟な。作戦に影響しない話でしたので伝えていなかったのですが、現在北九州鎮守府に鹿児島鎮守府から艦娘が一名見学に来ているのですよ。ですから共同作戦を行う狐塚提督にも一声かけておこうかと思ひまして。」

「かかか、鹿児島鎮守府だ?!?なんでそんな遠くの奴らが出て来るの

だ!？」

「元々今日は鹿児島鎮守府と演習をする予定でして、深海棲艦の対応の為に急遽延期になってしまいました。それで島津提督が機嫌を損ねてしまった、演習を延期する条件として監視役を一人派遣される事になりました。建前上は見学ですがぶつちやけ監視ですね。」

「ぐ……つまり今回の戦いは佐世保鎮守府の派閥の奴が監視している……しかも島津提督と言えば佐世保傘下のナンバーツーで好戦的で頭の固いジジイだろ？わたしの一番苦手なタイプだ。」

「奇遇ですね。私も苦手で苦労しているところです。」

「ううむ……嘘……ではなさそうだな。」

「まあ、見学だけでこちらの作戦指揮への口出しはしないとの約束です、今回の作戦への影響はありませんのでご心配なく。」

「ぐ……まあ、事情は分かった……念の為に聞いておくが、鹿児島の艦隊はこの作戦に参加しないという事で良いのかな？」

「ええ、その認識で問題ありません。」

「分かった……私からは何も言わん……」

ふむ？思ったよりはもめなかつたな。最後まで鹿児島鎮守府からの介入を気にしていたようだが、不満はあっても飲み込める程度と言う事か。この件で激しく抗議されるようであれば益田鎮守府との共闘を断って、うちの艦隊単独で作戦を開始するつもりだったのだが……

「ありがとうございます。それで作戦の方なのですが、先程益田鎮守府の艦隊には戦闘開始後に側面からの攻撃をお願いしていたと思うのですが、少し変更して後方の警戒をメインとして予備戦力として待機して頂きたいのですが。」

「……益田鎮守府の艦隊を戦場から遠ざけたいと解釈しても……」  
「ええ、構いません。私には狐塚提督が何を考えているかは分かりませんが、その方が都合が良いのではないですか？」

「ぐ……」

ほう？黙ったと言うことは都合が悪いという事か？それとも自分から疑いをかけられている時点で困っているのだろうか？

「どうされました？もし私の思い違いであれば、まだ作戦を変更する余地はありますが？積極的に戦闘に参加されたいのでしょうか？」

「ぐ……いや、その作戦で構わない……そちらが主導の作戦なのだから文句は言わん。」

「ありがとうございます。それでは秘書艦同士で連絡を密にして、なにかあればすぐに情報共有しましょう。益田鎮守府との共闘作戦は今回が初ですから、今後の関係の為に良い関係を築きましょう。」

「ぐ……宜しく頼む……」

狐塚提督との通信を終えて一息吐く。とりあえずこちらの要求を一方的に通せたので満足だ。電話の向こうで良い関係を築こうなどと白々しいと叫んでいる姿が目につかぶが、それくらいは些細な問題だろう。

「はあ……提督？」

「陸奥、どうした？」

「あんまり古鷹さんを困らせちゃダメよ。」

「あ!?!いえそんな!!私は大丈夫ですから!!」

「……ん？何か問題でも？」

「古鷹さんはこれを島津提督に報告しなきゃいけないのよ？」

「それは理解しているが？」

「あ……えつと……今の内容は島津提督にはどこまで伝えて良いのでしょうか？」

「全て伝えて構わないが？別に私に隠すべき事はないからな。狐塚提督は知らないが、鹿児島鎮守府からの監視がある事は受け入れて貰えたから問題無い。」

「あ、あはは……分かりました……」

古鷹は何を気にしているのだろうか？陸奥も頭を抱えているが、何を憂いているのかが分からない。島津提督に伝わって困る内容は話していないと思うのだが？

## 205話（コーヒーとプリンツオイゲン）

狐塚提督との通話も終わり一息ついたタイミングで執務室のドアがノックされる。

「提督、コーヒーとお菓子をお持ちしました。」

「入れ。」

「失礼します。」

「しつれーしまーす。」

間宮がお菓子を持って執務室に入って・・・間宮の後ろからプリンツオイゲンが入ってきただど!?なぜよりもよって鹿兒島鎮守府側が探りたがっている奴がコーヒー持ってくるのだ!?素早く陸奥に視線を向けるが、陸奥自身も驚いているようだ・・・これは陸奥にとっても想定外の話なのだろうか？

「Guten Abend Admiral 美味しいコーヒーを淹れてきましたよ♪」

「あ、ああ。」

プリンツオイゲンはニコニコ笑顔で執務室へと入ってきたが、執務室内は混沌とした状況だ。自分は動揺しているし、大淀は指示を求めするようにこちらに視線を向けてくるし、陸奥は間宮に問うような視線を向けて、間宮は申し訳なさそうにしている。古鷹はそんなこちらの状況を察したのか、どこか気まずそうな顔をしている。

「Oh? 皆さんどうかしましたか？」

「・・・いや、なんでもない。大丈夫だ。それより何故プリンツオイゲンがコーヒーを持って来てくれたんだ？」

「Oh? Admiralはご存知無いですか? ドイツと言えばビールとソーセージが有名だけど、ドイツはコーヒー大国なんですよ♪だからAdmiralにも本場ドイツの本格的なコーヒーを飲んで貰おうと思って、間宮さんにコーヒーを淹れる役目を代わって貰いました♪」

「そ、そうか・・・それは楽しみだな。」

察するに陸奥は間宮にコーヒーとお菓子の依頼を出したが、それを

聞きつけたプリンツオイゲンがコーヒーを淹れる役目を是非と言つて、間宮が押し切られたのだろう。

「はい♪是非味わって下さいね♪陸奥さんと古鷹さんもどうぞ♪」

「え、ええ、頂くわ。ありがと。」

「あ、はい。頂きます。」

ひとまずは気持ちを落ち着ける為に渡されたコーヒーに口をつける。

「……………美味しいな。」

「あら？本当にとつても美味しいわ!!」

「はい、すごく美味しいですね!!」

「Hurra♪気に入つて貰えて嬉しいです♪このコーヒーはドイツの伝統的なドリッップ方法のペーパードリッップ式で淹れたんです。ニッポンでもよく知られたドリッップ方法だと思いますが、なんとこの方式を生み出したのはドイツ人なんですよ!!」

プリンツオイゲンが嬉しそうにコーヒーの知識を披露し始めたところで、ようやく自分も落ち着いてくる。しかも陸奥がこちらにリンクをすると、プリンツオイゲンにコーヒーについての質問を始める。どうやら私が今後の対応を考える為の時間稼ぎをしてくれているのだろう。

……………というか落ち着いて考えたらプリンツオイゲンの事を探られても問題ないのではないか？鹿児島鎮守府側としてはプリンツオイゲンがドロップした理由をなんとしても探りたいのだろうが、こちらとしては理由がさっぱり分からない上にやましい事は何も無い。むしろ古鷹の目線をプリンツオイゲンに向けさせておく事で、隠しておきたい他の事から古鷹の目を逸らす事が出来る。

「古鷹さん。」

「は、はい!?!なんででしょうか?」

「プリンツオイゲンは希少な海外艦ですし、なかなか話をする機会は無いですよ。せっかくの機会ですしお話されたり質問してみてもいいがですか?」

「え!?!良いんですか!?!」



「ええ、もちろん構いませんよ。ああ、プリンツオイゲンが嫌がらなければですが。」

「Hurra♪もちろん良いですよ♪いっぱいお喋りしましょう♪」  
それに自分自身もプリンツオイゲンについてはほとんど知らないのだ。この機会にどんな艦だったのか聞いておきたいところだ。

それからしばらくはプリンツオイゲンの名前の由来や戦歴等を語って貰った。自分は日本の軍艦については勉強していたのだが、海外艦についてはほとんど知らなかったので目新しい話ばかりだ。

「ライン演習作戦でイギリス海軍を破り、ツェルベルス作戦で白昼堂々とドーバー海峡を突破か・・・それに艦砲射撃で対地攻撃を行い、ソ連軍の戦車を蹴散らしたとはな・・・物凄い武勲艦だな。」

「それにハンニバル作戦で味方の救出に成功したお話も感動的でした。」

「・・・私としては長門と一緒に原爆の実験に使われてしまった事が悲しいわ・・・それでも2発の原爆に耐えて生き残った強い娘なのね。」

「Danke Danke!!今日は私の事をたくさん知って貰えて嬉しいです♪」

「ドイツ海軍でもずば抜けた武勲を持つ艦であれば、艦娘としてもきつと活躍出来るだろう。今後の活躍に期待している。」

「そ、そんな!?私よりもビスマルク姉様の方が強くてカッコイイですから!?!」

「ビスマルクというと・・・ライン演習作戦の時に出て来た戦艦だったか?」

「はい!!ビスマルク姉様イギリスの強い戦艦を相手に物凄い活躍を見せてくれたんですよ!!私も僚艦として一緒に戦えて光栄でした!!」

「なるほどな。だがここに居るのはビスマルクではなくてプリンツオイゲンだ。だから私はプリンツオイゲンの活躍に期待するぞ。」

「Hurra♪ありがとうございます♪期待に応えられるように頑張っちゃいますよお!!」

しかしまあ、プリンツオイゲンについて探るといふ古鷹が島津提督からの受けているだろう任務を遂行させる為に話をさせてみたが、ついつい自分も聞き入ってしまったな。だが古鷹も満足そうだしひとまずは良しとするか。

「提督、川内さんから通信です。益田鎮守府の艦隊と合流したとの事です。」

「ああ、分かった。代わろう。……葛原だ。」

「あつ、提督？益田鎮守府の艦隊と合流したよ。」

「ああ、とりあえず益田鎮守府の艦隊には予定通り後方で待機して貰う。それで敵はどんな感じだ？」

「うくん？けつこう多そうだけどやれない事はないと思うよ。でも敵もけつこう警戒してる感じがするし、上手くやらないと苦戦するかも？」

ふむ……集積地棲姫も討伐され、長門鎮守府方面と益田鎮守府方面へ出した偵察部隊も壊滅しているのだ。当然警戒しているか。

「そうなると大型艦は奥に引つ込んでいて、水雷戦隊や潜水艦が周囲を警戒していると考えて良いな。」

「うん。それが基本だよな。」

「ならば狙うべきは大型艦ではなくて周囲の小型艦を狙うべきだな。深入りはせずに川内の艦隊と五十鈴の艦隊で的の小型艦を削ろう。」

「それは良いけど金剛達は？」

「最初は戦闘に参加させずに後方待機だ。敵にこちらの戦力を誤認させておきたい。こちらの攻撃に反応して敵小型艦が集まってくるなら一旦引いて、それでも追ってくるなら金剛と合流して返り討ちだ。」

「大型艦も一緒に来たら？」

「その時は思いっきり引いて仕切り直しだな。それでもしつこく追って来るようならば、益田鎮守府の方に引き付けろ。無理矢理益田鎮守府から戦力を出させて戦わせる。」

「うわあ……益田鎮守府を強引に巻き込むとか提督容赦ないねえ……」

「ん？益田鎮守府に容赦する必要があるか？」

少なくとも自分としては、北九州鎮守府の戦力が削られるくらいな

ら、益田鎮守府との関係悪化を選ぶ。だがまあこれは最後の手段だ。北九州鎮守府だけでやれるならそれに越したことはない。

「んー？無いかもだけど、そんな事しなくて良いように頑張るよ。なんて言ったって夜戦だからね♪私に任せてよ♪」

「ああ、期待している。速やかに作戦の準備を整えろ。そして攻撃準備が整うか何か異変があればすぐに連絡しろ。」

「うん任せて♪さあ夜戦だあ!!夜戦だああ!!」

上機嫌な川内との通信を終えてふと回りを見渡すと、艦娘達の顔が引き攣っていた。例外として大淀だけはすまし顔で作戦指揮の用意をしてくれている。

「・・・どうかしたか?」

「U p s !?そろそろ作戦開始みたいですから私はそろそろお部屋に戻りますね〜あはは・・・」

そそくさとプリンツオイゲンが執務室から出て行く。

「えつとその・・・この件も島津提督に報告しても良いのですか? 共闘する相手を裏切るような発言をされてますが・・・」

「ああ、元々お互いに利用しあってるだけだからな。いざと言うときは遠慮なく使うつもりだ。これが信頼出来る相手であれば話が違うのだがな。」

「そ、そうですか・・・分かりました・・・」

「はあ・・・ちよつと提督?」

「どうした陸奥?」

「あんまり性格の悪い事ばかりしてたら、古鷹さんが困るでしょ? さつき注意したのに分かってくれてなかったみたいね・・・」

「・・・ん? 何故だ? もし仮に今回の作戦を実施したからと言って、困るのは狐塚提督だけだろ?」

「はあ・・・古鷹さんはなんとか提督と島津提督の仲を取り持とうと努力してくれてるのよ? こんな提督の人間性を疑われるような事は謹んだ方が良いと思うわ。」

「いや・・・それはどう考えても無理だろ?」

自分と島津提督の相性が最悪なのは実証済みだ。少なくとも自分

としては仲良くする理由は無いらしい、島津提督としても監視役を送り込むからには、仲良くする気など微塵も無いはずだ。

「無理でもやらなきゃいけないの!!古鷹さんは提督と島津提督との板挟みになってるんだから・・・」

「そうか・・・それは気づかなくて悪かったな。だからと言って作戦を変える気はない。私は提督としてお前達の命を預かっている。ならば出来る限りお前達を沈めない方策を考えるべきだ。もちろんどんな作戦にもリスクは付き物だから、それを恐れてばかりいては何も出来ない。だからこそせいざと言う時の事も考えておく必要があるし、手段を選ぶ程の余裕がなければ汚い手も使うべきだと考えている。」

「はあ・・・そう言われたらお姉さんもお手上げよ。私達の事をしっかりと考えてくれてる提督をこれ以上責められないわね。ごめんなさいね古鷹さん。」

「あ、いえそんな!?気にしないで下さい!!艦娘思いの素晴らしい提督でちよつと羨ましいくらいです。」

艦娘思いの提督か・・・自分にそんな事を言われる資格があるのか?あくまでも私の考えは鎮守府の戦力を増強する為のものだ。そんな聖人君子みたいな理由でやっているわけではない。だがここでそんな話をして無駄か・・・そんな事より作戦に集中しなくてはな・・・

## 206話（8日日夜戦開始）

提督との通信を終えた姉さんが益田鎮守府の娘達も含めた全員を集めて提督からの指示を伝達しました。流石に最後の手段として益田鎮守府を強引に巻き込む話はしなかったですが・・・

「という訳で益田鎮守府の艦隊には後方の警戒といざと言う時の為の予備戦力として待機して貰うよ。それで良いかな？」

「狐塚提督からも北九州鎮守府の指示に従うように命令されてるからOKだよ♪那珂ちゃん達あんまり力になれなくてごめんね？」

「良いって良いって、なんか見た感じそっちのメンバーはかなり疲労してる娘いるじゃん？そんな状態で無理したら危ないよ。」

「あー、そうなんだよねえ・・・」

「うゆく今日の狐塚提督は鬼だぴよん・・・」

「いや・・・ほんとにしんど・・・」

「・・・もうやだ、帰りたい。」

那珂ちゃんが率いる益田鎮守府の艦隊ですが、姉さんの言う通り疲労の色が見られて、特に駆逐艦の卯月・望月・初雪はかなり疲労しているようです。こんな状態では予備戦力としても期待は出来なんでしょう。提督が益田鎮守府の艦隊を当てにせずに戦場から遠ざけるのも納得出来ます。

「こんな感じでちよつとねえ・・・ほら皆!!辛い時こそ笑顔だよ!!那珂ちゃんみたいに笑顔で頑張ろ♪」

そんな那珂ちゃんの声掛けにも力無く笑うのが精一杯のようですか・・・もし私が旗艦だったら叱咤して無理矢理にでも気力を振り絞らせるところですが・・・ここは無理をする場面では無いですね。

「まあまあ、うちの提督からも益田鎮守府の艦隊には極力戦わせないようにって言われてるしき。私達に任せてゆっくりしててよ。今夜もあたしは絶対調だから心配しなくて平気だよ♪」

「川内ちゃんありがとう♪やっぱり夜の川内ちゃんはカツコイイね♪」

「川内さんが夜戦大好きで助かるぴよん・・・」

「ここは任せて後ろに行く!!なんてね・・・」

「はぁ・・・疲れ果てた私達の事を考えて後方待機させてくれるなんて、葛原提督はとっても優しい提督なんだね。狐塚提督にも見習って欲しい・・・」

初雪さんの発言に姉さんの笑顔が引き攣る。他の北九州鎮守府の艦娘達も目線を反らしたりと急に挙動不審になった為に、益田鎮守府の娘達が不思議がってしまいました。確かに葛原提督は優秀な指揮官だと思いますが、優しいと言うイメージからはちよつと・・・

「あ、あはは・・・うちの葛原提督は良い提督だとは思うよ?」

「川内ちゃん?」

「いやいやなんでもないなんでもない!!それよりそろそろ作戦行動を開始しよう!!」

「あ、うん。じゃあ夜戦頑張つてね♪」

那珂ちゃん達が離れて行ったのを確認して姉さんが大きなため息を吐く。姉さんがため息吐く姿なんて珍しいですが、那珂ちゃん達に隠し事をしなければいけないかったのが精神的な負荷となつたのでしょうか・・・

「あー、私の艦隊の娘達は私が通信してたのを近くで聞いてたから、予想はついてると思うけど・・・さっきの作戦には続きがあるんだ・・・」  
「ふーん?それって益田鎮守府の艦隊の娘達には聞かせられない話つてわけ?」

「・・・そうだね。あの娘達に聞かせたら不味い話。とりあえず小型艦を狙つて敵の戦力を削る作戦なんだけど、もし仮に序盤で敵が全軍で反撃に出てきた場合なんだけど・・・そのまま敵を引き連れて益田鎮守府に向かえつて命令なんだ・・・」

「はぁ? 私達じゃ手に負えなかつたら益田鎮守府に強引に押し付けるって事? 益田鎮守府の弱腰な態度には五十鈴もイライラしてるけど、それはそれとして気分の良い話じゃないわね。」

「まあまあ、落ち着いてよ。これは最後の手段なんだから、使わない可能性の方が高いからさ。そのために金剛さん達を待機させる事で敵に戦力を誤認させて、全力の迎撃をさせないようにしてるんだから

さ。」

「それは知ってるわ。ただ単に相手に相談もなく強引に巻き込もうって卑劣な発想が気に食わないのよ。金剛さんは同じ旗艦としてどう思ってるのよ？」

イライラした様子の五十鈴さんが金剛さんに話を振ると、金剛さんは少しだけ俯いて考えてから顔を上げた。

「Ah・・・私達の提督は仕方のない人ネ・・・でも私達はそんな提督を信じてついていくって決めたヨ。だから提督から信頼して貰えるように頑張るだけデース。」

「はあ・・・そう。まあここで提督に文句を言ってもどうせ軍属だから命令に従えって言われるだけね。なら作戦を完璧に成功させて、そんな卑怯な手段を使う必要はなかったって言ってるわ。」

「それが良いね♪よおし!!じゃあ待ちに待った夜戦の時間だよ!!しっかりとっついて来てね!!」

「提督、川内さんからももうすぐ接敵するとの事です。敵の総数はおよそ30〜40くらいで、まずは哨戒中の小型艦に奇襲を仕掛けるそうです。」

「ああ、作戦通りに進めてくれ。」

敵の戦力はこちらの倍くらいか・・・これくらいの規模の艦隊ならばおそらく輸送艦や空母も含まれているはずだ。いや、輸送艦は潰したばかりだから居ないかもしれないか・・・どちらにせよ空母の護衛の事も考えるならば、いきなり全軍で反撃することは無いはずだ。

「・・・奇襲成功しました。敵水雷戦隊を一艦隊撃破、潜水艦を二隻撃破。こちらの損害軽微、敵艦隊が集まって来るので一度離脱します。」

「順調な滑り出しだな。」

「すごい順調ですね・・・視界が制限されるはずの夜戦で、ここまで正確に敵の動きが把握出来るだなんて凄いですよ。」

流石に古鷹が川内の索敵能力について疑問を持ち始めたか。別に川内の索敵能力の件がバレたところで問題は無いのだが、わざわざ教

える必要も無いか。

「川内は夜になると調子が良いようですからね。」

「あー、どこの川内さんも一緒ですよねえ。私も夜戦は得意なんですけど、夜戦と言ったらまず川内さんの名前が出てきますよね。」

「どこの川内もそんなものですね。」

流星は夜戦バカで有名な川内だ。夜戦だからで片付けられるのは便利だな。

「川内さんから報告です。敵艦隊が3艦隊ついて来ているようです。このまま金剛さん達が待機しているポイントまで誘き寄せるとの事です。」

「3艦隊か。金剛達と合流すれば数は対等で、こっちには戦艦が四人だ。有利に戦えるはずだからそのまま作戦を継続するように伝えろ。」

「了解しました。」

作戦通りに進んではいるが油断は出来ない。川内が上手くやってくれば良いのだが……

砲撃音が聞こえて少し経ちましたが、そろそろ川内さんがこちらに敵を誘き寄せて来る頃でしょうか？時折響く砲撃音が近付いてきたので、青葉もちよつと緊張しちやいますね。

「金剛お姉様、砲撃音が近付いて来ました。もうすぐ川内さんからの合図があるかと思えます。」

「OK 霧島!!敵は川内達が照らしてくれるヨ!!私達はそこに撃って撃って撃ちまくるデース!!」

「はい!!気合入れて!!撃ちます!!」

「榛名!!全力で参ります!!」

「うち漏らしは私と青葉さんで仕留めますので思いっきりやって下さいね。」

「いざとなったら青葉も探照灯をもってますので、索敵は青葉にお任せです!!」

それにしても今日の金剛さん達はやる気に満ちているというか、な



んだかとおつても頼もしい感じですよ。これも提督と金剛さんが和解決た影響でしょうか？やっぱり艦娘としては提督とは良い関係でいたいものですからね♪

「川内さんからの合図です。敵艦隊は三艦隊ですね。敵艦隊見えまして!!距離、速度良し!!お姉様!!」

「OK!!全砲門!!Fire!!」

川内さんの探照灯によって照らされた敵艦隊に、戦艦四人による全力砲撃が撃ち込まれる。川内さん達を全力で追いかけていたところを横から砲撃されたので、敵艦隊としてはたまったものじゃないでしょうねえ。

「第二射用意!!Fire!!」

最初の斉射で大打撃を受けた敵艦隊にもう一度戦艦からの斉射が撃ち込まれて、ほぼ壊滅状態へと陥る。これで残りは二艦隊・・・相手はどう動くでしょうか？

「金剛お姉様!!敵艦隊が二手に分かれて、こちらに一つ向かって来ます!!」

「OK!!アオバー探照灯を使うネ!!」

「了解です!!」

川内さんがこちらに近付いて来る敵艦隊に探照灯を当てているところ、青葉が探照灯を当てると、川内さんはこちらに任せるように探照灯をもうひとつの艦隊へと向けました。

「第三射!!Fire!!」

金剛さん達の斉射がまた敵艦隊に撃ち込まれて大打撃を与えます。そしてそろそろ青葉と高雄さんの射程距離に入りますね。このまま押し切ってしましましょう♪

## 207話（8日日夜戦決着）

川内さん達からの連絡があつてから、執務室には緊張した雰囲気か漂っています。葛原提督は黙って海図を睨んでいるし、大淀さんは通信を聞き漏らさないように集中しているし、私の案内役の陸奥さんもそんな二人を心配そうに見ている。作戦通りに事が進んでいても、やっぱり仲間が戦っている時は緊張するものですね。

「・・・提督、川内さんから報告です。追つて来た敵艦隊を全て撃破し、こちらの損害軽微。すぐに敵の残存戦力への攻撃許可を求めています。」

「ああ、許可する。」

「了解しました。」

葛原提督が大淀さんと短いやり取りをして、すぐにまた海図を睨んでいます。葛原提督は士官学校に通っている途中で急に抜擢された新人提督だと聞いていましたが、作戦が上手く進んでいても浮かれる様子がなく、かなり落ち着いた雰囲気です。

「あとやり方は任せる。一気に叩け。」

「了解しました。」

「え!？」

「・・・古鷹さん。どうかしましたか?」

驚いて思わず声がけ出てしまいました・・・ちよつとご迷惑になつてしまったかな・・・葛原提督がこつちを睨んでるけどなんて言おうかな・・・

「あつ、すみません。作戦を現場任せにした事が意外だったのでいい・・・」

「なるほど。これは私の持論ですが、作戦前は情報収集をしっかりと行い、作戦を考えて命令を下すべきだと思います。しかし戦闘が始まったら指揮官の指示は早く簡潔であるべきだと考えていますし、現場の艦娘達が判断出来る事は任せて経験を積ませるべきだと思います。」

「な、なるほど。」

なんとというか葛原提督はちよつと冷たい印象があつたというか警戒心が強いというか・・・事前調査でも優秀だが我の強い人物だとの評価だったので、艦娘達を信じて任せるって事をするのは意外でした。

「ん？なにか間違つていますか？深海棲艦の上位種が通信妨害や通信傍受をする可能性がある事は、古鷹さんもご存知でしょう？」

「あつ、はい。」

「であれば艦隊に指示が出せない状況は想定しておくべきでしょう？対応するには艦娘達自身が判断する必要があります。ならば余裕がある時に経験を積ませるべきだと思いますが？」

「そ、そう思います。」

「はいはいストップ。提督落ち着いて。古鷹さんは一言も悪いなんて言つてないでしょ？戦闘中でピリピリするのは分かるけど、熱くなりすぎよ。」

「ん・・・ああ、すまない。」

陸奥さんが庇つてくれて助かりました・・・葛原提督の目が凄く怖かったです・・・でもなんというか熱くなるってよりは凍てつくような雰囲気というか、とにかくこちらと壁を作っているように感じました・・・

「まったくもう・・・ごめんなさいね古鷹さん。提督も今日はちよつとピリピリしてるみたいで・・・」

「いえ、そんな!!こちらこそ作戦行動中に余計な事を言つてしまいましたから・・・」

「いや、すまないな。監視されてると思うとどうしても気を張つてしまふのでな・・・」

「あ、あはは・・・お気持ちは理解出来るのであまり気になさらないで下さいね。」

うーん、やっぱり気不味い・・・陸奥さんが居てくれて本当に助かった・・・

「提督、川内さんから敵艦隊が逃亡しているので、追撃を仕掛けるこの事です。」

「ほう？決戦ではなく逃亡を選んだか。先程の戦闘でもそうだが、敵は本能に任せて暴れるだけの能無しではないか。やはりそれなりの知能と統率力を持った上位個体がいるようだな。」

「それは間違いありませんね。」

「ならあとは川内達のお手並み拝見だな。」

「……葛原提督はここまで読んだ上で作戦を立案したのでしょうか？益田鎮守府と共同で索敵をした結果からは、敵艦隊の規模の予測は難しいはずでした。それなのに適切な戦力を向かわせて、敵の一部を誘い出して撃破して有利な状況を作った。そして逃げる敵を背後から襲うのであれば、また損害が少なくて勝利出来るはずです。どこまでが葛原提督の手の上なのでしょう？この人は本当に新人の提督なのでしょうか？」

提督の作戦通りに進めたらすつごく上手くいって、今日はずっとも楽しい夜戦だよ♪しかも追撃戦は私の自由にさせてくれるし最高だね♪よおーし!!提督の期待に応えて最高の夜戦だったよって報告しなきゃね!!

「ん!?敵が足止め部隊を出して来た!」

しかも足止め部隊に戦艦2隻を使う大盤振る舞い。深海棲艦の旗艦はなんとしても逃げ延びたいんだね。

「金剛さん達はこのまま正面の敵を叩いて!!五十鈴達はその援護!!私の艦隊は迂回して敵の旗艦を仕留めに行くよ!!」

「OK センダーイ!!任せてヨ!!」

「ここは旗艦は譲ってあげるからさっさと仕留めて来なさい。モタモタしてたら五十鈴が仕留めるからね。」

「うん、ありがとう!!ここは任せたよ!!」

これで正面の敵艦隊は潰せるはずだから、あとは敵の旗艦を逃さないようにしなきゃね。幸い敵の旗艦は空母みたいだから速度は私達が上だ。

「……見えた。敵はヲ級eliteにヌ級eliteが2隻、ル級1隻にホ級eliteが2隻。夜戦で空母が無力化してるから

十分勝機はある。」

皆に敵の情報共有してから静かに敵艦隊へと近付いていく。敵には戦艦がいるから射程では負けてる。だから気付かれないうちにどこまで近付けるかが勝負だ。そして相手が警戒しているであろう真後ろから近付くのではなくて、斜め後ろから横に並ぶように距離を詰めていく・・・ハンドサインで北上と大井にル級を狙うように指示を出して、他の四人でホ級eliteを叩く。空母の相手はその後からでも遅くはない。

「攻撃開始!!」

こちらの砲撃が届く距離まで近付いてから探照灯を使って敵を照らす。奇襲は成功したものの砲撃ではル級にあまりダメージは与えないか・・・やっぱり雷撃を当てないと無理だね。ホ級eliteにはダメージを与える事に成功したけど、轟沈させるには至らない。しかも元から警戒していたからか立ち直りも早い。

「敵の砲撃が来るよ!!各自散開しながら近づいて雷撃を撃ち込むよ!!  
島風と雪風は先行して攪乱を!!」

「私のスピードの出番だね!!私には誰も追いつけないよ!!」

「はい!!頑張ります!!」

敵が探照灯を持つてる私を目掛けて斉射してきたけれど、余裕で回避することに成功する。それに散開していたおかげで誰かが流れ弾に当たる事も無い。この前の戦艦棲姫とかいうヤバい奴の砲撃はこんなに生温くなかったよ!!

「神通!!私達でホ級を仕留めるよ!!」

「はい姉さん!!」

こっちの奇襲で手傷を負わせていたホ級eliteに止めを刺すように砲撃を仕掛ける。

「なっ!?!」

「くっ・・・防がれましたか・・・」

ホ級eliteに向けられた私達の砲撃は、庇うように飛び出して来た又級elite達によって防がれる。本来守られるべき存在である空母が弾受けをするなんて・・・敵もいよいよなりふり構っていない

られないみたい・・・でも逆に言えばそれだけ追い込んでいるんだ!!  
「にひひっ あなたたって遅いのね!!」

「雪風は・・・沈むわけにはいきませんっ!!」

先行した島風と雪風が横からホ級eliteを攻撃して片方を沈める。これには流石に敵艦隊は探照灯を持つてる私よりも島風達に意識を向ける。今のうちにもつと近付かないと!!

「あうっ!!? 痛いっばあっ!!」

「島風ちゃん!?雪風は・・・誰も沈ませません!!」

雪風が被弾した島風を守るように前に出てホ級eliteへと砲撃をする。しかしまた壁になるように又級elite達が前に出て・・・

「隙あり!!」

「島風さんと雪風さんの努力は無駄にはしません!!」

こちらへの意識が薄くなった事を良い事に、私と神通で砲撃を加えて残っていたホ級eliteを沈める。これでは!!行くよ大井っち!!

「ギツタギツタにしてあげましょうかね!!行くよ大井っち!!」

「はい!!九三式酸素魚雷やっちゃってよ!!」

どさくさに紛れて近付いていた北上達が、敵艦隊を魚雷の射程距離圏内におさめている。そして動きの遅い空母や戦艦では北上達の魚雷からは逃げられない。さらに追い打ちとばかりに先行していた雪風も別方向から魚雷を撃ち込む。盛大な水飛沫が上がった。

「提督、川内さんから通信です。」

「ああ、代わろう。・・・川内か、状況を報告してくれ。」

「あ、提督・・・その・・・敵艦隊は殲滅したよ。」

ん? 敵艦隊を殲滅したというのに、どうにも川内の様子がおかしい・・・まさかこちらの損害が・・・轟沈した者が出たのか!!  
「・・・川内、こちらの損害は?」

「あ、それは大丈夫。金剛さん霧島さん島風が中破、五十鈴と漣と曙が小破。それくらいで済んだよ。」

「ほう? 想定以上に被害が抑えられたな。全員良くやってくれた。」

「えへへ♪提督の作戦が良かったからね♪最高の夜戦だったよ♪」

ふむ、川内の様子がおかしいかと思っただが、どうやら杞憂だったみたいだな。作戦通りに事が進んだとは言え、敵との戦力差を考えれば大金星だ。

「では周囲に敵がいなさそうなら帰還しろ。警戒は怠るなよ。」

「あつうん。じゃあすぐに帰還するんだけど・・・その前にね・・・落ち着いて聞いて欲しいんだけど・・・」

「・・・なんだ？」

「ドロップ艦が出現したから保護したんだけど・・・」

「ほう、ドロップ艦が現れたか。それで？」

「海外の艦娘みたい・・・それも二人も・・・」

「・・・海外艦？二人も？・・・どうやら私はかなり疲れているようだ・・・そんなあり得ない聞き間違いをしようとは・・・」

「・・・すまない川内。どうにもよく聞き取れなかったようだ。もう一度言ってくれるか？」

「あ、うん。ドロップ艦として海外の艦娘が二人出てきたんだ・・・」

「・・・そうか。」

どうしてこんなに厄介事ばかり転がり込んで来るのだろうか？もし神などと言う存在がいるのであれば、私は物凄く嫌われているのだろうか・・・

## 208話（海外艦挨拶、島津提督との口論）

それにしても海外艦が二人か・・・この海域は本当にどうなっているんだ？横須賀鎮守府が掃討をした範囲では、海外艦が出現したなどとは聞いていない。それに戦艦棲姫を討伐した時であれば、姫級という非常に強力な個体を倒したからだと納得も出来る。しかし今回倒した奴らは自分達にとって充分強敵ではあるが、姫級などと比べれば遥かに格下だ。それなのに希少な海外艦が二人も出てくるなんて明らかな異常だ。

「て、提督？聞こえてる？」

「ん、ああすまない。少し考え事をしていた。」

「あーだよねえ・・・とりあえず二人共提督に挨拶したいって言ってるんだけど？」

「わかった、代わってくれ。」

さて、どんな艦娘が来るのやら・・・せめて真面目で扱い易い艦娘が来てくれれば・・・

「Guten Tag 私はビスマルク型戦艦のネームシップ、ビスマルク。よおく覚えておくのよ。」

「ビスマルクだど!?ライン演習作戦でイギリス海軍を破ったという、ドイツの戦艦ビスマルクか!？」

「ええそうよ。ドイツの誇るビスマルク級超弩級戦艦のネームシップ、それがこの私よ。Admiralもよく勉強してるようね。でもこんな極東の地にまで名前が伝わっているなんて、流石は私って何かしら？」

「ああ、プリンツオイゲンから話を聞いていたのだな。」

「へー、あの娘が居るの？それは都合が良いわね。」

「ああ、同郷のものが居た方がプリンツオイゲンも喜ぶだろう。ビスマルクの事をかなり慕っていたしな。おっと、挨拶がまだだったな。北九州鎮守府所属の葛原だ。これからよろしく頼む。」

「ええ、この私力が貸してあげるわ。じゃあもう一人に代わるわ。」

ふむ、話した感じからはなんとなくプライドの高さを感じる。これ



は事前にプリンツオイゲンから話を聞いていても運が良かった。なんとなくだかもしビスマルクの名前を自分が知らなかったら、変な揉め事の原因になっていた気がする。

「How is everybody? あたしは、Atlanta級防空巡洋艦、Atlanta。Brooklyn生まれ。貴方、提督さん? よろしくね。」

「ああ、北九州鎮守府所属の葛原だ。えっとアトランタで良いのか?」  
「そうAtlanta、アメリカの巡洋艦だよ。」

「ああ、よろしく頼む。」

「Ah...それで悪いんだけど早く鎮守府に案内して貰えないかな? 夜の海はなんか落ち着かなくてさ...近くに日本の駆逐艦居るし...」  
「夜と日本の駆逐艦が苦手なのか?」

「Ah...艦の記憶ってやつかな...」

軍艦時代の記憶か...ドイツは第二次世界大戦時に日本の同盟国だったが、アメリカは日本の敵国だった。となれば艦娘としてもそういう因縁に悩まされそうだ。個人的には戦力として使えて命令に従うならそれで充分なのだがな...

「そうか...では川内にすぐに帰還するように伝えてくれ。」

「All right 助かるよ。」

そう言い残して通信は終わった。さて...ここからどうしたものか...

「あ、あのお...」

「古鷹さん、どうされましたか?」

「その...海外艦が二人ドロップしたと聞いてしまったのですが...」  
同じ部屋で自分の監視をしていたのだ。当然状況はある程度理解しているだろう。はあ...どうせ大本営に報告はしなくてはならないし、古鷹には島津提督の命令が優先される以上口止めは無駄だ。ただでさえ島津提督からの印象は悪いが、下手に隠そうとすれば余計に怪しまれるか。

「はい、物凄く驚く事に海外艦が二人もドロップしました。正直に言えばこういう事で目立つのは勘弁して欲しいのですがね...」

「あはは・・・葛原提督も苦勞されてますね・・・それでその・・・島津提督への報告をしても良いですか？」

「ええ、それが古鷹さんのお仕事ですから。私としてはなに一つ隠すつもりはありません。」

「分かりました。それでは部屋の隅で通信をしても良いでしょうか？」

「ええ、ご自由に。」

どうせ島津提督がどんな手を使ったなどと問い詰めて来るだろうが、こちらとしてはどうしようもない。もちろん島津提督だけで済むなんて事はあり得ない。そして何故海外艦がドロップしたのか全く分からないので、交渉の材料にも使えない。そしてどこかの鎮守府へ移籍させるのもまた派閥争いを激化させるだけだ。派閥同士で勝手に争う分には知ったことでは無いが、巻き込まれるのは勘弁だ。

「提督、狐塚提督から通信です。」

「・・・ああ、代わろう。・・・葛原です。」

「狐塚だ。戦鬪が終わったようだな。」

「ええ、連絡が遅くなって申し訳ありません。敵の主力艦隊を含め、全ての敵を殲滅しました。これより北九州鎮守府の艦隊は帰還させます。」

「うむ、見事な手腕だった。流石は士官学校で優秀な成績を修めた葛原提督だ。」

「お褒めにあずかり光榮です。機会があればまたご助力頂ければ幸いです。ではこれで。」

「ああ、待ってくれ。ドロップ艦なのだが・・・海外艦が二人もドロップしたと言うのは本当か？」

ちっ・・・流石にその話題に触れない訳にはいかないか・・・おそらく現場に居た益田鎮守府の艦娘達が嗅ぎつけたのだろう。戦鬪中は距離をとって貰っていたが、戦鬪が終わって海外艦で驚いている北九州鎮守府の艦隊へと近づいたとかだろうか。

「ええ、非常に珍しい事ですが、二人同時にドロップしました。この件はきちんと大本営に報告致しますので、すぐに皆さんの耳に入るか

と。」

「そうか……ダメもとで聞くが益田鎮守府も協力したので一人わけて貰う事は？」

「開戦前にはつきりとドロップ艦は北九州鎮守府が貰い受けると明言したはずですよ。軍用回線での通話ですから記録もきちんと残してあります。」

「ぐっ……だが海外艦はトラブルの種にしかないぞ？舞鶴鎮守府側に一人、呉鎮守府側に一人渡した方がバランスも取れると思うが？」

「そんな事をすれば佐世保側と横須賀側から抗議されるのが目に見えています。」

「熊井提督も海原提督もそんな真似はしないはずだ。」

「トップの二人はしないでしょうね。ですが傘下の者達は別です。プリンツオイゲンの時は佐世保も横須賀も傘下の者達が動いています。ただでさえ面倒な状況だというのに、さらに刺激するメリットがありません。」

まあ、呉と舞鶴に一人ずつ渡せば呉と舞鶴からは文句が出なくなるはずだから、メリットが無いとは言えないのだが……艦娘を売り渡すのは印象が悪すぎる。艦娘の移籍は大本営が認めているが、ドロップした艦娘を厄介払いのように移籍させれば要らぬ誤解を生む。特に北九州鎮守府の艦娘達は大森提督によって売られた過去を持つのだ。艦娘の移籍に関して過剰に反応するのは目に見えている。

「ぐ……分かった。最後に聞いておくが、お前は海外艦がドロップすると最初から知っていたのか？私の艦隊を遠ざけたのもドロップ艦を独り占めする為だったのではないのか？」

「もし知っていれば手は出さなかつたですよ。誰が好き好んでこんな面倒な状況になるのと知って首を突つ込むのですか……それと益田鎮守府の艦隊を戦場から遠ざけたのは、狐塚提督が深海棲艦の討伐に消極的だと感じたからです。信用出来ない味方と共闘するよりは自分達だけでやった方が良いと判断しました。なにか反論でもありませんか？」

「ぐ……いや、ない……」

「ではこれで失礼します。」

一方的に通信を切ったが、狐塚提督もこれ以上話す事は無いだろう。これ以上は時間の無駄だ。

「あ、あの……」

「古鷹さん、どうしましたか？」

「島津提督が葛原提督と通信をさせろと……」

はあ……厄介事の始まりだ……

「……仕方ない。……北九州鎮守府の葛原です。どのようなご要件で？」

「海外艦の話に決まっているだろうが!?希少な海外艦が2隻もドロップしただと!?嘘ではないのか!？」

「確かに信じ難い事です。先程二人と通信で話をしましたが、ドイツとアメリカの艦娘とのことです。」

「貴様!?いったいどんな手を使った!?この短期間で3隻もドロップするなど異常だぞ!？」

「異常事態なのは同感です私には全く心当たりが無いので、困惑しているところです。」

「とぼける気か貴様!？」

「状況からして疑われるのは百も承知です。ですが私としては心当たりが無いとしか言いようがありません。今から大本営へ詳しい報告をしますが、その報告以上の情報はありませんと申ししか無いのが現状です。」

まあ、こう言ったところで信用されるとは露ほども思っていないがな。

「つまりわしに秘密を教える気はないのだな？」

「今回の件に関しては秘密など無いのですが、言うだけ無駄でしょうね。それともこの場で適当な話をでっち上げれば満足して貰えますか?。」

「ふざけているのか貴様は!？」

「どうせ何を言っても信じないでしょうと言っているのです。であれ

ばこれ以上の会話は無駄です。それと監視として送られて来た古鷹さんですが、戦闘が終了しましたのでそちらに戻って頂きます。構いませんね?」

「馬鹿を言うな!? 貴様が怪しい以上監視は必要に決まっているだろうが!」

「島津提督の考えなどこちらには関係ありません。古鷹さんが監視に来たのは、北九州鎮守府が鹿児島鎮守府との演習を断る正当な理由がある事を証明するためです。だからこれ以上監視を受け続ける理由がありません。」

「だが貴様が不正をしている事は明らかだ!! ならばそれを追求する必要がある!!」

こいつは何を思い上がっているのだ?

「島津提督、あなたになんの権限があつてそんな発言をされるのですか? あなたは憲兵隊でも大本営の人間でもないただの提督ですよ? これ以上は鎮守府の自治権の侵害として、大本営と佐世保鎮守府に正式に抗議しますがよろしいですか?」

「貴様あああ!?! いか絶対! 貴様の悪事を暴いてやるからな!! 覚えておけ!!」

「記憶力は良い方です。島津提督が私に敵対的だと言う事は忘れませんよ。それでは失礼します。」

通信を終えて顔を上げると古鷹が泣きそうな表情をしていて、その隣で陸奥が頭を抱えている。

「いや、この状況で良好な関係を築くのは無理があるだろう? 私は海外艦をドロップさせる為の方法なんぞ知らないのだぞ?」

「そうね... 島津提督にも問題があるから、これで提督だけを責めるのは酷な話よね...」

「島津提督がご迷惑をおかけしてしまい申し訳ございません...」  
「別に古鷹さんが謝る事ではないですよ。とは言え監視の任務はこれで切り上げて頂きます。追いつくような形になるのは申し訳無いですがご理解下さい。」

「はい、分かりました。本日は作戦指揮の見学を受け入れて頂きあり

がとうございました。」

「いえ、古鷹さんもお仕事が大変でしょうが頑張ってください。陸奥、案内してください。」

「分かったわ。古鷹さん、行きましょう。」

これでひとまず鹿児島鎮守府との問題は片付いた。明日の演習がどうなるかはまた後で考えるとしよう。きっとそれどころではなくなるだろうがな・・・

## 2009話（人事部中井さん）

古鷹を送り出してもまだやる事はある。正直面倒な事になるのは目に見えてるが、どうせ避けられない話だ。

「大淀、大本営に通信を繋げてくれ。」

「了解しました。……人事部の中井さんが対応されるそうです。」

「ああ、わかった。それと少し席を外して貰えるか？」

「あ、はい。部屋の外で待機していますので、終わったらまたお呼び下さい。」

大本営相手にはあまり人には知られたくない手を使うつもりだ。

まあ、軍用回線で記録が残るので小細工程度しか出来ないがな。

「……北九州鎮守府所属の葛原です。」

「人事部の中井だ。こんな忙しい時になんの用だ？」

ほう？かなり夜遅いにも関わらずまだ仕事をしているのか？そう言えば朔真が大本営側は謝罪会見の件で久藤提督と鶴野提督から睨まれたと言っていたな。その対応に追われていると言ったところか？

「益田鎮守府付近に居た深海棲艦を討伐しましたので、その報告をと。」

「そんな事でわざわざ通信してくるな!!報告書の提出でもすれば充分だろうが!!なんだ？貴様は自分の戦果自慢でもしたかったのか？」

「いえ、戦闘後に海外艦が2人ドロップしたので大本営に報告をと思いましたが、余計な事だったようですね。これは失礼致しました。では私はこれで。」

「……待て待て待て!?海外艦がまたドロップしただと!?今度は2隻もか!?!」

「ええ、ドイツ出身のビスマルクとアメリカ出身のアトランタの2人です。」

「いったいどんな手を使ったんだ!?!」

「それが心当たりが全く無いので困っているのですよ。ここ最近の軍事行動の報告は既に送っていますし、今回の分もすぐに送るつもりで

す。ですがそれ以外に参考になりそうなものが無いのも事実です。」  
「馬鹿な事を言うな!!そんな簡単に海外艦がドロップするわけ無い!!  
何か心当たりがあるはずだ!!」

まあ、想定通りの反応だな。では予定通りに小細工を仕掛けるとするか。

「そうですね・・・心当たりと言う訳ではありませんが仮説は2つ立てています。」

「言ってみろ。」

「まずは海域の方に異常が発生している場合です。こちらは今後調査をするしか無いので、私からは特別な事は言えません。」

「もう一つは北九州鎮守府になにか細工がされている場合です。これに関しては私に心当たりが無い以上、別の人間が細工したと考える良いでしょう。」

「別の人間だと!?!前任者の大森提督が何かしたと言いたいのか?」

「可能性はあるかと。一応もう一人候補がいますが。」

「・・・誰だ?」

「その前に以前憲兵隊の黒川さんに大森提督の暗殺についての仮説を伝えたのですが、中井さんはご存知でしょうか?」

「仮説・・・大森提督を殺害したのは艦娘でも深海棲艦でもなく、提督の才能を持った人間かもしれないというあれか!?!」

「ええ、その仮説です。」

この話は大本営から前任者の大森提督暗殺の犯人を特定するようにと命令され、その催促が面倒なのででっち上げた仮説だ。結局あのあと大淀を問い詰めて春雨が自白したのでこの仮説は完全にデータメなのだが、せっかく大本営の捜査を春雨から遠ざけるチャンスだ。利用しない手は無い。

「まさかその犯人が!?!いや、だがなんの為に!?!」

「これも仮説に過ぎませんが、大森提督と犯人はそれなりに仲が良く共に海外艦を出現させる為の研究をしていた、もしくは大森提督の研究に出資をしていたのではないのでしょうか?それか大森提督の方が出資者で犯人が北九州鎮守府を使って実験していた可能性もありま



す。それで大森提督が犯人を裏切って研究成果を独占しようとした  
め、犯人が大森提督を殺したという事が考えられます。」

「あの大森提督がそんな研究を!?だが証拠品として抑えた書類などに  
はそんな記述はなかったぞ!」

「そうでしょうね。犯人が大森提督の研究成果が目的ならば、資料は  
すでに確保しているはずです。殺害した当日に奪ったかもしれない  
し、大森提督殺害事件の調査として入った時かもしれないし、隠し通  
路から侵入して事を済ませた可能性もあります。」

「あり得ない……とは言えないな……そしてその研究成果が  
今頃現れたと……」

「ええ、そういう事です。」

「信じ難い話だが……筋は通っている……」

そうだろうか?自分で言うのもなんだが、自分の望むドロップ艦を  
手に入れる研究と言う時点で怪しい。しかも誰も見た事の無い海外  
艦の艦娘をどうやって選ぶと言うのだ?それに何故ドロップ現象が  
起きるかも理解していないのに、その操作なんて夢のまた夢だろう。  
さらに言えばドロップ艦は深海棲艦を倒した時に出てくるものなの  
だ。それが鎮守府への細工でどうこうなると考えるのは不自然だ。

「ちなみに大本営での捜査で何かしら手がかりは掴んでいるのですか  
? 私には他の提督を調べる権限がないのでこれ以上の捜査は難しい  
とお伝えしたはずですが?」

「馬鹿を言うな!!これだけの難事件だ!!捜査がたった数日で進む訳が  
ないだろうか!!」

「そうですね。残念です。」

こつちにはそのたった数日で犯人を見つけられたのかと催促して  
きたくせに、随分悠長な事を言うものだ。まあ、真犯人の春雨を見つ  
けられたら本当に困るので、ずっと変わらず迷走し続けて貰いたいも  
のだが。

「それで、この話を知る者は?」

「少なくとも私は黒川さんにしか伝えていません。誰が犯人なのかわ  
からないのですよ?安易に情報を流せば犯人に警戒されたり、証拠の

隠滅をされる危険があるのです。こんな事を軽々しく口には出来ません。」

「・・・そうだな。悪くない判断だ。」

「ですからこの海外艦がドロップする異常事態についても、私は他の提督達から追求されても、知らぬ存ぜぬを突き通さなくてははいけません。もちろんここ最近の軍事行動の記録などは、大本営経由で開示して貰って構いません。逆にそこを隠してしまえばこちらが何か隠しているという疑いが強くなる。ですがそれ以上の情報を提供するつもりはありませんが構いませんね?」

「分かった。だが貴様は鎮守府内に怪しいものが無いかしつかりと調べて報告しろ。わかったな?」

「ええ、了解しました。ではこれで失礼します。」

ふう・・・上手く騙せたな。そもそも今回の件は海域の異常の方があり得る話だ。にも関わらず大森提督殺害の件との関連を臆わせるだけで、ここまで都合良く勘違いしてくれるとはな。とにかくこれで今回のドロップ艦の件で大本営からの圧力は減るはずだ。そして北九州鎮守府を調べたいと考える提督達への牽制にも繋がる。鶴野提督や久藤提督あたりが大本営からの命令で北九州鎮守府を調べるといふ状況を作りかねなかったが、これでその企みを事前に潰す事が出来た。

さて、これで仕込みは終わったし次の動きを始める為に大淀を呼ぶか。執務室から出ると執務室から離れた位置で大淀と陸奥が立っていた。これならば盗み聞きの心配も無さそうだな。

「大淀、待たせたな。執務室に戻ってくれ。それと陸奥はどうした?」  
「古鷹さんを送ったから戻って来たのよ。そうしたら大淀さんが執務室前に居たから、事情を聞いて一緒に待ってたの。」

「なるほど。であれば陸奥にもまだ手伝って欲しいのだが構わないか?」

「ええ、もちろん良いけれど何をしたら良いの?」

「陸奥には出撃している艦隊が戻ってくるまで、艦隊との通信を担当して欲しい。大淀には別件で動いて貰う必要がある。」

「分かったわ。」

「では私はなにをすれば良いのでしょうか？」

「急な話ではあるが、明日の朝に記者達を集めて海外艦三人のお披露目をしたい。会場の手配と新聞各社に通知をして貰いたい。」

そう伝えると大淀も陸奥も物凄く驚いた表情になる。

「それは構いませんが・・・本当によろしいのでしょうか？かなり大事になるかと思いますが・・・」

「それに提督って記者とかが嫌いなイメージがあっただけけど・・・謝罪会見をさせられた時かなり警戒していたと思うのだけど？」

「ああ、それは理解している。だがそのデメリットを受け入れてもやっておきたい事がある。」

「ふくん？また何か悪巧みしているのかしら？」

「悪巧みとは失礼な。ドロップ艦達を他所の鎮守府に奪われないうの小細工をするためだ。海外艦の情報というエサを使ってでも記者達を集めたいだけだ。」

「ふふっ♪私達の仲間を守るためなのね♪ならちよつと悪い事しても目を瞑ってあげるわ♪」

「そうしてくれ。大淀、会場は出来ればこの前会見で使った場所が良い。これも綾瀬さんに確認をとってくれるか？」

「はい!!お任せ下さい!!」

これでひとまずの仕込みは良いだろう。あとは大本営から情報を聞いた奴らがどう動いてくるかだな。

## 210話（鶴野提督、久藤提督）

中井さんとの通信を終えて大淀に明日の準備をさせていたが、いきなり大淀の手が止まった。これは通信が入ったようだな。

「提督、舞鶴鎮守府の鶴野提督から通信です。」

「はあ……まあ、当然動くよな……北九州鎮守府の葛原です。」

「舞鶴の鶴野じゃ。要件は分かっているじやろう？」

「ある程度予測は出来ませんが、誤解を防ぐ為にも要件は明確にしてください。」

「貴様がまた海外艦を手に入れたというのは事実か？それも2隻も手に入れたと聞いたが？」

「ええ、間違いありません。」

「ふむ……で、どのような手段を使った？」

「作戦行動に関しては現在大本営への報告書を作成しているところです。後日大本営へ請求していただければ詳細が確認出来ると思います。」

「貴様しらばつくれるつもりか？」

「しらばつくれるものにも私から出せる情報はその程度のもんです。」

しばらく沈黙が続くが自分から出せる情報など本当にその程度しかないからな……もし仮に何か情報を持っていたとして、鶴野提督にわざわざ教えるかと問われればまた話は別なのだが。

「とりあえず貴様はわしに協力する気が一切無いと言う事じゃな？まあ貴様は久藤の若造に尻尾を振っておるから当然の反応ではあるのう。」

「私は久藤提督の傘下になんぞ入ったつもりはありません。久藤提督の事は取引が出来る相手だとは考えていますが。」

「ふん、白々しいのう。まあいい、そろそろ本題にうつるとしよう。察しはついておると思うが、今回の作戦は益田鎮守府の協力があつてこそのもものじゃ。ドロップ艦を北九州鎮守府だけで独占というのは、ちいとばかり虫が良すぎると思わんか？」

「思いません。その件は私と狐塚提督ですでに話がついています。そ

こを蒸し返そうとする方が虫が良すぎると思いますが?」

「わしにも狐塚の奴にもメンツというものがある。この話に応じないのであれば、こちらもそれ相応の対応をせねばならんのか?」

「はあ・・・そういう事を鶴野提督から言われたら、私としては不本意ながら久藤提督と交渉をするしか手が無くなるのですよ。私が久藤提督の派閥だと勘違いされる原因は鶴野提督にあるのですよ?」

まあ、当然他にも抗う為の手札は用意するつもりだ。久藤提督に借りを作るのはリスクがあるので、出来る限り使いたくない手だ。

「ならば四大鎮守府のどの派閥にも参加せず、それぞれから甘い汁を吸おうとするのをやめるんじや。中途半端な奴は目障りじや。中立を気取って調子に乗っているようじやが、中立とは全員の味方ではなくて全員の敵だと言う事は理解しておるか?」

「ははは、鶴野提督は御冗談が得意なのですな。」

「何が冗談か!!」

「いえ、私ほど周囲が敵だらけだと考えている人間もそういないと思いますよ?そんな人間にお前は敵に囲まれているぞと言われても、もちろんそのつもりですとしか言えませんよ。」

「つまり四大鎮守府全てを敵に回す覚悟があると言う事じやな?」

「ええ、派閥争いをするならばですがね。少なくとも軍事的に必要があれば協力するつもりですし、こちらにちよつかいを出して来ない相手に手を出すつもりはありませんよ?そんな余裕ありませんから。」

・・・今はだがな。

「よかろう。最後に確認じやが今回手に入れた海外艦を譲るつもりはないのじやな?」

「ええ、誰にも渡すつもりはありません。」

「そうか。では好きにしろ。」

そう言つて鶴野提督は通信を切った。好きにしろとは言われたものの、この程度で鶴野提督が引くとは思えない。潰してやるからそれまで勝手にしろと言われたと考えておこう。

「提督、お疲れのところ申し訳ございませんが、先程久藤提督から通信がありまして、手が空き次第折り返せとの事ですが・・・」

「わかった。すぐに繋いでくれ。」

久藤提督も耳が早いものだ。大方大本営から情報が渡ったのだろう。

「了解しました。．．．．．どうぞ。」

「北九州鎮守府の葛原です。」

「おう、呉の久藤だ。お前のところで海外艦が2隻もドロップしたそうじゃねえか？」

「ええ、想定外の事態で頭を悩ませているところです。」

「だろうな。一応確認しておくが、新しく手に入れた海外艦を売るつもりはあるか？」

「いえ、プリンツオイゲンの時にもお伝えしましたが、私は艦娘を売るつもりはありません。これは久藤提督に対してだけでなく、他の提督が相手でもです。」

「なら次だ。海外艦を手に入れる方法を売るつもりはあるか？もちろんこれも高く買うぞ？」

艦娘の売買に関しては前回同様にあっさり引いたな。そして情報を寄越せではなくて売ってくれか。島津提督や鶴野提督よりもずいぶんと理性的だな。

「申し訳無いですがそれも無理です。」

「ほう？理由はなんだ？」

「自分でも海外艦がドロップした理由がわからないからです。プリンツオイゲンの時は戦艦棲姫という大物を撃破したので、幸運だとは思いますが納得出来ません。しかし今回の相手はル級やヲ級、それもelite程度の個体でした。それで二人も海外艦がドロップするなんて訳がわかりません。そして売れる情報が無いのに交渉は出来ません。」

「ほほう？偽の情報すら売らないか。」

「ええ、私と久藤提督は交渉の出来る節度ある敵対関係だと思っっています。であるからこそ交渉の内容で嘘をつくのは避けたいところです。そんな事をすれば交渉すらも出来なくなりますからね。」

「確かに交渉の場に下手な嘘は良くねえな。こつちもお前の言う事を

鵜呑みにするつもりはねえが、お前なりの誠実な対応だと受け取っておこう。裏切る時までには節度ある敵対関係つてのを維持しようじゃねえか。」

ふむ。ずいぶんと聞き分けのいい事だ。こちらとしては圧力をかけられたところで何も情報を出す事が出来ないので助かるが、久藤提督はやけに落ち着いているのが気になるところだ。

「ああ、もちろんここ最近の戦闘記録などは大本営に提出しますし、それが自分が出せる情報の全てですね。」

「いや、まだ海外艦についての情報を聞いてねえな。どんな艦がドロップしたんだ？」

どうせ明日の朝にお披露目するのだから、ここで隠すメリットは無いな。

「ドイツの戦艦ビスマルクとアメリカの巡洋艦アトランタですね。性能や戦歴などは流石にまだ把握していません。」

「まあ、まだゆっくり話をする時間も性能試験をする余裕もねえか。また後で情報が欲しいとこだな。」

「とりあえず明日にプリンツオイゲンも含めた海外艦三人のお披露目をしようと考えていて、今は会場の手配や記者達への告知をしているところです。戦歴などはその時に語らせる事になると思います。性能試験の結果については大本営に報告する予定ですので、そちらから情報を引っ張って下さい。」

「ほう？海外艦を公開するのか。意外だな。お前は記者達に囲まれるのは嫌いだと思っていたが、大本営にでも命令されたか？」

「いえ、私自身の意志です。確かに記者達が集まる事には辟易としますが、必要がある事ならばやりますよ。」

「ほほう？何か企んでるってわけだな。まあいい、とりあえず最後の話だ。そしてこれが本題と言っても良い。」

ほう？これまでの話が前置きか。それで久藤提督も無理に問い詰めたりしなかったわけか。いや、元々ダメ元で話をしただけで期待はしていなかったのか。

「分かりました、お聞きしましょう。」

「俺と俺の傘下の奴らで大規模な調査隊を編成して、海外艦がドロップした海域を調査したいと考えていて、日本海側に出るには関門海峡を通る必要がある。だからお前のところを通過させて貰うが構わないな？」

「ええ、通行するだけなら問題ありません。お気遣い感謝します。」

「それと北九州鎮守府を補給拠点として利用する事は可能か？呉鎮守府傘下で最も北九州鎮守府に近いのは柳井鎮守府なのだが、北九州鎮守府まで片道3時間はかかる事になる。海域の調査が長期化する可能性も考えれば、時間も燃料も節約しておきたい。もちろんこつちで使う資材は準備するし、それ相応の礼はするつもりだ。」

「……なるほど。一見すれば筋も通っていて悪くない条件に思えるが、北九州鎮守府を補給拠点として貸し出せば北九州鎮守府に呉派閥の艦娘が多く滞在する事になるだろう。もしくは前線で指揮をするためだと言って、呉派閥の提督達が滞在させると言う可能性もある。そんな状況では全員の動きの把握は困難だし、色々嗅ぎ回られる事になる。ドロップ艦の件に関しては嗅ぎ回られたところで知った事ではないが、もし万が一にも悪雨の情報が漏れたら大変だ。」

「……それは難しいかもしれないですね。明日からは佐世保傘下の提督達と北九州鎮守府で連日演習をする予定になっています。しかも今日は鹿児島鎮守府と演習する予定だったのを延期して深海棲艦の討伐をしました。そんな状況で海外艦が二人もドロップしたので島津提督はこちらをかなり疑ってました。なので明日から盛大に揉める予定です。そこに呉鎮守府傘下の人間も関わってくると、そこらにも飛び火して余計に大きな問題になるかと。」

「ほう？佐世保傘下の奴等が喧嘩売ってるって話は本当だったのか。」  
「表向きはあくまでもただの演習です。しかも北九州鎮守府で行うのに資源は向こう持ちと好条件です。ただ少なくとも鹿児島鎮守府の島津提督とは喧嘩腰の言い争いに発展してます。ろくな事にはならないでしょうね。」

「まあ確かに佐世保の連中と揉め事を起こすのは面倒だな……あいつらはなんだかんだで実力がある。政治的な駆け引きならどうとでも



なるが、それであいつらの戦力を削ってしまえばこっちとしても都合が悪い。さらにあいつらは軍人氣質で他の派閥に対しても上から視線でキャンキャン吠えてくるからな。」

「はあ……あの横柄な態度は島津提督だけじゃないのですか……」

「例外はいるがそんなもんだ。そんな奴等と鉢合わせたら、俺の傘下の奴らも抑えが効かねえかもしれん。しようがないから補給拠点にするのは諦めよう。」

ふう……まさか島津提督が役に立つ時が来るとは思わなかった。人よけに使えると言う事は覚えておこう。

「そうして貰えると助かります。では通行する人員が決まればご連絡下さい。」

「おう。じゃあな。」

そう言って久藤提督は通信を切った。なんというかそれなりに有意義な話が出来たな。相変わらず油断出来ない相手だが。

## 211話（龍田会話）

コンコンコン

久藤提督との通信を終えて一息ついていると、執務室の扉が叩かれる。もう夜遅いというのに誰だ？

「龍田です。報告書を持って来ましたあ。」

「入れ。」

そう言えば鳳翔が率いる哨戒部隊と龍田率いる遠征部隊がとつくに帰還している時間か。夜戦やその後の対応で後回しになっていたな。

「失礼しますねえ。はい、これが今回の戦闘報告です。鳳翔さんの分も一緒に預かってますからねえ。」

「ああ、助かる。それにしても鳳翔ではなく龍田が持って来たのは意外だったな。」

「大淀さんに連絡したら提督はお忙しいみたいで、全員集まっつての報告は難しそうでしたし、私が提督に少しお話がありましたからついでにねえ。」

「なるほどな。それで話とはなんだ？この場で話せる事か？」

「二人きりでお話したいかなあ。」

「・・・大淀、陸奥、少し離れても大丈夫か？」

「はい、川内さん達も問題無いですし、今のところ他の通信も入っていません。それと先程綾瀬さんに記者会見を開く為に場所を提供して貰う話をしましたが、前回と同じ場所を提供して下さいさるそうです。記者の方々への告知も引き続き継続します。なにか問題が起こればすぐに報告しますのでご安心下さい。」

「わかった。では応接室で話そう。ついて来い。」

「はあい。ありがとうございます。」

それにしても龍田からの話か・・・自分からの龍田の印象は姉の天龍を守る為に必死だったくらいだ。今日は天龍とも話をしたが、特別気になった事はないはずなのだが・・・となると今日の出撃の件で何か思うところがあったのか？いや、情報も無いのに考えても無駄か。

話があると言うならまずは聞かないと始まらないか。応接室に入つてソファに座るが、龍田はテーブルの横に立ったままこちらを見ている。

「まあ、座れ。」

「はあい、失礼しますねえ。」

「では話を聞こうか。」

「そうね〜とりあえず今回の戦闘に関しては報告書見て貰った方が早いかなあ？皆頑張つてたから後でちゃんと褒めてあげてねえ。」

「そうだな。確かにきつちりと仕事をしてくれたのだから、こちらもきちんと評価をするべきだな。あとで目を通して貰おう。とりあえずは敵を全滅させてこちらは全員生きて帰つたのだ。龍田も旗艦として良くやってくれた。」

「ありがとうございます。」

「それで、本題はなんだ？」

「まずは天龍ちゃんの件かなあ？天龍ちゃんが提督も案外話せば分かる奴だつたつて言つてたから、ちよつと気になつたのよねえ。今回の件は私のイメージする提督から考えると、ちよつと甘い判断かなあつて思つたから気になつてしまつて。」

ふむ、やはり天龍の話か。龍田は笑顔で話をしているが、どうにもこの笑顔は胡散臭い。といつても怒りを隠しているというよりは、愛想笑いと言つた方が近いかな？なんにせよこういうこちらに感情を読まれないようにする奴らには、どうしても警戒してしまう。

「駆逐艦達への指導を天龍に任せた件か？」

「ええ、その件です。どうして天龍ちゃんに任せたんですかあ？」

「であれば天龍の成長を期待しての事だな。天龍が自身が今回の戦いを省みて、その上で駆逐艦達の指導を任せて欲しいと言つてきたからな。今後も天龍には駆逐艦達を率いて貰う事も多いだろう。ならば天龍が現場の指揮官として成長しようとしているなら、私としては後押ししたい。」

「・・・私達艦娘に指揮官としての力をつけさせたいって事かしら？」  
「ああ、提督の仕事はお前達艦娘を管理することだ。だがそれはお前

達に1から10まで全て命令を下すという意味ではないと考えている。お前達艦娘は意志を持ち自分で考える事が出来る。ならば艦娘達を成長させてより良い戦力として使えるようにする事も私の仕事の一つだ。」

「・・・わかったわあ。？は無いみたいだし、これは私が提督の事を誤解していたみたいですなぁ。」

こころなしか龍田の笑顔が和らいだ気がする。少なくとも龍田が満足出来るだけの回答はしたと言う事か？

「まだ一週間程度の付き合いだ。お互いに知らない事などいくらでもある。」

「そうねぇ。提督の噂は色々聞きますけれど、わからない事だらけですからねえ。」

「どんな噂かは知らないが、噂だけで人を理解するのは難しいだろうな。本当にいろんな噂が艦娘達の間で飛び交っているようだしな・・・」

「それは当然だと思いますよお？ 私達の今後や命にも関わる事ですから、必死に情報を集める娘も多いですからねぇ。」

「・・・なるほどな。」

前任者の大森提督から仲間が使い潰されたり酷い虐待や凌辱に果ては解体とやりたい放題されていたのだ。新しい提督の情報はそれこそ生死を左右しかねない。噂話も物凄い勢いで飛び交うわけだ。龍田だつてこうして話をするのも危険な橋を渡っているようなものなのかもしれない。

「それでもう一つ聞きたい事があるんですけど良いですかあ？」

「ああ、なんだ？」

「・・・春雨ちゃんの件、何か心当たりはありますか？」

それまで少し穏やかな雰囲気すら感じていた龍田の笑顔から、急に冷淡な笑顔へと変化する。今日の出撃から龍田は何を読み取った？どこまで春雨の事情を突き止めたのだろうか？

「・・・・・・・・何かと言われても曖昧過ぎて良くわからないな。」

「ダメですよ提督。そんなに怖い顔してたら何か隠してる事があ

るって言ってるようなものですよお？」

「顔が怖いのはいつもの事もだろう？わりとよく言われる。龍田こそなんだか穏やかな雰囲気ではないぞ？」

「うふふ。そんな事はないと思いますよお？」

「そうか。」

「ええ、そうですねえ。」

そこからしばらく黙ってお互いに視線で探り合う。微かに龍田が震えているか？気丈に振る舞ってはいるようだが、龍田は前任者からの仕打ちで提督を怒らせる事がどういいう結末を迎えるか充分に知っているはずだ。最悪の場合でも龍田への口止めは可能か・・・あまり使いたい手ではないが、春雨の深海棲艦化の件が広まるよりはマシか。

「それで？何が聞きたい？」

「私は今日の出撃でちよつと春雨ちゃんの調子が悪そうだったから、提督は何か知らないかなあ？って思って聞いただけですよ？なんだかあんまり聞かれたくないお話だったみたいですけどねえ？」

「であれば白露型の姉妹の方が春雨を近くで見ていると思うが？」

「もちろん白露ちゃん達にはそれとなく聞いてみましたよ？あの娘達も春雨ちゃんの事を心配してるみたいですけど、詳しい事は教えてくれなかったのよねえ？」

「まあ、私が把握している件ならば春雨のプライベートに大きく関わるから、白露達も安易に吹聴したくはないのだろう。」

「ふーん？それはわかりますけど、あの娘は提督にすごく懐いているみたいですよねえ？あれだけ提督からのトラウマを植え付けられていたにも関わらず、この短期間でずいぶんと好意的・・・なにか不自然だなあ、提督が何か知ってるんじゃないかなあって思うのが自然じゃないですか？」

ふむ、とりあえず龍田は春雨の行動から不信感を抱いているわけだ。特に自分が春雨相手に何かをした、何かを強制している事を疑っているのだろう。流石に深海棲艦化にまでは辿り着いていないようだが、警戒は必要だな。

「そうだな・・・それで？龍田は春雨の秘密を探って何をしたい？」  
「うーん？私はいくまでも提督の事を知りたくて質問したつもりですけどねえ？提督が春雨ちゃんに何かしたのかなあと思って。私、前に言いましたよね？私はまだ提督の事を信用してませんよって。それで探りを入れてみたら予想外に大きな反応があったからどうしようかなあって。」

「それならば探るのはそれくらいにしておけ。さっきも言ったがこれは春雨のプライベートに大きく関わる問題だ。他人に心の傷を探られるのも迷惑だろう。提督としてお前達と面談をした私が言えた話ではないかもしれないがな。そこは仕事として割り切って貰えれば助かる。この件に関して私から言えるのは私や白露型姉妹は春雨の問題を把握していて、その対応で色々動いているという事。春雨達に対しての命令で指揮官としての範疇を超えるものは無いと言う事。これくらいだろう。」

しばらく龍田がじつと見つめてくるが、その目線から逸らすような真似はしない。今の言葉に嘘は無いが、それを信じるか信じないかは龍田次第だ。

「はあ・・・これ以上詮索するのは危なそうだから辞めておくわあ。天龍ちゃんになにかあったら私が悲しむみたいにな、私になにかあったらきつと天龍ちゃんが悲しんじゃうもの。それに提督が私に対して誠実に対応しようとしてくれるのは、なんとなく伝わってきたもの。」  
「そう思ってくれると助かる。」

「まあ、それだけであなたの事を信頼出来るほど物分りの良い娘じゃないんだけどねえ。」

「ああ、その警戒心は素直に評価出来るところだな。」

「そう・・・じゃあ私の話はここまでねえ。あつ、最後に一つだけ伝えておくわ。」

「なんだ？」

「春雨ちゃんの問題にちゃんと対応するつもりなら、早いうちに出会ってあげた方が良くと思うなあ。春雨ちゃんったら帰還後に提督が忙しくて会えないって知らされた時に、すっごく不安そうな顔をしてた

から。誑し込んだならその責任はちゃんと取るべきかなあって。」

・・・また深海棲艦化の発作だろうか？戦闘のたびにケアが必要なのは厄介だが、それでも春雨と悪雨から得られるものは大きい。早めに対処しておくか。

「誑し込んだと言われるのは心外だが、春雨がなにか私に話があると  
言うなら聞いておきたい。ここに呼んで貰えるか？」

「分かったわ。・・・・・・すぐに来るみたいよ。じゃあ私はこれで失  
礼しますねえ。」

「ああ、ゆつくり休め。」

ふう・・・・・・なんとか事なきを得たが、なかなか難しい問題だ  
な。今回は疑いだけで済んだが、今後も春雨だけを特別扱いするほど  
んな疑いをかけられるかわからない。そして的外れな疑いでも調べ  
ようとすれば偶然深海棲艦化の事に辿り着かないとも限らない。し  
かし悪雨の暴走を防ぐにはそれ相応の対応が求められる。どうした  
ものか・・・・・・

## 212話（春雨・悪雨会話）

龍田が応接室から退室して少しすると、誰かが駆けて来る足音が聞こえた。まあ、普通に考えて春雨だろう。足音は応接室の前で止まり一呼吸おいてから遠慮気味にノックの音が聞こえる。

「し、司令官、春雨です。」

「入れ。」

「失礼します。」

おずおずと応接室に入つて来て礼儀正しくお辞儀をする様子を見ると、今は悪雨ではなくて春雨のようだな。龍田が春雨の調子が悪そうだと言っていたが、そこまで深刻では無いと言う事か？髪色にも変化が無い・・・ように見える。余裕が無い時は二人きりになった途端に抱き着いてきたりしたしな。

「まあ、座れ。」

「あ、はい。その・・・」

「ん？どうした？」

「えっと・・・お隣に失礼しても良いですか？」

前言撤回だ。今の春雨にあまり余裕は無さそうだ。

「ああ。」

「失礼します♪」

応接室にはテーブルを挟んで三人座れるサイズのソファが置いてあるので、春雨が横に座ったからと狭いわけでは無いのだが・・・ソファの片側にだけ人が座つて話をすると言うのはなんだか微妙な感じだ。しかも春雨はこちらに身体を寄せて来て、自分の右腕に抱き着くような体勢で落ち着く。

「はあ・・・やはりまた精神的に不安定になつていたのか？」

「あ、はい・・・深海棲艦の声を聞くとどうしても不安になつてしまつて・・・ごめんなさい・・・」

「いや、謝る事では無い。春雨の事情もある程度は把握しているつもりだ。だがそれで少々問題が発生しているのも事実だ。」

「問題・・・ですか？」



春雨が少し不安そうに首を傾げる。春雨にとって提督である自分に引付くのは深海棲艦側に心を引く張られ無い為の儀式だ。それに問題があると言われれば心中穏やかでは無いだろう。

「春雨を呼んだのは龍田から春雨の様子がおかしかったと相談・・・というか探りを入れられたからだ。」

「龍田さんが・・・ですか？」

「ああ、旗艦として今日の春雨の調子が悪そうだと感じたようだ。それで白露型姉妹や私に何か知らないかと聞いて回ったらしい。」

「そうなんですか・・・知らない間に龍田さんにご心配をおかけしてしまっただけですね・・・」

「それだけならまだ良い。龍田は春雨が・・・いや白露型姉妹もだろうか・・・とにかくお前達が急に私に心を許している姿を見て、私がお前達に何かしたのではないかと疑っていた。」

「何かですか？確かに司令官は私を救ってくれました。それはきつと姉さん達も一緒に救って下さったのだと思います。だから私も姉さん達も提督に好意を抱いているのだと思います、はい。」

真つ直ぐこちらを見つめる目にはブレが無く、本気でそう思っているのが伝わってくる。だがそれは盲信的でどこか危うさを感じてしまふ目だ。

「私にも思惑があつてやった事だ。それはともかくこの件を周囲に説明しようとする、春雨が大森提督を殺害した件に触れなければならなくなる。当然そんな話を吹聴するのはリスクが高過ぎるから、周囲にちゃんとした説明など無理だ。」

「な、なら私が龍田さんに司令官が良い人だから好きになつたつて言えば・・・」

「おそらくだが龍田は納得しないだろうな。あの様子だと私が春雨や白露型姉妹に何かを強制しているのではないかと疑っているようだった。おそらく私が艦娘達に取り入るきつかけとして、白露型姉妹に私に好意的に見えるように行動しろと命令したと疑っているのでは無いだろうか？」

「そ、そんな事は!?!」

「無いのは知っている。だが龍田はとにかく私が怖くて不安でたまらないし、提督という存在が受け入れ難いのだろう。だから必死に情報を集めて探りを入れる。そしてそれはいつか春雨の秘密・・・悪雨の事にも届いてしまうかもしれない。」

「そ、そんな・・・」

「だからあまり誤解を生むような行動は避けたいところだ。だから人前では春雨も自重してくれると助かる。」

「そ、そうですよね・・・」

春雨がまた不安そうな顔で震えているが、これも鎮守府を守る為に必要な事だ。

「え？あ、うん・・・司令官、悪雨ちゃんが話したい事があるそうです。」

「ああ。分かった。」

春雨から悪雨に変わると言われて一旦春雨が顔を伏せて、再び顔を上げると鋭い目で思いつきり睨まれた。流石は半端者とは言え深海棲艦だ・・・迫力と言うか殺気というか・・・危険な雰囲気を感じる。

「少し確認したいのだけど良いかしら？」

「ああ、なんだ？」

「あなたと接する事で私達は心の安定が得られるという話を忘れた訳では無いわよね？私達を見捨てるつもりかしら？」

「そんな事はない。春雨と悪雨にそれが必要な事は理解している。だがこうして疑われた以上、人目のあるところでは控えた方が良いと判断しただけだ。人目の無いところであれば問題無いと思うのだが？」

「そう・・・あなたと二人きりでの密会は悪くないけれど・・・それは余計な噂を加速させるだけよ？そんなに頻繁に二人きりで会ったら、それこそ疑われる原因になるわよ？」

「それは・・・確かにそうかもしれないな・・・隠せば隠そうとするほど、探ろうとする奴らから見れば怪しく見えるかもしれない・・・」

「それと私達白露型姉妹が提督に好意を寄せてるのは分かっているわよね？」

「ああ。お前達も含めて白露型姉妹が春雨の1件で恩を感じて、友好

的に振る舞ってくれているのは理解している。」

そう言うのと悪雨がジト目でこちらを睨んでくる。先程までの殺気は感じないが、何か不機嫌になるような事を言ってしまったか？

「そうね、とつつつても友好的ね。」

「ん？違ったか？」

「……話を戻すけれど、今まで友好的だった私達が急にあなたと距離を取ろうとしたら、余計に変な事になるわよ？特に本能で生きている夕立姉さんに提督に対して友好的にするのを辞めろなんて言っても理解してくれないわよ？当然他の姉妹も悲しむわよ。」

「では逆に聞くんが、悪雨は今回の件の対応策が他に思いつくか？」

「別に？気にする事ないわよ。龍田さんが勝手にあなたを悪者にして疑ってるだけでしょ？そんなのに一々付き合ってたらないわ。」

それこそ悪雨はどうでも良い事のように切り捨てる。

「はあ……何度も言うが悪雨の情報が広まる事だけは絶対に避けたい。だから何かしら対策を考えるのは必須だ。」

「だから私達に我慢しろって言うの？ちゃんと抑えきれない自信はないわよ？」

「そうか……それは困るな……」

悪雨が右腕に抱き着く力が強くなる。これはかなりマズイ状況か？それこそ悪雨が暴走するような事態になれば元も子もない……それだけは絶対に避けなければならない。

「あつ、簡単な解決策を思いついたわ。」

「……龍田を処分しろとかは無しだぞ？」

「そ、そんな物騒な事は考えてないわよ!!」

「なら良いが……」

「……そういうあなたこそ実行したりしないでしょうね？」

「……出来る限り避けたいところだ。」

「……これって私が考えてるよりずっと重い話じゃないかしら？もしかして龍田さんに限らず私の秘密を知ってしまった艦娘は、もれなく処分されるとか言わない……わよね？」

……正直に言えば否定は出来ない。それくらい悪雨の情報

は重いものだ。知ってしまった艦娘本人への口止めくらいは出来る。だが秘密とは知る人間が増えれば増える程漏れやすい。口止めするまでに広まってしまいう可能性もあるし、秘密を知ってしまった事で怪しまれる言動をしてしまい、他の誰かに怪しまれる可能性もある。ならば私と春雨と悪雨だけの秘密にしておくのが一番安全だ。

「……それで？簡単な解決策とはなんだ？」

「ツ!?あ、そ、その……こ、これは提案のひとつだから採用するならちやんと考えてからにしてよ!？」

さつきまで強く抱き着いていた右腕から悪雨が距離を取る。少々怖がらせてしまったか？

「ああ、分かっている。」

「あれよ。木を隠すなら森につてやつ？提督に好意的な艦娘が増えれば、私達白露型姉妹は目立たなくなると思ったのよ。」

「つまり多くの艦娘達との仲を深めれば、提督と艦娘の仲が良いのは当然という空気感を作り出せると？」

「そういう事よ。これなら簡単でしょ？それに私達が人前であなたに抱き着いても、他の娘も同じようにしてたら目立たないから良いじゃない？」

確かにそれが出来れば悪雨の件は目立たなくなる可能性は高い。

高いのだが……

「……それは難しくないか？」

「なんでよ?」

「この提督に対するトラウマを抱えた艦娘ばかりの鎮守府で、そんなに協力者は得られないだろ?しかも抱きついたり等の身体的接触をできるほどの艦娘だぞ?」

「えっと……あなたが思っているより好意的な艦娘は多いと思うんだけど?抱き付きそうな程って言われたら困るけれど……」

「そうか?」

「むしろ好意的に見てる娘は多いと思うわよ?なに?無意識に誑し込んでるのかしら?」

はあ……龍田にしる悪雨にしる何故自分が艦娘達を誑し込んでい

ると疑っているのだ？自分は艦娘相手に軍人同士として接していて、決して口説き落とそうなんて考えてはいない。むしろイクみたいなのが奴からは一定の距離を保とうとしているくらいだ。

「はあ・・・私は艦娘達を口説こうなどと変な考えは持っていない。私には色恋沙汰にうつつを抜かす暇など無いし、そんな危うい関係になりたいとも思わない。」

「はあ・・・分かってるわよそんな事・・・まあいいわ。とにかくあなたは艦娘達が成果を出したらちゃん褒める事。それだけ意識してたら充分よ。頭を撫でてあげるなんてのも効果的ね。」

「そんなものか？」

「そんなものよ。艦娘なんて元から提督に惹かれ易い存在なのよ？あいつらはまともに提督をやったらほいほいついて来るチヨロい存在よ。」

「それは流石に暴論過ぎないか？確か艦娘は本能的に提督の存在を暖かく感じるものと聞いたが・・・」

確か悪雨曰く艦娘達はその暖かさを快く思い、逆に深海棲艦達はそれを憎むだったか？その件は夕立が抱き着いて来て撫でた時に『提督さんに撫でられるとぽかぽかして気持ち良いっぽい♪』とか言っていたので、たぶんその情報は正しいのだろうが・・・

「なら試してみれば良いわ。とにかく私から提案出来る意見はこれだけよ。」

「わかった。検討してみよう。」

「そう。じゃあ私はもう行くわね。」

そう言う悪雨は立ち上がりドアの方へと向う。もう話す事は無いのだろうし、しばらく抱き着いていたから精神的な不安も少しは解消されたのだろう。

「あつ!!それと誰かを解体するのは無しよ!!私のせいで誰かが解体されるとか耐えられないわよ?」

「ああ、分かった。」

「それじゃおやすみなさい司令官。」

それにしても厄介な事になった・・・とりあえず現状は悪雨の案で

味方になる艦娘を増やすしかないか。

「あ、提督おかえりなさい。お話はもう終わったのですか？」

「けっこう長く時間がかかってたわね？大丈夫？」

執務室に戻ると大淀と陸奥が机で仕事をしながら出迎えてくれる。

「ああ、問題ない。そちらはどうだ？」

「私の方は記者達への告知は済みました。あと北九州鎮守府所属の憲兵隊の方へ連絡して、明日の送迎の手配まで完了してます。」

「川内達は異常なしよ。順調に帰って来てるから、私は川内達と通信しながら今回の戦闘報告書をまとめてるところよ。」

「ああ、助かる。」

ん、そう言えば悪雨が成果を出したらきちんと褒める事、あとは頭を撫でるのも効果的だと言っていたな。試してみるか・・・大淀に近付くと大淀は少し不思議そうな感じでこっちを見上げているので、とりあえず頭を撫でてみる。

「え!?あ、あ、え!?て、て、提督?!こここれはいったい!?!」

「いや、成果を出した者はきちんと褒めるべきだと進言されてな。これは何か違うのだろうか?」

「あ、いえ!?そそそういう意図があるのであれば間違ってはいないと思いますし信賞必罰は組織の運営に必要ですし提督のお考えは素晴らしいというかなんというかありがとうございます!!」

ん?大淀がかなり動揺しているようだが、これは本当に大丈夫なのか?悪雨は頭を撫でるのは効果的だと言っていたが、駆逐艦と軽巡洋艦では勝手が違うか?それともただたんに個性の問題か?

「あらあらあら?大淀さんったらそんなに可愛い反応するのね♪」

「む、陸奥さん!?!これはいやその!?!」

「うふふ♪ねえ提督、私も頑張ってると思うのだけど、お姉さんにはしてくれないのかしら?」

「確かに不平等は良くないな。」

「ふふっ♪ちよつとくすぐったいわね♪でもなんだかちよつと嬉しいわ♪」

「なら良かった。では引き続き仕事をするとしよう。」

効果の程は良く分からないが、人間関係に即効性を求めるのも間違っているはずだ。とりあえず継続してみても経過観察するしかないか・・・

## 213話（叢雲と長門鎮守府の仲介）

「……思っていたよりもずいぶん静かだ。てつきり海外艦の件が大本営から各地の鎮守府に伝えられて、その情報の問い合わせや鎮守府訪問の交渉などが殺到するものだと思っていたのだが……いったいどうなっているんだ？」

「大淀、あれからどこからも通信はないのか？」

「ふあ、あ、はい!!今のところどこからも通信は入っていないです。」

「そうか……」

「これは明日記者会見を開くから、そこで公開される情報を待っているのか？だが記者会見なんかで重要な情報なんて流すはずもないのに、探りすら入れて来ないのは気になるところだ。」

「ん!……提督、横須賀鎮守府の叢雲さんから通信が入りました。」

「噂をすればなんとやらか。だが海原提督ではなくて叢雲からか……」「どうされますか？」

「ああ、すまない。代わろう。……北九州鎮守府の葛原です。」

「横須賀鎮守府所属の叢雲よ。今朝ぶりね。」

「そうですね。横須賀には無事に到着したのですか？」

「ええ、なにも問題なく到着したわ。心配しなくても平気よ。」

「……そういうわりには叢雲の声に少し覇気が無い気がする。問題は起きてなくても流石に疲労はしているのだろうか？」

「それは良かったです。それでご用件は？」

「察しはつくでしょうけど、海外艦が二人もドロップした件についてよ。」

「はあ……私としては本当に心当たりがありませんから、通常の軍事記録に残すような内容しか情報は無いですよ？」

「まあ、そうでしょうね。」

「……え？」

「え?じゃないわよ。あんたみたいな新人の提督が海外艦を狙ってドロップさせる方法なんて知ってるわけ無いでしょ?それにもし仮に



知っていたとしたら、わざわざこんな目立つ真似はしないわよね？  
私にはあんたがそこまで馬鹿じゃないと考えているのだけど違うかしら？」

これはまた随分と信用されたものだ。だがこれではどうして叢雲がわざわざ通信をしてきたかが分からなくなってきた。

「はい、その通りです。信じて貰えるのは助かるのですが・・・では今回ほどのようなご要件で？」

「その・・・横須賀鎮守府としてはあんたの事を信用してるのよ。でも横須賀傘下のやつらは別なの・・・今は私が睨みを効かせてるから黙ってるけど、いつ暴走しだしてもおかしくないのよ・・・私だって明日には別海域の調査でそれどころじゃなくなるし・・・」

「それはまた・・・大変ですね・・・それで？」

「とりあえずガス抜きさせる為にも、海外艦がドロップした周辺の海域調査に、横須賀傘下の提督達も参加させたいの。北九州鎮守府に問題があるんじゃないかと海域の方になにかあると思うから、海域の調査に関われたら少しは満足するでしょ。もしかしたらまた海外艦がドロップするかもしれないものね。それで海域調査をするにあたって、北九州鎮守府を補給拠点として利用させて貰えないかって相談よ。」

海外艦の件で横須賀傘下の奴等まで海域の調査に乗り出してきたか・・・この状況なら四大鎮守府全てが海域調査に手を出す事になりそう。これはまた縄張り争いで大きく揉めそうだな。

「難しい話ですね・・・横須賀鎮守府の艦娘達だけであれば、こちらも受け入れは容易なのですが・・・プリンツオイゲンの時の反応からしても、傘下の提督達は問題を起こす可能性が非常に高いと言わざるを得ません。」

「そこは横須賀鎮守府からまとめ役として艦娘を派遣する事で納得して貰えないかしら？まとめ役というか横須賀傘下の監視役と考えて貰っても構わないわ。」

「それは最低条件ですね。それともう一つ厄介な事情がありまして、明日からは佐世保傘下の提督達と北九州鎮守府で連日演習をする予定になっています。これに関しては約束をした事ですので、余程の事

がなければキャンセルは出来ません。そして横須賀鎮守府と佐世保鎮守府では仲が悪いでしょう？必ず揉め事の種になるかと。」

「そうね・・・横須賀鎮守府だけならその戦果で佐世保傘下の提督達からも一目置かれてるけど、横須賀傘下の提督達は艦娘を甘やかすだけで実力が無いと思われてるわね。そして横須賀傘下の提督達は佐世保傘下の提督達を艦娘を兵器として酷使して、非人道的な扱いをしてると批判しているわ。横須賀の艦娘が監視役として見張っているも、佐世保側から挑発されればこっちの提督達も黙っていられないかも知れないわね・・・政治のゴタゴタに巻き込みたくはないから仕方ないわね・・・」

やはりそうなるよな・・・他所で勝手に揉めるのは知った事では無いが、鎮守府内で揉め事を起こされても面倒だ。横須賀には恩があるので出来るだけ協力したいところではあるが残念だ・・・ん？他所で揉め事を起こされるぶんには問題無いわけだよな？

「・・・ではこちらから一つ提案があるのですが？」

「ふーん、どんな提案かしら？」

「長門鎮守府を補給拠点として利用するのはどうでしょうか？今長門鎮守府で提督をしている織田は私の士官学校時代の同期です。ですから仲介くらいは出来ますがどうでしょう？もちろん織田に断られたらそれまでの話ではありますが・・・」

「えっと・・・長門鎮守府ってつい先日には崩壊したばかりよね？補給拠点として使えるのかしら？」

「確かに今は必要最低限の設備が整っているだけです。ですが資源の援助があれば、あとは妖精さん達の力で再建可能です。長門鎮守府は資源の援助が受けられるうえに、駐屯する横須賀傘下の艦娘達に鎮守府を護って貰う事が出来ます。そして横須賀傘下の方達は問題の海域のすぐ側に補給拠点を確保出来ます。横須賀傘下の提督達の多くは東北や北海道に鎮守府を構えていますから、一度きりの遠征ではなくて長期間の調査となると移動にかかるコストは膨大な物になるはずです。ですから長門鎮守府の復興を手伝うコストがかかっても悪くはない提案だと思いますが？」

実際にこの話に乗れば長門鎮守府は早急に復興する事が出来るのだ。多少のトラブルがあってもお釣りがくるくらいだし、これだけのメリットがあれば霞を説き伏せるのも簡単だろう。

「……そうね。確かに悪くない話だわ。それで織田提督の人柄は信用出来るのかしら？ 調べた情報だとあまり良い話は聞かないのだけど……」

「そうですね……性格的にも能力的にも問題があるのは事実です。ですが悪事を働くタイプでは無い事は保証しましょう。それと士官学校に所属していた霞を初期艦として特別に連れて行っているので、霞がしっかりと織田提督の手綱を握ってくれると思います。横須賀の艦娘が横須賀傘下の人達をまとめてくれるならば、大きな問題は起きないかと思えます。」

「……そう。なら仲介をお願いしても良いかしら？」

「ええ、分かりました。では一旦失礼します。」

とりあえず叢雲は説得出来たしあとは霞の説得をすれば良い。織田は自分と霞から説得されれば首を縦に振るだろうしな。

「大淀、長門鎮守府の織田に繋げてくれ。」

「分かりました。……どうぞ。」

「北九州鎮守府の葛原だ。」

「うむ!! 我こそは長門鎮守府を統べる海軍の英雄織田信雄である!! こんな夜更けに我が盟友からの通信とはただ事ではあるまい。なに、我と盟友の仲だ!! 力を貸してやろうではないか!!」

「そうか。話があるから霞と代わってくれ。」

「ぬおおお!! また我を仲間外れにするつもりであるか!!」

「まあ、今回はお前の力を借りようかと思っている。だが実務の話ならば霞の方が話が早い。さっさと代わってくれ。」

「ふっふっふっ。ついに盟友が我に助力を求める時が来たと言うわけだな。あいわかった!! 我が右腕たる霞殿と話がしたいのであれば否とは言うまい!! 霞殿!! 我が盟友から話があるとの事である!!」

「……霞よ。私に用があるなら直接私に繋がれば良いじゃない。なんで一旦このクズを挟んだのよ？」

「一応こつちから頼み事をする立場だからな。そんな奴でも長門鎮守府の提督だ。一言くらいはかけておこうかと思つてな。」

礼儀なんかを気にする奴ではないと思うが、あまりに無視をしてヘソを曲げられても面倒だ。

「そう。それで用件は何かしら?」

「その前に一つ伝えておこう。先程の益田鎮守府との共同作戦で海外艦が二人ドロップした。所属は二人共北九州鎮守府になる。」

「……はあ?あんたまた海外艦!?それも二人同時に!」

「ぬおおお!?また海外艦を手に入れるとは羨ましいぞ盟友!!」

「ちよ!?通信中なんだから静かにしてなさいよこのクズ!!」

「ぬおつ!?す、すまぬ……」

ん?今軽くベシツと何か叩く音が聞こえた気がしたが気の所為か?でも織田の反応からしても霞に叩かれたようにしか思えない……艦娘は人間に暴力を振るう事は出来ないはずなのだが……頭のおかしい織田の事だから、霞を相手に我を叱る時は叩いても良いとか命令した可能性もあるか?その命令で艦娘が提督相手に手を出せるのかどうかは知らないが……流石に霞が深海棲艦化している可能性は考えたくない……

「騒いで悪かったわね。あんたが変な?つくとは思えないから本当の事なのよね?」

「ああ、それで四大鎮守府がそれぞれに海域の調査を計画しているよ。うだ。それで横須賀鎮守府から横須賀傘下の提督達が使う補給拠点として、北九州鎮守府を利用して欲しいと相談されたのだが……事情があつて受け入れる事が出来なくてな。」

「まさかそれで長門鎮守府を使わせてくれって事!?うちがまだボロボロで設備が整つてないのはあんたも理解してるでしょ!」

「もちろん理解している。だから横須賀側から資源を提供してもらつて鎮守府の設備を再建する代わりに、長門鎮守府を補給拠点として利用させるという話を提案させて貰った。それならば双方に利益があると思う。霞としても鎮守府の設備は早急になんとかしたいだろうし、一時的とは言え大勢の艦娘達が長門鎮守府に留まる事になる。鎮

守府を護る為の戦力が確保出来るのも悪い話では無いはずだ。」

「そう・・・確かに鎮守府の再建は急務よね。横須賀鎮守府に借りを作るのはちよつと気が進まないけれど、なりふり構ってられる状況じゃないものね。でもそんな好条件よく引つ張り出せたものね?」

とりあえず霞は説得出来たようだな。相変わらず話が早くて助かる。

「それだけ横須賀鎮守府も切迫してるって事だ。一応織田にも確認をとってくれるか?」

「分かったわ。あんた話は聞いてたんでしょ?この話受けても良いかしら?」

「うむ!!盟友の頼みであるからな!!」

「だそうよ。」

「ああ、私も横須賀鎮守府には恩があるから適当に断るわけにもいかなかったので助かる。では詳しい話は横須賀鎮守府所属の叢雲としてくれ。」

「ええ、分かったわ。」

これで話は上手くまとまったな。あとは霞と叢雲の間で上手くやってくれるだろう。長門鎮守府の再建の問題と叢雲からの相談が一気に解決出来そうだ。まあ、どうせ織田が横須賀傘下の提督達と揉めそうではあるが、そこはもう霞と横須賀鎮守府から派遣される監視役に頑張って貰うしかないな。

## 214話（夜戦部隊帰還）

織田との通信も終えてふと時計見ると、既に深夜の3時を過ぎていく。時間的にももうそろそろ夜戦に出していた艦娘達が帰ってくる頃か。

「陸奥、川内達はどのあたりだ？」

「もうすぐ北九州鎮守府に帰って来るわよ。道中特に問題はなかったみたいね。」

「そうか。では迎えに行ってくる。」

「・・・それは皆喜ぶと思うけれど、明日に備えてそろそろ寝ておくべきじゃないかしら？明日も朝から記者会見で忙しいのでしょうか？休める時に休んでおくのも仕事のうちよ？」

「それはそうだが・・・出来れば少しでもビスマルクとアトランタと話をしておきたい。二人がどういう奴かを把握しておかないと、明日の会見で問題を起こすかもしれないから・・・それに明日の会見で喋らせる内容も検討しておかねば・・・」

「はあ・・・分かったわ。でも二人と少し話をしたらちゃんと言わねえよ！明日会見で使う原稿についてはお姉さんが海外艦の娘達とやっておくから、提督はちゃんと寝ておきなさい。」

「・・・陸奥もそろそろ疲れているだろう？あまり無理をするものではない。」

「はあ・・・一番無理してるあなたに言われたくないわよ・・・それに私達は艦娘よ？一日徹夜するくらいなら心配しなくても大丈夫よ。」

確かに陸奥に明日の会見の準備をして貰えば、短くとも睡眠時間を確保出来る。元々は問い合わせが殺到して明日の朝までろくに眠れないつもりだったが、予想に反して静かな夜だ。そして明日からも面倒な事が続くと考えれば、今のうちに休んでおきたいところだ。それに陸奥ならば無難に会見の原稿作成も出来そう。もし不備があっても明日の早朝に修正すれば問題ない。最悪の場合は海外艦には喋らせずに、自分で海外艦の紹介をしても良い。

「……なら頼めるか？」

「ええ、任せて。」

「挨拶に関しては自己紹介として軍艦としての来歴を簡単に語って貰うつもりだ。あまり長く語らせる必要はないから簡潔にな。」

「ふうん？海外艦の顔見せはするけど、あまり情報は出したくないってどこかしら？まあいいわ。」

「では出迎えて一言声をかけたら休むとしよう。大淀、お前には明日も働いて貰う必要がある。そろそろ休んでおけ。」

「……了解しました。それではきりの良いところまで終わらせたら休ませて頂きます。」

「ああ、分かった。」

それにしても少し頭が痛い……連日の夜戦での寝不足や面倒な奴らの相手で疲労が溜まっているのか？そろそろ鎮守府の運営も落ち着いて欲しいのだが……なかなか難しいものだな……

「総員、提督に敬礼!!」

出撃港で艦隊の帰還を迎えると、満面の笑みの川内が嬉しそうに号令をかける。軍隊らしくビシツと揃った敬礼をする姿は頼もしい。まあ、ビスマルクとアトランタが遅れてしまうのは仕方ないし、その程度の事で口うるさく言うつもりもない。

「諸君、夜戦での敵艦隊の撃滅よくやってくれた。今回の戦いは相手の数も多かったが、諸君の奮闘によって大きな被害なく戦闘を終える事が出来た。この調子で今後も私の指揮下での奮戦し、生きて帰ってくる事を期待している。」

「はっ!!」

「そしてビスマルクとアトランタ。北九州鎮守府へようこそ。私は貴官らの着任を歓迎する。早くこの北九州鎮守府に慣れて、戦場でその実力を見せてくれる事を期待している。よろしく頼む。」

「ええ、この海でも縦横無尽に活躍するわ。期待しなさい!!」

「ああ、うん、よろしくね。」

ビスマルクは自信満々な態度だな。ドイツ人は真面目な人間が多

いと聞く。ビスマルクはそれに加えてやはりプライドの高い人間か？逆にアトランタは気軽な態度というか少し自信が無さそうというか・・・夜と日本の駆逐艦が苦手だと言っていたからその影響か？

「では各自艦装を外して休め。入渠は損傷を受けた者達を優先するよう。それと報告書は明日の昼までに提出すれば良いので、ゆつくり休むように。あとビスマルクとアトランタは明日にプリンツオイゲンと共に記者会見で挨拶をしてもらおう事になる。だから悪いが今夜のうちに陸奥と明日の原稿を考えて欲しい。以上だ。」

「総員、提督に敬礼!!」

さて、やることは済ませたし早目に寝て明日に備えておくか。艦娘達も解散してそれぞれ移動を始め・・・

「ごっしゅじんさまあ♪なにか忘れてるものはないですか?」

部屋に戻って休もうとしたら漣が満面の笑みで話しかけてきた。それにしても忘れてるもの?・

「・・・ん?・すまない、なんの話だ?」

「いや〜またまたご主人様たらあ〜漣達も今日はすっごく頑張ったと思うのですよ。ならばご褒美があってもおかしくないと思いますぞ?」

確かに信賞必罰は必要だったな。いよいよ疲労で頭が回らなくなってきたか・・・まずはきちんと・・・褒めておかなければ・・・

「ちよつと漣!!みつともない真似は辞めなさい!!」

「ん〜?ぼのたんはご褒美が欲しくなほわあ!」

悪雨のアドバイス通りに漣の頭を撫でると漣が奇声を上げて驚く。かなり驚いたようだが・・・本当にこれで良かったのか?

「漣も良く戦ってくれた。」

「あ、えつと、これは、その、ちよつと予想外な展開ですなあ。なんて、あはは。」

「漣・・・あんた動揺し過ぎじゃない?」

「いやいやいや!?だって甘い物をねだったつもりが、急に頭を撫でられたら驚きますぞ!?しかもあのご主人様からですぞ!?」

「ん?ああ、甘味が欲しかったのか。すまないな。間宮に・・・いや、



もう寝ているか。甘味は明日用意させるから今日は我慢してくれ。」

「あつ、別に頭撫でられるのが嫌だった訳ではないのですぞ？かなり驚きましたがこれはこれで良いかと。甘味の方も明日ありがたく頂きますが。あ、とはいえ漣だけ撫でられるのはいささか不公平ですな。という事で次はぼのたんの番ですぞ♪」

「は、はああ!?なに言ってるのよクソピンク!？」

「ぼのたん良いのかなあ?この機会を逃せばご主人様に撫でて貰える機会なんてそうそうないかもよ?」

「べ、べべ別に私は頭撫でられて喜ぶほど子供じゃないわよ!!」

ふむ・・・悪雨は撫でるのも効果的だと言っていたけれども、この反応を見るとやはりあれは悪雨の個人的な主観であり、個人差が大きいもののような。ならば安易にするべきではないか?

「ほら、ぼのたんが素直にならないからご主人様がまた難しい顔してるじゃん。そんな態度だとこのボーナスタイムが終わっちゃうよ?」

「だから私は要らないって!!・・・ボーナスタイムってなによ?」

「はあ・・・これだからぼのたんは・・・漣はご主人様とはまだ短い付き合いですけども、ご主人様の突然の行動には心当たりがあるので。ずばり!!艦娘の誰かから頭を撫でるのが効果的だと言われて試してみました!!ご主人様、違いますかな?」

まさかたったこれだけの行動でそこまで読み取られたのか。漣はコミュニケーションが得意なのが長所と言うだけあって、たったこれだけの情報を分析して答えにたどり着くとはな。漣の評価を上げておこう。

「はあ!?!そんなわけ・・・」

「ほお?よく分かったな。」

「・・・え?」

「ふっふっふっ、ほれ見た事か。おやおやどうしたのかなぼのたん?そんなに驚いた顔をしてえ?まさか秘書艦補佐ともあろうお方が、漣よりもご主人様の事を理解していなかったのかなあ?」

「ぐ・・・うっさいわね!!」

「そしてぼのたんよりもご主人様の事を理解している漣には、これか

らどういう展開になるかも当然分かりません。ぼのたんに拒否されたご主人様は『頭を撫でるのはあまり効果的では無いようだ』とか考えて、頭を撫でるのを辞めてしまうのです!!つまりご主人様が優しいボーナスタイムの終了ですな。そしてぼのた人は多くの艦娘達から白い目で見られてしまい・・・ああ!!ぼのた人はなんと罪深い事を・・・おおよ・・・」

「な、いや、ぐう・・・」

ニヤニヤしながらからからかう漣と、顔を真っ赤にして怒りながらも悔しそうに黙る曙・・・これはコミュニケーションとして成功なのか？失敗なのか？よくわからない反応だな・・・

「まあ素直になれないぼのた人は置いといて、おぼろんと潮ちゃんカモン!!」

「あ、うん。」

「え?あ、うん。」

「ん?朧と潮は頭を撫でた方が良いのか?」

「うーん?褒められるのは素直に嬉しいと思います。」

「そ、そうだね。」

「そうか。二人共良く頑張ってくれた。」

「ありがとうございます。次も頑張ります。」

「う、潮もが、頑張ります。」

そう言っ二人を撫でると朧は少し満足そうに笑い、潮は最初少し怯えた雰囲気をしていたが、すぐに安心した表情になった。ふむ、この二人は問題なさそうだな。となると事前に許可を得たのが良かったのか?いきなりだと大淀や漣のように驚くのだろうか?

「こんな感じで良いのだろうか?」

「ええ、素晴らしい撫で方ですぞ。さあ、この調子で他の艦娘達も撫でまくって経験値を稼ぎましょう♪ご主人様のコミュ力はまだまだ低いですから、どんどん実践を重ねるのです!!次はぼのたん・・・はまだ難易度高そうですね・・・あ!!あそこで羨ましそうに見てる金剛さんにしましょう♪」

「What!?Ah・・・ササナミー?ワタシ達は提督と少しお話した

かったから待ってただけヨ？」

ふむ、金剛達の話か。金剛と霧島が中破しているにも関わらず、この場に残って話したいことがあるのか。

「おっとこれは失礼しました。ささつご主人様、金剛さん達のお話を聞いてあげて下さいな。漣達は入渠してきますのでこれで。」

「あ……」

「ん？曙、どうかしたか？」

「いや……なんでもないわ……」

「あー、ご主人様？ぼのたんにも一言頂けますかな？あと第七駆逐隊でぼのたんだけ撫でられて無いのはバランスが悪いのでそちらのオプシヨン付きでおなじやす。」

そんなものなのか？曙は必要無いと言っていたのだが大丈夫なのか？とりあえず頭を撫でる為に一步近付いてみたが逃げる気配は無い。

「曙も良く頑張ってくれた。明日からも忙しくなるだろうから、秘書艦補佐としてしっかりと働いて貰う。だから休める時に休んでおけ。」  
「うん、分かったわ。おやすみなさい。」

そう言い残して曙は小走りで去っていき、他の第七駆逐隊も曙を追い掛けていく。漣の言う通りにしたが、これで良かったのか？まあ、少なくとも曙は怒ってはいないようだったからよしとするか。

「待たせたな。それで話とはなんだ？」

「Ah……ワタシと霧島は見てのとおり中破しちゃったヨ…… sorry」

「ん？何故謝る？金剛達は作戦通りに動いてくれたし、あれだけの敵を相手に無傷で終われるわけない。むしろ想定していたよりも損害が少ない大戦果だぞ？」

「本当デスか？ワタシ達はちゃんと提督の期待に応える事が出来てマスか？ワタシ達提督に認めて欲しくていっぱい頑張ってきたヨ。」

「ああ、さつきも言ったが素晴らしい戦果だ。この調子で戦果を上げて、そして生きて帰って来い。」

そう伝えると金剛は目を潤ませながらこつちをずっとみつめてく

る。何も言わないので良く分からずに姉妹達の方に視線を向けると、比叡は金剛に熱い視線を向けていて、榛名はこちらの視線に気が付いて優しく微笑む。そして霧島もこちらの視線に気が付いて少し目を合わせていたが、その視線を金剛の頭と行き来させる。ああ、これは金剛を撫でてやれという事か。さつき漣も金剛が羨ましそうにしていたと言っていたな。とりあえず第七駆逐隊にしたように近づいてからそつと頭を撫でる。

「金剛、良く頑張ってくれた。」

「うっ……うっ……提督と仲直り出来たデース。提督に認めて貰う事が出来たデース。」

「やりましたね金剛お姉様!!」

「榛名は金剛お姉様なら大丈夫だと信じていました。」

「これにて作戦完了ですね。データの想定より良い結果になりましたね。」

ふむ、夜戦の出撃前にきちんと話をしたつもりだったのだが、想像以上に金剛は気に病んでいたようだ。人の心というのは難しいものだな。

「うっ……うっ……うっ……うっ……テイトクー!!」

「おわっ!!」

いきなり金剛が抱き着いて!?!力強!?!倒れ!?!

「がっ!?!」

「テイトクー!!テイトクー!!テイトクー!!」

「こ、金剛お姉様!?!お、落ち着いて下さい!?!」

「っ!?!て、提督!?!提督!?!」

「え、衛生兵!!衛生兵!!」

金剛の力強い抱き締めと、バランスを崩して後ろ向きに倒れた衝撃が……薄れいく意識の中で何故こんな事にと問う……艦娘は人間に危害を加えられないはずなのに……まさか……攻撃の意志が……まったくなかったから……なのか……

## 215話（9日目朝）

ぼんやりと意識が覚醒し始めると、すぐ近くに人が居る気配がある。近くに一人と少し離れたところにもう一人……。ここまで無防備な姿を晒しても襲って来ない相手のようだが、状況が分からないので相手に気付かれないように薄っすらと目を開けて周囲を探る。ここは自分の私室で近くに居るのは……

「……長門か。」

「ん？目が覚めたか。良かった。具合はどうだ？」

「……問題無さそうだ。それにしてもいつの間にか寝ていたようだな……。それで、あれはなんだ？」

自分が指差した先には部屋の入り口の横で正座している金剛が居た。しかも首から『ワタシは提督を危険な目にあわせました』と書かれた板を下げている。

「昨日の事はどこまで覚えている？」

「えっと……。川内達を出迎えて第七駆逐隊と話をして最後に金剛姉妹と……。ああ、なるほど。」

そう言えば金剛に抱きつかれてそのまま後ろに倒れてしまい、そこからの記憶が無い。つまりそこで気を失って眠っていたと言うことか。

「Sorry テイトク……。提督に認めて貰って感極まって抱き着いてしまったヨ……。まさかあんな事になるなんて思わなかったデース……。」

「はあ……。以後気をつけろ。それでなんでそんな格好で正座している？」

「あー、提督が気を失ったあとの事を説明しよう。提督が気絶した事で大騒ぎになってな。事態の収集の為に私が陸奥に呼ばれたのだ。とりあえず提督に外傷はないようだしそのうち起きるだろうと私室のベッドに寝かせ、大泣きする金剛を入渠施設に放り込んだ。金剛が損傷したままなのは提督にとって都合が悪いと判断したがどうだろう?。」

いささか対応が雑ではあるが、対応に問題があるかと問われると微妙だな。とりあえず痛みは無いから、後頭部を強く打ったわけでは無さそうだし、今は良しとしておくか。

「その判断で問題ない。それで？」

「私が護衛も兼ねて秘書艦代理として提督が目覚めるまで近くにいる事になった。大淀と陸奥から引き継ぎはしているから安心すると良い。それと入渠を終えた金剛がまた提督に泣き付こうとしたからとりあえず正座させておいた。あの看板については私は知らん。」

「なるほど。」

「Ah・・・ワタシはテイトクに怪我をさせしまいましたネ・・・だから何か罰を・・・」

確かに提督である自分に怪我をさせた以上、なにかしら罰を与えなくては示しがつかないか。一応ずつと正座して待っていたようだが、それはあくまでも長門と金剛が勝手にした事だしな。

「とりあえず金剛は今日一日営倉に入っている。」

「Why!? そんな軽い罰じゃダメだよ!？」

「悪いがこれ以上金剛に構ってる時間は無い。それよりも長門、会見の件はどうなっている？ それと間宮に頼んでなにか手軽に食べれる物を執務室に用意してくれ。」

「・・・ああ分かった。会見は9時からだから8時半までに憲兵隊が用意してくれる車に乗れば良い。それとこれは陸奥と大淀から提督に渡してくれと頼まれたものだ。」

そう言つて渡されたのは今日の会見に関する資料だ。時間は長門が言つていた通り9時から。場所は先日と同じ会場で、集まる記者の数は・・・先日よりも多そうだな。というか海外艦を一目見ようと有力者という名の野次馬もかなり来るようだ。そして陸奥に頼んでおいた海外艦達の挨拶原稿も無難で問題ない。

「ふむ、これなら一安心だな。あの二人は良い仕事をしてくれる。」

「ふっ、後で直接言つてやれ。その方が二人とも喜ぶだろう。それともう一件、5時くらいに呉鎮守府傘下の艦娘達が関門海峡通過の許可を求めてきた。久藤提督との間で事前に話はついていると大淀に確

認したので、そのまま通行させている。呉鎮守府傘下代表が提督に直接挨拶したいと言っていたが、提督がまだ起きていないと伝えたらまた伺うと言っていた。」

「そうか。久藤提督がさっそく動き出したか。とりあえず関門海峡の通行に関しては自由に通して構わない。だがそれ以上の事を言い出したら必ず私に確認してくれ。それと通過した艦隊の編成は分かるか?」

「6艦隊36人だな。おそらく索敵メインの艦隊が4つに主力艦隊が2つ。しかもそれが第一陣と言っていたからまだ増えるぞ。」

「久藤提督もずいぶんと力を入れているようだな。では準備をしてから執務室に行くから先に行ってくれ。」

「ああ……金剛、行くぞ。」

「……OK ナガト。」

さて、久藤提督が大きく動いたという事は、おそらく鶴野提督も対抗して大きく動くはずだ。海外艦の争奪戦で負けたくは無いだろからな。横須賀傘下の奴らも動くし、島津提督の態度から考えて佐世保も動くはずだ。こうなると北九州鎮守府から益田鎮守府あたりまでの海域で多数の艦娘が索敵をする事になるだろう。これでしばらくは深海棲艦の心配をしなくて済みそうだ。

執務室に入ると長門と大淀が話をしていた。昨夜も遅くまで執務をしていて、さらに自分が起きてくるよりも早く執務室に来ているか……

「提督、おはようございます。」

「ああ、おはよう。大淀、ちゃんと寝たのか?」

「数時間ですが寝ていますので問題ありません。もし気になるのであれば昼前には曙さんも起きてくるはずですので、曙さんに引き継ぎをしてから少し休ませて頂きます。」

昼前には自分も会を終えて鎮守府へと戻っているはずだし、それまでは大淀に任せるしか無いか。

「……分かった。それまでは頼む。あれから何か連絡はあったか?」

「いえ……驚くほど静かです。呉鎮守府傘下の艦娘達が通行許可と提督への挨拶を求めてきただけです。」

「他は何かあるか?」

「昨夜の戦闘に関する報告書が出来ていますので、ご確認ください。」

「ん? 川内達には今日の昼までに提出すれば良いと伝えただが? もう作って来たのか?」

「その……気付いた時には私の机の上にあって、艦娘は誰も知らなかったのおそらく小森さんかと。」

「なるほどな。」

そう言えば昨日の夕食のあたりから小森を見ていない気がする。どうにも余裕が無い時は小森の事を忘れてしまいがちだ……。だからこれも小森なりに存在感を示す為のアピールなのか?

「……提督、北条さんから通信です。」

「北条からだど? この忙しい時に面倒な……とりあえず代わろう……葛原だ。」

「おーほっほっほっ!! 聞きましたわよ葛原!! また新たに海外艦を二人も獲得したそうですわね? 流星は葛原ですわ!! これで私の派閥の名声も高まると思うものですわ!! おーほっほっほっ!!」

「はあ……それでなんの用だ?」

「まずは頼まれていた件の報告ですわ!!」

……頼まれていた件? 北条に何か頼んでいたか?

「……すまない。心当たりが無いのだがなんの事だ?」

「あら? 昨夜遅くに珍しく小森さんから連絡があつて、協力して欲しいと言われましたわよ? てっきり葛原からの依頼かと思っていましたか?」

「いや、小森の個人的な依頼だろう。それで小森から何を頼まれた? というか私からの依頼ではないのに私が聞いても良いのか?」

「ええ、これは葛原が欲しがる情報ですし、隠すような話でもありませんわ。本郷。」

「葛原様、失礼致します。小森様の依頼で各地の鎮守府の動向を探っております。あくまでも鎮守府の外から鎮守府の出入りを監視し



ただけですが、それなりの情報を集めております。」

各地の鎮守府の動向だど!? 確かにおおよその想像は出来るが、確実な情報が得られるならばそれに越した事は無い。昨夜小森が北条に無茶振りして、北条が執事の本郷さんに丸投げしたのだろう。本郷さんとその部下には同情はするがせっかく集めてくれた情報だ。無駄にするほうが失礼だ。

「それはとても興味があります。」

「後ほど詳しい資料は送りますのでざっくりとした説明だけ。まず呉鎮守府傘下の鎮守府ですが、小森様から連絡を受けて人員を派遣した時には既に動き始めていたようです。各地の鎮守府から艦隊が出撃したり輸送船が出港するのを確認していますし、柳井鎮守府で出入りする姿も確認出来ています。既に関門海峡を通過している艦隊もおりますので、葛原様もご存知かと?」

「ええ、それは確認しております。」

「次に舞鶴鎮守府傘下の鎮守府も慌ただしく動いております。こちらは益田鎮守府を拠点として動くようなのですが、各地から出撃した艦娘の数と益田鎮守府に到着した艦娘の数に大きな差があります。平時とは違い全ての鎮守府が一斉に動いておりますので、何か別の意図があるものと考えられます。」

ふむ・・・益田鎮守府に集まる者達は海外艦狙いの海域調査で間違い無いだろう。ならば残った艦娘達は通常の海域の警備つてところか? いや、もしかしたら広範囲を搜索するつもりか? 日本海側を支配している鶴野提督ならばそれも可能だ。

「なるほど・・・」

「次は横須賀傘下の鎮守府ですが、つい先程動き始めた鎮守府が多いです。輸送船も多数動いているのも確認しております。こちらは長門鎮守府を拠点に動くと聞いておりますが、秋田鎮守府に動きがないのでおそらくそこで一度合流して長門鎮守府に向うのかと。それと横須賀鎮守府からは大規模な艦隊が出撃したのも確認しておりますので、横須賀鎮守府も本気かと。」

ふむ、横須賀鎮守府傘下の奴らは呉や舞鶴に比べて一步出遅れた

か。呉や舞鶴がトップの権限で強引に動かしたのに対して、横須賀傘下は有志が集まるから仕方なく横須賀鎮守府が監督する事になっている。トップの熱量の差が如実に現れたか。それと横須賀鎮守府から出撃した大規模な艦隊は、おそらく叢雲が言っていた別海域の調査というやつだろうな。

「分かりました。それで佐世保傘下はどうでしょう?」

「佐世保傘下の鎮守府ですが、こちらはほとんど動きがありません。もちろん出撃する艦娘はおりますが、平時と比べてあまり差がないかと。もちろんこの後も監視は続けますのでご安心を。」

佐世保傘下の動きが鈍いか。島津提督の態度から考えると、熊井提督はともかく傘下の提督達は海外艦の獲得に強い関心があるはずだ。それに軍隊気質の佐世保ならば、上が命令を出せば迅速に動くのが当然で・・・逆に上からの命令で動け無いか!?熊井提督の性格ならば今回の件に関与しないのも頷ける。そして北九州鎮守府との演習であれば特に問題なくても、海外艦を探すために大規模な艦隊を組んで搜索しようとすれば、少なからず通常の艦隊運用に支障が出る。だから熊井提督に一蹴されて参加出来ない可能性は高いと思う。

「ありがとうございます。お陰様で大まかな動きが把握出来たので助かりました。ですがこれ以上は皆様の負担を増やすだけですし、欲しい情報はもう手に入りましたので、ご協力ありがとうございます。」

「そうですか。お気遣い感謝致します。またお役に立てる事がございましたらなんなりとお申し付け下さい。」

「ええ、また頼りにさせて頂く事もあるかもしれませんが、その時はどうぞ宜しくお願い致します。」

やはり北条工業の力は絶大だ。組織として大きいという事は自由に使える人員の確保が容易という事だ。北条に力を借りれば自分の手持ちでは出来ない事も簡単に行えてしまう。だからこそ頼り過ぎるのはマズイ。今回の件も北条への大きな借りになってしまおうし、こんな事を続ければ北条の派閥として取り込まれるのも時間の問題だ。北条自身は悪い奴ではないが、北条工業内部の派閥争いに巻き込まれ

るのは避けたいところだ。

「では私はこれで失礼致します。お嬢様。」

「ええ本郷、ご苦勞様ですわ。どうですか葛原？私の本郷は優秀でしよう？おーほっほっほっほっ!!」

「ああ、本当に優秀だな。それでここまで大きな情報を貰ったのだ、見返りに何を求める？」

「見返りですか？特に考えていませんわね？葛原も織田も小森さんも私の派閥ですから、派閥の主として支援するのは当然ですもの!!この調子で実力と名声を高める為に頑張りなさい!!おーほっほっほっ!!」

「いや、私は派閥に入ったつもりは無いと何度言えばわかるのだ・・・それでなにか無いのか？派閥に入れ以外でだが。」

「そうですね？葛原が借りを作るのを嫌うのは知っていますが、そもそも今回は小森さんからの依頼ですわよね？ならば私に借りを作ったのは小森さんになりますから、葛原は心配しなくて良いでしょう？だから葛原が恩を感じるならば小森さんに対してですわね。」

確かに今回は何故か小森が独断で動いた話だから、北条の主張も理解出来る。このまま北条と言いつても埒が明かないか・・・とりあえず個人的に借りを作ったと思っておくとして、後で小森から何故こんな事をしたのか聞き出さないといけないな。

「・・・分かった。ひとまずおいておこう。私もあまり時間に余裕が無いのでな。とりあえず今回は助かった。」

「また何かあれば遠慮なく言いなさい!!私は私の派閥を強化するためであれば、協力を惜しみませんわ!!おーほっほっほっ!!」

「・・・ああ、分かった。ではこれで失礼する。」

ふう・・・・・・貴重な情報は手に入ったが・・・小森の奴は本当に何を考えているんだ？小森が苦手になっている北条を頼ってまで動いたのはなぜだ？

## 216話（会見道中）

さて、北条と話をしたので会見まで余裕が無い。自分が居ない間の指示を出してすぐに出るか。

「大淀、海外艦の三人に正門に集まるように連絡してくれ。私もすぐに向う。」

「了解しました。連絡要員として誰か連れて行かないのですか？海外艦の三人を会見に出すのであれば、会見中に通信が出来る娘を準備したほうが良いかと。」

「・・・確かにそうだな。プリンツオイゲンに連絡要員を任せようかと思っていたが・・・」

さて、誰を連れて行ったものか・・・護衛を考えると春雨なのだが、前回の会見に連れて行った時にストレスで暴走しかけている。いざと言う時の保険にはなるが、それ以上に悪雨の件がバレるリスクが高い。海外艦と上手くやれそうなのは・・・イギリス生まれの金剛くらいだがあいつは今営倉に入れたばかりだ。

連絡要員としてだけ考えるならば、真面目で余計な事を喋らない奴が良いし、駆逐艦で充分事足りるだろう。真面目な駆逐艦で夜戦に参加してないとなると朝潮・吹雪・時雨・秋月・不知火あたりか？朝潮は真面目過ぎてなにかやらかしそうだから外すとして、時雨は留守中の春雨の精神面が心配なので残しておきたい。吹雪は面談の時になり緊張していたからプレッシャーに弱いのもかもしれないから外そう。残るは秋月と不知火か・・・不知火の方が寡黙で冷静なイメージがあるし不知火にするか。

「どうされますか？」

「・・・不知火に急いで準備をさせてくれ。」

「了解しました。すぐに手配します。」

「それと長門は今日も鹿島と一緒に演習の監督をしろ。人員は夜戦に参加した者以外で演習への参加を希望する者だけで良い。内容は長門と鹿島に任せるが、あまり鎮守府から離れないようにしてくれ。」

「ああ、この長門に任せておけ。」

「では行ってくる。」

とりあえず鎮守府の事はこれでなんとかなるだろう。あとは会見で上手く立ち回れば良い。面倒な事になるだろうがな……

のんびりと朝ご飯を食べる事が出来るこの時間、姉妹艦である不知火と一緒にこの鎮守府に拾われて良かったと思える一時だ。長門鎮守府が壊滅して多くの仲間が犠牲になった事は悲しいけれど、生き残った者の使命として力尽きるその時まで戦い抜く覚悟だ。けれどそれはそれとしてせつかく生まれ変わったこの世界で、たくさんの樂しみを見つげたいと願うくらいのがままは許されるはずだ。やっぱり人生は楽しまなくっちゃね♪

「ねえ、不知火。」

「なんですか陽炎？」

「あんたってなにかやりたい事とかある？」

「やりたい事ですか……」

「そうそう、なんかない？」

「そうですね……航行演習など良いですね。戦艦棲姫との戦いで不知火と朝潮は戦艦棲姫の砲撃に阻まれてしまいました。あそこで敵の砲撃を回避出来ていれば、戦艦棲姫に止めを刺していたのは不知火だったかもしれません。」

ここで真つ先に演習が出てくるかあ……不知火は相変わらず真面目だなあ……それにしても……

「もしかしてあたしにラスト取られて悔しかった？」

「そう……ですね。陽炎と比べてどうというよりも最後まで戦い抜けなかった己の未熟さが悔しいです。」

「なるほどねえ……なら演習頑張らないとだね。」

「ええ、早く実力をつけて司令のお役に立てるようになりたいです。」

ん？司令の役に立ちたい？長門鎮守府に居た頃の不知火は確かに真面目だったし自己鍛錬を怠らない娘だったけれど、司令に認められたいなんて言う娘じゃなかったと思う。まあ、あの原田提督からの扱いを考えれば好きになれないのも当たり前前かもだけど……それと比

べたらこの北九州鎮守府は物凄く居心地が良い。葛原提督を怖がる娘もいるし色々と噂を聞く事もあるけれど、少なくとも今まで接した感じでは真面目に提督をしている人だと思うし、私達へ色々配慮してくれていると感じている。つまり……

「ねえ不知火?」

「なんですか?」

「もしかして司令に惚れた?」

「ん?なにを言っているのですか?確かに上官として信頼出来そうな方だとは思いますが、戦果をあげてもっと認めて頂きたいという気持ちはありませんが……」

「なんだあ……この鎮守府に来てからすつごく待遇良いし、ご褒美に甘い物とか用意してくれるし、頑張ったら頭を撫でて褒めてくれる優しい司令だから、てつきりそういう話かなあって思ったのになあ……」  
この不知火の反応を見ると違ったっぽいなあ。不知火はあんまり表情に出ないタイプで周囲から怖がられちゃうけれど、お姉ちゃんの私から見れば凄く素直に表情に出るわかり易い娘だ。その不知火が本当に不思議そうにしているから、提督に惚れちゃった訳じゃないかあ。

「……」

「不知火?どうしたの?」

「いえ、なんでもありません。」

なんだろ?このちよつとニヤついてる不知火は?なーんか生意気な事を考えてるような気がする。

『不知火さん、不知火さん、提督から連絡要員として会見について来るようにとのご命令です。大至急最低限の艦装を装備して正門へと集合して下さい。』

『不知火了解しました。ただちに向かいます。』

「おつ、不知火お仕事みたいだね。」

「ええ、どうやら不知火の出番のようです。大至急との事なので食器の片付けを任せても良いですか?」

「うん、やつとくから急いで行つてきなさい。」

「お願いします。では行ってきます。」

お礼を言った不知火が最後にちよつとだけ勝ち誇つたようなドヤ顔をした事に一瞬イラツときたけれど、これくらいで喧嘩するのも馬鹿らしいわね。まあ、やる気があるのは良いことよね。さあて、不知火が居ない間に自主練でもして、今度一緒になった時に實力差を見せつけて悔しがらせてやろうかな♪

正門に到着すると既に海外艦の三人と最低限の艤装を装着した不知火が待つていて、門の外には憲兵隊の車が3台止まっていた。とりあえずビスマルクとプリンツオイゲンは仲良さそうに話をしている、アトランタは少し離れたところで佇んでいる。そして不知火はピシツと立っていたが、こちらに気が付いて敬礼をしてきた。

「待たせたな。」

「定刻通りね。まあ良いわ、行きましょう。」

憲兵隊に誘導されてビスマルクを先頭に乗り込む。それに続いてプリンツオイゲン、自分、不知火、アトランタの順で車に乗った。中は向かい合って座るタイプの座席で、こちら側に自分と不知火が座り、対面にはプリンツオイゲン・ビスマルク・アトランタの順で座った。とうかさつきから不知火がビスマルクとプリンツオイゲンを睨んでいるような気がするが気の所為か？元々目つきの悪い艦娘だし、勘違いの可能性もあるが……

「さて、会場に着く前にぎつと今回の件を説明しよう。特にビスマルクとアトランタは着任したばかりでほとんど状況がわからないだろうからな。」

「Nein 陸奥から少し聞いてるわ。日本では私達みたいな海外艦はすつごく珍しいそうね。だからたくさんの人が私達に興味を持っている。違うかしら？」

「ああ、その認識で間違いない。もっと言えば海外艦を保有する事は、その鎮守府の優秀さを示すステータスの一つとして考える風潮があつてだな……そのせいで海外艦の移籍を望む提督や、海外艦をドロップさせる方法が知りたいという提督が多い。だが私としてはお

前達を移籍させるつもりは無いし、海外艦をドロップさせる方法なんて本当に知らない。」

「ふーん、まあ、このビスマルクを手放したく無い気持ちはわかるわ。それで?」

「今回の会見はお前達を一般人に認知させて、私には海外艦を移籍させる意志が無いと断言するのが目的だ。そうして世間の目に晒す事で、大本営や他の提督達が強引な手を使い難くするのが目的だ。」

「ふーん?よくわからないけれどとりあえず私は大勢の人の前でこのビスマルクの勇姿を見せつけてあげれば良いのよね?」

「.....ああ、それで良い。」

「Hurra!!流石はビスマルク姉さま!!すっごくカッコいいです!!」

「Danke まあこれくらいは当然だけどね♪」

なんと言うかプリンツオイゲンは本当にビスマルクの事を尊敬しているのだな。とはいえこれはどうしたものだろうか・・・ビスマルクのプライドの高さはなんとなく気が付いていたが、これは揉め事の種類になりそうだ。とは言え会見で余計な事は喋るなど命令すれば、ビスマルクとビスマルクを慕っているプリンツオイゲンから反感を買いそうだ。むしろこちらを追及しようとする記者にぶつけてわざと問題を起こしてみるのもありか?ただの記者を相手にビスマルクが一喝すれば、その後がやりやすくなるかもしれない。このへんは臨機応変に対応するか。

「とりあえずはこれだけ知ってくれていれば充分だ。アトランタはなにか気になる事はあるか?」

「Ah・・・あたしはおかたいのが苦手なんだけど大丈夫かな?Brooklyn生まれだし。」

「別にそこまで緊張することではないだろう。艦娘が個性的なのは周知の事実だし、やる事は私が紹介したらあとは昨日作った台本通りに挨拶するだけだ。あとは私がやる。」

「そっか。それくらいなら大丈夫かな。」

「それと不知火は連絡要員として控えていてくれ。会見では特に喋る



必要も無いし、記者共が余計な質問をしてきても答える必要はない。」  
「ええ、了解しました。」

「それとさつきからずつとビスマルクを見ているようだが、なにか気になる事でもあったか？」

「い、いえ、大丈夫です。」

ふむ・・・なにかあるようだがこの場で言うつもりはなさそうか。ならばわざわざ問い詰める必要もないか。

「ふふつ、まあこのビスマルクの存在に目を奪われるのも無理はないわ♪私は気にしないからAdmiralも気にする必要ないわ。」

「Hurra!!流石はビスマルク姉さま!!懐の深さを感じます!!」

プリンツオイゲンに褒められてさらに気分を良くした様子のビスマルクに対して、隣の不知火の視線に少しだけ不満の色が混ざった気がする。不知火は表情の変化がほとんどないから断言は出来ないが・・・この会見が終わったら話でも聞いてやるか・・・ちなみにアトランタはビスマルクの言動に少しうんざりしているような雰囲気だ。こちらは表情に出ているのでわかりやすい。とりあえずは仕事の話を優先させるか。

「とりあえずもう一度自分達が書いた台本を読んでおいてくれ。自分達の生い立ちの事だから忘れる事はないと思うが念の為な。」

さて・・・会見がどう転ぶことやら・・・どうせ想定していないトラブルだって起きるだろうしな・・・

## 217話（会見前）

車内で会見での挨拶の練習をさせたが、特に指摘するところもなかった。あとは記者達から投げかけられる質問をこつちで適当に流してしまえば問題無いだろう。

「葛原提督、もうすぐ会場に着きます。」

運転手から声をかけられたがもうそんな時間か。

「ええ、分かりました。ではお前達も心の準備をしておけ。車から降りたらすぐに大量の記者達に囲まれて、写真をバシバシ撮られながら質問が浴びせられるだろう。だがそこで一切答える必要は無い。無視して堂々としている。常に見られている事を意識して、あまり無様な姿を晒すなよ。」

「ふーん？まあいいわ。ドイツ軍人がどういうものかを日本人に見せてあげるわ。オイゲン!!気を引き締めなさい!!」

「Ja!!私もビスマルク姉さまの隣に立つのに恥じない姿を見せましょう!!」

ほう？ビスマルクとプリンツオイゲンのまとう空気が変わったな。先程までは少し楽しそうな雰囲気だったのに、まるで戦場に向うかのような雰囲気だ。プライドが高いぶんこういう見栄を張るべき場所では気合が入るのかもしれないな。

「Ah・・・まつ、礼儀作法は自信無いけど、軍人らしく振る舞えつてくらいなら出来るよ。」

「軍人ならその程度で大丈夫だ。不知火も大丈夫か？」

「ええ、問題ありません。」

アトランタはあまり緊張していないようだし、不知火に至っては表情こそ変わらないものの、ビスマルク達よりも真剣な目をしている。これなら問題無さそうだな。そしてちょうど車も停車して周囲を憲兵隊が囲んで護衛の準備も整ったようだ。

「では行こうか。私、不知火、ビスマルク、プリンツオイゲン、アトランタの順でついて来い。」

そうやって車を降りると途端にフラッシュの嵐が巻き起こる。眩

しくて鬱陶しいが、とりあえず無視して憲兵隊が確保してくれる道を進む。ざっと周囲に目を配ってみるが、かなりの数の人間がこの付近一帯に集まっているようだ。この数は記者達と有力者どころか、もつと関係無い野次馬までいるはずだ。どれだけ海外艦の情報が流れているんだ？まあ、野次馬達は会場には入れないのだ。気にする必要は無い。

「葛原提督!!海外艦を手に入れたお気持ちをお答え下さい!!」

「どうやって海外艦を二人も獲得したのですか!?!」

「海外艦の今後についてどのようにお考えですか!?!」

「周囲の鎮守府や四大鎮守府との関係性をどのようにお考えですか!?!」

鬱陶しい記者達を憲兵隊が掻き分けながら進むと、ぽつかりとスペースの空いた場所に出た。……記者会見の事だけを考えていたのですっかり忘れていた。面倒事というものは一つ一つ順番に起こるのではなく、いくつも同時にやってくるという事を……。「貴様あ!?よくもこんな場所にのこのこと顔を出せたものだなあ!?!」

記者達を掻き分けた先には顔を真っ赤にした島津提督と顔を真っ青にした古鷹さんが立っていた。島津提督と直接会うのは初めてだが、写真は見た事あるしあの怒声は間違いない。向こうも護衛の憲兵隊がスペースを確保していたようだが、こちらの憲兵隊と協力して自分と島津提督が会話するスペースが作られる。はあ……どうしてこうもトラブルの方から寄ってくるのやら……

「はあ……島津提督、なんのご用ですか?ご覧の通り今から記者会見を開きますので、いきなり会いに来られても時間を作る余裕は無いのですが?」

ずんずんと近付いて来て胸ぐらを掴まれる。こいつ公衆の面前で立場ある人間が暴力行為だなんて正気か?とりあえずこの場で抵抗するのはマズイ。ここで提督同士の殴り合いなど演じれば、島津提督に巻き込まれて自分も処罰を受ける事になる。そうなれば大本営や虎視眈々と北九州鎮守府の秘密を探ろうとする奴らに大きな隙を見せる事になる。幸い証人となる奴らはそこらじゅうでバシバシと撮

影しているのです、いくらでも言い逃れは出来るはずだ。

「貴様という奴は!!いい加減に自分の立場を理解したらどうだ!?!」

「そのお言葉をそっくり返させて頂きます。ご自身の立場とこの状況をしっかりと考えて下さい。これが提督として正しい振る舞いですか?」

「貴様あああ!?!その腐った性根を叩きなおしてくれ!!」

「ぐっ!?!」

「司令!?!」

頭に血が上った島津提督から顔の右側に重い一発を貰ってしまった。老いているとはいえ鍛えている軍人からの一発は流石にキツイな・・・駆け寄って来た不知火に助け起こされながら立ち上がるが少し足元がふらつく。島津提督が思いつき殴った事でようやく憲兵隊も割って入ってきたか・・・というか島津提督が胸ぐらを掴んだ時点で割って入って欲しかった。

「ちよつと!!私のAdmiralになにするのよ!!」

「ビスマルク、下がっている!!他の者もだ!!島津提督、この一発は重いですよ?」

「あたり前だ!!貴様のようなひよつことは覚悟も鍛え方も違う!!」

いや、別に痛かったぞと言いたいわけではない・・・いや、物凄く痛いけれども・・・それと口の内側を切ったようで血の味がする・・・歯が折れて無さそうなのは幸いだな。

「はあ・・・そういう意味では無いのですがね・・・とりあえず会見の邪魔です。道を開けて下さい。」

「なんだと貴様あ!?!貴様のようなクズの性根は一発では治らんか!?!クソツ!?!離せ!!」

なおも暴れる島津提督を憲兵隊が抑える姿を周囲の記者達が大喜びで撮影している。これだけの証拠があれば言い逃れは出来ないだろうし、後は憲兵隊に任せてさっさと会見を・・・

「なんの騒ぎだ?」

自分の後方から重く響く声が聞こえる。このざわつく群衆の中でもはつきりと聞こえるし、それまで騒いでいた群衆が静まり返るくら

いの圧を感じさせる。割れるように道を開ける群衆の先には……

「熊井提督……ですか。」

「ああ、これはなんの騒ぎだ？」

巖の如き体格に軍人らしく鋭い目つき。他者を威圧する圧倒的な存在感。写真や通信越しではそこまで感じられなかったが、これこそが生粋の軍人なのだと言わんばかりだ。深海棲艦出現後にとりあえず軍人に仕立て上げた奴らとは格が違うな。

「お初にお目にかかります。北九州鎮守府所属の葛原です。ご存知かもしれませんが、本日海外艦の件で会見を開こうと思つて来たのですが、そちらの島津提督に妨害されて困つているところです。」

「妨害とはどういう言い草だ!? 貴様が「島津。」

また怒鳴り散らそうとした島津提督をたつた一言で黙らせる。

「島津、説明しろ。」

「先日からこのひよつこがふざけた態度をとるので性根を叩きなおしてやろうと「そんな仕事をお前に任せた覚えは無い。下つていろ。」

島津提督はなお言い募ろうとしたが、熊井提督に睨まれて引き下がった。流石の島津提督でも派閥のトップには噛み付けないか。

「……怪我をしているな。部下が迷惑をかけた。すまない。」

「いえ、島津提督を止めて下さつて助かりました。ですが熊井提督はどうして……へ？」

「会見を見に来た。構わんな？」

「ええ、それは構いませんが……」

「会見後に時間が欲しい。迷惑をかけた部下にけじめをつけさせねばならん。話し合いの場が欲しい。」

「ええ、分かりました。この会見の後に控室でお話しましょう。」

「分かった。憲兵隊の方もこの件は私が預からせて貰いたいが構わんな？」

「はい、熊井提督であれば信頼出来ますので。」

「助かる。」

北九州鎮守府から護衛としてついて来ていた金子さんに確認をとつて、熊井提督は島津提督を連れて去つて行く。

「では我々も会見の準備をしましょう。」

はあ………本当に想定外の事態だ。島津提督の殴り込みはまあわかる。ここから島津提督が泊まっていた博多鎮守府まで車で2時間かからない距離だ。自分が確実に姿を現す会見の場に来るのはある意味当然とも言える。しかし熊井提督がわざわざ足を運んで来たのは何故だ？普段から政治の話には一切興味を示さない熊井提督が何故？わざわざ会見を見に来たと言う事は、熊井提督も海外艦に興味がある？それと島津提督は熊井提督が会見に来る事は知っていたのか？知っていたらあんな問題を起こすような真似はしないと思うが、熊井提督の思惑でわざと問題を起こした可能性も否定は出来ない。さてどうしたものか。

「司令、まずは治療をしましょう。」

「ああ、頼む。」

控室に入ると真っ先に不知火にそう言われた。とりあえずうがいをするのと吐き出した水に血が混ざっているのがわかる。やっぱり口の中を切っていたか。そして施設の職員が用意してくれていたであろう氷や救急箱やらを不知火が持つて来る。

「司令、ここに座って口を開けて下さい。」

「ああ。」

「っ!?やはり出血が……でも傷はそこまで大きく無さそうですね。止血をしますのでそのままじっとしてして下さい。アトランタさんは頬の腫れを抑える為に氷を当てて下さい。いえ、氷の袋を直接ではなくてタオルで包んで、そう、そのままお願いします。」

不知火はピンセットでガーゼを掴んで頬の内側の傷に押し付けて圧迫する。外側はアトランタによって氷の袋が押し付けてある。傷も小さいようなのですがすぐに止血も終わるだろう。

「司令は普通に喋れていたので骨折はしてなさそうですが……少しずつ触っていきますので、痛いところがあったら右手を上げて下さい。」

不知火が頬骨や顎骨に沿って触っていくが、特に折れてる場所は無

さそうだ。それにしても治療の手際が良いな。これも軍艦時代の記憶のおかげか？

「……治療が終わりました。」

「ああ、助かる。」

「……あまり無茶はしないで下さい。」

「……気をつけよう。」

表情からは読み取れないが、不知火に心配をかけてしまったようだな。今回はわざと島津提督に手を出させたところもあるので、言い訳もないな。

「ねえAdmiral、なんであいつを殴り返さないのよ？いきなり殴られたのに殴り返さなかったらなめられるじゃない？無様な姿を見せるなってあなたが言ったのでしよう？」

「ビスマルクさん。司令にも立場やお考えがあります。考えなしに発言するのは控えて下さい。」

「なっ!?この私が考えなしですって!？」

「ええ、そうです。それとここは軍隊で司令は私達の上官です。上官を侮辱するのがドイツ軍人の礼儀作法なのですか？」

「へえ？私に喧嘩を売るつもり？故国を侮辱されたら私も黙ってられないわよ？」

「ビスマルク姉さま、お、落ち着いて下さい!!」

はあ……。今日も次々と面倒事が起こるな……。島津提督達の問題の次は艦娘同士の喧嘩か……。天龍に言われたみたいに、私は本当に呪われているのではないだろうか？

「不知火もそのへんにしておけ。」

「……すみません司令。出過ぎた真似をしました。」

「それとビスマルクも先程の発言は考えなしと言われても仕方ないぞ。あんな衆人環視の中で殴り合いなんて出来るか。それこそ後先考えない無様な姿だ。そんな直情的な人間は指揮官に向いて無い。」

「それは……。そうかもしれないけど……。」

「この話はここまでだ。さっさと会見を済ませる。打ち合わせ通りにするからついて来い。」

「はっ!!」「J a!!」「OK」

．．．．．バラバラな返事がこの四人のまとまりのなさを象徴しているようだ。海外艦を自分の艦隊として運用するのは、自分が想定しているよりもかなり難しいのかもしれない．．．

「戦艦に真正面から喧嘩売るなんて．．．やっぱり日本の駆逐艦は恐ろしい奴らだね．．．」



## 218話（海外艦お披露目会見）

憲兵隊の先導で会見の場に入ると、当然の如く猛烈なフラッシュに歓迎される。だが流石に主催者の自分が喋る前に質問する馬鹿はいないようだ。自分が中央のマイクの前に立ち、不知火が左後方で待機、右手側一歩引いたところから海外艦達が並ぶ。事前の打ち合わせ通りに出来ているようだし始めるか。

「北九州鎮守府所属の葛原です。本日は海外艦の情報公開の会見にお集まり頂きありがとうございます。今回は先日北九州鎮守府にて保護した3名の海外艦について簡単に自己紹介をしてもらいます。彼女達海外艦の艦娘はその名の通り外国生まれ軍艦の魂を持つ者です。当然の事ながら我々とは違う文化や考え方の国から来ていますので、考え方の違いに驚かれる方や偏見を持ってしまう方も多いかも知れません。ですがこの会見をきっかけに皆様に海外艦についての理解や見識を、もつと言えれば艦娘や鎮守府についても理解を深めて頂ければ幸いと思っております。今日はどうぞ宜しくお願い致します。」

そう言って一礼すると会場から大きな拍手が聞こえてくる。押し寄せている記者や有力者達からしたら、海外艦の情報が欲しいところに会見を開いたのだ。邪魔をする馬鹿は居ないか。少なくとも今はな・・・

「それではさっそく海外艦の自己紹介に移りましょう。ビスマルク。」  
ビスマルクに声をかけてマイクの位置を明け渡すと、堂々とした態度でビスマルクがマイク前に立つ。当然の事ながらカメラのシャッター音が響き渡るが、ビスマルクは一切動じない。

「Guten Tag 私はビスマルク型戦艦のネームシップ、ビスマルク。ドイツの誇るビスマルク級超弩級戦艦のネームシップ、それが私よ。ライン演習作戦でイギリスの巡洋戦艦フッドを沈め、最新鋭の戦艦プリンス・オブ・ウェールズを追い払う戦果を上げたわ。この日本でもその実力を見せつけてあげるから期待してなさい!!」

堂々と言い切るビスマルクに会場はどよめく。日本人にはあまり見られない強気な自己紹介に慣れていないからか？なにせよ滑り

出しは順調だな。ビスマルクが挨拶を終えてプリンツオイゲンと交代する時になって、ようやく大きな拍手が鳴り響く。

「Guten Morgen、ドイツ生まれの重巡、プリンツ・オイゲン。アドミラル・ヒツパー級3番艦です。ビスマルク姉さまとライオン演習作戦に参加し、その後もツエルベルス作戦、バルト海での対地支援、ハンニバル作戦と様々な戦いをくぐり抜けてきました。ここ日本でもビスマルク姉さまとともに戦い抜く事を誓います!!」

ほう？プリンツオイゲンと話した時はなんといかもう少し優しそうな雰囲気だったが、こういう凛々しい姿も見せられるのだな。会場もビスマルクで慣れたからかすぐに大きな拍手が鳴り響く。さて、最後はアトランタか。

「How is everything? あたしは、Atlantia級軽巡洋艦、その一番艦のAtlantia。アメリカのBrooklyn生まれ。防空巡洋艦として造られたから私がいるところでは、敵空母に好き勝手させないよ。大戦時は日本とは敵国だったけれど、今はこの日本で共に深海棲艦と戦う仲間だね。よろしく。」

一番不安だったアトランタも問題なく、会場に拍手が響き渡る。一応大戦時の敵国アメリカの艦娘だが、横須賀のタシケントも佐世保のガングートも旧ソ連、つまり敵国側だった艦娘だ。その二人が活躍している下地があつたからこそ、ここまですんなりと受け入れられたのかもしれないな。さて、あとは自分の番だな。

「えー、これで海外艦の挨拶は以上となります。今後の彼女達の活躍にご期待下さい。それでは私が皆様からの質問にいくつかお答えしようと思いますので、質問がある方は挙手をお願いします。」

そう声をかけると前の方に集まっている記者達が一斉に手を上げる。逆に後ろの方に控えている有力者達は静観の構えか。それにしてもきちんとして挙手して質問をしようだなんて、記者達は随分とお行儀良いじゃないか。こちらが情報を出す姿勢でいるから、下手に刺激して会見を中断する事を恐れているのか？

「えー、たくさん挙手頂いていますね。では前列右端の方から順番に一つずつお答えしましょう。」

「では、葛原提督は今回希少な海外艦を二人も獲得しましたが、その経緯についてお伺いしても宜しいでしょうか？」

「今回の戦闘は復興中の長門鎮守府を防衛するために、周辺海域の哨戒を行った事から始まりました。横須賀鎮守府が掃討した資材溜まりの調査も含めて哨戒していたところ、敵艦隊と遭遇しこれを撃滅。敵艦隊に輸送艦隊が居ましたので、輸送艦隊を送ってきた大元を探して撃破する為に、益田鎮守府と協力して索敵を行いました。その後おおよその位置を特定してから夜戦部隊を送り込み、北九州鎮守府の独力での撃破を達成し、ドロップ艦として現れた二人を保護しました。次の方どうぞ。」

「先程のお話では益田鎮守府と協力したとの事ですが、成果であるドロップ艦を北九州鎮守府のみが獲得するのはなぜでしょうか？」

「良い質問ですね。確かに益田鎮守府に索敵の協力はして頂きましたが、敵艦隊の撃滅は北九州鎮守府のみで行っております。もちろん事前にドロップ艦が出現した時は北九州鎮守府が貰い受けると、益田鎮守府の狐塚提督と取り決めをしております。軍の通信記録にもきっちり残してありますので何も問題ありません。次の方どうぞ。」

この事をはっきりと公表するのが今回の重要な目的の一つだ。軍の通信記録に残してあると言えば信憑性も高まる。提督目線で見ると大本営は信用ならないが、世間一般としては信用されているはずだ。というか深海棲艦への対抗組織が大本営率いる海軍しかないのだ、信用せざるをえないと言ったところか？

「では海外艦の今後についてはどうお考えですか？新人の葛原提督の元に海外艦が三人も集まる事を疑問視する声も上がっておりますが？」

「彼女らは北九州鎮守府の所属です。今後は北九州鎮守府の一員として、他の艦娘達同様に扱うつもりです。それと海外艦の移籍については一切考えておりません。この事については先日の会見でも少しお話しさせて頂きましたが、強さの象徴とも言われる海外艦を自分達の方ではなく他所から譲渡してもらおう。こんな恥ずかしい話も無いでしょう？ですから身の丈に合わないと思われようとも譲渡するつも

りはありません。次の方どうぞ。」

まあ、本当は政治的なゴタゴタや艦娘達の士気に関する問題など色々あるが、とりあえず体外的にはこれで押し通すでしょう。出来れば北九州鎮守府に海外艦の譲渡を要求する鎮守府を非難する空気感を作りたい。

「プリンツオイゲンさんに始まり、ビスマルクさんとアトランタさん。この短期間に3名もの海外艦を獲得された葛原提督ですが、希少な海外艦がこの短期間に3名も現れたのは異常な事だと思います。葛原提督はこの事についてどうお考えですか？」

「私としても異常さを感じているところです。海外艦がドロップした海域の異常については、各地の鎮守府が調査に協力して下さっているようです、じきに皆様に報告出来る事があるかもしれません。私が把握しているだけでも呉鎮守府傘下の方々と横須賀鎮守府傘下の方々が調査に向かっています。次の方どうぞ。」

異常があるのはあくまでも海域である。そのスタンスは絶対だ。そうでなくても北九州鎮守府は疑われているのだから、付け入る隙は与えたくない。

「葛原提督はこの短期間で多数の深海棲艦と戦い、その全てに勝利しているとお聴きします。この事についてはどうお考えでしょうか？」

「・・・ん？質問の意図がよくわかりませんね。私としては普通に哨戒と戦闘をさせているだけです、深海棲艦の多さについては集積地棲姫の影響とその残党だと考えています。戦勝が続いている件に関しては決して自分の実力だけでなし得た事ではありません。特に横須賀鎮守府の艦隊の助力が無ければ、北九州鎮守府は壊滅していました。これで構いませんか？」

「ええ、ありがとうございます。」

なんだ今の質問は？なんというか先程までの記者とは毛色が違うというか・・・よくわからん奴だ。

「では次の方どうぞ。」

「葛原提督は先程周囲の協力得て深海棲艦に勝利する事が出来たと仰っていました、亡くなられた原田提督や先程暴力沙汰に発展して

いた島津提督との関係を見てしまいますと、他の提督達との協力関係が上手くいつているようには見えません。しかも四大鎮守府の傘下に収まらずに独自で動いていますよね？そのあたりを含めて葛原提督の今後の方針をお聞かせ下さい。」

ほう？海外艦の事よりも私自身の事を聞いてきたか。まあ、あれだけ派手に島津提督は暴れたのだ。そこに触れないわけはないか。

「まず私はどこかの派閥の傘下に入るつもりはありません。その上で軍人として協力出来る範囲で協力してきましたし、今後もそうするつもりです。もちろん私はこの北九州鎮守府に派遣された提督です。で、北九州鎮守府とその周辺地域の安全確保が最優先です。他の鎮守府の事は要請と余裕があれば手を出す。これが私の方針です。次の方どうぞ。」

「葛原提督は士官学校で優秀な成績を修めていたとお聞きしますし、実際に提督として働き始めて短期間で優秀な成果を出されております。葛原提督をここまで鍛え上げて下さった士官学校の教官の方々になにか一言ありますか？」

「……は？ああ、失礼しました。生憎ですが私は士官学校の教官達のやり方が気に入らずに反発していましたし、当然教官達からは嫌われていましたのでなにか一言と言われても困りますね……ああ、でも一人だけこんな私を認めて下さって根気強く指導して下さいました方が居ましたね。その方には感謝しています。そろそろ時間ですし、次の方で最後にしましょうか。」

本当ならば士官学校の教官共はクズばかりで使い物にならないと言つてやりたいが、今はこのくらいで抑えておくべきだろう。ただでさえ島津提督や原田提督のせいで印象が悪いのだ。こんな状態で大本営や士官学校の実態を語ったところで、周囲の人間に対して攻撃的な葛原提督という印象が強まるだけだ。いずれは引きずり降ろしたい連中だが、もつと実力と実績を手に入れて発言権を得なければ相手にされないだろう。

「えー、では、葛原提督の今後の動向について、多くの国民が注目しております。ですので今後もこういう場を開いて、葛原提督や艦娘の皆

さんや鎮守府についての理解を深めていきたいと考えております。ですからまたこのような会見の場を開いて頂く事は可能でしょうか？」

最後の質問が次もまたこんなチャンスが得られるかどうかの確認・・・というか要請だな。一蹴するのも問題になるだろうし、かと言ってここで言質を取られるのも面白くない。最後の最後で面倒だな。

「あくまでも私の仕事は提督として北九州鎮守府とその周辺地域を守る事です。結局のところその仕事をする上で必要だと感じた事を実行するまでです。今回の件は海外艦についての見識を広める事が北九州鎮守府の利益になると判断しましたので、このような会見を開かせて頂きました。今後についても同様の判断を致します。」

これならば会見をまた開くとも開かないとも断言せずに済む。そして記者達に対して『こちらの足を引っ張るような記事を書けば、今後は会見を開かないかもしれないぞ?』と伝える事が出来る。記者達の様子も少し緊張感を増したように見える。

「それではこれにて会見を終わらせて頂きます。本日はお集まり頂きありがとうございます。」

全員で一礼して盛大な拍手に見送られて会見の場を後にする。ふう・・・とりあえずなんとかあったようだな。あとは熊井提督との話し合いか・・・こちらはこちらで気が重いが、島津提督から殴られて迷惑をかけられたぶんは吹っ掛けないとな。それに熊井提督の思惑も気になるところだ。

## 219話（熊井提督会話）

無事に会見を終えて控室に戻る。憲兵隊は控室の入り口で警備をするそうだ。おそろくすぐにでも熊井提督が来るだろう。

「お疲れ様 Admiral なかなか様になつていたわね。」

「ああ、ビスマルクも立派な挨拶だった。プリンツオイゲンもアトランタもだ。」

「ふーん？まあこのビスマルクにとっては当たり前の事だけど、称賛されるのは悪くない気分ね。」

「ドイツ軍人としてビスマルク姉さまの隣に立つなら、変な姿は見せられませんからね♪」

「まつ、提督さんが満足してくれたなら良かったよ。思ったよりスムーズに会見も終わったみたいだしね。」

「……そうだな。」

確かに気味が悪いくらいスムーズに会見が終わったものだ。記者達の質問を制限するように上手くコントロールしようとしたのは確かだが、それにしても上手く行きすぎたとも思う。自分を潰そうとする圧力が減ったからか？横須賀の海原提督とは元から敵対していないし傘下の奴らは政治的な搦め手を嫌う、呉鎮守府の久藤提督からは現状こちらを潰そうとする意思が感じられない。佐世保鎮守府の熊井提督はこういう搦め手は使わないだろうし、傘下の奴等が何か仕込んでいても熊井提督の目の前で仕掛けるのを自重した可能性がある。鶴野提督は当然潰しに来るだろうからここは変わらないだろう。大本営側は今回の件での動きが見えてこない。動かないのか動けないのかはわからないが、少なくとも現状では潰しに来てない。あとは有力者達が何一つ動きを見せなかったのも気味が悪い……

「……司令、何か気になる事でも？」

「……まあな。だが判断するには情報不足だ。そういえば北九州鎮守府から通信はなかったのか？」

「緊急の案件はありませんでした。呉鎮守府傘下の艦隊がまた通行許可を求めてきたので通した事と、長門さんと鹿島さんの指示のもとで

演習を始めたとの事です。司令の出された命令通りに動いてますので、司令への報告は余裕がある時にと大淀さんから言われておりました。」

「なら問題ないな。引き続き情報の共有を頼む。」

「はっ!!」

コンコンコン

「葛原提督、熊井提督と島津提督が来られました。」

「通して下さい。」

憲兵隊の金子さんの案内で島津提督と熊井提督が控室に入ってくる。熊井提督への敬意として立ち上がって敬礼で迎えると、艦娘達も自分に倣って敬礼をする。

「葛原提督、もしよろしければ隣にもう一部屋用意しておりますので、艦娘の方達はそちらで休ませては如何ですか？」

金子さんがそう提案してくるか…金子さんが気を利かせたのか、それとも熊井提督側からの要請があったのか？重要な話だから三人だけで話したいのか、自分と艦娘達を分断する事自体が目的なのか…

「その部屋にこちらの艦娘以外誰も居ない状態を確保して貰う事、連絡要員の不知火に連絡が入ったらすぐに取り次ぐ事。この二つをお約束頂けますか？」

「…分かりました。少しお待ち下さい。」

金子さんが一旦控室を出て、外の憲兵達に指示を出しているようだ。どうやら隣の控室には先客が居たようだな。自分と海外艦を含む艦娘達を分断してなにをするつもりだったのやら…

「お待ちせしました。お部屋の準備が整いました。」

「分かりました。ではお前達は隣で待機していてくれ。不知火は緊急の案件があればすぐに部屋の外で待機してる憲兵に取り次ぎを頼んでくれ。」

「了解しました。」

金子さんに案内されて艦娘達が退室して、部屋には自分と熊井提督と島津提督の三人だけとなった。



「お待ちせしました。では始めましょうか。」

「ああ、島津。」

「ぐ……カツとなって殴ってしまつてすまなかつた。」

ふむ、島津提督の表情からは不本意な謝罪である事が物凄く伝わってくるが、熊井提督の前だからとりあえず頭は下げるようだ。

「はあ……とりあえず謝罪の言葉は受け取りますが、熊井提督としてはこれからどうするおつもりですか?」

「まだ島津からの話しか聞いていない。お前の話を聞いておきたい。」  
「話……という今回島津提督から殴られた経緯でしょうか?それとも演習に関するトラブルから全て話をした方が良いですか?」

「な!?それは「島津、葛原提督の話を聞く約束だ。話したい事は全て話して良い。」

「分かりました。それでは。」

そこから自分目線での島津提督とのやり取りを全て熊井提督へと語った。演習の申し込みがあった事とその内容。深海棲艦の対応の為に日程調整を申し込んだが怒鳴られて話がかかず、古鷹さんに間に入って貰つてようやく話が進んだ事。深海棲艦討伐の為に日程の変更を伝えたさいに、強引に北九州鎮守府へと乗り込んで来ようとしたので、妥協案として古鷹さんを監視役として受け入れた事。海外艦ドロップの報告を古鷹さんから聞いて、勝手に不正をしたと決めつけて怒鳴り散らした事。そして今日の会見で待ち伏せされて、公衆の面前での罵倒と暴力。ここまで随分と迷惑をかけられたものだ。

「以上が私から見た島津提督とのやり取りです。」

「……部下が迷惑をかけたな。すまない。」

「そう言つて下さると助かります。それで熊井提督はこの一件をどう治めるおつもりですか?」

「今後島津を葛原提督とは関わらせないように命ずる。演習の為に持つて来た資材は詫びとして北九州鎮守府にそのまま渡そう。他の鎮守府との演習はどうしたい?」

とりあえず島津提督とこれ以上関わるのはごめんなので、島津提督を引き離してくれるのは助かる。資材を貰えるのは魅力的だが、公衆

の面前で殴られた件を考えると割に合わない気はする。まあ、まだ交渉は始まったばかりだな。

「そうですね・・・演習で経験を積む事は北九州鎮守府にとって貴重な経験です。可能であれば予定通りに進めたいところです。ですがまたこのようなトラブルに見舞われるのは困りますので、熊井提督から参加される提督達に一言頂ければと思います。」

「良いだろう。思いつくのはこれくらいだが、他に何か要望はあるか？」

「そうですね・・・今回の一件で世間に私と島津提督の不仲が広まる事になりました。これはそのまま佐世保鎮守府傘下の提督達全てと私が険悪な関係であると受け取られかねません。これは敵の多い私にとってはかなりデメリットです。それに私としては佐世保鎮守府を始めとして傘下の方々とは、軍事的な協力が出来る程度には関係を保ちたいと思っております。派閥争いなんかで鎮守府を潰してしまふなんて馬鹿馬鹿しいですからね。」

「ああ、当然だな。それで？」

「ですから私としては世間と佐世保鎮守府傘下の方々に対して、今回の一件できちんと和解した姿を示す必要があると考えています。ですが私は島津提督を信用出来ません。ですから島津提督よりも上の存在である熊井提督にその役目をお願いしたいです。」

「持って回った言い方は好きでは無い。」

「では単刀直入に。私が佐世保鎮守府を訪れて佐世保鎮守府の演習を見学させて頂きたい。そしてそれを記者達に取材させたいと考えております。」

こんな機会でもない熊井提督と関わる機会ほとんど無いだろう。まして佐世保鎮守府を訪問して演習を見学する機会なんてあり得ない。そして佐世保鎮守府傘下の連中が厳しい演習によって艦娘達を鍛えている事は有名だ。実戦でのふるい落としで損耗率が高いけれど、そのぶん新人の艦娘達を実戦投入出来るレベルまで鍛えるノウハウはどこよりも持っているはずだ。そのノウハウは練度の低い艦娘だらけの北九州鎮守府に今一番欲しいものだ。

「む？佐世保のやり方を教えろと？」

「ええ、私は熊井提督の傘下に入りたくはありませんけれど、熊井提督のやり方には興味があります。それは今後私が提督として戦い抜く為の大きな力となると確信しています。ですからこの条件を飲んで頂く事を今回の落とし前として頂きたい。」

そう伝えると熊井提督は目を瞑って黙り込む。傘下には入りたくないがノウハウは教えてくれなんて凶々しい話ではある。だが熊井提督は他に何か要望はあるかと問い掛けてきた事を考えると、島津提督の謝罪と資材の提供だけでは迷惑料として不足だと考えている可能性が高い。せっつかくなので部下がやらかした落とし前として良い条件を分捕ってやろうじゃないか。

「……良いだろう。好きな日に来い。案内に演習を統括させている香取をつける。」

「ありがとうございます。日程を調整して出来るだけ早くお伺いします。」

「では話はこれで終わりだな。島津。」

「はっ!!」

熊井提督の話は終わったと立ち上がり、島津提督と共に控室から出ようとする。

「熊井提督、最後に一つだけ宜しいですか？」

「なんだ？」

「そもそも今日の会見に来られた目的はなんですか？」

「お前がどういう人間か見に来た。それだけだ。」

そう言い残して熊井提督は今度こそ出ていった。部屋から出る時に島津提督がこちらを鬼の様な形相で睨んでいたが、正直に言ってもう島津提督に興味は無い。それよりも『お前がどういう人間か見に来た』か……熊井提督は派閥以外の人間に興味が無いのかと思ったが、少なからず注目されているのだな。

## 220話（仙崎さんの取材）

熊井提督と島津提督が退室すると、すぐに憲兵隊の金子さんが入室してきた。

「葛原提督、お話は終えられたようですが、これからどうなさいますか？一応面会の申し込みがかなり来ていますが？」

「事前に予約も無いのに一々相手に出来ません。とりあえずリストだけ鎮守府に持ち帰って、今後の対応はまた後で考えます。すぐに北九州鎮守府へ戻りますから、車の手配をお願いします。」

「そちらはいつでも出せますのでご安心を。」

「では行きましょう。」

控室から出て隣の控室で待機している艦娘達に声をかけると、即座に不知火が出て来た。扉の前で待機していたのか？

「司令、お怪我はありませんか？」

「ああ、大丈夫だ。それよりさつきと鎮守府に帰るぞ。」

「あら？もう帰るの？せつかくオイゲンがコーヒートを淹れたのだから、Admiralも飲んで行けば良いのに。」

ビスマルクがそんな事を言うので控室の中を覗いてみると、中で海外艦の三人が机で寛いで優雅にコーヒートを飲んでいた。おそらく控室に用意されていたインスタントコーヒートを使ったのだろう。呑気にコーヒータムとは・・・緊張感がなくなったか・・・

「はあ・・・お前達はなんでコーヒータムなんて飲んでるんだ？」

「え？私はお茶よりもコーヒータム派よ？まあ使った豆が悪いみたいだけど、オイゲンの腕のおかげで及第点ってところかしら？」

「ありがとうございますビスマルク姉さま。もっと美味しく淹れられるように頑張りますね♪」

「いや・・・そんな話は聞いてない・・・」

「Ah・・・提督さん？案内の人から自由に使って構わないって言われたんだけど・・・まさかだったかな？」

正直に言っただけが緩んでいると言いたいが、この控室には北九州鎮守府の艦娘達だけしか入れない状態だったし、この施設の職員が準備

して使用して良いと言ったにも関わらず、それを使用して怒るのもな・・・私は部屋の備品を使うなんて命令は出していないしな・・・」

「……まあ、許可を貰っているなら良い。とりあえずさっさと・・・」

「葛原提督、少し宜しいですか？」

「金子さん・・・なんででしょう？」

「今新しく面会の申し込みに来た記者がいるそうなのですが、少し気になる事を言われたそうでした。」

「気になる事・・・ですか？」

「はい、なんでも葛原提督から依頼された仕事が終わったので、葛原提督とお話がしたいとか。ここ数日で何度か鎮守府の方にも足を運んだそうですが、来客を断られていたのでお会い出来なかったとか。何か心当たりはありますか？」

記者に依頼？・・・そう言えば綾瀬さんの調査を頼んだ記者が居たな。名前は確か仙崎さんだったか？

「その方の特徴とかは覚えていますか？」

そう尋ねると金子さんは報告に来ていた若い憲兵に視線を向ける。

「ええ、女性の方でその・・・足を怪我されているようでした。お名前前は仙崎情報社の仙崎さんです。」

ならば仙崎さんで間違いなさそうだな。だが何故直接持つて来た？資料の事はすっかり忘れていたが、資料が完成したら入り口の憲兵隊に渡して貰えば良いと伝えたはずだが・・・万が一にでも憲兵隊に見られたら困ると言う事か？それに何度か来ていると言う事は面会の申し込みをしている可能性も高い。他にも面会の申し込みは多数あったから、紛れて見落としてしまったかもしれないな。

「その記者の方は今どちらに？」

「面会希望者の皆さんは待機していただきますのですぐにお呼び出来ます。」

すぐ呼べる状態か。正直ここに長居するのは本意では無いが、自分から仕事を依頼しておいてほったらかしというのも不義理だ。作戦行動中ならともかく今は時間がとれるしな。

「では仙崎さんだけ対応しますので、連れて来て頂けますか？」

「はっ!!」

「プリンツオイゲン、コーヒーの準備を頼む。」

「Ja!!」

「不知火はついてこい。ビスマルクとアトランタはここで待機していろ。」

「はっ!!」「わかったわ。」「OK」

艦娘達の控室を出て、元いた控室の方にまた戻ってくる。先程まで座っていた椅子に座ると、不知火は自分の斜め後ろに立って、直立不動の姿勢で待機している。やはり気の抜けていた海外艦達と違って、不知火は緊張感を持って仕事をしてくれているようだ。

コンコンコン

「葛原提督。お客様をお連れしました。」

「どうぞ。」

「失礼します。仙崎情報社の仙崎まどかです。本日は急なお話にも関わらず、貴重なお時間を頂きありがとうございます。」

「いえ、こちらこそ何度かお伺いして頂いたにも関わらず、対応が出来ずに申し訳ない。立ち話もなんですからどうぞお掛け下さい。」

「ありがとうございます。」

仙崎さんがゆっくりと座ったので、さっそく話を切り出す。

「今回は先日依頼していた綾瀬さんの調査資料をお持ち頂けたと聞いておりますが?」

「ええ、こちらに。調べたらすぐに出てくるような簡単な資料ですが。」

「拝見します。」

手渡された封筒を開けて中の資料を確認する。北九州市で不動産会社社長の次男として生まれ、それなりに良い大学を卒業して実家の不動産会社に就職、深海棲艦襲来後は街の復興のために、街から再建部門の指揮者として雇われた事が書いてある。再建部門の仕事内容としては被害の把握と復興の計画案の作成。どの区画を優先的に復興するか、どの区画を放置したり瓦礫等の廃棄場所として利用するかなどを決めているようだ。綾瀬さん自身についての評価は、仕事が出来る人間で人当たりも良いとの事だ。まあ、あの人は有能だと感じた

し世渡り上手だとも思う。裏では色々やってるだろうが・・・

「・・・なるほど。やはり優秀な方なのですね。」

「そうですねえ。再建部門の部下の方々や取り引き先の業者の方々からも評判は良かったです。ただ黒い噂もチラホラとありました  
が・・・」

「でしようね。」

「それと昨日綾瀬さんは正式に市長に任命されましたよ。」

「ほう？随分と早いですね。」

「まあ、このご時世ですからねえ。いつまでもトップ不在は困りますから。それに今回は東雲さんが辞退したので、信任投票になったのも大きいですね。」

副市長の源さんは憲兵隊に捕まり、明日への希望党の東雲さんは辞退か。自分が東雲さんを支持しなかったから、バックについてた政治家達も綾瀬さんの方に鞍替えしたのだろうか？どちらにせよ綾瀬さんが市長になったのならばやりやすい。

コンコンコン

「Admiral プリンツオイゲンです。」

「入れ。」

「失礼します。コーヒーをお持ちしました。」

「ああ、助かる。」

「おお!? コーヒーですか!?!このご時世ですとなかなかお目にかかれないので嬉しいですよ。」

「そうですね。こういう嗜好品を融通して貰えるのも提督の特権の一つですね。有難い事です。」

市販にはほとんど流通していない品物でも、提督をやっているか何かと手に入る。それだけ提督達は優遇されていて、同時にその働きに期待されていると言う事でもある。

「それに噂の海外艦の方にコーヒーを淹れて頂けるなんて光栄です!!」

「Hurra♪喜んで貰えて嬉しいです♪不知火さんもいかがですか？」

「いえ、不知火は職務中ですので必要ありません。」

「そうですか・・・なら鎮守府に戻ってからは是非ご馳走させて下さいね♪」

「・・・ありがとうございます。」

不知火は相変わらずキリツとした表情を崩さないが、もしかするとコーヒーが苦手なのだろうか？コーヒーは苦味があるから苦手とする者もいるだろう。まあ、このあたりは不知火とプリンツオイゲンの個人的な話なので口を出す必要はないな。とりあえずコーヒーを少し飲んで心を落ち着けてから話を再開する。

「さて、少しお聞きしたいのですが、綾瀬さんに関する調査結果を何故入り口の憲兵隊に預けなかったのでしょうか？」

「あー、その件ですか・・・なんと言いますか・・・綾瀬さんの事を調べていると、どうも監視されていたようでして・・・念の為に直接お渡しして、この件を葛原提督にもご報告しようかと思いましたが。」

「やはりそうでしたか・・・直接なにかされたりは？」

「いえ、直接的な動きは無いですね。影からコソコソ見られてるくらいです。あ、でもうちが葛原提督に独占インタビューをした件でネチネチ絡んでくる奴らはいたみたいで、そちらは夫が対応してくれました。」

「それは・・・大変でしたね。」

「いえいえそんな!!葛原提督のおかげでうちの売上は過去最高でしたし、絡んで来た人達には夫が平和的に解決しましたから。いや〜お陰様でかなり儲けさせて頂いております。私としては街の皆さんが笑顔になるのが一番ですけど、やっぱり先立つものは必要ですからね。」

商魂逞しいな。小さな会社だとしても新聞社の端くれという事か。いや、小さいからこそ大手に潰されないように逞しくなったのかもな。うちも見習わなくてはな。

「そうですね。やはり資金は無いと活動出来ませんからね。それでは報酬の件ですが、あいにく出先なので今は手持ちがなくてですね。後で会社の方に届ける形で良いでしょうか？」

「あ!!その件ですが報酬は金銭ではなくて、噂の海外艦に直接インタ



ビューする権利とかでお願い出来ませんか!?先程の会見で多少の情報は頂けましたが、まだまだ気になる事がいっぱいですから!!」

「ん・・・海外艦への直接インタビューですか・・・流石にそれは欲張り過ぎではないでしょうか?」

「むむ・・・では私が色々と見聞きした噂話なんて如何でしょうか?きつと葛原提督のお役に立つものもあるかと思えますが?」

ふむ・・・噂話か・・・流石にこの状況で鎮守府と関係の無い話をするような馬鹿には見えないし、なにかしら有益な情報が得られるかもしれないか・・・

「噂話ですか?確たる証拠がなければ話半分聞くしかないですが・・・」

「それはそうですが・・・頭の片隅に入れておく価値はあるかもしれませんよ?」

「流石に話を聞かなければ価値があるかは判断出来ませんね。」

「んー、では先にこちらがお話しますので、葛原提督がその噂話に価値があると思っただぶんだけ海外艦へのインタビュー時間を伸ばすかどうかでしよう?」

ふむ、噂話を先に話すのは最低条件だし、海外艦へのインタビューをする事が前提の提案だ。ただし噂話への評価はこちらに一任されているので、価値が無ければ一蹴してしまえば良いか。

「分かりました。一先ずお聞きしましょう。」

「ありがとうございます!!まあまずは葛原提督が久藤提督から気に入られたって噂ですかねえ。なんでも久藤提督が北九州市の有力者の方々に『北九州鎮守府の邪魔をするな』って言ったらしいですよ。現に平川副市長と大森前提督のご遺族がそれに逆らって消されたとの話も聞きますし、信憑性は高い話かと。それで北九州の有力者の方々は葛原提督を怖がっているとか?」

ふむ、確かにそれは自分も感じていたところだ。久藤提督とは敵対関係ではあるが、きちんと交渉が出来る相手でもある。久藤提督としても北九州鎮守府に自分を置いておくメリットがあるから、現状維持しようとしているのだろうか。

「なるほど。そのわりには今日は北九州の有力者の方々から面会の申し込みが多数来ているようでしたが？」

「それは葛原提督に取り入ろうとしているのではないでしょうか？ ようは葛原提督の邪魔をしなければ久藤提督の怒りを買う事は無いのですから。」

はつきり言って擦り寄って来たり面会に時間を使わされる時点で邪魔なのだが、これを言うとは仙崎さんを怖がらせてしまうか。今まさに時間を使っているわけだし。

「そうですね。他には何かありますか？」

「ではこういうのはどうでしょう。一部の記者達が葛原提督を新たな英雄として祭り上げようとしているとか。」

「……は？」

「いやまあこれもわかる話ではありませんよ？ この着任してからこの短期間で姫級の討伐に海外艦を三人も獲得しているのですから。東の英雄海原提督と西の英雄熊井提督、その二人に続く新たな英雄の誕生だって騒いでも仕方ないですよ。」

「待って待って、北九州鎮守府は横須賀鎮守府と佐世保鎮守府と比べたら、その戦力差は歴然だ。それで英雄扱いなんて何かの冗談だろうか？」

「うーん？ そのあたりは一般人には理解が難しい話なんですよねえ。一般的な感覚としては横須賀鎮守府が一番凄くて、佐世保鎮守府が次にすごい、呉鎮守府と舞鶴鎮守府がその次にすごい。これくらいの感覚ですから。それと新聞記事にするならインパクトのある内容の方が売れますから、そういう記事を書くところもおかしく無いですよ？」

言われてみれば確かにそうだ。軍に関わりを持たない一般人が鎮守府の戦力差なんて理解出来る訳がない。それこそ四大鎮守府は凄いらしい程度の認識でもおかしくない。そして姫級討伐・海外艦獲得なんて大きなニュースならば注目も浴びるか……

「なるほど……確かに私も提督としての目線では物事を見て居なかつたようですね……」

「あはは。それは仕方ない事ですよ。それとこの件は先程の久藤提督の件とも絡んできますね。葛原提督を批判する記事を書けないなら、いつそ絶賛する記事を書いてしまえってな感じです。鶴野提督の派閥の記者さん達は相変わらず批判的な記事を書く気満々なようですが。」

「そこは変わらないでしょうね。」

「とりあえず葛原提督周辺の噂話で大きいところはこのくらいですがいかがですか？」

ふむ、鎮守府の人間からは見えない斬新な視線での話もなかなか興味深いな。今後定期的に外の情報を集める為に役立って貰いたいし、ここはきちんと利益を提供しておくか。

「ええ、面白い話が聞けたと思います。プリンツオイゲン、隣の部屋からビスマルクとアトランタを呼んで来てくれ。」

「Ja!!」

「やったあ!!葛原提督、ありがとうございます!!」

「いえ、こちらとしても今後面白い話を聞きたいところですし、お互いに良い関係を築きましょう。」

「はい!!是非よろしくお願い致します!!」

お互いに笑顔で握手をする。情報収集の為にこの関係を今後も活用するでしょう。

## 221話

ビスマルク達を呼んでから約一時間。仙崎さんによるインタビューはまだ続いていた。軍艦としての来歴は会見で語られていたのでそこそこに、日本に来た感想や今後の意気込みを聞いて、そして今は趣味嗜好の話で盛り上がっている。

「ええ、ですから日本でもビールやソーセージの生産はされていますよ。昔に比べれば流通量は激減していますけれど、一般人でも頑張れば手が届くくらいには出回ってますね。もちろん日本人の好みに合わせた品になりますから、本場ドイツのものとは少し違うかもしれませんが。」

「悪くない情報ね。流石は新聞記者つてところかしら。日本のビールとソーセージも試してみるわ。」

「ありがとうございます♪やっぱり故郷の食べ物は恋しくなりますよねえ。」

「あ!!仙崎さん、チーズはありますか?私もビスマルク姉さまもチーズが食べたいのですが、なにかご存知ですか?」

「チーズも比較的手に入り易いですよ。沿岸地域で行う漁業と違って、山間や平地で行う酪農関係は深海棲艦からのダメージをあまり受けていませんし、海沿いから避難した人達の人手もあつて復興も早かったですから。まあ、流通の関係で近場の酪農家を作るものしか流れて来ないのですが、これも一般人でも頑張れば手が届くレベルですね。」

「なるほどなるほど。頑張つて探してみます!!」

「ええ、是非日本のチーズも食べてみて下さい♪アトランタさんは何かお好きな物とがありますか?」

「そうだね・・・日本の食事でも悪くないけど、やっぱり朝食はタマゴ2つとフライドベーコンが良いね。」

「卵はどこでも入手出来ますし、ベーコンも入手可能ですね。アトランタさんもやっぱり日本食よりも洋食のほうが好みでしたか?」

「そうだね。でもまだ着任したばかりだから慣れてないだけかも。そ

れにこの国だつて戦時中なんだから、まともな食事が出てくるだけありがたい事だし、あんまり我儘言えないよ。」

「ふむふむ、確かにそうですねえ……個人的には艦娘の皆さんにはいっぱい食べて英気を養つて頂きたいですが、鎮守府にも色々な事情があるでしょうから……」

ふむ……あまり長く続けさせると、鎮守府の事情を好き放題喋つてしまいそうだな。海外艦達は着任して間もないから、あまり情報は持つて居ないだろうが。

「んんつ、それなりに長くなりましたし、そろそろ鎮守府に戻ろうと思うのですが?」

「あ、はい。本日は貴重なお時間をとつて頂きありがとうございます。これで海外艦の皆さんの魅力を北九州の人達に伝える事が出来ます!!」

「ではまた何か面白い話があればお聞かせ下さい。それとまた調べ事をお願いするかもしれません。」

「ええ、お任せあれ!!また取材させて頂ける日を楽しみにしてますね♪ではこれで失礼致します。」

仙崎さんは一般人なのにピシツと敬礼をしてから控室から出て行った。なんというか記者にしては嫌味が無くてやりやすい人だったな。いや、それさえも仙崎さんの術中かもしれないな。

「不知火、鎮守府からなにか連絡は?」

「特に変わった事はありませんでした。演習の方も参加希望者が多く、熱心にやっているとのことです。」

「それは良い。では帰るぞ。」

「随分と慌ただしいのね。まあいいわ。あの記者さんが言つた事は気になるし、帰りにお店に寄つてみたいのだけけど?」

「ビスマルク……もう少しよく考えて発言してくれ。お前達が街に出れば人が群がって買い物どころじゃなくなるぞ?街に混乱を引き起こすつもりか?」

「えっ?じゃあどうやって買い物するのよ?」

「外部の業者とのやり取りは明石に任せているから、明石を通して買

い物をしてもらう事になるだろう。それにお前達は着任したばかりでまだ給料を貰っていないだろう？基本的な衣食住は提供するが、嗜好品などの個人的に買いたいものは自分の給料で買って貰う。」

「ふーん、それが日本海軍のルールなのね。」

「日本海軍のやり方ではなくて私のやり方だ。このあたりのルールは鎮守府によってバラバラだ。ついでに言えば着任からのゴタゴタと資金面の問題から、まだシステムとして運用出来てない段階だ。他の者達にも我慢を強いている状態だから、お前達だけを特別扱いするわけにはいかない。もうしばらくは我慢しろ。」

そう言い放つとビスマルクは顔を引き攣らせ、プリンツオイゲンはオロオロし、アトランタは諦めたようにため息を吐く。

「はあ・・・随分と息苦しいところに着任してしまっただみたいね・・・」  
「否定はしない。行くぞ。」

ビスマルクとの会話を打ち切って控室を出る。とはいえ給料と買物のシステムを立ち上げなければ、艦娘達の不満もドンドン溜まってしまう。幸い島津提督との一件が片付いたので、今日は余裕があるはずだ。前任者の大森提督の私物を売却してある程度の資金もあるし、そのあたりのシステムの構築に取り掛かるか。

控室を出て憲兵隊に護衛されながら外に出ると、待つてましたとばかりに記者達に囲まれる。それなりに長い時間仙崎さんと話していたのにご苦労な事だ。とりあえず記者達を無視して車に乗り込もうと思ったが、一つだけ告知しておきたい事があるのを思い出して、艦娘達を先に車の中に入らせる。

「あー、一つだけお伝えします。先程熊井提督と話し合いをして佐世保鎮守府関連のवादかまりは解消されました。そして友好の証として後日私が佐世保鎮守府を訪問して、佐世保鎮守府の演習を見学させて頂く事になりました。そしてその様子を何名かの記者に取材して貰う事になりそうです。」

「おお!!それは素晴らしい事ですね!!その際には是非うちに取材をさせて下さい!!」

「いえ!!我々にお任せ下さい!!」

「うちの会社は葛原提督の味方です!!是非うちにお任せ下さい!!」

想定外のチャンスに色めき立つ記者達を制する。うるさい記者達もこちらが発言しようとするれば、一言一句逃さぬように集中する。

「どこの会社の記者を呼ぶか、何名の記者を呼ぶかなどは熊井提督との相談になりますが・・・熊井提督も私も煩わしいのを嫌う性格です。あくまでも演習の見学が主目的ですので、それを邪魔するような取材はお断りします。この事を理解された方からの取材申し込みをお待ちしております。」

「どういう事ですか!?我々が邪魔だと言うおつもりでしょうか!」

「そんな閉鎖的なお考えでは国民の理解は得られませんよ?」

「全国民に対して説明をする義務があると思わないのですか!」

ほう?これだけ言って引かないと言う事は、こいつらは鶴野提督派の記者達か?それともただの馬鹿なのだろうか?とりあえず大半の記者は言葉の意味を理解して騒ぐのを止めたようだが。というかこいつら会見の時は大人しくしていたのに、なんで今更騒ぎ出す?・・・もしかしてこいつら会場入りを断られた奴等か?

「私から話す事は以上です。それでは。」

それだけ言い残して車に乗り込むと、金子さんの指示で動き出す。

「金子さん、一つお聞きしたい事があるのですが?」

「はい、なんででしょう?」

「今回の会見ですが、会場に入れなかった記者達もいるのでは?」

「ええ、もちろんです。会場の収容人数も限られておりますし、警備の都合で危険そうな人物を中に入れる訳にはいきませんから。」

「なるほど。その判断は久藤提督の意向ですか?」

「いえ、憲兵隊として当然の判断です。我々としては葛原提督の身を守るのが一番の務めですから。」

「そのわりには私に敵意を抱いている島津提督をあつさり引き合わせましたけどね。胸ぐらを掴まれても殴られるまでは止めに来ませんでしたし。」

「あー、その件は申し訳ございません。こちらの不手際でした。」

そう言つて金子さんは素直に頭を下げる。言い訳の一つもしないか・・・だが金子さんは久藤提督との繋がり強い憲兵だ。ならば今回の事も久藤提督の思惑が働いていると考えるのが自然だ。記者達とおそらく有力者達も選別したのは久藤提督なりの支援だろう。それと鶴野提督相手への妨害だな。となると島津提督の行動を阻止しなかったのは何故だ？北九州鎮守府と佐世保鎮守府側との関係悪化を狙ったか？それともただ単に佐世保鎮守府関連への干渉を避けただけか？

「まあ、この件は良いです。とりあえず会場に入っていたやけに物分の良い記者達は、久藤提督の息のかかった金子さん達が選んだ記者だった。そういう事で良いですか？」

「・・・あまり穿つた見方をしないで頂きたい。あくまでも私達が葛原提督を警護するために必要だと判断して行つた事です。それでもご納得頂けないのであれば、今後は葛原提督が招待した方のみを会場に入れるなどの対応を取られてはいかがでしょうか？警備の観点から見れば随分と楽になるのですが？」

とりあえず金子さんは久藤提督の意志でやったとは認めないか。ふむ・・・ここまで強く否定されると、久藤提督の意思か金子さんの独断かは判断出来ないな。

「はははっ、私が招待した記者だけとなると、数人しか呼ばれない記者会見になってしまいますね。なんにせよ会見がスムーズに進んだのは事実ですし、お心遣いに感謝致します。今後もお任せしますのでよろしく願います。」

「ええ、ご理解頂き感謝致します。今後も我々にお任せ下さい。」

仲直りと言う事でお互いに笑顔で握手するが、お互いに相手の事を信用してはいないだろう。金子さんは久藤提督の判断次第で裏切る人間だ。そんな人間に護衛を委ねなくてはならない現状が歯痒い・・・かと言つて信頼出来る人物は居ないし、自分の命令に従う艦娘達では人間の悪意を止められない。だから現状ではこの信用出来ない相手と上手く付き合つていくしかないか・・・



## 222話

鎮守府へと到着すると入り口に憲兵隊以外に数人立っていた。こちらに近付こうとするのを憲兵隊に阻まれたので、口々に面会を求めてなんとか話をしようとしてくる。

「はあ・・・会見の会場だけでなくここでもお出迎えですか・・・」  
「葛原提督がほとんど対応なさらないですから、あれくらいは日常的に来られてますよ。」

「そう言えば面会希望者のリストもかなり溜まっていましたね。」

「ええ、かなり溜まっているかと。ですが我々は我々の職務を淡々とこなすだけです。対応なさるかどうかは葛原提督が決められて下さい。」

「ええ、助かります。それではこれで。本日は護衛して頂きありがとうございます。ありがとうございました。」

「いえ、これも仕事ですから。」

金子さんに謝辞を伝えてから鎮守府の門をくぐる。当然面会希望者達は無視だ。数が多いのに一々相手をしてもらえない。

「ねえ、会見の会場でも思ったのだけど、Admiralと話がしたいって人間は多いのよね？話くらい聞いてあげたらどうなの？」

「優先順位の問題だな。私の職務はこの北九州鎮守府の防衛だ。面会の予約をきちんと取った人は対応するが、直接押し掛けて来た人間を一々相手にはしない。それをするとな面会希望者リストに載っていて、きちんと順番待ちしてる人達に不義理だろ？」

「それは道理ね。でもさっきの・・・あの女の記者とはすぐに面会したわよね？」

「それは仙崎さんに私が仕事を依頼していたからだ。仕事を依頼しておいて仕事が終わったのに会えませんかでは話にならないだろ？」

「それもそうね。」

とりあえずビスマルクは納得してくれたようだ。ビスマルクはなかなか扱いの難しい艦娘のようだが、わからない事をすぐに質問してくるのは長所とも言えるか？まあ、今後の活躍を見て判断するべきだ

な。

「お前達、今日は会見への参加ご苦労だった。もうすぐ昼食だから各自食堂に向うと良い。私は執務室に寄って来る。」

「了解しました。大淀さんには連絡しておきます。」

「ああ、頼んだ。」

さて、とりあえず大淀の報告次第だが、ひとまず気になるのは演習の報告と久藤提督の動きだな。あとは小森が何故北条に頼んで各地の鎮守府の動きを調べたかも気になるところだ。

Admiralがぶつぶつなにか呟きながら去って行く背中を見つめて、ついたため息が出てしまう。なんだか悪い人じゃ無さそうなんだけど、よくわからない人ね・・・

「ふう・・・なんだかモヤモヤするわね・・・まあいいわ、オイゲン、食堂に行くわよ。」

「Ja!!今日のお昼ごはんはなにかなあ♪」

「ビスマルクさん、少しお話ししいですか?」

昼食で気分転換しようとした私を目つきの悪い駆逐艦が引き止める。なんかこの駆逐艦はさつきから私に食って掛かるのよね?まあ、このビスマルクを前に物怖じしない度胸は認めてあげるわ。

「良いわよ。オイゲン、先に行って席を取っておきなさい。」

「いえ、出来ればプリンツオイゲンさんとアトランタさんにも聞いて欲しいです。」

「あ、はい・・・分かりました。」

「え?私も?はあ・・・あんまり喧嘩に巻き込まれたくないんだけど・・・」

「いえ、不知火は喧嘩がしたい訳ではありません。」

随分と鋭い目つきで睨んでくるけれど、これで喧嘩を売ってきてる訳じゃないの?日本の駆逐艦はよくわからないわね。

「ふーん?まあいいわ、それで?」

「先程はつかつとなつてビスマルクさんの故郷を侮辱するような発言をしてしまいました。申し訳ありませんでした。」

なにを言い出すかと思っただけいきなり謝罪ですって？深々と頭を下げてる姿を見れば誠意は伝わってくるし、間違いを認めてきちん頭を下げさせたのに許さないのは狭量で恥ずかしい奴ね。

「謝罪は受け取ったわ。だからドイツ軍人の誇りにかけて、今後はこの件であなたに何か言うつもりはないわ。オイゲンも良いわね？」

「Ja!!ビスマルク姉さまとシラニーさんが仲直り出来て良かったです♪」

「不知火です。」

「Ups!?!ごめんなさい!!えつとシラヌウイさんで合ってるかな？」

「・・・少し発音が気になりますが合ってます。」

「・・・シラニーじゃなかったのね。オイゲンが先に間違えてくれて助かったわ。えつとシラヌウイ？でも発音が違うって言うってしシラヌウイ？陸奥みたいに短くて言いやすい名前ならすぐ覚えられるのに・・・」

「それで？話はこれだけかしら？」

「いえ、違います。故郷を侮辱するような発言は謝罪しましたが、ビスマルクさんの司令に対する態度が不愉快だった事は今でも変わりません。ですが司令にたしなめられて気が付きました。ビスマルクさん達には状況判断をする為の情報が足りていませんでした。」

「ふくん・・・まあ、確かにそうね。私はこの国の事もAdmiralの事もほとんど知らないわね。」

「ですから不知火が知る限りの事ではありますが、知っておくべき情報をお伝えしておきたいのです。」

「そう？それでなにを教えてくださいのかしら？」

そう問いかけると目つきの悪い駆逐艦は微かに笑った気がした。でもその笑みは楽しげな感情は一切感じず、悲しげで諦観を滲ませる嫌な笑みだ。そして鋭く睨んでいた目はドス黒く濁っていた。

「・・・狂ったこの国で艦娘がどのように扱われているか・・・です。」

執務室に戻ると大淀が曙に引き継ぎをしているところだった。

「待たせたな、今戻った。」

「お帰りなさい・・・やはりお怪我を・・・」

「え？提督が怪我!?ちょ!?顔が腫れてるわよ!?」

「落ち着け曙。大した怪我ではない。」

「大した怪我ではないって!?あんたそれ殴られた跡でしょ!?誰にやられたのよ!?憲兵隊の人達はなにしてたのよ!？」

はあ・・・たった一発殴られたくらいですいぶんな慌てようだな。艦娘達なんて戦場に出たら砲撃や雷撃で大怪我すると言うのに・・・とりあえず曙は仲間が被弾すると冷静さを欠いてしまうタイプか・・・扱いは難しいからどうか訓練するしかないか・・・

「良いから落ち着け。これは島津提督にやられたがその場に居合わせた熊井提督が島津提督に落とし前をつけさせた。もう解決した事だからこれ以上騒ぐな。これは命令だ。」

「う・・・分かったわ・・・治療はしたの?」

「ああ、向こうで不知火にしてもらった。」

「そう・・・あたしに出来ることはもうないのね。」

「私の怪我の心配よりも仕事の心配をするべきだな。昼からは大淀を休ませるつもりだ。曙にしっかりと働いて貰わなくてわ困る。」

「・・・分かったわ。」

とりあえず曙は落ち着いたか。ならばさつきと引き継ぎをして大淀を休ませるとしよう。

「大淀、不知火から報告は受けていたが、特に変わった事はなかったのだな?」

「はい、提督のご指示で対応出来ない案件はありませんでした。関門海峡を通過した呉傘下の艦隊については、こちらで人員を確認して記録しています。不知火さんからお聞きしたとは思いますが、呉傘下艦隊の代表を務める艦娘がご挨拶したいとの事でした。もしこのお話を受けられるのであれば、時間の調整をしてください。」

「分かった。挨拶くらいはしておくべきだろうな。」

「北九州鎮守府の方ですが、大勢の演習参加希望者がいましたので、少し混乱が起きていたようです。皆さんやる気があるのは良い事なの

で嬉しい悲鳴でしょうか。」

「そこは私の不手際だな。時間がなかったとはいえ、自主性に任せるという雑な指示を出して、長門と鹿島に丸投げしてしまったからな……」

「いえ……そんな事はないかと……私達が上手くまとめきれなかったのが原因ですから……」

大淀は少し言い難そうに否定したが、問題が起こってしまったのは事実だ。そしてもつと問題なのは大淀の思考だな。

「大淀、それと曙も聞いておけ。私も人間だ。それも提督になって日が浅い新人だ。当然私も間違える。だから私が間違った時はそれをきちんと指摘していい。間違いに気付ければ修正も出来るからな。だから秘書艦だから私に否定的な意見をしてはいけないなどと考えるな。最終的な決定権を持つのは私だが、意見を言うところまでは前達の職務の範疇だと言う事は忘れないで欲しい。」

「……失礼しました。以後気をつけます。」

「ああ、他にはないか?」

「そうですね……いつも通り面会の申し込みが来ていますので、リストは作っております。こちらはかなり溜まっていますね。同じ方が複数回申し込みに来られているものもありますし……あとは報告書作成や収支の計算等の通常業務は滞りなく。」

「そうか。良くやってくれた。それでは大淀はしばらく休むと良い。」  
「ありがとうございます。」

そう言つて丁寧に頭を下げた大淀だったがすぐに休憩に入るわけではなくて、なんだかそわそわしながらこちらをチラチラ見ている。「どうした?まだなにか言いたい事があったか?」

「あ、いい、いえ。なんでもありません。し、失礼しました。」

大淀は慌てたように執務室から出て行つたが、あれはいったいなんだったのだろうか?大淀のよくわからない行動に疑問を持つっていると、曙がじとつとした目で見ている事に気がつく。

「どうした曙?先程の大淀の不可解な行動についてなにか知っているのか?」

「ふん、知らないわよ。疲れてちよつとボーつとしてただけでしょ。」  
「そうか・・・やはり大淀には無理をさせていたか。」

「・・・別に気にする程じゃないわよ。それよりもう昼食の時間よ。まだ食べてないんでしょ？朝食もまともに食べて無いわよね？」

「・・・そうだな。」

朝は会見の準備と北条からの連絡で時間がなかったからな。間宮が執務室に届けてくれたおにぎりを一つ食べるのが限度だった。

「提督に意見を言うのが私達の仕事って言うなら、もう少し自分の体調管理に気を配りなさいよ。あんたが倒れるのが一番困るのよ？」

「むっ・・・気をつけよう。とりあえずまずは食事をするか。」

「じゃあ行くわよ。それと食事が終わったら少し仮眠を取ったほうが良いわ。やっぱり疲労が溜まっているように見えるわ。そんな状態じゃ判断ミスするわよ？」

確かに昨日も頭痛を感じていた。気を失ったのは金剛の抱き付きの衝撃が原因だったが、元々疲労が溜まっていたのも原因だろう。これから何が起こるかわからないのだから、休める時に休んでおくべきか。

「ああ、そうさせて貰う。」

「そう。なら早く食堂に行くわよ。」

## 223話

曙と食堂に向かうと既に多くの艦娘達が食事を始めているようで、廊下にまで楽しいげな声が聞こえてくる。演習をしていた者達も既に昼休憩に入っているようだ。

「あ、司令、お仕事お疲れ様〜」

入り口に近づくと入り口の前で待っていた陽炎が駆け寄ってくる。

「ん、陽炎か。どうした？」

「姿見かけたから声かけたただけだよ？ ってうわ!? 顔腫れてるじゃん!?! それ大丈夫?」

「ああ、たいした怪我ではない。」

「まあ、大丈夫なら良いんだけど・・・ってあれ? 不知火は一緒じゃないの?」

「ああ、連絡要員の任務は無事に終わったからな。執務棟の前で別れた。先に食堂に向かったと思っていたのだが?」

「うくん? まだ来てないみたいよ?一緒に食べようと思っただけだ。あの娘どこで道草食ってるんだろ?」

「さあな? だが不知火は真面目な奴だったから、何か用事があったのではないか?」

「確かにねえ〜ほんつとあの娘は真面目過ぎるからね。でも良い子だったでしょ?」

「ああ、凄く真面目に仕事をしてくれた。ああいう真面目に仕事をする艦娘は高評価だな。」

職務に真剣で忠実なのは良い事だ。少しビスマルクと揉めてはいたが、あれくらいならまだ可愛いものだ。

「う・・・そう言えば司令もカタブツだったね・・・でも妹を褒められるのは気分が良いかな♪」

「そうなのか?」

「まあね♪私はお姉ちゃんですから♪じゃあちよつと不知火探してくるからまたね♪」

そう言っただけで陽炎は手を振りながら走って行った。身内を褒められ

る喜びか・・・自分も子供の頃は兄さんの事を褒められると、物凄く誇らしい気持ちになつていたものだ・・・

「おお、提督、待つていたぞ。」

食堂に入ると入り口付近の席に座つた長門が声をかけてくる。長門は既に食事を始めていて、目の前には戦艦に相応しい大量の食事が盛られている。

「今度は長門か。どうした？」

「いや、演習についての話がしたかつたのでな。食事でもしながらどうかと・・・ん？殴られたのか？」

自分が殴られたと聞いて食事中の艦娘達がざわつく。もしかしてこれは艦娘達と話をするたびに心配されなくてはならないのか？たいた怪我ではないのにそれは少し面倒だな・・・

「ああ、だがたいした怪我ではない。」

「ふっ、そうか。提督も一人前の日本男児なものな。それくらいの怪我はどうという事はあるまい。それにただ殴られた訳ではあるまい？」

「まあな。この一発と引き換えに面倒な島津提督はこちらに関われなくなつたし、大量の資材がタダで手に入るし、さらに今度佐世保鎮守府へ演習の見学にも行けるようになったぞ。」

「ほう？それは随分とふっかけたものだな。ならばその怪我也名誉の負傷だな!!はっはっはっ!!」

ふむ、長門が明るく大きな声で笑つたからか、他の艦娘達も落ち着きを取り戻したようだ。仲間を安心させるためにわざと明るく対応したのか？そう考えると艦娘のまとめ役をやっていただけの事はあるな。

「そんなものだ。とりあえず演習の話は聞いておきたいし食事を持つてくる。」

「あ、提督さんのお食事なら私がお持ちしています。鹿島もご一緒にても宜しいですか？」

「ああ、もちろん構わない。鹿島からも演習の様子を聞きたかつたところだ。」



「ありがとうございます♪」

「ああ、それともう一件、今度佐世保鎮守府に演習の見学をしに行く事に決まったのだが、鹿島には同行して貰うつもりだ。佐世保鎮守府の演習方法を学びに行くぞ。」

「え!?本当ですか!?私も練習巡洋艦としてまだまだ未熟ですから、いっぱい勉強させて頂きます♪」

鹿島もこの話に前向きならば問題無さそうだな。これで佐世保鎮守府のやり方を少しでも取り入れられれば、演習の効率も上げられるだろう。

「むっ?であればこの長門も共に行くべきではないだろうか?最近では皆の演習を監督することも多いから、四大鎮守府の訓練方法には興味がある。」

「ふむ・・・そうだな。長門には残って引き続き演習を監督して貰おうと思っていたが・・・それは陸奥に任せる事も出来るか。」

「うむ、陸奥は自慢の妹だ。あいつなら上手くやってくれるだろう。それにしても提督が陸奥を信頼してくれているようだなによりだ。」

「そうだな。陸奥はそつなくなんでもこなしてくれるから、上の人間としてはとても扱い易くて助かっている。」

「そうだな。あいつは昔から器用な奴だった。」

「明石や間宮や大淀みたいなその道のスペシャリストも当然重要だが、組織を円滑に運用するには陸奥のように色々と任せられる人材も重要だからな。」

「ふむ、これは私も負けていられないな。そう言えば陸奥はよく頼られているようだ。が赤城には声をかけないのか?あいつも陸奥と同じく人当たりが良く落ち着いていて、真面目にしっかりと仕事が出来るとやっだぞ?たまに抜けているところもあるが、あれくらいなら許容範囲だと思おうが?」

「なるほど。今は加賀が瑞鶴を鍛えているのでそのサポートに回しているが、人手が欲しい時は呼んでみるか。他には誰かいるか?」

「そうだな・・・大和や榛名も人当たりが良いし頭が良いから、色々仕事をこなせる人材だな。加賀は無愛想だが真面目な奴なので書類

関係は得意だ。あと霧島は計算が得意だから書類仕事だけじゃなくて経理関係なんかも手伝えると思うぞ。」

ふむ、こうしてみるとまだまだ活用出来ていない人材が多いな。上に立つ者として部下の能力把握は重要な課題だ。戦闘に関する事だけではなくその他の仕事に関しても把握しておくべきだ。機会を見て色々試してみるか。

「なるほど。参考になった。では午前中の演習の様子について聞こう。」

はあくまったく不知火の奴はどこをほっつき歩いているんだか？連絡要員の任務が終わったらそのまま食事に来ると思っただけで待ってたのになあ。私達の部屋に戻ってみても帰って来た形跡はないし．．．こんな時に通信が使えたら楽なんだけど、この鎮守府では私用での通信は禁止って言われてるからなあ。司令は執務棟のあたりで別れたって言ってたし、そこらへん探してみても居なかったら諦めるか．．．そう思っただけ執務棟あたりを探すと執務棟の裏のあまり人目につかないところで不知火を発見した。

「あっ!!不知火、こんなとこに居たのね!!」

「ん?ああ、陽炎ですか。」

「まったくなんでこんなとこにつてええ!?なにこれどうしたの!?!」

不知火に駆け寄ってみると地獄絵図が広がっていた。プリンツオイゲンさんは真っ青な顔で頭を抱えて蹲っているし、ビスマルクさんは深刻そうな表情でブツブツ呟いてるし、アトランタさんは奥の茂みで吐いてるみたいだ。

「いえ、たいした事はありません。それより不知火に何か用事ですか?」

「いやいやいや!!たいした事あるつて!!お昼ごはん一緒に食べようとかどうでもよくなるくらいしたいした事が起きてるじゃん!!」

「むっ．．．せっかく用意して頂いた食事を蔑ろにするのは感心出来ませんね。陽炎は長門鎮守府での日々を忘れたのですか?」

「．．．．．不知火、あんた誤魔化そうとしてるわよね?」

「……いえ。」

あ、こいつ目を逸しやがった。

「だったらここに司令を呼んでも問題ないわよね？」

「……司令のお手を煩わせるほどの案件では無いと思います。」

「OKわかったわ。ここで白状するか司令に即通報か選びなさい。」

「……分かりました。説明しましょう。」

そこからの不知火の話を要約すると。海外艦達の司令への態度が気に入らなかった事・司令にたしなめられて海外艦達が自分のおかれている状況がきちんと認識出来ていないのでは？と思いついた事・海外艦達に日本の艦娘がどのように扱われているか、実体験も含めて詳細に語った事を白状した。

「はあ……つまり私達が長門鎮守府でどういう扱いを受けて来たかを説明して、この北九州鎮守府に着任した事がどれだけ幸運かを伝えたかったと？」

「そうです。」

「それで着任したばかりの海外艦達がこんな状態になるまで追い詰めたと？」

「……はい。」

「目を逸らすな。あんたはこれで満足？」

ボロボロな精神状態の海外艦達に改めて目を向けさせる。不知火の気持ちはわからなくはないけれど、これは流石にやり過ぎだ。

「……伝えた事は全て真実でした……ですが少しやり過ぎたかもしれません。」

「よろしい。なら一緒に海外艦の人達に謝るわよ。」

「……はい。」

うん、不知火はこれで良し。私達が元々ブラック鎮守府で過ごしてたのは事実だけど、だからってその価値観を他の艦娘達に押し付けるのは良くない。せつかく良い鎮守府に着任したんだから、悪い事ばかりに目を向けるのはもったいないからね。

「おっ、ビスマルクさくん。」

「はっ!?あなた誰よ!?いつからそこに!?追撃戦なの!?今度こそ絶対に

生き延びてやるわ!!」

だいぶ錯乱してるなあ。というかこれ軍艦だった頃の記憶を刺激されてない? ビスマルクさんは追撃戦に嫌な記憶があるのかも?

「はいはい、落ち着いて落ち着いて。敵じゃなくて味方の救援ですよ。」

「味方!? 味方なの!?!」

「同じ北九州鎮守府の仲間ですよ。陽炎型駆逐艦のネームシップの陽炎よ。」

「そ、そう・・・味方なのね。」

「落ち着いたらプリンツオイゲンさんを助けて貰えますか? 私はアトランタさんの方をなんとかしますんで。」

「Ja」

プリンツオイゲンさんをビスマルクさんに託して、茂みでぐったりしてるアトランタさんに近づく。

「アトランタさーん、大丈夫ですか?」

「だ、誰だ!?!」

「同じ北九州鎮守府所属の陽炎型駆逐艦のネームシップの陽炎よ。」

「ひっ!?!ま、また日本の駆逐艦!?! 日本の駆逐艦は恐ろしい奴らだつての!?!」

あー、アトランタさんは日本の駆逐艦にトラウマがあるのか・・・これはちよつと大変なやつだ・・・まったく・・・妹のやらかした後始末をしなくちゃいけないなんて、お姉ちゃんは大変だよねえ。でもこれ司令にバレたらまずいかもだし、なんとか隠せないかなあ?」

## 224話

軽くパニック状態のアトランタさんをなんとか落ち着かせて、ビスマルクさんがプリンツオイゲンさんを宥めてくれたので、ようやく話が出来る状態にまで落ち着いた。

「ほら、不知火。」

「・・・皆さんを少々脅し過ぎてしまいました。申し訳ございません。」  
「うちの妹が暴走して皆さんを脅かしてしまつてごめんなさい。」

二人で深々と頭を下げてきちんと謝る。仲直りするにはこれがまず一歩目だ。

「そ、そうね。私は別にちよつと脅かされたくらいじゃ動じないけれど、オイゲンとアトランタは少し怖がつてしまったのは事実ね。もちろん私は全然平気だったけれどね!!」

え? ビスマルクさんもけつこう危ない状態だったような・・・いや、ビスマルクさんがそう言つてくれるなら無粋なツツコミはやめておこう。

「え? ですがビスマルクさんも「どわあ!!ちよつとタイム!!」

無粋な事を真面目な表情で言おうとする妹を慌てて止めて、海外艦の三人から少し離れてからコソコソ話が出来る距離まで不知火に近づく。

「あんたは馬鹿か!!せつかくビスマルクさんが歩み寄つてくれて、たいたした事なかった事にしてくれようとしてるのに、なんでその好意を無駄にするような事言うのよ!?!」

「・・・え? そういう事だったのですか?」

「分かつたらもう余計な事は言わない!!分かつた?」

「・・・はい。」

不知火に釘を刺してから海外艦達の元に戻る。ああもう!!今のやり取りの間でビスマルクさんがちよつと涙目でプルプルしてるじゃん!強がったのが私達にバレたの理解して恥ずかしがってるよ・・・ちよつと不知火を止めるのが遅かつたか・・・

「急にお話を中断してごめんなさい。そ、それで続きをですぬ・・・」

「うつ・・・そ、その・・・確かにオイゲンとアトランタを脅かした罪は重いわ。でもシラアヌイが過去に辛い経験をしてきた事はよく理解したし、何も知らない私達に警告しようとしてくれてたのも理解したわ。だからもう許してあげるわ。オイゲンももう良いわね?」

「流石はビスマルク姉さま、強い心をお持ちです。私もビスマルク姉さまみたいに強くなりたいから、このお話も真正面から受け止めなくちゃですね・・・シラヌウイさんも辛かったのですよね・・・」

「・・・はい。」

「だったら私は仲間として支えてあげたいです。」

「・・・ありがとうございます・・・ごじます。」

うーん、ドイツ艦の二人は強いなあ。あたし達の過去って事はけっこうハードな内容だと思うけど・・・

「Ah・・・陽炎だったかな?一つ良いかい?」

「アトランタさん、なんですか?」

「その・・・さ・・・陽炎は不知火の姉で同じ鎮守府の出身なんだよね?」

「はい、そうです。」

「って事はその・・・陽炎も・・・なのかい?」

「あー、まあそうですね・・・ついでに言えばこの北九州鎮守府も似たような感じだったらしいです。今の葛原提督が着任してからはそんな事無いみたいですけど、昔は酷かったそうですね・・・」

艦娘達が金儲けの道具として消費される鎮守府。派閥は違っても裏でやる事なんてそんなに変わらないみたいだからねえ・・・あえて違いを言うなら、こっちでは駆逐艦は弾除けとして消費されるけど、長門鎮守府では特攻と称して無謀な突撃を強いられたくらいかな?結局特攻したら敵の攻撃はこっちに集まるから、轟沈する確率で言えば大差無さそうだけど・・・

「そっか・・・そっかあ・・・」

アトランタさんはため息をついてから空を仰ぎ見る。やっぱり着任したばかりでこんな重い話をされても困るよね・・・

「あー、でも今の葛原提督はすごく良い人ですよ。顔は怖いしすつ

ごく真面目で不知火と大差ないくらいカタブツですけど、きちんと衣食住は保証してくれるし、作戦はきつちりと考えて立案してくれる。それに活躍したらきちんと評価してくれますし、頑張ったらご褒美も貰えます。なんか私達を艦娘として軍人としてきちんと扱ってくれる提督って感じですね。その代わり悪い事をしたらしつかり罰を与えられるみたいですけど。」

「Ah・・・確かに真面目そうな人だったね。いやらしい視線も向けて来ないしさ。記者会見ってやつ？あそこではそういう視線が集まるのを嫌でも感じたからさ。提督がそういう視線を向けて来ないのは正直助かるよ。」

あー、やつぱりアトランタさんはそこ気になるかあ。すつごく大きいもんね。後でちよつと揉ませて貰えたりしないかな？

「陽炎？」

「あ、いえ、なんでもありません。聞いた話だとうちの提督は女性への興味・・・というか人への興味自体が薄いんじゃないかって噂ですね。なんか雑談一つするのも苦労するらしいですし。」

「・・・提督さんはサイボーグかなにかなのかな？」

「あー、あり得ないですけど似たようなものかも？仕事に関する事はスラスラ喋るから、コミュニケーションが出来ないのとはまた違いますし。敵対する人にはすつごく攻撃的で恐ろしい姿を見せるとも聞きますし。」

「Ah・・・確かに島津って人には物凄く冷たい対応だったね。大勢の人の前だから冷静に振る舞ってたみたいだけど、人気が無いところならどうなっていたか・・・」

「・・・そんなに恐ろしかったですか？」

「そうだね・・・人気が無いとこだったら銃を取り出して迷わず撃つてたかも・・・そんな目をしてた・・・ビスマルクとプリンツオイゲンも見たでしょ？」

「え？そうかしら？ただ睨んでただけでしょ？」

「ですよ？殴り合いの喧嘩くらいはしてもおかしくないかもですけど？」

うーん？これはどっちだ？アトランタさんが気にし過ぎなだけかな？ドイツ艦の二人が鈍感なだけかな？

「まあまあ、司令だつて顔は怖いけど人殺しなんてしないですつて。」  
「・・・ですが陽炎、葛原提督は敵対した人物を輸送船に乗せて、自らの手で深海棲艦の目の前まで連れて行つたとの話を聞きました。帰り道はその人を救命ボートに乗せて、輸送船で引きずり回しながら帰還したとか。司令はやるときは容赦しない方だと思えますが？」

なんで不知火は余計な事を言つちやうかなあ!?その噂は私達の間でもドン引きエピソードなのに!!でも確かに護衛がいるとは言え司令が自ら船に乗つて深海棲艦のところまで行くとか、狂気の沙汰にしか思えない行動なんだよなあ・・・

「え？なにそれ？Admiralは狂つてるわよ・・・」

「ビ、ビスマルク姉さまあ・・・」

「・・・crazy」

「だあもう!!やっぱりこんな反応になるじゃん!!ちよつと待つて下さい!!弁明させて!!なんかその人が私達をまた娼婦扱いしようとして、司令がブチ切れたつて話らしいですから!!司令は私達の為に怒つてくれたつてところだけは理解してあげて下さい!!」

「そ、そう・・・」

「あ、はい・・・」

「Ah・・・うん・・・」

「不知火ももつと良いエピソードあつたでしょ!？」

「良いエピソードですか？前任者の大森提督と共に悪事の限りを尽くしていたこの街の元市長がいて、司令が憲兵隊を引き連れてその元市長を粛清しに行った話とかですか？」

「なんでそういう血生臭さい話に持つて行く!？」

「不正を許さない誠実な提督として、素晴らしい行いだと思えますが？その行動のお陰で奴隷扱いされていた艦娘達を助ける事が出来たのですよ?」

「そ、そうなんだけど・・・そうなんだけどね!!」

ほら、海外艦の人達が引いてるじゃん!!司令にだつて優しいところ



はあるんだから、そういうところをアピールするべきでしょうが!!

「Admiralが過激な人物って事は良く分かったわ。でも相手は散々ルールを破ってきた悪人なのよね?」

「ええ、そこは間違いないです。実際に奴隷扱いされてた娘達からも話は聞きましたし。」

「なら当然の行いね。ええ、当然の行いよね。」

「そ、そうですね。悪い人は許しちゃダメですよね?」

「Ah・・・撃たれても仕方ない奴なら、まあ、それほど騒ぐ事でもない・・・よね?日本人にしては珍しいってだけでさ。」

海外艦の人達の一言に不知火がうんうんと頷く。

「ええ、そうですね。悪事を働いた者達が罰せられただけです。司令にはなんの落ち度もありません。もちろん司令を恐れる必要もありません。司令は私達を理不尽に罰する方ではありませんから、私達が悪い事をしなければ罰せられる事はありません。」

それって悪い事したら肅清されるぞって脅しに聞こえるんだけど・・・

「な、なら問題ないわ。私達ドイツ軍人はルールに厳格な事に誇りを持ってしているもの。ねえオイゲン?」

「Ja!!もちろんですビスマルク姉さま!!」

「まあ、私も悪い事をするつもりはないよ。うん、きっと大丈夫。大人しくしてるよ。」

「まあまあ、そんなに固くならないで。普通に仕事してたら問題無いですから。あ、それよりけっこう長く話し込んでしまいましたし、そろそろお昼ごはん食べに行きましょう♪」

「ええ、そうですね。食事を疎かにする行為も司令は嫌うと聞きました。」

「っ!!オイゲン!!急ぐわよ!!」

「Ja!!」

あ、ドイツ艦の二人が真っ先に駆け出して行った!!

「まざったかな・・・先行くよ。」

「アトランタさんまで!?!ああもう!!不知火追い掛けるわよ!!」

「はい……陽炎。」

「ん？なに？」

「ありがとうございます。……では先に行きます。」

「ふふっ、照れちゃって可愛い妹ね。って私を置いてくくなあ!!」

かなーり問題はあったけど、とりあえなんとかなったかなあ？あと  
は司令にバレないように上手くやれば完璧ね♪

## 225話

昼食を食べながら長門と鹿島から午前中の演習の様子を聞いて、午後からの指示も出せた。午後からは着任したばかりの海外艦達の能力測定もしておきたい。他の仕事は後回しでも構わないだろう。食事自体も相変わらず美味かったし、有意義で満足出来る昼食だった。「では曙、私は部屋で少し休ませて貰う。」

「ええ、ゆっくり休みなさい。」

「必要であれば手の空いてる奴に執務を手伝わせても構わない。それと何かあればすぐに起こしてくれ。」

「分かったわ。」

「ぼのたんのサポートであれば、我々第七駆逐隊にお任せあれですぞ。ご主人様♪」

「ぼのたん言うな!!てか漣、あんたどこから出てきたのよ!？」

「いや、ここは皆が集まる食堂ですぜぼのたん?そりゃ漣の一人や二人出でくるって〜」

「二人も出てくるわけないでしょうが!!」

「流石ぼのたん今日もツッコミ業務お疲れ様です!!」

「秘書艦補佐よ!!秘書艦補佐!!誰がツッコミ業務よクソピンク!!」

ふむ・・・これが漣や村雨の言うところの雑談か。漣が意味のわからない事、つまり意味の無い事を言っただけが反応する。意味の無い会話とはこういう事か。だがあの変な発言は理解に苦しむ上に、突拍子も無い事を言うには創造性が必要だ。これは雑談というものもなかなか難しいものだな。

「あつ、それとご主人様あく約束の甘味をまだ頂いてないですぞ?夕食のデザートでとお考えでしたらそれはそれで構いませんが?」

「甘味の件か。そうだな。間宮、居るか?」

「はあ、ちよつとお待ち下さ〜い。」

食堂の奥に声をかけると、間宮がパタパタと小走りやって来た。

「提督、何かご用事ででしょうか?」

「昨日出撃した者達に褒美としてなにか甘味を出してやれ。あと大

淀・陸奥・長門・明石・夕張の5名にも出してやれ。」

出現した者達が評価されるのは当然だが、後方で支えた者達もきちんと評価されるべきだ。

「はい、分かりました。なら时期的には少し早いかもしれませんが、試しにアイスクリームを作ってみたのでそれを出しましょうか?」

「ほう?噂の間宮アイスか?」

「うおおお!?マジスカ間宮さん!!まさかあの間宮アイスが食べられる日が来るとは!!キタコレ!!」

やはり間宮アイスの名は艦娘達にとっては特別なのだろうか?だがしかし……

「うふふ♪そんなに喜んで貰えるなら作ってみたかがありますね♪提督もお一ついかがですか?」

「……だが5月にアイスクリームは、时期的に少し早くないだろうか?何か他の物は出せないのか?」

間宮自身も时期的に少し早いかもしいないと言っているしな。すると隣ではしゃいでいた漣の動きが止まる。

「……は?ご主人様それマジで言ってます?」

「アイスは夏に食べる物だろう?」

「……ご主人様、落ち着いて聞いて下さい。アイスを食べたいという気持ちに時期なんて関係ありません。」

「いや、冬でも食べるつもりか?」

「寒い冬に暖かい部屋でアイス食べるとか最高の贅沢ですよ?漣はやった事ありませんけど。」

「そ、そうか……」

普段は軽いノリの漣が今回はやけに真剣だな。口調もいつもと少し違っているし。漣といえば軽いノリのイメージがあるが、こんなにも真剣な目をするのだな。ここは戦場では無いのだが……

「良いですかご主人様?確かに先日漣達は祝勝会でアイスクリームというものを初めて頂きました。北条様が持って来て下さった他の甘味も味あわせて頂き、至福の時間を経験しております。で・す・が!!間宮アイスは漣達艦娘にとっては特別な存在なのです!!全艦娘が憧

れる間宮羊羹と並ぶ二大スイーツです!!」

「お、おう・・・」

「それを時期じゃないとか気分じゃないとかの下らない理由で艦娘から取り上げてしまう・・・これがどれ程の愚行かご理解頂けますか!? ええ、もちろんご褒美を何にするかはご主人様が決める事です。ですが僭越ながら意見具申させて頂きましょう。ご褒美の内容は間宮アイスが最善であると!!」

漣が身振り手振りも駆使して熱く語る。何がここまで漣を必死にさせるのかは理解出来ないが、漣が間宮アイスを食べたがっているのはわかった。そして周囲を見渡しても反論は無さそうだ。というか普段なら漣の発言に反応する曙もどういう訳か止めようとしないうつまり曙もなにも言わないが漣と同意見なのだと考えられる。

「まあ、漣がそこまで強く主張するのであれば間宮アイスにするか。間宮、配れるだけの数はあるのだろうか?」

「ええ、問題無いですよ。」

「では間宮アイスを出してやってくれ。」

その瞬間食堂に歓声が溢れる。漣の主張する全艦娘が憧れる二大スイーツという肩書きも、誇張表現では無いのかもしれないな。

「はい、お任せ下さい♪」

「ありがとうございますご主人様あ♪ご主人様ならばきつとわかって下さると漣は信じておりましたぞ♪」

「そうか。ああ間宮、妖精さん用の金平糖も持って来てくれるか?」

「妖精さんにもご褒美ですね♪すぐに取って来ます♪」

間宮は嬉しそうに小走りで食堂の奥に行つて、金平糖の入った小包を持って来てくれた。

「はい、どうぞ。」

「助かる。ではあとは頼んだぞ。」

さて、約束は果たしたしとりあえず工廠によって妖精さんに金平糖を渡したら少し休むとしよう。

「完・全・勝・利!!」

提督が食堂から出ていった後に、漣が食堂のど真ん中で変なポーズをとって調子に乗っている。あのクソピンクはよくもまあ提督を言いくるめたものね。

「良くやったクマ!!」

「あの提督に食ってかかるなんてあんた度胸あるじゃない♪」

「間宮アイス!!間宮アイスっばい!!」

「司令官を手玉に取って操るテクニク：私も教えて欲しいわぁ♪」  
お祭り騒ぎの食堂で漣が寄ってたかつて褒められている。普段はアホみたいな事を言い出す奴だけど、今回ばかりは認めてあげてもいいわね。

「はぁ〜い皆さ〜ん!!さっそく間宮特製アイスクリームを配りますから並んで下さ〜い♪」

間宮さんのその一言で集まっていた艦娘達が我先にと並び始める。

「ぼーのたん♪念願の間宮アイスを貰いに行きましょうぞ!!」

「そうね。でも漣、あんまり調子に乗っていると提督から怒られてしまうから気を付けなさいよ? 営倉行きになっても庇わないわよ?」

「ふっふっふっ。やはりぼのたんはご主人様の事を理解してないですなあくこれはそろそろ秘書艦補佐の座を漣に明け渡す日も近いのでは?」

「はぁ!?!なんですって!?!」

「いやいや、冗談だって。もちつけぼのたん。だいたい漣に秘書艦業務は・・・まあ出来なくは無いけど、ぼのたんから奪ってまではやりたくありませんぞ。」

「はぁ・・・それで? 私が何を分かってないって言うのよ?」

「なんと今回のやり取りはご主人様を知る為の実験だったのでありますぞ!!」

「はぁ? 実験? どういう事よ?」

「このクソピンクはまたわけのわからない事を・・・」

「ねえ漣ちゃん、そのお話私も興味あるなぁ私にも聞かせてくれるかしら?」

「おや? 龍田さんも興味ありますか? ええ、もちろん構いませんよ。」

なんと!!漣はご主人様をお願いを聞いて頂く為の方法を調べているのです!!」

「はあ?あんなそんな事してたの?ってまたなんか人が集まって来たんだけど!」

なに!?!皆そんなに漣の話が気になるの!?

「おっほん!!ではご主人様研究の第一人者であるこの漣が、研究結果を公表しましょうぞ!!あつ、もちろんご主人様にはオフレコでおなしやす。」

「誰が第一人者よ・・・それで?」

「おやおや?文句を言いつつも先が気になるのかなぼのたん?あつ、ちよい待ち、ちゃんと教えるから。えー、まずご主人様をお願いしたい時に、可愛くおねだりとか色仕掛は絶対に駄目です。無反応で一蹴されて心に傷を負うだけです。」

「あーあなたも可愛さアピールしてたわね。」

「ぼのたん・・・あの引いた目でただ一言『そうか。』って言われるのけっこうキツイのよ・・・マジで・・・」

「ふふっ、そう。」

なんでもないような顔してたくせに、意外と堪えてたのね。

「ぐぬぬ・・・まあ、話を戻しますぞ。お願いを聞いて貰うには条件が3つあるのです。まず一つはお仕事を頑張る事。お仕事を頑張ったご褒美としてしかご主人様は動きませんぞ。」

「それは当然ね。無闇に私達艦娘を甘やかす人じゃないのは皆知ってるわ。」

「ご主人様は真面目ですからなあ。基本的な衣食住に必要な物以外はご褒美としてねだるしかありませんな。そして次にきちんと要求する事!!この仕事を頑張ったから何が欲しいとききちんと主張する事で、ご主人様は動いて下さるのです!!遠回しな言動は誤解の元ですな。」

「ああ、あんな甘味をねだったら頭を撫でられてたわよね?」

「あー、あれはあれで棚ぼただったので良いのですが、ご主人様ははっきりとした物言いの方が好きみたいですな。とりあえず欲しいご褒美があるなら自分の口でしっかりと伝える。これ重要ですよ。」

「ふーん、それで最後は？」

「あー誤解を恐れずに言うなら、ご主人様にとってどうでも良い事であるって事かな。」

「は？なによそれ？私達へのご褒美をどうでも良いことだと考えてるって事？」

それは流石に無いと思う。信賞必罰は組織の運営に重要だと言っていたし、実際に私達の士気についてはけっこう気を使っていると思うもの。

「ちよつと意味合いが違うんだよぼのたん。例えば今回の一件だけど、ご主人様にとつて重要なのは漣との約束を守って甘味をご褒美として出すって事。それとそこご褒美で漣達の士気が上がるかって事。どうでも良いのはその甘味が何かかって話。アイスだろうが羊羹だろうが桜餅だろうが関係ないって事ね。だから強く主張すれば怒られる事なく間宮アイスを出して下さったのです。」

「……そういう事ね。逆に提督にとって重要な話であれば絶対に譲らないって事ね。」

「ですなあ。聞いた話だけど仕事関連で提督が決めた事を変えさせるのは無理ゲーっぽいですなあ。」

「そう？ついさっき『私も人間だ。それも提督になって日が浅い新人だ。当然私も間違える。だから私が間違った時はそれをきちんと指摘している。』とか言ってたわよ？」

「ほほう？それはまた興味深い話ですなあ。それってさつきみたいにご主人様を説得する事が出来れば、ご主人様の決定を覆せるって事かな？」

「たぶんそうね。でも説得は難しいでしょうね。きちんと自分の提案の利点と欠点を説明しないと無理でしょうね。」

「つまり提督に性欲発散のメリットと、性欲を溜め込んでしまう事のデメリットを伝えれば、夜戦に突入出来るって事なのね!!漣ちゃんは意外と頭良いのね♪」

イクさん……まだ諦めてないの……

「ああ……そうかもですね。でもかなり難しいでしょうし、たぶん心



に傷を負いますぞ?。」

「それはそれでちよつと気持よくなつて来たところなのね♪」

「あ、そつすか・・・頑張つて下さい・・・」

はあ・・・最後はイクさんのせいでグダグダになったけど、意外と漣も色々と考えてたのね。ちよつとだけ参考になったわ。

## 226話

先行して食堂に向かって走り出した海外艦の人達を不知火と二人で抜き去る。たとえ陸上であっても私達駆逐艦がスピードで負ける訳にはいかないからね♪

「あっ!?笑ったわね!!待ちなさい!!」

「おっさきく♪」

悔しがるビスマルクさんを尻目にあとは不知火と一対一の真剣勝負!!不知火の方が先行してるけど、先頭を走る不知火は食堂のある生活棟の扉を開かなくてはならない。そこでの減速の隙について追い抜いてやる!!なんで競争してるのかわかんないけど、長女として絶対に負けられない!!

「って!?うわっ!?」

不知火が生活棟の扉の前で急ブレーキをかけるのは予想してたけど、扉を開かないですって!?!私も慌てて急ブレーキをかけるけど、不知火が扉を開けた隙に追い抜くつもりだったから、このままだと扉に突っ込んで!?

「っ!?!陽炎!?!」

「ぐふっ!?!」

咄嗟に不知火が私の襟元を掴んで止めてくれたから、扉に突っ込む大惨事は避けられたけど・・・

「ゲホッゲホッ!!あーもう、助かったけどなんであんな扉を開けなかったのよ!?!」

「静かに。これを見て下さい。」

「え、なに?メモ?」

生活棟の扉には『裏から静かに食堂に入った方が良いです。』と書かれたメモが貼ってある。

「え、なにこれ?こっそり忍び込めって事?」

「陽炎もこのメモには見覚えがありますよね?」

「あー、小森さんがケーキを確保してくれてた時の奴と同じメモ用紙だよね?って事は小森さんからの警告って事かな?」

「そう考えるのが妥当でしょう。」

うーん？小森さんがどういう人かわからないけれど、私達の為にケーキを確保してくれた人だし、たぶん優しい人だと思う。ならこの警告には従っておいた方が良いのかも？

「追い付いたわよ!!さっきはよくも!!」

「あ、ビスマルクさん達。お静かにお願いします。よくわかんないけどこっそり裏から入れて書かれてるから、裏から行きましょう。案内します。」

そう言つて海外艦の三人に扉のメモを見せる。

「は？なんでこの私がそんなこそそしなきゃいけないのよ？食堂はすぐ目の前よ？行くわよオイゲン!!」

「え!!?Ja!!」

「あつ!!?ちよ!!?行つちやつた・・・」

「陽炎、私達だけでも裏から行きましょう。」

「Ah・・・私もなんか嫌な予感するからそつちから行くよ。」

「了解。じゃあこっそり行きますか。」

うーん？よくわからないけど、何か意味があるはずなんだけどなあ？

艦娘達が大盛りあがりしている食堂を出ると、廊下の向こう側からビスマルクとプリンツオイゲンがかなりの速度で走って来ていた。

「はあ・・・ビスマルク!!プリンツオイゲン!!」

「B・h!?!Admiral!?!な、なんの用かしら?」

「子供じゃないんだから廊下を走るな!!艦娘でしかも戦艦のパワーで走り回って何かにぶつかったら、大惨事になるだろうが・・・壁に大穴でも開けるつもりか?」

戦艦のパワーは身をもつて体験したところだ。艦装を装着してなくても艦娘達の身体能力はとても高い。筋力だけでみても子供のような体格の駆逐艦達が、自分のような男性軍人より少し強いくらいだ。当然大型艦になれば人間離れした筋力になる。本当に壁をぶち抜けるかはわからないが、わざわざ自分が管理する鎮守府で試したい

話ではない。

「わ、悪かったわよ・・・」

「プリンツオイゲンはおそらくビスマルクについて来たのだろうが、ビスマルクを盲信してついに行くんじゃないかと、きちんと止められるようになってくれ。」

「E s t u t m i r l e i d . . . あっ、ごめんなさい。」

「それで?こんな時間までなにをしていたんだ?ほとんどの艦娘はもう昼食を食べ終えているぞ?」

「え、A h . . . ちよつとオイゲンと大事な話をしていたのよ。ねえオイゲン?」

「あ、はい!!そうです!!」

なんだ今の間は?何か隠し事たろうか?じつと見つめるとビスマルクとプリンツオイゲンがあらさまに動揺している。目線を逸して汗をダラダラと流して、これはもう隠し事をしていますと全力でアピールしているみたいだ。

「・・・本当か?」

「嘘は言っていないわ!!A h . . . ちよつとお喋りに夢中になってしまっただけよ。そうよねオイゲン?」

「え、ええ。その通りです。アトランタさんとカゲルウさんとシラヌウイさんは先に食堂に向かったから、食堂に行くのが遅れたのは私達二人だけです。」

「あ、バカ!!なんで名前出しちゃうのよ!!」

「おあ!?な、な、なんでもないです!!」

なんだこいつらは・・・どれだけ嘘をつくのが下手なんだ?おそろく上官である自分から仲間が怒られないように庇っているのだろうが、わかりやす過ぎて追求する気も失せてくる。大方自分と別れたあとに海外艦の三人と不知火が話し込んでいて、不知火を探していた陽炎も加わってなにか話したのだろう。

「はあ・・・不知火や陽炎となにか揉め事か?」

「っ!?そんな事無いわ!!ソーセージを食べるくらいありきたりな事しかなかったわ!!」

「そ、そうです!!喧嘩なんてしてません!!」

「そ、そうよ!!怖い事なんてなにも無いわ!!」

はあ・・・おそらく海外艦・・・というかビスマルクと不知火が喧嘩をしたのだろう。プリンツオイゲンはビスマルクを支持するだろうし、アトランタはあまり積極的に関わりそうに無い。となると後から合流した陽炎が仲裁したってところか。後で不知火と陽炎にも話を聞いておくか・・・艦娘同士の揉め事など頭が痛くなる。

「はあ・・・隠し事をしたいならもう少し上手くやれ・・・もういい。何があつたかは聞かないから早く昼食を食べてこい。特に用事も無いのに食事の時間を遅らせて、間宮に迷惑をかけるのは良くない。以後気をつけるように。」

「ええ、悪かったわね。じゃあもう行くわね。」

「ごめんなさい。」

「ああ。」

とりあえずこの件は後回しだ。さっさと妖精さんに金平糖を渡して休ませて貰おう。

他の娘達が間宮アイスで盛り上がっている中で、たまたま外に出ようとしていた私は、偶然提督さんが声を荒らげたのを聞きつけて足が止まる。提督さんが声を荒らげたって話はあんまり聞かないし、天龍や青葉が罰せられた時も淡々と言っただけだし・・・でも話を聞くと海外艦の娘達が廊下走ってたのを注意しただけかな?あと昼食の時間に遅れた事も注意されてるみたい?

「もう・・・瑞鶴?盗み聞きなんて良くないわよ?」

「翔鶴姉、たまたま聞こえただけだって・・・」

「そんなに扉に近付いて聞き耳立ててるのに、たまたまなんて言い訳はダメよ?」

「いやほら、誰かが怒られてるところに出くわすなんて気不味いからさ、ちよっと様子見してるだけだって。」

正直に言っとうちの提督さんはかなり怖い。直接暴力を振るってくるような人ではないみたいだけど、どこか底知れない恐ろしさを醸

し出す人だ。心が折れた私にもう一度立ち上がるチャンスをくれたので、冷酷な人では無いと思うんだけど・・・『翔鶴姉を守れるくらい強くなれるかな?』と継るように問い掛けた私に対して、溜息を吐いて『その調子では無理だろうな。』とぼつさり切り捨てて『それを私に聞いてくる時点でダメだ。強くなりたいたいなら他人任せにするな。なれるかななんて半端な意思では強くなれん。自分自身で強くなると決めて努力を続けろ。』そう突き離すように答える厳しい人だ。

・・・でもその言葉がなければ私は今も甘ったれたままだったかもしれないと考えたら、あれは提督さんなりの優しさなのかもしれないけど。

「五航戦、何をしているのかしら?」

「げ、加賀さん・・・ちよつと提督さんが怒ってるみたいで外に出にくくて・・・」

「そんな事を言ってる暇はないわ。午後の演習をするから早く準備しなさい。午前中はまだまだ手ぬるかったみたいですし、午後はずっと厳しくするわよ。」

「う・・・望むところよ!!」

あの鬼のような演習が手ぬるかった!?でも加賀さんに鍛え直して貰って、翔鶴姉を護れるようになるって決めたんだ!!弱音なんて吐いてられない!!

「行きましよう加賀さん。私も手伝いますから、瑞鶴さんをビシバシ鍛えましよう。」

「ええ、赤城さん。一緒に頑張りましよう。」

・・・え?加賀さんがスパルタなのは元からだから今更気にならないけど、なんか赤城さんまで戦場に赴くかのような真剣な表情だ。

「あ、赤城さん?あんまり瑞鶴に無理をさせ過ぎると、瑞鶴が倒れてしまふかと・・・」

「翔鶴さん・・・あの光景を見て何か思うところは無いのですか?」

ん?赤城さんが指差すのは間宮アイスで大盛り上がりしている娘達だ。正直に言って間宮アイスを食べる事が出来るのは羨ましいけ

ど、あれは戦闘でしつかりと結果を出したご褒美だ。私も戦場に出られるようになれば、ああやって提督さんからご褒美を貰えるのかな？  
「ええっと・・・皆さん喜んでいるようで、とても良い事だと思いますが・・・」

「ええ、とても良い事だと私も思います。ああやって提督から功績を認めて頂く事は、私達艦娘にとってなによりも誇らしい事です。」

「ええ、それは理解出来ますが・・・」

「ですが!!私達は提督から間宮アリスを頂けませんでした!!」

「え？あ、はい・・・」

「つまり私達の演習は提督に満足して頂けなかったと言う事です!!」

「そ、そうなのでしょうか？」

それは流石に極論じゃないかな？戦闘と演習じゃ危険度も段違いだし・・・

「私も間宮アリスが食べたい」「赤城さん？」じやなくて提督に認めて頂いて間宮アリスが食べたいです!!」

赤城さん・・・そんなにも間宮アリス食べたかったんですね・・・  
加賀さんのツツコミで一度は間宮アリスから離れようとしたけど、どうしても頭から間宮アリスが離れなかったんですね・・・私も間宮アリスは気になるけど。

「はあ・・・赤城さん？別に私は食欲で動いているわけではなく、あくまでも提督に認めて頂けなかったのが悔しいだけなのですが？」

「加賀さんは間宮アリス食べたくないんですか!？」

「・・・それとこれとは話が別です。」

あ、加賀さんが目を逸して言い淀んだ。やっぱり加賀さんも間宮アリス食べたいんだ。

「と言うわけで特訓あるのみです!!提督にご納得頂けるように頑張りますよ!!」

「行きますよ五航戦。夕食の時間まで何度でも叩きのめしてあげます。」

一航戦の二人が間宮アリス欲しさに暴走してる!?!だけどどうせ特訓しなきゃ強くなれないんだから、腹をくくるしかないわね!!

「ああもう!! やってやるわよ!!」



## 227話

ビスマルク達を叱り、工廠で妖精さん達に金平糖を与えて喜ばれ、ようやく私室に帰って一時間くらいは仮眠を取る事が出来た。出来たのだが……ドタバタ走ってくる足音で目が覚めてしまった……今度はどの艦娘が走ってるんだ？

ドンドンドンドン!!

「提督!!起きて!!緊急事態よ!!」

「っ?!入れ!!」

その一言でドアを蹴破るような勢いで曙が私室に入ってくる。

「なにがあった!?!」

「大本営から憲兵隊が来てる!!大本営の命令で抜き打ち調査するそうよ!!あと出雲鎮守府の猿田提督も一緒に来てる!!」

「なんだと!?!」

大本営が面倒な動きをしないようにきちんと牽制していたはずだが、鶴野提督の圧力で押し切られてしまったか!?!しかも舞鶴傘下出雲鎮守府の猿田提督までおまけで付いてきたか……鶴野提督も本気で動いてきたか？

「今は北九州鎮守府所属の憲兵隊が時間稼ぎをしてくれてるみたいだけど、大本営からの命令書があるから断れそうに無いそうよ。」

「すぐに向かう。曙はついて来い。演習は中断させて、艦娘達は全員自室で待機。私の許可があるまでは自室の扉の鍵を閉めて、憲兵隊達が来ても対応しないように伝えろ。」

「わかったわ。」

「クソ!!完全に後手に回ってしまったな……」

現状一番マズイのはなんだ?そんなもの当然悪雨の件が露見してしまう事に決まっている。ならどういう状況だとバレてしまう?一つ目は悪雨が憲兵隊達の前で深海棲艦化してしまう事。可能性は極めて低いがもしそんな状況になってしまったら、目撃者を口封じして逃げるしか無い。そうなったらまた提督に復帰など不可能だ。ならば一番可能性が高いのは、難癖をつけられて北九州鎮守府の提督から

外される事だ。そして後任の提督が命令されてしまえば艦娘達は従うしかない。

「ねえ、憲兵隊をどうするつもり？ 追いつ返すの？」

「追いつ返せばそうしたいが、大本営からの命令書があるならば難しいだろうな。こうやって鶴野提督が動いた以上、こちらをどうにかする勝算があつての事だろう。」

「ならどう対応するつもり？」

「そうだな……後手に回ってしまったから、相手がどう動きたいか探る必要がある。これが単なる嫌がらせなのか本気で私を提督の地位から引き摺り落とすつもりか……」

「……私はあんた以外が提督なんて嫌よ。」

「ああ、私も引き摺り落とされる気など毛頭ない。」

とは言つたものの状況は悪い。現状で味方に付けられそうなのは誰だ？ 鶴野提督に対抗するならばまず思い付くのは久藤提督だ。ただしここで久藤提督の力に縋ってしまったら、そのまま派閥に取り込まれてしまう程の借りを作ってしまう。久藤提督を頼るならば最低でもこちらから交換条件を提示出来る状態が必要だ。鶴野提督の派閥拡大を嫌って勝手に動いてくれるのであれば、こちらの関与するところでは無いのだが……そこまで甘い相手では無い。そして海原提督と熊井提督を巻き込むのも難しい。この二人は基本的に政治関連には関わろうとしない。ならば大本営？ 大本営が命令書を出しているならば、大本営は敵に回ったと考えるべきだ。鶴野提督に脅されて渋々行動しているというならば、付け入る隙はあるかもしれないが……

「っ!? 見えてきたわ!! 門のところ!!」

「ずいぶんと大人数だな。だが軍関係者はそこまで多くなさそうだな。あとは野次馬か？」

正門のところでは憲兵隊の制服を着たもの同士が怒鳴り合っている。片方は北九州鎮守府の憲兵隊をまとめている金子さんなので、もう片方が鶴野提督が派遣してきた憲兵隊の代表なのだろう。

「大本営からの命令書が見えんのか貴様は!! この抜き打ち調査は大本

「宮からの命令だ!!貴様は上からの命令に逆らうつもりか!!」

「こちらは事前になんの連絡も受けていない!!だから大本営への確認が取れるまでは、私の職責に従って通すわけにはいかないと言っている!!」

「だつたらさつさと確認を取れ!!時間を稼いで証拠の隠蔽をするつもりか!」

「早く確認して欲しければ無理やり通ろうとするのを止めろ!!お前達のせいで私が現場から離れられないのだから!!」

「確認くらいさつさと部下を走らせる!!北九州鎮守府所属の憲兵隊は無能揃いか!」

「ずいぶんと激しくやり合っているようだな。金子さんもよく自分が到着するまで保たせてくれたものだ。」

「失礼、北九州鎮守府所属の葛原です。これはなんの騒ぎですか?」

「ようやく来たか!!私は出雲鎮守府所属の憲兵隊の赤嶺である!!大本営から貴様の鎮守府を抜き打ち調査する命令が出ている!!大人しく従わない場合はその時点で反抗の意志ありと判断して、拘束して軍法会議にかけるものとする!!良いな!」

「命令書を確認させて頂いても?」

「うむ。確認するが良い。」

「拝見します。……『葛原提督の艦隊運用は不透明な部分があり、その艦隊運用能力と提督としての思想に疑義が持たれる。よって調査を行い提督としての能力を再確認すると共に、鎮守府が健全に運営されているかの調査を行う。』ですか……私が犯罪を犯したわけでも無いのに、ずいぶんと強引な話だと思いませんか?」

「それは貴様が判断する事では無い!!大本営のお偉方が判断する事だ!!」

「それはごもつともで。金子さん、大本営への確認をお願いしても?」  
「はっ!!すぐに確認しますので少々お待ちを!!」

金子さんが大本営の確認の為に憲兵隊の詰所にかけてゆくと、赤嶺さんの後ろから海軍の軍服姿の男が近付いてくる。一応海軍の制服は着ているものだらしく着崩しており、髪は金髪に染めてピアス

やらネツクレスやらをジャラジャラとさせている。これでも軍人なのか？どこかのチンピラが軍服を盗んで遊んでいると言われた方がまだ理解出来る。歳は自分よりは上だろうが、あまり離れては無さそうだ。

「ケケケ、これが噂の新人君か？ずいぶんとおつかない目をしてるじゃねえか？」

「ええ、北九州鎮守府所属の葛原です。そういうあなたは出雲鎮守府所属の猿田提督でお間違い無いですか？」

「ああ、間違いねえよ。鶴野の爺さんからの命令でお前のとこの鎮守府を徹底的に調査しろって言われてよお。狐塚の野郎じゃ頼りにならねえからって、俺に役目が回ってきたんだぜ？お前どう思うよ？」

「・・・大本営からの命令という建前ではなかったのですか？」

「はあん？なに言ってるんだお前？お前が鶴野の爺さんに喧嘩売ったからこんな事になったんたろうが？お前は馬鹿じゃねえんだからそれぐらいわかってるだろ？建前なんてどうでも良いから本音で話せよ。」

なんと言うか・・・言動もチンピラみたいな奴だな。政治的な駆け引きをしたいなら、建前つてもものは重要はずなのだが・・・こちらの油断を誘っているのか？それとも建前なんて必要無いくらいに追いつめたと考えているのか？それともただの馬鹿か？

「はあ・・・では鶴野提督の要求は？」

「そうだな？穩便に済ませたいなら海外艦をドロップさせる為の情報を開示しろ。ついでに今いる海外艦を差し出せば機嫌も良くなるんじゃないかねえか？鶴野提督に二人と俺のご機嫌取りに一人なんて良いと思うぜ？」

「穩便に済まない場合は？」

「クビじゃねえか？鶴野の爺さんがどこまでやる気かなんて俺が知るかよ。」

はあ・・・この猿田って男は鶴野提督の意志を伝える役目じゃないのか？こちらの恐怖を煽る為にわざと隠しているという線も考えられるが、本当に知らなそうなのが余計に怖いところだ。

「まあ、どちらにせよ海外艦を渡すなんて選択肢はありませんから、交渉決裂ですね。」

「ケケケ!!そうこなくちやなあ!!お?そっちの憲兵が戻って来たぜ?」

「葛原提督、大本営に確認が取れました。出雲鎮守府所属の猿田提督及び憲兵隊10名に北九州鎮守府を調査する命令を下した。北九州鎮守府所属の者は捜査に協力するようにとの事です。ですので我々も調査に協力する為に同行いたします。」

ほう?金子さん達もついて来るのか。かなりの大人数での移動になるな。それにしても金子さんが同行を申し出た時に赤嶺さんが嫌な顔をした。やはり北九州鎮守府の憲兵隊の同行は、向こうにとってやり難いのだろう。

「分かりました。それでは猿田提督、ご案内します。」

「おう、行くぞお前ら。」

猿田提督の一言で出雲鎮守府の憲兵隊がついて来る。猿田提督自身は北九州鎮守府の憲兵が同行する事に対して、特になにも感じていないのか?

「それではどこから案内しましょうか?まずは執務室でしょうか?」

「あー、そうだな。執務室で書類関係を漁るとするか。てかその前に一つ気になつてる事があるんだけど?」

「なんですか?」

「さっきからついて来てるの曙だろ?なにこいつ?秘書艦?」

「秘書艦は大淀で曙は秘書艦補佐ですね。今は連絡要員として連れ歩いています。」

「はあ・・・お前センスねえなあ・・・曙って言ったら生意気でクソクソ言うクソガキだろ?なんだってそんなうぜえ奴を近くに置いてんだよ?」

何かと思えば曙が気に入らないか・・・はあ・・・バカバカしい・・・うちの曙は私をクソ提督と呼びませんよ。それに真面目に仕事をする優秀なやつです。」

「おつ、マジかよ。なに?調教済み?」

「さあ？別に特別な事はしてませんよ。」

「ケケケ。そんなわけねえだろ？艦娘の性格が歪んでんだ。何かしらの理由があるってのが道理だろ？」

「曙の性格に影響を与えたのは前任者の大森提督でしょう。私ではありません。」

「ほう？お前は前任者の使い古しで満足してんのか？」

「・・・どうにも先程から侮辱的な物言いが多いようですが、どういっておつもりですか？」

「ケケケ。わりいわりい、ちよつとからかっただけだからそう怖い顔すんなって。それに今のやり取りで分かった事もあるからよ。」

「ほう？なんでしよう？」

「教えてやんねえよ!!さっさと案内しろよ。」

「ええ、ではまずは執務室へ。」

今のやり取りから何を読み取った？今までの会話からすると8割方どうでも良い事だとは思うが、猿田提督の事を理解出来ているわけではない。相手が馬鹿だと侮って足元を掬われるような間抜けになるのはごめんだ。よりいっそう警戒しなくてはな。

## 228話

執務室へと向かう道すがら、キョロキョロとあたりを見回す猿田提督が声をかけてくる。

「なあおい?」

「どうかしましたか?」

「ずいぶんと静かじゃねえか? 艦娘達はどこ行つた?」

「全員自室で待機させていますよ?」

「ほう? この俺が早朝からこの面倒くせえ調査に駆り出されてクソ眠いつてのに、お前のとこの艦娘共は自室でグースカお休み中って事か? あいつらをちゃんと働かせないなんて職務怠慢だがどうするよ?」

そういうわりには特別疲労してそうには見えないのだが? 目にくまも無くふらつく様子もなく極めて健康そうな雰囲気だ。

「職務怠慢だなんて人間き悪いですね。艦娘達への聞き取り調査をするならば、すぐに呼び出せるように待機させておいた方が効率的でしょう? それに艦娘達があちこち動き回っていたら、証拠隠滅を疑われてしまいますからね。当然の対応かと。」

「.....チツ」

「この対応がご不満であれば艦娘達に仕事をさせても良いのですが? 私としては時間を無駄にせずに演習をさせたいところですし。」

「ケツ!! そのまま待機させてろ。」

「それは残念です。早いところまともに戦えるように鍛えておきたいのですがね.....」

「何がまともに戦えるようだ白々しい。姫級ぶつ殺して海外艦も3隻手に入れたつてのに、まだ功績が足りねえつてか?」

こいつはなにを当たり前の事を言っているんだ? 提督として着任した以上、戦い続けるのも戦力増加を考えるのも当然の事だろう? 大怪我をしたわけでも隠居寸前の老人でもないんだぞ.....

「当然ですね。軍人として、提督として上を目指すのは当たり前の事です。私の功績なんて海原提督の足元にも及ばないのに、これで満足

しろとでも?」

「……はあ?お前それ本気で言ってるのか?俺達の前で良い子ぶってるだけか?」

「逆に聞きますが今の話で疑われる理由がわからないのですが?猿田提督ご自身も近隣の鎮守府と協力して、大きな戦いに何度か挑まれていると聞いていますが?それは軍人としてきちんと働いて功績を得る為なのではないのですか?」

「はあ……この馬鹿は本気で言ってるやがるな……」

「では猿田提督は何故提督をしているのですか?」

「あ?金だよ金。それに食い物も女も困る事はねえ。あと提督ってだけで周りの奴らがペコペコ頭下げてるのも気分が良い。だから提督として街を守ってやってる。街の奴らが死んじまつたら俺に貢ぐ奴らが居なくなっちゃうからな。提督の才能だけで良い生活が出来るこの時代に感謝だな。」

ここまでくるといっそ清々しいな。出雲鎮守府から来ている憲兵隊達はニヤニヤしているし、北九州鎮守府所属の憲兵達も特に何も反応していない。こいつらにとってはそれが当たり前って事か。だがこんな奴でも一つの鎮守府を維持して街を護っている。思想や戦い方や艦隊運用に問題はあるが、それでも実績がある以上どんな思想でもクビには出来ないと……

「猿田提督は欲望に忠実なのですね。」

「はん!!楽しく生きなきゃ人生つまんねえだろ?お前だって提督になつて良かったと思わねえのか?深海棲艦の被害から復興途中で民衆が満足に食事出来ないようなこの国で、飢えの心配もなくなったらふく食える上に嗜好品だって簡単に手に入る。金が欲しけりゃちよつと工夫するだけでいくらでも稼げる。そんな事を考えた事はねえのか?」

「そうですね……我々提督が優遇されているのは理解していますし、感謝もしています。だからこそ我々は提督としての役割をはたすべきでしょう?」

「だからお前は馬鹿なんだよ。提督としての仕事なんて最低限で良い



んだよ。それともなんだ？本気で頑張ればあの海原提督を超えられるとでも思ってたのか？」

「ええ、かなり時間はかかるでしょうが、目指さない理由はありませんね。」

それだけの実力と功績を積み上げれば、さぞかし大本営への影響力も強くなるはずだ。兄を殺した奴らへの復讐も、兄が護ろうとしたこの国を護る事も同時に叶えられるかもしれない。戦力増強こそが目的達成へ近づく道だ。

「はっ!!そうかよ。まあ、頑張れよ大馬鹿野郎。無事に提督を続けられたらな!!」

「ええ。着きましたね、ここが執務室です。」

執務室の前に着いたので扉を開けて中に案内する。執務室は広いとは言え、かなりの数の憲兵隊が着いて来たので多少手狭だな。

「おう、お前ら書類を片っ端から調べろ。」

猿田提督がそう命令したものの、憲兵隊がすぐに戦闘記録や資材や資金の運用記録などを集めてくるが・・・

「おい!?!どうなってんだ!?!なんでこんなに記録や書類が少ない!?!」

「ご存知無いのですか？私が着任する前に前任者の大森提督が殺された件で調査に入った憲兵隊が、書類関係をほとんど持って行ってます。そして私が着任してから今日で9日目ですから、書類や記録の量なんてたかがしれています。」

「ふざけんな!!たったこれだけで何を調べろって言うんだ!?!ああん!?!」

「ん？おかしな事を言いますね？今回の目的は私の提督としての能力を疑っての事でしょう？ならば私が着任してからの記録で事足りるでしょう?」

「チツ・・・お前には関係ねえだろ!!黙ってる!!」

どうにも腑に落ちない。猿田提督はなにか別の物を探していたのか？猿田提督はとりあえず数少ない書類を読んでいたが、なにかに気が付いたのかニヤリと笑う。

「おい?この日に資材が急に増えてるよな?これは何があった?」

「えつと・・・6日目ですか。これは久藤提督から支援物資として送られて来たものですね。」

「おいおいおいおい、これはお前が久藤提督とつるんでるって証拠だよな？ 資材を横流しして貰って何を企んでんだ？ ああん？」

「これは私にとりよりも、北九州鎮守府を拠点とした横須賀鎮守府の艦隊が集積地棲姫と戦えるようにと、久藤提督が送って下さった物資ですね。ご覧の通り北九州鎮守府の資材は連日の戦闘でかなり消費していて、横須賀鎮守府の艦隊に十分な支援が出来ない可能性があります。まさかとは思いますが、横須賀鎮守府への支援を批難するおつもりですか？」

「クソ!!なんか他はねえのかよ!?!」

思い通りに行かずにはいふんと荒れてるようだが、この程度でどうにかなると思われてたのか？ これはまたずいぶんと舐められたものだな。

「クソが!!海外艦のドロップに関してほとんど情報がねえぞ!?!どうなってるんだ!?!」

「はい？ 海外艦がドロップした時の戦闘記録はきちんと残しているでしょう？ 偵察の時点から全て記録はあるはずですが？」

「肝心の海外艦をドロップさせる方法がどこにも書いてねえだろ!?!どこに隠しやがった!?!」

「そんなもの知るわけないので、探しても時間の無駄ですよ？ ここで時間潰すくらいなら海域の調査に加わった方がよっぽど有意義かと。」

「なんの為にわざわざこんな遠いところまで来たと思ってる!!情報の一つも得られずに帰れるか!?!」

「それこそ私の知った事ではありませんね。」

いや、本当に知らないのだがどうしようもない。もし仮に知っていたとしても、教えてやる義理は無いのだが・・・

「クソ!!資金の名簿は・・・北条のご令嬢から大金が流れ込んでるな・・・」

「ああ、大森提督の遺品を売り捌いた時のものですね。これも大本営

の許可を得ていますので、なにも問題ありませんよ?」

「北条のご令嬢と仲が良いってのはマジなようだな。」

「ただの士官学校の同期ですよ。」

「チツ・・・ただの同期がここまでするわけねえだろうが・・・」

まあ、なにかと北条からは良くして貰っているな。その分迷惑もかけられているが・・・北条の突拍子も無い行動にはずいぶんと振り回されたものだ・・・

「クソが・・・他にはなにかねえのかよ・・・」

「ん?ずいぶんとあつさり引くのですね?」

「煽ってんのか?北条工業に直接喧嘩売れるわけねえだろうが・・・」

鶴野提督の権力があっても、北条工業とまともにやり合うのは避けるのか。それとも猿田提督の権限ではそこまでのリスクを負えないってことか?ああ、鶴野提督ならば北条工業と本気で揉めそうになったら、猿田提督を切り捨てて知らぬ存ぜぬを貫きかねない。猿田提督としてはそんな危ない展開は絶対に避けたいところか。そんな事を考えていると曙から袖をクイクイと引かれる。耳打ちするような仕草をするので屈んでやるが・・・

「おい!!何コソコソしてやがる!!」

猿田提督が目ざとく見つけてきて邪魔をされる。こいつもなにか自分を陥れるための手掛かり探しに必死なのだろう。証拠なんて適当にでっち上げれば良いだけなのに律儀な事だな。

「はあ・・・曙、なにか報告があるならこの場で言っつて構わない。」

「鹿児島鎮守府所属の古鷹さんから連絡よ。もうすぐ資材をのせた輸送船が到着するから、入港許可が欲しいと言ってるわ。熊井提督からの指示で当初の予定よりも多い量を積んでいるそうよ。博多鎮守府で少し輸送船に積み足したようね。」

「わかった、返事は少し待ってくれ。」

ほう?約束の資材がもう来たのか。対応が早いな。だがこれに劇的に反応したのは猿田提督だった。

「はあ!?!鹿児島鎮守府から輸送船だ?!?どういう事だよおい!?!」

「聞いての通りですが?佐世保鎮守府傘下の鹿児島鎮守府から、支援

物資が届いたようです。熊井提督が資材の量を増やして下さいとうですし、後で感謝を伝えなくてはですね。」

「そうじゃねえよ!!お前は佐世保鎮守府とは仲が悪いはずだろ!?今朝の会見で殴り合いにまで発展したって聞いてるぞ!?どうなってんだ!?!」

「それは少し違いますね。殴り合いではなくて私が島津提督に一方的に殴られただけです。」

「そんな事はどうだって良い!!どうやって熊井提督に取り入れた!?!」

「別に取り入れたわけではありませんが・・・これは私と熊井提督との話し合いの結果ですし、どうしても聞きたいと言うのであれば、先に熊井提督に確認を取る必要があります。勝手に喋って熊井提督の信頼を損ねるのは避けたいところですし。」

「俺が今回の調査の権限を一任されているんだ!!良いからさっさと話せよ!!じゃねえと反抗の意思ありとして拘束させるぞ!!」

ふむ?ずいぶんと焦っている様子だな?今回の件を熊井提督に知られるのはマズイのか?これは良い事を知ったな。

「はあ・・・そこまで言われるのであれば仕方ないですね・・・こちらは調査される立場ですし。」

「チツ、最初から素直に従えってんだよ!!」

「ですが佐世保からの輸送船はどう対応するおつもりですか?理由も話さずに待たせる訳にもいきませんが?」

「・・・・・・・・資材の受け取りくらいなら艦娘にでもやらせれば良いだろ!!」

「そうですか。曙、古鷹さんに入港許可を。それと明石と夕張に資材の受け取りをするように伝えてくれ。」

「分かったわ。・・・・・・・・古鷹さんが提督と直接話がしたいって言うてるわよ?」

「今は取り込み中だからしばらく待機して貰おう。」

「あっ!?!おい!?!勝手な真似は!?!」

「なんですか?私としては猿田提督達が同席しても構いませんので、私が古鷹さんと話をするところに同席されますか?」

「ぐう……鶴野提督に連絡する!!戻って来るまでなにもするなよ!!」

そう言い残して猿田提督は執務室から飛び出して行った。佐世保からの支援物資がこの時間に届いたのは偶然だろうが、本当に良いタイミングだったな。そして隣の曙が少しドヤ顔をしているところを見ると、曙も何か仕掛けてくれたのか?なににせよ面白い展開になってきたな。

## 229話

クソツ!! いったいどうなってやがる!? 佐世保鎮守府は今回の件で介入して来ないんじゃないのか!? 北九州鎮守府の執務室から飛び出したら、憲兵隊の一人が慌てて通信機を持って来た。とにかくまずは鶴野の爺さんに連絡しねえと・・・鶴野の爺さんの秘書に連絡するが、なかなか出やがらない・・・

「はい、鷺田です。」

「猿田だ。大至急鶴野の爺さんと代わってくれ。」

「申し訳ございませんが、鶴野提督は現在大事なお客様とご歓談中ですので。」

「大至急だつて言ってるんだろ!! こっちは時間がねえんだよ!!」

「・・・少々お待ち下さい。鶴野提督に確認して参ります。」

そう言つてまたしばらく待たされる。こっちは時間がねえつて言つてんのにチンタラしやがつて!!

「あー鶴野じゃ。何があつた?」

「大変なんつすよ!! 葛原の野郎が俺の調査を妨害する為に熊井提督に助けを求めてやがつたんです!!」

「ほう? あの熊井が動いたのか?」

「そうなんすよ!! 俺等が北九州鎮守府に踏み込んでから、一時間もしないうちに鹿児島鎮守府の奴らが来やがつたんすよ!!」

「熊井提督本人ではなく鹿児島鎮守府か?」

「あー、えつと? 葛原の秘書艦は鹿児島鎮守府所属の艦娘からとしか言つてなかつたような・・・でも鹿児島鎮守府は佐世保の傘下つすよ? それで資材を載せた輸送船が北九州鎮守府に入港を求めてて、鹿児島の艦娘が葛原への面会も求めてるんすよ!! 俺達がいるこの時を狙つてみたいに!! 俺達が踏み込んだ後に助けを求めたなら絶対に間に合わないタイミングだ!! どっかに情報を漏らした裏切り者がいるはずだ!!」

誰が情報を漏らしやがつた!? うちの憲兵隊か? 大本営の奴らか!? 俺達の計画を邪魔しやがつたクソ野郎はただじゃおかねえぞ!!

「まあ、落ち着きなさい。裏切り者を調べはするが、おそらく鹿児島鎮守府の介入は偶然じゃろう。今朝方鹿児島鎮守府の島津提督が葛原を殴って、熊井提督が仲裁に入ったのは聞いておる。熊井提督は生真面目な奴じゃから、その輸送船とやらは迷惑かけた詫びじゃろう。」

「な、なるほど・・・けどどうするんすか？偶然とはいえ佐世保傘下の奴らに今回の件を嗅ぎつけられるのはマズくないっすか？」

「よいよい。どうせ今回の件は近いうちに広まる。それに熊井提督は今回の件にはあまり介入はしてこんじやろうよ。だからお前さんはお前さんの仕事をしなさい。だがそうじゃのう・・・とりあえず海外艦の秘密を探る方を優先しなさい。葛原を退任に追い込む件は難癖つけて嫌がらせをする程度で充分じゃ。そのくらいは出来るじやろ？」

うーん？鶴野の爺さんはこう言ってるが、万が一佐世保鎮守府と揉めるような事になれば、なにかしら責任を負わされそうだしよ・・・

けど海外艦について探るぶんには佐世保と揉める事はねえよな？

たぶん・・・けど鶴野の爺さんに逆らうのも、それはそれでヤベえからなあ・・・

「あ、ああ、そのくらいなら問題ねえっす。」

「ああ、そうじゃ。葛原と鹿児島鎮守府のやり取りには同席させて貰いなさい。向こうにとつても今回の調査は想定外のものじやろうから、動揺してなにか重要な情報を漏らしてくれるかもしれんから。」

「・・・え!?おいおい!?」

「では頑張りなさい。」

そう言つて鶴野の爺さんは通信を切りやがった。マジかよあの爺さん!!下手すりゃ佐世保と戦争だぞ!?熊井提督が政治に興味が無いから今の均衡を保てるつてのに、こつちから喧嘩売りに行くとか馬鹿じゃねえのかよ!?これはいよいよ俺を捨て駒扱いしやがったのか?このまま進めばかなりヤベえ状況だが、だからと言って鶴野の爺さんの命令に逆らうのもヤベえ・・・なんとかしねえと・・・

「チツ!!クソが!!」

猿田提督が通信している間に今後の展開を色々と考えていると、荒々しく執務室の扉が開かれる。

「おや、お戻りになられましたか。」

「おう。」

「それでどうなさいますか？」

「お前が鹿児島島の古鷹に会うところに俺も同席する。」

「ほう？それは少し意外ですね。私は構いませんが、古鷹さんには事情を全て説明してから許可を求めますが構いませんね？」

「………しゃあねえな。」

流石に内緒でいきなり会わせるなんて無茶は言わないか。猿田提督は凄く苦い顔をしているので、かなり不本意な話なのだろうがな。

「曙、古鷹さんに事情を説明しておいてくれ。それでは港の方に行きましようか。もうじき輸送船も到着するでしょう。」

「……ああ、案内しろ。」

それにしても同行してくるか。つまり佐世保側に今回の件がバレても問題ない。もしくはバレてもリスクが許容出来るって事か。だがそれは鶴野提督の考えで、猿田提督としては納得していないが命令には逆らえないってところか？これは付け入る隙になりそうだな。とはいえ猿田提督を上手くあしらえたとしても、鶴野提督が何を考えているのかがわからないから油断は出来ない状況だな……

「………提督、古鷹さんに事情を説明して、猿田提督達の同席にも同意して貰ったわ。」

「ああ、わかった。」

「クソッ!!なんだって俺がこんな目に……」

猿田提督は本当に余裕を無くしてさつきから悪態ばかりだ。うちの曙よりもよっぽどクソクソ言ってるぞ。それに比べて曙の方は少し上機嫌か？曙を悪く言ってた猿田提督が焦ってるのを見て、ざまあみろって感じか？まあ、なんにせよせっかく弱味を見せてくれているのだから、どれくらい有効か揺さぶって試しておくか。



港でしばらく待つっていると鹿児島鎮守府からの輸送船が到着した。明石と夕張で輸送船を誘導して資材倉庫の近くに停泊させてロープで固定し、スロープ状のタラップが設置されて資材を下ろす準備が整えられる。こういう作業は流石に手慣れたものだ。そして輸送船から古鷹さんが降りてきた。

「お待たせしました。鹿児島鎮守府所属の古鷹です。」

「北九州鎮守府所属の葛原です。そしてこちらが本日調査の為に来ている出雲鎮守府の猿田提督と出雲鎮守府所属の憲兵隊の方々です。」

「あ、はい。宜しく願います。」

「・・・おう。それで？島津提督や熊井提督は来てないのか？」

「ええ、資材の受け渡しだけです。それがどうかされましたか？」

「いや、いい。」

それだけ言って猿田提督は引き下がった。なにがしたいのかは分からないが、口出してこないならとりあえず作業を始めるか。

「とりあえず荷下ろしをしましょうか。」

「はい、分かりました。資材は私達で荷下ろししますから、運ぶ場所だけ指定して頂ければ。」

「分かりました。明石、資材の方は頼んだぞ。」

「はい。お任せ下さい。」

「ああ、猿田提督、疑われるのであれば先に荷物を調べますか？」

「ぐ・・・おい、赤嶺!!憲兵隊を率いて搬入される荷物に怪しい物が無いか、それと運ばれた荷物の量を調べておけ!!」

「はっ!!」

ん？一瞬言い淀んだ。そもそも調査に来ているなら荷物の検査くらいしそうなものだが、こちらから提案するまで動かなかったのも気になる。

「では古鷹さんはこちらに。古鷹さんから私にお話があるとの事でしたし。ああ、それと事前に曙から伝えられてると思います。現在北九州鎮守府には猿田提督が調査に入っています。なんでも私の提督としての能力や思想に重大な疑義があるとか？ですから猿田提督も同席されますが構いませんね？」

「ええ・・・あ、はい・・・」

古鷹さんはちよつと引き攣った表情をしているが、取り敢えず猿田提督の件は納得してくれたようだ。二人と護衛の憲兵隊を引き連れて、工場エリアにある休憩所に案内する。ここは普段明石や夕張が休憩に使ったり、書類関係の仕事をする部屋だ。

「さあ、どうぞおかけ下さい。曙、なにか飲み物を用意してくれ。」

「ええ、分かったわ。」

「さて、では古鷹さんからのご用件を伺っても？」

「え!? いや、その・・・私はその・・・資材を搬入するので葛原提督にご挨拶をと・・・」

古鷹さんはずいぶんと困っている様子だな。おおかた古鷹さんとしては今朝の島津提督の件で謝罪をしたかったのだろう。しかし猿田提督が同席するという想定外の事態が起きてしまった。当然この話は島津提督にまで伝わっているはずだ。そして島津提督の性格からすると、熊井提督からの命令で不本意ながら資材を送っているうえに、舞鶴傘下の提督に自分のところの艦娘がペコペコ謝罪している姿なんて見られたくないのだろう。そしてそんな困っている姿の古鷹さんを見て、猿田提督の表情が険しくなる。まあ、こんな不審な態度をとれば何か隠していると疑うのも無理は無い。

「ああ、それはご丁寧にも。とはいえそれだけの用事でしたら、わざわざ場所を改める必要もなかったかもしれないね。」

「あはは・・・そうですね・・・」

「では資材の搬入が終わるまでのんびりお茶でも飲んでみましょうか?」

「そ、そうですね!! それではお言葉に甘えて!!」

「おい、ちよつと待て。」

「猿田提督? どうかされましたか?」

「なんで鹿児島鎮守府からの輸送船が北九州鎮守府に来たんだ? 答えろ?」

「私は話しても構いませんが・・・古鷹さん、島津提督からはなんと?」  
「えつと・・・すみません・・・島津提督からは部外者に話す事は無い

と・・・」

まあ、そうだろうな。というか鶴野提督であれば今朝島津提督が自分を殴った件は知っているだろうし、熊井提督が仲裁に入った件も知っているのです、今回の輸送船の件に関しても察しがつくはずだが・・・それでもプライドの高い島津提督は謝罪の為に資材を送って来た事を隠したがっていたか。面白くなってきたな。

「ふふっ、そうですか。それは困りましたね。島津提督がそうおっしゃるのであれば、私としても軽々しく口には出来ませんね。」

「おい!?お前は立場を忘れたのか!?俺は大本営からの命令で調査に入ってたぞ!!その俺に隠し事をするって事がどういう事か分かってんのか!?!」

「仕方ありませんね・・・であれば猿田提督が直接島津提督と話をつけられては如何ですか?島津提督も大本営からの命令という事であれば考えを改めてくださるかと思いますが?せっかく連絡役の古鷹さんもいらっしやる事ですし。」

「ぐ・・・」

ずいぶんと悩んでいるな。やはり島津提督を盾に使うのは有効のようだな。大本営からの命令だと言えば島津提督も納得すると思うが、それでも佐世保派閥に喧嘩を売りたくは無いつてところか。かと言つて鶴野提督からはしつかり調査しろと言われているので、板挟みになってるってところか?そして無理矢理命令して聞き出したところで、たいした話は出てこない。こちらとしては何も損する事なく猿田提督を困らせて、反応を探る事が出来る。

「だったら・・・だったら上には葛原提督と島津提督が協力して、なに隠し事をしてしていると報告するぞ!?!」

「おや?これは心外ですね。私としてはこの輸送船について話す事は構わないのですよ?猿田提督が島津提督を説得すれば丸く収まる話だと言うのに・・・島津提督も大本営からの命令だと納得して下さいれば、素直に話して下さいるはずですよ?それなのに連絡もしないなんて、これは猿田提督の職務怠慢と言われても仕方ないと思いますか?古鷹さんはどう思われますか?」

「ええ!? いや、その・・・私はただの連絡役なのでなんとも・・・」  
「いやいや、この場で島津提督の事を一番理解しているのは古鷹さんでしょう? 島津提督がどのような反応を示されるか予想も出来るのでは?」

「ああ・・・うう・・・はい・・・すつごく怒ると思います・・・」  
「だそうですよ・・・ここはやはり一度猿田提督ご自身が島津提督ときちんと話し合う事をおすすめします。きちんと話し合えばきっとお互いの誤解も解けるはずですよ。」

あの島津提督とまともに話し合えるのであれば、という条件付きだな。それこそ熊井提督に仲介を頼むか、鶴野提督や大本営の人間を引つ張ってくるか・・・色々とやりようはあるだろうが、島津提督との関係悪化は確定だろう。猿田提督はこつちを睨みながらしばらく唸っていたが、不機嫌そうに視線を逸らす。

「チツ・・・この件はもういい!! それよりもこの部屋を調べさせて貰う!!」

「おや? そうですか? とはいえせつかく曙にお茶を用意させたのですから、資材の積み込みが終わるまでは一緒にお茶でも飲みませんか? 古鷹達が遥々鹿児島から資材を持って来て下さったのに、もてなしの一つもしないのであれば、私の器を疑われてしまいます。」

そう言つて古鷹さんに微笑みかけると、引き攣つた笑顔を返してくれる。本当はさっさとこの場を離れたいのだろうが、島津提督が散々迷惑をかけているので、心優しい古鷹さんは強気に出れないのだろう。悪いが利用出来るものは利用させて貰う。

「あ、はい・・・ではお言葉に甘えさせて頂きます。」

猿田提督もかなりイライラしているが、曙が全員の前にお茶と茶菓子を配ると、不承不承ながら着席した。

「ねえ、提督?」

「ん? どうした曙?」

「あんたまさかここまで資材運んで貰っておいて、手ぶらで帰すつもり? お土産くらい持たせるのが礼儀つてもものでは?」

「ええ!? いや!? そんな事は・・・」

「ふむ、そうだな。失念していた。すまないがなにか見繕ってくれるか？」

「ええ、分かったわ。」

曙はニコニコしながら休憩室を出て行った。あいつもずいぶんと猿田提督を煽るような真似をするものだ。曙と言えはかなりツンツンしているが、凄く真面目な艦娘だという認識だったが、こんな嫌がらせもするのだな。

## 230話

猿田提督との通信を終えられた鶴野提督が小さく溜息を吐かれる。少しだけ困ったご様子でしょうか？

「もう宜しかったのですか？」

「少し想定外の事も起きておるようじゃが、向こうはどうとでもなるう。それよりも客人を待たせておる方が問題じゃ。」

「・・・そうですね。」

鶴野提督がどこまでの事を考えておられるかは、浅学非才の身では理解出来ませんが、今回のお客様がかなり重要な人物だと言うのは理解出来る。なにせ・・・

「ただいま戻りました。お待ちせして申し訳ありませんなあ北条会長。」

「いえいえ、お構いなく。鶴野提督がお忙しい事は存じ上げておりますから。」

今回のお客様はあの北条工業の会長様だ。今の日本で最も力を持つ企業はどこか？それはもちろん北条工業だと子供でも答えられる。深海棲艦が現れる以前はただの金属加工工場であったにも関わらず、この数年で工業・農業・物流・建築など様々な分野に手を出して、日本国民の生活は北条工業が支えていると言っても過言では無い。とはいえ北条会長が社長として辣腕を振るっていたのは深海棲艦襲来後の2年くらいまでで、ここまでは会社を大きくしたのは北条会長の息子さんである現社長だが、北条会長は未だに影響力の大きい人物だ。

「そう言っただきると助かります。それでええと、どこまで話をしましたかな？」

「私の孫娘の麗子のお話でしたな。」

「おお、そうでしたな!!わしも麗子さんのご活躍はよく耳にしております。なんでも提督としての才能だけでなく、北条工業や国の為になる事にどんどん挑戦していらっしやるとか? いやはや優秀なお孫さんに恵まれて羨ましい限りです。」

「ははは。ありがとうございます。自慢の孫娘なのですが、その分幼い頃から好奇心旺盛で気になる事があればすぐに駆け寄るお転婆な娘でして・・・ヒヤヒヤさせられた事は数え切れませんよ。」

「そうだったのですか？」

「ええ、勝手に工場内に入り込んで作業員を捕まえてあれこれ質問するような娘でして、本当に困った娘でしたよ。従業員達も私の孫だからと強くは出れず・・・いや、従業員達もあの娘の事をとても気に入っていましたが、つつい甘やかしてしまっただのかもしれないなあ。とはいえ私にとつてもたつた一人の孫娘ですし、一番甘やかしていたのは私かもしれませんね。」

「そう言う北条会長の顔はとても穏やかな表情だ。困っていたと言いつつも、とても懐かしく良い思い出となっているでしょう。これも北条工業のご令嬢の人徳でしょうか？」

「うーむ、そのお気持は分かります。わしの孫達も本当に手のかかる子ばかりでして。どうかかしたいとは思ってはいても、やはり孫は可愛くて仕方ないのでつつい甘やかしてしまいました。」

「・・・確かに鶴野提督のお孫さん達は我儘な方が多いですが、その孫達からもかなり恐れられてるのによくすらそんな事が言えますね。」

「そうですかそうですか。やはり孫は可愛いですから、仕方ない事ですな。」

「ええ、仕方ありませんなあ。そう言えば話題に出た麗子さんですが、提督として新しい派閥を立ち上げようと頑張っておられるとか？」

「あー、そうなんですよ。私と息子は麗子にいずれは北条工業を継いで貰おうと思つて育てたせいかな、人の上に立つのが当然と考える娘でして・・・いやはや提督としては未熟者でしょうに困つたものです・・・」「いえいえ、わしは良いと思いますぞ？近頃の若者は覇気に欠ける者が多いというのに、麗子さんの行動力には目を見張るものがありますからなあ。それに新たな派閥を立ち上げたからと言って、他の派閥と争おうとは思っていないのではないのでしょうか？実際に士官学校では派閥の垣根を超えて人脈を作り、近頃は各地の鎮守府をあちこち

回っているとか？もちろんわしのところにも挨拶に来てくださいましたな。」

「その説はどうもご迷惑をおかけしました。」

北条会長が申し訳無さそうに頭を下げられた。確かにお忙しい鶴野提督に対して当日の朝に訪問出来るかを尋ねて、飛行機で飛んで来るといふ電撃訪問。おかげでこちらは大慌てでスケジュールの調整やらもてなしの準備をすることになり、とても大変なイベントでした。けれども北条工業のご令嬢が高価な食材やお酒などを差し入れて下さったので、舞鶴鎮守府で働いている事務員や憲兵隊は凄く喜んでいましたね。

「いえいえ、迷惑だなんてとんでもない!!むしろこの老骨に次代の若き力を感じさせて頂き、次代の為にまだまだ頑張らねばと思わせて頂きましたよ。」

「そう言ってお下さるとありがたいです。」

「それに派閥を立ち上げると言っても、別に先駆者である我々を蔑ろにするわけでは無さそうでしたしな。ならば若者の挑戦は大いにけっこうですな。」

「鶴野提督にそう言ってお頂けると心強いです。」

「あー、しかし一つ気になる事もありましてな・・・」

「と言いますと?」

「老人の余計なお節介と思われるかも知れませんが、どんな人間とも関わりを持つとうとするのは少し危うく見えるものでしてなあ・・・何かと問題のある人間ばかりを派閥に入れるのはどうかと思うのですよ。」

「う、それは・・・」

「ええ、もちろん他の派閥に入れなかったあぶれ者達を集める事で、自分の派閥を立ち上げたいと言うのは理解出来るのですよ。しかし性格に難があったから他の派閥に入れなかったと言う事は忘れてはいけません。特に性格面に問題のある者だらけというのは如何なものかと心配しておりますな。」

「それはそうかも知れませんが・・・息子も麗子も『変わった性格の持



ち主こそ新たな可能性を生み出すかもしれない人材だ』と言って聞く耳を持たなくてですね。実際に息子はその方針で会社をここまで大きくしましたので、私からは何も言えませんなあ……」

「なるほどなるほど。そのお考えも一理ありますな。部下として迎え入れて、手綱を握れるのであればそれもまた良い事でしょう。しかし……将来の伴侶と考えてみると、そんな悠長な事は言えないのでは?」

鶴野提督の一言で困り顔だった北条会長の表情が一気に変わる。

「しよ、将来の伴侶ですか?!いい、いつたいなんの話ですか?!私はそんな話は聞いていませんぞ!」

「まあまあ、落ち着いてください。と言われても急にこんな話をされたら驚きますか……これ、北条会長にお茶のおかわりを。」

「はっ!!北条会長、失礼しますね。」

「す、すみませんなあ。」

北条会長は少しだけお茶を飲んだが、やはりまだ落ち着かない雰囲気だ。

「そ、それで、麗子に良き人がいると噂でも?私はそんな話を聞いた事も無いのですが……」

「ええ、あくまでも噂に過ぎない話ではありますが、この前北九州鎮守府に着任した葛原という男をご存知ですか?」

「ええ、麗子からも何度か話は聞いておりましたし、最近何かと話題になってきている提督ですよね?」

「ええ、その何かと問題を起こしている葛原です。なんでも士官学校時代から麗子さんが何度も声をかけて気にしておられたとか?一匹狼を気取る葛原に対して、何度も何度も根気強く派閥への勧誘を行い、北九州鎮守府に着任してからも支援を惜しまず投資しているとか?あとは士官学校時代に何度か麗子さんの権限で、葛原と共に外出していたという話も聞きます。」

「そ、それは……私も少し耳にはしています……」

「そして葛原という男は士官学校でも素行不良で有名な男でしてなあ……教官に逆らって営倉送りになる事も日常茶飯事で、士官候

補生同士で暴力沙汰になった事も少なくはありません。しかも提督となつてからも長門鎮守府からの協力要請を無視したり、平気な顔で佐世保鎮守府から手柄を掠め取ったり、鹿児島鎮守府の島津提督と揉め事を起こしたりと、好き放題している困った男でして・・・ついには大本営も葛原提督の横暴なやり方に我慢出来ず、監査の為の人員を送り込んだと聞いております。」

「・・・いや、監査の人間を送り込んだのは鶴野提督じゃないですか!?逆らつたら恐いから私は何も言いませんけど・・・」

「そ、そんな事に・・・これはまたずいぶんと・・・癖のある人物というか・・・」

「若くて覇気と野心と気骨のある若者はわしも好きなのですが、葛原という男はどうにも自己中心的で他者との協調性がなく、とにかく周囲をあらしてしまふ人物というのがわしからの評価です。このような人物に近付き過ぎるのは、どれ程危険な事かといついつい心配してしまふのですよ・・・」

「ううむ・・・どうしたのですかね・・・」

「この件に関してはわしは部外者ですからなあ・・・心配する事は出来ても、何か口出するのはお節介が過ぎると言うものです・・・麗子さんにはもつと良い相手を見つけたいと願っておりますが、こればかりはなんとも・・・」

「ありがとうございます。一度麗子にそれとなく話を聞いてみようと思ひます。」

ふう・・・相手の不安を煽るだけ煽つて相手に自分から動いて貰う。鶴野提督が良く使っていた手ですね。最近は権力をしつかり握っているのです、命令を下したり脅したりするほうが多かったですね・・・流石に北条工業の会長相手にそんな恐ろしい真似は出来ませんからね。

「ご家族でよく話し合つてみると良いかもしれませんなあ。おっと、いかんいかん。歳をとると心配事ばかりしてしまいますな。それよりももつと明るい話でもしましょうか。実は・・・」

## 231話

古鷹さんと猿田提督としばらく話をしていると、運び込まれる資材の確認と荷下ろしが終わったとの報告を受けた。そして輸送船の見送りの際に鹿兒島鎮守府の艦娘達にお礼を言い、お土産に曙が用意した甘味を渡すととても喜ばれた。ただ古鷹さんだけは引き攣った笑顔を浮かべていたのは、きつと猿田提督がずつと不機嫌だったからだろう。今も古鷹さんと自分が別れの挨拶をしている横で、不機嫌そうに睨んでいるからな。

「では私達はこれで失礼します。お土産まで頂きありがとうございますございました。」

「いえいえ、こうやって資材を運んで下さったのですから当然の事です。ああ、それと一つ聞き忘れていたのですが……」

「はい？何でしょう？」

「明日からの佐世保鎮守府傘下の方々との演習の予定をまだ聞いていないのですが、なにかご存知無いでしょうか？」

「え、えつとお……私は何も聞いてないです……」

「そうですか……佐世保鎮守府にお伺いして佐世保鎮守府のやり方を勉強させて頂く話もありますし、早めに予定を決めたいところなのですが……」

「ちよ!?ちよつと待て!?佐世保傘下と演習!?しかも佐世保鎮守府から直々に指導して貰うのか!?」

まあ、当然食いついてくるよな。というかこの話は今朝多くの記者の前で語った事なのだが、まだ猿田提督の耳には入っていないかったのか？鶴野提督の情報網ならば既に知っていて当然の話のはずだ。なにせ入り口で群がって来た記者達は鶴野提督の派閥の人間のはずだ。

「ええ、その予定ですがそれがなにか？」

「ほ、本当なのか!?」

「あ、はい。私は詳しい事は知りませんが、島津提督からそう聞いています。」

「チツ!!そうかよ……」

「では話を進めさせて頂きますが、演習についてはどなたに尋ねれば良いのでしょうか？それとも待つていればなにかしら連絡を頂けるのですか？」

「少し待つて頂けますか……現在調整中ですので、おつてご連絡するとの事です。」

「分かりました。それではご連絡お待ちしております。」

「じゃ、じゃあ私達はこれで失礼しますね。」

「ええ、では島津提督にもよろしくお伝え下さい。」

「あ……はい。分かりました。」

古鷹さんは最後まで頑張つて笑顔を浮かべようとしていたようだが、やはりどこか引き攣つた笑顔になるのは仕方ないか。だが島津提督の意地と古鷹さんがなんとか取り繕おうとしてくれたおかげで、猿田提督に自分と佐世保派閥との仲が良いと誤解させる事に成功した。少々あからさま過ぎた気はするし、いずれは誤解が解けてしまうかもしれないが、今回の調査を凌げればそれで構わない。

「さて、鹿児島鎮守府の艦娘達も帰還されましたが、これからどうしますか？まだ調査を続けますか？」

「あ、当たり前だ。せめて海外艦についてだけでもなんか調べねえと終われねえからな。とりあえず工廠や倉庫を徹底的に調べる。」

「はあ……まあ、やましい事は無いので好きにしてください。」

「ああ、赤嶺、そっちはお前達憲兵隊でやれ。俺はこいつに話がある。」  
「はっ!!護衛は何名残しましょうか？」

「扉の外に一人でいい。大事な話だから絶対に許可なく入つて来るなよ……行くぞ。」

ほう？二人きりで話があるか。今度はいったい何を企んでいるのやら？とりあえずつい先程まで古鷹さんと三人でお茶をしていた部屋に戻る。曙も入ろうとしたが猿田提督に止められて部屋の前で待機させたので、部屋には猿田提督と自分の二人きりだ。

「それで？わざわざ人払いまでしてなんのお話でしょうか？」

「ここには俺とおめえの二人きりだ。まだるっこしいやり取りは無しで腹あ割つて話そうぜ。」

「・・・はあ？そんな事は信用していない人間相手に出来るわけないでしょう？」

「このままじゃお互いに埒があかねえだろうが？てめえもこの調査が面倒くせえだろうけどよ、俺もクソ面倒くせえんだよ。だからお互いに情報を出し合って妥協点を探す。悪くねえはずだが？」

ふむ？なんと言うか猿田提督は先程まではずいぶんと荒れてたはずだが、ここにきて一気に落ち着きを取り戻したな。佐世保派閥との関係を見せつけた事で、強気な態度を維持出来なくなったから、今度は交渉に切り替えようって事か？あれだけ侮辱的な態度や脅迫をしておいてずいぶんと虫のいい話だが、とりあえず何を言い出すか聞いてみるか。

「そうは言ってもこちらから出せる情報なんて大したものはないのですがね・・・それでも言うならば話くらいは聞きますが、まずは猿田提督から誠意を見せて頂きたいものですね。」

「それが筋つてもんか・・・とりあえず鶴野の爺さんは海外艦にすげえ拘ってるみたいだぜ。お前を鎮守府から追い出そうとしてるのも、お前から海外艦を奪おうとしたからだ。お前がムカつくつても大きいだろうがな。」

「はあ・・・その程度の事で何を話せと？鶴野提督が海外艦に拘ってる事なんて今更でしょう？」

「だけど俺がさつき連絡したときに、お前を追い出すよりも海外艦をドロップさせる方法について調べる方を優先しろって命令があったのは知らねえだろうが？」

「知りはしませんが予想の範囲内ですね・・・まあ良いでしょうその情報に見合う程度の質問なら答えましようか？」

「チツ・・・言い方が気に入らねえが・・・とりあえずこのまま調査を続けたとして、海外艦のドロップについての情報なんて出てこないんだろ？」

ほう？あれだけ探し回っていたのにもう諦めてくれるのか？それともこっちの油断を誘うつもりか？

「ええ、出てくる事は無いです。私はなにも知りませんからね。ああ

いや、一応私もこの鎮守府の全てを把握している訳ではありませんし、前任者が隠し部屋でも作っていて、そこになにか資料を隠している可能性は否定出来ませんね。だからなにか見つかる可能性はゼロでは無いですよ?」

「少なくともお前は見つかる訳は無いって思ってるんだな?」

「ええ、もちろんです。とはいえ私の発言を信じるおつもりですか?」  
「だから腹あ割って話すって言っただろうが。そこ疑い始めたら話が進まねえよ。それに大事な情報は頭ん中にだけ入れとくとか、研究資料は他所に置いてるとか色々あんだろ。少なくともここにはねえって話を信じるだけだ。」

こうも急に態度が変わると気味が悪いな。それにしても敵の言う事を信じるか。まあ、取引をしたければ必要な事かもしれないな。自分と久藤提督もお互いの利害が一致するという条件があれば、お互いの事がある程度信用して動く事が出来る。もちろんお互いに完全に信じ切る程脳内お花畑ではないから、本当に重要な局面では絶対に信じないだろうが。

「分かりました。その言葉を信じておきましょう。ではこちらから質問です。今回の一件で猿田提督はどうしたいのですか?」

「あー、一番良いのはお前のとこの海外艦手土産に鶴野の爺さんのご機嫌をとる事だが・・・無理だろ?」

「ええ、強引に話を進めるなら、こちら的手段を選ばずに抵抗するだけです。」

「わーつてるよそんな事はよお!!んで海外艦ドロップの秘密も期待出来ねえ、お前を提督の座から蹴落とすのも無理そう。だからけっこう詰んでんだよ。失敗したら何言われるかわかんねえのによ。」

「そうでしょうね。だから今更交渉でどうにかしようとも?」

「悪いかよ。んでどうしたいかだったな。俺としては鶴野の爺さんが納得するような成果か逃げ道が欲しい。じゃあこっちが聞く番だが、久藤提督とはどれくらい繋がってる?」

ふむ? 成果か逃げ道か。おそらく成果の方は無理だろうな。だが逃げ道の方ならば交渉の余地はあるか?

「久藤提督とはたぶんお互いに敵だと思ってますよ？共通の敵である鶴野提督に対しては、少しでも協力するかもしれませんが。」

「つまりどつぷり繋がってるわけじゃねえし、いざって時は頼れねえって事か。」

「まあ、そのようなものです。猿田提督は鶴野提督の派閥でどれくらいの権力を持っているのですか？」

「あー、うちの派閥は提督が偉いつて考えだから、けっこう好き勝手出来るぜ。それでも鶴野の爺さんには小間使いみたいにあれこれ命令されるけどな。」

「では他の提督に命令したりは出来ないと？」

「他の提督に命令したけりゃ鶴野の爺さんを通すしかねえな。じゃあ次は北条工業とはどれくらい繋がりがあるんだ？」

「北条とは士官学校の同期です。北条個人とは多少の縁があります。北条工業とはなにも無いですね。というかさつきからなんですか？ずいぶんと私の背後関係を気にされてますが、鶴野提督の本命はそちらですか？」

「というか態度も話の方向性も急に変わったので、これで警戒するなという方がどうかしている。」

「あーいや、これは俺の事情だな。つうかよく考えたらよお、俺は個人としちやお前のやり口は嫌いじゃあないんだぜ？」

「・・・はあ？どういふところがですか？」

「どこか一つの派閥に所属しないであちこちにコネを作っておいて、色々甘い汁を吸おうってやり口だよ。確かにやられた側からすればムカつくやり方だがよ、逆に言えば俺自身がやる側になれば俺も良い思いが出来るって事だ。今まで俺は鶴野の爺さんの下でやって来たけどよお、不満がねえわけじゃねえからよ。いざって時に鞍替え出来るコネを作っておくのも悪くねえと思ってるな。」

「はあ・・・そんな事をすれば鶴野提督から裏切り者だと判断されて処理されるだけでしょう・・・最初から敵対的な人間と部下の裏切りでは、鶴野提督の対応も大きく違ってくると思いますか？」

「それはかなりやべえんだよなあ・・・だから久藤提督と手え結ぶなら

かなり慎重にやらなきゃなんねえ。んで横須賀派閥は汚職に厳しいから論外だし、佐世保派閥も軍規でガチガチだから論外だ。そこでお前の出番ってわけだ。」

いや、出番なんてあつてたまるか。一刻も早く縁を切りたいのに、なんで自分がコネ作りの手伝いなんかしなくてはいけないんだ？

「はあ……どう考えても私が出る幕では無いでしょう？」

「まあそう言うなって。お前は北条のご令嬢と仲が良いんだろ？んで北条のご令嬢は新しい派閥を立ち上げようと頑張ってるらしいじゃねえか。普通なら新しい派閥の立ち上げなんか鶴野の爺さんと久藤のおっさんが潰すだろうが、流石にあの二人も北条工業相手に喧嘩は売らねえはずだ。」

「まあ、そうでしょうね。」

「んで北条のご令嬢は4大派閥全部と仲良くする気らしいじゃねえか。」

「北条が何を考えているかは知りませんが、士官学校では派閥に関係なく交友関係を広めていたようですね。私のような無所属の人間も含めて。」

「だったら俺が北条のご令嬢と仲良くしても鶴野の爺さんは文句言わねえだろ？むしろ俺が北条のご令嬢と親密な間柄になれば、派閥間の仲介役として重要なポジションを獲得出来る。そうなれば鶴野の爺さんも俺には強く出れなくなるだろうし、いざって時は北条のご令嬢の派閥に入って匿って貰えば良い。な？完璧な計画だろ？」

「……少々夢を見過ぎではないだろうか？まず猿田提督が北条に気に入られるのが前提条件だし、鶴野提督が北条工業が絡む重要な交渉を他人に任せるとは思えない。しかもいざって時に匿って貰うと言うが、そんな事をすれば北条と鶴野提督の派閥は険悪な関係になつてしまう。そんなデメリットを飲み込んでまで助ける程の関係を築けるとも？」

「さあ、私には理解出来かねます。ですが猿田提督の要求はわかります。猿田提督を北条に紹介して欲しいのですよね？」

「ああ、話が早くて助かるぜ。」



「……まあ、北条と猿田提督が会う約束を取り付ける事くらいは出来るだろう。そもそも北条は派閥に関係なく交友関係を広めているし、いずれは全ての提督と話がしたいと言っていた気がする。そしてその後の事は北条が好きにやるだろう。」

「……分かりました。おそらく北条と面会の約束を取り付けるのはなんとかなるでしょう。ですが私がするのはそこまでです。その後どうするかは猿田提督次第で私は関与しません。構いませんね?」

「おう、それで構わねえ。むしろ仲介役として今後も幅を利かされたら邪魔だからな。」

「では面会の約束を取り付けければ、即座に北九州鎮守府から手を引いて出ていく。この条件で構いませんね?」

「おお、交渉成立だな。な? 話せば分かるもんだろ?」

「……元々話なんてする気も無くて高圧的な態度をとってた奴がよく言うものだ。さて、この面倒な奴を北条に押し付けるとするか。どうせ北条に振り回されて終わるか、北条に上手く使われて終わるだろ。」

「……そうですね。では北条と話をしますので少しお待ち下さい。」

## 232話

とりあえず部屋から出ると扉から少し離れた所で待っていた曙が駆け寄ってくる。無言のまま真剣な表情でこちらの頭の上から足元まで視線を動かしていたが、いったいなんなのだろうか？

「曙、北条と話がしたい。通信を繋げてくれ。」

「え？北条さんと？分かったわ。……繋がつたわよ。」

「葛原だ。」

「今朝ぶりですわね。貴方から連絡なんて珍しいですけれど、どうしましたの？」

「少々厄介事だな……」

「あら、いつもの厄介事ですか？」

「いつもの厄介事だ。」

「おーほっほっほっ!!相変わらず厄介事を引き起こしますわね!!それこそ葛原ですわ!!」

厄介事だと言っているのに喜ぶとは……北条こそ相変わらずだな……

「単刀直入に言う。出雲鎮守府の猿田提督が北条に会いたがっている。時間を作ってやってくれるか？」

「ええ、それは構いませんけど、貴方が人を紹介したいだなんて言うのは初めてですわね。明日は雪や槍でも降って……イ級くらいなら降ってもおかしくありませんわね……」

「そこまで珍しい……かもな。というか初めてだったか？で、どうだ？」

「ええ、まあ、構いませんわよ。いずれは全ての提督と会うつもりでしたし、向こうからのお誘いならば話が早そうですわ。」

「そうか、助かる。」

やはり北条ならそう言ってくれるか。これで心置き無く厄介事を押し付けられる。

「それで？猿田提督を紹介したいとの事ですが、葛原から見て猿田提督はどのような方かしら？」

「あー、クズだな。それもかなりの。」

「……私は今までいろんな人を紹介して貰って繋がりを作って来ましたが、そんな紹介をされたのは初めてですわね。ふふっ、でもそれでこそ葛原ですわ!! 良いでしょう!! なんだか面白くなりそうないやつだな。」

「面白くなるかは北条次第だ。じゃ猿田提督と代わるから後は任せただぞ。」

「ええ、よろしくてよ!! おーほっほっほっ!!」

もう少し状況説明やら交渉やらで時間を取られるかと思っただが、面白くなりそうというだけで承諾してくれるとは……相変わらずすごいやつだな。

その後部屋に戻って猿田提督に通信機を渡すと話はスムーズに進んだようで、猿田提督はご満悦な表情で通信機を返してきた。

「北条との交渉は上手くいったようですね。」

「ああ、近日中にうちを尋ねてくれて会食の場を設けてくれる事になったぜ。」

「それでは約束通りに撤収して頂きましょうか?」

「ああ、良いぜ。おい、赤嶺に撤収の準備をしろと伝えろ。」

「えっ!? もう撤収されるのですか!?!」

猿田提督が部屋の入り口で見張りをしていた若い憲兵に命令すると、突然の方針転換に若い憲兵は驚きを隠せなかったようだ。

「俺の決定だ。文句あるか?」

「いえ!! すぐに撤収準備をします!!」

大慌てで駆けてゆく憲兵隊を見て、ようやくこの厄介事も終わりが見えてきたのを実感する。とりあえずこいつを追い出せば一先ず安心だが、鶴野提督が次にどんな手をうつてくるのかは気になるところだ。

「なあ、おい。」

「……なんででしょうか?」

「お前が提督になってからやった事で、他の提督がやって無さそうな

事とかねえか？」

「・・・まだ何か探るつもりですか？北条との顔繋ぎをすれば即座に撤収するという約束をしているのを忘れですか？」

「そう言うなよ。こんなの撤収の準備が終わるまでの雑談だろ。そうかたい事言わずに教えろよ。」

はあ・・・図々しい奴だな・・・こちらとしてはそんな雑談に付き合う必要は無いのだが・・・どうせ撤収準備まで多少の時間はかかるだろうし、嫌がらせも含めて少し話をするか。

「そうですねえ・・・そう言えば猿田提督は深海棲艦を見た事はありますか？」

「は？まあ、資料で見た事はあるぜ。」

「つまり直接見た事は無いのですね。」

「当たり前だろうが？あいつらを見る奴なんて、襲撃から逃げ遅れた奴だけだろ？んで生き残ってる奴はそうとうな幸運の持ち主だな。・・・まさかお前は見た事あんのかよ？」

「ええ、輸送船に乗って深海棲艦を見に行きました。見れたのは駆逐イ級が3隻のしよぼい艦隊でしたし、もちろん艦娘達に護衛して貰って安全を確保した上での話ですが。」

「おいおい、冗談キツイぜ。あれか？もしかしてそんな事言ったら俺が騙されて試してみるとでも思ってたやがるのか？そんなもん自殺と変わんねえよ。」

「いえいえ、冗談ではありませんよ？信頼出来る護衛が居ればなんにも問題ありませんでしたよ。なあ曙？」

「っ!?問題だらけよクソ提督!!あんな危ない事は二度とやるんじゃないわよ!!」

「・・・そう言えばお前達からは反対されていたんだったな。」

おつと、初めてこの曙からクソ提督と呼ばれてしまった。そう言えば艦娘達はあの一件に対してはかなり否定的なんだったな。だが曙の本気の罵倒を聞いて、猿田提督はどうやら本当にあった話だと信じてくれたようだ。

「おいおいマジかよ・・・お前・・・頭イカれてんじゃないのか？」

「これは心外な反応ですね。猿田提督も私と同じで護国に命を捧げた軍人でしよう？それにいつも艦娘達に命をかけて戦えと命令していただきますよね？それなのに深海棲艦をそこまで恐れるとは・・・土道不覚悟とやらじゃ無いですか？」

「俺は武士じゃねえし、誰だって自分の命が一番だろうが!!」

「私だって犬死したくはありませんよ？だからきちんと偵察もさせましたし、護衛だってきちんとつけていました。そうやってきちんと安全が確保出来たから、深海棲艦を見れたのです。」

「・・・なんでだよ？」

「はい？」

「なんで深海棲艦なんか見に行こうと思ったんだって聞いてんだよ!？」

「彼を知り己を知れば百戦殆うからず。有名な孫子の言葉ですからご存知でしょう？だから敵である深海棲艦について知りたい、自分の命令で戦う艦娘達の事も知りたい。そのためには実際に戦場で艦娘達が戦う姿を見るのが一番だと考えた。ただそれだけです。別におかしな話では無いと思いませんか？」

「・・・。。。？だろおい。」

まあ、？だ。本当は市長候補だった源さんに、深海棲艦の脅威を理解させる為に連れていっただけだ。ただあの荒療治でも源さんの考えが変わらなかった事を考えると、あまり効果は期待出来ないのかもしれない。とはいえどうにも猿田提督はこの話でひいているようなので、少し話を盛ってそのままお引取り願おうか。

「無理強いは出来ませんがとても良い経験になると思いますよ。深海棲艦から感じる本物の殺意、死をもたらす砲弾が近くに着弾してまき散らす爆風と水飛沫、そんな恐怖に負けずに立ち向かう艦娘達の勇姿、沈む敵艦隊を眺めて生き残れたと確信出来る安心感。このような感覚は執務室でふんぞり返えているだけでは感じられません。」

「そ、そんなものがなんの役に立ってんだ!!俺達は提督だ!!指揮官だ!!前線に出るのは艦娘の仕事だろうが!!」

「その前線を知る事も指揮官の仕事です。というか先程は少し大袈裟

に話しましたが、私が見たのはイ級が3隻だけの艦隊ですよ？我々が日常的に討伐しているような相手ですよ？この程度の相手に突破を許すような艦隊を率いる無能提督であれば、さっさと殉職したほうが国の為になるでしょう。」

「……」

「猿田提督、お話中失礼します。ご命令通り撤収準備が整いました  
が……」

「おつ、赤嶺さんが猿田提督を迎えに来たから、茶番はここで終わるか。」

「っ!おう、すぐに帰るぞ。」

「は、はあ。ですが本当に宜しいのでしょうか？鶴野提督からのご命令もあります……」

「すぐに帰るって言ってんだろが!!俺の命令が聞けねえのか!!」

そのまま猿田提督は挨拶もせずに逃げるように北九州鎮守府から去って行った。猿田提督の異様な雰囲気を感じとったのか、赤嶺さんを含む出雲鎮守府の憲兵隊達もそれ以上文句は言わず、こちらを警戒しながら去って行く。

「ふう……ようやく面倒なのが出て行ったな。」

「ねえ。」

「ん?どうした?」

「さっきの言葉はどこまで本気なのよ?」

「曙にそう尋ねられるが……」

「どの言葉だ?」

「深海棲艦を見に行った理由とかよ。」

「ん?曙も知っているだろう?あの一件はお前達艦娘を軽視する源さんに、深海棲艦と艦娘がどういう存在なのかを教える為のものだぞ。」

「ええ、それは知ってるわ。けど……全部がデタラメで嘘をついてるようには見えなかったわ。そんな薄っぺらい言葉じゃ無かった。本気の目、いいえ、少し狂気すら感じる目をしてたわよ。」

「そうか。まあ、話した内容自体にあまり嘘は無かったからな。源さんに体感させたかった事を自分が体感したかった事にしたくらい

だ。」

「そう……」

曙は黙りこくってしまったが、いったい何を考えているのだろうか？ それにしても狂気すら感じる目か……猿田提督を脅かす為に少し力が入り過ぎたか？ とはいえ臆病な猿田提督を脅かそうと少し大袈裟に話したが、内容としてはわりと普通の事なのだがなあ。

「さて、邪魔者も居なくなつた事だし厳戒体制も解除して通常業務に戻そう。全員の自室待機を解除するように通達をしろ。」

「……分かったわ。」

「それともうすぐ日も沈む時間だから、昼に予定していた演習は中止だな。夕食後に夜戦演習をしておきたいから編成を考えておかねばな。夕食の時に川内に相談しよう。」

「それが良いわね。」

「では執務室に戻るぞ。」

そう言つて執務室へと歩き出したのだが……曙が立ち止まって付いて来ない。

「……どうした？」

「その……あなたは死ぬのが怖くないの？」

「は？ 怖いに決まっているだろう？ 死を恐れないなんて言う奴は感覚が狂つてる。私がそういう頭のおかしい人間に見えるか？」

「……少し。」

少し見えてしまうのか……

「はあ……そうか……」

「……普通の人間なら自分の命が一番大事なはずよ。」

「私は普通の人間ではなくてお前達と同じ軍人だ。死を恐れてなお踏み出すべき人間だ。だから死を恐れないわけではなくて、死の恐怖に直面しても冷静な判断力を失わないように心掛けているだけだ。」

「そう……確かにそうね。」

「それだけならもう行くぞ。ただでさえあいつらに邪魔をされて執務が滞つたんだ。時間は無駄に出来ない。」

「ええ、分かったわ。」

どうにも曙の様子が少しおかしい気がするが……猿田提督関連で少し疲れているのかもしれないな。

「軍人なら死を恐れてなお踏み出せ……か。」

それは理解出来る。私だって軍人だもの。どんな敵が相手でも立ち向かう気概は持つてるし、戦場で死ぬのが怖く無いとは言わないけれど……戦場で死ぬ覚悟は出来てる。出来てるけど……  
「私は……あんたが死ぬ方がよっぽど怖いわ……」



## 233話

曙を連れて執務室に戻ってさっそく執務に取り掛かろうとしたのだが・・・外からドタバタと多くの足音が聞こえてくる。ビスマルクとプリンツオイゲンを叱ったばかりだと言うのに、どうしてこうも落ち着きの無い艦娘が多いのだろうか？それとも何か緊急事態でも起こったのだろうか？そんな事を考えていると勢い良く執務室の扉が開かれる。

「にひひっ♪やっぱり私が一番だよね♪そうよね♪だって速いもん♪」

「司令官!？」

「提督さん大丈夫っばい!？」

「うあああ!!またいつちばん逃したあ!!」

「司令!!ご無事ですか!？」

「提督!!そろそろ夜戦の準備しよ!!」

「ちよっ!?!入り口でたむろしないで下さい!!早く提督のご無事を確認しなくてはいけないんです!!」

「司令官!!なにがあったのか是非とも取材を!!」

次から次へと艦娘達が雪崩込んで来る。本当に何事なんだ？

「静まれ!!いったい何事だ!!」

そう一喝すると入り口で騒いでいた艦娘達がビクツと反応して騒ぐのを辞める。騒いでいた奴らの半数以上が駆逐艦だが、川内・大淀・青葉もいるのか。しかも後ろからまだ足音と話し声が聞こえるということは、まだまだ集まるつもりか？

「大淀、これはいったいどういう事だ？説明しろ。」

「は、はい!!私は大本営からの監査が入ったと聞きご命令通り自室で待機していましたが、待機命令が解除されましたので秘書艦として状況の把握と提督の無事を確認する為に駆け付けました。他の皆さんも心配して駆け付けているのかと。」

なるほど。自分と大本営というか鶴野提督との問題だと考えていたが、艦娘達にとっても提督が変えられるかもしれないというのは大

事件か。自分の後釜に前任者の大森提督みたいな人物が来れば、また不当な扱いを受ける事になるかもしれないので、不安になって確かめに来たつてところか。

「ふむ・・・他の者達もそういう理由か？」

そう尋ねるとほとんどの艦娘達は頷くなりして肯定しているのだが・・・

「えっ？私は皆がかけっ子始めたから追い抜いただけだよ？だって私が一番速いし。」

「私は提督が夜戦の事を考えてる気がしたから駆け付けたよ!!今日は敵が来そうに無いから演習になりそうだけど、楽しい夜戦演習にしようよ!!」

・・・川内はいつも通りだから良いとして、島風は競争がしたかったけど・・・この島風は提督である自分に怯えている印象しかなかったが、そう言えば本来の島風はスピードに固執する奴だったな。島風も私とこの鎮守府の環境に少し慣れてきたってことか？

「はあ・・・なら島風はもう満足しただろ。部屋に帰つてろ。」

「はあゝい。」

「川内は今日の夜戦演習の計画を考えておいてくれ。夕食の時にでも提案を聞こう。私からの要望はプリンツオイゲンとビスマルクを艦隊と川内のやり方に馴染ませる事だ。」

「それは良いけどアトランタさんは良いの?」

「アトランタは夜戦にトラウマがあるのだろうか?いずれはそのトラウマに向き合つて貰う時が来るかもしれないが、今はそこまで時間を割く余裕は無い。」

「そっかあ・・・アトランタさんにも夜戦の楽しさを知って欲しかったんだけど、提督がそういうならまた今度にするよ。じゃあ晩ごはんの時までに考えとくね!!」

「提督、入るぜ。」

島風と川内が退室すると、入れ代わりで天龍が入って来る。そして扉の外で多くの艦娘達が待機しているようだ。執務室に駆け込んでこないだけまだ冷静な対応をしているって事か。

「天龍達も今回の調査の件が気になったってところか？」

「まあな。オレは提督なら大丈夫だろうって言ったんだけどよ、ちびっ子どもが不安がってんだ。少しくらい説明してくれても良いだろう？」

「それは構わないが大した話じゃないぞ？ただ単に嫌がらせて鎮守府に調査の人員が送り込まれて来て、ある程度対応して適当に追い払っただけだ。本来であればお前達にも事情聴取があるはずだったから自室で待機させていたが、結局事情聴取をされる前に追い返す事が出来たから不要になったただけだ。」

「ふうん、なるほどな。なんにせよ一つだけ確認させてくれ。お前が提督を辞めさせられたり別の鎮守府に飛ばされたりする事は無いんだな？」

「ああ。少なくとも今回の件ではもう無い。それと私を提督の座から引き摺り下ろそうとする奴が居れば、手段を選ばず徹底的に戦うつもりだ。」

天龍はこちらの真意を探るように睨んでくるが、しばらくすると納得したように頷いて息を吐く。

「ああ、それだけ聞けりゃ満足だ。邪魔したな。お前達もこれで安心しただろ!!オラ散った散った!!執務の邪魔だって営倉に放り込まれっぞ!!」

天龍がそう声をかけると執務室に入ってきた艦娘達と執務室の外で待機していた艦娘達が、そろそろと執務室から離れて行く。大淀は秘書艦なので当然執務室に残って、青葉は名残惜しそうにしていたが天龍が引き摺るように連れて行ってくれた。部屋の外で待機していた艦娘達も解散していったようなので、ひとまずこれで一件落着か。あの騒ぎをまとめてしまうと、天龍の奴は荒い口調に反して意外とリーダーシップがあるのだな。

「ふう・・・さて、ずいぶんと時間を無駄にしてみました。夕食前にしても執務を進めるぞ。」

「そうね。」

「え、あ、はい!!」

大淀と曙に声をかけたが、何故か大淀の反応が少し鈍い。

「どうかしたか?」

「いえ、大丈夫です。ではご報告ですが、憲兵隊の金子さんがまた大量の取材の申し込みが来ていると連絡がありました。」

「どうせ猿田提督が来た時に鎮守府前に居た野次馬達だろう。そんなものはお断りだな。とりあえずいつも通りリストだけ受け取っておこう。誰か暇な艦娘に受け取って来るように指示してくれ。」

「なら漣にでも行かせるから、私に任せなさい。」

「では曙さんをお願いします。それと明石からですが、調査に来た憲兵隊達が倉庫区画の物をかなり荒らしていったとの事で・・・証拠品として一箇所に集めていたものをそのまま置いて帰ったみたいでして・・・食後で構わないので整理整頓の為の人員が欲しいとの事です。」  
「まあ、連中が後片付けなんてするわけないよな・・・とりあえず夜戦演習に参加しない者で手分けして片付けさせよう。とりあえず空母は夜戦演習に参加出来ないから赤城と加賀をリーダーにして、下に何人か付ければ良さそうだな。」

「それで問題無いかと。それと間宮さんからですが、調査の一件で自室待機していたので夕食の仕込みが出来なかったため、現在有志を募って急ピッチで調理を進めているようですが、どうしても夕食の間が少し遅れてしまいそうですと。」

「それも仕方ない。間宮に任せる。」

「とりあえず現状の問題はこのくらいで・・・」

ん? 大淀が急に黙ったな。これは何か通信でも入ったか?

「どうした?」

「呉鎮守府傘下の合同艦隊が出撃先から帰還しているようで、関門海峡の通行許可と代表が葛原提督にご挨拶をとの事ですが、いかがしますか?」

「通行に関しては問題無い。それと今朝来た時は対応出来なかったし挨拶くらいは受けておこう。」

久藤提督とは節度ある敵対的關係だ。相手が礼節を守っているのであれば、こちらが理由も無く一方的に拒絶するのは問題だ。

「どこでお会いされますか？執務室か応接室にお通ししましょうか？」

本来この時間は島津提督が北九州鎮守府に滞在しているはずだった。それを理由に呉鎮守府傘下の艦娘達が補給拠点として滞在するのを断っている。そもそも補給だけならば問題無いのだが、滞在したのを良いことに色々と鎮守府内を探られては面倒だと考えて断つたのだ。今更隙を見せて鎮守府内部に踏み込ませる必要もない。

「・・・いや、出撃港まで迎えに行こう。大淀は執務を頼む。曙、付いて来い。」

「は!!」「分かったわ。」

出撃港で少し待機していると海の向こう側で待機している大艦隊が見えた。今朝聞いた時は六艦隊36人との事だったが、それよりもっと多そうだ。途中で合流した艦娘達もいるのだろう。その中から一人だけこちらに向かって来る。薄暗くて分かり難いが艤装の大きさからして戦艦か？目を凝らしてみても自分の視力では判別が難しいな。

「こっちに向かって来てるのは日向さんね。」

「伊勢型戦艦2番艦の日向か。たしか真面目な奴だったな。」

「そうね。あまり変な事をする人では無いと思うわ。」

日向ならば士官学校でも見た事がある。士官学校に居た日向は未改装だったが、改装する事で航空戦艦へと変化するはずだ。うちには扶桑型も伊勢型も居ないので、航空戦艦になれる人材が居ないのが悔やまれる。まあ、無いものねだりしても仕方ないので、現有戦力をどう鍛えてどう使うかを考える方が現実的だ。そんな事を考えている間に日向はどんどん近付いて来て、出撃港から上がって来て自分の前までたどり着く。

「呉鎮守府所属の伊勢型戦艦2番艦の日向だ。北九州鎮守府の提督自らのお出迎えとは痛み入る。」

「北九州鎮守府所属の葛原です。わざわざご挨拶にお越し頂き感謝します。」

「ごちらの都合で通行させて貰うのだから、礼節くらい守るのが筋というものだ。派閥が違えば通行するだけでも一触即発の雰囲気になる事もあるのだぞ？それを考えれば快く通して貰えるだけでもありがたい。」

「派閥争いも中々大変なものですね・・・とは言え事前に久藤提督からお話は聞いておりますので、通行に関しては一報頂ければご自由にされて下さい。ですが補給や滞在に関しては諸事情がありますので。」

「やんわりと馴れ合うつもりは無い事を伝えたと、日向の表情が少しだけ気まずそうに変わる。

「む!?そう言われればそうであったな。これは海上から挨拶するべきであった。すまないな。」

「いえ、流石にそれは日向さんに対して失礼ですから気になさらないで下さい。ですが応接室までご案内出来ない無礼をお許し下さい。」

「それはもちろんだ。鎮守府ごとに事情があるのは当然の事だ。深入りするような真似はしないさ。」

「ありがとうございます。」

「あー、それでだな、手土産を持参しているのだが、受け取って貰えるだろうか?」

「手土産ですか?」

「ああ、少し待ってくれ。」

そう言うとう日向は懐から何かを取り出して・・・

「・・・ん?それは!」

「私が手塩にかけて育てた瑞雲だ。」

「艦装ですか!?!しかも熟練度を上げた艦載機だなんて流石に受け取れません。」

「なあに、呉鎮守府に戻れば瑞雲はたくさん残っているから心配するな。瑞雲とはとても素晴らしい機体だと言う事は知っているか?いや、新人の提督であれば知らないのも無理は無い。瑞雲と言うのはだな

「という訳だ。瑞雲とは素晴らしい機体だろうか?」

「ええ、確かに素晴らしい機体です。」

日向からの瑞雲の詳しい説明はそれなりの時間がかかったものの、それ相応の情報量が詰まっていた。座学で各種艦載機の知識はあったのだが、それでもここまで詳しい話は知らなかった。

「うむ。やはり君は見込みがあるな。君ならばきつと私の瑞雲を使いこなしてくれるだろうから、遠慮せずには是非とも受け取って欲しい。」  
「それなのですが・・・」

「うん？まだ受け取れない理由があるのか？」

「そもそも私の艦隊には瑞雲を搭載出来る艦娘が居ないのです。」

「なんだと!？」

「瑞雲を装備出来るのは航空戦艦・航空巡洋艦・水上機母艦・潜水空母と極一部の第二改装済みの艦娘達でしたよね？うちには現状扱える者が居ないのですよ。」

「瑞雲程の愛された機体だぞ!?!本当に扱える者が誰も居ないのか!？」

「そうですね・・・鈴谷と熊野は航空巡洋艦への改装が可能な艦娘ですが、練度不足ですから改装出来るのはずいぶんと先になるでしょうね。」

「なら良いではないか。いずれはこの瑞雲を使うのだと思って練度上げに励んでくれれば良い。それにもしかしたらこの先で瑞雲を使える艦娘が仲間に加わる事もあるかもしれないだろう？その時までには大切に保管してくれればそれで良い。」

「・・・そうですか。一応確認ですが、この件は久藤提督も了承済みなのですか?！」

「もちろんだ。艦装の譲渡なんて私の一存だけでは出来ないからな。きちんと説得済みだ。」

であればこれは日向さん個人の善意ではなく、久藤提督からの手土産・・・通行料と考えるのが妥当か。

「分かりました。それでは日向さんが育てた瑞雲を頂きます。早くこの瑞雲を扱えるように努力しましょう。」

「ああ、その言葉が聞けたら満足だ。では仲間を待たせているのでこれで失礼する。君の健闘を祈っている。」

「ええ、ありがとうございます。」

日向は満足そうな表情をして、出撃港から降りて仲間達の元へと去って行った。なかなかカッコいい艦娘だったな。



## 234話

日向さんを見送って執務室に戻ろうとすると、曙に袖を引かれる。

「もう夕食の準備が整ってるわ。」

「もう準備出来たのか？ずいぶんと早いな。」

「そうでもないわよ。あんたずいぶんと長く日向さんの瑞雲談義に付き合ってたわよ。」

「・・・そんなにか？」

「ええ、そんなによ。」

思いのほか時間がかかっていたようだが、有意義な情報を得られたのであれば良しとするか。

「そうか。では食堂に行くか。」

「その瑞雲は私が倉庫にしまっておくから先に行つてなさい。」

「ああ、頼んだ。」

瑞雲を曙に預けてから食堂に向かうと多くの艦娘が集まっっていて、楽しげに話ながら間宮の前に列を作っている。そんな楽しげな雰囲気のに並ばずに食堂の入口に佇んで居た奴がこっちに近付いてくる。

「ども、恐縮です。司令官、またお食事がてら取材しても宜しいでしょうか？」

「はあ・・・青葉、食事時間を取材時間だと勘違いしていないか？」

「あはは・・・でも司令官って基本的にお食事の時と寝る時以外はずっと働いてるじゃないですか。だからお食事の時くらいしか取材するチャンスが無いんですよ。」

「そんな事はないぞ？執務室でコーヒーを飲んで一息吐く事もあるし、状況次第では執務室で仮眠もとる。無理をするべき時でなければ、きちんと体を休めて体調管理しているつもりだ。」

「うーんどすね・・・普通の人であれば余暇の時間というのがありましてですね？お昼ごはんのあとに少し休憩時間をとったり、仕事が終わってから寝るまでの間に趣味の時間があったりするものなんですよ。」

「普通の人はつてのはよくわからないが、少なくとも私が着任してからは問題だらけでそんな余裕はなかったと思うが？」

前任者の大森提督殺害事件の調査、汚職関連での調査と交渉、大本営や鶴野提督からの嫌がらせ、深海棲艦の大規模な襲撃、秘密裏に売られていた艦娘達の奪還、海外艦ドロップに関する諸問題。ぱつと思いつくだけでもこれだけの量の問題があったのだから、余暇を楽しむ余裕なんてあるわけがない。そう言えば暗殺もされかけてたな。

「あ、あはは・・・確かに司令官は本当に大忙しですからねえ・・・あつ、立ち話もなんですしこちらのお席にどうぞ。」

「いや、私はまだ食事を受け取ってないのだが。」

「その辺は衣笠に頼んであるので大丈夫ですよ。他にも協力してくれる娘も多いですし。」

「ほう？ずいぶんと段取りが良いな？」

「恐縮です。」

「あと夕食中に川内と夜戦演習の打ち合わせをする予定なのだが？」

「・・・司令官も食事の時間を会議の時間だと勘違いされてませんか？食事中に報告を受けたり打ち合わせをする姿をよく見かける気がしますが？」

「・・・確かにそうかもしれないな。」

言われてみれば食事中に艦娘達と仕事の話をすることが多い気がする。とはいえここ最近は艦娘側から食事に誘われる事も多く、そしてその場で報告を受けたりしていると思う。これも青葉が言うように艦娘達が私に話し掛ける余裕がありそうなのが、食事の時間くらいしか無さそうだからだろうか？

「あー、司令官はお忙しいですから、なかなか話し掛ける機会が無いってのはありますから、食堂だと話し掛け易いってのはありますねえ。だから別に司令官が悪いって訳じゃないですから。」

「・・・ふむ、やはりそういう事か。」

「司令官？」

「いや、なんでもない。」

「まあ、川内さんも後で合流すれば良いですし、こちらのお席へどう

ぞ。」

とりあえず青葉に勧められるままに席に座わって少し待つと、衣笠と第六駆逐隊が食事を運んで来てくれた。

「青葉く食事持つて来たよ〜」

「ありがとうガサ♪第六駆逐隊の皆もご協力ありがとうございます  
!!」

「司令官、ご機嫌ようです。」

「やあ、司令官。」

「こんばんわ、司令官♪」

「司令官さん、こんばんわなのです。」

「ああ、こんばんわ。私の分の食事を持って来てくれたのか。助かる。」

「ふふん♪輸送任務はレディのたちなみ!!・・・たしなみ。」

「噛んだ。」

「噛んだわ。」

「難しい言葉を使おうとして噛んだのです。」

「ん!!と、とにかくごはんにするわよ!!司令官もきつとお腹ペコペコよ!!」

暁がそう言うところからともなくクウくと可愛らしいお腹の音が聞こえた。暁が顔を真っ赤にしているし周囲の視線が暁に集まっているが、指摘するのは野暮と言うものだろう。

「そうだな。空腹ではこのあとの執務に支障が出る。それにせっかく用意して貰ったのだから、温かいうちに食べておきたい。」

そう伝えると暁達がテキパキと食事の支度を整えてくれる。暁と雷は凄く笑顔で楽しそうだし、響もあまり表情が変わらないものな心なしか楽しそうだ。ただ電だけはまだ自分が怖いのか、時折こちらの顔色を伺うようにチラチラと見てくる。まあ面談の時よりはマシになっているので、いずれは慣れてくれるだろう。全員が席について手を合わせてから食事を始める。

「ではではさっそく取材を始めさせて頂いても宜しいでしょうか?」

「まあ、程々にな。」

「ありがとうございます♪ございます♪そうですね、まずは昨夜の夜襲作戦の成功と海外艦をさらにお二人獲得した件でしようか？改めて全員生還での大戦果おめでとうございます。」

「ああ、作戦の成功は素直に安堵したし、想定以上の戦果を上げられた事はとても素晴らしい。今後もお前達の奮戦に期待している。」

「ええ、司令官が期待して下さいるならば、青葉ももつと頑張っちゃいますよ!!ってあれ？海外艦のお二人についてはノーコメントですか？」

「あー、純粹に戦力として見れば海外艦の二人、いやプリンツオイゲンも含めて三人にはかなり期待しているのだが・・・それ以上にトラブルも多く発生するので素直に喜べ無いのがな・・・とはいえこれは人間同士のトラブルだから、お前達は出来るだけ巻き込みたくは無いです。思っている。」

「なるほどなるほど。海外艦を三人も獲得したので、物凄く目立ってしまったですよねえ。海外艦のお披露目会見まで開いちゃいましたし。」

「海外艦獲得なんて話は絶対に広がるからな。情報を公開する場でも設けなければ、なんとか情報を得ようとする奴らが後を絶たないからな。面倒でもやらなくてはならなかったのだ。」

だがそこで島津提督が余計な事をしてくれたせいで、別の問題まで発生したのだがな・・・あそこで熊井提督が出て来なかったらと思うとゾツとする。まあ、タイミングが良すぎて熊井提督の自作自演の可能性も否定出来ないのが怖いところだが。

「司令官も大変ですねえ・・・会見の内容など聞かせて頂いても？」  
「流石に全部話すのは面倒だ。あの場には海外艦達と不知火が居たから、後でそつちから聞いてくれ。」

「分かりました♪いや々夕食前に不知火さんに取材したんですが、『司令の許可なく任務について口外するつもりはありません。』ときつぱり断られてまして・・・海外艦の方々に話を聞こうとしても、不知火さんが睨みを効かせていたので困っていたんですよ。」

「ほう？不知火は情報の重要性をきちんと理解しているようだな。以

前青葉にも教えた事だが。」

今回の会見に関しては別に隠す必要も無いが、口止めしていた訳でも無いのに安易に情報を漏らさない姿勢は高評価だ。自分が島津提督に殴られた後も手際良く治療もしていた事も考慮すれば、連絡要員として連れ回すのに良い人材だな。

「あはは・・・アオバモチャントリカイシテマスヨ・・・」

「なら良いのだがな。とりあえず会見自体は事前準備のいかいもあってスムーズに進んだ。海外艦の三人も堂々とした態度で好印象だったな。」

「なるほどなるほど。ちなみに島津提督や熊井提督関連のお話を聞いても?」

「会見の会場前で島津提督に待ち伏せされて、言い掛かりをつけられて殴られた。その後熊井提督が来て仲裁をしてくれて、鹿児島鎮守府との演習は中止・島津提督が持つて来ていた資材は謝罪として受け渡し・後日私が佐世保鎮守府を訪ねて見学、この条件で和解した。」

「お昼ごはんの時に長門さんも言っていました、ずいぶんと条件をふっかけましたね。」

「公衆の面前でトラブルを起こされて、北九州鎮守府と私の評判を下げられたのだ。これくらいは要求はさせて貰うさ。」

「んー、まあそうなんです・・・司令官が他人からの評判を気にしているのは少し意外です。ほら、司令官って我が道を行く!!邪魔な奴は排除する!!って感じじゃないですか?」

まあ、そう考えるのも分からなくはない。だいたいのは目的の益になるか害になるかで考えている節はあるからな。

「まあ、否定はしないが私だって無闇矢鱈に敵を作っている訳ではないぞ?それと有象無象が囀る悪評とは違って、佐世保鎮守府との関係悪化という悪評はデメリットが大き過ぎる。それ故に対処しただけだ。」

「なるほどなるほど。なんというか司令官らしいお答えですね。ではいよいよ大本営からの調査が入った件についてお聞きしたいのですが?」

「ただの嫌がらせだから、聞いても気が滅入る話しか出てこないぞ。そんな事を話すくらいなら「今夜の夜戦の事を話したいよね!!」お、おう。」

いきなり満面の笑みで会話に割り込んできたのは、確認するまでもなく川内だ。いや、川内との約束が先約だったので、割り込んでるのは青葉とも言えるが。

「いや〜晩御飯の時に提督と夜戦の話をするって約束だったから探しに来たけど、青葉に衣笠に第六駆逐隊の子達が先に提督と一緒に食事してたからさあ。」

「すまん、青葉から呼び止められてな。川内との先約がある事は青葉に伝えたのだが、川内も後で合流すれば良いと言われてな。」

「あはは・・・あつ、川内さんもちちらにどうぞ。先に司令官をお借りしてしまいすみません。」

「良いって良いって♪それよりも私と提督との会議に参加したいって事は一緒に夜戦したいって事でしょ?皆が夜戦演習にやる気になってくれて嬉しいなあ♪一緒に楽しい夜戦をしようよ♪」

「・・・え?えつと・・・青葉は新聞の編集がですね・・・」

「分かっている分かっている♪だからそんな遠慮しなくて良いって♪今回の夜戦演習は海外艦の人達が初めて実践形式で演習するから、青葉さんも海外艦の人達がどんな戦いをするのか近くで見たいんでしょ?」

「・・・青葉、夜戦大好きです!!是非とも一緒にさせて下さい!!」

青葉のやつ・・・川内のテンションに引き気味だったくせに、海外艦が戦うところが見れるという餌で簡単に手のひら返したな。

「そこなくっちゃ♪他の娘達も参加するよね?」

「うーん、衣笠さんも海外艦の人達が気にならないって言ったら嘘になるし。うん、参加させて貰おうかな?」

「もちろん第六駆逐隊も参加するわ!!一人前のレディならいつ戦いに呼ばれても、颯爽と駆け付けるものなのよ!!」

「暁がそう言うなら参加するしかないね。」

「海外艦の人達が初めての実践演習?しかも夜に?きつと心細いわよ

ね?つまり雷に頼ってしまうわよね!!うん、それ良いわね!!」

「あわわ・・・皆が参加するなら電も頑張るのです。」

「良いよ良いよ!!じゃあ後は神通誘って、海外艦の二人でしょ?六対六なら後二人かあ。夜戦をしたそうな娘は誰かなあ?」

てつきり川内は夜戦演習のメンバーを決めてから提案しに来たのかと思ったら、その場の勢いでどんどん決めてしまったな。しかも席から立ち上がってキョロキョロしだした。

「ん!?遠くからでもわかるよ♪不知火ちゃんあの目は夜戦に出たがってる目だね!!お〜い!!不知火ちゃんも一緒に夜戦しようよ!!」

「はっ!!ありがとうございます!!」

「あっ不知火だけズルい!!川内さん私も!!」

「オッケー♪陽炎も参加ね!!提督!!メンバー決まったからこれで夜戦演習して良い!?!」

ふむ、川内・神通・ビスマルク・プリンツオイゲン・青葉・衣笠・第六駆逐隊・陽炎・不知火か。戦艦であるビスマルクの火力と装甲が飛び抜けているが、夜戦であれば一概に有利だとも言えないか。人員に関しても適当に選んでいたが、演習ならばやる気があるならそれで構わないか。まだ試行錯誤する時期だから、色々試してみれば良い。「ああ、そのメンバーで構わない。食事が終わったら演習の準備をすると良い。」

「やったあ!!夜戦だ!!夜戦だあ!!」

「食事が終わったらな。」

川内は相変わらずだな。普通ならば落ち着きの無い軍人向きな性格では無いと判断するところだが・・・川内はこれくらい騒いでる方が頼もしいかもな。

## 235話

「さて、夜戦のメンバーはとりあえず決まったが、編成をどうしたものか？ 今回の目的は川内のやり方に海外艦の二人を慣れさせるという目的があるので、川内を旗艦としてその下に海外艦の二人を付けるとすると、相手側に青葉衣笠神通の三人を入れて駆逐艦を3人ずつ付けるのが無難だろうか？」

「うん、そうだねえ。海外艦の二人が夜戦でどれくらい動けるかわからないけど、それを試す為の夜戦演習だもんね♪旗艦はもちろん私と神通ね♪」

「川内は当然だし神通もあの性格なら立派に旗艦を務めてくれそうだな。駆逐艦の分け方はどうする？」

「戦力を均等に分けるなら第六駆逐隊を二人ずつに陽炎達を一人ずつかなあ？ 陽炎も不知火もこの間の夜戦でけっこう良い動きしてたしさ♪」

確かに戦艦棲姫に止めを刺したのは陽炎不知火朝潮の三人だったな。練度で言えば第六駆逐隊と大差はないのだが、修羅場を潜り抜けたという経験は大きい。川内もその部分を評価しているのだろう。「確かに戦艦棲姫との戦いは陽炎と不知火の大きな経験になっただろうからな。」

「それにほら、第六駆逐隊の娘を三人と一人で分けちゃったら仲間外れみたいでなんか可哀想でしょ？」

「ん？ そういうものなのか？」

川内の良くわからない発言に疑問を覚えて第六駆逐隊の方を向くが、暁と雷はなんだかよくわかってなさそうな顔をしていて、響はこちらから視線を逸らすように顔を背け、電は苦笑いをしている。これはどう判断するべきなのだろうか？

「そういうもんなんだって。絶対に気にしてあげなきゃいけないって話ではないけど、今回みたいに切羽詰まってない状況なら多少のわがままは許して欲しいなあ。」

「まあ、川内がそう言うなら構わないが・・・陽炎と不知火の二人を分



けるのは良いのか？」

「あー、あの娘達は負けん気が強いしお互いにライバル視してるみたいだから、むしろ積極的に戦わせた方が良いと思うよ?」

ふむ、姉妹での関係性も艦娘毎に変わってくるのは当然だな。士官学校で艦娘達の容姿と名前や性能そしてその来歴等は頭に叩き込んだが、性格についてはそこまで深く理解出来てはいない。そもそも同じ艦を元にした艦娘であつても個人差が出るので、一律にこの艦娘はこの性格だと言えない。今後艦隊を指揮するならば艦娘達の性格についても把握していく必要があるか? 艦娘達を甘やかして艦隊の編成に影響が出てしまうのは問題だとは思うが、相性の良い艦娘達を組ませる事で士気や連携に良い影響があるかもしれない。

「なるほど、ではその分け方で進めよう。お前達第六駆逐隊からは編成に関して何か要望はあるか?」

「暁は一人前のレディだから川内さんの艦隊でも神通さんの艦隊でも問題ないわ。どんな人と組んでもちやんとお仕事出来るのが一流のぷろふえっしょなるよ!!」

「噛まずに言えたね。」

「噛まなかったわ!」

「ちよつと発音は気になるけど難しい言葉をちやんと言えたのです。」  
「もう!!これくらい当然言えるわよ!!さつきから長女の暁をバカにしてない!?ぶんすか!!」

「Извини そんなつもりはなかったんだ。暁は私達の頼れるお姉さんだよ。」

「そ、そう?それなら良いのよ♪」

響のその一言で怒っていた暁はすぐに機嫌をなおしてしまった。ずいぶんと簡単に機嫌がなおるものだとは思ったが、元から本気で怒っていたわけではないだろうしちよつとじゃれ合ってるだけか。

「あつ!!はいはい司令官!!私は海外艦の人達と一緒に艦隊が良いわ!!きつと海外艦の人達も初めての演習で心細いだろうから私がサポートしてあげるわ!!」

「雷ちゃんはやっぱり優しいのです。だったらもう一人は響ちゃんが

良いのです？たしか響ちゃんは海外に縁のある艦なのです。だからきつと海外艦のお二人とも仲良く出来るのです。」

「H e T 確かに私はソ連と縁があるけれど、ソ連とビスマルクさん達の故国のドイツはその・・・あまり仲が良くなくてね・・・私は気にしないけれど・・・」

ドイツとソ連は艦娘達の記憶にある第二次世界大戦の時だけでなく、第一次世界大戦の時も敵国だったか？とはいえ響は元々日本の艦艇なのだから問題無い気もするのだが？まあ、どちらにせよ自分の艦隊に所属した以上は仲良くとまではいかなくとも上手くはやって貰わないと困る。

「そんなんじや駄目よ響!!昔はどうだったかわからないけれど、今は背中を預けて戦う仲間なのよ!!せつかくの機会なんだから今日は一緒に艦隊になってちゃんと仲直りしてきなさい!!」

「いや暁、別に喧嘩した訳ではなくて・・・」

「はわわわ!?電が余計な事を言ってしまったせいで響ちゃんが怒られてしまったのです!」

「ん？よくわからないけど響は海外艦の人達が苦手なのよね？なら私が響と海外艦の人達との仲を取り持ってあげるわ♪」

「ちよつと雷!!そういうのはお姉ちゃんである暁の仕事よ!!」

「え？雷なら大丈夫よ♪」

「そういう問題じゃない!!」

「ふ、二人共喧嘩は駄目なのです!!」

はあ・・・第六駆逐隊に意見を求めてみたが、これでは収集がつかないな・・・

「んんっ!!」

軽く咳払いをすると大騒ぎをしていた暁と雷と電の三人がハツとした表情をして気まずそうに席に座る。

「響、ソ連とドイツに因縁があるのはわかったが、ここは北九州鎮守府でお前達は北九州鎮守府所属の艦娘だ。変な苦手意識を持たれては困る。せつかくの機会だからドイツ艦の二人と話してみるべきだと思うが?」

「D a p ちゃんと話してみるよ。遠くから見ただけど二人共良い人だとは思うからね。」

「では響と雷が川内の艦隊、暁と電は神通の艦隊に入ってもらおう。あとは……」

陽炎と不知火をどちらの艦隊に入れるかだが……不知火がこちらに駆け寄って来て、そのあとから陽炎も追い掛けて来ている。先程川内が二人を演習に組み込んだのは伝わっているし、私達がここで編成の話をしているのも聞こえているだろうから、慌てて食事を済ませて参加しに来たつてところか。別にそこまで急ぐ必要は無かったのだが。……特に不知火はかなり急いで来たみたいだな。

「司令、お待たせしました。不知火も夜戦演習の打ち合わせに参加させて下さい。」

「あ、ああ。それは構わんが……」

「はあ……不知火、あんた食事くらいゆっくり食べさせなさいよ。」

「……？陽炎に食事を急ぐように強要した覚えはありませんが？」

「いや、あんただけ先に打ち合わせに参加するのはなんか違うと思ふっ!？」

陽炎が不知火に文句を言おうと顔を上げた瞬間吹き出して、それを不審に思った不知火が鋭い眼光で陽炎を睨む。

「……不知火に何か落ち度でも？」

「あはははは!!落ち度よ!!落ち度!!子供じゃないんだから口元のケチャップくらいちゃんと拭いておきなさいよ!!あはははは!!」

「ッ?!?」

「はいはい!!不知火さん、雷が拭いてあげるからじっとしててね♪」

「いえ、大丈夫です。ナプキンだけ頂きます。」

そう言っただけで不知火は雷からナプキンを受け取って口元を拭く。表情こそ全く変わらないが、心なしか顔が赤くなっている気がする。恥ずかしかがっているのか？こういう表情を取り繕える相手は感情が読めないのではなかなか厄介だ。まあ、不知火は軍人として忠誠度の高い生真面目な性格をしているので、よほどの事が無ければ自分の敵にはなりそうにないと思うので問題なさそうだが。

「司令、お見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ございません。」  
「あー、次から気をつけてくれれば良い。」

「くふっ……し、失礼しました。」  
「……」

陽炎はさっきの一件での笑いがまだ収まっていないのか、なんとか堪えている様子だ。その陽炎を不知火がかなり睨んでいるが、睨めば睨む程逆効果だな。不知火をずっと晒し者にするのも良くないので、さっさと話題を変えてやるか。

「あー、夜戦演習の件だが、現状決まっているメンバーは川内を旗艦としてビスマルク・プリンツオイゲン・響・雷、神通を旗艦として青葉・衣笠・暁・電だ。そこに陽炎と不知火が一人ずつ参加して六人編成にしようと思う。二人から何か要望はあるか？」

「いえ、特にありません。陽炎と戦える機会を頂きありがとうございます。」

「おっ？ 不知火やる気じゃない？ 不知火と戦えるのは私も嬉しいけど……私が勝っちゃうわよ？」

「陽炎……徹底的に追い詰めてやるわ。」

川内が言っていたように陽炎も不知火もお互いにかかなり意識しているようだ。まあ、張り合って競い合うだけならさぶんと健全な関係性だな。

「お互いにライバル視するのは構わないが、今回は個人戦ではなく艦隊戦だ。そこは忘れるなよ。」

「はっ!!」

「さて、不知火はどちらの艦隊でも良いとの事だが、陽炎はどうだ？」

「私もどっちでも大丈夫だけど、しいて言うなら神通さんの方かな？」

「理由は？」

「ほらやっぱり海外艦の二人って気になるでしょ？ だから一度戦ってみたいかなあって。」

ふむ、そこで一緒に戦ってみたいではなくて敵として戦ってみたいと言うあたり、陽炎もかなり好戦的な性格なのだ。士官学校にいた陽炎はなんというかも少し姉として姉妹艦をまとめている印象

だったが、やはり以前所属していた長門鎮守府の環境で性格に影響が出ているのだろうか？今度機会があれば長門鎮守府での話も聞いておくか。

「わかった。では不知火を川内の艦隊に、陽炎を神通の艦隊に入れる。川内もそれで良いな？」

「うん!!楽しい夜戦になりそうだね!!」

楽しいかどうかはともかく、どんな夜戦演習になるかはとても気になるところだな。さっさと食事を済ませて準備をするか。

## 236話

食事中に話した夜戦演習の編成に関しては、艦娘側から様々な意見が出てきた。今までも艦娘達からの意見は聞いてきたと思うが、今回得られた情報は今までのものとは少し毛色が違っていた・・・と思う。なんというか艦娘達の能力の話ではなくて、関係性の話を聞かせてくれたというか。とはいえ艦娘達の関係性の情報がどれだけ意味を持つかは、今からの夜戦演習で垣間見えてくるはずだ。既に食事は終わって艦娘達に演習の準備をするように通達して執務室に戻っているの  
で、あとは艦娘達の準備が整うのを待つだけだ。

「・・・提督、佐世保鎮守府所属の香取さんから通信です。明日からの演習の日程について相談したいとの事です。」

そう言えば佐世保傘下の鎮守府との演習の打ち合わせが残っていたな・・・

「ああ、代わろう。・・・代わりました、北九州鎮守府所属の葛原です。」  
「佐世保鎮守府所属で秘書艦を務めております香取と申します。夜分遅くに申し訳ございませんが、佐世保鎮守府傘下の提督達と北九州鎮守府での演習の件でご連絡させて頂きました。今少しお時間宜しいでしょうか?」

「ええ、もちろん大丈夫です。」

「ありがとうございます。ああ、それと今回島津提督がご迷惑をおかけしてしまった件、改めてお詫び申し上げます。」

「いえいえ、その件に関しては熊井提督がきちんと仲裁に入って頂けましたし、佐世保鎮守府側からの誠意ある対応はきちんと理解しております。この件に関しては円満に解決したと認識しております。」

「うふふ、そう言って頂けると助かります。なにせ私達は葛原提督が今回の件でご納得頂けていなかったのではないかと、少し心配しておりましたので。」

・・・ん?ずいぶんと下手に出てくるな。丁寧なのは艦娘の香取の性質として違和感はないが、ここまで佐世保鎮守府側が下手に出る必要は無いはずだ。これは少し警戒すべきか?

「ははは、自分はただの一提督に過ぎないというのにも関わらず、過大な心配り痛み入ります。」

「あらあら？・過分な心配りでしたか？こちらとしてはてつきり私達の配慮が足りなかったせいで、葛原提督が佐世保鎮守府の庇護を受けようとしているように思えたのですが？」

「……猿田提督をあしらう為に島津提督と古鷹さんを利用した事を怒っているのか？耳の早い事だ。だがその程度ならば想定範囲内だな。」

「何故そのような事まで心配されるのか心当たりがありませんが、佐世保鎮守府の傘下に入らないと明言している以上、佐世保鎮守府の庇護を受けないというのは自明の理です。ですが軍事的な話であれば協力出来る場面もあるかと考えていたのですが……佐世保鎮守府側との認識の齟齬があったのでしょうか？」

「ええ、もちろん軍事的なお話であれば協力する事は吝かではありませんよ。熊井提督は葛原提督の指揮能力を高く評価されております。もちろん新人の提督としてはの一言が入りますが。」

「それはありがたいお言葉です。今後も提督の一人として日々努力致します。」

「ええ、是非頑張って下さい。とはいえ話を戻しますけれど、協力する事が出来るのはあくまでも軍事的なお話に限ります。政治の場でまで力を貸すつもりはありませんので、そこはご理解頂けますか？」

「ええ、もちろん理解しております。ああ、ですが一つだけ政治的に協力して頂く必要がありますが、当然忘れてはいませんよね？」

「そう伝えれば通信機の向こう側で少し香取さんが黙ってしまう。だがやはり頭が良いのですぐにこちらの意図を理解してくれる。」

「……島津提督が葛原提督に暴行した件で広まった、葛原提督と佐世保傘下が敵対しているという噂の払拭でしょうか？」

「そのとおり。仲良くする必要はありませんが、敵対していると世間に思われるのも困ります。ですからきちんと和解したとアピールするために、私が佐世保鎮守府を訪れて演習を見学するという話を世間に広める必要があります。それは熊井提督御本人から了承頂きました。」

たが、まさか反故にはしませんよね？」

「え、ええ。もちろんです。その時には私がしっかりとご案内させて頂きます。ですがその件ではなくて北九州鎮守府に大本営からの監査が入った時に、私達が巻き込まれた件についてのお話です!!」

「あー、あれですか。あの件に関しては抜き打ちでしたので、鹿児島鎮守府からの輸送物資の搬入と被ってしまったのは、私にはどうする事も出来ませんでした。大本営からの命令書が出ていたので拒否する事は出来ませんでしたし。それに私は監査を受けている最中であっても島津提督への配慮は怠ったつもりはありません。むしろ島津提督が下手に情報を隠そうとされるので、私があらぬ疑いをかけられてしまつて困つたものです。」

「それは・・・その・・・」

「ああいえ、別に怒っているわけではありません。監査に來た猿田提督の横暴な態度をみれば、島津提督が反感や不信感を抱くのも無理はありませんから。それに猿田提督も何故か島津提督との会話を嫌がったので、話が余計に拗れてしまつたのですよ。ですから島津提督の対応だけが悪かつたとは言えませんから。」

「くっ・・・そう言つて頂けると助かります。では猿田提督の眼の前でわざわざ私達との演習の件や佐世保鎮守府への見学の件について言及した事については、どのような意図があつたのでしょうか？」

「・・・ん？ただの確認だつたのですが、何か隠す必要がありましたか？演習に関しては特に隠し立てするような話ではないですし、佐世保鎮守府への見学に関しては公にする話なのですよ？鹿児島鎮守府からの資材受け渡しに関しては島津提督の感情に配慮して、島津提督に事前に確認を取りましたが・・・佐世保鎮守府側としては演習の件で何か隠さねばならない理由でもあつたのでしょうか？そうであれば私の配慮が足りなかつた事をお詫びしたいのですが？」

「う・・・確かに隠し立てするような事では・・・ないですね・・・葛原提督のおっしゃる通りです。」

猿田提督の前でわざわざ演習の話をしたのは、当然北九州鎮守府と佐世保鎮守府が繋がっていると猿田提督に誤解させる為だが、猿田提



督が勝手に誤解した事にまで自分が責任を負う必要はない。それに佐世保鎮守府側が演習の件を隠すべきだと主張すれば、それは何かやましい理由があると認めるようなものだ。例えば実績を上げた新人提督のメンツを潰そうとしてるみたいなしような理由があるなど。とりあえずこれで香取さんからの追及は振り切れただろう。だが佐世保鎮守府との関係はある程度確保しておきたいので、香取さんをやり込めたままで反感を買ったままというのも面白くない。少しだけ下手に出て相手を立てておくか。

「ご理解頂けたようですね。ですが私の言動で佐世保鎮守府側に不要な誤解を招いてしまった事はお詫び申し上げます。今後は気を付けますのでご容赦頂きたい。」

「……はあ。葛原提督の事情とお考えは把握致しました。こちらも疑うような真似をして申し訳ございません。」

香取さんも自分の言葉を全部信じた訳ではないだろうが、とりあえずお互いに謝ってこの件については終わりという事にしてくれるようだ。このあたりの柔軟性は余裕のある大人な対応といったところか。

「いえいえ、熊井提督程の立場のお方であればよからぬ輩がすり寄って来る事も多いでしょうし、警戒されるのも致し方ない事かと。まあ、幸いにも誤解は解けたようですので、そろそろ実務的な話をしませんか?」

「そうですね。本題は佐世保鎮守府傘下の鎮守府と北九州鎮守府の演習のお話でしたね。今回の演習は博多鎮守府・佐伯鎮守府・天草鎮守府の提督と演習して頂こうと思います。」

「ん?宮崎鎮守府は不参加ですか?」

「ええ、色々と事情があります……」

事情……か。色々と濁しているあたりあまり詮索されたくは無いのだろう。となると軍事的な理由では無さそうだな。一番あり得るのは島津提督の一件で熊井提督が睨みを効かせるようになったので参加を辞退したつてところか?もしくは宮崎鎮守府の提督が性格に難があつて弾かれた可能性も充分ある。理由について追及する事も

可能だが、追及したところでたいした話は出てこないだろうし、やぶ蛇になっても面倒くさいか。

「それならば仕方ないですね。話を進めて下さい。」

「ありがとうございます。今回は夜戦の演習という事ですし、20時頃から演習を開始するように考えておりまして、その時間に合わせて北九州鎮守府を訪問したいと思います。具体的には1〜2時間前に北九州鎮守府に到着するのがベストかと。」

「そうですね。演習前の挨拶や準備の時間も必要ですので、妥当な時間設定だと思います。」

「それと演習のルールについては、一艦隊六人編成で佐世保鎮守府側は巡洋艦と駆逐艦のみの編成かつ一人新人の重巡洋艦を入れる。北九州鎮守府側の編成は自由ですが必ずプリンツ・オイゲンさんを入れる。これが以前決めた条件だったと思います。これに関して異論はありますか?」

「いえ、問題ありません。」

「ちなみにですが・・・ビスマルクさんとアトランタさんも演習に参加して頂く事は可能ですか?もちろん一回の演習で三人を参加させるのではなく、3回演習をするので一人ずつ参加して頂く形で構いませんので。」

演習の条件を決めた時にはプリンツ・オイゲンだけしか居なかったが、ビスマルクとアトランタが加入したとなれば当然そちらも気になるよな。

「そうですね・・・ビスマルクであれば参加させる事は可能ではありません。ですがアトランタはとても難しいですね。そもそもアトランタは対空に特化した防空巡洋艦ですので、空母の居ない夜戦ではその真価を発揮出来ません。」

「なるほど・・・確かにアトランタさんの参加は難しいですね・・・ではビスマルクさんは参加して頂けるのですね?」

「条件次第と言ったところででしょうか?希少な海外艦の情報を差し出すのですから、タダという訳にはいかないでしょう?」

「むう・・・資材や資金で解決出来ればとても簡単なのですが、これ以

上北九州鎮守府に支援を送るのは問題がありますので・・・」

ふむ・・・佐世保鎮守府が資材や資金不足に陥る事など無いはずだ。ならば猿田提督との一件で警戒されていると考えるのが妥当か？なら他にも欲しいものはある。

「では海外艦の情報には海外艦の情報でどうでしょう？佐世保鎮守府にも海外艦のガングートさんが在籍されていたと記憶しておりますが？」

「ガングートさんですか・・・葛原提督が佐世保鎮守府を訪問される時にお会いする事は可能ですが、同じ海外艦とは言え練度に差があり過ぎて対等な条件とは思えませんね。それに葛原提督はガングートさんとお話したいのではなくて、演習等でその実力を知りたいとお考えですよね？」

「まあ、一番気になるのは実力ですが、他にも色々となつてはいますよ？海外艦ゆえに文化の違い等から艦隊に馴染む事にも苦労があつたでしょうし、運用についても難しいものがあつたでしょう。そういう話も今後私が海外艦達を指揮する上で参考になるかと考えております。」

「あー、海外艦ゆえの苦労ですか。そう言われれば気になるところではありますよね。ではこういうのはどうでしょう？葛原提督が佐世保鎮守府に訪問される際に海外艦の三人も一緒に来て頂いて、うちのガングートさんとお話する機会を設けるとするのは如何ですか？もちろん葛原提督も同席されて構いませんよ？」

「・・・こちらからは海外艦三人分の情報を提供することになるが、先任の海外艦から直接話を聞けるのはとても魅力的だ。落とし所として悪くない。」

「・・・悪くありませんね。」

「それとその時にアトランタさんの対空演習を見せて頂けませんか？弾薬等はこちらで持ちますし、相手役の空母もこちらで用意致しますので、当日艀装を準備して頂ければ大丈夫です。その代わりこちらもガングートさんの砲撃演習をお見せ致しますので。」

「・・・その条件であれば構いません。それにしても熊井提督は

ずいぶんと海外艦にご興味がおありのようですね?」

「ええ、葛原提督も情報の大切さをご存知でしょう? 未知の艦娘に興味があるのは当然では?」

「仰る通りですね。では明日からの演習、宜しく願います。」

「ええ、こちらこそ宜しく願います。もし何か問題があれば私にご連絡下さい。」

「ありがとうございます。それでは失礼致します。」

「ええ、失礼致します。」

香取さんとの通話を終えると、つい安堵の吐息を漏らしてしまう。香取さんは理性的で佐世保鎮守府の権力を振りかざすような真似や、こちらを威圧するような事はしなかった。もちろん理性的な相手の方が話は進むのだが、油断すれば相手の良いようにされてしまうので気が抜けない相手だった。正直に言えば熊井提督が言葉数が少なく判断が早いので、佐世保鎮守府相手の交渉は楽だと思っていたのだが・・・やはり四大鎮守府の一角だから油断出来ない・・・だがこちらにも十分にメリットのある結果だ。良い交渉が出来たと前向きに考えよう。

## 237話

「大淀さん、神通隊は所定の位置に着きました。ええ、ええ、はい。では提督の通信が終わるまでその場で待機します。それでは。」

おやおや？ 出港時も司令官はなにやらお忙しいようでしたが、どうやらもう少しかかりそうなお様子ですね。演習が終わってから是非とも取材したいところですが、うちの司令官はとーっってもガードが堅くて、あんまり喋ってくれないんですね。それよりも今は演習で海外艦のお二人が、どのような能力をお持ちなのかを調べたいところですね。

「総員、この場で待機との命令です。今のうちに道中で話した作戦の再確認をします。」

うーん、神通さん気合い入ってますねえ。なにせ演習の相手は夜戦忍者と名高い川内さん。夜戦においては反則的な強さをお持ちですからねえ。妹の神通さんも対抗意識を燃やしてるようですし、この姉妹対決にも注目です。

「まず初めに頭に入れて欲しいのは相手はあの姉さんだという事です。夜戦での姉さんの感覚は異常な程に鋭いですから、こちらの動きは常に把握されていると考えて下さい。ですからいつ狙われても回避行動にうつれる心構えを持っていて下さい。」

本来の夜戦であれば相手との位置の探り合いになるのですが、あの川内さん相手では勝負になりませんから仕方がありませんね。先制攻撃をされるのは諦めて、どれだけ初手の被害を抑えて反撃に移れるかが肝要ですね。

「次に相手が仕掛けて来る時は十中八九姉さんが探照灯でこちらを照らして来ます。ですから探照灯で照らされたら即座に回避行動をして初撃をやり過ぎして下さい。」

その後は陣形を整えつつ青葉さんに探照灯で相手を探して貰い反撃を開始します。この時に探照灯を持って目立っている姉さんを狙ってはいけません。姉さんをすぐに仕留めるのは困難なので、姉さんが稼いだ時間で他の娘達に砲撃されてしまい、戦力差が広がってし

まうだけです。ですから駆逐艦の娘達は敵駆逐艦を、衣笠さんと青葉さんはプリンツ・オイゲンさんを狙って下さい。私は姉さんを牽制する為に砲撃します・・・が牽制以上の事は期待しないで下さい。」

なるほどなるほど。まずは川内さんの無茶苦茶な戦術に嵌まらないうようにするべきと。旗艦の川内さんさえ倒してしまえばかなり有利になりますが、それが一番難しいっていう罫ですから避けるべきですよ。それにしても神通さんはかなり悔しそうな表情ですね・・・やはり姉妹艦の川内さんに実力で遠く及ばない事に忸怩たる思いを抱えているのでしょうか・・・それでも勝つ事を諦めた目ではないですね。

「と、ここまで姉さんの危険性を語りましたが、姉さんにも弱点・・・とまでは言えなくとも付け入る隙はあります。」

「え!?夜戦での川内さんの弱点ですか!?なんですかそれ!?青葉すつごく気になります!!」

「当たり前と言われればそれまでなのですが・・・姉さんは軽巡洋艦です。」

「は、はあ・・・もちろん知ってますが・・・」

「ですので火力が低く重巡洋艦の青葉さんと衣笠さんを仕留めるのは苦労します。ですから砲撃戦で重巡洋艦のお二人を仕留めるならば、海外艦のお二人に任せるしかありません。ですので海外艦のお二人と重巡洋艦のお二人の砲撃戦がメインになります。この砲撃戦でお二人が生き残り、さらにプリンツ・オイゲンさんを撃破してから雷撃戦に持ち込むのが私達の勝利条件と考えて下さい。」

「こ、これは責任重大ですね・・・」

「う、うん。でもそれだけ衣笠さん達に期待してるって事だから頑張らないとね!!でもそうなると青葉が探照灯役するのはちよつとキツくない?」

「だったら探照灯役は暁に任せてくれても良いわ!!」

確かに探照灯役をしながら衣笠と二人で海外艦のお二人と砲撃戦をして、こちらは二人共生しながらプリンツ・オイゲンさんを撃破する・・・かなりハードなお仕事なので探照灯役を暁ちゃんに代わっ

て欲しいのですけれど・・・神通さんは首を横に振られてますね・・・  
「確かにその案も考えましたが・・・駆逐艦の娘達に探照灯を持たせて  
しまうと、姉さんの砲撃で真っ先に潰される危険があります。それに  
私が探照灯を持って生存出来るかと言われると、まず不可能でしょ  
う・・・姉さんの好きにさせないように妨害しながら指揮するのが限  
界です。」

「な、なるほど・・・」

「ですから衣笠さん、青葉さん。」

「は、はい。」

神通さんが青葉達に静かに微笑んできますが、柔らかな印象がまっ  
たくありません!!というか物凄く怖いです!!

「勝つ為に死ぬ気で頑張ってください。」

「は、はい!!」

「もちろんお二人だけではありません。駆逐艦の皆さんも雷撃戦で有  
利に戦う為に、砲撃戦で相手の駆逐艦の数を減らす必要があります  
し、雷撃戦ではビスマルクさんを確実に仕留める必要があります。で  
すから死ぬ気で頑張ってくださいね。」

「はい!!」

「では作戦会議は以上です。演習開始まで各自集中力を高めていて下  
さい。絶対に勝ちましょう。」

うう・・・やっぱ演習の時の神通さんはとっても恐ろしいです・・・  
けどそれだけ演習に真剣に向き合っているって事ですし、やっぱりや  
るからには勝ちたいですよ!!よおーし!!頑張るぞお!!

Ha・・・初めての演習が夜戦なんて最悪だわ・・・夜更かしはお  
肌に悪いし、敵は捕捉し難いし、敵の攻撃も避け難い。しかも少しず  
つ雨も降り始めて最悪よ!!濡れるし視界の確保や集音に支障が出る  
のも嫌だけど、何よりも天気荒れた夜でも関係なく追い掛けてくる  
あの忌々しい複葉機を思い出すのが最悪よ・・・

「ビスマルク姉さま?」

「・・・なんでも無いわ。」

だからってオイゲンの前で夜戦に嫌な思い出があるから参加したく無いなんて、情けない姿を見せれる訳ないでしょ!!しかもあの Admiral!!このビスマルクが演習に付き合っただけであがるって言うのに、急に別件が入ったからと見送りにも来ないのよ!!しかも旗艦をこの私にしないなんて!!

「夜々戦々夜々戦々たのしくしく夜々戦々」

さつきからあんな変な歌を呑気に歌ってる軽巡洋艦に任せるだなんてどうかしてるわ!!しかもシラヌウイは相変わらず睨んでくるし!!確かに私達ちよつと揉め事はあったけどちゃんと和解したわよね!?!この娘はいつまで過去の事を引きずってるのよ!?!それとさつきからちよつと離れたところでコソコソやってる駆逐艦の娘達もよ!!

「ほら響、せつかくのチャンスなんだから話し掛けて仲良くならないと。」

「Her...なんだかどうでも機嫌が悪そうだ...今話し掛けるのは得策じゃない...」

「そんな事言ったらいつまでも話し掛けられないじゃない!!」

コソコソするならわからないようにやりなさいよ!!というかこのビスマルクと話したいなら堂々と話しかければ良いじゃない!!別に私は駆逐艦の娘達から話し掛けられたからと言って怒る程狭量じゃないわよ!!

「あ、もしもし大淀? 指定位置についたよ♪早く夜戦やろうよ♪夜戦♪...え!? 提督の電話がまだ終わらないから待機!? 早く夜戦やろうよ!! 皆夜戦がしたくてうずうずしてるよ!! 夜ー戦!! 夜ー戦!! 夜戦夜戦夜戦夜戦夜戦あつ切られた...」

「ちよつとあなた落ち着きがないわよ!! 旗艦を任せられたならもつと堂々としてなさいよ!!」

「あはは、ごめんごめん。でも夜戦だといついでテンション上がってしまったてさあ〜」

「Igitit 貴女こんな悪天候での夜戦が本当に楽しみだなんて言ってるの?」

「もちろん♪星空の下での夜戦も当然とっても楽しいけど、曇天や荒



れた天候での夜戦ってのもまた違った趣きがあるじゃん♪いつもよりさらに暗い世界だし、そんな悪い視界を雨がさらに悪化させるし、集音性にも影響が出るから索敵がとつても大変になる!!うくん、最高だね♪」

「どっこがよ!?!」

「なんなのこの・・・センサーだったかしら?この軽巡洋艦頭おかし  
いんじゃないの?」

「え?夜戦の環境が厳しいって事は、それだけ夜戦の技術を持つてる  
方が有利って事でしょ?だったら夜戦技術がより試されるし、演習な  
ら夜戦技術の習得にもってこいじゃん♪」

「・・・センサー、貴女よっほど夜戦に自信があるのね?」

「もちろん♪夜戦と言ったら私!!私と言ったら夜戦だもん!!川内と書  
いてやせんって読むくらいだよ?」

「A c h s o?日本語って一つの単語でも複数の読み方があるからや  
やこしいのよね・・・まあ良いわ。貴女が夜戦に自信があるのはわかっ  
たけど、まだ演習が始まるまで時間があるのでしょう?作戦とかどう  
するのよ?」

「え?あー、さっきハンドサイン教えたよね?あれで指示を出すつも  
りだから、接敵するまではそれに従ってくれば大丈夫だよ。あとは  
私が先行しながら探照灯で相手を照らすから、そこを目掛けて撃つて  
くれれば問題ないよ。」

「・・・は?バカなの!?!貴女旗艦でしょ!?!それなのに一人で先行した上  
に探照灯まで使うつもり!?!旗艦がやられたら終わりなの理解してる  
の!?!探照灯を使えば攻撃が集まるのなんて常識でしょ!?!」

「ふーん?ビスマルクさんはわかってないなあ?」

「っ!?!なんなのこの娘は!?!この余裕な笑み・・・何かとっておきの策  
でも用意しているとでも言うの!?!」

「な・・・何がわかってないのよ?」

「ビスマルクさん・・・攻撃は避けたら当たらないんだよ?」

「・・・W i e b i t t e?」

「ん?えつと・・・だから相手が撃ってくるのを避ければ問題無いって

事だよ。大丈夫、私避けるのとっても上手いから♪」

何を言い出すかと思えば撃たれるなら避ければ良いって・・・そんな事出来たら苦労しないわよ・・・というか何で私だけがこの軽巡洋艦の暴走に付き合っつてやらなきやいけないのよ？

「Igitit・・・貴女達も何か言っつてやりなさいよ・・・それとも日本艦は間違っつてる上官に苦言の一つも言えないのかしら？」

「えっと・・・川内さんだし・・・ねえ、響？」

「そうだね。無茶苦茶な事を言っつてるのはわかってるけれど、川内さんだからね。」

この駆逐艦姉妹はダメね!?!なら最後は!?!

「シラヌウイ!!シラヌウイは真面目な娘でしょ!?!なんとか言っつてやりなさいよ!!」

「ビスマルクさん少し落ち着いて下さい。ビスマルクさんが混乱する気持ちはよくわかりますが、戦場で冷静さを失えば敵に沈められるだけでなく味方も危険に巻き込む事になりかねません。」

「シラヌウイ・・・取り乱して悪かったわね。」

「いえ、落ち着いて頂ければ問題ありません。それでビスマルクさんの困惑を理解した上で言いますが、川内さんは先程のような豪語をするのに相応しい実力の持ち主です。戦艦棲姫相手には遅れを取ってしまいました、それでも夜戦における索敵能力と回避能力は素晴らしいものがあると断言出来ます。」

「そ、そう・・・真面目な貴女がそこまで言うなら冗談ではなさそうですね・・・」

「ええ。それと川内さんの戦い方は非常識ですが、その常識にとらわれない戦い方できちんと戦果をあげています。ですから今回の演習はその川内さんの戦い方を海外艦のお二人に知って頂く事が目的だと司令から伺っています。」

「そう・・・分かったわ。情報に感謝するわ。」

「いえ、それでは川内さんの指揮下で勝利しましょう。」

それだけ言っつてシラヌウイは私から離れていく。会話の最中もずっと睨んできてたけど、怒っつてるにせずいふんと落ち着いた物

言いだったわね。もしかして怒ってるんじゃないかって、演習を前に気が  
昂ってるだけなのかしら？

「ビスマルク姉さま、ビスマルク姉さま、ちよつとこちらに。」

「何よオイゲン？そんなにコソコソして？」

「少しビスマルク姉さまのお耳に入れておきたい事がありまして……  
その……私聞いちゃったんですけど、センダウアイさんって実は……  
ニンジャらしいんですよ!!」

「ニンジャ……ニンジャ……はっ!?日本の諜報組織で暗躍している  
と言われてるあのニンジャ!？」

「ええ、諜報活動から破壊工作に要人暗殺までなんでもこなすうえに、  
生身で水の上を走ったり数mはある壁を平気で乗り越えたりする身  
体能力を持ち、煙と共に消えたり火を吹くなどの多彩な技術を持ち、  
さらにはニンジャソードによる近接戦闘までこなせる、あの伝説のニ  
ンジャらしいです!!」

「で、でもSDもAbwehrも本物のニンジャに遭遇した事は無  
かったという話でしょう？まさかニンジャが実在していただなん  
て……しかもそんなニンジャの技術を持った艦娘だなんて……」  
「しかもセンダウアイさんは夜戦ニンジャ、つまりは夜間の戦闘に特  
化したニンジャらしいです。」

「そう……なのね……」

なるほどね。あの堅物なAdmiralがなんでこんな無茶苦茶  
な作戦を実行しようとする娘に旗艦を任せるのか疑問だったけれど、  
この部隊は伝説のニンジャに率いられた特殊部隊って訳ね。特殊部  
隊のエリートであれば、通常の部隊では不可能な作戦を遂行するのが  
当たり前。そしてAdmiralはそんな部隊の演習に私とオイゲ  
ンを参加させた。ふふふつ、面白いじゃない!!

「オイゲン、気を引き締めなさい。Admiralが日本の秘密を晒  
してまで私達に日本の実力を見せつけようとしているのよ!!ここで恥  
ずかしい姿を晒せばドイツ軍人はその程度かと笑われてしまうわ!!」

「Ja!!ドイツ軍人の誇りにかけて頑張ります!!」